双子の弟は魔法忍者

稲中卓球部

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
双子の弟は魔法忍者

【Ｎコード】
Ｎ４５１４Ｌ

【作者名】
稲中卓球部

【あらすじ】
本作はネギの双子の弟に転生した少年の物語です。これはネギ・スプリングフィールドの物語ではない。その双子の弟アスカ・スプリングフィールドの物語です。筆者は小説書き始めてそう経っていないので厳しいところは見逃してください。
感想、指摘があれば随時修正していきますのでよろしくお願いします。追加、指摘によって順次文章が変わります。【２００１１／１１／１４より修学旅行後を開始しています】

ｐｒｏｌｏｇｕｅ前編　九尾は物語を外れた（前書き）

事前に宣言通り、設定の変更に伴って序盤から作り直しています。

あくまで作り直すのは原作前までです。原作部分に辿りつけば、設定の変更に伴った修正と一人称を三人称に直すだけになると思うので、展開は速くなります。

修学旅行編は二日目、三日目は分割します。

今回はナルト世界がほとんどで、最後にネギま世界になります。

それではどうぞ！！

ｐｒｏｌｏｇｕｅ前編　九尾は物語を外れた

時は第三次忍界大戦が終結した四年後、波風ミナトが四代目火影に就任した翌年の出来事である。

うちはマダラの戦いで九尾を手に入れた初代火影の柱間は、渦潮の里の中でも特に九尾を押さえ込める強いチャクラを持った者の中に封印し、人柱力とした。

その者は初代火影の妻になった女、名をうずまきミトという。

それからはずっと木ノ葉が九尾を所有していた。でもそのミトが余命僅かになった時、うずまきクシナが次の九尾の器として渦の国・渦潮隠れの里から木ノ葉に連れてこられ二番目の人柱力となった。

真紅のロングヘアーが特徴の美女で、伝説の三忍の二人、綱手と自来也曰く子供の頃はお転婆で男の子のようだ。忍者学校時代は太っており、その体型から同級生に「赤いトマト」と誂われていたが、持ち前の気性でいじめっ子を次々と返り討ちにしたため「赤い血潮のハバネロ」と恐れられる。語尾に「ってばね」と付けるのが口癖で、動揺したり興奮したりすると出る。

月日が流れ彼女も思春期を迎える。そのうずまき一族の特殊なチャクラを知っていた岩の国の忍に誘拐されそうになる。その際唯一自身を助け出した同期であったミナトにコンプレックスだった赤い髪を誉められた事で彼を意識し始め、のちに恋愛関係に発展し結婚、ナルトを身篭る。

「何の……つもりなの？」

人柱力の尾獣の封印が弱まる唯一の機会、出産。それを狙って全身を黒いコートで覆い、変わった文様の仮面をつけた男が現れた。

人柱力の女性が妊娠をし、出産を迎えるまでの約１０ヶ月の間、封印に使っているエネルギーがお腹の子供へと移行していくために尾獣の封印がそれに比例して弱まっていく傾向がある。

クシナの出産の場所を知っているのは三代目火影猿飛ヒルゼンを含め、上層部の数人だけ。三忍ですら知らされていない。

もしもの事を考え、里から少し離れた結界の中で出産をすることになり、四代目火影波風ミナト、ヒルゼンの妻ビワコ、暗部のタジのみが付き添っており、これら全てが極秘となっている。護衛もつけるがヒルゼン直属の暗部のみ。

クシナの出産に意識を集中していたとはいえ、仮面の男は暗部の忍の見張りやタジやビワコを素早く倒し、張られていた結界をすり抜け、更に生まれたばかりのナルトを利用して無理矢理、ミナトに【飛雷神の術】を使わせて遠ざけた。

そして仮面の男はクシナを出産をした祠から離れた岩場に連れ出してクシナを拘束している。

「お前から九尾を取り出し、木ノ葉を潰す」

「なんだと……！？」

出産後のため息を乱したクシナは奇妙な模様の面を被った男の目的を聞き、驚愕する。

「術式マーキングのある空間から空間へと瞬間移動するミナトの【瞬身の術】。そのマーキングがこの封印式に書き足されているようだ。常にミナトがお前を守っている。だが今、ミナトを遠ざけた。しかも出産で九尾の封印は弱まっている。・・・・・・・この僅かな隙をどれほど待った事か」

ミナトの飛雷神の術は、術式マーキングのある空間から空間へ飛びまわる術である。なので何かあった時、クシナを守ることができるように、そのマーキングが書かれている。

飛雷神の術で再びクシナまで戻ってくる僅かな隙を縫って、弱ったクシナの封印式を解き、九尾を復活させること。それこそが男の狙い。

男がつけている仮面に唯一穴の空いている右目が、写輪眼の文様を写して見開かれてクシナの中の九尾に干渉する。

「！！」

眼に居竦まれたクシナの内面。封印が弱まっている影響か、九尾を括る球体はドロドロと溶けている。九尾を括る球体には九の尾と四肢、そして腹に杭が打ち込まれており、杭を繋ぐ鎖が拘束している。

――――――お前は、うちはマダラ！

「何……！」

ここで本来あるべき流れと違うことが起こる。九尾は仮面の男の

正体に逸早く気付き、写輪眼に操られないように目を閉じたのだ。

男は九尾の想定外の行動に驚き、次の対応が一歩遅れた。

――――ウオオオ！！！

封印が解けかけている事を知っていた九尾は、仮面の男が次の行動に移る前に雄叫びを上げて自身を縛る鎖をドロドロと溶かしていく。続けてズボボと杭から身体を抜いていく。

それと同調するようにクシナの身体を九尾の衣が包みだし、ポコポコと泡立つ。

九尾はクシナの腹部にある封印の核である黒点から抜け出し、ついにその出産によって不安定になった封印が破られて地上に姿を現す。

「グォォォォォォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！」

それは、巨大な獣だった。その鍛えられた刃を思わせる牙は、常に血を求め、赤く染まっている。

その名を九尾の妖狐。広大なる大地に巣くうあやかしの一つにして、その力は神にも、地獄の魔物にも匹敵するという。

封印から解き放たれた九尾は空に浮かぶ月に向けて歓喜の雄叫びを放つ。

「くっ！　まさか九尾が写輪眼に囚われる前に俺に気付くとは！！」

雄叫びを放ち続ける九尾に前に、仮面の男は絶好の機会に失敗して崩れた予定に歯噛みする。

「そ、そんな……」

渦の国の忍ゆえの生命力のお陰か、それともうずまき一族の特殊なチャクラがなせる業か、クシナは尾獣を抜かれても驚異的な生命力で生きていた。息絶え絶えではあっても即死は免れたのだ。人柱力は尾獣を抜かれたら死ぬ。だが、六道仙人の血を分けた弟系列のうずまき一族は、その驚異的な生命力によりすぐに死ぬことはない。

しかし、その顔には明らかな死相が浮かんでいる。クシナに残された時間は。そう長くない。

「グオオオオ！！」

雄叫びを止めて地を睨み、仮面の男の存在に九尾は怒り狂う。怒りに支配されても操られないように眼を瞑った九尾の振りかざされた掌が歯噛みしていたマダラを押しつぶしそうと、動けないクシナを巻き込んで叩き下ろす。

「無事か！　クシナ！！」

ズンと九尾の腕が地に沈む前にマダラは離脱し、クシナもナルトを家に寝かせてきたミナトの飛雷神の術が間に合って無事助けられる。

「……ミナト……ナルト……ナルトは無事なの？」

文字通り命がけの出産と九尾を抜かれた事で意識が朦朧とする中、クシナはナルトの無事を気にかけていた。

「ああ……無事だよ……今は安全な所にいるよ……」

「……よかった……」

明確な死相が浮かんで青白くなった妻に言葉が詰まりそうになりがらもミナトは伝える。そのミナトの言葉にクシナは一先ず安心して力なく微笑む。

ミナトは目を閉じたまま暴れまわる九尾と、その周りを飛び回る妻、息子をこんな目に遭わせ、九尾を復活させ、今度は木ノ葉までも潰そうと企む仮面の男をキッと睨みつける。

しかし、衰弱しきった妻をこの場に置いておく訳にはいかず、【飛雷神の術】で家にいるナルトの元へ戻った。

ミナトが去った後、マダラは怒り狂った九尾を木ノ葉の里へ誘導して当初の目的を達成した。ミナトはクシナをナルト傍に置いて里外れにある絶壁に彫り込まれた歴代火影の岩石の上にやってきた。それを九尾が見つけ、圧縮したチャクラを放つもミナトは【飛雷神の術】で安全な場所へ飛ばす。

九尾は三代目を中心にした部隊が迎撃に当たり、事実を伝えようとしたミナトは突如として現れたマダラと交戦を開始。

未だに怒りが収まらない九尾は、マダラに木ノ葉の里へ誘導されても構わずに破壊の限りを尽くしていた。

一声吼えれば大地を揺るがし、九本の長大なる尾は、それが波打つかのように振るわれるたび、嵐を呼び、雷を生んで天を引き裂いた。

――――――うあああああアアアアー！

九尾の息吹が、地を轟かし、森の木々を揺さぶる。どこからともなく湧き出た黒雲が、雷光を纏いつかせながら、天上で渦を巻いた。

九尾を遠巻きに囲んでいた里の忍び達は、ただそれだけで、我知らず後ずさっていた。忍び達の鍛え上げられた精神でさえ、九尾の放つ桁違いの力の前には、本能的な恐怖を抑えることができなかったのである。

この時点で、既に勝敗は決していた。

いや、そんなことは、この場の忍びたち全員が分かっていることであった。例え全員が全てを投げ打っても、この相手を倒すことは出来ない。それを知って挑む戦いだった。

「次々に仕掛けるのじゃ！」

三代目の指示に従い、自らを鼓舞するように忍びたちは一斉に鬨の声を上げた。同時に、最前列に立った忍びの一団が、九尾に向けて持てる最高の秘術を用いて襲い掛かる。

九尾は怒りに支配されていてもマダラに操られないように目を閉じたまま、ただ、短く一声吼えた。それだけにも関わらず、使い手の持てる最高の術が粉々に消し飛んでいた。火遁の炎は雲散霧消し、あるいは吹き返され、武器を構えて宙を飛翔していた忍者たちは、全身をずたずたに引き裂かれ、ボロ布のようになって地面に転がった。

だが、忍者たちは怯まなかった。前衛が引き下がると、次に控えていた一団が術を放つ。間髪をいれない攻撃に、さしもの九尾も術を防ぐことができなかった。鼻先で炸裂した火球に顔を顰め、鋼鉄ににも匹敵する硬度を持った水球に横面を叩かれ、地から屹立した尖った岩の柱を腹部といわず、顎といわず突き立てられて、チャクラの練り込まれた無数の手裏剣が命中する。

更に勢い込んだ忍者たちは、更なる攻撃を仕掛けようとして、はたと動きを止めた。

九尾を迎え撃つために召集された忍者たちは、里でも手誰と呼ばれた者達ばかりだった。その一人一人が必殺の技と自負する攻撃を、まともに食らわせたのである。常識で考えれば、少なくとも多少は打撃を与えてしかるべきだった。

だが、薄れゆく爆煙の向こうから姿を見せた九尾は、その鼻面に皺を寄せ、牙を剥き出しにして忍びたちをねめつけるのであった。僅かでも傷ついた様子は見当たらない。それどころか、低く喉を鳴らして唸りを上げる九尾の顔は、目の前の小さき者どもを嘲笑っているかのようだった。

実際には忍び達の攻撃で、九尾の怒りは制御可能な範囲にまで落ち着いていた。九尾は決して人間を侮っていない。自身より小さく

弱き者だとしても、自身を封印出来る者を侮るつもりはない。

封印を抜け出したはいえ、対処する手段がない筈はなく、また封印されては元の木阿弥。皮肉にもマダラ対策に目を閉じたことが余計な情報をシャットダウンし、九尾に冷静さを与えていた。

かといって封印されて狭く暗い闇の中に閉じ込められ続けた恨みや、たった今攻撃された事を忘れたわけではない。

（適当な所で引き上げるか）

そこまで考えた次の瞬間、九尾は動いていた。忍びの鍛えられた目にすら捉えることができない疾さ（はや）で、その巨大なる獣は滑るように前に出た。術を放つための印を結ぼうと、今まさに身構えていた忍者たちは、横合いから叩きつけられた九尾の鉤爪に引き裂かれていた。

最前列の生き残りと、術を放った後、いったん後退して気息を整えていた一団は、なんとか攻撃を躱すことができたものの、渾身の術が全く通用しない相手と知って、愕然となった。

これでは足止めすらならないではないか。

陣が総崩れにならなかったのは、ひとえに里の忍びたちの人間離れした精神力の賜物だった。無残に叩き伏せられ、或いは噛み砕かれ、桁違いの巨体と力によって引き起こされる烈風に吹き飛ばされても、身体の動く限り、忍びたちは何度も九尾に立ち向かった。

彼らが抵抗を止めれば、それはこの里のみならず、周辺の広大な地域の破滅を意味することになりかねない。

それほど長い時を経ずして、忍びの数たちは確実に減っていった。生き残った人間も、体力、精神力共に底をつき、彼らの身体を動かしているのは、忍者としての本能と愛する者達を守るという強固な決意だけだった。

最前線で戦っていた三代目も膝をつき、このまま戦いを続ければ遠からず全滅は目に見えていた。

その時だった。九尾は目の前の死に体に近い忍び達に止めを差すことなく、後方に飛び退いた。

「これは四代目だ！！」

疲弊し切った忍者達を助けるように先程まで九尾がいた場所に巨大な蝦蟇が着地して対峙する。これこそが木ノ葉の忍者達が、その命をかけて待っていたようなものだった。

その大きさにもまして、奇妙ないでたちの蝦蟇だった。その巨体を覆わんばかりの大きな半纏を羽織り、短刀を腰の辺りにさして、口には煙管（パイプ）まで咥えている。

蝦蟇の頭部にはマダラに手傷を負わせて撤退させたミナトの姿。蝦蟇はミナトが口寄せの術で呼び出したものなのだ。

ミナトの気配を察した九尾は未だにマダラが存在している可能性を考て目を瞑ったまま、これ以上続けることは危険であり、多少暴れてすっきりしたのでそろそろ頃合かと考える。

突っ込んできた蝦蟇が引き抜いた短刀で切りつけてくるのを罠の

可能性を疑って受けず、後方に跳んで距離を取りながら高濃度のチャクラを溜める。

着地と同時に溜めたチャクラを口に含み、身体の全周囲に解き放つ。

解き放たれたチャクラは九尾のいた場所を中心に無作為に破壊を撒き散らす。里と忍者達が後ろに背負っているので避けることはできず、蝦蟇が盾になるしかなかった。

九尾が解き放ったチャクラは辺りの物全てを吹き飛ばすも、彼らにとって幸いにも放たれたのは衝撃波のみだけだったので盾となった蝦蟇が耐えたお陰で後方にはほとんど被害はない。

「逃げられた、か」

ミナトが庇っていた腕を退けて見ると既にそこに九尾の姿はない。皆が衝撃波に耐えている間に逃亡したのだ。

逃げられた以上、探すしかないのだが九尾が現れて破壊された里の被害は甚大。この戦いで失うものはあっても得たものは何もない。

尾獣を抜かれたクシナは、残った忍び達に指示を出して急いで戻ってきたミナトに看取られて死に、九尾は捜索も空しく見つからない。

「追っ手は撒けたか。さて、何処に行こうかの」

何故なら九尾は逃亡後、直ぐに人間の女に化けて人間の中に埋もれたため行方が分かるはずもない。白い着物姿で玉藻は悠々自適に

街道を歩いていく。特に目的地はなく、気ままな旅ができればいいと考えている。

「待ってください！　今回の一件、うちは一族は関係ないはずです！！」

事件から数日経ち里では家や商店の修繕が行われていた。玉藻が暢気に街道を歩いている頃、ミナトは里の重役達と会議を行っていた。議題は勿論、九尾についてである。

「そうは言ってもな、四代目よ」

「九尾を操ることなどうちはしか出来ん事」

「しかしっ！」

「くどいぞ。これは木ノ葉としての決定だ」

九尾事件以後、九尾は操られていなかったというミナトの証言には木ノ葉で暴れた以上、確証がなく、うちはマダラの存在を知っていたが故に他の幹部による忠告を受け止め、暗部によるうちは一族への監視が徹底されることになった。この時、うちはマダラの存在を三代目にだけしか教えなかったのが後に裏目に出てしまう結果となる。

崩壊した里の復旧は続く。九尾事件から一年立って元の状態に戻ってきた頃、忍の蒸発事件が多発。禁術開発の現場を三代目火影により突き止められた大蛇丸が木ノ葉を抜け、自来也が大蛇丸の監視を始める。

それから数年は安定するも、うちはフガクを中心としたうちは一族の木ノ葉へのクーデターの実行計画が現実味を帯び始める。

「ふむ、存外に人間の世というのも面白い」

完全に木ノ葉の捜索網を抜けた九尾は、名を「玉藻」と偽り、いろいろな里を周って忍術や忍具の作り方、様々な知識や経験を積んでマダラに抗するために写輪眼対策を探す旅を続ける。

「気ままな一人旅じゃ。次はどこに行こうかの？」

その二年後、ミナトと三代目の奮闘も空しく、うちはイタチとうちはマダラによる一族虐殺事件が起こる。サスケとイタチ（とマダラ）を残してうちは一族は全滅。イタチは木ノ葉を抜けたのち、暁へと向かう。

「ナルト、今日から一緒に暮らすうちはサスケ君だ。仲良くするようにな」

「分かったてばよ父ちゃん。よろしくなサスケ」

「ふんっ」

一族で一人残されたサスケを、母親同士の親交があったミナトが引き取った。だが、家族を失ったばかりのサスケに取って純粋な好意とはいえ、認めることはできない。

父親代わりであり現役の四代目火影であるミナトに逆らうことは難しい。兄のイタチに復讐するには力が必要。それには里で最強の火影の傍にいることは決して間違いではないとサスケは考えていた。

だから自身に差し伸ばされたナルトの手を払い、一人で何処かに行ってしまう。

「何だってばよあいつは！　何であんな奴連れて来たんだよ！！」

当然、サスケの事情など全く知らないナルトは善意を無碍にされて怒る。差し出した手を払われては仲良くしようとする気もなくなるというものだ。

「あの子には複雑な事情があるんだ。俺は火影としての仕事もあるからナルトに頼みたい」

「ん～父ちゃんがいうなら仲良くしてやるってばよ」

頬を膨らませて怒りを露にするナルトに、ミナトは言い聞かせるように伝える。父の頼みにナルトは渋々と引き受けて、サスケの後を追って部屋を出て行く。

「頼んだよ、ナルト」

本当なら自分がサスケの心の傷を癒してあげたいのだが未だ見つからぬ九尾、三忍とまで謳われた大蛇丸の里抜け、うちは一族の壊滅とここ数年だけで大事件が相次いでいるので、火影のしての仕事は嫌になるほどにある。うちは一族の壊滅にマダラが関与している疑いがあるので慎重さが必要になる。

それにうちは一族の壊滅にクーデターを止める事ができなかったのでミナトにも責任の一端がある。

子供同士なら何とかなるのではないかと期待も持っており、似ているようで似ていない二人なら仲良くなれると確信を抱いていた。

「うすらトンカチの癖にやるな、ナルト」

「お前もだってばよ、サスケ」

サスケにとって家族としてのナルトの存在は邪魔でしかなく、実の父がいるということも嫉妬を抱かせるには充分であった。最初に手を払いのけたから、もう近づいて来ない思ったのに直ぐに行く先々について来るようになり、仲良くなろうと必死になっているナルトを邪険に思っていた。

当然、度も過ぎれば無視していようと頭に来るもので、そんな日々が一週間も経てば爆発してしまうのも無理からぬ話であった。いがみ合いも過ぎれば喧嘩となり、サスケは一族が壊滅した時の怒りもあってナルトとの間で盛大な大喧嘩を繰り広げた。

流石に日常的にクナイなどの忍具を持ち歩くはずも無く、忍者アカデミーに入学して二年ぐらいでは大した忍術も使えないので、拙い体術での殴り合いになった。

喧嘩の結果はダブルＫＯ。盛大に爆発したのと自分と互角に戦ったナルトを、多少は認めたサスケは喧嘩して仲良くなるという古典的な仲直りをしつつ仲良くなり、兄弟同然に育っていく。

「それじゃあ、まずは基本の木登りの行から始めようか。やり方は……」

火影として忙しいながらもミナトはマダラの存在があるので二人

を鍛え始める。師のお陰でサスケは入った忍者学校をぶっちぎりの主席で卒業。持ち前のチャクラが膨大すぎてコントロールに難のあったナルトは中ぐらいだったが実力に大差はなく、サスケと良きライバル関係にある。

「何故こうも我は騒動に巻き込まれるのじゃ？」

水の国にある霧隠れの里や、雷の国にある雲隠れの里など色んな里を訪れた玉藻は、何故か行く先々で騒動に巻き込まれ、場合によって五影とも戦う結果になり、何時の間にか手配書（ビンゴブック）に乗ってしまう。

「同じ班か、よろしくなサスケ」

「ああ」

忍者学校卒業後は春野サクラと共に、上忍はたけカカシの第七班に配属される。本来ならパワーバランスを考慮して、ナルトとサスケは別の方がいいのだがこの年は旧家の影響も強く、二人は同じ班になる。

「行くぞ。ナルト、サクラ」

「おうっ、カカシ先生から鈴を奪い取ってやるってばよ」

「待ってよ、二人ともっ」

カカシから鈴を奪い取るサバイバル演習では兄弟同然育てられた二人が“仲間の大切さ”に気付かないはずもない。サクラと協力して鈴を奪い、これまで合格者を出したことのないカカシから正式に下忍として認められる。

「このような状態では砂の里に未来はないか。さっさと次に行くか」

ナルト達が下忍となった時、玉藻は風の国にある砂隠れの里を訪れていた。砂隠れの里は地形的には砂漠が多く、木ノ葉隠れの里と同盟を結んでいるが、風の国の大名が軍縮の方針を打ち出し、他国の隠れ里に依頼するなど自国の里の力を重視していないため、力は衰えつつある。このままでは砂隠れの里に未来はないだろうと考え、学べるものだけ学びさっさと抜け出した。

「波風ナルト、ただいま見参！！」

木ノ葉にいるナルト達は波の国のタズナの護衛の任務において、後に「ナルト大橋」と呼ばれる橋の上で戦闘を行っていた。上官であるカカシは霧隠れの抜け忍・桃地再不斬と二度目の戦闘に入り、サスケは血継限界【魔鏡氷晶】を操る氷遁忍術の使い手である少年・白と戦闘をしていた。

【魔鏡氷晶】は白の一族にのみ伝わる忌わしき、そして絶大な能力。敵の周囲に出現させた複数の氷の鏡の中を光速移動しながら敵を攻撃する。目にも止まらぬその秘術の前には、ただただ敵は翻弄されるのみ。

しかし、サスケも生と死の極限状態において資質を徐々に開花させて白の動きを見切りかけていた。

「遅いぞ、ナルト。俺一人で倒そうかとも思ったところだ」

「へへ、悪い悪い。ちょっと野暮用が……ってサスケ！　お前その目！？」

戦況が変わりかけていたところに現れたのがナルトだが寝過ごしてしまい、置いてかれてしまったのだ。まあ、そのお陰でイナリやイナリの母ツナミを人質にしようとしていたガトーの手先を野望を止めれたのは僥倖であろう。

そんなことがあって遅れたナルトだがサスケの二つの瞳が、それまでの黒から、赤みを帯びた色に変わっていた。虹彩の左右に浮かび上がった紋様は、二つ巴の印のようにも見える。

「写輪眼……そうか、君も血継限界の血を。だとすれば、これ以上長引かせるわけには行きません」

チャクラを大量に消費する白の術は、長時間の戦闘には向いていなかった。しかも、サスケの眼は既に白の動きを捉えつつあるのである。ナルトが氷の壁の外側にいる以上は、時をかければ白が敗れる危険は十分にあった。

「これで、決めさせてもらいます！」

白が鏡面を飛び出した。白の攻撃は、例えるなら雷の雷光だった。サスケは、はっきりと捉えると視界に浮かんだ攻撃の軌道から、完全に身をかわす事に成功していた。

勢いあまって滑る身体を止めると再びその瞳を白に向けていた。仮面に隠れて表情は見えなかったが、白が一瞬たじろいだように見える。

「遅い！！」

今までただの光の移動にしか見えなかったものが、サスケの眼には酷く間延びしたものに見えた。もっとも、自分の身体ももどかしいほどにのろまに感じたが。

攻撃を見切ったサスケは、避けられても再度一直線に飛翔してくる白の仮面に、カウンターの一撃を与えた。

全力の一撃だったために避けることも、受けることもできずに白自身のスピードもあってその一撃の破壊力は凄まじく、軽い身体は自らの作り出した氷の壁を破壊して吹き飛ばされる。だが、攻撃はまだ終わっていない。

「ぐはっ！」

白が吹き飛ばされた先にいたナルトが背中に追撃の蹴りを放つと、大きく宙を舞ってどさりと二人の中間に地面に落ちた。連動するように氷の壁が大きくひび割れ、崩壊し始める。

朦朧とする意識の中、白は再び立ち上がっていた。既に戦う意思はなく、白自身、何故立ち上がったのか自分でも分からなかった。

サスケの一撃で罅割れていた仮面に大きく亀裂が入った。

漂う濃霧の向こうに敵がまだ立っていることに気付いたナルトとサスケは、両側から白を挟み込むように拳を振り上げて襲い掛かった。遥かな遠間を飛び越えると、チャクラの込められた拳がその頭上に振り下ろさせる。

白の顔から仮面の破片が崩れ落ち、その素顔が明らかになる。

呆然と虚空を見つめる白の顔に、今まさに当たろうとしていたナルトとサスケの拳は止まっていた。

「お前は、あン時の……」

「何でここに……」

抜け忍として処理された再不斬が生きている可能性を考えたカカシが三人を鍛えるために木登りの行を科そうとするも、ナルトとサスケはアカデミー時代に終えており、サクラには二人が教えている（水面歩行の行も同様）。

そんな訳でカカシが教えれることはなくなり、二人は修行、サクラは依頼者タズナの護衛をすることで落ち着いた。

修行を開始して数日後の朝、組み手をやりすぎて動けなくなり、森の中で一夜を過ごした時に現れたのが薬草を摘んでいた少女――――実は下手な女よりも女らしい少年だったわけだがそれは置いておく。その時に出会ったのがいま対峙している白である。

「何故、止めたんです？　僕は貴方達の敵ですよ」

白は厳しい顔になると、自分を呆然と見るナルト達に言って睨みつける。二人の表情は歪み、数日前に出会った白が敵であることを信じれきれない。それはサスケも同様だった。

白は表情を変えて、穏やかに二人を見返してから微笑みすら浮かべて静かに語り始めた。

白が生まれ育ったのは、霧の国の雪深い小さな村だった。彼には

当たり前のように仲の良い両親がいて、どこにでもいる子供のようにとても幸せに暮らしていた。

でも、白が物心ついた頃、父が母を殺して白も殺そうとしたのだ。

絶え間ない内戦を経験した霧の国では、血継限界を持つ人間は忌み嫌われていた。そして白の母親が血族の人間だと父に知られて殺され、白が気付いた時には父を殺していた。

この事が白は自身をこの世にまるで必要とされていない人間だと思い込ませるには十分であった。

親を失い、浮浪児となった白の生まれを知った上で再不斬は必要とした。

白にはそれが何よりも嬉しく、その日から再不斬の武器として、どんな困難な命令もこなしてきた。

「ナルト君、サスケ君、ボクを殺してください」

二人に語りながら白の脳裏に再不斬と過ごした日々が、走馬灯のように蘇っていた。

白の想いの前には不可能と思われた任務も可能となった。白は、再不斬がその夢を果たす日まで、自らに決して敗北しない事を課していたのである。

だが、その想いは今や無に帰していた。

「納得いかねえ！　強いヤツでいるってことだけが、お前のこの世

で生きてる理由だってのかよ！！」

ナルトは行き場のない怒りに叫んでいた。サスケには怒るナルトとは対照的に白の想いが多少は理解できた。幾らナルトとミナトという家族の存在によってイタチへの憎しみが少しは薄れたといっても、力への欲求や恨みは今もサスケの心を焦がしている。

「戦うこと以外でだって、お前の事を認めさせることぐらい出来るだろう……それじゃ、駄目なのかよ」

「やめろ、ナルト。俺達にこいつを止めることはできない……出来るのは終わらせることだけだ」

「ごめんない、ナルト君。サスケ君の言う通りです」

ナルトの心の篭った思いに答えらない白は悲しげに笑い、サスケの言葉を肯定する。

「サスケ君。森で会った時、君はボクと良く似ていると思いました。だから、君になら分かる筈です。ボクが再不斬さんのために生きようとする限り――――」

白は目を閉じると胸を差し出すように、僅かに顔を上に向けた。

「ああ、分かりたくもないのにな分かってしまうんだ」

「待てよ、サスケ！」

サスケは足のホルダーからクナイを引き抜くと、静止するナルトを振り切って白に向って走り出す。突き出したクナイは真っ直ぐに

白の心臓に向けられていた。白は微動だにする事無く、そのときを待っていた。

「な、なにを……」

クナイが胸に突き立つほんの僅か手前で、白はサスケの手首を掴んで止めた。驚きの表情を浮かべるサスケや安堵の表情を浮かべるナルトに、白は悲しげに答えた。

「ごめんなさい！　ボクは、まだ死ねません」

言いながらも、白は残った右手で印を切っていた。突然、サスケの目の前で冷たい空気が旋風のように渦を巻き、そして、白の姿は消えていた。

二人が白を見つけたときには、カカシに殺されかけていた再不斬を助けるためにその身を犠牲としていた。

この後、白に救われた再不斬だがカカシと戦闘によって両腕を損傷し、戦闘を続けられるような状態ではなくなった。

そしてこの任務ができた原因である男――――ガトーが現れた。

ガトーは海運会社・ガトーカンパニーを経営する大富豪だが、裏では麻薬や禁制品の販売、企業や国の乗っ取りまで行う、悪徳組織の長。波の国を乗っ取り、物流を遮断し富を独占して波の国を貧困に追い込んだ。抜け忍である再不斬らを最終的に裏切る腹積もりで雇い、橋の建設による新たな物流を試みるタズナを暗殺しようと企んでいた。

カカシとの戦闘で重傷を負った再不斬の前に頃は良しと、カカシ共々葬る為に多くのならず者を引き連れて登場したというわけだ。

裏切りの宣言や白の死体を蹴飛ばす等の暴挙と白の無念を想ったナルトの言葉で再不斬の心は動いた。

再不斬はナルトに借りたクナイを口に咥え、無数の刃を全身に受けて身体を針山のようにしながらも尚、立ち塞がる者を斬り捨てて捨て身の特攻を続ける。

最後はガトーの首を刎ねて事切れた。

その全てを目にしたナルトとサスケは耐え切れず、思わず目を落とそうとした。

「目を背けるな」

それを阻んだのはカカシの声だった。

「必死に生きた、男の最期だ」

白の生き様、再不斬の最後の切なさに胸が張り裂けそうになりながら二人は頷いた。その光景は　まだ年若い二人の心に深く根付いた。

砂隠れの里を出た玉藻は土の国にある岩隠れの里を訪れて、何故か彫刻を彫っていた。

「芸術は爆発じゃ！」

などと仏の像を作りながら、変なテンションになっていた玉藻の姿が目撃されたらしい。

下忍となっていくつかの任務をこなした第七班は、カカシの推薦により中忍試験に参加。木ノ葉の同期の下忍を含め、各里から中忍候補の下忍達が木ノ葉の里に集う。第一次試験である筆記試験を突破し、第二次試験の“死の森のサバイバル”に臨む。しかし、その途中、伝説の三忍の一人大蛇丸が突如として現れ、サスケに謎の呪印を刻み込む。試験官のみたらしアンコは、かつての師であった大蛇丸を追撃するが、惜しくも取り逃がす。

「俺はお前と本気で戦いたい」

「ああ、俺もだってばよ」

組み手をすることはあっても、本気で全力を出して戦うという機会のなかった二人は二次予選前、拳を突きつけあって誓い合った。

その後、二次試験は終了。合格者多数のため、候補者同士による個人戦という形で予選が執り行われる。サクラは山中いのと引き分けるが、ナルトとサスケは順当に勝ち上がり、後日行なわれる本戦

への進出を決める。

「中忍試験か面白そうじゃのう。あれから木ノ葉はどうなっておるかの？」

中忍試験の予選から1ヶ月後、各国の忍頭や観衆が見守り、数多くの経験を積んだ玉藻が正体を隠して12年振りに木ノ葉に訪れて観戦する中、中忍試験本戦が開始される。ナルトは白眼を持つ柔拳使い日向ネジを相手に苦戦を強いられるも辛くも勝利。

本来の流れでは九尾のチャクラを使用したが、ナルトは自身の実力で勝利した。だが、反対にネジに言葉は届かなかった。

幼少の頃に日向宗家の嫡子で従妹にあたる日向ヒナタが誘拐されたことが原因で、父親が身代わりとして殺されたことから宗家を恨み、才がありながら分家に生まれた自分の運命を恨むようになった。また、父親が死ぬきっかけを作り、宗家の人間でありながら自分より遥かに実力が劣るヒナタを憎んでおり、彼女を見下す態度を露にしていた。

人生は変えようのない運命に支配されているものだという、絶望的な人生観を持っていたため戦闘中もナルトは声を掛けるも「四代目火影の息子」というエリートという立場にいることが理由でネジを説得することができなかった。

しかし敗北後、日向宗家の当主日向ヒアシから「父親の死の真実」を聞かされることで宗家やヒナタとの蟠りは解消され、運命は誰かが決めるものではないと気づき「自分が火影になったら変えてやる！」というナルトの言葉を信じることにした。

「あれが四代目の息子か……資質はありそうじゃが馬鹿じゃの」

単純に実力を見るならば、今のナルトの力自体は忍者の世界から見て大したことはない。玉藻の基準からしても脅威にはならないが将来性はありそうである。

「ん？　ほぅ、あれが一尾の人柱力か」

ナルトとネジの対戦後、一戦間に挟んで砂隠れ、砂瀑の我愛羅が待ちわびたように試合場に現れた。それを見た玉藻は興味深そうに観客席から身を少しだけ乗り出す。

「なんじゃ、つまらん。あれでは振り回されているだけではないか」

が、直ぐに我愛羅から興味を失って数ミリだけ上げた尻を落として座り直す。

同じ人柱力でも、二尾（化け猫）を宿し、完全に制御していたわけでは無いにしても自らの意思で尾獣化を制御できる二位ユギトや、八尾（大凧（オオダコ））を宿し、玉藻にして「人柱力として完璧な忍」と評することが出来るほどに尾獣の力を完全に制御していたキラービーと比べれば雲泥の差である。

およそ十年前に雲隠れの里（雷の国）を訪れた際にキラービーや四代目雷影・エーとも戦闘することになったが忍術を身につけて強くなった玉藻でも苦戦を強いられた。

キラービーは、その下手なラップとふざけたような言動と刀は裏腹に、7本を体の至る所に挟み、回転しながら敵に襲いかかるという奇天烈な戦闘スタイルからは想像もつかない程の強さを誇り、速

さと不規則すぎる動きから刀の動きが見えにくい。

雷影は自らの肉体に雷遁のチャクラを鎧のように纏い、パワーを生かしたプロレス技的な戦法が多い。特にスピードは波風ミナトの「飛雷神の術」に匹敵する程速く、玉藻が放った術をろくに見ずに反射神経だけで避けるほどである。

更に兄弟ならではの雷影とキラービーの連携も、玉藻を梃子摺らせた原因だ。

戦闘は長時間に及び、最後は生き物としての基本的な性能差で上回る玉藻に敗北を確信したキラービーが尾獣化。流石に八尾相手に今の状態では厳しく、九尾の本性を明かせない玉藻が撤退して引き分けという結果に終わった。

「キラービーと比べること自体が間違いかもしれんが、あれではな」

そうこう玉藻が考えている間に会場中央で木の葉を巻き上げ、カカシとの修行を終えたサスケが満を持して登場して試合が開始された。

カカシから千鳥を伝授されたサスケは我愛羅を相手に善戦するが、その最中、突如として何者かが場内全体に幻術をかける。大蛇丸が“砂隠れ”を巻き込み、中忍試験の隙に乗じて木ノ葉隠れに戦争を仕掛けたのである。

「クシナ！　よくも大蛇丸!!」

「保険とはこういう時に使うなものよ、四代目!!」

四代目火影は大蛇丸を倒す一歩手前まで追い詰めるも、死者をこの世に蘇らせる業深き口寄せの術【口寄せ・穢土転生】で蘇ったクシナに動揺して致命傷を負う。

四代目火影を決める時に立候補もむなしく落選した大蛇丸だが、決してミナトを侮っているわけではない。寄る年波に勝てず衰えた三代目よりも強いミナトに対して保険を用意していた大蛇丸の作戦勝ちである。

自身は重症で傷の具合から治療しても、そう長くは持たない事を悟ったミナト。その脳裏にはクシナとの出会いからナルトが生まれ、サスケという新しい家族が出来て過ごしてきた日々が流れていく。

「大蛇丸!!これからお前も知らぬとっておきの術を披露してやる!!　喰らえ、封印術・屍鬼封尽!!」

死を覚悟したミナトは、印を結びながら油断して高笑いする大蛇丸に【飛雷針の術】で接近する。するとミナトの背後に白装束を着た死神とも見える者が出現して大蛇丸を拘束する。

「わたしの知らない術だと!」

勝利を確信して完全に油断していた大蛇丸が気付いたときには、死神は大蛇丸の中から何かを引きずり出そうとしていた。

「屍鬼封尽……これは、術の効力と引き替えに……死に神に己の魂を引き渡す……。命を代償とする術」

ミナトの言葉に、大蛇丸は震えながら印を結ぶも術が発動する気配すらない。そう、魂を取られかけている今、それは敵わぬことだ

った。

「これからお前の体から魂を引きずり出して封印する。封印が終了したと同時に俺の魂も喰われるがお前も死ぬ！！」

「！！」

身体が言う事を聞かなくなってきてミナトが言う事が真実だと確信し、完全に大蛇丸は焦っていた。

「そろそろ見えてきたでしょう……。あなたの魂も、もう半分ほど抜け出ている！　この術によって魂を封印された者は、永劫……成仏することなく、死神の腹の中で苦しみ続ける……。封印した者とされた者、お互いの魂が、絡み合い憎しみあって！！永遠に戦い続ける！！」

ミナトの言葉に、大蛇丸にもだんだん見えてきた死神は口にあった小太刀を手にとり、舌なめずりをした。

「なんだ……？！」

腹のなかから封印した者の魂が抜け出そうとすると、それを小太刀で断ち切り、呻き声と共にそれは死神の口の中へ吸い込まれるように泳いでいく。

大蛇丸は喰った魂をくちゃくちゃと音を立ててかみ砕く死神を見て、自身が辿る末路に戦慄を抱く。

「ふざけるなァ四代目！！　火影の座のみならず、何でも貴様の思い通りにはさせぬ！！」

「ごめんなさいミナト！　避けて！！」

そう怒鳴ると大蛇丸は指で草薙の剣を持つクシナを呼び寄せる。【口寄せ・穢土転生】で蘇ったクシナは術者である大蛇丸に逆らうことができず、謝りながら避けるように叫ぶも術を発動中で動けないミナトを貫く。

ミナトの口から鮮血が零れ落ち、少しずつ大蛇丸の魂が体に戻っていく。

「さっさと、死ねェ……！」

大蛇丸が言うも、お互いに肩で息をしていて限界は近かったが、天秤は両者以外の手によって傾いた。

「がっ、貴様！？　死人の分際で！！」

「は！　何時までも私を操れると思うんじゃないってばよ！！」

「クシナ！！」

ミナトの術で弱った影響か、それともミナトへの愛がそうさせたのか、クシナが術の影響から脱して持っている草薙の剣で大蛇丸に斬りかかった。よほど頭に来たのかクシナの言葉が昔に戻っている。

追撃をかけようとするクシナに大蛇丸は穢土転生の術を解く。同時に現世との？がりを失って体が塵になっていくクシナだがミナトに向けて親指を立て、やってやったとばかりに笑顔を向けて消えた。

この後、ミナトは自らの命を犠牲にして対象者の魂を永劫の時へと封じる究極の封印術【屍鬼封尽】で大蛇丸の腕を術を封じてこの世を去った。

「死んだか四代目――――」

玉藻は幻術にかかるはずもなく、卓越した忍術で隠れて一部始終を観戦していた。先代の人柱力であるクシナが出てきた時には驚きもしたが、ミナトが死んだ事を合わせても特に感慨もない。できれば自分の手で殺せなかったのが残念といえば残念である。

「皆の者、里を守るのじゃ!!」

三代目が指揮を取り、木ノ葉の忍者も死力を尽くして応戦して本来の流れよりも少ない犠牲で敵を撃退することに成功した。

ナルトとサスケは、一尾の人柱力である我愛羅と激突し、不完全な状態で呼び出された守鶴に苦戦していたところにやってきた玉藻に気絶させられる。

「無様じゃのぅ、一尾よ」

「何だお前はよ？　そうかこの俺に殺されに来たんだな!!」

異様なチャクラを感知して超速でやってきた玉藻は、不完全な解放状態の一尾を見て嘲笑する。我愛羅（一尾？）が見知らぬ若い女に楽しんでいたところを邪魔されて苛立ちを隠さずに代わりの標的にした。

「テ…メェ……何も……ん……だ……」

「哀れじゃな、同属を忘れるとはな」

「な！」

この後のことは語るべくもなく、クシナやミナトを自分の手で殺せなかった苛立ちから完全に開放される前に一尾を瞬殺し、殺そうとしたところで増援が来たのでそこまでは至らずに姿を消した。

「そ、そんな父ちゃんが死んだって？！」

「馬鹿な――――――」

結果的に、この戦いで五影の内2人が死亡し、双方の里は甚大な被害を受けてしまう。特に父と父代わりを失ったナルトとサスケは強いショックを受け、次第に仲違いしていくことになる。

四代目火影波風ミナトの葬儀も終わり、安定してきた木ノ葉隠れに里を抜けたうちはイタチと、霧隠れの抜け忍干柿鬼鮫の2人が突如として現れた。彼らは、かつて大蛇丸も所属していた暁と呼ばれる組織のメンバーで、行方不明の九尾の手掛かりを求めてかつていた里へやってきた。彼らの侵入を察知した猿飛アスマ、夕日紅、カカシが応戦するが、イタチの写輪眼による幻術“月読”を受け、カカシは戦闘不能となる。事態を知り、父代わりのミナトが死んだことで不安定になったサスケは、復讐の対象である実兄イタチを追って返り討ちに合い、心を折られて重傷を負う。

「マダラと同じ写輪眼……使えるか？」

そろそろ木ノ葉を去ろうと考えて偶々、それを見た玉藻はマダラ

への対策として、同じ写輪眼を持つイタチとサスケに目をつける。

三代目は高齢を理由に火影就任を固辞して伝説の三忍の一人、自来也を推薦するも同じ三忍で初代火影の孫でもある綱手を推薦。

修行とナルトの父を失ったショックを癒すことも兼ね、共に綱手を探す旅に出た。自来也と共に里を旅立ったナルトは、道中で父の術である【螺旋丸】の修行に励む。

その頃、ミナトによって両腕を奪われた大蛇丸は術を封じられ、激痛に苦しめられていた。医療忍者のスペシャリストである綱手に両腕を治すよう、部下のカブトと共に交渉を持ちかける。腕が治ったら再び木ノ葉を襲うという大蛇丸に綱手は激昂し、要求を退けるが「最愛の2人を生き返らせる」という大蛇丸の言葉に動揺する。その直後、自来也とナルトも綱手を発見。

「俺は父ちゃんの跡を継いで火影になる！」

「ふん！　螺旋丸を修得できたら、コレをやろう」

父の背を追って火影になるというナルトの姿に、亡き弟の姿を重ねた綱手は初代火影の首飾りを譲ると賭けをする。ナルトは【螺旋丸】の修得に燃える。

その後、綱手は大蛇丸の要求を完全に拒絶。そのまま大蛇丸・カブトとの戦闘に突入。そこで大蛇丸が父・ミナトを殺した事を知り、ナルトはブチ切れて今まで契約していてもできなかったガマブン太の口寄せに成功する。巨大口寄せ動物3体を巻き込んだ壮絶な三竦みの戦いを繰り広げる。

薬で弱っているといっても三忍の自来也はカブトを退け、苦戦の末、ナルトは綱手の手助けもあって渾身の一撃の【螺旋丸】を大蛇丸に叩き込み、何とか退ける。

「俺は……俺は今まで何をしていたんだ?」

大蛇丸を退け、綱手が五代目火影に就いたことにより、里は完全に平静を取り戻そうとしていた。しかし、大蛇丸によって呪印を刻まれたサスケは、己の宿命に苦悩する。イタチと同じく絶対の存在であった父代わりであるミナトを倒した大蛇丸。力を求めるサスケにとって、これ以上の誘惑はなかった。

「もっと強くなりたい」

そんな葛藤の中でサスケは大蛇丸の部下である音の四人衆と接触。大蛇丸の元へと誘い込まれる。ナルト、シカマル、チョウジ、キバ、ネジの五人は、サスケを連れ戻すため音の四人衆と交戦。本来の流れでは我愛羅たち砂隠れの忍者の助けがある筈だったが、木ノ葉崩しにおいてナルトは我愛羅と心を通わせることができなかったため現れることもない。

「ナルト――――――」

結局、救援に来たリーを突破した君麻呂の足止めにあいナルトはサスケに会うことができず、サスケは想いを引き摺りながらも強さを求めて大蛇丸の元へ行ってしまう。

「サスケ――――――――ぇ!!!!」

その後、自身の力不足を実感したナルトは強くなるために自来也

と2年半の渡る修行に出た。

ｐｒｏｌｏｇｕｅ前編　九尾は物語を外れた（後書き）

この時点での修正点は、神様による能力付与による転生がなくなりました。

それに伴って玉藻は、九尾そのものの別の未来ということになります。

次回の投稿はちょっと明言はできません。できれば来週の日曜日に出したいですけど、今日から仕事に行っているので作業の時間を取れる自身がありません。

遅くとも三週間後、早くて来週の日曜日午前０時に更新したいと思います。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

活動報告で修正や経過報告を書いてたりしています。

尚、修正は投稿から一日後に纏めて行います。

ｐｒｏｌｏｇｕｅ後編　九尾は世界を外れ、少年と出会った（前書き）

ちょっと淡白すぎるという事で可能な限り、加筆しました。

飛び飛びなのは見逃してくれると有り難いです。全部詰め込むのは流石に無理ですので。

文字数は１４４８８字です。

ｐｒｏｌｏｇｕｅ後編　九尾は世界を外れ、少年と出会った

ナルトが修行の旅に出た2年半の間に三代目が死去し、暁が尾獣を手に入れるため行動を開始していた。

ナルトが修行を終えて木ノ葉に戻った頃、暁のメンバーの一人、デイダラが砂隠れの里で、実力はあるので上忍になっているが、持て余されていた我愛羅を倒して連れ去った。

砂隠れの里からの緊急の報せを受け、ナルト達カカシ班が砂隠れの里へ向かう。途中、連絡を受けて急ぎ砂隠れの里に戻っていたテマリと合流し、砂隠れの里を目指す。

その頃、砂隠れの里についたカカシ班は、暁を追って毒に蝕まれたカンクロウを治療。そして、砂隠れの里の相談役でありサソリの祖母、チヨバアと共に暁のアジトを目指した。

我愛羅の奪還のためデイダラを追うナルトとカカシ。サクラとチヨバアはサソリと対峙する。祖母と孫による、砂隠れの歴史の中で最強のカラクリによる死闘の末、サクラとチヨバアは苦戦しながらも何とかサソリを倒し、ナルトたちの後を追う。

「間に合わなかった。任務失敗だ――――」

一方ナルトとカカシは、カカシの万華鏡写輪眼のおかげで我愛羅の奪還に成功するも、既に尾獣を引き抜かれており死んでいた。任務の失敗である。

「我愛羅……」

我愛羅の遺体は砂の里に運ばれ、兄弟であるカンクロウとテマリによって密やかに葬られた。たった二人の葬式という悲しいもの。

本来の流れなら風影として慕われた我愛羅も、この世界では報われることは無かった。中忍試験前とは周りに対する対応は大部変わったけど、自分から積極的に関わろうとしなかったので腫れ物に触るような反応は結局、最後まで変わることは無かった。それどころか頭痛の種が減ったと喜ぶ人間もいたぐらいだ。

「ごめん、ごめんな我愛羅」

カンクロウとテマリは我愛羅の変わろうとした努力を知っていた。それを周りが理解してくれなかったのが悲しかった。

我愛羅の遺体の前でテマリは、涙を流して謝り続けた。

我愛羅奪還失敗に意気消沈するカカシ班。更に万華鏡写輪眼の影響でカカシはしばらく動けなくなっていた。代理でカカシ班の隊長に指名されたのはヤマトと、サスケの補充としてサイがカカシ班に加わり、サクラがサソリから聞き出した情報で、大蛇丸のもとにいるサソリのスパイと接触することになる。

ヤマトがサソリに変装しスパイと接触するも、そのスパイの正体は大蛇丸の右腕のカブトで、既にカブトに掛けられたサソリの術は大蛇丸に解かれており、ヤマトは窮地に陥る。

「やはりサスケ君より弱いわね。四代目の息子だから当たり前だったかしら」

「大蛇丸、お前だけは！！」

ナルトはヤマトを助けるために大蛇丸に挑むも、父を侮辱するという決して犯してはならない領域に踏み込まれた。

挑発に触発されて攻撃するも反撃にあい、大蛇丸には逃げられた。暴走するナルトを放置して、サイは本来自分に与えられた任務のために動き出す。

大蛇丸によってダメージを受けたナルトを回復させた七班は、大蛇丸のアジトに潜入する。

そこで、先にアジトに侵入していたサイが所属する暗部の真の目的がサスケの暗殺にあることを知る。しかし、サイはサスケとの繋がりを守ろうとするナルトとサクラを見て兄との繋がりを思い出し、共にサスケ奪還に協力する。

そしてナルトは2年半ぶりにサスケとの再会を果たす。

「オレを追い回す暇があったら修行でもしてりゃ良かったのに……。なァ…ナルト」

サスケは全てを諦めたように言った。そして、一呼吸も置かないうちにナルトの前に立ちその右肩に手を乗せる。まるで再会を喜ぶ家族のように。

「…サ…サスケ君…！」

「仲間を……家族一人救えねぇ奴が火影になんてなれるかよ。そうだろ……サスケ」

腰に佩いた刀をスラッと抜くサスケに、決意を滲ませた口調でナルトは語りかける。しかし、そこにいたサスケはかつてのサスケとは違っており、ナルトたちを本気で潰しにかかる。

ナルトとサイとヤマトは、サスケに全く歯が立たずに敗れる。そして、全てを終わらせようとした時、大蛇丸がそれを止める。そして、かつての友であるサスケはナルトたちの前から再び消えてしまう。

「ええぃ、しつこい！」

ナルト達がサスケと邂逅している頃、九尾である玉藻にマダラの手が伸びていた。如何なる手段を使ったのかマダラは玉藻の居場所を察知して執拗に追う。実は、マダラは一尾から玉藻の情報を得ていた。

あの時の四代目や先代の人柱力が死んだからといって、一尾の前に姿を現したのが仇となった形になる。

未だに写輪眼に抗する手段を持たない玉藻は逃亡を続け、写輪眼を持っている者の中でもっとも弱いサスケを探す。

「こいつが生霊といわれる”二尾”の化け猫か」

ナルト達が木ノ葉の里に帰還してまもなく、雲隠れの里で二尾を宿した人柱力が暁に倒されて拘束した。また、他国においては暁の別のメンバーが三尾の捕獲に成功する。

「アスマ――――――ッ！！」

雲隠れの里で人柱力を刈った暁のメンバー飛段と角都が火の国に侵入し、交戦した上忍猿飛アスマが彼らの術の前に敗れ還らぬ人となる。

師の敵を討つべく、元第十班のメンバーは、アスマの代役のはたけカカシと共に再戦。ヤマトを筆頭とする仮の第七班として参戦し、非力さを痛感したナルトが修行で習得した、螺旋丸に風の性質変化を組み合わせた“風遁・螺旋手裏剣”で倒した。

「もうアンタに教わることは何も無い。…アンタの前でも…非情になれそうだ」

ナルト達が暁メンバー二人を討ち取った頃、「大蛇丸を越えた」と確信したサスケはついに大蛇丸に凶刃を晒す。例え代わりであっても父だったミナトを殺した大蛇丸を始めから赦すつもりはなかった。大蛇丸を倒しその力を取り込んだサスケは囚われていた水月を引き連れ、残りの香燐、重吾を仲間に加え、小隊を「蛇」としてイタチの捜索を開始。

「もちろん”蛇”の目的は唯一つ……」

「つまりオレ達が狙うのは……」

「「うちはイタチだ」」

奇しくも木ノ葉も同じ頃、小隊を結成してイタチの捜索を開始した。

「オイラの芸術は…爆発だ!!」

サスケはイタチの捜索中にも暁メンバーの一人デイダラとトビに遭遇。交戦し、接戦の上、重症を負うもこれを撃退することに成功した。

「許せ、サスケ……これで最後だ」

自来也が雨隠れの里へ侵入してペインに敗れた頃、デイダラとの戦いでの傷が癒えたサスケはイタチと戦闘を始め、苦戦するも勝利する。

「あれが写輪眼の力……これほどとは」

デイダラとの戦い前からサスケを監視していた玉藻は、兄弟が争うのを全て見ていた。

イタチの使った決して消えない炎【天照】、時間や空間、質量などあらゆる物理的要因を支配する自らの精神世界へと対象を引きずり込み、相手に無間地獄を体験させる幻術【月読】、突き刺した者を幻術の世界に飛ばして永久に封印する効果を持つ十拳剣や、あらゆる物理攻撃や特殊攻撃を無効化する絶対防御をほこる八咫鏡を持つ【須佐能乎】。

特に不味いのが【須佐能乎】の十拳剣で、受ければ幾ら玉藻といえど回避手段は無い。能力の多彩性や脅威、放っておけば何れ敵になった時が厄介だ。

「ミツケタヨ、キュウビ」

イタチが死んだのなら、イタチの眼を戴こうとした玉藻だが、二

人の戦いに気を取られてマダラの捜索網に引っ掛かってしまった。

それは、黄色い眼と緑の髪の風貌で体を巨大なハエトリグサの様なもので包まれており、人間離れした外見をしている。左半身と右半身とでは肌の色が異なっており、互いに異なる人格を持っている。左半身（白ゼツ）は優しげでやや子供っぽくまともな喋り方をするが、右半身（黒ゼツ）は厳格でカタコトを喋る。

地面や木などに身を潜めることができ、敵の監視役や仲間が捕らえた人柱力の回収等に回っているが、他にも九尾である玉藻の捜索も一手に担っている。

情報が漏れてからは、ゼツが玉藻を追跡している。

「ちっ、厄介な時に！」

目的を達する事無く、撤退して木ノ葉の里に逃げ込んで身を隠した。といってもイタチの遺体がマダラのアジトに持って行かれるのを、ゼツの跡を追わせた影分身に確認している。

「お前を――――――守るためだよ」

後にサスケはマダラから、うちは一族とイタチの真実を知らされることになった。

「我らは”蛇”を脱した。これより我ら小隊は名を”鷹”と改め、行動する。”鷹”の目的は唯一つ。我々は――――――木ノ葉を潰す」

仲間と合流したサスケは小隊の名を「蛇」より「鷹」と改め、イタチが死んだばかりで自身を愛していたという衝撃の真実を知った

ところで気付かぬうちにマダラによって想いを捻じ曲げられて暁と手を組み、イタチや一族の真の敵である故郷、木ノ葉への復讐を決意した。

「約束通り八尾は連れてきた」

「鷹」は雲隠れの里へ向かい、八尾の人柱力・キラービーと戦い生け捕りにしてマダラに引き渡した。このことは雲隠れにも知られ、「鷹」は雲隠れに追われる身となった。暁は八尾の封印を行うが、サスケが生け捕りにしたキラービーは変わり身だったため、失敗に終わった。

「自来也ちゃんが戦死した」

木ノ葉の里、火影の執務室に呼び出されたナルトは、つい数日前まで、何時ものように隣りに立って微笑んでいた師の戦死がフカサクからナルトに伝えられる。

「……は？」

まるでキツネにつままれた、とはこの事だ。これは何かの悪い冗談か？里に戻るひと月前には、まだまだ自分が死ぬわけが　ないと豪語していたばかりではないか。

走馬灯のように流れるのは、二年半共に過ごした日々の灯火。その後のことをナルトは、あまり覚えていない。いや、覚えているけど頭の中と心が同じ速度でついていかない。

それでもイルカや周りに支えられて少しずつ、師との絆が受け継がれていく。

自来也の命を奪ったペイン。その無敵の忍術を解析する作業が木ノ葉で始まった。自来也の仇をとりたくて焦るナルト。そのナルトを鍛えるべく、フカサクが妙木山で仙術の修行を提案する。

「九尾は木ノ葉の里か。ちょうどいい」

ナルトが妙木山で修行を開始して成果を上げる中、玉藻が木ノ葉に逃げ込んだ事を察知したマダラがペインを動かす。

九尾捕獲の為、ペインと小南は木の葉へ襲撃を開始し、容赦無い破壊を行い、次々と里の人や忍達を追い詰めて多くの忍達を殺害。更に、自らの術で木ノ葉にクレーターを作った。

皮肉というべきか、里の人間と玉藻が親しいという情報が無かったので、聞き出すのではなく、六道達が探す形になったので被害が本来よりもかなり死者が少なくなっている。

「あれは輪廻眼！　まさか保持者がこの時代にいるとはな！！　ん？　あれは四代目の息子。都合がいい。囮になってもらおうか」

里の者達が逃げ込んだ避難所に紛れていた玉藻は、里などどうでもいいが、襲撃者が輪廻眼の持ち主である事に歓喜した。

蝦蟇から木の葉襲撃の報を聞いて、本来の流れより早く仙人モードを習得していたナルトが急いで帰還して単独でペインと交戦を始めたのを見て、行動を開始した。

「仙人モード、か。中々に力をつけおったな。確か名は波風ナルトとか言ったか」

仙人モードを駆使したナルトがペインと戦っている間に既に倒されていたペインの一体から遠隔操作で本体の居場所を察知した玉藻は、群を抜いて高く聳え立つ紙で覆われた大樹にやってきた。

そこには、明らかに異常な機械に乗ったペイン――――長門と小南がいた。

「初めまして、というべきかな。確かペインとか言ったか」

「貴様、九尾！　何故ここに！！」

暁では、九尾の容姿などの情報が出回っている。今回も木ノ葉の里を襲撃した理由は九尾である玉藻を捕らえるためのもの。逆に長年、情報収集をしていた玉藻も、暁の人間と直接の面識はないものの幾人かの情報は得ている。

しかし、まさか当の本人が自分から目の前に現れようなどとは考えていなかった。それが今までずっと暁から逃げ回っていたのだから当然の考えである。

「なに、そいつの輪廻眼に用があっての」

玉藻のたったそれだけの言葉で目的を理解した二人は先制攻撃を仕掛ける。

長門の乗っている機械の前部を覆っていた門が開き、露になった砲門から矢の様に放たれた巨大な棒、巨大チャクラ受信棒が飛び出し、小南はチャクラを瞬間的に流し込み、硬化と研磨を施した紙片を手裏剣として用いる術【紙手裏剣】を放つ。硬化された紙は実物

の手裏剣と同等か、それ以上の斬れ味を持つ刃となる。

それらが玉藻に向かって飛んでいくも、

「ん？　今、何かしたか？」

微動だにしない玉藻に当たるかと思われたが、瞬間的に体の内から溢れだしたチャクラによって簡単に弾き飛ばされる。幾ら今の二人が木ノ葉を襲撃して大半のチャクラを使っていたとしても、ここまで簡単に弾かれてしまったらどうしようもない。

そこにあるのは歴然とした戦力差。万全な状態ならまだしも、六道が出払って力の大半を使い果たした彼らには抗いようも無い。

「で、結局、お主は何がしたかったんじゃ？　我を捕らえたいのに木ノ葉を潰すとか意味が分からん」

先程の攻撃を気にした風も無く、長門に向けて問う玉藻。今の状況ははっきりと言って絶望的な長門達は、六道が戻るまでの時間稼ぎを選択した。

「……オレの目的は平和を生み出し、正義を成す事だ」

火の国…そして木ノ葉は大きくなりすぎた。国益を守るため大国同士の戦争で自国の利益を獲得する必要があった。でなければ、国……里の民が飢える。だが、それら大国の戦場になるのは小さな国と里だった。その度に国は荒らされ、疲弊していった。幾度かの戦争を経て大国は安定した。小国に多くの痛みを残して。

誰もが自身の正義の為に動く。大切なものを失う。痛みは誰も同

じ。

長門の最大の痛みは2つある。1つは両親の死。かつて大国に巻き込まれ戦場になった雨隠れの里。食糧目当てに家に侵入した木ノ葉隠れの忍から逃げようとした際、暗がりで敵と見間違えた忍に両親を殺害される。両親の死をきっかけに長門は悲しみと怒りで輪廻眼を開眼し無意識下で相手を殺害。

両親を失った長門は食料も尽きたので家を出て、あてもなく里を彷徨っていたところ、同じく戦災孤児の弥彦、小南と出会い、自身が拾った子犬のチビを加えて、市場から盗んだ食糧で生活していた。半蔵と三忍の戦に巻き込まれてチビを失い、後に三忍と出会った際に弟子入りを志願し自来也に引き取られる。

しかし、木ノ葉の忍に両親を殺された長門は、なかなか自来也を受け入れる事が出来なかった。

それでも、自来也と生活しているうちに、「彼（自来也）はちょっと違う」という思いが長門の中に芽生え始めた。そんなある日、事件が起きた。

忍の残党が弥彦と長門を襲ったのだ。弥彦が殺されそうになったのを見た長門は輪廻眼の動術を無意識に発動。残党を殺してしまった。

長門の輪廻眼を知った自来也は、弥彦・小南・長門に対し真剣に忍術を教え始めた。身を守るための忍術だと言っていたが、本当は長門に輪廻眼をコントロールさせるための修行だった。

長門は自分の力が怖かった。憎しみで力が暴走し人を殺めてしま

った。その事で罪悪感に苛まれた。しかし、自来也はそんな長門を救ってくれた。

自来也から忍として修行を受け、自来也が木ノ葉に帰った後は弥彦をリーダーとした組織を結成、争いを止めるために活動を続け、規模を拡大させていった。

組織が掲げる「極力武力に頼らない平和を構築しよう」という考えにみんなが賛同した。そして、組織はあっという間に有名になった。

しかし、その頃世界では岩・木ノ葉・砂の三大国間の戦争が行われていた。雨隠れの長・半蔵は長門たちの組織に対し「平和の為に手を組もう」と持ちかけた。長門たちはその考えに協力することにした。

それが全ての災いの始まりだった。手を組もうと言うのは半蔵の罠だった。雨隠れの主権を弥彦に奪われるのではないかという疑念をもった半蔵は、木ノ葉のダンゾウと手を組み弥彦の抹殺を企てていたのだ。

小南を人質に取り「弥彦を殺せば女とお前は助けてやる」と長門に迫る半蔵。長門に弥彦を殺せる訳ない。でも、そうしたら小南が殺されてしまう…。

長門は究極の選択を強いられた。どうしたらいいのか解らないままクナイを握る長門。すると、弥彦が自分からクナイに向かって飛び込んできた。深々と弥彦の体に刺さるクナイ。血を流す弥彦。

ズルリと崩れる弥彦の体。泣き叫ぶ小南。弥彦が死んだのに長門

へ攻撃を仕掛ける半蔵。

『こんな世界が続くなら、僕が神様になってやる…っ！』

それはかつて弥彦が言っていた言葉。その言葉を思い出した長門は素早い動きで小南を救出。しかし、その時半蔵の火遁術で両足を負傷。それでも長門は半蔵たちに立ち向かっていった。

長門は「口寄せ・外道魔像」を使い半蔵の部下および木ノ葉暗部を殺害。しかし、半蔵とダンゾウはその場から逃亡した。

命の恩人であり長門の夢。命を掛けて守りたかった友。弥彦の死…それが長門の二つ目の痛み。

弥彦を失い、組織のリーダーになった長門。しかし、仲間を何人も殺され世界への絶望は深まるばかりだった。

「人は決して理解し合う事のできない生き物だと悟らざるを得ない。忍の世界は憎しみに支配されている。オレはな…その憎しみの連鎖を止めるために“暁”を立ち上げた。オレにはそれができる…そのためには九尾の…お前の力が必要なのだ。全ての尾獣の力を使い、この里を潰した数十倍の力を持つ尾獣兵器を作る。一国を一瞬で潰せるほどのな。本当の痛みを世界へ知らしめ、その痛みの恐怖で戦いを抑止し…世界を安定と平和へ導くのだ」

大きな痛みは人々に恐怖と不安を与え、それが大きな抑止力になり、結果人々は安定するという。時が経ち人々がその痛みを忘れかけた頃、所詮人は賢いとはいえない生き物、過去と同じ過ちを繰り返し痛みを知り、安定する。

その繰り返しによって平和が保たれるという長門の理論。

長門は骸骨が浮き出るほどやせ細った身体でチャクラの発信機となる黒い棒を埋め込み、蜘蛛のような補助装置に取り込まれた姿は、その狂信的な思想の先鋭性をよく表しているといえる。

「この終りなき憎しみの連鎖の流れの中に痛みにより一時の平和を生み出す事、それがオレの願いだ」

世の中不思議なことに絶対正しいことよりも絶対間違っていることの方がほとんど。

特に平和だの正義だのの大義名分は言葉に実が伴わず、だから有り体に戦いの狼煙として掲げられてしまう側面を持っている。

だからこそ、長門はその真実性を求め、己の信ず“本当の平和”を実現させようと躍起になっているわけだ。

「我もこの十数年、色々な所を旅したからの。世界がどういうものかは大凡理解しておる。それでもお主のやり方が正しいかどうかは、我には判断がつかん」

“平和”への答え。憎しみをどうにかし、人と人が分かり合う平和への答え。玉藻にはその明確な答えがない。

「例えお主に共感できたとしても、我は協力できんよ」

協力できない理由はマダラの事や、他にも幾らでもあるが、そもそも確立した自己を持っている玉藻には、人間の為にそこまでする義務はない。

交渉というものでもなかったが決裂してしまえば、お互いに譲れないものがあり残るのは意地を通すのみ。

「な！？」

最後のペインを倒して玉藻と同じく遠隔操作で辿りついたナルトが見たのは、殺された小南と長門を喰らって輪廻眼を取り込んだ玉藻の姿のみ。

「遅かったな四代目の息子よ。もはやペインはどこにもおらんよ」

納得できないナルトは玉藻と戦闘に入るも、ペインとの戦いで消耗していたナルトに勝機はなく呆気なく敗北して玉藻は悠々と逃亡。

「歴代火影達の築いてきたものが全て破壊されちまったな。何も残ってねーよ。まさかこんな事になっちまうとはな」

「火影達の遺産はこの里だけじゃないだろ。オレ達が残ってる」

ペイン襲来の被害は甚大。五代目火影・綱手は倒れ、死者も多く出て里の力はかなり低下した。

ペインがいなくなったとはいえ、深い虚無感が漂う木ノ葉の里。失意の中で木ノ葉が復興へと動く中、ペイン襲撃の際、チャクラを使い果たして昏睡状態に陥った五代目火影・綱手に代わり、暗部の頭・ダンゾウが半ば強引に六代目火影に就任してしまう。

雷影は、実弟の八尾・キラービー（変わり身）が誘拐されたこと激高し、雲隠れの忍にサスケらの捜索を命令。また、抜け忍のサス

ケを木ノ葉が止めなかったことが気に入らなかったため、サスケの殺害に同意を求める文書を用意させ、五影を招集する。

八尾の捕獲に失敗したことを知ったマダラは、サスケに接触し、急遽「月の眼計画」を打ち出す。

「…今さら何の用だ?オレ達“鷹”は“暁”を抜けた。お前らにもう用はない。」

「イヤ…“暁”としてやった仕事は最後までやってもらう。…とは言っても八尾はもういい…。今は別の用をやってもらう事にした。」

尾獣狩りの件で暁に協力したが裏切った覚えはないサスケ達だが、結局のところサスケ達が持ち帰ったのは身代わりに過ぎなかった。

写輪眼では確かに見切っていたはずだと驚くサスケだが尾を分断したときにその隙があったことに気付く。

暁として引き受けた仕事はやってもらうと言うマダラを押し通ろうとするサスケだが、マダラの身体を透過してしまう。

「お前の目的は今や空しく聞こえてくる…残念だ。木ノ葉隠れの里はもう無い。」

マダラの言葉には流石にサスケも驚きを隠せない。そこへまた突如として現れたゼツが、火影がダンゾウに決まったことを知らせる。

ダンゾウという言葉に反応したサスケを、待ってましたとばかりに次のようにマダラは追い討ちをかけ、一体木ノ葉で何があったのか、訊ねるサスケにマダラは答える。

「オレの部下ペインが木ノ葉を潰した。お前もペインもハデにやりすぎたせいで、ついに五影も動き出したようだ。」

サスケの八尾拉致、およびペインによる木ノ葉強襲は、暁に対する局所的に点在していた不満分子を一気にかき集めてしまう結果を引き起こしていた。

五影会談が開かれるとなって、ターゲットであるダンゾウが木ノ葉を出てしまうなら、ターゲットが向かう方に行った方がいいのではないかと提案に、火影の首を取るために行き先変更するサスケ達。

「…それがいいだろう。」

その意を示すとマダラは北叟笑むかのように言う。しかし、この時点でマダラは長門は殺されたものと想い、輪廻眼を玉藻に喰われた事で自身の計画が破綻していることに気付かない。

「始まったか。では、うちはイタチの写輪眼。頂くとしようか」

中立国である鉄の国で「五影会談」が開かれたが、暁が会場に侵入し、五影と交戦。

マダラが玉藻を監視していたように、玉藻もマダラを監視していた。玉藻はその隙をついて、マダラのアジトを強襲して保存されていたイタチの身体を喰らって写輪眼を取り込んだ。

マダラは「月の眼計画」と「第四次忍界対戦の布告」を伝え、五影の前から姿を消す。マダラは当初の計画通り、サスケを敵の一人であるダンゾウと戦わせた。本元でないダンゾウが借り物の力であ

る写輪眼の奥義を心得ているかのような態度は、まさに奢りそのもの。

結果的に、より写輪眼を使いこなしたサスケが後一歩までダンゾウを追い詰める。

「このワシが…！　こんな…小僧に……！ワシはまだこんな所では死ねん！！！」

ダンゾウは衰弱し、それゆえ制御が利かなくなった柱間の細胞を右腕もろとも切り離し、香燐によってチャクラの回復を図るサスケの前に、再び立ち塞がる。

ダンゾウもただ戦っていたわけではなく、奥の手としてシスイの眼の回復を図っていた。

千鳥を放ち突進するサスケをかわし、香燐を人質にとる。

その瞳力の狙いは弱ったサスケではなく、高みの見物を決め込んでいるマダラ。この戦いがマダラに仕組まれているものだという事はダンゾウも重々承知していた。

「瞳力を使いすぎたな」

「自己犠牲を語ったお前が…人質とはな」

「自分の…命が……惜しい訳ではない。木ノ葉の為…忍の世の為、ワシはこんな所で…死ぬ訳にはいかん…。どんな手を……使っても…生き残る。ワシは……この忍の世を変える唯一の改革者となる者…。この女はその為の犠牲だ。」

サスケは右目の万華鏡の模様が消え、皮肉に言うもダンゾウはそう答えるも自分のミスには気付かない。

「動くな、香燐」

サスケに助けを求める香燐にそう告げるサスケ。次の瞬間、サスケは邪悪な笑みを浮かべて香燐ごとダンゾウの急所を千鳥で貫いた。

「兄さん……まずは一人目だ…。」

悪魔が乗り移ったような狂気の表情を浮かべて薄気味悪くサスケは呟く。サスケは敵の一人であるダンゾウを殺害し、己の目的のために鷹のメンバーを見限った。

死期を悟ったダンゾウは、裏四象封印術を用いて迸る血液が球をつくり辺りを包み込み、マダラとサスケを巻き込み滅しようするも届かなかい。

マダラに言われた通りにサスケが香燐に止めを刺そうとする。絶体絶命かと思われたサクラが駆けつけた。

自身を想って里抜けまでするといったサクラを裏切り、殺そうとするサスケ。そこに割って入るようにカカシが止めた。

「（まだ可能性はあるか）何のつもりだ、サスケ」

そこにほんの僅かな躊躇いを見て取ったカカシの一縷の望みをかけて放たれた言葉も、サスケには届かない。二人は戦闘に入り、サスケの“黒濁”とでも表現すべき感情が、須佐能乎の変化を通じて

カカシに危機を知らせる。

しかし、最も禍々しくその姿を変えたと思われた次の瞬間、須佐能乎が衰え消えていく。

サスケの視界がかすみ、目の前にいるカカシの姿すらぼやけて良く見えない。その隙にサクラはサスケの背後に忍び寄る。

「（サクラ…何で出てきた！　よせ！）」

カカシに重荷を背負わせるわけにはいかない。

それがナルトを苦しめてきた自分の贖罪だと、そしてそれが自分の覚悟と信じてやまないサクラは、もう状況を冷静に判断できなくなって、個人的な感情が先走ってしまっている。

「（…覚悟……したハズなのに…！！）」

でも、生来のサクラがもつ優しさからなのか、どこかでサスケを許してしまっている自分がいる。

サスケに気づかれず背後をとりつつも、最後の最後でクナイをサスケに刺せない。

でもそれはサクラの弱さであり、甘さであり、非情なサスケはそれを見逃さなかった。サクラの首根っこをつかみ、サクラの手にするクナイを奪い取る。

「よせ！！　サスケェ！！」

万華鏡写輪眼の反動でよろめき、助けにいけないカカシの叫びもむなしく、振り下ろされた兇刃がサクラを絶命させるその瞬間、ナルトがサクラを助けた。

そして止めるカカシを影分身が抑え、サスケの千鳥と螺旋丸との応酬の中でナルトはその“理解”を示す。

「最初は気に入らない奴だと想った。でも、喧嘩して、ぶつかり合って、語り合って、オレはお前と家族になれてホントによかった」

出会い、そして?がってナルトは自分を変えてくれたそのことに感謝の気持ちを顕すように、狂気と化したサスケを前にして生き生きと語る。

しかし、復讐に取り付かれた現在のサスケにはその想いは届くことはない。ナルトもそのことはよく分かっている。

「ナルト、オレもそう思う……だけどなお前が今さらオレに何を言おうとオレは変わらねェ!!　オレはお前も里の奴らも一人残らず全員殺す!!　行きつくところ、お前の選択はオレを殺して里を守った英雄になるか!!　オレに殺されてただの負け犬になるかだ!!」

「負け犬になんかならねーし!　お前を殺した英雄なんかにもならねェ!　そのどっちでもねーよ!　オレは――」

ナルトの本心からの言葉に、少し狂気が抜けたようにサスケも認めるが最早、引き返せるものではない。とっくの昔に二人の行く先は分かたれており、決するには二択しかないと決め付ける。

ナルトは別の道を見つけると宣言し、何でそこまで自分に拘るのか、というサスケの言葉に唯一言「家族だからだ!!」とサスケとの決着に命を懸けることを決意する。

二人は別れ、次に戦う時は雌雄を決することを予感していた。

マダラはサスケを連れて戻ってきたアジトが廃墟になっているのに気付いた。更に、既に長門の輪廻眼が存在しない事をゼツから聞かされて、怒りは頂点を越えた。

マダラは、怒りがある一点を超えて、逆に冷静になると一人の存在が脳裏に思い浮かび、陥れていたつもりが嵌められていた事に気付いた。

「おのれ九尾……！　一度ならず何度もオレの邪魔をするか……！」

どちらにしても、マダラの計画は大きく崩れ、別のシナリオで『月の眼計画』を進めねばならなくなった。

「これをもって…忍連合軍の結成が承認されました。モニターを録画。私、天画がこれらの証人となります」

最終的に五大国は、忍連合軍も雷影を筆頭にして結成するも、本来なら我亜羅がいることで纏まる筈が、いないために信頼性に欠けている。

大いなる野望に動き出す暁、そしてそれを阻止しようとする忍五大国、写輪眼を取り込んでマダラへの対策を万全にした玉藻。

マダラとカブトの暁、里同士での繋がりがイマイチ薄い忍連合軍、

九尾の玉藻による第五次忍界大戦、世界の運命を賭けた最終決戦が始まった。

「…カブトは穢土転生とか言う大蛇丸の闇の忍術を使ってくる。データによると魂を縛られ生き返った死人だ…。いくら攻撃しても死ぬ事がないらしい…。魂を封印するか、動きを止める術しかやりようがない…。しかも…術者を殺したとしても術は解けない…。どの部隊でもそうだが、まずカブトを見つけ次第拘束だ。後で幻術をかけ、そのやっかいな術を解く…、とそう聞いてる。」

大蛇丸の細胞を取り込んだカブトの【口寄せ・穢土転生】によって蘇った血界限界持ちや優秀な忍びたちに苦戦して劣勢に追い込まれていく忍連合軍。

「サスケ――――――ッ!!」

「ナルト――――――ッ!!」

その中でナルトはサスケと対峙し、激戦を繰り広げ、玉藻は絶好の機会を伺う。

「オレと一緒に生きろよ、サスケ」

「くっ、ナルト」

蘇った忍び達と忍び連合軍が交戦をする中、写輪眼の多様で視力の落ちているサスケは兄弟としてのナルトに説得されて破れた。数年とはいえ、兄弟として生きたナルトの言葉に、ついにサスケの心は動かされたのだ。

「さて、行くとするか」

二人の決着がついた事で決戦のバランスは徐々に拮抗していくのを感じた玉藻は、一気に立ちはだかる者達を倒し、時に喰らってマダラに迫る。

「何だ、アレは！！」

「九尾だ！！」

当然、突如現れた九尾に戦場は大混乱に陥る。周りの混乱を余所に、玉藻は目障りな【口寄せ・穢土転生】を使うカブトを真っ先に狙い、チリ一つ残さず跡形もなく消滅させてマダラと対峙する。

「待たせたな、マダラ――――――ッ！！」

「九尾風情がオレの邪魔をするな――――――ッ！！」

完全に油断していたマダラは他の尾獣達や写輪眼など、持てる全てを使うも玉藻に劣勢に追い込まれていく。玉藻は写輪眼を喰らったことで耐性をつけ、多彩な忍術と圧倒的な力を使ってマダラとの戦いを有利に展開していく。

忍術は妖魔と人とを分つ絶対的な壁だ。

力のある妖魔はチャクラを有効活用しようとはしない。当然だ。腕を振るだけで炎が出たり、大地が隆起したりするのだから。しかし、そこにはかなりの無駄遣いがあるが、それは無駄遣いをしても大丈夫なだけの容量があるからである。

人間は違う。僅かなチャクラを有効に活用する為に印を切り、術を使うために適した回路を構築していく。無駄に使えるだけのチャクラがないのだから修練をこなし、チャクラの運用法を身体に刻んでいく。つまり、妖魔には【術】という概念がないのだ。それは息を吸うのと同じくらいに当たり前のことであり、意識せずとも起こってしまう現象でしかない。

仮に、膨大なチャクラを持ちながらも【術】を使う生物がいたとしたらどうなるか――――それが、玉藻が圧倒的な強さを誇る理由である。

「死ね！　マダラ！！」

周りを巻き込みながら他の尾獣たちを倒し、玉藻の雷光を発する手刀がぼろぼろになりながらも立っていたマダラの胸を貫く。ザシュと言う音が最早、辺り一面荒野と化した空間に響いて、透過することなくマダラを玉藻の腕が貫いた。

「…馬鹿な、九尾如きに敗れるとは……！！」

仮面が剥がれ、全身から血を噴出して致命傷を負ったマダラは口から血を吐き出しながら、１６年前での失敗を後悔する。あの時の失敗がまさか今に響いてくるとは考えもしなかった。

「ふ、ふふふふ・・・見事だ――――まさか、俺が倒れるとは」

「ふん、１６年前のあの時、我を操れんかったのが貴様の敗因じゃ」

末期の如く血を吐きながら笑うマダラに、玉藻は少し異なれば違ったであろう切欠を思い出す。１６年前の時点で操られていたか、

そうでないかが今に続いている。

「計画は既に破綻した。しかし、貴様は逃さん!!　このまま俺と一緒に死んでもらおうか!!」

「何?　これは、離さんか!!」

己の死を実感したマダラは計画を破綻させた玉藻を道ずれにしようと、自身を貫いた腕を離さぬまま時空間忍術を暴走させる。空間が歪んでいくのを感じた玉藻が逃げようとするも、マダラは自身を貫いている玉藻の腕を簡単には離そうとはしない。

空間の歪みはまし、やがて空に亀裂が走っていく。

玉藻も他の尾獣たちとの戦い、マダラの決戦で浅からぬ傷を負っておりマダラを振り解くのに時間がかかった。

「どけ!　くっ、おのれマダラ!!」

玉藻がマダラを振り解いた時には、既に逃げる時間は残されていなかった。空間の亀裂に吸い込まれていく玉藻はマダラに呪いの言葉を吐く。

「ははは、さらばだ九尾よ!!」

計画を散々邪魔してくれたイレギュラーに、最後の最後に一矢報いたマダラは嗤う。

玉藻を吸い込んだ空間の亀裂は音もなく閉じていき、見届けたマダラは嗤った表情のまま事切れた。

その日、第五次忍界大戦は九尾の横槍という形で終結し、唯一残った忍び連合軍が勝利した。九尾である玉藻はこの世界から消え、この世界の今後は彼らに委ねられた。

どことも知れぬ森の中、一匹の子狐が死に瀕していた。

この子狐はマダラの最後の足掻きによって空間の亀裂に巻き込まれた玉藻であり、幸いというべきかまだ（・・）生きている。しかし、その全身は傷だらけで今にも死にそう。

マダラとの決戦で出来た傷だけでなく、どことも知れぬ空間で嵐ともいうべきものに巻き込まれて致命傷を負った。自前での治癒力も上手く働かず、もっとも消費の少ない子狐状態になっているが残された時間は少ない。

（ここまでか……）

玉藻は怪我の状態を把握して冷静に悟る。チャクラは空っぽで全く動かず、傷は致命傷、治癒力もほとんど働かない状態では助かる術はない。

（癪といえば癪じゃが、この16年は思うがままに生きれた。それで良しとするか）

マダラに一矢報われてまま死ぬのは癪ではあるが16年前に封印から逃れてからは、それなりに好きな事をして生きた。悔いがないと言ったら嘘になるが求め始めたら終わりがないので納得するしかない。

しかし、それでも――――――。

（家族、というものを作ってみたかったな）

各地を旅している時に見た家族というものに玉藻は一種の憧れを抱いていた。

封印が解けた当初はそんな気持ちにもならなかったが何年も俗世に塗れ、ずっと一人で生きてきたので孤独感を感じてしまった。

九尾である玉藻は、六道仙人によって十尾の身体から抜かれたチャクラが9つに分けられてそれぞれの尾獣になった内の一つ。故に親や子、同類という存在がいない。或いは他の尾獣が同類、兄弟といえるかもしれないが玉藻にそんな考えはない。

死に瀕しているので、尚更にそういう存在が欲しいと欲求が強まっている。

「どうしたの君、大丈夫?!」

（ああ、温かいな）

だから、自分を見つけて慌てて駆け寄ってきた金髪の少年に抱き上げられた時に、その腕の中が本当に温かいと感じて手放したくないと薄れゆく意識の中で思った。

この出会いが世界の運命すら変えるのだということを知ることもなく。

ｐｒｏｌｏｇｕｅ後編　九尾は世界を外れ、少年と出会った（後書き）

ちまちまと加筆して、当初の倍の量になりました。

次回はほとんど本作と変わらないと思います。多少、文をつけたしたり変えたりするぐらい？

前々回同様に次回更新は遅くとも三週間後、早くて来週の日曜日午前０時に更新したいと思います。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

活動報告で修正や経過報告を書いてたりしています（最近は怠け気味ですが）

尚、修正は投稿から一日後に纏めて行います。

第一話　　九尾と契約を交わした少年（前書き）

今回は仕事を始めたため3週間とかなりの時間が空いてしまいました。申し訳有りません。

まあ愚痴はこれぐらいにしてＰＶ累計　７００万、ユニーク　８０万人を突破しました。見てくださった皆様に感謝を。

文字数は１３１８８字です。

それではどうぞ！！

第一話　九尾と契約を交わした少年

イギリスのウェールズにある片田舎にある小さな村。一見どこにでもあるような村だが、ある一点のみ普通とは異なっている箇所があった。

それはこの村の大半の人間が魔法使い、もしくはその関係者であるという事。

そんな普通とは少し変わった村の中で、叔父の家の離れを借りて広い家で双子の兄――――――ネギ・スプリングフィールドと二人で暮らしていたアスカ・スプリングフィールドが、自分には前世があることをはっきりと理解したのは二歳の誕生日を迎えてからのことである。

アスカの意識が徐々に出てきたのは大体物心がついた頃ぐらいで、それからは意識が浮いたり沈んだりを繰り返して二歳の誕生日を向かえた時ぐらいに自我を完全に確立した。

完全に自身を自覚した時はたった一人で遊んでいたのか緑が生い茂った森の中にいて、周りには誰もいなかったので慌てた姿を誰かに見られることはなかったのが救いといえば救いか。

自分が何故見知らぬ、だけど知っている場所にいて、アスカ・スプリングフィールドという名前、容姿、年齢、果ては人種まで変わって生きていることに戸惑いを覚えた。

夢だと断じるには見る物、感じる物全てがリアル過ぎた。そして僅かとはいえ、物心ついた頃からのアスカ・スプリングフィールド

としての記憶もある。

今世で親は物心ついた頃には既にいなかった。周りの話では父親は死亡し、母親のことは誰も二人には言わないので死んだものだと思っていた。

病弱で碌に病院の外にも出ることが出来なかったが、優しい両親や友達などに囲まれて幸福だったという前世の記憶を持っている。

夢だと思い込むしても普通なら在りえない筈の記憶があり、そこには自分の感情や思いがあって確かに自分の記憶だと断定できる物であった。今の状態を分かりやすく言うなら忘れていたものを思い出したという言葉がピッタリと当て嵌まる。

「悪い夢みたいだ」

頬を抓っても痛みがあり、どうしようもなくなったアスカは周りに迷惑をかけないために普段通りの行動を取るしかない。

家に帰って数日して自分が前世で呼んだ『魔法先生ネギま』の世界、もしくはそれに限りなく近いに世界にいるのだと知った。

自分の事は良く分かっていたのだが双子の兄であるネギの事には頭が回らなかったのだ。双子の兄であるネギは前世で読んだ『魔法先生ネギま』の主人公で、自分は存在しないはずの弟である。

ネギだけなら名前が似ている別人と思い込むことも出来ただろうが、他に従姉のネカネ・スプリングフィールドや幼馴染のアンナ・ユーリエウナ・ココロウァ（通称アーニャ）までいるとなれば違うとは言えない。

更に何日経っても変わらないとあっては、これを現実だと認めるしかなかった。とはいえ元の場所に帰りたいと想いがなくなるわけではない。

そう思うのはやはり元の場所が恋しいという思いもあるが、今世で親がいないのが大きい。アスカは前世で優しい親に愛されていた。それも溺愛というレベルだと言っていい。前世のアスカも親を愛していたと胸を張って言える。

分かりやすくいうなら親の愛が欲しい甘えん坊なのだ。

元の場所に帰りたいと思う理由は他にもある。父親であるナギ・スプリングフィールドは千の魔法を使いこなす「千の呪文の男（サウザンド・マスター）」と謳われる最強の魔法使い。２０年前の魔法世界での戦いにおいて文字通り世界を救った英雄。極めつけに母親のアリカ・アナルキア・エンテオフュシアは災厄の女王と呼ばれてタブー視されている。

つまり現時点において父、母共に災いを齎す存在でしかない。

恐らく兄のネギは父親であるナギが自分の名前から取って、弟であるアスカは母親であるアリカが自分の名前にから取ってつけたものだと推測できる。

ちなみにネギとは双子だが容姿はかなり違っており、アスカの髪の色はネギのように父親譲りの赤ではなく金色。顔はネギは比較的父親に似ているがアスカは母親そっくりな顔をしている。

母親が写った写真とかがないので確認はできず、漫画の知識だけで確定はできないがアリカの顔を幼くしたような印象を受けた。つ

まりネギは父親似、アスカは母親似というわけだ。

これだけ似ていないのだから少なくとも一卵性双生児ではないのだろう。二卵性双生児だとしてもここまで似ていないと本当に双子どころか兄弟であるのかも疑わしいとすら思えるほどだ。

「嘘だ、そんな！？」

最初に鏡で母親に似ていると気がついたとき、アスカは愕然とした。

唯でさえ【英雄の息子】という肩書は、普通に生きるのに邪魔なのに極めつけは母親を幼くしたこの顔。母親は漫画を見たときには好感を持てても、タブー視されているアリカの事を知っている人には自身が誰の息子かが一目でばれてしまい危険なのは間違いない。

わざとか、或いは偶然かアスカの前髪は顔が隠れるくらいに長い。アスカは自身の記憶を思い返してみればネカネやアーニャの母親は切るように言われても頑なに切ることを拒否して髪を伸ばし、誰にも素顔を見られないように気をつけていたのは前世の記憶の影響なのだろう。

「神様、もしかして僕は何か悪いことをしましたか？」

何故、最も死亡フラグ満載の血縁に生まれてしまったのかと思い、存在するか定かではない神様にと問いかけずにいられなかった（当然、返事はなかったが）

「あそこへ、あの暖かい場所に帰りたい」

そういう事もあって今の親のいない環境よりも前の場所に戻りたいという想いも無理からぬものがある。

しかし、そう思っても何も変わらないのが現実である。

といっても全てが全て悪いことばかりではない。まずは体が健康だということと、住んでいる村が本当に田舎で、静かで空気の綺麗な土地だということだ。

生前は病弱でろくに病院の外に出ることができなかったから、これはとても嬉しくて暇さえあれば毎日外を走り回っています。毎日外で走り回っているので静かで空気の綺麗というのはとても嬉しい。

流石にネギとアスカは、二人だけで暮らしていたといっても世間一般では子供どころから幼児といっていい年齢なので家事はできない。当然、そこら辺は全て叔母がやってくれている。

二人で暮らしていたなら兄弟間の仲が良いかと言われれば然に非ず。普通なら大したことのない筈だった出来事が発端で二人の関係は拗れてしまった。いや、もしかして当人からしたら深刻な問題であったのかもしれない。

それが起こったのは何時ものように家でネギが父の事を話すのを聞かされている時だった。

基本的にアスカは周りに手間を掛けず、家にいる時は前世で読書が趣味だったので借りてきた本（とても子供が読むような本ではなく、かなり難解）を大人しく家で読んでいるか、村に同年代の子供が少ない影響で一人で遊ぶことが多い。どちらかといえば一人でい

る事を好む子供だった。ネギと共にいる時間は兄弟なのに意外に少ない。

その仲違いともいえる関係になった最初の切欠はアスカにある。ネギとアスカは双子、兄弟であるのに似ていない。確かに物心ついたときには一緒にいたけど赤の他人だと言われても信じれそうなぐらいに全く似ていない。本当に兄弟なのだろうかと疑っても仕方ないほどに。

アスカはとても信じられないが漫画の世界で最も厄介な血筋に生まれ、村で何か周りが自分に向ける視線に違和感を覚えるなどかなりのストレスが溜まっていた。

「ねぇねぇアスカ。ほら見て父さんの絵を描いたんだ」

アスカが家で何時ものように難解な本を読んでいる時にネギはクレヨンで描かれた下手糞な絵を差し出してきた。その絵には左上と下に花と太陽、真ん中に人がいて持っている杖から出ている何かが描かれておりお世辞にも上手いとは言えないが、ネギがどれだけ父を好きかを。

「うるさい！　いない父親の事を思って何になるんですか！！」

ネギに他の人に聞いた父の事を聞かされ、虫の居所が悪かったアスカが反発してしまったのだ。

アスカにも勿論、言い分はある。アスカは原作知識というもので最低限ナギが生きている事を知っている。行方不明になったことにもそれだけの事があったのだと理解している。それでも親ならば傍にいてほしいという思いが常にあった。

アスカの理想の親像は、前世での親そのものである。故に今世で傍にいてくれない両親に対して忸怩たる想いを抱いてしまう。

それは生まれ変わった現状を受け入れようとしたアスカ本人も自覚していない願いでもあったが果たされることはない。

「何だよ、アスカなんか！！」

「何ですか！！」

憧れている父の事を悪く言われたネギは当然の如く怒り、不満が爆発したアスカとの間で兄弟喧嘩が始まる。この喧嘩は叔父の家を巻き込み、魔法学校から帰って来たネカネが来るまで続いた。

子供の喧嘩なので掴みあい、殴り合いになっても怪我は擦り傷ぐらいで大したことはないが結果二人の仲は完全に冷え切ってしまう。

次の日になって頭が冷えたアスカは反省するも、意地になって自分から謝ろうとはしなかった。精神が肉体に引っ張られているのか子供っぽい意地を張ってしまったのだ。

一応、ネカネやアーニャの母親に言われて二人は一旦の仲直りをしている。これでネギは満足したのか元通りになったが。アスカには隔意が残ってしまった。

どちらかというとネギには全く責任のないことに怒ってしまったことによる自己嫌悪だろうか。

だからこそ、ネギと一緒にいる空間に耐え切れず森にやってきた

というわけだ。元々、ネギとアスカ二人の関係は決して良好というわけではないのでそれに気付く人間はいない。

その日もまた、家でネギと一緒の空間にいることに気まずさを覚えて近くの森にやってきていた。

「はぁ……」

トボトボという擬音が合いそうな感じで森の中を歩いていたアスカは疲れたように溜息を零す。本当に体が疲れているというわけではない。いや、精神的には疲れているのだから大差はないかもしれないが。

「分かっている。分かってはいるけど！」

苛立ちが高まって行儀悪く、近くにあった木を殴りつけて行き場のない憤りを吐き出す。

「僕は、誰だなんだ」

自身が■■■■であり、アスカ・スプリングフィールドでもあるという本来なら一つしかない筈なのに二つの名がある矛盾。皮肉にも前世があるということで自身を持つことが出来ずにアスカを不安定にさせていた。

前世の記憶さえなければ、今のように思い悩む事無く現状を受け入れて普通にネギと接することもできただろう。或いは二人を繋ぐ者――――子に無償の愛を注ぐ両親の存在さえあれば家族になれたかもしれない。

もはやｉｆでしかないそれを惨めな感傷だと、努めてアスカは考えないようにしていた。

「ん――――――？」

木を力の限り叩いたことで痛む右手を摩りつつ、歩みを再開すると前方十数メートル先の地面に何かがあるのに気付いた。

距離があるのではっきりとはしないが大きさは目算で１メートルもなく、少なくとも人間ではない。なので獣、それも大きさから見て子供ではないかと推測した。

気になって近づいてみても動物は寝たままの姿勢で動こうとしない。例え寝ているとしても普通なら野生の動物は人間が近づけば何かしらの反応しなければおかしい。それだけ野生の動物は警戒心が強いのだ。

彼我の距離が十メートルを切り、ようやく獣が動かない理由が判明した。獣は、その柔らかそうな金色の毛を血で斑（まだら）に染めていた。

「どうしたの君、大丈夫？！」

アスカは獣――――――子狐の状態に気付いて慌てて駆け寄り、血塗れの体を抱き上げて通じるわけもないのに問いかける。それほど動揺していたという事だ。

子狐を抱き上げると怪我の具合が良く分かった。

全身傷だらけで幾つかは間違いなく致命傷。今も体毛を伝ってポタポタと地面に流れ落ちる血と地面の血痕の痕を見れば生きている

だけでも驚愕を覚えるほど。温かさと手に感じる鼓動の感触、呼吸をするたびに僅かに動く胸がなければ死んでいると思うだろう。

少なくとも全身満遍なくある傷の状態から他の獣の仕業とは考えにくい。かといって自然についたものとも思えない。ならばこんな傷をつけられるのは消去法的に人間しかいない。

こんな小さな子狐に大怪我をさせた者に義憤を覚えるも、今は治療を優先させなければならない。

「直ぐに治療を「（待て、少年）」……へ？」

流石に人間の医者に動物の治療を頼むには無理がある。何分小さな村なので獣医はいないが魔法使いは山程いる。治癒専門の魔法使いがいるか定かではないが何とかしなければならない。

そう思い、急いで子狐を村に連れて行こうとして脳裏に響いた女性の声にアスカの口から変な声が出る。アスカが声の出所を探して子狐を抱いたままキョロキョロと辺りを見渡すも人の姿はない。

となると残るのは――――

「もしかして、今の君が？」

「（そう、お主に抱かれている狐が我じゃ）」

普通なら動物が喋るなどあり得ない。しかし、本来ファンタジーの世界にしかいない魔法使いがいるのだからないとも言い切れない。そうは考えても中々信じれないというのが人間というもの。

子狐の顔が見えるように抱え直したアスカの口から出た問いかけの言葉は信じれきれていないという思いが込められている。だが、張本人（張本狐？）から答えが返って来て驚く。

といっても、アスカは魔法の世界の事を表面上のことしか知らないので喋る狐がいてもおかしくはないかとあっさりと納得してしまう。後で本当の事を知って自分に呆れたりもしたが。

「（治療をしても間に合わん。最早、この身にはそれだけの時間は残されていない……もう、いいのだ）」

「――――――っ！　なら何か別の手段がある筈、諦めないでよ！！」

子狐から死を受け入れて達観したような、別の見方からすれば諦めのようにも聞こえる言葉にアスカは反発する。目の前で誰かが死ぬことはアスカには耐えられない。前世では自身が常に死に近い場所にいたが為に「死」に過敏になっており、一生のほとんどを病院で過ごしたので身近に死を経験する事が多かったが、その度に親や友達といった周りに助けられてきた。

なのでアスカは助けられるのならどんな手段を使っても助けたいと考えている。

「（――――――方法がないわけではない）」

それに子狐は力の無い瞳を驚いたように僅かに見開き、少しだけ嬉しそうに血を流す口元に笑みを浮かべた。

「それなら直ぐに……！」

「（まあ、ちゃんと聞）ゴホッ」

ここまで必死に自分の事を心配してくれたことに弱っていた子狐は方法があることを口に出す。方法があるのならと息せき切って急ぐアスカに、話を聞くように言おうとして途中で子狐は咳き込んで血を吐き出す。

少しは落ち着いて話を聞こうとしたアスカは更に慌て、子狐が弱々しく静止をかけるまで続き、何とか話を聞ける状態へ持っていく。

「それで方法というのは一体？」

「（お主に一つ頼みたいことがある）」

疑問に子狐は緩々と頭を上げてアスカと眼を合わせる。

頼みたいことと言われて、幾らアスカが普通の二歳児とは一線を隔しているといっても、大人に比べればできることはかなり少ないので何かと頭を捻る。

「（難しいことではない。じゃがそれによってお主に何が起こるか分からん。それでも良いのか？）」

「……構わないけど一応、何をするのかを教えてくれる？」

子狐の言葉に、助かるのならしてもいいが確認のために聞く。流石に助けて自分が変なものになるのは勘弁願いたいからだ。

「（本当ならこの程度の傷など直ぐに癒えるが、どうやら魂に損傷を受けたようで満足に治癒が働かん。魂を分けてもらいたいが人間

がそんなことをすればただでは済まん。お主に頼みたいのは我と魂を共有して欲しいのじゃ）」

子狐――――玉藻は自身の提案の結果が忌み嫌っていた以前の状態、人柱力に近い状態になることに皮肉を感じざるを得なかった。

自身に利がなく、普通の人間なら見ず知らずの、人語を解して明らかに異常な子狐の提案を呑みはしない。しかも、提案によって何が起こるのか分からないとなれば逃げ出すかもとすら思っていた。

「それってつまり僕と命を共にするっていう事、だよね」

話から大凡の予測がついたアスカが推測を言うと玉藻は頷き、強制はしないと続けた。問題が命に関してだけに慎重にならざるをえない。

少し考えてアスカは玉藻の提案を受け入れることに決めた。助けられるのに目の前で子狐が死ぬのを見過ごせなかった、というのが大きな理由である。理由はそれだけではなくて、今世で人はいるのに孤独感がずっと纏わりついていてもう一人でいることに耐えられない。そんな思いも少なからずあった。

「うん、いいよ」

「（……本当に良いのか？）」

自身を抱きかかえる少年が余りにもあっさりと了承したことで、玉藻は予想を覆されただけでなく驚きで一時だけ怪我の痛みを忘れて聞き返す。

「その代わりお願いがあるんだ。僕の――――――家族になってくれませんか？」

「（！？）」

人生の一大事のわりには比較的早い決断に玉藻は、しげにアスカに問いかけるも、返って来た代わりの願いに弱くなっている心臓が一瞬、激しく高鳴るのを感じた。

それは先程、決してアスカが知る筈もない玉藻が願いと合致する部分が大きかったためである。心を読まれたというわけではないのが分かっているので、その驚きは大きい。

「（よ、良いのか？　自分で言うのも何じゃが我は普通ではないのじゃぞ。それと家族なんて――――――）」

長い生涯（といっても大半は封印されたりだったが）で初めてと言っていいほどに玉藻は動揺していた。助かる手段として自分から方法を提示しておきながらの狼狽は過去の経歴を考えれば当然のものかもしれない。

「それでもいいよ。君を助けたいという思いがもっとも強いけど、一人でいることが寂しい。話をして君なら家族になってもいいと思えたんだ。だから、助けるためとかじゃなくて僕と家族になってくれませんか」

前世の影響で血の繋がりがある双子の兄を家族と思えずに孤独感に苛まれていたアスカ。

十尾から分離して生まれた九尾であるが故に親や兄弟を持たず、

封印から解放されてからは一人で生きてきた玉藻。

全く似ていないのに求めているものは同じ二人、家族を本当に求めているのは果たしてどちらなのか。ここで二人の望みが合致しているのは運命とも言い換えることができる。

「（そうか……ならば最早、言葉はいるまい。契約を交わすのならば我の手を掴め。じゃが、それによって何が起こるのかは保障できん。しかし、契約したことで例え何があろうとも髪の毛一本から魂に至るまで全てお主に捧げることを妖狐、玉藻の名においてここに宣言しよう）」

数秒で動揺を抑えた玉藻はアスカの言葉を聞いて覚悟を決めた。正直に言えば流れた血はかなりの量に達し、残された時間が短いのもあって結論を急ぐ。抱えられて体が動かないので様にはならないが、アスカはその込められた思いに気圧される。

「……っ僕も、アスカ・スプリングフィールド名において何があろうとも家族になることを誓うよ」

この誓いは大切なものだと頭ではなく心で感じ取ったアスカは、お腹の奥に力を入れて気圧されていた精神を発奮して自身に誓いを立てる。

「「我ら二人、生まれや種族が違えども家族の契りを結びしからは、心を同じくして助け合い、生きていく事をここに誓う。同年、同月、同日に生まれることを得ずとも、願わくば同年、同月、同日に死せん事を」」

二人がそれぞれの誓いをした後、まるで予め決めていたかのよう

に同じ言葉を紡ぐ。全く同じ言葉、タイミングの誓いは意図したものではなく、二人の心が自然に言わせたもの。この時、間違いなく二人の心は?がっていた。

お互いに伸ばされた手は、やがて重なり光が二人を包み込んだ。その光に包まれて心に温かいものを感じながらアスカはゆっくりと意識を落とした。

光に包まれて意識を失ったアスカが眼を覚ました時、そこは元いた森の中ではなく温かい布団の中だった。

眼を覚ましたといっても言葉通りに目を開けたわけではない。というよりは、目を閉じている状態でも目蓋を透過して感じる眩しさに目を開けることができないというのが正しい。

幸いというべきか何というべきか前髪が多少なりとも遮ってくれているので十秒程度の時間で光にも慣れてきた。周りを見てみれば、電球で照らされた見知らぬあまり生活感が感じられない小さな部屋で仰向けの体勢でベッドに寝かされていた。カーテンが閉じられた窓も薄暗い。光も透けておらず、窓の外は夜のようだ。

動こうとして、全身に強く圧し掛かる気だるさで腕を少し動かすだけでも一苦労する。まるで何日も体を動かしていないかのような倦怠感を感じる。

更に気だるさだけでなく体の中、内臓ではなくもっと別な異物が

できたような強い違和感を感じていた。

寝起き特有のはっきりとしない意識で考えていた中で、寝ている自分の近くで人の会話が聞こえたのでアスカは状況の把握に努めることにした。

近くで交わされる数人の男達の会話から状況は直ぐに分かった。どうやらアスカが寝ているのは自宅とは別にある村外れの小屋にあるベッドに寝かされているようで、晩御飯になっても帰ってこないのを心配したネギが叔父に言って村総出で森の中を探し、血痕の中心で倒れているのを発見されたらしい。

本人には目立った傷はないといっても、大量の血痕の痕があったので何らかの事件性が疑われて調査が行われた。一日経ってもアスカの意識が目覚めなかったことが何かの事件に巻き込まれたと思い込ませるには十分であった。

「しかし、まだ原因が分からないのか。もう一ヶ月だぞ。やはり何かの事件に巻き込まれてたのでは」

「少なくともあの血痕はこの子のものではなかった。頭も打った様子はないし、何らかの魔法的処置がされた痕跡もないから意識が戻らない理由が分からないらしいな」

「この子はあのサウザンドマスターの息子だぞ。何かあったらどうするんだ!!」

まだ誰もアスカが目を覚ましたことに気付いていないので会話は続いている。

会話から察するに森で倒れてから既に一ヶ月の月日が経過しているようだ。

少なくとも一ヶ月も意識不明になっていたら何かあったと思うのは普通の反応であろう。目を覚まさない理由が分からないとなれば特に。

しかし、アスカは交わされる会話に微かな違和感を覚えた。

―ナギ・スプリングフィールド《サウザンドマスター》の息子であることから、村では大事にされていることは分かっていたが何かがおかしい。

具体的に何がおかしいかというのは諸々の理由で意識が混濁しているので考えが纏まらない。

悩むアスカを余所に男達の会話は続く。

「意識が戻らないだけでなく、サウザンドマスターを越えるほどの魔力が半減しているなんてあり得ないぞ」

「自然でこんなことになるとは思えない。やはり何者かの仕業と考えるのが妥当か」

魔力が半減という言葉にアスカは僅かに驚いた。英雄とまで呼ばれた男を越える程の魔力を持っているなんて全く知らなかった。が、アスカ自身はサウザンドマスターを越えるほどの魔力が半減してようが何だろうが現状で困ることはない。魔法使いとしては困るのだろうが幼児といっていい年齢でしかないアスカが魔法を使える筈もないので半減したところで大した意味も無く、実感も無い。

大量の血痕の痕に倒れていて一ヶ月も目覚めず、更に魔力が半減したとなれば何者かの仕業であると考えるのが普通であろうとアスカは思った。状況的に玉藻と契約を交わした影響であろうことは間違いない。

体の気だるさは長時間寝ていたからとして、倦怠感とは別のこの違和感は果たして何なんだろうかとアスカは疑問を感じていた。

「魔力が半減しては、この子がサウザンドマスターの跡を継ぐのは難しいか？」

「一概にそうとは言えないな。この子は聡明、いや異常とも言えるほど頭が良い。このまま育てば一角の人間になる可能性は高い」

「しかし、私は今の段階では一流にはなれてもサウザンドマスターの跡を継ぐのは難しいと思う。やはり魔力がな」

どうやら二歳の子供が専門書を読むのはやり過ぎたらしく、異常者とまではいかなくても訝しげに見られていたようだ。

改善しなければならないな、と考えながらも彼らの言う事を聞いたアスカは、やはりどこかおかしいと思った。何故、彼らはアスカの未来を本人の意思を確認する事無く、まるで自分達が将来を決めつけているかのような事を言うのか。

「この子には期待していたんだがな……」

「それだけの資質を持っていたんだ。仕方ないさ」

勝手に期待して、失望するなんて普通の倫理観を持っている人間からすれば勝手なことだと断じることだろう。

だが、考えてみて欲しい。例えば親や血縁などが有名人だった場合、その者は間違いなく期待される。それが資質に恵まれているとなれば期待もまた大きいものになるのは必然の出来事である。

大戦の英雄ナギ・スプリングフィールドの実子であり、彼すらも凌駕する魔力を持っていたのだから期待しないほうがおかしい。期待された本人からすればいい迷惑だが。

「だが、これでは跡を継がせるならサウザンドマスターには及ばないにしても、今のアスカ君よりかは魔力のあるネギ君の方がいいのではないか？」

「そうかもしれないが今の時点で決めるのは早計だと思う」

「まあ、二人は双子だ。どちらかがモノのなればいいさ」

こちらが駄目ならあちらで、と人を替えがきく代替物であるかのように話されるのは気分の良いものではない。だが、これで以前から村の人間から感じていた視線の違和感の理由を理解した。

彼らにとってアスカやネギはただの子供である前にサウザンドマスターの息子であることが先に来ており、かつ重要なのだ。この事実をアスカはすんなりと受け止めることができた。

アスカが傷ついていないわけではない。それよりも以前から感じていた違和感の正体を知れたことが大きい。結局、本当の自分を見てくれる人間などほとんどいないのだと納得した。

全ての村人がそう考えているとは言わない。魔法使いといっても人間に過ぎなかった。ただそれだけのことである。

男達はその会話を最後に笑いながら部屋を出て行った。どうやら事件に巻き込まれた可能性が高い（と彼らは思っている）としてアスカの見張りと護衛も兼ねていたらしく、交代の時間が来たらしい。

「ハハッ…滑稽だな」

男達が部屋を出てから次の者達が来るまでの間、部屋にアスカの自身を嘲笑う声が弱弱しく響く。おかしさのあまり笑うしかない。笑ったところで何が変わるわけでもないが…笑わなければやっていられない。

手で流れ落ちそうな涙を止めるために目元を覆いたいのに、満足に動くのは指先ぐらいで腕を上げるのにも一苦労する様が余計に惨めな感じがしてアスカの心を荒ませる。

《そう、嘆くな主よ》

荒んでいた所に突然、脳裏に響いた声にアスカの動かない体が驚いて反射的にビクリと浮き上がる。次いで動かしにくい首を横に振り、眼で彼方此方を見るも誰の姿も無い。

ならば誰がと考えて先程聞こえた声に聞き覚えがあることに気付いた。自身の内、今世で自意識が芽生えた時から喪失感を感じていた心に欠けたピースが埋まったような感触を覚えた。

「もしかして、玉藻？」

《正解じゃ。今は主（あるじ）の身体の中におるよ》

恐る恐る呟くように口から溢れたアスカの問いに脳裏に響く声が応えた。

「体は動かないけどこれは寝すぎた所為だし、ほかに影響無さそうだから上手くいったってことかな」

《契約自体は上手くいったが主の体に影響が出ておる。感じぬか体の変化を？》

さっきまでいた村人達の対応から少なくとも容姿等の外面の変化はないように感じる。外面でないとすれば、さっき村人達の話題に出てきた「魔力が半減した」ということから考えて変化したのは内面ということになる。

目を閉じて可能な限り感覚を遮断して内部に埋没する。真っ先に感じたのは体内に血管や神経と似たようなモノができているというあり得ないもの。

主観時間では数分前の出来事でも一ヶ月前にはなかった筈のものが存在している。何故、そんな事が分かるのかというと神経と似たようなものに血とは違ったものが流れているのを感じるからである。これは魔力とは別種の力だと直感し、魔力が半分に減った理由だど推察した。

それだけではなく、全身の筋肉や神経にも変化があるように感じる。新たな器官が出来たとかそういうものではないが、まるで別なものと入れ替えたかのように自分の体なのに馴染みが全くと言って

いいほどに無い。起きてからの違和感は体が自分の物ではないかのように感じていたからなのだ。

「何、これ？」

《我との契約の影響であろうな。チャクラを通す経絡系という器官が新たに出来ておる。肉体も妖魔である我の魂に耐えられるにより強靭になっておるから、一ヶ月も目覚めんかったのはその為であろう。主は人間である事は保障しよう》

余りの体の変化にアスカは困惑を隠せない。それはそうだろう、ちょっと意識を失って目覚めれば一ヶ月もの時間が経過しており、体のかなりが変化しているのだ。幾ら覚悟していようが驚かない方がおかしい。

混乱しているアスカに玉藻は落ち着かせるように柔らかく言い聞かせてパニックを起こさせないように努めていた。この時点での玉藻のアスカへの認識は見た目のまだ幼い割りには聡い子供。寝ていた時間を別にすれば接した時間は１０分にも満たないので「実は前世があります」などと分かるはずもない。

「ちょっと驚いたけど、もう大丈夫。変化はこれぐらい？」

《今は分かっておる変化はこれぐらいじゃな。後は追々分かってくるじゃろう》

表向きの変化はこれだけだとしても今後どういった影響が出てくるかは分からない。妖魔である玉藻と魂を共有しているのだから下手したらアスカが妖魔化する可能性もあるのだから注意が必要である。

魂の共有についてはどちらかが死んだ場合、もう片方も巻き添えで死ぬであろう事はアスカも薄々気付いていた。誰かに教えてもらったわけではなく、生まれたばかりの赤ん坊が産声を上げるように自然なことと同じレベルで理解していた。

人が「右足を出して、次に左足を前にそれを交互に」と歩く時に態々意識しないように、この事実を当然の事に受け入れている。既にそれが普通の人間とは異なっているのだとも気付きもせず。

《そろそろ動けるようになったのではないか？》

「ん……まだ、ぎこちないけど何とか」

交代の人員は連絡不備か、はたまたサボリか定かではないがかなりの時間が経過しているのに未だに来ない。意識が覚醒してから時間が経ったことで体も徐々に動くようになってきた。

億劫だが顔のところまで上がるようになった腕を見て実感する。

一ヶ月も寝たきりでは筋肉が硬直していたはずなのに眼が覚めてから１０分程しか経っていないとはいえ、動けるなど普通の人間ではあり得ない回復速度をしている。

二人とも家族ができて浮かれていたというのもあるかもしれない。意識を失っていたので意識不明だったという自覚が薄いアスカは異常さに気付けない。自前の回復速度がもっと早い玉藻も同じ。

「よっ……と」

掛け声をかけながらベッドから起き上がるも上手く力が入らず、体を支える両手はプルプルと生まれたての小鹿のように震えてしまう。

何とか座ることに成功しても暫くはその体勢から動くことができなかった。だが、それも時間を置けば体が慣れてきたのか震えも収まったので、次はベッドの端から地面に足を下ろして立ち上がろうとする。

結果は先程のベッドに起き上がるのを再現するかのように立ち上がった足が震える。

「ふぅ、何とか収まった」

《誰かに背中を押されたら簡単に倒れそうじゃがな》

震えが収まり、ちゃんと立てたといっても第三者の干渉があれば簡単に倒れてしまいそうなほどに不安定な状態では玉藻の突っ込みに笑うしかないアスカ。

普通なら簡単な「座る、立ち上がる」という動作に苦労するなんて前世以来の出来事であった。これが体の変化による影響か、単なる一ヶ月間の意識不明による筋肉の硬直なのか定かではないが、今世では忘れていた健康であることの有り難味が身に染みた。

「よし、行こう」

全ての動作を意識しないと崩れてしまいそうなのを我慢して足を踏み出して前に進む。ゆっくりと、しかし確実に一歩ずつ踏みしめて小屋のドアを開けて外へと出て行く。

こうして二人は家族となり、命を共有してどちらかが死ねば片方も死ぬという運命共同体となった。

アスカの歩む道の先にあるのは希望か、絶望か。果たしてどちらであろうか。

第一話　　九尾と契約を交わした少年（後書き）

玉藻とアスカの出会い、そして家族の契りを結びました。

何とか「遅くても3週間」にとの予告に間に合いました。仕事を覚えるのが大変だというのもありますけど執筆の時間を取れないのが痛いです。

次回は本作修正前の第三話と話の都合上、省略した第二話の再構成をしたいと思います。

前回同様に次回更新は遅くとも三週間後、早くて来週の日曜日午前0時に更新したいと思います。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

活動報告で修正や経過報告を書いてたりしています。

尚、修正は投稿から一日後に纏めて行います。

第二話　　人間不信になった少年（前書き）

二週間で何とか投稿することができました。

後半はまんま再構成です。

文字数は１０９４０字です。

それではどうぞ！！

第二話　人間不信になった少年

意識を取り戻したアスカが家に向っている頃になって、ようやくサボっていた人員が小屋にやってきて、アスカいなくなった事に気付いた。意識不明の原因すら分からないのに行方不明ともなれば当然の如く、事件性も考えられたので村中の人間を巻き込んだ大捜索が行われるのは自然の流れと言える。

「はぁはぁ、家が遠い」

自身の弱みを人に見せたがらないアスカは、人目の少ない道を蟻並みの遅さでふらふらとしながら歩いており、タイミングというか巡り会わせみたいなものが擦れていたのか捜索にも中々引っ掛からない。

「アスカに何かあったら私はどうすれば――――」

一ヶ月前、アスカが倒れた状態で見つかっただけでもネカネは魔法学校から慌てて帰って来た。従姉としてネカネは数日経っても眼が覚めないアスカを放っておくができない。

しかし、ネカネには学校があるので何時までもアスカの傍にいることはできないというジレンマが発生した。それでもアスカの傍にいようとするネカネを、意識不明そのものの原因が分からないので何時目覚めるとも分からないから、と両親やネギ達に説得されて本当に渋々、魔法学校に帰っていった。

だが、アスカが意識不明になって両親から今度は行方不明になったと連絡を受けると、取るものも取らずにネギの家に文字通り飛ん

で来た。本当に連絡を受けた格好で何も持たずに来たのを見れば慌て具合が良く分かるというものだ。しかも一緒に連絡を聞いたアーニャを置いてくるという慌てぶり。

もしかしたらアスカに何かした人間が護衛の眼を掻い潜って攫ったのではないか、と立て続けに事が起こりネカネの脳裏には悪い想像ばかりが思い浮かう。

「ネカネお姉ちゃん落ち着いて！」

その動揺具合はまだ幼いネギにも判るほどで、本当にアスカに何かあったら自殺をしそうな勢いだ。

ネカネはネギやアスカを溺愛しているといってもいい。それは二人に親がいないことで自分の両親が面倒を見ており、必然的にネカネが関わる時間が多くなったのも関係しているかもしれない。

理由はどうあれ、これほどに悲壮感を漂わせるネカネでは捜索にも支障が出る、と判断した村の大人達はネギの相手を任せたわけだが逆にネギがネカネの相手をしている状況になっている。

（僕にどうしろっていうのさーーーー！！！！）

とてもではないがアスカとは違って正真正銘の二歳児であるネギに抱えられる状況ではない。

もう、ネギではネカネを抑えておくのが限界に達しそうになったその時、誰かが家のドアを開けた。

「何、この状況？」

救世主というか、そもそもの原因というべきアスカが呟いた。弱った体に鞭打って鈍足で自分の家に帰ったらネカネが何か病んでて、その周りでネギが右往左往しているのを見て、自分が原因だろうなと薄々は感じながらも思わずそう言ってしまう。

「「あ、アスカ？」」

「えーと、ただいま」

こいつ行方不明なのに、何でここにいんの的な想いが込められた眼で見つめられて、取り合えずアスカが出来る事は帰った挨拶をするしかなかった。

固まった状況の中で、もっとも早く動き出したのはネカネだった。

「アスカ――――――っ！！！！」

「ぐぇっ」

はて、この状況をどうしたものかと考えていたところで、アスカを再起動したネカネが流星となって襲う。襲うといっても、そう感じたのはアスカだけで、ネカネからしてみれば、心配で心配で仕方なかった弟の無事な姿を見て感極まって勢いで抱きついたに過ぎないのだが。

ネカネも善意やら心配した気持ちで抱きついたのだが、というか押し倒されて潰れてしまったアスカは蛙が潰れた声を上げた。酔っ払いの千鳥足よりかはマシなレベルでしかないので避けられなかった。

「ギ、ギブ「アスカ！　アスカ！！」ぁぅぅ……」

「お姉ちゃん、待って！　アスカの顔色が凄いことに！！」

同じ子供とはいえネカネとアスカでは、年齢差からかなりの体格差がある。大人と子供とまではいかなくても、この年代では１０歳も違えば倍以上の体格差がある。

幾らネカネ無事なことが嬉しくても、抱きついて押し倒せば体重が諸に掛かるわけで、更に駄目押しに首の後ろに撒かれた腕がアスカの首を締めている。

圧しかかる体重と首が絞まったことで碌に息ができずに顔色が赤から紫、そして白へと劇的に変化していく。末期どころか既に天に昇天しかけているアスカを見て、慌ててネギが止めるも感情が爆発したネカネを止める事ができない。

数分とはいえ時間が経って少しは落ち着いてネギの静止が耳に入り、正気に戻ったネカネが見たものは真っ白になった顔色で魂が何処かに逝ってしまったアスカの姿。弱った体ではダメージが大きくてアスカはあっさりと気絶してしまったのだ。

あの後の事は本当に大変だったと後にアスカは後述する。

「アスカー！　アスカー！　しっかりして！！」

「追い討ちかけてるから落ち着いてよ、お姉ちゃん！　ああ、もう！　誰か！！」

アスカが死んだと本気で泣くネカネを止める事ができないと判断した自分で判断したネギが大人を呼びに行った。兄弟の家にやってきた大人が見たのは、完全にパニックを引き起こしてアスカの肩を掴んで起こそうと、ガックンガックンと振り回して追い討ちを掛けているネカネの姿。

何とか大人たちが止めることでアスカは九死に一生を得た。アスカは直ぐに気がついたが意識不明の原因も分からないので精密検査に回され、ネカネは落ち着くまで面会謝絶という形で落ち着いた。

その決定にネカネがごねるも、自分がやったことがそれだけのことをやったという自覚があったので大人しく引き下がった。

といっても納得したわけではなく、明確な原因を理解しているアスカからしてみれば、体に異常がないのは分かりきっているので麓の街での検査入院も数日で済んで家に帰ってきたからだ。

「それで一体、何があったんだい？」

「さあ？　僕にも何が何だか」

当然、倒れた張本人に何があったのかという事情調査を受けたが、本当の事を話すわけにはいかなので適当の真実を暈す。内容を要約すると「森の中で動物が血塗れで倒れていて、触ったら意識が途切れた」と、全て事実だけど肝心なことは言わずに煙に巻いた。

今はアスカの体内にいる玉藻を見つけられるはずもなく、結局事件は迷宮入りとなったわけだ。

「ちょっとネカネ姉さん！　流石にトイレにまで着いて来ないで下さい！」

「でも、また何かあったら大変だから」

「トイレに行って何かあるわけ無いですよ！！」

事件後、普段通りの生活に戻ったアスカだが、これまた困ったことにネカネが頑として魔法学校に戻ろうとしない。それどころか矢鱈とアスカに構おうとする。傍を離れようとしないのは当然として添い寝はするわ、一人で入っていた風呂に乱入するわ、果てにはトイレにまで付いてこようとしたので、我慢の限界というより貞操の危険を感じて、周りと協力して寝ているところを強引に魔法学校に戻した。

ネカネから文句はあったわけだが向こう側（魔法学校）にも協力してもらったので、ようやく納得してもらえた。

これでようやくアスカは忍術の修行を始めることができる。ネカネが始終一緒にいたら、未だに脳内での会話に慣れていないアスカでは碌に玉藻と喋ることもできない。

その日も他に人のいない森の中にアスカはいた。他人からみれば独り言を喋っているように見えるが、体内の玉藻と会話を交わしている。

「これがチャクラ？　って奴なのかな。やけにはっきりと判る」

《本来なら主には有るはずのない力じゃからな。その異物感というべきものが、普通にある物よりは感じやすくしとるのじゃろう》

玉藻の説明ではチャクラとは、人間の身体を構成する膨大な数の細胞一つ一つから取り出す「身体エネルギー」と修行や経験によって蓄積した「精神エネルギー」を合わせた物を言う。

「身体エネルギー」と「精神エネルギー」を練り上げて（「チャクラを練る」という）、術者の意思である「印」を結んで（組んで）、術を発動することができる。

印とは、練り上げたチャクラを術に変換するための重要な過程である。各術には、定められた印があり、それを間違いなく、また発動の瞬間に合わせて結ばなければならない。基本的にレベルの低い術ほど印はシンプル。高度な術になるほど複雑な印が必要となる。

術は基本的に「忍術」「体術」「幻術」の三種の術を基本として、それ以外に「呪印術」「封印術」「秘伝」の特殊な会得手段を必要とする術、「血継限界」のように遺伝により継承させる特殊能力を利用する術、一代限りの特異体質でしか使用できない術もある。

《しかし、忍術よりも魔法を学ばなくても良かったのか？》

「悪魔の襲撃までもう一年もないと思う。暢気にしていられる時間はないんだ」

原作知識で悪魔の襲撃があるので、アスカにはゆっくりと学んでいる時間はない。原作にいなかった身としては、身の保障がないので最低限でも自分を守れる力が必要なのだ。

本来なら魔法使い、それも一流の血統を継ぐアスカが忍術を覚える必要はほとんどない。というより下手な場合では騒ぎの元になる。

魔法と忍術のどちらに優劣を決めるかは愚かでしかない。

だが、魔法使いという世界においてアスカの、引いては玉藻の世界での忍術は異端であり、異常である。この世界全てを知っているわけではないが、玉藻から聞いた一部の忍術の特異性にアスカは唸らざるを得なかったほど。

それでも学ぶなら魔法よりも忍術を優先するには理由がある。それは、

「僕には彼らを信じられない」

事件前と事件後、注意しなければ判らないほどのレベルで村人達のアスカへの視線は変わった。名前をつけるなら「期待外れ」「失望」「安心」といったところだろうか。

理由は想像がつくので確証を得るために村中の調査をして、大体の事情を理解した。

村の人々のナギに対する大凡に分けて評価は二つある。一つは世間でも謳われているような『英雄』。アスカから見て大人世代は二言目には、「ナギは」「ナギが」とナギを通して、兄弟を見ている人ばかりだった。全員がナギくらい立派な人になってくれ、という期待を言葉で、態度で、眼で伝えて来る。

ネギは気付いてなかったが、そのために持て囃す者も少なくなか

った。なぜなら、ナギは英雄とも言える偉業を成し遂げている。その息子達は、ナギ譲りの巨大な魔力と才能を秘めていたから。

魔法使いにとって、二人はナギ・スプリングフィールドの息子。すなわち、英雄の息子だ。そのために立派に育って欲しいと考えている者が大半である。だが、性質が悪いことにそれが一方的な決め付けであることに気付いていない。なまじ、当然だと考えているだけに、始末が悪すぎる。そして、このことに玉藻は危機感を感じていた。こんなのは飼い殺しと一緒だと思いながら。

そしてもう一つは自分のトラブルに村を巻き込む『厄介者』だ。ナギの仕出かした騒ぎの後始末に村人が奔走したのは一度や二度ではない。元々は静かで小さな村だったのに、余所者が多く住み着いたのも理由の一つであろう。

大体、ナギを慕って村に住みついたりするクセのある者が前者で、元から村に住んでいた者達が後者である。しかし、元から村に住んでいた者の中にも前者に回る人間は多く、後者の人間は本当に僅かな者だけ。後者の人間にはナギの面影が強いネギや、資質だけはナギを越えていたアスカに対して隔意があった。

ある者は流石は英雄『千の呪文の男』の子と持て囃し、またある者は彼もまた大きな戦いに身を投じるのではないか、そして父の様に村を戦いに巻き込むのではないかと恐れていた。

表立って行動を起こすような者はおらず、酒を飲んだ勢いでくだを巻く程度なので、誰も問題視していなかったのだ。ナギの人柄から、迷惑には思っても本心から嫌う人間がいないというのも理由の一つである。

アスカは前世持ちだということを考慮しても非常に聡明な子供だ。切欠があったとしても、そんな彼等の微妙な心情を敏感に察知した。

村人達との隔たりに気付いてしまった彼にとって頼れるのは、事件であれほど心配してくれた従姉であるネカネ、年齢が一つしか変わらないのと幼馴染ということで小さい頃から一緒にいて『千の呪文の男の息子』である前に個人として見てくれるアーニャ、他には片手の指にも足りない。

腹に一物を抱えている人間を信じろというのは難しい。事に勝手に人の将来を決め付けている人間には、アスカが思うのも無理からぬものがある。

これは村ぐるみの洗脳ではないかと疑いを持ってしまう。この中にいたら絶対にネギのようにナギになろうとするか、反発してグレるかの二択になってしまう。

《あ～まあ、分かった。そういうことならこれ以上は何も言わん》

「うん」

玉藻から見てアスカは完全に人間不審に陥っていた。話しに聞いた前世との環境の変化に戸惑いを覚え、以前からあった不審が完全に表に出てきた形になっていた。

自身との契約が切欠なので改善したいが、怪我の影響でアスカの体内から出ることができないので何もできない。アドバイスなり何なりすればいいのだが玉藻自身人生経験が豊富というわけではなく、アスカ自身が頑なに拒んでいるのでどうしようもなかった。

月日は流れ、アスカが玉藻と出会って数ヶ月の時が経った。その日は普段なら忍術の修行を行っているところだが魔法学校が長期休暇に入り、帰って来たネカネに呼ばれてネギを合わせて三人で御飯を食べれる所に向かっていた。

「――――そうね、あなた達のお父さんはね、とっても有名な英雄（ヒーロー）……スーパーマンみたいな人だったのよ」

「スーパーマン？」

雪が舞い降りて視界を僅かに遮る中、話している話題は双子の父、サウザンドマスターの事。発端は勿論、アスカではなくネギ。父の事を知りたいネギがネカネに強請（ねだ）ってネカネはその話をしている。そうすると必然的に二人と一緒にいるアスカもその話を聞くことになる。

正直に言えばサウザンドマスターの話など単語だけでも聞きたくもないが、またネギと喧嘩をするわけにはいかないので黙ってアスカはネカネの話しに耳を傾ける。

アスカは村の人間に対しての不審だけではなく、根本の原因であるサウザンドマスターに対して憎しみに近い感情を抱いていた。なので単語自体が忌避の対象である。

そうは言っても、個人的感情で人間関係を進んで悪化させるほどアスカも奇特な人間ではないから、会話や話題には自分からは関わ

らないようにして、矛先を向けられた時だけの対応にしている。

「そう、誰もが危機（ピンチ）になったらどこからともなく現れて、必ず助けてくれるのよ」

「へ～、スーパーマンかっこいい！　ネカネお姉ちゃんも助けられたことあるの？」

表現が誇張しているのは子供に分かり易く話しているからであろう。実際には、そんな都合の良いモノは漫画やテレビの中にしか存在しない。何故ならば人は万能ではなく、そこまで博愛主義な人間も少ない。

そもそも何をもって危機（ピンチ）とするのか、それが問題である。「学校の宿題を忘れた」や「買い物でお金が足りない」など人によっては下らないものでも、当人にとっては重大なものは挙げれば際限がない。大きいものならそれこそ戦争とかもある。

大人になっていけば嘗てはスーパーマンやヒーローを信じていた子供も、成長して視野が広がったことで諦観と共にそんなものは存在しないと理解する。

「フフフ、それはひ・み・つ・よ」

この言い方だとアスカにはネカネがサウザントマスターに会ったことがあるように聞こえる。だとするならばネカネは兄弟が預けられた時に会ったのだろうか。

そんな事をつらつらと考えていて、会話に入る気配すらないアスカをネカネがチラチラと心配げに見る。

ネカネはアスカが父であるナギの事を良く思っていない事を薄々と理解していた。二人の喧嘩を仲裁したのと、話題になる度に極端に話すことが減れば勘付きもするというものだ。

当人のアスカは心配ないと愛想笑いをして誤魔化した。

《大丈夫か？　主よ》

最近、というよりナギの話題が出ている時や大半の村人と接する時は、こんな風に愉しくもないのに愛想笑いをすることが多いアスカを気遣って玉藻が声を掛ける。

《大丈夫だよ。気遣ってくれてありがとう、玉藻》

《無理はせんようにな》

人間不信も極まって人の会うだけでストレスが溜まる日々ではあるが、玉藻という運命共同体の存在がアスカを支えていた。気遣いの言葉に感謝を示し、返って来た言葉に心の中で頷く。

ちなみに、一連の会話は全て体の中にいる玉藻との念話であり、この念話を聞くことは精神の？がりのない限り誰にもできない。

「じゃが、奴は死んだ。散々無茶やった挙句お前たちを放ったらかしてな……バカな奴じゃよ」

アスカが玉藻と念話していると、通りの角の向こうから、人が想像する典型的な魔法使い（老人＋ロープにとんがり帽子）の格好をしたスタン（本物の魔法使いだが）が現れて、ネカネとネギの会話

を聞いていたのだろう辛辣な事を言う。

「もう、スタンさん！　子供にそんな言い方」

まだ幼い子供に言うべき事ではないと、ネカネはスタンに文句を言う。しかし、スタンは言いたい事を言うと、さっさと背を向けて行ってしまった。その去っていく背中がどこか寂しげに見えたのは、アスカの目の錯覚だろうか。

聊か不満そうなネカネとは対照的に、アスカは何となくもの悲しいような気分になる。

スタンの憎まれ口も幼い兄弟を思っての事で、心底ナギがどうこうという思いはないはず。子供を放っておいて勝手に死んだことが赦せないのだろう。

「……「死んだ」って？」

「……」

二歳という幼すぎる年齢のネギでは、『死』という概念はまだ理解できていない。身内や家族に不幸があったりしなければ理解しろと言うのも無理な話だ。普通はそれでも理解できないものではあるが。

ネギの純粋な疑問に、傍目から見ても父に憧れていると分かるので、どう言ったらいいものかとネカネも直ぐには答えられない。

「もう会えないって事だよ、兄さん」

「アスカ……」

ネギを思って何も言えないネカネに代わって、アスカが『死』という概念ではなく、分かりやすい例えで言う。

自分の代わりに言い難い事を言わせてしまったとネカネが心配げに見るも、アスカの心は何も感じてはいない。

アスカには血縁があるからといっても、会ったことの無い人の死を悲しめない。テレビのニュースで人が死んだという事を聞いても、「ああ、そうか」とぐらいにしか認識できていない。

それにアスカには、ネギと違って一度も会った記憶のない人を父親や母親と考えれない。どうしても前世での知識から前世での両親を親と見てしまう。今世で両親が傍にいれば自然に親と思えるようになっただろうけど、全ては後の祭りだ。それどころか今世の両親を原作を知っている分、負の遺産ばかりを残した疫病神とすら思えてしまう。

それに持っている原作知識では、サウザンドマスターは死んでいないはずなので悲しみが湧くはずもない。

「もう会えないってどーゆーこと？　お父さんどこか遠くへ引っ越しちゃったの？」

「……そう遠い遠い国に行ったんだ。「死んだ」っていうのはそういうことだって僕は聞いたよ」

アスカが言ったことは前世で小さい頃、同じ病室にいた友達がいなくなって両親に居場所を聞いた時に言われたことだから、嘘は言

っていない。

その時のアスカも「死」の概念が理解できていなかったけど、これで納得した。

「じゃあさ、じゃあさ、もし僕がピンチになったらお父さんは来てくれるかな？」

「さぁ、僕も聞いただけだし。どうなのネカネ姉さん？」

《自分で教えないのか？》

《面倒事の気配がするからね。何かあった時に僕の所為にされたくないし。この年代では、普通は知らないはずだしね》

嬉しそうに話すネギの話しの矛先を、アスカは何も知らないと偽って自分からネカネへと向けた。直感的に面倒事の気配を察知して、下手な事を言って自分の所為にされたくないのでネカネ姉さんに振ったのだ。

「えっ！　う、う～んそうね…」

「あんたたち、バカね～死んだ人には会えないのよ。サウザントマスターの子供なのに、そんなことも分からないのかしら」

いきなり話題を振られてネカネがどう言おうか悩んでいると、隣の路地から、まるで待っていたかのようなタイミングで現れたアーニャがふんぞり返って、兄弟を見て言った。

「アーニャちゃん、こんにちわ」

「こんにちわ、アーニャ姉さん」

「そ、そんなことないもん！」

アスカとネカネは挨拶しているが、ネギはアーニャの言葉にムッとして言い返している。年齢が近い人間に馬鹿にされれば怒るのは仕方ないにしても、挨拶はしようと心の中で突っ込みを入れるアスカ。

親しき仲にも礼儀あり、挨拶に始まって挨拶に終わる。諺になるぐらいに挨拶は大切なものなのだ。

「お父さんは来てくれるもん！！」

「あなた、バカね「死ぬ」のイミわかってないでしょう！！」

二人がギャーギャー、キーキーと言い合っているのを、アスカとネカネは止めずに眺めている。毎回二人が会うとこんなことが起きるので止めようという気もなくなるというもの。

どちらかといえばアーニャの行動は、好きな子に素直になれない小学校低学年の男の子の行動そのままである。

《相変わらず仲が良いのう》

《兄さんは気付いていないけど、アーニャ姉さんは兄さんが好きみたいだしね》

《素直になれてないんじゃのう》

《でも、ちょっと羨ましいかな。前世含めて誰かとこんなに言い合ったことないし》

こんな喧嘩ができるのも二人の親しさの証拠なんだろう、と一人で感慨にふける。前世も合わせて人とここまで言い合ったことがないので、ちょっと嫉妬を覚えてしまうアスカであった。

ネギと大喧嘩したことは綺麗に頭から消しているアスカであった。

《主には我がおるであろう？》

《ははっ、そうだね》

誰かと心を許せる関係でいることは、こんなにも心を豊かにさせるのかとアスカは実感している。村人の視線の理由に気付いた切欠になったことを玉藻は気にしているが、遅かれ早かれ気付いたことなのだから気にする必要はないと常々思っている。

「ハイコレ、あんたたちにあげるわ」

散々二人で言い合って疲れたのか、納得したのか分からないがアーニャが先にネギ、次にアスカに、先端に星型がついた子供が魔法使いごっこをするような小さな杖を渡してきた。

「コレは？」

何となく予想はついていたが確認の為にアスカは尋ねる。

「初心者用の練習杖。あんたたちも来年から学校来るんでしょ。生

きてた頃のお父さんみたくなりたかったら、ちょっとは練習しておきなさい」

結局、見たまんまのものではあるのだが、先っぽに星型をつけるのは子供に興味を持たせるためかなと邪推してしまう。こんなことを思ってしまうのは心が汚れている所為かなと思う身体年齢2歳のアスカ。

《ちょうど良かったのではないか？　魔法発動媒体が欲しかったのであろう》

《そうだね、忍術の修行も形になってきたから倒れるようなこともなくなったし、家でも何かしたいと思ってたところだから助かる。おっと、ちゃんとお礼は言わないとね》

「ありがとう、アーニャ姉さん」

「……」

棚から牡丹餅というか、タイミングが良かったのは事実ではあるのでありがたく頂戴する。アスカはアーニャにお礼を言うが、反対にネギは杖を見てるだけで何も言わなかった。

杖を貰えて感動したのか、別のことを考えているのかは分からないが凡庸とした視線を受け取った杖に向けている。

《お礼は言おうよ、兄さん》

《そうじゃな、しかし礼儀を教える人間が少ないから仕方のないことなのかもしれんぞ》

《そうかもしれないけど、しかしアーニャ姉さん。もしかしてこれを渡すためにここで待ってたのかな、これってツンデレ？》

《わざわざずっと待っておったみたいじゃし、ツンデレじゃな》

お礼を言わないネギに突っ込みながらも、アーニャが聞いたら怒髪天をついて杖を取り上げるだろう事を玉藻と話すアスカであった。

あの後すぐ、アーニャと別れて料理屋に来た。

「全くナギの奴には苦労をかけられっぱなしじゃったわい！　あいつさえいなければ、ワシも村も、もちっと平和じゃったものを！！」

「スタンさん、飲みすぎだよ」

が、困ったことに同じ料理屋に先に来ていたスタンが、お酒を飲みながらサウザントマスターの愚痴を延々と言っている。流石に他にも客がいるので迷惑だと、お酒の飲みすぎということを理由にして店主がスタンに注意しているが、スタンは気にせず飲んでいる。

「もうスタンさんたら、また・・・・」

「放っておけば？　いつものことでしょ」

ネカネがスタンの言葉を止めようと立ち上がりかけるのを、アスカが先んじて止める。

スタンは飲んだくれてサウザントマスターへの愚痴を漏らしているけど、アレは、自分より先に死んでしまった息子や孫に対する愚痴ではないのかなとアスカには思えたからだ。

それをぶつける先がないから酒に溺れる。そういう風に見える。だから今、止めても想いの解消法を別に見つけなければ意味のないことだと思う。

「お父さんは悪い人だったの？」

二人のやりとりを黙ってみていたネギは、スタンの言葉が気になったのだろうネカネに問いかけた。

しかし。それに答えのはネカネではなくスタンだった。

「ああ、悪ガキじゃったわい。あいつのしでかした騒ぎの後始末が何度あったか。村が巻き込まれたこともあったしな」

《ここまで言われてて、何で原作ではあそこまでサウザントマスターに憧れてたのか謎だ》

《確かに普通ここまで言われれば多少は疑うと思うのじゃがな》

スタンの言葉を聞いて、スパゲティをすすりながら僕はそんなことを玉藻と念話で喋っていた。ちなみに、アスカの体内いる限り、玉藻には食事は必要ないが、一緒に食事の気分は味わえるらしい。

「……」

「あいつが死んでしまってせいせいしとるわい」

スタンの言葉に「いや、生きてるけどね」という呟きを一人、アスカは心中でしていた。

手に持っていたコップを見つめながら黙ってそれを聞いていたネギは、やおら立ち上がってコップを置いて走って料理屋を出て行った。

「あっネギ！」

店を出て行ったネギに、ネカネが声を掛けるも止まらず、走り去っていった。何時もなら基本的にネカネの言う事に従うネギも、静止の言葉が届かないほどにショックだったらしい。

「ハァ～、待ってるから行って来てあげなよ、ネカネ姉さん」

「ゴメンね、連れて来るから待ってて！！」

アスカが一人残る事に不安を感じた様子のネカネに待ってる事を告げ、ネギを追いかけるように促した。

それを聞いたネカネ姉さんは慌てて兄さんを追って店を飛び出した。

「あの言い方はないだろじーさん」

「フン！　ホントのことじゃい。べらんめい」

周りが何か言っているが僕は気にせずに一人我関せず食事を続けた。しかし、二人が戻ってくるまで食事が終わっても一人で待つ羽目になってしまった。

時間が空いたので初心者用の杖を持っているのもあって、周りから魔法の指南を受けたのであった。

第二話　　人間不信になった少年（後書き）

感想でプロローグが淡白すぎるということで加筆しました。

前編は既に上げてあるので後編を２２日０時に投稿したいと思います。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

尚、修正は投稿から一日後に纏めて行います。

第三話　　故郷を失った少年（前書き）

仕事にも大分慣れてきて執筆も安定してきました。

二週間以上、空けずに投稿できます。

今話は、本作の『第三話　失ってしまった少年』の再構成です。改定前よりも暗いですし、欝成分が多いです。

見る場合はそこら辺を十分に覚悟してください。

文字数は１５４７５字です。

それではどうぞ！！

第三話　故郷を失った少年

休みも終わり、ネカネやアーニャはバスでウェールズの魔法学校へと戻ることになっているのでバスの停留所に来ていた。

そこに、ネギとアスカも二人を見送るために雪がちらちらと降る中で一緒に来ていた。

「じゃ、また一ヵ月後にね。練習しなさいよ」

別れ際、アーニャは二人に渡した杖で魔法の練習をするように、と素直なのか、そうじゃないのか微妙な感じで言う。ネギと離れるのが本当に寂しそうな顔を最後までしていたのは愛嬌だろう。

それにネギが気がつかないのは年齢が理由だと思いたい。でなければアーニャは将来、絶対に苦労することになるから。

「火元には、くれぐれも気をつけてね。それと知らない人にはついて行かないこと。それから、病気や怪我にも、それと……あれも……」

「ネカネ姉さん、バスが待ってるから早く行かないと」

ネカネも、アスカが意識不明になったり行方不明になったりした頃に比べれば、ベタベタと傍を離れないというのはなくなったが、過保護なところは変わっていないので、生活のアレやコレやと注意等を去り際まで繰り返していた。

アーニャが止めなければ延々と続いていたのは間違いない。その

場合、停留所に来ているのにバスに乗り遅れるという珍事が発生しかねない。

「あ、そうね。元気にしてるのよ、ネギ、アスカ」

「「うん」」

アーニャの言葉で時間が差し迫っていることに気付き、ネカネは最後に二人に声を掛けながらバスに乗り込む。

ネカネの過保護具合を諦めの境地に達して、聞いていた二人は頷きを返し、バスに乗り込むアーニャに感謝を示す。

アーニャは気にするなと苦笑いを浮かべ、発車したバスの最後部座席から見えなくなるまで何時までも二人に向って手を振っていた。勿論、その隣りで恋人と無理遣り離されたような顔を浮かべていたネカネがいたことはスルーすべきである。

「「はぁ～」」

バスが発車して完全に姿が見えなり、帰り道で家に向いながらネギとアスカは揃って溜息を吐いた。

自分達の事を思って言ってくれるのは判るのだが、前の一件があってから度が過ぎる。特に事件の張本人であるアスカに対しての過保護っぷりは郡を抜いている。流石に事件直後のトイレまではついてこないが、隙あらば傍に引っ付こうとするので困りものだ。

年相応に甘えん坊なネギからして、大好きなお姉さんを独占していることの嫉妬よりもアスカに対して哀れみを感じるのだから、そ

の行動は凄い。

停留所から家へと帰るために並んで歩く二人の姿は、似ていないとしても誰の目にも間違いなく普通の兄弟に見えた。悩みを理解できたこの時は、二人は普通に当たり前の兄弟として過ごせた時だったのかもしれない。

ネカネ達がウェールズの魔法学校に戻り、半月ほどの日が経ってからネギが奇妙な行動を取り始めた。

最初は、日常的ないたずらをして周りを困らせ、何を思ったのか高い木に登っては、そこから飛び降りたり、仕舞いには猛犬の？がれていた鎖を覚えたての簡単な魔法で切っては追い掛け回されたりなど、徐々にやることがエスカレートしていった。

「兄さん、そんなことしたら危ないよ」

「大丈夫だよ、だから邪魔しないで」

勿論、最初のいたずらの段階で何度も止めるようにアスカが注意するも、弟という事で潜在的に下に見ているのか止めようとしない。或いはそれが楽しいか、また別の理由があるのかと推測するもアスカには分からなかった。

実行する前に止められないならアスカに出来ることは被害を最小限に抑えることしか出来ない。

「ごめんなさい！！」

「……まったく、仕方ないね」

いらずらをして困らせた人に代わりに謝り、その必死具合に仕方なく許してもらったり、

「危ない！　――――――ぐぇっ！」

「あれ、アスカ？　何でいるの？」

木から飛び降りたところに滑り込んでクッションになって潰され、何故アスカがいるのか不思議そうな顔をするネギに本気の殺意が湧きかけたり、

「わぁあああああああ――――――――――っ！」

「あれ？」

魔法で鎖を切って猛犬に追われていたところを庇って、標的がアスカに変わり、追い掛け回されたり、とかなり散々な目に合っている。

しかも、極めつけに真冬の湖に自ら飛び込んで溺れてしまっていた。現在は４０℃の高熱を出して寝込んでいる。

これも第一発見者はアスカで、流石に小さな身体で溺れている子供を助けるのは無理、と判断して大人を呼びに行き、助けられて事無きを得た。

その山間の村は冬になると雪に閉ざされる寒冷な地。そんな場所で冬に湖に飛び込むなど自ら命を捨てるようなものである。そう、ネギの行動は子供の「悪戯」を飛び越えて「自殺未遂」と言っても過言ではない暴挙なのだ。

「ネギが溺れたって本当ですか、お父様！？」

ネギが住む離れの小屋に飛び込んできたのは、彼の年の離れた姉、ネカネだ。

アスカの件から兄弟に対しては心配性の気があるネカネが急遽呼び戻された事からも、ネギの容態がどれほど悪かったかは推して知るべしである。

意識を取り戻したネギにネカネは何故、あんな事をしたのかと問い質してみたが、返ってきた答えは、

「だって、危機（ピンチ）になったら、お父さんが来てくれるって思ったから……」

しかし、この時既にネギの父、「千の呪文の男（サウザンド・マスター）」ナギ・スプリングフィールドは人間界で消息を絶ち、既に死んだとされていた。ナギほどの魔法使いの間での有名人が何年も目撃情報すらないことで、一般的な考えでは死亡したと見る人間が多い。

この前、アスカとネギの三人で御飯を食べに行った時、ネカネがショックを与えまいとオブラートに包んで説明したと言うのもあるだろうが、まだ幼児といっていい年齢のネギには『死』と言うものが理解できなかったのだ。

それを聞いたネカネは、たとえネギを傷つける事になっても残酷な真実を伝えるべきだったのかと思い悩んだ。

ネギがイタズラをするようになったのは、一才年上の幼馴染であるアーニャが魔法学院に入学した頃から顕著になってきていた。

ネギはこの年代の子供にしては非常に聡明だ。まだ三才であり、誰からも魔法を習った事がないにも関わらず、彼は「自分の魔法で」犬の鎖を切っている。おそらく周囲の人が魔法を使っているのを見て、自然に身に着けたのだろう。

村人の中でネギやアスカと積極的に交流を交わそうという人間は驚くほど少ない。お菓子を上げたり親切なことをしても、家に招いて御飯を食べさせたり、泊まらせることはほとんどない。それはネカネの家も例外ではない。確かに家の離れを貸してはいるが、幾ら家事を変わりにやるといっても幼い子供達だけで生活させるのは異常だと言える。

本当の意味で例外なのは同じ年代の子供を持つアーニャの家やスタンの家、後は世間的に老人と言える年齢に達した人たちぐらいだろうか。それ以外の村人達とは明確な一線が引かれている。

だが、普通はそれが当たり前なのだ。知り合いの子供だからといって、わざわざそこまでする義理と義務は彼らにない。となると、やはり一緒に遊べる同年代の子供が少ないのが問題になるわけだが、理由など探そうとすれば幾らでも思いつく。これ以上の思考は堂々巡りになるだけだ。

結局の所、頼れる人間の少ないネギなのに、その内の二人が魔法

学院の寮に入って村からいなくなり、更にアスカが一人での行動が増えたこともあって、一人ぼっちとなってしまったネギは父親に助けに来て欲しかったのだろう。

誰か一人だけが悪かったわけではない。寂しいと感じたネギが悪かったわけではない。ただ、歯車が噛み合わなかっただけなのだ。

こんな風になってしまう前にもっと自分を頼ってくれればとネカネは思うが、逆にネギの方は自分が我侭を言えば、魔法学院で勉強中のネカネに迷惑が掛かる事を理解していた。その年齢不相応な聡明さが逆に仇となってしまった形だ。

この時、ネカネはネギの心配をするあまりにアスカがどうしていたのかを完全に失念していた。

アスカはネギの一連の行動の理由を聞き、周りの反応を見て顔を真っ青にしていた。

ネギの行動の理由は、一応は理解できる。自分の行動が人に迷惑掛けていることを理解していないのは子供だから仕方の無い部分はある。しかし、周りの村人たちは何故誰もそんなネギを叱ろうとしないのか。

ただ、「サウザントマスターに似て悪ガキ」「元気があるのはいいことだ」と笑っているだけ。諌めているのはネカネ姉だけで、それでも叱っているというものでもない。周りの大人たちと違い、まだ子供と言える年齢だからネカネは理解できる。確かにこれからはネギも、ネカネの言うことを聞いて、もうこんな事はしないだろう。

アスカは本来、子供が悪いことをしたら叱るのが、大人のするこ

とではないのかという考えを持っている。悪い事をしたら叱らないと子供は悪い事をしたと認識できないのではと思うからだ。子供というのは叱られることで善悪や、やっていいことと悪いことの区別がついていくのではないだろうか。

実際、ネギはいたずらをしても誰にも叱られなかったから、その行為が悪いこと、危険な事だと気付かずにエスカレートして真冬の湖に飛び込んだ。ただのイタズラなら問題はない、しかし今回のは最悪の場合、命に関わる可能性があった。

もしかして、叱らないのは英雄の息子だから、英雄の息子なら何をしても許されるのかとグルグルと思考が延々と同じ場所を回り続ける。

《主……》

《おかしいよ、みんな！　何であんな危険なことをしたのに、叱ろうともせずに父親に似ているって笑ってるだけなの！》

思考のループに嵌ったアスカに玉藻が心配気に声をかけるも、無自覚な悪意を覗いてしまったことで溜まりに溜まった負の感情の爆発が起きていた。

もちろん、笑う村人の中にネギの行為に眉を顰めている者達も確かにいた。というよりネギの理由を聞いた大半の人はそうだった。幾らナギを慕って集まった者達といっても、彼らも良識ある大人である。それぐらいの判断はつく頭を持っている。一部例外はいるが。

アスカは最初に目にした部分だけに注目しすぎてそれを見逃して、それが全てだと思い込んでしまったのだ。

《……》

《ネカネ姉さんはまだいいよ。だけど他のみんなはどこかおかしいよ！！》

今のアスカからは村人たちが人間ではなく、それ以外の化け物に見える。もちろん、視覚的なものではなく比喩的なものではあるが、理解できないという点で同じ人間とは思えなかったのだ。

被害妄想な部分は多分にある。それだけのことを考えさせる下地を作ってしまった村人達にも問題はあるが、初めから疑って掛かったアスカにも責任の一部はあった。

アスカも中途半端に一人で自己完結してしまっている。吐き出してしまえば楽なのに、それが出来ない辺りはまだ子供だからか。

《主、お主には我がいる。ネカネに看病を任せてここを出よう》

《……うん。修行しないと、兄さんがこんな行動したということは悪魔の襲撃の日が近い筈だし》

玉藻はアスカの被害妄想な部分に気がついていたが、アスカの今の精神状態では何を言っても無駄だと悟った玉藻が外に出るように促す。

それはアスカの気分を変えるという意味合いが強いが、ここにいても悪化させるだけだと玉藻の配慮からの言葉である。

さっきまでのことを意図的に忘れるかのようにアスカは、玉藻の

言葉に従ってネカネにネギの看病を任せて家を出た。

アスカは自分が何も知らなければ、ネギのように異常を異常と気付かずに過ごしてしまうと考えてしまったから、今は例え一時でも彼らと一緒にいたくなかったのだ。反対に玉藻は時間を置けば理解できるだろうと希望的観測を抱いていた。

このことが後により深い傷になるとも知らずに。

家を飛び出したアスカは村の人々の目を避けながら森の中で魔法と忍術の修行をしている。といっても魔法の方は独学なのでさっぱりと諦めて忍術の方を優先している。

《さて、修行を始めるかとするかの。今日も引き続き木登りの行じゃ》

「あれって大変なんだよね」

木登りの行とは、手を使わずにチャクラを足の裏に集中して木の幹に密着させて登る。口で言えば簡単なことだが、これをやるには、練り上げたチャクラを必要な分だけ必要な場所に集め、それをずっと維持しなければならない。

《前にも言ったが今の主の制御は余りにもお粗末。この状態で術を覚えるよりも完璧な制御をできてからの方が良いのじゃ》

チャクラを手に入れて日の浅いアスカでは、とてもチャクラを使いこなせていない。生半可にチャクラが巨大すぎるのもあってコントロールが必要な【分身の術】とかは、発動しても碌に制御が出来ていないのでへろへろな状態で、白目を剥いて地面にべったりと倒れているという変なものが生まれた。一応、分身はできているといってもお粗末過ぎる。

ほんの少し足りなければ術として成り立たない。逆に多少多くても術は成立するが良くてチャクラの無駄遣い。悪くて術が暴走する。長期戦だったらほんの少しのチャクラの無駄が後々影響を及ぼしてくるから、それも無駄には出来ない。それほどに忍術はコントロールを要求する。

木登りの行を行うために必要なチャクラの量は、多くても、少なくてもいけない、その量の範囲は非常に微妙。更に、足の裏はチャクラを集めるのに最も難しい部位とされている。つまり、このチャクラを調節する技術を極めれば、どんな術だって体得可能という理屈だ。

様々な術に合わせて、微妙な量に調節されたチャクラを、そのまま長時間維持し続けることは、チャクラを単純に集中するのは困難だった。しかも、チャクラを練る必要が生じるのは大抵、戦闘中がほとんどになるだろう。動きを止めることすら難しい状況で、チャクラを調節し、維持することは更に困難を極めることになる。

そのためにチャクラのノウハウを習得するには、これが一番というわけだ。

この修行法を下忍になってからやることに玉藻はずっと疑問に思っていた。チャクラのコントロールなんて基礎中の基礎。忍者アカ

デミーの教育カリキュラムを本気で見直した方が良いのではないかと思ったことである。

そう思っていた玉藻は、旅の過程で得た忍者アカデミーのカリキュラムを参考にして知識も並行して行ったが、肝心のアスカのチャクラが大き過ぎて、術のかなりの大雑把さに先に制御を見につけさせようと思った次第である。

「うん、分かった。やるよ」

玉藻の説明に納得したアスカは、手近にあるキズだらけの木の下まで行くと短く印を結び、意識を集中するように目を閉じる。そうして、やおら、目を開くと気合と共に目の前の木に向かって駆け出した。

今は勢い良く登っているが最初は酷いものだった。

それを登ったと解釈するなら、アスカの最初の挑戦は、幹に向かって踏み出した最初の一歩だけだった。コントロールもなにもできていないアスカの足の裏が、幹を捉えられるはずがなかったのである。最初から歩いて登るのは難しいので、走って勢いに乗り、だんだんと慣らしていくつもりだったのが、それ以前の問題だった。

数日経っても、チャクラの集中はできているものの、結局、数歩駆け上がったところで、アスカは幹から跳ね飛ばされていた。チャクラが多ければ、足は吸い付かず、逆に弾き飛ばされる理屈で、チャクラの調節と持続を同時に行うのが如何に難しいかということを強く実感した。

何回やっても、あまり成長が見られないアスカに玉藻が教えたコ

ツは単純明快。要するに力むな、ということだった。

このアドバイスだけで以前の倍以上を登れるようになったのだから、いかに力を込めすぎていたのかが良く分かるというものだ。

登れる高さが高くなればなるほど落ちた時の衝撃も大きい。毎日、チャクラを限界まで使い切り、大なり小なり怪我をしてフラフラの状態で家に帰って、消耗した体力を取り戻すかのように食事をがっつき、そのまま熟睡する。そして早朝に起きてまた森へ行って木登りの行を、という日々が続いた。

必然的にチャクラのコントロールは元より、何度も地面に叩き付けられる事で打たれ強くなった。

それを成すことができたのは、一重にアスカの意地と玉藻との契約による回復スピードの増加があってのことだろう。

「くっ」

だんだんと木への吸着力が失われていき、地面へと落ちる。即座に持っていた尖った石で木にキズをつけて、自分の今の実力を刻み込んで、くるりと回転して綺麗に着地を決めた。何度もすれば対応もできてくるようになる。身軽になったように感じるのだから不思議だ。

だいたい木につけたキズの位置は、木の高さの三分の二だ。次に登る時は、その上に印をつけられるように心掛けているので徐々に上がってきている。

《うむ、前回よりも上がったな》

「今日こそは登りきってみせるよ」

《その意気じゃ》

目に見える評価として木のキズという分かりやすい跡があるので、良い結果が出ればやる気も出てくるというもの。玉藻の言葉に勇気づけられてアスカは再度、意識を集中して駆け出した。

この日のうちにアスカは木を登りきった。驚くべきことに、垂直に立つ木の幹の表面を、まるで地面を歩くようにすたすたと登り、さらに、地面と平行に張り出す大枝に辿りいて、その枝の表面を歩き、完全に地面に対して逆さ向きになることができるまでになった。

「ｚｚｚ、ｚｚｚ、ｚｚｚ」

が、目標を達成して気が緩んだ所為でうっかりその場で眠り込んでしまい、ネギの件が解決したばかりで過敏になっていた村挙げての捜索がされるという珍事を引き起こしてしまう。

発見された時には、既にすっかり陽が昇り、森の中も木漏れ日で明るくなっているにも関わらず、アスカは目を覚まそうとしなかった。そのあまりにも無邪気な眠りっぷりに、小鳥達も警戒する事無く、アスカの周りで餌を啄ばんでいる程だった。

「聞いてるの、アスカ！！」

「ごめんなさ――――――――――――いっ！！」

ちなみにこの件は当然、ネギの看病をしていたネカネの耳にも入

り、大説教が繰り広げられた。が、真冬に外で一晩を過ごしたので途中で熱を出して倒れ、ネギの横で兄弟仲良く（？）寝込むことになった。

「いい？　身体に気をつけるようにね」

「「はい、以後気をつけます」」

その後、ネカネは二人の事が心配で堪らない様子だったが、何時までも休んでいるわけにはいかなくなって、自分の両親に後の事を託して魔法学院へと戻っていった。

最後に二人に念を押すネカネに二人はベッドに横になったまま神妙に頷くのであった。

村人達が共同でネギとアスカを見張る事になったが、ネギが自ら命を捨てるような行動に出る事がなくなるまで安心はできない。魔法学院に戻った後も、ネカネはしばらく心穏やかではない日々を過ごす事となる。

これからはできるだけ休みを取って二人に会いに行こうと心に決めるものの、二人の事が心配で勉強に全く身が入らず、看病で休んでいた分の遅れを取り戻して再び故郷の村へと戻るまで一ヶ月の時を要した。

アスカも流石に心配を掛けすぎたという自覚はあったので、大人しく過ごしていた。ネギも同様で、ネカネが泣いたのが効いたらしく、いたずらは成りを顰めた。

そして時は過ぎ、遂にその日が来た。

轟々と家が燃え、大人達の怒声と悲鳴に交じって物を破壊する音が聞こえる。

静かで空気が綺麗な村はその姿を変え、地獄と呼べる様相を呈していた。ネギが異常なまでにサウザントマスターに固執するようになるあの事件である。

原作の中でもかなり重要度が高いこの事件を、アスカがなぜ回避出来なかったかというと、原作では六年前とだけあり具体的な日付が分からなかったのともう一つ、こちらの理由が大きいのだが、アスカはそろそろ悪魔が襲撃してくると予想していたので村に入るのを避けたかったが、アーニャの母親（ココロウァさん（おばさんと呼ぶと拳骨が飛んでくるので））にどうしてもと呼ばれたので断りきれなかったのだ。

アーニャの母親には昔から逆らうと容赦なく拳骨が飛んでくるので、好き好んで殴られたくないので逆らうことができない。

そんな訳で、何故ネギと二人ではなく自分一人だけ呼ばれたのだろうかと疑問に思いながらアーニャの家に向かっている時に、悪魔達は村を襲撃した。

悪魔が来た事を周りが騒いだとき、アスカは今持てる全力で村から出るために走りだしたが、村の出口に着く前に悪魔はやってきた村を破壊し始めた。

村の魔法使い達も応戦しているが、刻一刻と形勢は悪魔達へと傾いてゆき、状況はだんだんと悪くなっていく一方。

悪魔達はそれぞれが強力な個体であり、優れた魔法使いといえども苦戦は必死。

しかし、少数の下位悪魔だけなら、本来なら軍隊の一個大隊にも匹敵する村人達でも十分に渡り合う事はできただろう。

圧倒的な数と質、更に極僅かに召喚された爵位級の上位悪魔が戦況を決定的なものにした。

普通に考えて、こんな小さな村を襲撃したところでメリットがある者はいないだろう。おそらく、村人の誰か、或いは『千の呪文の男』に恨みを持つ者の仕業に違いない。この村にはナギを慕って移り住んできたクセのある者が多いため、このような襲撃事件は今までにも規模に大きな差はあっても何度かあった事なのだ。

「シッ！【魔法の射手・連弾・雷の三矢】」

アスカの隠れている近くで、村人の言葉と共に足元の家の壁だった木の板を踏みしめて現れた下級悪魔に無詠唱で魔法の射手を放たれた。

放たれた三つの雷の矢は複雑な軌道を描き悪魔に向かい、悪魔に着弾して爆発を起こす。

その爆発に、下級悪魔が怯んだ隙に、アスカは戦っている誰にも気付かれぬ内に横を走り抜ける。

「はぁはぁ、撒いたか」

少し行ってから隠れて、先程の下級悪魔と村人達が気付いていない事を確認して、また走り始める。

「ちっ！　やっぱり来なければよかった」

アスカは呼ばれたからと言って、この時期に村に来てしまった己の迂闊さを反省した。後悔先に立たず、これ以上の後悔を止め、それよりもどうやってこの状況を打開すべきかと頭を働かせる。

《……》

玉藻は言葉に出さずに、自分が出れば一蹴できるものを、と脳裏で歯軋りしていた。自分が出れれば簡単に片はつくけど、下手したら討伐の対象になりかねないのが結局、自分には何もできないだと思い知らされるようでまた癪に障る。

「くそっ、出口が遠い」

あちこちで戦っているため、時に崩れた家の瓦礫の下に隠れたりして悪魔をやり過ごしたり、戦っている場所を迂回したりしているため未だに村から出られない。

「これが何もしなかった僕への罰なのか……」

村が燃え落ちる光景は正に地獄絵図、アスカには自分の罪の証をまざまざと見せ付けられているように感じた。先程まで動いていた村人達が石像になっている……それがどんな事なのか。決して好きにはなれなかった人たちではあるが、見捨てると言う事の意味を理

解させられた。

《違うぞ主よ。これが起こったのは必然。止めることなどできはしなかった》

「そう、そうだよね」

諌める玉藻の言葉に、自分に言い聞かせるように繰り返す。

だが、直ぐに見捨てるということを理解した気になっているだけだと思い知らされた。

焼けつく熱気が寒いので着ていた厚手の服越しにもジリジリと、ともすれば崩れ落ちそうになる両膝を力任せに前へと踏み出し、燃える瓦礫を乗り越えていく。

「……ぅ……」

そこで炎の音に紛れて響いた、微か呻き声を聴き取ってしまった。意識は弾かれたように、けれど、身体はゆっくりと呻き声の方へと向き直る。崩れた瓦礫の先、わずか三メートルほどを隔てて、見覚えのある村人が倒れこんでいる姿が見えた。今にも炎に巻かれそうな、けれど、まだそうはなっていない。

傍らの壁が大きく炎を噴き上げ、破片を撒き散らす。荒れ狂う灼熱はどんどんその勢いを増して周囲を包み込む。一刻も早く救い出さなければならない。今ならまだ助けることができるだろう。

けれど……と、逡巡したアスカの視界を、炎が真っ赤に覆いこんだ。炎は真っ赤に、激しく、猛り、燃え上がる。

（助ける？　助けない？）

例え、救い出せたとしても、小さな体躯のアスカに大きな体格の大人の男を村の外まで連れ出せるか。そもそもあの男は、自分を替えの効く代替物だと言っていた張本人だから助ける義理などない。自身が助かる可能性さえ低いのに足手纏いを連れてどうする、と頭の中の悪魔が囁き続ける。

（助けるべきではない。何故、人の未来を勝手に決めるような人間を助けなければならないんだ）

ジワリと、アスカの背筋をやけに冷たい感覚が駆け抜けた。自身がそんなことを考えていることに、冷たい、あまりにも冷たく凍るようなその怖気が、助けるべきだと、心の中の善意の部分と反発して前に踏み出そうとした足を絡め取る。

「……た、助・……け……」

男がアスカに気付いて助けを求めてきた。だけど、アスカの足は地に根を張ったように動けない。動かない。動くことが出来ない。

迷っている間に燃え上がる火炎は、男を巻き込んであっという間に燃やして炭化していく。助けるどころか一歩も動くことができず、燃やしていく過程の全てを見させられる。

「ぐ……うぅ…ぉ……」

口から漏れ零れた、獣のような呻き。人が死ぬ過程を、自分が見捨てた所為で死んでいくのをはっきりと脳裏に刻み込んでしまう。

耳に何時までも響く断末魔、鼻につくのは人が焼けた異臭、視界にはもはや誰であるかも分からないほどに炭化してしまったモノ。

それら全てを認識した途端、全身から汗が噴き出して強烈な目眩と嘔吐感を感じた。必死になって忘却しようとする自分を悲惨なまでに否定し、眼前で展開されているソレを自分の脳裏に焼き付ける。

まるで、それが自分の罪だとでも言うように。お前は生きていてはいけないのだと宣告するかのように。

「……う……あ、あぁ……」

恐怖と混乱、嫌悪に支配されたアスカは、自分でも気付かない内に微かなうめきを発していた。荒い息を吐きながら手を握り締め、その目は幻を見ているかのように焼死体を捕らえて離さない。強く握り締められた手は爪を立て、強烈な握力で突き刺されたそこには薄く血が滲んでいた。

信じたくない醜い自分。理不尽極まりない感情に任せて人を見捨て見殺しにした自分。

「うっ……うぅえっ……ぇぇぇ」

ついに背筋から競り上がるような嘔吐感にアスカは、とうとう胃のモノを吐き出してしまった。

死んでいたという過去形ではない。目の前で死んだのだ。ヒトの姿をし、例え嫌っていたとしても、さっきまで生きていたヒトだったモノ。

胃の中のものを全て吐き出しても嘔吐は止まらず、胃液すらも搾り出して続き、それから暫くの間、アスカの記憶はない。

それからどれだけの時間が経ったかは分からないが、アスカが自意識を取り戻した時には、さっきまで居た場所を離れて崩れ落ちる村の中を彷徨っていた。

意識が戻ったのに頭がはっきりとしない。周りが燃えている所為で、空気が薄く酸欠で考える力が低下しているのもあるのだろう。それよりも先程見た人が焼け死んでいく光景が脳裏に焼きついて離れない。鼻に肉の焼けた異臭が、脳裏には人だったモノの姿が、断末魔の叫びが耳に木霊している。

「僕が……僕が、いたから……こんなことに……」

《……》

周りの光景すら目に入っていないのか、アスカは壊れたレコーダーのように自分を責める言葉を繰り返す。

先程の玉藻の言葉も既に頭に残っていない。あるのは見捨てたという事実とこの襲来を引き起こした原因が自分にあるという罪悪感のみ。

玉藻はアスカに何と言葉をかけたらいいかが分からず、沈黙することしか出来ない。こういう時、どうすればいいのか玉藻には分からなかった。

確かに玉藻は長く生きているが、その大半を封印されていた。普

通の人間のように生活したのは十数年のみ、アドバイスするには圧倒的に経験が足りない。

アスカの所為ではないと言うのは簡単である。助けたからといって連れて逃げれるほどアスカに余力は無い。

だが、それを説明しても今のアスカには届かない。それが分かっているので玉藻は何もできなかった。

《むっ！　主！！》

だからこそ、玉藻の反応は遅れ、意識が完全に散漫になっていたアスカは玉藻の言葉を聞き逃した。

何時の間にかアスカの目の前に上級悪魔が立ちはだかっていた。目の前の上級悪魔はこちらを向いて、にやりと嘲る様に狩られるだけの獲物を見て笑う。

《主！！　そやつは危険じゃ！！　逃げろ！！》

酸欠と脳裏に浮かぶショッキングな映像により逃げる選択肢が頭の中から抜け落ちており、体の中からの玉藻の声に気付けない。

だが、アスカの意思よりも、現れた上級悪魔のプレッシャーに酸欠で鈍った頭ではなく生存本能に従い体が反応した。込められるだけのチャクラを足に流し込み、一目散に反転して後方へと駆け出す。

走り出した瞬間に酸欠で鈍った頭が上級悪魔の存在に気が付き、危機感から一瞬で更に過剰ともいえるチャクラを体の事を考えずに流し、一秒にも満たない時間で判断して上級悪魔から逃げる。

悪魔の存在に気付いてからは、数秒後には元いた位置から５０メートル以上は離れており、計れば５０ｍ走の世界記録を間違いなく超えるだろう。

当然、目の前の獲物をわざわざ上級悪魔が逃がすはずも無く、逃げるアスカの背中に近づき、強烈なパンチをお見舞いする。

「ほぅ」

だが、命中した瞬間、上級悪魔は僅かに目を見張った。アスカの姿が直後、瓦礫に変わっていた。当の本人は【変わり身の術】で入れ代わり、方向転換して逃げようとしていた。

「だが、甘い」

「ガハァッ！」

が、上級悪魔の前では、アスカのしたことは文字通り子供騙しで時間稼ぎにしかならなかった。上級悪魔は一瞬の内にアスカに近づいて、今度は【変わり身の術】をする暇も無く、その身に一撃を叩き込んだ。

横から一撃を受けたアスカは、未だ崩れていなかった家の壁に叩きつけられる。叩き付けられた壁は衝撃で崩れ、破片と共にアスカの体は地面に落ちる。

咄嗟に攻撃に気付いて盾にした右腕と肋骨は確実に折れ、他にも罅が入ったり、打撲で全身が痛む。寸前で両足に回していたチャクラを瞬時に右腕に集めていなければ一欠片も残らなかったかもしれ

ないのだから、十分に奇跡かもしれない。

《主！！　しっかりするのじゃ！！》

何とか痛みと玉藻の声で途切れそうな意識を保てているが、思考が纏まらず体もろくに動かないため立ち上がることができない。

勝算を見出すどころか自由に動くこともできない。

「この年齢で私を一瞬とはいえ欺いた技術と咄嗟の判断力。……本当に残念だ。後10年、いや5年もあればな。こんな依頼でなければ将来を見てみたかったが、ここで私に出会った不運を恨みたまえ」

その上級悪魔の言葉は、アスカの確実な死を意味していた。

そして上級悪魔はアスカに近づき、その口を開きガパッと開き光線を吐き出す。その前に射線から逃げようとしても、身体は思ったように動かず、どう考えても間に合わない。

ここまでかと諦めた瞬間。

誰かに体を力任せに引っ張られた直後、爆音が轟いた。アスカが痛みで霞んだ目を開いて周囲を確認すると、目の前にはアーニャの母親がいて、さっきまでいた上級悪魔がいない。

先程の爆音から考えるに、どうやらアーニャの母親に助けられたようだ。

「アスカ君、諦めちゃ駄目でしょ」

「……ココロウァさん？」

「ココロウァさん？じゃないわ。いくらピンチだからって、諦めちゃ駄目でしょ」

「ツッ！」

そう言って頭に拳骨を落とされる。その衝撃で体が動き、全身に激痛が走る。特に酷いのは右腕と肋骨で、痛みで呼吸が浅くなって脂汗が止まらない。

「ん？　骨が折れてるのね。……【治療（クーラ）】」

アスカの様子がおかしい事に気付いたアーニャの母親は無詠唱で治癒魔法を掛ける。

「骨折までは直せないけど少なくとコレで暫くは動けるはずよ。さぁ行きなさい」

治癒魔法の掛けられたので痛みは残っているがだいぶ沈静化して、呼吸も幾分楽になった。完治したわけではないので激しい運動はできないが、歩く分なら何とかなりそうだ。

「えっ、ココロウァさんも一緒に……」

アーニャの母親と玉藻の言葉に従って動こうとして、何故一緒に行かないのかと思い、それを見て言葉を失くした。アーニャの母親の片側の指先からゆっくりと石化していたのだ。

本来ならアスカが受けるはずのそれを庇ったためだ。

「あッ……指が石にしっ、進行を止めないと！！」

「クッ！　無理よ、私ではこの石化は止めるだけでも難しいわ。だから私を置いて一人で行きなさい」

石化の痛みでか、その顔を苦痛に染めたアーニャの母親はアスカに、自分を置いて一人早く行くように急かす。

完全に石化してしまえば、それが上級悪魔の永久石化である以上、解くのは難しい。石化途中であれば石化の呪いの進行を止めつつ本人の回復力を増進させればよいのだが、完全に石化が完了してしまっていた場合、本人の回復力は停止してしまっているため術者の魔力のみで呪いを解いて治癒させねばならない。つまり桁外れに魔力が必要になるのだ。

襲来した悪魔たちとの戦いで大半の魔力を使い、先程の上位悪魔への一撃の為にほとんどを使い果たしてしまった。つまり、他の者達が戦闘を繰り広げている中で彼女に現状を回復する手段は無い。

できるのは、目の前の子供を逃がすことだけ。

「行けないよ！！　そうだ、誰か治療できる人を呼んでくるから待っ」

だが、そんなことを知らない、認められないアスカが治療できる人を捜しに駆け出そうとするのをパンと頬を叩いて止める。

そして叩いた頬を優しく右手が完全に石化してしまったので左手

だけで挟み、目を見る。

前髪が分かれて見えた目にアスカの素顔を見たのは何時いらいだろうかと、そんな考えが浮かぶほどに久しぶりなことに今更気付いた。

自分がもっと早くアスカと向き合っていれば、少なくとも巻き込まれることはなかったであろう事実に申し訳ない気持ちになる。

だが後悔しても、もう遅い。刻一刻と残り時間がなくなっていくのを、徐々に石化していく身体を見て実感する。

ならば、その前に目の前の小さな子供に伝えなければならない。

「良い、時間が無いから良く聞きなさい。……ゴメンね、あなたが私達を避けていたのは知っていたけど、今まで何もしてあげられなくて。それを言いたくて家に呼んだのにこんなことになってしまって」

元々、村人全員の思いとしては、頭の良い子で一度決めた事を決して曲げない頑固な子供だった。自身やネカネが何を言っても、目を隠すほどに長い前髪を切ろうとせず、意識不明になってからはっきりと村人に対する態度が変わったのをアーニャの母親は気付いていた。

まるで避けるように、怯えるように――――――人を避けて一人になろうとしていると。

それをどうにかしたくて家に呼んで話をしようとして、こんな事が起きてしまった。

「気にしてないから、だからだから！」

石化の進行が早すぎて、もう間に合わないと気付いてしまったアスカの目に涙が溢れる。

「（玉藻！！　何とかできないの！！）」

《……済まぬ。我にはどうしようも出来ぬ》

玉藻に助けを求めるも、アスカの体内から出ることができないのでどうしようもない。本当に何も出来ない事を理解して、涙がポロポロと流れ出す。

泣きながらそう言うアスカを見ると、もう既に腰まで石化したアーニャの母親は、慈愛に満ちた笑顔でアスカに言う。

「ありがとう。大変だろうけど周りに負けずに幸せになりなさい。それとアーニャにも伝えて。『幸せになりなさい』と。私はあなたたちが幸せになってくれることを祈ってるわ」

それだけ言うと、アーニャの母親はアスカの返事を聞く事無く完全に石像になってしまった。

「うぉ……おぉ……うあぁぁぁぁぁぁぁぁ――――――――――――――ッ！！」

自分はこんなにも思われていた、愛されていた。独断と偏見で遠ざかった自分にこんなにも優しい言葉をかけてくれて、助けてくれた。なのに何も返せていない。助けてくれたお礼すら言えていない。

想いの行き場を失くしたアスカは、叫びとして意思を外に表現した。

荒れ狂う火災の轟音の中、業火に燃えた村の中で物言わぬ石像に縋りついたアスカの絶叫は低く低く、周囲の火炎を震わせて響き渡った。

《このままここいるのは危険じゃ、走れ。約束を果たすのじゃろう！》

「クゥ……ッ！！」

約束を果たさなければならないので、アスカは玉藻の叱責にゆっくりと身体を動かす。アーニャの母親の石像をその場に置いて歩く。心の中で「ごめんなさい」と何度も呟きながら歩く。歩く。歩く。

そして、村の出口に辿り着き、一度振り返ってから外へと向って歩き出した。

結局、あれから悪魔に出会うこともなく村を出て裏山まで辿りついた。そして、これで一安心だと気を緩めた瞬間にそれは起きた。

「！？」

少し離れた所から一線の光が飛び出し、轟音と共に山を吹き飛ば

したのだ。アスカはその余波の風に十メートル近く吹き飛ばされて、地面に叩き落される。

山が消し飛ぶほどの轟音に驚いたが、直ぐに発信源にいた人影を確認したが、さっきの衝撃で体が動かず、そこへ向かうことができなかった。

轟音の発信源には石化したスタンと、足が石化し砕けて気絶しているネカネ。そしてネギと……ローブを目深に被ったサウザントマスターらしき人影を遠目からはっきりと認識した。

そこまで確認したが既に肉体は限界に達しており、チャクラは完全に枯渇しており、さっきの衝撃でアーニャの母親の治癒で辛うじて?がっていた骨も折れて激痛が再燃した。

幸いというべきか、折れた骨が内臓を傷つけるということにはならなかったようで急を要する事態にはならなかった。

が、激痛と疲れも合間って景色が薄らとぼやけ始めていた。

《玉藻、何かあったら起こして》

《ああ、主よ、今は眠れ》

限界を察したアスカは、何かあったら起こしてもらえるように玉藻に頼み、意識を落としていく。

「僕は……」

誰に向けた言葉かも自分でも判らず、それだけを言ってアスカは

意識を失った。

「お父さぁ――――――――――――――――――――――――――――――――――――ん！！！！！」

意識を失う直前、どこからかネギの慟哭が聞こえた気がした。

第三話　　故郷を失った少年（後書き）

書いてる筆者からして「暗ぁ！」と思ってしまいました。

改定前よりもトラウマを着々と増やしております。

尚、次回はもっと暗くなります。というか、主人公に救いがありません。

次回の更新は、仕事にも慣れてきたので二週間後の日曜日午前0時に更新したいと思います。

遅くなる場合は、その都度、活動報告に上げます。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

活動報告で修正や経過報告を書いてたりしています。

尚、修正がある場合は投稿から一日後に纏めて行います。

第四話　　復讐を誓い、決意した少年（前書き）

今まで活動報告でも全く音沙汰有りませんでしたが、筆者は関西在住なので被害はほとんど無いです。被害はせいぜいマガジンが書店に並ぶのが一日遅れたぐらいでしょうか。

震災の犠牲者の方々に心からの冥福を。

また、前話の修正を行いました。詳しくは活動報告をご覧下さい。

文字数は１０９６５字です。

それではどうぞ！！

第四話　　復讐を誓い、決意した少年

ゆっくりと自身の意識が回復し、ベッドに寝かせられているのに気付いたアスカは、瞼を開くと白い光が目の奥に刺さった。

身体を起こそうとして右半身に走る鈍い痛みに目をぐっと瞑り、思わず顔を顰めた。

「痛い…」

ぽとんと柔らかく清潔な枕に頭が落ちる。視界に映るのは白い部屋。ちょっと痛みを堪えて首を動かして周りを見る。前髪にかかる髪がさらりと揺れる。

白い壁、白い天井、白いカーテン、何もかも清潔そうで味気ない部屋だ。病室の一室らしい。大部屋ではなく個室だった。

窓から見える青い空には高く日が昇り、爽やかな風が開いた窓から入り、カーテンを揺らして。太陽の高さから見て静かな昼下がりだった。

「あら、気がついたのね」

頭の上の方から女性の声が聞こえた。アスカは寝たまま視線を向けると二十台後半ぐらいの白衣を着た女性が立っていた。

「ここは……病院ですか？」

建物自体はそれほど新しくはない。小さな部屋にドアからもっとも

遠い場所に置いてあるベッドに寝かされていた。

「ええ、あなたは助けられてここに運ばれたの。待っててね、お医者さんを呼んでくるから」

「あ、はい」

目を覚ました時、偶々いた看護師がアスカに端的に状況を説明して、慌しく医者を呼びに病室を出て行った。

「一体どうなってるの、玉藻？」

「（あれから三日間、ずっと主は眠り続けて数時間前に救助隊に助けられてここに運ばれたのじゃ）」

誰もいない病室の中でアスカは、一人呟くように体内にいる玉藻に語りかける。玉藻の存在を知らなければ一人でぶつぶつと呟く痛い子だが、部屋には他に誰もいない。

「……成る程。でも、右手にギブスがしてあるのは分かるんだけど、体がほとんど動かないのは何故？」

返って来た玉藻の返答には納得するも、そうなると体が碌に動かない理由が分からないので疑問を呈す。

「（我と？がった影響で主の回復力は増加しておるからな、傷も既に大分癒えておる。だが、そのエネルギーは元から体内あったものを使っておる。元からあるエネルギーを使った分、その分だけ体が衰弱しとるのじゃよ）」

まるで傷ついた獣が他の動物から身を隠して癒すように、アスカは三日間の間は無駄なエネルギーを使わないように眼を覚ますことなく、玉藻と魂を共有した影響で増加した回復力で治癒に専念していた。本人はそれを意図したわけではないが結果的にそういう結果を齎(もたら)した。

勿論、幾ら回復量が増加していようが今のアスカの回復力は人よりかは速いというレベルでしかない。例えば真祖の吸血鬼のように瞬時に再生するわけでもないので決して万能というわけでない。

病院に搬送された時も全身、特に右半身のあちこちの骨折事態は罅にまで回復していても、変わりに脱水症状と栄養失調を引き起こしかけていた。医者が少し頭を捻ったが、あんなことがあったから仕方ないかと無理に納得していた。

人間は、水と睡眠さえしっかりとっていれば、たとえ食べものがなかったとしても2～3週間は生きていられると言われている。しかし、水を一滴も取らなければ、せいぜい4～5日で命を落としてしまうことになる。

飲まず食わずだとしてもそこまでの症状が出ているのには理由がある。治癒を促進させるには栄養が必要で、丸三日間寝たままで何も口にしていなければ元からある体内の栄養を持ってくるしかない。そうなればいくら動かないといっても栄養が不足するのは自明の理。

チャクラの枯渇と疲労、幾らアーニャの母親に治癒してもらったのに、ローブの男の魔法の余波で治りきっていない怪我が悪化してアスカは気を失ったことを思い出した。

二つの条件が重なり気絶してアスカが目を覚ましたのは、悪魔の

襲撃から三日後にやってきた救助隊に助けられて搬送された協会関連の病院でだった。

看護師と一緒に来た医者に聞いた診断は、骨の治療等諸々（もろもろ）で全治八週間というもの。立派な重症患者の出来上がりだ。

「いや、自分でやりますから。っていうかやらせて下さい！！」

「まだ、碌（ろく）に体が動かないでしょ。いいから大人しくしていなさい」

栄養失調やら何やらあって目が覚めても体がほとんど動かないのには困りもので、看護婦に下（シモ）のお世話をされるのは非常に心に来るものがあるとアスカは感じていた。いくら肉体年齢三歳児でも羞恥心はあるものだと変な感心をしていた。これを逃避とも言うが。

「あ――――――っ！」

女性看護師の言う通りだが、男としての矜持があるアスカの願いは届くことなく、計ったようにタイミング良く花瓶に生けてあった花だけがポトリと落ちた。

「――――――うう、汚されちゃったよ」

「（そんな大袈裟な）」

アスカはるーるると眼の幅涙を流して枕を濡らし、何故かホクホク顔の看護師は意気揚々と病室を出て行った。別にいやらしい行為はなかったので玉藻が突っ込みを入れた。

救助されて日の夜が明けてから悪魔の襲撃後、全く会っていなか

ったネギやネカネが朝早く見舞いに来た。アスカは一日経っても、まだ録に体が動かないため、病室のベッドの上で横になったまま出迎えになる。

「本当に……アスカも……無事、で……良かった……！」

「うん、僕は大丈夫だから」

開口一番ネカネは、アスカの怪我を気にして無事な左手を握りながら、顔を俯かせて感極まったように涙声で無事を喜ぶ。それだけ事件当日にアスカの行方が知れなかったことや、見つかったと思ったら重症を負っていると知ってからは心労を溜めていたのだろう。

左手を握られ、右腕は完全にギブスでガチガチ状態になっているので行動に移すことができないので、握られている手を握り返し、言葉で大丈夫だということを伝える。

そんなに泣くほどに心配を掛けたのかと申し訳ない気持ちと、そこまで思ってくれることにアスカは少し嬉しくも感じる。

暫くの間、ネカネが落ち着くまで部屋には、すすり泣く声やアスカの落ち着かせようと若干、慌てた声が響く。

「良く無事だったね。ネカネ姉さんも」

「本当、自分でもそう思うわ」

時間が経ってネカネも落ち着き、お互いに事件当日の話を聞いたアスカの率直な感想がそれである。もちろんアスカはほとんどの情

報を秘匿し、アーニャの母親のこと以外は当たり障りのないものに変えている。

どうして見捨てた村人のことを話さなかったのか？

状況的に見捨てたからといって非難することは誰にも出来ない。チャクラで身体能力を強化しても体格的に大の大人を連れて逃げるのは不可能だと誰もが思うだろう。

それでもネカネに言えないのは、アスカは自分が人を見殺しにした最低な人間なのだと知られたくなかったから。

例え事実を知ってもネカネは、アスカにどうこうという想いを抱くことはないだろう。それでも事件でネガティブな思考に陥っているアスカは嫌われたくなかったから、と万が一でも可能性のあることはできなかった。。

「そう……アーニャちゃんのお母さんに。アスカは大丈夫なの？」

「大丈夫だよ。僕は――――大丈夫だから」

アーニャの母親のことついては、ネカネは村の状態から大凡の予測がついていたのか驚きはしなかったがアスカを庇ったということには内心では慌てていた。

大丈夫だと努めて笑顔で対応して安心させ、内心の傷を隠すことに成功した。ネカネは気付くことなく、成功してしまった。

ネカネ自身も両親を石化され、年齢的に村の状況を正確に理解で

きてしまっているので、その分のショックは大きい。更に幼い子供たちのために弱い姿を見せられないと、気丈になるように努めているためアスカの僅かな変化を見逃してしまった。

アスカの内心の動揺に気付いたのは玉藻だけで、救助された時にアスカは話す内容を決めていたので口を挟むことができなかった。ネカネなら気付いてくれるか、という淡い期待を抱いていたが外れて肩を落とした。

「でも、二人ともほとんど怪我がなくて良かったよ」

一番傷が浅かったのは扱けでもしたのか擦り傷ぐらいネギで、次点が足を石化されたネカネ、最後にぶっちぎりの重症のアスカとなっている。

悪魔に足を石化して砕かれたネカネだが、襲来した悪魔を撃退したナギによって石化は止められ、やってきた救助隊によって助けられた後、治癒術師の手によて解呪されたので足は無事である。

何故、上級悪魔の「永久石化」を受けたのに解呪出来たか？

それは術をかけられた本人が完全に石化していなかったからである。外からの治癒術師の力と本人の回復力という外と内からのアプローチによって解くことができたのだ。

これが石化進行中や、もっと石化の被害が酷ければ別であったが幸いにもネカネの石化は治癒範囲だったのは運が良かったと言える。

「それで村の人たちは……？」

「ごめんなさい。私にも分からないの」

「そう……」

アスカはネカネから、最優先である村人が結局どうなったかという情報は得られなかったが、さっきから気になっていることがある。

病室に入ってきた時からネギがその小さな体には不釣合いな杖を持っていることだ。歩くと支えきれずにバランスを崩したりして危なっかしく、ネカネが持つと言っても頑なに拒否している。

何となく病室に入ってから空気みたいになっているが、本人は杖を抱きしめて一人悦に入っているので放っておいたのだが話題がなくなってきたので矛先を向けた。

「兄さん、その杖は？」

話題は簡単にネギの持っている杖は誰のかとである（誰の者か判ってはいるが確認の為に）

「……お父さんが、僕にくれたんだ」

その言葉であのとき意識が朦朧としていたが、見たものと記憶には間違いなかったということが分かった。

「お父さんが？　死んだはずじゃ」

心の中と玉藻との会話ではサウザントマスターと呼んでいるが、それ以外では思ってもいないのにアスカは「お父さん」と呼んでいる。

そしてサウザントマスターが生きていることは知っているので、知らなかった振りをして驚く演技をする。

あの場を見ていたことも、父親が生きていたことを知っている事をネギたちに知られるわけにはいかないからである。

教えられるまでサウザントマスターが生きていることを、アスカが知っているという事を他人に知られるのは不味い。原作を知っていたとか言っても異常者扱いされるだけだからだ。

遠くから見た、と事実をそのまま言ったらいいかもしれないが、その場合はネカネが自分たちの近くにいたのに重症のアスカに気付かなかった、と落ち込まれる可能性があったので止めておいた。

「生きてたんだよ！　お父さんは僕を助けてくれたんだ！！」

しかし、どうもネギは何故か助けられた事や杖を貰った事などを話す時、やけに『僕を』という言葉を強調している気がするとアスカは感じた。

それは、父に杖をもらったという自慢か、それとも自分だけ助けられ、アスカは助けられていないという子供染みた優越感からか。

《ネギは子供じゃし、アレだけ憧れていたのだ。そう思ってしまうのは仕方あるまい》

《そう、だね……》

「……そう、なんだ」

父に『ネギは救われ、自分は救われなかった』という事実に、アスカの心にさざ波が立ったのに気付いた玉藻がネギの言葉を気にしないように念話で話しかけるも、その甲斐もなく、返すアスカの念話と現実の返事は言葉少ない。

自分は救われなかったことにショックを受けているのか何なのか、アスカは自分でも理由が分からない。

後悔、不快感、不満、嫉妬、劣等感、怨み、苦しみ、悲しみ、切なさ、怒り、諦め、絶望、憎悪、空虚と、有りと有らゆる感情が浮かんでは消え、一時たりとも留まることなく変化し続けた。

結局、アスカはそれだけ言うと自分で理解できない心の動きに口を閉じた。

「……」

「アスカ！　さっきのはネギも悪気があったわけじゃなくてね――――――――」

アスカが黙ったことで自分がひどい事言ったと思ったのか、ばつが悪そうな顔をしたネギもそれ以上何も言わなかった。ネカネも黙ってしまったアスカが傷付いたのかと思って慰めているが、アスカの耳には何も届いてこない。

ネギは父に自分だけ助けられて杖を貰い、アスカは助けられなかったことにネギは自分では隠しているつもりでも、顔に出ているが優越感を感じていた。

それは子供特有の親の愛を独占したいというもので、大なり小なり幼い兄弟、姉妹がいる家では別段おかしいものではない。

しかし、平時ならアスカも特に気にはしなかっただろうが、如何せんタイミングが悪過ぎた。

二人の反応を見て、年齢に比して聡いネギも自分がしたことが悪いことだと感じてアスカに申し訳ない気持ちになり、杖を持ったまま項垂れた。

直ぐにアスカに謝らなかったのは、兄としての矜持ともしかしたら交換条件で杖を渡さなければならなくなるかもしれない、という危機感からである。

「――――――――今日は、もう帰るわね。また明日も来るから」

何を言っても反応を返さないアスカと、俯いてしまったネギを見て、日を空けた方が良さそうだと判断したネカネは帰ることにした。

普段はネギ以上に聞き訳がいい、というより手間をかけないアスカだが一度こうと決めたら頑として譲らないことは、髪のことでネカネも重々承知している。

髪の時に近い状態になっていることを察したネカネは、アスカに対して罪悪感を持ってしまったネギを連れ、明日も来ることを告げて病室を出て行った。

「……」

二人が病室を出て行って5分、10分と時間が経っても、アスカ

は仰向けで天井を見つめたままピクリともしない。

病室の壁は防音素材を使われているのか、それとも外が静かなだけなのか、外部からは何の音も聞こえず、個室なのでアスカが音を立てなければ部屋は無音のまま、更に数分が経過した。

「……っ！」

突然、右腕をギブスで固定されてろくに動けないはずのアスカが起き上がって、傍らに置いてあった花瓶を左手で壁に投げつけた。壁に思い切りぶつかった花瓶は、派手な音と共に水と破片と花の残骸を辺りにまき散らす。

「……は」

まるで激情を抑えるように荒い息を吐いていたアスカは、直ぐに痛みで力尽きて倒れるように身をベッドに沈める。

自分の所為で親しかった人を犠牲にしたなんて、ネギの言葉に動揺して花瓶を壊すなんてことをするなんて滑稽すぎる。

ネギの話が真実なら、サウザンドマスターが悪魔を撃退したことで気絶している時に襲われなかった可能性もあり、アーニャの母親と合わせて一度ならず二度も助けられたなんて、あまりにも、あまりにも無様すぎて、もう嗤う気にもならなかった。

そのお陰で自分はこうして五体無事に生き長らえた。残ったものはこの命と、鍛えたのに何の役にも立たなかった力だけ。

「――――――――――いや」

ふと気付いた。モノを壊すだけの力、敵を打ち倒すだけの力、その使い道はある。

（あれはもしかしてヘルマンだったんだろうか）

アスカの頭の中にはこれからの事をだけを考えていた。あの時は色々あって気付かなかったがアーニャの母親を石化した上級悪魔は、もしかしたらヘルマンではなかっただろうかと推測していた。

そう思った根拠は、あの悪魔の姿が原作で見たヘルマンの悪魔化した姿に似ていた気がしたからだ。何分、原作知識も何年も前のことなので確証は無いが、石化魔法も使ったという共通点があるので可能性としては高い。

ヘルマンとは何時か戦うことになる――――アスカは原作知識と関係なしに根拠もなく、そう感じていた。

そのためには今のままではとても勝てない。今のアスカはあまりにも弱く、勝つためには力が必要だ。

そして、この事態を引き起こした明確な敵はいるのだ。拙い原作知識と推測から導き出された敵は多いが該当するものは一つしかない。

玉藻から教えられた村の人間の戦力評価はかなり高い。そんな彼らを圧倒するほどの悪魔たちを召喚するには個人では不可能。組織だとしてもかなりの規模になるとアスカは推測した。

この事件を知ったほとんどの者は『ナギ・スプリングフィールド』

に恨みを持つ者が起こしたと考えるだろう。だが、アスカにはもう一つ狙われる理由に心当たりがある。

それは母である『アリカ・アナルキア・エンテオフュシア』の存在。高度に政治的な問題が絡んでくるが、こちらなら息子であるネギやアスカが狙われる理由にここまでの戦力を出してきたことに納得できる。

この襲撃での利益、不利益、数多の思惑を計算し、該当する組織は――――――メガロメセンブリア元老院しかない。

（だが、できるか？）

敵は魔法世界を二分している片方の大国のトップ達。いずれ、力をつければできるかもしれない。けれど、確実とは決して言えない。自分の力はまだ未熟なものに過ぎないのだから。

力が、欲しい。自分の運命と呼ぶものすら断ち切ることが出来るほどに、強い力を。

自分が自分でなくなってもいい。だけど、倒すべき敵だけは、この命に代えても倒さねばならない。

――――そう。アスカ・スプリングフィールドは、そう在らなければならないと復讐心に駆られ、自身をそう定義付けた。

襲撃前のアスカなら復讐なんて考えもしなかった。なのに、思考がそっちに行ってしまうのは、それだけのモノを見て、聞いて、感じてしまったから。

強くならなければ、復讐しなければならない、と強迫観念にも似た想いがアスカを責め立てる。

「玉藻、僕は強くなりたい」

「（――――――――それは復讐のためか？）」

泣いたままの自分が嫌だから、自分で自分を壊すことを選んだ。泣くしか出来ない自分が嫌だから、禍々しく狂う事を選んだ。それがどんなに間違っていてもそうせずにはいられなかった。

「そうだ」

普通ならば、の話だが必要以上に身体を痛めつける意味はない。だが、生憎とアスカには時間がない。弱いということが許される立場にないのだ。

『大戦の英雄』『千の呪文の男（サウザンド・マスター）』と『ウェスペルタティア王国最後の王女』『災厄の女王』の息子。魔法世界でも知らぬものはなしの英雄と悪役の息子。その直系となれば恩恵と災厄は必ず降りかかる。

親の因果は子に巡る。因果なものだ。親は子を選べない。それは真理だ。だが同時に子も親を選べないのだ。

アスカの場合は最悪で、父であるナギ・スプリングフィールドは魔法使いの中で知らぬものは居ないとされるほど有名な、最も身近な英雄だ。それはとたんに現実味を増し、神話での英雄では居ない崇めるもの以外の反発など生易しいものではなく憎悪するものが発生する。世界は全く持って理不尽なもので、そういった恨みつらみ

を血縁者で晴らそうとするものが多いのだ。

狙われる者には選択肢が三つしかない。自分の身は自分で守るか、強者の庇護下に置かれるか、狙われているものを手放すか。

狙われているのは自身、故に手放せない。ならば、強者、もしくは権力者の庇護下に置かれるか。

その点、玉藻なら強者だし、そう遠くない未来にはアスカの身体から出ることもできるから適任であろう。だが、強者であっても政治力はなく、下手したら狙われる対象になるので却下。更に他の権力者や強者に自分を利用しないと誰が言える。

ならば残るのは一つしかない。自分の身ぐらい守れるぐらいに強くならなければならない。

そのための力がなければ、意地という名の信念で守ろうとするだろうが、それでは何れ自滅する。最悪な結末だ。中途半端に力があることこそが、ある意味では一番の不幸なのかもしれない。

「（復讐など無意味だぞ。何も得られはしないし、人に理解もされない。それでも主はその道を行くのか？）」

「それでも」

玉藻の実感のある言葉にも迷いなく、アスカは返した。意味も価値も関係ない。この力に敢えて意味を求めるとしたら、その程度しかないというだけのことだ。

だから、アスカは言う。己の存在意義を込めて。

「奴らを倒せる力を、誰にも負けない強さを僕にくれ」

「（――――――まあ、良いじゃろう）」

暫しの沈黙の後、玉藻は悲しげにアスカの願いを受け入れた。

アスカの目は先程のネカネと話していたときとはまるで違う。追い詰められて視野狭窄を起こした、正気と狂気の狭間で揺れる瞳は、それ以外の道はないのだと自分に思い込んでいるようであった。

だが、何かを憎まなければ心は持たなかった。何かに憎しみをぶつけなければ、生き場のない感情は心に留まるだけだ。そうなれば、いつかはあっさりと砕け散る。耐えきれずあふれ出て壊れる。

まだ出会ってから短くても濃い付き合いをしている玉藻には、ネカネが思ったのと同様に、アスカが一度決めたことを変えないことは良く理解している。なので、例えここで断ったとしてもアスカは独力でなそうとするだろうことは容易に想像できた。だからこそ、反対するのではなくて可能な限り自分が無理をしないように干渉できる選択を取った。

これからのことを考え、思考に没頭して父のことなどカケラもないように見えるアスカだが、それはわざと思い込んでるだけで心の中で杭が深く、深く突き刺さっている。その杭の正体を、アスカは気付こうとしないので知るのは何年も先の話になる。

ちなみに花瓶は、夕食を持ってきたナースが発見し、アスカは割ったちゃんとした理由を話せなかったので、いたずらで壊したということになってきちんと怒られましたとさ。

アスカは1ヶ月経ち、体が動くようになると周りの反対を押し切って無理遣りに退院すると、三人は予定より遅れて魔法学校のある街へと引っ越すことになった。

又聞きに話になるが村の生還者はアスカとネギ、ネカネの三人と、魔法学校にいて巻き込まれなかったアーニャの計4人だけだった。

街についたアスカは、病室での一件からぎこちないネギと、兄弟の入学手続きなどは二人の祖父がやってくれているが寮生活には日常必需品などの用意や買い物、傷心のネギやアーニャの世話で何かと忙しいネカネの目を盗んで、真っ先にアーニャにアーニャの母親からの言葉を伝えた。

「――――――『幸せになりなさい。私はあなたが幸せになってくれることを祈ってるわ』と最後に僕に言いました」

「……お……母……さん……」

アスカは石化する直前の、アーニャの母親の最後の言葉を伝えた。

「……う……うぇ……何で！　何でお母さんが！！」

アーニャは最後の母の様子を思いながら、口を抑えて堪えようとしても耐えられない嗚咽を漏らす。やがては目から流れる落ちる涙を抑えて人目も憚らずに大泣きした。

「本当なら僕が石化されているはずだった。ココロウァさんは僕を庇った所為で石化したんだ」

目の前で大泣きされて、何故そうなったのかと聞かれたのでアスカは正直に自身を庇った所為だと答えた。原作では石化していたが、アスカを庇わなければアーニャの母親が石化しない可能性もあったのは確かで、アスカを庇って石化したことには間違いないのでそのまま伝えた。

が、このアスカの対応は、アーニャの気持ちを碌に考えておらず、無神経の誹りを受けても仕方がなかった。

「お母さんがいないのにアスカがここにいるのよ!!　返して!お母さんを返してよ!!」

ポロポロと涙を流しながら搾り出すような言葉を吐いて、アーニャはその拳でアスカの頬を思いっきり殴った。

「――――――――っく」

幾ら怪我が完治していないとは言っても、魔法学校に通っていても人を殴ったことなどないアーニャの拳を避けることは簡単ではあったが、それはしてはいけないのだとアスカは心のどこかで思い、大人しくその拳を受けた。

アーニャの言葉は決して悪意から出たわけでも、本当にそうなれば良かったと思っているわけでもない。ただ、母親がいないことが悲しかったのだ。

自制よりも激情が勝ったという、それだけの話。

直ぐに自分がアスカを殴ったことに気付き、罪悪感に駆られるも母を失って収まりのつかないアーニャはアスカの前から泣きながら走り去る。

「――――――――」

《大丈夫か、主？　しかし、あそこまで言わなくても良かったのではないか？》

《仕方ないよ、言った通りなんだし。でも、結局泣かせてしまったな……》

アスカには、アーニャにどんな感情があったのかが判らないから、ただ去っていく後姿を見ていることだけしかできなかった。

「村のみんなはどこに行ったの？」

「大丈夫、心配ないよ」

アーニャが去った後、アスカは村の皆がどうなったのかを周りに訊いて周るも、誰もどうなったのかを教えてくれない。みんな「心配ない」と、そう言って言葉を濁すだけで、子供のアスカには教えてくれなかった。

だから、自力で何処にいるのか探し出して見つけた。アスカの推測が正しければ、ほとんどの村人は石化されており、どこかに安置されているはず。村にいる人間は優に百人を超えるので、大半が石化されたとして置いておける広範囲な場所は限られてくる。

そう考えて数日探して、魔法学校に大きい地下室のあるのを見つけ、忍び込んで発見した。

螺旋階段を下った先には幾つもの石像があり、アーニャの母親やスタン、ネカネの両親の姿もそこにあった。

「ココロウァさん……」

あの日、あの場所で別れたままの状態であるアーニャの母親の石像を前に、アスカは暫しの間、思いを凝らす瞑目する。

そして、目を開くと当初の目的である石化した全員からサンプルとして衣服部分の欠片を折って採取して、このために持ってきた袋に入れる。

今後の目的の一つとして、石化した彼らを元に戻すことを目指す。

「僕はどうすれば良かったんだろうか……」

例えどうにもできなかったとしても、何かできたのではないのかとあの日から見るようになった悪夢を見るたびに思ってしまう。

まるで大切なモノをあの日、あの場所に置いてきてしまったようで、あの日で時間が止まってしまったような感覚を覚える。アーニャの母親にちゃんと助けてくれたお礼を言えなければ、アスカは一歩も前に進める気がしない。

過去は変えられないから未来で彼らを元に戻す、それが何もしなかった贖罪になるとアスカは考えた。もしかしたらアーニャの母親

に庇われず、それでもアスカが無事だったなら贖罪なんて考えもしなかったかもしれない。

「何時になるか判りませんが、必ず貴方を助けてみせます。それまで待っていてください」

《我も協力するぞ》

そう小さく、アーニャの母親の石像の前でアスカは、自分にだけ聞こえるような声で心に刻み込むように誓いをかけて決意して、振り返らずにその場所を出た。

一連の事件で、アスカは一つの間違いを犯した。それは自分の感情を抑え、ネギやアーニャの癇癪に理解を示して自分から引き下がってしまったこと。

周りに気をつかい、自分が悪者になるようにアーニャに母親の伝言を伝えて大人しく殴られたのは誰かに罰して欲しかったから。

アーニャのように癇癪を起こして、誰かに、何かに思いっきり八つ当たりでもすれば良かったのだ。八つ当たりをして吐き出せば、内に溜め込むこともなく、これからのことも変わったのかもしれない。

第四話　　復讐を誓い、決意した少年（後書き）

総合評価　１０，０００ｐｔ　ＰＶ累計　８００万、ユニーク　９０万人を突破しました。見てくださった皆様に感謝を。

今回は別ですが、次回こそは暗くなります。尚、主人公にも後で救いがあるようにしますので、そこら辺のことをご容赦下さい。

次回の更新は、二週間後の日曜日午前０時に更新したいと思います。

予定より遅くなる場合は、その都度、活動報告に上げます。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

活動報告で修正や経過報告を書いてたりしています。

第五話　　追い詰められる少年（前書き）

何故かヘルマン戦や麻帆良武道会決勝の方が出来上がってきた作者です。

仕事にも慣れてきて執筆スピードも大分上がってきましたね。

今話は長くなったために二話に分けました。

それでも一万文字オーバーですが。今回と次回の話は暗いの注意を。

文字数は１０２８６字です。

それではどうぞ！！

第五話　追い詰められる少年

アスカとネギがメルディアナ魔法学校に入学して半年以上の時間が経っていた。

メルディアナ魔法学校はイギリスのウェールズの一角にある。学校と名はついているものの世間にその存在を知られている訳ではない。何しろ生徒も教員も皆『魔法使い』等と言う非現実的な存在であるが故のこと。もっとも、幼少の頃より魔法の存在を知らされてきた者たちにとって、魔法は既に現実の一部である。物語の中の存在などではない。

授業も終わって陽が落ちた夕方――――皆が寮に帰る頃、周りの建物が死角となって人目につきにくい場所で、そんな時間には人が来ない裏庭でアスカは体中に痣を作って地に伏していた。長時間に及ぶ暴行によって全身を蝕む痛みで、直ぐには立ち上がることすら出来ない。

「ふぅ……さて、ストレスも解消できたことだし帰ろうぜ」

学校という空間は、それだけで一つの社会を構成している。その内部は外部に対しては強度に閉鎖されており、部外者には一種の異世界に等しい。

大人を嫌う子供たち、不祥事を厭う教師たち、その両者が結託すれば、隠蔽できない事実は皆無に等しい。殺人事件が起きても『不幸な事故』として片付けられる社会――――――――――――それが学校という小世界なのだ。

人間は、自分の行動に他人が聞いて至極最もに見える理由、つまり「大義名分」が用意されれば、普通では踏み切れない行動にも進んで踏み切る傾向がある。もともと人間は、相手を信じたい気持ちと同時に、信じたくないという相反する気持ちを持っているものだ。彼らの納得する「大義名分」を示しさえすれば、信じたい気持ちが触発され、こちらの言うことに目を向け始めることになる。「ただやれ（義務）」や「お金のため」や「自分のため」などよりも、「（大切な）誰かのため」や「正義のため」や「環境のため」や「（地球や人類などの）未来のため」や「みんなのため」のような美しい理由のほうが、人の心を動かしやすい。

そして彼らには、自分なりの「大義名分」の下に行動している。

「おー、いやぁ今日もいい運動した」

アスカは野良犬が野垂れ死んだような格好で地面に倒れていた。その様子を、数人の子供が見下ろしていた。

けらけらと頭上で笑う悪魔達。共通しているのは、彼らが浮かべる表情だった。

――――――――嘲笑。

這い蹲る少年を囲んで、子供たちは楽しそうに笑っている。彼らは心から笑っていた。純粋に、無邪気に、そして――――――――残虐に。子供ゆえの、道理を弁えない残酷さ。蜻蛉の羽を毟って、無様に地を這う姿を嘲るように、這い蹲るアスカを嘲笑い、罵る。

あまりにも残酷な仕打ちだったが、彼らに罪悪感はなかった。なぜなら彼らにとっては正当な権利なのだから。

「じゃあな。よ――――――――――っと！」

「――――――――――！！」

去り際、最後に腹に一蹴り浴びせて、彼らは帰っていた。呻きなどもはや上げる事もできない。口の中は迫り上がった血で満たされていて気持ち悪かったが吐き出すことはしなかった。足音が去ったのを感じて、アスカはやっと口の中に溜めていた血を吐き出した。

「げほ、げほっ――――――――――げほ！」

アクション映画などでは口から血を吐き出すなんて良く見る光景ではある。前世でも血を吐くことなんてなかったので、自分はそれほど現実離れした酷い目に遭っているのか、と力なく笑う。

吐き出した血を避け、痛む身体を何とか仰向けにして空を眺めた。建物に区切られた空は、まるでアスカが吐き出した血のように赤く染まっていた。

ネギとアスカは『英雄』であるナギの息子。

ネギの身には『魔力量』が普通の魔法使いの数十人分あり、魔法を使う才能も入学してから一年で『基本魔法』に於いては『ここ十年最高の成績』と先生方から太鼓判を押されるほどで、新しい物事は真綿が水を吸うかの如く取り込んでいく『一を聞いて十を知る』、そんな言葉を体現するような『天才児』。加えて言えば容姿もひどく端麗。

アスカの場合は、ネギには遥かに劣るものの『魔力量』は一般魔

法使いより十分にある。魔法学校の科目には、魔法歴史学、魔法倫理学、錬金術、薬草学、基礎魔法学、数学に国語、社会に理科がある。そのうち、魔法とは関係ない四科目は国の違いはあれど、それほど難しくはなく適応は簡単だった。その分、魔法に全力を傾けられるので周りと成績や理解に差が出るのは半ば当たり前の結果だ。

アスカは前世の知識分だけ周りより出発地点と歩みが速いだけで決して『天賦の才』は持っていないにしても、周りには偉大な父親の跡を継げられるような、誰もがそう期待してしまうような『天賦の才』を二人は持っているように見えた。

そんな子が、誰一人として友人がおらず一人ポツンといたら、周りの人間はどう思うのか？

誰もが才能に嫉妬し、持って生まれた凡人との壁を実感するだろう。

勿論、そんな思いを抱いたところで何にもならないことくらいは分かる。でも……だからといって割り切れる人ばかりではない。

相手が異性や年の大分離れた人なら、まだその人に憧れや好きという気持ちになっていくかもしれない。けれど、どれだけ努力しても、頑張っても、死に物狂いになっても決して届かない。やるだけ無駄、意味がない。そんな思いを常に抱かされたら、想いは悪い方向にしか向かない。

更にナギのように『英雄』でも何でもないくせに、ただその子供というだけで目に見える形で贔屓されていた。魔法学校は全寮制で誰かと同じ部屋にならないといけない事になっているのにアスカとネギは一人部屋になっている。

さらに他の子なら怒られるのにある程度の我侭は通り、外泊するのだって届け出が必要なのに、二人にはそれが必要無い。

分かりやすい例を挙げるなら、ネギが事前の届出なしでネカネのところに行きたい時に行っていた。というより、もはやネカネの部屋で生活しているとすら言っていいほどに入り浸っている。

各教師達も二人に対してだけは他の子と違う対応するから、悪意が形となって動き出すのにそう時間はかからなかった。

幾ら魔法学校であっても集団の集まりに違いない。人が集まれば思いも集まる。人は様々なものを欲する。金に権力、地位や職。それらを手に入れられる人間も居れば、失う人間もいる。夢を叶える者も居れば、夢を散らせる者がいる。失った人間は、夢を散らせた人間はこう思うだろう。『憎い！　妬ましい！』と。

世の中に本当の意味での平等なんてものは存在しない。持っている者と持っていない者というのは必ず現れ、格差が生まれる。これは魔法に限った話ではなく、どんなことにでも言えることだ。

人は常に自分と他人を比べて見てしまう、優劣をつけたがる生き物だ。力ある者は無い者を見下す、無い者はある者を妬む。これはどうしようもないことだ。

これで二人が社交性があって、周りと仲良くする気があったなら別であっただろうが、どちらも周りに目を向けている余裕などなかった。アスカは直接的な力を求めて学校にいる間は魔法を、それ以外では忍術の修行ばかりをしているので他の人に付き合っている時間はない。ネギは図書室で本の虫となり、時間があれば休憩時間で

も本を読んで魔法を勉強している。

そのような態度では周りと仲良くなれるわけもなく、二人はやがて孤立化していった。その様子は学校中に広まっており、二人に好意的な生徒は片手にも満たない。特に上級生になるほどこの反感は顕著に現れていた。

魔法学校の在学期間は飛び級という例外を抜かせば七年で卒業する。大体、入学するのが五歳前後なので、卒業する頃には十三歳ぐらいになっている計算になる。日本でなら十三歳は中学校に通うぐらいの年齢になっている。

それぐらいの年齢になれば、外の世界や自分の能力について客観的に見れるようになってくる。自分は子供ではないと思い始めているが、周囲からは大人と認められない鬱憤が溜まる。自我の芽生え、進路の選択、大人や社会との葛藤がある時期でもあり、不安定な時期でもあるので無軌道に走るケースも多い。

自分の限界、周りの評価、そういうものに気付き始める。幼い頃は純粋に見れた夢も色褪せ、諦観と共に理解する。自分たちはいくら『ナギ・スプリンフィールド』を、『立派な魔法使い』を目指そうとも辿り着くことはできない。才能が、素質が、能力が、自分の限界を悟らせてしまうのだ。

だけど、長年追い求めたものをそう簡単に捨てられるものではない。ある者は自分にはもっと先があるのだと信じて鍛錬を続けた。ある者はすっぱりと諦めて別の道を探した。、ある者は認められずに自分を、他者を、周りを責め続けた。そして、ある者は認めることも出来ず、他者に八つ当たりをして溜め込んだものを紛らわそうとする者がいた。

メルディアナ魔法学校の上級生たちが取ったのは最後だった。

最初に彼らが標的に定めたのは、ナギの生き写しでアスカよりももっと贔屓されているネギ。だが、この動きは事前に察知した魔法学校の先生や校長がその動きを潰した。彼らにもある程度、こういうことが起こるであろう予測があったのだ。世の為、人の為を謳おうが魔法使いも所詮は人間、こういうことは十分に起こり得ると。

この件は、本人やネカネたちにはそのことは伝えられることはなかった。伝えても本人たちが気に病むだけで仕方のないことだから。

ネギを標的にすることを潰された彼らは慎重になり、次の標的であるアスカに狙いを定めるも直ぐには動かなかった。このことで校長たちは安心して警戒を緩めてしまう。

ほとぼりが冷めるのを待って、警戒が解けたのを確認した彼らは実行に移した。

ここでアスカが抵抗するなり、校長に告げ口なりすれば良かったのに碌(ろく)に反抗もしなかった。結局はただの八つ当たりだと理解しながらも、アスカはこれを自身に与えられた罰だと考えた。

後悔する、罰を与えるという行為には心を休ませる意味がある。とりあえず後悔だけしておけば、今目の前にある問題から逃げることができる。罰を与えられれば自分は償ったということになり、罪が逃れることができる。悪いのを全部、昔の自分にしてしまって、だからそれは、とりたてて自責ってわけではなくて、後悔している間は正しい自分でいられた。

徐々に彼らの行為はエスカレートして、周りの者たちも勘の良い者は気付く者も出てきた。だが、誰もアスカを助けようとしない。虐めを止めようともしない。

気付いた数人の生徒たちは下手に関われば、自分も標的にされるから助ける義理もないと考えた。自分で何とかしなければ意味が無い。結局のところは他人事だ。自分が優先しなければならないのはそんな何の関係もない他人の事か？

魔法学校は結界に守られたイギリス山村の中にあって、卒業生も、年に数人だけと生徒数はそれほど多くない。虐めをしていたのが最上級生や上級生で固められていたのもある。校舎の割りには生徒数が少ない学校では当然、上級生の力が強いのは必然で、基本的に寮生活なので逆らうことは珍しい。

これがいい判断なのだと、深い心の底で言い訳を繰り返して関わろうとしない。能力や優遇に対して嫉妬や妬みの感情があったのも間違いないだろう。

集団の中に生まれる集団心理というのは恐ろしいもので、それまでは確実にあった筈の倫理が、綺麗さっぱり吹き飛び、反対意見も出ない。あってもそれすら飲み込んで、ただ暴走する塊になってしまう。

そして何か切っ掛けが無いと止まれなくなる。責任の転嫁というものもあるのだろうが、場の空気もある。

まるで雪だるま式に増えていくそれは留まる事を知らず、そぐわない対応をしたもの諸共に巻き込んでいく。無事でいるためには、その玉の奥に引っ込んで上手く立ち回るしかなくなるのだ。

タイミングが悪かったのもある。二人が魔法学校に入学してから数ヶ月経ち、基礎魔法の行使に入った段階でアスカを取り巻く環境はガラリと変わっていた。

火よ灯れ（アールデスカット）という一言で火を灯すことが出来る初歩の初歩は問題なかった。

だが、どれだけ試してもアスカには精霊が関わる極簡単な基礎魔法が使えなかったのだ。どれだけ時間をかけても、どれだけ魔力を込めても結果は変わらず、発動すらしない。すぐさまされた調査で判明した事実は、「紅き翼」の一人タカミチ・T・高畑と同じく、生まれつき呪文の詠唱ができない体質とは微妙に違うということだけ。使えないのは精霊が関わる魔法だけで、身体強化などの魔法は使えるのだから。

だが、アスカには大凡の予測がついていた。純粋に精霊を行使する魔法が使えないのは、考えてみれば当たり前のことで、個我のない精霊たちよりも遥かに強い意志と力を持つ存在（王藻）がアスカの中にいるのだから、精霊が関わる魔法を使えなくて当然なのだ。

アスカに精霊が関わる魔法が使えないと分かると周りの対応はガラリと変わった。特に『英雄の息子』という最初の期待が大きかったせいもあるのか、特に教師陣の落胆ぶりは酷いものだった。酷いものになると、双子ということでネギと比べて「優秀な兄と比べて弟は……」とよく陰口を言われるようになっていた。

酷い物になると、「出来損ないの弟」とアスカは面と向かって言われることもあった。

年を経て教師や大人になった人間の、結局立派な魔法使いになれないと諦めた者達のあの時の自分・今の自分にこれだけの才覚があれば、という思いの果てに生まれた恨みの矛先がアスカに向かったのだ。

このように止めるべきはずの教師がアスカを重視せず、さらに自己保身を優先して問題視されることを怖れて校長に全く報告しなかったのだ。

教師たちは現場を目撃すれば注意はするがそれ以上のことはしない。ネギほどアスカに感心を持っていない彼らは踏み込んでまで止めようとする者は一人もいない。そこら辺、虐めをする彼らも人を選んでいるというべきか踏み込んできそうな教師が来ると現場を隠していた。

どれだけ残酷なことをしても、普段贔屓されている分と相殺される。いや、まだまだ足りない、と彼らはそう思っていた。大人になりきれない子供ゆえの無思慮ゆえの残虐さ。アスカは、魔法学校に蔓延るそれを一身に受けていた。

「帰ろう……」

陽が落ちてきて暗くなってきたのを感じて、ノソリと起き上がり誰に言うことなく呟く。服についている土を払い、ゆっくりと歩き出す。学校の直ぐ横にある寮に入り、階段を登って部屋に向かう。

「……」

途中で他の寮生と擦れ違うが誰も彼もがアスカと決して眼を合わせようとせず、話しかけようともしない。服についた汚れや僅かな

血の跡に何があったのかを理解しながらも、自分の罪を認めないように、見たくないと言わんばかりに眼を反らし続ける。彼ら、彼女らにも自分が悪いことをしている自覚があるのか、誰もアスカと目線を合わせようとしない。

アスカには、虐めが始まってからネカネ以外の人間と事務然としたもの以外で最近碌に会話を交わした記憶がない。

虐めの主導者達が男子生徒というのもあって、男子寮では半ば公然の秘密状態になっている。女子寮や女生徒の間であまり知られていないのは、校長には絶対に話が行かないようにネカネ、アーニャと、ほとんど女子寮で生活しているような形になっているネギがいるためである。

他の生徒に話しかけても最初に総無視された時は慌てたが、馴れとは恐ろしいもので、感情が麻痺してきたのか、それほど哀しいとも思わない。

痛みになれることはないが痛みは徐々に耐えられるようになってきている。毎日、毎日、馴れるはずの無い痛みに耐え続けて、人間とは凄いもので、どんな状況下でも馴染めるようになっているのだとアスカは自分自身の体に妙な感心を抱いた。

「痕……消えないな」

寮の自室に入り、髪に纏わりつく土を洗い流すために服が濡れないよう着ていたものを脱いだアスカの上半身は痣だらけ。顔への外傷は見られないものの身体は痛々しいほどの痣がある。

グロテスクで紫色をしていて首から下はアザで埋め尽くされてい

るほど大量にあり、常人なら眼を背けたくなるような光景があった。

殴る蹴るの暴行は日常茶飯事。酷い時には魔法を使われて火傷を負ったこともある。流石に火傷はやりすぎたと思ったのか拙い治癒魔法をかけられたが、アスカの身体には今なお色濃く、その痕が残っている。

部屋の隅にある小さな救急箱から消毒液を取り出して、今日付いた傷に塗っていく。するとチクリとした痛みがアスカを襲い、歪に歪んだ苦笑を浮かべる。

「……ッ！　人間ってなんで痛みには馴れないんだろう」

大まかに分類すると人間には二つの生き方がある。

環境からの抵抗や圧力――――即ち逆境に直面した時、かえって闘志を燃やして挑んでいくタイプと、争いを避けて無難な道を選ぶタイプである。

つまりタカ派とハト派、二つの戦略がある訳だが、このうちどちらがより優れているとは一概に言い難い。勝てる見込みのある時だけ闘い、闘っても利益のない時には退く――――そんな具合に状況に応じて二つの戦略を使い分けられればそれが理想だ。

しかし、人が何かを求めて生きようとする以上、そう上手くはいかないのが現実である。不利な闘いを強いられるときもあれば、その逆の場合もある。状況判断を誤ることだってあるだろう。

今のアスカの場合はハト派に近いものがあるが、結局のところは逃げているだけだ。

「……ん？」

薬を塗り終えて別の服に着替えていたところでコンコンとドアをノックする音が聞こえた。

自分の部屋を尋ねる人間など、この魔法学校には片手の指の数にも足りない。そして、こんな時間に訪れるとしたら更に絞られる。アスカの脳裏に浮かぶのは一人の知り合いの姿。

浮かんだ姿に苦虫をすり潰したような表情を浮かべ、待たせないように髪をパッと流し、途中だった着替えを直ぐに終わらせてドアに向かう。

「――――――――――どうしたの、ネカネ姉さん？」

今、もっともアスカが顔を合わせたくない従姉ネカネが急いで開けたドアの向こうに立っていた。

「顔を見たくなって。元気、アスカ」

アスカの問いに疲れた表情をしたネカネは身を案ずるように尋ねた。

だが、目の下の隈や僅かに扱けた頬は化粧で隠せても、力のない目は隠しようがない。

兄弟が魔法学校に入学してから、ネカネは多忙な日々を送っていた。自身の学業、ネギとアーニャの世話と疎かにできないものを二つも抱えていた。唯でさえ二人の世話もあって自分のことに時間を

かけられないのに、そこに二人と距離があるアスカの世話まで焼こうとすれば負担がネカネの身に圧し掛かる。

祖父である校長は普段通りの業務と事件の後始末、石化した村人への対応、魔法世界への報告、石化から回復させる手段の模索、とやることが多くてとてもではないが子供たちの面倒を見れるはずがない。故に他に頼れる親類のいないネカネは、子供たちの世話を一手に引き受けなければならなかった。

これで二人とアスカの仲が拗れていなければ、ここまでの負担にはならなかっただろう。アスカはそうでもないのに、ネギとアーニャは事件直後にあった出来事で気まずくなり、一緒にいるどころかアスカの近づこうとすらしない。嫌っているわけではないが自分の間違いを認めることが中々出来なかった。

――――――――――ネギは謝って自分が父から譲り受けた杖を取られることを怖れた。さらに自分だけ助けられたという負い目も持っており、アスカにどのような顔をしたらいいのか分からない。

――――――――――アーニャは母の最期になるかもしれない言葉を伝えてもらったのに、「アスカがいなければ母は無事だったかもしれない」という思いに囚われ、それが間違いだとは理解できてもアスカを直視できない。

子供染みた思いだとしても重大なことで、二人が心に折り合いをつけるには長い時間が必要だった。折り合いをつけた頃にはアスカが傍にいないのだとしても。

それらから目を逸らすようにネギが寝食を忘れるほどに魔法の勉強にのめり込んでしまったのも、ネカネの負担に拍車を掛けた。ア

ーニャがついているといっても、強制力はなく、親がいない寂しさをネギで埋め合わせるように依存して、なし崩し的に同行するので止めるのは必然ネカネの役目になる。

少しでも目を放せば無理をするネギに集中して、曲がりなりにも上手くやっている（ように見える）アスカへの注意が減ってしまうのは当然だった。さらにネカネが疲れていることに気付いたアスカに「自分の世話はいいから」と言われてしまったのもある。

アスカが上手くやっていることも、自分の世話はいいと信じてしまったことも全てが間違いだと知ったのは、大分後になってからになる。

「大丈夫、何時も通り元気だから」

「そう、なら良かった」

慣れた風にやり取りをしながらも、アスカは自分の言葉が空虚であることを感じていた。

確かに元気ではあるが、無事だとは言い難い状況では空元気でも言葉には、聞いているものに説得力というものを感じさせない。それを感じ取れていない段階で、ネカネがどれほど疲れているかが分かる。

「ごめんなさいね。何もしてあげられなくて。あ、そうだ部屋の掃除してあげましょうか――――――――」

いくら寮生活でも、共有スペースは寮長がやってくれるが、自分の部屋の掃除はしなくてはならない。自室は個人のスペースである

ためプライバシーが尊重されている。

「昨日したから綺麗だからいいよ。ネカネ姉さん、化粧で隠しているつもりだろうけど疲れてるでしょ。また無理して時間を作ってきたね」

「う！？」

ネギとアーニャに掛かりきりで、アスカには何もしてあげられないことを謝り、やれることをしようとするも一息の元に頓挫した。しかも、化粧して隠しているのに疲れていることがバレていた。ネギには前から欲しがっていたアンティークの魔法具を与えてそれに熱中している間にやってきたわけだが、アスカには見抜かれている。

「はぁ～、前にも言ったけど僕は大丈夫だから兄さんやアーニャ姉さんを見ててあげて」

もはや魔法学校に入学してから何度繰り返したか分からないやり取りを続ける。

「そうはいうけどね、アスカ――――――――――」

アスカの言葉に込められてた裏の意図にすら気づけないネカネは従姉として、年上として、保護者としての義務や権利など諸々の理由を胸に抱きながら面倒を見ようとして、

「いいから！……ね？」

「――――――――――分かったわ。絶対に無理をしないこと、何かあったら言うこと。これを守れる？」

アスカの強い拒絶というべきか、嘆願というべきか願いに、深く息を吐きながらこれだけは譲れないと何かあったら直ぐに連絡するように言い渡す。最後が問いかけになっているが守れないのならこちらも引く気はないという意思が見て取れる。

ネカネ自身も自分が疲れていることを自覚している。だからといってアスカを疎かにするつもりはないが、現時点ではそうなっているので改善したいとは常々思っているのにままならない。

アスカが精霊魔法を使えないと分かってからは、できる限り傍にいようとするも学校では何故かそういう機会に恵まれない。アスカを虐めているメンバーが妨げているからだ。

アスカの虐めの理由にネカネの存在が関わっているというのも最悪の皮肉だろう。本人が知ったら、もしかしたらアスカに詫びて首を括ったかもしれない。ネカネ自身は、自分が特別だと思っていない。成績優秀、容姿端麗、性格も良く、人付き合いも良くてパートナー候補として引く手数。もしかしたらスプリングフィールドという名前の所為というのもあるだろうが、思春期の少年たちに取ってネカネは偶像（アイドル）に近い。そんな彼女がスプリングフィールド兄弟に無心の愛を注ぎ、その中でも男子寮まで来てアスカの世話を通い妻のようにしているのを見て平静ではいらない。ネカネ部屋に行っているネギよりも、アスカの方が愛されているように周りに見えるのも皮肉とは言えば皮肉な話だ。

自分の行動が、存在がアスカの首を絞めていることを知らないネカネは悩んだ。

何時ものように何かをしに来て、先回りされて何も出来ず、なら

ば一緒にアスカといようとしても疲れた自身を癒すようにマッサージなどをしてもらって眠りこけてしまい、逆に世話をしてもらうという本末転倒な結果になっている。

「守れるよ。ほら早く行ってあげて」

「絶対よ？　――――――――――じゃあ、また」

力強く頷いたアスカを信じることにしたネカネは、名残惜しげに幾つかのことを言い含め、何度も振り返りながら女子寮の自分の部屋へと帰っていく。結局、最後まで二人は互いに気遣いあいながらも、擦れ違い続けた。

完全に姿が見えなくなるまでネカネを見送ったアスカは、ドアを閉めて寄り掛かるようにズルズルと座り込む。

何が大丈夫なものか。もはや学校ぐるみとすらいっていい虐めに合い、心身ともに衰弱していながらも心配をかけたくないからと嘘を言って誤魔化した。

ネカネにありのままを話せば、校長に話が言って事態は簡単に解決したかもしれない。だが、あんな疲れ果てたネカネにこれ以上の苦労をかけられるはずがない。自分のことは自分でしないといけないとアスカは自分に言い聞かせ続けた。

――――――――――心の底で助けてと泣いている自分には蓋をして。

第五話　　追い詰められる少年（後書き）

次回の更新は、明日の午前０時に更新したいと思います。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

活動報告で修正や経過報告を書いてたりしています（最近、怠け気味ですが）

第六話　　壊れた少年（前書き）

連続投稿の二話目です。

それでも一万文字オーバーですが。前回同様に暗いの注意を。

文字数は１２４４６字です。

それではどうぞ！！

第六話　　壊れた少年

どれだけ我慢しても傷は増え続け、血は流れ続ける。アスカの心が破綻を迎えるのにそう時間は掛からなかった。

考えたくなかった。何も考えず、何も感じず過ごす為の逃げ道を探していた。罪悪感はそれほどにアスカにとって絶望的なものだった。

その中で始まった虐めは逃げ道としては最適ではあっても、同時に心を傷つけていくことは当たり前だった。虐めに耐え、心は閉ざすことで寂しさや悲しみ、不安に潰されないようにいろんなことを諦めていた。

こんな想いをしたくない。何の為に生まれてきたのか。どういう意味で生まれてきたのか。少なくとも――こんな想いをするためではない。こんな想いをするくらいなら、生まれてきたくなんかなかった。こんな惨めな、死んだほうがよっぽどマシな人生なら、生まれてこなければよかった。

生きていることに耐えられなかった。そして行き着いた答えは――終わり。

それは避け続けた答え。何故なら、その答えが最後だから。しかし、今のアスカには避ける理由は見当たらない。苦しみしかない過去、変わらない今、やらなければならないことの困難さ、生きていても降りかかるであろう理不尽な未来。

終わり――――――――――それは何と甘美な望みだろうか。

それが卑怯で弱虫でも、もう全てから自由になりたい。それだけ……ただ、それだけが今のアスカの希望だった。

それほどにアスカの心は折れており、追い詰められていた。

玉藻は何も言わなかった。いや、言えなかったというべきか。自分を助けなければ間違いなく違ったであろう運命。そこに変わってしまった元凶である自身が口出す権利はない。アスカは全てのことが、生きていること自体が間違いに思っているのに、玉藻と出会わなければ良かったとだけは、全然、思っていない。それが嬉しくもあり、いっそ憎んでくれた方が楽なのにという思うのに、自分もアスカと出会わなければ良かったとは思えない。だから、アスカが終わらすというなら自分もそれに付き合う、そう考えていた。

分厚い雲が瞬く間に光る月を隠す空の下。

アスカは寮を抜け出して夜の闇の中、魔法学校の屋上のフェンスを超えた向こう側にいて縁に足をかけている。何をしようとしているかなんて、この場面を見た者であれば簡単に推察できる筈。

後、３０ｃｍも踏み出せば終わる。終わることが出来る。

（よし……）

心の中で決めて踏み出そうと足を踏み出そうと……。

「！？」

足を踏み出そうとしたその時、ゾクッと背中に走るものを感じ、

どうしたのかと思った時には腕が震え、足が戦慄き出す。

それと同時に突然、今まで閉ざしていたあらゆる感情が喚き出して汗が噴出する。

「ハッ……いや……行くんだ」

みっともなく震えながらも自分を鼓舞するように言葉を口にするが足は前に行かない。

「終わるんだ……こ……ここに残る理由なんて、な、何もないんだ！！」

しかし、足は動かず、一つの感情と脳裏に映像が浮き上がる。感情は死に対する恐怖。映像は自分が死んだものが鮮明に浮かぶ。

「ハッ！！」

それを自覚してしまい、過呼吸のように息を乱して後ろの柵に寄り掛かり、震えながらも柵を越えて安全圏に避難する。尻から落ちたその動きは無様で、滑稽で、とても見ていられない。

「む……無理だ……」

振り返って先程、越えた柵を掴んで搾り出すような言葉と共に視界が曇った。何故だろうと、と思ったアスカは手で目元を触れてみた。

湿っている――――。

自分は涙を流しているのか。決して泣くまいとしていた自分が。
常に自分を殺していた自分が――――――――――。

「――――――――っ。――――――――ぁぁ」

何一つ決断などできていなかった。死の決意など出来るはずもない。誰かのためや何か理由があったわけじゃない。ただ、何よりも死ぬことが怖かった。

辛い現実を生きていくことよりも死ぬことの方が怖かった。ただそれだけの話。

圧倒的な死の感触。

前世の終わりに経験したらしく、記憶、知識として残っていなくてもその強烈な印象だけが残っている精神は、身体は容易く恐怖に蝕まれた。

死を求める者などいない。死を望む者などいない。

死を選ぶのは、もうそうするしかなくなったがための絶望と逃避であり、初めからそれを願い望んで死に走る者などいはしない。ならば死にすら絶望した者はどうすればいいのか。

「――――――う――――――うう――――――誰か――――――助、けて――――――」

膝をつき、柵に縋って声を押し殺して泣く。そして今世では初めて助けを求める声を発した。しかし、それを聞き届けるものは、この場には誰もいない。

「（我には……何も出来ぬのか）」

玉藻だけが唯一聞いていたが、アスカの中から出ることができないので何もできない。この時ほど玉藻は自分が外に出れない事を、無力を、己の存在を呪ったことはない。自分さえ、アスカの前に現れなければ輝かしい未来があったのではないか、そんな思いはずっと先まで玉藻が抱える悩みとなる。

１０～１５分ぐらい、そのままの姿勢でいたアスカは、一人で立ち上がり足取りも重く校舎の中に入っていく。

ネカネなどのアスカに近いに人間が、その前髪に遮られたアスカの眼を見たら絶句するのは間違いない。

そこには何もない。喜怒哀楽といった感情どころか、希望も絶望もない。諦める、失望する、感情を隠す、そういったマイナス面の思考すら存在しないのだ。アスカの瞳にあるのは全くの虚無。良識的な人間がいれば一体、どうすれば、五歳にも満たない子供にこんな顔をさせられるのかと言葉を失い、そうさせた人間や周りの者達に怒りを露にするだろう。

だけど、それを見た者は――――――――――誰もいない。

「強く……何よりも、誰よりも強く」

死ねなければ……死ねないなら、生きるしかない。その為には強くならなければならない。アスカはつらい現実から目を逸らすように、ただそれだけに集中した。

それに集中することで耳障りな声は消え、強くなる事に集中した。色んな物が消え、頭の中は強くなる事だけになった。

人は許容以上の精神的負荷を負うと、それを逃がす為に逃避行動を取ると言う。軽いものでは無意識な落書きや貧乏ゆすりなど、自身に単純な刺激を与え、ストレスから気を逸らす。

アスカの場合もそのケースに近く、強くなるという作業にだけ集中した。逃避とも言える行動がアスカを驚異的なスピードで力をつけていったのは皮肉か。

この時点でようやく影分身を習得していたので、幾つもの影分身を生み出し、学校の図書館で知識の習得と魔法の習熟や忍術の修行を行って本体は只管、肉体を苛め続けた。

――――――――幾千、幾万も汗を、血を、涙を流して磨き続ける肉体。睡眠を削り、気が狂うほどに机で古典書に向かい合い、何度も読破した数々の魔道書の山。

そのどれもが一筋縄にはいかない努力の賜物で、人によっては狂気とも言える行動である。

狂気の一例を挙げると、分身体に口と鼻を塞がせ、呼吸の出来ない中で五十キロの重りを五十回捻るというものがあった。

口と鼻を塞がれているので完全に息ができないので、五十回捻るというのは相当素早く捻らないと呼吸ができずに最悪の場合は死ぬ。

「う……！　うぐ……！！」

分身は決して五十回に達するまで手を離さなかった。アスカは脳や筋肉に酸素の供給が断たれて筋肉が痙攣し、眼は白目を剥き、形相は夜叉のようになる。

「うが…！　ぐがっ……！」

視界から景色が消え、ブラックアウト寸前。意識して動くという代物では無い。全て無の中の作業だ。

「はい、五十回」

「ガガガッ！　ガガガッ！！」

分身の軽い言葉共に呼吸を留めていた手は離れ、崩れ落ちたアスカは忘我の境地の中でやっとの呼吸を始める。終わった後の呼吸は凄いの一言に尽きる。その音はコンクリートまでぶち抜く削岩機のような音そのもの。

傍目にはこれは訓練などではなく、幼児虐待と言っても可笑しくは無い。これを一日十本やっていると知ったら、どんな人間でも卒倒するのは間違いない。

これを考案したアスカの考えは、体の中にある速筋を鍛える。速筋はスピードとパワーの源だ。筋肉に速筋と遅筋があって遅筋は運動を長く持続させる筋肉だが、速筋は一瞬にしてパワーが最大に達するものだ。

その速筋運動には無酸素的代謝……酸素を必要としないエネルギー機構を持つ（エネルギー源はグリコーゲン）。遅筋運動は好気的代謝……酸素を必要とする。

息をすれば遅筋も少しは働き出す。ならば純粋に速筋だけを鍛えるには口を塞ぐしかない。

当然、こんなことが毎回達成できるとは限らない。回数に達せず、酸素不足で意識を失うこともかなりあり、そのまま呼吸が止まったのは一度や二度ではない。

まだ全力を尽くしてはいない。まだ余力が残っている。この程度でくじけるな。何者にも屈しない力を。誰にも負けない強さを。もはや狂気とすら呼べる強迫観念に突き動かせてアスカは【力】を【強さ】を我武者羅に求め続けた。

これほどに危険なこと、いやもっと直接的に命に関わるようなことすら毎日、玉藻の静止も聞かずに続けていた。

身体を、精神を省みずに鍛え続ける日々。ともすれば拷問とも思える修練を繰り返し、親しい人間とはほとんど接触しない日常。

知識として知っているだけでは意味のない戦闘の方法。筋力、骨格、反射、それを使えるように体を作り上げ、更に気の遠くなるほどの反復練習を繰り返して……体にそれを叩き込まなければ意味が無い。

天才には色々な定義があるだろうが、かつて「本当の天才とは生まれながらに備わった優れた才能のことではない。努力し続ける才能のことを言うのだ」と言った者がいた。そういう意味では間違いなくアスカは天才だろう。それが本人には不服にしても。

毎日、修練の果てには立つことさえできなくなり、吐く物もなく

なって、手も上がらなくなっている。そして毎回、意識を失うように眠り、分身に寮まで運んでもらって朝までの間に玉藻の回復力で体を癒す。朝起きる頃には、万全とまではいかなくても修行することができるほどには回復しており、また繰り返す。修行という言葉すら生温い地獄をアスカは続けた。

逃避と言っても一日の半分をトレーニングで支配して、それを毎日こなしている。オリンピック強化選手でも三日と経たずに精神と体を壊すであろう……幾らなんでも子供では、とても耐えられぬ特訓だ。体中は常に疲労や怪我でガタガタ、影分身の多用によって精神疲労による負荷で頭は常にフラフラ。

ギリギリ持っているとも言えるが、ここまで酷使すれば普通はとっくの昔にアスカは壊れている。そうなっていないのは玉藻の力の恩恵で本当にギリギリのラインで壊れずに済んでいるだけに過ぎない。

普通の人間ならば、とうに精神は崩壊して壊れているだろう。アスカにしたところで復讐という目的を拠り所にすることで、辛うじて自己同一性（アイデンティティ）を維持しているにすぎない。いや、もしかしたらゆっくりと壊れていたのかもしれない。

それが苦痛だと思う事も、破綻していると気付く間もなく、「強くならなければならない」という強迫観念に突き動かされてアスカは地獄のような毎日を繰り返した。

その【強さ】にすら裏切られることを知りもせず。

悪魔襲撃事件から一年経ち、事後処理がようやく落ち着いてきた頃、メルディアナ魔法学校に『紅き翼』の一人、高畑・T・タカミチが訪れた。本人が魔法世界でかなりの有名人ということもあって来訪は極秘にされ、知っている者は教師の一部と校長のみ。

時期は折りしも長期休暇の前日で、寮にいる生徒の大半がバタバタと家に帰る準備を進めている最中の出来事であった。

皆が慌しく準備をしている中で、まったくその様子を見せずに普段どおりにしている（ように見えるが修行という名の肉体に対する拷問を行っている）アスカは校長に呼ばれて校長室を訪れていた。

「やあ、君が……アスカ君だね」

「あなたは……『紅き翼』の高畑・T・タカミチさんですね。初めまして、知っておられると思いますがアスカ・スプリングフィールドです」

「あ、うん。初めまして」

互いの初対面はそう悪いものではなかった。

高畑は五歳にも満たない子供が自分のことを知っていて、ここまでキチンとした挨拶を出来るとは考えていなかったので若干慌てて挨拶を返す。先に会ったネギが年相応に子供らしいところがあるのに、アスカにはそれがないことに戸惑いを覚えていた。

アスカは初対面なのに馴れ馴れしい人だとは思ったが年の差が倍

以上あれば、こんなものだろうと気にしないことにした。それよりもなぜ有名人が自分に会いに来たのか、それを図れずにいた。だが、伸びた前髪の隙間から見えた（わざと見えるように動かした）素顔に高畑が僅かな驚きを示したのを見逃さなかった。その反応を見て、もう人に見せるのは止めた方がいいと分かり、目元を隠す必要があると考えた。

傍目に見ていた校長には奇妙な光景に見えたが、アスカの顔色が悪いように感じられた。髪には艶がなく、僅かに頬が扱けたように見えて、気になったので後で何かあったかと聞いてみようかと考えていた。

「何故、あなたほどの有名人が僕に会おうと？」

とても五歳未満には満たない子供が質問する口調と内容ではない。が、アスカの質問で自分が来た目的を思い出した高畑の動揺は収まったようで呆けた顔を引き締めて手を差し出した。

「僕と友達になってくれないかい？　アスカ君」

前々から関東魔法協会、近衛近右衛門を通して高畑が二人との面談を望んでいる事を打診されていた。

悪魔襲撃事件からもう一年経っているので二人の間で黙って見守っている校長も、二人がサウザントマスターの関係者と会っても問題ないと判断したので今回の件を了承した。

来る前にアーニャと一緒に外で遊んでいたネギと会ったので、続いてアスカを呼んだというわけだ。

「高畑さんは――――――――――」

「タカミチでいいよ。友達なんだからね」

何かを聞こうとしたアスカを遮って高畑が名前で呼ぶように言うも、了承もしていないのに勝手に友達扱いされていることにアスカの表情が不機嫌になるのを校長は見逃さなかった。

自分に差し出された手をじっと見つめていたアスカは、高畑の意見を了承したわけではないが出されたものは仕方なく応じるように握るも直ぐに離した。

「失礼ですが、あなたと父の関係は？」

それは果たしてどのような意図を持って聞いた問いなのか、校長にも分からなかった。今はまだ、アスカの意図を読み取れない。

「友達……というものではなかったかな。僕は魔法使いとしては落ちこぼれだったからね」

昔を思うように目を細めた高畑はアスカの問いに答える。最後の答えには苦笑が混じるものの、その目には確かな憧れの光が校長にも見て取れた。

「君のお父さんは僕の憧れだった。僕はあの人に……いや、あの人たちに近づくために僕は強くなった。まだまだだけどね」

ここではないどこか、アスカではない誰かを見ながら紡がれた高畑の思い。左手をポケットに、右拳を握って胸元に上げた仕草と表情から、本当に憧れを持っているのだと誰もが分かる。

「彼らは今も僕の憧れであり……目標さ」

こういう真っ直ぐな思いは見ていて気持ちがいいと二人の横で聞いていた校長は思った。

事前に高畑から聞いたネギと同じように父がそう思われていることに喜びを示すかと考えた校長の思いは、アスカの顔を見た瞬間に儚くも崩れ去った。

別段、アスカが何か表情を浮かべていたわけではない。が、そこにある感情を名づけるなら間違いなく『失望』を表していた。

「一つだけお聞きしたいことがあります。よろしいですか？」

「うん？　構わないよ。それにもっと砕けて話してくれても――――――「あなたは」」

固い口調が変わらないアスカに、友達なのだからもっとフランクになってほしいと言おうとした次の言葉は、途中でアスカに遮られて途切れた。

「あなたは、僕がナギ・スプリングフィールドの息子でなくても友達になろうと言ってくれましたか？」

アスカが聞いた問いはとても、とても単純。例え親のことが関係なくても友達になろうと思ったか、その一点だけ。

「「――――――――――――――――！？」」

当たり前で、純粋で、そしてあまりにも残酷な問いに、問われた高畑も傍で聞いていた校長も表情に驚きを隠せない。

ナギ・スプリングフィールドの息子だからこそ、高畑は二人に会いに来て、友達になろうと言ったのだ。でなければ、他の生徒と同じように魔法学校に来たことすら知らず、大体の人間は一生接触すら持たないだろう。事実、高畑がこの学校に来たことを直の関係者しか知りえないことなのだから。

「それは……」

高畑が直ぐに答えられずに言葉を濁してしまったのは、もし、目の前の少年が彼らの息子ではなく赤の他人だった時のことを考えてしまったから。

そして、それが何よりも雄弁に高畑の心情を吐露してしまうのだと本人は直ぐには気づけない。

「……」

質問をしたアスカ当人は直ぐに気づいて、やはりという思いを強くする。

結局のところ高畑が会いに来たのはネギやアスカという個人ではなく、『彼らの息子だったから』という思いが先に来ているのだと理解してしまった。故郷が壊滅する前ならアスカも我慢できたものの、今はとてもではないが我慢できない。

「……先程の友達の件についてですがお断りさせて頂きます」

初対面の年上の人を名前で呼ぶつもりは、例え許しが出ようと余程の理由がない限りアスカにはない。

「え？」

どういったものかと悩みだした高畑は、唐突に（高畑主観）言われたことにポケッとした表情を晒してしまう。先程の握手を了承と捉え、ネギのこともあって断られるなど考えもしていなかった。

「それでは……」

「アスカ、待つ――――――――」

思考が回復していない高畑を無視して、それだけ言うとアスカはさっさと校長室を出て行ってしまった。校長が止める暇もない出来事であった。

「どうして……こうなってしまったんでしょうか？」

「……」

アスカの背が消えたドアを五分ほどじっと見ていた高畑は、搾り出すようにそう吐き出した。どう答えたらよいものか分からなかった校長は、悲壮感を漂わせた高畑に何も言えず、校長室は沈黙に包まれた。

高畑は自分の短慮に気づき、謝るために一日時間を空けて会いに行くも、アスカは中々捕まらない。長期休暇が始まって寮のほとんどの生徒が帰省する中で、ネギやアーニャとネカネは校長が買った家に帰ったのにアスカだけは寮に留まっていた。

それと二人とアスカの仲が拗れていることをネカネから相談され、それを切欠としてもう一度ちゃんと話をしようとするも会うことが出来ない。

ネギと遊ぶ傍ら、時間が空いたら何度も会いに寮の自室まで行ってみたが、会う事はできなかった。一晩中、寮の部屋の前で待ったこともあるが帰っては来ず、ようやく自分が避けられていることに気付いたのは滞在期間の半分である一週間が経過してからのことだった。

その日もネギと一緒に滝まで行き、拳で滝を真っ二つにするところを見せて喜んで貰い、そろそろ帰ろうかと言った所で突然校長から大声で念話が来た。

《タカハタ君！　君は今、ネギと一緒にいるかね！！》

《っう！、校長声が大きいです。音量を下げてください。ネギ君ですか？　一緒にいますよ》

校長の念話の声が大きすぎて瞬間的に頭痛を感じて、ネギに悟られないよう程度に顔を顰めて音量を下げてもらうように言ってから、聞かれたネギは一緒にいるのでそう答えた。

《悪いが問答をしとる暇ではない！　街に以前ナギが捕まえた犯罪

者が入り込んだ。恐らく奴の狙いは何処で知ったのかは分からんがナギの息子である二人じゃ。急いでネギを連れて校長室まで来とくれ。ここが一番安全じゃ！！》

《何ですって！　……そうだ！アスカ君は、どうなったのですか？》

犯罪者が入り込んだことに驚きを覚えつつも、ナギの息子というなら自分が会えなかったアスカはどうしたのかと疑問が湧いて念話で校長に問いかけた。

《ワシも捜しておるが見つからんのじゃ。他の者は犯罪者を捜しており手が放せんし、君はネギを連れてきたらアスカの捜索に向かってくれ！》

《何てことだ！？　分かりました直ぐに戻ります！！》

校長の話に衝撃を受けたが、アスカが見つかっていないため、そんな事を言っている場合ではないと持ち直した。今、高畑ができるのはネギを安全圏に届け、一刻も早く自分がアスカを見つけなければならないという使命感を燃やした。

「ネギ君！　悪いけど急いで校長室に行くよ！！」

「えっ何で？　てぇぇぇぇ――――――――――――――――」

直ぐにアスカの捜索に加わるために、声を置き去りにしてネギ君を脇に抱え急いで校長室に向かい全速力で走った。

あの日、校長室で高畑と別れてから徹底的に会うのを避けていた。高畑は二、三日経っても中々諦めず、しまいには寮の部屋の前で待つようになってからは初めての野宿で晩を明かしているため睡眠不足に陥っていた。

しかも、修行は変わらずに続けていたので一週間が経過した頃には心身共に限界が近づいていた。

「ハッハッハッ、どうだいネギ君！」

逃げ回っていたアスカは、高畑がネギの前で笑いながらその拳で１００メートルの滝を真っ二つにしているのをすぐ近くから見ていた。

他の物体　（たいていは生物）　に化ける術であり、上手く化けるのにも「それなり」の技量が必要とされる【変化の術】で、小さな天道虫に化けてネギがいる近くの木に止まっていた。まさか天道虫になっているとは高畑も考えておらず、穏行術も併用した気配を殺したアスカの存在に気づかない。

二人が帰りそうな雰囲気を察したアスカはひらりと飛んで高畑の感知エリア外よりも遠く、念のために五キロほど離れてから術を解いて元の姿に戻る。

「結局、あの人が見ているのはサウザンドマスター（ナギ・スプリングフィールド）ということか」

本人にその気はないのだろうが、ネギを通してその背中に視えるナギ・スプリングフィールドを幻視していると傍で見ていたアスカ

には感じられた。

《主……》

完全に失望して肩を落として自分の修行をするためにその場を離れて移動をするアスカに、玉藻が心配げに声を掛けるもアスカは何も返さなかった。

失望したこと、慣れない野宿による睡眠不足、修行による疲労によってアスカの感覚は近づく人影にすら気づかぬほどに鈍化していた。

「な――――――――――!?」

失意のまま何時もの修行している山まで来たアスカは、突如現れた人影に襲われた。

平時なら気付いた筈だが、高畑から逃げるために連日寮の自室に帰らず、慣れない野宿のため睡眠不足で頭が回らず、接近を許して気付いたら囚人服を着た男に圧し掛かられて首を絞められた。

「ナギィィィ、貴様がああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

「がっ……はっ、ぐぇ……っ！」

男の目は既に正気を失っており、目の焦点は合ってなく口からは涎が飛び散っている。理由は分からないがナギと混同しているようだ。

薬物か何かをやっているのか、どう見ても正気には見えず、その所為でアスカはサウザントマスターに全く似ていないのに混同してしまっている。

男はその顔を憎しみに染め、アスカは強い力で首を絞められ苦悶の声が零れた。

「貴様さえいなければあああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

「っ……あ……あ……ぁ……」

首を絞められているため呼吸ができず、アスカの意識は徐々に薄れていく。

だんだん意識が薄れてきて＜魔力＞による身体強化を行うには集中できず、忍術を使うには両手を使う必要があるのに男の手から離すことは死期を早めるだけ。少しでもチャクラで身体強化して抵抗するが、強化した力でも子供の力では大人の男の力にはとても敵わない。

《主！　主！！》

アスカの危険な状態に気付いた玉藻が、念話で呼びかけるが意識が消えかけていてそれに答える余裕がない。アスカはただこの状況から回避を願い、本能は生存に向けて本人の意思を無視して行動を始めた。

「死ね、死ねえええええええぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！

！！」

自分自身を完全に意思の力でコントロールできる人間というのは少ない。いっそ、いないと言ってしまった方が現実的だろう。

自分は他人の言いなりになんかならないと信じている強い意志の持ち主でさえ、何かのきっかけで心に隙が生まれ、それまで考えもしなかった異常な行動を取ってしまうことがある。

ことに本能、と呼ばれるものは意思でどうにかなるものではない。それが本人の意思に反するものだとしても。

脳に行き渡るはずの酸素が不足して、アスカの意識は既にほとんど失っているに近い。無意識に現在修行中の雷遁を右手に纏い、力を込めるために近づいていた男の首のある場所に意図せず拳を放った。

「がはっ……ごほっ、ごほっ……ハッハッ、ハァハァ……」

拳を放った衝撃で男の体が僅かに浮き、直ぐに男の体の下から抜け出して、起き上がり犬のように舌を出し空気を貪った。

下を向いて空気を貪っていると、上から何か液体が降りかかるが、視界が回復していないため見えない。やがて、呼吸も安定してきて視界も戻ってきた。

薄れた意識の中で右手に初めて感じるそれは重く、深く、熱く……いうならば『生命』そのもの触れた手応えだった。どくん、とアスカの心臓が軋んだ。気付いてはいけない。それが何か気付いてし

まえば――――――――――――――自分は壊れる。そんな予感がした。

「――――――――――――――っ！」

クリアになってきた己の手にヌメリを伴った奇妙な感触を感じた。その生暖かい感触にどくん、と更に心臓が軋む。薄れていた意識が正常に戻っていく。僅かな感覚から精神が乱れて思考が途絶する。

《――――――――――――――！！》

誰かの声が脳裏に響く。だけど、それが誰か分からない。何を言っているのかが分からない。どうして――――――――そんなにも必死なのかが分からない。

まさか、まさか、まさか、まさか、まさか、まさか、まさか――――――。

薄れていた意識が完全にはっきりとして、そこで男が何もしてこないのを疑問に思い、さっきので気絶したのかと下げていた視線を上げると眼前の衝撃的な光景を目前して固まった。

男は気絶なんてしていなかった。男は……死んでいた。

眼前の白黒で特徴的なシマウマ模様……一般的に囚人服と呼ばれる服を着た男は、地面に膝をつき、男は腕をだらんと下に垂らして焦点の合わぬ瞳を宙に向けたまま、空を仰いでいた。そこまではいい。だが、その首にはバックリと穴が開き、今もそこから血が吹き出している。

先程かかった液体は男の血だった。目の前にいたためアスカの体に今も降りかかり続け血に塗れていく。

生存本能に従って意図せず放った雷遁を纏った拳が首に当り、そこで爆発したのだ。喉の付近が穴が開きそこから中身も見えている。どう見ても致命傷で流した血は致死量を越えており、既に絶命している。

ビクビクと痙攣を繰り返し、首から飛び散って自身にもかかっている血の色彩に、起きた事実を認識してしまった。

（……死んでる）

足元の全てが崩れ落ちていく様な、今まで忘れていたモノに圧し潰される様な、二度と自身が今まで居た場所に帰れないと思い、まるで自分が潰れながら奈落に落ちていくようにアスカは感じた。

常人なら目を背けてしまう死体の有様を見て、ゆっくりと認識したそう思った瞬間、音を立ててアスカの感じる世界が壊れていく。

――――――――――大地が揺れている。その振動は尋常ではなく今にも地面が崩れ落ちてしまいそう。

――――――――――空気が重たい。重力が重く伸し掛かって今にもこの身体は押し潰れてしまいそう。

――――――――――風が冷たい。熱を失った風に吹かれていると今にも心臓が凍りついてしまいそう。

それは全てアスカの錯覚だ。しかし、その押し寄せる錯覚はアスカの中では真実のものと成りかけていて、今にも心を打ち砕いてしまいそう。全身に力が入らない。

既にアスカの目に、光は映っていない。ただ、ただ――――――――後悔が流す涙で瞳が濡れていた。

《主――――――――っ！！》

それらを感じた玉藻は、後のことも、自分のことも、無理遣りにアスカの中から外界に出る影響も一切構わずに力任せにアスカの体内から飛び出した。

「主――――――――っ！！」

呆然としているアスカの眼前に二十代前半～後半ぐらいの白い着物を着た金髪美女――――――玉藻が煙と共に出てきた。目の前の死体を見て顔を顰めたものの、何も言わず膝をついて綺麗な着物が血に染まることを厭(いと)わずにアスカを抱きしめた。

玉藻に体内から出られた喜びなどない。今は優しすぎる主が壊れないように、引き止めるように、必死に今に留めようと強く、強く、強くアスカを抱きしめた。

アスカはそれに何も反応も返さず、ただ玉藻の肩越しに自分が殺したモノを無感情に見ていた。

「アスカ君！　無事か！！　……これは、一体……」

「来るな、人間――――――――――――っ！！！！」

そこに高畑が到着し、アスカを抱きしめている玉藻、そして既に物言わなくなった死体を見てアスカに近づこうとするも、子を守る母のように怒声を放つ。

玉藻のあまりの剣幕に高畑も一瞬怯むも、状況が状況ゆえに自分の知らない部外者の存在に直ぐに立ち直ってアスカの傍に走り寄る。

「――――――――――――――――！」

「――――――――――――――――！！」

「――――――――――――――――！！」

「――――――――――――――――！！」

二人が何かを怒鳴りあっているが、アスカはそれを認識できない。人を殺したという現実を受け止めきれず、玉藻の努力の甲斐もなく、精神は緩やかに崩壊を始めていた。

最初に鼻についていた血の臭いが消え、僅かに口に入った血の味を感じなくなった。続いて玉藻と接している感覚が消え、二人の怒鳴りあう声が何も聞こえなくなった。

アスカの右目から血の涙が一滴だけ流れる。

「ゴメン、なさい……」

その謝罪は誰に向けてなのか。殺した相手か、未だ見ぬ両親か、

それとも自分の身を案じてくれた玉藻にか。本人にも分からぬまま、最後に『ガチン』とどこかで歯車の一つが噛み合う音が聞こえて視界が閉じ、アスカ・スプリングフィールドの精神は壊れた。

第六話　　壊れた少年（後書き）

暗いですけど主人公にも後で救いがあるようにしますので、そこら辺のことをご容赦下さい。

次回の更新は、二週間後の日曜日午前０時に更新したいと思います。

予定より遅くなる場合は、その都度、活動報告に上げます。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

最近、超が来た未来はアスカがいるけど介入しなかった結果を考えています。詳しくは活動報告で。実際に採用するかは別ですが。

第七話　　失って得た少年（前書き）

予想より早く出来上がったため、一週間早く投稿します。

文字数は１１３８１字です。

それではどうぞ！！

第七話　　失って得た少年

魔法学校の近くにある山には滅多に使われていない小屋がある。その小屋は山の管理人の物であるが、大分前に亡くなったので使われなくてかなりの期間が経っている。

小屋が人が近づかないアスカの修行場所に近いこともあって、無断ではあるが清掃、補強して休憩場所として利用している。布団や最低限の食料が置いてあるので良く使っていた。高畑から逃げ回っていた時は小屋の場所から修行場所が校長や他の人間にバレないようにするために使用できなかった。

アスカの異変に気付いた玉藻が口論を中断して、高畑が何か言ってきても無視して居場所を悟られないように、この小屋に運んでベッドに寝かした。

「……」

寝ているアスカの顔に、表情は無かった。悪夢で苦しんでいても何らかの表情があったのに、今のアスカの顔はまるで精巧なマネキンのよう。

アスカの精神は完全に壊れてしまった。村人への不審、故郷の壊滅、幼馴染の母親に庇われて目の前で石化し、見殺しと村人の石化、魔法学校での虐め、トドメに正当防衛とはいえ殺人。

頼みの玉藻もアスカの内部から出ることができず、アドバイスや助言以外は何もできない。外敵から守ることも、拷問といっていい修行を止めることすらできない無力な存在だった。

ネカネも学業、ネギとアーニャの世話だけでも大変なのにアスカまで背負おうとして手が届かず、それでも手を伸ばして無理をする。疲労が大きすぎてアスカの状況に気づかない。

守るべき者達は悉くが無力。頼れるものはなく周りはほとんどが敵に近い四面楚歌。ここまでよく壊れずに耐えていたと言えるだろう。

精神と肉体は密接な関係にあると言われており、日本の諺（ことわざ）に『病は気から』という言葉がある。病気は、その人の心の持ち方しだいで軽くもなるし、また重くもなるということの意味で精神が肉体に影響を及ぼすことを表している。

心が肉体に及ぼす影響の方が多いように感じるが逆に、肉体が心に及ぼす影響も大きい。

例えば、寝不足で体が相当疲れている時は、当然元気も無く、やる気も起こらない。逆に、十分に睡眠を取って、疲れが回復している時は、エネルギッシュでやる気も満ち溢れてくる。また、運動もせず、体重も増え、筋肉も落ちてくると、姿勢も崩れて少し動いては疲れて休み、積極的に行動しようという気が起こり難くなる。逆に、毎日、筋トレを行い、ジョギングなどで体を鍛えている人は、体も軽くて活発になり、積極的に行動しようと考えやすい。

アスカが虐めによって肉体に痣が増えていけばいくほどに精神に影を落としていたのかもしれない。

「まだ、間に合うか？」

精神が完全に壊れたのなら肉体がそれに引き摺られる可能性は大いにある。つまり精神に引き摺られた肉体の死。それが起きていないということは、アスカが現在も無事な面があるかもしれないこと。

あくまでこれは玉藻の希望的観測に過ぎない。だけど、玉藻はこの希望に縋るしかなかった。

「今、行くぞ主。【忍法・心転身の術】」

両手の親指、人差し指、中指をくっ付けて円を作り、その間からアスカを覗き込むように見た瞬間、発動させた忍術の効果により、玉藻の精神は肉体から離れた。精神を失った肉体は、ベッドに寝ているアスカに覆いかぶさるように倒れ込んだ。

玉藻が行った【忍法・心転身の術】は相手に自分の精神を直接ぶつけ相手の精神を乗っ取る術で、戦闘向きの術ではないが、諜報活動をする際などに非常に有効。ただリスクも大きく、術使用中は術者の体が無防備になってしまう上に、精神を乗っ取った相手へのダメージはそのまま術者本体にも反映されてしまう。当然、その間は術者の体は無防備である。

念のために玉藻は術の前に影分身を残しておいたので、襲撃者があったとしても大丈夫である。

アスカの精神に入って最初に見えたのは無機質な白い部屋。だけど、どこか温かみを感じさせる雰囲気を感じさせる部屋だと玉藻には思えた。

「まったく……また■■ったら無理して」

聞こえたのは心底呆れながらも、その相手に愛情を無類の愛情を感じさせる声。名前を読んだようだが、その部分だけがまるでフィルターでも掛けられたように玉藻の耳には届かない。

玉藻がそちらを振り向くと、恐らくここはどこかの病院の病室なのだろう。そこにいたのは部屋のスペースの過半数を占めるベッドに横になっている中学生位の体格の少年を見て、腰に手を当てて椅子に座っている女性の姿だった。

ベッドに横になっている少年は痩せ細っているので体格から中学生に見えるが、どう見ても生きているだけで精一杯で、成長する方向に栄養が回っているようには見えないのからもしかしたらもっと年齢は上かもしれない。

「え、と……ごめんなさい、母さん」

「しょうがない子ね。仕方ないから許してあげます。次はないからね。無理はしないように」

少年の言葉をそのまま信じるなら女性は少年の母親なのだろう。女性は謝る少年に困った顔を見せながら注意するも、息子には甘いのか手を伸ばして優しく撫でる。

撫でられることに恥ずかしそうにしていても少年の表情は嬉しさを隠しきれていない。

双方向に流れる愛情は目に見える形で現われているので家族の形

として理想のように見えると、二人には見えないのか壁の模様となりながら玉藻は感じた。

場面はそこで唐突に変わり、今度は窓から見える太陽の傾き具合を見るに夕方頃なのだろう。

先程はいなかった壮年のスーツを着た男性の姿が増えている。大きなキャリーケースがあることから出張か何かから帰ってきたばかりで、そのまま立ち寄ったみたいだ。

「今度の出張先はイギリスだったんだけどな、流石は世界一まずい料理で覇者を取る国だ。俺の主観かもしれないが不味い、不味い。ああ、でもロンドンの街並みは良かったな……」

やはり出張先のイギリスから帰ってきたばかりのようで、マシンガンのようにトークが男性のペラペラと口から溢れ出している。

壮年の男性は少年の父親なのだろう。少年が痩せ細っているので分かり難いが、肉をつけて成長すればそっくりになりそうなほど顔が似ている。

「イギリスか……いいよね。何時か行って見たいな」

父親のトークをベッドに寝そべったまま楽しそうに聞いていた少年は微かな羨望を持って、天井を見ながら呟く。傍にいた母親は、夫が持ってきた花を背を向けて花瓶に生けながら固まり、身体を震わせる。

「……っ！　そうだな。何時か家族（みんな）で行こう」

「ええ、そうね。何時か行きましょう」

呟かれた一言に、一瞬だけ唇を噛み締めるも男性は直ぐに持ち直し、表情を緩めて同意した。目元を拭った母親も振り返って同意する。

「うん。ありがとう、父さん、母さん」

決して叶わぬ夢だとしても肯定してくれた父に、母に感謝の気持ちを伝える。

そこで終わり、場面がまた変わる。

今度は少年が小学生高学年ぐらいに幼かったり、はたまた幼稚園ぐらいの年齢にまで遡ったりと時系列がバラバラではあるが、同じ病院に入院している入院患者たちと交流したりと、病院から出ることはないが少年の顔には確かな笑みが浮かんでいた。

「そうか、ここは主の前世の……」

最初は困惑するも、アスカに聞いていた話を思い出して合点がいった。

これならば今の親のいない状況に対して不満を覚えても不思議ではないだろう。それほどに前世の両親はアスカに愛情を示している。周りの環境も、病気でも明るい友達ばかりということもあって打ち解けていることが多い。

思いっきり体を動かすことはできないが、それでも確かにここにはアスカの望んだ幸福があった。そしてそれを望んでいるのはアス

カ自身。玉藻はこのままでいることが、もしかしたらアスカの為ではないのかとも考えた。

だが、幸福そのものだった場面が突然地獄に変わる。

「ありがとう。大変だろうけど周りに負けずに幸せになりなさい。それとアーニャにも伝えて。『幸せになりなさい』と。私はあなたたちが幸せになってくれることを祈ってるわ」

焼け落ちる家、悠々と闊歩する悪魔、石化した村人達、見殺しにしてしまった男、そしてアスカの目の前で石化していくアーニャの母親。

「――――――――――ッアアアアアアアアアアアアアア――ッ！！」

アスカの上げた咆哮は喉を焼き、玉藻の思考を燃やし、闇の静寂を引き裂いて響いた。

そして場面はまた変わる。

「何時になるか判りませんが、必ず貴方を助けてみせます。それまで待っていてください」

そこは何処かの地下室で無数の石像がある。その石像の前でアスカは「必ず石化を解く」と、例えそれが贖罪であろうとも成し遂げてみせると誓ったのだ。

「主よ、ココロウァ殿と約束したのではないか『幸せになる』と！石像の前で誓ったのではないか『石化を解く』と！　あれは嘘だ

ったのかっ！！」

前世の記憶の後に続いた映像を見た玉藻は何も映さない暗黒の世界へと化したアスカの内面世界で叫ぶ。かつての約束と誓いを忘れたのか、嘘なのかと。

「……赦して……もう赦してよ……十分に苦しんだでしょ。まだ苦しめと言うの？」

暗黒の世界で一人地面に座り込み、自身の身を抱えているのは今世でのアスカの姿。眼を閉じ、耳を塞いで自分の殻に閉じ篭ってしまっている。

それは、もうハッキリと泣き言だった。自分は十分に頑張ったと、我慢したと、どうせ戻っても苦しみしかないと、そんな諦めと絶望に染まった泣き言。

だが、それは直ぐに張り上げられた玉藻の叫びに掻き消される。

「分かっている、そんなことは！　それでも、それでも――――っ！！」

それはアスカの幸福な夢を見たのに、地獄しかない現実に連れ戻すしかない悲哀が込められた叫び。しゃくり上げる幼児のように痛ましい泣き声。泣き言どころではない。明確な泣き声である。

どうしようもなく悲しくて、どうしようもなく哀しくて、溜め込み続けた嘆きが限界を超えて弾けてしまったような声。

「……僕は……僕は……」

耳を塞ごうとも聞こえてくる玉藻の叫びは、アスカの魂の奥底を揺さぶる。だけど、同時に玉藻の声と存在が術の発動が解けて内面世界から消えた。

「……」

アスカも玉藻に言われなくても分かっている。自分が逃げていることを、嘗ての誓った思いを裏切ろうとしていることを。

ここはアスカにとって優しく、そして都合の良い世界。清明で暖かな善意に満ちた争いなき世界。見方によってはこれを「永遠の楽園」と捉えることもできる。

――――でも、この世界はやっぱりホンモノじゃないわ。

この世界はきっと……今後どれだけ力を費やしても決して戻れない楽園。だけど、それでも戻ってきて欲しいと願ってくれる人がいる。■■ではなく、アスカの大切な人が泣いている。

――――お前を思って泣いてくれる人がいる。それでも逃げ続けるのか？

満たされぬ思いが大きすぎて、一度空いた穴が大きすぎて甘美な夢から出たくないとアスカは思っている。それは逃げで、泣いている人がいるのに動けない。

――――何時までも立ち止まっているわけにはいかないだろ。それに女を泣かせるのは男がすることじゃないぞ。

心の中で何かが訴え続ける。この訴えを聞かれなければならないと自身の魂とでもいうべき深い部分が知っていた。

現実でもたった一歩でも歩み寄れていれば変わったかもしれない。

『英雄の息子』として見られるからなんだというのだ。親が有名な子供は大なり小なりそういう傾向がある。そんな人は探せば世界に幾らでもいるだろう。度が酷くても現実に何か悪意を持って成されたことは少ない。

もっとちゃんと自分を見てくれ、と言えば変わったかもしれない。魔法学校の虐めだってネカネでも校長でも助けを求めれば直ぐに解決したのも事実。

――――私たちの息子なら立ちなさい

その言葉に従ってゆっくりと立ち上がる。逃げたいという思いと、この世界に居続けたいという思いが胸の中にある。

玉藻の声がアスカの凍てついた心を揺り動かし、この声が背中を後押しする。それよりも意地と言えるかもしれないが、この言葉の相手にみっともない姿を見せることだけはできなかった。

――――さあ、行きなさい。

一歩ずつ踏みしめるように前を向いて歩き出す。暗黒の世界なのに進み続ければ出口があることは分かっていた。だって、ここはアスカの内面世界。アスカには全てが分かる。

歩き続けると出口が近づいてきたのだろうか、アスカの内面世界

に光が満ちてくる。

我知らずに涙が流れる。振り返らなくても、そこに誰がいるのか分かっていた。少しでもみっともない姿を見せたくなくて、少しでも誇られる子供でいたくて一度も振り返らなかった。

「ありがとう……父さん、母さん」

――――――私たちの子供に生まれてきてくれてありがとう、幸せになりなさい。

自身の身体が完全に光に包まれる前にそう呟くと、確かに彼らは笑ってくれたように思えた。

夢を見ていたような気がする。目を覚ましていたような気がする。霞のかかった意識の向こうで、誰かが自分を呼んでいる。何度も何度も、執拗に。だが、決して不愉快ではない。

今は全てに対する感覚が薄い。だから、ゆっくりと確かめるように目を開いていく。開いた直後は霞んでいたものの、徐々にはっきりと形を帯びてきた。

「主！　ああ……！！」

この時の玉藻の表情は、生涯忘れることはないだろう。如何にも慌てた様子で今にも泣き出しそうな優しい笑顔で駆け寄り、震える

両腕でアスカを抱き締めた。アスカはそれまでも玉藻に心配をかけ、怯えるように、怖れるように、安堵や安心を通り越して、ただ、アスカ・スプリングフィールドという存在の無事だけを確認するように、抱く腕に力を込める。

「ただいま……玉藻。こうして顔を会わせるのは初めてだね」

『ただいま』それが今言うべきもっとも正しい言葉のように思えた。同じように玉藻の背に腕を回して人の温もりを実感する。

それが何よりも嬉しく、こうして誰かに抱きしめられるのは何年振りか。故郷にいた頃にネカネに心配をかけて泣かれた以来だから二年か、三年か。

「ああ、そうだな……主!?　その目は!!」

大きすぎた感情に、大袈裟な態度を取ったことで少し気恥ずかしげながらも、嬉しいという気持ちを隠しきれない玉藻がアスカから身を離しながら同意して顔を見た瞬間に凍りついた。

「どうしたの、玉藻?」

玉藻が何を驚いているのか分からぬアスカの髪の間から覗くその瞳には、先程までは濃い緑がかった色をしていたのに、今は赤くなり、六芒星に二重の円が描かれた文様が浮かんで異様なモノへと変化していた。

それは玉藻には苦い思いで共に今も尚、記憶に刻まれている忌まわしき宿敵が保有しているものと同種の眼。

「何故、【写輪眼】が主に。しかもこの紋様は【万華鏡写輪眼】」

玉藻の驚きようは、曲がりなりにも数年一緒にいたアスカですら見た（？）ことがない。

動揺収まらぬ玉藻に事情を聞いたアスカは、運命の皮肉とでもいうべきものを感じられずにはいられなかった。

本来、【写輪眼】はうちは一族の一部の家系に伝わる特異体質であり、うちは一族の血継限界である。血継限界を除く「体術・幻術・忍術」をすべて見抜くことができ、また視認することによりその技をコピーし、自分の技として使うことができる。動体視力もずば抜けて高く、高速で動く物体にも対応することができる。さらに、チャクラを流れや形として視認することができ、性質を色で見分けることも可能な瞳力を持つ。【写輪眼】使用時は、瞳に勾玉文様が浮かび、目は赤く光って見える。瞳の文様は開眼時は1つ，または2つであるが、使用者がある程度成長すると最終的には3つに変化し、この状態で【写輪眼】は完全なものとなる。

開眼初期の能力は、ずば抜けて高い動体視力（洞察眼）のみであるが、術者が成長するにつれ、多くの能力を有するようになる。【写輪眼】の瞳力の力は使用者によって様々。その他、相手に幻術を見せる「幻術眼」、相手に催眠術をかける「催眠眼」など、数多くの特殊な能力を持つといわれている。

【写輪眼】を持つ者が自身の目の前で大切な人の死を体験することで、さらに上位の瞳術【万華鏡写輪眼】を開眼することができる。

【万華鏡写輪眼】とは、うちは一族の長い歴史の中でも開眼しえた者はわずか数名しか存在しない伝説の瞳術とされる。【写輪眼】

が変異した形であり、発動の際は瞳の文様が変形する。全ての面で【写輪眼】を凌駕する瞳力を誇り、この形でのみ使用が可能となる瞳術も存在する。また、【万華鏡写輪眼】は写輪眼とは違い目の文様も、もたらされる力『瞳術』も特別な要因が無ければ開眼した個々で異なる。

「百歩譲って我が食らったイタチの写輪眼が主に発現したのは認めよう。だが何故、今なのじゃ？　それも【写輪眼】を通り越して【万華鏡写輪眼】を開眼するなど在り得ぬ」

何故、玉藻が取り込んだものがアスカに発現するのか定かではないが、こう考えないと辻褄が合わない。となると玉藻は他にも色々と取り込んでいるので、もしかしたら他にも発現する可能性が出てきた。

仇敵の眼にして、玉藻が元の世界で取り込んだうちはイタチの【写輪眼】が何の因果かアスカに発現して、しかもいきなり【写輪眼】を通り越して【万華鏡写輪眼】を開眼してしまっている。

「あの時か……？」

魂がまだ完全に回復していなかったのに、アスカが壊れかけていたので後のことを全く考えずに表に出てしまったことが影響している可能性もある。アスカの体内にいた頃よりも魂の共有率が上がっているような感覚も見受けられている。

「だが、それでは【万華鏡写輪眼】に開眼する理由にはならない」

もし、開眼するならばアーニャの母親の死を経験した直後のはずなのに今なのか。

【万華鏡写輪眼】の開眼条件は、調べた玉藻にもはっきりとは判らないが、イタチの死後開眼したサスケの状況から考えて恐らく「親しい者の死（を経験すること）」だからだ。条件から考えると、襲撃犯を殺したことで発現するなどあり得ない。

ならば、前世があると言ってもアスカはまだ子供。親がいないのだから、近くにいたアーニャの母親を母を「置き換え」ていてもおかしくはない。流石にネカネを母と見るには年齢的に無理がある。そしてアスカにはこの世界で母と呼べる人が近くにいなかったのだ。だから一番身近でどれだけ逆らっても叱ってくれるアーニャの母親を見て、母に「置き換え」ていてもおかしくはない。

発現するならその時に発現しているはず。今、発現する理由がない。

「済まぬが、目に意識を集中して、これに【燃えろ】と念じてもらえぬか？」

「え？　うん。分かった、――――――【燃えろ】！！」

玉藻が布団の羽毛を一枚を取り出しながら言った事に疑問を抱きながらも、アスカは言われた通りに目に意識を集中して強く念じた。

すると、念じたのと同時にアスカの意思ではなく自動的に＜チャクラ＞を注ぎ込まれ、目視したその視点から太陽の如き高温の黒い炎が発生した。念じたのは一瞬だったにも関わらず、＜チャクラ＞の大半が持っていかれて黒い炎が羽毛を燃やす。玉藻が放した羽毛を完全に燃え尽きるまで消えなかった。

「これは……？」

「【万華鏡写輪眼】を開眼者した者だけが手にする力【天照】。我が取り込んだ【写輪眼】の持ち主であるうちはイタチが使っていた術じゃ」

使用には大量のチャクラを必要とするため使用回数は制限されるが、その効果は一般的な術の範疇ではない。燃やしたい所を瞳力の宿る方の【万華鏡写輪眼】で目視し、ピントが合うだけでその視点から太陽の如き高温の黒い炎が発生する。使用すると火さえも燃やし、その黒い炎は対象物が燃え尽きるまで消えない。仮に対象が逃げようとしても、視界に入る限り逃れる事はできない

「……凄いね」

一瞬の発動とはいえ、大半の＜チャクラ＞を持っていかれたのは制御が甘いから。制御（コントロール）できれば絶大な力となるだろう。

アスカが求めていた力。望んで止まなかった力を今、手にしたがけれど、それはもう、何の役にも立たない。全てが遅すぎた。

「～～～～～～～～～」

【天照】に使用によって時間差を置いて生じた頭痛に頭を抱えながら、アスカは呻いた。もっと、早く力に目覚めていれば――――

（――――そうじゃない）

まだ綺麗事を吐こうとする自分を、アスカは心の中で罵倒する。間に合わなかったのではない。偶然、今、目覚めたのではなく、条

件が揃っていなかったのだから今でなければならなかったのだ。

滑稽な自身を嘲笑いながら右眼から涙のように流れた夥しい量の血を拭った。

（やはり取り込んだイタチの【写輪眼】の影響か？）

考え込むアスカと同じように、玉藻も思考の裡に沈んでいた。イタチの【写輪眼】を取り込み、【万華鏡写輪眼】を開眼したみたいなので試して見たが【天照】が出てきたことで予想が現実のものとなってきた。

【写輪眼】、それも【万華鏡写輪眼】を開眼した者を玉藻も三名しか知らない。その内、うちはマダラの能力は最後まで分からずじまいだった。残っているのはイタチとサスケの兄弟のみ。

今、アスカが【天照】を発動したのは出血したことからも右眼。サスケは左の【万華鏡写輪眼】に【天照】が宿ったことも考えて、イタチと同じ右眼で発動した以上、そう考えるのが自然だ。

「主よ。体調でも何でもいい、何か変わったことはないか？」

「変わったこと？　【天照】を発動したことで頭が痛いけど他には特に何も――――」

玉藻が何を困惑しているのか分からないアスカは、体調も【天照】の発動の影響以外には何も変わっていないので、そう言おうとして固まった。

倦怠感はあるものの、肉体的には何の問題はない。出来事を遡っ

ていこうとして、目覚める前に見たものを思い出そうして、

――前世の父と母の顔や名前、何があったのかをほとんど思い出せない。

まったく身動きもせず、しかも顔色が真っ白なため、ベッドに横になっていることもあって死んでいるのではないかとさえ感じられた。

「記憶……僕の、記憶」

とアスカが少し虚ろに呟くのを見て、詳しく話を聞いた玉藻は自らの愚かさを呪いたくなった。

アスカには、前世の記憶をほとんど失っていた。一般常識や知識などは覚えているし、喜怒哀楽の感情もあるのだが……かつての自らの名、その家族、友人、住んでいた場所等の記憶はほとんど忘れていた。胸の奥にある確かに愛されていたと感じる以外は。

アスカ・スプリングフィルードの前世、■■■■として生きて来た中で関わった人間に関する記憶の消去。前世の自分がどんな性格だったのか。自分の両親の名前や顔は勿論のこと、どんな性格だったのか。関わった全ての人物の思い出をほとんど残っていない。

アスカの症状は一見すると『全生活史健忘』のそれだ。

『全生活史健忘』は、発症以前の出生以来すべての自分に関する記憶が思い出せない（逆向性・全健忘）状態。自分の名前さえもわからず、「ここはどこ？私は誰？」という一般的に記憶喪失と呼ばれる状態である。「記憶喪失」と同視されている。障害されるのは

主に自分に関する記憶であり、社会的なエピソードは覚えていることもある。

多くは心因性。まれに、頭部外傷をきっかけとして発症することがある。発症後、記憶は次第に戻ってくることが多い。治療としては、催眠療法で想起を促すことなどが行われる。

脳が精神を保全する為に記憶を封じるケースは間々ある。

――これは玉藻の推測だけれど、アスカは自身に罰を与えたのではないか。「殺人」というその罪に対して「記憶を消す（自分を殺す）」という重い罰を。

人を殺したことで、アスカの精神は崩壊直前となった。いや、ゆっくりと壊れていたと言ってもいい。その精神の崩壊を防ぐため、罪の意識から少しでも逃れるためにアスカの精神は一つの選択をした。つまり、

「そう……か、そうだったんじゃな……」

何故、【写輪眼】が開眼したのかはさておき、【万華鏡写輪眼】を開眼したのは理由があったのだ。

即ち、前世の自身の消滅。

人をヒトたらしめる物は何か。他でもない「記憶」だ。一個人として自己を定義し、されるにはそれが必要となる。ならば「記憶を失う」ということは、少なくとも、それ以前の自分（他人）にとっては。文字通り“死”を意味すると言えるだろう。

反対に今世の記憶が残っていることから考えて、アスカの場合は今世での自分よりも大切にしていたと言ってもいいほどに、前世の記憶だけが唯一無二の縋れるものだったということだ。

【万華鏡写輪眼】の開眼条件である「親しい者の死（を経験すること）」にも合致する。

推測を纏めると、強引にアスカの体内から出たことで共有していた魂に玉藻が取り込んだ因子に影響が出て、前世の自身の消滅という死を経験したことで開眼したといったところか。或いはアーニャの母親を失ったことが開眼条件に当て嵌まったか。

推測に推測を重ねたものではあるが、現に発現している上に理論立てて証明することが難しいので、これで納得するしかない。

「あ、その、主……」

「戻らないのかな……僕の……記憶」

と、もごもごと何かを言おうとして口ごもる玉藻に、アスカは諦めたような声で言った。それを聞いた玉藻は、これから言うことが気休め以外の何者でもないことを知りつつ、

「いや、可能性ならある」

「え！　えっ、有るの、方法が……」

と言った。その玉藻の声を聞くとアスカは期待に満ちた声を出した。が、玉藻は苦々しげにあくまでも可能性だが２つほどと答える。

一つ目は記憶が自然に戻るのを待つというもの。精神的ダメージで記憶が無くなったのなら、後は時間が解決して回復するのを待つというもので、今出来ることは何もない。

そして二つは、元いた世界にそこを見て知っている人間に会ったり、場所に行けばというもの。アスカが元いた世界がどこにあるかも分からず、そもそも運良く戻れたとしても今のアスカの姿は前世と全く違う。奇跡どころか希望的観測すらない。

「それじゃあ、やっぱり……無理なんだ……」

と、俯いたまま動かなくなったアスカを見て、自らの無力さを嘆きながら玉藻は『このままでは、またアスカの精神が異常を起こすかもしれない、どうにかして話を逸らさければ」と悩み始めた。

「大丈夫だよ、玉藻。記憶が無くても想いは確かにここにあるから」

胸に手を当てるアスカを見て、間違いなく無理をしていると玉藻には分かった。

だけど、歯を食い縛り、虚ろに近い眼に光が薄くても前に進もうという、前のアスカにはなかった気概がそこにはあった。

アスカの精神の主柱、根幹は前世がもっとも多く占めている。そのもっとも大切なモノ(記憶)を失くしたことで、今のアスカは自身の立身点とでもいうべきものがない。今にも崩れてしまいそうな心を支えているのは、胸の裡にある想いだけ。

顔も名前も分からなくても、この想いをくれたのは親だということは覚えている。

「立ち止まるわけには行かない。行かないんだ……」

「――――――無理はしなくていい。泣きたいなら泣いてもいいんじゃよ」

自分に言い聞かせるように呟くアスカを、その無理具合が堪らなくなった玉藻が言葉と共に抱きしめて言い聞かせる。

前に進もうと思うことは決して悪いことじゃない。だけど、無理してまで押し通そうとすれば、今は良くてもいずれは破綻する。前世の記憶や今世でもその傾向が強いので危惧し、感情を抑えすぎないように泣いてしまえと。

「大丈夫、僕は……大丈……夫……なんだ――――――ぁ……っく……っう……っぁ……」

大切な、本当に大切な記憶だったのだ。それを失くして辛くないはずがない。それでも立ち止まらないために哀しみを誤魔化そうとしたが、玉藻の言葉と行動によってあえなく瓦解した。

大丈夫だと言い聞かせていたアスカも、やがては埋めがたい喪失に嗚咽を漏らし始めた。声を上げて泣かないのはせめてもの意地と言うべきか。

アスカの悲しい泣き声は夜まで止むことはなかった。

第七話　　失って得た少年（後書き）

これで多少は主人公も前向きになりました。

【写輪眼】関連は『第三話　故郷を失った少年』で削除したシーンが入れられています。

主人公の記憶の説明をしますと、失くしたあくまで記憶であって知識は残っています。一般常識や勉学などは残って、逆に誰が?どこで?などの思い出を失っています。ちなみに今世の記憶は無事です。

原作知識に関しても、強くイメージしていた【ナギは生きている】【アリカの存在】【ヘルマン】【麻帆良】ぐらいしか残っていません（もしかしたら後で多少の変更の可能性もありますが）

次回の更新は、『来週』の日曜日午前０時に更新したいと思います。元々、次話とは纏めて一話のつもりだったのですが長くなったので分けました。半分以上、既に出来上がっています。

予定より遅くなる場合は、その都度、活動報告に上げます。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

第八話　　罪と罰と少年（前書き）

既にご存知のことと思いますが、予告通りに旧バージョン（改定前）を削除しました。

改訂版が追いつき次第、別に板を作って投稿したいと思います。それまでお待ち下さい。

今話は前話の直後からの話になるので、改定前にはない話になります。

実は前話から合わせても作品時間が二日しか経っていないです。

ちなみに文字数は１２４３１文字です。

それではどうぞ！！

第八話　罪と罰と少年

そこは何処とも知れぬ場所。地平の果てまで何もなく、ただ地平の果てまで真っ黒な空間が広がっている。その空間内にいるのは多くの人間と少年――――アスカ・スプリングフィールドのみ。

「ひっ！」

アスカは手近にいる男に手にした雷光を発する木刀を振り被り、のっぺりとした表情で特徴のない男の顔が恐怖に染まる。魔力で簡単に折れないように強化し、木刀に雷性質のチャクラを流し込む。切れ味を上げる「チャクラ流し」の中でも、「千鳥」を用いた術を特に「千鳥刀」と呼ぶ。輝きさえずる刃は鋼をも容易に斬り裂くほどの威力を誇っている。

防御しようとした男を構わず斬り伏せる。斬られた男からは噴水のような血が吹き出し、やけにゆっくりと地に倒れていく。

吹き出した血はアスカの手や服に飛び散るも拭う暇もなく、駆け抜けて立ち塞がる者を老若男女関係なくその手で抉り、斬り捨てていく。アスカは顔に血が掛かろうとも無表情に、ただ人を殺すという作業を行う。着ている服は全て黒いので血が掛かっても目立つことはない。見た目には変わらなくてもそれでも人を切り捨てるごとに服に血が掛かり、水分を含んだ服が重みを増していく。

重みを増した服が罪の重さを表しているようだと心の何処かでアスカはそんな事を思った。同時に心の一部がこれを夢であると判断した。今のアスカには使えない「千鳥刀」や数々の術を容易く行使していることが、これは現実ではなく夢だと判断した理由である。

「殺さないと……」

心の一部が夢だと判断しても、それでも殺さなければいけないという強迫観念に駆られて殺して、殺して、殺して、殺して、殺し尽くす。

やがて目的もなく人を殺すという作業を行っていたアスカは、血を吸った服の重みで倒れないようにする為に膝をついて一歩も動けなくなった。そして初めて自分の周りを見渡した。そこで初めてここが先程のように真っ黒な空間ではないことに気付く。

火災が起きたのか辺り一面に火が灯り、そこには斬りつけられた死体、焼かれた死体、何かに押しつぶされた死体、目立った外傷はないがピクリとも動かない死体。他にはアスカの周りに何もなく、死体と火しかなかった。この光景に似たものを、かつて見たことがある。

悪魔の襲撃によって滅ぼされた故郷の光景に似ているのだ。自分が、ネギ達がいろんなものを失ったあの悲劇の場所に。

そう思ってしまったアスカは、目の前の死体達の顔に幾つかに見覚えを感じて目を向ける。

――――――目の前の死体は、いや死体達はネカネやアーニャ、ネギ、村の住人達だった。

彼女達の体には何かに抉られたような痕や斬られた痕等があり、アスカが右手に持つ木刀や左手からは絶えずポタリポタリと血が滴り落ちている。

（殺した・・・・・・・僕が、皆を殺した）

それを認識したアスカは、何かで視界が滲んでいくのを感じた。

「ぁぁぁ

ボタと落として、その眼は焦点が定まっていないと、とても尋常な様子と呼べるものではない。

「し……死んだ皆！　……ち、血が……！」

「主！　落ち着け、大丈夫じゃ。手に血などついていない」

ぶつぶつと呟き続けるアスカを、後ろから玉藻が抱きしめて「大丈夫」と言い続ける。誰が見ても子供が悪夢を見た魘(うなさ)され方ではなく、ようやく精神が壊れかけたところを持ち直したとこなので、原因究明を後回しにしてアスカを落ち着かせようとする。

「ごほっ。ごほっ、ごほっ――――――！！」

今、見た悪夢を吐き出すように、アスカは前屈みになって激しく咳き込む。あまりの咳の強さに喉や肺が痛まないかと玉藻が心配になるほどに。。

「……っ」

今も手に残る感触は、理屈ではなかった。得体の知れない感情が、アスカの胸を締め付ける。そのままアスカは玉藻の腕の中で、胃の中のモノを戻す。食べた物が出尽くしても止まらない。胃液を吐き出しても止まらない。

綺麗な白い着物がアスカの吐瀉物(としゃぶつ)で汚れても玉藻は嫌な顔一つせずに背中を優しく摩(さす)り続ける。

「はあ、はあ、はあ……ゆ、め……？」

激しい咳と嘔吐を何度か繰り返して――――あれは夢なのだと脳が徐々に理解を始めると、アスカの呼吸も安定してきた。暫く続けて意識が途切れるように再度眠りについた。

「――――やはり、人を殺した影響が出ているか」

アスカをしっかりと寝かせて、汚れた着物や布団を取り替えながら玉藻は自分の無力さを嘆く。

アスカは前世を失ったが、忘れるというのは苦しみから逃れる為の手段だ。人は自分が思うほどに背負えるものはそうはない。その罪に対して罰を与えてしまう事が一番簡単な解決策なのかもしれない。けれど、本当にそれで良いのか。そうする資格が誰に有るのか。

医療に於いて“尊厳死”という言葉がある――――所謂、安楽死の事だ。“尊厳”とは何とも哲学的で捉えにくい概念ではあるけれど、それは何にも優る自己決定権と言い換えられる。

――――アスカは人を殺したことを悔いている

アスカは殺した相手のことを覚えている。都合よく忘れなかったために今でもその生々しい感触が鮮明に蘇り、悪夢という形で表に出てきた。

再度の眠りについた今でも、自分の手をまるで何かを落とすように擦っている。それが幻だと頭で解っていても言葉通り、血がこびり付いていたように感じているのだろう。

その震えながら擦り続ける手を、玉藻は両手で握り締めた。年相応に幼くか細い指先を力強く優しく包み込んだ。自分と比べて一回

りも小さな手の感触は柔らかく、とても冷たかったが、何より暖かかった。

他者の体温を感じて安心したのか手の震えは収まった。

「我にはこんなことしかできんのか」

アスカの心の問題であるが故に玉藻にできるのは傍にいて手を握ってやることしか出来ない。

個人によって大小の差はあれども、玉藻のようにそもそもの生き物としての種が違ったり、精神的に異常でない限りは殺人に対する罪悪感は永遠に消えない。

眼を逸らしても網膜に焼きつき、耳を塞いでも鼓膜に響き、忘却の彼方に放り込もうとも絶対に追い回してくる。――結局は自身が生きる為の必要最低限の犠牲として割り切るか、背負うしかない。

そして背負うといっても何を背負うかは人それぞれ。奪った生命か、犯した罪咎か、届かぬ怨嗟か――何れしろ、自責の念で押し潰れてしまうほどに重たいものだ。

そう、背負う以前から殺したという事実が重く圧し掛かり、アスカの精神を酷く圧迫している。果たしてアスカはそれらを背負う覚悟を持てるだろうか。

「でも、それを分かち合い、一緒に背負う事は出来る」

手を握ったままアスカの寝顔を見る玉藻は、決意を秘めた表情を浮かべる。それは悪魔の誘惑か、或いは神の福音か。闇の中で苦し

み悶えるアスカはそれを知らない。

これからもアスカが生き延びる為には、対峙した敵の屍を踏み越えるしかない。屍の仲間入りしたくないなら特に。最初から敵として現れた者に対話の余地は無い。自身の生を掴むには相手を死に堕とすしか無い状況に追い込まれる可能性が高いのだから。

玉藻クラスならば如何なる相手が立ち塞がろうとも殺す必要は無い。だが、アスカではその領域に近づこうとしても何年掛かることになるか。

内部からの軋轢、外の脅威。『英雄の、災厄の王女の息子』では敵など湯水の如く湧き出てくるだろう。

もしかしたら玉藻よりも強い敵や、出し抜ける者が現われるかもしれない。

「――――――強くなれ。誰よりも、何よりも。そして……我よりも」

幾ら強くても玉藻は決して万能ではない。そもそも万能であったのならアスカに初めて会ったときのような状態になったりはしない。マダラに勝利とはいえ痛み分けに近い決着だったのだから。

アスカが玉藻に依存してしまえば、そんな時が来たら殺されてしまう。

その時が来ることを考えた玉藻は小刻みに震えていた。その弱々しい仕草はいつも自信満々で大胆不敵な彼女には似合わない。アスカを見つめる真摯な瞳には普段では在り得ない、臆病な色が見え隠

れしていた。自分の命よりも目の前の子が死ぬ恐れを、玉藻はその胸に抱いていた。

大切な人ができて、もしかしたら玉藻は弱くなったかもしれない。そんな自分が嫌いではなかったし、好ましい変化だと思っている。

またアスカが悪夢に魘されないように、目覚めるまで手を握って寝顔を見続けた。

アスカ・スプリングフィールドは、自身が死にたくないがために一人の人間の命を奪った。明確な殺意に対して報いたそれが、正しいのか間違いなのか。赦されるのか、赦されないのか、その疑念。人殺しは悪いことである。そんなことは分かっている。では、自身が殺されようとしていた時に相手を殺すことは悪か、そうではないのか。いったいどちらであろうか。

今でも行為自体が間違っていたとは思わない。現行の法に照らせば正当防衛で殺人罪にはならないだろう。しかし、如何なる理由があっても人を殺したことには変わらない。正当防衛ということを抜きにしても殺人が罪であることは分かっていた。取り返しのつかぬ行為であることも思い知ったし、今も手に残る感触に苦悩と苦痛をたっぷりと味わった。

罪悪に対した時、人はどうあるのが正しいのかはまだ分からない。けれど、アスカ・スプリングフィールドが殺人を犯したことは紛れもない事実。だからアスカは、起き上がれるようになったその足で

町の警察へと向かい、自身の殺人行為を訴え出た。

そこから先のことは――――――正直、アスカ自身にもよく分からない。推測はできるが、当時のアスカには事実を確認する術もなかったので明確な答えは不明のままだ。

警察に出頭したアスカは、あまりにも簡単に過ぎる聴取を受けただけで、特に拘束されることもなく、直ぐに釈放された。否、そもそも殺人事件そのものがなかったことにされてしまったのだ。

なぜこうなったのかを理解するのは大分先になってからのことである。が、その時は釈放されたことに困惑を抱いていた。

誰がそんなことをしたのか……という件に関しては、アスカもその場にいた人間と揉み消せる人間を知っているので承知している。

アスカの今にも死にそうな雰囲気から現場の人間はいたずらとは思わなかったが、警察上層部から圧力が掛かって釈放された。アスカの身元保証人として現れたのは、何時ものローブ姿ではなく黒い仕立てのよいスーツを着た魔法学校の校長。

「何で――――――」

「あのことは忘れなさい。そしてこのことを決して口外してはいかん」

兄弟の祖父である校長は、問い質そうとしたアスカの言(げん)を途中で遮り、鋭い目つきで見つめながら告げた。低く厳しい言葉で言い含められたそれは、だから、そういうことなのだろう。

「――――――――っ！？」

祖父の行動や言動は、幼い孫のことを思ってのことかもしれない。

自身の事を考えて、気遣って、優しくしてくれる。それは普通なら何よりも嬉しいことだ。だが、その時のアスカにとっては何よりも忌むべきものでしかない。

いや、それどころか校長の優しさを優しさとして理解できなかった。

結局、彼が認めているのは『ナギの息子』としてだけで、ただの『アスカ』として見てくれないのだと思い込んでしまった。

何の事情も知らないまま、そう思い込んでしまったのだ。

「っ！？　待つのじゃ、アスカ――――――」

だから、アスカは祖父の前から逃げた。足止めのために玉藻が外に出たのを感じながら、目的もなく走り続けた。

静止してくる祖父を振り切って町を彷徨い、忘我の意識の中、何かに追い立てられるかのようにフラフラと歩んだ道行き。その果てに……気がつけばアスカは、町の郊外に建つ教会の前に立ち尽くしていた。

魔法学校に入学してから、一度たりとも町に来た事は無い。その町の郊外に経つキリスト教会の存在も今日、始めて知った。

五十人規模を楽に収められる吹き抜け二層の聖堂。頂に大きな十字架を掲げた鐘撞き堂が鎮座している。建物の周囲には、庭と呼ぶよりは庭園と呼ぶに相応しい手入れの行き届いた景観。敷地を取り囲むのは石柱と鉄格子が組み合わさった堅牢そうな外壁。

まるで西洋絵画から切り抜きしてきそうな「教会」の情景。

「教会？　丁度いい」

神の家へと辿り着いたことが意識的であったにせよ、無意識であったにせよ、それはアスカにとって僥倖というものだった。

脳裏に抱いた疑問。問い質すならば、これほどに相応しい場所も無いだろう。

急き立てられるように大扉を開けて入れば、数十枚の窓硝子から差し込む斜陽に照らし出された聖堂は、今のアスカの心境からしてみれば正直なところ「場違い」「疎外感」という言葉が近い。その見慣れぬ神域の静かな威風に、思わず浅い溜息を零してしまう。

二階建てで、木製の長椅子が左右にずらりと並ぶ光景は整然としている。町外れに建てられた教会施設としては随分と立派に思えるが、そも平均規模がどれほどなのかも知らないアスカでは、それは単なる印象でしかない。それに、少なくとも今、こうして気圧されるような威圧感を感じて四肢が萎縮している理由は、この教会の規模には起因しない。ましてや、初めて訪れた場所への不安や気後れなどでもありはしない。

聖堂の奥には、数枚のステンドグラスに彩られた祭壇が見える。そこに抱かれた十字架と、その十字架に磔にされた救世主の姿から

視線を背(そむ)けるように、アスカはやや俯き加減で歩を進めた。用があるのはそんな輝かしい存在ではない。或いは神に直接訊(き)けるならそれに越したことはないだろうが、生憎とただの子供に過ぎないアスカは、神の声を聞けるほど敬虔(けいけん)でもなければ、芸達者でもない。

目指すのは祭壇の前、設えた説法台に佇む後姿から直感的にそれなりに高齢だと思われる僧衣(カソック)姿の男。初めて教会に訪れたので当然、面識はなく僧衣(カソック)姿から、この教会の神父であろうと予測した。

神の代理人。目に見えて接し、言葉を交わす事が出来る彼にこそ、アスカは用がある。

それと分かる重く強張った足取り。コツコツと立てる歩み寄る音で、神父は振り返る。その髪はほとんどが年を経て髪の色素が抜けた白髪で、本来の色であろう金の髪もほんの一部だけを残すのみ。左手に持っている杖で身体を支えていることから足を悪くしたのか、それとも別の理由か。

待ち受ける神父は穏やかな、それでいて透明な表情を崩さないまま呼びかけてきた。

「この教会に人が訪れるとは珍しい。ようこそ、少年」

涼やかな声音は、見た目に反して以外に若い。近づいてみれば老いを感じさせる皺があるが彫りの深い顔立ちに小柄ながらも、見た目の年齢の割りにガッシリとした体躯をしている。単純な見た目ではそのガッシリした体格から６０代後半、後ろに見ても７０前半といったぐらいろうか。やけに世捨て人のように老成して見えるのは、今を見ているようで見ていない目の所為か、あるいは宗教者という存在への先入観か。

その答えがどちらであろうと大して差はありはしない。そんな些細な思案よりも、今は心中に抱いたドス黒い蟠りをこそアスカは吐き出しに来たのだ。

そんな苦渋にも似た心境に気付いたのか、向き合った神父はどれだけ見ても空虚にしか見えない笑顔をやや引き締めつつ「何やら迷いでもおありかな？」と、声音を顰めて問いかける。

「迷い……そう言えば、そうかもしれません」

アスカは反芻するようにそう返して、しかし、抱いたコレを”迷い”と呼ぶには少々違うような気がした。そうどちらかといえばやはり、これは”疑念”だ。

どうしよう、という迷いではない。どうなのだ、という疑念。

アスカは祭壇に向かって左方、聖堂の片隅にある小部屋に目を向けた。小部屋というより小屋だ。礼拝堂の一画に陣取るそれは、確か告解室という、信徒が罪を告白する場所ではなかろうか。

アスカは暫し考える。だが、自分は懺悔をしに来たわけではないと思い直し、改めて神父の、その柔和だが空っぽの眼差しを見返して”疑念”を問いただした。

疑念。アスカの中に渦巻き蟠るドス黒くも切実な、その疑念。

「僕は人を殺めました。自身を守るために、この手で殺めました」

懺悔の声は淡々と、低く厳しく抑えられていても激する感情を抑

え切れていない。両手を胸の前に掲げ、錯覚だと理解していても未だに血がこびり付いているように見える。

「見も知らぬ男に殺されかけ、それから助かりたいがために結果的に相手を殺しました。そしてそれを誰も悪くないと言う。これは正当防衛ですか？　それともただの殺人ですか？」

静かに、淡々と、詩でも朗読するようなそれは、しかし、痛切なまでの後悔に満ちている。

それは一息に単刀直入に投げかけた疑念の塊。今の今まで肝の底に蟠り、脳の芯に蠢いていた汚泥の如き定義の混沌。それはこうして吐き出した上でなお激しく深奥に脈打つようで――――アスカは思わず失笑を零した。

それはまさに失笑。質問を冗談や悪ふざけと受け取られるような誤解を、この神父に与えては元も子もない。とはいえ、こうして実際に言葉にしてみれば、それはただの子供が抱くには、確かに大仰に過ぎた疑問である。そもそも子供が語るにはあまりにもあり得ない話だ。誰が五歳ぐらいの子供が人を殺したなどと信じられる。

まるで”この殺しは正当か罪か”という愚問を、あろうことか神の使徒に問いかける。それを冗談や悪ふざけと呼ばずして何としよう。

しかし、ならばこそだ。アスカは、冗談や悪ふざけのように大仰な疑念が、自身にとっては真実に真剣で大真面目であるという事実にこそ、笑いが込み上げたのだ。

「……それは”自身を守る為に、他者の命を奪うことは是か否か

”ということですか？」

薄笑いを浮かべたアスカの、その第三者から見れば不遜以外の何者でもない様子に、対する神父は暫し熟考すると虚空を見上げつつ、確認するように、とても真摯な態度で返してきた。

あるいは嘘をつくなと激昂されて追い出されるかとも思っていたアスカは、その反応に虚を衝かれ、そして、その実に的を射た返答の内容にハッキリと深く頷いた。

障害を排除しなければ生き残れない状況になった時、それを殺すことは善か悪か？　そんな疑念に本気で取り憑かれてしまったからこそ、アスカはこうして信じてもいない神の家までやってきた。

神も仏も信じていないが、それでも抱いた疑念に苛まれるあまり、そんな信じてもいないものに縋りついた。あるいはこの問いに明確な答えをくれるなら、その信仰に生涯を捧げてみるのも良いとさえ思っている。少なくともアスカにとっては、それほど深刻な問題であるのだから。

「この世には、奪って”是”とされる命などありはしません。それは建て前の綺麗事だと言う人もいるのでしょうが、それでもその綺麗事をなくして魂の安息はあり得ない。良いかな少年、命とは、すべて等しく尊いものでなければならない。だからこそ殺生は罪であり、殺生で殺生で報いることもまた、同じく罪深いことなんです」

――――――たとえどんな罪悪であっても、それを殺すことは同じく等しく”罪”である。

それは善良なる神の使徒らしき、実に真っ当にして道徳的な理屈。

そんな当たり前の理屈はアスカ自身、疑念の中で幾度も繰り返し考えていたこと。だが、それだからこそ、第三者から改めて真摯に向けられたそれは、アスカの中に重く響いた。

（ああ……そうか）

ジクリと脳髄に疼いた痛覚。それに共鳴するように胸の奥で蠢いた何か。自身の鼓動とは異なる微かな脈動。そのほんの微かな胎動が、大きくハッキリと震えだす寸前に、眼前の神父は厳かに力強く、胸の前で十字を切った。

「祈りなさい少年。貴方は重い悩みを背負っているようだ。それが何かの罪であるのならなおのこと、神に祈るのです。この世の善悪を裁くのは”人”にあらず。それは”神”の業です。なれば人であり神の子たらんとする我らはただ祈り奉るのみ。敬虔なる者の祈りに、神は許しを持って応えてくださるでしょう」

穏やかに静かに、どこまでも優しく告げられたその信仰の概念が、アスカの脳髄に抉るような痛みを走らせる。疼痛などという生易しいものではない。電撃めいた激痛は胸奥の胎動をねじ伏せるほどに強く、深く走った。

――――罪を裁くのは神の業――――罪を赦すのは神の慈悲――――。

ならば、今、目の前に迫る罪悪に、神ならぬ人間はどう抗えば良いのだろう。今、目の前に迫る悪意に、今、まさに自身を殺そうとする脅威に、慈悲も説得も交渉も逃走も敵わぬ決定的な罪悪の局面に際した時、どうすれば良いというのか。

祈れば神が救ってくれるのか？　神が目の前の罪悪を裁いてくれるのか？　馬鹿げている。現に殺されかけたアスカに神は何もしてくれなかった。

神父の言葉は正しいのかもしれない。人が人を傷つけるのは罪、まして人が人を殺すことに是も否もないのだろう。だが、だからといって無抵抗のまま殺されることが正しいわけもない。悪意が誰かを殺す、そんな凶事を見逃すことが正しいはずもない。

もし、仮にそれが正しいというのなら、アスカの罪はそれこそ是非もない。事実、彼はそうすることで今、生きているのだから。

殺されたくないなら、殺させたくないなら、抗う以外に道はない。たとえ罪悪を裁く行為が人の身にあっては罪に他ならないのだとしても、やはり同じこと。人である身には、罪を赦すこともまたできないのだから。

「天に在します我らが父よ、貴方の慈悲で、この迷い子を導き救いたまえ――――ａｍｅｎ（エイメン）」

祈りの言葉は厳かに、夕暮れの聖堂に染み入るように導く。昼と夜との境界、光と闇との境界、今はどちらでもないけど、その先に迫るのが暗黒であることは決まっている。まさに自分の存在を示しているようだ……と、暗澹とした心境は、それでいて奇妙に晴れやかでもある。

誰かに自分の罪を認めてもらえたことが嬉しいとは皮肉なものではあるが一部の悩みが解けたのも事実。

（僕は人殺しだ）

が、そう自嘲と共に自覚して、しかし、それでも本当のところアスカは、心の奥でそれを肯定できずに――――否、否定したいと思っている。

誰もが自身を正当化する自分は罪悪ではないのだ……という自己欺瞞。

けれどそんな欺瞞は、ふとしたきっかけに大きく揺らぐ。多くのそれは罪悪感。己の罪を直視し、認めることで抱く魂の負い目。悪いことだ、良くないことだとされながらも、そのいずれも犯さずには存在できないという人間の、矛盾を孕みながらも消えることのできない業。

それは保身のための自己弁護だと言われるかもしれない。小賢しく開き直っただけの言い逃れだと言われるかもしれない。だが、それでもやはり、疑念は今も深く根付いている。

アスカは自身が死にたくないが故に人を殺した。人殺しは間違いなく罪である。

正当防衛だから、なんだというのか。自分の命を守るためだから、殺したことを許してくれる？　そんなわけがない。どんな理由であれ、命を奪うことは弁護の余地のない罪悪だ。許されるはずがない。許されていいはずがない。

神父は善悪や罪科を人の意思で判断し、選り分けることこそが罪悪である。人の子が善意を裁くこと、それこそが間違っているのだと言った。

確かにその通りだとアスカは思う。それが正しいと思う。けれど、それでは立ち行かないこの現実もアスカは知っている。殺されかけていた自身に、神はなんの裁きも、救いも与えはしなかった。

この世に、あるいは遥か天の高みに神がいるのか、いないのか、そんなことは分からない。けれど、何も答えてくれないのならば、いてもいなくても変わらない。

それとも、多くの使徒たちが言うように、それらの迷いや苦しみや災禍の全てが神の試練であり、人がそれらを乗り越えることこそが神の望みであるというなら、是非もない。

人を導くために人を殺すモノを、アスカは神だとは決して認めない。

ああ、だからこそこの苦悩は――――考え悩みながらもいつもそこで行き詰るのだ。アスカが認めない”神”と、成した罪は同じ――――何かのために何かを殺すという概念。結局は何もかも間違っているとこになる。

自嘲と自責はどうしようもなく心胆を抉り、脳髄を軋ませるそれ。

「……？」

そこで自分を見る神父の視線の違和感に気付いた。

ニコニコと陽気に剽軽（ひょうきん）に振舞っていながらも、その雰囲気は痛ましいほどに悲しみで、哀しげで、その双眸は今にも涙を零し始めるかのようだ。それは普通に接している分には分からないほど微かな違和感なのかもしれない。だが、アスカ自身が似たような感情を抱

いているからか、神父の浮かべた笑顔の歪さと儚さが、不思議とハッキリ感じ取れる。

興味がないといえば嘘になる。だが、そういうことを露骨に尋ねることこそ礼儀知らずであろう。アスカだって、心の傷に無遠慮に触れられれば不快に過ぎるというものだ。

視線をずらして、前方の祭壇――――そこに掲げられた十字架を見遣って、アスカは思考の中に蟠る疑念をゆっくりと抑え込もうとする。抑え込み呑みこんだ様々な疑念の中で、それでも浮き上がり、思考の中に居座るのは今、アスカが苛まれている疑問。

「それは神父としての言葉ですか？　それともあなたの自身の想いの言葉ですか？」

「――――――さあ、どちらだろうか」

アスカが質問した直後、傍と分かるほどに神父の雰囲気が変わった。が、それも一瞬で元に戻り、はぐらかすように先程までとは違ったぼんやりと投げ遣り気味の言葉に、短い苦笑とも取れる呼気を挟んでアスカは目を閉じた。

「あなたは”絶対に赦せない罪”って、どんなことだと思いますか？」

暗く視覚を閉ざしたせいか、自身の問うた声はやけに鮮明に響く。返答はすぐにはなく、染み入るような静寂の中で、アスカの声の残響が教会内に響く。

「”絶対に赦せない罪”……信仰に生きている人なら、神が

神でいられなくなるような罪は赦してはいけない」

黙考の後に紡がれた返答は、だからこそ、目を閉じたアスカの耳朶には、物悲しげに響く。

神が神でいられなくなる罪――――それを犯すことで神の威光が薄れるような罪のことだろうか？　信仰が揺らいだり、神を否定することに？がるようなこと。それとも言葉のまま、神という概念が別の何かに摩り替わってしまうことなのか？　そういえば、キリスト教を始めとした幾つかの宗教は、自分達の信じる神が”唯一絶対”であるという教理を守るためには、それ以外の神――――すなわち異郷の神々を軒並み異端として否定した歴史があるが、そういうことなのだろうか？　しかし、むしろそれこそが神を神でなくす罪という感じもする。ならば、逆にその異端視のことを指しているのか。

何となく良く分かるようで、正直良く分からない。そんな小難しくも曖昧な返答の中で、アスカの内心に響いたのは答えの内容そのものよりも、その答え方。

”――――赦してはいけない――――”

神父はそう言った。なるほど……と、アスカは思う。きっとそれこそが、神父にとっての”絶対に赦せないこと”なのではないだろうか。

「あなたは……赦したいんですね」

呟きは思いのほか密やかに、それでも静謐な堂内には充分に染み渡る。神父はその笑顔を微かに崩した。神父の顔を一目見た瞬間か

ら感じていた類似感。あれは鏡で見たアスカ自身の顔にそっくりだったのだ。

赦せない。誰かを、何かを……なによりも自分を。

「――――――――」

神父はアスカの言葉に何も返さない。返せないといった方が正しいのかもしれない。一度崩れた表情を戻してからは、アスカには全く感情を読み取れない。

「僕は赦せない。他の誰でもない。自分自身を……赦せない」

この世には、見過ごせないほどに思い罪科というものが、確かに存在する。キリスト教神学の”七つの大罪”にも語られるように、人が生まれ持った業であるというなら、否定できないし、否定しようもない。元より全ての生物は、生きるために殺し、生み出すために壊すという罪科を背負っている。中でも人間の業の多くは、それらの生物の営みからハッキリと逸脱しているのだから、確かに罪深い。

安らぐために殺し、楽しむために壊す。知恵をもって生きる人間の罪業。

ああ、だからこそアスカは、目蓋を閉ざした闇の中でゆっくりと自分が放った言葉を反芻する。

”――――絶対に赦せない罪――――”

アスカは今、それに遭遇して直面し、思い知っている。自身の罪

悪を赦せない。否、赦したくないのだ。

裁いてくれる筈の相手も、そもそも罪さえ存在しないこの世界で。真実、赦す事が出来るのは、自身だけなのだから。

それは出口が有るのかも分からない迷路（地獄）。きっとこれからも、苦しむ事になるだろう。けれど、痛みから解放するだけが救いではないから安易に自分を赦そうとはしない。

「……」

自身の裡で反芻するアスカから視線を外した神父が見たのは、窓硝子から見える陽が沈んでいく太陽。

「――――もう遅い。帰る頃には陽が暮れてしまう。今日は泊まっていきなさい。御飯と寝床ぐらいは用意しよう」

これから町に帰るにしても陽が完全に沈んでしまう方が早い。それを考えての神父の提案だった。もしかしたら他の理由があったかもしれないがアスカには預かり知らぬことである。

「……はい、ありがとうございます。お世話になります」

何時の間にこれほどの時間が経っていたのかと同じように外を見て感じた。

急げば帰ることができるかもしれないが今はそんな気にはなれない。だから心苦しくはあっても神父の提案は渡りに船なわけで、暫しの黙考の後、礼を言って頭を下げる。

そして神父の後に続いてアスカは教会の奥へと消えて行った。その姿を十字架に磔にされた救世主（メシア）が何時までも見守っていた。

第八話　　罪と罰と少年（後書き）

次回の更新は、来週の日曜日午前０時に更新したいと思います。これからは麻帆良に行くまでは一週間単位で更新できます。何とかストックができたので。

予定より遅くなる場合は、その都度、活動報告に上げます。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

活動報告で修正や経過報告を書いてたりしています。　偶にサボりますが。

第九話　　神父と玉藻と少年（前書き）

ユニークが累計１００万人を超えました。数にすると凄いですね。

今回はタイトルにあるように前話で出てきた神父が大きく関わってきます。

文字数は１４７７７字です。

それでは、どうぞ！！

第九話　神父と玉藻と少年

神父の勧めで教会に泊まったアスカだが、それ以降も教会に居つくようになった。教会に居ついたのに特に理由があったわけではなく、単に居場所がなかったから。

魔法学校では、人殺しになった自分が正しい道を目指す彼らと同じ空間にいることに耐えられず、数日もしないうちに授業に一切出ずに図書館に篭りきりになり、寮を出て数キロ離れた教会から通うようになっていた。一月も過ぎた頃には半分は影分身が代行していた。

事件後にアスカは直接、ネカネと会ってはいない。どうしても変わってしまった自分を見て嫌われることを怖れたからだ。下手に騒ぎになるのも面倒だったので、教会に住み着いたことは玉藻が校長には伝えてある。

事件後の対応で仕方なかったにしても自分の不手際を悟った校長は、玉藻から「今はそっとしておいてほしい」という言葉に従い下手に干渉せずに静観することにした。他に手段がなかったとも言えるが考えに考え抜いての苦渋の決断だったのだ。

当然の如く何があったのか事情を知らぬネカネは、突然アスカが寮から姿を消して学校でもいるはずなのに出会えず、どこに移り住んだのかも教えてもらえずに苦悩していることをアスカは知らない。ネカネが真実を知るのはもっと後になってから。その時になってネカネは自分の罪を突きつけられることになる。

アスカが教会に居着いたことに神父は特に何かを言うことは無か

った。それどころかアスカが物置の掃除中に見つけた別荘（内外時間が変わらない）を「強くなりたいから使わせてください」と頼んだら、ならばと「私が強くしてやる」と鍛え始めた。

その過程で人を殺したことで、アスカが＜魔力＞などの＜力＞を一切使えなくなったこともあったが玉藻の荒療治によって治された。治ったではなく、治されたである。軽く死に掛けたが。内容については「黙秘権を行使する」と思い出したくないからか、アスカは後に後述している。

そして＜力＞が使えるようになり、神父が師となっての修行は苛烈を極めた。

「ぬぐうううううううううう！！」

アスカは指一本で逆立ちしていた……玉藻の土遁で作り出した針の上に立って。その状態で既に一時間以上も＜魔力＞を収束して身体を何とか支えているが全身は汗びっしょりで、支えている筋肉はプルプルと末期の如く震えている。

「もう、へばったのか。情けない奴だ」

別荘にアスカの苦痛に満ちた呻き声が響き渡る。もはや限外寸前というアスカを前にして神父は初めて会ったときのような他人行儀な感じではなく遠慮も呵責も無い。

「神父！！……これは……やりすぎ……だと……思うん……です、けどっ！」

「強くなりたいと言ったのはお前だろう？　異能はあっても、ずば

抜けた力や才能を持たないお前が強くなるには＜力＞の制御（コントロール）を身につける必要がある。それにはこれが一番手っ取り早い」

汗をダラダラと流し、掛かっている負荷でやばい感じに身体が震えだしてきたので堪えかねたアスカが叫ぶと、神父は最初に頼んだのはアスカで、強くなりたいならこれが良いと言う。

「なら、何で漫画の修行法を試すんですか？！」

普通なら神父の方が正しいのだが片手に持っている物――――日本の漫画が説得力を無くしている。

「限界ギリギリまで一点に放出するという修行法事態は十分に理に叶っている。喚いてないでそのまま後、五時間続けろ。言っとくが、サボったり、落ちたら地獄を見ると思え。まあ、途中で指を変えるぐらい許してやる」

今もアスカの人差し指から放出している＜魔力＞が針先が刺さらないように全体重を支えていて、既に限界間近だというのに神父は無茶を言う。

長時間姿勢を維持たければ＜魔力＞の放出を限界まで抑え、かつ長時間安定させるという二重の作業を行わなければならない。できなければ針がアスカの身体を串刺しにして、文字通り身体に穴が空く事態が待っている。

「「「「「「「「「「あ、悪魔かあんたは！！！」」」」」」」」」」

別荘にアスカの叫びが十重に響き渡った。差に在らず、アスカの横には影分身で出した分身体たちがずらりと並んでおり、その数は

十や二十ではきかない。分身体が本体と異口同音に叫んだのだ。

分身体たちは＜魔力＞だけでなく、＜チャクラ＞と神父に使い方を教えてもらった＜気＞を使っている。影分身の経験蓄積を玉藻から聞いた神父が術を行うように指示したのだ。

分身体が体験したことや目撃したものは分身体が消えたとき、術者の記憶として残るので修行に使えば何倍もの速さで術を習得できる。反面、分身体の疲労も術者に還元されてしまい、さらには分身体の数だけ本体のチャクラも分割されるため、チャクラの少ない者には不向き。莫大なチャクラを持つアスカだからこそ可能な術。

ただでさえ消耗するのに、影分身をしたことで内在する＜力＞が分割されたので本体の疲労が大きい（分身も同じだが）

ちなみに玉藻はアスカが逃げ出さないように待機していた。以前に似たようなことがあった時、逃げ出したのを嬉々として捕まえられたのでアスカは逃げることも出来ない。

「「「「「「「「「「ぬぐぅおおおおおおお！！」」」」」」」」」」

「ほら、後４時間５５分じゃ」

分身体共々に叫びながら、玉藻が残り時間を言っているが少しだけ神父に「強くなりたい」と言ったことを後悔していたアスカだった。

別荘内に流れる川の畔（ほとり）にアスカと玉藻の姿があった。神父の姿がないのは教会の雑事があるためで、今日の修行は玉藻が担当することになっている。

「今度は何をするの？」

若干、アスカの腰が引き気味になっているのは、ここ最近の修行内容が中々に常軌を逸したものになってきていたから。自分で考えて行う分にはいいのだが、玉藻と神父が考えたものをすると文字通り限界に挑むことになるので少し敬遠気味になっている。

「ふっふっふ……この川の上を歩く！」

「はぁ？　ああ、木登りの応用か」

何故かノリノリの玉藻はズビシッと川辺を指差した。いきなり訳の分からないことを言われて、アスカは素っ頓狂な声を上げるもチャクラ維持のために木登りの修行したことを思い出して、恐らくアレの応用なのだろうと当たりをつけて納得した。

「木登りでチャクラを必要な分だけ必要な箇所に集めてずっと維持するだけ。ずっとそのチャクラ量を維持するだけ。木は固定されているものだから吸着しておくだけでいい。つまり一定量のチャクラを練りこむための修行じゃ。じゃが……」

そこで一旦、説明を区切ると玉藻はチャクラを練ると、おもむろに川に向かって歩き出した。すると玉藻の足は川に沈まず、そのまま水面を歩き出した。

アスカは、その様子を目を開いて感心したように「おお～」と声を上げて見つめる。

「こうやって水面を歩くには、チャクラを水中に足から常に適量を放出し、自分の体を浮かせる程度に釣り合わせなければいかん。このチャクラコントロールは維持するより難しく、一定量のチャクラを術などのために放出して使うコントロール修行じゃ。ほれやってみい」

「うん、分かった。……まずは足にチャクラを溜めて。常に一定量放出しながら……身体の重さと釣り合わせる……」

そう言われてアスカは教えてもらったことを反芻しながらチャクラを足に集中し、放出するように川に踏み出した。

「あ！　す、少しだけど浮いてる！」

アスカの足の裏が水面につくまでとは行かなかったが、少し沈んでいるがちゃんと浮いてるようになっていた。それを実感して嬉しそうに玉藻に振り返る。

主が喜んでいるのを見るのはやはり楽しいと実感しつつ、玉藻はウンウンと頷くのだった。

「……おっ、とと……わ！　あちゃちゃ――――――！！」

調子に乗って何歩か踏み出したところでバランスを崩して水の中に沈んだアスカだが、直ぐに叫び声と共に跳ね上がった。

「ああ、言い忘れておったがさっき火遁を放ってしまっての。多分、この川の水の温度は６０度を越えておるから失敗ばかりすると、茹(ゆで)蛸(ダコ)になってしまうぞ？」

「絶対にワザとだろ！？」

本当にいま思い出したかのようにしれっと言う玉藻の表情は笑っている。主が喜んでいるのを見るのも好きだが、困っているのを見るのも好きな玉藻だった（困らせていいのは自分だけ）

とはいえ、ただ困らせるためだけにこんなことをしたわけではなく、

「うぉっと……おっ……お！　少し分かってきたぞ！」

数回目のチャレンジで大分コツを掴んできていた。失敗すればお湯に真っ逆さまともなれば、嫌でもやる気がでるというもの。だからこそ、このチャクラコントロールのコツをこれほど早く掴むことができる。

何事においても近道などないが、到達点に至るまでの歩むスピードを早くすること出来る。

「あちゃ――――――！」

「ふふふ」

実は本当の本当に、アスカが困る表情が見たいのが目的なんじゃないかというぐらいに笑う玉藻の姿があったのは秘密である。

珍しく別荘ではなく、外で修行をすると言われて連れて行かれた場所は町外れの街道のど真ん中。ようやく陽が登り始めたぐらいの朝っぱらなので人っ子一人いない。

「は？　もう一度お願いします、神父」

「街道の雑草を抜いてほしいと言ったのだよ。本当は町の集まりの仕事なのだが、無理を言って任せてもらった」

思わず信じられないような言葉を聞いて問い返したアスカだが、返って来た言葉は変わらなかった。

「……広いなぁ、何キロあるんだろう？　いっその事、火遁の術で焼き尽くしたいなぁ～」

視界の限り見渡すと街道の脇には伸びきった雑草の群れ。一年に一度、町の有志で集まってやる雑草抜きを、何故か神父がアスカ一人でやれとか抜かしやがったので、火遁で焼いたら楽なのになぁと現実逃避に陥っていた。

「ハハハ、心配は無用！　貴重な時間を、ただの草毟りで潰す訳がなかろう！」

何故かやたらハイテンションの玉藻が、覚えたての火遁の印を結ぼうとしたアスカの手を掴んで止めた。更に片手で持ってきた大荷物の鞄を漁って、取り出した何かをアスカの眼下に突き出す。

それを見たアスカの感想は一言で「一体、何なんだこれは」だった。

「見よ、我特性の根性ベルトだ！　これを両手足に巻きつけるように」

開いた口が塞がらない。まさかこの現代で、こんな古典的な修行方法をやらせようとするなんて想定外過ぎる。

あまりのベタな修行方法に絶句し、渡された重りの重さに呆れよりも先に、こんなものをつけてやる羽目になるという事実が重く圧し掛かって神父の方を見るも、初めから知っていたのかさっと視線を逸らされた。

「……いや、あのね玉藻。流石にこれは――――――」

「なに！　重しが足りないとは！　流石は主、もっと増やしてやろう」

「いや――――――!?」

止めないかと言おうとしたアスカが間違いだった。なにかこの重りを使った修行法を考案した奴の呪いにでも掛かったのか、やたらと情熱的でハイテンションな玉藻が変な勘違いをして重りを増やされた。

「うぅ、身体全体が痛いぃ。つ、疲れた……」

何とか朝から陽が暮れるまで丸一日掛かりながらも、なんとか雑

草抜きを終わらせ、筋肉痛で軋む身体を引き摺って教会に帰還した。持久力など当の昔に尽き果て、足りない分を＜チャクラ＞で補い続けたアスカは全身疲労に陥り、明日まともに動けるか微妙なところである。

「……生きろ」

途中で一人だけ玉藻の魔の手から撤退した神父は、そう言ってドアを開けて死にそうなアスカを出迎えた。神父なりの励ましの言葉だが、まだ死んで無いと言おうとして眼前に鏡を突き出された。

（うん、眼が死んだ魚のように腐っているな）

神父がそう言いたくなるほどに全身に生気が無く、眼に死人のように光がなかった自分でもそう言うだろうと思って神父の言う通りだった。

「でも、そう言うなら途中で助けてくれても「さて、夕飯を作らんとな」――ちょっと！」

こうなる前に助けてくれてもよかったんじゃないかと言っている途中で、神父はアスカを置いて奥に引っ込んで行ってしまった。

「まったく情けないぞ。主よ、根性が足りん。明日はもっと広いところを請け負ってきたからな。場所は――――」

「ぐはっ」

後ろからやってきた玉藻が愚痴口と文句を言いながら、さりげなく明日も地獄がもっと凄いことになると告げた。神父に見捨てられ

たと悟ったアスカは、力を失って崩れ落ちた。そのまま夕飯の時だけ起きて飯をかっ食らってトイレ以外は寝続けた。

翌日、寝続けたことですっかり筋肉痛もなく過ごせる玉藻の回復力を怨みながら、前日と別の街道の雑草をウルウルと泣きながら抜いているアスカの姿が目撃されたという。

ちゃんとアスカ自身よりも遥かに詳しい玉藻がこうなっても肉体を管理しているので、筋肉の発達を偏らせたり、成長を阻害させることはなく、普通の子供ではありえないレベルの運動能力を持つに至るのだが当時のアスカには知るよしもない。

大きな滝が流れ落ちるそこは、大量の水飛沫が巻き起こり、屈折を余儀なくされた陽光によって大きな虹がかかっている。

なぜか別荘内にある滝の麓にアスカと神父はいた。

「登れ」

「……」

神父に確かに見上げただけで絶句するほどの激流に、チャクラを

利用して登れと言われたのだ。胸が空くような思いになったのは言うまでもない。

思わず昨日掃除したばかりの耳を穿(ほじ)って「聞き間違いですよね？」と視線で問いかける。

聞き間違いであってほしいというアスカの願いは聞き届けられず、ただ一言「登れ」と低い声で最後通牒のように申し渡されたアスカは、

「無理です！　無理ですって！　沈んだら溺れ死にますって！」

木を登るのとは訳が違う。水面に立つのとも訳が違う。滝は動いている。激しく流れている。さらには上から下に落ちている。

死ぬ、もし失敗したら死ぬ、というか嫌という一念で拒否を続けるが、神父はいっそ清々しいほどに嘘くさい爽やかな笑みを浮かべながら、「登れ」と言うのだ。

最近は重りをつけて生活することに順応してしまった自身の身体を恨めしく思いながらも、見上げるは断崖絶壁といっていい滝。果たして頂上まで何メートルかは考えたくもない。

「束の事をお聞きしますが、重しはつけたままで……？」

「当たり前だ。早く登れ。さっさと登れ。今すぐ登れ」

はて？　自分は何で強くなりたいなどと言ったのかと少し前の自分を後悔していたアスカ。何の装備無く、逆に重し付けた上で命綱無しの滝登りなんて幾らなんでも無謀である。

「……はい、登ります」

だが、神父から逆らい難いものを感じて、アスカは本当に嫌そうに足を引き摺りながら滝の真下を目指す。

真下から見上げると、頂上が見えないほどの絶壁から流れ落ちる滝は恐ろしさすら感じるほどの威容を誇っている。人の身など軽く捻り潰すことができるだろう圧倒的な大自然に勝てる道理などあるはずもなく、アスカは折れた自分の心を必死に自己弁護していた。

（だって、ここで嫌がると、もっとひどい訓練メニューに）

嫌がったときの悪ノリした玉藻と神父の訓練メニューを思い出して、思わず閉じた瞼から心の汗という名の雫が零れ落ちた。

「よし……！」

なけなしの根性を心の底から引きずり出し、掛け声と共に瀑布が織りなす水壁から最初の一歩を踏み出す。

ゆっくりと鈍足ながらも一歩一歩踏みしめながら、着実に登っていくが、重度の負荷をかけられた肉体が悲鳴をあげる。両手首と両足首に装着された枷の重量がアスカの身体に負荷を掛け続ける。

足を上に動かすたびに太股の筋肉が軋み続け、重りがさらに身体中にかける負荷を増し、滝と直角に立つアスカの身体は地球の重力を諸(もろ)に受けて、折れないように支えているは腹筋は激痛と共に気だるい灼熱感が圧し掛かる。

精密なコントロールを要される【滝登りの行】は、少しでも集中力を欠くとすぐに地面へと落下してしまう。当然命綱などなく、落ちたらただでは済まない。

重りのせいで湖に落ちると普通に死ねる。人間の身体は水に浮くのようにできているものなのだが、おそらくは金属であろう高質量の枷は水に浮かない。沈むだけ。しかも、落ちたら落ちたで枷のせいで身体が動かしにくいので死ぬ確率が鰻登りである。震える身体を気力で奮い立たせて、再び滝を登り始める。

針の穴に糸を通すような神経を削る作業。たった一歩踏み出すだけで精神力が根こそぎ奪われるなど理不尽極まりないことではあるが、助けてくれると思っていても、水面にダイブなどしたくないので、チャクラコントロールに全身全霊を捧げていた。

「ぬぐっ……がぁ……む……」

アスカの主観では気が遠くなるほどの時間をかけて、ようやく滝の中ほど到達した。気はまったく抜けなくても半分過ぎたという事実は、アスカの中で救いになった。

「なぁ！」

突如として視界が暗くなり、見上げると岩が滝の上から落ちてきた。悲鳴を上げ、慌てて避けるも岩は間断なく降り注ぎ続けていて気の休まる暇も無い。

「ホレ、どんどん行くぞ！！」

聞こえてきた声の位置から玉藻が滝の上から石を落としているの

が分かり、絶望感が増した。

何故か姿が見えないなと思っていたら、最初からこの役割が決まったいたらしく、雨霰（あめあられ）と降り注ぐ岩石を避けながら、吸着させている＜チャクラ＞と平行して＜魔力＞を全身に回す。

「うぁぁぁぁっっっ！」

避けられるものは避け、避けられないものは＜魔力＞で強化した身体能力で破壊して滝を登っていく。岩に押されて湖面に落ちれば、真面目に死にかねない事実が目の前に迫っているので必死にもなろうというもの。

＜チャクラ＞と平行して＜魔力＞を纏っているので強化率は微妙。なので、岩を砕いた拳がジンジンと痛む。それでも何とか疲労、痛み、恐怖といろんなものと闘いながらアスカは滝を登りきることに成功して歓声を上げた。

「うぉぉぉぉぉぉっっっ！！　やったぞ、登りきったぞ、流石は俺！」

駆け上がった勢いのまま雄叫びを上げて、頂上の開けた場所に辿り着いて安全な地面に息切れしながら仰向けになり、大の字に寝転がる。幾度となく落ちて死にそうになったが、アスカは無事に乗り切り、傾けた視界から見下ろせる絶景を味わっていた。

「さあ、次は降りるぞ」

――――――などと絶景を味わう暇も無く、玉藻は無情にも言い放った。そのさも当然の如く発せられた言葉に、アスカの思考は見事な

までに停止した。

「え？……無理ッ！」

「いいから、さっさと行け！」

身体が既に限界を超えているので拒否するも、抵抗する間もなく玉藻の小脇に抱えられて流れる川に投げ込まれた。

「わぎゃ――――――っ！！」

そのまま力の入らない身体をどんぶらこ、どんぶらこと流されて悲鳴と共にアスカは滝壺へと落ちて行った。ドボンと沈み、まったく上がってこないアスカを、自分でやっておきながら慌てて救助する玉藻の姿が見られたという。

なにも一口に修行といっても身体を鍛えるばかりではなく、時には知識や他の分野にも手を広げていた。

普通の人間は限度を作り、留まる。それは何も知らないことと同じだ。もし、同じ「力」……「体力」も「技術」も同じ力であるなら、この者同士の勝敗は何で決着がつくか。それは見える物を見る力だと神父は持論を述べた。

「見える物を見る力？」

通常・・・人間は自分が「巨大な可能性」を持っていることに気付かず過ごす・・そして同じ力の持ち主同士は偶然によって勝ち負けがつけられたと思っている。

そうではなく、同じ力のぶつかり合いなら必ず優れている方が勝つ、と。

「そうだ。これを見れば良く分かる」

そう言って神父が取り出したのは二枚の写真。

片方は海らしき場所で木造の古い船と波が高く上がって波飛沫が上がっている写真は、日本の江戸時代に「画凶人」と呼ばれた葛飾北斎という絵師によって描かれた「富嶽三十六景」。

もう片方は容器に入ったミルクの上面にミルクを1滴垂らすと、きれいな王冠状になった状態を超高速度カメラによって捉えた「ミルクの王冠」。

何万分の一秒で捉えられた水の一瞬の姿が、機械でしか捉えられない世界と、人間の目が描いた物と……両方を比べるとある事実が明らかになってくる。

「あ、同じだ！！」

「ほう、波頭が超高速度カメラのものと全く同じとは」

１８０年もの昔、その一瞬の水の実像を捉えた者がいる。機械でしか暴けないミクロのフォルム。何万分の一を見抜いた男が確かに

いたのだ。

アスカは驚愕し、玉藻は人間の可能性に際限がないことを実感した。

「人間の脳には「上丘」という退化しかけた古い脳があり、この脳がこの一瞬を捉えたと言われている。人間がまだ直立歩行を始めた太古の昔から受けつぐ野生の脳。現代人は新しい脳である大脳新皮質を多く使っているそうだ。身体だけではなく、そちらも鍛えていく」

「はい！」

その常識で固められた大脳だけが「力」ではなく、見えるとされているものさえ見える。常識では押さえつけられない本能の力がまだ自分の身体に眠っているのだとアスカは自覚した。

「眼」というのは武術やスポーツにおいて「視力」の度合いだけを示すものではない。一般に言われる「1．2」「2．0」などの視力とは違う。それ以上の「眼」で見て瞬時に「体」を反応させるまでに能力を向上させないと真の意味で「眼」がいいとは言えない。

「オプトメトリー」は眼が過不足なく機能しているか、見るべき対象を正しく捉えているか、そして眼が効率的に使われているか・・・・。

トレーニングを通じて直接、脳や肉体を反応させ「訓練し」「鍛え」「向上」させるものだ。

「できる」と思う者がやる。世の中「できる」と思う奴と「でき

ない」と思う奴がいるが、勝つには「できない」は始めから必要ない。

それらの鍛えるのに神父は【ビジョントレーニング】という多種多様なトレーニング法を取り入れた。

【ビジョントレーニング】とは眼の機能を正しく効率よく指導する方法・・・・１００年以上の歴史を持ち、今はアスリートにも取り入れられているトレーニング法。人は眼が見えることで満足しているため、それ以上は必要としない。

しかし、同等の力を持つ者同士の戦いで鎬を削っているなら、この眼の「オプトメトリー」は更に精度を上げた感覚をもたらし勝者へ導く。

【マースデンボール・チェーシング】

天井から糸で吊るした野球のボールに、小さなアルファベットの文字を沢山はりつける（これをマースデンボールという）

「５＋６は？」

「１１」

振り子のように揺らせて、顔は固定し、目だけで文字を読み取る。文字が読めるようになったら、同時に簡単な足し算などの問題に答える。注意力は計算に奪われるが、文字は常に読み続ける。計算に意識を持っていかれても、無意識に文字を読める能力を身につけるなければ後で玉藻主催の罰ゲームがあるので必死にもなる。

【フォア・コーナーズ】

「『右、左斜め下、上、右斜め上』」

一室の壁から2～3メートル離れて立ち、テープに入っている指示に従って目だけを動かして壁の四隅……つまり右上、右下、左上、左下を見る訓練で、目の運動性だけでなく、指示に従って素早く反応するトレーニング。

【ハートチャート・トレーニング】

――――――ポチャン、ポチャン、ポチャン、ポチャン

「眼が回りそう……」

アルファベットや数字が書かれた紙を用意し、水道の水滴の音に合わせ、左上隅。右から二列目、下から二列目、中央、右から二列目。上から3列目・・・・左から3列目、下から3列目と順に見ていく。

【ペンシルサッカード・トレーニング】

サッカードとは視線を移す時に生じる急速な眼球運動の事。2本の鉛筆を使って左右を瞬間的に見るトレーニング。一定のリズムに合わせ、顔を動かさずに目だけで正確に鉛筆を捉える。

眼はリラックス時は瞳孔を広げて毛様体を弛緩し、遠くにピントを合わせるが危険が迫ると瞳孔を縮小し、より近くにピントを合わせようと調整する。この自動的に反応する自律神経の働きで実際の意思と、実際のピントの合い方にギャップが生じる。

【カーシュナーズの矢印】

――――カチッ、カチッ、カチッ、カチッ

上下左右に矢印が書かれた紙の前に立ち、メトロノームの音に合わせ発生・動作を正確に行う。声を上げて腕をその方向に動かす。更にメトロノームのスピードを速くし、発生・動作を今度は正反対に行う。

このトレーニング法は自分の体を動かす、想像して動かす……より早く、より些細な刺激にも反応させるためのもの。肉他と心の正確な認識力を高めるものだ。

【ビジュアル・メモリー】

「……むむ、難しい」

ある図形を脳裏に焼きつけ、９０。回転させた形を描く。または裏返しに描く。このイメージ力は最も高度なもの。描いた図形をイメージし、回転させたり、ひっくり返したり、折り畳んだり、イメージをさまざまに加工するトレーニング。イメージを「操作する力」。

どんな図形もいろんなイメージに変形する。様々な図形を変形させるトレーニングをしておくことで情報が引き出しやすくなり、突然起こった状況に正確にスピーディーに反応できる。

その他にも写輪眼などの異能を用いずに、基礎能力の強化に徹した。アスカは自覚しないまま、身体も精神もより強靭になっていっ

た。

魔法学校でのアスカへの虐めは変わらなかったが、修行のハードさにストレスを溜めていたアスカは、教会に居付いてから直ぐに遂に我慢も限界に来て爆発した。つまり、やり返すという行動――――ばれないように闇討ちに出た。

ついでに修行の成果も兼ねて、幻術の訓練台にしたり、覚えたてで使い慣れていない【月読】の実験台にしたりして【万華鏡写輪眼】の具合を試した。

結果として分かったのは、アスカの【写輪眼】が不完全であるということ。確かに【万華鏡写輪眼】を開眼しているが、ただの【写輪眼】として使うことができないのだ。【写輪眼】を発動したつもりでも自動的に【万華鏡写輪眼】になってしまう。負担は玉藻の回復力が効いているのか乱用さえしなければ視力が落ちるということもなかった。回復力を超えるほどに酷使すればその限りでもないというのが玉藻とアスカの共通見解である。

アスカを率先して虐めていた去年卒業した者たちには、玉藻が執拗に追いかけて廃人同様にして再起不能に追い込んだらしい。暫く見なかったと思ったらすっきりした顔で帰って来たので聞き出したら、如何なる手段を使ったのか魔法世界にまで行って制裁してきたようで、よほど当時何もできなかったことで鬱憤が堪っていたのか始終ご機嫌だった。

虐めていた者達が卒業生も含めて相次いで廃人とまでは言わなくても、何らかのトラウマを抱えたりして退学したり休学したりすればアスカに疑いの目が向けられるのは必然の事。もちろん記憶は消しており、万が一を考えて【変化の術】で姿も変え、【影分身の術】でアリバイを作って行っているのでバレる心配はない。

お陰で虐めに同情的な生徒や普通の教師すら怖がって誰も近寄らなくなったが、元々魔法学校にはアスカの居場所など初めからないに等しいのでどうとも思うことはなかった。

そういうこともあって魔法学校に行くのは完全に影分身の役目となり、一日中図書館で本を読みふけって知識を深め、術を解いたら本体に還元するだけ。

楽しくも、穏やかな時間は修行だけではなく、教会の仕事に参加したりして人と交流を交わしていくことで、ゆっくりと傷を癒していった。教会で過ごす日常はアスカに大いにプラスに働き、一年が経過する頃には肉体だけではなく精神的にも大きく成長を遂げていた。

どこかに出かければ必ずといっていいほど騒動に巻き込まれ、狼男（ワーウルフ）や下級悪魔などの敵と戦うことになるとは考えもしなかった。

その日常は、まさしく波乱万丈といっていいほどに賑やかなもの。玉藻がアスカで遊んで慌てふためているのを見て悦に浸り、それを寡黙な神父が眺めているという光景が良く見られた。

だけど、そんな楽しい一時も終わりの時が近づいてきていた。

時が経つにつれ、神父が体調を崩すことが多く、容態は悪化の一

途を辿っていた。咳き込む回数が増え、時には薄く血を吐くほどにこもった咳が連続した。

アスカが教会に居付くようになって半年以上は経つと神父自身もあまり外を出歩かなくなり、神父としての仕事やアスカの修行を見るだけになってきていた。

アスカは神父の性格を考えて過剰なお節介を焼くことはなかったが、それでも神父が頻繁に食事を抜くようになると医者にかかるべきだと熱心に勧めた。

だが、食事後に玉藻が食器を洗い、差し向かいでテーブルについて神父は秘密を打ち明けた。

「……私は胸を病んでいてね。この教会は廃墟同然だったから私の死に場所として選んだのだよ。神父としての仕事もその一環に過ぎない」

若い頃の無茶が祟ったかな、と珍しく冗談交じりに神父は言葉を続けた。

この町に来て神父になったのも、アスカが来る一年前からだという。使われていなかった教会を改修して、そのまま神父の役職に収まって今に至る。

あらゆる医者や治癒魔法使いに頼ったし、秘薬まで使ったが駄目だった。病気がどうのというより、もはや寿命なのだと言われてしまえば、アスカにできることはあまりにも少ない。玉藻にも見てもらったが同じことで手の施しようが無い。

さらに時が過ぎ、ベッドにいる時間がめっきり増えた神父に代わり、食事や神父の仕事の肩代わりの役目まで玉藻と交代でやるようになってからは、どちらが居候か分からない。

アスカは方法がないと納得したようで神父が回復する希望を捨てなく、魔法学校の本来なら立ち入り禁止である禁呪書庫にまで入って治療法を探し続けた。

だけど、その甲斐もなく楽しかった日々は唐突に終わりを迎えた。何時ものようにアスカが、自分の部屋で寝ている神父に食事を持って行くと咳き込んで血を吐き出していた。

「！！……ゴホッ、ゴホッ！！」

「神父、今すぐに救急車を……！」

ヒュー、ヒューと明らかに異常と分かる呼吸音を繰り返す神父を前に、何時もの発作と違うのだと直感したアスカは直ぐに救急車を呼ぶため、電話しようと電話機のある場所に向かおうとする。

「待て……っ！」

振り返って駆け出そうとするアスカを、苦しいのだろう、胸を押さえた神父が呼び止める。

「誰もが迎えねばならないモノが、私にも来たというだけだ。自分の死期も見えている。私はもう助からん」

「そんな……」

憶測ではなく、純然たる現実として悟ってしまった神父の言葉にアスカは、駆け出そうとした足を戻してベッドに横たわる神父の傍に近寄る。せめて少しでも生きているという実感を得たくて手を握ると、神父も微かに手を握り返してくれた。

「できるならば……お前が巣立つところを見たかったが、そうもいかないようだ」

神父はうわ言のように虚ろな声色で、そんな叶い得ぬ願望を呟いた。

”初めて会った時に感じたのは、果たしてこの目の前の少年は本当に生きているのだろうか”

それほどまでにアスカは死に囚われていた。まるで自分がこの世界に存在してはいけないのだと、そう思っているようで、その瞳からは将来の展望も何もない。夢もなく、希望もないように思えた。ただ最後の役目を待っている老犬のようだった。

時間は人を変える。人と触れ合えば、人は変わる。その両方を経て、アスカの心の中はほんの少しだが和らいだように見えた。それが神父にとっても救いのように思えた。

罪に塗れた自身の姿から目を背け、嘆き苦しむ己の心から眼を背け、ただ日常に埋没し続けたその先に、見つけた神父のただ一つの灯火。

震える四肢に力を込めて、その身を僅かに起こすと、自分を支えるアスカの顔を見る。死の間際の自分を見て、ショックを感じているのか青白い顔で、彼は涙を流していた。

カーテンの隙間から見える白く輝く三日月の下で、月の輝きに二人は照らされていた。

「……お、ぁ……」

何かを言おうとしてカラカラに渇いた喉奥から零れ出たのは、言葉にもならぬ呻き声。そんなアスカに、それでも察するところがあるのだろう。神父は穏やかな微笑を浮かべる。

「きっとこの世には”絶対に赦せない罪”など、本当はどこにもない。罪など所詮は人が考えたものに過ぎない」

死に瀕しているのに、何時もよりも優しい声音。何時も通り笑顔の形をしているだけの泣き顔で、静かにそう断言した。それはアスカが教会に初めて訪れた時に聞いた問いに対する、神父としてではなく、神父自身の言葉だと感じられた。

「しかし、目の前に災厄があり、それを止める力と意思があるのなら、迷ってはいけない」

守るべきもモノのために罪を背負うことは、間違いではない。奪ったことそのものが罪であったとしても、守ったこと自体が間違いであるはずがないのだ。

間違いではない。間違いであってはいけない。そこで赦していけないモノを赦そうとして、失われずにすむはずの者達を脅かすことこそが間違いないのだ。

失いたくなかった。そんな後悔は裏を返せば、失わぬことで代わ

りに死ねと告げるのと同じ事なのだから。

「でも、僕は……」

アスカの躊躇(ためら)うような言葉を聞いて、神父は理解した。

そう、アスカは迷っている。自分の進んできた道、これから進むべき道に対し、自信を持てずにいる。それはいくら隠そうとしても、神父には分かりすぎるくらい分かっていたことなのだ。

死が直ぐ傍に近づいてきたせいか、幸いにも呼吸も楽になり、痛みまでやや薄らいできた。死ぬことに恐怖は無い。だけど成せばならないことだけはしなければならない。

せめて前へ進む手助けになればと決意した神父は静かな口調でアスカに語りかけた。

「これから先の人生において、君は幾つものは決断、幾つもの選択をするだろう。迷うことも多いかもしれない。この先、自分の行いに迷いが生じることがあったら、自分の信じる道を選択しなさい」

出会った当初はともかく、今は何の不安もない。神父は口元を綻ばせて穏やかに話を聞かせた。深い緑の眼を一杯に見開いている少年に、今度は断固とした声音で力強く言った。

「例えどんな決断をしようと、迷わずに進むといい。君の行く道に誤りはない。自分には出来ない事などないと信じろ！！」

アスカはマジマジと目を見張ったまま、神父の言葉を胸に刻みつけるように何も言わなかった。

「……君の進む道には無限の可能性が満ちている。だから、迷わず進め」

呟きは祈り願うように密やかに、浮かべた彼の微笑みは、思えば初めて見た本当の笑顔であるのだと思った。

どれほどの時間が経っただろうか。アスカは零れ落ちる涙を拭うこともせずに、噛み締めるように反芻して。

「覚えておきます。その……ありがとうございます。貴方に出会えてよかった」

蚊の鳴き声のように小さな、涙で震える囁きは哀しいほどに温かく、その言葉を聞いた神父は満足そうに微笑む。

「……ふふふ、そうか……」

そう一言だけ最後に呟くと、神父の目の生気が消える。神父が永遠に眠ったことを理解したアスカは、猛り狂う感情の奔流の中で、動かなくなった神父の身体を強く掻き抱く。

――――最後に微笑んだその笑みが、とても眩しかった――――

「あぁ……」

口から零れ落ちた吐息交じりのそれは嗚咽か悲哀か、アスカにも分からなかった。月だけが何時までも動かない二人を照らし続けていた。

神父の葬儀は玉藻が主導して滞りなく勧められた。町に住むようになってから二年程と、それほど親しい人はいなかったが知り合い数人が式に参列してくれた。

神父が残した遺書から遺体は教会の裏手の広場に埋められ、遺品は全てアスカが引き継ぐことになった。

神父が死んでショックを受けていた時に、魔法学校で突っかかってきた奴を懲らしめた所為で、過剰防衛ということで停学になる。が、初めから魔法学校に居場所のなかったアスカはいい機会だからと旅に出ることにした。

校長の執務室の机の上に置手紙と退学届けを置いてきた。騒ぎにはなるだろうが、ここを出て行くアスカには関係の無い話だ。

「……さぁ、行こうか」

「――うん」

神父の墓碑の前に立ったまま動こうとしないアスカを玉藻が促し、二人は並んで歩き出した。その場に残った墓碑がアスカを見送るように背後から風が吹き、アスカの背中を押したように思えた。

だから、悲しい顔じゃなくて笑って歩もうと精一杯の笑みを浮かべて歩み続けた。歩んだ先に求めたものがあると信じて。

第九話　　神父と玉藻と少年（後書き）

というわけで魔法学校を飛び出して旅に出ます。ネギが麻帆良に来た当初に数えで十歳って言ってますし、概算すると五歳～六歳ぐらいの計算になります。

修行やりすぎじゃね？と思った次第です。

次回の更新は、来週の日曜日午前０時に更新したいと思います。

予定より遅くなる場合は、その都度、活動報告に上げます。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

活動報告で修正や経過報告を書いてたりしています。　偶にサボリますが。

第十話　　旅をする少年０１（生贄の少女）（前書き）

うっかり更新を忘れていて、さっき気がついて慌てて更新しています。

旅編が始まります。旅編は四話行う予定です。

今話は最初の一話目です。

まあ、タイトルにある通り必ずしも救いがあるわけではないのでありしからず。

今回は１１，２００字です（大幅修正後は１３１３１字です）

それでは、どうぞ！！

第十話　　旅をする少年０１（生贄の少女）

旅に出たアスカは、特に目的地もないので、まず、ヨーロッパにおいても有数の歴史ある都市であり、中世および近世に建設された建造物が数多く残されているロンドンを目指した。お金は何かと物入りなので、可能な限り節約するために歩きやヒッチハイクを繰り返す。

ごつい男じゃなくて、妙齢の美女と幼い子供では警戒心も湧き難い。親子で、離婚したから故郷に帰りたいがお金がないので頼めば比較的ヒッチハイクはやり易く乗せてくれる人は多かった。半分ぐらいは玉藻目当てが多かったが。

アスカがその町を訪れたのは旅を開始してから三日後で、ある凶悪事件によって掻き乱されていた。凶悪事件といっても人が殺されたり、害を受けたわけではない。

約一年前から野良猫や野良犬が街から姿を消し、続いて家畜、ペットと突然いなくなる事件が相次いでいて、犯人の目的が分からないので、人間も標的にされるのではと町中を恐怖が覆っていた。

当初、単に誰かのイタズラと放って置かれたそれが、時と共にエスカレートするにつれて、恐怖が伝染していき、犯人は杳（よう）として判明せず、地元警察の懸命な捜査も功をなさぬまま、アスカが町にやってきた。

町に入ったアスカが見たものは、事件が進んでも犯人が捕まらず、互いに疑心暗鬼になって用事が無い時は家に閉じ篭る町の住人達の姿。

アスカは旅に出てからは、寝る場所は人の家に泊めてもらうか、そうではない時は野宿で過ごすことにしていたが、ヒッチハイクで乗せてもらった男性――――クイートの家に泊まらせてもらうことになった。

「わぁお客様だね、お父さん！」

「あぁアスカ君だ。仲良くしてあげてくれ」

「あたしリスティ。よろしくね！」

「えと……僕はアスカ、よろしく」

男性の温かい家庭。そこの一人娘のリスティは、アスカと年が近いということもあって初対面なのにかなり仲良くなった。普通なら精神年齢が大人と子供ほど離れているので、そうはならないのだがリスティの年齢相応の純真さや素直さは、アスカの頑なな心を簡単に解すほどに人なつっこい。

神父の元で一年間、普通に人と接することができるようになっていたアスカもリスティの気性に絆（ほだ）されたのか、生来の人の良さが出てきたのか、よく面倒を見ていた。

「危ないよ、リスティ」

「大丈夫だよ、お兄ちゃん。見てて！」

一人で先走るリスティと、それを追いかけながらも行き過ぎないように諌めるアスカの二人姿は、揃って金髪なので傍から見れば仲

の良い兄弟にも見える。

そんな二人を、ここ最近、事件の事もあって暗い話題が多かったので夫婦と玉藻が本当に嬉しそうに見ていた。

「あのね、あのね、お姉ちゃん」

「うん、どうした？」

たった数日でアスカと仲良くなったリスティは、玉藻を「お姉ちゃん」と呼ぶようになり、アスカ程ではないが慕っていた。

アスカに対しては、どんな時も後をついて回り、昼間の自由時間や寝る時の布団まで同じだという慕い振りだった。夫妻もまるでリスティに面倒見の良い兄が出来たようだと見守っていた。

「今日ね――――――」

アスカがトイレに行って時間ができたこともあり、リスティは玉藻に今日あったことを眼をキラキラと輝かせて楽しそうに話している。

「あ、お兄ちゃん！」

「うわっ――――と。突然飛び出したら危ないじゃないか、リスティ」

「ごめんなさい～。あのね、あのね――――――」

楽しそうに話していたリスティはトイレの水が流れ落ちる音が聞こえると、玉藻の前から一目散に走り去って行った。ドアを開けて

出てきたアスカに飛びついて二人で話しながら、子供が寝る時間になってきたので寝室へと向かって行く。

「やれやれ、まるで娘を取られたような気がするよ」

「あなた、何言っているのよ。二人ともまだ子供よ？」

娘が彼氏を連れてきて、自分には構わなくなった父の気分を味わったクイートは妻に窘められ、玉藻は終始笑っていた。

あまりにも居心地が良いのと、アスカが去るような素振りや言動を見せるとリスティは決まって涙ぐみ、アスカの服の裾を掴んで離さなくなるので困ってしまい、気がつけば一週間も町に長居してしまった。

だけど、何時か出て行かなければならないと考えたアスカは、夫妻と相談してタイミングを見計らってリスティにバレないように出て行った。

「どうしのじゃ、主？」

「さっきからずっと胸騒ぎがするんだ。何だろう？」

だが、町から歩いて一時間の距離まで来たところで、胸の中でざわつくモノを感じて足を止めたアスカに不思議そうに玉藻が問いかける。

「何か気になる。一回戻ろう」

胸のざわつきは収まるどころか一分、一秒毎に時間に比例するよ

うに強さを増している。居ても立っても居られないようになり、何か直感的なものが働いたのかと考えた玉藻と二人で急ぎ町に戻った。

「あなた！　リスティがどこにもいないの！！」

「何！　まさか……もしかしてアスカ君を一人で探しに出たのか？！」

そこでは、これまでの事件と同じようにリスティが行方不明になっていた。玉藻は別にして子供という事で事件に巻き込まれる可能性が高いアスカは、捜索に加わることが出来ずに家で匿われる事になったが、一目を避けて独自に捜索を開始した。

単純に人手を得るという意味では、多重影分身はその恩恵を十二分にアスカに与えた。更に魔法などのアスカの持っている能力全てを活用したことで、一日も経たずに転移魔法の痕跡を見つけて辿り、犯人の居場所を見つけることが出来た。

周囲を雑木林に囲まれながらもぽっかりと空いた場所で、一つ深呼吸をして、アスカは＜魔力＞を纏わせた手をゆっくりと目の前に差し出した。

感触も反発もなく、それでも確かにアスカの手は『境界』に触れていた。

感覚を研ぎ澄ませ、実際に触れているアスカでさえ「そこにあるかもしれない」という程度しかわからないほどの見事な結界。

自身が持つほとんどの手段では破壊することが不可能であろう完成度を誇るそれがアスカの行手を阻む。物理的な力では街一つ灰に

するくらいの火力でなければ影響すら与えられないだろう。【おわるせかい】などの完全殲滅呪文ならばまだしも、ただの拳纏うしかできない＜魔力＞ではそのエネルギー全てを受け流されてしまう。

だけど、アスカの目は結界の僅かな、本当に針の穴よりも小さな綻びを見つけた。だからこそ、その顔に一片の焦燥すら浮かべることもなく、アスカは伸ばしていた右手を握り締めた。

「ふぅ～……」

その体から噴火と見まごうまでの莫大な量の＜魔力＞と、＜魔力＞に重なるように＜チャクラ＞が立ち昇る。

手を押し付けた目の前の空間がかすかに歪む。撓んだ結界はそれでも決して崩れることはない。だからこそ、高まり続ける＜力＞を針先よりも鋭く一点に集中する。

それは、至極当然の光景だった。荒れ狂う＜力＞の波が、音を立ててアスカの体を侵食してゆく。内圧に耐えきれなくなったかのように皮膚が弾け、血液が飛び散る。独りでに骨に亀裂が入り、臓腑から滲む赤が口から溢れ出る。

【千丈の堤も螻蟻の穴を以って潰ゆ】という日本の諺がある。意味は、千丈もある長大な堤防でも、ケラやアリが空ける小さな穴から崩れてしまうこともある。結界の僅かな隙間から穴を抉じ開けて通ればいいだけの話しだ。

「はぁ！！」

裂帛の声と共に針先一点に集中した＜力＞を解放する。小さな綻

びに莫大な＜力＞を注がれた結界は、アスカがようやく通れそうな穴ができた。

その穴が修復される前に通ったアスカの姿は、その場から消失した。

「これは――――」

そして結界の中にあった古びた洋館を間近に見上げ、アスカは呻いた。

本来ならばすぐにでも本格的な治療を必要とする程の傷を応急処置で済ませた。動ければそれでいい、リスティを助けるまで持ってくれればそれでいい、とアスカは考えた。

遠目にでもよく分かる、古色蒼然とした佇まい。長い間雨に打たれて赤錆だらけになった鉄格子の門。膝丈ほどに雑草が伸びた庭。塗装が剥げた壁は廃屋のように寂れ、それでいてほの暗い熱気の篭った退廃的な気配。

夕暮れの紅い空の下、ドス黒い魔力に包まれた屋敷だけが周りと比べて異様に暗い。あまりの禍々しさにアスカの背筋が粟立った。

重要なのはただ一つ――――この中から魔力を感じるということ。それも闇より深い黒と、氷よりも冷たい寒気を連想させる、極めて禍々しい魔力が。

立ち並ぶ木々に遮られ、既に太陽は見えなくなっていた。それでも紅く染まっていた空が、少しずつ闇に侵食されていく。

逢魔が時――――昼と夜の境。それは魔が跳梁を始める時。

読んで字の如く、逢魔が時は「何やら妖怪、幽霊など怪しいものに出会いそうな時間」、大禍時は「著しく不吉な時間」を表していて、昼間の妖怪が出難い時間から、いよいよ彼らの本領発揮といった時間となることを表す。

深まる闇の奥底から、夜に住まう者達の哄笑が聞こえるような気がした。

玄関の前まで来るが、直ぐにはドアを開こうとはしない。この家には隔離結界が張り巡らされている。頑丈な外部とは反対に脆い結界を解除してから、アスカは取っ手に手をかけて開く。結界を失くしたドアはゆっくりと開いて、中へと入っていた。

扉を開けると、そこは異世界だった。

妖気の充満する気配。数える気にもならないほどの人外の気配。そこかしこから漂う、怨嗟に満ちた呻き声。

「閉じ込められたか……」

《先に進むしか道はなくなったな》

館の内と外とのあまりのギャップに、アスカは内心で驚きの声を上げる。更に追い討ちをかけるようにばたんと扉がひとりでに閉まり、退路を封じた。咄嗟に飛びつくが、全力を込めても扉は微動だにしない。館の内部は、外部の隔離結界とは別の結界で封鎖されているらしく、閉じ込められたようだ。

出ようと思えば脱出の手段は幾らでもあるが、ホラー映画そのままの状況に出くわしてしまったことで、些か平静を失っていたようだ。思わぬ事態に醜態を晒してしまって僅かに頬を赤らめる。

外から感じられたのは、結界の隙間から漏れたほんの一部の妖気に過ぎなかったわけだ。流石にこれは予想外だった。

とはいってもやることは変わらず、先に進むことにした。

「薄気味悪いな」

夕方ということもあって、汚れたり罅割れた窓から陽がほとんど入っておらず薄暗かった。注意深くと見ると、廊下には埃が積もっており、歩くたびに足跡がついた。

館に入って数分が経った頃、気配を感じて廊下の中ほどで立ち止まった。

《主よ……》

「分かってる、敵だ」

強化した聴覚には、前方と後方から唸り声が聞こえた。声を聞かずとも、囲まれていることは解っていた。視覚でも、聴覚でもなく――――第六感で敵の数を感じ取った。

正体を隠すために掛けるようしているサングラスに隠れた瞳を鋭くし、何時でも動けるように敵を身構えると同時に、軽い足音と共に、それらが暗闇から姿を現した。

「キマイラか？　いや姿が違いすぎる」

基本形は四足歩行をする黒い獣。自然界の獣と違うのは、各部位に様々な動物のモノが混じって、ちぐはぐなカタチをしているということ。

例えば前方の二体、片方は頭部が犬、胴体が猿、足が猫、尾は狐のカタチをしているのに対し、もう片方は頭部が猫、胴体が翼の生えた鳥類、足は犬、後ろには尾の代わりに蛇が生えて、牙をぎらつかせて威嚇している。

アスカを囲む四体の敵は、全てそんな風に自然界に在る動物をバラバラにして、各部位を繋ぎ合わせたようなカタチをしていた。

ギリシア神話に登場するライオンの頭と山羊の胴体、蛇の尻尾を持つというキマイラに近いが、整合性がなく醜悪さは「化け物」と呼ぶに相応しい。

「――――――」

犬よりも大きく、見るからに獰猛そうな存在たちに囲まれていても、アスカは落ち着いていた。右腕の袖から一本のクナイを取り出して握り、右半身を前にした構えを取って＜力＞を体内に張り巡らせる。――――そして右斜め前に跳ねた。

強すぎる＜力＞と跳ねただけの動作で、抑え込んだはずの傷から少量の血が滲んだが意思の力で痛みをねじ伏せる。

「――――はっ！」

五メートルの距離を一度の跳躍で駆け抜けると、右手を振り上げて一気に振り下ろす。クナイには雷遁系のチャクラを流し、殺傷能力を上げており、前方の一体の脳天から切り裂いて、右半身と左半身の真っ二つにした。当然、絶命して崩れ落ちる。

（殺した……）

神父のところで過ごした一年の間に巻き込まれた騒動で大なり小なり動物や悪魔、妖魔の命を奪っている。だけど、慣れることはなく、慣れてもいけないもので、命を奪うことに対して僅かに動きが鈍る。

《躊躇うな！　次が来るぞ！！》

（分かってる！）

幾ら敵で異形とはいえ、躊躇なく殺してしまったことに瞬間的に罪悪感が湧き上がるも、まだ他にもいることから玉藻が気持ちを切り替えるように念話で声を張り上げる。

戦闘において躊躇いや躊躇は即、死を招く。ずっと玉藻から言いつけられているからこそ、一時的に命を奪うことに対する忌避感を心から追い出す。それぐらいの精神制御（マインドコントロール）を行う術は身につけていた。

アスカが一体を仕留めたことを確認すると、今度は後方の二体が迫っているのを見て、玉藻の念話に発奮するように次の行動を起こす。

「――――疾（シッ）！」

こちらには、アスカの後ろに現れた玉藻がクナイで同時に二体を仕留めんと横薙ぎに振るう。右の方を先に捕らえ、それは胴体をぐちゃぐちゃに撒き散らしながら左に吹き飛んだ。だが、その時の抵抗で僅かに抵抗が落ちたせいだろうか――――もう一体は大きく地面を跳躍して、クナイをかわしていた。

「ゴァァァァァアアア

と左に別れたのとは逆に口から上と下に別れて、駆けた勢いのまま直進し、内容物を撒き散らしながら廊下に落ちる。

そして、地面に転がったままで起き上がろうとしていた最後の一体の眉間に、玉藻が放ったクナイが貫いた。

――――――それで勝敗は決した。無事に立っているのはアスカと玉藻だけで、他はことごとくが絶命している。

「……暗いな」

地下への階段を見つめ、アスカは囁いた。住人は現代的ではないのか屋敷には電球などの照明器具が一切無かった。あるのは壁に立掛けられた蝋燭だけで現代的な物がほとんどない。当然、地下には一筋の光も無い。

ここに来るまでに様々な動物が綯い交ぜになった――――ちぐはぐなカタチをした生き物が次々と襲い掛かってきた。アスカと玉藻は撃退しながらここまで辿り着いた。

アスカは一階を、玉藻は二階を手分けして捜索した。が、人の姿はなく、アスカが地下への入り口を見つけたのと、その先に人の気配を感じたのである。

「明かりをつけても大丈夫かな？」

《うむ、これだけ暴れたんじゃ。もう不意打ちはできそうにないからの》

何があるのか分からないので玉藻は一度体内に戻っている。玉藻が答えると同時に、アスカの頭上に魔力で作った光が灯った。熱はなく、直視できないほどではない炎が、アスカの影を床に色濃く焼き付ける。

「行くか」

敢えて言葉を出して一歩を踏み出して階段を下りていく。

こんなところにも分厚いカーペットが敷き詰めてあるので、足元が妙にフワフワとして頼りない。階段を下りているので、まるで果てしない闇の底に落ちていくような錯覚に襲われた。

が、階段を下りるまで拍子抜けするほど襲撃などはなく、下りきると大きな扉があった。

「この奥に……」

アスカは扉に手をあて、慎重に力を込めていく。鈍く軋みながらも、扉は徐々に開かれていった。

照明の炎が扉の隙間に潜り込み、地下室を明るく照らし出す。意外に広く、壁が十数メートルの奥行きがあった。

明かりがあるのに、そこだけ暗黒に閉ざされているかのように暗く陰って……それでも、この場所に合ういかにもな白衣を着て背を丸めている老人の姿だけは、切り抜かれたようにハッキリと鮮明

に映り出た。

好々爺な笑みを浮かべている姿からは、孫と一緒にいれば微笑ましい光景に映ったであろう。

――――――だが、様々な器具や練成陣に取り囲まれ、巨大なフラスコが幾つも乱立する暗く狭い場所にいてはそんなイメージを持つことすら出来ない。

「おい！　リスティはどこだ！！」

現実感のない世界でポツンと立っていた老人は、ふと気がついた様子でアスカを見遣って、そして、やや笑顔を顰めつつ首を傾げた。

「ん、突然に人の家に入って来て何のことかな？」

まるで身に覚えのない突飛な質問に困惑する老人――――――公園とかならまともな反応でも、場所が場所だけに、そんな如何にも真っ当な反応には異常さだけが際立つ。

大きく一歩、アスカは歩み出る。老人に近づくために、もっと近くで、問い詰めようと一歩ずつ確実に進む。

「うッ！？」

内部を見たアスカが思わず嗚咽を漏らすのは無理もない。前の世界で荒事を経験した玉藻すらも目の前に広がる陰惨な光景を目の当たりにして声を詰まらせたほどだ。

「これは……一体？」

部屋の両脇に設けられた檻の中には、白骨化した爬虫類、哺乳類は言うに及ばず、人骨も見てとれる。その程度であれば、玉藻も見なれたものだが、問題はその横に並べられたガラスケースにあった。

大凡、人の原型をとどめていない『なにか』がガラスケースの中でホルマリン漬けにされている。単眼の《一つ目（サイクプロス）》、腕が腹の部分から一本余分についた『三本腕（スリー・アームド）』などと、まるで子供が書いた下手な怪物の絵を実体化させた様である。

それらが、ずらりと視界の果てまで並んでおり、生の宿らない瞳で『彼ら』はこちらを恨めしそうに睨んでいる様にも感じられた。

「ここで、一体なにをしていたッ！？」

正視に耐えうる『彼ら』の出迎えは、アスカに少なくない衝撃を与えて叫んだ程である。この光景は我慢ならないものだった。

「……お……にぃ……ちゃ……ん……」

聞こえた声に問い詰めようと近づいていたアスカの足がピタリと止まる。声の発信源は老人の後ろ、光に遮られた暗い闇に隠れるようにその存在がそこにいた。かつて自分をそう呼んだ少女の気配と、その存在の気配が重なる。

――――あり得ない。あり得ない。あり得ない。あり得ない。あり得ない。あり得ない。あり得ない。あり得ない。あり得ない。あり得ない。

リスティが人間だった頃の髪の色と同じ金色の体毛を纏い、四肢

を地面につけて座る体は間違いなく大型の獣。

例えるなら首に密集して生える長い鬣（たてがみ）があることからライオンに近い印象を強く与える。

そこに人であるリスティと重なる部分など髪の毛と毛の色しかないのに、何故かリスティと獣の姿がが重なる。重なってしまう。

「ああ、困ったな……。流石に見られては言い逃れようも無いか」

視線が老人の後ろにいる存在に釘付けになったアスカの耳に、誇らしげなまでに穏やかな声が届いた。

「凄いだろう？　人語を理解する合成獣（キメラ）だ」

仰げば、そこにはとても楽しげに嬉しげに、ニコニコと笑う老人の異様。まるでちょっとした失敗を照れて恥じるように、老人は顔を赤らめて……あまりにも晴れやかな笑顔を浮かべて言った。

「……リ……ス……テ……ィ……」

紡がれた言葉は、たった一言。護ろうとして、護れなかった少女の名前。

それだけで老人は全てを察したようだった。

「リスティ？　ああ、確か実験体の娘の名か。それを救い出すためにここまで来たと？　残念だが一寸遅かったな」

アスカを嘲るように、老人は唇の端に笑いを刻む。その笑みが、

これが単純な狂気ゆえの行為ではなく、明白なる理性と悪意が渦巻いているという事実を表している。ブラックホールを閉じ込めた宝石のように虚ろに輝きを放つ瞳が相手を射抜く。

「……っ！」

その言葉に、頭を思いっきり殴られたような衝撃が走る。世界が足下から崩れていくような感覚。ついで、噴火のように腹の下から沸きあがってきた怒りにアスカは身を震わせる。

「いや、そろそろ実験に人間を使おうと思っていたところに、森の中で一人でいるところを見つけた時には運命を感じたよ」

（リスティは一人で何を？）

リスティに狙われる理由などない。ならば何故、リスティだったのかというアスカの疑問に答えるように老人は答える。

それは森の中で一人でいたからと単純なもの。ようは老人はリスティでなくて誰でも良かったのだ。誘拐に掛かる手間と時間を少なくするために一人でいたリスティの存在が都合良かっただけ。

「ああ、そう言えば森の中で見つけたとき、彼女は『お兄ちゃん』を探していたらしい」

「！！！」

老人はアスカの反応を楽しむように、そして嬲るように言葉を続ける。

「実験中も助けを求めるように『お兄ちゃん』と叫んで喧(やかま)しかったな」

リスティが家を抜け出して森の中で一人でいたのはいなくなったアスカを探していたから。陽が登る前の出立時にクイートと奥さんには別れの挨拶をしているのに、まだ寝ていたリスティには手紙しか残していない。

彼女は兄にも近いアスカが自分に何も言わずに出て行ったことに納得できなかったのだろう。両親がどれだけ言っても納得せず、目を盗んで探しに出た。そこを老人に見つかり、誘拐された。

「あの娘は、私の実験体となることで自らの命に価値を与えた。実に良くやってくれたよ。彼女の存在は私の研究の一部となり、いずれ人類を救うだろう」

今までアスカを嬲る以外に何の感情も覗かせなかった老人がかすかに口調を変えた。真摯ともいえる口調が他人からすれば根拠のない理由でも、彼が本気でそう思っていることを窺(うかが)わせる。

「ふ……ふざ、け……るなっ……」

「ふん、やはり理解できんか。やはり君のような私の崇高な研究を理解できないガキは嫌いだよ」

その言葉を聞き、アスカはそれまでの人生で最大の怒りを抱いた。あのリスティがただ生贄などという下らないものになるために、これまで生きてきたなどと言われたことにこれまでの最大の怒りを、アスカは覚えた。

自分とは違い純粋で綺麗な心を持っていたリスティの価値がそれだけしかないのだと語る厚かましさは、絶対に許すことはできなかった。

何故、リスティがそんな目に遭わなければならなかったのか。こんな男の身勝手な欲望の為に。

「は・・何を怒ることがある？　医学に代表されるように人類の進歩は無用の人体実験の賜物だろう。ましてやこれほど短時間にこの場所に辿り着けたのなら君も魔法使いなのだろう。本来、魔法使いは『立派な魔法使い（マギステル・マギ）』よりも、私のように万物を司る『法』に背くものである『魔の法』を使うからこその『魔法使い』なのだよ」

アスカは立派な魔法使い（マギステル・マギ）に対して魔法学校での経験で純粋に憧れるものではない。

ならば、アスカにとっての魔法使いとはなんだろうか？

自分を虐げるもの、奪うものといった悪いイメージが定着している。

確かに神父も魔法使いではあったが、どうしても『魔法使い』としてではなく『神父』とイメージが先立っているので魔法使いという感じがしない。

アスカは魔法使いが魔法使いたる所以の精霊魔法を使えない。使える魔法は数少なく、故にどうやっても魔法使いとして大成することはない。魔法使いとしては三流。それがどこまで鍛えたとしても魔法使いとしてのアスカの評価だ。

自身はどうあるべきか？

誰もが一度は考え、夢想し、望むものをアスカは描けないでいた。

老人のある種の悪意の究極ともいうべき言葉が、衝撃となってアスカの心を揺さぶる。

「目の前に可能性があったからこそ試した！　例えそれが禁忌であると知っていも試さずにはいられなかった！」

自己の欲望を満たすために、人間はあらゆる苦難を克服してきた。たとえ次元の障壁が立ちはだかろうとも、必要とあらば必ずそれを打ち破る。それによって、他者が被る被害のことなど気にも留めずに。

欲望の全肯定――――善きにつけ悪しきにつけ、それが人の種の方向性だと老人は主張した。

「人間を使って初めての実験だったが大成功だ。まさか私も最初に上手くいくとは思わなかったよ。まさに私の実験のために生まれてきてくれたようなものだ」

既に老人の眼に在るのは正気はなく、狂気のみ。老人は既に人の道を外れた外道と成り果てている。

本当の意味で彼の研究が世界に必要とされているのなら、どこかしらの組織との繋がりがある。それが悪意による？がりにしろ、利用できるものなら利用しているだろう。

だが、彼にはそれがない完全な独り善がり。

待っているのは、世界に見捨てられ、妄執の果てに狂った老人は片田舎の洋館に引き篭り、周りを巻き込んだ破綻のみ。

「……」

朗々と自分が成したことを自慢するように語り続ける老人を前に、アスカにはたった一つの感情しかなかった。

何故。何故。何故――

今、この時のアスカの感情を確かに表すもの。それは明確にして冷徹なる意思。

そこにいる存在を絶対に赦さぬと、心の底から研ぎ澄ました殺意。頭の芯と腹の底から激しく煮え立ち、どうしようもなく込み上げる不快なる嫌悪感。

アスカの中で、ざらりとした何かが猛然と膨れ上がった。いつもなら、どんなに意志が猛り、精神が疼こうとも、届かなかった心の奥の更に最深部にまで届いた。猛り燃え上がる意思に、焼けつく心に、真っ直ぐ呼応して脈打つ血の胎動。アスカの存在という根底で、今にも溢れ出しそうに煮え立つ感覚がある。それはアスカ自身の精神を食い尽くすかと思えるほどにドス黒く、ドロドロとした感覚を放つものだったが、アスカはあえて抑えるつもりはなかった。

それは今までにもそこにあったけど、理性の氷壁を溶かすほどに熱く燃えることはなかった。今はそれがアスカ自身にはどうしようもないほどに熱く、激しく、グラグラと激しい火炎を上げて渦巻いている。

思えば、アスカはよくその時に発狂しなかったものだと思う。それともあまりにも常軌を逸しすぎて、まともに受け止め切れなかったのか。或いは……アスカ・スプリングフィールドは既に狂っていたのかもしれない。

その体内に膨れ上がる力を、いま解き放とうとしていた。

――――殺して、やる。

言葉の形をとった憎悪と怒りの情念が、アスカから発せられた。

そして――――虐殺が始まった。

アスカが気がついた時には、目の前に広がるのは紅い血溜まり――――そこに倒れ付す血に染まった白衣を羽織った老人の姿。

赤く鮮やかな色彩と、黒く沈んだ濁り。生きながらに切り開かれた人体というものは、かくもビクビクと脈打つものなのか。零れ出た紅色と、引きずり出した朱色と、赤黒い色彩が視界を埋め尽くしていく。

開いたドアから入ってくる風が吹くたびに小さな波が立って、周囲に金臭いような生臭いような――――独特な匂いを撒き散らす。鋭利な刃物で切り裂かれたような傷が全身にあり、衣服はズタズタに引き裂かれて真っ赤に染まっている。破れた衣服から覗く傷口からは肉と内臓が露出して、陽光に照らされ白く瑞々しく輝いている。

それと対照的なのが目だった。痛み、恐怖、驚愕で男の顔は歪んでいて、今にも断末魔の叫びが聞こえそう。そして零れ落ちそうなまでに見開かれた眼球――――そこにはもう光は無い。濁った汚水でさえ光を受ければ煌くというのに、男の目は光を受けても虚ろなまま――――これ以上は無いというぐらいに死んでいるという証。

思い返せば自分が成したことを思い出せる。どれだけ助けて欲しいと哀願されても、加減なく、躊躇なく、容赦なく、全力を込めて殺すつもりで死に至らしめた。

老人の周囲に先程までガラスケースに入っていた『単眼の《一つ目(サイクプロス)》』や『三本腕(スリー・アームド)』の死骸も散らばっている。アスカに抗するためにガラスケースから出したが、いくら手傷を負わせてもアスカは止まらず蹴散らした。

アスカの身体中には致命傷とまではいかなくても、服はズタズタ、玉藻の治癒力を以ってしても未だに傷は癒えず、血は流れ続けている。

アスカ・スプリングフィールドは、以前のような正当防衛などではなく、明確な殺意を持って殺人を行った。それは間違いなく殺人であり、アスカは絶対に老人の存在を許せないと思い、生かしておけぬと思い、激しく強い殺意をもって殺害した。一人殺せば、後は何人殺しても積み上げた数字でしかない。0と1とで分けた袂は、二度とは戻らない。それでも殺意を持ってか、そうでないことでは天と地の差がある。この日、アスカは正真正銘の”人殺し”に成り下がった。

そして――――――。

「お……にぃ……ちゃ……ん……」

今、目の前でかつては少女だったものが死に行く姿に、己は本当に無力で無価値な存在なのだと気づかされる。

『単眼の《一つ目（サイクプロス）》』や『三本腕（スリー・アームド）』も戦わせた老人がリスティをそのままにしておく理由がない。目測の大きさから２００キロはあるだろう巨体が跳躍して前肢で獲物（アスカ）を引き倒し、噛みついて仕留めようとした。

彼我の体重差は半分どころか数倍はある。押し倒されればそれだけで圧死は確実。その凶悪に光る牙で噛み付けばアスカは簡単に死ぬだろう。

生存本能に従って行動したアスカが選択したのは迎撃。相手がリスティということを頭が理解する前に身体は、圧し掛かる獣の口に雷光を纏った手を突っ込んだ。寸でのところで頭が追いついて止めたから即死には至っていないものの、致命傷には違いない。

「玉藻！　直ぐに治療を」

《その傷では無駄じゃ。できたとしても長引かせるだけにしかならん》

未だ未熟なアスカや医療忍術に力を入れていなかった玉藻に治療できる傷ではない。最後の時を長引かせることはできても苦痛を長引かせるだけにしからない。

「おにぃちゃん……あそぼう……あそぼう……」

二人で一緒にいたときに良く言っていた言葉を呟き続けるリスティに、再び泣きそうになりながら、その変わってしまった身体を強く、強く抱きしめる。

「どうして……どうして俺は！？」

自分への怒りに歯を食いしばりながら、地面に膝をついてリスティの身体を抱きしめて力一杯に怒鳴った。他人が聞いていないのを幸いに、思いっきり声を出すも、声の震えは隠しようもない。

「あそぼう……あそぼうよ……おにぃちゃん」

ゆっくりと、その瞼が閉じた。もう開かない。もう一緒には遊べない。

「あ、ぁ……」

光に生きるべき少女はアスカの腕の中で逝った。アスカに助けを求めたのに、何もできなかった。それどころか誘拐される原因を作ったのはアスカだ。

「あああああああああああああああああああああああああっ！！！！」

もし、黙って出て行かなければリスティは死ぬことはなかった。もし、町に来なければリスティは死ぬことはなかったもし、出会わなければリスティは死ぬことなどなかった。

アスカ・スプリングフィールドが来たせいで、リスティは死んだ。

一体この子にどんな咎があり、責められるべき点があったというのか。日々の中で幸福を得る資格こそあれど、こんな場所で死ぬような人生を送ってきた訳では断じてない筈だ。

「あああああああああああああああ……いあぁぁぁ

第十話　　旅をする少年０１（生贄の少女）（後書き）

救いがねぇ、と自分で作っておきながら思った筆者です。

鋼の錬金術師第五話『錬金術師の苦悩』を参考にしています。

次回は少し年月が経ちます。次回タイトルは『第十一話　旅をする少年０２（戦場と占い師）（仮）』になるかなと思います。

次回の更新は、来週の日曜日午前０時に更新したいと思います。

予定より遅くなる場合は、その都度、活動報告に上げます。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

今回は遅れたため、更新報告サボります。

第十一話　　旅をする少年０２（戦場と占い師）（前書き）

前話の『第十話　旅をする少年０１（生贄の少女）』が色々と物議を醸し出したので修正しました。

最後をほとんど変え、他のシーン等にも手を加えています。別の意味で悪化した感が多少ありますが、今話の前に見て頂けると幸いです。

今話は多少のグダグダ感があるかもしれませんが、それでもよければどうぞ。

ちなみに文字数は１１８６８字です。

第十一話　　旅をする少年０２（戦場と占い師）

故郷を飛び出し、旅に出て一年以上――――アスカ・スプリングフィールドが色んな国の戦地を転々とするようになってから既に三ヶ月が経過しようとしていた。

旅に出た最初の頃は食料や水分も無く、転々と放浪の旅を続けていた。だが次第に…生物の持つ特性、慣れと言う物は驚くもので…生活に変化が生じる。自力で獲物を捕まえ、自力で火を起こし、自力で水分を補給できる様になったのだ。

【変化の術】は便利なもので、アルバイトをして金を稼ぐこともあった。【変化の術】で化けても戸籍がない以上、選り好みはできないので色んなものをした。【影分身の術】を使って同時平行に行ったので様々な技能が身についた

それはさておき、今アスカがいるのは赤道近くにある冬のないこの国は、かたや「平和」を標榜し、かたや「自由」を掲げる戦いの真っ最中で、先進国では国から渡航注意が出されているような内乱紛争国だった。

戦地を訪れた理由は幾つかあるが、それは後に語るとしよう。

ＮＧＯも入れないような激戦地に身を投じた最初の一ヶ月はハッキリ言って、何も出来なかった。それでも何かをしたいと、時には武器を握って人を殺し、時には医療忍術を習う過程で玉藻から教えてもらった医療知識を用いて治療行為を行った。

初めは今まで奪った命に対する贖罪であった。それでも自分の拙

い技術でも喜んでくれる人がいて心が沸き立つものを感じた。

自分の力が少しでもこの世界の為になるのなら、意味はある。小さい頃から鍛え続けてきた力の意味が、自分の生きてきた意味があるのだと。

その時の気持ちに嘘は無い。何かを成し得ようと誓った決意に偽りなんてない。けど――――辛かった。何度も救えず、目の前で治療の甲斐もなく死んでいく人を見て泣いた。

戦争とは、失意とは、憎悪とは、絶望とは何なのかを自分の身で知る事になった。

戦争は、人の心を荒ませる。敵も味方も関係無し。戦が起これば世界は荒れる。争いが生まれる。飢えが起こる。平等ではなくなる。苦しむ者が生まれる。死に逝く者が生まれる。殺される者が生まれる。生まれる――怨差が、慟哭が、憤怒が、絶望が。人の心を蝕む感情が、生まれ続ける。

世界には理不尽なことが多すぎて、全ての哀しみを防ぐことなど出来はしない。どんなに鍛えても磨いても強くなっても、この手のひらは必ず何かを、誰かを取りこぼしてしまう。

苦しかった。逃げ出したくもなった。何もかも投げ捨てて無かった事にしたかった。

それでも――――――

――――炎が視界を染める

辺境の町。ただでさえ国の援助が行き渡り辛い其処は、内戦化において最早陸の孤島と化している。助けはおろか見向きをされないような小さな村。そんな村に今存在するのは、見向かざるを得ない、地獄絵図だけだ。

一面の炎。崩れ破壊された無数の家。穏やかで安らかであったであろう村の情景は、その面影を僅かに残すのみ。

あちこちで反響する人の悲鳴。恐れと怒りと悲しみと――戦争の最中、こんな叫びは何度も聞いた。決して慣れる事の無い、人の慟哭。自分の無力さと、暴力に対する憤りを実感させる嘆き。

此処は煉獄だ。火の海と、廃墟と、絶望に満ちた人の声。それが揃えば、そこは生きながらにして地獄に成り果てる。

燃えさかる町の中を、アスカは片手に鞄を持って走っていた。つい、今しがたまで平和だった町が、ほんの僅かの内に燃え盛る炎の中に沈もうとしている。

今もこうしているのは――――自分でも誰かを助けられるからか、何かを成せるからか、単純に罪悪感からか、アスカ自身にも理由は分からない。

「くそっ、またか！」

アスカの頭上高く、また一つのミサイルが低空で飛んでいく。ア

スカの遥か前方で下降しながら街中に着弾した。

まだ無事だった建物の上で閃光が走り、爆発と共に屋根が吹き飛ばされ、壁がガラガラと崩れ落ちた。そうして、間を置かずに火災が起こる。

「――――――――クソッタレが！」

アスカは爆発がする前に近くの車の陰に隠れて爆発の衝撃を凌ぎ、火災が発生した箇所に走りながら罵倒の言葉が零れ落ちる。

「ちくしょう、もう許さねぇ――――」

「おい、あんた！」

爆心地のすぐ近くで巻き込まれたものの、奇跡的に掠り傷で済んだ青年は周りの被害に、これを成した者たちに憤怒を抑えられない。ミサイルが飛んできたらしき方向を見やって叫んだ青年が、飛び出そうとするのを横を走り抜けたアスカが呼び止める。青年は思わずつんのめりそうになりながら声の方向を憎々しげに振り返った。

「変なタイミングで声かけんな！　もうちょっとでコケる……」

「手を貸せ！」

ある意味でバッチリなタイミングで声を掛けた奴に文句を言おうとして振り返ったところで再度遮られる。アスカは跪いて、倒れた柱の一端を担いで持ち上げようとしていた。

「！！！」

良く見ると、アスカが担いでいる柱は、怪我人の上に乗っている瓦礫の下に差し込まれていた。青年は、一瞬だけミサイルが来た方向を目で追ったが、目の前で死に掛けている人間を見捨てられるほど青年は薄情ではなかったので直ぐにアスカの傍に駆け寄った。

「分かった！」

青年はアスカの横に身を屈め、素早く柱の下に腕を差し込んだ。そうして、気合と共に柱を持ち上げる。柱の見た目より軽いことに驚きながらも、めきめきと音を立てながら、苦痛に呻いている怪我人の上から瓦礫が持ち上がっていく。

「大丈夫か！」

瓦礫が向こうに崩れ落ちたところで、青年は柱を投げ捨て、下敷きになった人間に目をやった。ぜえぜえと異音を発しながら肩を上下させているその男の胸に、アスカが手を当てているのが見えた。

「早く、病院へ連れて行かないと……」

だが、そこまで言って青年の言葉は途切れた。ちゃんとした病院など何年も前に、ここと同じように爆撃に合って瓦礫の山と化した。今はただの廃墟と化しており、数少ない医者がいるだけである。

「肺に穴が空いている。このままで長くは持たない」

それは絶望の宣告だった。肺に穴が空くなど重症中の重症。安全な場所に運んで医者を連れてきても間に合わないだろう。

男の命は風前の灯に思われた。

「ここでやる。あんたも手伝え」

絶望に陥っていた青年はアスカの言葉に現実に引き戻された。

アスカは脇に置いてあった鞄を開き、中にあった革の箱を取り出した。箱の中には、医者が使う手術刀（メス）や注射器、薬品などが収まっていた。

「アンタ医者なのか？」

しばらく洗っていない汚いシャツに膝の破れたズボンと治安の良い国なら浮浪者同然の格好だが、足元は頑丈でも動きやすい軍用ブーツで固めている。

手入れをしていない長髪は首の後ろで結ばれていて身なりこそ粗末だが、専門の人間しか持たないような物を持っている時点で青年がそう考えるのも無理はない。

が、本当に医者なのかと確認したのは、目の前の青年の容姿が自分と同年代ぐらいで若かったことにある。容姿などは逆に特徴がないことが特徴なのだが、目だけは強い意思を感じさせるので印象に残りやすく一度会えば忘れることはないだろう。

「みたいなものだ」

アスカは肯定も否定もしない微妙な言い回しをしながら倒れている男の症状を見る。

胸腔に漏れ出した空気が対側の肺や心臓を圧迫しており、このままでは血圧低下、ショックを来たし、緊急に胸腔穿刺を行わなければ死に至る。

今の状態での呼吸困難に対し、人工呼吸は禁忌である。胸腔内圧を更に上げる事になり、肺の虚脱が亢進する。緊張性血気胸・血胸では緊急手術となることもある。

処置に時間の掛かるドレナージで無く迅速な穿刺を行わなければならない。

「ならば、手段を選んでいる余裕はない」

アスカはそう言いながら、取り出したガラス管を右手に握ったメスで斜めに切った。

そうして、手の中でガラス管をくるりと回し、男とガラス管に最低限の消毒を行って尖らせた側を下に向ける。なにをするつもりだ、と青年が問いかける暇もあればこそ、アスカは手にしたガラス管を怪我した相手の胸に突き立てた。

「わわっ！！」

死んだと思われた青年の想いとは裏腹に、その怪我人は、肩から力を抜いてふぅっと息をついた。ガラス管を伝って、胸に溜まっていた空気が抜けたのだ。

刺されたのに顔色が良くなっていくのを見て、青年もトドメを刺したのではなく、強引だが医療行為だと分かって安心した。

「ふぅ、これで暫くは大丈夫のはずだ。本当はもっとまともな処置をしたいところだが、ここではそんな贅沢も言ってられない」

突き立てたガラス管を抜けないようにテープで固定しながら、男の表情を見たアスカは安心したように肩から力を抜く。

「よし、次だ！　行くぞっ！」

胸を逸らすように男を寝かせ、いまだ空爆が続いている場所から怪我人を安全な場所へと運ぶと、アスカは青年を先導するように他の怪我人の元へ走っていく。

青年は半分腰を浮かせた中途半端な姿勢で、走り去るアスカの背を呆然と見つめていた。

「おい、待てよ――――――だぁ、もう！」

未だ爆撃が続いており、安全な場所にいるべきだと思ってした静止に答えずに、瓦礫の山を乗り越えて次の怪我人の下に向かうアスカに、青年は仕方なさげに後を追った。

爆撃はそれほど長時間は続かなかった。町の半分近くが破壊されたあたりで、次弾が来ることもなくなってアスカと青年は救助活動を続けた。

アスカが知識だけで医者でもなんでもないことは既に皆知っている。

それでも真っ当な医者がいないので、アスカという医者もどきの元に続々と怪我人が集まり、決して少なくない命が救われた。それでも被害は多く、賢明の治療の甲斐なく助けられなかった命もあった。資格云々よりも助けられるか、助けられないかが皆には重要だったので本職でなくても別に良かったのだ。

「……」

丸々三日間ほとんど不眠不休で治療を続けたアスカは、精魂疲れ果てた表情で崩れ落ちた家の瓦礫に腰掛けていた。

「町の被害はどうだったんだ？」

アスカは振り返りもせず、唐突に誰もいないはずの背後に問いかけた。そこには、アスカと一緒に救助活動を続けた青年――――ラモニドが丁度やってきていた。

「……町の三分の一の建物が被害を受けた。全壊が全体の十分の一、半壊が五分の二、犠牲者は最低でも三百人、行方不明者の数を含めるとまだ分からないそうだ」

ラモニドはアスカの行動にこの三日の間に散々驚いたので、今さら振り返らずに自分に問いかけたぐらい驚くことなかったが、それでも言い辛いように短い間を置いて答えた。

「そうか……」

奪い合い、殺し合い、裏切り合い、誹り合う、人間としての醜悪の混沌。

アスカが見たものにはもっと酷い状況もあった。もっともっと酷い状況だっていくらでもあった。罪を犯す者が悪であるとは限らない。むしろそうではないからこそ、犯した罪を悔い、嘆き、苛まれて罪悪に囚われる。

もっと多くを救う術は他にもあったかもしれない。もっと犠牲を少なくする術もあったかもしれない。アスカが選んできた道は、最善ではなかったかもしれない。そういう想いが常にアスカの中に留まり続けていた。

「――――ドクター！　また怪我人が運ばれたんだ。疲れているところ悪いが急いで来てくれ！」

被害を聞いて疲れたように肩を落としているアスカに声を掛けようとしたラモニドの後ろから、別の男性が慌てた様子で走ってきて告げた。ドクターとは医療行為をしている間についた俗称で、皆がアスカをそう呼んでいる。

「分かった。直ぐに行く。先に戻っててくれ」

「……行くのか？」

男性に直ぐに行くと声を掛けて、腰を落としていた瓦礫から立ち上がると、三日間ほとんど不眠不休で最低限の食事と休息しか取っていないアスカを気遣ってラモニドが問いかけてきた。

「ああ――――おっと、大丈夫かい？」

問いに返しながら歩いていたアスカは目の前を走り過ぎようとした幼い少女が、瓦礫に躓いて倒れたのに気づいて近づき、声をかけて少女を起こそうとする。

いかにも線の細い、弱々しい印象を受ける少女である。ザンバラに伸びた長い髪に、身に着けているのはボロボロの服。

だが、アスカの差し伸べた手を忌避するように少女は飛び起き、そのまま元向っていた方へと走り去っていった。

「なんだ、あれ？　助けようとしたのに……」

「さあ、それより急がないとな」

折角、人が助けようとしたのに失礼な態度を取る少女にラモニドが少し憤る。アスカはそれを宥めながら、どこかで見たこと在るような気がして、ちらりと視線を少女が走り去った方向を見る。

崩れて焼け焦げた街並みの向こうには、襲撃が終わってから到着した正規軍の兵士達がいた。あまりの行動の遅さに地元住人たちは憤っており近づこうとしない。

停車した装甲車の上に座した数人の兵士達の傍に駆け寄った少女は、ニッコリと無邪気な笑顔で、服の下から取り出した拳銃を兵士の一人へと向けた。

少女の行動に気付いたアスカが何かをする暇さえなかった。

鳴り響いた銃声と怒号。すぐさま応射され、蜂の巣にされた少女は鮮血を流して崩れ折れる。走り去る装甲車の音は直ぐ遠くへと……。

アスカは残された少女の下に足取りも重く、歩み寄ると、血を流す骸の脇に跪き、見開かれたままの幼い瞳をゆっくりと閉じてやった。

「――――思い出した。この子は昨日、俺が助けられなかった母親の子供だ」

「そんな……」

睡眠不足、溜りに溜まった疲労で鈍った頭でようやく思い出した。

昨日、瓦礫に埋まっていたところを発見されてアスカの元に親子共々運ばれ、子供は親が守ったからか掠り傷程度すんだものの、母親は処置の甲斐なく死亡。母親に縋って泣く少女の慟哭が今もアスカの耳に残っている。

何故、彼女に気づかなかったのか。

疲れていたことなど言い訳にはならない。気づいていたなら彼女の行動に注視し、明らかに普通ではなかった様子を分かったはずなのだから。

現に今、思い出してみれば服の脇付近に不自然なふくらみがあったことを思い出している。

死角になる位置にいたラモニドには気付き難く、ぶつかったアス

カだけが彼女の凶行を止められる立場にいた。疲れていたことなど言い訳にならない。アスカがしっかりしていれば彼女は死なずにすんだかもしれないのだ。

「どうして、こんな子供が拳銃を？」

「大方、正規軍に恨みのある誰かが渡したんだろう。でなきゃ持てるはずがない」

昨日の今日で何のツテもない少女が拳銃を持ち、かつ兵隊に向かって撃つなどあり得ない。

だけど、女子供を使った奇襲なんて、戦場では常套の手段で、見飽きるほど繰り返された光景だ。爆薬でもあれば、もっと直接的に自爆させる。ないなら、適当な武装で特攻させる。大抵はああして返り討ちにあうが、それでも十分に効果的だ。幼い子供に銃口を向けられて、それを撃ち殺すなんていう事実は。兵士達の精神に多大なストレスを負わせることになるから。積み重ねれば士気も戦意もそぎ落とせるというわけだ。

実に単純にして容易な戦法。何せ、戦場には特攻させる孤児なんて、腐るほど溢れている。家族の仇、友の仇、天に在します神への殉教……哀れな被害者達を煽る魔法の言葉は幾らでもある。けど、そんなものは大して必要ではない。

何故なら、枯渇した環境では、人はパン一切れのために獣へと変わるのだから。

悪いことだ、良くないことだとされながら、そのいずれをも犯さずには存在できないという〝人間〟の、その矛盾を孕みながらも消

えることのない矛盾。

そう、こんなのは戦場では何時もの事。別に珍しいことじゃない。

「この子の埋葬を頼めるか。せめて母親と同じところにいさせてやってくれ」

「分かりました。先生は？」

「怪我人が待っているんだ。行かないわけには行かないだろ」

ラモニドに少女を母親と同じ場所に埋葬してくれるように頼み、アスカは一人で待っている患者の下へ向かった。玉藻に少女を嗾(けしか)けた者を探すように言いながら。

戦場に来るまで正直に言うとアスカは自惚れていた。心の奥底に僅かながらにあった……自分なら救える、助ける。この力がある限り幾らでも……――――そう、思っていた自惚れは呆気なく砕け散った。

荒れ果てた村々、焼き焦げた建造物、枯れ果てた大地、悲劇を体感した人々。もう何度も見た光景で、冷静に周りを見回せば視線に映る物は……貧困なる人々。

感じるのは鼻に突く匂い。人体が焼ける匂い。焼かれていく肉と血が混ぜ合わされた匂い。多くの人が理不尽に死ぬ場所。明日への希望も今日の絶望に塗り替えられるかもしれない場所。

「辛い、苦しい……けど」

この風景を生み出した人間は、どうしようもなく救いようが無い。けれど――人の命に宿る命というものを実感しているから、それを救いたいと思ったのだ。

戦火の中、他に医者がいない状態でアスカは妊婦の出産に立ち会わなければならなくなった時があった。ほんの少しばかりの知識しかなかったが、出産経験者の力を借りて生まれたばかりの赤ん坊を取り上げた。

時間を経て、尻込みしながらも好奇心が勝って生みの苦しみで大変だった母親の許可を得て、誕生したばかりの生命を前に怖々ながらもその感触を確かめようと赤ん坊の頬に触れた時、指先に伝わってきた肌触りはあまりにも柔らかく、少しでも力の加減を誤ればか細い陶器のように壊れてしまいそうな脆さに酷く戸惑った。

そして赤ん坊がアスカの手を握り、あどけない笑顔を見せた瞬間、戸惑いは喜びに変わり、命の尊さを自覚したのだ。

「それでも……それでも俺は歩いていける」

だから、まだ続けられる。続けることができる。戦うだけの価値はある――辛くても苦しくても、進むその先に何かが生まれると信じている。

月日は流れ、内戦は終結には至っていないが小康状態に陥っていた。反乱軍（革命軍）がその勢いを突然、減じ始めたからだ。

アスカはその日も治療や町の復旧行為に明け暮れ、日も暮れた頃に食事を取るために酒場に寄っていた。

そしてスラム街の端にある壁に大穴が開いて表通りが見えることから、現地の言葉で「くずれかけ」と呼ばれているオンボロ酒場のカウンターで食事を食べ終えて一枚の紙切れを前に悩んでいた。

『今から三十後、酒場の外を少年が通りかかる。その少年がすることを止めることができれば君は救われる』

紙切れの文面はそれだけで、誰が書いたのか分かるような宛名も何もない。これは先程、物乞いのようなみすぼらしい格好の年齢一桁後半くらいの子供に渡されたものだ。

食事を食べている時に突然背後から「なあ、アスカ・スプリングフィールドってあんたのことだろ」と声が掛かった。

そのときのアスカは、身長１７５センチ前後で中肉中背、この地域では珍しくない肌の色や顔つきの青年に【変化の術】で化けていた。今の自分を見て本名を言ったことと、アスカ本人と判断したことに表には出さなくても最大限の警戒心を持って、オンボロ酒場内部と目の能力の一つ【透視】を使って周辺を見渡すも、隠れているような人間がいなかった。

誰もいないことに不信感を抱きながらも、敵の可能性が高いので知らん振りをして惚けたアスカに少年は、爺ちゃんなる人物に『この酒場のカウンターで食事している人が、アスカ・スプリングフィ

ールドだ』という情報を与えられたらしい。

そしてその時、カウンターで食事を取っているのはアスカだけ。少年の様子から嘘は言っていなさそうなので信じるにしても、その『爺ちゃん』の意図を計りかねていたアスカに少年は「駄賃をもらったから渡してくれと頼まれた」と言った。

で、その文面に先程のが書かれており、爺ちゃんなる人物が何者かを少年に駄賃を催促されたので渡すと「占い師」ということが分かった。

少年の話から、元からこの町にいる人間だと推測し、少なくとも敵対するような人間とは考え難い。だが、変化したアスカを本人だと断定した理由が分からぬうちは信用することができない。

だが、その占い師はアスカが聞くこと、することを予言しており、少年が驚いていた。

聞くこと、することを予言されて思わず渋面になるも、別段、アスカの行動を予測することは難しくないので、もし、全て知った上でやっているのなら小賢しいヤツもいたものだと思う。

「ん……？」

少年から伝言を受け取ったアスカは、いたずらかもしれないが念のために【透視】で酒場周辺を見渡していた。

【透視】は玉藻がいた世界の日向一族のみに伝わる瞳術。第二胸骨の真後ろ以外のほぼ全方向を見渡す視野、数百メートル先を見通す視力の他、物体の透視や、幻術や瞳術による洗脳を見破る力に長

けている。写輪眼同様チャクラの性質を色で見分けるだけでなく個人レベルのチャクラの性質さえも色の識別で見分ける事が可能、体内でチャクラの流れる場所「経絡系（けいらくけい）」をも見ることができる。このため、洞察力なら写輪眼をも上回ると言われる。

【写輪眼】と同じように【白眼】の能力も発現したのだが、発現したのが玉藻経由なのが理由なのか「全方位を見渡す視野」と「数百メートルを見通す視力」はなく、できるのは物体の透視だけ。

それでも医療行為においては、体内の患部を開腹せずに見ることが出来たり、こういう風に壁を見通して辺りを見渡せるので十分に重宝している。

やはりいたずらかと思って、酒場の通称の由来にもなった「くずれかけ」の壁の隙間から、目視で外を眺めていた。が、丁度、伝言を受け取って三十分経った頃、巡らせていた視線をある箇所で止めた。

その視線の先には、駐屯している軍隊のジープが停まっており、ガラの悪そうな兵隊たちが、酒瓶片手になにやら大声を上げて騒いでいる。それらを迷惑そうに見ている客や通行人が多いが、アスカの視線はさらにその先にいる、一人の少年に向けられていた。

「マスター。金はここに置いておくから」

アスカは懐から金を出してカウンターに置き、店のマスターに言うと、店を出て、その少年の下に走り寄って行った。

「やぁ、こんにちは」

気軽に、気さくに、警戒する気すら失くしてしまいそうになるほど無防備な笑顔でアスカは少年に話しかける。

「……」

少年は答えない。いや正しく言うと、答える余裕がないといった方が近かった。

じっとジープに乗る兵隊たちを見て、そうしなければすべてが終わってしまう。折角固めた決意が崩れてしまう、そう言わんばかりに。

アスカの横をすり抜けて、通り過ぎようとしたところで。

「やめとけ。誰に唆（そそのか）されたのか知らないけど、死ぬのは辛いぞ？爆発に巻き込まれると滅茶苦茶痛くて苦しいしな」

「――――――!?」

自分にしか聞こえないぐらいのアスカの小さな言葉に、少年ははっとして振り向く。

だが、当のアスカは自分の身体で兵隊たちからは見えないように遮って、不自然に膨らんだ少年のボロボロのシャツを捲り上げた。

そこには、どこで拾ってきたのか、それとも誰かに渡されたのか、幾つものＣ４――――プラスチック爆弾が巻きつけられていた。

「うるさい……おれは……おれは逃げない……おれが敵を討つんだ……」

おそらく、少年の父親か母親、もしかすると両方とも、あの兵隊たちか、彼らが所属する軍隊が殺したのだろう。

そして少年は敵を討つために、自爆テロを決行しようとしていたというところか、とアスカは少年の言葉から推測する。

「それに後ろの連れも巻き込むつもりか？」

少年の言葉を否定も肯定もすることなく、アスカは少年の肩越しに、その後ろ、物陰からじっと二人を見つめている、少年よりもさらに幼い二人の子供を指差した。

振り返って、その姿を見た少年の顔に明らかな戸惑いが生まれる。

「アイツら……来るなって言ったのに……」

その二人は、少年の弟と妹だった。

両親が死に、幼い弟妹を残され、どうしていいか分からなくなった少年は、「辛くとも生きる」のではなく、「復讐を果たして死ぬ」ことに逃げた。

アスカにそんな少年の詳細までは分からない。

奪った相手に復讐したいと気持ちは良く分かるし、長年逃げてきたから少年の気持ちがなによりも理解できた。弟妹を振り切ってまで実行しようとしたなら止めなかった。その場合は責任を持って弟妹の世話を焼くつもりでいた。

「う……うぐ……うわぁあああああああああっ！！！」

アスカに、兄弟を捨てて逃げ出そうとした自分を見透かされたような気がして、少年は情けなさにその場に崩れ落ち、涙を溢れさせる。

「存分に泣け。奢ってやるから泣き終わったら兄弟と一緒に御飯を食べよう、な？」

アスカは笑いとも、苦笑いとも取れる笑みを浮かべながら、安心させるように片手で少年の頭をなで、もう片方の手で少年が握り締めていた爆弾の起爆スイッチを取った。

少年とその弟と妹は、アスカと酒場の一角にあるテーブルで、貪るように食べ物を口に入れている。一体、何日も食事を取っていなかったのか。

夜になれば酒を飲みに訪れるその場所も、昼間は単なる食堂として開かれている。夜のような酒気を帯びた賑やかさは無くとも、昼間もまた違った賑やかさが充満している。

ここは、どこだろうと変わらない所だろう。つまりは、食事休憩の一拍の時間。仕事を忘れ、役目を忘れ、ほんの一時だけ自由になる時間――そんな一瞬が、昼間の食堂にはある。まあ其処は酒場なのだけれども。飯を食べる時は、気分は高揚気味になるというものだ。旨い飯を噛み締め味わう一瞬。その一瞬まで黙ることは無い。

感情に任せて飯を平らげるだけだ。

並んでいるものは、この地方で主食として食べられている芋類に、肉がいくらか浮かんでいる薄いスープ。このあたりでは標準的な食事ではあるが、先進国の裕福な子供なら顔を背け、大人なら同情の視線を送ってしまうだろう。

「ほら、誰も取りはしないから落ち着いて食え」

哀れみは時に侮蔑と同意になる。それを知っていたアスカは、兄のように語り掛けると、子供らは口の周りを食べかすで一杯にしながら満面の笑顔を見せた。

ついさっきまで、死を考えていたとは思えない、無邪気な笑顔だった。

いくつもの国や文化圏を転々とする生活を続けていると、いわゆる常識というものが当てにならないことを思い知らされることは多い。文化が違えば習慣や風習はもとより、普遍的だと信じていた道徳的な価値の基準すら逆転しまうこともあるからだ。

そして何よりも善悪を判断する基準が変わる。人々にとって『最も神聖で価値ある事柄』が国や文化によってまるで異なるからだ。

同じ行為がある国では褒められても、他の国に行けば悪行として罵られる場合もある。子供を捨ててもいい国があれば結婚前に性交渉をすると死刑になる国もあるが、それらの国の社会が未発達で野蛮なのではなく、ただ単に文化が違うというだけのことだ。文化が違えば生きる意味すら違ってくる。

だったら何を基準にすればいいのか？

世界中どこでも通用するような無難な選択を、アスカは見つけられていない。結局は自分が正しいと信じる方向性を、その結果、得るものが称賛であろうと、罵倒であろうと貫くしかないのだから。

《今、戻ったぞ》

変な方向に行っていた思考を断ち切るように出掛けていた玉藻が、アスカの体内に戻ってきて声をかけた。

《ん、お帰り。結果は？》

《主の予想通り、黒。あの時に潰したと思っておったのじゃがな。どうやら幹部に生き残りがいたようじゃ》

子供らを見守りながら念話で玉藻の嫌悪感を隠しきれていない報告を聞いたアスカは思わず渋面を作る。満面の笑みで食事を貪るように食べる子供たちに気づかれぬ内に表情を元に戻す。

玉藻があの時に潰したというのは、アスカが助けらず死んだ母親の子供が拳銃を入手して兵隊に撃って撃ち殺された時に、拳銃の入手経路を辿った先にあった組織のことだ。

内乱の一部勢力であったその組織は母を失った子供を唆して強行に至らせた。それを知ったアスカが組織を玉藻と共に強襲して壊滅に追い込んだ。末端の構成員は証拠と共に正規軍に叩き出したが、幹部クラスは一人として生きていない――――はずだった。

《今度こそ完膚なきまでに殲滅しておいたから心配はない》

《それは心配していないよ。どうも、ねぇ》

玉藻が今度こそ殲滅したというなら事実なのだろう。アスカもそこは心配していない。

問題なのは、まるで全てを知っていたかのように少年が強行に及ぶのを予知し、唆したのがアスカと因縁があり、かつ関わりのあった組織であるということを知っている預言者の存在。

【変化の術】で化けていたアスカの存在を見透かして、ここまでの経緯を言い当てている。不気味なことこの上ない。

《探ったが数年前にこの町に移り住んだ老人らしい。小僧が言った通り占いが良く当たるという評判の占い師じゃが、それ以上は分からん》

《玉藻でも探れない相手か……厄介な》

調査能力に優れた玉藻ですらほとんど探れない相手となると、本物かよほどの曲者の二択になる。

少年たちをどうするかを考えながら、頭の痛い問題が出てきたなと御飯のお代わりを要求してくる小さな狼たちに返事をしながら考えていた。

この後、少年と兄弟を信頼できるラモニドに任せ、帰宅の路についたアスカは件（くだん）の占い師に出会うことになる。その出会いがアスカの後の未来において大きな影響を与えようなどとは玉藻も、アスカ本人すらもこの時は予期していなかった。

第十一話　　旅をする少年０２（戦場と占い師）（後書き）

今話は前話より作品内時間で一年経っています。その為、主人公の成長が若干、変化しています。一年の間に色んな事件に関わり、多少なりとも成長しているためです。

占い師との邂逅の内容は後々に出していきます。

次回の更新は、来週の日曜日午前０時に更新したいと思います。

予定より遅くなる場合は、その都度、活動報告に上げます。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

第十二話　　旅をする少年０３（襲撃と拳師）（前書き）

今話の文字数１６３９７字のうち九割が戦闘シーンになっています。

それと『とある作品』と微クロスしています。ですが、クロスと言いながら設定や人物だけを利用したオリジナルと考えて下さい。

矛盾などが多々あるかもしれませんが、そこら辺は見逃していただけると幸いです。

それでも構わないという方はどうぞ！！

第十二話　　旅をする少年０３（襲撃と拳師）

戦地での日々は占い師の老人との邂逅後、長くは続かなかった。

特別な何かがあったわけではなく、毎度お馴染みになってきた騒動に巻き込まれてうっかり【変化の術】を解いてしまったのだ。それも偶々ＮＧＯの活動で訪れていた高畑・Ｔ・タカミチが現場に駆けつけて遭遇するというタイミングの悪さで。

政情不安で手を出しあぐねていたＮＧＯが、内乱が終結したことで入ってきたのだ。アスカたちが潰した組織が武器商人だったことで内乱が終結したのだから世の中どこで?がっているか分かったものではない。

行方不明のアスカが突然、目の前に現われた高畑は当然捕まえようとするも、そんな気のないアスカは周りに最後の挨拶をしてからという余裕振りを発揮して国外逃亡を図った。

中国――――それはアスカが戦地の次に選んだ滞在の地である。

なにか特別な理由があって選んだわけではなく、ただの気紛れだったのだが、そこがアスカの価値観を根底から変えるとは思ってもいなかった。

だが、アスカが中国にやってきた当日に事件は起こった。

場末の寂れた安っぽいホテルにチェックインして部屋に入った直後、寝室に潜んでいたらしい黒ずくめの賊が襲い掛かってきたのである。

「あ、やっちゃった。て言うか何だろう、この人は？」

《格好は真っ当な人間には思えんが……》

「本当に――――――って！」

明らかに普通の人間とは思えず、何かされる前に一撃でノしてしまったわけだが、その途端にホテル中に殺気だった雰囲気が充満した。

悩んでいたところだったので、思わず素っ頓狂な声を上げてしまう。

「取り合えず……脱出！！」

ホテル中敵だらけなので狙われる事情その他諸々を置き去りにして脱出を選択する。

部屋を出た瞬間からあちこちの部屋、天井、廊下の角からゴキブリのように人がわらわらと出てきたのを撃退し、ホテルを飛び出して近くにあった雑木林に駆け込んだ。

疾走しながら大きく息を吸い込み、肺に大量の酸素を取り入れて全身に＜力＞を巡らせる。血液中のアドレナリン量が増加し、アスカの肉体は僅か一呼吸で戦闘態勢を整えた。

その用意は無駄にはならなかった。

十歩と進まないうちに、頭上からカマイタチのごとき鋭い殺気が

叩きつけてきたのである。

アスカは反射的に地を蹴って前方に大きく跳躍すると、空中で身を捻って背後を振り向きながら着地し、樹上より襲い掛かってきた黒い影と対峙した。

突然の襲撃者は、長身痩躯の漆黒のライダースーツを纏った若い男だった。黒いキャップを目深にかぶり、鼻から下をバンダナで隠している。アスカの受けた第一印象は「強盗」という身も蓋もないものだった。

「見るからに怪しい……俺に何の用だ？」

「……」

思わず本音が出てしまったことは気にせず問いかけるも、男は答えずに無造作に一歩を踏み出した。両手はダラリと下げたままで、構えらしい構えはない。しかし、前髪の間から覗く切れ目の鋭い眼光を宿し、針のように冷たく尖った殺気を放っていた。

謎の男の放つ殺気はホテルにいた三流どころではなく本物だった。解せないのは初対面の相手に対してこれほど強い殺気を放てるその理由である。

（こいつ本気か！？　それにしても狙われる心当たりなんて――――）

そこで、ふと旅に出てから今までのことを考えると心当たりがあ

る。というか多すぎて逆に分からない。

（いかん！？　心当たりが多すぎて分からん！！）

《矢鱈（やたら）といろんなところで恨みを買ってるしのう》

自慢ではないがアスカはよく騒動に巻き込まれる。自分から騒動に突っ込んで行っているのか、それとも騒動がアスカを引き寄せるのかは別にして、この事実を知ったものの中にはアスカを事件体質（トラブルメーカー）と呼ぶ者もいた。

そして行く先々で騒動に巻き込まれる所為か、相対的に方々で無数の恨みを買っている。その中には、どこぞの悪の組織の野望を阻止したなんていう話もあれば、力足りずに救えなかった犠牲者の身内から憎まれる、なんていうのもザラにある。

中国にはまだ来たばかりなのでそういうことはない。ないはずだが、アスカを殺したいほどに恨んでいる者は両の指の数では到底足りないのが現実である。世界規模のスケールの話なので、今回のもどこかで買った恨みかもしれない可能性が無きにしも非ずなので分からない。

恨みを買っているにしても大人しくヤラれるわけにはいかなので、アスカは僅かに腰を落とし、左の拳を顎の高さに持ち上げて、取りあえず防御の姿勢を取った。

ジャリと土を踏む足音が聞こえた。それも複数――――アスカは自分がすっかり包囲されていることに気付いた。

新たに現れた気配は五つ。どれも目の前の男と似たような身なり

の男たちである。どう見てもチンピラやヤクザにはない、それ専門の研ぎ澄まされたような冷たい雰囲気を纏っている。準備や手間の良さから考えるに、この場所に誘い込まれたようだ。

「こんなことをされる心当たりはないんだけど、素性と目的と明かしてくれないか」

「……フッ」

最初に襲ってきた男は鼻を鳴らすと、流水のように早く滑らかな足取りで踏み込んできた。それは水中の獲物目掛けて急降下するカワセミのように鋭く、迷いのない神速の一襲であった。

「シュッ！！」

アスカの懐に飛び込んでくるなり、男は鋭い呼気と共に右の貫き手を打ち込んでくる。顔面に向かって一直線に伸びてくる貫き手を左手で弾くと、残る男の左手が弧を描き、真横から襲ってきた。

「ぬぅっ！？」

辛うじて顔を後ろに引いたアスカの鼻先を、男の手が空を裂いて走る。男が身長差に慣れずに目算を誤っていなければ今の一撃で勝負がついたかもしれない。

目の前を一瞬で通過していく手を恐るべき動体視力でアスカは、その手が真っ直ぐに伸ばした人差し指、中指、親指の三指を揃えた得々の型をしているのを見て取った。

（もしかして中国拳法か！？）

アスカは男とすれ違うようにして体を入れ換え、知識が無いので変わった構えと中国という場所から推測したわけだがあながち間違いではないだろう。

急所への一撃必殺を真髄とする中国拳法が相手となれば、密着するほどの近距離はアスカにとっては不利な間合いである。

先制攻撃が空振りしたと見るや、他の五人が一斉に動いた。

最初の男も加わり、左右と背後から三人が同時に低い姿勢でアスカの足元を狙って滑り込み、残る三人がそれぞれ微妙にタイミングをずらして跳躍からの攻撃を仕掛けてくる。相打ちの危険はあるが、受ける側にとっては地上にも空中にも逃げ場のない、完璧ともいえる連携攻撃――――しかし、アスカの五感には、六人の動きを三次元レーダーのように的確に捉えていた。

動きが見えているといっても、相手から魔力や気を感知できず、表だって忍術や魔法を使えないのでは数と未知の拳法を使う相手たちを相手

取るのは不利。そう判断したアスカは、身体を捻りながら真後ろに向って後ろ回し蹴りを放った。

背後の完全な死角から仕掛けようとした男の顔面にカウンターで蹴りがヒットする。吹っ飛ぶ男を追うようにして飛び退くと、攻撃対象を失った五人の襲撃者は一瞬前までアスカの立っていた位置で激突し、もつれあって無様に転倒した。当の襲撃者たちは、何が起きたのか理解できていないという表情になった。よもや子供に必殺の陣を破られるなどとは思いもよらなかったのだ。

――――【螺旋丸・極小バージョン】

アスカは左手に集めた＜チャクラ＞を乱回転させて、通常よりも小さなアスカの掌にスッポリと収まる小規模の螺旋丸を、転倒した男たちの近くの地面に叩きつけた。慌てて起き上がろうとした六人を、衝撃波が木の葉のように吹き飛ばす。

「まったく乱暴な奴らだ。今のは手加減したが……続けるなら次は容赦しないぞ」

開いた左手を威圧するように前に突き出しながら、アスカはつとめて優しい口調で言った。ただ飛ばされただけなので物理的なダメージはほとんどないものの、何をしたら十にも満たない子供が地面を陥没させるのかと相手の戦意に十分な衝撃を与えていた。

「……ッ！」

リーダーらしい男が符丁のような意味不明の言葉を発すると、謎の襲撃者たちは現れた時と同様に闇に溶けるように姿を消した。アスカは気配が完全に消えたのを確認してから構えを解き、また厄介ごとかと溜息を吐いた。

（問答無用で襲ってきたわりに、随分と引き際がいい。素性がバレるのを怖れたのか、それとも）

溜息を吐いて気を緩めたその時、アスカは背中に針先が触れたような殺気を感じた。決して油断していたわけではない。まだ、敵がいる可能性も考えて気を張っていたから周囲に人の気配は感じなかった。

が、背後から針の先程の細い殺気が身を貫いているのを感じ取った。

「――っづ！」

この時、自分でもよく瞬時に反応できたものだと後に思う程に、アスカのスピードは今まで出した中で間違いなく最速の動きだった。

だが、過去最速のスピードを記録したといっても完全に避けるのは間に合わず、腕を何かが貫いた激痛に呻き声を上げた。刃物か何かで刺されたらしく骨に達しているかもしれないほどの激痛が走る。

反射的に殺気に反応していなければ、真っ直ぐに背中から心臓を狙っていた何かによって命を落としていただろう。

（危なかった……！）

間一髪。腕だけですんだが身体の芯まで震える。後少しでも気付くのが遅れていれば間違いなく心臓を貫かれていた。

その事実に恐怖しながらも、痛みに耐えてその場から離脱して振り返ると、そこには齢百を越えるのではないかと思える皺だらけの猿染みた風貌をした老人が、アスカの血が滴り落ちているナイフを片手に立っていた。

「ふむ、今のを避けるか。いや、私が殺気を完全に消しきれなかっただけか」

ナイフを振って血を払いながら、そこだけは生気の衰えない黒々

とした双眸が光っていた。

「誰だ……」

「我が名は王・英（ワン・イン）。主（ぬし）には怨みはないがその首、貰い受ける」

小さく、呟くアスカだが相手が答えてくれようはずもないと思っていた。が、何故か正直に答えてくれた。よほどの自身の実力に自身があるのだろう。それほどに立ち会っているだけでも強さがビリビリと伝わってくる。

あのまま立ち止まっていれば、仕留められていただろう。それを防げれたのは重畳だ。だが窮地といった点では変わりない。先程ぐらいの相手なら逃げられることが出来たかもしれないが、見るだけでも相手の地力の高さが窺える。

（くそ、隙が無い……！）

未知の相手と対峙した時、何故、初見が重要なのか？

体力、実力に大きな差があれば成り行きで圧倒できるかもしれない。しかし、相手が相応の実力であれば出来うる限り情報を得た方がいい。

体格や構えから格闘技の有無、また種類など……そこからどう攻めるべきか、何をしたら危険か、有利な点・不利な点を判断するので、この時点で勝負を分けるといってもいい。

情報を得ることによってある程度、戦略を立てることが出来る。そして自分の得意な流れを作って、より強力な技を決めるようにす

るのだ。状況に

よって臨機応変さも必要だが、ある程度、方向を決めて戦う方が迷いなく戦えるものなのだ。迷って動きが止まることや、無頓着にかかって行くことは極めて危険である。

（逃がしても……くれそうにないな）

初めて訪れた土地なので、当然のごとく土地勘がないので逃げ切れるかも怪しいが、そもそもすんなりと逃がしてくれる隙がない。背を向けた瞬間に脊椎を折られ、臓腑を抉られるというビジョンが確定した未来のビジョンとして脳裏に浮かぶ。

一瞬、【忍術】を使おうかとも思ったができない。相手からは魔力も気も感じないので、実力はあるのに裏の人間が判断がつかないというのもあるが、何よりも左手の二の腕を刺されたので腕が上がらず、印を組めない。

印を組めなければほとんどの忍術が使えないので、できるのは印を使わない螺旋丸などや身体強化ぐらいしかない。

「何故、俺の首を狙う？　さっきのもそうだが、心当たりがない」

今は一つでも情報が欲しいアスカは、どこぞで恨みを買ったかもしれないことはおくびに出さずに問いかける。

「黒虎白竜門会、と言えば分かるだろう」

「黒虎白竜門会？」

王（ワン）が当然のように言うもアスカにはその名に心当たりがない。名前やこの場所から考えるに現地の組織のようではあるが少なくとも、この国ではまだ騒動には巻き込まれていないはず。

「知らぬと言うのか？　ならば何故、我らの仕事の邪魔をした」

眉を顰（ひそ）めて問いかけてくる王（ワン）に、本当に心当たりをないことを告げると雰囲気が変わった。

「そもそも、この国には今日来たばかりで、何か邪魔したような記憶はないんだが……ただ、誘拐されそうだった女の子を助けた記憶はあるけど」

空港からこの街に来て、早々に中華料理を味わった後に本場の肉まんを食べながら街を散策していると、目の前で自分と同年齢くらいの少女が数人の男たちに黒いバンに連れ込まれかけていたので助けた。

気配を消して少女が必死に抵抗して手間取っている男たちの後ろから強襲して倒し、後は警察に任せてさっさと退散して散策を続けた。

《あれ？　もしかしてあの男たちが所属していたのが黒虎白竜門会っていうオチなのか》

《どうやらそうっポイの。さっきの奴らもそうだと仮定するなら全ての辻褄があう》

玉藻が出した結論を聞いてオーマイガーと言って空を仰ぎたくなる。アスカにとっては呼吸をするように当たり前のことをしただけ

なので、今までそれほど頭の中に残っていなかったのだ。

「ということは本当に何も知らないで邪魔をしたということか。大老が聞いたら何と言うかな」

本当に知らないことを告げると、少しばかりの呆れがあったが直ぐに雰囲気が変わる。殺伐とした雰囲気――アスカに思わず構えさせるほどの殺気を向けてきた。もはや止めることも逃げることもできないのだと分からされた。

「だが、邪魔をしたことは事実。面子もあるのでな、自分の不運を悔いて死ね」

黒虎白竜門会は中国武術を扱う者たちが所属しており、悪逆の限りを尽くしてきた一切の情を持たない冷酷非情なる組織。知らなかったから

といって許されるはずもなく、一度兵を向けた以上は組織としての面子もある。

アスカには理解できないことだが、裏の組織が何よりも重んじるのは面子だ。己の強さこそが誇りであるからだ。

強さに拘るが故に、いかなる理由による戦いでも、勝負とあれば勝たねばならない。そして、敗北すれば、その雪辱のために全力を傾けざるをえない。

闘えば一方が必ず敗者となるこのゼロサム・ゲームにおいて、常に勝者であり続けることは難しい。勝者は敗者の恨みを買い、さらに厳しい闘いを強いられることになる。

それは武道を志す者も同じで武徳を養わねばならないのだが、アスカは別に武道を志しているわけではないので割愛する。

「……」

「……」

数秒のにらみ合いの後、二人は向き合ったまま、ほぼ同時に真横に走った。二人の間を木が挟んで互いの姿を一瞬隠した直後、牽制に放れたナイフを取り出したクナイで打ち落としながら、アスカは地面を踏み切って王（ワン）に襲い掛かった。

「シッ！」

アスカの一撃は距離を一気に踏み越えた、低く鋭い跳躍から左足で超高速の上段後ろ回し蹴りだった。左右に避けることも退くことも出来ない強襲である。王（ワン）は慌てることなく、肘を使って流れに逆らわないように蹴りの打点をずらし、アスカの着地に生じる隙を狙おうとしたが、しかし次の瞬間、刹那の間、攻撃すべき相手を見失った。

「なにっ！？」

アスカの蹴りは一撃では終わらなかった。避けられた上段回し蹴りの回転力を活かしたまま、連続で右足で下段回し蹴りを放ったのである。

この技の名を【木の葉流・体術：木ノ葉旋風】。上段蹴りと下段蹴りを連続で放つ体術で、上段蹴りを囮に相手が回避したところを

下段蹴りを放ち命中させる。左腕の怪我もあるし、相手の実力の底が見えないので速攻で決めにいった。

蹴りを浴びた王（ワン）は防御しきれずにたまらず後退した。アスカは着地と同時に再び、跳躍し、頭上から踵落としで追撃するが、王（ワン）は蛇のようにするりとその大技をかわし、アスカの横に回りこみながら右手を振るった。

「！！」

打たれた場所に刺すような痛みを感じたアスカは、飛び退いて王（ワン）との間合いをとった。王（ワン）も直ぐには攻め込んではこず、再び睨み合いとなる。

「小童にしては小癪な技を使う。成る程、私が呼ばれる必要があったわけだ」

王（ワン）は先程の男たちのように両手を突き出し、やや左半身に構えている。服の胸元に靴跡がくっきりと残っているを見て、少なくとも当たったはずなのになんともなさそうな王（ワン）に、刺された背中と打たれた右脇腹に走る激痛で歪みそうになる顔を抑えて焦りを覚えた。

刺された腕の傷は当然として、軽く一突きされただけの右脇腹も並みの人間ならあっさり戦意を奪われそうなほどの痛みを感じていることに詐欺だと言いたくなる気持ちを抑える。

（どうする、どうする、どうする……！？）

混乱のまま、何とか逃げ延びうる方法を、良い策を見いださなければ、とかつてない恐怖に駆られながら、思考に耽る。

（影分身、いや魔法のことを知られるのはだめだ。痛みもあるし、そもそもこの腕では印を結べない。螺旋丸……それも駄目だ。振りが大き過ぎる）

思考が纏まりきらない。そこに、さらなる追撃がきた。

「――――――ジャッ！」

幻惑効果の高いぬめるような足運びで踏み込み、指先を揃えた独特の型の拳で急所を狙ってきた。

今までの敵は動きに緩急をつけることはあっても、ここまで独特な歩法を使う者はいなかったのでやりづらい。初めて見る動きなので先の行動が読めない。何時もなら読めなくても身体が勝手に反応してくれるのに、王（ワン）の攻撃に何故かついていけない。

この攻撃も鎌首を擡（もた）げた毒蛇のような動きで防御の隙を巧みに突いてくる。アスカは動き回り、時には木を盾にすることで避けているが、その動きは王（ワン）のような達人レベルの人間からしてみればあまりにも直線的過ぎた。

単純なスピードなら勝っているのに動きを先読みされ、奇妙な動きに攻撃でアスカは何時ものリズムを崩されて自分のペースを保てない。

アスカの弱点はその絶望的とも言えるフィジカルの弱さにある。齢（よわい）七～八の子供なのだから仕方ないにしても、それを補うために最後には【忍術】に頼らざるを得ない戦術……だが、それは【忍術】というこの世界では異能に当たる術に依存することになり、アスカ

自身の成長を阻害する結果へと?がる。

強敵と出会う度に【忍術】に依存すれば、成長することなく尚更、頼らざるを得なくなる。それは無間地獄のように?がって悪循環を成し、鎖のようにアスカを縛り上げていく。

その兆候を感じ取っていたからこそ玉藻はこの戦いに助力しない。これもまた試練と考え、最後の瞬間まで手出しをする気はない。成功よりも失敗、勝利よりも敗北こそがより人を成長させると知っていたからだ。

アスカの後退する兆しを見抜いて数メートルの間合いを一足飛びに詰め、鳩尾を狙って二指を伸ばした拳を突き込んできた。身体が居着く瞬間を狙ったため攻撃に気づいても回避不可能だった。

「フグォッ!?」

鳩尾に食らったアスカは身体をくの時に折る。点穴を打たれて単純な打撃力以上の痛撃をアスカに与えた。

「――――――ちぃっ!」

横隔膜が麻痺して呼吸が止まるも、身体に雷遁を流して刺激を与えて無理遣りに動かす。表だって【忍術】を使えない以上は見えないところで使うしかない。

反撃するため、思わず地についていた右手を軸にローキックを放つ。ローキックを飛び上がって避けた王を追いかけて飛び、高速に回転しながら中段蹴り、上段蹴り、最後は踵落とし、と流れを止めることなく放つ。

「避けた！？」

が、王（ワン）は初見の技である高速連続体術【木ノ葉大旋風】を、驚くほど柔軟に、そして独特な動きで全て回避した。

「甘い、直線的過ぎるぞ小僧！」

小柄なのに鞭のようにしなる足がアスカのがら空きの腹に吸い込まれた。着地して動きの止まったアスカに畳み掛けるような連打が襲いかかる。

鋭い突きと弧を描く刺し技の連続攻撃を食らってアスカは怯む。

「むっ！？」

頬にひきつれを感じたアスカは反射的に顔を背けた。直後、胸と顔面に鋭い痛みが走る。まぶたを浅く切られ、左目の視界が朱に染まった。

ガードが甘くなった左手をすり抜けて、王（ワン）の掌打がアスカの脇腹に突き刺さった。掌で打つとも共に折り曲げた指が点穴を突く。

「がぁあああああああああ！！」

脳天まで貫く激痛が走るが、アスカは怯むどころか逆に反撃に出た。

王（ワン）はアスカの突き出される腕を弾き、その一瞬に生じた空隙に、閃く稲妻のごとき渾身の突きを打ち込む。

まるで野獣のように激烈な攻撃に成す術もなく、押されるアスカ。

間違いなく王（ワン）は、アスカが今まで闘った相手の中でも屈指の実力者だ。単純なパワーやスピードなどの能力はそうでもないのに、中国武術特有のやり難さと先の読めない動きに翻弄される。

アスカは得意な距離を保ちたいのにピッタリと動きについてくる。踏み込みの先を潰されるのでトップスピードに持ち込めない。パワーも力が完全に乗る前に抑えられては翼を？（も）がれた鳥のようなものだ。

アスカが蹴りを放つも、王（ワン）はそれをかわしつつ背後に回り込んで背に肘を打ち込む。アスカが裏拳で反撃すると、その腕を上に跳ね上げつつ足元を刈り、同時に胸を掌で打った。

「ぐっ……！」

アスカは吹き飛ばされながらも踏ん張り、倒れはしなかった。しかし、相当に効いており、かつ手加減されていることは明らかだった。受けと崩し、そして攻撃を同時にやっている。正面から突っ込んでいくだけでは勝てないのは明白だ。

遊ばれているのに押されているという現実に歯噛みする。旅に出てから幾人もの強敵と闘ったが、＜魔力＞も＜気＞も使わないのにここまでの相手は初めてだった。

「食らうがいい、我が絶招を！！」

鋭い飛込みから、腕を真っ直ぐに伸ばして手刀を振り下ろしてく

る。

アスカは無事な右腕を頭上でクロスさせて防御したが、如何なる方法を使ったのか防御の上からアスカの身体に衝撃が走る。

王（ワン）は伸ばした両腕を身体ごと回転させながら、連続で手刀を叩き込んでくる。都合五回目の攻撃で、アスカの右腕は痺れたように痛んだ。アスカはかわしきれなかった二回を腕で受け止めるも、受けた感触は氷の刃に等しく、悪寒が身体の芯まで染み通った。

移動と攻撃が一体となった王（ワン）の絶唱【連環掌拳法】でアスカの懐に入り込んだ王（ワン）は、蛇のような動きで続けざまに抜き手を放つ。間合いを詰めた王（ワン）は両手の三指を揃えて蛇頭を模した形にし、身体の正中線に沿った急所を狙って刺突を繰り出した。

アスカは目にも留まらぬ神速の突きを、危機感から発動した【万華鏡写輪眼】の見切りや洞察眼の能力を全開に使い、刺されて動かない左腕も無理やり動かしてその攻撃を弾き、払い、軌道を逸らして捌き、あるいは弾いたが。

しかし、五回目の攻撃は捌ききれず、胸に食らってしまう。

「ガハァッ！」

氷柱を身体に突き立てられたような痛みと共に、胃の奥から込み上げてきた血の塊が口から飛び出した。

見えていたのに身体が反応しきれなくなっていた。前の攻撃を捌いた直後の右腕の位置では防御できない絶妙な死角を突いてきたのだ。

相手の攻撃に対して的確に対応しているつもりでも、まるで詰め将棋のように追い詰められ、最後は王手を掛けられる。受けきれなくなる前に反撃しようとしてもその隙が見つからず、後退するか、受けるかの二択しかない。

王（ワン）は再び連続突きを仕掛けてきた。最初とはコンビネーションの異なる連続攻撃である。アスカは今度は三回目までしか防げず、捌ききれずに刺された肩に受け、毒蛇に噛まれたような重い痺れと疼痛が残り、今度こそ完全に左腕は死んだ。並みの人間なら一打を食らっただけで立っていられないはずだ。

（まずい――――）

敵と一対一で相対し、正面から激突しながら圧倒されるなどという状況は、今までに数える程しかない。師である玉藻と一年と少し前に戦った吸血鬼など数えるぐらいである。玉藻がアスカ相手に殺し合いをするはずもないので論外。他の相手は力押しで負けそうになれば、奇策やいろんな手段を使って勝ったので、本当の意味での絶体絶命というのも初めてかもしれない。

「人体の構想を研究し尽くした上で編み出された絶対回避不可能の連撃――――しかし、すべてが急所を狙う必殺攻撃だ」

防御不能だというなら技自体を食らわないようにしなければならない。【連環掌拳法】自体は密着間合いでしか使えない技だが、その布石としていろんな攻撃方法を持っている。受けに回るのは得策ではなかった。

「我が絶招【連環掌拳法】を手加減したとはいえ、五つまで捌いた

のはお主が初めてだ」

王（ワン）は皮肉ではなく本気でアスカを称賛した。

「だが、半分を防ぐとは。これ以上、小童と思って侮るのは危険か」

王（ワン）が何を呟いた瞬間、アスカの身体に衝撃が走った。

何が起きたのか確認しようと視線を下げたアスカは、王（ワン）の右手が服を突き破って自分の鳩尾に深々と突き刺さっているのを見た。拳を打ち込まれたのではない。手刀が腹筋を貫き、臓腑を抉っている。

今までの全てが遊びだと言わんばかりに、あっさりと決着がついた。

「グッ……」

食道を登ってきたものがアスカの口から噴き出した。ドス黒い血だった。

苦し紛れに攻撃をするが、簡単にかわされた。

だが、距離を取ってくれたことで直ぐさま、まだ辛うじて無事な右腕の掌に＜チャクラ＞を込め、【掌仙術】で文字通りの『手』当てを行って血止めをする。

が、その絶対ともいえる隙を王（ワン）が見逃すはずもなく、一歩で接近され、生死を分つ間合いへと入り込まれる。

即座に繰り出されたのは回し蹴り。軸足の左足が、地に根を張る

かのように固定されて体重の移動と共に鋭く回転。あまりの回転力に地面が抉れ、遠心力をたっぷりと乗せられた右足が、アスカの米神へと畝(うな)りを上げて襲い来る。

「……っ!?」

声にならない恐怖の叫び声を上げながら、アスカは地面へとしゃがみこんで避けた。その直ぐ上の頭上を、足が通り過ぎた。だが、攻撃はそこで終わらなかった。

（まさか木ノ葉旋風を!?）

王(ワン)は蹴りの回転を殺さぬまま、背中を向けて根のように地に張っていた左足で飛んで下段蹴りを繰り出してきた。それは先程、アスカが見せた【木ノ葉旋風】の変形で僅か一合でコピーされたことを意味していた。

無様にしゃがみこんでいたアスカは避けるどころかガードすることもできずに吹き飛ばされる。

（ぐっ……!?）

側頭部を蹴られ、更に吹き飛ばされた先にあった樹に後頭部を打ち付けてしまい、脳が揺さぶられる。そのまま、視界が掠れていった。

「子供を殺すのは気が進まんが、己が運命を怨むがいい」

そう言いながら、ゆっくりと歩み寄ってくる王(ワン)の姿が見える。

身体はほとんど動かず、視界も定まらないアスカはもはや闘えない。両腕は既に死んでおり、足には力が入らない。

もう限界かと玉藻が判断して表に出ようと考えていると、王（ワン）が首を回して辺りを見渡しだした。

「んっ！？　ぬりゃああ！！！」

まるで誰かを探しているように辺りを見ていた突然、斜め後ろにあった木の幹に右の拳を叩きつけた。左半分を粉砕された幹はバキバキと自重に耐え切れなくなって左に倒れていく。その木の後ろには人の姿。

「ほっ！　さすがは裏世界に名高き黒虎白竜門会の王・英（ワン・イン）！！　容易に背後は取らせてもらえないね！！」

鼻の下に左右に伸びる長い黒ひげと眉毛を蓄え、カンフー服と帽子を着用しているのはアスカよりも背は高いが成人にしては小柄な中年の中国人の男性。

「ぬ！？　貴様は鳳凰武侠連盟・総帥にしてあらゆる拳法の達人、馬剣星（ばけんせい）！！　何故、ここに！」

アスカは全く知らないが王（ワン）が知っている有名人のようで、驚きを露にしている。

「なに、彼が助けてくれたのは私の娘ね。出てくるのは当然よ王（ワン）！　そもそも先に喧嘩を売ってくれたのはそちらね！！」

その男性――――――王（ワン）の言葉から馬剣星（ばけんせい）と呼ばれた男性は、ど

うやらアスカが助けた少女の父親らしい。剣星の娘だったから助けに来てくれたようで、傷ついて倒れたアスカを見て気勢を上げる。

「ふん、そういうことか。出会った以上、その首を貰うぞ剣星(けんせい)！！」

剣星の気勢に合わせるように王(ワン)も気勢を上げ、両者は同時に踏み込んだ。

「はぉ！」

「ふん！」

お互いに相手の動きを脳内で先読みして牽制し合い、複雑に入り組んだ攻防が始まった。二人が一瞬で高速で移動するために立ち位置が目まぐるしく変わる。

螺旋運動をしながら突きと前蹴りを同時に放つ王(ワン)に対して、小柄な体格を活かした剣星は相手の突きと蹴りを避けながら足を取り、胸部に頭突きを入れる。

王(ワン)は突きを放った手とは逆の手で頭突きを防御し、金的攻撃と膝の関節を破壊しようとするのを跳び退って回避するも、剣星に懐の内側に入り込まれた。

王(ワン)に向かって左の掌が伸びる。一見すれば掌で攻撃するだけだが剣星のそれは伸筋や重心移動の力により絶大な威力を誇る勁力を送り込むようにして打つので決まれば必殺となる。

「十字手！！」

先程とは逆に、今度は王（ワン）が剣星の攻撃を掻い潜り、両手を交差させ手刀の先で相手の鼻を削ぎ落とさんと迫る。

その攻撃に気付いた剣星が間一髪顔を上げるも、掠った鼻先が焼けるような火傷の痛みを与える。少しでも反応が遅れれば鼻先が削り落とされるゾッとなる展開になるところだった。

「むっ……！」

上体が浮いたことで反応が遅れる剣星の隙を突き、伸ばされた左を掴んで捻り、自身の膝に剣星の頭を叩きつけ、裏拳で打ち砕こうと振り下ろす。

「ちっ、もう少しで頭が砕けたものの……」

辛うじて回転して回避して即座に立ち上がった剣星を憎々しげに言うのを、ズキズキと痛む身体を起こしたアスカが見ていた。

《凄い……》

《逐次動きを変える王（ワン）もそうだが、それに完全に対応している剣星というのも中々にやりよるな》

アスカは二人の戦いに見惚れていた。純粋な力や速さなら本気を出したアスカが勝るだろう。だが、彼らのように流れるような動き、技を繰り出せる自信は全くない。今のアスカでは再現することもできない。単純な拳士としての技量に差がありすぎるのだ。

独特の歩法、手元で伸びる動き、気や魔力を使わないにも関わらず並みの術者を遥かに凌駕するパワーとスピード。踏み込みで地面

を陥没させ、無造作に放った一撃が簡単に木の幹を粉砕して折るのを見ると本当に人間なのかと疑いたくなる。

武術は極めるごとに詰め将棋のようになっていくと聞いた事があるが、成る程理に叶った、自分の扱う体術とは住む位階が違う洗練された技術だ。

（なんだ、あれは？）

発動したままの【万華鏡写輪眼】の洞察眼によって二人の間に奇妙な線が浮かんでいるのを見た。それは二人の技の軌道を読み取っているのだが、今のアスカには理解できない。

（だけど、王（ワン）の見切れなかった動きの秘密が分かった）

太極拳、八卦掌、刑意拳の中国三大武術……本来はさらに小林拳を加えた四大武術とするが、裏社会を統べる黒虎白竜門会は仏門に通じる小林拳を外し、三大武術としている、

闘っている二人を第三者の視点から見ることで、読めなかった王（ワン）の動きの秘密が分かって来た。分析に全神経を集中することで、実戦で多様な敵と渡り合う上で最も必要な能力である”見切る力”が発揮された。

王（ワン）の動きの秘密は『円、線、螺旋』にある。八卦掌の円運動、刑意拳の直線の軌道、太極拳の複雑な螺旋と目まぐるしく、あまりにも異質な三つの動きこそが秘密。

中国三大武術とはよく言ったもので、こうも常に違う三つの動きを一歩ずつ変化してされれば身体がついていくはずがない。

幼い頃からの特訓で条件反射的に相手の動きに対処できる目と身体になっているが、その対処自体を逆手に取る攻撃だから不利な闘いだったのだ。円と見るや線、線と見るや螺旋と、どうしても前の動きが後を引く。順番も自由自在だから対応することも難しい。

全く違うそれらの動きを、一つの動作に組み込む王(ワン)こそが異常なのかもしれない。

アスカが観察している間にも戦いは続いている。

王(ワン)は鋭く跳躍して近くの木を蹴り、三角蹴りを仕掛ける。それを剣星はかわして着地を狙おうとしても再び跳躍し、別の木を使って急角度の蹴りで突っ込んだ。

三角蹴りで剣星の懐に潜り込んだ後も王(ワン)の猛攻は止まらない。アスカに放ったのとは段違いのスピードで、点穴を狙った拳突と死角から襲ってくる鋭い蹴りの間断ない高密度の攻撃。先程までは文字通り遊んでいただけだと言わんばかりの猛攻を、剣星は悠々と捌き、突然アスカの目からも消えた。気付いた頃には猿が大木間を駆け周るような俊敏さで王(ワン)の背後に回っていた。

王(ワン)も即座にその場から離脱するも、剣星はピタリと追いすがって全身でぶつかるように掌を接触させた。

「くおおっ！」

地面を陥没させるほどの震脚を伴った【発頸】の生み出す衝撃は一トンを越え、王(ワン)は身をかわして何とか急所を外したものの、数メートルは跳ね飛ばされた。

「ぬぅ……噂通りの腕……いや、噂以上か……」

王（ワン）は歯軋りをしながらも立ち上がった。顔を歪めたのは憤怒のためばかりではなかった。掠めただけにも関わらず、身体の奥に浸透するようなダメージを受けていたのだ。咄嗟に身をかわさなければ、今の一撃で勝負がついていたところである。

「退け、王（ワン）！！」

地に降り立って帽子を押さえながら剣星は腹を押さえて膝をついた王（ワン）に忠告する。

二人の実力差はほとんどなく、拮抗していた。実力が拮抗しているなら、先程受けたダメージの差で王（ワン）が不利になるのは目に見えている。このまま闘えば待ち受ける結果は即ち、王（ワン）の『死』である。

「悪いが、そうはいかんのだよ。私にも武道家としての意地がある」

口の端から血を垂らし、未だに痛むのか【発頸】を撃たれた腹を押さえながらも王（ワン）の戦意は全く揺らぎもしていない。

「剣星！！　我が絶招を持って打ち砕かん！！」

「王（ワン）が本気で来るとあらば……手は抜けんね」

『絶招』とは中国拳法における『奥の手、切り札』転じて奥義のようなものに付けられる技の称号のことで、王（ワン）は宣言して両手を胸の前まで上げて気勢を発する。

『絶招』の示す意味を正確に理解している剣星は気を引き締め、待ち受けるように拳を握り構える。

「ゆくぞ！！」

王（ワン）は疾風の如き速さで突進して剣星に襲い掛かった。その攻撃は、まさに獲物の喉笛に食らいつく野獣の顎と化していた。

鋭い跳躍から、真っ直ぐ伸ばした腕を振り下ろして手刀を叩き込む。着地すると、再び跳躍しながら身体を回転させ、上昇と下降の間に連続して計十回の手刀攻撃を加えた。

「ぬう！！」

王（ワン）の絶招【連環掌拳法】は――――今回は十回目で終わらず、攻撃は倍の二十回は続いた。

最後の二十回目は両手による掌底だった。一つ一つの技が必殺の威力を持ち、急所を狙い、それらが連携することで隙を補い合う。一回でも通してしまえば致命的なダメージは必死だった。

奥義と言いながらも、一つとして同じ技は含まれておらず、どの攻撃も急所を狙いながら同時にフェイントでもあるという虚実入り混じった連携で、そのバリエーションは千差万別である。人体の構造や心理まで計算されて工夫された奥義なのだろう。初手で見切れるような底の浅い代物ではなかった。

【連環掌拳法】を破るには組み手の実力で完全に王（ワン）を上回るか、普通の人間ではあり得ない動きで応じるかのどちらかだが、あまり分のいい賭けとはいえない。

例え怪我もなく万全の状態でもアスカに耐えられるのは、どんなにシュミレートしても十回が限界。

なのに、剣星と呼ばれた男性の両手が二重の円を描き、殺到する飢狼(がろう)のごとき王(ワン)の連続攻撃を腕の回転という最小限の動きだけで捌いていた。それが化頸といって、中国武術において相手の攻撃力を吸化、或いはベクトルをコントロールする身法のことだと知ったのは後になってのことである。

二人は猫のように空中で姿勢を立て直して足から着地すると、何事もなかったように再び相手に向って突っ込む。

「イヤアアアッ！」

「おおおおおっ！」

互いの中段突きが激突した。

あまりの衝撃に王(ワン)が拳を戻して一瞬だけ動きを止めたのとは反対に、剣星は動きを止めずに王(ワン)の左足を跳ね上げる。更に剣星が肘打ちを合わせると、膝関節が破壊されて逆向きに折れ曲がった。膝を折られても尚、構わずに攻撃しようとする王(ワン)を、剣星は下から突き上げる膝蹴りで弾き飛ばす。

「ごふぅ……！」

空中に吹っ飛んだ王(ワン)を追って跳躍し、上昇しながら旋風脚と踵落としの連続蹴りで追撃した。王(ワン)は地面に叩きつけられてバウンドし、その前に剣星が体重を感じさせずにふわりと着地する。

「ぐ……あ……」

王血交じりの唾を吐きながら身体を起こした。驚異的な体力といえたが、左足を破壊されては満足に動くことが出来ないので王に戦闘能力がほとんど残っていないのは明らかだった。それでも剣星は油断無く構え、相手の次の動きを待った。

「私の……最後の攻撃だ！　受けて見よ、剣星！！！」

それでも立ち上がった王。まだ足が、手が動くならば闘える。それを再現しているような王の姿にアスカの心が震えるような情動を覚えた。

限界が近いことを感じ取っていた王は最後の攻撃だと宣言した。肺の中の空気を全て吐き出し、大きく息を吸うという深呼吸にも似た呼吸をしながら、腰を落として開いた右手を前に出し、左掌を上にして構える。

「その呼吸……さては雷声！！」

剣星が王の呼吸法を見て驚きの声を上げるも、その時には既に王は無事な右足だけで踏み込んだにも関わらず驚異的な速さで拳を繰り出していた。

特殊な呼吸法で横隔膜を振動させ、身体を一つの弾丸の如くする太極拳の秘法【雷声】。拳銃に例えるなら、横隔膜が撃鉄で拳が弾丸のようなものである。形のみ伝わっている場合も多い中で本物の必殺の一撃。

「フン！！」

それに対し剣星は拳を受けて血を吐きながらも、一歩左脚を引いて脚とは反対の右掌を前に突き出していた。

剣星が繰り出したのは【退歩掌破（たいほしょうは）】と呼ばれる、前に突き出した反対の腕を一直線にすることによって、向かってくる相手を返り討ちにするカウンター技。

退歩とは己が力を一切使わず、相手の力が強ければ強いほど、効果が増大する実に高度な攻撃技の一つ。下がって突くのではなく、手をその場に置いて後ろの足でつっかえ棒にしている。つまり、王（ワン）は剣星の右掌で突き飛ばされたのではなく、全パワーに【雷声】を乗せた状態で地面に固定された棒に自ら突っ込んだのだ。

「ガハッ……見事……なり、馬剣星……」

メキメキと骨が砕ける音と共に猛烈な衝撃に吹っ飛ばされた王（ワン）は、背中から樹に激突して大量の血を吐きながら地に横たわる。

「良き闘いだったね、王・英（ワン・イン）」

念のために内功を練っていなければ、いま立っているのは逆になっていた。まさしく勝敗の差は紙一重でしかなかった。

「ふ……」

己が最後の攻撃を凌いだ剣星を称賛し、剣星の言葉に同意するように笑みを浮かべて王（ワン）は目を閉じた。

アスカもそこで気が抜けて視界がぼやけて意識が遠くなっていく。

口から流れる血を拭いながらこちらに歩み寄ってくる剣星への対応を玉藻に任せ、最低限の血止めもできたので安心して気を失った。

第十二話　　旅をする少年０３（襲撃と拳師）（後書き）

分かる方も多いと思いますがクロスした作品は『史上最強の弟子ケンイチ』です。

ちなみに敵役はオリジナルです。達人の扱いとかは後々に出していきますので。

次回の更新は、来週の日曜日午前０時に更新したいと思います。

予定より遅くなる場合は、その都度、活動報告に上げます。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

そろそろストックがなくなりかけてきた今日この頃。

第十三話　　旅をする少年０４（師と名の持つ意味）（前書き）

前話同様に『史上最強の弟子ケンイチ』と微クロスしています。ですが、注意としてクロスと言いながら設定や人物だけを利用したオリジナルと考えて下さい。

多分、ご都合主義などが含まれているのでご注意を。矛盾などが多々あるかもしれませんが、そこら辺は見逃していただけると幸いです。

今話の文字数は２２９５５字と長くなっています。話の都合上、半分に割ろうとすると後半が若干短くなってしまいます。まあ、気にせずにしたらいいんですけど、一話１万字を切りたくないという見栄から妥協できませんでした。

文字数は２３２２３字です。

それではどうぞ！！

第十三話　　旅をする少年０４（師と名の持つ意味）

石畳を踏みしめる足音が辺りに響く。ダンスほどリズミカルでも激しくもないが、足音の一つ一つは力強く、また軽やかでもあった。

まだ日も上がっておらぬ宵闇の中で、踊る小さな人影の姿が一つ。

上着の胸に昇り龍の刺繍が施されている黒いカンフー着を着た少年である。辺りに響くのは少年の履いている功夫靴が敷き詰められた石畳を蹴る足音、鋭い呼吸音、板張りの床を蹴る音、空気を裂いて振るわれる拳の音、振り回された鈍器のような音を立てながら通過していく蹴りの音だけだ。

少年は拳法の鍛錬の最中だった。ギャラリーなんて一人も存在しない広場において、少年はただ一人舞踏を踊る。

跳躍しながら右足を頭の上にまで上げて蹴りを放ち、その蹴りの動作が終わる前に左足を同じように蹴り上げる。二段蹴りから着地しても間を置かず踏み込みながらの左右の肘打ち、さらに矢のように飛び出しながら腕を伸ばして渾身の拳突を放つ。数メートルの間合いを一歩で詰める長大なストレートパンチだ。

「ハアアァァ――――――……」

低く唸るような息吹と共に、今度は相次いで拳と蹴りが空を裂いて走った。小さな体躯が大きく旋回し、宙に跳ね上がった爪先が弧を描く。

「フッ……ハッ！」

拳の突きの連打から回し蹴りを放ち、バックハンドブロー、肘打ち、突然身体を沈めてからの足払い、その体勢から膝蹴りで飛び上がり、踏み込みながら突き上げるような蹴りへと技を繋いでいく。

大技が終わると今度は呼吸を整えながら太極拳のようなゆったりとした動作に移った。スローな動きだが全身に力が漲っているのが素人にも分かる。

要所で雷鳴のような激しさで地面を踏む。

両足を肩の幅に平行に開き、背を伸ばしたまま腰を落として両の拳を正面に突き出す。ちょうど馬に跨るような姿勢である。その姿勢を維持したまま動かない。

十分、二十分、三十分と時間が経過しても同じ姿勢を崩さなかったが、休んでいるわけではなかった。中腰で両手を前に突き出したままの姿勢は見た目以上に筋力を使うので、少年の額にはみるみると汗の粒が浮かんで流れていく。

さらに時が過ぎ、陽が登ってきて何分経過したか分からなくなった頃、限界が近づいているのか少年の息が上がっていた。太腿や腕が小刻みに震えている。

そこに少年の背後――――建物の影から飛び出した誰かが猛然とダッシュして背中に飛び掛った。

「――――うわっ！？」

集中していて周りに意識を向けていなかった少年は驚いて体勢を

崩しかけたものの、倒れることなく持ち堪えた。

「連華（れんか）、鍛錬中に飛びつかないようにって前に言ったでしょ」

「いいじゃない、別に。それに鍛錬になるからいいじゃない」

アスカが自身の背中に飛び乗ったままの少女に注意する。少女――馬剣星（ばけんせい）の実娘である馬連華（ばれんか）は、困ったように注意するアスカを見てニコニコと笑う。

連華はアスカと同年代で、チャイナドレスに大きな鈴の髪飾りを付けた美少女で将来はきっと美人になるだろうと思わせる顔をしている。

アスカがこの国に来た当初に誘拐されかけていたところを助けた縁もあって、かなり連華に慕われており、時折このようにベッタリと引っ付いてくることがある。

「それで、まだ朝も早いはずだけどどうしたの？」

一通り楽しんだ後、連華が背中から降りてアスカは気息を整えると、渡されたタオルを受け取って浮かんだ汗を拭き取りながら尋ねる。

「朝御飯ができたからパパに言われて呼びにきたのよ」

「ああ、もうそんな時間か」

熱中していて気がつかなかったが、空に目をやれば鍛錬を始めた当初は隠れていた太陽が完全に空に登っている。腹の空き具合も朝

食の時間を表していて、思わず鍛錬にのめり込みすぎたらしい。

「ほら、早く行こうよ」

「ああ、分かった」

子供らしく落ち着きのない連華が急かし、だらだらと流れていた汗も拭き終わったアスカもタオル片手に先を歩く連華の後を追うように歩き出す。

後ろから連華の後姿を見れば、耳のようになっている髪は本物の猫の耳のようにぴこぴこと楽しげに動いている。猫のように動く物を追う習性があり、連華は耳のように動く髪の部分を掴まれると力が抜けるので、そのために玉藻から偶に猫扱いされることがある。

本人は不服そうだが言われて皆が納得してしまったのは本人には秘密である。

「でも、家に来たときは同じぐらいだったのにアスカばっかり背高くなって不平等だよね。私にも分けてよ」

「ははは、この地が肌にあったのかな。急に伸びたからね」

一人で前を歩いていた連華がアスカの横に並びながら不満そうに言うのをアスカは笑って受け流す。

二人は同い年にも関わらずアスカの方が視線が高い。この年代なら女の子の方が成長が早いのだが、アスカ本人の言うように中国という国の土地が肌にあったのか、当初は同じぐらいの身長だったのに目に見えて差が出来てきた。連華の身長も伸びているのに、それ

以上にアスカの身長が急激に伸びているのだ。

今では連華がアスカと目線を合わせようと思ったら見上げなければならなくなったことに不満を感じている。

「それで、あの話しどうするの？」

「……う～ん、申し出は在り難いんだけど正直に言えば悩んでる」

あの、とは剣星からの養子縁組の話のことだ。最近、剣星から『自分たちの子供になる気はないか』と言われたのだ。

幾らナギが生きているという記憶があっても会ったことがなく、母アリカは生きているかどうかも分からない。それとはっきりと言ってしまうとネギよりも連華との方が余程兄妹らしいとも感じている。容姿云々ではなく、単純に仲の良さで（容姿という点では、ネギとも似ていないことで大差はない）。

剣星もエロ関係は別にして、師として、人間として尊敬している。奥さんや他の子供たちとも仲良く出来ているのだから、受け入れる理由はあっても断る理由がない。

だけど、アスカの中では自身に流れる血の因縁やその他諸々で踏ん切りがつかない。

蓮華にそう言いながらアスカの意識は、この国に来てからのこれからのことに意識が飛んでいた。

この国に来た夕方、ホテルにチェックインして部屋に入ると暗殺者らしき人間に襲われ、蔓延した殺気でホテル中が敵だらけだと悟って近くの雑木林に逃げ込んだ。

だけど、それは誘い込まれたものだと中国武術を使う六人の人間に囲まれてから気付いた。魔力や気を使っている様子のないことで、秘匿の関係上から【忍術】を使えない。人数の不利を悟ったアスカは、普通の人間ではできない地面を陥没させるという手段を使って追い払うことに成功した。

それで安心したのも束の間、殺気を感じて反応するも背後から左腕を刺された。慌てて振り返った先には齢百を越えるのではないかと思える老人の姿。

そこで襲われた理由を知るも、組織としての面子やら何やらで闘うことになった。だが、老人の底知れぬ強さの前に、【忍術】に依存した戦い方しかできないアスカは重症を負って敗北した。

アスカの命運はここまでかと思われた時、連華の父、剣星がアスカを助けに現われた。

アスカが襲われたのは、少女（後に連華だと教えられた）が誘拐されそうになっていたのを助けたためであり、その誘拐をしようとしていた組織が老人が所属する黒虎白竜門会なのだ。

剣星は王・英（ワン・イン）と戦い、激闘の末にこれを倒した。

剣星は中国で１０万人以上の門下生を擁する中国武術団体・鳳凰武侠連盟の最高責任者で、中国武術界でもその名を知らぬ者はいない。黒虎白龍門会と中国を二分する高名な武術団体であり、１０００年以上前から存在しており下記の黒虎白龍門会とは長きに渡る因縁がある。

黒虎白龍門会は鳳凰武侠連盟とは正反対の一切の情を持たない冷酷非情なる組織で、悪逆の限りを尽くしてきた。１０００年程前から数えて、黒虎白竜門会は馬剣星の先祖によって１０人以上の首領を殺されており、鳳凰武侠連盟とは長きに渡る因縁があり、アスカはそれに巻き込まれた形になったわけである。

重症を負って気を失ったアスカは、剣星の勧めで玉藻が運んで家に連れて行かれて治療を受けた。娘の恩人であり、遥か昔から対立している組織間のゴタゴタに巻き込まれたアスカを放っておけなかったらしい。

「むにゃ……あれ、どこ行くの？」

「あ、いや～ちょっとね」

【魔法】と【忍術】で怪我自体はその日の内に治ったものの、こっそり夜中に抜け出そうとしてトイレに行くために起きていた連華に見つかり、誤魔化そうとするも咄嗟に良い言い訳が思いつかない。

「じゃあ、一緒に私と寝よ」

汗を垂らして必死に考えるアスカを見て、どうしたのかと首を傾けた連華は自分を助けてくれた王子様を恥ずかしそうに誘う。決して連華が言っているのは変な意味ではなく、本当に一緒に寝るだけ

である。

「はぁ！？　……え～と、ごめんね！！」

考えもしなかった申し出に思わず出た大声に口を抑え、言い訳が思いつかずに逃げたのだが連華が大声を上げた所為で屋敷中の人間が目覚めて追走劇が始まった。

「それでどうして傷が治っているね？　さあ、おいちゃんに言うね」

「あ、あはははははは……」

最終的には怪我が完治していないのに逃げ出したので捕まり、完治とまではいかなくても傷が治っていることを不審に思った馬家族に問い詰められて【魔法】の存在を知られてしまった。

逃げられないように縄で雁字搦(がんじがら)めに去れ、縄抜けも出来ない状態に陥ったので最初は笑って誤魔化すも、

「玉藻！　裏切ったね。玉藻も俺を裏切ったね！！」

「まあまあ、落ち着け。ちゃんと理由はある」

色々と立ち去る理由を上げるも、悉(ことごと)く却下され、玉藻も何故か向こうに回ってしまって孤立無援状態に陥ってしまった。

玉藻にしても、何時までも根無し草でいることはアスカの教育上、良くないということを考えており、ここいらで落ち着きたいと考えていた。ここに残ることはアスカに取ってプラスになると判断したから馬一族の側に回ったのだ。

「え～パパ知ってたの？！」

「まあ、職業柄耳は広いからね」

ここで驚いたのは三人の子供以外の親二人は【魔法】の存在を知っていたのだ。使えるわけではないが大分前から知っていたらしい。

どう見てもアスカの怪我は全治数ヶ月の傷が、たった数時間で治りかけているのだ。そこには何かタネが考えた時に剣星の口から【魔法】というキーワードが出てきた。

まさか剣星が【魔法】のことを知っているとは考えなかったので、思わず口が滑ってしまった。

「うえええ～～～～ん！」

「分かった！　出て行かないから泣かないで！！」

それでも頑なに「出て行く」と言い続けるアスカを止めたのは連華だった。断り続けるアスカを見て、自分を助けた所為で襲われたから興っていて嫌っているのだと思って泣き出してしまった。

どれだけ説明しても泣き止まない連華に遂にアスカの方が先に折れた。何故か知らないが女性の涙には滅法弱いアスカは、決して譲れない一線以外では驚くほどに甘くなる。

それが実は失った前世の記憶――――人を殺したことで自分の世界に閉じこもったアスカの背を押す時に言われた言葉が原因であることを本人は知らない。そもそも言われたこと自体は忘れているの

だが、深層心理に『女性に涙は流させてはいけない』とでも刻み付けられているのかもしれない。

「すみませんが、怪我が治るまで厄介になります」

そんなこんなで馬一家の家に厄介になることになったわけだが、アスカ本人は長い間旅を続けたということもあって環境の適応能力は無駄に高い。一ヶ月もすれば昔からいるかのように溶け込んでいた。何か困っていたら風のように現われて風のように去っていくことから嫌う人間も少ない。

だが当然、馬一族の中枢に食い込んだアスカを厄介に思う者はいたが、表だって悪意を表す人間はいなかったので比較的過ごしやすい土地であることに変わりはなかった。

傷自体は一週間もすれば、剣星が用意した漢方の秘薬やらで完治した。となれば自由に動き回れるわけで学校にも通っていないアスカは暇になった。

暇つぶしに散策をしている時に道場を見つけ、そこで修行に励んでいる剣星の弟子たちを見て、夜に自分にも教えてもらえないかと頼んだ。王・英（ワン・イン）に破れたのもそうだが、自分が今まで【忍術】に依存した戦い方をしていた自覚があったので新しい風を吹き込みたいと考えたのだ。

思ったより簡単に許可を貰えたのだが、直ぐに後悔することになったのは余談である。

何故かアスカは地面に埋めた三本の杭の上で片手で腕立て伏せを行っていた。

「１０１！　１０２！　１０、３！」

１０３の時に腕立てしているアスカの腕を払おうとするのを、腕を飛び上がらせることで避ける。その分、腕を再度つけて続行する時には倍する圧力が腕に掛かるという変わった腕立て伏せをやったり、

「千切れる！　指が千切れる！！」

何やら水が入って揺れる度にタプタプ言っている重そうな壷を両手で一つずつ盛り上がった部分を持ち、足を開いて腰を落とした姿勢にさせてから股下……というよりは肛門下に熱そうな線香を数本立てて、両上腕部には、脇を閉じると刺さるようになっている小さな刃物が取り付けられている。

腰を下ろせば線香に焼かれ、脇を閉じようとすれば刃が刺さって慌てて広げなければならない。

また、頭の上には熱湯入りの茶碗が乗っけられていて、下手に崩れ落ちると熱湯が身体に降りかかる羽目になるので自分で止めることができない。

「そう言って、千切れた者はまだいないね」

剣星はそう言うだけで悲鳴を上げるアスカを本当の限界が来るまで助けようとはしなかったり。

「熱ぃ！　熱いぃぃぃ！」

床面に木製の支柱が埋め込まれ、支柱の間に棒が渡してあり、形としては小学校にある鉄棒に似たようなものである。しかし、そのサイズはかなり大きく、支柱の大きさだけで2メートルを越えている。

アスカは足を支柱の間の棒に括られ、下では焚き火が炊かれており、火の熱が容赦なく襲う。

お腹が火傷する前に背中を向けないといかず、背中を向ければこれまた火傷する前にお腹を向けないといけないという無限ループに突入している。これを考案したのは剣星ではないらしが、考案した者曰く、スルメ踊りという修行法らしい。

「コレは中々、火加減が難しいね」

「問題はそこですか、師父!?」

まだ、突っ込む余裕があるのかとパタパタと火元に風を送っていた剣星は更に火の勢いを強める。ちなみにアスカは剣星のことを『師父』と呼んでいる。

「あちゃゃゃ――――――――――ッ!!」

火の勢いが増したことで、無限ループのスピードを上げなければならなくなり、悲鳴を上げるアスカの姿が近くで普通に鍛錬を積む

門下生には見えた。まるで犬の尻尾のようにのた打ち回るアスカの姿を皆が気の毒そうに眺めていたり、

時には真っ暗な一室に閉じ込められ、中には一切の光はなく、常にあらゆる方向から攻撃されるように鉄球や木人君が仕組まれていたこともあった。

時にはこっそり外から入ってきた玉藻が攻撃したりするので、外から来る者は即、敵と判断して襲う。

視覚を閉ざしているせいで他の五感が鋭敏になっているのだ。嗅覚、触覚、聴覚の三つが特に顕著であり、嗅覚は自分の匂い以外の者が入ってきたりしたら直ぐに分かり、触覚は僅かに流れる風すらも知覚し、聴覚に至っては自分の体内で動く内臓の音すら聞こえてくる。

「痛っ！！」

木人君の攻撃を捌き切れずに肩口を強打して、アスカは思わず苦悶の悲鳴をあげる。だが、そこで一気に決めようと大振りの一撃を放ってきた木人君の隙をアスカは見逃さなかった。

「はっ！！」

散々打たれた所為で身体中の関節がギシギシと悲鳴をあげる音を無視しながら、木人君の腕を掴み、そのまま投げ飛ばす。勢いを利用され、大きく放り投げられた木人君は壁に叩きつけられる。そして木人君が起き上がってきた瞬間、アスカは一気に踏み込んだ。

「ふんっ！！」

掌低を木人君の胸に叩き込み、同時に剣星から習ったばかりの【寸剄】を相手の内側に向けて放つ。剣星並みの威力を出すことはできないがその威力は強大で、木人君は背部が膨れ上がり爆発した。

「……なんですか、これは？」

修行後アスカの前に並べられたのは見るからに、怪しい、いや怪しすぎる“物体”だった。多分、漢方だと思うのだが、まるで見た事の無い形をしている上に何か動いているし、蠢いている。

「知り合いの柔術家と相談してね。アスカの筋肉の質を変えてみようと実験することになってね。肉体鍛錬だけではなく、食事にも漢方を取り入れてみたね」

実験ってあんた人の身体を何だと思っていると、そう突っ込みたかったが何か聞くのが怖くて止めておいた。そして、彼は眼前の料理に再び視線を戻した。

（この人は神父の同類だ。断ればその分、修行メニューが酷いことになるのは目に見えている）

今までの修行で実感したアスカはやがて決意をし、同時に目のまえの“それ”を口に運んだ。

「ぐはっ！！」

そして口に含んだ瞬間に声をあげた。苦いとか辛いとかそういうレベルではなかった。まずい、という感覚すらない。ただ、口の中が溶けていくようなというか、侵食されていくというか、だが、確

かに体中に力が湧いてくるような感覚はあるのだ。

「うええ～～～」

確かに効果はありそうなので吐きそうになりながらも食べるアスカの姿があった。

修行の日々を思い出したアスカは、流れ落ちそうになる涙を零さないために空を見た。

「今日も晴れたな」

「ん？　どうしたの急に」

空を見て呟いたアスカに疑問に思った連華が問いかけるも、まさか「修行の日々を思い出して泣きそうになった」などと言えずに何でもないと笑う。

剣星に師事したことで強くなった自覚はあるのだが、如何せん変な漢方を飲ませられたり、肉体改造の名の下に『柔軟性は筋力に並ぶ武術家の命、骨もしなり筋肉や腱も柔らかい子どものうちに柔軟な肉体に仕立て上げれば、良い武器となる』と言われて行き過ぎな柔軟をされたこともある。

関節が良く動けばそれだけ壊される心配も減るから、とどれだけ痛がっても柔軟体操の名を借りた拷問は続いた。そのお陰か股割り

も簡単にできるまでになったことは、苦労に対して喜ぶべきか微妙な気持ちになる。

元々、神父に課された修行で土台固めが成されていた。基本的にアスカが神父に課された修行は魔力コントロールや肉体を鍛えるものがほとんど。それはただ只管(ひたすら)に広大な基礎工事だけがアスカの中で行われていたのだ。

平原を歩いていたら『城でも建てる気か』っていような巨大な基礎工事が着々と進んでいるものと想像してみるといい。

そこで剣星は更に突っ込んで優れた柔軟性の獲得や筋肉の質を変えることを選んだ。当然、武術を教えるのと平行してだ。

剣星自身も多くの弟子がいることもあって教え方が上手い。

好きなものは女子高生で趣味は盗撮（その為にポラロイドカメラと携帯電話も最新式モデルを所有）という極度のエロ親父で、玉藻にしばしばセクハラに及んで、玉藻と奥さんが一緒になって剣星を折檻している姿を見かける。

「我が馬一族のモットーは、『自分に素直で後悔なし』ね！！」

との言葉通りにエロ本を買いに行って売り切れていたら人前であろうが泣き崩れ、実は倉庫に一冊残っていたことに歓喜し、期待外れの内容に腹が立ったら誰憚(はばか)らずに怒る、という一歩間違えたら駄目人間の見本になりそうな男である。

今でこそ禿げた髭親父ではあるが昔はかなりの美形で、星の数ほど恋愛経験をしたことがあるという自称「中国の光源氏」だが、本

当かどうか怪しいとアスカは思っている。

調合師としての腕も高く、死人さえも目覚めると形容される秘伝級の漢方薬などを製薬し、アスカの疲労を和らげたり、内部を漢方薬で着々と改造し傷の治りを早くしたりと大いに役立っている。更に占いの心得もあり、中華料理もプロ級。

エロ以外の色んなことでアスカは師事を受けている。剣星はエロ関係も伝授しようとするも、玉藻の壁は厚い。玉藻はアスカが変なところで悪影響を受けないように、修行中は基本アスカの中にいるので剣星も歯噛みしている。

「アスカにもエロ道を極めて欲しいだけね！」

というのが奥方に折檻されてもアスカにエロの道を勧めようとしていることに疑問を思った門下生が聞いて返って来た剣星の言葉である。

こんな風に総責任者という地位を持ちながら厳格という文字が似つかわしくないユーモアの溢れる性格をしている。だが生半可な修行をしたことは一度もなくそれがどんな修行内容であろうと何らかの形で実戦に表れている。

更に知り合いの柔術家――――――岬越寺秋雨を中国に呼んだ。

『哲学する柔術家』の異名を持つ岬越寺流柔術の達人。柔術着にストレートの口髭が特徴的なオールラウンダー。彼の柔術はあらゆる物を取り込んで昇華し、『岬越寺流』と呼ばれる独自の流派と化している。２０年以上に及ぶ独自のトレーニング理論により、全身の筋肉をピンク筋（瞬発力の白筋と持久力の赤筋の両方を併せ持つ

性質の筋肉）へと変えており、痩身でありながら、アスカが思わずあんぐりと口が開くほどの恐るべき筋力を誇る。

「岬越寺秋雨だ。よろしく頼む」

「よろしくお願いします」

「早速だが、修行を始めよう。まずは街をこれを乗っけて三周しようか」

「は？　これってタイヤですよね。しかもなんで上に乗ってるんです？　しかも三周って１０キロはあるじゃないですか！！」

とまあ、初っ端から開始した修行は波乱含みながらもタイヤの上に秋雨を乗っけて走るアスカの姿が街で見られた。ちゃっかり玉藻と密談して玉藻特性の根性ベルトをつけて数十キロの重りが加わっていたことを知ったのは大分後になってからだ。

魔法や忍術だけで勝たせてもらえるほど世の中は甘くないことを思い知った。上には上がいる。

秋雨と剣星は、早い段階で特に筋肉の質を変える点を抽出しそれを施すことで、無理に筋肉をつけずに瞬発力と持久力を兼ね備えた筋肉に作り替えようと考えた。

はっきり言って、それは机上の空論にも等しい未知の領域。秋雨ですら、筋トレなどをする中で徐々に作り替えて行ったのである。質のみを変えるなどそう簡単にできることではない。

神父によって課された修行と数年間旅をしてきてアスカの身体は

生半可なことでは壊れにくくなっていることで、『うっかりやりすぎても簡単に壊れない』のが秋雨の琴線を刺激したらしい。

「うおおおお……ぉあああぁぁぁぁぁぁぁぁ」

「何事も力尽くではいけない。前にもそう教えただろ。おっと、聞こえていないか」

滞在していた期間は短いものの、原理が分からないほどにポンポンと簡単に投げられた。力みが無くて重心がストンと安定した感じ。自分の持っている技で一番いいものを出したのだが投げられて受身も取れず、注意を受けたのに気絶して聞いていなかった。

それと玉藻と芸術で意気投合するわ、穏やかで理知的な性格なのに騒がしかった記憶しかない。

（地味に命の危険を感じるんだよな、あの人が考えた修行って）

秋雨は日本に帰った今でも剣星とアスカの修行方針を連絡しあっているらしく、時折秋雨考案のキツイ修行法に怨むことがある。

秋雨以外にも、他に風林寺隼人（ふうりんじはやと）という『無敵超人』の異名を持つ武術の達人が孫娘の美羽を連れて訪れてきたことがあった。

年老いてなおも筋骨隆々の巨体を誇る飄々とした老人。その武術は我流ながら生涯無敗で、「人手裏剣」「亡心波衝撃」など計１０８つの必殺技を持つ。熟達された人格に加え、老成に達した者が持つ独特のユニークさを併せ持つ。まさに人生経験の塊のような人物であり幾多の方面で円熟の極みにある（ただし、機械類に関しては疎い）。

鮫や熊を素手で瞬殺したり、気や魔力を一切使わずに海の上を走ったり、プールの水を蹴りで割ったりとその超人ぶりを目撃したアスカは、普通の人間の定義ってなんだろうと悩んでしまう。

「強くなりたければどうじゃ、アスカ。ここは一つワシの修行を受けて見ては？」

決して弟子をとらないことで有名なのに、アスカが【影分身】という彼からしたら面白い技法を持っていることで興味をもったらしい（実は剣星が何かを言って、隼人も何かを感じたらしい）。

「え！！　お爺様が！？」

孫娘の美羽でさえ、祖父がアスカに教えを授けることに驚きを隠せなかった。

「あ、はい。強くなれるのなら、よろしくお願いします！」

隼人のことをよく知らないアスカはそんなことを知る由もなく、こうして立ち会っているだけで底知れぬ強さを感じさせる隼人から教えを受けられること素直に喜び受け入れた。

が、了承後、突然遥か人里離れた山奥に拉致されて『一週間一切の”武”、”忍術”、”魔法”、”気”を禁じ、拳を作ることも許さない』と何もしない修行を言い渡されて野生に帰りかけたこ。

実はこの修行、制空圏を掴むためのものだった。

武術の第二段階「緊湊」に到達した者は、自身を中心とする全方

位に「制空圏」と呼ばれる球状空間を展開し、領域を侵犯した敵性体に対して識域下による迎撃行動を起こすことが可能となる。その有効半径は体得者の実力によって個人差があるが（武器使いは相応に巨大）、真後ろのような死角からの攻撃や、複数の敵による多角的な攻撃にも半ば自動的に反応して、回避・反撃することができる、言わば「拳の結界」を形成している状態が成立する。

「先に開展を求め、後に緊湊に至る」（最初は大きく伸びやかに、後に小さく引き締める、の意。最初は威力と正しい動作を重視し、その基礎を身に着けてから実戦的な命中精度や動作を重視するという事）という中国武術で実際に使用されている言葉から来ている。

川の魚を取るために心の波を沈め、鏡の如く周り映す。つまり日本風に言えば澄んだ鏡面のような心――明鏡止水を表していた。毎日、後ろ髪を触られるような違和感を感じていた所為で疲れていたお陰で心が落ち着いたのだ。

後ろ髪に何かが触った感触に反応して振り返るよりも早く動くなんて、無駄に素早いお爺さんなんだと思ったアスカである。

（何時か絶対にあの爺さんをぶっ飛ばす！！）

本当に大変だったのはその後の、一定の距離を取っての蛸殴りや、崖の突端でグラグラと揺れる積んだ石の上で蜂を寸でのところで針を出した奴だけを払ったりと今思い出しても涙が出そうなやつばかりである。

美羽とは連華と一緒によく遊んだ。あの祖父にしてこの孫ありとでもいうべきか武術の腕が半端ない。遊びが武術関連ばかりになってしまうのは仕方ないかもしれない。普通の遊びもしたが。

「ほ～れ、ネコちゃん。ネコじゃらしですわよ～」

「フニャニャニャ」

最初は警戒していた連華も猫好きな美羽に散々猫扱いされても動くもの追う習性があって何だかんだで仲良くなり、二人が去るまでは大概一緒にいた。

こうしていると修行ばかりをやっているように見えるアスカだが、実際にはそれだけではなく仕事もしている。

ただ居候させてもらっているのは申し訳ないので何でも屋をして稼いでいるのだ。馬家もお金はいいから学校に通ったらいいと言ってくれるが、アスカの学力は大学クラスなのであまり意味がない。それに学校にいい記憶がないので断った。それで何故か連華の家庭教師をしていたりする。

勿論、偽名＋【変化の術】で大人に化けているものの、アスカが関わる依頼はトラブルの連続だ。

例えば半年前の出来事で、あちこちで妖魔の封印を解いて回っている奴がいるということ依頼があり、調査を開始した。

封印とはそうした破られる危険性（リスク）を承知の上でやるわけだが、十以上の封印が暴かれれば危険性は跳ね上がる。

妖魔を完全に滅ぼすことに比べ、封印は遥かに小さい力で成し遂げることが出来る。そして、妖魔が封印の中で妖気を消耗し尽くす――――下級のものでも数十年の時間を要する――――いわば『餓

死』するのを待つわけだ。

つまり封印とは、非力な術者でも強大な妖魔を無力することを可能とする代わりに、封じた妖魔を数百年に亘って管理し続けなければならない術なのである。

無論、封印が解かれれば、妖魔は直ちに解放される。それまでの苦労は水の泡である。ならばとっとと滅ぼしてしまえ、という意見もあるのだが、封じられた妖魔は強力な術者でも太刀打ちできないモノではないとは言い切れない以上、安易に封印を解くことは躊躇われる。

故に、封印はよほどのことがない限り、現状維持のままで引き継がれていくのが常なわけだが、事故にしろ人為的にしろ、それが複数同時に解かれてしまうような事態が生じたりすると、その脅威は尋常のではないものとなる。

危険性を年月で割って薄めるという行為が裏目に出て、数倍に濃縮された危機が現出してしまうのだ。

とある町で足取りをキャッチし、町に入ると【奇門遁甲の陣】に囚われてしまった。

奇門遁甲とは、広義では占術の一体系のことであるが、ここで言うそれは、その思想を用いて編み出された一つの術――敵を誘い入れ、迷わせて惑わせて封殺する、迷路化した結界のことを指す。

結界の外縁上に、出口が等間隔に八つ。しかし、その大半は通るとろくでもない目に遭うように設定されており、最悪の場合は死に至る。正しい出口を見つける方法のない調べた結果、陣のえらい端

っこのような気がした。

別に、獲物を中心に置かなければ機能しないというわけではないが、やはり対応しやすい真ん中を選ぶのが普通のはずだ。

それをわざわざ結界の端に位置させたのだから、そこには何らかの意図があると考えるべきだろう。まさか、本来の標的は別にいて、偶然巻き込まれただけということもあるまい。

罠かとも考えた。一番近い門が死門。ちなみに死門とは、『外れ』の出口の中でも最悪のもの――――通った瞬間に即死するという門である。

どうも狙っていた標的の為に奇門遁甲を張ったのだが、何の因果かアスカも術の発動に巻き込まれてしまったのだ。

千載一遇の機に無用な隙を作るはずもなく、術を張った道士と闘う羽目になったのだが、これが強い。道士の実力事態は大したことないが、使役している妖魔や宝具（パオペエ）と呼ばれる呪法具が厄介だったのだ。

仙人が用いるものに宝具（パオペエ）というものがある。

簡単に言えば仙人が作った道具である。伝説によれば、それ一つを手にしただけで世界征服すら可能になる、というほどのものもあるようだが、流石にそれほど強力なものが人界に流出することはあり得ない。

それでも宝具（パオペエ）は厄介で、道士を倒すのにかなりの時間を要した。

そこからが問題で、実はアスカが闘った道士は仙人の宝物庫を荒らした犯人だったらしく、倒した道士から奪った宝具（パオペエ）を検分していたところに、丁度アスカが陣に囚われる原因の犯人たる道士を追って来た仙人がやってきて何の因果か誤解の果てに闘うことになった。

だが、アスカは仙人に破れた。

先の戦闘で疲労していたのもあるが、純粋に仙人がアスカよりも強かったのだ。その仙人は、アスカが【万華鏡写輪眼】などの切り札、奥の手全てを出しても届かないほどの力を持っていた。

仙道とは文字通り、仙人になるための思想と実戦の道である。

己の存在を天地と同化させることによって、天地と等しい寿命を獲得する超人思想の一種――といえば高邁（こうまい）な思想にも聞こえるが、見方を変えれば、それは死からの逃避であるとも言える。

輪廻という魂の循環（サイクル）を繰り返すことによって霊的進化を目指す、人間の、ひいては全ての『正しい』在り方に真っ向から背く邪法である、と宗教家あたりならば言うかもしれない。

もっとも、アスカにはそうした偏見、あるいは一元的な価値観への囚われはなかった。自分の『正しさ』を他者に押し付けることの非礼を、彼は今までの経験から十分に弁（わきま）えている。

仙人とは、世界と同化することで人を超え、永遠となる存在である。

それならば――己と世界を同化させるということは、世界を己と同化させることに等しいのではないだろうか。

自らを世界の一部と為すことで、世界を自らの一部と成す。それによって事情を操ることが仙人の能力であるのなら、それはまさに万能の力であると言えるだろう。

森羅万象を、文字通り『自分の身体のように』自在に操れるのだ。出来ないことなど何もない。

仙道の術には空間を操るものが多い。壷の中に一つの世界を創生する『壷中の天』。空間そのものを縮めることで高速移動を可能にする本家本元の『縮地の術』を使い、アスカは破れた。

（最後はどことも知れぬ空間に閉じ込められて気がついたら気絶してたしな）

負けた直ぐ後に誤解だと分かったが死にかけるほどの重症を負っているのもあって、本来なら放っておくが宝物庫荒らしの下手人を捕まえたのがアスカということもあって、特別に仙人の住処に案内されて治療を受けた。

（手札全て使っても勝てないとか強すぎだろ）

その後も時間が空いたら直々リベンジしに行くも、今のところ全戦全敗である。その他にもキョンシー使い、妖術使い、妖魔やらと戦ったりと依頼はそんなものばかりであった。

依頼以外にも馬一族関連（鳳凰武侠連盟など）で急激に実力を上げたことや中枢に近しいことで身内に見られ、暗殺者や武道家に狙われる日々が続いた。

（何故か連華の婚約者になっているし）

何時の間にか対外的には連華の婚約者になっていたアスカである。生き残るためには勝ち続けなければならず、勝ち続ければ名が広まって腕を上げるため、名を上げるためと挑戦者が後を絶たずという悪循環が形成されていた。

（良く生きてるよな、俺）

本当に一年ちょっとの間に色々あったなと思わざるを得ないが、死にそうな目に合ったのは一度や二度ではない。確かに強くなれた自覚はあるものの、果たしてリスクに見合うものかと問われれば反応に困る。

（まあ、結果良ければ全て良し、かな）

強くなった結果だけを見て、敢えて苦しみとかを無視すれば良しと思える。そう思わなければ夜に枕を水で濡らすから無理に納得する。

「お～い、アスカ～」

「うん？」

「あっ、パパ」

辛すぎる修行内容に無理に納得していると上から声を掛けられて上を向くと、窓から剣星が顔を出していた。

「アスカに西洋人の美人の客が来てて、流石にまだ朝早いからまた

来ると言っていたね。後で紹介するね……ちょっ待つねママ！
さっきのは冗談だから、そのフライパンを降ろ」

剣星が言葉の途中で突然後ろを振り返る。そして慌てて誰かに釈明している途中で窓がパタンと閉まり、ドカバキと鋼鉄製の何かが人みたいなものを殴打する音が微かに聞こえた。

「……さて、こんな時間に来た客って誰だろう」

「パパが美人さんっていうことは女の人だね、知り合い？」

立ち止まって窓を見上げていた二人だが、連華は生まれてから何時もののこと、アスカも最初は戸惑ったものの持ち前の順応力で直ぐに慣れた――――何があったかを華麗にしてスルーして話の内容だけを話す。

アスカは玄関を開けて食堂を目指しながら過去を思い出す。

「う～ん、誰だろう？　心当たりは……ないな」

剣星が美人と形容をつけたからには女子高生以上の年齢の女性ということになる。しかも西洋人ということになれば、かなり絞られてくる。

そこまでの条件なら何人か該当するものがいるが態々（わざわざ）と中国まで尋ねてくるほど親しい人間はいない……はず。怨まれているとかなら別の話になるが。

「まあ、また来ると言ってるから会えば分かるでしょ」

「ふ～ん」

この楽しい終わりの時が近いことを知らず、結局は会ってから考えることにしたアスカは結論を出したが、連華の反応は微妙だ。

結局、朝食を食べている間も終始不機嫌な連華の姿と、頭にタンコブを作りまくった剣星の姿が見られたという。

その日の夕方、アスカは周りより一際高い、もう一年以上過ごしている家の屋根瓦に上に風に揺られながらポケットに手を入れて立って陽が沈んでいくのを眺めていた。

昼食後、客と会ってからずっとここに立ち続けている。

見ているようで何も見ていないアスカの目の中にある感情を表すなら諦め、虚無とでも言ったほうがいいか。

客――――――ドネット・マクギネスに会ったことによってアスカはこうなった。

ドネットはメルディアナの校長の【魔法使いの従者】で秘書もしている人で、英国出身の金髪美女だが各種言語にも堪能で、かなり知的な印象である。ツリ目気味の風貌から一見するときつそうな性格に見えるが、魔法学校にいた頃に忙しい中でアスカを気に掛けてくれていた。

既知といえば既知だが、彼女は何もただ会いに来たわけではない。彼女はメルディアナの校長の命を受けて最近になって行方の分かったアスカに会いにきたのだ。

校長からという手紙には、心配するあれこれと要約すると『〇月〇日の卒業式に出席されたし』と書かれていた。

「俺は最初の一年間以外は碌に授業に出てないですし、そもそも退学届けを出したはずですが？」

「あなたの届けは受理されていないわ。世間的には秘匿されているけど公的には留学という扱いになっているし、単位はあなたがまほネットで公開した論文と魔道薬で賄われることになっているわ」

アスカは修行を続けながらも、村人の石化解除手段を探していた。地道に研究しながら良い方法はないかと各地を巡り、その地の技術を取り込んで纏まった物を論文としてまほネットで公開していた。論文といっても別段目新しさがあるわけでもなく、可もなく不可もなく、平均である。単に子供が出したから目立っている、それだけのものだ。

魔道薬といっても使えるものからしょうもない物まで作っては、アメリカで出来た友人に作って貰ったサイトで販売して小銭を稼いでいるだけだ。

・兵糧丸・劣化バージョン（服用した者は一日だけ休まず戦える丸薬。高タンパクで吸収も良く、ある種の興奮作用・鎮静作用の成分が練り込まれている）

・兵糧丸・魔力バージョン（食べると少しだけ魔力を回復・増幅さ

せる効果のある丸薬）

・増血丸（丸い粒状の秘薬を口に含んで増血を行う）

・ポーション（薬学の知識を活かして、気分がスッキリしたり、やる気が出るなどのアロマよりも効果のある葉を開発した（使い方は葉を燃やすだけで効果が出るので一般人にも使える））

等の比較的まともで効果のある物から『おできを治す薬』や風邪薬だが、これを服用した場合、体温が上がって耳から煙が数時間出続ける『元気爆発薬』や『髪を逆立てる薬』など正直に言えば微妙な魔法薬も販売している。

以外と売れているのだから日々の金で悩んだことは旅の最初以外ではあまりない。【変化の術】を使ってのアルバイトやサバイバル能力の向上があったのも要因の一つではあるが。

「そんなにも『スプリンフィールドの名』は大きいということですか」

「……そう、言うことになるでしょうね」

全てを嘲笑うように手紙を読んで口元を歪めたアスカはドネットに素直に思ったことを尋ねる。

ドネットは机を挟んで目の前に座っている少年から発せられる威圧感に気圧されそうになりながら、言い難そうに言葉を濁すが認めた。

アスカは最初の一年以外まともに魔法学校に通っていない。最後

の一年に至っては学校にはいても書庫に篭りっきりで碌に授業に出ていない。

留学していたという扱いになっているとか、発表した論文や売っている魔法具を単位に当てるなど無理があり過ぎる。ちゃんと授業に通い、単位を稼いだ者から見ればアスカは楽をしているようにしか、何か裏技を使ったようにしか見えない。

メルディアナ魔法学校の上位組織であるメガロメセンブリ元老院か、それとも教師たちが何かしたのだろう。でなければアスカが卒業するはずがないのだから。

何故彼らがそんなことをするのか？

それはアスカが『ナギ・スプリングフィールド』の息子だからということしかあり得ない。それを鑑みての先程の「スプリンフィールドの名は大きい」に？がる。

（結局、名からは逃げられないということか）

何度も実感したことではあるが、単純な絶望なら今までを上回る。剣星からの養子縁組の話が来ていたからというのが大きい。心の天秤は彼らと家族になりたい方向に傾きかけていたのだ。

『スプリングフィールド』の名の意味を旅の間に十分に思い知らされてきた。『ナギ・スプリングフィールド』の縁者ということで襲われたことは一度や二度ではない。暗殺者や襲撃者も現われるようになったからこそ、名や姿を偽って戦地で過ごしたのだ。

「分かりました。卒業式には出る、と祖父に伝えてください」

居場所が知られている以上は断っても何らかのアクションがあることが予想される。それこそ、暗殺者や襲撃者が現われることや、権力を笠に来て馬一族を脅しに掛かる可能性も無きにしろ非ず。

「本当にいいの？」

「選択肢なんてあってないようなものでしょ」

「……そうね」

ドネットが思わず聞き返したのは、調査の過程でアスカがここでの生活に満足していることを知っていたから。魔法学校では見せていたような作り笑顔ではなく、本当の笑顔を見せているのだから分からないほうがおかしい。

どうなってもアスカには、ここを出て行くという選択肢しか残されないことを嫌でも理解せざるをえないドネットは、自分の力の無さに苦渋を感じてしまう。

この後二、三話した後にドネットは帰り、アスカは屋根の上に上った。

（ここは温かい）

目が覚めたら『おはよう』と、寝る時には『おやすみなさい』と微笑みかけてくれる人たちがいる――――ただそれだけの、けれども何物にも代え難い、そんな満ち足りた日々。

狂う欲しいほどに追い求めた力も、純粋に強くなる喜びに目覚め

てからは夢に見ることは少なくなっていた。『自分の力』でも『力のある自分』でもなく、ありのままでいられる静かな居場所を持つ人たちに出会えたのだから。

彼らの周りの小さな世界を守れればそれでいい。本当に、心からそう思えるようになっていた。

だが結局、名からは逃げられないのだと思い知らされた。居場所が知られている以上は何時かここに迷惑や刺客が送られてくることも考えられる。

（まったく……）

アスカは己の愚かさを嗤う。何を甘いことを考えていたのか。弱ければ、負けてしまえば何も守れないのに。全てを失ってしまうというのに。

《これでよいのか？》

《いいさ。元の根無し草に戻るだけなんだから》

ここを去ることにもの哀しさはあるが、元々アスカには帰るべき家はない――――というのが常態だったのだから元に戻るだけだ。何も変わりはしない。

帰るべき家を持たない者は、生涯を旅人として生きることになる。それをアスカ自身は不幸だとは思わっていない。社会の一員としての自覚がないせいか、世俗的な意味での成功――――社会的地位や名誉には最初から興味がなかったからだ。自身はそうあるべきだと感じていた。

正直に告白すれば、アーニャの母親と約束した『幸福になること』も第一の目標にはしていない。自分が咎人であることを自覚しているので、簡単に言ってしまえば『幸せになる価値のない人間』と考えていた。

そもそも何をもって『幸福』とすべきなのか、今のアスカには分からなかった。前世の記憶を失ったことで自分が何かの間違いで生まれてきた余計な人間だと思い込むようになっていた。

人間が正しい道を歩むために必要な物は何だろうか？

それは思い出だ。

幸福な思い出、人から愛された思い出、心からの安らぎを覚えた日の思い出――――それが人間を根本のところから支える誇りとなり、暗闇の中にあっても輝く星となる。

だが、アスカは自我の根源である前世の記憶をほとんど失ってしまった。残ったのは、今世での辛く苦しい記憶だけ。確かに幸福な記憶はあっても比率はかなり低い。

そしてもう一つ、自我の基盤となるものが家族の絆であり、血族の歴史だ。先祖たちが生きた過去があるから自分が生きる現在があり、それはやがて子孫たちが生きるであろう未来へと受け継がれていく。

たとえ幻想であるにせよ、自分が永遠へと連なっていく物語の一部を担っているという確信は、人の心に安らぎと希望を齎（もたら）す。家族を愛し、祖先を敬うこと――――それが人が幸福に生きるための基

本的な条件だという説にアスカも異論はない。

人間は本能を失った動物であるがゆえに、自己の存在を保証するものを外部に求める。

だけど、血の絆を失った人間はどうすればいいのか。両親に会ったことすらなく、双子の兄とは何年も会話を交わしていない。絆などあってないようなものだ。

過去（ルーツ）もなければ未来（あした）もない。おまけに現在（いま）いる場所もない――――台本を渡されずにいきなり舞台に上げられたような役者のような、そんな人間はどうやって幸福になればいいのか？

故郷を失い、安穏と生きられる場所を捨て、アスカは齢五～六という幼さで旅に出て己の腕だけを頼りに生き抜いてきた。平穏無事に生き長らえるだけなら簡単だが、持って生まれた性質故か闘いや騒動に巻き込まれる運命にあるらしい。

アスカは世界を旅する間に似たような境遇の人間とは数多く出会ったが、今をもって答えは出ていない。その答えが出るまでアスカは彷徨（さまよ）い、求め続けるしかない。何時か答えが見つかる、その日まで。

剣星がアスカが出て行くのを阻止したり、養子縁組の話をしたのには幾つか理由がある。

姿だけを見ると、アスカはどこにでもいるような凡庸な少年だと思える。しかし、そう見えるのはあくまで彼の瞳に注意を払わなかった時のことだけだ。

少年の全身の中で、その濃い緑がかった瞳のみが、強い存在感を放っていた。凪いだ海のように静かで穏やかなくせに、じっと見つめていると思わず見せられそうになる。厳しさと優しさを兼ね備えたような、不思議な瞳だった。

そのしてその瞳の底に透けて見える、紛れもない悲しみ。なにが原因かは分からないが、その哀しみこそが、この少年の顔をひどく大人びて見せていた。

「強くなりたいんです。誰よりも、何よりも」

自分に師事を求めてきた時にも、どこか危ういものを感じた。例え自分が断ろうとも何とか技を盗み、”力”そのものを欲して修行に励み続けるだろう危険な状態にあった。

武術家には大きく分けて二つのタイプがある。

心を落ち着かせて闘争心を内に凝縮、冷静かつ計算ずくで戦う”静”のタイプと感情を爆発させ、精神と肉体のリミッターを外して本能的に戦う”動”のタイプに分類している。これらの属性に優劣の差があるわけではなく、またどちらに属するかを自律して選択することは難しく、個人のスタイルや性格的な向き不向きで決まる。

”静”は自身の実力を常に安定して発揮でき、力量が劣る相手との戦いで不覚を取ることは少ない。対して”動”はその時のテンション次第では実力以上の力を発揮できる場合もある。しかし”動”

のタイプは一つ間違えると精神のリミッターが外れっぱなしになり、人格が豹変して元に戻らなくなってしまう危険性がある。「リミッターを外した自分自身」を制御する事が出来れば問題は無いのだが、完全に暴走させて”動”の気に呑まれてしまうと破壊と殺戮のみを求める修羅道、すなわち”闇”に堕ちることになる。

（まあ、決して”動”のタイプが悪いというわけではないけどね）

アスカは武道家ではないにも関わらず、”動”のタイプになる兆候が見えていた。それも一度『成って』しまえば完全に暴走させて”動”の気に呑まれ、破壊と殺戮のみを求める修羅道に堕ちることになると直感させるほど。

中国拳法には各門派毎に心のリミッターを外す秘伝の方法がある。でもこれは大変危険である。薬を服用して、師の直々の監視のもと行う。一つ間違うとリミッターが外れっぱなしの凶暴な性格になるからだ。

連華を泣かせたくないと慌てた姿や数日一緒に過ごせば彼の大体の性格も掴めてくる。

アスカは極度のお人好しだ。が、その行動原理や価値観は、単純そうに見えて複雑だ。

目の前で困っている人間がいたら、よほどの外道で、解決策が人道に反していなく、自分で乗り越えるべきことでない限りは、手を差し伸べて力の及ぶ限りどうにかしようとする。できないことは他人に任せるが、自分で出来る範囲で困っている人が大抵の場合は助けている。一種、病的といっていいほどに、だ。

「主は悔いている。犠牲になった人たちを、自分の存在を、無力を、な。だから、目の前で誰かが泣いていることを許せない」

それがどこか贖罪のようなものであることは、アスカと常に共にいる妖狐玉藻から酒飲み話の中で聞いて確信した。

娘の恩人を兄、馬槍月のようにしたくなったのもあるし、彼自身の性質が好ましいこともあって鍛えることにした。嬉しい誤算というべきかアスカの身体は十分に基礎能力を満たしていた。話を聞けば神父なる人物に一年間師事したようで、懐かしそうに、そしてどこか悲しそうにアスカが話してくれた。

（本当に大切な人だったようね）

話からよほど大切な人だったのだと推測でき、かつ既に亡くなったことをどこか受け止めてきれていないのだと剣星には思えた。

知己である甲越寺秋雨に連絡して、アスカと会わせたら剣星と同じく『危うい』と同じ意見を出した。

「才能自体はそうでもないが、他の条件が良い。本人の気質も自己内罰的ではあるが好ましくもある」

分身体が体験したことや目撃したものは分身体が消えたとき、術者の記憶として残るという影分身の能力に驚き、良い物見つけたとばかりに剣星と二人で眼光がカッと光らったことをアスカは後述していたのは別の話しだが。

ある調査によると、そのジャンルを問わず一流と呼ばれるプロフェッショナル達が積み重ねてきた鍛錬は、最低でも一万時間を要す

る。大雑把に計算して、一日三時間の練習を十年間休まずに続けてようやく一万時間。つまり多くの「プロ」たちはそれだけの積み重ねをしてきたということになる。

アスカの才能は決して突出しているわけではなく、端的に言ってしまえば人並みの才能しかない。だが、アスカは一日に影分身を二百人生み出して修行を行うことが出来る。たった二日で一年を越える経験値を得ることができるのだ。才能がなくても人の何倍も続ければ何れ高みへと届くことが出来る。

人が少しずつ登るべき階段を一気に飛び越えてしまうのが天才なら、アスカは一段一段踏みしめながらも凄い速さで登るに等しい。

更に幼少の頃から玉藻や神父によって課された修行でバランスを崩すことなく、がっちりとした土台の上に築き上げられた基礎が作られている。

特に『眼』の良さが際立っている。『眼』といってもアスカの有する能力の一つ【万華鏡写輪眼】のことではなく、素での脳が認識するかという謂わば『視能力』のことである。

武道やスポーツに必要とされる『視能力』はなんといっても『動体視力』。

その動体視力の中でも特に重要視される『瞬間視』と呼ばれるものがある。これは文字通り一瞬だけ見たものをどれだけ正確に認識できるかという能力で、一流と呼ばれる者はこの能力に優れている。

幼い頃から最新の科学トレーニングを行ってきたアスカの眼は、今の段階でも既に彼らに近い能力にいる。更に玉藻の治癒力や後天

的に身についた頑丈さ、影分身という垂涎物の技能まで身につけている。

ならば、鍛えるしかないではないか！！

「いやいや、強い子供がいると聞いて来てみれば面白いことになっておるの」

噂を聞きつけた『無敵超人』の異名を持つ風林寺隼人（ふうりんじはやと）まで参加したのだから強くならないはずがない。

（まさか、おいちゃんもここまで伸びるとは予想してなかったね）

自分で始めた何でも屋の仕事や、行く先々で巻き込まれる騒動で実戦を積んだことで、一年という短い期間でアスカは驚くべき成長を遂げた。

それに伴って”動”のタイプになる兆候は薄れていき、”静”との道との分かれ道にまで戻った。そこからは両方の道を行ったり来たりを繰り返して定まらない。”動”のタイプでも必ずしも修羅道に落ちるわけではない。それはその者の根本が善であり、力を振るっている自分をどこかでちゃんと統率できているからで、改善してきたアスカでも危うい部分が多い。

（心が定まっていないね。でも、どちらに転ぶかはこれからの本人次第）

自身を支える信念がないアスカの心は常人に比べれば強くても、特Ａ級達人（マスタークラス）の剣星から見れば弱く脆い。

連華がアスカに気があることを悟った剣星は、アスカに養子縁組の話を持ちかけた。このまま育てたいという欲もあるが、一度手放せばどこかに行ってしまうのだと感じたからだ。

それと一年も一緒に暮らせば情が湧いたというのもある。二人が結婚できる年齢になれば籍を抜くという手段もあるし、このままという手もあるので、アスカが選んだ方法で考えるつもりだった。

が、アスカが選んだのはどれでもない、この地を離れるというもの。

アスカを尋ねてきたという西洋人の美人の客と会ってからアスカの中の何かが変わったのを感じ取った。その日は客と会って以降、食事も取らず、ずっと続けてきた修行すらもほっぽりだした。これはよほど大事な仕事や用件がない限りなかったことなので連華や門下生たちも心配していた。

翌日、寝ていないのか憔悴したような顔で朝御飯を食べた後、「〇月〇日までにここを出て行く」と皆に告げた。突然のことに驚いた皆の中で、客が来た時点でどこか予感のあった剣星だけが平然としていた。

「もう、ここを出て行くことを決めてしまったようね」

「はい、今までお世話になりました」

連華がアスカに声を掛けようとしたのを遮って剣星が言うと、アスカはお礼と共に深々と頭を下げて一向に上げようとしない。

その姿に申し訳なさや遣る瀬無さ等の色んな感情を感じて、座っ

たままの剣星はアスカに気づかれないように嘆息する。

（原因は昨日の客なのは間違いないね）

どう考えても理由がそれ以外に思いつかない。既に決めてしまった以上は曲げるつもりがないことは、部屋に現われたアスカの顔を見たときから気づいていた。

（この子は変なところで頑固すぎるから困ってしまうね）

一年近く一緒に暮らして分かったことではあるが、女性に甘いことや頼まれごとを断らないなど全く感じさせないがアスカは一度決めてしまったことを曲げることはほとんどない。

他人の意見やアドバイスを受け入れても、やり通すと決めたことは誰が何と言おうとも必ず成し遂げようとする。よほどの事情があれば曲げることはあっても、自分の身に及ぶ危険とかについては度外視している部分があるのだから見ているこっちはハラハラする。

仙人と戦って死に掛けたと聞いた時には心臓が止まるかと思った。しかも、その後に何度もリベンジしに行って毎回ボロボロになって帰って来るのには心底呆れた。

アスカのは頑固といっても悪い意味だけではないが、どうも、そうでもしなければ本当に壊れてしまうような強迫観念染みたいなものを感じさせる。

「何時までも頭を下げていないで、顔を上げるね」

座っていた席から立ち上がり、未だ頭を下げ続けるアスカの肩に

手を当てながら言うも頭が上がる気配は無い。

「連華たちも突然のことに驚いているだけで責めるつもりはないね。だからそんなに頭を下げられると逆においちゃんも困ってしまうね」

おどけた口調ながらも真剣な気持ちの篭った言葉にゆっくりとアスカの頭が上がっていく。

上がった顔の中で、眼の奥だけが不安に揺れていることに気付いた剣星は言葉を続ける。せめて、それがアスカの救いになるように、と。

「出て行くのを止めはしないね。だけどこれだけは覚えておくね」

一緒に暮らしてから急激に伸びたといっても、まだ自分より低い頭に手を置いて柔らかな金色の毛を捏ねるように撫でる。

「ここはアスカの第二の実家みたいなものだから何時でも帰ってきていいね」

息子になったかもしれないアスカに向けた言葉は紛れもない本心。たとえ去ろうとも、ここがアスカの家であることは変わりなく、何時でも帰ってきてもいいと伝える。

「……！！」

その言葉にアスカは目頭が急激に熱くなることを感じた。

自分には、家や居場所などないと思っていた。だが、違ったのだ。帰る家が、居場所が、アスカにはあったのだ。いや、正確には『で

きた』というべきか。

「あ、……ありが、とう……ございま……す」

自分が一人ではなく繋がりがあることは、これほどに嬉しいことはない。

感情が昂ぶりすぎて、お礼の言葉がみっともなく震えてところどころで詰まってしまう。泣いている情けく崩れた顔を見られたくなくて、一度は上げた顔をまた伏せる。

「……もう、こんな雰囲気になったら何も言えないじゃない」

俯いていて分かりにくいが、どう見ても泣いているアスカを見て出て行くことを反対できるような空気ではなくなってしまった。食卓の空気が送り出すものになっている中で、一人だけ反対をして折角の暖かい空気を気まずくさせるほど幼い蓮花も空気が読めないわけではない。

それでも表だって言い出せないだけで決して納得したわけではない。出来るのは不満も露に朝食を口に運ぶことだけだった。

第十三話　　旅をする少年０４（師と名の持つ意味）（後書き）

これで改定前の形に持っていくことになります。次回は卒業式の話になります。

次回の更新は、来週の日曜日午前０時に更新したいと思います。

予定より遅くなる場合は、その都度、活動報告に上げます。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

今週は発奮して２話分のストックができました。でも、麻帆良からのがまだです。ぶっちゃけ面倒になったら改定前のをそのまま使うかも。

第十四話　　卒業させられた少年（前書き）

今話は改定前の『第五話　旅立った少年』を改定後の設定に合わせて修正・加筆したものです。

改定前が五話で、改定後が十四話とか話しが長いな。

予約掲載をしたつもりがうっかりそのまま投稿してしまいました。
消して再投稿するのもアレなんでこのままでいきます。

今回の文字数も前話同様に長めの１９８８４字となっています。

それではどうぞ！！

第十四話　　卒業させられた少年

イギリスはウェールズのペンブルック州にある、のどかな田舎町にその建物はあった。緑に囲まれた静かで穏やかな街の一画に、一般人には知られずにある教育機関がある。

歴史を感じさせる格調高き伝統的な建築物。その中心に聳える講堂の中で、１つの儀式が執り行われていた。

頭までローブにスッポリと覆われ、杖を持った大勢の者達が見守る中で、ローブにトンガリ帽子と言う如何にも魔法使いな格好をした少年少女達が数人いる。

そんな少年少女の彼らから見て、正面の少し高くなった演台の向こうにいるのは、この場所の責任者である校長。この場で最も多くの視線を集めているその人物は、背後のガラス越しに差し込む光によって、その威厳をより高めているかのようであった。

魔法を以って人知れず社会に貢献する人物を目指す子供たちが、この地を出立しようとしていた。

腹に響く様な鐘の音。今日はメルディアナ魔法学校にある大聖堂を思わせる広間で卒業式を行っており、そこには、厳粛な空気が張り詰めていた。

胸の下まで伸びた立派な白髭に、年季の入った豪奢なローブという高位の魔法使い然としたメルディアナ魔法学校校長が、壇上の下に並ぶ今年度の卒業生達に祝福の言葉を贈っていた。

今年度の卒業生の数は六人、男の子は深い緑色のローブ、女の子は紺色のローブに三角帽と、それぞれ新米魔法使いらしさを匂わす服装で顔に緊張を滲ませて立っている。

そんな未来を感じさせる少年少女たちの端で、アスカは一人緊張感もなく立っている。

一人だけ頭に何も被らずに金の髪を晒している。それに他の男の子たちと違って深い緑色のローブではなく、黒いコートを着ているので一人だけ目立って仕方がない。

当然、アスカにも着替えるように要請はあったものの、アスカはこれを頑なに拒否した。アスカにとって、メルディアナ魔法学校は『敵地』に近い。そのような状態なので、ここで出されたものは食事や飲み物を決して口にしないし、どれだけリラックスしているように見えても、完全に気を抜くことなどあり得ない

このコートはアスカと玉藻が素材から拘り、可能な限りの魔法、物理防御をかけて一から作り上げた力作である。

素材は＜気＞や＜魔力＞、そして＜チャクラ＞を通しやすい最高級の絹。それも糸を紡ぐ時点からアスカが三種の＜力＞込め続けたという、値段にすれば途轍もなく高価になる代物だ。

金と手間隙を惜しみなくつぎ込んだ結果、芸術品と言うべきコートが出来上がった。

しかし、費用もそれに相応しいもので、これ一着で車が買えるどころではなく、はっきり言って特注しようと思えば豪邸が建つほどの金が必要になる。

コートには山程の仕掛けが施してあり、武装も為されているので襲撃を受けようがアスカには対処する自信がある。まあ、卒業式に武装していく卒業生などアスカぐらいなものであるが。

ちなみに、コートの色を黒にしたのは、普通の魔法使いが白色のローブを好むのに反発してのことである。小さいことでもアスカには決して譲れないものであった。

「卒業証書授与、この七年間よくがんばってきた。だが、これからの修行が本番だ。気を抜くでないぞ」

低く、それでいて良く通る声が反響しながら講堂中に響き渡り、少年少女達に僅かな緊張が走る。

いよいよ明かされる彼らの未来への第1歩。立派な魔法使い(マギステル・マギ)になるべくこれから修行を始める彼らに取って、この時は緊張の一瞬なのだろう(一人は緊張感など欠片もないが)。

アスカは彼らを横目に校長の後ろの窓ガラスの向こうを脱力した視線で見ているようで警戒を解いていない。

これから巣立っていく教え子達へ、人生の先輩としての訓示が述べられる。卒業式開始と同時に続いていた訓辞がようやく終わり、ついに卒業証書の授与に移る。

そしていよいよ始まる卒業証書の授与。講堂に静かな緊張が走る。

「これより卒業証書の授与を行う　メルディアナ魔法学校卒業生代表!ネギ・スプリングフィールド!前へ」

「ハイ！」

電球は使われず、明かりは蝋燭のみで照らされている薄暗いホールの中に、ネギの声が響き渡る。

少年少女達の中で真ん中にいた幼い顔つきの、いかにも魔法使いチックな白いローブを頭まで被った赤毛の少年。

ネギ・スプリングフィールドと呼ばれた少年……アスカの双子の兄は主席なので一番最初に名前を呼ばれ、芯の通る声で返事をしてから、ゆっくりと前に踏み出して壇上へと進み出て校長から手渡される卒業証書、それを両手でしっかりと受け取り、返礼をして壇上から元の位置に戻る。

最後にアスカがネギを見たのは確か四年前だったか。卒業式が始まるまで教師陣と一悶着合ったので顔も見ていなかった。

四年前も遠目から見ただけで顔を合わせて会話をしたのは六年前の病室の一件以来一度も無い。背が伸びただけで他は何も変わっていないようにアスカには見えた。といっても、パッと見なのでそれぐらいしか分からないが。

卒業証書を脇に挟み持って卒業生達の所へ戻るネギへ、魔法学校の教員や在校生達とは別の適当な拍手を贈りながら、アスカは込み上げてくる欠伸を噛み殺すのに難儀していた。

卒業式というものはとても退屈なのだ。しかも、ちゃんと通ったのは最初の一年だけで次の年は図書館に篭りきり（それも大半は影分身が行っていた）で、四年前に飛び出してからは一度も近づいて

いないので、アスカに卒業式だからと感傷を持てという方が難しい。

それに、昨日の夜にイギリスに着いて時差ボケもあって一年間暮らした教会に帰ってさっさと寝ようと思ったのだが、四年間もの長い間整理されていなかったので埃やらで掃除しなければならなかった。

懐かしさもあって分身を使わずに掃除したので殆ど寝ていない。旅の疲れもあって眠たいことこの上ない。

《動きは武術などをやっているそれではなく、完全に素人。しかし、主席なんだから成績は良いみたいだけど、膨大な魔力を完全にコントロールはできていないみたいだな》

歩き方や姿勢を見れば、ある程度武術や格闘技などをやっているかどうか分かる。まあ、魔法学校なのだからそっち系統の勉強などするはずもないから当たり前なのだ。

知識面では主席なのだから優秀なのだろう。しかし、ナギ譲りの魔力を完全にコントロールできていないようで、ギリギリで制御できているが気が抜けたりしたらネギの身体から途端に魔力が溢れ出すだろうことが容易く予想できた。

《そうじゃのう、旅にである前にネカネがネギにくしゃみで服を弾き飛ばされておったことがあったな。あれでよく英国紳士をなのれるものじゃな。英国紳士よりラッキースケベを名乗るべきじゃろう。流石に衆人環視の中で脱がされたネカネが哀れじゃった》

《ああ、そういえばそんなこともあったね》

アスカの記憶には殆ど残っていないが入学して少し経った頃に、衆人環視の中でネギがくしゃみをしてネカネの着ていた服を全て弾き飛ばすことがあった。

それを遠目からアスカも見たがあれはひどかった。服を脱がされている時点で幸いと言えるか分からないけど、その時は一緒にいた女生徒が直ぐにローブをかけてくれたけど、近くにいた男達に好色な視線を向けられてネカネも涙目だった。

教師もその場にいたし、あの頃よりかはマシになったようだが何でもっとちゃんと魔力コントロールをさせないのかアスカには分からない。もしかしたら単純にネカネも美人なので、その教師も男だったからまた見たいだけなのかもしれないが。

しかし、くしゃみして服だけを吹き飛ばすとかまるで狙っているようだ。あれで英国紳士を名乗るとは本場の人に喧嘩を売っている。

「次に……アンナ・ユーリエウナ・ココロウァ君」

「はい！」

先ほどの少年と同じ様な赤毛の元気のいい少女が次に呼ばれて前に出る。同様に卒業証書を受け取り一礼してから元の場所へと戻る。

その少女に対して、アスカはネギと同様に複雑な感情を抱かざるを得ない。結局あの日以来ネギと同じく会話をかわしていない。

とはいえ、旅に出ている間はほとんど存在自体を忘れていて、思い出したのが極最近なのだがそれも仕方のない部分がある。アスカが二人のことを忘れていたのは、彼が薄情だからと云うわけではな

い。それだけ日常が波乱万丈だったということで、過去を振り返る暇がなかったことを示している。

忘れていたことを気にしても仕方が無いので、早く終わらないかなと考える。たった六人なのに掛かっている時間が長く感じる。

玉藻と会話をしてると他の卒業生三人も同様に進み、何時の間にかアスカの番がやってきていた。

アスカは退学したつもりだったが留学扱いになっている。とはいえ、授業に出ていないので卒業生の中で最下位。呼ばれるのは必然最後だ。

「最後に、アスカ・スプリングフィールド君」

「……はい」

呼ばれたのでアスカは睡眠不足からくる倦怠感から億劫そうに返事をして壇上に上がり、微妙そうな顔の校長から卒業証書を貰ってまた元の位置に戻る。

元の場所に戻るとどこからか数人の呟きが聞こえる。

「なんで学校にいなかった奴が卒業できるんだ?」

「何でも留学してらしいぞ。論文も発表しているとか」

「ほら、あれだ。どうせ英雄の息子だからだろ」

本人たちは周りの人に聞こえないぐらいの小声で呟いているつも

りだろうが、生憎アスカの五感は鍛えられるため聞こえていた。が、彼らが言うことも最もで、アスカ自身もそう思うがこれ以上聞いていると気分が悪くなりそうなので、聞くのを止める。

「うぅっ……ネギ、アーニャ、アスカ、立派になって」

堂々とした足取りで校長の前まで歩み、「おめでとう」という祝福の言葉とともに卒業証書を渡されるネギとアーニャ、そしてアスカの姿（アスカはやる気なくだらだらとした姿だがネカネにはフィルターでも掛かっているのか？）にネカネは成長を感じて感極まって、口元を押さえて泣いていた。

これで卒業式が終わり、ネギたち卒業生だけでなく職員や在校生達が広間を後にし始めた瞬間、アスカは【隠遁術】で気配を消して壁際に寄った。ネカネが自分を探しているのが見えたが姿を見せることは無かった。

人がいなくなるのを待って手に持っていた括られている卒業証書を開く、ゆっくり文字が浮かび上がってくる。

「さて、試験は何かなっと」

手に持つ証書に修行内容が書かれてるらしいが、アスカには大して興味もない。多少の感心はあれども魔法使いとしては三流でしかないアスカが修行する意味などないからだ。

どんな陰謀が張り巡らされているのかな、と思いながら開いた紙にはこう書いてあった。

＜　日本で教師をする　＞

浮かび上がってきた文章が信じられず、一度かけていたサングラスを外して目を擦り、念のためもう一度読み返すが、やはり文字に変化はない。

《なぜ教師？　しかも日本と限定しているんだ？》

《間違いではないのか。でなければ、１０にもならない子供が教師をやるなどあり得ん》

《そうだよね。まあ、どちの道行くつもりだったし、校長室に行くか》

修行内容に疑問はつきないが最初から校長室に行くつもりだったので、ついでに聞くかと【隠遁術】を解除して、どこまでも軽い足取りで、静かになったホールを独り悠然と出て行った。

卒業式が終わった直後、場所は変わって講堂につながる外廊下に先ほどの少年たちが何やらワイワイと騒ぎながら歩いており、その後ろを彼らより年上らしき女性が辺りをキョロキョロと落ち着きなく見ながら遅れて歩いていた。

（……どこにもいない）

ネギとアーニャの二人が話しているがその中でネカネだけは周りを見渡し、もう一人の弟であるアスカを捜しているが人が多くて見つからない。もう先に帰ってしまったのかと思い、気を落とす。

その事実に重い溜息が出る。それに周りがうまく隠しているつもりだろうがネカネはアスカが周りにどう思われ、どういう扱いを受けているのかを知っていた。

と、言ってもアスカに陰口を言ったりネギに近づこうとして実力行使に出た人間達が後で何かひどいことされたらしく、そのことが広まっていた噂を偶々知ったのだ。

ネギは魔法学校に入学すると勉強三昧の生活で、気に掛けなければどんなことになるのか想像が付いたので、傍を離れることができなかった。

ネギとは対照的にアスカは魔法学校に入学してからも、何時も通りの雰囲気で魔法学校に入る前と同じ態度で過ごしており、何の変化がないためネカネは気付かなかったのだ。

それでも知ったのは噂が広まってからかなり経ってからであり、既に虐めと言えるものは収束していたが、周りのアスカに対する反応は以前として剣呑なものだった。

数人の教師と生徒が廃人同様になるなど大きな事件になり、虐めをしていた主犯格ばかりが被害者の為疑いを向けられたアスカの元に行ったが一緒にいるときにも同様の事件が起きており、ネカネが証言してアリバイもあるため犯人ではないとネカネは信じたが周りの疑いが晴れることはなかった。

それどころかアスカは四年前、とある事件を起こした直後に突然彼女たちの前から姿を消した。その事実に気付いたのは、校長から書置きと退学届けを残していなくなったと聞かされてからだ。

ネカネはちゃんとアスカの姉をやれているのかとあれから思ってしまう。

思い返すと、アスカは小さい頃から大抵の事は一人で出来てしまう子だった。年相応な子供らしかったネギとは違い、常に周りに線を引いており誰かに甘えているのを見た記憶がない。

魔法学校ではネギの事にばかりかまけていて、アスカにはほとんど構ってやれなかった。アスカの趣味は？　好きなものは？　と聞かれてもほとんど何も答えられない。下手したらアスカより自分の友達のほうがよく知っているぐらいだ。これでは家族失格だと言われても不思議ではない。

それにネギとアーニャとの確執についてアスカには何の責任もなく、二人もアスカに謝りたいようだが、既にかなりの時間が経っており、謝るタイミングを逸してしまっている。

少なくともアーニャの問題については、石化さえ解ければ解決の目処は立つが、ネギの問題は根がかなり深い。

元々二人の間には溝があり、虐めの環境にあったアスカがネギを憎んでいても何も不思議ではない。時間だけしか解決する術はないのか、と八方塞がりになってしまう。

ネギたちと同じくアスカの保護者でもあるのに、思えばアスカには何もしてやれなかった。挙句の果てには、心配しても逆に自分が

心配されるような始末。

いなくなってから魔法学校でのアスカの扱いや何があったのかを聞いた。虐め、望まぬ殺害。きっと苦しかっただろう、辛かっただろう。

だけど、アスカは決してネカネに本心を明かそうとはしなかった。どれだけ苦しくても、辛くても、助けを求めることも、自分の知る限り弱音を吐くこともしなかった。

それを知ってしまったが故にアスカの失踪以来、常にネカネは後悔を胸に生きてきた。当初は悩みすぎて体調を崩すことも多く、ネギたちに心配されて更に悩む……という悪循環に陥っていた。

それも校長から伝えられた目撃情報などでアスカが誘拐などの事件に巻き込まれたのではなく、自分の意思で出て行ったが少なくとも元気でいることは分かったので持ち直すことが出来た。

どうにかできないものかと悩み校長に相談に行ったが、校長もアスカを捕まえることができなかった。だが、数ヶ月前にアスカが中国にいる事が分かり、校長が何らかの方法を使って卒業生として式に呼ぶことが出来た。

しかし、四年前より身長が凄く伸びていて驚いた。双子のネギとの身長差が１０ｃｍ以上あるだろう。同じように卒業式で久しぶりに顔を合わせたネギとアーニャもびっくりした顔をしていた。

だが、今だに話ができていない。それどころか面と向かいあうことすらできない。

アスカは前日に到着して、式が始まる直前に姿を現したので遠目でしか見れなかった。卒業式が終わった後に探すも、何時の間にか姿を消していた。

避けられている。

その事実に胸が張り裂けそうになるほどの哀しみが満ちる。

（そうよね。何も出来ない、迷惑ばかりかける私には会いたくないのよね）

別にアスカにはネカネを避けている気はないが、旅に出るときも何も言わなかったためどういう顔をしたらいいのか分からず敬遠しているのは事実。

そしてアスカに対して今まで何もしてやれなかった事が、ネカネの心に重く圧し掛かる。こういう変に自虐的というか、自分に責任を求める気質は従姉とはいえ、アスカと良く似ているのは血が？がっているだからだろうか。

本人は強く責任を感じているがアスカの対する件で責任はネカネにはない。全くないとは言えないがそれでも小さなものだろう。

より責任が重いのは管理不行届きで校長だろうが、校長にしても脱獄囚の一件でようやくアスカの周囲と本人の異変に気付けたのだから救いようがない。事実、ネギもアーニャもアスカが出て行く契機となった事件があったことは知っているが、虐めや脱獄囚の事件には未だに気付いていない。

「ネギは何て書いてあった？　私はロンドンで占い師よ」

先程アンナ・ユーリエウナ・ココロウァと呼ばれていた赤毛の少女が、ネギに話を振っているようだ。ネカネもそれが気になり、思考を一時中断しネギを見る。

「今浮かびあがるところ……お……」

「どう？……」

ネギと呼ばれた少年の持つ卒業証書に、僅かな明りと共に文字が浮かび上がった。

「え～と……に、日本で先生をやること……」

「「えええぇ～っ！？」」

日本で先生、その言葉に理解できないアーニャは驚きネギの襟元を掴み、思いっきり揺さぶる。

「ちょっと！これどうゆうことよ！！　ネギが教師なんてできるわけないじゃない！」

「僕だってわかんないよ」

赤毛の利発そうな少年の声が廊下に響くと同時に、ネカネは校長に真偽を確かめる為に慌てて走り出した。その隣にはアーニャが同じように慌てながら詰め寄ってくる。遅れてネギも二人の後を追って走る。

校長室に辿り着いた二人はノックも無しに扉を勢い良く開く。

「おっ！」

校長は開かれた扉から突進するように向かってくる二つの馴染みのある影に軽く目を瞬かせる。本来ならば校長として注意をするところだろうが、ネカネのあまりの形相にそんな考えも浮かばなかったのかもしれない。

「校長先生！　これはどういう事でしょうか！？」

ノックもせず部屋に入るなりいきなり何時ものお淑やかな姿を脱ぎ捨てて、ネカネは校長に向かって叫んだ。ネカネが校長に詰め寄る。だが、当の校長は飄々としたものだ。

「ほう……「先生」か……」

校長は豊かに伸ばした髭を触りつつ、手渡されたネギの卒業証書を見つめる。

「何かの間違いなのではないですか？　１０歳で先生など無理です！」

「そうよ！　ネギったら、ただでさえチビでボケで……」

ネカネとアーニャは必死で校長に撤回を訴えているが……まぁ、普通は既に決められた修行内容の変更など聞き届けられる事は無い。

しかし、アーニャは何気にひどい事を言っており、二人の後ろでネギが落ち込んでいる。

「しかし課題に関しては、卒業証書に書いてあるのなら決まった事じゃ。立派な魔法使い（マギステル・マギ）になるためにはがんばって修行してくるしかないのう」

「あ、ああ……」

既に決定事項と断言されてネカネは今にも倒れそうな様子で頭を抱えている。彼女にとって、ネギは大切な弟でまだ１０歳だから……異国の地で教師など心配で堪らない。

「「あ！　お姉ちゃん!?」」

更にアスカのこともあって心労も溜まっていたこともあって倒れそうになるネカネをアーニャが受け止める。

「ふむ……安心せい、修行先の学園長はワシの友人じゃからの。ま、がんばりなさい」

「……」

「ハイ！　わかりました！」

倒れたネカネと慌てて支えるアーニャを他所に、ネギがぐっと校長の言葉に頷き、元気な声で返事を上げる。倒れた姉は無視なのかと突っ込める人物はそこにいなかった。

ネギとアーニャ、ネカネは丸め込んで既に校長室から退室させている。数分後、校長室の扉がノックされ、校長は予定通りに来た当初の待ち人の入室を促す。

「失礼します」

予想通り、扉を開けて中に入ってきたのは、先程までここにいたネギの双子の弟、アスカ・スプリングフィールドだ。

アスカは挨拶し、椅子に座った校長の前にまで一歩ずつ歩いて来る。その歩きには力みなど無く、自然体でいるように見えた。

「……お帰り、アスカ。久しいな」

一瞬の間は懐かしさからか、それとも警戒心からかアスカ自身にすら判断がつかない。それでも校長の声は深い優しさを伴ってアスカの耳に響いた。

「ええ、お久しぶりです。随分と心配かけたみたいで、すみません」

返事を返しながらも、アスカは決して『ただいま』とは言わなかった。

ここはもう、アスカ・スプリングフィールドの『帰るべき場所』ではないのだから。校長もそれに気付きながらも、アスカがここを飛び出してから予感があったので、対応は変えない。

「……うむ。アスカよ。話をする前に2つ3つ聞かせてもらえんか？」

「なんですか？」

校長にはどうしてもアスカに聞きたいことがあった。四年もの間溜め込み続けた疑問を解消する機会は今を置いて他にない。

「お主は誘拐とかでは無く、自分の意思で出て行ったのじゃな？」

それが第一に確認すべきことで、集めた情報から事件性はないと判断しているが本人の口から真偽を確かめたい。

「そうですよ。退学届けと書き置きを残しておいたはずです」

「あんなモノが書き置きと言えるか！　はぁ～お前は全く、見た目はネギの方が父親に似ているが中身は絶対お前の方が似ておるわ」

アスカの言い分に校長は額に手を当て、こめかみを解す様に押し始める。

受理はされなかったが退学届けはちゃんと形式立てて書かれており、別に問題はない。

問題があったのは書置きの方だ。書置きには『旅に出ます。心配しないでください。アスカ』としか書かれていなかったのだ。この退学届けと書置きの落差はなんだというのか。

「他にも聞きたいことは山ほどあるのじゃが、それはまたの機会でいい……なぜ、連絡もなくココ（メルディアナ魔法学校）を出て行った」

少し間を置き、校長が口を開いて重々しく問い掛ける。それだけは聞いておきたかった。それはこの四年間、ずっとアスカに訊きた

いと思っていたことだった。

「一言の相談もなく飛び出すことは無かろう。ワシはそんなに頼り甲斐がなかったか？」

思えば校長から見てアスカは哀れな子供だった。

魔法使いの家にさえ生まれなければ、英雄である『ナギ・スプリングフィールド』の子供にさえ生まれてこなければ、間違いなく優秀な子供だと言われただろう。

ただ一つ、精霊に関する魔法が使えないことを除けば何万人に1人生まれるか生まれないかの才能に恵まれた子供だった。知能に優れ、運動神経も良く、精霊に関すること以外の魔法の修得においても秀でた才を示した。

しかし、魔法使いとして精霊に関わる魔法は必須だった。

それでも他の魔法使いの家系なら他分野での才能を示せば十分だっただろう。だが、アスカは『英雄の子』なのだ。それが他の何よりも重要視されている素質だったのだ。

それゆえに、アスカはメルディアナでは無能者扱いされた。精霊魔法が使えなくてもアスカは十分に優秀だった。だが殆どの者は、精霊魔法を扱えない無能者と罵らえた。

「……出て行ったことに特に理由は無い……かな。あの頃は神父が死んだばかりで余裕がなかったから」

当時のことを思い出すように少しばかり斜め上を見たアスカは自

身の正直の思いを吐露した。

特に何かがしたかったわけではなく、単に居場所がなかったから出て行った。メルディアナ魔法学校には執着するほどの良い思い出はほとんどない。

一番仲が良かったネカネすらも事件の影響で顔を合わせたくないと考えていたので、出て行くことに未練や執着は本人も驚くほどになかった。

「そうか……やはりワシを、皆を恨んでおるか？」

苦渋の表情をしていた校長はアスカに問いかける。当時の対応の全てが間違っていたとは思わないが、もっと他にやりようはあったと思わずにはいられなかった。

いくら事件の後始末、石化した村人たちの処遇、メガロメセンブリア本国への事後処理や報告、事件そのものの調査、普段どおりの校長としての業務など、やるべきことは山のようにあった。

魔法学校に入学したばかりの二人の対応は必然疎かになってしまい、ネカネに丸投げした形になってしまっていた。そのネカネすらもネギとアーニャに掛かりきりになってアスカを半ば放置になってしまった状況を作り出したのは他ならぬ校長だ。

虐めに関しては加害者が悪いのもあるが、学校の最高責任者として止められなかった責任がある。脱獄囚の事件も然り、アスカが校長や周りを恨む資格は十分にある。

更に半ば脅しに近い形で卒業式に出席させたことで憎まれていて

も不思議ではない。殺意を向けられないだけで驚きなのだ。

「いえ、当時は別ですけど今は恨んでなんていませんよ」

そう言って笑いながら手を振るアスカには、影は見えなかった。長い経験を持つ校長でも恨んでいるように見えない。

「あの脱獄囚、メガロセンブリアが管理している刑務所から脱獄したらしいじゃないですか。それに薬物を打たれた後もあったんですから、どうやら『災厄の女王』アリカ・アナルキア・エンテオフュシアの息子だから、メガロセンブリア元老院に殺したいほど邪魔と思われているらしいですからね……」

そもそもアスカが殺した男は、魔法世界の法律によって裁かれて収監されていた囚人。アスカのことを思って事件をなかったことにしたわけではない。表の世界には存在自体がなく、事実を知る校長と高畑が裏でもアスカが殺した事実を隠蔽したので立件することなど不可能だったからだ。

校長もアスカがしたことが正当防衛であることは分かっていた。だから、将来を閉ざすことはしたくなかったし、死体だけ持っていて秘匿されている魔法世界の事を表に出すわけにはいかなかった故の決断だったのだ。

それを調べた結果から推測したので、当時は怨んだが今は校長の判断に納得している。ちゃんと話を聞かずに決め付けて飛び出したのは自分なのだから、校長を責めるのは埒外だ。

「むぅ、どこで、それを……」

それよりもアスカが母親のことを知っていることの方が校長には驚きだった。少なくとも村にいた頃や魔法学校で真実を知る誰かに聞いたとは考え難い。

「自分が殺した人物が何処の誰かぐらいは知っておこうと思いましてね。色々と調べたんですよ。母については、ここに確たる証拠がありますから」

校長の声を遮ったアスカの言葉に顔が歪む。アリカの顔は一般にはあまり広くは知られていない。オスティアの人間や当時映像などを見た人間は別だが、有名人なのに称号だけが独り歩きしている状態だ。

しかし、調べれば見つけることは可能なのだ。

ネギがナギの生き写しのように、アスカもアリカの生き写しという揺るがない証拠がある。

「まあ、だからこうやって隠しているわけですが」

長い前髪から覗く目元を覆うサングラスを指して言うアスカに、校長の今日会ってからずっと気になっていた疑問が解消された。

「……しかし、本当に強くなったのぅ。アスカ」

多くの意味を込め、校長は言った。四年前は心身共に幼く弱かった少年が、旅に出たことで一人前の男になり、強大な力と、それを統御する精神力を身につけて戻ってきたことが嬉しかった。

アスカの様子をこうして見ると、本当に四年前とは別人のようで

ある。外見も背が伸びて体格も幾分がっしりして変わったが、何よりも存在感の桁が違う。

その立ち振る舞い、何気ない動きには無駄がなく、完全に洗練された動きだった。それだけでもここにいた頃よりも実力が段違いに上がっているのが分かる。精神的にも、過去を受け入れ前に進もうという気概が感じられる。

それが魔法学校を出て行ったことで得られたことに複雑な思いはあっても、辛い過去に負けずにここまで成長したことに喜びの感情が湧き上がり、心から祝ってやりたい。

「……さあ、どうでしょう？」

「まだ足りぬか？　なぜそこまで力を求める？」

校長の予想に反して、アスカは自分の力に満足はしていないようだった。まだ貪欲に力を求めるのか、と幾分批判的に問いかける。

だが、アスカには、力に淫する者特有の飢えた光はなかった。むしろ、どこか行くべき場所を見失って途方に暮れた少年のように、頼りない表情を浮かべている。

「強くなれば何かが変わるとずっと思っていました。だけど結局、そんなことは幻想にしか過ぎないことを散々思い知らされましたよ」

旅の途中で一体何度力が足りず、無力さに泣いただろうか。だけど力があっても救えず、逆に力は人を傷つけるばかり。

「それでも強くなりたかった。そのためなら、悪魔に魂を売っても

構わなかった」

力をつけても救えない者は救えない。無力感を、絶望を、何度も味わってきた。そんなことを何度繰り返してきたことだろうか。

――なぜ力を求める？

その問いに返す答えをアスカは知らない。

二度と悲劇を繰り返さないためか、今度は護り通せるようにか。違う。そんなものはただの自己満足に過ぎない。理由なんてない。目的だってない。ただ手を伸ばせば届く力があったから求めただけ。

だから狂ったように修行を続けた。血反吐を吐きながら何度も死にかけるまで身体を苛め抜いた。その果てに今の自分がある。

「……弱い自分が、泣くだけしかできなかった自分が何よりも、誰よりも許せなかったんだ……」

ここではない場所を幻視しながら、アスカは搾り出すような声で呟く。結局、これしか言えない。まだ過去を完全に乗り越えることはできていない。何時か、力に意味を見出せるその時まで――。

校長は何も言わず、自分の握った手を見下ろして呟くアスカを静かに見ていた。

（弱い自分が許せない、か……）

校長は旅でのアスカのことを報告書でしか知らない。何を考え、感じ、思っていたのか。だから、ただ想像するだけだ。吐き出され

た言葉の意味を、未だ癒えることのない傷の痛みを。

「今度……そうだな、修行が終わったらでもいいから一杯やろう。未成年だから酒でなくても、な」

それでも愚痴を聞いてやるくらいはできるだろう。溜め込んだものを吐き出せば、少しは楽になれるかもしれない。校長は「祖父」として「孫」を支えてやりたかった。それがどれほどささやかなものであっても、かつて果たせなかった役割を、心に溜め込んだものを吐き出せる場所になれたらいいと考えた。

「……ああ、いいですね」

アスカは今も血を流し続ける傷跡を隠して穏やかに笑った。

（ああ、居場所はここにもあったんだ）

自分が知らなかっただけで、思ってくれる人が、居場所が、直ぐ近くにあった。それが分かっただけでもココに来た甲斐があったというものだ。

「じゃあ、また……」

「ああ、またな……って待てぃ！　何をスルッと出て行こうとしておるか！！」

一人納得して用件は終わったと踵（きびす）を返して校長室を出て行こうとしたアスカに、イイ感じな空気になって思わず了承しかけてしまった。校長が慌てて立ち上がって出て行こうとするアスカを呼び止める。

「チッ」

「舌打ちしたな！　いま舌打ちしたな、アスカよ！！」

上手く誤魔化されてくれなかったと舌打ちしたアスカに突っ込みを入れる校長は、思うよりノリが良い人なのかもしれない。

「なんですか？　まだ、何か他に用事がありましたっけ」

「そういう自分本位なところはナギにそっくりじゃな。お前にも修行の課題が出されておるじゃろ」

惚けるアスカの仕草に、嘗(かつ)ては同じようにこの学校を中退した馬鹿(ナギ)者の面影を感じてしまい、喜んだ方がいいのか、悪い部分が似たことに悲しんだ方がいいのか、悩みどころだった。

あまり父に似ていると言われることはアスカにとって不快なことではあるが、困った顔をしながらもどこか嬉しそうな祖父を前に、それを表に出すことは流石に収めた。わざわざ言って雰囲気を悪くするような空気の読めないアスカではない。

「ああ、このイカサマ染みた課題ですか」

内心はさておき、アスカは手に持っていた括られていた卒業証書を開き、校長にも見えるように高そうな机の置く。

開かれた卒業証書に『日本で教師をする事』とゆっくり文字が浮かび上がってくる。

「イカサマってな……」

「十歳にもならない子供に教師が勤まるはずがないでしょうに。そもそも自慢出来ることでもないですけど学校なんてまともに通ったこと無いですよ、僕」

探るような目線のアスカに対して、校長は冷や汗流しながらほっほと笑って誤魔化す。

「っていうか教員免許事態ないから違法でしょうに」

「別に大丈夫じゃろう。学校の責任者が了解しておる」

それでいいのか、とアスカは顔を引き攣らせる。本気で教師を目指している人間が聞けば間違いなく激怒することだろう。彼ら、彼女らからすれば自分の努力を全て否定されたようなものだ。

「う〜〜ん……」

確かに極東方面では安全でそれなりに魔法使いもいるらしいので、修行の環境としては悪くはないか、とアスカは何とか納得してみる。が、魔法使いの修行自体が意味のないアスカは乗り気にはなれない。

「やはり嫌か？」

アスカの反応から聞かずにはおれない。似ているからと母親を特定できる聡い子だから裏の意味まで気付いても不思議ではない。

「色々と大人の事情がありそうですからね。例えば上から圧力がかかっているとか」

「ぬぅ……」

確かにメガロセンブリア元老院からは圧力が掛かっている。その為にほとんど学校に通っていないアスカを留学したことにして無理やり卒業できることにしたのだ。

本来ならネギはメガロセンブリアに行き、アスカは魔法世界で修行になるはずだったのを信頼できる近衛近右衛門に頼み麻帆良学園に無理やり変更したのだ。

考えられるのはネギを自分達の都合の良い英雄に仕立て上げ、アスカを修行のどさくさに紛れて暗殺する可能性があった。その為の緊急の処置だ。

「そこまで分かっているのなら、隠してもためにはならんじゃろうな。確かに圧力はあった。だが、この修行内容はお主達のことを思ってのことじゃ。それは理解しておくれ」

思えば、アスカは最初からどこか周りの同年代と違った空気を漂わせていた。

初めは、兄であるネギ以上に嫌に落ち着きのある早熟の少年だと思っていた。しかし、その評価はあの脱獄囚の事件後、出奔したことで変えざるを得なかった。

五～六歳という幼さで社会に出たことで、どれだけ辛い事があったのか校長には想像しかできない。その精神力の強さには感服するしかなく、そうやって強く在らねばならなかった事に心を痛めた。

何も校長らはアスカにしてやれなかった。事件後のケアも出来ず自分で、もしくはあの使い魔の力で立ち直ったようだし、周りの虐めも結局止めさせることも出来ずに地力で解決してしまった。

アスカを率先して虐めていた教師や生徒が廃人になった事件の犯人も校長はアスカと見ている。が、確たる証拠も無く事件は終息を向かえ、このまま事件は迷宮入りだろう。

「それに修業場所の学園都市――麻帆良には私の友人が居る。彼ならそう無碍に扱う事もないじゃろう……多分。それに世界各地から大量の稀覯書が集められておる。その中にはお前の望む物もあるかもしれんぞ？　行くのなら貴重本を読めるように口添えをしておくぞ、どうじゃ？」

「う～～ん……」

本格的に悩みだしたアスカを前に、自分が餌を与えて飛びつくのを待っている猟師のような気分になり、そんな謀(はかりごと)を孫にしていることに吐き気を覚えた。

母親に似すぎているアスカが魔法世界に行くのは余りにも危険が多すぎる。件の友人は多少悪戯好きというか、愉快な事を行ったりする人物ではあるが信頼は出来る。

（アスカの場合は、ネギと違い父の面影を追うとかはないが母親に顔が似ているということは厄介ごとに巻き込まれる可能性が高い。或いはこの子なら自分でどうにかしてしまいそうだが、それとは別にネギとは仲良くして欲しいしのう……）

英雄ナギ・スプリングフィールドには味方も多数存在する反面、

敵も同じように存在していた。

唯でさえナギの所為で敵が多いのに、ネギと違い母親に似過ぎているためネギなら味方になる人間が、アスカの場合だと敵になる可能性もある。

正直、ネギとの確執があるのは知っており、彼を兄と同じ麻帆良に送っていいものかどうか迷っていたが、結局選択肢は残されていなかった。

アスカにネギのことを頼みたいと思っていないと言えば嘘になる。しかし、それ以上に校長はアスカの危うさが気になっていた。僅かに垣間見せた心の傷跡。六年前のことも未だに癒える兆しのないそれを、見て見ぬ振りはできない。修行先は賑やかで穏やかな場所だ。そこがアスカにとって最良の場所になることを祈るしかない。

「分かりました。行きますよ」

アスカは修行に行くことによるメリットとデメリットを脳裏にある天秤にかける。

幾つもの要素を秤に賭け、麻帆良にあるという蔵書も気になるが失った前世の記憶の中で、数少ない原作知識である『麻帆良』に興味を引かれたのが決定打となった。

それにここまで不安そうな顔をされると旅に出た所為で心配をかけたということもあって安心させたいとは思う。まあ、どこかの誰かの思惑に乗るのは気に食わないが目的を達したらトンズラしようと心に決める。それで最低限の義理は果たせるだろう。

「良いのか、アスカ？」

わりかしあっさりと結論を出したアスカに、逆に校長の方がそれでいいのかと問いかける。

「構いませんよ。何時までも追い掛け回されるのは気持ちのいいものじゃないですし、これから特に目的もあるわけじゃないですから。で、僕は何時頃向かえば良いんですか？」

別段、旅に出たのにも理由があるわけでもない。宛てもなく旅をするのも悪くないが追い回されるのは気に障る。

「2月1日から来て欲しいと言う事じゃ。それに間に合うように行ってくれればよい」

「……分かりました。ところでさっきのその友人の時に話で多分とか言いましたよね。それは何故ですか？」

少し考えるような仕草をしたアスカが先程の会話を思い出すように顎に手を当て、そんなことを聞いて来る。

「ちょっと悪戯好きというか、愉快な事をいきなり行ったりする人物でな、だが信頼は出来るのでな。安心しろ」

「……申し訳有りませんが、今から一，二ヶ月後に向こうに行けるようにしてもらえますか？　赴任前に実際にどんな授業をしているのか、実地で受けてみたいので生徒という形でお願いできませんか？　そのトップがそういう性格だといきなり最初から一人で授業とかさせられそうなんで。というか最初から生徒ってことにしてくれたら最高なんですけど」

アスカの言葉で脳裏に以前、近右衛門に唐突な思いつきに振り回されたことを思い出す。

実際にやりそうだからアスカの言葉を否定できない。それに実際現地で生徒の立場で授業を受けてみるというのは悪いことではない。

それに調べ物をするなら教師という時間を取られる職よりも、生徒という立場の方がやりやすいのは間違いない。

「……まあ、確かに信頼は出来ても信用は出来ん奴じゃしな。良いじゃろう、先方に掛け合ってみよう」

「ありがとうございます。お願いします」

僅か一，二ヶ月で世界一難しいと言われる日本語を覚えなければいけないのに、顔色一つ変えないとは、豪胆なのか単に気にしていないのか。

「今度こそ用件は終わりですね。それじゃ」

「ネギたちには会って行かんのか？　特にネカネはお前のことを気にしていたぞ」

矢鱈（やたら）と早く出て行こうとするアスカ。それもまた旅に出そうな雰囲気を感じて呼び止める。ネカネの話題を出したことで後ろを向いたアスカの肩が小さく反応したのを校長は見逃さなかった。

「勝手に出て行った手前もあって、どんな顔したらいいか分からなくて」

何も言わずに飛び出した罪悪感もあるが、もはや自分はネカネが知っている頃とは大分変わってしまった。この手は血に塗れ、多くの命を奪っている。

昔とは変わってしまった自分を知って嫌われたくなかった。結局、嫌われることが怖いだけなのだ。

「……そうか」

寂しげに持ち上げた片手で頭をかくアスカの後姿にそれ以上の事は言えなかった。

「……のぉ、ナギ、アリカ姫。ワシらはどこで間違ってしまったのかの？」

今度こそアスカは校長室を出て行き、一人残った校長の言葉は誰に聞かれること無く、寂しく部屋に反響した。ふぅ、っとため息をつきながら日本に送るネギとアスカの資料の作成にとりかかった。

そこは雑踏と喧騒に支配された建物の内部。多くの人々は重量のありそうなスーツケースや旅行鞄を持ち、軽い外出感覚で居るわけではないと判断できるが独特の騒々しさがある。行き交う人々の会話もあるが、独特のタービン音も聴こえる。まるで広範囲に撒き散らすかのような、独特の騒音。自動四輪や自動二輪のエンジン音では無い。これはもっと大きな機械――“乗り物”の作動音。

行き交う人々は、そんな騒音を気にも留めていない。まるで聴こえて“当然”と思っているかのような、そんな態度。

建物内部に所狭しと人が居るが、皆それぞれ目的を持って歩いている。一つはこの建物内部に入り込んで行く者。もう一つはこの建物内部から出て行こうとする者達の二種類。其々が、全く別のベクトルを持って動いている。

この建物は接続している。出て行こうとする者と、入って行こうとする者。この二つを接続するためだけの存在。此処は謂わば端末。ターミナルであった。

ここは――空港は、そんなところ。

ロンドン・ヒースロー空港ターミナルビル、そのロビーにアスカはいた。

ロンドン・ヒースロー空港はロンドン市内などとのアクセスは比較的便利なものの、老朽化と乗客数の増加を受けて繰り返す増築のために、荷物の紛失が多く報告されているほか、乗り継ぎの手間も

かかるなど、使い勝手の面ではあまり評判が良くない空港の1つである。また、周辺を住宅地に囲まれていることから騒音規制が厳しいことでも有名である。

大きな旅行鞄を押している観光客やスーツケースを抱えたビジネスマンに混じって、子供に見える、というか子供のアスカが一人で歩いていた。

数日だけ滞在して、校長から先方より教師の赴任の前に訪れてもよいという許可が下りたので、それまでの間にまた旅に出ようと思い、空港に来ていた。

鞄一つだけという、とても旅に出るような荷物ではないが大半は神父の遺品である【別荘】に入っており、【別荘】も武器を口寄せしたりする札に入れているので荷物は少ない。

今度はアフリカ大陸に行くつもりで空港にいたアスカは時間が来るまでロビーで待っていた。が、

「ま、まったく。今日出立って校長先生に聞いて急いで駆け付けたんだから……はあ……はあ……はあ…一言くらい声かけてもいいのに……」

そこに息を荒げたネカネが走って現われて驚いた。

「兄さんの相手で忙しいでしょ？　だから、邪魔をしたくなかったんだ」

走ってきたらしく、ネカネは息を乱しながらアスカを責めるように言うが、その言葉を聞くと逆にばつが悪そうな顔をした。

またネギを優先してアスカを放置した、とか思われてるんだろうが別にアスカは何とも思ってないし、最初からそのつもりで会うつもりもなかったのだから。

「……そう、ゴメンね。アスカ……あなたに渡したいものがあるの」

「渡したいもの？」

アスカは黙って近くにある窓の外にある発着する旅客機に視線を向けていた。ネカネも同じように飛行機を眺め、独り言のように話し始める。

話しかけたネカネに、アスカは横目でサングラス越しに見上げた。

《我はおらん方がいいな。邪魔者を排除してくる》

気を利かせた玉藻が、それだけを伝えて止める間もなくアスカの体内からいなくなった。

玉藻が言う邪魔者とは、校長が用意したのか、教会からずっとつかず離れずの距離を保ちながら背後、あるいは前方、あるいはアスカの姿がギリギリ視認出来る程離れた位置にいる数名の人間のことだ。

人が居ると、予め言われなければ気付かなかったかもしれないほどに気配は捉えにくい。無駄な力も強張りもなく、人混みに自然に紛れ込みながら、それでいて完璧に任務をこなしている手練。だが、今までは別にいいがプライベートな話まで聞かれるのは流石に鬱陶

しいことこの上ない。

それを察知した玉藻が気を利かせて排除（気絶させるだけ）しに行ったのだ。

そんなやり取りをしているとは思わないネカネはポケットから指輪を取り出し、それを横にいたアスカに手渡してきた。

「これは……？」

「校長先生からアスカに渡してくれって預かってね。魔法発動体としては最高級の物らしいの。それと伝言があってね「何もしてやれなくて済まなかった。せめてコレを受け取って欲しい」って」

その指輪を見ると魔法発動媒体としてのレベルは最高レベルに近いことは手に取って分かった。ネギが持っているサウザウントマスターの杖と同レベルなのでその金額がバカ高いだろうことは容易に想像できる。

正直、ほとんど魔法を使わないアスカには発動媒体は必要ないが、好意なのでありがたく貰う。もしかしたら今後、何かで使い道があるかもしれない。

「そう……これで十分だよ。「ありがとう、気にしてないから」と校長先生にも伝えて」

「分かったわ、伝えておく」

ネカネに校長への伝言を頼み、ポケットに指輪を入れた時、空港のアナウンスが流れた。

＜＜　〇〇〇〇〇便に御搭乗のお客様はＣゲートより搭乗してください　＞＞

「もう行かないと……」

搭乗を呼びかけるアナウンスが流れたので、アスカが置いていた荷物を肩に背負い、搭乗口に向かおうとするとネカネに呼び止められた。

「アスカ！　これだけは聞かせて……私達を、私を恨んでる？」

「……別に、恨んでなんかないよ」

本心から全く恨んでいないと言えば嘘になるだろう。

何で気づいて助けてくれなかったのか、何故ネギばかりを優先して自分を守ってくれなかったのかという思いはあった。だけど、それは自分本位な考えでしかない。

「……世界中を旅していろいろ考えてみたんだ。助けて欲しかったっていう気持ちはあったけど、あの時は誰も彼もが自分のことだけで手一杯だったから気持ちだけじゃなくてちゃんと言葉で伝えるべきだったんだ」

ネカネは、内心を吐き出すアスカの言葉に、ようやく自分の犯した大きな罪に気付いた。

小さい頃から聡く、下手したら自分よりも大人に感じたアスカも自分たちと同じ子供にすぎなかったことに。助けを求める気持ちがあり、自分はそれを忙しいから、大変だったからと気づこうとしなかった。まだ故郷にいた頃を思い出せば、行方不明になったり、長期間意識不明になるなどネギよりも不安定なことに気づくべきだった。

表面的な部分だけで安心して内面を測ろうとはしなかった。言葉にしないと分からないことがある。確かにそうだろう。だが、自分は助けられるばかりで本当に聞ける姿勢だっただろうか。

何時も疲れた顔をして、もしかしたら無意識に優しくしてくれるアスカに甘えていたのではないか。当時のことを思い出してそんなことを考える。

「誰か一人が悪かったわけじゃない。誰もが間違えて、その間違いから目を逸らそうとした結果だよ。それは僕も例外じゃない。誰とも向き合おうとせず、逃げたから」

「えっ……？」

ネカネは不意をつかれたような表情になった。そうだろう、アスカに何の咎があるのかネカネには分からない。

「じゃあ……」

搭乗時間も迫っていることもあって、アスカは理由を話すことなかった。

「ゴメンね！　何も気付いて上げられなくて、何もしてあげられなくて！！」

理由を聞きたい。それでも搭乗口に向かって歩き出したアスカの背中が傷つき、疲れ果てたように見えたから、これだけは伝えずにはいられなかった。

「……」

今まで冷笑され続けてきた人間が、周りからの好感情に鈍く気付いても戸惑うというのは結構例がある。アスカはその典型だろう。優しくされると戸惑ってしまう。

アスカが聞いたネカネの声は震えていた。もしかしたら泣いているのかもしれない。戻って慰めてあげたい衝動に駆られるが、それでもアスカは衝動を振り切って前に進む。

「行ってらっしゃい、アスカ！」

（行って来ます。ネカネ姉さん）

ネカネの言葉にアスカは何も言えなかった。何か言うと泣きそうな気がしたからだ。だから振り向かず、ただ返事をするために行ってきますと手を振った。

（そうだな。落ち着いたら手紙を出そう）

一度切れた関係を直すことは容易なことではない。だけど、直ぐに仲直りはできなくても一歩ずつ進んでいけば、何時かは昔のような関係に戻ることができるだろう。だから、今はこれでいい。最初

の一歩を踏み出したのだから。これからどうなるかは二人次第。

アスカは搭乗口から飛行機へと乗り込み、ネカネが見送る中で飛び立って行った。

第十四話　　卒業させられた少年（後書き）

次回は『リリカルなのは』、アスカ、学園長＋高畑、の各々の話しになります。学園長＋高畑目線の話では少しだけアスカの過去が明かされます。

次回の更新は、来週の日曜日午前０時に更新したいと思います。

予定より遅くなる場合は、その都度、活動報告に上げます。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

第十五話　　回りだす運命と少年（前書き）

ＰＶが累計　九百万アクセスを越えました。皆様に感謝を。

今話は改定前の『第六話　願いと思い（リリカルなのは編）』を改定後の設定に合わせて修正・加筆したものです。

今回の文字数も少なめの１０２５７字となっています。最初出来上がっとき１００００字に足りなかったから、かなり付け足したので無理矢理感があるかもしれません。

それではどうぞ！！

第十五話　　回りだす運命と少年

9月19日八神家

ソレの名は闇の書という。時を越えて世界をゆき、様々な主の手を渡る旅する魔道書。かつての姿は今はなく、時の移ろうまま終わる事無き輪廻を繰り返す。

長き時、闇の書を守護せし者らと共に旅を続けてきたが、その始まりは既に忘却の彼方に消えた。闇の書そのものであるソレにすら、原初の姿も、託されし想いも知ること叶わない。

だが、しかし此度の明けはこれまでとは少々異なっていた。

「ん・・・あ一、おはよ一さんや」

この目を擦りながら起きて空にプカプカと如何なる方法でか浮かぶ闇の書に朝の挨拶をするのが此度の主、名を八神はやてという。

彼女の名は八神はやて、小学三年生相当の女の子。

小学校は足の障害のため休学中。古代遺産（ロストロギア）「闇の書」とその守護騎士たちのご主人様である。

小さいころに両親を無くし、足に原因不明の障害を抱えながらも「父の友人」とギル・グレアムの庇護を受けながら1人で生活していたが、彼女が9歳の誕生日である6月4日の午前0時、突如自宅に飾られていた書物（闇の書）が光を発して、闇の書の守護騎士プログラムが起動。守護騎士「ヴォルケンリッター」のシグナム、シ

ヤマル、ヴィータ、ザフィーラの４人が姿を現した。

彼らが出現した時は驚きのあまり気絶してしまったものの、守護騎士達から話を聞いて詳しい事情を知った彼女は、魔法の存在や闇の書と守護騎士の主に選ばれた事実を受け入れ、闇の書の主として守護騎士達の衣食住の面倒をみる責任があると解釈した。

「なんや、闇の書」

ベッドから移動して車椅子に座ったままでキッチンにて料理を行う自身の主の姿を、闇の書は隣りで浮遊せしまま、観察を続ける。

この主の元で封を解かれてはや数ヶ月、驚くべきことに闇の書のページは未だ一ページすら蒐集されていない。

「そんなところで見とったら、水がはねて汚れるで」

はやてが横に浮かんでいる書に注意しても、聞こえているのか聞こえていないのかその場から動こうとしていない。

「き一とるかぁ」

闇の書が齎(もたら)すとされる大いなる力を欲せず、闇の書の守護騎士(ヴォルケンリッター)の主たる責からも逃走しない。これは闇の書が永き生のうちにて、少なくとも「■■の書」が「闇の書」というの名を冠されてからは初めてのことである。

「おはよう、はやてちゃん！」

そこに現われたのは二人の女性。

一人目は金髪の若奥様のような女性。守護騎士（ヴォルケンリッター）・参謀で風の癒し手、湖の騎士シャマルである。

外見年齢は騎士たちの中でもっとも年長で２２歳相当。金髪のおっとりした優しげな美人だが、守護騎士の中ではドジで少々頼りない面が目立つ。

直接的な戦闘能力を持たない分各種サポートに非常に秀でており、魔導師の探索や結界形成、騎士たちのダメージの回復など縁の下の力持ちとしてなくてはならない存在。過去にいざという時の控えとしてたびたび仲間の窮地を救う場面があった。魔力光は明るい緑。使用デバイスは補助機能に特化した指輪型のアームドデバイス、風のリング「クラールヴィント」。

「おはようございます」

もう一人は実直そのもの口調と態度の桃色の髪をポニーテールした女性。守護騎士（ヴォルケンリッター）・将で烈火の将、剣の騎士シグナムである。

生真面目で実直、騎士道精神を持つ武人。家族として接する主に対しても常に敬語を崩さないが、主の優しさに安らぎを得ているのは他の騎士と同様。凛々しい風貌の、外見年齢１９歳前後の美人。和食、入浴が好き。

戦闘面では接近戦のスペシャリストとして非常に高い戦闘能力を持っている。また魔法は炎を使うものが多い。魔力光は紫。使用デバイスは剣型のアームドデバイス、炎の魔剣「レヴァンティン」。

幾多の戦いを主と共に潜り抜けた、シグナムの騎士としての誇りの象徴的存在。

「シャマル、シグナムおはよう♪」

起きて来た家族にはやては料理の手を止めて振り返り、機嫌良く朝の挨拶を返す。小さい頃からずっと一人だった彼女は、ごく当たり前なこの習慣ができるだけでも十分に嬉しい。

「……闇の書を連れてお散歩ですか？」

はやてが料理をしている姿は珍しくない……というより当たり前だが、書がそれに引っ付いているというのは中々に珍しい光景なのでシグナムが尋ねてしまうのも無理からぬものがあった。

「そう見えるか？　なんや今日はついてきてしまうんよ、どないしたんやろ」

何時もとは違った書に疑問に思いながら言葉と共に、はやては宙に浮かぶ書を人差し指でつんつんと突く。意思表示ができないようなのではやてには何を思っているのか分からなかったが。

小さい頃から家にあって、鎖で雁字搦めになっていて中身を読むこともできなかったが、この本が彼女に家族を与えてくれた幸運のアイテムなのである。

普段は滅多に動かないその書が変わった行動をしていると気になってしまう。

「闇の書もはやてちゃんの事が好きだったのかしら」

「あはは……そうなんか？」

書という見た目そのものから感情があるとは思えないが、書から彼女たちから出てきたのだから十分にあり得ることなので思わず尋ねてしまう。

「ともあれ、お料理の邪魔になってはいけません、私が預かりましょう」

汚れた程度で何か機能に支障でるとは思わないが、それでも万が一の事を考えてしまい、気にしてしまって料理を作る手も必然遅くなる。食事が遅くなるのは別に構わないが主であるはやての邪魔はよくないと考えたシグナムが提案する。

「汚れたらあかんしな、ええか？　闇の書」

主の邪魔を成すことは本意ではないからか、はやての言葉に従いシグナムの元へ浮かんで向かう。この行動から書にも最低限の知恵はあるようだと推察できる。

単純に汚れたくないからと自分本位な考えではないと思いたい。

「ええみたいやね」

「はい」

シグナムは手の中にふよふよと飛んできた闇の書を掴み、シャマルは料理を手伝うためにエプロンを身に着けていた。

ガチャ、バタン！

「たっだいま～っ！」

そんなやり取りの中で玄関のドアを開けて帰ってきて挨拶したのは、守護騎士（ヴォルケンリッター）紅の鉄騎、鉄槌の騎士ヴィータだ。

騎士たちの中では外見、精神ともに最も幼く（外見は小学１年生程度）常に勝気で自由奔放に振舞うが根は優しい少女。外見年齢が近いこともあってか、主は実の妹のように可愛がっており、彼女もまた「優しいはやて」を強く慕っている。

戦闘スタイルは遠近両用に防御をも兼ね備えたオールラウンダーで、シグナム同様に非常に高い戦闘能力を持っている。特に防御は、完全に徹すればシグナムを上回る。しかし本人は射撃戦よりも近接戦を好む傾向があり、中距離から飛び込んで一撃の破壊力で勝負するタイプ。シャマルもヴィータを「アタッカー」と称している。特に「防御を突き破っての破壊」にかけては逸品である。魔力光は紅色。使用デバイスはハンマー型のアームドデバイス、鉄（くろがね）の伯爵「グラーフアイゼン」（通称アイゼン）。

そしてヴィータが持っている紐の先には守護騎士（ヴォルケンリッター）蒼き狼　盾の守護獣ザフィーラ。

獣人の男性で、人間時は外見年齢２０代半ばの筋骨隆々とした青年の容貌、獣時は青い毛皮の大柄な狼の姿。召喚後は八神家唯一の男性であることへの配慮と、主が犬を飼いたがっていたという理由から、日常では基本的に獣の姿をとっている。寡黙な性格で、常に仲間たちから一歩引いた冷静な目線で全体を把握している。

戦闘での役割やスタイルはサポートとして抗バリア魔法・捕縛系バインド魔法等の補助系魔法や拳での格闘を得意としている。また状況を見極める力が高く、戦局不利と見て後方に控えるシャマルに指示を飛ばす場面もある。デバイスは使用していない。魔力光は白。

「お帰りザフィーラ、ヴィータ」

「二人ともミルク飲む？」

シグナムが二人を迎え、靴を脱いでリビングにやってきた二人に散歩で喉が渇いただろうと考えたシャマルが問いかける。

「飲む！」

「シグナムも？」

「ああ……いただこう」

シャマルの問いに元気よくヴィータが返事をして、続けて問われたシグナムも了承し、皆で冷蔵庫から牛乳を取り出して飲む。

「しかし、どうした？　お前も主はやてが心配か。確かに主の体は不自由だが、年に似合わずしっかりした方だ。我らも随意お守りしている。心配は要らないぞ」

闇の書の一部にして、我と主の剣である守護騎士ヴォルケンリッター。一騎当千の戦騎とシグナムとヴィータ。それを支える騎士シャマルと守護獣ザフィーラの四騎からなる戦闘集団。

ページの埋まらぬこの状態では闇の書には意思具現化の術はない。

だが、騎士達はこの暮らしが気に入っている。

様々な主の元での様々な戦い、命じられるまま我の完成のためページを蒐集し、戦う力を振るうのみの日々。

闇の書の中にいる存在もまた、この子らもそれをただ受け入れ、永き時を過ごしてきたがこの子らがこのような平穏な日々を受け入れ、さらに喜んでいる様子であるという事実は小さな驚きであった。

主の器か子供らしい素直な愛情故なのか、いずれにせよ騎士達にはこの年若き主をいたく気に入っているようである。

「ほんなら行って来ます」

「はい、お気をつけて」

シグナムとシャマルに見送られて朝食を食べ終えた二人は図書館へ向かうために家を出た。

はやてにとっては、このような家族との絆こそが、何よりの宝で、そのような他愛無い家族としてのやり取りこそが、宝石の輝きを持つ。

「んん……今日もええ天気やな」

「だね」

空の快晴具合に車椅子に座ったままのはやてでも背伸びしたいような気持ちになる。世間では夏休みも開けて小学校が始まっているが休学中のはやてにはあまり関係がない。

後ろから同意したヴィータが車椅子を押し、はやての膝の上には目的地である図書館で借りた本が置かれている。これから図書館に行って返しに行くところなのだ。

「ヴィータ、図書館は退屈とちゃうか？」

活動的といっていいヴィータには図書館という静かにしなければいけない場所は退屈ではないかと思い、迷惑だったのではないかと考えて不安そうに問いかける。

「別にィ、はやてがいなきゃ家だってどこだって退屈だもん」

九月という残暑も厳しいこともあって日傘を差しながら、ヴィータは母が子に甘えるような声を出す。

最初は機械然としていた彼女たちも慣れてからはこのようにそれぞれの個性が出るようになっていた。ザフィーラだけはあまり変わらないが。

「うーん、ほんならヴィータの楽しい事なんか探してあげなな」

「いいよ、そんなの。あたしははやてがマスターでいてくれるだけで嬉しいんだから」

そう思ってくれることを嬉しく感じながらもはやては家族としては外に目を向けて欲しいと考えるも、今はまだ早いようだ。もっと時間をかけて町に溶け込んでいくようにしなければならないようだ。

「わたしもヴィータたちと一緒に暮らせるの嬉しいよ」

彼女は孤独だった自分に突然できた「家族」の存在を喜んだ。騎士達に「家族」として仲良く暮らすことを望み、闇の書がもたらすとされる強大な力を理解した上でその完成を望まず、守護騎士リーダーのシグナムと「闇の書の頁蒐集は行わない」との約束を交わした。

「わたしの周りには危険も無いから、みんなが戦うことも無いし闇の書のページも集めんでええ。みんなで仲良く、一緒に暮らしていけたらそれが一番や。そやからわたしがマスターでいる間は、騎士としてのみんなのお仕事はお休みや」

八神はやてにとって、一人であることは普通だった。だが、どんな経緯にしろ八神はやては、生まれて初めての家族を得た。

生まれて初めて得た家族は、はやてが想像していた以上に幸せなものであり、彼らのおかげではやての生活は彩りを大きく変えていた。だから、自分がマスターでいる間だけでもゆっくりと休んで欲しいと思っていた。

それが、それだけが自分と家族になってくれたみんなへの精一杯の感謝の気持ちだった。

「……闇の書のマスターは、これからもずっとはやてだよ。あたし達のマスターもずっとずっとはやてだよ」

どれほど成熟せし魔道師であっても、古代ベルカの叡智をその身に宿す賢者であっても、その心を持つことは容易ではないことをヴィータは良く知っている。

穏やかなその心は、戦いに疲れた騎士たちの魂を、優しき温もりとともに、労わるように包み込む。歴代の闇の書の主において、守護騎士を“家族”として扱ったのも、今の主であるはやてのみ。

だからこそ、彼女を守りたいと、暖かな笑顔を潰したりしたくないと守護騎士たちは常々思っていた。

「んん、そうやったらええな」

はやては闇の書のマスターやから守護騎士一同の衣食住、きっちりと面倒みなければ思っている。皆の笑顔が彼女の宝物。こんな時が、どうか少しでも長く続きますようと強く、強く願っていた。

そんな日々が一年にも満たない期間で容易く崩れるとは、このときの彼女たちには想像もしなかった。事件の中心である唯一人を除いて。

これは初めから決められていた箱庭。決められた運命。定められた宿命は幸せな日々を少しの間だけしか許してはくれない。

それは「闇の書」がそう呼ばれた理由。連綿と受け継がれた負の遺産――――もはや呪いの域に達した終わりが訪れるのを待つしかない。

ソレの名は闇の書。かつての姿と名が今はもはや無く、遠からず時は動き出してしまう。破滅か再生かいずれかにせよ。ただその時を待つばかりなり。

そうなった時、騎士たちと今代の主八神はやては闇の書を呪うだろうか。此度は一体どのような形で目覚め、力を振るうのだろうか。

そして誰がどのようにして、自分たちをを破壊するのだろうか。

願わくばその時が、例え僅かでも先に延びるように、と闇の書の内部の存在はただ祈るばかり。

だが、それでもソレ――――――彼女はただ願う。誰かがこの因果の鎖から主を救い、守護騎士（ヴォルケンリッター）を解き放ってくれることを、そうまるで物語の「英雄（ヒーロー）」のように。そんな者が現れて主を救ってくれる事を、切に願っている。

「ん……？」

日本に向かう飛行機の座席に座りながら、アスカは誰かに呼ばれたような気がして辺りを見渡す。窓際の席で、廊下側まで誰もいないという好条件の席にアスカは座っている。

滑走路から離陸してかなりの時間が経過しており、雑多な音はするものの特にアスカを呼んだような声は聞こえない。

《どうした、主？》

《誰かに呼ばれたような気がして》

《我には聞こえんかったが》

キョロキョロと首を回して落ち着きなく声の主を探すアスカに困

惑した玉藻が答えるも、アスカは納得がいかないのか首を捻っていた。

アフリカでも蘇ったばかりの神様と出くわして戦ったり、狩猟禁止の絶命危惧種動物を密猟しようとする狩猟者を検挙したり、と毎度の如く騒動に巻き込まれていた。騒動に巻き込まれていない日の方が少なかったぐらいだ。

それで疲れたのかな、とも思ったが精神的、肉体的の疲労はそうでもない。

（あれ、神様と密猟者って落差がありすぎじゃない？）

いくらなんでも騒動にも差がありすぎるだろうと自分に突っ込まざるを得ない。仙人とか、妖魔とか、悪魔とか、邪教集団とか、死霊使いとか、並べていくと「あれ？　俺って何歳なんだろうか」と自分の歳を疑いたくなるぐらいに騒動に巻き込まれていた。

「しかし、本当に幻聴かな？」

あえてそっち方面は考えないようにして言うが、先程の何かがアスカの琴線に引っ掛かるものを感じて気になってしまう。喉の奥に魚の骨が刺さったような違和感を感じてしまい、無視するには気になるものだ。

だが、直ぐにそんな場合ではない事態が起こった。

「この飛行機は俺達が乗っ取った！　全員、大人しく従ってもらおうか！」

突然、前方のコックピット付近が騒がしくなり、前方と後方から手に黒光りする拳銃を手にした中年というべき年齢に達しているであろう男性数人が、軽く引き金に手をかけ、いつでも発砲できることを示しながら現われた。

「素直に我らの言うことに従えば、危害を加えることはしないと約束しよう」

自らが持つ力を誇示しながら、まったく怯えることなく、それが当然といわんばかりに、野生的な笑みを浮かべる男たち。アスカは彼らの正体を理解した。

――――――即ちテロリスト、と。

誰もが拳銃に恐怖して動くことができない。撃たれたら下手をすれば、一発であの世行きである。だから、誰も勝手に動いて目をつけられたくないのだ。その行動で、彼の注意を向けたくないから。その引き金に手をかけられた銃口が自分に向けられたことを恐れているのだ。

彼らは飛行機という完全に周囲と隔絶された空間の支配者になっていた。

（ああ、どうしてこう毎度の如く騒動に巻き込まれるのか）

周りが恐怖やら何やらで騒ぎになる中で、アスカはテロリストに怯えるような様子をまったく見せず、まるでそれが日常の一コマのように平然としていた。

慣れとは恐ろしいもので、ただの拳銃を持ったテロリストの恐怖

を覚えるほど生半可な経験をしていない。

被害を出さずに彼らをぶっ飛ばす作戦を考えているアスカの頭には、先程誰かに呼ばれたような気がしたことは残っていなかった。

学園都市麻帆良――――――その学園長室には、この学園の学園長である近衛　近右衛門とタカミチ・T・高畑が話し合っていた。

「フム、アスカ君は数日後には到着か。しかし嬉しそうだのう、タカミチ君？」

「ええ、アスカ君に会うのはあの事件以後一度だけ会ったんですけど、あの時は逃げられてちゃんと話はできませんでしたからね。立ち直っているようには見えましたけど、やっぱり気になってましたから」

高畑は当時のことを思い出して学園長に苦笑しながら言う。

「では、彼の迎えは任せても構わんかのう」

学園長も事件直後に帰ってきた高畑の憔悴した様子を知っているので、少しは二人で話せる機会を作ろうと考えた。それ故の提案である。

「はい。できるなら少し二人で話をしてみたいですから」

麻帆良に来た時のアスカの迎えを高畑に頼み、学園長は机に置かれている報告書を手に取る。

それはメルディアナ魔法学校の校長が調べた物と学園長が個人的に調べた物の二種類ある。とはいえ、アスカが旅に出ていた経歴で二種類の内容にほとんど差はない。

「しかし、彼は容姿は似ていないのに、僅か五歳で旅に出るなんて破天荒なところは父親とそっくりじゃな。しかもトラブルに首を突っ込むところは本当にそっくりじゃ」

アスカが旅に出た目的は明らかではないが、持って生まれた性質なのか、やたらとトラブルに巻き込まれることが多く、それらを解決していっている。

親はなくとも子は育つとでも言うべきか、騒動に首を突っ込むか巻き込まれるかの差はあるにしろ、父親（ナギ）に良く似ている。

だが彼らも、まさか今この瞬間にもアスカが乗っている飛行機がハイジャックされているとは思わない。

「それに復活したてとはいえ、吸血鬼まで倒しておるしな」

報告書で特に特筆するのは、旅に出て一年後の出来事。

ドイツのある地方で長年封印されていた吸血鬼が蘇り、察知して討伐に向った近隣の魔法組織も撃退され、丁度、ドイツに居てその噂を耳にしたアスカは、呆れたことにその本拠地へ戦いを挑みに行ったのだ。

戦いは陽が出てから沈むまで続き、瀕死の重傷を負いながらも、アスカはついに吸血鬼を倒したそうだ。誰も現場に立ち合ったわけではないので、あくまで噂ではあるが。

「その噂は本当ですか？　当時の彼はまだ六～七歳の子供ですよ」

高畑が疑わしく思うのも無理は無い。どこの世界に組まれた討伐隊を倒した吸血鬼を討伐できる子供がいるのなどと信じられるか。とても信じられる話ではない。

「事実じゃ。現に件（くだん）の吸血鬼はあれから姿を見せんらしいし、調査に向かった者たちの話では戦場というほどの戦いの痕があったらしいからの。無論ワシが調べたことが全て真実だと仮定しての話しじゃが」

と、推測の話しながらも渋い顔で高畑の疑問に答えた学園長は言葉を結んだ。

彼は真実だと考えているからこそ、その表情には苦いものがある。何故なら麻帆良には真祖の吸血鬼――――嘗（かつ）て６００万ドル賞金首であるエヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マグダウェルがいる。

アスカの父ナギに遺恨があるエヴァンジェリンが戦いを挑みはしないかと心配なのだ。

「どうして、彼はそこまでするんでしょうか？」

高畑も、もっと強くなりたいとは思うが、それでも当の吸血鬼は、生きた年月、賞金、実力はエヴァンジェリンには遠く及ばないまでも強大な力を持つことには変わりない。件の吸血鬼の、メガロメセ

ンブリアでの戦闘能力の格付けは、正式なものではないので暫定的ではあるが派遣した先遣隊を全滅させた手並みからAランクとされている。

自分がアスカと同じ年頃の時に、同じ事が出来るかと問われれば否と答える自信だけはあった。それどころか、今の自分でも回復というより蘇生のレベルで傷が癒える吸血鬼の相手には苦戦するだろう。

何故、そんなことをするのかは分からないが、どう考えてもそんな年齢の子供がやることではない。

「分からんよ。だが、そこまで強くなったのには何かしらの理由があったのは間違いないじゃろうな」

学園長から見てもアスカのやり方は度を越していると思うのだ。

報告書の別の記載を見れば、地球最後の秘境と呼ばれているギアナ高地へ向ったという目撃情報もある。

情報には、暴れていた魔獣を倒したり、悪魔召喚をしようとしていた邪教集団を壊滅させたり、その邪教集団が最後に喚んだ中位悪魔を魔界に追い返したり、巨大妖魔と戦って退ける等々、政府機関、とある部族、退魔組織や教会とも小競り合いをしている。。有名どころでは二年前にアメリカで起こった死霊使い（ゴーストティマー）事件を解決している。よくたった数年でここまで騒動に関わるなと思う。

騒動に引き寄せられるのか、騒動が引き寄せられるのか、果たしてどちらだろうか。

「まあ、彼が無事じゃったことは喜ぶべきじゃろう」

学園長は長い髭を撫で付けながら、送られてきた報告書を見て呟くように言う。

「そうですね。僕もまさか戦地で会うとは思ってもいませんでしたが」

アスカが書置きと退学届けを残しての突然の失踪をしたことで、当たり前だが騒ぎになった。齢五～六歳の子供が家出したとは考え難く、誘拐が疑われたが、彼方此方で無事な姿の目撃情報や騒動の痕跡が残っているのでそれも直ぐに解消された。

直ぐに捕まると思われたが、発生から数年以上経ち、極秘裏にメルディアナの校長から依頼された高畑も動員しての捜索がなされたにも関わらず、何年経っても見つからない。手掛かりと足取りは噂や目撃情報は山程あるのに、直前になると行方を晦まされるのだ。

『家出』は偽装されたもので、実は誘拐されたのではないかという意見もあったが目撃情報や出会った人たちに話を聞くとそうでもないらしいのは彼らに取って救いだった。

一時期はそれも途絶えたが、戦地で高畑が遭遇したことで無事が確認された。

その場は逃げられるも、ごく最近に中国にいることが分かり、メルディアナ魔法学校の校長のパートナーであるドネット・マクギネスが赴き、アスカはこじ付けな理由での卒業を迎えることになった。

「アスカ君から向こうの校長経由で、予定より早く来て現地の教師

を知るために生徒として通わせて欲しいと要望が来ておるからな。そう時間も無いから準備を終わらなければならん」

「現地で実際に学ぶという姿勢は評価できますが、本当に大丈夫なんでしょうか？　日本語はそんなに簡単に覚えられるとは思えませんけど」

報告書を片付けている学園長に尋ねる高畑の疑問は最も。

日本語は、中国語・アラビア語などとともに、世界で一番習得に時間のかかる言語と言われている。

他の多くの言語と異なる点としては、まず、表記体系の複雑さが挙げられる。漢字（音読みおよび訓読みで用いられる）や平仮名、片仮名のほか、ラテン文字（ローマ字）ギリシャ文字（医学・科学用語に多用）など、常に3種類以上の文字を組み合わせて表記する言語は珍しい。

魔法を使っても日本語を覚えるのには時間が掛かるはず、と高畑は考えていた。

「なんでも中国にいた頃に日本人の知り合いがいたようでな。その人物に教えてもらったから問題ないとのことじゃ」

当然、高畑の心配は学園長もしていて向こうの校長に確認していた。

日本人の知り合いとは甲越寺秋雨のことであるが、アスカは別に日本語を習ったわけではない。前世の記憶を失っても知識はあり、日本語も少し練習して、秋雨と会話練習を重ねたことで問題なくな

った。

「ああ、そういうことなら心配はいりませんね」

教えてもらったといっても詳細は何一つアスカは話していないので、後は彼ら自身が納得できる理由を自分たちで作っていた。

二、三話した後、高畑は学園長室を辞して教師としての仕事に戻り、学園長はアスカの受け入れ準備を進める。

だが、彼らは知らない。

アスカという異物によって変わっていく世界は、正史ならネギを中心にして周った物語が歪めていくことに。今の彼らには知るよしもないことだった。

アスカが麻帆良に来ることによって運命の輪がカラカラと回りだす。

第十五話　　回りだす運命と少年（後書き）

今話では旅の間のアスカの過去が少しだけ明かされました。どうだったでしょう？

それと一部シーンに風の聖痕を場面を流用しています。

ちなみに改定前よりも麻帆良に来る時期がかなり早くなっています。欧米は年度が9月始まりなのでその大分前に魔法学校の卒業式も終わったと予測しています。なので麻帆良に着く時期は九月中旬～下旬辺りと大分早くなります。

次回の更新は、来週の日曜日午前0時に更新したいと思います。

予定より遅くなる場合は、その都度、活動報告に上げます。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

第十六話　　麻帆良と少年（前書き）

２ヶ月前に活動報告に載せたように改定前のを投稿しました。こちらは基本的に新たに新話を更新することや修正することはないと思います。

尚、勘違いしている方もいますが『（旧）双子の弟は魔法忍者』を投稿したからといって、こちらの更新が滞ることはありません。

今話は、というか暫くは改定前のを修正・加筆したものが多くなると思います。新話も何話か入れる予定です。

文字数は１７１１２字です。それでは、どうぞ！！

第十六話　麻帆良と少年

時刻はもう夕方。此方の方面に行く人は少ないのか、数えるほどしか人が乗っていない電車の中で駅への到着を告げるアナウンスが流れて閉じていた目を開く。

足の間に入れていた荷物を持って立ち上がり、タイミングよく開いたドアから電車を降りて自動改札機を通り、駅を出る。

待ち合わせ場所が駅前で、予定の時間より早く麻帆良に着いたので待つために座れる場所がないか駅前を見渡す。少し捜すと、駅を出てすぐ近くの所にベンチがあったので、そこまで歩いて荷物を置き隣に座る。

今は九月の下旬。日中でも気温はまだ蒸し暑く夕方でも上にもう一枚羽織っていると汗が止まらなくなる。アスカも空港につくまで着ていたコートを脱がなければ汗だくになっていたところだ。

「ここが、麻帆良か……」

はぁ～っと息を吐き出し、目の前に広がる麻帆良学園都市の光景に少し圧倒されて誰に聞かせるでもなく呟いた言葉がアスカの麻帆良での第一声だった。

《しかし、ここは本当に日本なのかな？　街並みが異国情緒溢れ過ぎなんだけど》

前世での記憶が残っていないのでどうだったかなどの判断はつきかねる。海外で仕入れた知識では、ここまで異国情緒溢れたもので

はなかった。流石に今だに江戸時代のような木造建築で、侍が刀を持って蔓延っているとは思っていない。

《街並みを気にしても仕方あるまい。それで誰が迎えに来るのじゃ？》

《タカミチ・T・高畑だよ。あの人、苦手なんだよね。正直、別の人が良かったな》

《ソレは同感だ。機会があったら奴を八つ裂きにしたいぐらいだ》

《いや、それは流石に不味いから。殺生石の腹下しの呪いで収めてよ》

一応、殺すのは対外的にまずいので止めるけど殺生石の呪いは承認する。高畑はアスカを通して両親を見ている。我慢はできるが敢えて近づきたくはない。

殺さなければ多少の鬱憤を晴らせるから呪い程度ならアスカも構わないし、玉藻を抑えるのはこれでも大変なのでこれぐらいは許される筈だ。やられる本人には不本意ではあるだろうが。

腕に嵌めているアナログでそこそこ値の張った時計で時間を見ると、まだ待ち合わせの時間に三十分以上はある。遅れるわけには行かないから早く出たが、その所為で予定の時間より早く来すぎてしまったようだ。

なので、時間潰しにここに来るまでに玉藻が潜入して調べた情報と考察を脳裏に思い浮かべる。

この麻帆良学園都市は、明治中期に創設され、幼等部から大学部までのあらゆる学術機関が集まってできた都市。これらの学術機関を総称して「麻帆良学園」と呼ぶ。

一帯には各学校が複数ずつ存在し、下記の都市機能を含め、大学部の研究所なども同じ敷地内にあるため、敷地面積はとても広い。年度初めには迷子が出るとのこと。

元々魔法使い達によって建設されたと考えられており現在も学園長、近衛近右衛門を始めとして多くの魔法使いが教師・生徒として在籍し、修行や学園の治安維持に従事している。

都市の警備には、魔法先生や魔法生徒と言われる者達は無報酬で警備に参加している。しかし、時に命のやり取りをするのに、修行の一環と考えるのはアスカとしてはどうかと思う。きちんと報酬を受け取って自分の装備や道具の拡充を行ったり、万が一死んだ時の為に家族の生活保障を考えるべきだろう。多分、装備その他や家族の保証も考えてはいるだろう。流石にそこまで考えていない組織だったら立ち居かなくなっているだろうし。

（まあ、あくまでこれは外様の意見だから中身がどうなってるかまでは分からないし）

更にこの学園には、十五年前に討伐された『闇の福音』エヴァンジェリン・A・K・マクダヴェルがいるという情報もある。

学園のマザーコンピュータに侵入して手に入れた特S級秘匿情報と十五年前にナギに討伐されたという情報を合わせて推測すると、十五年前に何らかの事情でエヴァンジェリンはナギによって封印されたらしい。

学園内には学園外の常識では考えられないほど極めて超常的な特殊能力や特殊技術を備えた人材・組織が氾濫しており、しばしばそれらが様々なトラブルや事件等を起こしている。

しかし、それが市民の目に触れることはあってもそのことについて深く気にする人は少ないようで、そういったニュースによる騒ぎなどはほとんど起こっていない。学園内の異常さが外部に漏れることも少ないらしく、いわば陸の孤島といった様相を呈している。

学園が侵入者に狙われる要因の一つが明治の中ごろ学園創立とともに建設された麻帆良湖に浮かぶ世界最大規模の巨大図書館だ。

二度の大戦中、戦火を避けるため世界中から様々な貴重書が集められ、古今東西の魔法書が納められており、その中には貴重な魔法書もあり侵入者がこれを狙ってくる。

図書館島にある貴重書は、アスカがここに来た目的の一つである。

そして侵入者に狙われるもう一つの要因は世界樹、正式名称『神木（しんぼく）・蟠桃（ばんとう）』だ。学園の中央に聳え立つ、樹高２７０ｍという世界に類を見ない巨木で内部に強力な魔力を秘めている世界樹。

二十二年に一度の周期でその魔力の蓄積量が最大となり、木を中心とした六箇所に強力な魔力溜まりを形成する。

この魔力溜まりが周囲に居る人の心に作用して、その願いを叶えてしまう。即物的な願いは叶えないが、こと告白に関する願いには成就率１２０％という呪い級の威力を発揮する。

世界樹伝説とは世界樹の力が発揮される日が学園祭の最終日（夏至の日）にあたるため、学園祭の最終日に世界樹の下で告白をすると必ず成功するという都市伝説。

学園内にはこのようにやけに的を射た噂が多く流れており、吸血鬼（エヴァ）騒動、図書館島の魔物（クウネルのドラゴン）などを初めとして魔法先生・魔法生徒の存在すらも「魔法少女（ンジェリン）」「魔法オヤジ」として都市伝説化している。

侵入者に狙われる最後の要因は学園長の孫であり、敵対する関西呪術協会の長の娘・近衛木乃香。その立場と極東最強の魔力の持ち主のため狙われる理由に事欠かない。

都市伝説にまでなって秘匿はどうした、と突っ込み所か満載過ぎて、どこから突っ込めばいいのか分からなくなってしまった。

《主、来たぞ》

《おっと、玉藻ありがとう》

思考に没頭してしまい、玉藻に呼ばれるまで待ち合わせの時間が近づき、高畑が来たことに気付かなかった。突っ込みどころが多すぎたのも原因の一つかもしれない。

荷物を持って立ち上がり、近づいてきた高畑に旅で学んだ処世術の一つである『愛想笑い（フレンドリーなので本当の笑みだと相手に錯覚させる）』を向ける。

「お久しぶりです。高畑さん」

「ああ、久しぶりだねアスカ君。学園長が待ってるから行こうか」

はい、と返事をして二人で連れたって歩き出す。少しの間僕らは二人で歩く。

これから向かうのは日本は関東の魔法使いたちを取り仕切る『関東魔法協会』の会長でありこの麻帆良学園都市の学園長、近衛近右衛門の元だから利用されないように気を付けないといけない。

アスカは魔法協会に入る気はないし、組織の使い勝手のいい駒になるつもりもない。

そう思って心の中で気合を入れていると前を向いて歩いていると高畑さんから視線を感じたので、考えている事を気付かれたかなとそちらを向く。

「何ですか？　僕の顔に何か付いてます？」

「……いや、何も付いてないよ。二年間で随分大きくなったと思ってね」

何もついていないのは分かっているが、もしかしたら本人が気づいていないだけかもしれないと思って顔を触りながら高畑にそう言うと、苦笑をしながら否定する。

高畑に最後に会ったのは二年前の戦場での一度限りだが、当時と比べればアスカの身長は比較にならないほどに伸びている。中国にいる間だけで背が伸びているはずの連華と比べても異常な伸びを示しているので、本人にもその自覚はある、。

「ハハ、自分でもそう思いますよ。卒業式の時に久しぶりに姿を見

た兄さんより双子なのに１０ｃｍ以上の差がありますし」

高畑がアスカに色々と聞きたいことがあるのは顔を見れば分かる。戦場で会った時は碌に話をしていないし、あの事件の後のことやら、どうして旅に出たとのか、など聞きたいことが山程あるだろう。

アスカが中国にいることがバレている時点で捜査報告書みたいなものができているのは明白であるし、自分の行方を散々追ってきたのも承知している。だからこそ、姿を偽って戦場に身を隠したわけで、中国にいた時に対策を取らなかったのは失策である。

「そういえば、ネギ君は」

「卒業式に見たきりですけど元気でしたよ。僕は元々日本に興味があり機会もあって日本語を勉強してたので楽でしたけど、兄さんは今頃日本語の勉強を頑張っている頃でしょうね」

そう言ってアスカはハハハ、と笑う。

だが、笑みのアスカとは対照的に高畑の顔が僅かに曇る。アスカがネギと話せていないことを校長からの報告書で知っているからだ。二人の仲が拗(こじ)れているのは五年前の段階で知っていた。

アスカが旅に出たことでほとんどなかった交流が完全に途絶えたことを知っているだけに、二人の関係を修復させることは容易ではないと分かっている。

アスカを見る限りでは、ネギに対して二心があるようには見えない。しかし、それが偽りのモノか、本心からかは高畑には判断できなかった。

「そう言えば、学園長室は何処なんですか？　降りる駅から見ても学園都市の奥の方まで来てますけど」

「学園長室ならこの学園都市の最奥、この女子校エリアにある女子中等部にあるよ」

これ以上、下手なことを言ってボロを出すのも不味かったので、アスカが無難な話題に変えてくれたのは有り難い。

疑問に思ったように聞いてくるアスカに答えるが、

「……何故、女子校エリアの女子中等部に学園長室があるんですか？　学園長ってロリコン趣味ですか？」

「そんなことは……ないのかな？」

答えたことに対して渋い顔をしたアスカの疑問に、「よくよく思い返してみれば女子校エリアに学園長室があるっておかしくないか？」と今さらに気づいてしまった。

少なくとも学園長がロリコン趣味ということはない。学園長の年齢は知らないが、そもそも彼から見れば世の中の女性の過半数以上はかなりの年下になる。老人にだけはロリコン趣味というのは当てはまらないのだ。

閑話休題
それはともかく。

学園長は高畑と同じ２－Ａの副担任である源しずなに対して、その並外れた巨乳に偶然を装って顔を埋める等のセクハラ行為を行っ

ている。その都度、本人から制裁されているので問題になっていない。

とはいえ、そのような前例がある以上は怪しいと言える。まさか孫と同世代の子に欲情しているとは考えたくないが……。

等と考えてしまい、思考の袋小路に嵌ってしまった高畑は沈黙した。

《本当に何で女子校エリアの女子中等部に学園長室があるんだろうね。学園長がそういう趣味を持っているのか、何か別の理由があるのか》

《流石に判断材料が少ないから分からんのう。少なくとも高畑には何かしらの心当たりがあるようじゃが》

考え込んでしまったことこそが学園長に対する疑いを深めていることは気づかない高畑を横目に、アスカは学園長への脳内評価を下げるのであった。

女子中等部の校舎に入った所でようやく自分の役割を思い出した高畑は、アスカを放って黙り込んだことを謝罪した。

「黙り込んですまない、アスカ君」

孫娘の護衛の観点から女子校エリアにあるのだろうと無理やりに

納得することにした高畑の中で、僅かに学園長への信頼が下がっていた（主にエロ関係において）。

「いえ、気にしないで下さい」

真実アスカは気にしていないので、その旨を説明し、後はアスカが旅時代の面白かったこと等を話題に出して適当に談笑しながら学園長室まで案内してもらった後、高畑はまだ仕事があるのか足早に去っていった。

「失礼します、アスカ・スプリングフィールドです」

「うむ、鍵は開いている。入りたまえ」

アスカは姿が見えなくなるまで高畑を見送った後、学園長室のノックをして、中から入室を促す声が返ってきたのでドアを開けて中に入った。中にいるのは本当にアスカと同じ人間なのか疑わしい後頭部を持っている学園長と思わしき人で、アスカは学園長と黒壇の机を挟んで立っている。

「フォッフォッフォッ、よく来たの、アスカくん」

学園長はその常人外れた眉毛に隠れた眼を、在りしの日の幻影を思い出すように細めた。

実はアスカが日本に来る前の飛行機でハイジャックにあい、テロリストを叩きのめしたことを知らない。メルディアナを立つ際から用心深く足跡を消していたので、何時到着する以外は全く知らないのだ。

「お初にお目にかかります、近衛近右衛門学園長。アスカ・スプリングフィールドです。宜しくお願いします」

正直に学園長を初めて見たときにアスカの抱いた感想は、「自分の知っている仙人よりも仙人っぽい風貌をしている」と本人が聞いたら憤慨しそうなものだった。

アスカの知っている仙人は、酒も博打も女もやる、一見、俗っぽい性格をした、世間一般が抱く仙人の理想からもっとも遠い人？だった。性格、能力――――――どうやって説明しようとも余計に混乱するような人で、剣星に説明した時は、自分で話しているのに話せば話すほどに真実から遠ざかっていくような錯覚を覚えた。説明された剣星も人相が安定せず、頭を捻っていたが。

自分以外の生物は微生物すら存在しない、絶対的な孤独の空間に死ぬまで放り込まれたとしても、その精神に罅（ひび）の一つも入るかどうか怪しい。

精神と同様にその実力も異常の一言に尽きた。

外科手術染みた精密さで身体を破壊し尽くされ、忍術を一度見ただけで同じ効果を持つ技を作り出し、魔法や忍術とはまた違った理解すら及ばない力に対する恐怖は今もこの胸の奥にある。

単純に出会った『敵』としては最強だろう。負けたことが悔しくて何度も挑んでコテンパンにされたが。五回目くらいからは半ば意地である。

アスカは誰が最強かと言われれば二人の名を上げる。それは玉藻と件の仙人だ。

玉藻にして「闘ってみなければ勝敗は分からない」と言わせ、「闘えば間違いなくどちらかが死ぬ」とまで言わせた人たるを捨て、人を超えんと志す化け物だ。

中国を去る前に仙骨（素質）があるからと仙人になるか、と誘われたが断った。アスカは仙人になるつもりは初めからない。が、それは向こうも承知だったようで、こちらが正気抜けするほど簡単に引いてくれた。

流石に思考が取り留めのないところにまで外れていることに気づき、思考を元に戻し、この麻帆良学園都市を纏め上げており、各学園の学園長を務めている近衛近右衛門に向かって挨拶して一礼する。

最初、アスカの視線が学園長の頭に行ったがそれ以降は表向き普通に接している。だが、心の中では玉藻と本当に学園長が人間か論議していた。

《ぬらりひょん？　いや、それとも仙人か？　あの後頭部の長さは人間ではありえないと思うが》

《確かにあの後頭部の長さはとても人間とは思えんな。妖怪とか仙人と呼ばれたほうがまだ信じれるのう》

学園長の後頭部のありえない長さを見て、玉藻と念話で議論しているがソレを表には出さないまま会話を続ける。本当の仙人を知っているだけに妖怪という線も十分にあり得る。

「修行のために日本で教師など、また大変な課題を貰ったようじゃのぉ。しかも教師の勉強の為に生徒として通いたいとは天晴れな心

意気じゃ」

「いえ、日本語の勉強は早い段階で終わりましたので、現地で生徒の立場で授業を受けるのが教師をするのに何よりも良いと考えただけですので」

メルディアナの校長から教師ではなく、生徒として通うのは無理だと聞いているので駄々を捏ねたりはしない。流石にこちらの無理を短期間で通してもらったのだから譲歩はしなければならない。

アスカがそう言うと、感心したのか学園長は笑みを浮かべて頷く。

「それは結構。君が編入するのは来年に副担任になる予定のクラスじゃ。ちなみに君が担当する教科は数学で構わんかの？」

「はい。私は問題ありませんが、実習生が教科を持ったり副担任をするのは無理があるのでは？」

教育実習とは、教員免許状の授与を受けるために修得する科目のこと、または、その科目の内容として各学校で行われる実習のことである。実習期間は大体、2週間から4週間程度と短いため役職や教科を持つのは望ましくない。

「そこはそれ、ワシが何とかするから気にせんでええわい」

真っ当な疑問に学園長は詳しく答えることはせず、言葉を濁したことでアスカには大体の事情が察せた。要するに権力などの裏技を使うと言っているようなものだ。

そういう手法を取ること自体はアスカも非難したりはしない。旅

をしている時にそれで苦労したこともあるし、自分が使ったこともある。なのに、何故それが気に食わないかと言えば、

（真面目に教師になりたいと思っている人が聞けば何と言うか）

言い訳するつもりはないが、アスカがそういう手段を取ったのは何れ（いず）も非常手段や他に方法がなかったからで、好き好んで使ったことはない。今のように必要もないのに使うのは、まるで教師を目指す人を馬鹿にしたような行為を前に申し訳ない気持ちになってしまい、学園長の好意を素直に受け取る気にはなれない。

「希望通り図書館島の本の閲覧にはパスが必要になる。数日後に許可書を渡すからそれまで待ってもらうことになる。それと住む場所についてはもう直ぐ同居人が来るので「コンコン」ほれ、来たぞい」

アスカの懊悩を知らずに学園長は一人話を進める。普段なら気づくのに、もしかしたらあの人の面影を感じさせるアスカを前に気持ちが昂ぶっていたのかもしれない。

「「失礼します」」

ノックをして扉を開けたのは制服を着た中学生ぐらいの二人の少女だった。

一人は赤毛でツインテール、鈴をその根元に付けており、よく見ると瞳の色が左右で違うオッドアイと珍しい。もしかしたらその容姿も相まって帰国子女か何かとアスカに思わせた。

もう一人は昔話のお姫様みたいな長い黒髪で、まるで墨を流したような艶やかな黒髪は腰まで届く超ストレートロング。抜けるよう

な色白の肌に、黒目がちでやや垂れ目な目。日本人形を思わせる柔和な美貌の持ち主であり、おっとりとした大和撫子みたいな雰囲気をしている。

「おおよく来たのぉ、二人とも」

二人とも学園長室にいるアスカを見て、不審そうに頭を傾けている。学園長室に呼び出されて、知らない人間がいたら不審に思うのも仕方が無い。

何か自分たちに用事があるのなら知らない他人がいるのはおかしい。

「初めまして、二月からこの学校で教師をやることになりましたアスカ・スプリングフィールドです。2月までは勉強の為にこちらに生徒として通わせて頂くことになっていますので、どうか宜しくお願いします」

何事も第一印象が大事なので二人に向き直って、挨拶と自己紹介と簡単な事情を説明して一礼したアスカだが、学園長が言った『同居人』というキーワードで現われた少女たちを前に混乱していた。

《はぁ？！　同居人が女性二人って何事さ！？》

《落ち着け、主よ。口調が何かおかしいことになっておるぞ》

表面上は何の卒もなく、それどころか優雅とも取れる所作とは裏腹に内面では混乱のあまりに暴走し、玉藻から諌められていた。

「ええ――――――――――――っ！？」

「アスカ君やね。うちは近衛木乃香や。よろしくな」

「はい、近衛さんですね、宜しくお願いします（何でここで極東一の魔力の持ち主が出て来るんだよ！！）」

ツインテールの少女が一人驚いている中、大和撫子みたいな雰囲気の少女――――近衛木乃香……その名前から持っている情報にある極東最高の魔力の持ち主にして関西、関東両方の長の血縁であることが分かり、内面での混乱はピークに達していた。

が、内面とは別に表情は笑顔で挨拶をされたので、返すように笑顔で挨拶していた。

とはいえ、今まで激動の人生を送ってきたアスカの対応能力は半端ではない。数秒もすれば落ち着き、現状を把握するようになっていた。

近衛木乃香。関東魔術教会の会長を祖父、関西呪術協会の長、近衛詠春を父に持ち、極東最強の魔力の持ち主でその容量はナギ・スプリングフィールドをも凌ぐほどである。しかし、裏の事は何も知らないため、現状ではただの魔力タンク。生家は京都だが麻帆良学園には父の意向で初等部のころに転校して来た模様。

近右衛門の孫とあったため、いったいどんな怪奇な頭の子が出るかと心配していたが。予想外に（失礼に当たるが思ってしまった）普通の子だったので安心していた。長いさらさらした黒髪の、ニコニコと愛嬌のあるいい笑顔の少女を見て悪い印象を受ける人は居ないだろう。

《ダダ漏れの魔力を見れば親は何も教えておらんのじゃろうな。しかし、これだけの魔力。裏のことを何も知らせず、何かあったときはどうするんじゃろうか》

こうして近くにいるだけでも過敏なアスカの感覚には、木乃香から溢れ出る魔力を感じていた。

《確かに。せめて、最低限自分の身を守るぐらいの術は教えるべきだと思うけどね》

《全くじゃ、恐らく裏に関わらせたくないと考えたのかもしれんが、血筋やその能力で結局は狙われるのが分からんのかのう》

旅の間に力や血筋が原因で何度となくアスカが命を狙われたこともあって、尚更に玉藻の意見は厳しい。

《まあ、いいんじゃない。そこまで関わらなければいいんだし》

《そうじゃのう。じゃが、主よ気をつけるのじゃぞ。お主は自分で思っているより遥かに、遥～～～～かに甘いんじゃからのう》

《あはは、肝に免じておくよ》

木乃香の情報を玉藻と交わして、今後はできるだけ彼女に必要以上に関わらない方針で行くことに決定したアスカだが、玉藻は多分関わることになるのだろうなと諦観を抱いていた。

こと、トラブルに巻き込まれるというのと女性に関してアスカの言は信用に置けないことは今までの経験から分かりきっている。どうせ何かあったら関わるのだろうと、この時点で諦めにも似た思い

を持っていた。

《しかし、似てない祖父と孫じゃな》

《これも遺伝子の神秘という奴なのかな？》

二人の共通の認識として、学園長と木乃香は祖父と孫なのに全く似ていない。いや、この場合は祖父に似ていない木乃香の勝利した遺伝子を褒めるべきか。

年頃の女の子が学園長のように後頭部が尖ったら自殺するかもしれない。そう考えれば似ていないのは彼女にとって天啓なのだろう。

「こんな子供が先生ってどういうことですか！　正気ですか！？」

「まあまあ、明日菜ちゃんや悪いが、この子を君達の部屋に泊めてくれんかのぉ」

学園長はツインテールの子――――――明日菜という名前らしい――明日菜の怒声に動じることなく、ひょうひょうとした態度で彼女を宥めて、二人にいきなりそんなことを言い出した。

「そうですか、彼女達に頼むということは僕は女性と住むのですか」とアスカは、仮にも自分は子供でも男なんだから女性と同じ部屋は道徳的に良くないと思うと同じように学園長に詰め寄る。

「いきなり呼び出されたと思ったら何ですかソレは！」

「そうやで、どういうことなんお爺ちゃん？」

常識的に彼女たちの言こそが正しい。アスカは同年代より成長しているといっても、子供が教師とか労働基準法に真っ向から喧嘩売っているようにしか見えない。

というか、そもそもアスカは教員免許を持っていないどころか碌に学校に通った経験すらない。

世の中の教師に憧れる人がこれを知ったら殺されそうなので、もし、教師をやることになっても知られないように気をつけないといけない。もし、知られても全て学園長の所為にして逃れなければ、と姦計を働かせていた。

「あいにく空き部屋がなくてのう、流石に子供を一人で暮らさせるわけにもいかんし。頼まれてくれんか？」

事前に連絡があったからと言っても、本来来る時期よりも半年も早く来たわけだから住居の準備ができてなくても仕方がない。それどころか一ヶ月に満たない期間で最低限の受け入れ態勢を作っただけでも凄いことだ。

「いえ、住居が決まるまでどこかのホテルに泊まりますからいいですよ」

アスカは住居が決まるまで別の場所に住むつもりだったのだが、

「うちは別にええよ。明日菜は？」

「う～ん。まあ、ガキは嫌いだけど礼儀正しいし、流石にこんな子供に一人暮らしさせるわけにはいかないから仕方ないか……あたしは神楽坂明日菜よ。まっよろしくね」

最初に木乃香があっさりと認めた。続けて明日菜が自分が嫌いな子供のタイプではないアスカを認め、流石に暮らすところがなく、子供を一人暮らしさせるほどの非情ではなく、改めて自己紹介した。

「そういうわけじゃ、アスカ君」

二人の反応を見た学園長は逃げ場を失くすようにアスカに告げる。

「いやいや！　この国の諺には『男女七歳にして、同衾せず』というのがあるじゃないですか！！　っていうか学園長、あんた止めましょうよ！　ってあなたが発案者だった！！」

同居人たる少女たちが同居を認めてしまったがために逃げ場を失くしたアスカは、説得しようとするも当の学園長が発案者であることを思い出して頭を抱えだした。

そしてそんなアスカの反応を見た三人は、

（（（やば、反応面白すぎ））））

異口同音に、アスカが一人でボケて突っ込むその打てば響くような反応の面白さに内心笑いを隠せていなかった。

「……ちょっと、失礼」

流石に自分が動揺しすぎていることに気づき、遅まきながら少し失礼して三人から視線を外し、深呼吸して荒れた呼吸と動揺を収める。

かなり動揺する出来事が連続して起こったために失態を晒したが、熱した分だけ冷めるのもまた速い。

「それではよろしくお願いします。近衛さん、神楽坂さん今日から暫くお世話になります」

同居人たる二人が認めてしまった以上は、自分だけが断るわけにはいかない。何かしらの対処を早急に考えなければいけないにしても、認めてくれた二人にお礼を言う。

この都市の地理にも疎く、もう夕方ということもあってホテルを見つけられるかどうか怪しい。別に野宿でも構わないが、それがバレた時の周りの反応が面倒くさい。

ここで認めることのメリットとデメリットが頭の中で鬩ぎ合い、結果、明日にはなんとかするつもりで今日だけ同居することを認めることにした。

「フォッフォッフォ、上手く纏まったようじゃの。ところでアスカ君には彼女はおるかの？　どーじゃな?うちの孫娘なぞ?」

「ややわ。じいちゃん。」

何時の間にか学園長の背後に回りこんでいた木乃香がガスッっとどこからか出した金槌で学園長に突っ込みを入れる。頭からダクダク血を流しているにもかかわらず、心配する素振りも見せない明日菜を見て、どうやら何時ものことみたいだと、中国にいた時の剣星と奥方みたいな、一種のじゃれ合いかと納得した。

でも、人を金槌で殴ることが何時もの事だとは思いたくないなぁ、

と思い、ちょっとかつてあった常識を取り戻したくなったアスカだった。

「そうですね。近衛さんみたい人なら喜んで、と言いたいですが、まだまだ僕には早いですよ。それに彼女のような器量良しなら僕よりずっと良い人が見つかりますよ」

木乃香の人柄は、この短い時間だけでもいい人だと分かるが、如何せんその血筋と裏の世界を知らないことがアスカにとってはネックになる。唯でさえ自分の事だけで精一杯なのに、人の面倒事まで背負う余裕はないので年齢を理由にして逃げる。

この後は学園長から半年近くお世話になる制服を貰ったり、学園生活での注意を聞いて三人で学園長室を辞して学生寮に向かった。

学生寮に向かう道で、二人と談笑しながらアスカは何者かに尾けられていることに気がついた。その視線には、明日菜には特に何の感情もなく、木乃香には親愛が、アスカには敵意が向けられていた。

視線に含まれた感情から木乃香の護衛か知り合いだと当たりをつけたアスカの判断は正しい。三人を尾行しているのは木乃香の護衛、桜咲刹那である。

彼女は烏族の中でも霊格高く、強大な力を持つ故にタブーとされている「白烏」として生まれた為、里を離れる事になったがそこを近衛詠春様に拾われ、京都神鳴流剣士として育った。

木乃香とは幼馴染だが、ある事件から疎遠になり、剣の修業等に明け暮れたためその内に会えなくなった。木乃香の父詠春の頼みと自身の希望により、護衛の為に今から2年前に麻帆良学園女子中等部1－Aに入学した。

再会はしたものの、烏族（化け物）という事を知られて嫌われるのを恐れた為、口も聞かず距離を取って影から見守るという形を取っていた。

アスカのことについては事前に学園長から話は聞いている。自分たちのクラスに学生として編入されることも2月から教師として赴任することも聞いた。

だが、与えられた情報（学園長は魔法学校卒業とだけで旅をしていたこと等は全く言っていない）聞いた話とアスカの実力が合致しない。歩き方、姿勢は何らかの武術を覚えているのは間違いないが、そんな話は聞いていない。

少なくとも学園長が許可しているのだから木乃香を狙う襲撃者ではないのは分かっていたが、何故と同じ部屋に生活させる必要があるのかと疑問に思っていた。そこまで信用おける人物なのか、と彼女らから付かず離れずの距離を保ちそんなことを考えていた。

「一緒に暮らす以上は、お二人にお話しなければならないことがあります」

件のアスカが二人の前を遮るように立ち、そう言っていたため、間に二人がいては攻撃のための動きを起こすことが出来なかった。それでも二人に何かしようとしたら直ぐに対処できるように足裏に

気を溜めて、何時でも【瞬動術】を行えるように準備をしておく。

「二人とも僕が顔を隠しているのには気づいていますよね？」

「ええ、髪の毛だけなら分からなかったかもしれないけどサングラスまでかけてたらね」

「なんかあるかと思ったら聞かんかったんよ」

それは刹那も遠目ながらも気になっていたことだ。前髪で目元を隠すのは、同じクラスの宮崎のどかのように対人恐怖症の気があるのかとも思ったが、現段階においてアスカは人当たりも良いように見えるので当て嵌まらない。

ならば、何か？

そうしなければならない事情がある、ということなのか。刹那の思考はグルグルと回る。彼女は先程の感じた威圧に混乱していた。

「まあ、つまり――――こういうことです」

あまり気の進まない表情をしながらも、アスカは右手でサングラスを外し、残った左手で垂れる前髪をかき上げる。

「「ひっ？！」」

露にされたそこにあったのは目元を中心に広がる火傷の跡、あまりにも生々しい傷跡に耐性のない少女たちは顔を青褪めて思わず悲鳴を上げ、遠目から見ていた刹那もまた思わず上げかけた悲鳴を、手で押さえて飲み込まれなければならなかった。

「昔にちょっと下手をこきましてこんなことになったわけです。こういうことになるので極力見せない方がいいと考えてサングラスをつけています」

説明しながらサングラスをつけ、かき上げていた左手を離して前髪を下ろす。

「見苦しいものを見せてしまって、すみませんでした。これを踏まえて聞きます。これでも僕と住めますか？」

深く頭を下げ、謝りながら聞くアスカは無表情だった。それが努めて無表情にしているのか、単に本人が何も感じていないかは刹那にも、明日菜や木乃香にも分からなかった。

それはズルい問いだろう。人は異端を嫌う。赤の他人、初対面で、障害や病気を持つ者とは一緒に暮らせるという奇特な人間は少ない。まるで断られることを前提としているような問いだった。

真実、アスカは二人と一緒に住むことを了承しているものの、可能なら断りという意思が見えた。

だが、その試すような思いは彼女たちにとっては詰まらないものに過ぎない。

「フン！」

「アイタッ」

ツカツカと歩み寄った明日菜がアスカの脳天に拳骨を落とす。何

の防御もしていなかったので大人しく受けると思ったより痛かった。

「そりゃ、ちょっとは驚いたけどさ、そんぐらいで反故にするようなことしないわよ」

「そうやで、うちらを見縊らんといてや」

怒ったように腰に手を当てて指差してくる明日菜、木乃香も心外だと言わんばかりに「メッ」とでも言わんばかりに可愛く睨んでいる。

刹那も最初はアスカにあった敵愾心が驚くほどに消えていくの感じた。

冷静になってみれば自分が敵意を漏らした自覚もあり、学園長が保証している人物を刹那が疑っても仕方がない。それも木乃香の父詠春の戦友の息子となれば、木乃香を守る助けになることはあれど、敵に回ることなどないだろう。

「すみません、試すような真似をして」

「ええよ。多分、一緒に暮らす以上は何時か知ったことやしね」

「こういうことは早い段階で教えてもらった方が気楽でいいわよ」

アスカが深く謝罪し、木乃香たちも特に責めるようなことはなく、三人で女子寮へと並んで向かった。刹那も先程まであった敵意を薄れ、元の職務である護衛の役割をこなす。

《ふむ、願った通りの結末にはならなかったけど上々といったとこ

ろかな》

《悪(あく)どいな、主は。そもそも主の目元には傷などないのに》

そう、本来ならアスカの目元には火傷の跡などない。これは、――アーティファクトによる擬態である。

ことは、五年前、神父が存命中でまだ旅に出る前の出来事。

山中で何時もの修行中に罠に掛かっていたオコジョ妖精を助けた（ちなみに原作でネギの使い魔であるアルベール・カモミールではない）

助けてもらったのでお礼をしたいと言われたので、どうせならばと玉藻とお互い主従で仮契約した。契約の方法は異性間ので定番のキスだ。ファーストキスだったのに、玉藻にソフトの方でなくディープな方をされてしまった。余りに玉藻のテクニックが凄くて腰が抜けてしまい、介抱されたのは恥ずかしい記憶だ。

それと一応、使うかもしれないのでその契約の仕方と血液交換でもできる仮契約の仕方を教えてもらった。他の誰かとする気はないけど、緊急の手段として仮契約をするかもしれないから一応念の為だ。

そして出てきたアーティファクトは、アスカが【偽りの仮面】、玉藻が【殺生石】だ。

【殺生石】は、敵対者に対して呪いをかける呪具。呪いの強弱は腹下しから重度の呪いまで術者の力と意思によって変わるが、殺すことはできない。

玉藻は【殺生石】を使いこれ幸いと、授業中とかアスカに陰口を叩いた人間相手に腹下し呪いをお見舞いしていた（黙認していたアスカも同罪だが）。

アスカの【偽りの仮面】は、能力の強力さから「マスターピース」と称される程のアーティファクトとは対極の位置にある最低ランクのアーティファクトである。

仮面といっても、露店で売っているようなキャラクターがついているようなものではなく、息をする穴もない顔を覆うだけの仮面だ。

このアーティファクトの使い方は顔につけるだけ。そして装着すると顔に同化して、顔にある傷などを術者の希望通りに消せるだけの能力しかない。後、術者がアーティファクトを解除しない限り、効果は半永久的に永続する。

仮面をつけているとも感じさせない付け心地と、本物としか感じられない触感は確かに凄いが、仮面をつけても別人になれるわけではなく、隠したいと思う傷がなければ使い道のないアーティファクトである。が、逆に傷をつけることもできると分かったアスカには、まるで天から授かったかのようなアーティファクトだった。

彼女たちが見た火傷の跡は、アーティファクトでつけた偽物の傷だ。

《幾ら理由があるといっても罪悪感はあるけどね》

理由があり仕方のない事とはいえ、怖がらせたことに罪悪感を覚えたが、これでわざわざ見ようと考えることはなくなるだろう。そ

れに後を尾けている人間の敵意も驚くほどに小さくなった。

思わず向こうの敵意に反応して殺気を出してしまったが、今までのやり取りでアスカを敵だと認識しにくくなったようだ。それを狙って今、この場所でやったわけだが思ったよりの効果が出た。

（まあ、こんな策略をしている時点で人としてどうかと思うけど）

自身が悪どい自覚はあるし、願わくば嫌われてくれれば自分で寝場所を探すことも出来た。結局、彼女たちの意思が強かったので、その結果は得られなかったが悪い気はしない（逆に罪悪感が半端ないが）

その後、着いた学生寮はやっぱり女子寮で、その事を知っていて言わなかった学園長に殺意を覚えたアスカは決して悪くは無い。

（オノレ！　学園長、謀ったな！！）

寮の中に入ったが誰にも会う事なく部屋まで行くことが出来たのは幸運と言える。女子寮に入って部屋につくまでの間に途中で尾けている気配は別の場所に向かった。どうやら寮生らしい。

「それでは、学園長お願いします」

『うむ、分かった。伝えておこう』

そして部屋に入り荷物を置いて、不法侵入とかで通報されたくないのでアスカは直ぐに学園長に電話して、寮の人達に通達してくれるように頼んだ。

電話を終えると木乃香が料理を作っていたのでアスカも手伝いを申し出た。自慢ではないがヨーロッパを旅にしていた時、食いっぱくぐれないようにレストランでアルバイトしたこともあって料理は得意である。

ドンッと目の前に置かれた料理を見て、明日菜は僅かに眉を顰めた。ラーメンのドンブリにも使えそうな大きな深皿に、スパゲティが山盛りになっていたからである。

「木乃香……一人じゃ、こんなにも食べられないわよ」

「ああ、それは小皿に取ればいいですよ。流石に一人じゃこんなに食べられませんからね」

アスカはそう言いながら、木乃香と一緒に運んできた料理の更を食卓に並べていく。スパゲッティ、シーフードサラダ、一見何の変哲も無いオムレツというメニューである。

「これって木乃香が作ったの？」

年齢的にアスカが作れるはずが無いので消去法で木乃香しか残っていないのだが、答えたのはアスカなので「はて？」と疑問を感じた。レストランに出てきそうな本場の料理を今まで作ったのを見たことがないためである。

「うちが作ったんとちゃうよ。手伝いはしたけど、アスカ君がほとんど一人でやったんや」

「はぁっ！？　アスカがこれを！」

見ていた自分でも信じられないような慣れた手つきで、数えで十歳だという少年が本場のイタリアン料理を作るを見ていたので、木乃香には明日菜の驚きが良く分かる。

「イタリアンと中華は本場で勉強しましたからね。得意なのは中華ですけど、無難なところでイタリアンにしてみました」

流石に店で出せるレベルではないが、教えてくれる人の腕が良かったこともあって中々の腕だと自負しているアスカだった。

「そういうことを言ってる訳じゃないんだけど……」

返って来た微妙に的外れなアスカの言葉に、明日菜は肩透かしを食らったような気分になり、追求する気も失せた。

「「「いただきます」」」

すべての料理を食卓に並べ、席について行儀よく礼を済ませ、一同は夕食に取り掛かった。

オムレツはアスカが自ら取り分け、特製のトマトソースをサービスした。鞄の中から取り出した瓶に二人が驚いたのは当然として、オムレツを口にした木乃香が目を輝かせる。

「ん！？　このオムレツ、ただの卵焼きやと思ってたら……凄く美味しい！　知らない味がするけど、何を入れたん？」

「バジリコ風味のオムレツです。それよりソースはどうです？　ちょっとだけタバスコを効かしてみたんですけど」

そういえばと寮に帰るときによった帰りのスーパーで、アスカが見慣れないものを買っていたことを思い出し、何に使うんだろうと疑問に思っていたので納得した。

「うちには丁度ええ感じや。市販のケチャップみたいに変に甘くなくて、オムレツによく合うわ。なぁ、明日菜？」

「え？　まあ、そうね……美味しいわよ。確かに」

同意しながらも、明日菜の表情には何か釈然としないものがあった。自分よりも年下の子供がここまでの料理を作れるのもそうだし、普通なら親元にいるはずなのに一人で教師になりにきたなど、常識的な感性を持つ明日菜には納得できない部分が多い。

それと、異性の年下の子供に料理という時代錯誤であっても女として負けた気分になってしまう。ことに料理、というより家事全般を木乃香に依存している明日菜としては女としてのプライドがズタズタである。

食事後、せめてものプライドで食器を洗う役目を引き受けた明日菜の姿があったとさ。

その後、二人の部屋に居候する上で食費とスペースの問題があり、三人は話し合いを始めた。

木乃香曰く食費は一人分増えても問題ないが、アスカとしては旅時代に食費と言うのが意外と痛いというものを知っているので、強硬にいくらかのお金を食事を管理している木乃香に渡すことで解決した。

お金はあるから別にいいのにと木乃香は言ってくれるが、アスカとしては女の子に養われるのは男の沽券に関わる。中国にいた頃にも無理を言ってお金を渡していた身である。唯でさえ居候させてもらい迷惑を掛けているのにこれ以上の負担を掛けるわけにはいかない。

アスカが使うスペースは元々持って来た荷物や数枚の着替えと多少の生活必需品のため、持ち物は少ないので端っこにでも置いておけばいいが、そもそも二人の部屋なのだから替えの布団などなく、どうしても寝る場所に困った。

アスカの寝る時間は世間一般から見ても、大分早く２１：００には何時も布団に入っている。五年前の事件で普通に寝れないのと、２２時～４時の間ぐらいに体が成長すると聞いたのでどうせならと早く床に就くようにしているのだ。

幸いにも明日菜が朝刊を配るアルバイトをしているので他の部屋よりも早く休むようだ。

順番に備え付けの風呂に入って髪を乾かすと直に寝る時間になり、アスカは布団がないのでソファーで寝るつもりだったのだが、それを言うと木乃香がそれを許してくれなくて、

「今日はウチと一緒に寝てええから、明日はお布団を買わないと駄目やなぁ」

「い、いえ、そこまでしてもらわなくても大丈夫ですから」

「いいから、いいから」

と、少なくとも一緒に寝てもらうほど親しいわけではないので、反論したが暖簾に腕押しで結局、

「それだけは勘弁してください」

世にも珍しい欧米人による綺麗な土下座が彼女たちの部屋で見られたという。

こうしてアスカの、麻帆良での初日は幕を閉じた。

第十六話　　麻帆良と少年（後書き）

主人公のアーティファクトの登場です。

本編の通り、【偽りの仮面】は普通なら全く役に立たないものです。戦闘や何かの役に立つわけではなく、顔の傷を隠すかつけるだけで変装にも使えないものです。凄いのは発動している限り半永久的に効果が永続するぐらいでしょうか？

主人公と玉藻のパクティオーカードの数字、徳性、方位とか誰かつけてくれませんかね。ぶっちゃけ考えるのが面どう……ゲフンゲフンなんて思ってませんからね？

最近の筆者の悩み（新コーナー）

「夜中や朝起きると背中や脇腹が痛いんですよ。なんか寝返りを打ってないみたいに身体が硬くて、どなたか解決策を下さい」

次回の更新は、来週の日曜日午前０時に更新したいと思います。

予定より遅くなる場合は、その都度、活動報告に上げます。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

第十七話　　少女たちと少年（前書き）

今話から前書きと後書きは纏めて活動報告に載せたいと思います。

なので、今回からはなくなります。

文字数は１８１０２字です。

第十七話　　少女たちと少年

夜が明け、時刻はまだ早朝の時間帯に、アスカは上から微かに聞こえる目覚しの音で眼を覚ました。

目覚めて最初に感じたのは違和感と僅かな体の痛み。

違和感は、今いる所が住み慣れた場所ではないことから生まれている。この感覚は旅を続けたことで慣れたものではあるが、寝起きの一瞬だけ自分がいる場所が分からなくなる錯覚を覚えた。

体の痛みは、柔らかい布団ではなくソファーで寝たためにできたものだ。この部屋の住人である神楽坂明日菜と近衛木乃香は、アスカが来ることを知らなかったので当然寝る場所と布団がない。木乃香に一緒に寝てもいいと提案されたが、これをアスカは外国人なのに見事な土下座を披露するとは誰が考えただろうか。まあ、お陰でソファーで寝る権利を獲得できたアスカであった。

《おはよう、玉藻》

《うむ、おはようじゃ主》

元々、【狸寝入りの術】で寝ているので一瞬で意識が覚醒し、同じタイミングで目覚めた玉藻に何時ものように朝の挨拶をしてから寝ているときもサングラスを外していない眼で部屋の中を見る。

明かりの点いていない部屋に上で人が動く気配を感じて、ベットの梯子を見ると人影が二段ベットの上段から下りてきた。普通の人が起きるには些か早すぎる時間なので、その人影に話しかけた。

「あれ神楽坂さん、どうしたんですか？」

「ん、ゴメンね。起こしちゃった？　これからバイトがあるのよ」

アスカの問いに対して、明日菜は自分が立てた物音で起こしてしまったと考えてと謝罪し、まだ早い時間に起きた理由を言った。まだ木乃香が寝ているので二人は小声で話していた。

「あ～昨日そう言ってましたね。なら、僕が朝ごはん作りますよ」

元々二度寝することはないし、どうせ起きてしまったからと明日菜の朝食を作ることにした。

二段ベッドの下段では木乃香がまだ寝ているので、起こさないように物音を立てず（普段から物音を立てないが徹底して）歩いて部屋の電気を点ける。

「いいわよ。あんたは子供なんだから、まだ寝てなさい」

明日菜はアスカを起こしてしまったと思っているのでそう言うが、アスカは日本に来てから一日ホテルで休んで時差ボケもしていないし、普段からトレーニングのためにこれぐらいの時間にはもう起きている。

「何時もこの時間ぐらいには起きてますから大丈夫ですよ。で、何食べたいですか？」

「ん～悪いわね、じゃあ目玉焼きで」

アスカは慣れてるからと笑って言っているが、ハッキリ言ってアスカの言を信じたわけではない明日菜はばつが悪そうにリクエストする。

「はい。それじゃあ、ちょっと待っててくださいね」

そう言ってアスカは、棚か明日菜の皿（昨日の内に木乃香からどこに何があるか教わった）と茶碗を取り出して部屋に備え付けられている冷蔵庫から卵ときゅうりを取り出してキッチンに持って行った。

フライパンを取り出してコンロに乗せて火を点ける。フライパンが温まってきたら油を引いて卵を割って落す。

慣れた手付きでアスカが料理を作っている間、明日菜は洗面所で洗顔とかを済ませて着替えている。当たり前のことだがアスカは明日菜の着替えを見ていない。紳士を自称するつもりはなくとも女性の着替えは見ないマナーは身に着けている。

フライパンに蓋をして目玉焼きが出来上がるまでの間にまな板を置いて、包丁できゅうりを切ってサラダを作る。出来上がった目玉焼きと切ったきゅうりを皿に盛り付けて、昨夜の内にタイマーをしておいた炊飯器から茶碗に御飯をよそい食卓に並べる。

「へ～、昨日は作るとこ見てなかったけど慣れたものよね」

途中から着替えも終わり、食欲が刺激される匂いを前に、座って出来上がる行程を見ていた明日菜が皿を並べ終えて、準備が終わったアスカに問いかけた。

「親がいないから小さい頃に親代わりの人たちに料理を習ったりしたんで料理を作ることには慣れてるんですよ」

最初に料理を習ったのは神父である。

玉藻は料理に関しては豪快で、切る、焼くしかしないために基礎は神父から習っている。その後はアルバイトで勤めた料理店で学び、中国にいた時に剣星から中国料理も教えてもらった。

何れも教えてくれた人たちの腕には遠く及ばないものの、世間一般的には十分な領域に達している。

ちなみに玉藻は料理をほとんど作れない。全く作れないのではなく、ほとんどである。旅時代が長かった所為か切る、焼く、煮るで済ましてしまうからである。

「……ゴメン。聞いちゃいけないことだったかな」

「いえ、そんなこと無いですよ。育ててくれる人はいましたから。ほら、早く食べないと時間がなくなりますよ？」

聞いては不味いことを聞いてしまったと思った明日菜は謝まるが、アスカにとっては別に気にしていないのでこのままでは時間がなくなると早く食べるように促す。

「そう言えば、あんたは食べないの？」

「僕は近衛さんが起きてきてから一緒に食べますから気にせずに食べてください」

そう言うとようやく朝食を食べ始めた明日菜横目に、持ってきたバックから黒のトレーニングウェアを取り出して洗面所に持って行きそれに着替える。

トレーニングウェアに着替えて戻ってくると、明日菜はもう朝食を食べ終えており流しに皿を置いたところだった。

「あれ、何処か行くの？」

「ええ、いつも日課にしているランニングに」

へ～と感心している明日菜と一緒にタオルを持って部屋を出て、寮の前で別れてからタオルを首に掛けて最初はゆっくりと走り、徐々にペースを上げていく。

まだ静まり返っている麻帆良の異国情緒溢れる学園都市内を、地理を把握するためにも走りながら周りを見て店や道を覚える。

「はっ……はっ……はっ……」

女子寮から六十分間も一般人レベルのスピードで走っていると徐々に額に汗が浮かび、息が乱れてくる。即乾のシャツでなければ、既に悲惨なことになっていただろう。普段なら六十分走った程度で疲れるほど軟い鍛え方をしていない。玉藻特性の根性ベルトをしているので、かなりの負担が掛かっているのだ。

大切なのは、まずは『正中線』であり、真っ直ぐ立つこと。それから身体のどこにも力みが無いこと。力むとバランスが崩れるし、体力を無駄に消費してしまう。

そして武術の運足は『地面を蹴らない』。身体の重心が先に移動して、そこに足がついていくように自然に足を運んでいけば軽快に走れる。

マラソン選手は速い選手ほど軽快に走っているように見えるが、あれは速いから軽快に見えるのではなく、軽快に走っているから速いのだ。

走る時に大切なのは姿勢とリズムである。

前屈みにならずに上半身は真っ直ぐ立てて、肩や腕に力を入れずリラックスすることを心掛け、足は身体の真下に着地させ、弾むように地面からの反発力を受け取って進み、頭の頂上を糸で吊り下げられているイメージを持つことが大切である。

前に傾いた方が速く走れそうなイメージがあるが、その姿勢を保とうとすると身体の前面や手足が縮こまってしまう。一定のスピードを保つ時は上体を真っ直ぐ立てた方が手足をリラックスして大きく動かせるのだ。

走るという運動は、脚というより身体全体を使って行う運動なのだ。脚から下の筋肉よりも胴体と脚を繋ぐ大腰筋などの筋肉を使えると、より効率よく走れる。

「はっ……はっ……はっ……」

もっと早く到着したい、もっと全力で走って行きたい。そんな気持ちを抑えながら、オーバーペースにならないように気をつけて一定の速度で走り続ける。急いた気持ちに押されて走れば、最後にはバテるのをよく知っている。そうなれば、結果的に遅くなる。

呼吸に気をつけて、走る。粘つく唾を一度飲み込み、ただひたすらにアスカは走る。

気持ちが早く行け、速く走れと急かしてくる。もっと前へ。もっと速く。

ペース配分をしっかり意識しているはずなのに、アスカのペースは徐々に速くなっていく。急かす気持ちを、押さえられなくなっている。胸の奥の感情が重くなればなる程に、足が軽くなっていく。前を見る。心が赴くままに地面を蹴って、ひたすらに走る。

《何人かに視られておるのう》

《そうだね》

アスカの今までの行動が行動なので突然いなくなる可能性が高いから監視の意味もあるのだろう。これでは例え結界を張って鍛錬しても魔法使い関係者に覗かれる可能性があるので、別荘以外では録に鍛錬もできない。

その別荘にしても同居人がいるから大っぴらに使えないのでこうやって走っている。現状では力を見せることはマイナスしかない。アスカは決して自分を過大評価しない。故に臆病なほどに自身の持ち得るカードを隠そうとする。自分の持ち味が隠されたカードの中にあると考えているからだ。

それからもう六十分程走り、汗をタオルで拭って息を整えてから女子寮に戻る。

女子寮の中は休日なのでまだ寝ている人の方が多いようで人が動いている気配は少ない。寝ている生徒を起こさないように音を立てず部屋に戻ると、木乃香はまだ寝ており既に明日菜も戻っていて二度寝をしていた。

二人を起こさないように部屋に備え付けられている風呂場に向かい、汗を吸ってボタボタのトレーニングウェアを脱いで汗をシャワーで流す。

タオルで濡れた体を拭き、トレーニングウェアを着る時に置いておいた私服に着替えた。ドライヤーを使って髪を乾かして出てくると、明日菜はまだ寝ているが木乃香が起きていて朝ごはんの用意をしていた。

「近衛さん、おはようございます。美味そうな匂いですね」

「あ、早いなアスカ君。おはよ～」

こうしてはアスカの麻帆良に来て二日目の朝が始まった。

朝食後、二人の部屋である６４３号室の近くにあった物置を見つけたので何とか寝れるぐらいには片付けた。その後は家事を手伝って昼御飯を木乃香と一緒に作っていると明日菜も起きたので昼御飯を食べて、三人で布団や生活必需品等を買いに出かけた。

買い物の方はいたって普通だった。買ったのはシャンプーなどの

日曜雑貨と食料品。布団などの大きいものは寮に送ってもらう手筈になっている。ただ、食料品の方は半端じゃない量であったが。

「これは流石に買いすぎじゃないの？」

買った食料品の量に、やや呆れた様子の明日菜が言う。

彼女が呆れているのもしょうがない。何しろ買い物した量が多すぎて、二人にも荷物を持たせているのである。もっとも、アスカが一人で両手一杯の袋を持ち、女性二人には１つの袋を抱きかかえながらだが。

「居候させてもらってるんですから、これぐらいはしないと。それに僕は人より食べるんで」

「昨日も凄かったもんな」

本人の言葉通りアスカは良く食べる。

消費するカロリーが多いからか三人前は食べるので、初めて見た者はその光景に必ず驚いている。御他聞に漏れず昨夜の夕食時も彼女たちは驚いた。木乃香は自分よりも少し小さな体に自分の倍以上の食料が消えていく光景を思い出して、買った食料品の量に納得する。

元々物に拘りがある性質でもないので、直ぐに買い終わったのだが、女子寮に帰る道すがらハプニングに出くわしてしまうのはアスカの宿命であろうか。

「あ、あの……ごめんなさい。困るんです」

学園都市で休日ということもあって学生が多い道端で、２―Ａに在籍している運動部四人組は高校生ぐらいの四人組に声を掛けられていた。

「いーじゃん、どうせヒマしてんだろう？　オレらと付き合えよ」

「だからさー、絶対に退屈はさせないからさー。いいクラブ知ってんだよ。そこなら顔パスで入れるからさー」

「な、行こうぜ。女だけで遊んでてもつまんねーだろ？」

「アイドルとかモデルなんかもよく来るんだぜ？　俺もそっちの知り合い多いから、なんなら紹介しても……」

言い寄られている女性四人が目配せを交し合っている間も、軽薄そうな男たちは、軽薄な口調で、軽薄な台詞を垂れ流していた。顔立ちは整っているのだが、その痴的な言動からは、品性の欠片も見出すことは出来ない。

要するに、ナンパである。それは、よくあることだった。日常茶飯事と言ってもいい。タイプは違えど、彼女たちはいずれも際立った美少女であるので、比較的によくあることだった。

軽薄そうで手前勝手な物言いに、運動部四人組の一人――――大河内アキラはうんざりしたように表情を曇らせる。

「ナンパでしたら他を当たってください」

「そうそう私たちは用事があるんだから付き合えないのよ」

リーダー格らしき少年にアキラは毅然とした態度で言い返し、横に並んだ裕奈が続けた。その後ろでは和泉亜子、佐々木まき絵が心配そうに様子を伺っている。

アキラと裕奈が前に出て、亜子とまき絵が二人の背中に隠れている形だ。

「ナンパですかね」

それを若干遠くから目撃したアスカは呟く。はっきり言って、若さ故に血気盛んそうな男共と真面目そうな少女たちでは釣り合いが取れるように見えない。

「あれってまき絵たちやない？」

「そうね」

同じ方向を見た二人はアスカと違い、クラスメイトの姿を確認しあっている。

「知り合いですか？」

「クラスメイトよ」

二人と同年代に見えたので同学年か同じ中学の子だろうとアスカは予想していた。アスカが尋ねると、明日菜が予想通りの答えを返してきた。実はこのやり取り、今日だけで実は三度目だったりする。

「あ、でも、なんか二人とも嫌がってるように見えます」

「亜子とまき絵は怖がってるけど、気付いてないみたいやね」

前の二人に隠れた少女たちは確かに少し怯えた感じを受ける。男の四人組はどちらかというと不良っぽいし、同人数とは囲まれれば怖がりもする。

「ガタガタ言わずに一緒に来いっつってんだろ！！」

律儀に受け答えしたのがかえって不味かったのか、リーダー格らしき少年は急に荒々しい顔つきになって一番に近くいたアキラの腕を掴んだ。が、

「女性を誘うには強引過ぎますよ」

「痛ぇ！　イテテテテ……！」

何時の間にか荷物を明日菜たちの足元に置いたアスカが十数メートル離れたアキラと少年の間に現われ、痣が出来そうなほどに強引に掴んだ腕を捻り上げていた。

「こちらは友達……には見えませんが？」

「ええ。さっきからしつこく誘われて……困ってたの」

アスカは改めて四人組と運動部四人組とを交互に観察した。四人はいかにも軟派な遊び人風で、ファッションには気を遣っているらしいが、知性や品性は感じられない。対する運動部四人組は文字通りスポーツ少女然としており、相手としてはどう見ても彼らとはジャンルが違う。ナンパする相手を間違えているとしか思えない。

「というわけなんで、ナンパなら街に行ってしてくだい」

アキラの、というより女性陣の意向を伝えて手を離したアスカだが、ちっぽけなプライドを踏み躙られ、ナンパ男たちの顔が怒りに歪んだ。まさか、自分よりもかなり年下の子供に虚仮（コケ）に（彼ら主観）されて黙っていられるほど人間が出来ていない。

「ああ～ん？　ガキに用はねぇんだよ、引っ込めバカ！」

彼らにはせせら笑っているように見えるアスカを睨み、男たちは次々と拳を固めて殴りかかる。少し殴れば簡単に退散するだろうという思惑があった。

一番近くにいたボクシングを真似た構えをした長髪の少年が右ストレートを打ち込んできた。生意気な坊ちゃんだと思い、舐めきっているパンチだった。相手をするのが羊の皮を被ったライオンだと気づけなかったのは哀れと言える。

アスカは腰の入っていないヘナチョコパンチを片手で蝿を叩くように右に弾くと、左半身に変化しながら密着し、真下から突き上げる掌底のアッパーを相手の顎にぶち当てた。ヘラヘラ笑っていた口がガンと噛み合わされ、脳天まで衝撃が突き抜ける。完全に顎が上がったところに胸に突き蹴りを入れると、少年の身体は真後ろにいて反射的に支えようとした仲間の幸運な二人もろとも吹っ飛んだ。

瞬きをする間の出来事だった。通りにいる他の学生や通行人が驚いて立ち止まる。

唯一、巻き込まれた二人とは違って射線上から回避した運の悪い

少年は、当然のごとく突き飛ばされただけだと勘違いしているので攻撃を仕掛ける。しかし、攻撃が届く直前、アスカはそっと避けて男の射線から逃れる。

男の拳は、その身体ごとアスカの横をすり抜けていく。まず拳が、続いて頭から突っ込むように上半身が、そして下半身は――――通り抜けられなかった。

アスカがさりげなくその場に残しておいた足で、男の足を払ったのだ。

「ぐえっ！？」

受身も取れず、男は豪快に転倒する。そこにアスカは音もなく歩み寄り、身を起こしかけた男の顎先を靴の先端で蹴り抜いた。

「――――っ！？」

男は声にならない悲鳴を上げ、白目を剥いてぶっ倒れる。

アスカの打撃があまりにも素早いため、突き飛ばされただけだと勘違いした仲間の少年二人は、すぐに起き上がって反撃に出ようとしたが、長髪の少年が陸揚げされたタコのようにぐったりとして動かないことに気付いて青褪め、無事だった少年が倒される光景を見て血の気を失った。目の前で起きたことが信じられなかったのもあるが、二人にぶつかった少年といま倒された少年が白目を剥いて完全に気絶していたからである。

「「う、うわぁぁぁぁぁぁ！？」」

いくら身の程知らずとはいえ、少年たちも流石に目の前の相手がただの子供でないことを悟った様子だった。残りの少年二人は気絶している少年たちを放って逃げ出した。

「――――さて、怪我とかはないですか？」

「大丈夫だけど、普通はこっちが聞く台詞じゃないかな」

「「「うん、うん」」」

その結末を見届けたアスカは振り返って怪我とかがないか彼女達に尋ねるも、亜子のもっともな意見に残りの三人が頷く。

そこに荷物を持った明日菜と木乃香がやってきた。

「アスカ、あんた強いのね。でも、男は助けないの？」

年上の男たちを片手で捻ったアスカを見て明日菜が感心するも、寮を出てからこっち何故か女ばかりを助けていることに疑問を持って尋ねる。

オープンバーで餡蜜を食べ過ぎてレジでお金が足りなくなっていた、背が高く顔黒の人にお金を貸したり、双子と買い物に来たのに目を放した隙にいなくなって困っていたお姉さんと双子を探すのを手伝ったりしていた。

他にも迷子や、道を尋ねられたり、荷物を抱えていた老人を助けたり、と一歩歩くごとに人を助けているが奇妙なことに全員女なのだ。

「？　ちょっとした手助けなら、普通に男の人にも結構してますよ？　今日は何故か女性だけですけど」

「してるんや……」

アスカの返答に木乃香が呆れにも似た気持ちを抱くのも無理はない。

ちなみにちょっとした手助けというのは、ランニングの途中で足をひねった運動部員の応急処置をしたりといった、余計なお世話といわれてもしょうがないような事柄ばかりである。この返事で普段のアスカがどんなことをしているのか八割ぐらい分かってしまった少女たち。

単純に今日は女性ばかりであるが普段から老若男女分け隔てなく善意を振りまいているアスカだった。

「あれ、明日菜と木乃香？　この子と知り合いなの？」

「あ～まあ、説明すると複雑なんだけど――――」

アスカと気安く話す明日菜と木乃香にまき絵が疑問を呈し、明日菜が面倒な説明をしようとした瞬間、アスカが何かに気付いたように後ろを振り返った。

そこには逃げたナンパ男たちが通りの向こうから仲間らしき格好をした男たちを数人連れてやってきていたからだ。

「あ！　あのガキです。荒田さん」

「こいつ？」

と、荒田と呼ばれた男は、アスカを指差した。

自分自身の腕を頼りにしている者と、数を頼りに威張っている卑怯者との間には、対峙した時に受ける印象からして歴然とした差があるのだ。この荒田という男はその中間ぐらいの微妙な感じだが。

「こんなガキにビビッて逃げ出したのか、お前ら？」

「だって、なんか格闘技をやってるみたいで強いんすよ」

「チョー生意気なんですよ、このガキ。礼儀を教えてやってください、荒田さん！」

口々にそう応える男たちは、ついさっきアスカに撃退された名も無きナンパ君一号、二号（仮称）だった。どうやら、けんもほろろに追い払われたことを根に持って、助っ人を呼んできたらしい。

――――「自分にはできないから助けを呼ぶ」普通ならいい話のはずなのに、これがナンパをして撃退された末なので凄まじく情けない話だった。

「おい、ガキ！　大人の話に子供が首を突っ込むんじゃねぇ。格闘技をやっているらしいがきっちり侘びを入れてもらうぜ？」

「――――――――」

あまりにも典型的な展開と現れた人物に、アスカは心底呆れたといった感情を全く隠していない視線で男たちを見据えた。冷ややかな視線に、先程やられたナンパ君一号、二号は後じさったが、荒田

は怯まずにその視線を受け止める。

「そんな目で睨んだって無駄だぜ！　荒田さんはレスリングをやってるんだからな！」

「やっちゃってください！　荒田さん！」

荒田の後ろに隠れながら、一号、二号が囃し立てた。虎の威を借る狐そのままの二人は無視して、アスカは荒田だけをじっ、と見つめる。

言うだけあって、それなりの修練は積んでいるようだ。着ている革ジャンの下に薄いタンクトップを着ているだけなので、筋肉の盛り上がりがはっきりと分かる。格闘用に鍛え上げられている肉体だった。

「神楽坂さんたちは下がっていてください。彼らが用があるのは僕だけみたいですから」

先程までの男たちと違い、筋骨隆々の男が現われたことで明日菜たちも動揺が広まった。が、アスカには動揺の欠片一つなく、少女たちを下がらせようとする。

「ちょっと待って！　あんな大男に勝てるわけないじゃない」

「そうやで、いま高畑先生を呼んだから！」

当然、明日菜たちはアスカを止めようとする。荒田は二メートル近くの身長で、確かに強いのだろうが木乃香よりも小さなアスカが勝てるとはとても思えなかった。

逸早く木乃香が携帯で高畑に連絡をつけるも駆けつけるには今暫くの時間がかかるだろう。

「大丈夫ですから」

少女たちの制止を笑って抑え、大丈夫だと念押ししてから荒田と呼ばれた男に歩み寄る。

アスカの笑みに頼もしさと自信を感じた少女たちは、不安ながらも大人しく待っていることにした。もちろん、何かあったら明日菜とアキラは飛び出す気満々だったが。

「ガキのくせに粋がってるから、こういう目に合うんだぜ？　もう年上には逆らおうとするんじゃねえぞ」

荒田は見た目で歩み寄ってきたアスカを舐めきっているので無造作に手を伸ばし、軽く小突こうとした。幾ら不良でも子供相手に本気を出す気も、真面目にやる気もない。

小突けば直ぐに終わるだろうと、想像していた。普通の子供が明らかに年上、もはや大人といってもいい体格に殴られればそうなるだろう。

――――――相手がアスカでなければ、だが。

手が頭に触れようとした瞬間、アスカはするりと足を踏み出す。

半身になって前に出る動作が、同時に荒田の腕を躱（かわ）す動作となった。伸びている手を左手で外側に弾きながら、手首を掴み、肩越し

に引き込むと同時に荒田の懐に滑り込んだ。ジーンズの股を掴んで、荒田の巨体を背中に担ぎ上げる。荒田の視界がグルリと一回転した。

「――――――なっ！？」

巨体が宙で綺麗な弧を描き、固い地面に叩きつけられると周りで見ていた全ての考えを裏切り、アスカは荒田を足から着地させた。

アスカがしたことは柔道でいう【袖釣り込み腰】だが、投げた本人は柔道のことをほとんど知らないので、単にそういう技の形になっただけである。

技自体は意図したわけではないが恐ろしく素早い体捌きと、重心を自在にコントロールする卓越したセンスがなければ、大人と子供ぐらいの体格差がある相手をここまで完璧には投げられない。

「レスラーって割りには腰が高いんですね」

変わらずにいるのはアスカだけで、誰もが信じられない光景を眼にして唖然としていた。元か現役かは分からないがレスラーといっても信じられる体格をした巨漢をいとも簡単に投げる子供がいると誰が想像できるのか。

「……クソッ！」

いくらなんでも紛れで子供が自分の巨体を投げられるとは荒田も思っていない。今度は本気でアスカに挑みに掛かった。アスカは掴みかかってくる手の下を体格差を活かして掻い潜ると、タンクトップの胸元を掴んで背負い投げを決める。

「この野郎、舐めやがってっ！」

今度もまた足から着地したことで、舐められていると感じた荒田は吼えて三度襲い掛かった。

が、今度は突進を真っ向か受け止めたにも係わらず、アスカの立ち位置は変わっていない。勢いに任せて体当たりしたはずの荒田は、足が縺(もつ)れたように地面に膝をついていて、何が起きたのか分からないという顔をしていた。

「何なんだよ、これはっ！？」

荒田は立ち上がって掴みかかろうとしたが、その両腕は空を切った。

身を退いてかわしたアスカは左手を伸ばして荒田の顔面を横に軽く押すと、巨体が横向きにもんどり打って倒れた。

「――――片手で！？」

ただでさえ体格差があるのに、突進を止めただけでなく片手で簡単に倒したことに明日菜は驚きを隠せない。

アスカは荒田以上のパワーで正面から跳ね返したのではなく、完全に見切って受け流していた。誰が見ても、体格差を込みにして二人の実力差は明らかだった。

この時点では明日菜たちは、アスカへの不安を失くしていた。素人目にも大人と子供並みに実力差があると知れたからだ。

「うおおおおおおおおお――――――っ！」

だが、それでも半ば意地になった荒田は再度挑みかかり、アスカの奥襟をしっかりと掴み、アスカの身体を力任せに放り投げようとする。今度こそ正面からの力比べになるかと思いきや、アスカの荒田と比べれば小さな身体は地に根が生えたようにビクともしなかった。

それどころか荒田は尻を後ろに突き出し、不恰好なへっぴり腰になった。攻撃ではなく逃げているように見える。

「こっ……このぉぉおっ！」

それは異様な光景だった。身長では５０ｃｍ以上は高く、体重ではおそらく三倍の差がありそうな荒田はアスカを持ち上げることができないのである。

「何やってんですか、荒田さん!?」

「そうですよ、何逃げてるんですか！」

「うっせぇ！（こ……こいつ、変だ！　掴んでいるのに……手応えがねぇ！）」

逃げているようにしか見えない姿にナンパ一号、二号が発破をかけるも、荒田は目の前の少年の実力が想像を超えていることを実感し始めていた。一直線の突進を躱したり、力の方向をずらして受け流すだけなら自分にもある程度できる。しかし、どう見ても圧倒的にパワー差がある相手と正面から組み合った状態で相手の力を完全に殺してしまうとなると、もはやレベルが違いすぎる。

人間が物体を掴んだり押したりする時には、その物体の外観から質量や密度などの状態を予測し、どのような手応えがあるかを計算して、それに見合った力を出す。

しかし、その予測が外れた時――例えばテーブルに載ったコップを取ろうとしたらコップがテーブルに接着剤で固定されていたり、何十キロもある重い岩石だと思って持ち上げたら発砲スチロール製のハリボテだったりした時、人間は衝撃を受けると共にバランスを大きく崩す。

アスカが荒田に対してそれと同じことをやっていた。

荒田が押そうとする時、アスカは膝を抜いて身体をほんの一瞬だけ宙に浮いたような状態にしていた。相手の質量と抵抗を予測している荒田は、その手応えのなさに驚き、身体のバランスを保つために慌てて重心を後ろに戻そうとする。ちょうど『暖簾に腕押し』の状態になり、その結果としてのへっぴり腰だった。

「もう止めませんか？」

「ぬかせぇぇ！！」

ここで引いては今まで築き上げた面子が崩れるとあって必死の形相の荒田に対して、アスカは余裕たっぷりだが困った感じに提案する。意地になった荒田が勢いをつけて引っ張るも、結果は変わらない。

武術の奥義にはそういった極めて高度で精妙な技術があると聞いたことはあるが、眉唾物だと思っていた荒田にはおよそ理解の及ぶ

代物ではなかった。

「……はぁ、しょうがない」

完全に頭に血が上ってこちらの話を碌に聞いていないことを悟る。それどころか逆に火に油を注いでいるだけだと嘆息して、引っ張る荒田の手から押さえていた自分の手を放し、掴まれているシャツの襟元をギュッと引っ張った。生地がピンと伸びて、掴んでいた荒田の手が一瞬にして外される。その実に簡単にさり気なく鮮やかなやり方で、外された本人ですら理解できない手並みをしたアスカは、バランスを崩して無防備な荒田の後方に回り込む。

「くっそ――――！」

「喰らえ！！　秘伝体術奥義！！！　千年殺しいいいいいい！！！！！」

叫びながら振り返ろうとした荒田は、直ぐ真後ろから聞こえてきたアスカの声に猛烈な嫌な予感を感じて身体を凍りつかせた。

「ぐふぉあ！！！！！！」

身構える暇も無かった。なにかの衝撃が後ろから下腹部を貫き、荒田は突き上げた熱い衝撃に喚きながら宙を飛んでいた。

「この技だけは……使いたくなかった」

両手の人差し指と中指を突き出して組み、大きく前方に突き出した姿勢で、アスカは憂慮を秘めた表情でぼそりと呟いた。派手なカンチョウーを奥義と呼ぶべきかどうかは別にして、その一撃で宙を

舞った荒田は、どしゃりと地面に突っ伏してプルプルと尻を抑えて起き上がれない。

「ふ……また、つまらぬ物を突いてしまった」

フッと指先に息を吹きかけ、格好をつけるアスカだが周りの目はしらけ切っている。しかし、これが先程までのやり取りを忘れさせるために敢えて道化を演じていると誰が理解できようか。

事実、アスカの道化染みた仕草と被害者（荒田）の痴態もあって、先程まであった子供が大人をあしらうという異様な光景を誰もが忘れていた。

「ひ、ひぃっ……」

「荒田さぁん……」

地面に横になって尻を抑えて痙攣している荒田を見て、完全に裏返った情けない声で残った男たちが悲鳴を上げた。

「さっさと連れて行ってください。通行人の邪魔ですから」

「「ヒィィィィィィ――――――!!」」

アスカが名も無きナンパ君一号、二号（仮称）を見て言うと、怯えながらすっかり伸びている仲間三人を引き摺って逃げていく。

「ふぅ……」

溜息を吐いて肩を落としたアスカは、拍手の音に顔を上げた。運動部四人組が少し控え目に手を叩いている。

「凄いニャ～。最後がアレだったけどニャ～」

「本当に、最後がアレだったけど」

「ホンマや、最後がアレやったけど」

「だよね、最後がアレだと」

次々と感心しながらも、最後の奥義と言いながら結局はただの浣腸だったことに突っ込みを入れていく。

「でも、凄かったで。あんな大男をポンポンと投げとったし」

「本当、見掛け倒しだったわね」

自分たちよりも小さなアスカがあれだけ簡単に投げられると、荒田は実は見掛け倒しで大したことのないように彼女たちには見えた。

「まあ、簡単そうに見えたのは第三の守りとでもいうものがありましたから」

実は「あの荒田は結構強いですよ」と説明してもポンポン投げた身では説得力がないかと考えて、アスカは掻い摘んで話し始めた。

「第三の守り……？」

「一つ目は足や身体で躱す守り、二つ目はガード……止める守り―

――」

説明しながら足元を指差して、足でトントンと地面を叩く。

「三つ目は……地の利とでもいうべきか、アスファルトです。これがレスラーにはとっては最悪なんですよ」

思い切り路面に転がった体験がなければ特別認識はないが、アスファルトは思うよりゴツゴツして固く、人の皮膚は本当に柔らかく破れやすい。

これはレスリングのタックルのように地に膝や手をついてしまいがちな技を持つ者にとっては、非常に大きなマイナスファクターになる。

荒田も最初は今まで通りにやったのだろうが、タックルを潰されたら簡単に膾（ナマス）のように摩り下ろされた経験があるのだろう。それからは膝がつかないぐらいの、潰されない位の高い位置でタックルするようになったのだと推測される。

だが、それも普通の相手ならば通用しても一級の技を持つ者ならその高さは十分に射程内しかならない。低く行けば上から潰され大ダメージ、高く行けば打撃の餌食になるだけ。

勘違いしてはいけないのがレスリングは決して路上で役に立たないわけではない。そもそも他の格闘技とは成り立ちが違うのだ。

ローマの時代から殺し合いを競技に高めたものなのだ。あくまで不利になるのは、路上限定で地の利が逆に働く場所ではレスリングは強い。

路上でもっとも地の利が働くのは柔道だろう。着衣である事、技の多様性、壁にひっついて投げられないようにしてもくずしによく使われる小技でコンクリートの壁に叩き付けられれば必殺の威力になりえる。柔道着ならではと思われがちな締め技なども、慣れた者なら襟元が深く開いている洋服などの方が締めやすいので、どこかを掴みあっという間に極めることが可能だ。

「――――――と、まあ向こうは不利な条件且つ、こちらのフィールドに引き込んだから弱いように見えだけで路上の喧嘩なら十分強いですよ、彼は」

「「「「「へぇ～」」」」」

アスカの深い知識に少女たちは揃って感心の声を漏らす。

戦力評価やレスリングというスポーツの来歴、荒田が取った戦法と素人でも分かりやすく説明したので理解できたのだ。

「お～い、君たち大丈夫かい！」

そこに連絡を受けた高畑が駆けつけた。もうナンパ男たちはいないが連絡を受けて僅か数分で辿り着いたのだから必死さが窺い知れた。

「――――――あれ？」

周りから注視されていたので高畑に後始末を任せ、アスカたちは近くの公園にやって来て自己紹介などをしていた。アスカが生徒として通うこと、今は女子寮に住んでいることなどを話を終えたところで唐突に不審の声を上げた。

「どうしたの？」

視線を皆の反対側に向けたアスカが不審の声を上げたので、明日菜は言いながらその視線を追った。視界の中央にあるのは――――共用のトイレ。

同じ方向を見た木乃香も気になったのだろう、続きを促した。

「どうしたん？」

「いや、今、女子トイレに男の清掃員が入ったんで」

「「「「「……」」」」」

アスカの発言に全員が沈黙した。確かにそれは、アスカでなくても不審の声を上げずにいられないだろう。

「それは――――なんか嫌にゃ～」

「そうだよね。私も嫌」

「嫌っていうか、普通はありえへんとちょうの」

「……」

「まあ普通、男がトイレの清掃員なんてありえませんからね」

それぞれの生理的嫌悪を漏らした呟きを（アキラのみ無言であったが）、アスカも同意の口調で補強した。

オフィスビルでさせ、トイレの清掃は女性の清掃員が行うのが普通である。男が清掃員をすると覗きや盗撮などの犯罪行為を行われる可能性が高い、と普通は考える。ましてや、公共の施設ともなれば役所がそんな無神経な真似をするはずがない。

「でもさ、違法ってわけじゃないんでしょ？」

「一応わな。でも、暗黙の決まりって感じやし」

男が清掃員をしてはいけないと決まっているわけではない。だが、木乃香の言う通り一般常識として暗黙の決まりが出来ている部分が多い。

かといって、違法とは言えないので不審に思っても手を出せないのが現状ではあるが、アスカは一つだけ気づいていながら言っていない点が一つあった。

それは清掃員がトイレの掃除をしに来たにしては掃除用具を持っているように見えず、その代わりに肩から下げたバックが妙な盛り上がり方をしていたことだ。そしてトイレに入る時に僅かに男の好色そうな歪んだ顔が見えたのを見逃さなかった。

女子トイレから、問題の清掃員が出てきた。

「ちょっと行ってきます」

アスカが取るべき行動はたった一つ。それを成すためにそう言って男の下へと向かって行った。

結局、アスカが予想した通り男は清掃員の振りをした覗きの常習犯だった。

見抜かれた男はアスカを子供と侮って逃げようとするも、当然逃げられるはずもなく、あっさりと捕縛されて呼ばれた警察に連行されていった。流石に現行犯逮捕までしてしまっては警察から事情聴取を受けないわけにはいかず、アスカはほぼ警察と同時にやってきた高畑と一緒に警察署に行っていた。

で、時刻は夕方。

警察から犯人逮捕に貢献した略式の証書（正式なのは後日に届く）を授与され、高畑と別れて女子寮に帰ってきたのだが、

「アスナさん！！」

「なによ！？」

何故か女子寮のロビーで取っ組み合いのケンカをしている明日菜と、アスカが知らない金髪の少女の姿があった。

「あわわわ！！」

「おおっ！」

「ヤレーー！」

「アスナに食券2枚ー！！」

しかも、元から置いてあった机と椅子をずらして綺麗に二人のスペース作り出している周りの野次馬たちの姿に頭が痛くなった。

反応と騒ぎようからこの二人が喧嘩するのは、それほど珍しくもないのだろう。周りは慣れているのか笑っているだけで、人によっては煽って賭けをしている人までいる。誰か一人位は止めてくれてもいいのに、とアスカは切に願った。

まあ、女の喧嘩の常套手段である髪の引っ張り合いをしていないところを見るに陰湿なものではないのだろう。周りの対応からもよくあることのようで、怪我までですることはないとアスカは考えた。

だが、最低限止めるにしても何を理由に喧嘩しているのか気になった。

（とはいえ、誰かに喧嘩の理由を聞くにしても知り合いが少ないからなぁ……）

麻帆良に来たのは昨日のことで、元々のこの都市にいる知り合いなんて高畑ぐらいしかいない。その高畑が女子寮にいるはずもないので（そもそもさっき別れたばかり）、必然知り合いは昨日、今日に知り合った両手の指に足りない人間に限る。

「あ、木乃香さん」

誰かいないかと首を巡らせると野次馬の端っこに木乃香の姿を見

つけ、声を掛ける。

「あ、アスカ君や。お帰り、帰ってきたんやね」

「ええ、ついさっき。しかし、何ですか？　この騒ぎは」

話しかけられて一瞬、木乃香は驚いたような表情を浮かべるも直ぐに話しかけてきたのがアスカだと分かると笑みを浮かべる。

アスカはなんとなく周りの騒ぎから小声で話しながら事情を尋ねる。

「実はな……」

事情は極簡単な話だ。

アスカが覗きを捕まえたことを逸早く女子寮に戻った裕奈が同じクラスである朝倉和美に教え、情報が数時間の内に女子寮全体にまで広まっていた。

アスカの容姿や善行なども一緒に伝えられ、そしてそのアスカが昨日明日菜たちの部屋に泊まったことが、明日菜たちの同級生にして２－Ａの委員長であり、ショタコン（本人に自覚なし）の雪広あやかの耳に入り、羨ま……ゲフン、ゲフンとか思ったかどうかは分からないが明日菜に突撃し、なんだかんだの内に現在に至るというわけだ。

「なんというか……」

中学二年にもなって喧嘩の低レベルさに頭の痛みを覚えて頭を押

さえて思わず天井を見上げてしまうアスカ。その喧嘩の原因が自分だと思うと少し情けない。

「ああ、気にせんでもええよ？　あの二人のは何時ものことやし」

慣れてしまえば何時ものことだと慰める木乃香だったが、一応は自分が喧嘩の原因なのでアスカはやはり自分が止めるべきだろうなと考えていた。

「ちょっと止めて来ます」

「放っておいたら止まると思うで？」

アスカの申し出に何年もの経験から木乃香が言うも、放っておいたら別に構わないのだが自分が原因の喧嘩で怪我をされてもアスカとしては困る。

「まあ、喧嘩の大本の原因が僕にあって怪我をされても困るので」

「そうか？　頑張ってな」

アスカの意向を聞いてあっさりと木乃香は送り出した。今日見た武勇から喧嘩に巻き込まれても怪我はしないだろうと思ったからだ。

木乃香のエールを聞いたアスカは後姿のまま手を振って返す。

アスカはスルスルと野次馬の間を通って喧嘩の二人の下を目指す。

幾ら喧嘩の観戦に夢中とはいえ、自分たちの横を男であるアスカが通っているのに誰も反応しない。本当なら目立つはずなのに全く

意識されずに合間を掻い潜っていた。

これはアスカが気配を消しているのもあるが、喧嘩に熱中している野次馬たちの感覚の隙間を縫い、常に死角をついて存在そのものを薄くしているのだ。

アスカは足を進め、とりあえず彼女たちを引き離す為、互いの胸元を掴み合う二人の二の腕を掴んでクルンっと一回転させるように引っ張る。そして空中にある彼女たちの膝の裏に軽く足を入れる。後は肩に移動させた手で下に重心をかけさせるように押せば終わり。

「「へっ？」」

何時の間にかアスカの前で正座させられていた明日菜とあやかが揃って間抜けな声を上げた。あれだけ騒いでいた他の生徒たちも今は静かに沈黙してしまっている。

「喧嘩をするな、とは言いませんが流石に殴り合いはダメですよ……」

腕を組んでワザと聞こえる様に嘆息した。アスカは少しぐらいお説教するべきかなぁ、と考える。喧嘩するな、とは言わないがこんな理由で怪我をするのも変な話だ。

――――――ザワザワ

ことここに至ってようやくアスカの存在を認識した当人たちと野次馬たちは、先程まではいなかったはずなのに突然現れ、二人を理解できない手際で正座させたことに驚きを隠せていないようで、隣りや近くのものとボソボソと話し合う。

「中学生にもなってつまらない理由で喧嘩をしないでくださいよ」

「でも、喧嘩をしかけてきたのはあやかの方で！」「ずるいのは明日菜さんの方です！」

アスカの嘆息しながらの言葉に、痛いところを突かれた二人は互いに責任を擦り付け合う。

「原因の僕が言うのも変な話ですけど、喧嘩両成敗です」

第三者的に見れば喧嘩をしかけたのはあやかだが、それに応じている時点で明日菜も同罪だ。それを考えて両成敗としてしまった方が楽に収まるだろうとアスカは考えた。

「「はい……ごめんなさい」」

流石に衆人環視の中でつまらない理由で喧嘩をしていたと自覚した二人は恥ずかしさもあって素直に謝った。自分たちよりも小さい子供の前で正座して怒られているという状態に耐え難かったというのもあったのかもしれない。

これで終われば一件落着なのに終わらないのは【歩く事件体質（トラブルメーカー）】と呼ばれたアスカ故か。

「少年強いアルな?!是非私と手合わせ願いたいアル！！」

突如背後から聞こえる女の子の声。

アスカが嫌な予感を感じて振り返ると、褐色の肌と明るいクリー

ム色の髪で着ているチャイナドレスが特徴の、日本では一風変わった少女がいた。

（ああ……これは）

その目を見て悟ってしまった。

彼女は所謂（いわゆる）、強敵と戦うことを望むバトルジャンキーだと。

手合わせを願ってきた少女――――古菲の申し出を口八丁で誤魔化したアスカは（中国にいた頃に似た手合いに何度も挑まれたので慣れている）、明日菜たちと部屋に戻ってきた頃にはすっかり夜になっていた。

「あ～、疲れた」

「なんやいろいろあったもんな」

部屋に着くと二人は疲れた～と届いたばかり荷物（布団などの配達を頼んだ大きい荷物）を置いて座り込み、アスカは整理した物置に布団を運んでいく。

そして二人に買い物に付き合ってくれたお礼にと前夜に引き続き、夕飯を作り始めた。

アスカは、火力を最大にしたガスコンロの前に立ち、大きな中華

鍋を片手で掴んで振っていた。野菜を炒めたところに、小麦粉をまぶして揚げた豚の角切りを放り込み、そこにカバンから取り出した甘酢餡(あまずあん)を加えて手早く全体に絡ませる。何故、カバンに甘酢餡(あまずあん)が入っているのかは永遠の謎だ。

勢いよく大皿に盛り付けると、どこに出しても恥ずかしくない本格派の酢豚の出来上がりだった。

「はい、お待ちどうさまです」

アスカは作っている途中から漂ってきた匂いに待ちかねた様子の明日菜の前に酢豚の皿を置いた。他には酢豚と同時進行で作った春雨サラダと木乃香が作った中華風つみれ汁の椀と御飯が並んでいる。

作っている間から漂ってきた食欲をそそる匂いで腹を鳴らしていた明日菜は、アスカが席についてから行儀よく手を合わせてさっそくレンゲで酢豚の肉を掬って口に運ぶ。

「……あ、熱っ！」

出来立てをいきなり頬張ったため熱さにびくっりしたが、その顔は直ぐに笑顔に変わった。

「美味しい……美味しいよ、これ！」

古今東西、美味い物に勝てる人間はいない。

はしゃぐ明日菜を見て、アスカは満足げに微笑んだ。師である剣星には遠く及ばないものの、昨日得意と言っただけあってかなり腕である。

食事後は、各自順番に風呂に入り、今日の話やクラスのみんなの写真を見せてもらって話を聞いたりして、何時もの就寝の時間になったので物置の部屋に行き、早めに就寝することになった。

こうして、麻帆良に来て二日目の夜は静まっていった。

第十八話　　初登校と闇の福音に出会う少年（前書き）

文字数は１９６１９字です。

第十八話　　初登校と闇の福音に出会う少年

登校初日の早朝、起床してまず明日菜の朝食を作ってバイトへ送り出してから、日課のランニングを済ませて挨拶があるのでアスカは二人より先に学校に向かった。

二人が道を覚えていないだろうから一緒に行ってくれると言ってくれたが、道は一度通ったので覚えていたのと、学園長室や職員室にも挨拶に行くので一時間は早く女子寮を出ることになるから、と説得して納得してもらった。

二人に見送られて女子校エリアまで電車に乗り、歩いて女子中等部の校舎まで行き学園長室に向かう。

学園長室にノックをすると、中から返事があったのでアスカは「失礼します」と一声掛けて入室する。

「おはよう御座います。学園長、高畑さん」

「うむ、おはよう」

「おはよう、アスカ君」

学園長室には学園長だけでなく高畑も一緒にいること驚きもしたが、アスカはそれを顔に出す事無く挨拶をすると、二人もそれを返す。

何故高畑がいるのかとは思ったが、よく考えたらアスカは２－Ａ組に編入されるのだから担任の高畑が一緒にいる方が二度手間にな

らなくていい。

「寮での生活はどうじゃ、何か問題はないかの？」

「神楽坂さんや近衛さんも良くしてくれているので何ら問題ありません。多少元気すぎるきらいはありますが」

そうか、と学園長は笑顔で頷き、麻帆良に来た当日には簡単な説明しかされていないので、細かい範囲での諸注意を３０分ほど聞いて高畑と学園長室を出て職員室に向かう。

「初めまして、アスカ・スプリングフィールドです。これからよろしくお願いします」

「私は生活指導員の新田。こちらが君の指導教員の源先生です。分からないことがあったら彼女に聞くといい」

「よろしくね」

職員室で挨拶をして、高畑に連れられて学園広域生活指導員の新田先生と同じ２－Ａ組副担任の源先生に会って自己紹介や説明を受けた。高畑が自分の席に行き授業の準備している間に、生徒という立場だが分からない事があったら質問していいと許可を受けた。

「ここはどうしたらいいですか？」

「ここはね……」

源先生も忙しい中だが仕事を見させてもらい、分からないことは教えてもらったりした。アスカのような子供で、しかも自分の仕事

に関する質問に嫌な顔をせず笑顔で答えてくれる人は珍しいだろう。

そんな自身を見る幾つかの視線があるのは気がついていた。

（好奇が五割と興味三割、期待一割、そして不快感一割といったところか）

魔法学校時代や旅をしていた経験からかアスカは視線に敏感である。

室内では少なくない数の教師が自分のデスクで何かしらの仕事を行っていたが、見た目完全なアスカの存在を気にしてしまうのも無理がない。好奇や興味は純粋に子供の教師という物珍しさなどがあるのだろう。後、礼を失さない子供の姿は、元気過ぎる生徒たちとを彼らについつい対比させ、好感を抱かせるのに充分であった。

期待は裏の関係者のものであろう。本人達は隠しているつもりだろうが、鋭敏すぎるアスカの感覚には制御されながらも僅かに漏れている魔力から分かってしまう。魔法使いなら誰もが知る『英雄（サウザンドマスター）』の息子。芸能人の子供が気になるのと同じレベルで見てしまうのは仕方がないかもしれない。

不快感は子供が教師をすることに対してのもので、とてもではないがこなせるとは普通考えない。教師としての仕事に誇りを持つ者、単純に気に食わない者、と動機はそれぞれでもアスカがどういう人間かを知らない以上は負の感情を抱くのは当然の帰結と言える。

アスカもこのような視線を向けられることが多いとはいえ、慣れるものではない。

現状では反発して組織と戦ってもアスカにはなんの益はない。それにここを逃げ出したとしても待っているのは組織に追われる逃亡生活。逃げ切れる自信はあるが、それでは石化を解除することができないし、ジリ貧で何時か捕まる可能性は高い。

旧世界にいる間は、アスカに逃げ道は無いことは既に思い知っている。それでも逃げられる自信はあるが追われる生活とは思うほどに神経を使う。かといって魔法世界に逃げても母親が誰かバレれば賞金首になりそうだし、暗殺されるかもしれないから危険度はあちらの方が高い。

周りに気付かれないようにふぅ、と溜息をつく。

《はぁ～、どこか魔法世界とは違う別の新しい世界に行きたい》

《そう思うのは仕方が無いが、無いもの強請(ねだ)りしても仕方あるまい。まあ我も同感じゃが》

思考と玉藻との念話をしながらも周りの仕事を観察する。観察して仕事の手順を覚えて、その手順を自分がやり易い様にアレンジする。

人と同じようにしても、自分がやり易いかはまた別だからだ。

そうやって仕事をしているのを見ると、高畑の準備が終わったようでアスカの下へと向かってくる。

「お待たせ。ゴメンね、待たせちゃって」

「いえ、ちょっとでも仕事を覚えられたので良かったです」

そうかい？と高畑は困った顔して頬を掻く。アスカが世間一般の子供の言うことでないので、戸惑ってしまうのだ。

「そろそろ時間だから教室に向かおうか」

「はい」

高畑の言葉にアスカは頷いて、去り際に礼をして職員室を出て並んで教室に向かう。

「そうそうハイ、これクラス名簿。教室に行くまでだけど見てみるといい」

「あっはい」

そう言われてアスカが高畑に手渡されたクラス名簿に目を落とすと、そこに書かれているのは顔写真付きの３１名の女子生徒達と所々に高畑が事前に書いたらしきメモがある。

その中の半分近くはこの二日間の間に既に出会っているので知らない顔は残り半分。覚えるのはさほど難しいことではない。

が、名簿を確認し終えたアスカからしてみれば異常すぎるクラス構成に作為的な物を感じずにはいられなかった。

「外国籍の方が多いようですが、この学園は一クラスにこんなに留学生を入れているのですか？」

そこには、英語や中国語で書かれた名前が結構ある。三十一人中

四人も留学生がいるとは、これが全クラス平等だったら、何という国際化学園だと思う。

「学園長の配慮でね。『留学生というモノは心細いじゃろうて、同じ仲間を同じクラスに入れ、支えあわせるのは当然じゃ』ということらしいよ」

学園長の口調を真似た高畑の言葉には嘘はないのだろう。しかし、言っていることに理解できるものの納得できないのはどうしてだろう、とアスカは脳裏で頭を捻った。

「出席番号一番の相坂　さよさんの、１９４０～というのは何ですか？この書き方では１９４０年生まれと解釈してしまうんですが」

まずは出席番号１番、相坂さよだ。他と違い一人だけ制服が異なるし「１９４０～」と「席を動かさないこと」とか書いてある。単純に「１９４０～」に在籍していると仮定してもおかしすぎる。

「僕も会ったことがなくてね。学園長の指示で席は動かさんようにしてほしい」

もはや言うべき言葉も出てこなくて、後で学園長に問い質そうと考え、再び名簿に視線を落とす。

出席番号２番、明石裕奈は『明石教授の娘さん』と書いてあるが、明石教授って誰だろう？　いや、それよりも、

「……ロボットがいる様に思うんですが？」

出席番号１０番、絡繰　茶々丸は耳のとんがりとかどう見てもロ

ボットなんだが誰も突っ込まないんだろうか。というか緊急時の連絡先が工学部とはこれ如何に？

「ロボットじゃなくて、確かガイノイドだったかな？　まあ、彼女は特殊な事情があってね。何かあったら書きこまれてる所に電話を入れて欲しい。そこは工学部につながっとるから。例えば、暴走したときとか」

ガイノイドは、人間の女性に似せて作られたヒューマノイドで、女性のアンドロイドを意味するだけでロボットでもいいのではないか、と思ったが口に出すことはなく、もう考えることが嫌になって聞くことはしなかった。

出席番号１３番、近衛木乃香。関東、関西の両長の血縁で極東最強の魔力の持ち主。だが、本人にその自覚はなし。

出席番号１５番、桜咲　刹那は『京都神鳴流』と書かれている。『紅き翼』の一人、青山詠春が使っていた流派だから初日に尾行していたことも考えて恐らく護衛なのだろう。護衛されている木乃香にその自覚はなさそうなので微妙にストーカーっぽい気がする。。

出席番号１８番、龍宮真名は調べたところによるとかつて魔法使いによるＮＧＯ団体「四音階の組み鈴（カンパヌラエ・テトラコルドネス）」に所属しており、世界中の紛争地帯を渡り歩いていた経歴を持っている。裏の世界ではかなり名の知られた実力者であり、報酬さえ受ければどんな仕事でも請け負うタイプ。

出席番号２０番、長瀬楓はところにはたった一文字『忍』と書かれている。『忍』ってなんだ、と突っ込みを入れずにはいられない。

名簿に視線を落とし、一人ひとりを指でなぞりながら名前を読んでいく。というか、何か大人っぽい人から子供っぽい人まで、色々なバリエーションがあるが、今はそんな事を気にせずに、ある程度まで名前を読んでいきアスカはある場所で指を止めた。

「Ｅｖａｎｇｅｌｉｎｅ　Ａ．　Ｋ．　ＭｃＤｏｗｅｌｌ。手配書と人相は違いますが彼女はもしかして……」

極めつけは出席番号２６番、Ｅｖａｎｇｅｌｉｎｅ　Ａ．　Ｋ．ＭｃＤｏｗｅｌｌ。見た目は１０歳くらいの女の子だが、その正体は吸血鬼の真祖、魔法世界の最強種のひとつであり、老練の魔法使いである。魔法世界では「闇の福音（ダーク・エヴァンジェル）」、「人形使い（ドール・マスター）」、「不死の魔法使い（マガ・ノスフェラトゥ）」、「悪しき音信（あしきおとずれ）」、「禍音の使徒（かいんのしと）」、「童姿の闇の魔王（わらべすがたのやみのまおう）」などの様々な異名を持ち恐れられている。エヴァンジェリンの名は魔法界において恐怖の対象となっており、６００万ドルの賞金首となっていた。また、寝ない子を大人が「『闇の福音』がさらいにくるぞ」と脅かすなど、「なまはげのような扱い」を受けている。

「彼女はアスカ君が思っている通り本人だよ。ちょっと事情があって１５年間もこの学園で生徒をやっているから暴れる様な事はない。安心してくれていい」

「そうですか、分かりました」

高畑の説明にあっさりと納得して頷いているように見えるアスカだが、心中では全く別の『信用できないし、用心しとこう』という考えを持っていた。

事前に調べた情報や一致する名前、高畑の『困った時に相談しなさい』と書かれていることから手配書とは人相が違うものの本当に

本人なのだろう。

（しかし、真祖の吸血鬼……か）

嘗（かつ）てアスカは吸血鬼と対峙したことがある。

裏のネットワークで、封印されていた吸血鬼がとある街で被害を起こしていると知り、被害を受けていた街に行って始めた調査の過程で知った被害者の末期を一言で表すなら『搾りかす』。

それが、アスカが犠牲者の生前と死亡後の被害者の写真を見比べて、最初に抱いた思いは遺族に呪い殺されそうなものだった。

しかし、それは写真を見比べたら誰もが抱く正直な感想だっと言えるだろう。――――正直に口に出す者は少ないだろうが。勿論、アスカも思っただけで口に出したりはしなかった。

被害者はいずれも、写真からでさえ生命の輝きが感じ取れるような、生気に溢れた者たちだった。それが死亡後の写真になると――――はっきり言って完全なミイラだった。そのまま博物館に飾っても全く違和感が無い。

カサカサに乾いた皮膚、皺に埋没した顔、虚ろに開いた目は恐怖さえ浮かべず、ただ諦観のみを宿している。こんなものが数日前まで生きていたと言われても、誰一人として信じまい。それほどに無残な死に様だった。

調査の中で件の吸血鬼に襲われた被害者を発見するも、予想以上だった吸血鬼を前に敗北。なんとか被害者を救えたものの、吸血鬼の支配下にあったため拘束するしかなく、解放するには吸血鬼を倒

すしかなかった。

現地の魔法組織に頼るには、当時のアスカには余裕と魔法使いに対する信用がなかったために選択肢にも入っていなかった。影分身数体掛かりでないと抑えられないのも処断の理由になり兼ねないというのもあった。数日前に討伐隊が敗れたと聞いたのも大きい。

調査の段階で件（くだん）の吸血鬼が過去に悪名を轟かせ、魔法使い数十人掛かりで封印したものの最近になってその封印を破ったことは分かっていた。

被害者の解放のために吸血鬼に挑んだ。戦況は互角に近かったが、当時のアスカの実力は決して強いとは言えなかった。並み以上の実力はあったが、それも異界の忍術という恩恵があったに過ぎない。

魔法世界でも上位に入るだろう吸血鬼相手に余裕など全くなく、今まで玉藻と神父以外に見せたことのない奥の手、切り札全てを使ってようやく五分に持ち込んでいた。

だが、奥の手、切り札になるほど体への負担は大きく、封印されていたとはいえ不老不死の吸血鬼の戦闘経験は伊達ではなく、忍術の特性も理解され、アスカの命は風前の灯となるのは時間の問題だった。

絶体絶命で追い詰められたアスカが取った手段は『九尾化』、玉藻の力を借りたのだ。しかし、術者としては未熟なアスカが途方もない力をつけても相手は悠久の時を生きた強者。一本目から二本目へと尾が増えても使いこなせず、互角にすら持ち込めない。

そして尾が三本目に増えた時、そこからアスカの記憶は途絶えて

いる。

九尾である玉藻と魂を共有しているアスカは、人柱力よりも更にダイレクトに破壊衝動と邪念が伝わってくる。九尾は他の尾獣よりも邪念が桁外れに強く、アスカが『九尾化』するには九尾の本能である破壊衝動と邪念が強すぎるから、それを抑えるために意識の大部分を使ってしまうのだ。

だからアスカが『九尾化』すると、一本目であろうと玉藻の意識は表面に出ることができない。

しかし、玉藻が意識の大部分を使ってさえ、破壊意識と邪念はアスカを侵食する。当時の限界点は二本目までで、三本目にはほぼ完全に支配されてしまう。

だからこそ、常日頃から制御できない三本目の使用を禁じており、当時も『九尾化』する前に念を押していた。が、吸血鬼を前に半ば恐慌状態に陥っていたアスカはそれを無視した。

その結果、周囲をまるで戦場の跡のような荒れ地に変え、吸血鬼を直ぐに再生すらできないほどボロボロに消耗させていた。

だが、アスカには不老不死である吸血鬼を滅ぼせる術も、封印する術もなかった。

だから、【天照】と【月読】2つの能力を開眼したときに瞳に宿った力、万華鏡写輪眼の開眼者のみ使用可能な術【須佐能乎(すさのお)】を残っていた全てのチャクラを使って発動させた。そして【須佐能乎(すさのお)】が持っていた霊剣十拳剣(とつかのつるぎ)を使い、幻術の世界に飛ばして永久に封印した。

なんとか吸血鬼を倒せたものの、アスカは満身創痍。【須佐能乎（すさのお）】を使ったことでチャクラも使い切り、全身の細胞に負担がかかって街に辿り着いた頃には『九尾化』の影響もあって半死半生で倒れこむほどだった。

（あれはできれば思い出したくもない）

敗北に近い勝利。いや、事実上の敗北だろう。しかも玉藻に力を借りながらも制御できずだったなので苦い思い出が多い。

「それじゃ、ここがそうだよ」

高畑に声を掛けられて、アスカは回想を中断し教室前の出入り口の前で止まる。

窓から教室の中を見ると、女子生徒三十人の高い声が耳に入ってくる。幼いとはいえ、この身体は男。正直あの中に入るのにかなり勇気がいる。教師として赴任しようが立場はそう変わらないし、周りに同じ男子生徒がいない女子校を想像してみれば理解できるはずだ。

「じゃ、行くよ。失礼」

アスカとしては、もう少し心構えを作る時間が欲しかったが、高畑は一人で入り口をノックして、さっさと入って行ってしまったので、アスカも諦めて高畑の後に続いて教室へと足を踏み入れた。

「2年A組、高畑先生ー！」

「はいはい、静かにして」

教室に入った途端に歓声と、パンパンと手を叩きながら高畑の少し呆れたような、それでも優しげな声が聞こえてきた。

その声に騒がしかったクラスが、少しずつ落ち着いていく。特に声を荒げたわけでもないのに、あれだけ騒がしかったクラスが静かになっていくのは、先生と生徒の間にしっかりとした信頼関係があるからだとアスカは直感した。

アスカが教室に足を踏み入れた瞬間に様々な方向から視線が此方に向き、教壇の近くに行くまで視線が突き刺さっていた。

（はて、透けて浮かんでいる人がいるような……）

クラス中をぐるりと見渡すと、何故かアスカから見て手前の右端に一人だけ浮かんで体が透けている人？がいることに気付いた。先程見た名簿の相坂さよにそっくりな少女は、どう見ても幽霊にしか見えないが今は何もできないので極力見ないようにしようと自然に視線を逸らした。

「あれ、高畑先生、その子は？」

転入生が来るのは噂好きの生徒が言っていたので知っていたが、女子校に男の子が来たので疑問に思ったらしいショートカットが特徴のボーイッシュ少女、出席番号１１番、釘宮円が高畑に質問をする。

「ああ、早速だけど、皆に知らせたいことがあるから聞いて。一部の人は知っているかもしれないけど、今日から二月まで生徒として

通うことになったアスカ君だ」

「え～、ホント？　朝倉知ってた？」

「う～ん、一応ね。でも元々は二月に教生として来るって聞いていたけど、なんか事情があって生徒として通うために今日になったらしいよ」

流石はスクープのためなら一部手段を問わない自称「麻帆良のパパラッチ」。情報が早い。詳しい事情までは知らないようだが数日と言う短期間で調べたのなら優秀なのだろう。

既に大半の人には既に会って自己紹介まで済ませているがそれでもアスカを見て、実力を計るように鋭い目を向けてくる者（武闘派の人達）、好奇心に目をキラキラさせている者（会っていなかった一般人の人）、舌打ちしている者（エヴァンジェリン）がいた。

「それじゃあ、アスカ君。自己紹介を」

はい、と返事をして一歩前に出て教室の中を見渡す。クラス中の視線が自分に集まるのを感じて少し怖じ気づきそうになるのを感じながら自己紹介を始める。

「アスカ・スプリングフィールドです。本来なら二月から教師として赴任する予定だったのですが、何分若輩の身ですので無理を言って少しでも生徒の立場で授業を受けてみたいと思い、こうして二月まで生徒として通わせて頂くことになりました。教師としての挨拶は赴任する二月にしますので、それまでは生徒としてよろしくお願いします」

『よろしく～』

アスカはそう言って綺麗なお辞儀をして、周りの反応を伺う。やはり半分ほどの生徒とは既に面識があるからか無駄なほどのはっちゃけぶりにはなっていない。

何人かは子供とはいえ男が通うことに不信感を抱いたりしているが、概ね好意的な反応が返って来た。彼女たちが暴走しないのは面識がある人間が多いこと、報道部の和美やショタコンのあやかが暴走しないので一定の安静を保っていた。

高畑は予想していた初っ端からの質問攻めなどの反応と違うのため戸惑っていた。

「高畑先生？」

「ん、ゴメン。ちょっと予想していた反応と違ったから戸惑ってしまったよ。それじゃあ、朝倉さん。みんなを代表してアスカ君に質問を頼もうか」

声を掛けられて高畑は驚きに固まっていたことを自覚してアスカに謝罪して、教室を見渡して何人かが質問したくてウズウズしているのを見て代表として朝倉を指名した。

「それじゃあ高畑先生の指名で私、朝倉和美が代表して質問するよ」

そう言って隣りの席に幽霊がいることに気づいていなさそうな和美が立ち上がり、右手に携帯録音機を持ってアスカに向ける

「まずは、生徒として編入するとしても何で男子が女子中等部にい

るの？」

和美がこちらに向かって録音機をズイと突き出し、教室を奇妙な沈黙が支配する中でアスカは口を開く。

「何故かこのクラスの副担任になることが決定しているので、生徒として通うなら副担任として赴任するクラスにと学園長が」

教育実習生が副担任になるなどありえないことで、それでも通うなら男子校にしてほしくて電話で学園長に頼んでみたが却下された。最初の時点では女子校とは知らなかったのだ。

「アスカ先生？　っていうかアスカ君は何歳？って言うか教師になるんだからどれだけ頭が良いんですか？」

「少なくとも大卒レベルの学力はあると診断されています」

魔法学校卒業の後、校長から試験を受けさされたのだが、それは学力を測るものだったようで少なくとも一般大学レベルなら卒業できる知識はあると診断されている。

実はこれには理由があるのだが今は蛇足になるので詳細は省く。

「小さいのに先生なの？」

「数えで十歳です。何故先生なのか僕が知りたいです」

アスカの答えに今日初めて会った人たちは疑問符を浮かべている。飛び級だろうが教師をやるなら自分で選んだと普通は思う。

「どういうこと？」

「決して先生になりたいからではなく、色々と大人の事情があるということです。理由を知りたければ学園長や高畑先生に聞いてください。まあ、先生をやるからには本気でやりますが」

アスカの答えを聞いたクラスのみんなは疑問が強くなったようで、高畑に問いかけるような視線を向けている。

ここでアスカは高畑に目的を聞いてみたい欲求に駆られるが止めておいた。聞いても答えてくれないだろうし、問題になることも避けたいから。

どっちの道、愛想笑いを浮かべて生徒たちの問いを誤魔化している姿を見れば答えてくれるとは思えなかったから。

「そっそれじゃあ次は、身長と体重は？」

「前計ったときは確か身長は１４０あるかないか、だったと思います。ここ一，二年で自分でも信じられないほど伸びてますから今はどれだけか分かりません。体重も同じです」

教室内が何とも言えない雰囲気になってしまい、和美は雰囲気を変えるために次の質問を聞いてきた。

「アスカ君はどこから来たの？」

「出身は一応、イギリスのウェールズの山奥です。どこか分からない人は地図で調べてみてください」

ウェールズ自体はアーサー王伝説とかもあり比較的有名なので、インターネットで調べればすぐにでも出てくる。

「趣味と特技は？」

「趣味は料理と武術……だと思います。得意なのは中華とイタリアン、武術の方は本格的なところで学んでいたので自信はあります」

アスカの特技を聞いた出席番号１２番、古菲と出席番号２０番、長瀬楓の目が爛々と輝いて目が「闘いたい」と言っている。

アスカの自然体で立ち、軸のぶれない体。長袖であり肌がほとんど見えないがある程度引き締まった筋肉。細いながらも力強い掌と無骨な指から本格的に学んだという言葉に偽りがないことを彼女たちは悟っていた。

特に昨日の寮での騒ぎを見て丸め込まれた古菲の戦意は非常に高い。

そんな闘志全開の彼女たちアスカは極力無視しようと目を合わせないようにしていた。

「女性経験は？または付き合っている女性はいますか？」

「数えで１０の子どもに何を期待してるんですか？　付き合っている女性もいません」

それもそうだよね、と全員が頷いた。ていうかこういう質問ってセクハラじゃないか、とアスカは突っ込みたい。

「次で最後、一番の重要な質問です！　このクラスの子の中でタイプの生徒は誰ですか！」

最後の最後で一番力を入れてチェシャ猫のような笑みを浮かべて和美が質問をしてきた。その瞬間、クラスの全体から物凄いプレッシャーを感じた。

女子校なので普段は異性の接触など教師など数える程しかいない。その中で年下とはいえ男のアスカ意見は貴重なのである。

「そ、そうですね、みんな美人だし甲乙つけがたいですね。全員魅力的だとは思いますが、敢えて誰だと上げるとするなら……神楽坂明日菜さんと近衛木乃香さんですね」

アスカは生徒たちから向けられる無形のプレッシャーに少し怯みながらも全員を持ち上げてから、二人の名を出す。

『おおぉぉ！！』

名を出された二人にクラス中の視線が集まる。二人は自分が呼ばれるとは思っていなかったのか驚いた顔をしたり、はにかんだりして周りの席の人から突かれている。

「へぇ、二人を選んだ理由は」

「ココ（麻帆良）に来てから一番接している時間は長いですからね。他の人より好意的になるのは自然だと思いますよ」

あ、なるほどと至極真っ当な理由だと質問した和美と他の人達も納得した。初対面の人間やちょっとの時間一緒にいた人より、それ

より長い時間一緒にいた人の方が好意は抱きやすい。

「とまぁ、質問はここまでにして、これからクラスメイトになるから仲良くしてあげてね」

「は～い」

高畑が質問はそこまでと止め、クラスのみんなから元気な返事が返ってきた。

「うん、いい返事だね。それじゃあ席は……一番後ろの廊下側から二列目のエヴァンジェリンさんの隣りに座って」

見たところ、席は一番後ろの列がほとんど空いている。一番後ろの席で埋まっているのは、廊下側に座っているエヴァンジェリンの隣りだけ。

アスカは指定された席に向かう。指定されたのは一番後ろの廊下側から二列目、エヴァンジェリンの隣りで裕奈の後ろだ。何か作為的なものを感じずにはいられないが、通りがけの人に挨拶しながら席に座る。

「よろしくお願いします、エヴァンジェリンさん《後で時間をもらえますか、闇の福音?》」

アスカは言葉と共に念話を送ると、そう言うとは思っていなかったのかエヴァンジェリンは意外そうな表情をした。

その表情は本当に何も知らない少女のようであって、アスカは一瞬自分が間違っているだけではないかと疑念を抱いた。が、

「ああ、よろしく《私は放課後、屋上にいる。来たければ来るんだな》」

返事と共に念話を返して来たエヴァンジェリンの興味を引いたような声と一瞬だけその唇が笑みの形を作ったのを見て、それこそが勘違いなのだと思い知った。

アスカが席に座った後は、互いを見ることなく前だけを見ていた。

自分で授業をする際の参考にする為に此処の教師がどんな授業をするのか――――そして放課後どうするかを事前に考えていた展開を思い浮かべながら考えていた。

――――――屋上

約束通りアスカは放課後に屋上に向かっていた。授業が終わっても教室に残って何人かと話していたが、トイレに行くと言って抜け出してきた。

屋上の扉を開けるとエヴァンジェリンとその後ろに茶々丸が立っていた。元々二人しかいないが念のため認識阻害と人払いの結界を張る。使い慣れた魔法なので、詠唱することなく指を鳴らすだけで発動できる。

「ほう、大した術式構築と展開速度だ。一般魔法使いのレベルを遥

かに越えている。魔法使いとしては三流以下と聞いていたが面白い。で、私に何のようだ」

エヴァンジェリンはアスカが発動した魔法の術式と展開スピードを見て確かに感心していた。たった二つとはいえ、この二つに限れば魔法学校卒業とはとても思えず、魔法使いとしては三流以下と聞いていたので驚きもあった。

エヴァンジェリンがアスカのことを知ったのは、ほんの少し前である。なので、旅をしていたことなど詳しい情報を知るよしもない。

故に表層の情報に騙される。

１０歳未満の子供が旅に出るなど考えられないのだから彼女がそう思ってしまうのも至って普通ではあるが。

「『闇の福音』にお願いがありまして、聞いて頂けるなら貴方にも耳寄りな情報を渡しましょう」

「ほぅ、耳寄りな情報ね。それに英雄の息子が「悪の魔法使い」に頼み事とは面白い。いいだろう言ってみろ」

他の誰かならこの申し出も一蹴していただろう。アスカが張った結界によって若干の興味と、やはり『ナギ・スプリングフィールド』の息子だというのが大きい。

エヴァンジェリンは、サウザントマスターに掛けられた【登校地獄】という呪いによってこの麻帆良の地に封じられて、もう１５年の月日が経っている。サウザントマスターは三年経てば呪いを解きに来ると言ったが、三年経っても来ず１０年前に死んだという情報

が流れた。

麻帆良

ここはエヴァンジェリンにとっての牢獄だ。三年毎に中学を卒業した人間に忘れられ、また一からやり直す。そんな日々に多少の変化があったのは2年前に絡繰茶々丸が私の元に来た事ぐらいだろうが、他は何も変わらない。

そんな中でサウザントマスターに双子の息子がいることを知った。

それを知ったエヴァンジェリンに生まれた感情は、歓喜と絶望という相反する感情。歓喜は自身の呪いをその血があれば解呪できる存在がいること。絶望は少なくともあいつには子供を生ませる相手がいたことと迎えに来なかったことだ。

息子の存在は現状の打破という希望を生み、もはやサウザントマスターが自身の物にはならないという諦めざるを得ない事実を生み出した。

エヴァンジェリン自身でも気付かぬ内に呪いの解呪という希望だけを残し、他の感情からは目を逸らした。そしてサウザントマスターの息子達がこの麻帆良に教師として来る事を知った。

最初は何故教師にと疑問に思った。だが、そんなことはこの忌々しい呪いさえ解ければどうでもいいことだった。調べたところでは解呪の可能性が高いのは双子の兄の方。呪いを解くにはサウザントマスターの血縁の血が必要なのだ、それも魔力を充分に含んだ血が。

弟は生まれたときは兄よりも魔力が上だったが、八年前から魔力が一般魔法使いレベルにまで低下している。

魔力が減退したり理由は不明でそれは今も変わらない。魔力量が少ない弟では解呪の可能性は兄より限りなく低い。だからこそ狙うなら兄の方だ。

現状では見習い魔法使いの兄の方でも、今の魔力がほとんどない状態では勝てる可能性は低い。それに本当に魔力がないのは呪いの影響なのかという疑いを持っている。

2月には奴らが来るからそれまでに準備しておくつもりだったのだが、情報を知って直ぐに出来損ないの弟が生徒としてクラスに編入してくるらしい。

準備不足は否めなかったが、出来損ないの弟なら気付かれなければ問題はないだろうと高を括っていた。確かに並み以上に体術は出来るみたいだがある意味予想通りというべきか魔力も一般魔法使いレベルよりかはあるが、エヴァンジェリンの求める領域には遠く及ばない。一瞬だけ違和感を感じたが気のせいだと直ぐに忘れた（アスカが旅をしていたことを知らず、表向きにはアスカは留学していたことになっている）。

弟の方、アスカの席が隣になり、闇の福音と知りながら念話を送ってきたことには多少の驚きを持った。呪いは解かれる事無く、今もこの地に縛り付けられ鬱屈した日々を過ごしている中で、闇の福音と知って接触してきたことにカンフル剤になればと思って申し出を受け、万が一を考えて茶々丸を連れて屋上に来た。

アスカが来るかどうかは半々だが、来れば暇つぶしぐらいにはなると考えていた。

（興味は引けたか。流石は真祖の吸血鬼。六百万ドルの高額賞金首

なだけはある。封印されているとは威圧感が半端じゃない）

ふぅ～と心の中で息をつく。少なくとも聞いてはもらえることに安堵して、僅かに強張っていた肩から力を抜く。

それでも何時でも戦闘に移れるように意識のギアは上げたままにしておくことは忘れない。アスカは吸血鬼の恐ろしさを知っている。例え封印されていようとも楽な相手ではない。

「まず一つ目、この学園で善悪の区別なく情報を持っている人を紹介して欲しい」

大体の情報は知っているが、情報源を聞かれたら答えられないものが多い。聞かれることになっても此処から聞いたと答えられる情報源が欲しい。

これには組織の枠に囚われていないものが適任で、善悪の区別なくなのは偏った考えだと情報に間違いがでるからだ。

情報漏えいになっても、いざとなれば目の前の吸血鬼（エヴァンジェリン）に責任を押し付ける気満々であるが。

しかし、もし目の前の吸血鬼（エヴァンジェリン）がアスカの危惧してた通りでなければその限りではなく、潔く罰を受ける気でいる。

「ふむ、それなら同じクラスの龍宮真名に聞くといい。依頼料さえ渡せば、大抵の情報は手に入れられるだろう」

なるほど、と納得した。昨日、オープンバーで餡蜜を食べ過ぎてレジでお金が足りなくなっていて困っていた様からは想像できない

が、事前に仕入れている情報を考えてももっとも妥当な線だった。
金を貸したが返して貰わねば、と少し思考がずれた。

「そう言えば何故『闇の福音』が中学生なんかしてるんです？」

「お前の父親（サウザンドマスター）が、『登校地獄』と言うふざけた呪いを私に掛けたからだろうが！！」

確認の為に聞いたが、聞かなければ良かったと思うほどに怒髪天になったエヴァンジェリンは掴みかかって来そうな勢いでアスカに言うがそれもやがては勢いを失っていく。

「三年経てば解きに来るとかいいながら奴は来なかった、しかも１０年前に奴が死んでせいでこの呪いは未だに解けん」

ついには項垂れてしまったエヴァンジェリンを前にアスカは困り果ててしまった。

泣いているようにすら見える見た目少女に過ぎないエヴァンジェリンを敵視し続けることは難しい。さてこの情報を言ったらどんな反応をするか。

「情報に齟齬がありますね、兄さんの話だと６年前に会って杖をもらったそうですよ。実際に僕も遠目からですがそれらしき人を見ましたし」

まあ『登校地獄』とか言うふざけた呪いを掛けられて、１５年もここに縛られたらこうなるのは普通だろう、それどころか良く耐えたものだ。

「そんな……奴が……サウザンドマスターが生きているだと？」

癇癪を起こしたようにエヴァンジェリンが怒り出したが、アスカが話し終わると俯いて肩を震わせ、信じられないように問いかける。

生まれた希望が費えるのを見たくなくて目を逸らしながらも絶望したくないと思っている。だけど、今度こそは、と希望から目の奥が揺れているのを見てしまった。

「ええ、実際兄さんは持っていなかった杖を持っていましたから間違いなしでしょう」

「フ…フフ、ハハハハは、そうか奴は生きているか。そいつはユカイだ。ハ……殺しても死なんような奴だとは思っていたが、ハハハそうかあのバカ、フフハハまあまだ生きていると決まった訳じゃないがな」

いきなりエヴァンジェリンは思い切り笑いだした。前後の話しをしらない人間がこの場面だけを聞いたら狂ってるとか思いそうだな、と見当違いのことをアスカは考えていた。

だが、仕方のないことかもしれないと同時に考えた。二人の間に何があったかは知らないが十五年の間にあった思いはそれほどに強く……そして重い。

「嬉しそうですね、エヴァンジェリンさん」

「ハイ。ここまで嬉しそうなマスターは初めて見ました」

エヴァンジェリンは笑いっぱなしなので、エヴァンジェリンの後ろにいた茶々丸に話しかけると、機械仕掛けだけど何処と無く嬉しそうに見えた。

それが本当に人間らしく見えたのでアスカは一瞬見惚れてしまった。

「は～、そう言えば貴様、父親の事なのにさほど興味がなさそうだな」

単純に呪いが解ける可能性が高まったからか、それともかつて求めた男が生きていた事を喜んだのかどうかはエヴァンジェリン自身にも分からない。

それでも一頻り笑って落ち着くと、アスカが父親の事を話しているのに興味なさそうな態度が気になってエヴァンジェリンは問いかけた。

「実際ほとんど興味ありませんからね。確かに英雄として見れば最高でしょうけど、父親としてみれば最悪ですからね。遺産は全くなしで養育費は親戚が出してくれましたが、ほとんど育児放棄状態。死んでいるから育てられないのは仕方ないと思っていましたが、実際には生きていましたし。しかもサウザンドマスターの残した厄介事を押し付けられるし、これでも愛せと言うですか？」

アスカの言葉に、エヴァンジェリンは、思わず口をあけて唖然としてしまった。

親に向けてはあんまりの内容だが、逆に納得もしてしまった。

少なくともナギは魔法使いの間では英雄と呼ばれていた。父親が英雄と呼ばれていれば普通なら憧れても不思議ではないのだが、理由を聞けば成る程と納得できるものだ。

確かにサウザントマスターは英雄ではあったが、父親としては失格だ。アスカは直接サウザントマスターと会ったことは無いと言うし、少なくとも生きていたのならやりようはあったはずだと思った。

「英雄の息子」という肩書きはなにかと得にはなるだろうが、アスカにとっては害悪にしかならないと思わせる発言であった。

「話はそれだけです。他になにかありますか？」

「待て、お前の力を確認したい」

これで話は終わりと思い、アスカが結界を解除しようとするのをエヴァンジェリンが止めた。

「力、ですか？」

「ああ、だから後で私の家に――――」

どれぐらいの力量があるのかアスカの力を確認したいから引き止めたエヴァンジェリンは、「後で私の家に来い」と言おうとした瞬間、背後から何者かに後ろから首に手を掛けられていた。

「――――何者だ、貴様……！」

言葉の途中に、何時の間に現われたのか玉藻がエヴァンジェリンの後ろに回り首に手を掛けていた。

十五年にも及ぶ怠惰な生活はエヴァンジェリンから牙の鋭さを奪っていた。鈍っていなければ事前に気づくこともできたであろう。

確かに油断はあった。だが、それでも背後にいる相手が全開時に自分でも油断ならざるべき敵だとエヴァンジェリンは直感した。

（ここまでは予想通り、さて上手く行くか？）

ここまではアスカが想定した通りに物事は運んでいる。

最初にエヴァンジェリンの興味を引き、追い求めているはずの男の情報を与えて釣る。そして１５年の間に錆びついた感覚の隙をついて、事前に潜ませておいた玉藻が拘束する。

事前に思い描いていた人物像に修正の必要はあったものの良い意味での誤差だった。

だが、ここからが今回の会談の本番だ。ここまでのは全てエヴァンジェリンを油断させるための布石に過ぎなかったのだから。

「我が名はアスカが僕（しもべ）、玉藻。下手に動くなよ。動けばその華奢（きゃしゃ）な首、へし折らせてもらう」

「マスター！」

「動くなよ、茶々丸。こいつは本気だ」

茶々丸もまた、エヴァンジェリンと同様で玉藻の動きを観測できておらず、声を上げて近寄ろうとするも、流石は六百年を生きた吸

血鬼と言うべきか、些かの同様も見せず、玉藻の宣言通りになる結果が見えて静止する。茶々丸も主に言われれば動くことが出来ず、その場から動けない。

如何に真祖の吸血鬼といえど首を折られれば治癒まで暫くの行動は不可能。しかも、封印状態では治癒の速度もかなり遅い。ここまで用意周到ならば自身を殺す術、拘束する術の一つや二つはあるのだろうと予測した。

「なんのつもりだ、貴様」

背後にいる者の言う通りのなら主はアスカということになる。

エヴァンジェリンは行動の意図を探るために、マグマすらも凍てつくような絶対零度の視線をアスカに向ける。

「一つだけ聞きたいことがあってね――――――答えろ『闇の福音』。貴様は人を喰らい害なす存在か？」

常人なら失神しそうな絶対零度の視線を向けられたアスカは堪えたようもなく、逆にエヴァンジェリンを呑みこむが如く殺気と共に問いかける。

「嘗て俺は吸血鬼に会ったことがある。そいつは人間を、血を生み出す家畜の如く扱っていた。あんたはどうだ？」

こんな脅しのような状況で問うのは卑怯だろう。だが、もし、エヴァンジェリンが同じだったなら取り返しのつかないことになる。昔、対峙した吸血鬼を知っているが故にエヴァンジェリンという存在を見極めなければならない。

十五年も学生をやっているから、封印されているから、なんていう要素では安心できない。それだけの絶対悪を、歪んだ吸血鬼というものを知っているから。

「……ふん、私にそんな気はない。そんな下種と一緒にするな」

「……」

嫌悪の表情を浮かべるエヴァンジェリンの心の奥を見破らんとばかりにアスカは沈黙したまま凝視する。数秒か、数分、もしかしたら何時間も経ったのではないかと思うほどに殺気を孕んだ緊張感が続く。

「――――申し訳有りませんでした、レディ。あなたは確かに悪でしょう。だが、下種ではなさそうだ」

そこに嘘はないと判断したアスカは、目配せで首を持っていた玉藻を離れされ、深々とエヴァンジェリンに謝罪する。

彼女の言う通りあの下種（件の吸血鬼）とは違い、確かな悪ながらも一線を越えていないことが分かったからだ。

嘘ではないという保証はない。が、信じるに足るだけのものが見えた。それに嘘であったならば責任を取って狩るだけだ。

「この謝罪はまた後ほど」

「まあ、同属に会ってそいつがそんな考えを持っているなら疑われるのも仕方あるまい。が、もしや謝罪程度で済ませられると思って

いるのか？」

エヴァンジェリンが首を摩りながら気にする茶々丸に大丈夫だと伝える。

アスカの無礼を許すも、脅してきたアスカと何時の間にかアスカの後ろに立っている玉藻に虚仮にされたのは変わらない。二人の間に流れる緊迫感は変わらないままだ。物理的な壁を持ちそうなほどに互いに殺気が放たれている。

「献血程度の血液ぐらいなら提供しましょう。勿論、操り人形にされないように監視はさせてもらいますが」

「ふむ、良かろう。致死量に達さぬこと、決して操らぬことは確約してやるから血を貰うとしようか」

エヴァジェリンとしても先程の騒ぎの対価としてナギの血縁の血を無償で手に入られるのは得となる。虚仮にされた自分の気持ちを抑えれば実を得られるのなら我慢できる自制心はあった。

条件としては決して悪くない。

アスカという存在は既にエヴァンジェリンにとってジョーカーになりつつある。玉藻の力はこうして対峙しながらも完全に計れないながらも全開時でも油断ならぬ相手であることは察することが出来た。

その玉藻の主であるアスカが弱いはずがない。流石にあの齢（よわい）で玉藻以上であることはないと思うが、それらの情報を知らずに魔法学校卒業という情報だけを鵜呑みして襲えば痛い目を見ていたのは間

違いない。

現状はまだ敵対するまでには至っていない。二人が着任する情報を掴んで、次の満月の夜から吸血活動を予定していたので、それがバレていれば危なかっただろう。

当初の目的であるナギの息子の血を得られるという点でも十分なメリットだ。

生徒などを襲って血を吸うのは存外に危険（リスク）が多い。幾ら吸血鬼化しないといってもバレれば目を尖らせる人間は多いだろうし、最悪の場合には討伐される可能性もある。下手をする気はなくても穴というのはどこにでもあるものだ。

アスカの魔力はエヴァンジェリンの望むレベルにはない。致死量を吸っても呪いが解けるとは思えないが、アスカの血を飲んだ方が一般人の血液を飲むよりも遥かに効率がいい。

それにアスカや玉藻にも興味が出てきた。この緊張感は封印されてから久しく味わっていない。二人とも一筋ではなさそうだが最低限暇つぶしぐらいにはなるだろうと考えていた。

「ならば上々」

互いに合意できたことでアスカはパチンっと指を鳴らし、張っていた結界を解除する。それと同時に屋上の扉がガチャっと開き、木乃香がやってきた。

何時の間にか玉藻の姿がないことに気づいて、エヴァンジェリンは舌打ちして自分が鈍っていることを自覚せずにいられなかった。

「あ、アスカ君此処におったんやね」

「どうかしたんですか、近衛さん？」

「フン。用がないなら、さっさと帰れ」

エヴァンジェリンとしてはもう少しアスカと話をしたいこともあって木乃香を追い返そうとする。

「あら～。エヴァちゃんもここにおったんやね。二人で何しとったん？」

何時も通りポワポワとした笑顔の木乃香は、アスカが遮って見えなかったエヴァンジェリンがいたことに気づき、知り合いではなさそうな二人が何をしていたのか気になって聞いてみた。

「エヴァンジェリンさんは父の知り合いなので、いろいろと教えてもらってたんですよ」

木乃香に言ったことは満更嘘でもないが、決して正しいと言えない。かといって魔法のことを知らない木乃香に真実を話す訳にもいかず、先程の事は何も無かったように誤魔化す。

「それで、どうしたんですか？」

「ああ！実は、アスカ君の歓迎会の準備ができたから呼びに来たんや」

「そうですか。じゃあ行きますか。ほらエヴァンジェリンさんも」

アスカが用件を尋ねると、木乃香はアスカを探していたことを思い出し、教室に来るように誘う。それに納得したアスカもエヴァンジェリンを誘った。

「ふん。たまにはいいだろう。行くぞ、茶々丸」

「はい、了解しました」

エヴァンジェリンは何時もなら歓迎会などには出ないが、今回は興が乗ったのと誘われたこともあって茶々丸を連れて参加する気になった。

「あ、すみません。先に行っていてください」

「どうしたん？」

「いえ、元々トイレに行くつもりだったんですけど行けてなくて」

四人で教室に向かっている途中に、アスカが先を促すも、答えたアスカの言葉に、そう言えば教室を離れたのはトイレに行くためだったと思い出した木乃香は、少し赤くなった。

「「「……」」」

我慢の限界なのか少し走り気味なアスカの背中を見送る三人だった。

女子中等部の校舎に男子用トイレはない。そもそも『女子』中等部なのだから生徒用の『男子』トイレがないのは当然である。なの

で、アスカは唯一の男子用トイレである職員室の横にある教職員用の男のトイレに入った。

「ふぅ～、封印されたとはいえ、流石は『闇の福音』。まだ手が震えているよ」

トイレをするわけでもなく、入り口のドアに靠れたアスカは大きく息をつき、いまだに震える右手を左手で押さえつける。

あれ以上は腕の震えを隠しておくのも限界だった。多少強引ながらも離れたのにはそういう理由があったのだ。

「封印されていなければ今頃八つ裂きになっていたかも……玉藻、僕は彼女と戦って勝てるかな？」

凍えるような視線を思い出してブルリと総身を震わせ、仮定を思い浮かべたアスカは相棒に自分は戦って勝機があるかを尋ねる。

《どうだろうな、今の状態なら九十八％の確率で勝てるだろう。封印が外れれば……まあ、百回やって一回勝てれば奇跡と言ったところじゃろう。それもあくまで予想で、向こうが手札を隠していないと仮定しての話しじゃが》

「きついね～。しかし、今は本気で敵対するのは不味いか」

内にいる玉藻の冷静な判断を聞いて苦虫を踏み潰したような表情を浮かべるも、自身が予想した結果とそう外れるものではないので納得する。

十五年も麻帆良に縛られているなら安心など油断する気は毛頭な

い。逆に十五年も縛られているからこそ、そろそろ解決策を見つける可能性が高いと考えた方が自然だ。数分程度の会話から決して彼女が力だけの愚鈍な者ではないことは分かっている。

ナギというプラス要素があったからこそ、最終的に今の状態にもっていけただけの話。現状では何時敵対してもおかしくない関係だ。

もし、彼女がアスカの知っている吸血鬼と同類であったならば、周りに犠牲を出す気はないがどんな手を使おうとも確実に滅ぼしていた。そもそもそんな吸血鬼なら幾らナギや学園側も滅ぼしていただろうが。

《主はまだまだ成長期にある。必ずあの領域に辿り着くことは保証するが、暫くは最低でも不干渉にするのが妥当じゃろうな》

「全てはこれからの対応次第……か」

やれやれとばかりに肩を竦ませてトイレを出る。

最悪の敵となるか、最強の味方となるか、現状では分からない。それこそこれからの対応次第だ。最低でも最悪の敵とならないように努めるばかり。

「やれやれ、ここでも退屈しそうにはないな」

その言葉通り、教室についた後は歓迎会を楽しみ、既に半分以上の人はこの三日間で会ったことがあると聞かされて知らなかった人が騒いだ。

真名に貸していたお金を返して貰ったり、裕奈とまき絵の口から、

自分達が不良達に絡まれてそれをアスカが倒したことを話してしまい、周りの人たちがそれに驚いている中で、爛々と目を輝かせて戦いたそうな格闘系の人達（楓、古菲）やアスカの実力を探る人達（エヴァンジェリン、茶々丸、刹那、真名等）の目が非常に痛かった。

サングラスの事は聞かれたから説明し、明日菜や木乃香に見せた時にあまり良い感情をもたれたなかったことまで説明すると、みんな蒼い顔をして納得してくれた（これで誰も遊んで取ろうとはしないだろうというアスカの目論見通り）。刹那が青い顔をしているのを見逃さなかった。

第十九話　　白鳥と傭兵と少年（前書き）

風邪引いた。

２１時の段階で３９．７℃もあって死にそう。

だが、更新はする。

明日仕事行けるだろうか？

文字数は１０２７３字です。

第十九話　　白鳥と傭兵と少年

アスカが生徒として転入してから一ヶ月が経ったある日、アスカはエヴァンジェリンから教えてもらった情報を確認するために、女子寮の龍宮真名の部屋を訪れた。桜咲刹那と同室だったことには驚きはしたものの、裏関係者なら同室にした方がやりやすかろうと逆に納得もした。

「こんにちは」

「いらっしゃい、アスカ君」

アスカを出迎えたのは真名。事前に連絡してあったため問答することなく普通に部屋に招かれる。

本当なら直ぐ来る尋ねるつもりだったのに遅れたのには理由がある。学生をやる以上は勉強しなければならず、英語や数学は問題ないが、日本史などの日本固有の教科は一から覚えなければならず、日本に来る前から勉強していたものの時間が短く追いつくために勉強漬けの日々を送っていたためである。

睡眠を削るほどではなかったが、食事と睡眠以外の時間全てを勉強に傾けるという受験生もかくやというほどの状況であった。

その勉強に対する姿勢は、勉強が苦手だった明日菜を宿題以外で自発的に机に向かわせるほどだった。

一ヶ月も知識を詰め込む続ければ少なくとも赤点を取らない程度にはなったと考え、ようやく時間に余裕が出来たので来たのだ。ち

なみに明日菜の方はイマイチ結果が振るっていない。

「今日はエヴァンジェリンさんの紹介で仕事を依頼しに来ました」

「ほう、面白い。で、内容は？」

卓袱台を間に挟んで刹那が入れた茶を啜り終わったアスカは居住まいを正して言うと、真名は言葉通り面白そうに唇の端を上げて内容を尋ねる。刹那も興味があるのか二人を俯瞰できる場所に座って眺めていた。

事前に真名は、アスカが生徒として編入してきた夜に部屋で銃の整備をしているときにエヴァンジェリンから電話を受けている。内容はアスカに自分を情報屋として紹介したというもので、尋ねたのはポーズに過ぎない。

依頼料が貰えるのなら構わないがアスカが「英雄の息子」であるという情報を事前に掴んでいるので、わざわざ金を取る自分でなくても直接学園長にでも聞けばいいのではないか、と思ったのだが、エヴァンジェリン曰く「傭兵という学園に直接関与しない者の方が信頼できるらしい」のだそうだ。

初めて会った時からアスカに対して妙に親近感が湧くことに気づいていた。完全な初対面のはずなのにそんな感情を抱く自分に頭を捻っていると、首に掛けている勾玉型の写真入れが目に入り、ようやく理解した。

前のマスターだったコウキにアスカはどことなく似ているのだ。年齢も大分離れているし、容姿も全く違うが身に纏っている雰囲気や、人が困っているときにさりげなく声を掛けてくるところが似て

いるのだ。

コウキとアスカを同一視するつもりはないが、コウキとどこか似た少年を見ていると懐かしくなる。それが親近感の正体だった。

だが、そんな二人の予想を裏切る言葉がアスカの口から出てきた。

「クラスにいる魔法関係者とその関係者の情報を教えて頂きたい」

一瞬の後、沈黙が部屋を支配するも、理解が追いついてきた刹那がやはり木乃香を狙う襲撃者だったのか刀を構えて濃密な殺気を放ち始めた。真名も疑いを持って威圧するがアスカには全く気にした様子がなくい。

「刹那、少し待て。アスカ君、何故そんなことが聞きたいのか理由を聞きたい」

その様子から何か理由があるのではないかと考え、今にも飛び掛りそうな刹那を抑え、理由を問う。刹那も真名に言われて一度刀を鞘に収めるが、何時でも抜けるように構えたまま警戒は解かない。

「何をするにも情報は大事ですから。利用したり気も、悪意もありません。なにかしたらこの首を差し出しますよ」

アスカは素人でも分かるほどの殺気をまるでないものの如く扱い、気にした様子もなく暖簾に腕押しで気楽に手を振りながら答えた。

(気にする必要がないのか、気付かなかったのか。なんとも判断しづらいな)

少なくともこの麻帆良でも上位に位置する二人が威圧したにも関わらず、アスカは全く気にしていないように見える。単純に気がつかないほど鈍いのか、それとも気にする必要もないのか。前者なら問題はなく、後者なら余程の実力者だということになる。

体術が出来るのは動きを見ればある程度分かる。アスカは魔法を殆ど使えないという情報があるが、それを鵜呑みにして弱者と判断するには時間も情報も足りない。

「依頼料については……」

「ああ、今回は初回サービスで安くしよう。私は餡蜜が好きでね。奢ってくれればいい」

「は……？」

こちらが振り回されてばかりで、あまりに澄ました顔をされているから依頼料の話になった時に、仕返しの意味を込めて意表をついてみたが、このアスカの顔は面白かった。

サングラスで目が見えないから分かりづらいが、呆然とした顔をしていたから真名は一本は取れたことを確信し、笑みを深める。驚くような顔を見たことがないので新鮮であった。

それと偶々、財布を忘れた時にお金を借りたという借りがあるので、それを返す意味で格安にした。

どこそこの護衛や、妖怪や悪魔の退治などの金が掛かるものでもなく、クラスの情報ならば学園長にアスカが聞いてきたとでも言えばタダで手に入る。そも、既に把握しているのでその必要もなく、

必要経費も手間もかからないことから考えれば、奢ってもらうことで真名には十分にプラスになる。

お互いに条件に納得して契約が完了し、簡単な情報は口頭で伝えて詳しい情報は後日に渡すことになった。

「ということは、やっぱり桜咲さんは近衛さんの護衛だったんですね」

「知っていたんですか？」

簡単な情報を口頭で伝えていた時に木乃香の話が出た時のことだった。

刹那が木乃香の護衛であることが話題に上がると、やはりという感じに頷くアスカに前から聞く前から知っていたような仕草を見せたので刹那が問いかけた。

「まぁ、あれだけの魔力と関東魔法教会と関西呪術協会の血縁であることは知っていたので、幾らお膝元でも護衛がいてもおかしくはないと思ってましたし、それに桜咲さんは僕が来てからの初日に近衛さんを尾けていたでしょ？」

「へぇ、刹那の尾行に気づいていたのか」

「かなり分かりやすかったですけどね。近衛さんに近づくと僕にだけ殺気が突き刺さりましたし」

単純に刹那の尾行技術自体が大したことないので気づくことはそう難しいことではない。事前の情報がなければ、逆にストーカーか

と思ったのはアスカだけの秘密である。

というか客観的に見れば刹那は木乃香のストーカーだ。

「それはそれは……刹那よ、お嬢様恋しと言えどそれはどうかと思うぞ」

「あぅ……」

真名のからかいの言葉に、未熟を指摘されたこともあって刹那の顔が朱に染まる。

それも少しの間だけで、刹那は何かを決意したように顔を上げ引き締める。

「お嬢様は裏のことをご存知有りません。私は護衛として木乃香お嬢様をお守りすることだけです。私は……お嬢様を守れれば満足なんです」

『私』を捨てて『実』を取る。まさに刹那の行動原理は『現代のサムライ』そのまま。

逆にアスカの行動原理は『武侠』と呼んだ方が適当だろう。『現代のサムライ』そのままを体現している刹那とは対極に位置している。

武士道の根源は主君への忠誠にある。滅私奉公というものだ。対して武侠の行動は義侠心に発する。主君のためではなく、友情のため、あるいは女のために命を捨てることは武士道では不名誉になるが、武侠の価値観では寧ろ本望。アスカはその気になれば生半可な

相手には負けないぐらいに強いが、誰かに命じられて、組織のために、という理由で、そこに自分の意思がないまま闘うことを良しとしない。闘う理由や正当性を他人に預けることができないと言ってもいい。

（主君の為に知られずに危険から守る侍（さむらい）、か。美談ではあるが……）

決意したように話す刹那の顔は、木乃香を守れることに誇らしげではあったが、アスカの眼にはどこか翳（かげ）りがあるようにも見えた。脆いようで、それでいて一途な戒めは、彼女が自分はこうでなければならないと無理やり型に嵌（は）めているような印象があった。

「だから、幼馴染なのに近づかないと？」

なので、少しだけ刹那を揺さぶってみることにした。

問うだけの理由を既にアスカは持っており、刹那が近づけない大凡の理由も見当がついているものの、本人が自覚しているかどうかを確かめたい。

「っ！？　何故、それを？！」

刹那が木乃香の幼馴染だということを知っているのは、麻帆良では当人同士と学園長と高畑ぐらいのものであろう。

余人が知るはずのないこと、更に護衛なのに一定距離から近づこうとしないことを悟られていることに、刹那は普段の彼女を知るものなら驚くほどに動揺を露（あらわ）にした。

「初日の時点で尾行に気づいていた、と言ったでしょ？　近衛さんに近づく度にあなたから殺気を向けられ、あなたは同じクラスにいた。なのに一緒にいる姿は見ない。そこに何か関連性があって聞いてみたんですよ。そしたら『初めての友達で親友』だと聞きました」

刹那が木乃香の護衛であることは知っていたので、初日の尾行や近づくたびに殺気を放たれたことを納得した。なのに、生徒として２－Ａに編入してからは、刹那の木乃香に対する普段の行動がやけにそっけないことに疑問を覚えたのだ。

で、当人に尋ねる前に木乃香に聞いたところ、先程の『初めての友達で親友』や刹那が怖い犬を追っ払たりして危ない時は守ってくれた話を聞いた。

しかし、木乃香が川で溺れそうになって一生懸命助けようとしてくれたものの、結局二人とも大人に助けられてからは、剣の稽古に忙しくなってあまり会わなくなり、木乃香が麻帆良に引っ越して中学一年生の時、刹那と再会してからは今のようにそっけない態度を取るようになっていた。

木乃香自身は刹那が昔のように話してくれなくなったことに何か悪いことをしたのかと、眼の端に涙を浮かべて気に病んでいた。

明日菜も木乃香が中学一年生の新学期の頃、落ち込んでいたことを思い出し、普段ならしない寂しそうな顔をしていた木乃香に、なんとなく理由が想像できていたアスカは仲直りできないものかと考えていた。

二人を仲直りさせようと決意した明日菜が行動を始める前に頼み込み、数日の猶予を貰ってアスカは行動を始めた。最初から真名に

仕事の依頼をしに来ただけではなく、予想を確認して本人の口から真相を聞くためでもあったのだ。

泣いていたことも合わせて、木乃香に聞いたこと、仲直りしたいことも全てを刹那に伝える。

「わ……私は……このちゃ……お嬢様をお守りできればそれだけで幸せで……！　いや、それもひっそりと影からお支え出来れば！」

木乃香の気持ちは痛いほどに嬉しいのに、それでも意地を張っている。傍にいたい、昔のように仲良くしたい木乃香と同じ気持ちがあるのにできない。

嬉しかった。ただ嬉しかった。　もう一度あの頃の様に、そう出来たらどれ程幸せだろう。　アスカに言われたように、自分だってそうしたいのだ。

だが、木乃香もアスカも本当の自分を知らないのだと、自身の中の後ろ向きな部分が待ったを掛けた。

木乃香の父である詠春は魔法や呪術、自分がそういったものに関わっていたからこそ知る、その世界の闇。せめて、自分の娘にはそういったものに関わらず普通の人として生きて欲しい。それが詠春の願いだった。故にそういった存在を隠していた。

だから、護衛である刹那も自分と一緒にいれば、彼女は何時かそういったものに関わってしまうかもしれないからと必要以上に木乃香に関わらないようにしていた。そういったものに関わらせないようにしていることを建て前として本音を隠した。

「……それは本心からですか？」

ＳＰと呼ばれる重要人物を護衛する者達は常に護衛対象の傍にいる。

理由は２つある。

１つは襲撃などがあった際、即座に対処するためだ。護衛対象が襲われるということを前提にしているのだから当然と言える。２つ目はもしもの場合、自身を盾にするためである。ＳＰとて万能ではない。隙を突かれ、護衛対象を凶刃に晒すこともありうる。それをさせないために、例え身代わりとなろうとも体を盾にして守る。それがＳＰの本分でもあるのだ。

そういう意味では刹那の場合、その両方を否定するかのようなものだった。

「本心です」

聞いてきたアスカに返した刹那の顔に一切の曇りはない。

それを聞いていた真名はやれやれといった表情をしていた。アスカの言ったことと似たようなことを真名も同じように考えたこともあるし、そうじゃないかと言ったことさえある。だが、刹那は今のように答えてしまうのだ。今回も同じ答えにまたかという心境だった。この時までは――――――。

「ふむ……」

思案しながら片手で顎を撫でていたアスカは徐(おもむろ)に立ち上がり、二人が疑問に思った次の瞬間には二人の目の前から姿を消した。

「ひゃっ！！」

と、刹那は背中ではなく、その背後に存在する羽を触らせて変な声を上げてしまう。他人に触られたことがないので敏感で、思わず悲鳴を上げて飛び上がり、そのまま尻餅をついた。

「おお、凄い柔らかい手触りだ」

混乱した刹那は、誰が見えないはずの人の羽に触っているのかと後ろを見ると、アスカが何もないはずの空間を楽しそうに撫でているのを見て固まった。

本人が出していないのにも係わらず、刹那の背中から羽が現出していた。

どうやって触っているのか、何故そんなに嬉しそうにしているのか理解できず、刹那が呆然とアスカを見ていると責めていると感じたのか、名残惜しそうに手を離して下に位置に戻った。

どこか満足気なアスカが座るまで真名諸共に固まっていた。。

刹那は最初言われたことが理解できずに固まっていたが、理解した途端飛び上がり、他に何も考えずただアスカをを切ろうと、脇においてあった竹刀袋から大太刀――――――夕凪を取り出して、鯉口を切ろうとしたその時、

「落ち着け、刹那！」

「は、離せっ！」

完全に刹那の思考の埒外にいた真名が逸早く刀を奪って、刹那の手の届く位置になく、投げても大丈夫なベッドの上に放り投げる。

何故これだけ真名が迅速に行動できるかというと、どんな反応をするかは分かっていたからだ。更に、この部屋で刃傷沙汰は困るので、夕凪を奪い返そうとする刹那の手を抑え込む。

刹那は他に何も考えられずアスカが木乃香に知らせる前に排除しようと、＜気＞まで使って拘束してくる龍宮から逃れようと暴れていたら、ポツリと呟かれたアスカの言葉に固まった。

「また触らせてくださいね」

恐慌が収まり、真名は刹那が直ぐに何かをしようとしない気配を悟って拘束していた手を離す。

力を失ってその場に尻餅をついた刹那は、恐怖にも似た緊張が身体を覆うが、ゆっくりとなんとか口を動かしていった。

「……あの、私の羽については何も思わないのですか？」

人に限らず、集団と言うものは異物を厭うのだ。その無思慮な反応は、しかし異物を含む事のデメリットを考えれば、ある意味健全な反応であり普遍的に起こり得る事なのである。

そんな扱いに晒され続けた刹那だからこそ、自身の正体を明かす事を躊躇う。

それを知って受け入れてくれたのは、詠春を始めとしたほんの僅かの人だけ。そんな彼をトップに頂く組織としての『西』ですら、けして安息の場にはなり得なかった。

他には、何も知らなかった木乃香。彼女だけだったのだ、隔意無く接してくれたのは。伸ばした手を取ってくれたのは。知られていないからこその、今の平穏を守りたい。

「？　いい手触りでしたよ。それがどうかしました？」

アスカの言葉がどういう意味か理解した刹那は心の中で『何も知らないくせに』と思った。知ればアスカは罵るだろう、化物と。そうすれば自身の羽を触りたいなどと二度と言わないだろう。

「……これが私の……本当の姿です……」

この時の彼女はあってはらないことに混乱していたのだろう。木乃香関連のことで動揺していた。だから、真名もいるのにその言葉の後に羽を晒した。

――――――バサァッ

刹那の背中に翼が生える。鳥のように羽毛に包まれた真っ白な翼が。人によってはまるで天使のように見える白い翼が花開いていた。

「どうですか、この姿……醜いでしょう……バケモノなんです……この体は……」

どこか寂しそうな面持ちで語る刹那。羽を晒しながら泣きそうな

顔を見られないように俯いて、自分は忌み子で化け物なんだと語った。

「……？」

化物だと罵倒されると思っていたにの周りの反応が何もないので、俯けていた顔を上げると先程までいた目の前にアスカの姿がない。

「あれ？」

「刹那、後ろだ、後ろ」

どこに行ったのかと周りを見渡そうとした瞬間、真名が声を掛けるのと同時に誰かが羽に身を埋めた感触を感じた。先程のように悲鳴は上げなかったが、慌てて後ろを見ると、先程のように幸せそうに自身の羽を触るアスカの姿があった。

（どうして、私は化物なのにそんな反応ができるの？）

と、刹那の内心は混乱の境地に達していた。気が付いたときにはアスカは私の羽から離れていて聞かずにはいられなかった。

「どうして私のこんな醜い羽を見てそんな幸せそうな顔ができるんですか！！」

「なんでですか？　化物どころから天使の羽みたいで綺麗ですよ」

だが、アスカは心底不思議そうに刹那の羽を見て、実に何気なく言った。

刹那は、本気で訳が分からないといった表情をしているアスカに、そんな顔をされたのは初めてのことで、かなりテンパっていた。悪い意味ではなく胸が締め付けられたかのように感じる。

「だ……だって、私は人間じゃないんですよ。それにこの羽の色は……烏族では不吉の象徴とされています」

トーンの低い、刹那の言葉だった。表情はさきほどと一変して暗いものとなっている。

今までそんなことを言われたことはなかった。生まれた里では忌み子、異端、禁忌と言われ忌み嫌われていた。結局それで里を出ざるをえなかったこの羽が刹那にはコンプレックスだった。

古来より、ヒトは自分と違う存在を排撃するという性質を持っている。だからこそ、異端者は異端者として害され、集団を石持て追われてきた。それがヒトに在らざるものであれば、その傾向はより顕著となる。人間は、人間以外の存在には優しくない。

だからこそ、桜咲・刹那は恐れている。

自分が何より大切に思っている、何にも変えて守りたいと思っている近衛木乃香に自分の正体を知られ——恐れ、遠退けられることを。

だからこそ、刹那は自分から護衛対象に近寄らないようにしている。近しくなければ、自分のことを知られる危険も減るし、恐れられることもないからだ。

「魔法世界では悪魔も普通にいますし、ハーフも別に珍しくはあり

ません。烏族では不吉の象徴とされているかもしれませんが、それを初めて聞いた僕にとっては綺麗な羽だとしか思えません」

彼女の表情は、どこか脅えているようにアスカは見えてしまい、下手なことをいってしまえば何かが壊れるように思われた。刹那は確かにアスカを見ているが、アスカの目を見ることはない。

だからこそ、アスカは本心を、思ったことをそのまま口にする。

それが本当の嘘偽りのない本心だと分かったからこそ、ただ、ただその一言だけで刹那の目に涙が浮かんできた。

「うっ……うっ……うっ……うっ……」

何かが変わったわけじゃない。それでも初めて羽を褒めて貰えて嬉しくて涙が止まらなかった。泣いている顔を見られないように両手を顔に当てて、声を押し殺すように泣いた。アスカが不器用に慰めてくれているのを感じながら、泣き続けた。

泣いたことが気恥ずかしくて、落ち着いてから部屋を見渡すと何時の間にか空気を呼んだ真名が部屋にいなかった。

「裏の事もあるかもしれませんけど、表にいるときは近衛さんと昔のような関係に戻ることはできませんか？」

「すみません、直ぐにはできません。少し時間をください」

刹那が落ち着いたのを見たアスカは裏のことは教えられなくても、普段は元の関係に戻れないかと提案する。しかし、刹那には今すぐに近づくだけの度胸がないので時間が欲しいと答えた。

それもそうだろう。今まで何年も疎遠で過ごしてきたのだ。直ぐに仲良くしろと言われても難しい。

「分かりました。そう伝えておきます」

答えた刹那に、たとえ僅かとはいえ進歩があったことを認識したアスカは笑みを浮かべて頷く。

これで万事上手くいくとはアスカも思っていない。上手くいくかどうかは当人同士と周りの助け、あとは少しの切欠次第だ。

「ところで、どうして私の羽を触ったんですか？」

仲直りさせるだけなら羽を触る必要はないはず。疑問に思って、もしかして自分の為なのかとちょっとドキドキしながら聞いてみた。だが、現実とは何時も無情なものである。

「へっ？触りたかっただけですけど」

「な……それだけですか！？」

何を言っているだとばかりに首を傾げながら、アスカは刹那の思いを軽く蹴っ飛ばしてくれた。

「それだけですよ、ではさよなら！」

驚きの連続で溜まったフラストレーションを発散しようとベッドに投げられた夕凪を手に取ろうとした時、刹那の行動を先読みしてアスカは立ち上がりさっさと部屋を出て行ってしまった。

その行動の素早さに、込み上げた怒りが行き場を失って彷徨い、溜息と共に拳を下ろす。

「ああ、そうそう。また羽を触らせてくださいね」

すると部屋を出て行った筈の彼がひょっこりとドアの影から現れて、それだけ言って返事を刹那の聞かずに去っていった。刹那はポカンとしたまま、閉じたドアを見つめてまた羽を触られる事を夢想して赤くなり、真名が戻ってくるまで一人部屋で身をくねらせていた。

「おや、もう終わったのかい」

寮に備え付けられている自販機に飲み物を買って廊下の壁に凭(もた)れて飲んでいた真名は、部屋から出てきて口元を笑みの形にしたアスカに声をかける。

「ええ、終わりましたよ。すみません、なんか追い出すみたいな形になってしまって」

「いや、気にしなくていい。私が勝手にやったことだ」

答えながら真名が空気を読んだとはいえ、結果的に追い出すような形になってしまったことを謝罪する。

あの後どうなったのか興味はあったものの、人に深入りしない性質の真名からすればあそこまでいたのも十分なぐらいだ。

それに刹那は木乃香を思って暗い雰囲気を出すことがあるので、

同室故にそれを改善してくれるならありがたい。

「ところで、どこまでが君のシナリオ通りだったのかな？」

一度コーヒーで口を湿らせ、真名はそうそうに本題を切り出した。

「なんのことですか？」

だが、問われたアスカは本当に何を言っているのか分からないように首を傾げていた。それを見て真名は一瞬、自分が間違っているのではないかと疑念に囚われるも、自分の勘と読みを信じることにした。

「刹那を誘導していただろ？　いや、そもそも君は本当に私の情報を必要としていたのかな？」

まるでアスカの行動は最初から全て分かった上で刹那を誘導しているように真名には感じられた。それに木乃香を関東、関西の直系だと知っていることからも事前に情報を仕入れていた可能性が高い。

初めから知っているのに、事前に知っていることがバレたら不味いから真名という情報源があったという裏付け欲しいだけ。真名は漠然とそれを悟っていた。

最初から知っていた上で行動している、それがアスカを見た上での真名の結論だった。

そして油断していたとはいえ、神鳴流剣士である刹那に悟られることなく背後に回ったアスカは間違いなく強い。その強さの一端を垣間見せたのが刹那の羽を触りたかったというのが変な理由だが。

「さあ、どうでしょうね」

アスカは真名の問いかけに否定も肯定もすることなく、はぐらかすように恍けた。真実か嘘か、アスカの笑みを見るだけでは判断がつかない。

そしてそれ以上答えることなく、アスカは背を向け、手を振って去っていった。

「――――ククク、本当に面白い。これから面白くなるだろうね」

真名が感じるのは、何(いず)れ訪れるだろう騒ぎの予感。その時、アスカは間違いなく騒動の種か中心になるだろうという予感を感じていた。少なくとも退屈することはないだろう。奇(く)しくもエヴァンジェリンが抱いたのと同じ予感を真名も感じていた。

真名は缶に残っていたコーヒーを飲み干し、一頻(ひとしき)り笑った後、刹那をからかうために部屋へと入っていった。

「お……おはよう……ございます」

次の日の朝、教室に入ってきた木乃香に会った刹那は意を決(けっ)して近づいて挨拶した。

「っ……おはよう、せっちゃん！」

アスカから話しを聞いていたのか直ぐに笑顔になって挨拶を返してくれる木乃香に、刹那は笑みが浮かんでくるのを止められない。

まだ挨拶だけしかできないが、木乃香の笑顔の為にこれから頑張っていこうと誓う。

思い返してみれば今まで挨拶も返さずにいて木乃香の寂しそうな顔をさせていた。刹那はその時になってようやく木乃香に悲しい思いをさせていることを理解した。

切欠をくれたアスカには礼を言わなければならないが、いざ礼を言おうとすると、また羽を触りたいと言われるのではないかと躊躇いを覚える。例え羽が綺麗だと言われても、長年のコンプレックスからは中々抜け出せないのだ。

「ま、これからでしょ」

そんなことを呟く金髪少年の姿が２－Ａで見られたとさ。

第十九話　　白鳥と傭兵と少年（後書き）

熱が下がったら前書き、後書きを追加します。

今はそんな元気がない。

第二十話　　人間不信気味の少女と少年（前書き）

前回の投稿の時は風邪で死んでました。

次の日も３８．０℃の熱があったのに仕事に行き、一日死にそうな感じで過ごしていました。家に帰ったら下痢と腹痛に悩まされて病院に行き、もらった薬を飲んだら火曜日には完治していた。

皆さんも風邪には気をつけてください。

文字数は１３，１７５字です。それでは、どうぞ！！

第二十話　人間不信気味の少女と少年

アスカが麻帆良を訪れて数ヶ月経って慣れてきた頃、とある休日に仕事用にと一人でパソコンを買いに出掛けていた。

どの道仕事でパソコンは必要だろうし、早い時期に書類を作っておくのも良いかもしれないと以前から考えていた。既に一台パソコンを持っているが、余人に知られてはならない情報も多々あり、仕事で使うには何かと問題が多い。

明日菜と木乃香はそれぞれ用事があるらしく、アスカは遠出をして電気店が多く連なる通りにやってきた。が、休日ということもあって人が多く、一本通りを外れてチラシを片手にどこか良いところはないかと捜していると、手に持った袋を抱えた地味目な眼鏡の少女が別の路地から現れ、アスカの前に出てきた。

（確か長谷川千雨さん、だったかな）

年頃の女子中学生にしては珍しい丸眼鏡をつけて首の後ろで髪を括った一見地味目な少女だが、アスカにはその眼鏡が視力の補正や遮光など、眼鏡の機能を目的としていない伊達眼鏡であることは分かっていた。

ファッションの一部としてはイマイチなので別に理由があると見ていた。普段からお祭り好きで常識外れのクラスメイト達と一線を画し、冷めた視線で周囲を見ていたので周りと同一視されたくないのか、それともなにかコンプレックスを抱えているのではないかと推測している。

周りの少女たちが騒がしいが故に逆にアスカの中で彼女の存在は強く残っていた。逆に目立っていることを彼女は分かっていないだろうが。

向こうはイアホンで音楽を聴いていてアスカが後方にいることに気づいていない。

――――――ドドドドドドドドドッ！！！

クラスメイトなので話しかけるべきか、それとも普段の様子からスルーした方がいいのか悩んでいると、後方から削岩機でコンクリートの地面を抉っているような音が聞こえた。

アスカの鋭敏な耳はかなり後方からだが音を捉え、後ろに振り返って確認すると工事用なのか重機がこちらに向かって来ていた。

いま二人がいる通りは大通りか一本外れており、歩道と車道の区別がない。大通りでは多く店もあり人が多いが、いま裏通りにはアスカと千雨以外の人の姿はない。

「危ないな……」

表通りに比べれば道が細いこともあってそれほどスピードは出ていないにしても、重機ならばもっと道の広い表通りを通るべきだろう。

数十メートル後方とはいえ、スピードが遅かろうがその大きさもあって迫力がある。

運転手はこちらに気づいていないのかスピードを緩める気配がな

い。呟きながら危ないと考えて道の端へと一人避けたアスカだが、前を歩いていた千雨が全く重機が後方から迫っていることに気づいているのか気になって視線を巡らせた。

「まさか、気づいていないのか！？」

重機の爆音染みたエンジン音よりも大きな音で音楽を聴いているのか、それとも何か別の理由があるのか定かではないが、避けようとしないということは気づいていないのだろう。

同時に重機もスピードを緩める気配がなく、前方にいるアスカや千雨の存在に気づいていないのかもしれない。

「ちっ！」

歩みを止めて脇に避けた所為で千雨との距離は離れていた。しかも、そうこうしているうちに重機はアスカの横を通り過ぎてしまった。

舌打ちをしながら膝を落とした次の瞬間、アスカの姿がその場から消えた。

「きゃっ！」

アスカの姿が消えたと思ったらその姿は千雨の直ぐ傍におり、突然抱えられて女の子らしい悲鳴を上げる。いきなり何者かに抱きかかえられた場合、彼女の行動は至って普通のものだろう。

（抱えられてる？！　なんで！　どうして！！）

引き寄せられて横に大きく跳躍したところまで分かるが、そうする理由に事情を理解していない千雨にはさっぱり検討がつかずに咄嗟に思いついたのが、

（変態か！！）

という至極最もなもので、彼女が取った行動も女性が取る行動で在り来たりなものだった。相手を確かめることもせず、千雨は言葉と共に腕を振るった。

「この変態が！！」

――――――バチン！！！！！

アスカの横っ面に綺麗に決まるビンタ。

平手打ちとは掌で相手の体を打つ行為、および相撲やプロレスなどの格闘技における殴打技である。一般社会では暴力・暴行行為の一種とされる。特に顔面（主に頬）をめがけて使用する場合は、俗称としてビンタとも呼ばれる。

ビンタという言葉は鹿児島弁のビンタ（頭部の意）に由来しており、頭部を打つ懲罰行為＝ビンタと誤解されて広まったものである。

「痛っ！」

迫り来る重機から千雨を抱えて避けるだけで精一杯だったアスカには千雨のビンタを避けることはできず、諸（もろ）に横っ面を張られた。それでもバランスを崩したり、千雨を落としたりしなかったのは流

石というべきか。

ようやく着地すると同時に千雨の耳からイヤホンが外れ、さっきまでは聞こえなかったエンジンの爆音と、自分がいた場所を重機が通り過ぎていくの見てようやく自分の状況を理解した。

（もしかして変態とかじゃなくて助けてくれた？）

自分を引き寄せたのはイヤホンで音楽を聴いていて重機が迫ってくるのに気づいていなかったから助けるためで、あんな重機に轢(ひ)かれたらただで済むとは思えない。良くて大怪我、悪ければ死ぬ。

そんな命の恩人に自分がしたことは助けてもらったことを反故にするようなビンタ。

「ご、ごめんなさい！」

下ろされた千雨が真っ先にしたのは頭を深く下げての命に恩人に対して謝罪。いまだに助けてくれた相手が誰かを確認していないのは彼女が慌てていたからだろう。

「ああ、気にしなくていいですよ」

（あれ？）

聞こえてきた声に千雨は心の中で頭を捻った。

標準的な女子中学生の体格を持つ自分を抱えることができるのは自ずと年上、大人に限られてくる。なのに聞こえてきた声は声変わりをした男性の言葉ではなく、かといって高い女性の声でもない。

断定はできないが未成熟な子供の声で、しかも聞き覚えがあるような気がした。それも毎日聞いているような……。

「ア、アスカ、アスカ・スプリングフィールド！！」

「ようやく気づいてくれたみたいですね」

動揺した所為か思わずフルネームで名前を言う千雨を前に、ビンタをされて赤くなった頬に手を当てたアスカが苦笑いを浮かべていた。

千雨が謝ったりやら何やらで慌しかったが、アスカの目的がパソコンの購入であることを知った彼女は恩返しと謝罪を兼ねて同行することになった。

店に行き、千雨がいい機種を紹介したアスカはそれを気に入り購入した（普通なら１０歳の子供が即金でパソコンを買えるはずが無いので、お金の出所が気になった千雨だったが経費か何かで下りるんだろうと思い聞かなかった）。

周辺機器も一緒に頼んだので宅配で送ってもらうことにして、二人で麻帆良へ帰宅の途についた。

基本的に二人とも常識人振っているのに非常識なところは良く似ている。

それに旅をしていたので無駄に社交性の高いアスカは相手との距離の計り方が抜群に上手い。麻帆良の異常さに気づいてからは人間不信の気があった千雨を、異常の筆頭でありながら普通に世間話が出来る関係――――つまり、世間一般的な『友達』と呼べる関係に近づいていた。

電車を乗り継ぎ、麻帆良に到着して女子寮への道すがらにまたまた騒動は起こった。

一台のバンと数台のバイクがやってきて止まり、合計１０数人の黄色と黒を基調にした悪趣味なストリートファッションに身を固めた少年たちが降りてきた。

「黒木さん、見つけやした。この金髪のガキですぜ！」

バイクに乗っていた少年が呼びかけると、バンのドアが開いて、金髪のオールバックにした大柄な男が現れた。眉は薄く、顔色は日焼けしたようにドス黒い。まだ二十歳前に見えるが、赤いシャツの胸を肌蹴て金のネックレスを光らせているあたり、不良を通り越して既に立派なチンピラの域に達している。

アスカの顔をしげしげと見つめた黒木は、合点がいかないという顔で周りの不良たちに尋ねた。

「おい、お前らこんなガキに痛い目に合わされたってのか？」

「本当ッスよ、黒木さん！　荒田さんもコイツにヤラれたんすよ、このガキをナメちゃいけねぇ」

リーダー格らしき黒田という男に、一人の少年が説明し、他にも何人かが口々に文句を並べ立てる。

「ええと……ああ、どこかで見たと思ったら昨日のナンパ君一号、二号とその他か」

集団の何人かに見たことがあるような気がして頭を捻っていたアスカは、流石に昨日のレスラー崩れのことは覚えていたので連鎖的に他のメンバーも思い出した。

「「「「「誰がナンパ君一号、二号とその他か」」」」」

上に向けた掌にポンとしているアスカに、名前すら出てこなかった者と、そうそうに逃げ出してその他扱いされた少年たちが纏めて突っ込みを入れる。タイミングがあっているので仲はいいらしい。

「ア……アスカ……」

自分たちが十数人ものの不良たちに囲まれており、周りは助けを求める視線を向けても進んで関わりにはなりたくない。中には携帯などで隠れて警察に連絡しているらしき人はいるが、見ているだけで助けに入る気はないようで孤立無援であることに気付き、恐怖に顔を青褪めて近くにいる知り合ったばかりのアスカの服を掴む。

この場面において一切の動揺も見せないアスカの方が異常なのだ。

「坊主。お前、自分の立場ってやつがよく分かってねえようだな。こいつらに怪我をさせてくれたワビは、きっちり入れてもらわねえとな！」

「詫びって……。悪いのは嫌がる中学生をナンパして、断られたからって強制手段に出ようとしたそっちで、こっちはそれを止めただけで、喧嘩を売ってきたのはそっちでしょうに」

アスカは心底呆れたように言って、それが真実だと察することが出来た見物人も軽蔑するような視線を少年たちに向ける。

「子供一人相手に数を集めないとまともに口も聞けないなんて格好悪すぎでしょ」

流石に付け足した言葉は言い過ぎたと思って、直ぐに口を閉じたが時既に遅し。

「てめぇ……！　ガキだと思って優しくしてやればつけあがりやがって！」

黒木の顔色がみるみる紅に染まった。子供に言われたことが、多少は自覚があったのか指摘されたのは屈辱だったらしい。黒木は発情した猪のように鼻息を荒げ、唇を歪めて部下に命じた。

取り合えず、周りの見物人やアスカ、千雨は「いや、全然優しくしてないし」と同じ事を思った。

公道にて突如始まった決闘騒ぎに、道行く人々は安全な所へ避難しつつも、安全地帯に収まると、その決闘の観戦を始めた。騒ぎの起こりやすい麻帆良ならではの肝の据わり様である。

「構うこたぁねえ……このガキに大人の厳しさを教えてやれ！！」

不良たちは待ってましたとばかりに歓声を上げて殺到した。

「……はぁ、しょうがない」

完全に頭に血が上ってこちらの話を碌に聞いていないことを悟る。それどころか逆に火に油を注いでいるだけだと嘆息して、一人目の懐に入り込み、畳んだ左腕をコンパクトに振り抜く。

アスカの掌底が、男の三日月――――――耳たぶの下にある下顎骨の尖った部分――――――にめり込んだ。問答無用で全力で放てば、容易く下顎が顔から千切れ飛ぶが手加減しているのでそんなことにはならない。

男の身体が、錐揉みしながら宙を舞ってあまり華麗ではない三回転半（トリプルアクセル）を決め――――当然の如く着地に失敗して、どしゃりと地面に倒れた。

その一瞬の行動を見届けてしまった男二人が固まり、そこにアスカが滑り込んで脚が二度閃いた。爪先が股間に突き刺さる。

「あげぇっ」

「おぶぅっ」

かなりの威力で蹴られたそれは、普通ならブーツの爪先と骨盤に挟まれ、睾丸がひとたまりもなく叩き潰されているところを直前で止められていたので潰れてはいない。

「一応、残しておいてやる」

自分で口の中のどこかを切ったのか、血の混じったピンク色の泡を吹いて悶絶する二人に、アスカは地獄の中で僅かな情を見せる。

三人を瞬殺したアスカは、続けて襲ってくる暴漢らへと向かって行った。

「クッ……この化け物が！」

「よく、言われます」

数分後には黒木を含めて全員が簡単に倒され、アスカは傷一つ負っていない。息一つ、汗すらも流していないアスカを見て黒木がそう言いたくなるのも分かる。

「お前たち、何時までそうやってる気だ！　さっさと立て」

変に根性があるのか黒木の命令に少年たちがフラつきながら立ち上がり、怒りに狂った眼差しをアスカに向けた。パチッという乾いた音と共に黒木の手にナイフが現れる。ナイフを持っていない者は、バンから木刀やバットや特殊警棒を持ち出してきた。

素手では敵（かな）わないと悟った彼らは各々取り出した武器を構える。

「いい加減に諦めたらどうです？　この上さらに恥の上塗り状態になりたいんですか？」

凶器を出してきた少年たちに周りが悲鳴を上げる中で、アスカは恐れ気も見せず、逆に嗜めるような口調で忠告してきた。そのいっそ不適とも取れる態度に、真っ先にナイフを取り出した黒木以外は戦慄を覚えて二の足を踏む。

刃物の弱点は主に二つある。一つは持った方も大きなストレスを負うことだ。躊躇なく刺せる人間はそうはいない。これみよがしに出した時点で素人であることは明白だ。

「くっくっくっくっ……」

しかし、当の黒木は気にしないのか、鈍いのか、はたまたナイフを持ったことで余裕に満ちた笑みを浮かべ、ナイフを持つ手に力を込める。

「死んだぜ、お前？　俺にナイフを抜かせて生き延びた奴は、今まで誰もいねぇんだからなぁっ！」

「――――」

黒木の言葉に、アスカは醒めた眼差しで周囲をざっと見渡した。当たり前のことではあるが、彼らは休日の人通りの多い通りのど真ん中で騒動を起こしているので注目の的になっている。

「少なく見積もっても五十人はいそうだけど、皆殺しにでもするんですか？」

「う、うるせぇっ！」

格好よく決めたつもりが冷静なツッコミを入れられ、黒木は顔を真っ赤にして怒鳴った。締まらないことこの上ない。

「下らねぇことを吐かしてんじぇねぇっ！　お前ら武器持ってんだ、ビビんじゃねぞ！　行けっ！！」

黒木にハッパをかけられた少年たちは奇声を発し、自分を奮い立たせてアスカに向っていった。

「はぁ〜、全く……」

アスカは横に回り込もうとする相手に向かって突進し、思いっきり振り被ってきた木刀を避け、がら空きになったところにすかさず鞭のようなミドルキックを食らわせる。「グエッ」と呻いて膝が折れて下がった少年の顎を肘で搗ち上げて意識を飛ばさせ、あっさりと一人目をKO。

木刀にしろ、バットにしろ、素人が攻撃する時は必ず振り上げる。この下がってしまえば殆ど攻撃を貰ってしまうので、懐に飛び込んでしまえば隙だらけになることが多い。

「面倒くさい」

左右から同時に攻撃してきた四人に対し、アスカは距離に応じてそれぞれ一人目が落とした木刀を拾っての突き、後ろ回し蹴り、裏拳、フックで応戦した。急所に当てて一撃で相手を昏倒させ、これで合計五人を倒したことになる。

「ヒュッ……」

一人の少年が突き出したナイフを避けて、引き戻す瞬間を逃さず、アスカはその切っ先を右手の二本の指で挟んだ。瞬間、ナイフは空中に固定されたように停止し、ナイフを引こうとした少年の身体の方がアスカの方に倒れるように引き寄せられる。アスカは空いている左腕を素早く倒れ込むような形の男の首に上から回し、頚動脈を

押さえて落とす。息を漏らすように吐いて気を失った。

刃物を持つことでのもう一つの弱点は、刃物一本（片手）の攻めになりがちな点だ。冷静に見れば手足四方向からの突きと蹴りを避けるより、一本の刃物をかわす方が容易といえるだろう。刃物を奪おうとして手に怪我を負うこともあり、もみ合いになった尚、危険だ。奪うときはダメージを十分に与えてから奪うべきだがアスカには容易なことである。

「グアァ……あ、足が……」

続けて木刀を振り被った少年の攻撃を避けつつ、その太腿に下段蹴りを放つ、それだけで少年は木刀を落として崩れ落ち、足を押さえて動くことができない。格闘有段者が素人とやる時は下段蹴り一発ですむケースが多い。『当てやすい』『大怪我（頭や内臓へのダメージ）をさせずに済む』などの理由もあるが、何よりも信頼性の高さからだろう。よほど足が頑強でもない限り、重く熱く痺れるような痛みは耐えられるものではない。

素人が本格的な蹴りを止めるのはまず不可能だ。蹴りを受けるには、その威力から力を逃がしたりパワーの出るヒットポイントをずらしたりとかなりの技術がいる。生半可に手で受けようとすれば、肘や肩を脱臼することや悪くすれば腕の骨を折ることあるのだ。

アスカは千雨を後ろに庇ったままで、決して被害がいかないようにしているので人質に取ろうとした者から真っ先に沈んでいく。

多人数を相手にする時は一番強い奴（リーダー）を叩け、という俗説を信じて酷い目に遭う人は多い。自分の実力を下回っていると思える者を無視し、一番強い相手に行ったとする。相手が自分と同等、もしくは

それ以上の時、その相手と格闘中に他の者が入ればいかに微力でも障害が働ければ致命的になる。必ずやられてしまうだろう。

では、どうするか？

確実に弱い者から確実に人数を減らしていくのだ。弱い者から倒すのには大きな理由がある。それは心理的な牽制だ。一撃で倒し、危険だと認識させれば殆どの場合は後の者は襲い掛かるのを躊躇する。

今回のアスカの場合は後ろに守る対象がいるので、向ってくる者だけを倒し、決して後ろに行かせない。人質に取られる可能性があるのもそうだが、自分事の所為で巻き込んだのでこれ以上の迷惑は掛けたくない。

「クソッ、なんて野郎だ！！」

さっきと違って武器を持っていて五分も経っていないのに数を半分に減らされ、それを見た黒木は愕然とする。そうしている間も一人、二人と仲間の人数は碌（ろく）にアスカに触れることすらできずに減っていくばかりである。

絶対的な強さを見せ付けるアスカだが、十人近くに囲まれていても自分一人なら問題ないが、後ろに守る者がいることや万が一を考えて周りにも被害が出ないように気を配っているため、一人一人の行動全てを読み取ることは難しい。

事実、一人で逃げるつもりなのかバンに乗り込んだ黒木の存在を意識の端から外してしまった。

周りに借り物の力を見せ付ける小物というのは根の方まで性質が悪く、こんな輩に対して絶対にやってはならない事がある。―追い詰め過ぎてはいけないのだ《・・・・・・・・・・・・》。

「アスカァ！　危ない――――！！」

状況の変化についていけずに虚ろな眼でアスカの戦う姿を追っていた千雨は、バンに乗って一人で逃げるものと思っていた黒木が再び出てきたのを見て、突然大声を上げる。

千雨の叫びを聞いたアスカは黒木の方を向いた。

「死ねや、ガキがぁぁ！」

狂気染みた黒木の声が響き渡った瞬間――――アスカの視界に、人魂のような白い光の玉が飛び込んできた。『バンッ！！』と花火が爆発したような銃声が轟き、アスカは吹っ飛ぶように力なく仰向けに倒れた。

「きゃあああああぁぁ――――――――っ！！」

千雨の悲鳴が高く響き、一人の少年が女の子を守って不良たちをバッタバッタと倒す軽快なドラマ見ていい感じだったのに、刃物やバットなどの凶器を持ち出しただけでなく、拳銃という殺傷能力の高い武器を撃ったことでパニックを起こした。千雨が悲鳴を上げ、それがきっかけとなって周囲は騒然となり、巻き込まれないようにバラバラに散っていく。

「ガキ――――――て、てめが悪いんだぞ！　俺を怒らせやがって！！」

数秒後、周りには誰もいなくなった通りで、流石に黒木の仲間もその場で凍りつき、壊れかけの人形のようにぎこちなく首を回して撃った本人を見た。黒木は土気色の顔にダラダラと脂汗を垂らし、犬のように口を開けて息を荒げている。前に突き出した両手には、先端から白い煙を上げるオートマチック式の拳銃が握られていた。

「流石に喧嘩に拳銃はやりすぎでしょう。刃物や鈍器もそうですけど」

『へ……？』

何事もなくむくりと起き上がったアスカに両目をまん丸に見開いた黒木は、パッパッと服についた埃を払うような仕草を見せられて呆けたような声を上げる。

それは隠れて見ていたギャラリー、思わず腰を抜かしてしまった千雨、凍り付いていた少年たちも同様で、撃たれて倒れていたはずの少年が何時の間に立ち上がって動いたのかを見れなかった。

アスカの無事な様子を見て、周囲の人間の中には「もしかしたら明後日の方向に撃ったのか？」と、撃った直後の黒木の様子から考える者も少なからずいた。

（ふぅ……間一髪。正直に言えば危なかったが）

だが、周囲の考えとは別に弾丸の照準は間違いなくアスカを捉えていた。あの瞬間、即座に身体強化を施し、顔面に来た弾丸を間一髪で指の合間に挟んで止めたのである。

倒れる動作の間に弾丸を指で弾いて近くの街路樹にめり込ませた動作を見た人間はいなかったので、初めからどこか別の場所に撃ったと周囲の人間は思ったのである。

止めたといえ、無事なアスカの姿を見て恐怖に駆られて流れ弾で周りに被害が不味いので、撃たれた振りをして倒れただけである。まあ、拳銃を素手で捉えるなんて普通はできないので、何らかの理由で誤魔化すことには変わらないが。

そして全員が呆けた次の瞬間、そうとは知らない者たちには瞬間移動したように感じられる速さで彼我の距離を一気に詰めたアスカが黒木を背後を取る。

「グガ――――ッ！！」

呆けた黒木の腕を、腕返しの要領で関節を極めながら腕を捻って拳銃を奪い、右肩を軸にして一回転して背中から地面に叩きつけた。

「ふん、トカレフか」

黒木を後ろ手に極めて拘束しながら誰にも聞かれないような小声で、見覚えのある拳銃を見て呟く。

正式名称はトカレフＴＴ－３３（トゥルスキー・トカレヴァ１９３０／３３）。ソビエト連邦陸軍が１９３３年に制式採用した軍用自動拳銃である。一般には設計者フョードル・トカレフにちなみ、単に「トカレフ」の名で知られている。１９５０年代以降、ソ連本国では後継モデルのマカロフ　ＰＭに置き換えられて過去の銃となったが、その後も中国を始めとする共産圏諸国でライセンス生産・コピー生産が行われた。中国製トカレフは１９８０年代以降日本に

も多数が密輸入され、暴力団等の発砲事件にしばしば使われることで、一般人にも広くその存在を知られている。

「ガキの玩具にしては少々、殺傷能力が高すぎる……最近は日本も物騒になったもんだ」

少年たちも流石に拳銃を持ち出して撃ち、そのリーダーがやられたのとで戦意を失ったらしく、次々に武器を落として座り込んでいる。

「さて、どこでこれ（拳銃）を手に入れたのか吐いてもらおうか」

「誰が言う……痛ぇ！　痛ぇって！！　分かった、言うから力を緩めてくれ！！」

腕を極めたまま問いに答えるように力を入れていくと、ギリギリと骨や関節が鳴るほどなのでよほど痛いのかあっさりと降参した。

アスカは入手経路にフムフムと頷きつつ、警察のパトカーのサイレンが聞こえてきたので説明が面倒だな、と現実逃避気味に考えていた。

警察署でアスカと千雨の二人がやっと事情聴取から解放されたのは、昼の災難から半日も後――――午後八時を回るところのことだった。

「ご協力ありがとうございました」

二人の後ろで警官が敬礼し、署内に戻っていく。

千雨は完全に巻き込まれただけ、アスカは喧嘩のお礼参りを撃退しただけで正当防衛が認められた。そもそもアスカの絶妙な手加減で少年たちには怪我一つないことも大きく、未成年者が拳銃を撃ったということで今まで時間がかかったが純粋な被害者ということで二人は認められた。

何気に被害者、人を助けて、第一発見者などと麻帆良に来て数ヶ月で何度も警察署を訪れているアスカと一部職員が顔見知りになっているのも大きかった。

彼らはアスカを見た瞬間に「ああ、またか」と思ったらしい。

ちなみに少年たちは今もなお拘留中、特に銃刀法違反の黒木は現行犯逮捕されている。

警察の事情聴取の後、迎えに来た高畑が待っている駐車場へ行く途中で堪えきれなくなった千雨がガバッと顔を上げ、血走った目をアスカに向けた。

「――――――何なんだよ、お前は！　あの人数を苦もなく倒せる強さといい、拳銃を持った相手を楽々と制圧するとかありえねーだろっ！！」

十人近くの大人と変わらない男たちに囲まれ、暴力の中にいればその場で恐慌を起こしたとしても無理はなかった。一介の女子中学生にしては今までよくもった方だろう。

溜まりに溜まった鬱憤を吐き出すのは仕方ない。

「自覚はありますよ。今まで色々ありましたから、本当に」

もはや常態になったとはいえ、毎度毎度こういうことがあれば嫌気も差す。しかし、かといって目の前の厄介事を投げ出すわけにもいかない。目の前で傷つき、助けを求める人がいて、それに応える意思と成せる力があるのなら応えたい。

だけど、アスカは強くなりたかった。失わないように、奪われないように。

正義の味方を気取るつもりはなく、ただ原初の想いを貫きたいだけ。ある意味で今のアスカを形作った今宵のように月の綺麗な日の出来事。

その時に抱いた想いを旅の中で更に強くした結果が今のアスカである。

「その所為で今回のことがあったので長谷川さんには申し訳ないと思ってます。すみませんでした」

だが、そのことと完全に巻き込まれただけの千雨には関係のないこと。被害者は千雨だけで、別の意味ではアスカも加害者と大差はない。

自分の厄介事に巻き込んだことをアスカは深々と頭を下げて謝罪の意を伝える。

「お、おい――――――」

これに慌てたのは糾弾していたはずの千雨の方で、ここまで素直に認めて謝罪されると反応に困る。

頭を下げ続けるアスカを前に頭をかいたり、無意味に手を動かしたり、目が助けを求めるように辺りを見渡す。

（ああ、もう！　なんだってこんなことに！！）

小学生に頭を下げさせている女子中学生。シュールな光景だった。

いくら夜で人通りが少ないとはいえ、完全に途絶えたわけではない。なので、周りの人が自分たちを指差してヒソヒソしているのが見えて羞恥心が湧き上がってくる。

少なくともアスカは嘘を言っておらず、紳士に対応してくれている。それにあの乱闘の中でもアスカが自分を守りながら闘っていたのは、どんな状況でも千雨の視界の中にアスカの背中があり、誰かに遮られることもなかったから分かっている。

「――――――分か「すみません、少し用事ができたので高畑先生と先に帰っててください。また明日、謝罪に窺いますので」って、もういいねぇし！」

羞恥心が限界を迎え、明後日の方向を向いて謝罪を受け入れようと言葉を発している途中で、何かに気付いたような仕草をしたアスカが早口で言う。視線を前に戻すと何時の間にかアスカの姿はなく、夜の闇に千雨の叫びが響いた。

都内某所――――――

アスカたちが警察署に向かっている時間帯、一台の黒塗りのベンツが不動産会社のビルの地下駐車所に滑り込んだ。ドアが開いて降りてきたのは、如何にもヤクザといった風体の男たちである。

その中の一人、明らかに周りとは着ている服装や態度が異なる男が車に乗っている時から恨み言を繰り返していた。

「畜生、まさか黒木のガキが街中でチャカを持ち出すとは何をやってやがる！！」

口汚く罵って唾を吐き捨てる。黒木はこの男――――――とあるヤのつく組織の若頭の部下の部下で所謂末端構成員という奴で、街中でたかが喧嘩如きに拳銃を持ち出し、挙句の果てには発砲。しかも、簡単に取り押さえられて今は警察に連行されているという情報が男の下に入ったのは早かったが仕事で県外にいたために情報が入るのが遅れたのだ。

男たちはエレベーターに乗り込んで最上階へ向った。そこには不動産屋の看板を掲げた暴力団の事務所があり、そこに組長がいて緊急で会合が開かれる。若頭は会合に参加するためにどうしても外せない仕事を急ピッチで終わらせて来た。

『チーン』とエレベーターが最上階に到着して降りた直後、若頭は怪訝な顔つきになった。エレベーターの昇降口を何時も警備して

いるはずのガードの姿が見当たらないうえ、事務所の入り口のドアが開きっぱなしになっている。

「どうなっている？　サボリか？」

「分かりません。会合ですからサボるとは思えないんですが……」

若頭を先頭に事務所に入っていった男たちは、仕切りの擦りガラスを越えたところで棒立ちになった。

事務所の中が血の海だったからである。

組織の幹部やガードたちが、自分の吐いた血反吐の中に顔を突っ込んでいた。まるで無造作に投げ捨てられた操り人形のように、手足の関節があらぬ方向に曲がっている。ピクピクと動いているので生きているらしいが、そうでなければ死んでいるようにしか見えない。

事務所の奥にあった会長室へ続く立派な扉はもはやなく、爆破されたように大きな穴が開いていた。

「う……あう……」

「……ボ、ボスゥッ！」

穴の向こうから聞こえてきた呻き声に、若頭は半分腰を抜かしながら会長室に向かい――――そこで完全に腰を抜かした。常日頃から尊敬し頼りにしていた組長が首根っこを掴まれたまま宙ぶらりんになって、口から泡を吐きながらみっともなく糞尿を垂らしていることが臭いと濡れているズボンを見て分かったからだ。

しかも、それを成しているのが誰が見ても魂を吸い取られそうなほどの美人と呼べる美貌を持った金髪の女だったのも、若頭が腰を抜かした要因の一つである。

「ほぅ、カモがネギを背負って来おったか」

「は……！」

女性は振り返りながら獲物が自分から死地に来たことに狩人の笑みを浮かべ、そのいっそ獰猛とも言える笑みにそんな場合でもないのに追いかけてきた男たち共々見惚れた。

「別に未成年がヤクザの事務所に出入りするのは好ましくない……とは言わんよ。我からしてみればどうでもいいが、ただ主の敵になったことを悔やむがよい」

金髪の女性は意識のない会長をゴミのように投げ捨てながら宣言するように言葉を発すると、言わんとしているところを察した男たちは、泡を食って逃げ出そうとした。

「な、身体が動かなねぇ！」「どうなってんだよ！」「俺が知るわけないだろうが！」

入ってきた穴から逃げようと振り返ることすらできず、男たちの身体は石化したように動かない。指一本動かすことが出来ず、彼らに出来るのは、もはや恐怖の為に脂汗を流すことだけだった。

彼らが動けないのは、自分の影を自在に形を変えて相手の影にくっつけ自分と同じ動きをさせる【影真似の術】と影で相手の体に直

接負荷をかける術で、もっとも一般的な攻撃方法が絞殺であることからこの名がついた【影首縛りの術】をかけられているためである。

玉藻といえど秘伝である【影真似の術】の戦闘で使うことは難しい。

限定された地域に住む集団や一族が、その子孫へ口伝により伝承する機密性の高い術。秘伝には特別な才能や血統を必要とするするものは少ないが、基本的に集団外へ伝えられることはない。術自体を秘密とするものもあり、玉藻が使っても本家の劣化バージョンにしかならない。

戦闘で用いることはできず、アスカも使えない。

「ぐぅ……！」

玉藻は若頭の襟首を捕まえてその顔を覗き込んだ。苦しみで無残に歪んだ顔をしているが、上目遣いに見ている目は恐怖に染まっているものの、許しを乞うような殊勝な色はなく、どこか不遜で甘ったれた傲慢さがあった。自分がどうしてこんな目に遭うのか納得できない目である。

「お主らの目は既に濁りきっておる。ちょっとやそっとのダメージでは反省どころか逆に復讐心を募らせるだけじゃな。これは徹底的にやらねばな！」

何故か楽しそうな女性――――玉藻は【影首縛りの術】で男たちの首を万力のようなような容赦のない力で締め上げた。薄れゆく意識の中、男たちは自分の命運が完全に尽きたことを感じとった。

この後、公衆電話からの匿名の通報を受けて駆けつけた警察が見たものは、自分達が作った血の海に沈んだ組の構成員と糞尿を垂らして壊れように笑う組長と死んだように動かない高校生たちの姿。

死者はいないがほとんどが重傷者で病院に搬送されたが、何故か用意されていた組が今まで行ってきた犯罪の証拠が出てきて、高校生も含めて全員刑務所送りになった。

「まったく玉藻は……僕の分も残しておいてよ」

「いや、歯応えがなくてつまらかったぞ？」

どこぞの主従がそんな会話をしていたとかしていなかったとか。

第二十話　人間不信気味の少女と少年（後書き）

今話はタイトル通り千雨の話となっております。ちょっと終わりが中途半端ですが、次話で千雨編完結？みたいな感じになります。

その後に明日菜編をやって一区切りかな？

次回の更新は、来週の日曜日午前０時に更新したいと思います。

予定より遅くなる場合は、その都度、活動報告に上げます。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

参考文献：風の聖痕、リアルバウトハイスクール、ホーリーランド等多数

第二十一話　　結末と鈴の少女と少年（前書き）

いいタイトルが思い浮かばない……それよりも０時になる前にうっかり投稿してしまった。別に問題はないのだが。

そんなこんな今話は前話の結末（千雨編）と試験に噛みあわせた話（明日菜編）となります。

よくある日常の風景という奴です。

文字数も少なめの１０４９５字

第二十一話　結末と鈴の少女と少年

「はぁ、まったく……今日も厄日だっな」

休み明けの月曜日、昨日の警察も係わった騒ぎの所為で中々寝付けず、遅くまで起きていて寝不足な千雨は、クラスの馬鹿騒ぎとあんなことがあったのに変わらないアスカの様子を思い出しながら、ふらり、ふらりと地に足が着いていない歩みで這々の体で寮の自室に辿り着き、ベッドに倒れこんだ。

そしてベッドの上で軽く頭を振ってから昨日一日の出来事を振り返る。

結局、あの後は事情を話して高畑の車で女子寮まで送ってもらったが、何時の間にかアスカも帰ってきていたらしい。

実は昼間のとある暴力団が何者かによって壊滅させられ、証拠まで綺麗に揃えられて全員が豚箱行きになったことがニュースで出ていたが千雨が知る由もなく、知っても関わりがあるとは思わなかっただろう。

「あいつがなんだかんだでウチのクラスの連中で一番非常識なのにまともそうなのが、腹が立つ」

千雨にとっては大変忌々しいことだが、あの二月から教師をやるために女子校なのに男子が生徒として通うという変わった経歴を持つ十歳児は、厄介事にさえ巻き込まれなければ超が付くほどのまとも人間だったことが忌々しい。

事件の経緯を車の中で高畑に聞いた千雨は、自分がアスカに八つ当たりしたことを自覚していた。アスカの様子から八つ当たりと理解しながら罵倒を受け、怒るどころか謝罪までしておきながら受け入れる前にどこかに行ってしまったことがむかつく。

気にすらしていなかったのか、懐が広いのか、それとも……。

「まっ、私には関係のない話か」

自分とアスカの関係は今日のように昨日のことは忘れたような関係に戻るのが一番いい。

そもそもあの年で働くなんて労働基準法や教員免許はどうした？

何だそれ食えるのかというがごとき理不尽な現実に、思わず体が震えた。

これまで思い浮かべていたアスカとの出来事を掻き消して、部屋に置かれたパソコンのスイッチを入れる。

「私は普通の学園生活を送るんだ」

制服を乱暴に脱ぎ捨て、唇にルージュを塗ってパソコンが立ち上がるまでに、既に手馴れてしまったお化粧を鏡を見つめながら進めて行く。

そこには普段掛けている眼鏡は無い。そうしてパソコンが立ち上がり、コスチュームに着こんだ者は既に長谷川千雨ではない。

こんな日はさっさと“ちぅ”になって世の中の不条理を忘れるにかぎる。

「私はネットアイドル界ナンバーワン、ちぅ様よ！」

回転いすに腰掛け、キーボードを叩きつけながら書き込んでいく。そう、今だけは理不尽な世界を忘れる事のできる唯一の自分であり、誰にも邪魔されない至福の時。

ネットアイドルとは、ネットで伝達されるメディア、特にインターネットのウェブサイトを主な活動の場とするアイドルである。

芸能事務所に所属して、既存のメディアで露出することで利益を得る、といった活動が立ち行かず（また、スタートラインである芸能事務所に所属ができず）、自身でウェブサイトを立ち上げ、自身の画像や動画、音声ファイル等を公開する、といった活動が大部分である。ネットアイドルを踏み台として独自活動に転身する例もある。

収益はウェブサイトの広告収入等であるが、ある程度の需要を獲得できれば有料制にする者もいる。

一部には「何か勘違いしている人（自身の芸能活動を明確に説明できないもの）」や、「倫理的に暴走してしまった人」が存在するのも否めず、往々にして自称ネットアイドルの場合には、ネタとして嘲笑を被る場合もあるだけに、余計に暴走する場合もあるようである。

中には人気を得るために、性的なサービスを提供するネットアイドルも有るため、倫理的な問題が指摘されている事例もあり、他にも自ブログで騒がれたいがためだけに放火事件を起こした「自称ネットアイドル」まで発生している。いずれにしても個人が少ないコストで世界中に情報発信できる時代にあっては、ある種の顕示欲が

これらの根底にあると見る事が出来る。

ネット界に何万と存在する営利目的ではない所詮、自己満足の、自称アイドルと名乗る有象無象の中で、ちぅの熱意は一線を画すものだった。

デジタルカメラで自作コスチューム姿を撮影して、取り込み画像をより綺麗に見せるために何時間もかけて修繕する。その結果自作ホームページに載る写真は、お色気に走った露出狂予備軍のそれとは全くできが違っていた。色気が無いわけではない。ただ露骨ではないのだ。肌を隠しているにもかかわらずそういったものが自然と漂う。

表の世界では慌てず騒がず、危険を冒さず、リスクの少ない裏世界でトップを取るのが千雨のスタンス。

「よし、来た。来た！　ネットアイドルランキングでもぶっちぎり一位！」

デジカメで撮った写真をフォトショップでお肌を修正し、ＦＴＰで写真をアップロード。ニヤニヤと邪悪な笑みを浮かべる彼女であったが、彼女は気付いていない。

部屋の外からノックをする音と自分を呼ぶ声に。

「私は女王なのよ！　いずれＮＥＴ界のＮｏ．１カリスマとなって全ての男たちが私の前に跪くのよ！」

今まさに妄想に悦に入っている千雨の背後に、ノックをしても返事がなく、だけど奇声が聞こえたので何度も念押しして部屋に入っ

てきた少年の存在に気づいていない。。

「――――ん？　ギャー！？」

「あ、どうも。ノックしたんですけど返事がなくて」

昨日の謝罪にケーキをを持って部屋を訪れた少年の存在に、ちうは、いや、千雨は、結局、ノリノリの自分の痴態を見せ付けてから気付くのであった。

「う……うう……」

「いい加減泣き止んでくださいよ。勝手に入ったのは謝りますから」

千雨は敬語も忘れ、頭の隅で、見られた以上殺すしかないと、物騒な考えが突然の事態に混乱しながら駆け巡っていた中で問い詰めた。が、ノックもしたし、千雨が思いっきり高笑いしていたことで本人にノックは聞こえなかったが、アスカはそれを入室の合図だと勘違いしてしまい、入ってきたことを聞くとこんな状態に陥ってしまった。

「……おい、この事はクラスの奴らには秘密にしてくれよ……頼むから。」

いまだに俯いたままの千雨は懇願口調でアスカに頼む。

「はぁ、どうしてですか？　別に人に秘密にしておくものでもないでしょう」

「へ？」

アスカの言葉を聞いたとき、千雨は間抜け面をしたまま、顔を上げた。

ここでアスカの状況を説明すると、一応一般常識というものは前世のことで習得しているが、記憶や経験は忘れている状態である。しかし、病院暮らしが長かったためにネット知識は皆無に近く、当然ネットアイドルの知識はない。

今世では多少ネットに関わっているものの、旅をしていた所為で変に知識が偏っていたり、一般的なことを知らずに勘違いしていることが多々ある。

ネットアイドルのことは最たるもので、アスカの本音としてはどうして隠したがるのかが分からないという状態だ。

大まかに色々と誤魔化しながらの説明を聞いた千雨は、アスカが常識を常識と知らない田舎物だと結論付けた。

「とりあえず誰にも言わなければいいから」

「はあ……」

取り合えず学校中の生徒にバレて後ろ指差されて笑われたり、変人たちの仲間入りにならないことが分かっただけで千雨には十分だった。再度の念押しに頷きながらも頭を捻っているアスカを前に一安心な千雨。

「それにしてもやっぱり長谷川さんは眼鏡を取った方が綺麗ですね」

「え？」

なんとか危急の事態には至らずにほっとしていた千雨が言われたことが咄嗟に理解できず、伏せていた顔を上げるとアスカの手がブレたように見えた。瞬きをし、目を開けたときには、アスカの手には、さっきまで千雨がつけていた眼鏡があった。

千雨は、顔に慣れた感覚がなくなっているのに気づき、アスカが持っているのが自分の眼鏡と気づき、顔を赤くして手で覆った。

「コ、コラ私の眼鏡！！」

少女は、対人恐怖症の気があるため「眼鏡がないと人前に出られない」のだ。なので、必死に取り返そうとするもアスカはするりと避けていく。

「やっぱり伊達眼鏡ですか」

アスカはチラッと眼鏡を見て度が入っていない伊達眼鏡だと確信し、千雨は普段の格好と今の光景から伊達眼鏡をつけるおおよその事情を理解されたのを感じ取った。

千雨を見て笑うばかりで眼鏡を絶対に返そうとしない。取り返そうとするが、基本の運動神経が違うのか撮影機材もあって狭い部屋なのに触ることもできず、普段運動しないので直ぐに息が切れ取り返すのを諦めた。

「あ、忘れてましたけどコレ昨日の謝罪の品にどうぞ」

息を整えていると、アスカは片手に持っていた小さな箱を千雨の

前に出してきた。

「はぁはぁ、分かったよ。もしかしてコレを渡しに来たのかよ。ってもしかして昨日の別れ際に言ってたのってコレか」

今になって昨日の別れ際の「また明日、謝罪に窺いますので」という言葉を思い出した。勝手にいなくなったことばかりを考えていてそこを完全に失念していた。

「分かったけどよ、なんで眼鏡を返してくれないんだよ」

「折角美人なんだから勿体無いじゃないですか」

謝罪の品を持ってきたのに眼鏡を返さないのは理由にならず、諦めながら聞くと恥ずかしげもなく言い切った。

そんな事を言われれば年頃の女性としては悪い気もしないから、アスカがいる間だけは眼鏡なしでいることにした。というより返して貰わなければ眼鏡をつけられないので諦めるしかない。

アスカが少しの間だけ部屋を出て、その間に千雨はコスプレ衣装から私服に着替える。

「上手いな……」

「朝早くなのに行列が出来てるぐらいですから」

そしてどうせならということでアスカと一緒に謝罪の品である、女子中でいま話題のスイーツを一緒に食べた。評判になるだけの味は千雨を唸らせ、行列に並んだ苦労の甲斐があったとアスカは破願

する。

なんだかんだで二人は打ち解け、千雨も強制的にとはいえアスカの前でなら眼鏡ナシでいられるようになった。

スイーツを食べてアスカがお暇（いとま）しようとすると、不意に千雨は紙に何か書いて渡してきた。

「私のメアドだ……お前も暇だったらメールぐらい送って来いよ。私が暇だったら相手ぐらいしてやるからよ」

「ありがとうございます。その時はよろしくおねがいしますよ」

赤らめて顔を逸らした素直ではない千雨の態度にアスカは笑いながらメールアドレスが書かれた紙を受け取る。秘密にしていた趣味が知られるなどの過程はどうあれ、アスカが信用できる人間であり、年下でも気兼ねなく話せる関係になったことに満足しているようだった。

ドタバタしたものの、二人はその後お互いに笑って別れた。

そういう関係から、千雨にとっては自分の趣味と本性を知られたのもあって本音で話せて普通の友達のような関係になっていく。この関係がその後どういう風に変わっていくのかは、今はまだ誰にも分からない。

部屋の中央に置かれた小さなテーブルを囲み、三人の人間が座っている。それぞれの前には教科書や参考書、ノートが広げられている。

１２月、日本は冬の季節を迎えて大分寒くなってきたこともあって暖房をつけながら試験勉強らしくガリガリとペンを走らせている。

癖のない金髪で前髪が目を隠している外国人の少年は、数学の解答を書き出すために途中式を真新しいノートに書いていく。シャーペンは一瞬も止まることなく解答に辿り着いた。彼は相当勉強できると窺(うかが)える。

背中まで伸ばした黒髪と、常に笑みを絶やさず、口調もどこか間延びした、ぽややん、というか、ふややん、というか、そんな擬態語が背後から透けて見えるような、おっとりとした少女は、教科書を片手に英単語をノートに書き写していく。その筆跡はとても綺麗で本場の人間でも惚れ惚れしそうなほど。しっかりと覚えるまで素早く繰り返し書いている。

少年と少女が黙々とノートの上にシャーペンを滑らせているなか――――残る一人、左右の目の色が違うオッドアイの持ち主である少女の手は止まっていた。何時も髪を結わえている鈴は風呂上りなので着けていない。なので普段はツインテールにしている髪は下ろされて背中に垂らされている。彼女の手はピタリと完全に止まっていた。

彼女が見ているのは参考書でも教科書でもなく、外国人の少年から借りたノート。授業中にするべき板書を今頃書き写している時点で、彼女がどれだけ勉強が出来ないかは推して知るべしだが、さらに酷いことに、書かれていることを全く理解できずにただ凝視している。

問題：１０

銅：酸素　４：１　マグネシウム：酸素　３：２

マグネシウムの粉末１．２ｇに銅の粉末が混じってしまった。この混合物を熱すると酸化銅と酸化マグネシウムの混合物が２．５ｇ得られた。（銅のグラフ→加熱前の質量（０．４ｇ）のとき加熱後の質量（１．０ｇ）、加熱前の質量（０．８ｇ）のとき加熱後の質量（１．５ｇ）、加熱前の質量（１．２ｇ）のとき加熱後の質量（１．６ｇ）のとき加熱後の質量（２．０ｇ））（マグネシウムのグラフ→加熱前の質量（１．２ｇ）のとき加熱後の質量（２．０ｇ））

★１　生じた酸化マグネシウムは何ｇか？

★２　混じった銅は何ｇであったか？

答え：★１　酸化マグネシウムは２．０ｇ　★２　銅は０．４ｇ

１．２ｇのマグネシウムが燃焼したときに結びつく酸素の質量をＸｇとすると、マグネシウム：酸素＝３：２より、１．２：Ｘ＝３：２の式を解いてＸ＝０．８になります。つまり燃焼後にできた酸化マグネシウムは１．２グラム＋０．８グラム＝２．０グラムとなります。問題ではマグネシウムと銅の混合物が加熱後に２．５ｇになっていることから、ここから酸化マグネシウムの質量２．０ｇを除

くと、残り０．５ｇが酸化銅の質量ということになります。銅：酸素＝４：１より、０．５ｇの酸化銅の中に含まれている銅は０．５×４／５＝０．４ｇとなります。

ｗｈｙ？　彼女は何度も何度もその文を読んだ。ちゃんと途中経過の説明してあるので、普通なら良く分かるはずなのに理解できず、そんな暑くもないのに、額から汗が一筋流れる。ちなみに今は１２月で暖房はついているが決して汗を掻くほどではない。

――――やがてオッドアイの少女は静かに目を閉じて天井を仰ぎ、ふぅと大きく息をついた。

「……明日菜さん？」

外国人の少年がノートから顔を上げ、天を仰いで燃え尽きたように真っ白になった少女へ不思議そうに声をかけた。

「……アスカ」

「なんです？」

声も疲れ切っていた。彼女――――神楽坂明日菜の今の声のトーンが暗すぎて、外国人の少年――――アスカ・スプリングフィールドは再度、不思議そうに聞き返す。

アスカも明日菜や木乃香を名前で呼ぶようになった。

「こんなこと授業でやったけ……？」

「あ～……」

「やったで。それも最近や」

言い辛そうに口篭ったアスカの変わりに、明日菜の対面に座る大和撫子のような髪型をした大人しそうな少女――――近衛木乃香が遠慮なく突っ込んだ。

明日菜と木乃香が長方形の広い部分に対面に座り、アスカが明日菜から右、木乃香から左に座っている。

「いい加減、現実逃避はやめて手を動かしや。何時までもノートを借りてたらアスカ君に迷惑やで」

「いや、別に僕は全部頭に入ってますから大丈夫ですよ。気にしなくていいですから、明日菜さん」

何時もはおっとりしている木乃香も、勉強会を開始してから何度も同じやり取りがあれば対応もきつくなる。というか、こと勉強に関しては明日菜に対して甘い顔をしない方がいいことを理解しているからだ。

明日菜も木乃香の言う通りだと思っている。アスカは優しく言ってくれるが（全部頭に入っているという言葉にショックを受けたりもしたが）何時までも甘えるわけにはいかない。

内容の理解は取り合えず置いておき、明日菜はノートを写す作業に戻る――――が。直ぐに自分が意味の無いことをしているように思えて。

「うう……こんなの勉強して何の役に立つのよ」

勉強が苦手な学生が一度は口にしそうな弱音を呟く。

「まあ、確かに理科の知識は大抵は役に立たないでしょうね。それこそ理科の先生にでもならない限り」

「だよね、やっぱりアスカもそう思う！？」

明日菜の手は再び止まり、アスカの賛成に表情は笑顔になる。

基本的に学校の授業というのは実社会においてはほとんど役に立たない。例えばサラリーマンなら歴史を知らなくても仕事は出来るし、食ってもいける。国語やそこら辺なら実社会においても役に立つ場面は多いかもしれないが、大半は意味が無いだろう。

学校で勉強するちゃんとした理由を説明しようとしたアスカは、行き詰った今の明日菜にはあまり意味がないだろうと途中で説明するのをやめた。

「――――――でもテストには必要な知識やから、今は覚えなあかんで」

「……あー……うー」

賛成を貰えて喜色満面のところを、最もな正論を木乃香に言われて明日菜は呻き声を上げて、シャーペンを重そうに動かし続けた。

１２月も半ば近く過ぎ、来週の月曜日から期末試験に向けて、二人の部屋にアスカがやってきて勉強会を開いていた。部屋から一歩も出ずに（アスカは寝る以外）小さなテーブルを囲んで勉強、とま

るで何処かの塾合宿のようなことを、試験一週間前の日曜日から始めている。

開始初日からアスカと木乃香はそれぞれのペースで着実に進めている――――だが明日菜はというと、テスト後にノートの点検がある四教科の最後、理科のノートを写しているところである。写し終わった三教科もただ写しただけで、今写している理科と同様に少しも頭に入っていない。

「うう……今回ばかりは私、駄目な気がしてきた……」

「何時も同じこと言うてんで、いい加減諦め」

シャーペンを握り締めたまま明日菜が弱音を吐くも、木乃香に追い打ちをかけられて沈んだ。この問答は試験があると毎度のことなので木乃香にも遠慮がない。

「あ、あはは……ホント、テスト前は容赦なく痛いトコばっか突いてくるわねぇ、木乃香は。これでどうして友達としてやっていけてるのか、不思議でしょうがいなわ」

「明日菜のことを思って言うてるんやで、うちは？」

明日菜は乾いた笑みを浮かべながら、木乃香を見るも、自分のことを思って言ってくれているので大人しく降参した。

「勉強の仕方が分からないなら僕が教えますから、頑張りましょう明日菜さん」

「うう～、アスカが天使に見えるよ～」

こと試験勉強においては自分に厳しい木乃香（単に毎回同じことを繰り返してるだけ）と比べて優しいアスカが天使に見えた明日菜は思わず拝んでしまった。

神楽坂明日菜は本人としては認めたいことではないけれど、クラスで『バカレンジャー筆頭バカレッド』と呼ばれる程あまり頭が良くない。頭を使うことが好きじゃないと思っている程の体力バカである。

で、そんな彼女がまるで叱られているかのようにカーペットに正座をして身を縮こまらせていたのには理由がある。

明日菜が伏せた顔からチラチラと見ているのは、テーブルを挟んで対面に座る自分よりも年下の少年アスカ――――正確にはアスカが手に持っている何枚もの紙であった。

普段から勉強しない人間が試験前に珍しく勉強をしたからといってテストの点数が振るう人間は少ない。ヤマ勘が当たったりして運良くというパターンはあるかもしれないが、そういうケースは稀だ。

とどのつまり、返って来たテストの答案をアスカに見られ、この状況が出来上がったのである。まるで、どこの家にでもある成績の悪い子供に相対する父親の図に見える。

ちなみに明日菜的に成績を分かりやすくすると、

理系：アスカ　同率学年一位（満点）　木乃香　上の下くらい
明日菜　かなり気の毒。

文系：木乃香　上の中くらい　アスカ　中の中くらい　明日菜
かなり気の毒。

木乃香は文系が得意ながらもバランス良く学年百位以内をキープしている。アスカは理系に突出しながらも日本固有の教科に苦戦しているが、平均は取っているので十分だろう。

問題は明日菜だ。理系、文系と共にかなり気の毒な領域に足を突っ込んでいる。

「……明日菜さん。流石にこの成績は……その、まずいと思うんです」

アスカが明日菜の前に差し出した紙には、この間終わったばかりの二学期末テストの学年順位が書いてあった。その中で明日菜の順位は７３７人中６９９番と、アスカが教えたからか大台には乗らなかったものの下の方は団子状態で一点差で最下位転落もあり得る状況だ。

「うっ……！」

痛いところを突かれたような明日菜にアスカは更に追い討ちをかける。

「明日菜さんが苦学生だということは知っていますし、それは立派な事だと思います。……思いますけど、勉強しなくていい理由には

なりませんよね」

「わ、わかってるわよ……！　で、でも、朝早いから、なかなか勉強出来ないのよ……」

理屈を武器にアスカが攻め立て、明日菜は自分的には最もな理由をつけて反論する。

「このままの成績なら高校にも行けませんよ？」

「麻帆良はエスカレーター式だから高校までは行けるわよ」

そう言えばそうだったとアスカは思い出して納得するも、こういう風に惰性で進学できるから勉強にやる気を出さない子が出てきても不思議ではない。将来が安定しているとはいえ、エレベーター式も良し悪しだ。

「普通に勉強をしていて、それでもこの成績ならそれ程文句も言いません。朝が早いから、バイトがあるから、という理由で勉強しないのなら教師になったら副担任権限でバイト禁止しますよ？」

こっち（高校方面）では明日菜を説得するのは無理そうなので方針を転換することにした。例え高校に進学したとしても進級は難しいと言えば別の話だが。

「ちょ、ちょっと待ってよ！　急にそんな……！」

明日菜には両親がいない。

小さい頃から学園長に世話になっていたが、義理難い性格をして

いる明日菜は何時までも迷惑を掛けられないと考え、少しずつでも働いて返そうと考えた。学園長は気にしなくていいと言ったが、明日菜が折れなかったのだ。

だが、中学生では普通のアルバイトも難しい。だからこそ新聞配達のバイトをしているわけである。

「職員室でちょっと問題になっているんですよ。明日菜さんのように学生は勉強をするのが本分なのに、それを疎かにするのならバイトを取り消しにすべきではないか、と」

とはいえ、明日菜がアルバイトをする事情を知っているので今まで表面化することもなかったが、来年には中学三年生になるからには進路を考える必要がある。高校進学を選ぶのならば、エスカレータ式なので入るのは問題なくても今の彼女の成績では進学するのは難しいだろうというのが教師たちの共通見解である。

彼女がどのような進路を選ぶにしろ、今の成績では自ずとも限界がある。しかし、苦学生である彼女の志を折るのもまた二の足を踏んでしまう。

「でも、私は……」

アスカの言うことにも納得できるが、それでも学費を少しでも返済していきたいという思いに板ばさみになってうんうんと唸る明日菜。

「まあ、明日菜さんの気持ちも分かるので【中学二年の最後のテストで学年の平均点を取れればバイトを認める】と【それ以降のテストでも平均を取り続けること】。この二点を守れば何も言いません」

「平均って、私の成績を知っているでしょ！　無理よ、そんなの！！」

今の明日菜の成績から見ればとても無謀とも言える条件を提示するアスカ。当然、そんなのは無理だと反論する明日菜だがアスカはこれが最低ラインだと言って頑として譲らない。

「そこまでにしときや～。御飯出来たで」

言い争いに発展しかけた二人を止めたのは、台所から漂ってくる香ばしい焼き魚の匂いと木乃香の声。

（今日は秋刀魚か）

匂いを嗅いで、二人の腹の虫がクゥと鳴る。そのため話を一旦そこで中断し、晩御飯の用意を調える。主菜は想像通り秋刀魚の塩焼き。筑前煮と白和え、茄子の漬物もある。コンロには味噌汁の鍋。御飯は炊飯器の中だ。

「「「いただきます」」」

丁度できたのが二人が言い争いに発展しかけた二、三分前だったらしく、味噌汁を温め直す必要もなかった。アスカは脂の乗った秋刀魚を堪能し、大盛り飯を三杯もお代わりした。玉葱とジャガイモの味噌汁は中学生では中々ここまでの味は出せないだろう。

料理を作るのはアスカと木乃香のどちらかの時もあるし、得意分野が上手く分かれているので互いに教えあいながら二人で作るときもある。

食膳前の挨拶をしてからは時々、明日菜と木乃香が話すのに合いの手を入れるぐらいでアスカは黙々と食事を口に運ぶ。食事中は喋るよりも食べる方を優先するので必然、言葉は減るが二人も心得たもので無理にアスカに話しかけない。

食事の熱いお茶をすすりながら、流し台で食器を洗っている明日菜の後姿を見る。

「お茶のお代わりは？」

「んっ？　ああ、お願いします」

聞かれたので、木乃香にテーブルに置いてある急須を持ち上げて大丈夫だと言おうとして、空になっていることに気づいて頼む。湯呑みと急須を持って立ち上がると、洗い物を終えた明日菜が自分がやるとアスカの手から取り上げる。

「さっきの話なんだけどさ……」

台所でアスカに背中を見せながら思い出したように明日菜が呟く。その話口から食事前のことであろうと察しって明日菜の方を見る。

「私一人じゃ分からない部分が多いからさ、アスカは教師になるんだから教えてよ」

暖めたポットからお湯を急須に入れながら振り返ることもなくぶっきらぼうに言う明日菜の頬は赤く染まっていた。

アスカが言うことは正論で、曲がりなりにも代替案があるだけで

もマシなのだろう。今から学年末まで三ヶ月はある。無理をすればどうにかなるだろうと、ある種の希望的観測があった。

「素直ちゃうな、明日菜も」

「本当ですね」

「う、うっさいわね！」

素直じゃない明日菜にクスクスと笑う木乃香と肯定するアスカ、振り返って言い返す明日菜。アスカが来てから頻繁に聞こえる笑い声が今日も彼女たちの部屋に響いていた。

第二十一話　　結末と鈴の少女と少年（後書き）

明日菜編の尺が短いからって、前話で長くなりそうだったから結末を持ってきて合わせたからちょっと微妙だ。

それはともかく、次話からリリカルなのはA's とのクロスに入って行きます。

基本、というかほとんど改定前と変わりませんが。

次回の更新は、来週の日曜日午前0時に更新したいと思います。

予定より遅くなる場合は、その都度、活動報告に上げます。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

水曜日に初夜勤だぜ。仮眠の時間はあるけどしんどいんだろうな……。

第二十二話　　悩んでたら始まった少年（前書き）

タイトル通り、リリカルなのはA's とのクロスに突入です。実際にはまだ触りだけですが。

またの名を千鶴編です。

文字数は前回同様に少な目の１０５３０字。

それと後書きにはちょっと驚きの事実があります。本作を楽しみにして下さっている方は本編を読んだ後、忘れずにお読み下さい。

第二十二話　悩んでたら始まった少年

――誰……か…誰か……

暗闇の中、どこからか声が聞こえる。誰の声なのか分からないが何も見えない中にその声だけが響いている。アスカ自身の体の感覚は無く、今の状態は意思だけの状態のようだ。

――私……誰か…けて……下さい……

これは間違いなく夢だ。しかもここ最近毎日見ている夢。だが、本来アスカが夢を見ることはおかしい。五年前のあの日から寝るとあの時の事を悪夢として見るから、寝るときは必ず【狸寝入りの術】を使っている。

初めて悪夢を見たときは、また人を殺したのだと錯覚するほどのリアルさで、叫んで起きた後は一晩中玉藻が傍にいてくれなければ耐えられなかった。

それから数日間は悪夢が怖くて布団に入っても眠ることが出来ず、眠れたとしても僅かな時間で全く同様の悪夢を見て起きてしまい、苦しんでもう限界だった僕を見るに見かねた玉藻が【狸寝入りの術】を教えてくれて、術を使用することでようやく寝ることが出来た。

最初は人を殺した罪悪感から悪夢を見ているのだと思っていたが調べた結果、ＰＴＳＤ（心的外傷後ストレス障害）に掛かっていたようだ。

ＰＴＳＤ（心的外傷後ストレス障害）とは危うく死ぬ、または重

症を負うような出来事の後に起こる心に加えられた衝撃的な傷が元となる様々なストレス障害を引き起こす疾患のことで、心の傷は心的外傷またはトラウマと呼ばれる。1．神的不安定による不安、不眠などの過覚醒症状　2．トラウマの原因になった障害、関連する事物に対しての回避傾向　3．事故・事件・犯罪の目撃体験等の一部や、全体に関わる追体験（フラッシュバック）　3つの症状が、ＰＴＳＤと診断するための基本的症状である。そのため、事件前後の記憶の想起の回避・忘却する傾向、幸福感の喪失、感情鈍麻、物事に対する興味・関心の減退、建設的な未来像の喪失、身体性障害、身体運動性障害などが見られる。

夢で追体験（フラッシュバック）からその所為で眠れないし、あれ以来前よりも魔法使いの事を避けるようになった。それにあの時の事だけではなく、村が悪魔に襲われた時の事や魔法学校での虐めも夢に見る様になっていたから嫌でも自覚せざるを得なかった。

ちなみにフラッシュバックとは、強いトラウマ体験（心的外傷）を受けた場合に、後になってその記憶が突然かつ非常に鮮明に思い出されたり、同様に夢に見たりする現象で心的外傷後ストレス障害（ＰＴＳＤ）や急性ストレス障害に顕著である。フラッシュバックという用語は過去に起こった記憶で、その記憶が無意識に思い出されかつそれが現実に起こっているかのような感覚が非常に激しいときに特に使われる。フラッシュバックは必ずしも映像及び音が存在するとは限らない。記憶には様々な要素があるため、フラッシュバックは「恐怖」などといった感情や味覚、痛覚など、感覚の衝撃として発生し得る。フラッシュバックは、幼児期に経験した外傷体験を言語的に認識する能力を持たないまま記憶し、それでもなお忘れられない場合にも起こる。この、外傷体験を当初から取り込むことに失敗する現象のことを解離という。この記憶はまともに意識に上らないため、時間に抵抗し変造加工が困難である。また、それゆえ

にフラッシュバック性の記憶はその鮮明さにも拘らず言語化が困難でもある。さらに時間とともに霞がかからずむしろ原記憶よりも鮮明さは増す傾向が強い。幼年期のトラウマの体験者は、これらの感情の記憶を意識化しないまま持っている可能性もあり、そしてフラッシュバックにおいてそれらを再経験する可能性がある。

旅に出てからも悪夢は変わらない。寧ろ悪化の一途を辿っている。

――私……書……格。お願いします……誰か……助けて下さい……

少し話がずれたが【狸寝入りの術】を使ったアスカが夢を見るはずがないし、見るとしてもあの時のことをフラッシュバックするだけでこんな風に夢の中で考えることなどできるはずが無い。

だから、夢の中でこんな風に誰かの声が聞こえるなんてことはおかしい。その聞こえてくる声には深い悲しみがあり、それが妙にアスカの心を刺激した。

最初は途切れ途切れだった声もやがてはっきりと聞こえてきた。

――私は夜天の書の管制人格。お願いします、誰か主を助けてください！！

夜天の書と名乗る声の主が助けを求めているが、助けてくださいとは何から助ければいいのか？それにあなたはどこにいるのですか？と声無き問いを発する。

毎夜同じ問いをするがその問いに返ってくる言葉はなく、何も見えない暗闇の中で声がはっきりと聞こえてくると徐々に声の聞こえ

る方に人型が浮かんできた。

人型は１０代後半相当の銀髪赤眼の女性の姿になり、その目から絶えず涙が零れ落ちている。

アスカは彼女が泣いているのを見たくなかった。何時も胸の奥から湧いてくる感情ではなく、ただ純粋に泣いている彼女の涙を止めたかった。

だが、彼女に近づこうすると毎夜の如く強制的に意識が引っ張られる。夢の世界から現実へと引き戻されているのだ。

毎夜見る彼女は何時も泣いている。薄れていく意識の中で彼女の涙を止めたくて、泣き顔などではなく笑顔が見たくて存在しない筈の手を伸ばすがそこで何時も目が覚める。

だが、どれだけ意識の中で彼女に向けて叫んでも反応しない彼女が何時もと違い、こちらを見た。

――――あなたは？

――――必ず、必ずあなたを助ける。だから、待ってて！

アスカの意識が薄れていく中、彼女にこちらの存在と意思を伝えられた気がした。そしてどこかで何かが繋がった音が聞こえ、そこでアスカの意識は夢から落ちた。

【狸寝入りの術】が解けて意識が一瞬で覚醒し、目を開ける。布団には寝相による乱れはほとんど無く、起きた時の姿勢が仰向けだったのでしばし天井を見ながら先程見ていた夢の内容を考える。

《どうしたのじゃ、主？》

《また、同じ夢を見たんだ》

《またか、これで一週間連続じゃぞ。しかし何故、感覚共有している我には見れないのじゃ？》

《う～ん、分からないね》

あの時のフラッシュバック性の悪夢は玉藻にも見れたのに、最近アスカが見ている夢は見れないらしく二人して不思議がっている。

初めて夢を見た日は、何者かの攻撃かと考え二人でできうる限りの検査をしたが、夢を見る原因は全く不明。一日経っても身体、精神共に何の変化もなく何だったのかと思いその日は床についたが、また同じ夢を見た。

それから一週間連続で同じ夢を見続けている。内容は毎回全く同じで、最小は切れ切れの声が聞こえてきて、やがて声の主、１０代後半相当の銀髪赤眼の女性の姿が現れてはっきりとした声が聞こえてくる。

女性の話す内容は毎回同じで「私は夜天の書の管制人格。お願いします、誰か主を助けてください」とだけ。

そもそも「夜天の書」という物に聞き覚えもないので、マホネットや図書館島でも調べたが分からなかった。そもそも書の「管制人格」という意味が分からない。

「管制人格」という語呂から考えると書を動かす人格、つまり人間ではなくプログラム体、電子精霊みたいなものなのだろうか。

だが、夢で見る彼女には肉体があり人間に見えたが、純粋な人間にも見えなかった。例えるなら電子精霊と人間を合わせた様な存在だと感じた。

似た存在を知っているが彼女たちとはまた違うという確信も抱いていた。

《夢を見る原因も理由も不明。夢を見ることによる身体、精神共に影響は無し。さてどうしたものか》

《原因も分からんし収まるまでは手の打ち様がないのう》

玉藻と念話をしながら布団を退けて体を起こし、立ち上って布団を畳む。その動作には術を使用しての睡眠なので寝起き特有の寝起きの気だるさは一切無い。

布団を畳み終え、着ているジャージを脱いで洗濯して畳んでおいたトレーニングウェアに着替える。服を脱ぐと肌を刺すような寒さを感じて、昨日見た天気予報で雪が降る可能性が高い事を思い出した。物置なので暖房もなく寒いが我慢するしかない。

《う～ん、何か夢に出てきた女性が気になるんだよね》

《夢の事を気にしても仕方あるまい、それよりも今日は千鶴と一緒に保育園のボランティアに同行するのだろう？》

着替えながら夢に出てきた女性を気にしている僕に玉藻は気にしても仕方ないと話題を変える。

保育園のボランティアについては、以前に２－Ａの生徒の那波千鶴がボランティア先で園児達と散歩しているところを見かけたのが事の始まりだった。

とある休日、アスカがいる通りの反対側にいる幼稚園ぐらいの子供たちと保母さんの集団の中に見覚えるのある人物を見つけて足を止めた。

「あれは……そう言えば保母さんを目指してるって言ってたっけ」

年上のはずの保母さんたちと混ざっても全く違和感の少女が何をしているのかと疑問に思うも、前に他愛のない会話の中で話題に上がったことを思い出して納得した。

手伝いかボランティアと考え、声をかけるのも無粋なので視線を切ろうとした瞬間、ふと耳に入った甲高いエンジンの音。

決して車通りがないとは言わないが集団で園児たちがいるので思わず視線を向けてしまう。が、そんなアスカの視線の端に入ってきたのは小さな影――――そう、子供故の我侭から列から車道に飛び出した園児の姿。

走る車と車道に飛び出した子供、その二つから導き出される一つの未来を思い描き、アスカが逡巡を覚える前に駆けだすのと空気を切り裂くクラクションの音が鳴り響いたのは全くの同時だった。

キキィィ――――――ッ！

周りもそれに気付き悲鳴を上げるが、アスカの極近くで耳をつんざくスリップ音が響いた。

車と子供の間に自分の体を入れて万が一には自分が庇えるようにして左腕で浚(さら)うように子供を抱え、そのまま歩道へと転がり込む。

間一髪で間に合い、車は少し行ったところで通り過ぎ、アスカと園児は目立った怪我もなく退避することに成功した。

「少年、怪我は無いか？」

「おお、二人とも無事だぞ！」

ぎゅっと目を閉じて体を固まらせた子供をゆっくりと下ろし、外傷が無いかを確かめる。何時の間にかアスカに抱えられていたことに目を丸くした園児に周りも無事に気付き、歓声を上げる。

「大丈夫ですか？！　す、すみませんでした！！」

危うく子供を轢き殺しかけた運転手が車から降りてきて土下座しそうな勢いで謝罪していた。

「勝手に飛び出しちゃ駄目でしょ！　良かった……」

見物人が歓声を上げる中で千鶴が二人に近づいてきて道路に飛び出した園児を叱り、無事でよかったと抱きしめる。

「助けてくれてありがとう。君は大丈夫？　って怪我しているじゃない。治すからうちまでいっらっしゃい」

「ただの擦り傷ですから大丈夫ですよ」

「そうはいかないわ。園児の命を救ってもらったのに恩返しもしないんじゃ名折れだわ」

そんな感じで同行していた保育士さんたちにお礼をしたいからと請われ、一緒に保育園に行くことになった。

普段からの人助けでアスカのことを目撃している人は多く、保育園では意外にも子供達に「金髪の兄ちゃん」という愛称で好かれ、度々訪れることになった。

一連の出来事を思い出し、今日はクリスマス会に呼ばれたので行くことになっているのだ。

《そうだね。気にしても仕方ないか》

トレーニングウェアに着替え終え、洗面所から出ながらそう玉藻に答えるがアスカの頭の中にははっきりと彼女の泣き顔が忘れられないほどに焼きついていた。気にはしないが何をするにも彼女の泣き顔がチラついてしまい、ちょっと憂鬱な気分でランニングに出かけた。

アスカたちが訪れた保育園は認可されている施設ではない。そこら辺の保育園に毛が生えた程度の小規模の施設ではあるが、三人の所員に加え、下は三歳から上は五歳までの子供たち、計二十人強がいる大所帯である。

パーティそのものの準備は、すでに数日前から子供を中心に、保育士や千鶴の手で進められていたため、後は簡単な飾りつけ程度で直ぐに終了。

「メリークリスマス！」

『メリークリスマス！』

外様で唯一の男手ということでサンタ役をしているアスカ。

クリスマス・イブ恒例の合言葉に子供たちも唱和する。歓声を上げて騒ぐ子供達をほど良く煽っては宥めつつ、紅白のサンタ衣装を着てプレゼントの入った袋を持って会場内を練り歩いている。そんなアスカに続くのは同じサンタ衣装に着替えた千鶴。白い縁飾りの施された真紅の帽子に、同色の上着……は、良いのだが、その下が問題だ。股下ギリギリを覆う赤い布地の下、眩しいほどの白い脚線美が惜しげもなく露出している。

艶然と微笑んではいるが、僅かに頬を赤くして少しでもスカート丈を伸ばそうとでもするように、ギュッと裾を握り締めて引っ張っている姿が気恥ずかしさを表している。

スタイルが良いので似合ってはいるが、本物のサンタも一発ＫＯな色気を醸し出しており、どこのイメクラだと突っ込みたい。中学生らしからぬ色気を振りまき、年頃の男性がいればイチコロであっただろう。

衣装を用意した人間は一体何を考えているのだろうか。用意したらしき職員が柱の影でアスカに向けてサムズアップしているのを見つけ、千鶴が陰影を背負いながら向かっていった後、響いた悲鳴に誰も突っ込まない。皆、自分の命がおしい。

「はい、どうぞ」

賢明に先程の光景を忘れて、不安げに見上げてくる子供の前に屈みこむと、手にしたプレゼントのお菓子を差し出した。

「ありがとう、金髪のお兄ちゃん」

プレゼントを受けとった子供は、アスカの微笑を見返して礼を言う。

夕食会といっても、内容は簡単なサラダやオードブルと、鶏の腿焼き、後は切り分けたケーキという、いかにも子供会のクリスマスといったものだ。

「「「

ようやくアスカは解放された。別に嫌々参加したわけではないのだが、解放という表現は決して間違いではない。幼児の遊び相手というのはただでさえ体力を使う。ましてや、それが集団となっては最早肉体労働同然である。

常人以上の体力を持っていようが、大の大人が女性の買い物に付き合うのと同じ（肉体的にというより気疲れが大半らしい）で、疲れることには変わりない。

『またね、姉ちゃん、金髪の兄ちゃん！』

ボランティアということで早めの帰宅を促され、会場となっていた広間の片付けも一通り終わって私服に着替えたアスカと千鶴に、見送りに出てきた子供たちが唱和する。

雪が降っていることもあって、冬の外気は一層に凍みる。子供たちに見送られて、並んで歩くアスカと千鶴にはこれといって会話は無いが、別に気まずさがあるわけではない。

アスカの一発芸（アンコールで何回も別のものをやった）などでクリスマス会は、例年以上の盛り上がりをみせて終わった。

時刻はもう夕方。保育園でのクリスマス会を終えて子供達を見送ってからボランティアなので先に上がり、アスカと一緒に女子寮に向かって歩いている。

千鶴がちらりと隣りを歩いている自分より頭二つ分は低いアスカの様子を見る。

初めて彼の年齢で教師をすると聞いた時は驚いた。千鶴自身、中

学生とは思えない大人びた風貌・言動をしている自覚はあるが、それでも年齢に合った学生という身分にある。

アスカと話すと精神的に成熟していると分かるし、平均より身長が高いから歳より上に見ることはあるだろうけど教師という職業ができるとは、とても思えない。

２－Ａに編入してからしばらく経ち、彼はクラスの生徒と仲良くやれているようだ。クラスの女子に対しても優しく、困っている人には手を差し伸べ女子寮でも紳士的に対応している。

クラスの人間が楽しく騒いでいるときも、その輪の中には入らずに周りのクラスに迷惑が掛かりそうになると、さり気なく騒ぎを沈静化させている。

確かに上手くやっているが、彼の年齢を考えると何もかもうまく行き過ぎている。もっと子供らしくあってもいい筈なのに例外は甘い物食べているときだけで他では彼には子供らしさというものが薄い。

考えても仕方のないことなのかもしれないけど、それは悲しいことだと思う。

クリスマス会であれだけ動き、騒いで疲れた様子はないがクリスマス会の途中から若干気落ちした感じを受けたので、気になって聞いてみた。

「ふふ、どうだった今日は？」

「今までほとんどクリスマス会なんてしたこと無いですし、楽しかったです」

楽しめたのならば良かったのだけれど、ほとんどクリスマス会をしたことがないと言う言葉の熱のなさが気にかかる。それに良く考えてみれば彼から家族の話を聞いた事が無いのを思い出した。

教師になるぐらいだから頭がいいとしても、この年頃なら家族と一緒にいたいと思うのが普通のはずだから、話題の一つはあってもいいはず。

そう言えばと思い出してみれば、あの日、車に轢かれそうなった園児を道路に飛び出した事で自分が叱っている時にどこか羨ましそうな視線を感じたことだ。

賢そうだから親に叱られたことが少ないのだろうかと普通に思った。それが事実を知らない戯言だと気づくのは直ぐ。

「そう言えばアスカ君、ご両親は？」

「さあ？　母親は顔どころか名前も知らないですし、父親の方は公的には１０年前に死んだことになっていますけど、双子の兄が６年前に見たらしいので死んでなければ母親とどこかで生きていると思いますよ」

その言葉には一切気負いが無く、無関心に実の両親の事をまるで赤の他人のように話す彼に、千鶴は何とか顔には出さなかったけど絶句してしまった。

「少なくとも記憶の中には両親に会った記憶はありません。その所為かどうか分かりませんけど父親を求める兄とは仲良くありませんでしたし、この６年ぐらい会話もありませんから。僕達は結局最初

から家族という形を成してないんですよ」

薄らと口元に笑みを浮かべる姿は傍から見れば楽しげにも見えるが、前髪とサングラスで目元は見えないけどその姿をよく見れば人形のように虚ろで何の感情も宿していない。

「……寂しくはないの？」

「フフフ、寂しいですか。初めから親や兄をいないものだと思えば寂しくもありませんよ。それに血の繋がりはありませんが、ちゃんと家族はいましたよ？　まあ案外それが原因で兄さんとは家族になれなかったのかもしれませんが」

歩みを止めて空を仰ぎ、笑いながら話すアスカの言葉には嘘は感じられない。

千鶴も足を止めて振り返り、向き合う。二人の間を遮るかのように先程から降り出した麻帆良では珍しい雪が大地に舞い降りている。

陽気に剽軽（ひょうきん）に振舞っていながらも、その雰囲気は痛ましいほどに悲しそうで、哀しげで、今にも涙を零し始めるかのようだ。それは普通に接している分には分からない微かな違和感かもしれない。だが、千鶴がそういう事に関して敏感なことや、話題に出たことで普段は表に出てこない感情が表出した二点が合わさって、アスカの浮かべた笑顔の歪さと儚さが、不思議とハッキリと感じ取れる。

興味がないといえば嘘になる。だが、そういうことを露骨に尋ねることこそ礼儀知らずであろう。千鶴だって、心の傷に無遠慮に触れられれば不快に過ぎるというものだ。

だけど、目の前で泣きそうな子を放って置けるほど千鶴は薄情ではない。空を仰ぎながら笑うその姿はまるで親からはぐれて独りぼっちで泣いている子供のように見えた。

だから、

「どうしたんですか？」

気付くと千鶴はアスカを胸に抱きしめていた。そして目元からは涙がポロポロと零れ落ちる。この涙は同情などではなく、ただ悲しかったのだ。

その強さに、強くあらなければならなかった状況が悲しかったのだ。

「泣いてもいいのよ、寂しいなら寂しいと言ってもいいのよ。誰もそれを咎めたりしないから」

そう言ってアスカを抱きしめる力を強める。

抱きしめられた腕の中でアスカは顔を上げると一つの風景を幻視した。

忘れていたのか、単純に覚えていなかったのかは分からない。今ある現実よりもなお力を持って目前に現われた光景を前にアスカは混乱し、選択したのは……。

「……僕は大丈夫ですよ。那波さんは優しいですね」

アスカが親を初めからいないことが当たり前だと思えてしまうこ

とが、この年で大人にならなければならない環境にいたことが千鶴には無性に悲しかった。

「雪が降って冷えますから風邪を引かないうちに早く帰ったほうがいいですよ」

しばらくその姿勢でいたけどアスカはそう言って千鶴の腕を優しく振りほどき、体を離し笑顔を見せる。千鶴にはその笑顔が無理して作っているように見えた。強張って、泣きそうなのに無理やり笑みを作っていると誰でも分かりそうなほどに。

「そうね、早く帰りましょうか。……あれ、行かないの？」

アスカの笑顔が痛々しくて何も出来ない自分に苦悩しながらも表情には出さず、頷き前を向いて歩き出そうとしたが彼は動き出す気配が無いので行かないのかと聞いた。

「ちょっと買い物があるのを思い出したので先に行ってください。じゃあ！」

そう言って、千鶴の返事を聞かずに止める間もなく後ろを向いて走って行ってしまった。千鶴は彼の後姿が見えなくなるまでその場を動かず立ち続けた。

ハラハラと緩やかに雪が降る中、保育園からの帰り千鶴を置いて

アスカは一人で走って世界樹の元にやってきた。

「……」

《……主》

アスカは玉藻の念話に答えず、樹の根元まで歩いて背中を向いて凭れかかり腰を下ろす。

「僕は那波さんから逃げた。これは……きっと未練なんだろうね……」

《そうかもしれん。じゃが、それも仕方のないことじゃ》

幸いにも今は監視の目がないが、誰にも聞かれないように額を膝に当てて小声で話す。念話でもいいのだがどうしても言葉を口に出したかった。

千鶴には買い物をすると言って離れたが、それは嘘であのまま彼女と一緒にいたら泣いてしまいそうだったからただ逃げたかっただけだ。

浮かんだモノはそれだけアスカの心を揺さぶったのだ。

「さっきまで忘れていたけど思い出したよ。あの日、降っていた雪と……母さんの泣き顔を」

最近毎日、夢で彼女の泣き顔を見ていたが雪と千鶴の泣き顔を見て思い出した。

前世での最後、意識も薄れて霞んだ目で見える窓からは雪が降っていたと思う。何人もの医者や看護師さんが慌しく前世のアスカの周りにいて、母と呼べる人が■■の名前を呼んで泣いていた。そんな崩れ落ちそうな母を父が支えていた。

自分でも意識が寝るのとは違い、どんどん薄れていくのを感じてこのまま死ぬのかとそれでもいいかと思っていた。でも、母さんが泣いていた。今までどんなに仕事で大変な時でも、毎日時間を作って笑顔で■■の見舞いに来てくれた母さんが泣いていた。

どんな時でも笑顔でいた母さんの泣き顔を見たくなくて、薄れていく意識を繋ぎとめてほとんど動かない手を母さんに伸ばした。少しだけ浮いた腕に気がついた母さんが僕の手を握る。

母さんが何かを言っているが何も聞こえない。■■は母さんに向けて笑顔を浮かべられただろうか、声が出ないから口を動かす。『笑って』と。母さんは涙で顔がグチャグチャだったが、■■の口の動きを理解してくれてぎこちないながらも笑顔を向けてくれる。■■は母さんの笑顔に満足して、意識を完全に落とした。

思い出せたのはこれと、僅かなことだけ。

末期に思ったこと、願ったこと、起こったことだけでその前後も微かにしか思い出せない。大切なことがあったはずなのに、どうしても届かないそのもどかしさ。

しかし、それよりも願うのはただ一つの願い。

「あそこへ帰りたい。叶うのなら父さんと母さんの子供に戻りたい。でも、僕はもう別の親の子供として生まれてしまったからどれだけ

願っても戻ることはできない。それは僕の過去を、現在を、自身を否定することだ。辛い事も悲しい事も沢山あったけど、それでも楽しい事や嬉しい事はあったんだ。そんなことはできない。そんな僕でも父さんと母さんを思うのは……許されるのかな？」

全てを捨て去れれば幸福な時に戻れるのだとしても、今のアスカには捨てられないものが多すぎた。

喜怒哀楽全ての感情の先にあるものは、瞳から零れ落ちる一筋の涙。目に浮かぶのは最後に見た、ぎこちない母という実感も無い人――――だけど、誰よりもアスカの心を締め付ける笑顔。

《他の誰が許さなくても、我が許す！！　だから主よ、そんなに思いつめないでくれ》

玉藻の声を聞いて思い出す。今世では家族に恵まれなかったが、どんなに苦しいときも傍にいてくれた玉藻という得がたい半身がいる。

他にも神父や旅で出会った多くの人たちの顔が浮かんでくる。一人じゃない、その事実が心を温かくしてくれる。

「そうだね。僕には玉藻っていう新しい家族がいる。玉藻、ありがとう」

《うむ、そろそろ帰らぬか？　雪も降っておるからコートを着ていても体も冷え切っておる。このままでは風邪を引くぞ》

万感の思いを込めて玉藻にお礼を言って、玉藻の言葉に頷いて雪で冷え切って固まった身体を解(ほぐ)すように動かす。体に積もっている

雪を退かして立ち上がって振り返り、しばしの間世界樹を眺める。

「……夢の彼女の涙を止めたいと思うのは僕の我侭かな？」

《我は良いことだと思うぞ。その女が誰で、何処にいるのかが問題じゃが》

手を尽くして調べたが、全く分からずじまいだ。はぁ～と溜息をついて寮に帰ろうと振り返ろうとした瞬間、世界樹が光りだした。世界樹が発光するのは予測では半年先の学園祭のはず。あり得ない事が起きているのだが光る世界樹があまりにも綺麗で見惚れる。

――助けて

だから、世界樹に見惚れていたからそれに気付かなかった。

「えっ？」

声が聞こえたと思ったら足元に穴が空き、世界樹に見惚れていたアスカは足場がなくなり重力に従って落ちた。アスカの姿が完全にその場から消え、開いていた穴も閉じるとその場には誰の姿もなく小石があるだけだった。

第二十二話　悩んでたら始まった少年（後書き）

改定後に合わせての修正、加筆はありますが基本、改定前と変わっていません。

まあ、改定前よりマシになっていればいいのですが。

ちなみにＰＴＳＤ，フラッシュバックの下りはＷｉｋｉｐｅｄｉａ参照です。

前書きで書きましたが、リリカルなのはＡ’ｓ編は終わるまで連日投稿を行いたいと思います。最後の一話を入れるべきか、入れないでおくかで悩んでいますが最低でも六話投稿します。ストックが全部なくなりますが。

というわけなので次回の更新は、明日の午前０時に更新となります。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

夜勤ってつらいぜ……。仕事変えたい。

第二十三話　はやてとリインフォースと少年（前書き）

連続投稿二回目。

三分の二ははやてが主人公。

文字数はちょっと長めの１２５６１字。

それではどうぞ。

第二十三話　はやてとリインフォースと少年

八神はやては他に色のない暗闇の中、ゆっくりと閉じられていた瞳を開いた。

「……眠い」

自分愛用の車椅子に座っているのは、感覚で何となく判るのだが彼女には自分がいま何処（どこ）にいるのかが全く分からなかった。ここに来る前の記憶もどうしようもないほどの眠気のせいであやふやで、今にもまた眠ってしまいそう。

碌（ろく）に目を開けていられないほどの眠気が襲ってくる所為で、体も全然動かない。動かそうという気力も湧かない。

しかし、このまま眠ってしまえたら楽なのに、何故かこのまま眠ってしまったらいけないような気もする。

何か大切なことを忘れているのではないだろうかとそんな気がして、収まらない眠気で閉じそうな瞼を開くと、はやての前に薄っすらと人影が見える。

その人影がはっきりと見えると、一度自覚せずに瞬きをした。

そこには見覚えのない筈なのに、どこか懐かしいと感じる人が立っていた。初めて見るはずなのにまるでずっと一緒にいたかのような気がする。

はやての前に立っていたのは黒のタンクトップと短いスカートを

着ていて清流の様に綺麗な長い銀髪を持ち、まるで宝石のように澄んだ輝きを宿す深紅の瞳を悲しみに染めた特徴的な女性。

彼女ははやてに優しくそしてゆっくりと話しかける。

「そのままお休みを……我が主。貴女の望みは、全て私が叶えます。目を閉じて心静かに夢を見て下さい」

他人には無表情、無感情に見える彼女の言葉を聞いたはやては自分が何を求め、願い望んでいたのかを意識が朦朧とする中で考えた。でも、思い出せずにその声に後押しされるように睡魔が力を増す。

やっとの思いで開いていた瞼もまるで何十倍も重くなったかのように感じて、さっきよりも開くことに力を入れないと閉じてしまいそうだ。大切な事だったはずなのに、まるで頭に霞がかかったかのように思い出せないはやては、零れ落ちるような問いを口に出した。

「……あたしは、何を望んでたんやっけ？」

そんなはやての自問するように呟いた言葉に、彼女の目の前に立っている銀髪の女の人は、まるではやてにそう言い聞かせるように語りかける。

「夢を見ること。悲しい現実は、全て夢となる。安らかな眠りを……」

そうだったかな、と自分の望みとは夢を見ることだったのか、と思案するが、どうしてもそのことに違和感を拭えない。違うと心のどこかでそれを否定している。

「あたしの……ホントの望みは……欲しかった幸せは……」

「健康な身体、愛する者達とのずっと続いていく暮らし。眠ってください。そうすれば夢の中で、あなたはずっと、そんな世界にいられます」

確かにはやては彼女が言うように健康な身体や皆と続く幸せな暮らしを望んでた。でも、彼女が言っているのは夢の中で続くお話、現実の世界での幸せではない。

はやては、意識が沈みかけながらも首を横に振った。

現実が簡単なものではないと知っている。何時からか、そう、何時からか一人の少年の夢を見ていた。

何時から少年の夢を見ていたのか、正確な時期は分からない。少なくとも闇の書が覚醒して守護騎士たちが出てきてからなのは間違いないが、最近なのか、もっと前からなのか本人にも分からない。

起きた頃には夢の内容を忘れ、胸に迫る悲しみや辛さに涙を流したことがある。だけど、いまは思い出せる。

苦しくて、辛くて、悲しくて、何度も泣いて、何度も折れて、何度も膝をついて、その度に傍にいてくれた人に、救ったはずの人に、救ってくれた人が立たせてくれていた。

少年は歪んでいる。それは客観的に夢を見ていたはやてには分かっていた。

だけど、同時に羨ましいとも感じていた。そこまで在れる強さに、

当たり前のことを当たり前としてできる弱さを。

だからこそ、少年のように目の前に困っている人が、泣いている人がいたら救えるようになりたいと憧れを抱いた。

両の拳を握り、薄く開いていた瞳を一度閉じて何度も首を横に振って意識をしっかり持つと、はやては車椅子から身を起こして彼女の悲しい目を見据えて言った。

「せやけど、それは……唯の夢や。私、こんなん望んでない。あなたも同じはずや、違うか？」

はっきりと、自分の意思を否定の言葉を告げる。はやては目の前に立っている女の人と、しばしの間互いの顔を見つめていた。

はやての瞳を静かに見つめる彼女は、ゆっくりと口を開いて、

「私の想いは、騎士たちの感情と深くリンクしています。だから騎士たちと同じように、私もあなたを愛おしく思います。無論私自身が魔導書としてあなたに接した時の感情を後押しする程度のものではありますが、私自身も騎士達と同じようにあなたを愛しく思います。だからこそ、あなたを殺してしまう自分自身が許せない」

「っえ？」

右手を胸に当てて僅かに顔を伏せ、瞳を閉じて言うその言葉に、はやては息を詰まらせた。

その時、はやては初めて目の前に居るこの女性が闇の書自身だと気がついた。何故自分を殺してしまうのかという疑問に、闇の書は

はやてに伝えてきた。

「自分ではどうにもならない力の暴走。あなたを侵食することも、暴走してあなたを喰らい尽くしてしまうことも、止められない」

伏せた顔を再び上げ、はやての顔を見て今の闇の書が、暴走状態にあるという事を告げてきた。

そう告白する闇の書の声の深い悲しみと悔しさ、無念さははやてに嫌でも伝わってきた。

「覚醒のときに、今までのこと少しは分かったんよ。望むように生きられへん悲しさ……私にも少しは分かる。シグナムたちと同じや！　ずっと悲しい想い、寂しい想いしてきた」

それは、はやてが闇の書の主として真の覚醒を迎えたときに頭の中に流れ込んできた闇の書の記憶の一部。

望むように生きられたらどれだけいいか。

或いは力で、或いは危険性から、生き方は曲がり、誰かに利用され、疎まれ、蔑まれる。それを仕方のないことと言ってしまえば、その程度かもしれない。

はやては幼少の頃から一人で暮らしてきた。決して自分から望んだものではない。障害を抱えて、何時麻痺が足から上に上ってくるかもと、一人でいることが寂しくてと、枕を涙で濡らしたことも一度や二度ではない。

闇の書の意志は、はやての境遇を、気持ちを知っているので頷き瞳を閉ざした。

「そやけど、忘れたらあかん！」

「っ！」

その言葉に驚いたように瞳を開いた闇の書の意志は、はやてを見詰めてくる。

身体を前に乗り出して闇の書へと右手を精一杯伸ばし、腰を浮かせて右頬に触れ、

「あなたのマスターは、今はわたしや！　マスターの言う事は、ちゃんと聞かなあかん」

微笑を浮かべ、はやてが感じるこの胸の中の想いをそのまま伝える。

言葉が放たれた直後、私の足元に正三角形の魔法陣が展開され、辺りを覆う暗闇を照らすように白い光を放ちながらゆっくりと回転を開始する。

右手と同じく左手も伸ばし、両手で頬を挟むように触れ、真っ直ぐに相手の瞳を見詰めた。

そして、闇の書を自身の目の前に座らせると、優しく語り掛けた。

「名前をあげる。もう闇の書とか、呪いの魔導書とか呼ばせへん。私が呼ばせへん」

言葉を聞いた女性、闇の書の目尻から涙が零れた。

「私は管理者や。私にはそれができる」

「無理です。自動防御プログラムが止まりません。管理局の魔導師が、懸命に私を止めようと戦ってくれていますが、それも……」

闇の書の意志は首を横に振り、僅かに眉を歪ませて答える。

この子にこれ以上辛い想いをさせたくない。

そして彼女は知っている。他人のために何度も何度も命をかける馬鹿な少年のことを。どれだけ傷ついても、どんな絶望的な状況であろうとも覆す少年の存在を。

はやてはそう思い、目を瞑って真摯に呼びかけた。

「停まって」

直後、二人を中心に展開していた魔法陣が、強い輝きを放ち始めた。

目の前の彼女の中で暴れまわっている自動防衛プログラムの動きを少しの間でも管理者権限を使って停止させることに成功した。

そして【闇の書】ではなく辛い過去を全て捨てた、新しい幸せな名前をこの子に上げようと思いつく。

「夜天の主の名において、汝に新たな名を贈る。強く支える者、幸運の追風、祝福のエール、リインフォース」

足元の魔法陣は輝きを増して白い光が放たれ二人を優しく包み込み、暗い世界を白く染めていった。

「闇の書」の本来の名は「夜天の魔導書」で、はやての目の前に立つ彼女は人間ではなく、書の管制人格（マスタープログラム）でユニゾンデバイスである。

「ユニゾンデバイス」とは、正式には融合型デバイス呼ばれ、ベルカによって開発されたデバイスで言うなれば、ミッドチルダ式のインテリジェントデバイスを極端化したもの。姿と意志を与えられたデバイスが状況に合わせ、術者と「融合」し、魔力の管制・補助を行う。この形式では他の形式のデバイスを遥かに凌駕する感応速度や魔力量を得ることができる。しかし、融合適性を持つ者の少なさや術者に合わせた微調整・適合検査の手間、そして何よりデバイスが術者をのっとり、自律行動を始めてしまう「融合事故」の危険性・事故例により、製品化に至らなかった。融合型デバイスは正しく使っても髪や瞳に変色が見られるなどの顕著な変化が見られる。外見が術者とデバイスのどちらに近いかで制御できているかどうか区別ができる。使いこなせていないと完全にデバイス側の外見になってしまうことがある。また、普段は主導側の思念通話に融合側が答えるという形で対話が行われるが、どちらか片方が意識を失ったり、行動能力を失っている場合には、内部空間で臨時の保護・治療、行動の支持や相談が行われる。この際、主導側のマルチタスク能力によっては内部で治療を行いながら外部で戦闘や移動等の行動を続けることが可能だ。

主と共に旅をして各地の偉大な魔導師の技術を収集し、研究する

ために作られた収集蓄積型の巨大ストレージデバイス。

しかし、夜天の書は歴代の持ち主の何人かがプログラムに悪意ある改変をし、その結果、旅をする機能が転生機能に復元機能が無限再生機能へと変化してしまった。

それにより収集蓄積型でしかなかった「夜天の書」は破壊の力を使う「闇の書」と呼ばれるようになった。

転生先は闇の書に合致する魔力資質の持ち主をランダムで主を選び、前回の消滅から新たな主の元へ直接転生する。

転生直後は全頁が空白になり、この頁は魔力の源である「リンカーコア」を吸収する事でページに文字が記載され、一定期間、頁の蒐集がないと持ち主自身の資質を侵食する。

頁が全く埋まっていない状態でも自力で空中を浮遊して移動することができ、ある程度頁が埋まった状態では自力で次元転移まで可能で、完成前に闇の書を用いて魔法を使用すると、使用した魔力の分だけ再び空白に戻ってしまう。

頁は全部で６６６頁あり、一人の魔導師や生物のリンカーコアを蒐集できるのは一度きりでこのリンカーコアを蒐集することで、その術者の使う魔法をコピーする機能がある。

「リンカーコア」を吸収する機能は「蒐集」と呼ばれ、完成時は「蒐集」した「リンカーコア」が使用経験のある「魔法」を行使出来る様になる。

ただし、コピーした魔法でも元々の術者との魔法資質の違いで別

の効果となったり、術式を組み直す必要がある。

完成後は、持ち主が闇の書の意志（管制人格（マスタープログラム））と融合することで、巨大ストレージ「闇の書」に蓄えられた膨大な魔力データの魔力を行使できる。当然蒐集した対象の魔法も使え、莫大な魔力がある分オリジナルを上回る威力を生み出す可能性もある。

ただし、所有者に選ばれても、蒐集によって魔導書を完成させた後に管制プログラム・防御プログラム双方の認証を受けなければ管理者権限を得られず、機能の全てを使用することはできない。

そして、自律思考を持たない防御プログラムの破損によりこの認証が正常になされず幾度も暴走を起こしていた。

所有者は一頻りの暴走の後に死亡、「闇の書」は初期の白紙状態に戻り、次の所有者の下へと転移する。

破壊・改竄を加えても即座に修復する「無限再生機能」とエース級魔導師の戦闘力を持つ「ヴォルケンリッター」を発生させて「闇の書」本体や所有者を守らせる「守護騎士システム」、そして何よりも、本体の消滅や所有者の死亡をトリガーにして新たな主たる資質を持つ者の下に転移再生する「転生機能」がある為、「闇の書」の完全破壊は不可能。

また、真の持ち主以外によるシステムへのアクセスを認めず、それでも無理に外部から操作をしようとすると持ち主を呑み込んで転生してしまうため、プログラムの停止や改変ができず、完成前の封印も不可能。

ページを埋める為に人間・人外を問わず多大な被害を与え、最後

には周辺の次元世界をも巻き込む程の暴走の果てに所有者すらも殺し（しかも完成に向けての蒐集を怠ると所有者の「リンカーコア」をも侵食して死に至らしめる）、更にはすぐさま次の犠牲者を生み出すその凶悪性から時空管理局では忌み嫌われており、「闇の書」という名称はそこから付けられた。

管理局からは最上級に危険な「古代遺産（ロストロギア）」第一級捜索指定がされている。

闇の書（夜天の魔導書）に付随するものとして、私（管制人格（マスタープログラム））以外に守護騎士ヴォルケンリッターがいる。

書とその主を守るために生み出された「烈火の将」「風の癒し手」「紅の鉄騎」「蒼き狼」の４人からなる魔法生命体。闇の書の第１次覚醒と共に現れ、以後闇の書のページを元に戻すために魔力蒐集を行い、同時にその主を守る。

管理者権限を持つ主は、魔力付与による彼女達の破損再生や記憶・感情のリンクが可能。

ベルカ式魔法やアームドデバイスを使いこなし、ベルカ式の特性である対人戦闘に特化しており、これまでも闇の書の登場と共に現れていたが、感情もなく、ただ命令を遂行するだけのプログラムだった。

だが、今回の主、八神はやてによって人間扱いされ、以後急速に人間らしさを見せるようになった。

「私達全員、随分変わったわ。みんな、はやてちゃんが私達のマスターになった日からよね」とシャマルが言っていた。

闇の書の全機能は彼女の管理下にあるため、守護騎士達の精神ともリンクしている。彼女は闇の書そのものであると同時に「第五の騎士」と言うべき存在で戦時に主と融合して戦う、言うなればヴォルケンリッター最後の騎士だ。

彼女が明確に姿を取って現れるのは闇の書の完成・暴走開始後となるが、意思はヴォルケンリッターの出現時に目覚めており、騎士たちと主との暮らしを見つめていた。

蒐集したページが４００頁を超え主の承認があると人格起動出来る。今代の主とは精神アクセスをかけることで、夢の中で数回出会っているが、彼女がその記憶を消していたため、主だるはやては覚えていない。

同時に、これまでと同様に暴走への道を進んでいることを悲嘆していた。

彼女もヴォルケンリッター達と同じく、今回の主となった八神はやてに深い愛情を抱いているが、結局は今までと同じ融合事故から暴走への道に陥ってしまったことに、深い悲しみを抱いていた。

そして闇の書は守護騎士達を蒐集することで完成しており、直に暴走を始める。

だから、彼女は主には悲しい現実を忘れて夢の中で安らかな眠りをと望んだが、主はそれを望まなかった。

「名前をあげる。もう闇の書とか、呪いの魔導書とか呼ばせへん。私が呼ばせへん」

彼女は主の前に跪き、その瞳から大粒の涙を零した。

彼女自身「ああ、これは涙」かと、久しく忘れていた感覚。自分はまだ泣けるのだと感動にも似た感情を抱いていた。

「私は管理者や。私にはそれができる」

「無理です。自動防御プログラムが止まりません。管理局の魔導師が、懸命に私を止めようと戦ってくれていますが、それも……」

此度の主は、一体どれほど暖かく、どれほど大らかで、何処まで心優しいのかと嬉しさを感じながらも、同時にそんな主を救えぬ自身に絶望を抱く。

「停まって」

主の言葉の直後、二人を中心に展開していた魔法陣が強い輝きを放ち、彼女の中で暴れている自動防衛プログラムの動きを停止させることに成功した。

しかし、それも一時凌ぎの時間稼ぎにすぎない。

「夜天の主の名において、汝に新たな名を贈る。強く支える者、幸運の追風、祝福のエール、リインフォース」

「新名称、――――リインフォース認識。管理者権限の使用が可能になります」

足元の魔法陣は輝きを増して白い光が放たれ二人を優しく包み込

み、暗い世界を白く染めていく。

その光の中で、彼女――――リインフォースは嘗(かつ)て願った想いを強く思った。

（何処の誰でもいい、どんな手段でもいい、この絶望の輪廻を断ち切ってもらえないか。この優しい主と、一途な騎士達を救ってはもらえないか。烈火の将、風の癒し手、蒼き狼、紅の鉄騎、そして我が主八神はやて。神でもいい悪魔でもいい、誰かどうかあの子らを……助けて）

彼女の将や主を救って欲しいという純粋で誰よりも強い願いは世界の壁すらも超えて放たれる。

本来なら誰にも届かなかったであろう願いは、届いた。本人の了承も得ぬままに。

「え？」

突然、リインフォースの脳裏に全容が見えないほど大きな樹が光っているイメージが浮かんできた。理解できず、呆けたような声を上げる。

「どうしたん、リインフォース？」

問うてきた主の言葉の後に、返事を返す前に書の主とリインフォースにしか干渉できない内部空間に穴が開いた。

問いかけてくる主の言葉に答えず、穴の向こうに先程脳裏に浮かんだ自身を遥かに上回る莫大な魔力なのにどこか暖かく感じる樹の

存在を感じ取った。

一瞬だけその樹のある土地に気が向いていると、穴を通って何かがこの内部空間に降り立った。

「なんやの？」

はやては状況の推移についていけない。

元々、この光もない真っ暗な空間にいる経緯すら分かっていない節があるのだ。リインフォースの奇行、返って来ない問い、新たなる闖入者と状況が目まぐるしく変わってついていけない。

「お下がり下さい、主」

主であるはやてが疑問を挺しているが、リインフォースにも状況が分からないので答えることはできない。取り合えず、出来るのは闖入者から主を守るように前に立つことだけ。

二人から見て背中を見せて膝を曲げるだけで着地の勢いを殺し、トンと着地の音をさせて静かに降り立ったのは、まだ少年と言えるぐらいの年齢の男の子で目元は髪の毛とサングラスか？で隠れて見えない。

年齢的にははやてと大差はないように感じる。この年代の身長の格差は意外と大きい。離れていても一個か二個ぐらいだろう。

高所から着地したにも係わらず、危なげなく着地したことや、纏う魔力から魔導師――――でなくても魔法に何らかの関わりがあることは間違いない。

この状況で普通に考えるなら干渉できないはずのこの空間に突然現れたのだから当然敵のはずなのだが、何故かリインフォースは少年を敵とは思えなかった。

「……え～と、確か夜天の書の管制人格さんで間違いないですか？」

立ち上がり、直ぐに二人の方を向いて少年がリインフォースとはやてと主を見つけて、闇の書ならばまだしも夜天の書と知らないはずなのにリインフォースに向けてそう言った。

理由などないがただ漠然とあの樹が自分の願いを叶えるために少年をここに呼んだのだと、なんの根拠もなくそう思えた。

世界樹の発光を綺麗だと思って眺めていたら、突然アスカを中心に半径３メートルの穴が空いた。

当然、足場が消滅したのでそのまま重力に従い浮遊感と共に穴に落ちた。

さっきまで過去を思っていた所に世界樹の発光を見ていた為に完全に油断してしまい、足場が消滅して自分が落ちている事に気がついた時には既に腰まで落ちていた。

如何に優れた戦士と言えど、何時も気を張っているわけではない。油断する時もあれば、気を抜いている時もある。

今がまさにその時で、手をどんなに伸ばしても穴の端まで届かない事は直ぐに分かり、【浮遊術】で飛ぼうとするが魔力が拡散して魔法をキャンセルされてしまった。

「……な、にっ！」

それならばと【虚空瞬動】で飛び上がろうとするが、魔力ほどではないが気も拡散してしまい多少は落下スピードが若干落ちるだけで解決策にはならない。魔法は魔力が拡散してしまって使えず、気はまだ魔法よりかは使えるが効果は薄い。

この間、僅かコンマ数秒の間に為され、何か手段はないかと高速で頭を働かすが成す術もなく、そのまま重力に逆らえずに頭も穴を通過した。

「影分身の術！」

何も打開策が思いつかず、苦し紛れに影分身の印を結ぶと術が発動し分身が斜め上に出現した。普通に術が発動したことに逆に驚いた。

術が発動してもアスカ自身が重力に従って落ちているので発動した場所にいる分身体とはこの位置関係になっている。

何故魔法と気は拡散して発動しなかったのに忍術が使用できるのかと一瞬驚いたがこれでいけると思ったが既に本体は完全に落ちており、戻るのは難しい。

刹那の間に判断した脳は体に指令を送る。

「行っっっけえええええぇぇぇぇ――――――!!」

アスカ本体は両手の掌を重ねてそこに分身の足を乗っけて、声と共に力の限り分身を開いた穴の外まで飛ばす。ちゃんとついたかどうかは確認できないが恐らく大丈夫だろうと思うしかない。

これで一時間経っても戻れない場合は分身が代わりに連絡してくれる。その後は元の場所で小石に変化して動かなければ消費を減らせば最大三日は存在していられる。

分身が消えるまでに帰れない場合は、旅に出たという事を消える前に連絡してもらう。これで少なくとも何とかなる。

《さて、これから僕達どうなるのかな?》

《分からん。何とかなると考えるしかあるまい》

視界が完全に地面より下になると見渡す限り真っ黒い世界で、上にだけ穴が空いて黒以外で空が見える。

見渡す限り真っ黒なので距離感やスピード感が今一分からないが、穴はまだ開いたままで見えている空が段々と空が遠ざかっていくのは分かる。

体感で3メートルぐらい落ちると遠ざかっていく空を見ていてもしょうがないので、何処に落ちるのかと下を見ると、下にアスカが落ちたのよりかは小さいが白く光っている穴が空いているのが見え

た。

《鬼が出るか、それとも蛇が出るのか。はてさて、これからどうなることやら》

《主？　こんなことになっているのに不安を感じていないようだが》

騒動自体に巻き込まれるのは、もはや諦めの境地に達しているので珍しくはない。しかし、大なり小なりの不安を抱えていることは。玉藻には分かっていた。

今回はそれが全くない。玉藻が気になっても当然のことだった。

《これは推測なんだけど世界樹が光っている時に「助けて」って声が聞こえてから穴が空いたから、もしかしたらその声の主が僕を呼んだんじゃないかと思うんだ。だから少なくとも悪いことにはならないと思うんだ》

玉藻の疑問にアスカは、どこか嬉しそうに話す。

趣味の欄に「人助け」と書いた方がいいぐらいのお人よしのアスカだ。最近悩んでいた懸案事項が解決できる可能性があるのだから声が弾むのも無理はない。

《確かにそうじゃが、さっきは仕方ないかもしれんが油断は禁物じゃぞ》

玉藻の言葉にアスカは心中で「そうだね」と頷き緩んでいた意識を引き締め、意識レベルを戦闘状態に持っていき、足から光っている穴の間を通っていった。

穴を通ると背中側に人がいる気配を感じ取り、気配の位置から普通に立っていることを予測して地面が迫っているのを自覚した。

先程までは異なり、この空間なら魔力や気は使えそうだがこれぐらいなら必要ないので、着地の反動を膝を曲げて殺して静かに着地した。膝を曲げた状態からゆっくりと立ち上がりながら不自然にならない程度に周りを観察する。

と言ってもほとんど辺り一面、闇で人は後ろでアスカを見ている、見た目から僕と同い年ぐらいの車椅子に座っている少女と、少女を守るように前に立っている夜天の書の管制人格（夢の人物通りなら）しかいない。

《此処何処だろう？》

《分からんな、少なくとも通常空間ではなさそうだが》

しかし、二人の足元に光っている正三角形の魔法陣は何だろうかと、見たこともない魔方陣に心中で頭を捻る。アスカが知らないだけかもしれないが、案外魔法世界とは違う世界の魔法かもしれないと楽天的に考える。

実はその考えが正しいと後になって分かるのだが、今は自分の発想の飛び具合に笑いを堪えるしかなかった。

「……え～と、確か夜天の書の管制人格さんで間違いないですか？」

車椅子の少女はもしかしたら夢で言っていた主なのかもしれない

と、管制人格（アスカは知らないがリインフォースと名付けられている）にこの場所の事を問いかけながらそんなことを思っていた。

「何故、私の名前を知っている？　そもそもどうやってここに来た。ここは主と私しか入れない場所だぞ」

この感じからすると、どうやら向こうは自分の事を知らないようだとアスカは予測する。それにどうやらここには彼女達以外に入れないようでリインフォースに警戒されているのも敏感に感じ取っていた。

知らない人間が二人しか入れない場所に勝手に入ってくれば警戒もするかと、一人納得した・だが、警戒している割には車椅子の少女は疑問符を浮かべているだけだし、管制人格も警戒しているだけで敵意は感じない。

それに二人とも何かを急いでいるように見えた。

「もしかして、急いでますか？　出来れば状況を説明して欲しいんですが……」

「あ～、正直に言うとかなり切羽詰っとてな。ゆっくりと状況を聞ける時間がないんよ」

リインフォースの後ろにいたはやてが彼女の手を後ろから引っ張って横に並ばせて、申し訳なさげに言った。

はやては少年に警戒心が湧かなかった。それに理由がある。それははやてには少年に見覚えがあったからだ。二人から少し離れた場所に立つ少年は夢に出てきた彼と瓜二つ――――というより当人だ

ろうと思ったから警戒心がどうしても湧かない。

しかし、まさか車椅子の少女が自分を知っているとは露(つゆ)とも考えないアスカは、かなり急いでいる、それもかなり切羽詰った状況にいることを自覚しながらも、どんな状況なのかを聞きたいし、それは乱入者である自分のことを聞きたい向こうも同じだろうと考えていた。

《それならば【月読】を使えばいいのではないか？》

《……ああ、それなら時間もほとんど関係ないしね》

玉藻の提案に少しだけ考えながらも、できれば取りたい手段ではないが、他に手段もない以上は【月読】なら時間が無くても関係ないから、ゆっくりと説明できる。

「それなら僕が時間を作りますよ」

そう言って相手の返事を待つことなく、つけているサングラスをずらす。

普段は隠されていた眼が衆目に晒され、意識を切り替え、一度閉じた目蓋が上げられた時には眼の色は赤く変色し、三枚刃の手裏剣の紋様が浮かび上がっていた。それがアスカの切り札の一つで【万華鏡写輪眼】を発動したことを示していた。

左目の【万華鏡写輪眼】の宿った術である【月読】を発動させて、二人を幻術空間に引き込んだ。

【月読】は瞳力の宿った目を見た相手に術者が時間や空間、質量

などあらゆる物理的要因を支配する自らの精神世界へと対象を引きずり込み、相手に無間地獄を体験させる幻術。

【月読】は一般的な幻術とは違い相手の意識に直接干渉し「実際に体験していると錯覚させる」術であり、なおかつ時間さえも操れる為術者は隙を作らずに対象に効果を及ぼすことが可能。

その上記の性質より常人でこの幻術を見抜くことは皆無（そもそも術にかかっていることが察知出来ない）幻術であるため相手に対しては物理的（肉体的）な殺傷力は全くないものの、与える精神的なダメージは計り知れない。

【月読】なら精神攻撃をしなければ術としてチャクラの消費が多いから多様はできないが、こういう風にも日常生活にも使える。例えるならアスカだけが使える精神だけのダイオラマ魔法球の別荘だ。

アスカでは、この眼のオリジナルであるうちはイタチほどに使いこなすことはできないが、そこそこのレベルまでは使える。

今回は状況を説明しあうだけなので、さっきまでいた黒一色の空間とは対照的な真っ白な空間に机と椅子があるだけだ。

二人を幻術空間に引きこんで対面の椅子に座らせて、アスカと姿を現した玉藻も椅子に座る。

「えっ！　あれ何時移動したん？　それに車椅子じゃなくて椅子に座って、しかももう一人の人は尻尾が九本もあるし……ってどうしたん、リインフォース！！」

はやては車椅子に座っていたから足が悪いのかと思ったので背凭

れと手摺つきと豪華である。

「……ああ」

何が起こったのかと不思議そうに辺りを見渡して玉藻の尻尾を不思議そうにみているはやてと違い、リインフォースは玉藻の力の大きさを理解できてしまい、茫然自失で震えて椅子から落ちそうになったところをはやてに支えられていた。

リインフォースからしてみれば堪ったものではない。突然、目の前に古龍――――それも何百年と生きた伝説レベルの存在が目の前で大顎を開けていたら、どんなに優れた戦士であろうと何の前準備もなく遭遇すれば呑まれても仕方がない。

《玉藻、力を抑えて。このままじゃ話にならない》

突然どうしたのかと思ったが、よく考えれば隣りの玉藻は全く力を抑えていなかった。こんなに大きな力なのに直ぐに気付かないとは慣れって恐ろしい。

《おお！　久しぶりに主以外の者と会ったからの、うっかり抑えるのを忘れておったわ》

何時も一緒にいたから、プレッシャーを感じるのが当たり前だったから気付かなかった。最近、別荘内以外でアスカの内から外に出ることがなかったためにうっかりした玉藻であった。

はやてが気付かないのは力を感じ取れていないからで、様子から魔力は大きいが初心者かもしくはそれに近いことをアスカに予測させた。

「すまんな力を抑えるのを忘れておったわ。……これで良いか？」

アスカが念話で玉藻に伝えると玉藻も忘れていたようで、慌てて謝りながら力を抑えた。

「はぁはぁ……はい。これなら大丈夫です。ありがとう御座います、主ももう大丈夫です」

「そうなん？　大丈夫ならいいんやけど……」

玉藻が力を抑えるとリインフォースも落ち着き、心配してくれた主に礼を言うが、はやては何があったのか理解できていないので不思議そうに頭を捻る。

「さて話を戻しますが、別にどこにも移動していません。例えるなら精神だけを別空間に連れてきたかっていうのが正確です。ここなら外の時間は関係ないので長く話しても現実にほとんど影響することは無いからゆっくりと状況を聞けます」

へえ凄いんやな～、と素直に感心している対照的にリインフォースはそれがどういうを意味を持つのかを理解しているので驚愕を露にして固まる。

【月読】の非常識具合を考えてみればリインフォースの反応が一般的なので、意識が解凍するまではやてと雑談をしていた。

そしてしばらくしてリインフォースが元に戻ってから、互いの状況を話し始めた。

第二十三話　　はやてとリインフォースと少年（後書き）

書くことほとんどないので、現在のマイブーム

「機動戦士ガンダムＵＣ」

ＤＶＤ借りたけど、映像が凄いです。

連続投稿第三弾である次回の更新は明日の午前０時に更新となります。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

どうしても原作ネギの強さに勝てるイメージが思い浮かばない。

第二十四話　　話し合う少年（前書き）

連続投稿三回目。

文字数は規定ギリギリの１０１２９字。

それではどうぞ。

第二十四話　話し合う少年

彼女達をこの幻術空間に引き込むと何故か既にそこに玉藻がいた。アスカとしては居てもいなくてもどちらでもよかったが、玉藻は二人の反応を見るために話はアスカに任せるようで、この話し合いには同席するだけのようだ。

二人の反応を見たいが為に出てくるなんて、ぶっちゃけ意地が悪いと思ったりはしたが口に出さない分別はあった。

まずは向こうの話を聞きたかったのだが、一番事情を知っていそうなアスカの目の前に座っている管制人格（リインフォース）がまださっきのショックから復帰できていないみたいなので、最初はアスカ自身の話から始めた。

玉藻との予想ではここはアスカが全く知らない世界の筈だが、下手にいらない事を言って後で問題にしたくないので確認しといて損にはならない。

「先に聞きたいことがあるんですけど【赤き翼（アラルブラ）】【千の呪文の男（サウザントマスター）】【魔法世界】【立派な魔法使い（マギステル・マギ）】って知っていますか？」

「わたしは知らんな。リインフォースは？」

「いえ、私も知りません」

最初にキーワードを出して知っているかと聞くと返答は「知らない」だが、嘘の可能性もあるが、これはアスカの主観になるが二人とも全く知らないようで最低でもここは魔法世界ではないと考えら

れる。

魔法世界の住人もしくは魔法使いに何らかの関わりがあるのなら、これらの単語に何らかの反応をする。

《どう見る？　玉藻》

《我から見ても嘘をついているようには見えんな、そこは信じてもよいじゃろう。だが、あの魔方陣や保有魔力から見て何らかの形で魔法、もしくはそれに類似するものに関わっている可能性は高いがの》

玉藻から見ても二人の反応は本当に知らないのだと判断できるようなので、此処は魔法世界ではないようだが目の前の二人は木乃香（ほぼ同棲に近いのだから名前で呼んでほしいと言われたので最近は名前で呼ぶようになった）の魔力量とほぼ同等クラス。双子の兄であるネギよりも魔力があったし、ここに落ちたときに彼女達の足元に光っていた魔方陣から見て彼女達が魔法を使う者であることは想像に難くない。

（知ってるって言っといた方が良かったんやろうか……でも、ほとんど知らんようなもんやしな）

考えに耽るアスカを尻目にはやては断片ながらも知っていることを言うべきか悩んでいた。咄嗟に知らないと言ってしまったが、全くではなく、断片的なら分かる。特に目の前の少年――――アスカのことならそれなりに知っている自負がある。

それ以外のことはほとんど知らないに等しく、アスカが話した単語も聞き覚えがある程度でしかない。なので、今さら知っていると

は言い辛い。

（魔法使いであることは言っても、英雄の息子とかは言わない方が無難だろう）

これまでの情報から判断して魔法使いであることは言っても問題ないと思うが、英雄の息子という有名人であることは問題になる可能性も大きく言うべきではないだろうと判断する。

玉藻の正体については力の大きさを知られてしまっているから完全に隠すことは難しいが、なんとか誤魔化そうと心に決める。

《玉藻のおっちょこちょい》

《いや、正直すまんかった。我のミスじゃ》

アスカと同年齢ぐらいの少女には理解できていないようだったから、周りに知られないようにリインフォースに口止めしておけば玉藻も同じ轍は踏まないから広まることはない。

そこでアスカはリインフォースに視線を移し、

（……綺麗な娘だよな……）

自然に、簡潔に夢ではなく現実でリインフォース見たアスカは、思わずそんな感想を漏らす。

長い艶やかな銀髪、整った造形の顔、少し鋭い切れ長な目、赤い瞳、細身な体、スラっと伸びる手足、自己主張の激しい母性の固まり、同姓でも憧れる様な整ったプロポーション。

顔には化粧の類の存在は感じられず、服は露出の多い黒いフィットネススーツ……というか、もはやこれは黒い下着姿と言っても良いだろう。

改めて見ると、この女性は一般で言う『美女』の部類の人間だろう。ファッション雑誌のモデル……いや、玉藻同様に人ならざる美しさを感じていた。

似たようなことをはやても玉藻を見て思っていたのだが、それはあまり関係のない話である。

「僕の名前はアスカ・スプリングフィールド。歳は数えで１０歳で「えー！！　わたしと同い年て嘘やろ！。背高すぎ！！」適度な運動と適切な食事、充分な睡眠で十分大きくなれますよ。話を続けますと魔法学校卒業したばかりの見習い魔法使いで、卒業課題で二ヵ月後に女子中の教師をすることになっていて今月から現地で生徒をしています」

「何で子供や言うても男やのに女子中学校に通ってんのや」

「確かにそうです」

と、はやてとリインフォースが「二ヵ月後に女子中で教師をする」「現地で生徒をしている」の単語に若干の非難の視線を受けたがこれにはちゃんとした事情がある。

「卒業した魔法学校の卒業課題がその女子中で教師をすることって指定されていて、まあ、ちょっとした事情があって抗議してもそれは覆ることがなかったのでそれならばちゃんと教師をできるように、

教師として赴任する前に現地で生徒として通わせてもらっているんです」

今の立場は自身の願いではないので苦々しさを隠す気もなく言うと、目の前の二人から同情の視線を向けられた。自分でやっといて何だがちょっと傷ついたアスカであった。

サングラスの下から頬に流れたのは心の汗だと信じたい。それに気が付いている二人がスルーしてくれたのは正直嬉しかった。

「それで聞きたいのだが、アスカはどんな魔法が使えるのですか？」

腕の裾で頬を拭うとそれまで話を聞いていたリインフォースがアスカはどんな魔法を使うのか尋ねる。

アスカは自分が魔法使いと言ってあるので基本的なことなら教えても問題ないと思い、簡単に説明する。

「単純に「灯りを点ける」や「手を触れずに物を動かすといった」魔法から、精霊を魔力で使役して攻撃する魔法とかですね。まあ、僕は魔法使いとしては三流以下なのでほとんど使えませんが」

そう言えばとはやては夢の中でも、アスカが自分を「魔法使いとしては三流以下」とよく人に称していたことを思い出した。断片的な記憶ながらもアスカが魔法と言える物を使ったことは決して多くはない。

（確か、忍術ってやつをよく使っていたような……）

それを思い出して聞くべきか、止めておいた方がいいかを考える。

いま、リインフォースが聞いているのはあくまで【魔法】についてであって他のものではない。敢えていま聞く必要もあるまい。

（あとで色んなこと聞っこうかな）

守護騎士たちと暮らして世界が広がったとはいえ、元々は一人暮らしで本の虫だった少女なのだはやては。不謹慎と言われても物語のような旅をしていたアスカの話を聞きたい欲がある。

そんな感じでリインフォースだけが真実を知らず、はやてとアスカの間ですれ違う話題は続く。

「まるでファンタジーの世界の魔法使いみたいやな～。見てみたいわ」

「その認識で間違いはないかと、僕が使えるもなら機会があれば何時でも」

アスカは魔法なら幾ら見せても問題ないので機会があればと答えておいた。しかし、自分で言っといて何だが精霊を使う魔法って雷とか炎とか出すけど自然現象になるのかなとちょっと疑問に思いもした。

後で必ず見せてもらうと意気込むはやての横で何やらリインフォースが思案しているが、聞きたいことがあるなら後で聞いてくるだろうと思い放っておいた。

「そしてこっちが僕の使い魔で名前は玉藻。見ての通り狐の妖怪で、僕が小さい頃に罠に掛かっているのを助けた時からの付き合いです。

基本的に人間嫌いなので普段は僕の中にいるので姿を見れるのは珍しいですよ？」

玉藻を使い魔という事にして（あながち間違いでもない）そんな作り話を話した。

流石に異世界から来て拾った……なんて話よりかは百倍は説得力があると思う。

「……何ちゅうスタイルと美貌や！　わたしのおっぱいスカウターを振り切るやなんて！！」

「待ってください、主。彼女はヒゥ！！」

はやてが変な感心したり、玉藻の力の大きさを理解しているリインフォースはその話に納得できていないみたいだけど玉藻がはやてに気付かれないように睨んで無理矢理納得させている。

『黙ってろや、コラ！』

つまり、力を背景にした恫喝である。

「それで、ここに来た経緯なんですけど……」

で、アスカは玉藻の恫喝をスルーして話を続け、ここ最近にリインフォースが泣きながら助けを求める夢を見ていたと言うと、当の本人はその事に驚いて赤面してはやてがからかうように肘で突く。

そして今日、クラスメイトのボランティアに同行して、その帰り道に世界樹と呼ばれる樹の所に来たら誰かの「助けて」という言う

声が聞こえ世界樹が突然光りだして、気がついたらここにいた。

「……と、言うわけなんです」

「はぁ～、何やよう分からんけどリインフォースがアスカ君を呼んだって事でいうことかいな」

「まあ、大方そんなもんじゃろうな」

アスカと玉藻は世界樹が何らかの理由でリインフォースの願いを聞き届けて、この世界に連れてきたのではないかと証拠はないが推測している。何故世界樹がそんな事をしたのかは分からないが。

アスカの話が終わったので、リインフォースから話を聞きたいが考え込んでしまっているので先にはやてに話してもらった。

「わたしの名前は八神はやてや。みんな下の名前で呼んでるからアスカ君も下の名前で呼んでや」

「いえ、しかし……」

「それに同い年何やから敬語もなしやで、分かった？」

アスカが今まで接した人間は圧倒的に年上が多い。その所為かアスカは同い年や年下には余程のことがない限り甘い。

強く出られたり、甘えられたりすると受け入れるケースが多い。この時もそうだった。

「分かったよ、はやて。これでいい？」

「うん！」

本来なら会ったばかりの人の名前を呼ばないのだが、八神さんと呼んだら名前で呼んで欲しいと強硬に言われれば、流石に敬語を止めざるを得ない。

お手上げとばかりに手を上げて敬語を止めれば、輝かんばかりのはやての笑顔が返って来た。

「で、わたしはな……」

アスカが最初に見た通り車椅子に座っていたのは足の障害があるようで小学校も休学中で、幼いころに両親を無くし、「父の友人」を名乗るギル・グレアムなる人物の庇護を受けながら最近まで1人で生活していたようだ。

財産管理などはおじさんがやってくれているのだが実際に会った事はなく、手紙のやり取りのみ。

そして彼女の9歳の誕生日である6月4日の午前0時、突如自宅に飾られていた書物（闇の書）が光を発して、闇の書の守護騎士プログラムが起動して守護騎士「ヴォルケンリッター」のシグナム、シャマル、ヴィータ、ザフィーラの4人が姿を現した。

彼らが出現した時は驚きのあまり気絶してしまったものの、守護騎士達から話を聞いて詳しい事情を知ったはやては、魔法の存在や闇の書と守護騎士の主に選ばれた事実を受け入れ、闇の書の主として守護騎士達の衣食住の面倒をみる責任があると解釈した。

突然現れた彼らだがはやても孤独だった自分にできた「家族」の存在を喜んで、騎士達に「家族」として仲良く暮らすことを望み、闇の書がもたらすとされる強大な力を理解した上でその完成を望まず、守護騎士リーダーのシグナムと「闇の書の頁蒐集は行わない」との約束を交わした。

しかし、はやての麻痺は徐々に上に進行しており、このままでは命の危険に関わると判断した守護騎士達が行動してしまい、はやての知らないままに約束は破られ、闇の書のページを蒐集し始めた。

だが、症状の悪化の一途を辿り病院に入院。そしてクリスマスの夜にヴォルケンリッターの消滅を見せ付けられ「闇の書」は完成し、暴走した「闇の書」に飲み込まれた。

しかし、闇の書の完成によって、闇の書に保存されていた莫大な知識を得た彼女は、闇の書の見せる「幸せな夢」よりも「現実に立ち向かう」ことを選び、「闇の書の意思」を説得して闇の書の意思に、新たなる名「リインフォース」を授けることでその真の主となった。

「で、リインフォースに名前を授けてこれからって時にアスカ君がやってきて現在に至ってるんよ」

……人の事はあまり言えないがこの年齢で援助を受けてるからって一人暮らしはどう考えてもおかしいだろ。しかも足に障害を抱えてるんだから普通に虐待とか育児放棄とか犯罪のはずで、何で近所の人とか誰も通報しないのだろうか。それに生活の援助して財産管理までしているのに今まで会った事がないってどう考えてもおかしい。

そこまで考えたアスカは口に出して問いかけてみることにした。

「はやて、正直に言うけどそのギル・グレアムっていう人怪しくない？　足の障害の事もそうだけど、援助しているとはいえその年齢で一人暮らしをさせるのはどう考えてもおかしいよ」

「仕事が忙しいみたいやから仕方ないんよ。援助してくれてるだけでも恩の字や」

と、困った顔をして言うが自分でも恐らく何かおかしいとは思っていることは察することは出来た。

この話はここでしても仕方ないので打ち切り、正直はやての話だけでは分からないことが多いのでリインフォースに話してもらおうと思ったのだが重複する部分もあるし、どうせならと許可をもらって玉藻、はやてを連れて魔法で記憶を見せてもらった。

彼女の本体「夜天の書」「夜天の魔導書」と呼ばれる古代ベルカの時代に作られた書物型の高性能「魔法」記録装置で、所有者と共に旅し、各地の優れた「魔導師」や「魔法」を記録として半永久的に残す為に造られた。「無限再生機能」は本来は記録の劣化や喪失を防ぐ為の単なる「復元機能」であり、「転生機能」もただ旅をするための機能に過ぎなかったが、歴代の所有者達が行った改変の末に暴走を起こし、「防御プログラム」を始めとする各種機能が破損、変質して、本来の目的であった「魔法」記録の為に無差別の「リンカーコア」蒐集を強要、最後には所有者の命すら奪う悪辣な存在へと成り果てた。その後も戦乱の道具として求められたり、「闇の書」が持つ強大な力に魅せられた者や不運にも選ばれてしまった者達の元で凶行を繰り返して今代の主、八神はやての下に来た。

だが、現在の所有者である八神はやてが望んだのは、「闇の書」の完成ではなく、騎士達に「家族」として平凡ながら仲良く暮らすことだった。当初は守護騎士達も、闇の書の長い歴史の中でも異端であるはやてに戸惑っていたが、次第に彼女に対して愛情を抱くようになっていく。またリーダーのシグナムは、闇の書の完成を望まないはやてに「闇の書の頁蒐集は行わない」と誓う。

しかし闇の書は、はやての命を蝕んでおり、彼女を助けたいと願った守護騎士達は以後、はやてとの誓いを破って「闇の書の頁蒐集」を起こしていく。

その過程で強大な潜在魔力を持つ少女を発見し、ヴィータがその少女を襲撃した事でその少女も合わせた時空管理局の面々と幾度となく衝突する。

時空管理局とは過去に何度も衝突を繰り返しており、第一級「ロストロギア」に指定されており因縁は深い。

そしてはやての容態が悪化して病院に入院することになり、親友である月村すずかが、管理局に協力している少女達の親友でもあることが発覚。入院したはやてのお見舞いに来る彼女達と時間帯が被らないように配慮していたが、クリスマスイブの日、はやての病室にお見舞いに来ていたシグナム、ヴィータ、シャマルらが、少女達と遭遇してしまい、彼女らに闇の書の主がはやてであることを察されてしまう。

互いに譲れない想いを抱き、少女達と最後の死闘を繰り広げる守護騎士達だったが、仮面の男達の乱入によってヴォルケンリッターは闇の書の蒐集の対象とされ、消滅させられてしまう。そして、彼女達が守護騎士達を消滅させることではやての絶望を招き、闇の書

を完成させてしまい、防御プログラムが外で管理局と暴れていると。

記憶の体験を終えて一息つく。しかも、その記憶も悲劇ばかりで碌なものがないから、流石にこれだけ見ると精神的、肉体的にも疲れた。

「ううん、リインフォース」

はやては記憶を見終わった後はリインフォースに抱きついて泣き崩れている。

《古代ベルカ式にミッドチルダ式か少なくとも、そんな魔法形態は元の世界でそんな魔法があるとは聞いた事が無い。これで完全に僕達がいた世界とは別世界と考えた方がいいだろうね》

《うむ、それにデバイスという魔法の使用の補助として用いる機械。どちらかというと科学が発展した結果のようなイメージを受けるのう》

《そもそも魔法使いじゃなくて、魔導師だもんね》

時空管理局、ロストロギアの単語にも聞き覚えはないし、玉藻との念話での相談でここは完全に別世界と判断してもよさそうだと結論を出した。

そもそも玉藻からして別世界から来たわけだし、異世界に来たからといって別段驚く理由にはならない（波乱万丈な人生を歩んでいる所為か生半可なことで驚かなくなった。というより常識が変になっている）。

魔法形態が違ったり「ロストロギア」なんて代物があることも、「まあ、そんなこともあるかな」ぐらいにしか感じていない。アスカは自分の感性が人からずれていることに気づけない。普段が常識人（一応？）なだけに、誰も気づかないのだ。

「リインフォースさん。僕を元の場所に戻すことはできますか？」

他にも気になる事はあるが、まず第一にそれだけは確認しておきたい。まだあの世界には遣り残したことが山程あるのだから。

「不思議ですが彼の地の樹とパスが？がっています。次元転送で送ることは理論的には可能ですが、あの世界は遠すぎて仮に行けたとしても多大な魔力と長い時間が必要になる。例えギリギリあの世界まで転送できる魔力があったとしても、こちらに来た時間から十年単位の時間が経過している可能性が高い。人間その転送の高速化にはさらに多大な魔力を必要とするので、人間の魔力量ではほぼ不可能と言える」

「それならば魔力さえあれば全て可能だと？」

「確かにそうだが、主はやての魔力クラスの人間が百人いてようやく魔力が足りるというレベルだ。とてもではないが人間が持ちえる容量（キャパシティ）を越えている。玉藻殿程の力がなければあの世界まで転送する力が足りない。更に転送の高速化ともなると不可能に近い……それに一方通行で戻ってくることはできないと考えた方がいい」

「あ～アスカ君をリインフォースが呼んでしまったみたいなんやし、もし帰れんかったら家に住むか？」

「う～ん、それも悪くないんだけど……」

それも悪くないと素直にはやての好意に甘えたいと心が傾きかけるがアスカはどうするかと考える。

玉藻の力があれば帰れるがこの世界に来た時間より十年の時が経ってしまうことになる。浦島太郎みたいに竜宮城から帰ってきたら７００年も経ってましただと洒落にならないし、聞いといてよかった。

しかし、玉藻が持っている力ってチャクラなんだけど次元転送って出来るのかな、と疑問が浮かぶ。

《まだ完成していないのに、アレを使うつもりなのか？》

《他に手段もなさそうだし、ねぇ》

玉藻の力でも向こうの世界に行けるだけで転送の高速化までは不可能となると、アレを使わざるを得なくなる。アレを使えば恐らく問題は解決するだろうが、まだ使っても安定しないので暴走する危険性がある。長時間維持するわけではないから、一瞬だけなれば上手くいくかもしれない。多分に博打の要素は大きいが。

《確かにそうじゃが。ふぅ、使う場合は細心の注意を払うようにな》

《了解》

アスカの思考を読み取った玉藻と念話で話しながら、失敗するとかなりの被害が出るので暴走しないようにしなければと気をつける。

「ふむ、それだけの力なら当てがあるので大丈夫ですよ」

「は……？」

正直、十年も経ってたら死亡扱いになって安全だろうからそれでもいいかも、と思ったが流石に不謹慎かなと思い、渋々諦めた。まあ、当てがあると即答されてリインフォースさんの呆けた顔を見れたので良しとしておこうと心中で笑う。

「どんな当てがあるん？」

「ハハハ、まあその時までの秘密ってことで、二人ともこれからどうするんですか？　外では防御プログラムが暴れているみたいですけど」

「……それだが単刀直入に聞くが、あなたなら防御プログラムをどうにかできるか？」

ハハハと笑いながら防御プログラムをどうするのかと聞くと、リインフォースが期待を込めた顔で聞いてきた。

かなりの驚天動地な事が多すぎてちょっと混乱気味だが、彼女にしたら今までいろいろあったから仕方ないと思う部分があるので考える。

しかし、防御プログラムと言われてもアスカには何のこっちゃって感じで分からない。防衛プログラムと言うのだから他にもプログラムがあるのだろう。玉藻に纏めて攻撃させると必要な部分まで一緒に消してしまうことになるのでこの手は使えない。

《さて、どうしたものか。……何か案はない玉藻？》

《跡形もなく消滅させる方法なら幾らかあるんじゃがな。如何せん消さなくてもいいモノまで消してしまうのがネックじゃ》

二人の期待の視線から目を何も無い真っ白の空に逸らして、何か案はないものかと腕を組んで考える。

全部消し飛ばすのは流石に不味い。かといってチマチマとできるほどリインフォースの記憶を見る限りできるとは思えない。

《防御プログラムだけを抽出して一点に集める事ができればいいんだけど》

無事なプログラムに影響がないようにしたいのなら実際にそれぐらいしかないだろう。出来るかどうかは別にして、だ。

《そんな都合のいい能力などあるわけ……ふむ。できるかどうかは微妙だが【地爆天星】で一点に集める事が出来るかもしれん》

【地爆天星】は【写輪眼】や【白眼】と同じく【輪廻眼】を開眼したことで使えるようになった能力である。

忍の始祖である六道仙人が開眼した、三大瞳術の中では、最も崇高にして最強の瞳術とされ、伝説上の眼と言われていた。世が乱れるときに現れると伝えられており、曰く突然変異によるものであり他の二つの瞳術とは違い遺伝では無い。

詳しい能力については、また何(いず)れ語るとして上記の二つと同様に不完全なものである。

だが、この場面において【地爆天星】は使える能力であった。

《地爆天星か。確かに地爆天星なら対象を限定すれば一点に集める事ができるけど……》

【地爆天星】は極限まで圧縮した小さいチャクラの球を核とし、強力な引力によって大地のあらゆるものを次々と吸引して外殻を固め、一個の星のごとく巨大な牢獄に対象者を捕縛したりすることができる。

本来は引っ張る対象を選ぶことなんてしないので、防御プログラムだけを引っ張ろうとすればアスカにかなりの負担が圧し掛かる。しかし、アスカはリインフォースを救えるなら自分の身をある程度外視しても行うつもりだった。

負担？　それがどうした。誰かを助けることはアスカの至上命題とすら言っていい。いや、人が呼吸をするように当たり前のことで、悪人やよほどの事情がない限り妨げられることはない。

特に意識的に前世を思い出したことに蓋をしようとしているから余計に普段の、今の自分を一演じようとしている部分がある。

そうやって自己を安定させているので玉藻も強くは言えない。他にアスカを安定させる手段がなかったからだ。

アスカは何も無い空を見ていた視線を元に戻し、組んでいた腕を解いて期待を向けてくる二人に結論を言う。

「結論から言えば……何とかなるかもしれません」

「本当ですか！？」

うぁ！？　とアスカが思わず飛び上がってしまうほど驚いた。断じて目を離していなかったのに何時の間にかリインフォースがアスカの首元を掴んでいる。アスカでも見切れないとは恐るべしスピードだ。

はやても突然のリインフォースの行動を唖然として見ている。

「ま、まぁ確約はできませんが上手くいけば周りに被害もなく収まると思いますよ」

上手くいきされすれば、の話ではあるが成功すれば周りに被害はなく、被害があったとしてもアスカだけということになる。失敗すればなんの意味もないが。

「本当に！？　なら今すぐやってください。お願いします！！」

「わ、分かったから落ち着いて……苦……し……い……」

リインフォースが鬼気迫った様子でアスカの首元を両手で握ったまま振り回すものだから、幾ら鍛えていようと首をガクッンガクッンと揺らされれば苦しくもなる。

「フッ、まだまだ未熟じゃな主よ」

「ちょ、ちょい落ち着きやリインフォース。アスカ君の顔色が危険な色にー！」

ハッ！！　危なかったと、もう少しはやてがリインフォースを止め

るのが遅かったら危うくお花畑を渡るところだった。お花畑の向こう側で神父に「まだこっちに来るな」と蹴り返されなければ渡っていたかもしれない。

何とか現世に戻ってきて二人に謝られ、目を逸らす玉藻にジト目を向けたりとちょっと収拾が付かなくてなっていた。

第二十四話　　話し合う少年（後書き）

どうしてはやてがアスカのことを知っていたのか？　後になって分かります。

連続投稿第四弾である次回の更新は明日の午前０時に更新となります。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

原作ＮＡＲＵＴＯでナルトの最終形態は、尾獣チャクラモード使用した状態で仙人モードではなかろうか。

第二十五話　呪いを打ち払い、夢を見る少年（前書き）

連続投稿四回目。

文字数は何となくギリギリかコレぐらいになるのかと悩む１２９００字。

それではどうぞ。

第二十五話　　呪いを打ち払い、夢を見る少年

アスカがゆっくりと深呼吸をして落ち着いている間に玉藻が作戦を説明する。

「それじゃあ、そろそろここから出ようか」

「本当に大丈夫なん？　三時間ぐらいここにいるけど」

幻術空間には時計なんて物は無いので正確な時間は分からないが話し始めてから体感時間で約3時間ぐらいの時が経っている。

はやての心配は当然のもので、普通ならとっくの昔に防衛プログラムが暴走している。

「大丈夫、大丈夫。今から元の空間に戻すから。……はい、戻った」

白い空間にひびが入り、ガラスが割れる音と共に体に精神が戻る。

「周りの色が変わっただけでよう分からんのやけど」

「いえ、確かに元の空間に戻っています。外に管理局の魔導師がいるのが確認できますし、さっきの空間に入る前とほとんど動いていませんから時間はほとんど経っていないと見ていいと思います」

【月読】は解いたが、はやてには車椅子に座っている姿勢に戻り、見た目的には色が白から黒に戻って机と椅子がなくなっただけなので本当に元の空間に戻ったのかは判断しづらいのは仕方がない。

その代わりにリインフォースが外の様子を報告してくれたので本当にほとんど時間が経っていないのだと感心している。

「……スゥ～ハァ～、それじゃあ時間もないので始めましょうか」

【月読】を使った影響で乱れた息を深呼吸をして整え終えたアスカは、二人からは見えないように左目から流れ出た血を拭いながら伝える。

二人は頷き、リインフォースは一度はやての車椅子を押して三人の後方へと下がる。

十分に距離を置いたリインフォースはアスカの傍にまでやってくる。二人が移動する間にも、アスカは深く息を吸って精神を集中する。

今までに【地爆天星】を使ったことはあるが、引力で引っ張る対象を選択した事など無い。間違いなく負担は大きなものと考えられる。

「私は何をすれば？」

「両手を前に出して防衛プログラムを強くイメージしてください」

はやてが安全圏まで距離を取り終えたのを視界に収めながら、傍にやってきたリインフォースに頼む。

「こんな感じで？」

「ええ、こんな感じにしてイメージしてくれれば後はこちらでやりますので」

リインフォースがアスカの前に立って、両手を前に出して掌（てのひら）を内側に向けるようにする。アスカは足を肩幅に開いて、外側からリインフォースの手に自分の手を重ね合わせる。

「……」

「……！」

【万華鏡写輪眼】から【輪廻眼】に意識を切り替えるとアスカの閉じた眼は幾重もの円が描かれた紋様に変わる。

目を閉じてリインフォースの両手に重ねながら、そこに小さなスーパーボール程度の大きさのチャクラの球を生み出してチャクラを送って肥大化しないように圧縮していく。

「これは……！」

「集中してくれよ、こっちには余裕がないんだ……」

驚きを露にするリインフォースを、アスカが眼を閉じたまま余裕なく言う。

ただでさえ、尋常ならざるチャクラと集中を要する【地爆天星】に本来なら在り得ない筈の引っ張る対象を選別するように手を加えるのだ。

眼の能力で負担なく使えるのは【白眼】の【透視】だけ。【万華鏡写輪眼】に至っては発動するだけでも負担が大きい。肉体的には既に【月読】を使用としている以上は万全と言えない。精神的にもどうだろうか。前世のことを思い出した所為で不安定になっている部分も多い。

「ちっ……！」

思わず声を荒げてしまったのも余裕のなさの表れである。浮き出してきた汗が流れていくの感じながら、チャクラを球に送り圧縮していく。

アスカの様子から余裕のなさを感じ取ったリインフォースは慌てて防衛プログラムを強くイメージする。

急がせたお陰でなんとかアスカの体が持っている間に術は完成した。チャクラを流し終え、成功した手応えを感じながら閉じていた目を開く。

「……行け！」

一息ついて、言葉と共に前方にチャクラ球を飛ばすとそのチャクラ球に向かってそこら中から何かが集まっていく。

チャクラ球に集まった何かは吸着してその規模を増やして球体になってゆく。何かの吸着が止まり完全な球体になったところで、振り返らずに後ろにいるリインフォースに確認を取る。

「リインフォースさん、これが防衛プログラムで間違いないですか？　後、他にもあります？」

「い、いやそれで全てだ。しかし、凄いなお前の世界の魔法は」

これは魔法ではない、と言おうとして止めた。これがどういうものなのか説明すると忍術の事まで話さなければならなくなるからだ。というよりも一刻も早く術を終わらせたい。

さっきからただでさえ負担の大きい【地爆天星】に余計なシステムを組み込んだ所為で頭痛が酷い。内臓が軋んで細胞レベルでやってきてるんじゃないと思うぐらいに痛い。

例えこれがやせ我慢であっても口まで上がってきた血の塊を飲み込まなければならなかった。

前方に意識を戻すと、防衛プログラムが集まっていく球体は大人一人がスッポリ入るほどに大きさを増している。

（下手に傷つけても無限に再生するのでは意味が無い……ならばその再生を上回る攻撃をすればいいだけだ！）

【月読】と同じ【万華鏡写輪眼】を開眼したことで手に入れた【須佐能乎】の【十拳剣】なら封印して簡単に済ませられるが、如何せんアスカは【輪廻眼】を発動しながら【万華鏡写輪眼】を同時に使うことはできない。【地爆天星】を解除すれば折角集めた防衛プログラムも元に戻る。それでは何の意味もない。つまり、この状況で【須佐能乎】を使うことはできない。

いや、例え両瞳術を平衡して使うことができたとしても、そもそも既に限界に達している以上、きちんと発動するかどうかも怪しい。

となれば、もっとも良いのは純粋な力技による塵一つ残さない消滅しかない。

【地爆天星】で手が離せないアスカでは不可能。アスカとはやてを守らねばならず、且つ正確な戦力を知らないリインフォースは当然の如く、除外。そうすると残るのは玉藻のみ。

というより初めからこの条件に最も適しているのは玉藻であった。力技において玉藻を上回る存在をアスカは知らない。例え玉藻と同格である仙人でさえ、力（パワー）の一点において大きく劣る。逆に技巧の分野においては立場が逆転するが。

「リインフォースは結界を！　玉藻、始めろ！」

「「了解！」」

アスカの掛け声に応え、事前に説明した作戦の通りにリインフォースがアスカとはやてを囲うように守護結界を張る。

同時に三人の前に出た玉藻の姿が突然発生した白煙に隠れる。そして白煙が晴れると共に本当の姿を露にしていく。

それは、巨大な獣だった。その鍛えられた刃を思わせる牙は、常に血を求め、赤く染まっているかのようで、金色の体毛は柔らかそうであり、また逆に近づく物全てを傷つける針鼠のようでもあった。

見た者全てに畏怖を感じさせずにはいられない姿に、はやてもリインフォースも言葉が出てこない。

二人がそんな状態になろうとも事態は推移していく。

玉藻が体を起こして九つの尾を頭の上に持っていく。尾の中心点にポコポコと白、黒の二色のチャクラが集まって混ざり、黒く巨大な球を形成していく。敏感なものなら高密度に圧縮された禍々しいチャクラを感じ取れただろう。

玉藻は＋の黒いチャクラと－の白いチャクラを８：２の割合で混ぜて圧縮し、凝縮したチャクラの球体を口に含む。そして閉じても抑え切れない蒸気を口の端から撒き散らしながら、顔を下ろして狙いをつける。

はやては眉尻を下げ、素人でも黄金の狐の姿へと変化した玉藻から感じ取れる圧倒的な力の波動を前に、如何な防衛プログラムといえでも最後の時が訪れるのだと直感した。

「ごめんな。おやすみ」

強いが故に圧倒的過ぎる力に震えるリインフォースの手を掴み、悲しいのか、任せるだけで何も出来ないことが不甲斐ないのか、自分自身ですら判別のつかない感情を抱えながらも、『夜天の書』が『闇の書』と呼ばれるようになった呪いそのものである防衛プログラムに別れを告げる。

どんな経緯に関わらず、呪いがあったからこそ、彼女は家族を得ることが出来た。結局、全ての災いを押し付ける結果になり、救えない防衛プログラムに対して後悔と悔いが残る。

「撃てぇっ！」

アスカの号令と同時に【地爆天星】によって集められた防衛プロ

グラムの塊に向かって放たれた。

爆音と共に空間をも切り裂いているような錯覚を与えて、球――――【尾獣玉】は防衛プログラムを飲み込み、その呪いに比べて呆気なく消滅した。

「くっ――――――！」

「きゃあっ！」

尾獣玉は防衛プログラムを飲み込んだ後も止まることはなく、果ての空間まで飛んで行き、着弾したのか結界があっても目を開けていられない衝撃波が到達した。

リインフォースが結界の強度を上げ、はやては悲鳴を上げて腕で顔を覆う。

長いことそうやっていたような――――――実際には数秒のことだろうが――――――腕を下ろしてさっきまで防衛プログラムがいた場所を見た

二人はチリも残さず消滅させた空間を見て絶句する。

はやては純粋にその破壊力からくる驚き。リインフォースは少し違い、たった数秒のモーションで広域攻撃魔法クラスの魔法ランクSを遥かに越える威力を発揮したことに恐ろしさを感じていた。

玉藻が念のために残しはないか、と確認するがもほや何も残ってはいない。

完全に消滅したことを確認して九尾状態になった時と同じ経緯で

人型に戻る。

「ふぅ、終わったぞ。はやてよ」

どれだけ玉藻が恐ろしくとも二人にとっては恩人。それを念頭において恐怖を飲み込み、リインフォースは一息ついて緊張を解いた。

「ありがとう」

はやては玉藻の言葉に返すには最も適切である言葉を返し、隣りを見るとリインフォースも頷く。

「これで管理者権限の使用が可能になります」

「そか、管理者権限発動」

リインフォースの言葉を受けて放たれた意志の後に、はやての横に四つの小さな光が生まれる。

「リンカーコア送還。守護騎士システム、破損修復。それじゃあ外に出よか。アスカ君もそれでええかな？」

光ははやての言葉に応えるように、その輝きを強くした。はやての言葉にぎくしゃくとした仕草でアスカが頷くと光は空間を埋め尽くした。

はやてやリインフォースは防衛プログラムが消え去ったこと、管理者権限が戻ったことに心を揺らされて、先程から一言も喋らないアスカのおかしな様子に気がつかない。

玉藻がアスカを支えるように斜め後ろの背後に立ち、身を案じるようにアスカを見ていることにも気づけない。

それは仕方のないこと。

アスカは二人に作戦に対する危険性を説明していなかった。

危険性と言っても、作戦が失敗したところで別に状況が悪化するわけではない。

元々、はやてが覚醒した時点で管理者権限を取り戻すことは、外で『闇の書の意思』と戦っている高町なのはに頼めば不可能とは言えなかった。

この作戦が成功したことですんなりと管理者権限を手に入れることができたから決して無駄ではない。が、唯一無二の手段でもない。

この作戦の危険性は決して二人に害を与えるものではない。なのに、話さなかったのは少しとはいえ話をして二人の優しさを知ったから。

【月読】の使用後、時間を空けることなく【地爆天星】――――それも本来はない余計なシステムを組み込むという――――どちらか一方でも負担の大きい瞳術の使用だとアスカの負担が大き過ぎる。

命までは関わらないだろうが、それでも――――。

空間に満ちた光が収まると四人は海の上にいた。

それぞれが異なる色を持つ四つの魔法陣が現れてその中心に光の塊がある。展開が終わると、魔法陣の上に光のヴェールが生まれ、

その収束とともに四つの人影が出現した。

彼ら、彼女らは本来の役目を取り戻した『夜天の書』を守りし守護騎士たち。

「ヴィータちゃん！」

「シグナム！」

はやての斜め上、そこには黒と白の服を着た二人の少女の姿。

名を呼ばれた人影、ピンク色の髪ポニーテールにして左手に鞘に収まっている剣を持って騎士然としたシグナムが口を開く。

「我ら、夜天の主の下に集いし騎士」

次に、金髪のショートヘアーで導師のような格好をしたシャマルが口を開く。

「主在る限り、我らの魂尽きること無し」

続けて、大男で体格がいいのに犬耳に尻尾をつけたザフィーラが口を開く。

「この身に命在る限り、我らは御身の下にあり」

最後に、ゴシック服を着て右手にハンマーを持ったヴィータが口を開く。

「我らが主、夜天の王――――八神・はやての名の下に」

言葉の終了と同時に、四人は閉じていた瞳を開いた。

光の塊に亀裂が走り、砕けた直後、はやてが姿を現した。その姿は先程とは変わりリインフォースに似た服を着て杖を持っている。

「……はやてちゃん！」

白い服を着た一際傷だらけの少女の言葉に、一瞬だけ痛みの感情で目を細めたはやては、杖を天上へと掲げる。

「夜天の光よ、我が手に集え。祝福の風、リインフォース。Ｓｅｔ Ｕｐ！」

杖の先端、剣十字が閃光を放ち、はやての姿が変わる。

髪ははやてとリインフォースを足して二で割ったような色になり、白いジャケットを着て腰から下に新たにスカートが追加されて、その背には三対の黒い羽が生えていた。

まさしく、新たなる夜天の王の誕生である。

「……はやて」

ヴィータが見上げる先にはうん、と頷き、小さな微笑を見せるはやての顔があった。

「……すみません」

背後から聞こえたシグナムの謝罪の言葉に、はやてが視線を動かす

と、

「あの、はやてちゃん、私達……」

「ええよ、みんな解ってる。リインフォースが教えてくれた。そやけど、細かい事は後や。今はお帰り、みんな」

シャマルの言葉を遮って言ったはやての言葉にヴィータが声を挙げて泣き、はやてに抱きついた。

「はやて、はやて、はやてぇぇぇ……」

子供のように泣きじゃくるヴィータを、他の三人は優しくその姿を見つめていた。

「……は……は……」

既に玉藻はアスカの内に戻り、治癒に努めているものの、少し離れた場所から【浮遊術】で飛びながらはやてたちの様子を見ていたアスカに限界が近づいていた。

アスカが限界が近づいているのに彼らに気を使って気配を消していたこと、知っているのがはやてとリインフォースだけで彼女たちは見ての通り他のことで手一杯で気にしろというのも無理な話。

はやてたちの様子を窺っていたのだろう、二人の少女は話が一段落したと判断して彼女たちに近づいていく。

ゆっくりと回転する魔法陣に静かに着地すると、はやても二人に気付いて、

「なのはちゃんと、フェイトちゃんもごめんな。うちの子達がいろいろ迷惑かけてもうて」

不意に掛けられた謝罪の言葉に、少女達も首を横に振って否定している。

すると、タイミングを計ったようになのは達の背後に、黒い人影が舞い降りる。

「……すまないな。水を差してしまうんだが時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。防衛プログラムはどうなったんだ？」

「防衛プログラムはそこにいるアスカ君のお陰で消滅したよ。わたしたちが確認してる」

クロノが理解できない状況を尋ねると、はやては笑顔を浮かべて自身の斜め上に浮遊しているアスカのお陰だと言うと、

「「「「「「「「「は？」」」」」」」」」

管理局組み、はやて＋リインフォース以外の守護騎士の上げた声が綺麗に揃う。

十数もの視線を向けられたアスカは、僅かの間だけ視界がぐにゃりと歪んで、なんとか【浮遊術】だけは維持したまま呼吸を乱す。

アスカは、ふらふらと頭を起こして内心で呟いた。

（能力を……使いすぎたか）

普段ならよほどの事が無い限り多用しない能力を連続で使ったのだ。そうでなくても、一度使うだけで通常の何倍も体力と精神力を消費する能力である。発動中にガタが来なかっただけで奇跡に近い。

――――あ、やばいと限界に達したことを瞬間的に思った。

「ゴフッ……ゲフッ……あ……ハッ…」

咄嗟に手で抑えるも収まりきらない血を吐き出して、皆が驚愕している視線を感じ、

「え……？……だ、大丈夫で――――」

困惑した白い少女が問いかけてくるのを最後にアスカの意識は消滅（ブラックアウト）した。

夢。

アスカは自分が夢を見ているのだと実感していた。しかし、夢といっても当時のことを思い出しているだけで創作やフィクションではない。

当時の自分をまるで第三者の視点で見ているような変な感覚、違和感と言ってもいい。

別に夢を見ていることに関しておかしいとは思わない。が、アス

カの見る夢は必ずいっていいほど悪夢しかない。幾ら爆撃があったかのように瓦礫が散乱している風景が目に入ってきても違和感を拭い切れない。

恐らく夜なのだろう、なんらかの破損を負った家々の中を歩いている土地特有の人種と大人の姿に化けている当時のアスカを見て、何時の頃のことなのかが分かった。

（そうだ。これは戦地にいた頃によく使っていた変化のパターンだ）

今から二年ほど前に戦地を転々としていた時に多用していた変化の容姿。

（でも、何故こんな夢を見る？）

ここに至るまでの出来事の前後と夢が？（つな）がらず、頭を捻らずにはいられない。

今のアスカが理解できずに頭を捻っていると、夢のアスカはふと誰かに呼ばれたような感じで顔を動かし、恐らく帰り道とは違うだろう道へと足を向けた。

（ん？　警戒しそうな気がするんだけどな、はて？　当時は何を考えていたっけ……）

こういう時はなにかあると考え、警戒して道を変えることもないのに今回に限って変えた理由はアスカ自身にも分からなかった。

（そう言えば何かがあるような予感があったんだよな）

戦地である以上、治安は悪いので道草は避けるべきだっただろうが、ある種の予感をどうしても放置できずにいたことを思い出した。殺気などの悪意の類ではない。ただひたすら遠くから呼ばれている気がしてならず、その思いがアスカの胸の中で高まり続けていたからだ、と当時のことを僅かに思い出した。

（確か……ラモニドに子供達を預けた日だったけ）

内戦が終わったばかりの町で治療や町の復旧行為に明け暮れ、食事を取るために訪れた酒場で子供に渡された紙切れ――――――予言めいたものを渡されたのがそもそもの始まりだった。

子供は変化の術を行っていたアスカの正体を看破した「占い師」らしい老人に頼まれていた。

不審を抱くものの、予言は的中して軍に復讐しようとしていた子供を助けることが出来た。身寄りのなかった子供を知り合いであるラモニドに預けて夜も深くなってきたので帰宅の路についていたところだ。

（でも、この先になにがあったのかを覚えていない。何故だ？）

当時のことを僅かとはいえ思い出した。なにかがあった。なのに、そこから先が思い出せない。

（なんだ、何を忘れて……いや、どうして忘れていると思うんだ？）

自分の口から零れ落ちた言葉に逆に疑問が積み重なる。

――――時は来た

疑問に疑問を重ねていたアスカの意識は、どこからか聞こえた声と共に夢のアスカと意識が同化した。

――――思い出せ

声と同時に同化した今のアスカの意識は消え、当時のアスカが主導となる

「……」

直感に従い、寝静まった町を大分歩いたが、人の気配どころか明かりのついた家さえ稀だった。戦地なので目立つような明かりをつけるはずがないので、暗いのは当然なのにまるでゴーストタウンに迷い込んでしまったような錯覚を受けた。

「――――ようこそ、『英雄の息子』」

「……！？」

闇に染まった路地で歩きながらアスカが呟いた途端、先程まで人がいなかったはずの後方に微かな声がした。驚きと共に瞬時に振り向くと、通り過ぎた石造りの家屋から、老人が顔を覗かせていた。

玄関代わりの布を片手で開けながら、壁に寄り掛かるようにして身に纏った服装はズタ袋同然での白髪の老人が辛うじて立っている。

間違いなく初対面と言える見覚えはない老人だった。

だが、油断はできない。変化したアスカの正体を見破り、その敬称をつけられる人間がいるなど考えもしていなかった。

警戒心がＭＡＸに跳ね上がり、体は何時でも動けるように緩やかな緊張をし、意識は即座に戦闘体勢へと移行した。

「少しでいい、わしに時間をくれんか」

老人は警戒しているアスカに懇願するように話しかけた。

「……分かった、いいだろう」

老人に対して直ぐには返答せずに考えるも、断るには気になる部分が多いと思って小さく頷く。老人の他に人の気配はないがどんな状況にでも対応できるように意識のレベルを保ったまま、老人の後に続くように小屋同然の家に入った。

内部は数メートル四方の四角い部屋が一部屋しかなく、直ぐに目に付いたのは、ベッドと椅子だけである。ベッドといっても長方形の石に布が置いてあるだけで、ベッドとは言い難いかもしれない。どう見ても老人以外が生活している気配はない。

老人は体調が悪いのかふらつきながら唯一の椅子を引き寄せて座り、アスカは立ったままで老人から少し距離を取って向かい合った。

「すまんな、椅子は一つしかないのでな」

「構わない……爺さん、あんたは何を知っている？　何が望みだ？」

何故か眩しそうな瞳でまじまじとアスカを見上げていた。まさかそんな視線を向けられるとは露とも思っていなかったので居心地が悪くなり、アスカは早々に口火を切った。

変化して完全に別人の姿になっていたアスカを見破り、かつ未来を予測したかのような伝言を渡してきたことから何か目的があって呼んだのだと考えていた。その真理をここで聞き出そうとアスカは喋らない老人に先立ち、口火を切った。

「わしは永らくあんたに会いたかった。時間切れ寸前だったが、やっと会えた。間違いない、六年前に夢で見た男は、確かにあんただ。ただし、夢のあんたは別の姿だったが」

破られない術などないと知ってはいたが、今までどんな人間にもバレたことのない【変化の術】を見破られたことに驚きを隠せない。

「あんた、何者だ？」

「――――ただの魔法使いであり、普通よりも未来を見通せる能力があるとでもいうべきか。普通の人間ではない、それだけを理解してもらえれば十分だ」

見破られている以上、意味がないと判断したアスカは術を解いた。

【変化の術】で化けていたのは理由がある。戦地に来る前からアスカへの捜索の手が厳しさを増していたのだ。校長が出したものだけではなく、
悪い意味の方も手が伸びてきていた。

自慢ではないがアスカはよく騒動に巻き込まれる。故郷を飛び出

してからもそれは変わらず、解決する現場を他人に見られることは少なくない。幼い子供がそんなことをしていれば当然目立ち噂も立つ。噂を辿ればアスカの足取りを掴むのも難しくないので【変化の術】で化けて、普通なら行きそうにない戦地にいるわけである。

「その姿だよだが、私が見たのはもっと成長した姿だったが」

本当の姿に――――七歳という年相応の姿に戻ったアスカは、その幼い双眸から凍てついた視線を一人納得したように笑う老人に向ける。

老人は小声ではあったが歯を見せて笑った。意外にもまだ全部、歯が残っていた。よくよく見れば、第一印象で死にかけというイメージを持っていたが、顔の皺も少ない。弱っているだけであって、老いぼれた様子ではないのだ。

「……言いたいことがあるなら聞こう」

アスカは普通の魔法使いが【変化の術】を見破れるはずがないと異議を唱えかけたが、老人の顔色と容態を見て、嘘はついていないなし、こんな死にかけに見える老人に演技力があるなら騙されても仕方ないと結局は頷いた。

如何にも怪しさ満載であるが今にも死にそうな老人の思いを踏み躙るのは気が進まない。そう考えて老人が何を言いたいのか聞くことにした。

もし、老人がどこかの組織に所属していて何か思惑があって行動しているのなら然るべき対応を取るつもりであった。

老人はそんなアスカの考えを知らず、皺だらけの顔に笑みを深くしてまるで旧友に会えたかのように、追い求めていた人に出会えたように懐かしげに言葉を紡ぐ。

「ずっとあんたに会えたいと思っていたよ。【英雄の息子の異端児】【永遠の異邦人】【狐憑き】【異界の術を使いし者】、そして【世界の命運に関わる者】よ」

「――――――っ！　あんたどこでそれを?!」

老人がとつとつと呟くキーワードにアスカは、かつてない衝撃を覚えた。

【英雄の息子の異端児】は、今こうしている状況から考えてアスカの素性を知っていれば簡単に予想することが出来る。だが、【永遠の異邦人】とは忘れてしまったとはいえ前世を持っているからで、このことは玉藻以外に話したことはないので知っている者がいるはずがない。

【狐憑き】は妖狐である玉藻のことを表している。精神病のように異常な状態になるものと考えられている【狐憑き】ではなく、肉体を持った守護霊のような状態ではあるが。

【異界の術を使いし者】は忍術を表しているのだろう。玉藻がいた世界を【異界】とするなら、まさしくその通りということだ。

だが、【世界の命運に関わる者】だけは分からない。そんなもの心当たりは全くない。

「今から言うことを、覚えておいてほしい。これは、あんたの将来

に必ず起こることだ」

聞き返したアスカに答えることなく、老人は一呼吸置いて重苦しい声で話し始めた。問いに答えるように言おうとしたアスカが気圧されて何も言えなかったのは切羽詰ったものを感じたからだ。

「世界を巻き込む戦争が近づいている。百年を越える争いだ。時が来れば、あんたにも分かる。わしが告げた戦（いくさ）とは。これだったのかと」

言っていることが物騒だということもあるが老人の茫洋とした瞳の奥で、奇妙な輝きを見た気がして、アスカは眉根を寄せる。

言葉はかけない。かけられない。老人の言葉を止めてはいけないのだと心のどこかが囁いているから。

「あんたは将来、運命の選択をせねばならない時が来る。必ずだ。一方は戦いのない安易で平穏な道。そしてもう一方は――――確実に死に至る道だ。……いいかね、あんたは強い。今の時点でも十分に強い。しかも、これからまだまだ強くなっていくだろう。もしかしたら、かつて誰も到達し得なかった高みにまで至るかもしれぬ。だが選択を誤り、そちらの道を進めば――――死ぬ」

アスカを見ているようでこの世ならざる場所を見ていたような瞳が、ようやく焦点が戻ってきた。

軽く咳き込んだためにそこで一度言葉をきった老人を宥めようとしたが、彼は決して話すのを止めようとしなかった。老人の不断の瞳を見て、アスカは決して途中で中断するつもりがないことを知って止めることを諦めた。

一言喋るたびに老人から生気が抜けていくのを感じていた。ただでさえ弱って見えたのに今にも死にそうな老人にアスカが出来る事は見届けること、最後まで話を聞くことしかなかった。

「わしの言葉をよく覚えておきなされ。その時が来たら、くれぐれも選択を誤らんように。おそらくあんたの決断が、その後の二つの世界の運命を決めることになる。具体的に教えてはやれないが、時が来れば、わしが何の選択について教えたのか、ちゃんと分かるだろう」

老人の言葉が終わると同時に、まるで世界全てが音を失くしたかのように沈黙が降りた。

老人は、二つの世界と言った。つまり今、アスカたちがいる旧世界と魔法世界の二つの世界のことであろう。その運命をアスカが決めることになるなど、想像すらしたことがない。

話のスケールの大きさに考えて押し黙ったアスカの顔を見て、老人は一つ頷く。

「そこまで今は難しく考える必要はない。あんたは自分の思い通りにした方がいい。これは予言でもなんでもないが、わしはそうした方がいいだろうと思っている」

考え込んでしまったアスカに、思い通りにすればいいと言葉を掛ける。それも予言なのかと問い返そうとしたアスカの思いを知ったのか、老人は否定した。

「あんたは誰かと勘違いしている。俺はそんな世界の運命に関わる

ような大それた存在じゃない」

アスカは自分の選択が世界の命運を握っているという老人の言葉を真っ向から否定する。

自分はそんなことができる人間ではないと、自分の矮小さは他の誰よりも理解している。だからこそ、老人は自分を誰かと勘違いしているのではないかと。

臆病で、弱くて、ちっぽけな存在だとアスカは常々自分をそう評価している。力や能力を過小評価することはなくても、アスカ・スプリングフィールドという一個人対する自分の評価は底辺に近い。

「あんたが自分をどう判断しているかは、この際、全く重要ではないのだ……いや、自らを過大評価しないからこそ貪欲に求め、真実に辿り着けるのかもしれんな」

厳(いかめ)しい声音で指摘していたが、直ぐに穏やかな声に戻り、最後はなんと言ったのか、アスカの耳を以ってしても聞こえなかった。

「それと『風』を見つけたら捕まえておくといい。あんたの助けになってくれるだろう」

「『風』？」

風とは、空気の流れのことで現代では「気流」が類義語にあたり、あるいは流れる空気自体のことである。また、古来、風という言葉は眼に見えないものを象徴するためにも使われる。

当然、空気を捕まえることなどできはしないし、空気全体の動き

を見つけるなど意味がアスカには分からない。

「今は理解できなく当然だ。あんたにも何れ分かるよ」

理解できなくて悩むアスカに、それが当たり前だと説明する老人の眼は、ここではなくもっと別の場所――――遠い先の未来を見据えているようだった。

「ずっと言いたかったことは伝えた。伝えなければならないことは伝えたんだ。後はあんたに任せるよ」

老人は、そう言って今までずっと抱えていたものを降ろせてほっとしたように微笑んだ。自分の死を受け入れた者に特有の、全てを超越したような笑みだった。これまで背負っていた物が消え、身軽になったようであった。

「どうしてだ？　どうしてそんなになってまで……」

「さあ、どうしてかな？　わしは小さい頃からこの先を見通す力に振り回されてきた。何故、自分にこんな力があるのか、ずっと疑問に思っていた。だが、それは多分、あんたに選択肢を教えることだったような気がする。わしはついに役目を果たしたわけだ。それに最後くらいはこの世界のために使いたかった。……そういうことにしておいてくれ」

嘘か真か、定かではないが老人は言い終わると震える手を上げ、戸口を指差した。もうそれだけの動きをするのも、辛そうだった。

アスカも今にして思えば、見た目の割りに死にそうなのは先を見通す力を使ったことによる衰弱のようにも思えた。

「悪いが、一人にしてくれないだろうか。少し、疲れたのでな」

その時にはもう、腕を膝の腕に下ろして老人の目は閉じていた。

結局、まだ名前すら訊いていなかったが……気になるからと意固地になって残るのも無粋かと考え、アスカは椅子から立ち上がった。死に行く人間を前にして、アスカに他にしてやれることなどないのだから。

振り返ることなく家から出て、満点の星空の下、今度こそ真っ直ぐ帰宅の路についた。

（『風』……祝福の『風』）

老人の家を出た直後にアスカの意識は切り離され、また第三者の視点に戻った。

アスカの心に一つの楔を打ち込んだ出会いだが、何故か翌日にはアスカの記憶には老人のことは残っていなかった。老人は時がくれば分かると言っていたか、もしかしたら何かをしたのかもしれない。

（祝福の風、リインフォース）

老人は「『風』を見つけたら捕まえておくといい」と言っていた。

そして当時は理解できなかった『風』と出会った。祝福の『風』リインフォースと。

「……」

意識の端に誰かの声が聞こえた。

どうやら意識が目覚めかけているらしく、浮かび上がっていく自分を感じた。

どうするかが全く決まらないまま、アスカの意識は急速に目覚めていった。

第二十五話　　呪いを打ち払い、夢を見る少年（後書き）

ちなみに主人公の幻術適正はあまり高くはありません。

幻術適正：イタチ＞＞＞＞サスケ＞アスカ＞＞＞＞ナルトとなります。しかも『万華鏡写輪眼』を使わないと二ランク落ちるという仕様。

設定追加：『万華鏡写輪眼』『白眼』『輪廻眼』の瞳術は平衡して扱うことは出来ない。例：『万華鏡写輪眼』発動時に『白眼』を発動することが出来ない。

負担度は発動するだけで『万華鏡写輪眼』＝８　『輪廻眼』＝５『白眼』＝１となります。ちなみに通常の『地爆天星』＝５　今回の改造『地爆天星』＝１５です。『月読』＝７で、現時点での限界値は３０です。

今回の使用：『万華鏡写輪眼』、『月読』、『輪廻眼』、改造『地爆天星』。８＋７＋５＋１５＝３５で主人公限界を超えて倒れました。

内気功と回復魔法を掛け続けてコレです。

後半で『第十一話　旅をする少年０２（戦場と占い師）』からの伏線回収。新たに伏線を張った。

純粋な疑問：はやては魔力がＳランクあるらしい。その半分の魔力だとどのランクになるのだろうか？

連続投稿第五弾である次回の更新は明日の午前０時に更新となります。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

参考書籍：レイン

第二十六話　　管理局と策謀する少年（前書き）

投稿するのが大変な連続投稿五回目。

文字数は前回同様に態とかと思うくらいに１２６０４字。

それではどうぞ。

第二十六話　管理局と策謀する少年

はやてとアスカが眠る医務室で、守護騎士たちだけしかいない部屋でリインフォースが言った。

「……やはり、破損は致命的な部分にまで到っている」

主は初めて明確な活動をしたリンカーコアへの負担、玉藻の力を間近で感じた疲労から眠ったまま目を覚まさず、守護騎士が目覚めを待つ中で夜天の書の管制人格――――――彼女によってリインフォースと名付けられた彼女が続ける。

「防御プログラムは停止したが、歪められた基礎構造はそのままだ。私は、夜天の魔導書本体は、遠からず新たな防御プログラムを精製しまた暴走を始めるだろう」

「やはり、か……」

シグナムが認めたのも別にこのことが予想外の事ではないからだ。

今のリインフォース、残骸も同じだ。

リインフォースは元々夜天の書と呼ばれる魔導書。確かに防衛プログラムは、異物でありガン細胞でもある。でもそれらは、元々夜天の書のあるべき機能。その一部が改悪により暴走しただけ。

無限再生は元々、保存した色々な魔法技術を後世にしっかりとした形で伝えるための修復機能。無限転生は色々な地域の魔法を蒐集するために備え付けられた、旅するための機能。

防衛プログラムは元を正せば全てリインフォースの身体の一部。改悪された部分は改善されておらず、防衛プログラムに異常な再生力がある様に、管制人格であるリインフォースにも破損を自動修復する力はある。例え本人は拒もうとも、破壊された防衛プログラムが再生されるのだ。

アスカが払った呪いはまた元通りに戻るだけなのだ。

「修復はできないの？」

「無理だ。　管制プログラムである私の中からも夜天の書本来の姿は消されてしまっている」

「元の姿が解らなければ、戻しようもないということか……」

ザフィーラの言葉に、リインフォースは頷いた。

破損箇所が多過ぎる上に、何度も歴代の主によって手を加えられた所為で元の魔導書の形には出来ない。そもそもリインフォースの中からも本来の夜天の書のデータが失われて久しい。

形の知らないものは修復出来ない。道理であった。

「主はやては……大丈夫なのか？」

「何も問題はない。　私からの侵食も完全に止まっているし、リンカーコアも正常作動している。不自由な足も時を置けば自然に治癒するだろう」

その言葉に、騎士たちがホッと胸を撫で下ろす。

元より、彼女たちの本来の目的はそれだったのだ。闇の呪いから主が解放されたことは喜ばしいことだった。過程はどうであれ、結果的に目的を達成できたことは素直に喜ばしい。

同時に寂しさもこみ上げてくる中でシグナムが皆を見渡す。

「これで、心残りはないな」

守護騎士たちが頷いた。

「防御プログラムがない今、夜天の書の完全破壊は簡単だ。破壊しちゃえば暴走することも二度とない……」

そう言いながらもヴィータの顔に影が落ちる。

「かわりに、あたしらも消滅するけど……」

「すまないな、ヴィータ」

「なんであやまんだよ。いいよ、べつにこうなる可能性くらいみんな知ってたじゃんか」

守護騎士とは、夜天の主を守るためのプログラムだ。夜天の書が破壊されれば、プログラムである彼女たちも消えてしまうのは道理であった。

悔いがないわけじゃない。やり残したことがないわけじゃない。はやてを残して逝くことなどしたくない。

それでもやるべきことは出来たと胸を晴れる。

「いいや、お前たちは残る」

リインフォースの発した信じられない一言に、騎士たちの視線が集中した。

諦観で紅い瞳を揺らしながら、彼女は口にする。

「逝くのは、私だけだ……」

リインフォースの悲しさの詰まった言葉を聞いたのは何も守護騎士たちだけではなかった。

この部屋には彼女たちの主であるはやてと――――――アスカがいる。

（……気にいらない）

丁度、リインフォースが大事な話を始めた時に目を覚まし、何となく起きたことを申し出るタイミングを外したため起きれずに寝た振りをしていた。

葛藤はあったのだろうが自分たちが消滅することを仕方のないことだと受け入れていた守護騎士たちも、それが自分の運命なのだと一人でいなくなるリインフォースも、どうしても気に入らない。

泣きそうな癖に涙を堪え、逆らえない運命に順じて逝くことなどアスカには認められない。

（どうしてやろうか……）

諦めてしまったリインフォースが気に入らないアスカは思考する。

出会えたことが奇跡なら、防衛プログラムを一時的にとはいえ討ち払ったのも奇跡。二回の奇跡が起こったのなら三回目がないなどと誰に分かる。

リインフォースは問答無用で自分を救おうとする英雄（ヒーロー）を知らない。

彼女（リインフォース）の幸福はまだ終わっていない。

次元世界の中でも繁栄著しく、最先端の魔法技術を持つミッドチルダを主体とした管理局。管理局によって第九十七管理外世界と名付けられた世界にある地球という星の遥か上空の空間に、一隻の艦船が停泊していた。

次元世界を管理する司法機関、時空管理局のＬ級艦船、アースラだった。

次元空間航行艦船と総称されるこの船は、管理局が所有する魔法技術の粋を担うもので、管理局員を他の次元世界へ運ぶ移動手段として用いられる。

魔法や次元世界についての認知のない世界は管理局の管理外ではあるが、それらの世界で魔法や、異世界産の品物が使用された場合には別である。

半年前に起こった「プレシア・テスタロッサ」事件、先程解決したばかりの「闇の書」事件はこの世界を中心に発生し、その両事件の解決に尽力したのが管理局艦船アースラのスタッフである。

そのアースラのモニタールームでは、制御卓についた制服姿の少女と、その背後に立つ黒衣の少年が二人で大型モニターを眺めていた。

モニターに映っているのは先の事件において、ある意味でたった一人で事件を解決してしまった少年――――――アスカ・スプリングフィールドの姿があった。

「しかしまあ、今回の件はクロノ君、例外と特例の許可が多いねぇ」

あまり緊張感のない様子で、制服姿に栗毛のショートカットには未だ幼さが残る少女……十六歳にしてアースラの通信主任兼執務官補佐であり、この艦に於ける実質的なナンバー3であるエイミィ・リミエッタが問う。

「艦長直々の許可が出てるんだ。僕がわざわざ反対することもない」

どこか憮然とした調子で、エイミィより二つ年下の黒衣の少年……クロノ・ハラオウンが答える。

「艦長決定だって、問題ありそうなら食ってかかるでしょ、普段のクロノ執務官はさ」

クロノは時空管理局の執務官である。

事件捜査や法の執行の権利、現場人員への指揮権を持つ管理職である執務官は、現場で高い権限を持つが、その分優れた知識や判断力・実務能力が求められる。

クロノは着任三年目の若い執務官だが、日々の努力や魔導師としての資質・良き教官に恵まれたこともあり、優れた成績と実績を残している。

プレシア事件でも現場最奥まで踏み込み、傷を負いながらも崩壊する庭園からなのはやフェイトたちの脱出を助け、事件による被害を最小限に抑えることに成功している。

また、闇の書事件でも管理局側の実働部隊のリーダとして舞台を指揮し、この件の黒幕とも言える存在を突き止めるなど彼以外の誰に出来ようか。

「僕も彼には興味があるからね」

「あれ～もしかしてクロノ君ってそういう趣味～？」

そんなクロノを笑顔でからかうエイミィは、クロトとは局の士官教導センター時代からの友人同士である。保護欲が湧くのか生意気な年下で可愛いのか、エイミィのクロノに対する扱いは半ば弟に対するようなものであり、執務官と執務官補佐という部下と上司の立場にあってもその対応が変わることはない。

「仕事中だぞ、エイミィ。真面目にモニタリングしろ」

クロノもまた、そんな部下兼友人の対応については黙認している。

実務一点主義のクロノは任務以外の些末なことに拘らないということもあるが、かつての友人に敬語や事務的な対応をされるより、現状の方が居心地が良く、仕事もお互いにやり易いというのも確かなのだった。

「だから、さっきからしてるでしょ。結界強度の確認してるし、いざという時の非常対応も、三ラインで五パターンも用意してるんだし」

「なら、いい」

「でしょう」

かくして、一風変わった執務官と執務官補佐は、モニターに視線を向けた。

映し出されている映像は、前髪とサングラスで眼を閉じているのか開いているのか分からないが、黙して動かないアスカの姿だった。

「……」

モニタールームと同じ映像がブリッジの大型モニターにも映し出されていた。

中央の艦長席でそれを見ているのは時空管理局提督、リンディ・ハラオウン。クロノの実母であり、アースラの艦長である。

そして同時にアスカの取引に応じた人物でもある。

提督としての責任の下、幾ばくかの打算と希望を抱いて許可した。

提督として、L級艦船を預かる艦長としての責任は無論ある。

しかし、「事件は解決したら終わりではない」というのが、リンディの持論である。

同様の事件の再発を防ぐこと。そして、事件に巻き込まれた人々の悲しみが少しでも和らぐようにすること。

打算でものを考える自分にいくらかの寂しさはあったが、それでも最終的に、少しでも不幸になる人が、悲しい心が減るならばそれでいい。それがリンディの偽らざる心情であった。

それに『闇の書』に対して若干の復讐心もある。彼が成功すれば彼女の復讐は達成される。

唯一救われない者が救われるという形で。

「……そろそろね」

ぽつりと、リンディが呟いた。モニターでは、アスカが今まさに、動き始めようとしているところだった。

アスカは血を吐いて意識を失って【浮遊術】が解けて墜落しかけたものの、数秒後には支えられる前に意識を取り戻した。

玉藻の治癒が回ったお陰で今しばらくは持つが、それでも限界に

近いことには変わりない。限界が近いことだけを伝え、急いで皆でアースラに行き、アスカは医務室へと直行、ついでに魔法が発露したばかりでリンカーコアに負担のかかったはやても同様である（闇の書の影響がないか検査も兼ねている）

三時間も眠れば普段どおりの動作には問題のない――――流石に全力戦闘には差し障る――――ぐらいには回復したアスカは、少し暑っ苦しいコートのようなものを身に纏った自身よりも背の低い少年――――黒と紺を基調にした管理局の制服に身を包んだクロノ・ハロオウンの後について歩いている。

（ふむ……魔力も大きく制御も中々。足捌きもやっているそれだ。接近戦もできるようだし、強いな）

クロノの脚裁きは明らかに武術をやっている者のそれだ。アスカとて武術を学んでいる者。その程度が分からずに相手の技量を測ることなどまず不可能。

魔力もアスカよりも圧倒的に多く、その制御能力には勝っている自信はあっても一目置かざるを得ない。

そして未だ眠り続けるはやては別にしてリインフォースからある程度の事情は聞いたとしても、正体不明に近いアスカの元に1人でやってきたことから、この艦における最優戦力……または別の何かがあるだろうということも、予想がついた。一線級であることは間違いない。

（接近戦で……魔法ナシでは勝てる自信はないな。魔法は使うようだが強さは未知数、希少能力（レアスキル）のような能力を幾つも持っていて厄介極まりないな）

クロノもまた、アスカに似た感想を抱いていた。

それは、アスカもまた何らかの武術を体得しているということ。正確な力量は計れないが、間違いなく自分より上であり、もしかしたら体術の師であるリーゼロッテ並みの実力者ではないかと推測していた。

魔法なしの接近戦で限定すれば勝てる自信はない。が、クロノの本領はそんなところにはないので別段、悔しいとも思わない。

更にリインフォースから固有の能力を使って防衛プログラムを消滅させたと聞いたが詳細は語ってくれなかった。詳しく聞こうとすると「狐、怖い。狐、怖い」と言って頭を抱えて震えてしまうのだ（玉藻の脅しは効いている）。

負けるとは思わないが違う技の元、話を聞く限りには固有の技能を幾つも持っているようなので油断できる相手とは考えていなかった。

異世界からの来訪、それはロストロギアの可能性を孕むので注意をしてし過ぎるということはない。

ここまで怪しい要素があって問答無用の拘束ではなく少しの警戒だけに留まっているのは、はやてが『生粋のお人好し』とアスカを指していること、元いた世界への帰還のみで何の報酬も求めないことが大きい。

クロノがアスカと敵対することを想定しているのは、元来の生真面目な性格が起因しており、危機管理として当然の行為だ。

――――――カツカツ

会話はなく、二人分の靴の音だけが廊下に反響する。

互いに警戒しあって相手の動向を探り合う緊張感の満ちた歩みだが、アスカはイマイチ集中しきれていなかった。

歩いているアースラの艦内に視線がどうしても移ってしまう。

圧巻。

今アスカが見ている光景を表すにはその一言だけで十分だった。アスカが知る既存の文化とは異なる雰囲気。船とあらかじめ説明されていなければ、どこかの建物と思い違いしてもおかしくないほど、次元航行艦アースラとやらは異様で圧巻だった。

もしも、アスカが普通の子どものような感性を持っていたとしたら、秘密基地のような雰囲気に喜んだかもしれないが、生憎ながら無駄に経験を積んだので喜ぶことも呆けることもなかった。

案内に従って時空航行艦アースラの中を歩いていく。五分ほど案内されてたどり着いたのは、案内される途中、いくつも並んでいた普通の扉の一つだった。

「さあ、奥に艦長がいます」

そういって開かれた先の光景は、これまでから想像したような背後に大きなスクリーンが並び、大きな机に肘を突いた中年の男性が座っているような光景ではなく、なぜか日本特有の獅子嚇しの音が

響き、お茶会でも開けそうな和の雰囲気だった。

「……ここって船の中ですよね？」

今までの雰囲気も異様だったが、ここの雰囲気は異質だった。あまりに他の場所とは雰囲気が違いすぎる。もしも、これがアスカを出迎えるために用意していたとなれば呆れるしかないが。

「その通りです。この部屋は私の趣味なの」

アスカの問いの答えは部屋の中にいた唯一の人物から返ってきた。

「ようこそ、アースラへ。艦長のリンディ・ハラオウンです」

ライトグリーンの髪をポニーテイルにし、時空管理局の制服のようなものに身を包んだ女性はアスカを出迎えるように微笑むのだった。

「ハラオウン？」

聞き覚えのある名前に、つらっと視線がクロノへと向かう。

「ええ、クロノは私の息子なのよ」

よくよく見なくても髪の色の違いはあれど、整った顔立ちは良く似ている。

しかし、アスカが驚いたのはそこではない。

クロノ・ハラオウンは他でもない彼女の息子である。

透ける様なライトグリーンの長髪を後ろで束ね、落ち着いた挙措は何処か大人としての魅力を漂わせる――――実際、十四になる男児の母親なのだが、とてもではないが二十代前半、上に見積もっても二十代後半にしか見えない。

（まあ、そんなこともあるだろう）

一瞬、若作りかとも思ったがそうも見えなし、今までに出会った非常識人（師など色々とぶっ飛んだ人が多かった）を思い出してこんなこともあるだろうと一人で勝手に納得をした。

アスカの常識の枠は彼らの所為で大変大らかになっており、「まあ、そんなこともあるだろう」と大抵のことには納得できてしまう。

完結したアスカは部屋の中に用意された畳と座布団の上に座り、自己紹介の後、これまでの事情（話せないこと、話したくないことは省略して）を彼らに話した。

「どうぞ」

「ありがとう御座います」

話の途中で入ってきたエイミィという少女に勧められた羊羹とお茶には手を付けることなく事情を話し終えた。

「そう、大変だったわね」

まるで、その苦労を労わるように重々しい雰囲気で呟くリンディ。

彼らは何の疑問も挟まず黙々とアスカの話を聞いていた。そして、聞き終わっての感想は、先ほどのようなものだ。そこにはとりあえずの相槌ではなく、確かな同情のようなものが読み取れた。

しかし、言動とは裏腹にリンディは角砂糖をお茶の中に三個ほど落とし、さらにはミルクを注ぐ。

アスカはその様子に僅かに眉を顰める。いや、慣れていなければ吐き気がするのも当然だろう。はっきり言って正気の沙汰ではない。

何より怖いのが、リンディの隣りにいるクロノが所業に対して何ら表情を変えていないところだろうか。内心では何らかの反応を示しているのだろうが…見ているだけで気持ち悪くなってしまいそうだというのに。アスカの態度を見て見ぬ振りか、それとも気が付いていないのかは分からないが。

「騒動に巻き込まれるのは慣れてますから、別段大変だとも思っていませんよ」

アスカにしてみれば別世界に行ったことはなかったが、騒動に巻き込まれるのは毎度のことなので驚くには値しない。

思わず一瞬眉を顰めたのは二人の方で、まさか『闇の書事件』をほぼ独力で解決した張本人が本当に本心から大変だとは思っていないことが分かったからだ。

そこはそれ、クロノは直ぐに元に戻り書類をアスカに見せる。

だが、アスカはそれに困惑するしかない。何せ見たことのない文字ばかりだ。英語に似ているがどこか違う。

仕方なく、許可を貰ってその様子を見られ、観察されていることは承知で翻訳魔法を使う。その様子を羊羹とお茶を配ったエイミィが記録しているだろうことも承知の上で。

「貴方達の個人情報は、現在時空管理局が認知している世界のどこにも属していない。……つまりは迷子です」

「僕も管理局やら次元世界なんて聞いたことがありません。今日始めて聞きました」

リインフォースと話した時点でこういう結論に至ることは十分に予測できていた。はやてにも学園都市である麻帆良が存在しないことを確認している。

年代的に差はほとんどなく、麻帆良がないのなら元いた世界ではないのだろうと推測していた。

「ともあれ、既に事情は聞いていますが帰る手段がなければ仰ってください。アースラにてその身を保護させてもらいます」

アスカが話せる状態でなかった以上は先に交流のあった二人から（はやてとリインフォース）事情は聞いていた。

「お心遣いありがとうございます。しかし、まだあの世界にはやり残したことが多いので帰られねばなりません」

この世界なら今まであった『英雄の息子』という柵（しがらみ）からは脱出できる。しかし、石化の解呪などやり残したことがある以上は帰らなければならない。

（この子は……駄目でしょうね。なのはさんもそうだったけど厄介なタイプね）

強い意志を感じさせる言葉を聞いただけで必ずやり遂げるだろうと直感してしまった。頑固と言ってしまえばそれだけだが、周りの静止など振り解いていくだろう。

こういうタイプの人間は、『ジュエルシード事件』でその一端を垣間見せた高町なのは同様に突っ走って、周りがヤキモキする羽目になる。

（どうしてこの世界で出会う子たちはこんなにも早熟なのかしら？）

なのはやフェイトやユーノ、今日会ったはやてにも感じた年に似合わぬ聡明さ。特に目の前にいるアスカには彼女たち以上に世間に慣れ、揉まれて来た柔らかさを感じる。端的に言えば子供らしさを感じないのだ。まるで、大人と向き合っているような錯覚を覚えさせる。

単に彼、彼女たちが特別なだけかもしれないが、どうも最近これが普通なのだと感覚が鈍ってしまったような気がしてならない。

「ところでお願いがあるのですが……」

「はい、なんでしょうか？」

まさかアスカの『お願い』があんな予想外のものだったとは、この時のリンディには思いもしなかった。

無数の計器が犇めき、何処か薄暗い印象を受ける一室でエイミィは、計測されたデータを観測するために先程からキーを叩き続けている

「また、ずいぶんと厳重に録画するよね。やっぱり彼みたいな子が趣味？」

一瞬たりとも目を離そうとしないクロノを揶揄したエイミィは、打ち込みながらアスカの様子をモニターで眺めつつ、計測記録を収めるのに余念がない。

「さあね。だけど、貴重価値があるのは間違いないよ」

本気か冗談か掴みづらいエイミィの返答を聞き流しつつ、クロノは画面を眺める。

今行われているのは、アスカが申し出た内容をリンディが受け入れたために行われている計測である。

アスカが申し出たのは能力の計測を代価にしたデバイスの譲渡。幾ら魔法文明があるといっても管理外世界におけるデバイスの譲渡など本来はご法度である。

しかし、それをリンディが受け入れたのには幾つか理由があった。

まず第一に、何故アスカがリインフォースの願いによって（本人

達談）呼ばれたのか、そもそも何故アスカだったのか、気になることが多い。

第二にアスカのいた世界の技術も興味深い。アスカが主魔法である精霊魔法を使えないことは痛いが、管理局の最も使われているミッドチルダ式同様に汎用性がある技術を知ることが出来たのは大きい。更に管理局が知らなかった気とい、う魔力がなくても戦える＜力＞の存在は破格とすら言っていい。解析し、再現できれば時間はかかるが人手不足を解消できる一手となるかもしれない。

それとアスカが望んだデバイスがワンオフ機のような特殊なものを望んだわけではなく、求めたのが武装隊で使っているようなタイプだったことがリンディにアスカの申し出を受け入れさせる決定打となった。

「魔力はそう多くはないかな。平均的な武装隊クラスだろうね。でも……」

表示されたデータを見てエイミィは呟く。だが、気になる部分があるのか最後を濁した。

魔導師ランク――それは管理局が定めた保有資質や魔力量の多寡で決定される魔導師の強さを表す順位のことを指す

大まかに下からＦ，Ｅ，Ｄ，Ｃ，Ｂ，Ａ，ＡＡ，ＡＡＡ，Ｓ，ＳＳ，ＳＳＳまでの１１段階で区別され、基本的にＳＳＳに近づくにつれ、強力な魔導師と言うことになる。そして補正で〇．五ランク分として＋、－が付与します。

保有資質や魔力量の多寡で主にランクは決まり、もちろん運用技

術や経験などと言ったものも考慮されるが、高ランク魔導師と一般魔導師を分けることになるのは、ほとんどが“生まれ持っての資質や魔力”であると言ってよい。こと魔導師に置いて“資質に勝る才能はない”それが管理局に置ける魔導師を表す絶対の原則であり認識だった。

優秀な魔導師揃いの時空管理局でも、ＡＡＡランク以上の魔導師は全体の５％にすら満たない。

クロノはその若さにも拘わらず管理局屈指の実力を持つ執務官であり、魔導師ランクはＡＡＡ＋。大人を含む局員の中でもＡＡＡランク以上は５％に満たない事を考えれば、その非凡さが自ずと知れよう。

そしてその中であってアスカの魔力量は武装局員の隊員であるＢランク相当しかない。

しかし、

「その制御能力は異常、か」

「分かるの？」

「まあ、ね」

瞬間的に放出できる魔力量の大きさを「瞬間最大出力」、放出した魔力を操作・維持できる能力を「制御能力」、魔力を特定のエネルギーに変える効率の度合いを「変換効率」と呼び、優れた魔術師はこれらのいずれにおいても高い数値を持つ。

アスカはこの三点でBランクとは思えないほどの高い数値を叩き出していた。魔力量から「瞬間最大出力」だけは別にして、こと「制御能力」と「変換効率」においては自信があったクロノをも容易く凌駕している。

測定器の端末が浮かぶ中、アスカは教えられた通りに魔力発露、収束、制御といった検査項目をクリアしていく。その数値は時折異様に高いレベルを示したりもするが、お世辞にも均整が取れているとは言いづらい。

これの前に制御能力の異常さに気付いたクロノはどんな訓練を受けてきたのかアスカに尋ねた。

学校の授業から始まる正規の訓練を受けてきたクロノからすれば、一体どんなスパルタなのかと問いたくなるようなハードな訓練内容だった。その能力に納得できるだけの命がけの内容だった。真似したいとは思わなかったが。

「確かに驚いたんだけど実はそれだけじゃないんだ」

「なんだ、まだ何かあるのか？」

「うん、アスカ君の魔力の性質というか、波長っていうのかな。それがね、はやてちゃんの物と酷似しているんだ」

エイミィは計測を続けながらクロノにも分かるように計測データと別に二人のデータを表示する。

「これは……」

「魔力光が似通うことは決して珍しくはないけど、最初から別人として登録していないと機械でも同一視してしまうほどそっくりなんだ。こんなことは初めてだよ」

「僕も初めて見たな、こんな事例は」

信じられないというエイミィと同じようにクロノもまた同じ気持ちだった。

個人の魔力波長の違いによって異なる「魔力光」の色。アスカのそれは白色であり、はやてと同じである。単に波長の違いによって示されるだけの色と、魔導師や魔力性質そのものには何の関連性もないのだが、二人の場合はそれ以外の物もほとんど同一のものなのだ。

全く同じ人間が存在しないように、魔力も機械が誤認するほどに似る事例は今まで確認されたことがない。広大な次元世界、そういうことがあるだろうとは言われていたが自分たちが遭遇するとは考えもしなかった。

「案外、これがリインフォースに呼ばれた理由なのかもしれないな」

「え、どうして？」

考えるように口元を手で覆い、ぽつりと呟いたクロノの一言に敏感に反応するエイミィ。

「いや、ただの推測だよ。魔力の性質が似通っているアスカと何らかの理由で？がって呼んでしまった……いや、論理的じゃないな。ただの与太話だ、忘れてくれ」

自分で言っていて理由にもならず馬鹿らしいと感じてクロノは推測を否定する。

記録を続けながらもエイミィは自分で否定したクロノの推論を聞いて少し考え、

「もしかしたらそうかもしれないよ。それにそっちの方が夢があるよ」

至った結論に自分で納得してクロノ自身が否定した推論を支持した。

「……？」

納得できていないという感じのクロノを見て、しょうがいないと言わんばかりにエイミィは肩を竦めて笑みを深めた。

「だって、助けを求めた女の子の願いが届いて救いに来た男の子って素敵じゃない？」

女の子が夢見る物語みたいだよ、と続けたエイミィにクロノは鳩が豆鉄砲を食らったかのように目を丸くした。だけど、直ぐに得心が言ったように頷いた。

『闇の書』は呪われた魔導書だった。その呪いは幾つもの人生を喰らい、それに関わった多くの人の人生を狂わせてきた。クロノの母リンディも、他の多くの被害者遺族も、こんなはずじゃない人生を進まなければいけなくなった。それはこの件の黒幕とも言うべきギル・グレアムやその使い魔リーゼ姉妹も同じ。

呪いによって主を殺さねばならない管制人格。主を助けたいのにその声は誰にも届かないと絶望に囚われていた。

誰もが闇の呪縛に捕まっていた中で、助けの声を聞いて唯一救いに来てくれた少年。たった一人で呪いに犯された少女を救い、呪いそのものを跳ね除けてしまった。まるで物語りに出てくるような英雄（ヒーロー）。

「ふ……全く夢を見すぎだよ」

「ぶー、なにさクロノ君てば、いけず～」

「だけど、悪くない」

格好つけながらもエイミィの拗ねたような言葉に、聞こえないぐらいの小さな声でクロノも認める。

物語にあるような正義の味方。例えこじつけであっても救われた人たちがいて、確かに呪いは討ち払われた。自分自身の手でそれを成せなかったのは心残りではあるが、結果的に誰も犠牲になることなく終わったのだから、延々と考え込むよりも都合の良い夢（ハッピーエンド）を見てもいいと思えた。

思索に耽るクロノに拗ねた振りをしていたエイミィはモニターに視線を戻して、観測を次のフェイズへと移行した。

「それじゃあ【瞬動】をしてもらえる」

エイミィに促されるまま、アスカは実使用をしての計測に移って

いた。

『はい』

応答した数秒後、アスカの姿が画面から消えて数メートル先に現われた。

【瞬動】――――正確には【瞬動術】というのは厳密には魔法では無い、端的に言うなら魔力や気を用いた歩法や移動術の事だ。

具体的には、足に魔力や気を集中させて地面を蹴る事で、短距離間……一般的な使い手なら大体3～7mを超高速で移動できる。自身への魔力供給による身体強化の応用なので、呪文入らずでアスカがいた世界において上位になればなるほど必須の技術である。

「『気』ってまるで漫画みたいだよね」

聞いた話から連想して、捜査で海鳴に滞在している時に息抜きで読んだ漫画のことを思い出す。

「まあ、この世界においては僕らの魔法も大差はないよ。だけど、例え魔力がなくても誰でも体得できる可能性があるんだ。艦長が記録として残しておきたいと考えるのは無理ないよ」

気というのは基本的に人間の体内に秘められた生命エネルギーの事を指すんだが、これは魔力と違って誰もが持っている物だ、とアスカから聞いている。勿論、厳しい修練だけではなく良き師に恵まれなければ会得するのは難しく、独学で会得するには余程の隔絶した才能がないと無理。

気は漫画に出てくるような何でもアリではない。自身の身体機能の強化、導入のしやすさ、というか使い易さという事に関しては、気の方が自分と同質という点でより上だと思われる。ただ、自己が生成した力の気と万物に宿るエネルギーの魔力を比較して魔力の方が全体量として多いというのは自明である。

エイミィは計測機器のキーを叩いて、それを記録していった。

「ありがと、もういいよ。次は【虚空瞬動】っていうのをしてくれる？」

『分かりました』

画面の中のアスカは膝を屈めて跳躍の準備に入った。

【虚空瞬動】は空中版の【瞬動術】である。

これは宙を蹴る事で【瞬動】を行う――――――【瞬動術】の高等技術であり、空中で方向転換が可能になるから通常の瞬動の弱点“一度入ると方向転換ができない”という点が解消される。

ただし、【虚空瞬動】で空を飛ぶ事は出来ない、あくまでも歩法。一応、飛ぶ為には魔法やそれなりの技法が必要になる。

空を蹴って飛ぶ様は、まるで空を駈けているようで憧れを抱かせずにはいられない。記録を続けながらエイミィは、あんなことができるなら気持ち良いだろうな、とそんなことを漠然と思った。

「幸福な結末（ハッピーエンド）、か……」

こんな仕事をしていれば後味の悪い結末に至ってしまう事件を見ることが沢山ある。

そんな中で誰も犠牲になることなく、幸福な結末（ハッピーエンド）で終わることが出来ればどれだけいいか。

アスカが取引を申し出てきた時の何かイタズラを企んだような悪（わ）餓鬼（るがき）染みた顔――――ナギを知る者が見れば驚くほどそっくりなそれ――――を思い出す。

――――ああいう簡単に諦める人間って気にいらないんです。だから、向こうが勝手に諦めるならこっちも勝手に救うだけですよ

「本当にどうにかなっちゃうかも」

可哀想だとか聖人君子みたいなものではなく、己の気持ちに正直なアスカの物言いが本当に全てを救ってしまいそうな気がしてエイミィは笑みが込みあがってきた。

第二十六話　　管理局と策謀する少年（後書き）

主人公は三時間寝たことで全開時の五割まで回復しました。玉藻の効果、薬品などなど色々使っています。

なにやら主人公が管理局に取引を持ちかけたそうです。

設定追加：主人公の魔力光ははやてと同じ『白』で、二人の魔力が酷似している。だから、リインフォースはアスカを呼べた？

：主人公の魔力は平均的な武装局員と同じＢランク。でも、制御はＡＡＡ＋のクロノを越えているようです。

連続投稿第六弾である次回の更新は明日の午前０時に更新となります。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

第二十七話　救う者と救われる者と少年（前書き）

もしかしたら最後の連続投稿。六話連続投稿だけで三時間はかかったよ。

文字数はジンクスからの脱出１３５７８字。

それではどうぞ。

第二十七話　救う者と救われる者と少年

街を見渡すことの出来る高台で、雪が積もった白銀の世界の中でアスカは街を見下ろしながらベンチに腰掛け、「清しこの夜」を歌っていた。

「～～～～～～～～～♪」

こういう寒い日だと普段ならアスカの中にいる玉藻も珍しく出てきて、子狐状態で左肩に乗って目を閉じ、静かに歌を聴いていた。

「～～～～～～～～～♪」

雪が舞い散る中で、肩に狐を乗せた少年が一人で歌を様は幻想的な風景を醸し出していた。

アスカが何故、「清しこの夜」を歌っているのか、それにはとある理由がある。

昨日、アスカは僅かとはいえ前世の記憶を思い出した。

その中に、前世で母親がこの歌を好きで、毎年良く歌ってくれたから歌詞を覚えてからはクリスマスに一緒に歌うようになった。この歌が好きだったわけではない。歌うことが好きだったわけでもない。ただ一緒に歌う母さんの笑顔が好きだったんだ――――そのことだけを思い出した。そこに思い出も、笑顔もなく、あるのは事実だけ。

きっと今日が12月25日クリスマスだから思い出せたことなの

だろう。

思い出したとも言えない事実ではあるが、それでも確かにある唯一の？(つな)がりとして歌っている。

「～～～～～～～～♪」

会いたい、思い出したい、少しでもいいから？(つな)がっていたい、その想いが込められた歌は聴いた者に物悲しさを感じさせずにはいられない。

歌が終わり、声が微かに辺りに響き渡る。歌い終わったことにアスカの心に一抹の悲しさが残った。

《……》

アスカの左肩に乗っていた玉藻は少しでも主の心を癒そうと首元に身を寄せる。何かが出来るわけでもなく、対処療法に過ぎないと分かっていても自分に出来るのはこれしかないと分かっていても、己が身の未熟さが疎ましく思えた。

「ありがとう、玉藻」

何も言わずとも玉藻の気遣いを感じ取ったアスカも自分から顔を寄せて柔らかい毛並みを撫でる。

《……！》

静かに撫でられている玉藻が僅かに身じろぎしたことでアスカもそれに気付き、ほぼ同時に高台の入り口を見る。一人と一匹の常人

よりも遥かに鋭敏な耳が此処に向かってくる雪を踏みしめる二つの足音が聞こえた。

一人はアスカと同じぐらいの体重の人間、もう一人は聞こえる足音から体重を推測すると成人女性。

雪の降る中、クリスマスに町外れにある丘に来る酔狂な人間は少ない。

微かな魔力と視線を感じることが近づいてきた足音が誰かということに誤りがないことを示していた。

「えっ？」

現われたのは露出の多い黒いフィットネススーツ……みたいな冬という時期には寒すぎる格好をしたリインフォースと、ベンチに座っているアスカと全く同じ格好、姿をしたアスカだった。

前にいるアスカを見たリインフォースは、自分の後ろにもいるアスカを見て困惑の声を上げる。

――――ボフン

驚く顔を見れたことに満足してベンチに座っているアスカは、リインフォースの後ろにいた影分身を解いた。

影分身を解いたことで煙が立ち、リインフォースが更に困惑を強める。

「さっきのは分身なので落ち着いてください」

一緒にいた筈のアスカが消えたことで混乱しているリインフォースを収めるために声をかける。

「そ、そうなのかお前の魔法は本当に凄いのだな」

いや、魔法じゃなくて忍術なんだけど……と、言いかけてこの場を見ている管理局も勘違いしてくれているならそれでいいかと訂正しなかった。

リインフォースも落ち着いたみたいなのでベンチから立ち上がり、顔だけでなく体も向き合う。

「さて、分身で聞いた話は分かってます。リインフォースさん、あなたを空に帰すのは僕でいいんですか？」

夜天の書の破損は致命的な部分にまで至っており、既に夜天の書本来の形がリインフォースの中から消されてしまっているのでそれを直すことが出来ない。遠からず新たな防御プログラムを生成し、再び暴走を始める。

守護騎士たちは既に本体から解放しているので大丈夫だが、管制人格であるリインフォースは夜天の書と共に消えなければならないとの事だった。

で、そのリインフォースを消滅させる役目をアスカにやってもらいたいと頼まれた。

勿論、アスカを元いた世界に帰してから行われるので――――――そうでなければ困るが――――――心配はいらないそうだ。

そんな大事なことなら主であるはやてには教えないのか、というアスカの問いに、リインフォースは悲しませたくないからと答えた。

当然、納得できないアスカは引き受けながらも裏で色々と手を回していたりするのだが、自分の消滅を受け入れているリインフォースは全く気づいていない。

彼女が大人しく消滅したかったのなら高町なのはやフェイト・テスタロッサに頼むべきであった。しかし、この選択が間違っているかどうかなどアスカには分からない。アスカは自分がしたいことをするだけだ。

「ああ、あなただからこそ頼みたい。アスカのお陰で主はやてを食い殺さずに済み、騎士達も生かすことが出来た。感謝している。だから最後はアスカに私を閉じて欲しい」

「勝手に一人で消えるなんて決めて、はやてとちゃんと話をしなくていいんですか？」

「私は消える、どれだけ悩んでもそれはもはや変えようが無い事実だ。私は主はやてを悲しませたくないんだ」

だからこそ、話をしとかないと勝手にそんなことをされたらそっちの方が自分は信用されていないかと悲しくなる気がするのだが、既に決めてしまった人に言っても無駄なのだろう。

アスカがそんなことを思っていると、更に雪を踏みしめる多数の足音が聞こえてきた。見届け人たる守護騎士たちと少女達もやってきたようだ。

「そろそろ始めようか、夜天の魔導書の終焉だ」

アスカの仕掛けは十分、果たして引っ掻き回される彼女はどんな望みを得ることになるのか。

真剣に時間稼ぎのつもりもなく、単純に言い出せなかったのだが、アスカはそもそもリインフォースを空に帰す術式を知らなかったので、本来、役目を担うべきだった少女たちに教えてもらわなければならなかった。

茶色のコートと端から見える白いスカートは恐らく学校の制服なのだろう、頭の両脇で愛らしく結った髪型や、革紐の先に赤い宝石をあしらった簡素なペンダントといった装いは、十歳程度に見える少女の外観によく似合ったものだった。

もう一人は先の少女と全く同じコートと端から見えるスカートから同じ学校の生徒なのだろう、長い金の髪は頭部の両側に結われて黒いリボンで纏められ、十歳を少し過ぎたように見えるが、手足のか細さや小さな手が、少女の印象をどこか幼く見せていた。

前者の少女は高町なのは、魔導師の杖・レイジングハートの主。後者の少女はフィエト・テスタロッサ、閃光の戦斧・バルディッシュの主で、二人ともミッドチルダ式の魔法を操る「魔導師」である。

現在小学三年生で若干九歳。

この場にはいない二人の人間のことも紹介しておこう。

ユーノ・スクライア。

ミッドチルダ出身のユーノはなのはの友人であり、なのはの魔法の教師である。

なのはと同い年の少年であり、淡い栗色の髪は短いが、一見して女の子ような長さで切り揃えられており、その手触りや感触はなのはのお気に入りである。

アルフ。

茜色の長い髪の間から犬科の獣の耳が覗き、臀部付近から尻尾が揺れる。

ミッドチルダ式魔法で生み出された魔法生物、使い魔。主より賜った名をアルフと言い、彼女はこの名を授けてくれた主との絆を何よりも大切に思い、誇りとしていた。

魔法の無い管理外世界の住人である高町なのは。遺跡の発掘を生業とするスクライア一族の出身であるユーノ・スクライア。魔法のある管理世界の住人であるフェイト・テスタロッサとその使い魔アルフ。

この一見縁(えん)もゆかりもない四人が出会ったのは、今年の五月に発生した事件、「プレシア・テスタロッサ」事件である。

きっかけは、極小さなことだった。

ミッドチルダの住人で、遺跡発掘を生業とする一族の子であったユーノ・スクライアが発見し、移送することになっていた危険な古代遺産「ジュエルシード」

それが不慮の事故によって四散し、第九十七管理外世界に散らばってしまった。

責任を感じたユーノは単身それを捜す為、この世界へとやってきた。魔法の腕に多少なりとも覚えのあったユーノだったが、単身での長旅と捜索による疲労が重なり、更にジュエルシードの暴走体は手強く、回収は困難を極めた。

傷つき倒れ、もはや進退窮まったユーノを救ったのがなのはだった。

学校帰り、仲良しの友人と共に通った帰り道で、なのは傷ついたフェレットを助ける。それは魔力の大半を失い、より低い魔力で負傷を癒すために動物体に変身していたユーノだった。

なのははユーノの「声」を聞き、深夜の町中でジュエルシードの暴走体に襲われていたユーノを助けるため、魔導師の杖レイジングハートを受け取って魔法の力を目覚めさせた。

その後のなのはの活躍と成長は目覚しく、ユーノはただ驚くばかりだった。

高町なのは天賦の才を持ち合わせた魔導師だった。

本来は魔力の資質を持たず、魔法の存在そのものを知らない世界

の人間の中にあって天賦の才に恵まれていたことは、勿論ある。

しかしそれ以上に、連続する実戦の最中、なのはは努力と鍛錬を欠かさなかった。

そんななのはを気に入ったのか、自らの意思を持つ自立思考型端末、レイジングハートも積極的になのはに力を貸し、なのはもそれに答えるように深い愛情と信頼をもってレイジングハートに接した。

互いの絆は更に固くなり、なのははレイジングハートをより使いこなせるようにユーノの指導を受けて魔導を学び、レイジングハートはなのはの資質に合わせて自らの性能を調整していった。

最終的に事件の首謀者、プレシア・テスタロッサは死亡。

フェイトは一連の出来事（ＰＴ事件）の重要参考人として裁判を受けていたがユーノやクロノ、リンディの働きかけで、保護観察は受けるものの、ほぼ無罪が確定。

就業年齢が低いミッドチルダであっても、親に命じられて子供が犯罪を犯すような事例については、子供を守る法が整備されている。

自由な思考や一般常識を身につける機会を阻害するような……例えばフェイトのような社会から隔離された環境で育った子供であれば尚更であるが、反面、自らの意思で悪意を持って犯行を行ったとされれば、子供であろうとも容赦なく裁かれる。

閑話休題（それはともかく）。

アスカは、まだ碌（ろく）に話したことのない二人に術式を教えてもらわ

ねばならなかった。

リインフォースを空に帰す術式自体はそれほど難しくはないので、何度か反復すればデバイスを持っていないアスカでも使用することは可能だった。

「さて、こちらの準備は整いました。始めますか？」

「ああ、頼む」

と、自分で始めるかと聞いといて何ではあったがアスカは自分が仕込んでおいた仕掛けがちゃんと作動したことを感じ取った。

施しておいた仕掛けがはやての車椅子を押して積もった雪を押しのけてやってきた。

「リインフォース！」

「はやてちゃん！　って嘘！？」

「はやて！ってハァ！？」

はやてがリインフォースの名前を呼びながらやってきて、シャマルとヴィータははやての後ろで車椅子を押しているアスカを見て驚愕の声を上げる。

他の人達も声は上げないもののはやての後ろにいるアスカを見比べたり、口をポカンと空けて驚愕を露わにしている。

「主はやて……アスカ、これは一体どういう」

彼女たちの驚く様子を見て、一人笑いを堪えていたアスカに全てを仕組まれていたことを悟ったリインフォースが問いかける。

「ちゃんと話はしておいた方がいいと思ったんで、勝手ではありますけど連れてきました。ちなみに事情は既に話してありますので」

結果はどうあれ、話し合う必要があると考えたから、本体が艦を降りると同時に先に家で寝かされていたはやての元に分身が向かい、子のタイミングで来るように起こして事情を伝え、この場に連れてきた。

つまり、最初から管理局はアスカのグルだということである。

幾つかの手札を管理局に晒す羽目になってしまったが、これでリインフォースが消えずに済むのなら安いものだ。

本体であるアスカの言葉と共に、はやての後ろにいる分身は消えた。分身が消えたことに更に周りに混乱が広がっているがアスカは敢えて混乱を収める事はせず、二人の動向を見守る。

はやては後ろの分身のアスカが消えたことにも気付かず、自分で車椅子を動かしてリインフォースに近づく。

「あかん、やめて！リインフォース、やめて！破壊なんかせんでええ！私がちゃんと抑える！大丈夫や！こんなんせんでええ！」

「主はやて、よいのですよ」

「いいことない！いいことなんかなんもあらへん！」

周りの混乱を他所に雪が降る中で、はやてとリインフォースの二人の言葉は止まらない。はやては今にも泣きそうな眼でリインフォースを見つめて、そんな事は決して幼い子供のように認められないと聞き分けの無い駄々っ子のように首を振る。

「随分と長い時を生きてきました。最後の最後で私はあなたに綺麗な名前と心を頂きました。騎士達もあなたの側にいます。何も心配はありません」

リインフォースはまるで赤子をあやすよう母のように優しく話しかけ、はやてはその言葉の意味が理解できてしまい、抑えきれずに涙を零す。

「心配とかそんな…」

「ですから、私は笑って逝けます」

はやての言葉を遮って自身は名を貰い、騎士達が傍にいるのだから何も心残りなどないとリインフォースは晴れやかな顔で告げる。

それは果たして本当に彼女の願いなのだろうか。それで満足だと、心配することは何もないと言えるのだろうか。

「話聞かん子は嫌いや！マスターは私や！話聞いて！私がきっと何とかする！暴走なんかさせへんって！約束したやんか！」

はやては必死な呼びかけて何とか思い留まらせようとするが、リインフォースの決意は覆らない。

思いだけでそれが出来るのなら、リインフォースは消えはしない。はやてにもそれは理解できているのだろう。だが、だからと言って簡単に心がそれを受け入れられないのだ。

「その約束は、もう立派に守っていただけました」

「リインフォース！」

「主の危険を払い、主を守るのが魔導の器の務め。あなたを守るための最も優れたやり方を私に選ばせてください」

「そやけど、ずっと悲しい思いしてきて、やっと、やっと救われたんやないか！」

はやての声はもう擦れて聞き取ることも難しい。だが、気持ちだけはしっかりと伝わってくる。それを受け取り、リインフォースははやてをしっかりと見つめながら告げる。

「私の意志はあなたの魔導と騎士達の魂に残ります。私はいつもあなたの側にいます」

「そんなんちゃう！そんなんちゃうやろ、リインフォース！」

「駄々っ子はご友人に嫌われます。聞き訳を、我が主」

「リインフォース！　……っく、アスカ君魔法使い何やろ！防衛プログラムをやっつけた時みたいに何とかできんの！？」

リインフォース相手の問答では埒があかないと悟ったはやてが初めて彼女以外に意識を向けて、アスカに懇願してきた。

殆ど一人で『闇の書』の呪いを打ち払ったアスカなら何とかできるのではないか。勝手だと思える考えだと自覚しながらも、他に縋る相手がなかったはやては救いを求めた。

ここにいる以上はアスカにも手はない、そんなことをもう一人の自分が囁いているのをはやては振り払うことができなかった。

だが、彼女の想いは良い意味で裏切られる。

「うん、できるよ」

ある意味予定調和でもあるのでアスカは、二人の思いの重さとは裏腹に聞かれたら考える間も無くあっさりと軽く答えた。

「「え？」」

はやての懇願からのアスカの即答に、主従二人は同時に理解できないとばかりに疑問符を浮かべて固まる。その場にいたメンバーにアスカの言葉が浸透するまでに若干の時間を要した。その方法は何かと聞かれる前にアスカは片手を上げて制した。

「でも、根本的な解決にはならないし、最低限受け入れてもらわないといけない条件がある」

「それはどういうことだ？」

「そうや、どういうことなんや！」

一番早く現実に戻ってきたのは、やはり消えるという選択肢しか

ないと思っていた張本人のリインフォースだった。どうやら消滅しなくてもいいという他の選択肢があると聞いて、逸早く他のメンバーより早く立ち直ることが出来たようだ。

自分で聞きながら茫然自失になったはやてもリインフォースさんの言葉で我に返って慌てて問いかける。

「リインフォースさんが消えなくてはいけないのは現状で直ぐに夜天の書を修復する術はなく、放っておけばいずれ新たな防御プログラムを生成されて暴走するから、ですよね？」

リインフォースが消えなければいけない大前提を確認すると、リインフォースも周りのメンバーもそれで間違いないと頷いた。

「ならば、逆にこうは考えられませんか？　今の状態で止めてしまえば防衛プログラムは生まれないのではないのか、と」

アスカの言葉にリインフォース以外の目に希望が生まれる。

だが、

「無理だ。夜天の書の機能を止めるということは私の死を意味する」

リインフォースの否定と共にその希望もなくなり、アスカを見る皆の視線に非難が混じる。希望を潰したみたいな形なので仕方ない。

ちょっと彼女（リインフォース）はアスカの言葉を勘違いをしている。

「いえ、夜天の書の機能を止めるのではなくて、夜天の書その物を現状のまま僕の魔法で封印して止めるんです」

あ、とアスカが言いたいことをようやく理解したリインフォースが固まってしまった。アスカの非常識さを知るはやては納得し、アスカのことをよく知らない他の皆が取りあえず希望が出てきたと目を輝かせてアスカを見る。

アスカでなくても似たような方法を取れる。

例えばクロノが持つデュランダル。

ギル・グレアム提督とその使い魔リーゼ姉妹が闇の書の封印のために、現時点での最新の技術と機能を注ぎ込んで開発した切り札。正式名称「氷結の杖デュランダル」。

闇の書が発動後必ず陥る暴走状態、その直前の数分間にこの杖を用いて極大の凍結魔法をかけることで、主もろとも闇の書を永久封印することができる。「闇の書の闇」が暴走状態に突入さえしなければ完全凍結することができる。

しかし、その凍結は外部から簡単に解除できること等の不安も大きい。

「でも、その魔法にも問題があるんですよ。それがさっき言った最低限受け入れてもらわないといけない条件に繋がるわけですが」

「その条件って何なん？」

固まったリインフォースに代わってはやてが聞いてきた。アスカとしては正直、さっきの二人のやり取りを見るとコレは言い出し難い。

「まず第一にリインフォースさんとはやて二人の繋がりを断たないといけない」

封印しても外部との繋(つな)がりがあるとそこから綻びが生まれかねない。本当ならそこまでしなくてもいいかもしれないが、危険(リスク)があるなら少しでも減らしておきたい。

「な!?」

「どういうことなん、それは?」

言い難そうにアスカが言うとリインフォースは驚愕の声を上げ、はやてはそれはどういう意味なのかと問うてくる。

「夜天の書を僕の中に封印する。封印する以上は外界との?(つな)がりであるはやてとの契約を切っておく必要がある」

リインフォースは眉間に皺を寄せて、はやては右手で口を隠すように当てて告げられた言葉を考えている。

はやては別にして、魔導書であるリインフォースには契約を切らなければならない理由に察しがついていた。だが、その手段は彼女が取りたくないものであった。

「……それしかないん?」

「他に方法があれば良かったんだけどどうやらないみたいだし、少なくとも僕にはこれ以外の方法は思いつかなかった。だから、結果的にはやてからリインフォースさんを引き離す形になるから、これ

は最後の手段と思って黙ってたんだ。でも、他に手段もなさそうだし、二人がちゃんと話し合ってくれないと困るから消える前に急いではやてを連れてきたって訳です」

はやての他に方法はないのかという問いを、何故この方法を今まで言わなかったのかを合わせて言うとはやてやリインフォース、周りのメンバーも納得したようだ。

管理局にもリインフォースを救う術はなかった。時間的にも、技術的にも手段を選ぶには何もかもが足りなさすぎた。

「それに他にも問題があって、この魔法を使えばリインフォースさんはほとんど僕以外とはコミュニケーションは取れないし、元の世界でやることが残っているので帰らないといけないからどうしても別れることになります。そして例え魔法を使ったとしても夜天の書の破損はそのままで根本的な解決にはならないから、自身の足で自由に外を歩きたいのなら管理局かどこかに直してもらえるように依頼しないといけない。まあ、僕にも直す当てはありますから動いてみますけど」

直す当てとして頭に思い浮かぶのはアメリカで起きた事件で偶々、出会った人たち。

アスカとは別の意味で常識外れな人たちの技術なら、或いは……と希望を持っていた。

周りのメンバーもそれに納得したのか頷いている。

「……取りあえず、説明は以上ですがどうしますか？」

アスカとしてはこのままリインフォースさんには消えて欲しくない。やっぱりあの記憶を見ると幸せになってもらいたいと思うからだ。かと言ってはやてに負担を掛けたくないし、リインフォースと別れさせたくはないがここに残るわけにもいかない。どちらに転んだとしても二人の結論を支持するしかない。

周りのメンバーや僕が見つめる中で、リインフォースがまだ悩んでいるがはやては何かを決意したようだった。

「……リインフォースの事、頼んでもええかアスカ君」

「本当にそれでいいの？」

頼んでくるはやてに逆にそれでいいのかと問いかけると、その目には不退転の光が輝いていた。

「他に方法はないんやろ、わたしにはリインフォースが消えるなんて耐えられへん！！」

車椅子に座りながらこの場いる誰よりも強い意志を示す。

「主はやて……しかし、私は……」

はやての想いに心揺れながらもリインフォースの心は決断を出来ていなかった。

――――――ピキッ

「ああ、もう～っ！」

そのウジウジとした態度に、医務室で最初にリインフォースの言葉を聞いてからいい加減に溜まりに溜まった苛立ちが噴出した。

何かと裏で動かねばならず、疲れも溜まっていて、望んだとはいえ不服な状況になったことがアスカの沸点を何時もよりかなり下げていた。

片手で髪の毛をガシガシと掻いて米神（こめかみ）に青筋を浮き立たせ、ズンズンと雪を踏みしめてリインフォースの元へ足を進める。

突然の行動に誰もが目を丸くする中、アスカはリインフォースの目前で止まり、その自分より頭一つ分高い顔を見上げ、

「グダグダとうるせぇ！　テメエはどうしたいんだ！」

首元を掴んで引き寄せ、その心に聞くように大声で問いかけた。

いっそ豹変したとすら言っていいアスカの大声。丁寧だった言葉を荒々しくなり、思わず鼻じろんだ様子のリインフォースは今さら何をとも思ったが当たり前のことを答える。

「わ、私は」「ああ！　そんな小さな声で言われたって聞こえねぇよ！　はっ、あんたのはやてへの忠誠心ってのはその程度のものだったのか！！　ああ、そうかあんたがそんな有様（ありさま）なら主であるはやてを放っておいても何とも思わないわけだ」

ボソボソと呟くように喋る声を遮ってアスカがもっと大きな声で喋れと、態と煽（あお）るように胸元を掴んでいた手を離して嘲笑（ちょうしょう）する。

嘲笑に何かに耐えるように俯いたリインフォースは気づかなかっ

たが、アスカは先の発言で切れかけた周りに抑えるようにジュエスチャーをしていた。彼女たちも何となくそれで意図を悟り、行く末を見守る。

「私は……消えたくなんかない」

「なにも聞こえないな～」

怒りを耐えるように拳を握ったリインフォースは先程よりも大きな声を出すものの、アスカは耳を掻いて聞こえないことをアピールする。

「はやて～、リインフォースって実は嫌々はやての元に来たんじゃないの？」

「そんな！　そんな風に思われたなんて、うち、悲しいわ」

顔を上げて睨むリインフォースを前に当人以外は分かっている挑発を繰り返すアスカと意図を察して泣き真似をするはやて。

その後も似たような寸劇染みたやり取りをリインフォース目の前で続け、

「ああ、そうだ！　私は消えたくなんかない！　もっともっと主の傍にいたい！　それがどうした、悪いか！？」

最終的には耐え切れなくなったリインフォースは想いの丈をぶちまけた。

消えたくなどない、残して逝きたくなどない、もっと傍にいたい、

自分の輪の中に入りたい。消える身では叶わなかった封じた願いをようやく表に出した。

「うっ……ふっ……くっ……」

よほど堪えかねたか遂には泣き出してしまったリインフォースに、はやてとアスカは目配せを交わす。

（ちょっとやりすぎたんとちゃう？）

（結果オーライってことで、まさか泣くとは思ってなかったけど）

（でも、反省しいや。うちも人のこと言えんけど）

（はい、流石に度が過ぎました）

目配せだけで、会話をせずとも意思疎通をするという昨日出会ったばかりとは思えない気の合いようを見せる二人は心の中で反省。特に八つ当たりした自覚のあるアスカは猛省。

「いや、悪くない。お前は八神はやての夜天の魔導書の管制人格・祝福の風リインフォース、だろ」

「ありがとうな、うちもリインフォースと一緒にいたい。でもな、離れ離れになっても消えてほしくないんや」

泣いているリインフォースを二人で囲んで慰める。

リインフォースも真摯な態度に自分をその気にさせるための演技だということに気づき、人前で泣いてしまったことを恥ずかしく思

い、頬を赤く染める

「……判りました。ですが、主はやて。どれだけ離れてもあなたから頂いたこの名と心は常に共に」

覚悟を決めたの察して離れたアスカを横に、車椅子の前に進み片膝をついてはやてに目線を合わせて、そう誓いのように告げた。

はやてはそれに何も言わずに、ただ手を伸ばしてリインフォースさんの体を抱きしめた。

《何か僕って救えない筈の人を救う救世主の筈なのに二人の絆を断ち切る悪役みたいになってる気がする》

《まあ、あながち間違いでもないのだから仕方ないじゃろ。楽しんで悪役になるんじゃな》

《う～》

と、感動シーンなのに念話で玉藻に弄られ周りが感動している中、一人心の中でいじけるという器用な事をしていた。

二人はそのまま姿勢で別れを惜しむように五分程抱き合っていたが、はやてから離れたリインフォースがアスカの前にやってきた。

「本当に構わないんですか？」

「ああ、頼む」

再度、確認するように問いかけるアスカに、リインフォースは憑

き物が落ちたようにすっきりした顔を見せて頷いた。

満足したアスカは視線を外し、何もないはずの中空を見上げて言った。

「と言うわけです。構いませんよね、リンディ提督」

『ええ、賭けはあなたの勝ちよ』

「「「「「「「「「へ？」」」」」」」」」

突然、空中にリンディが映った映像が浮かんで他の誰にも理解できない問答をした。

事情を知らぬ彼女たちは揃って疑問符を浮かべる。

「ちょっと提督と賭けをしてね」

そもそも前提としてアスカが元の世界に帰るにはリインフォースを一緒に連れて行く必要があった。しかし、暴走間近のロストロギアである彼女（リインフォース）を連れ出す許可が出るはずもない。

無理やり帰ればアースラやはやてたちに問題が出てくるので手段としては最後の最後。

そんな訳で元いた世界の技術、自身固有の技など幾つか（闇の書の闇を打ち払った方法）などを材料として取引を行い、彼女を連れ出す許可を得たわけだ。デバイス技術の譲渡は表向きには公表できないためカモフラージュに意味合いが強い。

自身の技術の公開についても実用化にはアスカがいない場合、数

十年の時が必要になることも大きい。こちらの魔法のように万人向けに普及されるには理論立てる必要があり、気などは多分に感覚的な含むため非殺傷設定を組み込みたいならプログラム化しなければならない。

アスカの他に使い手がいない以上は記録を取っても、ほとんど独学に近い状態では習得することはほぼ不可能と言っていい。下手したらお蔵入りになる可能性も無きにしも非ず。

故にこそ交渉材料としてアスカの存在は価値を高める。唯一の技能習得者であり、実用化に欠かせない人物だからだ。

当然、リインフォースに危険がないこと、封印できて安全であることを証明しなければならなかった。そのためにロストロギアの封印実験も行われている。

そして、この光景は管理局の本局にいる頭の固い上役たちを納得させるために生中継されていた。

色々とアスカに利用価値があることを示し、リインフォース自身も唯一現存する融合騎として歴史的価値も高いから認められたわけだ。

だが、そこで問題なのはリインフォースの意思。

長年の呪いの所為で虚無的というか、内罰的な思考に成りがちで、どうもプログラム故の限界か本人から現状を打破しようという気概が感じられない。

本人の意思なくやったところで救う意味がない。

泣かせたのは予想外だったが、管理局の上役が認めなくても世間に流せば同情的な風潮が流れる。美人の涙はなにかとお得だ。

それだけでは薄いので、この件の黒幕みたいなギル・グレアム提督にも会って頼み、手を回して色々と動いてもらった。裏取引やら利権やら子供には言えないような陰謀が裏で蠢いている。

アースラに到着した直後の三時間以外は裏で動いたり、実験動物よろしく観察されたりと休みなく動かなければならなかった。アースラについて起きてからは不眠不休で動いていた。

「……と、いうわけです」

再度、こちらに来た場合は管理局に協力しなければならない煩悶とここまでこぎつけた苦労を隠して、本当に大ざっぱに説明する

「そうやったんか……ありがとうな、アスカ君」

「別にいいさ。やりたいからやっただけだし、それに今日は12月25日だからさ」

何となく苦労を察して礼を言うはやてを前に恥ずかしいのか顔を逸らしたアスカがぶっきらぼうに言う。

「なんで12月25日なの？　なのは」

「う～ん、それってクリスマスだからってことかな」

「本当かよ」

完全に傍観者と化していた六人の中で、この世界の慣習に最も疎いフェイトは隣にいるなのはに聞く。聞かれた当人は日付から連想するのがクリスマスということだけしか思いつかず、自信なさ気に答える。そんななのはをヴィータが疑わし気に見る。

「そうさ、クリスマス。奇跡を起こすのにこれほど適した日もないだろ？」

三人の会話を聞いていたアスカは、なのはが言う通りだと認め、渾身のイタズラを成功させた悪餓鬼小僧の笑みを見せる。

「ぷっ……あはははは！　そうやな、その通りやとび～～～～っきりのプレゼントを貰ったわ！」

アスカの言いようが壺に嵌ったのか、爆笑したはやては膝をぱしぱしと叩いてうっすらと嬉しさで浮かんだ涙を拭う。

嬉しくないはずがない。どれだけアスカが苦労したのか、苦労する羽目になるのか分からない。今はただ、サンタから大人しくプレゼントを貰っておこう。何時か何倍にもして返すことを心に決めながら。

「騙した結果になるけど、どうかな？」

結果的とは言っても騙した分だけ引け目があるアスカは、大人数に泣き顔を見られるという最も被害を被ったリインフォースに尋ねる。

「まったく……怒ればいいのか、悲しめばいいのか分からな

い。だけど」

また主であるはやてと一緒にいてくれる可能性を残してくれたが大人数に恥ずかしい姿を見られたことを考るとどうしたらいいのか分からない。

それでも今の素直な感情を表すように表情が変わる。

「ありがとう」

薄らと、だけど誰もが見惚れてしまいそうな笑顔に。

「……」

その笑顔を最も間近で見たアスカの脳裏に突如としてある記憶が蘇る。

――――何時までも立ち止まっているわけにはいかないだろ。それに女を泣かせるのは男がすることじゃないぞ。

――――私たちの子供に生まれてきてくれてありがとう、幸せになりなさい。

初めて人を殺しことに耐え切れず、自分の殻に閉じ篭っていた時に見た自分に都合よく生み出したかもしれない幻想。リインフォースの、女の子の泣く姿が見たくなかった根源。

一瞬。

ほんの一瞬だけ心に刻み付けるように、今度こそ忘れないように

反芻（はんすう）する。

傍から見ればリインフォースが救われたかもしれない。だが、本当に救われたのはアスカの方だった。思い出せただけでこれまでの苦労は十分に報われた。

「こちらこそ、ありがとう」

「？」

逆にアスカも礼を言われても理解できないリインフォースは疑問符を浮かべるのみ。

「くくく、あはははははははは」

コテンと頭を傾ける仕草が面白くてアスカは笑った。

釣られるようにはやてが、リインフォースが、なのはが、フェイトが、ヴィータが、シャマルが、シグナムが、ザフィーラが、それぞれ大きな声であったり、密かにだったりとの違いはあれども笑いが満ちた。

呪いは完全に晴れたわけではない。結局の所は何も解決していない。

だけど、希望を見れる。明日を望める。輝かしい未来を信じることが出来る。そんな、人によっては戯言だと言われそうなことを信じられるほどに笑いの溢れた幸福な光景だった。

第二十七話　救う者と救われる者と少年（後書き）

ドラクエ風にすると、

リインフォースが仲間になりました。

主人公に『人でなし』『女泣かせ』の称号がつきました。

主人公に管理局に協力する義務が発生しました。

とでもなるかな。

管理局は基本的にアスカの要求を呑んでいます。リンディやグレアムが頑張ってくれたお陰でもあるんですが、また来た時には管理局に協力しなければなりません。『闇の書』としての機能が残っているリインフォースが存在している限り。あの映像を生中継で見れば誰が主かは一目瞭然、ならばいまここの世界を離れても再度来た時に……という感じで反対派も認められました。色んな思惑、陰謀、その他諸々が張り巡らされた中をリンディ達の助力もあって、ですが。

それらは気の有用性とアスカとリインフォースの希少価値を鑑みた結果です。

モノになれば儲けモノ、ならなくても最初からいなければと思えばという感じです。元々が事故みたいな結果で現われたアスカと、消滅するしか手がなかったリインフォースなので。心情を別とすればマイナスにはならないから

それはともかく、タイトル通りで救ったはずが逆に救われたというわけです。リインフォースの笑顔で忘れていたことを思い出したことでアスカは救われました。前世を完全に思い出したわけではなく、本当にほんの僅かですが。

連続投稿はひとまず終了……ではないのです。どうせならということでもう一話投稿します。

次回の更新は明日の午前０時に更新となります。流石にこれで連続投稿は終わりです。日曜日の午前０時の投稿もありませんのであしからず。

次でリリカルなのはＡ'ｓクロス編が終わるので、その後に間に一週間空けるか、原作が始まる前に空けるか考え中です。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

第二十八話　　帰還するも苦労は変わらない少年（前書き）

ダメ押しの連続投稿第七弾。

原作が近づいたことで修正するだけなので早いこと早いこと。連続投稿しながらもストックが溜まっている。

文字数は多めの１６２２３字

第二十八話　帰還するも苦労は変わらない少年

円満の内に分かれてなんとか元いた世界に帰還することが出来たのだが、その姿は決して無事に戻って来れたと言えるものではなく……端的に言ってアスカは死に掛けていた。

「……う……ぁ……」

その体には傷が幾つもあり、細かい擦り傷から中には重症と呼べるものまである。傷のない部分を探す方が難しく、服で隠れた部分も傷だらけであった。

リインフォースが元いた世界からアスカの生まれた世界には途轍もない距離があり、次元転送で転移するにははっきりと言って個人では不可能。次元航行艦でも数年から数十年を要してしまう。

これが年中、人手不足に管理局が気などの有力な戦力になりそうなものを知っても関わりあいになろうとしなかった原因である。リターンはあっても手間が尋常ではないので割りに合わないのだ。

そんな中でアスカが個人転送で元いた世界に帰るには、次元航行艦を越える莫大なエネルギーが必要になってくる。

管理局の魔力ランクでＳＳＳでも届かない領域に達する手段をアスカは持っていた。　とある方法を使っている間は玉藻をも越える力を手に入れることが出来る。単純な力だけでいえば玉藻に倍する、もしかしたらそれ以上の力が。勿論、アスカ個人だけではなく、玉藻の力も借りるが現状では間違いなく１００％暴走する。しかし、暴走する方法であっても他に手段はなかった。

幸いとでもいうべきか、ある意味必然とも言うべきか、リインフォースのお陰で帰還の目処が立った。

リインフォースの本体である『夜天の魔導書』はベルカによって開発された融合型デバイスで、言うなれば、ミッドチルダ式のインテリジェントデバイスを極端化したもの。姿と意志を与えられたデバイスが、状況に合わせ、術者と「融合」し、魔力の管制・補助を行う。この形式では他の形式のデバイスを遥かに凌駕する感応速度や魔力量を得ることができる。しかし、融合適性を持つ者の少なさや術者に合わせた微調整・適合検査の手間、そして何よりデバイスが術者をのっとり、自律行動を始めてしまう「融合事故」の危険性・事故例により、製品化に至らなかった。

クロノとエイミィが話していた通り、『夜天の魔導書』の主である八神はやてとアスカ・スプリングフィールドの魔力は酷似している。ほぼ同一と言ってもいい。

帰還の際に行われたリインフォースの調査でアスカの融合適正は決してはやてに劣るものではなかった。これは本来なら在り得ざること。

――――――もしかしたら彼が次の『闇の書』の主になっていたかもしれない

無限書庫で『闇の書』を調査していて現代で最も『夜天の書』に詳しいユーノがこの事実を知った時、ぽつりと漏らした一言が真実に迫っているように関係者は思えた。

『闇の書』はリインフォースによるとはやてが産まれて直ぐの頃

からはやてと共にあったらしいので、１１年前の事件の後、直接ここに転生してきたものと思われる。ユーノの調査によると、転生先は、闇の書に合致する魔力資質の持ち主をランダムに選ぶらしい。

リインフォースと？がったことも、これならある程度の辻褄が合う。資質という意味ではピッタリで、二人の年代的な問題を考えれば類似した魔力の持ち主に……と、あくまで可能性の話にしては真に迫りすぎていた。

それはともかく、アスカのこれ以上の手はないという切り札中の切れ札ならば求めるエネルギー量に達する。１００％暴走してもエネルギーを使えるリインフォースがいればなんとかなる。

形としては「融合事故」……融合型デバイスが引き起こすとされる、システムの誤作動ともいうべき現象を意図的に引き起こすとも言える。融合型デバイス独特の機能には、デバイスが主の意志と無関係に術者の肉体を操ったり、魔法を行使することが出来る、というものがある。本来、これは融合時の術者が意識喪失などの状態に陥ったときのための緊急処置として設定されたものだが、この機能が時として暴走し、デバイスが術者の肉体をのっとり、勝手に自律行動を行ってしまうという事故が起こる。これが「融合事故」と呼ばれている現象である。
この融合事故の危険性が、融合型デバイスの製品化を断念した最大の理由となったが今は置いておく。

玉藻が体内に戻り、リインフォースがユニゾンをする。そしてとある方法によって莫大なエネルギーを得て、それをアスカが制御し、玉藻が抑える形に専念しても暴走する中でリインフォースが転送を行う。これが現状で最も成功確率の高い帰還の方法であった。

もし失敗すれば、良くてどことも知れぬ異世界。悪ければ死ぬまで次元の狭間を漂う……なんてことも十分に在り得た。その危険性を承知の上で受け入れたリインフォースには頭が上がらない。

次元転送の魔法を実行するために余分にもらったデバイスがあまりの負荷に耐え切れず、塵となって風に流されていくのをぼんやりと見やる。

《なんとか……帰って来れたの》

結果的には元いた世界に帰還することが出来た。とある方法を一秒にも満たない時間だけ使ったにも関わらず、暴走した力の余波はアスカを傷つけ、鍛え上げた頑強な肉体と制御に専念していた玉藻が治癒に全力を注いでくれたお陰で死なずにすんだ。

《ありがとう、二人とも》

通常の人間より体の蘇生・回復機能が異常なほど高まっていなければそのまま死んでしまう可能性もあった。無事とはとても言えないが帰って来れたのだからアスカは念話でリインフォースと玉藻に深く感謝した。

《いえ、しかし、まさか本当に成してしまうとは》

治癒に専念していた意思だけ返って来た玉藻とは別に、リインフォースは少し唖然とした声音で答える。アスカの成すことにもう驚かないと思っていたのに更に上を見せられて驚きを隠せない。それだけアスカの成したことは非常識だった。

《あ、ははははは……》

自分が成したことの非常識さはよく理解しているのでアスカは誤魔化すように笑う。

そうこうしている間にもアスカの体中に刻まれていた傷は、先に重症の傷が優先的に治っていく。真祖の吸血鬼には及ばないまでも最上位の回復魔法並みの治癒速度だ。

とはいえ、傷が深く、多すぎるので完全な治癒には数日を要するだろう。今は表面的な傷を治し、最低限動けるまでに回復することを優先している。

（こんな服じゃね。人が近くにいないのはまだ救いだけど）

倒れた姿勢のまま着ている服を見ると、ボロボロで何も着ていないよりかはマシというぐらいの布しか残っていなかった。幸いにも近くには人の気配はなく、無人だ。往来でこんな格好をしている所を知り合いに見られる心配がないのは僥倖だ。

それに今のアスカはユニゾンの影響で髪と瞳の色が変色している。この変色は融合デバイス使用者特有のもので、色彩以外の変化がないのは、アスカが完全にリインフォースを制御しているためで、色はユニゾンしたはやてと全く同色である。

麻帆良でアスカは所構わず、人を問わずに人助けをしているので顔が知られている。アスカを知っている人たちが髪と眼が変色しているのを見たらどうなるか、火を見るより明らかだった。

「変化の術」

なんとか少しだけ動けるようになって仰向けになって震える腕で印を結び、【変化の術】で髪と眼の色だけを変える。本来は他の物体に化ける術だが使いようは幾らでもある。

リインフォースを外に出すことはできないので【変化の術】を使って色を変えたが、ここで少しだけ回復した体は限界を迎え、暫くは動けそうになかった。

放っておけば転移の波動を感じ取って魔法関係者の誰かが来るだろう。

「……ん？」

そこで慣れた気配を感じて後ろを振り返るとこの世界の残しておいた分身が立っていて、ポンと煙と共に消えた。分身が消えると共に分身の経験が蓄積された。ちゃんと明日菜と木乃香には連絡を入れていた。

用件だけを言って返事を聞かずに電話を切ったので、明日菜は怒っているだろうな、とちょっとだけ現実逃避。

《取りあえず無事を喜ぶべきか。はぁ～学園長とかに説明しないといけないんだろうな……面倒臭いな》

《主はある意味ゲストじゃからの。その主が突然消えたのじゃ、説明しなければ収まるまい》

《あの、私にも事情を説明していただきたいのですが……》

命がどうこうというレベルは越えたので玉藻も治癒を続けながら

会話に入ってきた。管理局上層部とアースラのトップ三にしか細かい事情を話していないのでリインフォースは事情を呑みこめない。

答えてあげたいがほとんどチャクラ、気、魔力を使い果たしているアスカには全身を蝕む倦怠感で気力が湧かない。

《あ～玉藻、説明しといて》

思考が回らず、面倒になって玉藻に丸投げした。

《分かった。よいかリインフォース、主は……》

玉藻がリインフォースに説明しているのを聞き流しながら、顎を上げて倒れている頭の上にある世界樹を見上げて思案する。

世界樹はリインフォースの願いを聞き届けて主を救える者を、つまりはアスカをあの世界へと送った。だが、何故アスカがそれに選ばれた？　ただリインフォースの願いを叶えるためなのか、適正があったからか、それともまた別の理由があるのか思考の渦にはまり結論はでない。

何者かの意思に寄るものなのか、単純に偶然か、リインフォースの願いを世界樹が自身の意思で聞き届けたのか理由が分からない。

まるで何者かの筋書きによって誰かの手の上で踊らされてる感覚は否めないが取りあえず、リインフォースを救えた事を良しとするべきか、と結論を出して思考を止めた

そんな事を考えていたから、というのと酷い倦怠感から何時もより接近する気配に気付くのが遅れた。

この数ヶ月で馴染んだ気配はタカミチ・T・高畑のもので、目視できる距離だが倒れている姿勢では首を巡らしても姿は見えない。

立ち上がることしかできない身ではどうすることもできず、大人しく高畑が来るのを待つ。どうやって色んな理由を誤魔化すかと考えながら。

あの後やってきた高畑に抱えられて（動けない身ではどうしようもなく）向かったのは保健室。まずは即効で学園長の下に行かなければならなかったのだが（やはり明日菜達に連絡を入れたとはいえ、突然消えて転移して戻ってきたから事情を説明する必要がある）、アスカの疲労具合から治癒術師による治療と休息が必要だと判断された。

アスカとしても異論はなく、素直に好意に甘えて治癒を受け、監視の網の中で大人しく眠った。

アスカが返って来たのは昼過ぎで、目覚めたのが日も沈みかけた夕暮れまで眠っていたにも関わらず、全開時の一割にも満たない状態がとある方法の負担具合を物語っている。

覚醒後、普通に歩く程度には回復しているので、高畑と共に自分の足で学園長室に向かって歩いていた。

過保護だと言いたいが自分の立場と、連絡を入れたとはいえ突然

いなくなった手前では負い目があった。

「服もボロボロで一体、なにがあったんだい？」

「二度手間になるので学園長に話すときに一緒に聞いてください」

学園長室に向かう道中、高畑に聞かれたが二度手間をするほどの余裕がないので了承させてからは、二人の間に会話は少ない。

高畑としては話したいが、徐々に回復しているとはいえ本当にアスカがしんどそうにしている様子を見ればできそうもない。

冬休みで人のいない夕暮れに染まる校舎を黙って歩き、学園長室に到着した。

まず高畑がノックをして先に入り、アスカも後に続いて学園長室に入る。

学園長室には見る限りでは高畑とアスカを入れて三人。と、普通ならそう考えるのだが疲労の所為か、それともとある方法を使ったからか、一度休息を取ってから異常に感覚が研ぎ澄まされている。

肌に触れる空気の流れ、鼻に届く高畑のタバコの匂い。

何時もなら気にならないのに、研ぎ澄まされすぎた感性に振り回されている実感があった。特にタバコのニコチン臭が鼻について仕方がない。なんとか我慢できるのでここまでは別にいい。

問題なのは、普段ならこの学園長室に三人しかいないと思えるのに、今はもう一人誰かがいるように感じ取れた。今のように敏感で

なければ気付かない、普段のアスカの感覚をも越えて身を隠す誰か。

高畑が気づいているのか、もしくは始めからグルなのか確証は持てない。だが、間違いなく学園長は隠れている誰かのことを知っている筈。

《玉藻……》

《分かっておる、リインフォースすまんが説明は一時中断じゃ。理由は後で言うから今は静観しておいてくれるか？》

《はい、分かりました玉藻殿（二人はあの老人を完全には信用していない。何故だ、何か理由があるのか？）》

個人として学園長は信頼できる人物である。好々爺として孫思いな、どこにでもいる老人。だが、そこに関東魔法教会の長という立場が混じれば変わってくる。

組織と個人の思惑は基本的に合致しない。いや、大抵の場合において沿う方が珍しい。それが組織のトップともなれば顕著に現われる。

組織の利益のため、被害を少なくするため、そのような理由で個人が害されることは多々ある。そしてこの考えは大凡の場合、正しい。

小のために危険に晒される大なんていうのはあってはならない。リスク、数の問題で考えれば正しい。犠牲になる小のことや、情を挟まなければ、ではあるが。

人によっての正しさは無限、この答えもまた人によって違う。議論に価値はあれど個人の出した考えはその個人にしか正しさはない。

（ここまで気配を隠蔽できる術者が麻帆良にいたとは。狙いはなんだ？）

気配はすれどもどこにいるのか分からない相手を探すという愚を冒さず、辺りに視線が行かないように注意しながら頭の中で絶えず思考しながら歩き、学園長の前で足を止める。

先に部屋に入った高畑は学園長の斜め前に立ち、対角線上にアスカと学園長を同時に視界に入れる場所に移った。

「ご迷惑をお掛けしました、学園長。ですが、疲れているので話はできれば明日にでもお願いしたいのですが」

まずは突然の失踪でかけただろう迷惑を真摯に謝罪するため深く頭を下げる。

本人の意思でなくても、一方的な連絡で碌に断りもなくいなくなったことは間違いなくアスカに責がある。どれだけ大人ぶろうとアスカは子供。その保護者というか責任者が学園長である以上は、なにかあれば彼が責任を取らなければならない。

ならばあったこと全てを話すべきなのだが、彼はアスカの完全な味方というわけではない。組織の利、個人の利、上からの命令、立場がある人間は情とは別に判断しなければならないことが多い。敵というわけではないが過剰な信頼は身を滅ぼす元となる。

それとは別に真摯に謝罪し、わざわざ時間を取らせたことに感謝

すべきなのに話を明日以降にと望んだのは、老獪な学園長相手に完全に誤魔化せる自信がなかったからだ。時間を空けて理由を考える時が欲しかった。若干回復しているとはいえ早く部屋で休みたいのは本当だが。

曲がりなりにも日本の半分を支配する魔法組織のトップが無能なはずがない。世襲制を別にして、その立場にいるということはそれだけの能力があったということなのだから。

「フォフォフォフォ、そう慌てるで無い。ちょっと君に聞きたいことがあったのでな」

好々爺な祖父が孫に尋ねるように言葉を紡ぐ学園長にアスカの態度は変わらない。

「疲れているので用件は手短にお願いしますよ」

悟られる前に、早く、早く、とそういう態度こそが「何か」あったと教えているものだと気づきもせず。

「分かっておる。……アスカ君、君は昨日夕方に世界樹が謎の発光をして以降から先程まで行方が知れず、姿を現したと思ったら衰弱して、服までボロボロ。一体君に何があったんじゃ？」

流石は関東魔法教会の理事と言うべきか、好々爺とした雰囲気から一変させてその身から発せられる威圧感に屈服しそうになるが腹に力を入れて跳ね飛ばす。

ここに来るまでに誤魔化す内容は考えてある。だが、果たしてそれで信じるかどうか。

「僕はその世界樹が光っている現場にいたんですよ。で、世界樹が光りだしたと思ったら世界樹から蔓のような幹に拘束されるように絡め取られ、引っ張られて世界樹の中に引きずり込まれたんですよ。服がボロボロなのは引きずり込まれないように抵抗したため破れたんです」

「馬鹿な、世界樹がそんなことを！！」

アスカの言葉に高畑は信じられないと声を荒げ、学園長は眉を一瞬だけピクリと跳ねるが、それ以上の反応はしない。

世界樹が今までそんなことをした、という記録は残っていない。高畑は麻帆良に来てから長いがそんなことは一度たりとも起こっていない。だからこそ、アスカの言葉を直ぐには信じられない。

少なくとも高畑はアスカの話を信じようという前提で話を聞いていたから否定の言葉を上げた。反対に学園長はピクリと眉が動いただけで信じたのか、嘘だと思ったのか、アスカには判断できる材料が少なすぎて分からかった。

ちなみにアスカはボロボロだった服を脱いで、保健室に置いてあった予備のジャージを着ている。間違っても女性用ではなく、男性用のである。

「世界樹の中に引きずり込まれた僕はどことも知れない真っ暗な空間に立っていました。他にすることもないのでその空間内をしばらく歩いてい光が晴れると気がついたらその空間から出ていて、世界樹の前で倒れていたんです。何故か酷く疲れていて動くことも出来ませんでしたが」

これがアスカが考えた内容だ。穴あきだらけで証拠もなく、ただ辻褄だけを合わせただけの信じれるような話しではないが、信じれなくても彼らにはアスカの話を覆す物証や状況を示すものが何もない。

「成る程のぅ……」

それまで髭を撫でながら黙って話を聞いていた学園長は、信じたのか判断しづらいリアクションで頷くと、普段は閉じている眼を開けてアスカを見る。

その時にアスカは学園長から何らかの魔法をかけられたのを感じた。恐らく思考を読むなりして真偽を確かめようとしているのだろう。見習い程度では絶対に気づかぬ精度の魔法。

この場において最も最適な手段で躊躇なく人の思考を読み取る手段を取った学園長に紛れもない称賛を感じながらも、掛けられた魔法を抵抗（レジスト）する。

まさか抵抗（レジスト）されるとは思っていなかったのか、学園長は普段は閉じている目を更に大きく見開いていた。

アスカは見たことのない学園長の反応に若干の面白さを感じながらもそれを表には出さずに、勝手に魔法を掛けられて更に不機嫌だという表情を崩さない。

「話は以上です。疲れているので失礼させて頂きます」

一息にそれだけを伝えると返事は聞かずにさっさと部屋を出て行く。高畑が止めようとするが、学園長は勝手に人の頭の中を覗こう

とした負い目があるから、追求を恐れて迂闊に引き止めることは出来ないとアスカは考えた。

ただ、結局隠れている誰かが何もしなかったことが不気味だった。

学園長は先程の不機嫌そうに出て行ったアスカの様子を思い浮かべながら、昨日の出来事を振り返る。

昨日の夕方、世界樹が突然光りだした後からアスカの行方が分からなくなった。夜を徹して急遽召集した魔法先生や魔法生徒に学園都市中を捜索させたが、見つからずにこれは［英雄の息子］というアスカ目当ての何者かの誘拐かと疑い、学園都市の外に捜索の手を伸ばそうと考えていたときに突然、魔力とも気とも判断がつかない莫大なエネルギーが転移してきたのを感じ取った。

孫である木乃香の魔力すら遥かに越え、もしかしたら最大時の世界樹の魔力すら超えていたかもしれないエネルギーは、学園長程の最高位の術者ですら勘違いであったかと思うほどに瞬時に消えた。

他の魔法使いたち、高畑や封印状態にあるエヴァンジェリンすら気づかぬほど間に消えたエネルギーに学園長が気付いたのには理由がある。アスカの捜索のために探査魔法を麻帆良中に張り巡らしていたことと、丁度世界樹付近を注視していたからという理由があったからだ。

【遠見の魔法】で侵入者らしきエネルギーの持ち主を見るとそこ

には昨日から行方不明のアスカがいた。

アスカが莫大なエネルギーの持ち主？　と疑問に思いつつ何かがあったのは間違いないと確信を抱いた。

体は傷だらけ、常人ならとっくに死んでいる傷を負いながらも未だ息があるのはそれだけ鍛えていた証拠だろう。だが、それも時間の問題だと急ぎ、救護を呼ぼうとした学園長の手は映像のアスカによって止められた。

傷が見る見るうちに治っていったのだ。流石に真祖の吸血鬼ほどの回復力はないが、上位の回復魔法並みの早さだった。

おかしい。

それが学園長の素直な感想だった。アスカに回復魔法をかけている様子はない。自然に治っているにしては重傷の傷が優先的すぎる。そこに何者かの意思を感じ取っていた。ある程度、傷が治るとうつ伏せの状態から仰向けになり、指を何やら動かしたと思ったら何故か白に近かった髪の色が元の金色に戻っていた。

アスカには何かがある。

学園長が初対面からアスカに感じていたもの。それがいま明らかな疑念となって形作る。

そして同時に思う。

アスカもまたナギと同じように何時かいなくなってしまうのではないか、と。

外面、性格、考え方、はっきり言って全てが全く似ていない。だが、本質、根っことでもいうべき場所が似ている。学園長はそう感じていた。似ていないのに、似ている。矛盾した考えではあるが、アスカの今までの経歴を考えるにあながち間違いではないだろう。

自分から首を突っ込むか、巻き込まれるかの違いはあっても争いに巻き込まれる。そんな気がしてしまう。

その場合、ナギと違って今のアスカは耐えられない気がする。ナギにあって、アスカにはない強さ。それが二人の差となって現われるからだ。

（いや、こんなことを考えても仕方あるまいか）

思考が埒外に外れていることを自覚して中断し、とある人物に連絡をつけ、丁度現場付近にいた高畑にアスカを向かいに行かせた。

極度の衰弱から治癒術師を派遣して、数時間の休憩を挟んで対面した。話を聞くと確かに辻褄は合っているがどうもそれが正しいとは思えなかった。

何だかんだでアスカが出て行った後、高畑も気づいていなかった部屋の角に隠れていた白いローブの男――――とある理由で図書館島の地下で静養している「紅き翼」の一員、アルビレオ・イマが姿を現した。

アスカの父、ナギ・スプリングフィールドがリーダーの「紅き翼（アラルブラ）」の一員であり、両世界において間違いなく最強クラスの存在。

「紅き翼（アラルブラ）」で生存が確認されている人間は存外に少ない。

ガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグは死亡。ナギ・スプリングフィールドは行方不明だが公的には死亡とされている。

フィリウス・ゼクトは大戦時に亡くなったと言われている。

ジャック・ラカンは生きていることは目撃情報から確かだが所在ははっきりとしない。

生存と居場所が確認されているのは関西呪術協会の長をしている近衛詠春、麻帆良に所属しているタカミチ・T・高畑の二人しかいない。メガロメセンブリアの元老院議員の一人で、オスティア総督のクルト・ゲーデルは敢えて除外しておく。

大半が死亡、もしくは行方不明という中で同じく生死不明だったアルビレオ・イマの存在。果たしてそれが意味するものとは一体。

「コレはコレは学園長ともあろうお人が下手を打ったものですね」

何時もの通り本音や本心をまるで見せない信用しにくい笑顔を浮かべたアルビレオ。

「お主の存在に気づいておったようじゃからな、関心を逸らさねばならなかった」

どうも何時もより反応が過敏というか、周囲を気にしている仕草が感じ取れた。何十年もの人生を積んで養ってきた観察眼がなければ気付けない変化だった。

本当の目的のために敢えて糾弾される覚悟を持って囮の探査魔法をアスカにかけた。最低限、実力の評価のために魔法のレベルを調節しつつだったが目論見どおり眼を逸らせることに成功した。

「……ほぅ、私に気づいていましたか」

まさか、自身の穏行を見破られていたとは思っていなかったアルビレオは胡散臭い笑みを顰めて呟いた。

彼らに近づいた高畑ですら気づかなかったアルビレオに気付いたアスカ。必ずしも能力に比例しないとはいえ、アスカの能力を上方修正する必要が出てきた。

「今までは気づかれなかったんですがね」

「なにかあったのか、それとも偶々か」

アスカは学園長より図書館島の本の閲覧の許可を得ている。偶にではあるが地下まで潜り、魔導書を読んでいる姿をアルビレオが目撃している。友人の息子であり、変わった経歴の持ち主ということでその動向を観察していた。

アスカはアルビレオが観察していたことは知らず、アルビレオもまた知られているとは思っていなかった。

いなくなった間に感知能力が伸びたのか、今回が偶々かそれははっきりしない。

だが、

「それでどうじゃった、アーティファクトを使ったのじゃろ？」

アルビレオのアーティファクトならばそれが分かる。

アルビレオのアーティファクト『イノチノシヘン』は他人の記憶や能力をコピーし、自分のモノにする事が出来る。待機状態である魔法書の状態ならば、コピーした人物の半生を読む事が出来る。だが、発動すると全ての記憶・感情・性格を再現し全て知る事が可能なのだが制限時間を超えれば魔力を失い、ただの人生録となってしまうが。好奇心の強い彼にはもってこいのアーティファクト。

学園長は思わず結果が気になり若干身を乗り出すように答えを求める。彼のことが分かれば今後についての見通しが大分立てやすくなる。

「そのご期待には、残念ながらお答えする事は出来ません」

「ど、どういうことじゃ？」

まさか断られてしまうとは想定していなかったので予想外な事態に、学園長は驚きを隠せない。理由を問われたアルビレオは首を横に振って悔しそうに顔を歪ませて理由を話す。

「私もコピーしようとしましたが妨害されて彼の書は燃やされてこの様です」

そう言ってローブから出した彼の右腕はボロボロに炭化しており、ここにいる彼が分身体でなければ切り落とすしかないほどの傷だ。

「これは……一体何があったんじゃ？」

「分かりません。彼は間違いなく私がしていることに気付いていなかった。可能性として考えられるとしたらアスカ君ではない第三者が『イノチノシヘン』に割り込んだとしか考えられません。そんなことができるわけがないというのが、正直な意見ですが」

「第三者の介入……か？」

学園長が思い浮かべた可能性として一番高いのは、昔に高畑が見たという彼の使い魔。しかし、未だにこの地では姿を見ていないし、その可能性は低い。

ならば、いなくなった間に出会った文字通りの第三者か。

見つけた時のアスカの髪の色の変化からすれば十分に在り得る考えと言えた。

「それも私が気付かないほどの、これでも手加減されたと感じましたから恐らく二度目はないでしょう」

「そうか……」

彼にもお手上げなら、こうなってしまってはもはや打つ手もなく本人が語る以外に知る術はない。騙したつもりが逆に騙されたとなっては、先行きの不安で学園長は背凭れに凭れて天井を仰ぎ、深い溜息を吐いた。

アスカは学園長室を辞して学校を出て寮に向かって歩きながら玉藻、リインフォースとさっきの事を念話で話していた。

《まさか?!　じゃあ、あの魔法は囮……》

学園長の目論みは半分成功しており、アスカは策に引っ掛かって完全に油断していた。

いくら疲労で頭が鈍っていたとはいえ、囮にあっさりと引っ掛かり気を抜いていた。自身の未熟を痛感するばかりだ。

《そうじゃろうな、恐らく主が第三者の存在に気づいていたことを悟っていたのじゃろうな》

《眼を逸らすため……ためですか》

《その通り、油断のならぬ奴じゃ。ああいう手合いはあまり相手にはしたくないの》

玉藻が気づいて、何者かの干渉を拒絶。逆にやり返していた。だが、玉藻にしてもアスカの中にいて特にやることはないので治癒に専念していたからこそ気づけた。普段なら恐らく気づかなかっただろう。

その老獪さ、伊達に組織のトップに張っていない手際、自身の汚名を省みずに結果を追求する姿勢は恐ろしく、逆に天晴れだとも言えた。

《だが、収穫はあった。隠れていた奴じゃが、向こうの接触で最低

でも学園長クラスの術者の存在が麻帆良にいることだけは確定できた》

《嫌な確定情報だよ》

収穫といっても恐ろしさを実感していたところに、更にアスカに気づかれずに干渉する手腕、技術を持つ謎の術者という嫌な情報まで入手してしまった。

《しかし、やはり手を燃やすのはやりすぎだったのでは……》

考え込んでしまったアスカとは別にリインフォースは玉藻がやり過ぎだと思っていた。

《リインフォース、お主は甘い！！　いいかよく聞け、さっきも説明したがこの世界、というより魔法使い達において主の立場は特殊じゃ。その主を利用しようとしたり、取り入ろうとする人間は山程いる。さっきの男達のようにな。そんな輩に手加減は不要じゃ。流石に主の手前、殺しはせぬが》

玉藻はアスカの事になると少々過激になる傾向がある。そこら辺は話し半分ぐらいに聞いといたほうがいいのだが、ストッパーであるアスカが思考に耽っていたため止める人間がない。

玉藻がリインフォースに次アルビレオ・イマがまたアスカにアーティファクトを使用してきたときは火達磨にしてやる、と息巻いているのを聞き流しながら電車に乗り込む。

（眠い……）

玉藻とリインフォースの念話を聞きながら、座れる席を捜すと冬休みとはいえまだ昼間なので空いていたから座ることができた。しかし、座ると未だ収まらぬ倦怠感から眠気が押し寄せてくる。

乗り過ごさないようにチラリと後ろの窓から外を眺めながら自分が新たに手に入れた力の事を考える。

異世界に飛ばされるという珍事はあれど、ミッドチルダ式やベルカ式というこの世界とは違う別系統の魔法を知り得たというのは幸運なことであった。どちらの魔法が優れているという議論はするつもりはないが、この世界の魔法とは異なる術式を知ることができたのだ。

単純にあの世界の魔法はこちらの世界のように魔力で精霊を使役するのではなく、純粋に魔力だけで魔法を使うからこちらの魔法よりは適正がありそうだった。

次元転移という世界を渡る手段を得たのも大きい。元々、なにかあったら魔法世界に行った後に死んだことにして別人に成りすまして旧世界に戻ってくるつもりだったが、何時か誰かにバレるかもというリスクがあった。だが、次元転移で世界を移動してしまえば後を追う手段のない彼らには捕まえることはできない。つまり、追われる心配もなく心置きなく普通に暮らせるというものだ。

女子寮の最寄の駅が近づいて来たので視線を窓から戻して、気を抜いたら眠りそうになる目を意識して開く。既に数時間眠ったにも関わらず、体がまだ足りないとばかりに休息を求めていた。

やがて電車が駅に到着したので降りて、改札を通って女子寮に向かって歩く。玉藻達の念話での会話をＢＧＭにしながら、歩いてい

ると敵意を感じて体が自然に動いた。

「「覚悟！」」

疲労と倦怠感から鈍った頭と体では逃げるという選択肢すら浮かばず、条件反射の域に達した防衛行動が作動した。

一息の間に、右の横合いから飛び出して来たチャイナ風のデザインの服を着た色黒の少女――――古菲が衝いてきた右の拳を左手で内側から弾く。

「フッ！」

気配を消そうが、死角から迫ろうが、今の敏感すぎるアスカの感覚から逃れることはできない。後ろから気配を消して接近している長身で目を閉じているように見える楓の姿を見ずに察知している。

古菲の攻撃を弾いた左手とほぼ同時に密着するほどの距離に踏み込む。両者が接触するほどの距離から右手を伸ばして掌（てのひら）をお腹に当て、鋭い呼気と共に震脚でアスファルトを陥没させながら勁（けい）を通した。

「ッ！」

古菲がこれほど簡単に倒されるとは考えていなかったのか、一瞬だけ楓の動きが鈍る。そのできた時間に凭（もた）れかかってきた古菲をそっと地面に座らせてすぐさま振り返る。

「忍！」

アスカが振り返る頃には楓は既に正気に戻っており、右手の指を口の前に立てて何事かを呟いた瞬間、楓の姿は増えていた。十六人に増えていて、それが【分身の術】と【影分身の術】の中間ぐらいの分身体であることを察して、防衛本能は動きの鈍いこの身だけではいずれ手数で追い込まれてしまうと即座に結論を出した。

派手な術を使えば吹き飛ばせるが冬休みの夕方とはいえ街行く人の目もあり、それは好ましくない。

同じ事をする分には問題ないと考え、手数が足りないのならば向こうと同じ条件で相手を打倒するのみ、と0コンマ数秒で対抗策を練り上げる。

「影分身の術」

使い慣れた印を一瞬で結び、ポツリと術名を呟いて楓が出した数と同数の影分身を出して迎撃する。本体は気の密度から相手の本体を即座に導き出して迎え撃つ。

「な?!」

数に対して数で対抗されるとは考えもしなかった楓の分身たちを、出来た隙に遠慮なくアスカの分身たちが一撃で吹き飛ばした。

「くっ」

分身同様に動揺した本体の楓もまた、本体であるアスカの回し蹴りをかろうじて胸の前で腕をクロスして受けるが、耐えられずに自分の分身達と一緒に吹き飛ばされる。無意識下でも、周りで唖然として観戦している人達には被害の行かないように吹き飛ばす方向も

調整してあるのは流石と言える。

本体の楓が蹴られて吹き飛ばされ、着地する前に後ろに回って後ろから首に手を掛ける。

「あ……あ～、まだやりますか、楓さん」

この時点でようやく自分の意識を取り戻したアスカは、どうするか考え、やってしまったものは仕方ないと開き直ることにした。

「……降参でござる。強いとは思っていたでござるが、まさかこれほど容易く敗北してしまうとは思わなかったでござるよ」

アスカの分身たちは既に消えており、自身が完全に死に体となっていることに気付いた楓も大人しく敗北を認めて項垂れる。回し蹴りを受けて痛む腕を摩りながら。

その後、楓に手を貸して立ち上がらせて古菲さんも既に回復しており、ちょうど立ってこちらに来た。こちらも無意識でも絶妙な手加減がされているので、ちょっと痛みがある程度である。

「一応加減はしましたけど、大丈夫ですか古菲さん？」

ぶっちゃけ敵意に反応して勝手に体が動いたとは情けなくて言えず、怪我はないかと心配をする。

「ちょっとお腹が痺れてるが大丈夫アル。しかし、強いとは思ってたアルがまさかこんなにも簡単に負けるとは思って無かったアルよ」

《今の動きは中々の動きじゃったな。合格点じゃ》

《一連の無駄の無い動きと状況判断、素晴らしいです主アスカ》

二人に褒められても素直に喜べない。無意識でも手加減して怪我をさせなかったのは良かったが、自分を制御できていないみたいで自慢はできなかった。

それはともかく、普段の一割ぐらいの戦闘力しかないアスカにあっさりと負けて落ち込んでる二人にちょっと聞きづらいが、突然襲って来た理由は何なのか。

「で、何でいきなり二人して襲ってきたんですか？」

動いたことで余計にしんどくなってきたので直球で聞くと、二人は俯いていた顔を上げて見合わせ、代表して古菲が理由を話し出した。

「楓とはさっき偶々会ったアルよ。その時に駅から出てきたアスカを見て、なんとなく今なら手合わせ出来ると思って気が早まってつい声を掛ける前に体が動いてしまったアル」

うんうんと古菲の言葉に頷く楓を見ながら、なんとなくで襲ってしまうとか呆れてしまう。それは人としてどうよ、と思ってしまうアスカは決しておかしくないと思う。

まあ、武道家としての勘で弱っていることを直感で察して今なら倒せるか、とも思ったかもしれない。

「先程のアスカ殿の見事な分身。拙者は、慢心していたのかもしれないでござる。お願いでござる！どうか、拙者を弟子にしてほしい

でござる！！　それが叶わなくともどうか少しでも指導を！！」

「ワタシもお願いするアル！！」

呆れているアスカに向かって二人は弟子にしてほしい、少しでも指導をしてほしいと腰を曲げて九十度に頭を下げてきた。

楓は言葉通り、アスカの【影分身の術】の完成度に感心していた。本体と攻撃の重さを同等にするには分身は四体までが限度。自分よりも幼いアスカが四倍の数、完全とも言える分身に見惚れた。未だ修行中の身なれど麻帆良に師はいない。そんな中で自分以上の腕の持ち主から教えを賜るなら年下だろうが拘りとはしない。しかし、術に使うのが＜チャクラ＞と＜気＞という違いもあり、そもそも術の形態そのものが違う。下手に教えて自分の良さを崩してしまっては意味がない。

古菲は麻帆良学園に来るまで本気で戦える相手がいなかったほどに強く、自分以上の強者が揃った願ってもない場所だが本当の強者と戦える機会はほとんどなかった。強さを追求する古菲にとっては強くなることは至上命題に近い。そんな中で動きの中に中国武術の息を強く感じさせ、今の自分よりも遥か高みにいる相手がいるとすれば教えを乞いたくもなる。それができずとも偶に組み手をしてくれるだけでもいい。

（どうするかな……）

二人の今までに無い真剣さにアスカも、そこまでされればちゃんと考えなければならないのでどうするか検討する。

結論からいえば、時間的、その他諸々の理由で弟子は無理にして

も別に偶に組み手や教えるぐらいなら別にいいかもしれないとは思える。元々、面倒見のいい方であるアスカはそちらに天秤が傾きかけるが、突然襲ってきた二人の言い分をすんなりと認めるのは道徳的にどうかなと思ってしまう。

「だ、駄目でござろうか？」

「駄目アルか？」

（そういえばこの二人、成績が悪くてバカレンジャーって呼ばれていたな）

見たことのない伺うような姿勢で聞いてくる楓と古菲にちょっとしたイタズラ心が沸いてくる。どちらに転んでも自分には損にならない案が浮かんだ。

「弟子は流石に無理ですけど、二年生最後のテストで学年５００位以上を取れたら偶に組み手や教えるぐらいならしましょう」

「それは殺生でござるよ」

「無理アルよ」

アスカの提案に歓喜の声を上げかけた二人は、条件を聞くと自分達の成績が６００代後半だから無理だと落ち込み始めた。

こんな条件を出すのも、文武両道という言葉もあるぐらいだから武だけではなく計画力・知性・教養・良識等の文も、今の世の中では持っていたほうがいいと考えたからだ。

本人からしたら要らぬ世話かもしれないが、そもそもこのままの成績で二人が高校に上がっても進級できるか不安なのだ。今からならきちんと勉強をすれば学期末の試験でそれぐらいは取れると思っている。

「分からないところは可能な限り聞いてくれれば教えますし、いくら麻帆良がエスカレータ式でも今の成績では高校に上がっても、今の成績では進級できるか怪しいですよ？」

「「ううー……」」

事実を言われて頭を抱えて呻き、強くなりたい、でも勉強は、と葛藤しだした。

二人は何を言っても、目の前で手を振っても反応してくれないので置いて帰る事にした。いきなり襲われて疲れているところに動かされて余計悪化させられたから根に持っているというわけでない。断じてない、決して。

《やれやれ》

《ふふ……》

二人のアスカ行動に呆れたような、微笑ましそうな念話を無視してこれ以上邪魔が入らないようにさっさと歩いた。アスカがいなくなっても二人はいつまでもそこでどうするか葛藤していた。

寮に戻る前に物陰に隠れて結界を張り、ユニゾンを解いて玉藻が【四象封印】でリインフォースを封印した。

ちなみに寮の部屋に戻ると一方的に連絡だけして電話を切り、帰らなかったのでアスカの身を心配して怒った二人に正座をさせられた。

疲れた身では二時間に渡る説教に耐え切れず、力を使い果たしてグロッキーになり、更に服がボロボロな理由を聞かれて誤魔化すのに余計に時間と力を使い、数日間寝込んだのは蛇足である。

第二十八話　帰還するも苦労は変わらない少年（後書き）

実はアースラ組みより幾つかデバイスをもらっています。で、その一個が早々に塵となって消えました。

神経が過敏になっているのは一時的です。

次回の更新は既にストックが出来ているので『月曜日の午前０時』に更新します。その後はどうするかまだ決めていませんが、もしかしたら週に二回、三回の更新になるかもしれません（あくまで予定ですが）

とはいえ、これで連続投稿は終わりです。日曜日の午前０時の投稿もありませんのであしからず。

前話の後書きで書いた『その後に間に一週間空けるか、原作が始まる前に空けるか考え中です』はナシで。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

第二十九話　　幽霊と年明けとエンジェルさんと少年（前書き）

今話はタイトル通り三本立てとなっています。

文字数は前回より少なめ、通常よりかはは多めの１４３２０字。

第二十九話　幽霊と年明けとエンジェルさんと少年

「きゃあっ」

とある少女が夕暮れに染まる町を歩いていると、突然吹いた風に長めのスカートが捲くられて悲鳴と共にスカートを抑えた。

だが、直ぐ横を中学生ぐらいの男子二人が横を通りかかったのに見向きもしない。このぐらいの年齢なら視線が移ってしまうはずなのに、だ。

「ううー……」

皆の周りに悪い子じゃないけどちょっと目立たないと言うか、存在感がないと言うか。いるのかいないのか分からない子っていないだろうか？　大体いるだろう、クラスに一人くらいそういう子って。

実は少女もそういうタイプの一人だった。なにせ……幽霊だから。仕方ないと言えばしかたないかもしれない。幽霊だから。

少女――――相坂さよは地縛霊を始めて６０余年になる。だけど、幽霊の才能が余りないらしくてイマイチ存在感がないって言うか、あんまり気付いてもらない。

あまりにも存在感がなさすぎて、どんな御払い師や霊能者にも見えない筋金入りである。

「ひっ……誰ですか！？」

それに、カタンと机が鳴るだけで驚くぐらいにとっても怖がりで夜の学校は何か出そうで怖すぎるという理由で、最近は朝まで近所のコンビニやファミレスで過ごしたりしている。幽霊なのに夜の学校が怖いとはこれ如何に。地縛霊なのに学校の近くなら出歩けるという摩訶不思議。

深夜のコンビニって何か安心しますよね、とは本人談。

幽霊としても駄目駄目だと感じている彼女は、只今彼氏ならぬ友達募集中。

本人としても相手を怖がらせるだけで、駄目だとは分かっている。性格は暗いし幽霊だし……と考えながら、いくら幽霊でも何年も話し相手がいないとちょっと寂しかったりする。

寂くて変わりのない日常に変化が出てきたのは数ヶ月前に転入してきた男子学生――――アスカ・スプリングフィールドの存在が大きい。何故かアスカと何度か見えないはずの自分と視線が合ったのような気がしたのだ。

でも、何度もアスカの目の前で挨拶や手を振っても反応してくれず、目が合ったのはただの気のせいだったのかと諦めかけていた。

そんな諦めかけていたさよが、冬休みが始まって誰もいない教室に一人寂しく佇んでいた時のこと。

「ひぇ!?」

冬休み中なのに突然ガラッとドアが開いたことに思わず悲鳴が出たさよ。ドアを開けたのはいまさっきまで考えていたアスカだった。

「あ、いたいた相坂さん。捜しましたよ」

「え、えええええ私の事見えるんですか！？」

アスカは誰かを探すように教室を一度見渡し、さよの方を見るとはっきりと名前を呼んだ。

自分の事がはっきりと見えていて、それに名前を言って捜していたと言うことはやっぱり見えていたのだと驚きを隠せない。

「初めから普通に見えてますよ」

「で、でも何で今まで見えること黙っていたんですか？」

「いえ、僕しかいない所なら反応してもいいんですけど、誰かが一緒にいる時に反応したら何もない空間に話しかけるイタイ人じゃないですか」

あ、それもそうでしたね、とアスカの言い訳に納得する。でもそれは何時も誰かと一緒にいて一人にならないアスカにも責任があるんですよ、と心の中で文句を言うのを忘れない。

「まあ、それはそれとして聞きたいことがあるんですよ。相坂さん、あなたは……生き返りたいですか？」

「え？」

後になってさよはアスカに会えた事が自身にとっての運命の分かれ道だと、そう語ったと言う。

１２月３１日、所謂日本では大晦日と呼ばれる日にアスカは木乃香に教わりながら一緒に御節料理を作っていた。

アスカという得意料理のジャンルは違えど料理上手な存在が極間近に現われたからか、最近木乃香の料理スキルは向上を見せている。中華やイタリアンの腕が抜群に上がったというのが、基本的に食べる人である明日菜の感想である。

反対にアスカもまた木乃香に和食を教えてもらうことで料理の幅を広げていた。

「は～、幸せ～」

そんな二人が作ったお節料理は大層美味しかったと幸せそうな吐息を吐いて明日菜は後に語る。

「それじゃあ、行きますか」

「はい」

「鍵、鍵っと」

お節料理を作り終えた三人は年を越す前に一緒に二年参りに出かけた。

「うわっ、人多い」

同じように二年参りに来た人でごった返した龍宮神社にやってきて、続々と合流した人達と一緒に新年を向かえた。

その後はお賽銭を投げて参拝を行ったり、みんなで御神籤を引く。

「意味深な……」

結果、アスカは良くも悪くもない吉で籤には「選択次第でこれからの人生の歩む道が変わる」と意味深なのものが書いてあった。

『明けましておめでとう御座います！！』

超達がやっていた屋台で甘酒を飲んだり、お雑煮を食べたりして初日の出まで時間を潰し、日の出時間が近くなったら都市の郊外の丘に移動して先にいた人達共に２－Ａの生徒で麻帆良に残っていた全員で初日の出を拝んだ。

何で帰省した人以外の２－Ａの生徒が全員いるのかというと、冬休み前に元気な面子がみんなで初日の出を拝まないかという提案に乗って集まったのだ。当然、集まることに渋る人もいたがこれも記念だと行きたい人たち皆が誠心誠意お願いして了承した。

ちなみにアスカは助けを求められてもあらぬ方向を見ていただけで何もしていない。

（後、一ヶ月か）

日の出を拝んで各グループに分かれて話しながら寮に戻る途中で、

アスカは一人輪から離れて今後について思いを馳せていた。

来月には兄であるネギも教育実習生として来てアスカも教師となる。なれば、生徒としてではなく教師として在らなければならないようになる。それを惜しいと感じるのはアスカが此処の生活を楽しいと感じているからなのだろう。中国にいた頃同様に心を開けているということだ。

所構わず叫びだしたくなる気持ちを深呼吸して落ち着ける。初めから決められたことだとしても此処に来て良かったと素直に思える。気持ちを抑えて考えを続ける。自分は果たして兄にどういう対応すべきだろうか、と。

家族？　六年前の時点でもなれていなかったし更に会わなかった期間の方が長いのに今更だ。

教師？　たかだか十歳にも満たない子供に果たして公私の区別をちゃんと付けられるだろうか。

他人？　担任、副担任という立場と双子という事実からそこまで割り切れない。

双子なのだから仲良くできればいいのだが現状では何もかもが中途半端、家族として接するには僕達の間には溝があり、子供の自分たちに成ったことのない教師としての対応など望むべくもない。赤の他人に成れるにはお互いの距離が近すぎて、結局何も決められない。

後一つ何かきっかけがあれば家族としても終わりそうなバランスで二人の関係は成り立って居る。

《本当にそれで良いのか？》

《いいさ。生まれや自分を辞められない以上は兄さんに罪があるわけじゃない》

ある意味で今のアスカを生み出す契機となった事件。

囚人服を着た男の襲撃。殺されかけたことで生存本能によって成された望まぬ殺人。

その事件はもしかしたら……。

《……兄君が居たから、アスカ殿が襲われたと？》

――英雄の忘れ形見。

片や災厄の王女そっくりで才能のない弟。名をアスカと言う。

片や才能溢れる、後継者となりうる、英雄の姿形を思い出させてくれる希望の星である兄。名をネギと言う。

彼らの生まれは色んな人間の陰謀を引き起こさずにいられなかった。

『英雄ナギ・スプリングフィールドの息子』ではなく、『災厄の女王アリカ・アナルキア・エンテオフュシア』であったことが問題であった者達にとっては特に。

例えば、２０年前の不毛な戦争に疲れ果てていた人々の全ての不

満と憎しみを生贄として押し付けたメガロメセンブリアの一部の人間達にとって、二人の存在は存在していてはならない害悪に等しい。

それ故の六年前の故郷への襲撃であり、動機と大量の悪魔を召喚できる組織力を有しているのは彼ら以上の適任はいない。

結果的に二人の抹殺は途中で現われたナギによって阻まれた。

だが、彼らはそこで諦めはしなかった。

ネギの双子の弟が“災厄の魔女”に瓜二つに成長すれば、世間は自ずと事実へと至る可能性が高い。今は二人のことは知られていないが、そう遠くない時期にネギも成長して活躍することだろう。それだけの才能をネギは魔法学校で示しているから少なくとも彼らはそう予測する。

きっと今と同じように将来は父に似て、その姿にナギの姿を重ね合わせて見る人は多いだろう。

その時、間違いなく双子の弟であるアスカの存在も注目される。

二十年前の真実に至らせてしまうアスカの存在がネギよりも別な意味で重要になってしまう。

そうなる前に殺してしまおうという彼らの発想は無理からぬものがあった。

しかし、以前のように大規模なことは警戒されていてできない。必然的に小規模にならざるをえず、例え犯人が捕まろうとも自分たちにまで辿り着かないようにもしなければならない。

ナギに恨みのある囚人を薬物などで洗脳し、魔法学校の近くで放した。彼らに幸運だったのは魔法学校の教師たちが優秀すぎるネギにばかり気をやってアスカの重要度を下げていたことであった。

結果的に上手く接触したものの、逆に返り討ちとなったが。

もし、もしも二人の忘れ形見が……アスカ一人だけなら、違う今があったかもしれない。でもそれはもしかしたらの話だ。

《あくまで推測だよ。何より、こうならなければ出会えない人も居たから》

状況からの推測にすぎず、こんなことにならなければ出会えない人がいたので一概に悪いとも言えない。

それでもネギの存在は、六年前の不和もあってアスカにとって悪影響を生み出すのではないかと二人は心配する。憎んでいても不思議ではないから。アスカにはネギを憎む理由と資格が十分にある。

《兄さんをどう思っているのか、俺にも判らない。会ってから考えるよ》

ほとんど六年間会話を交わしていない。兄をどう思っているのか、それはアスカ自身にも分からなかった。

それでも例えぎこちなくなったとしても学校では教師として、それ以外ではその場に合わせた対応をするしかないと一応の結論を出した。

《それでネギはいいとして、エヴァンジェリンの方はどうするのだ？　絶対に何か行動を起こすぞ、アレは》

ネギへの対応に一応の決着をつけると今後の対応を検討する。

《さて、どうするか》

エヴァジェリンはサウザントマスターによって十五年間この地に縛られている。そんな鬱屈した日々が続いていた中にその血縁者が、息子が来るのだ。アスカは先に釘を刺したが、ネギにまで適応されるかどうか。

学園側の対応も気になる。

因縁を知っている以上は獲物の前に餌を出すような真似を普通はしないが、エヴァンジェリンのことで学園側から何も聞いていない。

或いは全て承知の上で、襲撃を予測していて成長させる為に利用しようとしているとも考えられる。

そうすればどんな戦いであろうとそれはただの結末の分かった出来レースでしかない。細工することなんて簡単だ。例えばネギとエヴァンジェリンが一対一で魔法を使って戦う場合、魔法使いとして戦いでは封印状態のエヴァジェリンには勝ち目はない。

そうなった時果たして彼女はどう動くだろうか。

吸血をして魔力を増やすか？　駄目だ時間が掛かりすぎる。

手持ちでどうにかするか？　普通に魔法を使える分ネギが圧倒的

に有利で勝算は薄い。

ならば、勝つにはどうする？　例え限定的にでも封印を解ければ負けはないと考えるだろう。

彼女を縛っている登校地獄は魔力を封じるものではない。本人も気づきかけているが魔力を封じているのは学園結界だ。本気で戦うとすれば学園結界を解いて魔力を開放してからのはずだ。

大停電の時期とおおよその動き出すと予想される時期が重なるから間違いない。そして恐らくネギが危なくなれば停電を解除すればいいのだからそれは学園の、学園長の掌の上の筈だ。

《実際あのぬらりひょうんだとやりそうじゃの》

《私もそう思います。なんというかそれを感じさせる何かを持っています》

二人の言うことは尤もな事だが、確かにそれらの事はありえることかもしれないがこれはあくまで推測に推測を重ねた机上の空論でしかない。

《打てる手は打っておくべき、か》

今までの経験上、後手に回れば後々厄介なことになることが大半。その前に手を打っておくことで一応の結論を見た。

「アスカ～何やってんの、置いていくわよ！」

「は～い、今行きます」

人生は本当にままならないと思いながら、気付かず足を止めていたようで明日菜に呼ばれて走って向かう。既に関わっている人間はいるが、せめて彼女達は裏の世界なんか知らずに幸せになってほしいと願いながら。

冬休みも残り数日となり、いい加減新しい住処への催促に学園長室を訪れていたアスカは芳しくない反応に、自分で家を立てしまおうかと考えながら帰り支度を整えてそろそろ帰ろうと下駄箱に向かおうとしていた。

「あれ？　どうかしましたか、木乃香さん」

その途中で慌てた様子で職員室へと走ってきた木乃香を見かけ、声を掛けた。

「あ、うん。占い研究会でエンジェルさんをやったんやけど、どうもみんな様子がおかしくてな。先生を呼びに来てん」

返した声も、表情も、何時もどおり軟らかい。しかし、アスカには、その奥に宿る切実さを見逃しはしなかった。

なのだが――――

「エンジェルさんって何ですか？」

と、最も大切な根本的なことを知らなかったのである。締まらないことこの上ない。

エンジェルさんはコックリさんの変形、別名キューピッドさんとも呼ばれている。

コックリさんとは、西洋の「テーブル・ターニング」に起源を持つ占いの一種。机に乗せた人の手がひとりでに動く現象は心霊現象だと古くから信じられているが、科学的な見方では意識に関係なく体が動くオートマティスムの一種と見られている。

日本では通常、狐の霊を呼び出す行為（降霊術）と信じられており、そのため狐狗狸さんといわれる。机の上に「はい、いいえ、鳥居、男、女、五十音表」を記入した紙を置き、その紙の上に硬貨（主に十円硬貨）を置いて参加者全員の人差し指を添えていく。全員が力を抜いて「コックリさん、コックリさん、おいでください。」と呼びかけると硬貨が動く。

エンジェルさんは世に星の数ほどある、コックリさんの亜流の一つである。

紙に「あ」から「ん」の文字をハート型に書き、ハートの真ん中にイエスとノーを書く。１０円玉をイエスとノーの真ん中に置いてエンジェルさんを呼び出し、質問に答えてもらうというもの。

コックリさんが狐の霊を呼び出すのと違い、エンジェルさんは文字通りに天使を呼び出す――――というが、もちろん天使のような高位存在が素人の召喚に応えることなどあり得ない。やってくるものは低級な動物霊が精々である。

コックリさんにしろ、エンジェルさんにしろ可愛らしい名前がついているが、基本的に性質の悪い霊を呼ぶのが普通なので良いことに？がらない。

場合によってはドラッグなどよりもよほど危険な遊びであるというのが、木乃香から話を聞いたアスカの感想である。

何故、アスカがエンジェルさんやコックリさんを知らないか？

単純な話、前世の記憶を失い、今世で魔法学校に通うも中退に近い状況で普通の学校に通ったことがない。なので、学校特有の七不思議や都市伝説みたいなものにはかなり疎い。というかアスカの知識にはかなりの偏りがあるのだ。常識人なようで微妙にどこかずれているのがアスカである。

エンジェルさんのことは知らなくても、話から知っている『悪魔憑き』と重ね合わせてどういうモノか推測できたアスカからしてみれば何をやっているのかという想いしか抱けないが、思春期の少女がオカルトに興味を持つことは珍しくないようだ。

「ここですか？」

木乃香に先導されて現場である占い研究部の部室に辿り着くと、アスカは迷わずドアを開ける。念のため彼女に学園長にことのあらましを伝えるように頼み、この場所から遠ざけるのを忘れない。

そして、それと対面した。

麻帆良学園女子中等部の制服を着た、おそらくは体型から一年生

であろう女子や二年生、三年生――――の姿を借りた、モノたちが三人。机の上に乗って、侵入者であるアスカたちを見下ろしていたり、地面から見上げている。人の形をしていながら、四つん這いの姿勢が驚くほど様（さま）になっているのは動物霊が憑いたからだろう。

「ああ、こういうことか」

あまりに典型的な事例を目の当たりにして、アスカは思わず嘆息した。だが、典型的なだけあって、憑いている霊も底辺に近い雑魚らしい。

旅をしている時にアメリカで遭遇した『死霊使い（ゴースト・テイマー）事件』に比べれば簡単なものだ。

＜死霊使い（ゴースト・テイマー）＞――――死霊魔術（ネクロマンサー）でありながら呪殺はせず、適当な人間に死霊を憑かせてそれを操り、標的を物理的に殺害するという手法を得手とする、単なる呪術師とも暗殺者とも違う、差し詰め呪的暗殺者とも言える。

その名を世界に轟かせた事件が、アスカがアメリカにいた時に起こった。

とある有名企業のトップを暗殺するために、仕事を奪われて会社が破綻した人間が死霊使い（ゴースト・テイマー）に依頼したことが始まりだ。

依頼された死霊使い（ゴースト・テイマー）は、死霊を憑かせた多くの人間に爆弾を持たせて日本の神風特攻が如く、標的に特攻させたるという周りを巻き込んだ手段を取ったことが地獄の始まりである。

死霊魔術（ネクロマンサー）に限らず、術の同時制御はその数が増えるほどに難易度

が跳ね上がっていく。死霊の制御ならば、同時に十体も操れれば死霊魔術（ネクロマンサー）として一流と言えるだろう。つまり、件の死霊使い（ゴースト・テイマー）は間違いなく超一流と呼べる。

ここで問題なのは企業のトップは運良く難を逃れた代わりに、家族を失くしてしまったことだ。事件に巻き込まれた死傷者は優に百人を越え、企業のトップは激怒。裏を知っていたこともあってモグリの術者を複数雇い、報復行動に出たことで両者の争いは泥沼化の様相を見せていた。

まるで無関係な人間が、いきなり暗殺者に変貌するという意外性と、無限とさえ言える物量が死霊使い（ゴースト・テイマー）の強みだ。

大都市ならば、死霊にもそれを憑かせる人間にも事欠かない。憑かれた人間が殺されてしまっても何の問題も無いのだ。死者は新たな死霊となって死霊使い（ゴースト・テイマー）に囚われ、また別の人間に取り憑いて標的を襲うのだから。

その無限連鎖を阻むには、全ての死霊を一気に祓うしかない――――それができるならば、だが。

偶々、争いに巻き込まれたアスカは争いの沈静化――――マフィアのボスは犯人が捕まえるまで引く気はなく、件の原因である死霊使い（ゴースト・テイマー）の調査を開始したが、平行して憑かれた人間の救出もしなければならなかったので、玉藻の協力や影分身を使っても人手が圧倒的に足りなかった。

その時には争いはアメリカ全土に広がっており、捜索、救助範囲が広大だったのと、尚且つ余程、死霊使い（ゴースト・テイマー）は用心深いのか拠点を転々としており、居場所を中々、突き止められなかった。現地の魔法

組織、魔法学校も手を出しているが後手に回ってしまっている。

依頼者を見つけたときには既に被害の広がりに慙愧の念を持ち、自殺していた。依頼者も自分が雇った死霊使い（ゴースト・テイマー）の本質が最悪の愉快犯であることに気付き、依頼を中止するように迫るも、ただ自分が楽しみたいがために周りを巻き込んだことを知り、良心の呵責に苛まれてのことだった。

依頼者が自殺したことで捜査は完全に振り出しに戻った。

この鼬（いたち）ごっこを解決したのは一つの出会い。同じように事件に巻き込まれた人を助けたら、ＭＩＴに通う日本人の兄妹と三体（？）の人間に良く似たＡ・Ｉプログラムで、事件のあらましを教えたらネットワークを使って死霊使い（ゴースト・テイマー）を瞬く間に発見した。

ネット社会と言われる昨今では、ネットワークの網から逃げるのは容易ではない。店や通りの監視カメラなど、網はそこら中に張り巡らされている。逃れるにはネットのない田舎に行くしかない。

アスカはその能力に驚く暇も無く、犯人が逃げ出す前に即、現場に向かって捕縛し、二度と術を使えないようにしてからマフィアのボスに突き出した。

依頼者が既に故人であること、渦中の人間が捕まったことで事件は徐々に収束。死霊使い（ゴースト・テイマー）がその後、どうなったかはアスカは知らない。死んだかもしれないし、拷問やらなんやら受けているかもしれないが相応の報いを受けたことだろう。

アスカは事件が完全に収束するまで、出会った日本人の兄妹の家に居候させてもらい、別れるその時までどうせならと勉強を見ても

らった。普通の学校に通ったことがないので独学に近かったのでこれには助かった。特に理数系においては大学クラスまで到達している自信がある。今でも付き合いがあり、ネット通信などで連絡を取り合っている。今もデバイス作りやリインフォースの修復に協力してもらっており、本当に足を向けて寝られない恩人達だ。

数百人規模が憑かれた『死霊使い（ゴースト・テイマー）事件』と比べれば、目の前の状況は数が圧倒的に少ないのだ。

しかし、アスカ流の退魔術は精密な制御が必要なので滅茶苦茶神経を使う。複数の相手を纏めてしていたら、怪我させてしまうかもしれない。アメリカにいた時よりも腕は上げたつもりでも進んでやりたいことではない。

「先に謝っておきます。ごめんなさい」

謝りながら、真ん中の女子生徒に疾風のような勢いで突っ込み、鳩尾に突進の勢いを乗せた掌底を叩き込んだ。会心の一撃。手応えで衝撃が胃を突き抜けて、背中まで徹ったことが分かる。

残る二人が、左右から挟みこむようにアスカに迫った。アスカは迷わずに右に踏み込んで大振りの動きを躱し、伸ばされた腕を取って一本背負い。

女生徒は悪魔憑きとはいえ、素人なので受身も取れず背中から落下した。勿論、後に引かないように手加減はしているといっても、このダメージでは直ぐには動けない。

背中を向けたアスカに、最後の一人が襲いかかる。アスカは振り向きもせず、後ろ向きのままで女生徒に向かって跳躍した。

接触する寸前に地に足をつき、身体を九十度捻りつつ肘を突き出す。後足の蹴り出しで最後の加速を加え、運動エネルギーを右肘に集中させて鳩尾を突き上げた。

強烈な反動。ほとんど必殺の手応えだった。撃たれた女生徒の身体は十センチほど浮き上がり、糸の切れた人形のように崩れ落ちる。

「さて、と」

怪我をしないように、後に引かないように手加減はしてあるので女生徒たちの怪我の心配はあまりしていない。

それよりも本命が動き出したのを確信して、準備を始める。

倒れている女生徒の身体に、半透明の何かが起き上がっている。女生徒たちに憑依していた雑霊たちが身体を突き抜ける衝撃を受けて、危険を感じて逃げ出そうとしていた。

占い研究部は普段から人が少ないのか、憑かれた女子生徒たち以外に部室には他に人気はない。なんでもほとんどが幽霊部員らしい。ならば遠慮は無用とばかりに祓おうとして、今更ながらある事に気付いた。

（はて、エンジェルさんは木乃香さんもやったはずなのに何で影響がないんだろう？）

と、何故他の生徒には霊が憑いて木乃香だけ影響がないのか疑問に思ってしまった。それが致命的な隙になると気付いたのは次の瞬間のことである。アスカが体制を立て直すよりも早く、浮かび上が

っていた霊たちは女子生徒たちの身体に戻って、まさに獣そのままの動きで飛び掛ってきた。

アスカ――――――にではなく、何故か学園長室に向かったはずなのにドアを開け、覗き込むように教室を窺っていた木乃香に。

「きゃあ！」

防ぐ暇も木乃香に注意を促す暇もなかった。部室を覗き込んでいた木乃香は、アスカが止める間もなくひとたまりもなく少女達に押し倒される。そして――――。

「は？」

生徒たちは予想に反して木乃香に噛みつきも引っかきもしなかった。逆に木乃香の身体の上であらゆる動きを止め、次の瞬間、糸の切れた人形のように崩れ落ちる。

「――――うわぁ」

心底嫌そうな顔で、アスカは呻いた。肉眼では見えないものが、アスカにははっきりと見えていたのだ。即ち――――少女達に憑いていた霊が、木乃香に乗り移った光景が。

直後、教室を満たしていた妖気ともいうべきものが爆発的に密度を跳ね上げた。ついていた蛍光灯の光が急速に明度を落とし、明滅して――――消えた。

教室が闇に落ちていく。照明が消えただけでは到底足りない。粘るような質感を持った暗闇。その根源が『何』かは、もはや言うま

でもない。

意識を無くして覆いかぶさる少女たちを乱暴に押し退け、木乃香はゆっくりと顔を上げた。金色に光る縦に裂けた瞳孔が、射抜くようにアスカを睨む。

「――――ああ、アスカ君」

起き抜けを思わせるとろんとした口調で、木乃香はアスカの名を呼んだ。俯いていた顔が徐々に上がっていき、表情が露になる。

笑っていた。

微かにほころんだ口元。上気した頬。黒目の瞳は甘く潤んで揺れている。

あたかもそれは、宗教的な法悦。もしくはある種の薬物を服用することによる多幸感に浸っているようで――――。

「アスカ君。うちな、なんや知らんけど無茶苦茶気持ちええんや」

「……最悪」

アスカには、それだけの言葉で木乃香に何があったのか理解できた。故に片手で顔を覆って吐き出した言葉には強い諦観の念が込められていた。

木乃香は今、明らかにまともではない。こうなっては、尋ねたところで理解できる答えが返ってくるとは思えなかった。向こう側の世界に旅立ってしまった人間と、悠長にコミュニケーションを試み

ている場合でもない。

木乃香から注意を逸らさぬまま、周囲に視線を巡らせる。できる限り速やかに、かつ穏便に片をつけなければならない。

「大人しく捕まる気はないですか？」

無駄を承知で聞いてみた。幸せそうな笑みもそのままに、木乃香は答える。

「そんな気はないで。こんな力があるんやから、使わな勿体無いで」

ある意味では正論で、だけど迷惑な意思を放つ木乃香は、満面に広がる恍惚を宿す至福の表情――――仏像のそれを思わせる、透徹しすぎたアルカイックスマイルを見れば、力に溺れているのが良く分かる。

放たれる力の余波は、常人ならば一秒さえも生き延びることさえ叶わない圧力を生み出しているが、アスカは当然のように立っている。

《なんというか、いい具合に飛んでおるな》

《……そうですね》

魔力酔い、いや、この場合は力酔いとでもいうのだろうか。なまじ膨大な魔力があるが故に、その奔流のごとき力に抗しきれず、理性が押し流されてしまっているのだ。

今のアスカに出来るのは、現状維持が精一杯。少しでもアスカが

咄嗟に張った結界の＜力＞を抜けば、木乃香から溢れだしている＜魔力＞というか＜妖気＞というか――――――どちらでもいいが――は外部に影響を及ぼして、最悪の場合は辺りを巻き込んで爆発することもあり得る。

《正直に言えば屈辱だよ》

《まあ、の。仕方ないと言えば仕方ないが……才能というものは》

《こればかりは生まれで決まりますから》

何年も鍛えてきたアスカには、目覚めたばかりの木乃香を力押しで抑え切れないなどということは屈辱以外の何物でもない。幾ら相手が悪霊に取り付かれた極東最大の魔力保持者だとしても、素人に全力を尽くさなければならない事態が来るとは露とも思ってはいなかった。

今の木乃香は正気を失い、後先は全く考えていない。己が身を顧みることもなく、まさに捨て身で力を振るっているのだ。いや、捨て身という概念もない。ただ本能のままに暴れるだけの存在になってしまった。

「さて、どうするか」

こうなった理由に大凡の推測が立っているので動揺はない。

一緒にやっていた少女達には霊が憑いたのに、木乃香に憑かなかったのはその極大な魔力の恩恵があったからだろう。そもそも木乃香の魔力に惹かれて霊たちがやってきた可能性は高いが、鍛えられ

ていないといっても莫大な魔力は、漏れ出した分だけで天然の障壁となる。それがエンジェルさんをやって霊が憑かなかった原因で、直接接触で障壁をすり抜けて乗り移ったというわけだ。

妖気が強大になったのも木乃香の魔力故、驚く要素は少ない。

憑依された人間は代わったが、アスカの成すべきことに変わりはない。というか目撃者がいなくなるので終わった後で誤魔化せば好都合と言ってもいい。

だが、いま二人の力関係は完全に拮抗している。

極東最大の魔力の持ち主とはいえ、その使い方すらも知らぬ少女では悪霊が乗り移ろうとも完全な制御など出来るはずもない。つまり垂れ流しの状態に近いのだが、例えるなら後先考えずのフルパワーでタンクから蛇口を捻った感じが分かりやすいかと思う。

当然、どんな大きなタンクでも上限がある。後先考えずに蛇口を全開に捻れば、勢いは凄くても出る時間は必然的に短くなるものである。どれだけ莫大な魔力であろうとも有限である以上は何時(いつ)か必ず尽きる。

しかし、完全に制御できていないとはいえ常にフルパワーの状態にあるということは、抑えるほうにもかなりの力を必要とすることになる。

アスカは木乃香の＜力＞が外部に働かないように結界に気を張らなければならず、ただでさえ神経を使うアスカ流退魔術（ようは自分で編み出した自己流）が使えない。

（どうする？　このままではジリ貧。木乃香さんの命も危ない）

解決策を模索する間も、外に漏れないように張った結界を軋ませ、外圧に耐えかねて蛍光灯が割れる。

こうしている間にも取り憑いた霊は木乃香に負担をかけ続けている。霊もアスカに対抗するために少しでも制御しようと動かず集中しているお陰で、余計にこの均衡を崩すわけにはいかない。結界を突破されればどんな被害が出るか分かったものではない。

アスカの額から流れた汗が顎を伝い、地面へと落ちた。

（ん？　これは……）

その時、何かを感じたのかアスカは意識を一瞬目の前の木乃香から外し、戻した時には決心を宿した意思が感じ取れた。

「――――――――」

深く息を吸って、吐く。一行程（ストローク）の深呼吸で全身の力を活性化させ、両腕に意識する。

ぐにゃり、と生まれた光で手首の輪郭が歪んだ。アスカの手首を包む薄い光が、光の進路を掻き乱す。暗い部屋に、まるで太陽が生まれたような光が生まれた。

気の緻密な制御によって成されたそれに、木乃香（に取り憑いた雑魚霊の集合体）は怯えたように一歩下がる。

しかし、怯えたことが許せないように、木乃香は取り憑かれた影

響で腐ったような澱んだ瞳でアスカを見つめ、邪魔者を排除せんと逆に緩んだ攻勢を決しようと＜魔力＞が跳ね上がった。

マルチタスクで平行して行おうと拮抗したバランスが崩れるのは仕方なく、手に光を纏ったまま圧されて重圧に押し負けて二歩、三歩と下がる。

残った気勢で張り合うアスカだが、現状では不利。もう少しで吹き飛ばされるという時に待望の待ち人が来(きた)る。

（来た！）

「お嬢様！！」

その手に持つ夕凪を使って力尽くで結界を破って現われたのは木乃香の護衛である刹那。

どこかで監視していたのか、結界を察知したのか、それとも幼馴染か護衛としての直感で危機を察したのか分からないが、危機を感じてやってきたらしい。

理由はともかく、突然の刹那の登場に動揺したのは木乃香の中にいる霊。刹那の存在は木乃香の心を揺らす。そして憑依している霊は、どうしても木乃香の影響を受けてしまう。

アスカはその隙を見逃しはしない。動揺して弱まった波動を突っ切って踏み込む。

「はぁっ！」

霊に操られて肉体のリミッターを外された人間に、生半可な格闘技などは何の役にも立たない。だが、アスカからしてみれば力は強くても動きがまるでなってなく、隙だらけでがら空きの木乃香の胴体に容易く渾身の両の掌――――――【双掌打】を叩き込んだ。

掌を通じて、光輝が木乃香の身体に注ぎ込まれる。全身を光り輝かせながら、木乃香は電撃でも浴びたように身を仰け反らせた。

（ぎいいいいいいいいいいいいいいっ！！）

空気を震わせることなく、脳裏にだけ聞こえる悲鳴を上げて、雑霊を抵抗も許さずに消滅していく。

「――――――ふぅ」

雑霊を完全に消滅させたことを確認して、倒れこんだ木乃香を抱きとめる刹那を傍目に軽く息をついた。

憑依された人間を傷つけず、憑依した霊だけを倒す。今のアスカには中々に難しいことだ。ヨーロッパならエクソシスト、日本なら陰陽師や京都神鳴流が本骨頂だろう。

アメリカにいた時のアスカは、肉体に衝撃を与えて霊が逃げ出すまでぶん殴り続けるという策に出たのだ。当然ながら、やたらと面倒な作業である。魔法にも対霊のものがあるが、当時のアスカは習得していなかった。死霊使い（ゴースト・テイマー）事件の時は魔力による力任せだったので、大概の人に大なり小なり怪我をさせていた。退魔に関しては気の方が優れている、というのがアスカの推測であり、今回使ったのもそれが理由である。

先程の少女たちのようにショックを与えて、霊を追い出すやりかたは木乃香には通用しない。木乃香の力を利用していることでショック程度では離れないのだ。

なので、もっと先の次元に踏み込まなければならなかった。昇華させて捉えられた器には怪我をさせないようにはしているものの、かなりの集中を要するのであまり多用したくないというのがアスカの本音ではある。

アスカは自身が成したことが神鳴流の奥義であり、魔を祓う神鳴流の真骨頂ともいえる技で宗家青山家縁の者にしか伝承されていない【斬魔剣　弐の太刀】と全く同じ効果を及ぼしていることに気づいていない。

憑かれた人間には影響を及ぼさず、その背後にいる霊を滅ぼすことを主眼としたために辿り着いたことで、まさかそんなことに成っているとは気づかなかったのだ。

「……ぅ……うん、あれ、せっちゃん？」

「ご無事ですか？　お嬢様」

力を使い果たして疲れているのだろう、どこか力のない目を開けた木乃香は自分を抱き上げる刹那の名を呼ぶ。木乃香が無事なことに安心した刹那も何時もより柔らかい口調で語りかける。

事件を解決した立役者であるアスカだが、今は邪魔者であることを感じ取り、疲れて重い体を引き摺りながら哀愁を背負って教室を出て行った。

後日、２－Ａの教室にて。

「ほら、せっちゃん。テレんでええから」

「あ、その……お嬢様……なんというか」

「もう、昔みたくこのちゃんって、呼んでくれへんの？」

「いや、その……それはですね……」

そんな砂糖を吐きたくなるような甘い空気を振りまきながら、そんなやりとりをする木乃香と刹那の姿が見られた。

刹那の方は若干恥ずかしそうにしていたが、どうも自分が傍にいられなかったから起こった考え、出来る限り傍にいるようになったようだ。ただ恥ずかしさからか、呼び方などにぎこちなさが出てしまう。もっとも、それも微笑ましいものなので、事情を知るアスカは思わず笑みを浮かべてしまうが。

しかし、霊に憑かれた影響とはいえ木乃香の魔力は解放されてしまった。一度解放された資質は戻りはしない。

（いや、止めよう）

浮かんできた悪い考えを意識の奥底に封印し、微笑ましい光景を眺めていた。

第二十九話　幽霊と年明けとエンジェルさんと少年（後書き）

幽霊＝相坂さよ編

年明け＝ネギをどう思っているか、アスカが襲われた件の推測

エンジェルさん＝木乃香＋刹那編

と、なります。

ネタバレと解説を少し

まず、相坂さよですが改定前と違った結末を迎えることになります。救いがあるかどうかは分かりませんが。

アスカが襲われた件については、あながち間違いではないと思います。原作でもアリカの子供だからというだけで襲われたのに、似ている子供がいればありえるんじゃないかという思いから生まれました。

エンジェルさん事件は木乃香クラスの魔力ならやったら成功するんじゃね？という気がします。幽霊と悪魔が実際にいるわけですし。

木乃香の資質の解放は後々のフラグとなります。

それと原作者の『Ａ・Ｉが止まらない！』とのクロスもしており、アメリカにいた頃に主人公が世話になっています。アスカの言う当てというのは彼らのことです。

次回の更新は『水曜日』の午前０時に予定しています。その後はどうするかまだ決めていません。日曜日になるのか、間を取って金曜日に更新するか、次回までに決めておきます。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

参考書籍：風の聖痕

第三十話　　戦力評価とお風呂と少年（前書き）

今回も二本立て。

原作前に色々としている主人公です。

文字数は１４８９８字となります。

第三十話　戦力評価とお風呂と少年

一月中旬の休日、特に用事もなかったので朝から別荘に入り、修業を行っていた。

まず別荘に入る前に幾つもの分身を出して、一体はカモフラージュのために別荘に入らず、パソコンで授業用のプリントの作成。

別荘内にある専門の研究室で石化やデバイス技術の研究と開発。

他にもリインフォースの提案で普段から魔力総量を上げる為に魔力に負荷をかけて日常での一挙手一投足に魔力を消費するという、言わば「魔導師養成ギブス」をつけての定番の修行など。

現状でも異常な魔力量があるが、年齢的に伸び代は十分にあるということで一日を終えて寝て回復してこれを繰り返す事で魔力を増大させて全体の底上げをする、ということをしている。これで一気にパワーアップとは行かないが、長い目で見れば更に魔力量が上がるのは決して悪いことではない。同じように気やチャクラでもやっているが最初はちょっとつらかったが数日もすれば慣れてきた。適応能力の高さにリインフォースは呆れてたが。

当然、他にもリインフォースからミッドチルダ式やベルカ式の魔法を学んでいる。

この二種の魔法の基礎の基礎であるマルチタスクという技術を教えてもらった。

マルチタスクとは2つ以上のことを同時に思考・進行させる戦闘

魔導師には必須のスキルで、高速移動・回避をしながらの攻撃、防御をしつつ次の魔法の発動と、ようは右手と左手を同時に動かしてそれぞれ別の動きをするのと同じことだ。ようは、玉藻と念話しながら何かしらの行動をとるというマルチタスクではないが、既に似たようなことはやっていたのでそれを意識して日常生活と平行する形で訓練をしたらすんなりと使うことができた。

元々、人は何かをしながら別のことを考えるといったマルチタスクに似たことが出来る。それを恣意的に、意識的にすれば習得することは別段難しくはない。個人によって苦労の差はあれども。

そして今はマルチタスクを使用して玉藻との戦闘を始めたばかりである。

最初の攻撃はアスカの目にすら捉えられなかった。気がついたときには、アスカは玉藻の肘打ちを鳩尾に食らっていた。玉藻はそのまま肘を突き出した左腕を伸ばすと、固めた拳をアスカの胴に打ち付けて、さらに体重を預けるように地面に叩きつける。

アスカもただやられるばかりではなく、硬気功で防御して歯を食いしばりながら印を結び、精神を集中した。とたん、四体のアスカが玉藻を囲むように出現した。

「影分身か」

アスカたちは、手にしたクナイを逆手に持ち替えると、いっせいに玉藻の頭上から襲い掛かった。その姿は、たちまちアスカたちの向こうに見えなくなる。

その隙をついて、アスカはなんとか身体を引き起こし、敵の下か

ら身を離す。

四方八方から襲いかかるアスカの分身たちの手にはクナイが握られており、まずは前方から二体が下から滑り込むような動きで玉藻に接近する。

玉藻は焦ることなく、潜り込んで来た二体のアスカの頭を軽くトンと押して着物の裾を捲り上げながら飛び上がることによってかわした。

「「ここだ！！」」

頭を押された二体はバランスを崩して膝をついたものの、残りの二体が前方宙上がりをした玉藻の両横から挟み込むように着地する隙を狙って迫る。

天地が戻った玉藻は着地体勢に入りながらも冷静に周囲の状況を図り、未だ空中にいながら体操選手のように身を回転させて、足を広げて両足でそれぞれを蹴り付けた。

「「ぐわっ！！」」

ここでようやく着地するも、流石に体勢が崩れてしまい、直ぐには立ち上がれない。

「「はァ！」」

そこに先程踏み台にされた二体が背後からクナイを突き出して迫る。

しかし、それすらも後ろに眼があるかのように反応し、後ろでに手を伸ばして掴み取ってしまう。更に頭を下げ、肘を揭(か)ち上げることで分身の顎を跳ね上げる。

「「くっ！」」

そして顔が天を仰いだところに振り返り、「はっ！」という気合の入った声と共に振るわれた掌底に、大きく弾き飛ばされていた。飛び散った分身は次々と消滅し、たった一人残った本体のアスカは、時間稼ぎによって出来た時間の間に飛び退きながら次の手を打つ。

服の隠しポケットからクナイを一本引っ張り出す。

それを投げ放つよりも先に、真正面から飛んで来る物があった。拳を固めて、それを払いのける。横に弾いたそれを片目だけの視線で追うと、先程分身の一体が持っていたはずのクナイだった。

跳ね除けた服の腕の部分が、薄く切り裂かれる。クナイは偶然弾き飛ばされたものではなく、投げつけられたものに疑いなかった――裂傷の痛みに舌打ちしながら、クナイを改めて構え直す。

構え直したアスカを一瞥しながら、玉藻が一歩を踏み出そうとした瞬間に何時の間にしていたのか空中からアスカの分身が飛来し、その手には空気を切り裂きながら螺旋丸が渦巻いていた。

「っふ」

「グッ！」

しかし、玉藻は焦ることなく分身を左足で超高速の上段回し蹴り

を放って消滅させる。

分身を攻撃する隙を狙って【千鳥】を発動していた本体は、その上段蹴りを見て玉藻が何をしようとしているのか察して攻撃距離から離れようとするが、既に回避空間を限定されており、玉藻は上段蹴りの回転力を活かしたまま右足で下段回し蹴りを放つ。

「ガッ！」

玉藻の【木ノ葉旋風】で吹き飛ばされつつ、体勢を整えながらマルチタスクを最大限に活用して次の一手を模索する。

空中にいる自身追ってくる玉藻目掛けて、手に溜めていた【千鳥】を針状に形態変化させ、無数の鳥が鳴き交わすかのように、チチチチ、バチチ、と乾いた甲高い音が響き渡り、広範囲に飛び立つ千の鳥の如し針の群れを多数放出した。

玉藻といえど、雷属性の極みであるスピードに特化させた【千鳥千本】には足を止め、避けるには広範囲に渡って放たれたため迎撃せざるを得なかった。

足を止めた玉藻に向けてアスカは即座に次の攻撃を行う。

更に右手で【千鳥千本】を放ちつつ、左の掌を玉藻に向かって突き出した。刃に形に変形した【千鳥】が手から現われ、玉藻に向かって雷遁の剣が伸びる。

玉藻は余裕を持ってこれをかわす。が、それを見越してアスカが【千鳥鋭槍】を放っている左手をバッと開くと、

「っく！？」

次の瞬間にはかわしたはずの雷遁の剣が自分に向かって枝分かれして無数に伸びてきていた。

流石にこれには驚き、クナイを取り出して雷遁を流して防ぐ。【千鳥鋭槍】も雷遁である以上は普通に防げば痺れることは間違いない。

危ういところまで追い込みながらも、玉藻に傷を負わせることができない。それでも警戒しているのか一定距離には近づいてはこなかった。

「影分身の術」

雷の針と剣を避け続ける玉藻をマルチタスクで頭の中の一部に残しながら、出来た間隙に影分身を生み出す。

「任せた」

「任された！」

先程までの役割を分身に任せ、本体のアスカは別の作業を行う。

右手で【螺旋丸】を作り、そこに左手で風の性質変化を加えて【風遁・螺旋手裏剣】を作り出す。

「むっ」

慣れてきたのか、余裕で分身の攻撃を避けながらでもこちらを見

ていた玉藻はそれに驚いた顔を見せる。そこを隙と見た分身が玉藻目掛けて突っ込む。

目先の危機を無視できなかった玉藻は分身へと意識を向ける。勿論、本体からも意識を外さずにだ。

「何っ！」

何をしようとも対応する、そう受け取れる姿勢で待ち受けたが分身は玉藻の予想を超えた行動を取った。

なにか術をするわけでもなく、ただの特攻。術だと思って待ち構えていた玉藻は少し驚いたが、対応できないものではない。迎撃する。

「むっ」

しかし、拳で打ち据えようとして分身のアスカの口元に浮かぶ笑みを見て直感が避けろと叫ぶ。

玉藻の直感は正しかった。

――――――ボン！！！！

影分身がその身に蓄えられていたチャクラを爆発させたのだ。【分身大爆破】の威力は凄まじく、半径数メートルを爆炎が巻き上げた。

辛うじて回避に成功した玉藻だが、如何せん崩れた体勢はどうしようもない。

「風遁・螺旋手裏剣！！」

そしてそれを見逃す本体のアスカではない。

放たれた【風遁・螺旋手裏剣】は受けることも、避けることも叶わぬ玉藻の体を真っ二つにせんとばかりに迫った。

だが、もう少しで当たろうかというところで。

――――――ホピュー

投げた【風遁・螺旋手裏剣】が風船から空気が抜けるような音と共に風が消え、次いで螺旋丸本体も小さくなり消えた。

「は？」

必殺の【風遁・螺旋手裏剣】が露となって消え、戦闘中にも関わらずアスカの口から気の抜けるような声が出た。

【螺旋丸】とは”形態変化”を最高レベルにまで高めた状態を作り上げたものである。チャクラを超スピードで乱回転させて圧縮する術だから”性質変化”は必要としない。そもそも【螺旋丸】を作るのにもかなり集中力を要する。その上に”性質変化”を加えるのは至難の技である。

本来なら影分身で性質変化を付加する係りを作ってしか不可能なところを、マルチタスクを使って右手で螺旋丸、左手で性質変化を行ったが不完全だったのだ。

【螺旋手裏剣】と言いながらゼロ距離で相手にぶつけないと発動しない。まだ発動時間が、もって数秒と短すぎるのだ。

つまり、失敗した。

「隙だらけだぞ、主」

そんな隙だらけの状況を玉藻が放っておくはずがなく、体勢を整えてアスカに真後ろに現れ、地面に叩き落した。

「つううぅぅぅ」

アスカも頭から落ちるのを回避して何とか足から降りるがその衝撃で地面が陥没し、着地した衝撃が足先から脳天まで突き抜けて痛みで涙目になりながら集中できずに直ぐに動けない。

回復したときには玉藻は既に着地しており先程のように距離を取るのは難しいと判断して、止む無くマルチタスクを駆使して中距離戦から接近戦を選択する。

アスカに一定の距離まで近づくと玉藻は走りながら印を結ぶ。何らかの術を使うようだ。

【火遁・鳳仙火の術】

印を結び終わり、発動された術は触れると弾けるホウセンカの実のように藻の口から吐き出された炎が四方八方に乱れ飛び、アスカに襲い掛かってきた。

印を結んだ段階で術を悟ったアスカも同じ術で同数の炎を吐き出

し、迎撃する。

互いの炎は着弾して爆発する。

玉藻から目を離してなどいなかったが爆発に意識を僅かに逸らした所為で、気付いたときには自身の右側から迫られていた。

「チィ！」

玉藻の下げている右手にチャクラが渦を巻いて集まってきているのを感じて、それが螺旋丸の前兆だと分かり、行動が遅れた自身では相殺することはできないと即時に判断した。

「パンツァーシルト！」

想定していた幾つかの防御手段をマルチタスクを使って計算して、ならばと覚えたての防御魔法を発動する。

瞬時に三角形の魔法陣の盾を掌の先に作り出して角度を調節し、体を起こしながら突き出された玉藻の螺旋丸を、翳（かざ）した【パンツァーシルト】で異音を出して削りながら左側に逸らす。

「ほぅ」

感心した声を聞きながら右手で出した【パンツァーシルト】の直ぐ後に左手で用意した玉藻と同じ【螺旋丸】を玉藻の空いた左脇腹に叩き込む。が、それは果たされること無く玉藻は乱れた姿勢のまま左手で【螺旋丸】を生み出して、こちらの【螺旋丸】に合わせられた。

「なっ」

まさかここで【螺旋丸】を合わせられるとは考えていなかったためアスカの口から驚きの声が出る。

合わせられた【螺旋丸】同士が反発してお互いの体が弾き飛ばされて二人の間に5メートルの距離が生まれる。

だが、距離が生まれて同じ条件でも先程の驚きの所為で反応が遅れてこちらは片足が完全に浮いて姿勢を崩していて反対に向こうは万全に近い状態で何時でも動ける状態だ。このままでは不利と考え、自身の姿勢を整える前に体内のチャクラを練りこみ印を結んで発動する。

【火遁・豪火球の術】

体内で練ったチャクラを炎に変換させ、前方の玉藻に向けて巨大な球体の火を口から吐き出すと同時にマルチタスクを使い、ホルスターから手裏剣を抜き放って投げながら印を結ぶ。

一つから二つ、二つから四つ、と倍々方式で瞬く間に手裏剣は増殖し、終には千もの数にまで及ぶ。一つの手裏剣から千もの影分身を生み出し、敵を襲う、忍具と忍術の連携術。通常の影分身と比べて物質の影分身はより高度と言える。仕込み技のように事前の準備を必要とせず、かつ幻ではなく実体を生む影分身なので、飛び交う全ての影刃が等しく殺傷力を持つ。

全てが実在であるため回避は至難、まさに刃の絶対包囲陣。

正面からは火の塊が、上と左右から手裏剣が玉藻を囲うように覆

いつくして逃げ場などない。

「土遁・土流壁!!」

チャクラを大量の土へと変換し、吐き出すことで瞬時に隆起。玉藻の眼前に堅固なる土の壁が築かれ、迫り来る火の塊や手裏剣の雨から身を守る。障壁自体にもチャクラが張り巡らされており、単なる土壁とは比較にならない強度を誇る。

土の特性上、土壁は火や水に対して高い性能を発揮するので【火遁・豪火球の術】を完全にシャットダウンし、手裏剣の進行を阻む。

「それっ!」

――――――ドガン!

未だ攻撃は止まずとも攻勢が衰えたことを察して、自分で作った土壁を破壊して、吹っ飛ぶ瓦礫を壁にして薄まった弾幕の中を軽々と掻い潜って来た。

「ぐあぁぁ」

低くした姿勢のまま、アスカが崩れた体勢をようやく立て直せたところに右手を地面に付いて左足で顎を跳ね上げられた。

「甘い! この程度で油断するでないわ!!」

防御の暇なく跳ね上げられた顎は体を空中に飛ばされた。

その蹴りの威力に一瞬だけ意識が飛ぶがそれも直ぐに戻り、状況

を利用して浮遊術で空に上がろうとするもその時には既に玉藻は【影舞葉】で背後にいた。

【浮遊術】では間に合わないと即座に判断し、【虚空瞬動】で退避しようとするもその体は両手を脇に揃えて玉藻のチャクラの糸で拘束されている。糸の拘束から抜け出そうもするがどれだけ力を入れても糸が千切れない。

抜け出そうと足掻くが玉藻は僕をチャクラの糸で拘束したまま両手で抱え込まれて回転する。

既に【表蓮華】の状態に入っていて抜け出すことは出来ない。

「っちぃ！」

「行くぞ、表蓮華！」

迫り来る地面、何か対策を打たねばこのままでは脳天から落ちて死ぬ。体は拘束されていて動かないから印を結ぶ必要のある忍術は使えない。

印のいらない【千鳥鋭槍】でチャクラの糸を切りながら【千鳥流し】で玉藻の拘束を外したが、既に地面は近く衝撃を殺すため即座に印を結ぶ。

【風遁・大突破】

口から吐く息をチャクラで増幅。余裕を持っていれば大木を倒すほどの破壊力を持つが、今はそこまでを望むべくもない。

吐き出された突風は地面を巻き返して柔らかくし、落下スピードを減じて急ブレーキをかける。

「ガハァッ！！」

しかし、着地の衝撃はそれを上回り、体中に痛みが走る。玉藻の拘束を外しているので頭から地面に陥没するということにはならなかったが、仰向けに落ちた。

何時もよりかは善戦したが最終的に完膚なきまでに叩き潰されて指一本動かすこともできない。

「痛つつ、何かいつもよりひどくない玉藻？」

直ぐ近くに降り立った玉藻に痛みに呻きながら文句を言う。

《そうです。どう考えてもやりすぎです。特に最後のは殺す気ですか！》

「すまんすまん。まあ、あれだけの傷も全快したようだし、前までと違って術の間のインターバルもない。まさか分身を使わずに一人で螺旋丸に性質変化を加えるとは思ってなくての、つい歯応えがあって楽しかったからやりすぎてしまった」

二週間以上もかけてようやくこの世界に帰るためについた傷が完全に癒えた。

マルチタスクのお陰で以前よりも術のインターバルがなく、間違いなく強くなった。　それでも玉藻には傷一つ無く、せいぜい白い着物に一撃分の埃を付けられただけでも進歩か。あれでまだ玉藻は

本気じゃないんだから反則だと私は突っ込みたいです。て、誰に言ってるんだろ、疲れてるのかな、と自分に突っ込みを入れるアスカ。

「しかし、螺旋丸に性質変化を加えるだけに飽き足らずにそれを一人で行うなんて器用な事をするの」

「影分身みたいに右を見ながら左を見ることはできないけど、1のことを考えながら2のことを考えることができるからね。マルチタスクで魔法の併用ができるなら忍術にも同じ事ができるんじゃないかなと思ったんだ」

《結果は見ての通りですが》

玉藻に内緒でリインフォースと考えていたわけだが、失敗はしたけども可能性は広がっている。

玉藻との戦闘で着ていた修練用の服はボロボロになりできた傷を、普段ならこれも練習と自分で治すのだがほとんど動けないので玉藻に医療忍術で直してもらっている。

確かに自分でもここまでマルチタスク使えるだけで高速戦闘が出来るとは思っていなかったアスカである。

「ああ～……全身が痛い。特に頭が」

《体を痛めつけられてるのもありますが、戦闘中だから気付かなかったのでしょうがマルチタスクの使い過ぎで脳に負担がいったのでしょう。本来なら私達の魔法はデバイスありきのものですから》

「成る程デバイスのサポートがないとこうなる訳か」

《普通はこんなことにはなりません。デバイスがないから魔法が使えないという訳ではないですし、まだ慣れていないだけでしょう。慣れれば感じなくなると思います》

玉藻はしたり顔でアスカを治療しながら見下ろしているが、リインフォースの言ってることは同意できる。

時間をかけて使用し続けたら人間は慣れる生き物だから直に慣れてくるだろう。

「デバイスの方はあの人たちに任せるしかないか」

「そうじゃろうな。他に当てもないことじゃし、こと此の分野に関しては世界一ではないのか？」

《その件では迷惑をかけます》

外装はアスカと玉藻で作るにしてもシステム面はとある人たちに依頼している。その分に関してはアスカではどうしようもなく、唯一の伝手でこれ以上はない人たちに事情を話して頼んである（ある程度の事情を知っており、頼んだら喜んで引き受けてくれた）。

リインフォースの件も頼んでいるので本当に足を向けて寝られない。

「うん。俺は、まだまだ強くなれる」

アスカの戦闘資質は、この世界においてトリッキーともいえる忍術と、小さな体からは予想もつかないほどに鍛え上げた肉体を活か

した近接戦闘と高速戦の能力だった。

パートナーとなる玉藻も近い性質を持ち合わせつつ、九尾状態なら大火力に乏しいアスカを補うには十分である。

別方面の技術を持つリインフォースに指示を受けたことにより、アスカの唯一の弱点であった火力と抱えていた問題を解消する手口を得た。

しかし、一見隙のないアスカであったが、反面、高速機動に頼りすぎて防御が弱いという欠点があった。

《それがアスカ殿の弱点であり、攻撃において見落としやすいところです》

「まあ、主の場合は絶対的な防御力の持ち主との戦闘経験があるから見落としていても直ぐにどうこうというのはないがな」

絶対的な防御力の持ち主と相対する場合、細かい攻撃を重ねたり、防御を抜いたり崩したりしての一撃がほとんどで、突破できる忍術もある。例えば完成した【風遁・螺旋手裏剣】なら力押しで突破することも難しくない。

そういう意味では見落としていても苦労した経験から学んだことなので問題は無い。

だがその反面、自分が防御する側に回ったらアスカの防御は薄い。

基本的に障壁で受けるか、避けるか、体で受けるかの三択になるが、防御の一点だけを見れば、どれだけ逆立ちしても高位の術者に

は届かない。

障壁の術式を元の形がなくなるほどに改良して魔力効率と効果を上げても、防御魔法を使用した魔法使いには及ばない。

それにアスカは誘導弾の類を使えない。

ミッドチルダ式の射撃魔法は自動追尾の誘導操作弾や術者自らが操る思念操作弾など多彩な面がある。特に思念操作弾は制御範囲内であれば自由に操作、再加速が可能であり、これによって対象の死角からの攻撃や時間差多角攻撃など空間認識能力が高ければ何十の戦術を立てることだって可能な顔を持つ。

悲しいほどに適正が全くない以上はないもの強請(ねだ)りになるだけだ。

《【風遁・螺旋手裏剣についてはまだまだ考え直さないといけませんね》

「やっぱりチャクラを使うから通常状態では難しいかも」

「たった一発でチャクラが五割も飛んでいたらとても実戦では使えんしな」

分身やらでチャクラを使っていたにせよ、たった一発で五割も持っていかれてはいざという時に頼りにならず、かわされたりしたら大損になる。チャクラの効率や発動、展開スピードを見直さなければならない。

「疲れておるだろう、寝ておけ」

《そうですよ、あれだけのことをしたんですから一休みしてください》

「ありがとう。……少し、寝……る……」

考えることは多いが二人の好意を素直に受けて、未だに蝕む頭痛に悩まされながら意識を落として気絶した。

一月も後数日で終わるというある日、夜の七時三十分からアスカは寮長にお願いして寮の大浴場「涼風」に入っていた。

と、言っても女子寮の浴場なのだから入っていられるのは八時までで、間違って女子生徒が入ってこないように入り口にアスカが入っていると張り紙をしてもらっている。

しかし、この何処かの温泉ランドみたいな広さと設備は、少なくともこれは学校の女子寮の設備ではない。

入る分にはいいかもしれないが男子寮は同じ設備なんだろうか。とても気になる。これで女子寮に比べて男子寮の設備が劣っていたら完全に学園長の趣味だな、と結論を出した。

疑問に思いつつも現在入っている身としては文句のないアスカは体を洗い終え、一番大きな湯船に肩まで身を沈めてタオルを頭に載せ足を伸ばして寛ぐ。

四ヶ月近くもいて後数日でこの女子寮を出ていくのだから感慨深くもある。

職員寮は二月という中途半端な時期の為空きがなく、かと言って十歳にも満たない子供に周りに知り合いというか教師仲間がいる職員寮以外で一人暮らしをさせるわけにはいかないから現状のままで我慢してくれ、と学園長に言われた。

納得したわけではないが、そこまで言われれば仕方ないと思いその場は辞して本当に職員寮に空きがないのか調べてみたが、やはり時期的に中途半端というのもあるようで寮に空きはなかった。

これが赴任が春からならば、教師の異動もあるだろうから職員寮にも空きが出たはずなのに、素直にタイミングが悪いと見るべきか、誰かさんたちが逃げ場を失くす為に画策したと見るべきか微妙だ。

生まれた疑念云々は横に退けて現実問題、アスカは男なのに女子寮に居させて貰っている状態だ。

こちらの要望で予定より早くこっちにきたのだから住むとこがないのも納得できる。職員寮に空きがなく子供に独り暮らしをさせるわけにもいかないから女子寮で同居というのもアレだが納得できる。

だが、個人の見解としては教師が生徒と同居するのはどうかと思っていた。まあ、今まで暮らしといて言う資格はないかもしれないが。

個人的な事情があるにせよ、認められるのは同姓の教師と生徒の場合であり、異性の教師と生徒の同居なんて世間は認めないだろう。

前置きが長かったが、ようは教師になるんだから生徒と同居というのは周りが認めても自身が許容できないって事だ。

しかし、女子寮を出るにしても数日では正規の手続きで転居先を探して引っ越すのは時間的に無理だ。不正規な手段なら幾らでもあるが、あまり使いたくはない。

真っ当な手段で住む場所を得るには自分で作るしかなかった。

旅をしていた時に日本でいう大工みたいな仕事のアルバイトをしたことがある。とはいえ、一人で家を立てられるはずもなく、生徒や商店街、色んな人の力を借りつつ（人助けで知り合った人たち）二週間かけて小さな家を作り上げた。家というには二階はなくそこそこ広い1ルームの部屋があるのみで、小さすぎて小屋と呼べるレベルのものだがガス、水道、電気が通っているので十分だった。

明日菜と木乃香には玉藻のことは秘密で、学校時代の同居人と一緒に暮らすと言ってある。本当なら明日菜達には玉藻の事は秘密なんだけど、教えないと寮を出るのを許してくれなかったのだ。

全ての準備を整えた上では学園長も認めるしかなく、アスカの引越しはつつがなく行われた。

荷物は大きめのバッグに入るぐらいしかないから運ぶほどでもない。後は布団と生活必需品しかないのでそれほど大荷物にもならなかった。

ちなみに布団は寮の部屋に置いておく事になった。運ぶにはどうしても大きいから面倒だし、寮に置いておけば誰かが使うだろうという予測からだ。引越し作業と内装も必要な物を買ってきて、カー

テンや新たに買った布団などのシーツを掛けるだけで終わった。

後は数日分の着替えと生活必需品しか女子寮には残っていない。

――――――ワイワイガヤガヤ

何か出入り口の方で複数の人の気配と話し声が聞こえてきた。表にアスカが入っていると張り紙がしてあるのに何故だ。もしかして考え事をしている間に時間が過ぎて寮長が張り紙取ってしまったのか、と邪推する。

《誰か来たようじゃな》

《張り紙があるから来るはずはないのですが》

二人の念話での話を聞きながら、着替えが向こうにある訳だから逃げるわけにも隠れると後が不味いのでそれもできない。頭の上に乗っけているタオルを手にとってサングラスを外しているので万が一見ないように目を隠して頭の後ろで縛る。

《役得何じゃから気にせずに見ればいいのに》

《玉藻殿。主の体面もありますし、そういうわけにはいかないですよ》

リインフォースの言う通り。性欲なんかはないが思春期なんだから見られたくないだろうという配慮だ。開き直ってオープンになれるような性格でもない。３人で話していると浴場のドアが開いて女生徒が入っている来るのが聞こえた。

「それにしても何でアスナさんの部屋にアスカさんが」

「私が知るわけないでしょ」

この声はあやかと明日菜。他にも人の気配がするから何人来たのか。何気に知っている気配ばかりで、もしかして２－Ａの生徒達が連れ立って来たのかもしれない。

「あ～それはウチのお爺ちゃんがそうするように言ったんよ」

次いだ声で木乃香も来ているようだ。というか、明日菜と木乃香にはアスカがこの浴場に来ることは言ってある筈なんだが忘れているだろうか。

「学園長先生が？」

「へ～、じゃあ私たちもアスカ君と相部屋になれるように木乃香のお爺ちゃんに頼んでみようかな？」

いやいや、数日もすれば寮を出ますから学園長に言っても相部屋になりませんよ、と心の中で突っ込みを入れる。そもそも同人誌の作成を手伝われそうなのでこちらからご勘弁だと言いたいアスカであった。

「勝手に決めないで頂けます？　アスカさんと同居し、立派に育てるにはもっと相応しい人物がいると思いますわ」

育てるというにはアスカはあまり子供らしくない。人に頼ること少ないし、それだけの能力がある。下手に２－Ａの生徒より大人な部分があるために、彼女のように精神的に大人な子たちにとっては

心配の種なのだ。

彼女の場合、単純に性癖（ショタコン）が理由かもしれないが。

「そうでもないわよ、委員長。アスカは料理も作れてかなり自立してたしね、木乃香？」

「そうやで。それどころか明日菜はかなり世話してもらっとるからな。うちも助かるわ」

明日菜がバイトの日の朝食を作ってるし、勉強も見ているから世話していると言えなくも無い。これではどちらが年上か分かったものではない。

「１０歳にも満たない子に世話されている私って……」

同意を求めて逆に木乃香に凹まされて、沈む明日菜。

木乃香が偶に吐く毒舌は心を抉る。

「ぐっ！　しかしいかに天才少年とは言え、アスカさんもまだまだ子供！　そんなアスカさんを日々お世話するにはもっと母性的で包容力を持った女性、そう、例えばプロモーションも完璧な私のような」

ホホホと如何にも高飛車なお嬢様の如く高笑いを上げているあやか。本当に雪広グループのお嬢様だったので似合っているという言うべきか。

しかし、主観だと包容力云々で言えば雰囲気とかで木乃香の方が

あるとアスカは思う。

「でも胸は、私の方があるよね」

「う、うん……」

「胸が大きい方が、母性的とは言えるです」

タプタプと自分の胸を揉みながら言うハルナとその動作に恥ずかし気に頷くのどか、俗説を語る夕映の姿もあった。

ハルナのバストサイズは８７ｃｍとあやかのバストサイズ８５ｃｍを上回っている。

胸の大きさは遺伝や食生活や運動経験と複合的な要因が影響してるので一概に性格が要因とは言えない。

夕映の言う通り胸が大きい方が母性的っていうのは言われているけど、それじゃあ父性はどうやって判断するんだろうか、とアスカの胸中に疑問が浮かんだ。下世話になるだけだから考えても仕方ない。

《ふっ、胸なら我達の方が大きいぞ》

《そうですけど私達と中学生を比べるのはどうかと思いますよ、玉藻殿》

中学生とはいえ、設定年齢が大人の二人とは比べようもない。そうでなくても二人のスタイルはモデル並みなのだから。

「じゃ、私たちの部屋で、決まりってことで」

「ちょ、待ちなさいあなた方！　トップとアンダーの差では私の勝ちですわ！　大体あなたの場合少し太り気味な」

「委員長さんはちょっと痩せ過ぎです」

「おっと勝負するか？　いーんちょ」

痩せ過ぎや太り気味の考え方は、アスカには全く理解できないが年頃の少女たちには重い問題なのだろう。

そもそもアスカの住居は学園長が決めたことで、彼女たちに決定権はない。そもそも数日後には寮を出ることになっているのだから余計に無駄な張り合いでしかない。

――――ガラ

またドアが開く音と人の気配。

「あ、こんちゃー委員長。早いなー」

「なっ、長瀬さん！」

聞こえてきた声は楓のもの。隠れているアスカに気付いたのかチラリと視線が動いた。

思わずあやかが声を詰まらせたのはタオルで隠しているのに隠し切れない楓のバストにあった。

８９ｃｍと間違いなく二人を凌駕するサイズ。

「ま、まあ彼女は身長からして中学生らしからぬ感じですし」

「そ、そうよね。１８０ｃｍだっけ？」

確かに身長からして女子の平均を遥かに超え、並みの男性よりも高い彼女は例外だと言い訳みたいな言って、さっきまで言い合っていた二人は納得しようとする。どもって動揺しているのが丸分かりであるが。

中学生らしからぬのは二人も人のことを言えない。

「こんばんはー」

「お、時間通りにみんな入ってるなんて珍しいな」

９４ｃｍというクラス１の巨乳である千鶴。先程の夕映の俗説も彼女ならば正しいと思える。

８８ｃｍと楓よりかは少し小さいがそれでも二人よりかは上の和美が鳴滝姉妹と一緒に浴場に入ってきた。他にも人の気配がするからまだ来ている。

「？」

次いで現われた真名もアスカに気付いたのか、何でいるのかと不思議そうな視線を向ける。完全に出るタイミングを逃してしまったことを察したアスカは、どうしようかと途方に暮れていた。

「……ちょっとこのクラスには非常識な人達が多いですわね」

「む、胸の大きさで勝負するのはやめとこうか」

８８．９ｃｍの真名も合わせてクラス上位陣を締める者たちが相次いで現われたことで、ホホホとかアハハとか乾いた笑いを浮かべる二人。「ホントに中学生かなあいつら」、とも言うが２－Ａの人間に限って言えば世間の常識を当て嵌めるのは止めて置いた方が懸命だった。

「えー何の勝負してるですか？」

「な、何でもありませんわ！」

目を瞑っていると声を聞いただけでは鳴滝姉妹のどちらかの声か判断しずらい。喋り方からして史伽かなとは思う。

それとあやかはちょっと動揺しすぎ。

「何でも胸が大きい人がアスカさんを貰えるということだそうです」

「「えーーーーーっ！？」」

（いやいや、夕映さん何言うてはりますの！！）

突然の夕映の言葉に騒然となり、アスカは動揺しすぎて思わず心中でのツッコミが関西弁になってしまった。

しかし、動揺するアスカの意思とは関係なく夕映の言葉に大いに驚き、すぐに盛り上がるお祭り好きな面々。

流石にそろそろ撤退しなければアスカも身の危険を感じてきた。
こんなことに魔法や忍術を使うわけにはいかないので見つからないように修行で培った隠行術を使いそろり、そろりと移動する。

《スキルの無駄遣いじゃな。楽しめばいいものを、勿体無い》

《……何か最近はっちゃけてないですか玉藻殿》

リインフォースの突っ込みは正しい。どうもリインフォースが来てから玉藻の箍(たが)が外れてる気がする。

いや、昔に戻っていると言うべきか。まだ、神父が生きていた頃のように……。

「……何故いる？」

「そうでござる」

「そうだな」

「そうです」

少し感傷に浸っていた所為だろう。気付いた時にはエヴァンジェリン、楓、真名、刹那がちょうど進行方向で待ち伏せしていたかのようにいて、聞いてきた。

アスカの隠行術が未熟だったのか、それともこの人達が鋭いだけか。まだ他の人が気付いてないから後者の可能性が高い。

「いえ、僕の方が先に入ってましたし、8時まで入っていいと寮長さんに許可をもらって入浴中だって張り紙を張って貰ってた筈なんですけど。ちなみにタオルで覆ってますから何も見てませんよ？」

説明しながら目元を覆うタオルを指差す。寮長という証人いますから決して覗きではありません、と繰り返す。

「張り紙なんてなかったぞ」

「とっくに8時は過ぎてますし」

「寮長はもう出たと思って外したんじゃないのか」

「タオルで覆ってもアスカ殿なら何とかしそうでござる」

どうもゆっくりと浸かりすぎてとうに時間は過ぎていたらしい。寮長も確認ぐらいすればいいものを。

しかし、楓の言うことも説得力がありすぎて困る。

だが、こんなことが周りにバレると風評が悪くなる。何とか口止めをしなければと思考を回す。

そこで一つの疑問が浮かび上がる。何故、寮生ではないエヴァンジェリンがここにいるのか。

「そう言えば何故エヴァさんがこの浴場に？　寮生じゃないじゃないですよね」

「その通りだが、折角こんな広い風呂があるんだから在りがたく利

用させてもらっている。許可も貰っているんだから何も問題はない」

あ、なるほどそういうわけですか、と許可を取ってるならとやかく言うことじゃないし、それ所か逆に覗きだと言われる立場であること再度自覚する。

全て誤魔化してしまおうと、

「そうなんですか、じゃあ僕はそろそろ行きますね」

と、四人の前を通って出口に向かおうとする、そうは問屋が卸さず、一番出口に近い位置にいた真名に肩を掴まれた。

「まさかこのまま何事もなく行けるとは思っていないよね。餡蜜奢ってくれるなら考えないでもないけど」

「そうでござるよ、拙者の師匠になってほしいなんて思っていないでござる」

「私は血をくれればいいぞ。ククク、強制はしないがな」

「わ、私は……」

真名は餡蜜を奢れ、楓は弟子にしろ、エヴァンジェリンは血を寄越せ、刹那は赤くなって黙ってしまった。刹那の要求がエロイことのように感じるのは場所が場所だからか。

一応楓さ裏の事を知らない筈だから血を寄越せとか意味深な事を言うなと念話で告げるも無視された。楓本人は幸いにも気付いてないけど。

《他にも何人か怪しいが刹那もか》

《どういうことです？》

《クク、秘密じゃ》

何のこっちゃと玉藻に突っ込みたいが現状でアスカにそんな余裕はない。真名に餡蜜を奢るのはお金ならあるし別に構わない。楓を弟子にするのは前に約束した学年５００以上になってからにしないと古菲も弟子にしろと言ってくるに違いない。エヴァンジェリンに血をやるのは別に構わないが強制じゃないなら別の物に変えてもいいのだろう。本人が強制ではないと言っているのだから・刹那は何を求めているのか正直分かない。

結論、ここは３６計逃げるが勝ちだ。ところで３６計ってなんだ？

「楓さん弟子にしてほしいなら約束を守ってください。エヴァさんも強制でないなら別の物でもいいですね？　後日みなさんに餡蜜とか他のものでも奢りますんで今回は勘弁してください。では」

早口でそれを言って反応する前に、肩にかかる手から離れて瞬身の術で湯船を出て出口の前に現われ、誰かに認識される前に素早くドアを開けて浴場を出る。

「奢ってくれるなら別に私は構わんさ」

「中々手強いでござる」

「チッ高いものを奢らせてやる」

「アウアウ」

そんな言葉を聞きながらさっさと浴場を出る。着替えをする時に誰もいなかったのは僥倖（ぎょうこう）ではあった。

そして浴場から部屋に戻ってきた明日菜と木乃香にどこに行っていたのか聞かれたが、浴場にいましたとは言えずジュースを買って寮内を飲み歩いていたと誤魔化した。

後日、真名と楓には口止めの為に餡蜜を奢らされて財布から諭吉が一枚飛んで行き、エヴァには通販で買った高級和菓子の代金を請求されて財布の中身がすっからかんになった。刹那には何も奢っていないが後が怖い。

苦労ばかりが増えて思わず夕日に向かって逃げ出したのは蛇足である。

第三十話　　戦力評価とお風呂と少年（後書き）

前半は玉藻とアスカの模擬戦です。着実に強くなっています。

後半は原作第三話をオマージュしたものです。

アスカが寮を出る流れ

学園長「すまんが空きがなくての、もう少し木乃香たちの部屋にいてくれ」と言うが主人公は「ないなら自分で作るか」という理屈で家を作ろうと思い立つ。

←

商店街で材料を買っていたら聞かれ、素直に家を作ると答えたらアスカに助けられたことのある人たちが集まり、あれよあれよという間に家が出来上がった。

←

既に現物が出来上がっており、非合法に玉藻の戸籍を作ってアスカの保護者に名を連ねていたことで学園長は封殺され、認めるしかなかった。

という流れです。

次回から原作が始まるわけですが、その前に設定とかを上げた方がいいのでしょうか？　上げるにしてもそんなに手間はかからないので更新が遅れることはないのですか皆さんの意見を聞かせてください。

締め切りは次の次の更新までです。

次回の更新は『金曜日』の午前0時に予定しています。アンケートの締め切りは『日曜日』までです。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

設定（原作開始時）（前書き）

第三十話まで、原作開始時の設定です。なので、本編を読む前に見てしまうと展開が分かってしまうので、先に本編を読むことをお奨めします。

締め切りが日曜日だとか言いながら次の日に更新する筆者でした。

それでも構わない方はどうぞ。

設定（原作開始時）

名　　前：アスカ・スプリングフィールド

年　　齢：１０歳（９歳）

身　　長：１５０ｃｍ（この年代ではかなり高い）

容　　姿：アリカ・アナルキア・エンテオフュシアを幼くしたような顔。アリカが凛々しい顔つきをしていたこともあって不自然ではなく、二重眉ではない。髪は僅かに肩に掛かるぐらいで前髪で目を隠しており、常にサングラスをしているので顔を知っている人は麻帆良には直接目にした高畑、話を聞いている学園長しか知らない。

経　　歴：前世で死亡し、気がついたらが「ネギま！」のネギの双子の弟になっていた。

詳　　細：ナギ・スプリングフィールドとアリカ・アナルキア・エンテオフュシアの息子（双子で兄がネギ、主人公は弟）

性　　格：目の前で困っている人がいたら、よほどの事情がない限り手助けするほどの博愛主義。しかし、一度敵と定めるととことんまで冷酷になる。過去の経験もあって自己内罰傾向あり。

家　　族：父ナギ、母アリカ、双子の兄ネギの四人家族。だが、両親に会った記憶はなし。ネギとは故郷が壊滅してから共に暮らしておらず、会話は全くなかった。

人間関係：故郷にいた頃の人間とはほぼ疎遠。メルディアナ校長＝

理解、ネカネ＝文通、ネギ、アーニャ＝自分たちの行いで関係は断絶。ネギや両親には色々と複雑な感情を抱いている。敵対関係以外＝良好、もしくは駆け引き＋警戒＋注意。

一　人　称：基本的には「俺」だが、麻帆良に来てからは子供らしくを装って「僕」で通している。感情が昂ぶったり、動揺すると「俺」に戻る。

力　：魔力は生誕時はサウザウントマスタークラスだったが、玉藻との魂の契約によって半減してチャクラに還元されている。気も同様。チャクラはナギを越えるほどの魔力と気の半分で構成されているため原作ナルトよりも多め。魔力と気に隠れているので鋭い人でも違和感としか感じられず、気付かれにくい。魔力は武装隊局員の平均Ｂランクらしい。

アーティファクト：偽りの仮面（本文より抜粋：能力の強力さから「マスターピース」と称される程のアーティファクトである。仮面といっても、露店で売っているようなキャラクターがついているようなものではなく、息をする穴もない顔を覆うだけの仮面。このアーティファクトの使い方は顔につけるだけ。そして装着すると顔に同化して、顔にある傷などを術者の希望通りに消せるだけの能力しかない。後、術者がアーティファクトを解除しない限り、効果は半永久的に永続する。仮面をつけているとも感じさせない付け心地と、本物としか感じられない触感は確かに凄いが、仮面をつけても別人になれるわけではなく、隠したいと思う傷がなければ使い道のないアーティファクトである。が、逆に傷をつけることもできると分かったアスカには、まるで天から授かったかのようなアーティファクトだった）

魔　法：浮遊術、治癒，認識阻害，記憶のシンクロ，パンツァー

シルト，次元転移

気　　：縮地，虚空瞬動，退魔術（擬似劣化斬魔剣・二の太刀）

忍　　術：変わり身の術，変化の術・千鳥刀，千鳥鋭槍，千鳥千本，千鳥流し，螺旋丸，風遁・螺旋手裏剣（不完全），火遁・豪火球の術，火遁・鳳仙火の術，天照，陰癒傷滅，掌仙術，影分身の術，分身大爆破，月読，地爆天星，狸寝入りの術，手裏剣影分身の術，風遁・大突破，木ノ葉旋風，木ノ葉大旋風

幻術適正：イタチ＞＞＞＞サスケ＞アスカ＞＞＞＞ナルト。しかも『万華鏡写輪眼』を使わないと二ランク落ちるという仕様。

瞳　　術：『万華鏡写輪眼』（普通の写輪眼にはならない）『白眼』（使えるのは透視のみ）『輪廻眼』（第三十話までには出ていないものの不完全）。負担度は発動するだけで『万華鏡写輪眼』＝８『輪廻眼』＝５　『白眼』＝１となります。ちなみに通常の『地爆天星』＝５　今回の改造『地爆天星』＝１５です。『月読』＝７で、現時点での限界値は３０。

武　　術：「あらゆる中国拳法の達人」の異名を持つ中国拳法の達人馬剣聖より本格的に中国武術を学んでいる。他にも哲学する柔術家」の異名を持つ岬越寺秋雨、「無敵超人」の異名を持つ風林寺隼人からも手解きを受けており、素の実力で弟子（ディサイプル）を越えて妙手の領域に片足を突っ込んでいる。

戦闘スタイル：この世界においてトリッキーともいえる忍術と、小さな体からは予想もつかないほどに鍛え上げた肉体を活かした近接戦闘と高速戦。反面、高速機動に頼りすぎて防御が弱いのと火力不足という欠点がある。

手　札：■■■、■■■、■■■（一つ目と二つ目は単独、三つ目は両方を合わせたもの）

仲　間：玉藻、リインフォース（体内に封印中）

備　考？：玉藻とは魂を共有しており、耐えられるように肉体が頑丈になっていて死ねば一蓮托生。妖魔である玉藻と魂を共有している影響か、精霊魔法を全く使えない。

備　考？：リインフォースが体内に封印されており、教えてもらったミッドチルダ式の誘導弾の適正が悲しいほどに全くない。マルチタスクを習得している。

備　考？：正当防衛の末の殺人で前世の記憶を失っており、今はほんの少しだけ戻っている。

備　考？：今のアスカを形作っているのは神父の影響がかなり大きい。遺品として頑丈で時間設定は外と同じダイオラマ魔法球（エヴァンジェリンと同じ別荘）を貰っている。

備　考？：旅をしている時、各地を巡りながら修行をして村人の石化解除手段を探していた。

備　考？：旅をしながらその地の技術を取り込んで纏まった物を論文としてまほネットで公開していた。論文といっても別段目新しさがあるわけでもなく、可もなく不可もなく、平均である。

備　考？：ネットで自分が作ったものを売ってお金を稼いでいた。

備　考：偽名＋【変化の術】を使って何でも屋、様々なアルバイトを経験している。

備　考：学力は平均大学卒業並み。

備　考：狸寝入りの術を使わないと悪夢で眠れない。

備　考：戦場にいた頃に銃の使い方を覚えている（未登場）

備　考：中国いた頃に仙人と出会っている。

備　考：持って生まれた性質なのか、やたらとトラブルに巻き込まれることが多い。暴れていた魔獣を倒したり、悪魔召喚をしようとしていた邪教集団を壊滅させたり、その邪教集団が最後に喚んだ中位悪魔を魔界に追い返したり、巨大妖魔と戦って退ける等々、政府機関、とある部族、退魔組織や教会とも小競り合いをしている。アメリカで起こった死霊使い（ゴーストテイマー）事件を解決している。

備　考：六～七歳の頃に吸血鬼を敗北に近い形だが退治している。

備　考：中華とイタリアンの腕は準プロ級。

備　考：アスカが麻帆良に来てから巻き込まれた騒動や後始末でヤクザや不良が減って治安が良くなった。

備　考：麻帆良に来る条件として図書館の魔法書の閲覧許可を貰っている。

備　考：八神はやてとは魔力が似ているらしく、リインフォース

との融合適正、相性はかなり良い。

備　考？：戦場にいた頃に預言者から予言を受けている。

備　考？：リインフォースの件で将来的に管理局に協力する義務がある。対価としてアースラ組みより幾つかデバイスを貰っている（既に一個大破）。とある人物に作成以来済み。

称　号：【英雄の息子の異端児】【永遠の異邦人】【狐憑き】【異界の術を使いし者】【世界の命運に関わる者】【人でなし】【女泣かせ】

名　前：玉藻

年　齢：不明

身　長：１７８ｃｍ

容　姿：２０代中頃で金色の髪と瞳をして高級そうな白い着物を着ており、かなりスタイルが良い。１００人が１００人とも振り返る容姿。隠さなければ金色に光る九つの尻尾と頭の上には耳がある。

経　歴：原作と違い、ナルトが生まれた時にマダラに操られず、結果封印されなかったため各地を放浪。最終決戦でマダラと倒すものの、最後の足掻きの時空間忍術によってアスカのいる世界に半死半生で飛ばされ、魂の共有することで生き長らえた。

性　格：アスカ至上主義であり、そのお願いや頼みは滅多な事ではない限り断らない。が、甘やかすのではなく一人でも立てる強さを持って欲しいと厳しく育てている。

アーティファクト：殺生石（敵対者に対して呪いをかける呪具。呪いの強弱は腹下しから重度の呪いまで術者の力と意思によって変わるが、殺すことはできない）

忍　術：尾獣玉，心転身の術（戦闘では使えない），影真似の術（戦闘では使えない），螺旋丸，四象封印，火遁・鳳仙火の術，影舞葉，掌仙術，表蓮華，土遁・土流壁，木ノ葉旋風

チャクラ　：アスカのチャクラの約１００倍

戦闘スタイル：基本的にアスカに任せて戦うことはないが、戦う場合は忍術を使って戦う人間形態と有り余る力を用いての大型の妖狐形態で戦う場合の二種類。

備　考？：アスカとは魂を共有しており、死ねば一蓮托生。妖魔である自身と魂を共有している影響で精霊魔法を全く使えないアスカに深い謝罪の念がある。

備　考？：リインフォースの姉貴分

備　考？：唯一アスカが前世を持っていることを知っている。

備　考？：修行の時は鬼、もしくは悪魔。

備　考？：昔は力尽くだったが中国にいた頃にアスカが修行してい

るのを見て中国拳法を覚えてしまった。しかもアスカより実力は上。

備　考？：アスカが中国いた頃に出会った仙人と互角らしい。だけど、力の総量でいえば玉藻を上回る存在を知らないらしい

備　考？：アスカの事件体質（トラブルメーカー）は元々、玉藻が持っていたものらしい。

備　考？：アスカと魂を共有しているから尾獣化にはかなりの危険性がある。

備　考？：真祖の吸血鬼並みの身体能力と治癒力（アスカには体内にいないと治癒の恩恵は発生しない）

名　前：リインフォース・アイン（夜天の書）

年　齢：不明

身　長：１７０ｃｍ

容　姿：１０代後半相当の黒のタンクトップと短いスカートで長い銀髪と深紅の瞳が印象的な若い女性。その容姿は玉藻を太陽とするならリインフォースは月

経　歴：「夜天の書」の管制人格だったが改悪され「闇の書」と呼ばれるようになり、破壊しか生み出さない現状に絶望していたが当代の主、はやてとアスカによって救われたが、いずれ生み出され

る防衛プログラムの為に消滅の道を選んだがはやてに説得され、アスカの体に封印された。

性　　格：身内（アスカ、玉藻、はやて、守護騎士）にはとにかく甘い。それ以外にはどこか硬い態度

デバイス：夜天の書

魔　　法：近接戦闘の技量はフェイトとほぼ互角で、なのはでは相手にならない。魔力は当然莫大で、吸収したリンカーコアの持ち主の魔導技術まで使えるという非常識さ。「広域攻撃」の魔法資質を持つため、広範に渡る魔法を多く使用する。バリアを貫かれてエクセリオンバスターのゼロ距離射撃による直撃を食らっても沈まなかったどころか、ほぼ無傷。

戦闘スタイル：主と肉体・精神の融合を果たすことで主の魔法の手助けとなる「融合型デバイス」としての機能も発揮し、これまでに蒐集した膨大な魔法データを蓄積したストレージとしての「闇の書」を用いて、莫大な魔法を使うことができる。近・中・遠距離を問わず戦うことが可能な万能型。

備　考？：現在は消滅せずに防衛プログラムを生み出さないためにアスカの体に封印されているから表に出てくることはできない。

備　考？：玉藻の妹分。

備　考？：アスカの非常識の最大の被害者。しかし、救ってくれたことに深く感謝しており、はやてより少しだけ下ぐらいの好意を持っている。

備　考？：預言者に二人の出会いは予見されていた。もしかしたら彼女がアスカを呼んだ？

ネギま、リリカルなのは両世界の違いについて

？全体的にネギま世界の方がリリカルなのは世界より魔力ランクが低い。魔法世界、旧世界の二つのしかないネギま世界よりも、数多の次元世界を管理しているリリカルなのはの方が人が多いので、魔力ランクが高い人間が集まりやすいためである。

？基本的に戦闘した場合、一般魔法使い＜一般魔導師になるが、より上位になるとナギやラカンみたいな常識外れなバグキャラがいるため逆になる。リリカルなのは勢が強いのはデバイスやマルチタスク、バリアジャケットの恩恵が大きい。

？ネギま世界の魔法は魔力で精霊を使役する魔法、ようはファンタジーな精霊魔法。精霊と感応できなければ使えないので使える人間を選ぶ。魔力があっても素養がなければ精霊と感応できない。しかし感応さえできればリリカル世界では魔力が足りなくて魔法が使えなくても精霊魔法なら使うことができる。

？リリカル世界の魔法は高度に発展した術式で行う魔法、魔力を物理的事象に特化させる魔法。術式と魔力さえあれば誰でも使える汎用性がある。

？ネギま世界の魔法での精霊魔法での使用魔力を1とするなら、リリカル世界の魔法では使用魔力に3が必要。

?:両世界の魔法を使う人間にはリンカーコアがあるという設定。

クロス世界：ＮＡＲＵＴＯ，リリカルなのはＡ's

微クロス：史上最強の弟子ケンイチ，Ａ・Ｉが止まらない！

以下はチーム＋個人の強さを表したものです。見なくても何も問題ないので参考程度に考えてください。相性やその他もあるので、これはあくまで目安。尚、経験値等は考慮していないのでありしからず。ランク下位でも上位に勝つことは十分に在り得ます。

紅き翼（絶頂期のフルメンバー）＝玉藻＜越えられない壁＜リインフォース＝ナギ＝ラカン＝エヴァンジェリン＞フェイト・アーウェルンクス＝詠春（大戦期）＝アル（大戦期）＝ゼクト＝ガトウ＞＞高畑（本気の本気）＝アスカ（ユニゾン）＞＞＞リョウメンスクナノカミ＝アスカ（現段階）＞＞＞＞＞＞＞＞＞高畑（咸卦法なしで？）＞＞カゲタロウ＞＞フェイト・アーウェルンクス（ラカン初期予測）＞帝国鬼神兵（大戦期）＞ネギ（原作闇の魔法・術式兵装）＞タカミチ・Ｔ・高畑（本気か怪しい）＞イージス艦＞ネギ（原作闇モード起動）＞ネギ（原作ラカン修行後）＞竜種（非魔法）＞ネ

ギ（原作魔法世界に来たばかり）＞麻帆良の魔法先生（平均）＆本国魔法騎士団団員（平均）＆高位魔法使い＞戦車＆ネギ（原作初期）＞魔法学校卒業生＞＞魔法使い（平均的魔法世界人）＞長谷川千雨＞ネコ

まあ、こんなところで。

紅き翼は前衛、後衛、オールラウンダーとバランスが良く、かつ玉藻の鉄壁の防御をすり抜ける斬魔剣・弐の太刀等があり、相性が悪い。手段問わずの殺し合いをすれば多分、相打ち。勿論、玉藻が紅き翼の情報を事前に知らないことが前提。

設定（原作開始時）（後書き）

今まで出てきた内容を出来るだけ網羅したつもりです。

あくまで原作開始時の設定を書いたもので、忍術や魔法を習得していても登場していなければ書いていません。今後も増える可能性は大です。

書き忘れなどがあれば追加、修正しますがなければ基本的に変更はありません。

なにか足りないもの、間違いなどがありましたら報告していただけると嬉しいです。

次回は金曜日の午前０時、今夜ではなく明日の夜に更新します。次回から原作が始まります。

今話の設定を除いてプロローグも合わせれば苦節三十二話、読了時間：約８９２分（４４万５，９２７文字）本当ぉ――――――っに長かった。

ようやくここまで辿り着きました。

ここからは少しペースを上げて週二回～三回の更新で行きます（改定前のを少し修正するだけでいいので）。

大体、水曜日の夜と以前通りに日曜日の夜に更新を予定しています。

今回は金曜日と日曜日になりますが。

第三十一話　　再会する少年（前書き）

ついに、ついに原作が始まりました。

一月から改定を始めて苦節、８ヶ月。本当に長かった。

ここまでだけで設定も合わせて９００分という長さ。原作世代に生まれながら過去に行ったりせずにここまで長いのも珍しいのではなかろうか。

文字数は１１３８０字となります。

第三十一話　再会する少年

二月初日。

住居を女子寮からエヴァンジェリン邸から少し離れた場所に小屋――――もとい、家に移していた。今までと違うのは玉藻が表だって動いていることだろうか。

教師になるにしても習慣を変えるつもりはないので、何時もの時間にランニングに出かける。

「あれ、明日菜さん？」

「アスカ？」

当然住んでいる場所が違うのでランニングルートも変更したのだが、そのルートが明日菜のバイトの配達ルートに重なったようで曲がり角で鉢合わせした。

「ん？　何時もより荷物が多いみたいですけどどうしたんですか？」

「バイト仲間が風邪で休みなのよ。だからその分までね」

運動神経がいい明日菜がよろめいたから理由を聞くと、確かに一人で運ぶには少し多すぎる新聞の束を持っていた。

「手伝いますよ」

「そう？　悪いわね」

気がいいと言うか真面目と言うべきか苦笑しつつ、アスカも配達を半分手伝ってまた学校でと別れた。別れた後もランニングを続け。終わった後に玉藻に朝食を作ってもらって、その間にシャワーを浴びる。

「さて、行くか」

朝食を食べた後は玉藻は体内に入り、新品のスーツを着てコートに腕を通して忘れ物がないかを確認してから家を出た。

学園長からネギの迎えを頼まれているので先に職員室に行って鞄を置いてから駅へと向かい、麻帆良に初めて来た時に座ったのと同じベンチに座って待つ。

《待ってるんだけど来ないね》

《もう時間じゃからの行き違えたかもしれんな》

《初めて見たときも思いましたけど人が多すぎるので気がつかなかったのかもしれません》

目の前の駅から文字通り湧いて出てきた生徒たちという異常な光景にも慣れてしまった自分の感性を若干嘆きながら、卒業式の時の顔から見て勝手に時間に几帳面そうな性格だと思ったから予定の時間より３０分も前から待っているのに来ない。

目の前の風景を見てこれを初めて見た人間は誰も登校風景と呼ばないだろうな、と感慨を抱く。

バイクの二人乗りをしながら肉まんを売る者やインラインスケートなどを履いて路面電車につかまっている者等およそ、普通とは言い難いものがある。

何回か駅に電車が来て生徒が出てきたがその中にネギの姿はない。この駅ならば小さい体は逆に目立って見つけやすいはずなのだが。

『学園生徒のみなさん、こちらは生活指導委員会です。今週は遅刻者ゼロ週間、始業ベルまで１０分を切りました。急ぎましょう。今週遅刻した人には当委員会よりイエローカードが進呈されます。余裕を持った登校を……』

アナウンスでも言っている通り、もう待っていられる時間がない。今も駅から生徒が走って出てきたけどその中にネギらしき人影は見えなかった。時計を見ても本当に時間に余裕は残っていない。

《これはもう放っていくしかないですね》

《やっぱりそれしかないか》

《時間もないしな。それどころか主が遅刻になるぞ?》

それもそうだ、と考えて学園長には理由を話して呼び出しもらうかと思い、腰を上げて人が少なくなった駅前から――――――ギリギリまで待ったので時間的に走らなければ間に合わない――――――学園長室に向かって走り出した。

アスカが手伝ってくれたお陰でバイトも何時もより早く終わり、時間的余裕が出来て二度寝をしたら思わず寝過ごしてしまった。

「やばい、寝過ごしたー！！」

「あははは、にしても明日菜足速いよねー。私コレやのに」

他の生徒を次々に追い抜く速度で疾走しながら息を乱す事無く叫ぶ明日菜に、木乃香は笑って地面を滑るローラスケートを指差す。彼女達は息を乱すことなくそのハイスピードの走りの中で会話していた。

「悪かったわね体力バカで」

運動神経しか取り得がないと馬鹿にされた気がするので、幾ら事実とはいえ不貞腐れて返事をする明日菜。

最近はアスカのお陰で若干上昇傾向にあるとは言え、まだその体力に反比例するように明日菜の成績は学年の底辺を飛行しており、悪いのは事実でそんな返事しか出来ない。

「ん？」

明日菜は巻いているマフラーがふわっと浮き、自身の左横に風の流れを感じた。

自然の風ではなかったので何かと首を左横に向けると何時の間にか二人の横を大きなリュックに身長以上の長さはある白い布の巻かれた棒のような物を背負い、小さすぎて実用性のなさそうな眼鏡を

かけて髪を後で縛ってた、見るからにここにいるべきではない年齢の少年がいて、横に並走している。

ここは女子中等部玄関付近だから普通は男は教師しかいないし、その例外はアスカぐらいで学区から考えてこの年代の子供がいる筈も無い。

その少年は走ったまま明日菜の顔を見ると笑顔で口を開いた。

「あのーあなた、失恋の相が出てますよ」

「え〝……？」

突然現れた見知らぬ外国人の少年から掛けられた失礼な言葉に明日菜は一瞬呆然となり、直ぐに頭の中は噴火したばかりの山の如く燃え盛った。

見ず知らずの人間、しかもアスカのように好感の持てるタイプとは逆の、無神経で大嫌いなタイプの『子供』にいきなり「失恋します」と聞き捨てならない事を言われて、恋する乙女が到底許せるものではなかった。

「な……し……しつ……て何だとこんガキャー！」

「うわああ！？」

沸点を越えた怒りで逆に涙目になりながら心からの絶叫が迸る。

その阿修羅もかくやの憤怒の形相に恐ろしさに少年は思わず声を上げた。

「どどどういうことよテキトー言うと承知しないわよ」

「い、いえかなりドギツい失恋の相が……」

明日菜は涙を流しながら少年に迫り先ほどの発言を否定させようとするも、迫力に押されながら明日菜の微妙な乙女心を理解できてない少年はとどめを刺すように非情にも告げた。

「ちょっとおお～～っ」

「なあなあ相手は子供やろー？　この子初等部の子と違うん？」

ある種悲痛な叫びを上げる明日菜と困惑している少年の間に木之香が入った。木之香としても先程の少年の言葉に思うところはあれど見た目外国人美少年の容姿に「かーいー♪」と素直な感想を漏らす。

「あたしはね、こういうガキが大ッッキライなのよ」

ポロポロと涙を零しながらあるだけの憎しみを込めて告げて、ワナワナと震える右手で少年の頭をガッと掴む。

「うひ」

少年が変な声を上げるが無視して溢れる恋する乙女の怒りを込めて頭を掴んだ手をそのまま持ち上げる。

「取・り・消・し・なさいよ～～」

「あ、いや、あわわ」

恋する乙女の怒りはあらゆる限界を越えて力を発揮し、そのまま上に引っ張り上げて少年の体を宙に浮かせる。阿修羅と言わんばかりの形相と子供を片手で持ち上げる腕力。普通の男が見たら尻尾を巻いて逃げ出すだろう。

「坊や、こんな所に何しに来たん？　ここは麻帆良学園都市の中でも一番奥の女子校エリア。初等部は前の駅やよ」

木乃香は彼のことを体格と服装から考えて麻帆良に初めて来た留学生で迷子になっていると考えた。彼女としても恋はしていないが乙女として多少は気持ちが分かるので、敢えて明日菜の暴挙を止めはしない。

「そう！　つまり、子供（ガキ）は入ってきちゃいけないの。分かった！？」

「は、放してください～～～っ」

未だ掴まれたままの少年は手足をバタバタと暴れて逃れようとするが万力の如き力で抑えられているので下ろされる気配は無い。

（あうう～な、なんて乱暴な女の人なんだ。日本の女の人は親切で優しいって聞いたのに――っ）

少年は日本に来る前に聞いていた話との余りのギャップに戸惑っていた。この場合は少年の自業自得なのだが繊細な乙女心を理解できていないので謂れの無い暴力を振るわれているとしか考えられなかった。

というか、人の話を鵜呑みしてはいけないが状況的に仕方ないか

もしれない。誰だって夢は持っていたいものだから。

「ほなウチら用事あるから一人で帰ってなー」

「じゃあねボク！！」

木乃香の少年を気遣う言葉と、未だ怒りが収まらないが、始業の時間も迫っているので掴んだままの手を離した明日菜も顔も見たくないと暗に込めた言葉を残してて先へ行こうとする。

「いや、あのボクは……」

「いや、いいんだよアスナ君！」

少年が二人を呼び止めようとしたところで、頭上から声が掛かった。

三人以外の声の主は女子中等部校舎の窓から三人を見下ろしていた。

「お久しぶりでーす！！　ネギ君！」

「え〝っ」

「あ」

その声にびっくりして明日菜は少年を掴んだまま手を離し、彼らが見上げればそこにはスーツ姿に眼鏡と短い白髪と顎には無精ヒゲを生やして、左手中指に指輪をした３０代後半ぐらいの男性が見下ろしていた。

「高畑先生!?　お、おはよーございま……！」

「おはよーございまーす」

自分達の担任の姿を見つけて明日菜はさっきまでとは異なりしおらしく、木乃香は普段通りに挨拶する。この明日菜の反応を見れば大抵の人はどういう感情を持っているのか理解できるだろう。

「久しぶりタカミチーッ」

彼女達の朝の挨拶に続いて少年も当然のように、しかも一回り以上年上なのに敬語もなしに彼女達の担任に声を掛けた。

「!?・・・・っ　し、知り合い・・・・!?」

誰でも明らかな年の差があるのにフランクに交わされた事に明日菜は酷く驚いて思い切り下がった。

明日菜の大好きな男性を下の名前で呼ぶなど単なる知り合いではないし、久しぶりということは知り合い?と思考がこんがらがった末に、更に爆弾発言が思い人より投下された。

「麻帆良学園へようこそ。いい所でしょう?『ネギ先生』」

「え、先生?」

「……」

続けられた担任の言葉に出てきた単語に木乃香は疑問符を浮かべ

た。明日菜は思考が完璧に停止して強張った顔で少年を見る。

子供が教師というのはアスカという前例があるが暫く一緒に暮らして年下と思えない如才の無さを見せたアスカとは違って、見た目通りの幼さの少年では教師とは思えなかった。

初対面のその言動から子供でも教師になっても可笑しくは無いとだろうという知能の高さを感じさせたアスカと、見た目通りの幼さを感じさせる少年とでは同じ立場であることに違和感を感じるのは仕方がないだろう。

「あ、ハイ。そうです」

二人の思惑に関係なく、少年はそういえばまだ挨拶もしていなかったことを思い出して目の前の二人の女性に改めて名乗ることにしたようだ。

「この度、この学校で英語の教師をやることになりました、ネギ・スプリングフィールドです」

二人の同様を置き去りにして少年、ネギ・スプリングフィールドはコホンと一つ咳払いをして、何度も練習をしていたような小さくお辞儀をして名前と役目を告げる。

「「え……ええーーーーーっ!?」」

ペコッと歳相応に可愛らしくお辞儀をしたが未だ半信半疑だった明日菜と木乃香、二人の声が綺麗に揃った。流石に驚かずにはいられなかった。

木乃香は単純に驚いているだけだが自分の乙女心を傷つけたネギが教師など信じられない明日菜は再び掴みかかった。

「ちょ、ちょっと待ってよ！　先生って、どーいうこと！？　あんたみたいなガキンチョがー！！」

「まーまーアスナ（でもスプリングフィールドって、もしかしてアスカ君の親戚かな？）」

木乃香は明日菜を宥めながら先程の少年が言ったアスカと同じ性から、年齢的に兄弟かと考えたが二人が全く似ていない事から親戚か何かなのかな、と心の中で頭を捻る。アスカから両親が死んでいること以外、家族の話が聞いたこともないので二人の関係が合致しない。

その間も激しくネギに詰め寄る明日菜を宥めるが治まる気配は無い。

「いや、彼は頭いいんだ。安心したまえ」

そこに何時の間にか右手にタバコを持って外に出てきたタカミチがハハハと笑いながら木之香と共に明日菜を諌める。頭がいいこと、教師になれるかは別問題であるというツッコミを入れられる人間はこの場所に存在していない。

「先生……そんなこと言われても……」

「あと今日から僕に代わって君達２－Ａの担任になってくれるそうだよ」

丁寧に説明されても、木乃香は「えー」と驚いているだけだが明日菜は傍目にもショックを受けていると分かる。

「そ、そんなぁアタシ、こんな子嫌です。さっきだってイキナリ失恋……いや、失礼な言葉を私に「いや、でも本当なんですよ」本当言うな！」

乙女心を傷つけられた明日菜は涙目になりながらもタカミチに言うが、言葉を訂正してくる少年をあくまでも認めないつもりらしい。

「大体あたしはあんたみたいなガキがキライなのよ！　あんたみたいに無神経でチビでマメでミジンコで……」

明日菜は滂沱の涙を流しながら言うが後半はほとんど同じ事を言っている。

少年は親切で占いを教えたのにここまで言われてむ～と頬を膨らませて流石にカチンときた。

（ううっ、ひどい言われ方だ。何だよこの人、占いだって親切で教えたのに）

どこまでも乙女心に気がつかない鈍いネギは親切が人のためにならないことに最後まで気づかないのであった。

「あ、いた」

ネギがそんなことを思った丁度、その頃、駅から学園長室のある女子中途部へしばらく走り続けたアスカがネギを見つけた。

木乃香と白い物で巻かれた棒のようなものと大きなリュックを背負った少年、ネギに掴みかかっている明日菜と三人から若干離れた位置に高畑の姿が目に入ってきた。

どうやらネギはやはり先に行っていたのかと走る速度を緩めて歩いて４人の前に出ようとするが、突然ネギから魔力の高まりを感じた。

嫌な予感を感じて、普段は抑えている身体能力を全開にして更に強く地面を踏み込み、着ているコートを脱ぎながら百メートル近い距離を身体強化なしでオリンピック選手を並みのスピードで疾走するという常識外のことを成し遂げた。単純な筋力は同年代を遥かに凌駕し、動作に一切の無駄を排することで大人をも越える身体能力を発揮している。

「ん……ハ……ハ……はくちんッ！！」

ネギのくしゃみと同時に発生する魔力の突風。当然、ネギの真正面にいた明日菜はそれをもろに受けてボタンが飛んで“服だけが”吹き飛ばされてしまった。服が吹き飛ばされたため露出されたブラジャーとクマ柄のパンツが見えた。

《毛糸のくまパンか》

《くまパンじゃな》

《くまパンですね》

走りながらも目がいいアスカには明日菜の服が吹き飛んでいくのがゆっくりと見えた。見えたくまパンに、コンマ数秒だけ自分と体

内の二人は現実逃避をしてしまったが合計一秒にも満たない時間で我に返る。

明日菜の服が吹き飛んだ瞬間に左手でポケットから出した小銭入れを取り出し、唯一の大人の男性である高畑の目に向かって視界を遮るために投げる。

「おっと」

高畑が投げつけた小銭入れに注意を向けて掴んだので、右手に脱いだコートを持ちながら明日菜の体から離れて舞った服が空中に飛んだ瞬間にネギと明日菜の間に入ってネギの視界を遮る。

男性陣の視界を遮ってもアスカの動きは止まらない。

突然現れたアスカに全く気付けずにびっくりしている木乃香とネギと明日菜を尻目に、アスカが周りに見えないように身長的に丈は短いが明日菜の背中にコートを掛ける。

「キャーーッ!?　何よコレーー!?」

コートを掛けられてようやく自分の服が吹き飛んだことに気付いた明日菜が、悲鳴を上げながらコートを引っ張って腕で胸を隠して座り込む。

《くしゃみでぶ、武装解除ってこれは酷いよ兄さん》

《流石はラッキースケベ》

《まさしく女の敵ですね》

このままではコートで隠れていない前が見えてしまうのでスーツの上着も脱いで明日菜さんに渡す。

明日菜さんの服が突然吹き飛び、アスカがいるのか理解できていない木乃香と、アスカの小銭入れを持ちながら困惑した表情の高畑は言葉も出ずに現実逃避気味にコートの掛かった明日菜を見下ろしていて何も動かないためである。

「あ、ありがとアスカ」

スーツの上着を受け取って顔を赤くしながら前を隠す明日菜にアスカは頬を掻きながら苦笑いする。本気になれば服を吹き飛ばされる前に止めることもできたのに、周りの目を気にしてしなかったから自慢できることではない。

あまり直視するのはどうかと考え、アスカこれ以上明日菜を見ずに男二人から隠す様にして背中を向けると、必然的にネギと向き合う形になる。

何故こんな事をしたのか理由はこの場に来たばかりのアスカには皆目検討もつかない。しかし、明日菜の服を吹き飛ばした張本人のネギ兄を見ると、明日菜に対して頬を膨らませてプンプンと分かりやすい態度で怒っていた。

《もしかして、わざと?》

《こうなった経緯を知らんからそうだと判断はできんが可能性は高い》

《どちらでも反省はしていないのは間違いないです》

そんな反省もしていないネギを見てアスカの眉は怒りでつり上がった。

日本の諺（ことわざ）に『士、別るること三日、まさに刮目（かつもく）して相待つべし』というものがある。

志のある者は三日会わない間にも何かしら成長しているので注意して観察しろ、といった意味の言葉だ。実際は良くも悪くも変わり映えはしないことがほとんどだが、成長どころか逆に堕落している場合もままあるので、やはり注意するに越したことはない。

ちゃんと顔を合わせるのは事件直後の病院での出来事以来、六年振りになるが成長している感じが窺えない。それどころか堕落している感すらあった。

取りあえず、明日菜が渡したアスカのコートに腕を通してスーツの上着で前を隠せたのを見計らって、自身の目線より下にあるネギの頭を軽く拳骨で殴る。本気で殴るとマジでトマトみたいに潰してしまうので手加減の必要があった。

「な、何で」

「どういう経緯でこうなったのか分かないけど女の子を全裸に近い格好にさせといて謝りもしないなんて」

「う～」

ネギが頭を抑えて泣きそうになってアスカを見る。

しかし、こういう美少年の涙目の表情はショタコンのあやかなら喜びそうだけど、同姓で同年代のアスカにはそんな趣味はないので何も感じない。それどころか何を被害者ぶっているのかと怒りが増してくる。

どうも今のネギを見ているとアスカは無性に腹が立つのを抑え切れなかった。理不尽だと理解しながらも正体不明の衝動に駆られる。

そんな睨み合う格好になった二人に対して高畑は見るに見かねたのか声を挟んだ。

「ま、まあとりあえず学園長室に行こうか」

「その前に高畑さん。職員室にジャージがあるので取ってきてもらえますか？　このままでは動けません」

「ああ、分かった。待っていてくれ」

促す高畑に対してアスカはチラリと後ろの明日菜を見る。幾らコートとスーツの上を羽織っているとはいえ、明日菜の今の格好では動くの得策ではない。

高畑も目配せで直ぐに動けない理由を理解して走ってジャージを取りに校舎内に戻って行った。

「ほっ」

「大丈夫か、明日菜？」

やはり成人男性であり、想い人でもある高畑がいなくなったことで明日菜もほっとしている。木乃香も高畑と同様に現実逃避から戻ってきて今は明日菜を慰めている。

「う～」

ネギはまだアスカが殴った箇所が痛いのか両手で擦りながら涙目で睨んでいる。その様子に意味不明な苛立ちを感じながら今後のことを思って先行きの不安を感じていた。

（本当に……前途多難だよ）

これ以上の対応はなかったにせよ、殆ど六年振りの兄弟の会話がこんなものになろうとは思わなかった。変に気まずくなるよりかはマシかもしれないが今後の事を思って、はぁ～と溜息が零れる。

教師生活、初めからこんなことになるとは前途多難だった。

あの後ジャージを持ってきた高畑は２－Ａのホームルームに出るためジャージを渡して、アスカ達にネギの案内を頼み去って行った。

明日菜がジャージに着替えた後にスーツとコートを返して貰い、木乃香にスーツ姿を褒められ、こうなった事情を聞いた。二人だけほんわかした空気が漂うが、ネギを絶対に見ようとしない明日菜とネギの間には険悪な空気のままで学園長室に向かった。

事情を聞いて、取り合えずネギに「小さな親切、大きなお世話」と言ったアスカは悪くない。

何故明日菜が怒っているのかを説明したのだが、本人は良い事をしたのに何で怒られなければならないのかと納得できていない顔だった。

もしかしたら、アスカの言っていることは理解できても弟の言葉だからこそ認めたくないのかもしれない。

まあ、そこら辺は二人の問題だからこれ以上は干渉するわけにもいかない。決して面倒だからとは思っていない。本当だよ？

そして問答を終え、学長室に着いたのだが何故か生徒二人も部屋の中に残っている。

明日菜のあの表情を見るに、文句の一つでも言いたいのだろうと思い、木乃香はその付き添いかと当りをつけた。

そんなわけで今、アスカはジャージ姿の明日菜と付き添いの木乃香と主賓？のネギと共に責任者である学園長と対面していた。

「学園長先生！！　一体どういうことなんですか！？」

そして開口一番、ジャージに着替えた明日菜が学園長に袖を捲くり上げながら問うている。

「まあまあ明日菜ちゃんや。なるほどのぉ、修行のために日本で学校の教師を……そりゃ大変な課題をもろうたのぉ」

見事に明日菜の言葉を聞いていなかったのかの如くスルーして話

し始める学園長。この状態の明日菜をスルーするとは学園長は良い根性していると変な方向に感心を覚えさせるものだった。

（修行とか課題とか連呼しすぎ）

あまりに禁句ワードを連呼する学園長に実は隠す気がないのかと思わずにはいられない。

「？」

「しゅぎょー？」

事実、事情を知らない二人が親しいアスカに何のことかと聞きたそうな目で見られた学園長に非難の視線を向ける。

「は、はい。よろしくお願いします」

「しかし、まずは教育実習と言う事になるかのう。今日から三月までじゃ……。ところで、ネギ君には彼女はおるのか？　どうじゃな、うちの孫娘（このか）なぞ？」

しかし、二人はアスカの視線など知らぬまま、やり取りを続ける。

「ややわ、じいちゃん」

木乃香さんがどこからか出した金槌でガスッと学園長の頭を突っ込みを入れる。ダクダクと学園長の頭から血が流れてるんだけど誰も気にしない。お陰で二人の疑問の視線はなくなったが、これを当たり前の風景として馴染んでしまったのは喜ぶべきか悲しむべきか。

「ちょっと待ってくださいってば！　アスカは別にしてもこんな子供（ガキ）が先生なんておかしいじゃないですか、しかもうちの担任だなんて！！」

明日菜としては高畑が担任から降りる事を気にしている。これでまだアスカが担任なら百歩譲って納得は出来るが、デリカシーのなさすぎる子供（ネギ）では納得できるはずもない。

もしかしたらアスカが最初からネギのことを言っておけば、心の準備も出来てここまで激昂しなかったかもしれないがもはや後の祭り。

「フォフォフォ。ネギ君、アスカ君この修行は恐らく大変じゃぞ。駄目だったら故郷に帰らねばならん。二度とチャンスはないがその覚悟があるのじゃな？」

頭から血をダクダク流しながらも、結局最後まで明日菜をスルーして話を纏めようとする学園長。

明日菜は全く話を聞かない学園長からアスカへと一縷の望みをかけて縋る様に見るが諦めてくださいと首を振ると、何を言っても無駄と諦めたのか腕を組んで納得いかないという表情をしながらも黙って後ろに下がった。

「は、はいっ、やらせてくださいっ」

ネギがハッキリとそう言ったが学園長以外の三人は先行きの不安を覚えた。

《アレは自分の事しか考えておらんな》

《学園長も何を考えているのか修行や課題という言葉を連発していますからね》

《往来で脱がされた明日菜が哀れじゃな》

《そうですね》

玉藻は別にして初対面のリインフォースですらネギの評価が低い。女として往来で脱がされれば評価が最低になっても仕方ないか。

「アスカ君もいいかね？」

「……確認しておきますけど学園長、責任者のあなたが全て承知しているんですよね？」

暗に何かあればあなたが全ての責任を取るんですよね、と含めた最終確認を学園長に取る。

「フォフォフォ。何、良くも悪くも教育実習の期間は一か月も無い。精一杯やってみなさい」

既にネギは問題を起こしているんだが、初日からこんなことだとどれだけの事が起きるのやら。

が、証人もいるし言質も取ったことでアスカは大人しく引き下がった。

「わかりました。ならばやらせて頂きます」

「うむ、では今日から早速やってもらおうかの。アスカ君はもう知っておるが指導教員のしずな先生を紹介しよう。しずな君」

「はい」

学園長の言葉にその声と共に扉が開き、入り口から1人の女性が入ってきた。

その人はメガネをかけ、パッと見ただけで母性溢れるといえそうな女性でネギがそっちを向くとその大きな胸に顔を埋めた。

「む”」

「あら、ごめんなさい」

何故か、しずなの胸に振り向いたネギの顔が挟まれましたよ。相手が大人でよかったね。と言うか、実は狙ってたんじゃね？と思わずにはいられない。

《ラッキースケベ2じゃ》

《子供だから許されることですよね》

大人がやればビンタは間違いないだろう。狙ってやっていたらそれはそれで問題だ。

「分からない事があったら彼女に聞くといい」

「源しずなよ。よろしくね」

「あ、ハイ……」

ウィンクしながら笑顔でそう言うしずなにネギは惚けていた。大人の魅力に誑(たぶら)かされたらしい。ネギが年上趣味だとすると幼馴染のアーニャの恋心は数年先になって大きくならなければ難しそうだ。

そんなこんなで、学園長との話も終わり教室へ向かうことに。

「そうそうもう一つ、このかとアスナちゃん。しばらくはネギ君をお前達の部屋に泊めてもらえんかの。まだ住むとこ決まっとらんのじゃよ」

「げ」

「え……」

「ん～うちは別にええよ」

学園長から告げられた言葉に明日菜は本当に心底嫌そうな声を出し、自分の所為とは気づいていないが明日菜に良い印象を持っていないネギも同じような声を漏らす。

木乃香は少し考える素振りを見せてから了承した。アスカとは違って子供らしい子供ということで近所の年下の子を預かる感覚に似ている。

「もうっ！　そんな何から何まで学園長っ！？」

納得していないのに勝手に決められれば世話になっているといっても不機嫌にもなろう。詰め寄って抗議する明日菜を学園長はやん

わりと説得するが、第一印象が悪すぎたため説得できていない。

「教師と生徒が同じ部屋なのは色々と都合が悪いと思いますが？寮に空きがないにしても独身者の部屋や寮以外で暮らしている人の所に入ってもいいと思いますし、学園長の頼みでなら何とかなるでしょう？」

アスカの場合は異性といえども年下で生徒として通ったので受け入れられた面が大きい。教師と生徒が暮らすのは何かと問題が大きい。だからこそ、アスカも寮を出たわけでもある。

学園長が強権を発揮すれば多少の無理は聞く。寮に空きが来るぐらいまでなら受け入れてくれる人もいるだろう。

「そうですよ、学園長！！」

アスカが続けて言うと明日菜は更に学園長に詰め寄る。

学園長はアスカの言葉を受けて少し考えている。

「それに、大人でも大変らしい子どもの面倒を中学生2人、というか木乃香さんに任せるのはどうかと思いますが」

「君も同じ条件だった筈じゃが？」

「僕は兄さんとは違い生徒という立場でしたし、一通りの家事は出来ましたから少なくとも二人の負担にはなっていないと自負しています」

ただでさえ子育ては大人でも難しいのに多感な女子中学生に任せ

るのは如何なものか。

アスカの時も同じ条件だったが彼を基準にするには色々と規格外すぎる。負担どころか逆に彼女たちが世話をされていたと言ってもいい。

アスカが自身を持って負担にはなっていなかったと語ると、確認の為か学園長が明日菜と木乃香を見て、二人は頷いて認めた。

「可愛ええよ、この子」

「アスカならいいけどこんなガキは嫌なんだってば！」

「仲良くしなさい」

結局は学園長のその一言で明日菜は黙り込むことしかできなかった。

学園長に色々お世話になっている身である為、あまり無理は言いたくないのだろう。感情では納得は出来ないが学園長がそう言うなら我慢するしかないと考えているのだろうと思うとアスカの口からため息が零れる。

明日菜に向かって「ゴメンなさい」と頭を少し下げるが、「気にしないで」とばかりに力なく首を振る彼女を見て、せめてなにかあった時は手助けしようと心に決めた。

第三十一話　再会する少年（後書き）

次回の更新は『日曜日』の午前０時に予定しています。改定前は合わせて一話だったんですけど、一日目の後編です。

主人公の出番が少ないような……。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

第三十二話　　ネギに困らされる少年（前書き）

前話の続き、形としては後編みたいなものでしょうか。

文字数は１５７４１字となります。

第三十二話　ネギに困らされる少年

その後しずなが制服を取りに行き、別室で明日菜が着替えている間に木乃香とネギの二人には話せない内容を話すからと頼んで学園長室を出てもらって、学園長との間で給料の件で折衝を行った。

教育実習なんて二人が働く為のただの口実に過ぎない事を知っていたので、アスカは学園長に給料を要求した。本当に小さい頃から自分でお金を稼いでいたので、お金の大切さはよく理解している。

その旨を伝えてアスカの意図を理解した学園長は、僕達が子供だから大きすぎる金額を渡すのは危険だと言う。対してこちらは教師が子供であるはずがないという理論を展開した。結果、諸経費は向こう持ちで、手取りがアスカと学園長、二人が最初に提示した金額の間が給料として貰えることになった。

ちなみに給料を貰えるのはアスカだけでネギの場合は木乃香に生活費を渡して、小遣いという形で渡すらしい。アスカには文句を言うつもりなどない。

明日菜の着替えも終わって学園長室を出てからも、明日菜とネギはお互いに決して顔を見ようとはしなかった

「あの……」

「あんたなんかと一緒に暮らすなんてお断りよ！！　じゃあ私、先行きますから先生！！」

そして恐る恐る話しかけようとしたネギに、明日菜は睨み付けな

がらはっきりそう言って木乃香と先に教室に先に向かって行ってしまった。

廊下にはスプリングフィールド兄弟、指導教諭のしずなだけが残っている。ネギは明日菜がいなくなると彼女のあんまりな態度（若干大人気ないにしても客観的にみると反対）に不満が口をついてる。

「何ですかあの人は～～？」

「ウフフ……あの子はいつも元気だからね。でもいい子よ」

大人な対応をするしずなだが、仲違いしている理由を女性であるあなたが知れば間違いなく明日菜さんの味方をすると思われる。普通は人が少なかったとはいえ下着のみ格好にされれば誰でもああなっても不思議ではない。

それから少し歩いた所で不意にしずなの歩みが止まった。

「ハイ、ネギ先生これクラス名簿。「あ、どうも」それより授業のほうは大丈夫なの？　ネギ君、アスカ君」

しずながネギにクラス名簿を渡し、二人に尋ねてきた。

「あ……う……ちょ、ちょっとキンチョーしてきました」

「準備はしてありますから」

初対面で日本に来たばかりのネギと、何ヶ月も前から来て生徒として通い、事前に準備をして三学期になってからは模擬授業も行っていたのアスカを比べるのは可哀想だろう。

そのことを知っているから、しずなもアスカに関しては左程心配はしていないようだった。

「ほら、ここがあなた達のクラスよ」

緊張しているネギの様子を微笑ましそうにしずなは見ている。

身長差を活用して、しずなに促されて教室を覗いているネギの上から中を見る。相変わらずというべきか教室の中は喧騒に満ちていた。

教室を覗き終わると出席簿を開いて生徒を確認しているネギをしずなと一緒に後ろから見る。

「げっ……い、いっぱい……」

学校なのだから一杯いるのは仕方ないが現実を直視して気後れしてしまったようで、やっていく自信が薄れたのか俯いてしまった。

全員自分より年上の人で３１人の顔と名前を見たら気後れするのが普通の反応だろう。魔法学校は一学年十人にも満たないから余計に多く感じるのかもしれない。

「早くみんなの顔と名前を覚えられるといいわね」

「あうっ……」

二人のやり取りを黙って聞いていたアスカは扉が若干開いていて、視線を上に向けるとそこには黒板消しが挟まれているのが見えた。

《これは……》

《これは黒板消しトラップか》

《単純というかこのクラスらしい言うべきなのか》

ネギは自己完結したのか俯いていた顔を上げてカチンコチンに緊張したまま扉を二度ノックして、気づいていないことを察したアスカが止める間もなく、扉を開けてしまい黒板消しトラップが発動してしまった。

「失礼しま……」

警戒心もなくネギが扉を開けると、頭上から黒板消しが降ってきた。

これぐらい気付くだろうと、何もせずに見ているとネギの頭に落ちる瞬間に常時展開していた障壁が消えずにピタッと受け止めた。黒板消しがネギの頭上で止まるのを見た生徒達が一瞬ざわつき……信じられないような物を見たような雰囲気を醸し出す。

アスカが1秒程浮いた黒板消しを「迂闊すぎる！」と心の中で罵倒しながら、瞬時に後ろから手を下手に伸ばして取る。

（このクラスには勘の鋭い者が多いんだから勘弁してくれ）

本人は隠そうと必死なのかもしれないが、傍目から見ているとわざとやっているように見える。ネギを見ているとそのうちクラス全員に簡単にバレてしまいそうだ。

魔法学校を主席で卒業したのだから多少はマシかと思っていたのに、アスカの中でネギの評価がどんどん暴落していく。しかも、アスカが黒板消しの事を取ってからようやく気付いたし。

教室から「ちっ」と舌打ちが聞こえたけど果たして罠に掛からなかったからか、裏の関係者がネギが魔法漏洩しかけたことに対するのものなのか判断がつかない。

改めて教室の中を見れば足元にロープがあり、再度アスカがネギを静止を呼びかけようとするが。

「ネギ先生」

「え、「足元に罠が、って遅かったか」へぶっ!?　あぼ！　あああああ、ぎゃふんっ！」

アスカの声にネギは顔だけ振り向いたがそれが不味かった。

踏み出した足がロープに引っかかり、その直後に罠ごとに奇声を上げながらロープに足を取られて転び、バケツが降ってきて直撃しておもちゃの矢が尻に命中し、その勢いのまま教壇に背中から激突した。

今更だが、もしかしてこの罠ってアスカ用なのだろうか？

「あらあら」

後ろにいるしずなの呆れた声と罠に掛かったのを笑うクラス中を見渡すと明日菜が、今の黒板消しがネギの頭上で止まったのに疑問

を持っているのが分かった。

「えっ……」

「あ、あれ……？」

そこでようやく罠に掛かったのがアスカじゃないのにまき絵と桜子が気付いた。初めからいたのに気付いてもらえないって何事だろうか。

「え――っ。別人？」

「君！　大丈夫！？」

「ゴメン。てっきりアスカ君かと思って」

アスカならこんな罠に掛かるのはいいのだろうか。もしかしたら単純にアスカなら避けてしまうと踏んだのかもしれないが。

「いいえ、その子もあなた達の新しい先生よ。さ、自己紹介してもらうからみんな席について。ネギ君」

「は、はい」

しずながパンパンと二度手を叩いて生徒の注意を引いて、席に着いたのを確認すると、ネギは教卓の後ろに立ち、ここからでも唾を飲み込む感じる程にたどたどしく口を開いた。

「ええとあ……あの……。ボク……ボク……今日からこの学校でまほ……英語を教えることになりました。ネギ・スプリング

フィールドです。3学期の間だけですけどよろしくお願いします」

しずなの横で聞いていたアスカは思わず頭痛がしそうな頭を手で押さえる。裏の関係者の何人かが同じ事を考えたのか頭を抱えているのが見える。

エヴァンジェリンに至っては「こんなのが魔法学校の主席なのかと？」と問いたげな視線を向けてくるのが重症の証拠だ。茶々丸もそんな主に習っているのかネギからこちらへと視線を移している。

自分は知らんし、関係ないと首を振るアスカ。

ネギへの評価が既に最初の半分以下になっているから、裏の関係者のその気持ちはよく分かる。

（兄さん今、絶対に英語じゃなくて魔法と言おうとしただろう）

魔法と英語をどうやって言い間違えるんだよ……と会って一時間程度しか経っていないのに既に諦めモードに突入しかけていた。頭が良いくせにバカ、という典型だ。それも、救いようがあるバカではなく無い方のバカだと確信した。

最初は呆然とネギに視線を向ける生徒達だが直ぐ様時間が動き出した。

「「「「「「「「「「キャアアッ！　か、かわいいいーーーーっ！」」」」」」」」」」

学校を揺らすかのような大歓声と共に生徒達は立ち上がって一斉に立ち上がりあっという間にネギを殺到して囲み、もみくちゃにし

はじめる。

アスカと違い、明日菜と木乃香以外は初対面で、見た目も中身も子供だから完全に愛玩動物扱いだった。このクラスを知っているなら、いまさらながらありえる光景なので見送りながらしみじみと嘆息した。

「何歳なの～～？」

「えうっ！？　その、数えで１０歳で・・」

「どっから来たの！？何人！？」

「ウェールズの山奥の」

「ウェールズってどこ？」

「今どこに住んでるの！？」

「いや、まだどこにも・・」

「スプリングフィールドってアスカ君と同じ性だよね。もしかして知り合い？」

「えっと、アスカ僕の双子の弟です」

生徒達から矢継ぎ早に告げられる質問にネギは答える端から次の質問を上げられ翻弄されている。

《若いな……》

《いや、主もヤツと同い年じゃから》

《それに主は彼女達よりも年下ですよ》

思わず生徒たちの熱意に老けるアスカ。知っていたとは言えその元気さに思わず現実逃避をしてしまうが、玉藻とリインフォースに突っ込まれて現実に戻ってきた。

「……マジか？」

「ええ、マジです」

よほど信じられないのか、アスカの傍に来て聞いてきた千雨にそのまま返すが、その間もネギは生徒達に揉みくちゃにされ続けている。

「ねえ、君ってば頭いいの！？」

「い、一応大学卒業程度の語学力は」

「スゴーイ！！」

「あーーんカワイーーー」

「わわーーっ」

ネギは今もハルナの中学生らしからぬ胸に抱きしめられ、全身をかい繰り回されている。あの立場ってある意味男の天国だよな、とまた現実逃避しかける。

「ネギ君はちゃんと教師の資格を持ってるけど見ての通りあなた達より年下よ。お手柔らかにね」

そもそも教育学部どころか大学にすら通ってないから完全に偽造です、資格なんて持ってないです、と言ったらどうなるのか。そんな囁きがアスカの胸の内に湧いた。

取り合えず……誰が見ても立派な犯罪です。

「「「「「「「「「「「「「「「ハーイ」」」」」」」」」」」」」」」

しずなの声に元気良く返事する生徒達だが、一向に騒ぎが治まる気配は無い。

が、何かを考えていた明日菜がその輪の中に入って行き、ネギの襟元を掴んで教壇の上に乗っける。

「さすが、力持ちや」

「おお」

「何、明日菜？」

上から亜子、桜子、美砂と続いて言って周りが何かあるのかと気になって二人から少し離れている。

「ねえ、あんたさっき黒板消しに何かしなかった？　何かおかしくない？　あんた」

「え……」

突っ込まれてそんな露骨にギクッとして顔から血の気が引いてたら何かしたって言っている様なものじゃないか。

「キッチリ説明しなさいよ――！」

「あうあう」

明日菜がネギのスーツの首を持って吐かそうとするのを見て、アスカがそろそろ止めるかと動こうとしたが二度机を叩く音がしてそちらにみんなの注意が向く。

「いい加減になさい！　皆さん、席に戻って先生がお困りになってるでしょう。明日菜さんもその手を放したらどう？　もっともあなたみたいなおサルさんにはそのポーズがお似合いでしょうけど」

机を叩いたのは委員長であるあやかで、何か背中に花が飛んでいそうな優雅に微笑みと共に発した声は教室に響いた。

「何ですって？」

ギヌロンッと擬音がしそうな視線をあやかに向けながら威嚇する明日菜。正直その視線が怖くて踏み出そうとしたアスカの足は二の足を踏んだ。

「ネギ先生、先生はオックスフォードをお出になった天才とお聞きしておりますわ。教えるのに年齢は関係ございません。どうぞホームルームをお続けになってください」

ずっとウェールズにいたネギがオックスフォード大学なんて出ていない。アスカとしては流石に義務教育の学校内で年下に教えられるのは嫌だ。

アスカは何も理由無く年下に教えられるのが嫌って訳じゃなくて、先生って言うのは呼んで字の如く”先に生きている”って書くんだから先に生まれた人ってことだと思っている。先に生まれたって事は大小の差はあれど、生きてる時間が長い分経験が豊富だからだ。学校で教えている勉学を教えるだけなら塾の講師に頼めばいい。そっちの方が専門家なんだから頭は良くなるだろう。学校では勉学だけでなく、社交性等など塾では学べない事を学べる場所だ。そういうものは人生経験の多い人からの方が学ぶべきことは多い。

「は……どうも」

「委員長何いい子ぶってんのよアンタ！」

明日菜はあやかの言い方が気に入らなかったのか、そちらに視線を向けてネギを掴んでいた手を放す。

「ふ……あら……いい子なんだからいい子に見えてしまうのは当然でしょ」

あやかは明日菜の言葉を余裕の態度で受け止めるが、アスカにはこの後の展開が読めたので再度溜息を吐く。

「何がいい子よ！　このショタコン」

「なっ」

言われた言葉に先ほどのネギに突っかかった明日菜のように掴みかかり、喧嘩を始めた。

「言いがかりはおやめなさい！　あんたなんかオヤジ趣味のくせにいい」

周りから見ればどっちも趣味が対極過ぎるというだろうな。明日菜のオジコン、あやかのショタコン、ホントに足して二で割ればちょうどいい趣味になりそうだ。

「なっ」

「知ってるのよ、あなた高畑先生のこと……」

別に言われなくても気付かれていないと思っているのは本人のみで、クラス全員知っていることだ。

「うぎゃーー！　その先を言うんじゃね――！　この女――ッ」

「あの、やめ……」

何時も通り取っ組み合いの喧嘩を始めた二人に、それを知らないネギが仲裁に入ろうとするが、周りの二人の煽る様な空気によって遮られていた。

「――――――全員着席しなさい」

騒いでいた教室に決して大きくはないアスカの声が波紋となって広がる。なにか特別なことをしたわけではなく、ただ声を発しただけ。アスカが命じると、生徒たちは飛ぶようにして席に戻った。ア

スカは全員が落ちつくのを待ってから、教室中を見渡して言った。

「他のクラスは授業中です。喋るなとは言いません。ですが、他のクラスの迷惑にはならないように」

生徒は教師の能力を敏感に嗅ぎ分ける嗅覚を本能的に持っている。たった今、生徒たちの鼻はきなくさい臭いを嗅ぎ分けていた。ついこの前の生徒だった頃の延長線だと想像していたよりも何十倍も手強い教師が現れたことに気付いたいのだ。子供だとしても、教師としてちゃんと授業をするとなれば話は変わってくる。

「時間も押してるので授業しますよ。全員、席に戻って。それではネギ先生お願いします」

授業が出来る環境が出来上がったことを見てとり、固まったままのネギに任せる。ここら辺は慣れなどの部分があるのでネギが出来なくても仕方がない。

「は、はい」

自分はどうすることもできず、掴み合いをしていた二人どころか他の生徒たちをあっさりと座らせたアスカにネギは驚いていた。

形はどうあれ、生徒達の期待と一部の失望の眼差しを一身に受けた自覚のネギでも授業を始められそうだ。

「それでは私は自分の授業の準備をしますので職員室に戻ります」

「え、ええ分かったわ」

アスカの授業は次の時間。自分の授業の準備のためにしずなに言ってから教室を出て職員室に向かった。

その途中で何かを忘れていることに気付いた。

《アレ？　僕って何しに一緒に教室に行ったんだっけ？》

《一緒に挨拶に行った筈なのに完全に主は忘れておったな》

《言おうとはしたんですけどね》

職員室に向かう途中にその事実に気付き、わざわざ教室に何をしに行ったんだと誰もいない廊下で暫くｏｒｚとなって落ち込んだ。

授業終了のチャイムが鳴り、ネギは結局まともな授業にならなかったことに落ち込んで職員室に戻ろうとする。

「ネギ先生、初授業はどうでしたか？」

教室を出ようとすると突如開けられたドアから高畑が顔を覗かせた。

「タカミチ、それが大変でさ。あまり・・わっ！？」

「た、高畑先生、こんにちは！」

突然廊下で木乃香と放していた明日菜がネギの肩を押して割り込んできた。

「あたしがついてるから大丈夫ですよ！　初授業も大成功だったんですよね！　ねっ、ネギ先生」

「え……」

真実は授業中、明日菜が消しゴムをネギの頭に投げつけてあることないことをネギに吹き込んだあやかと喧嘩を始めた。それで結局授業ができなかったのにネギの頭を撫でつけてタカミチに嘘八百を並べて喋る彼女の突然の態度の変わりように呆気にとられる。

「ほほう、そりゃあよかった。ありがとう、アスナ君。じゃあネギ君のこと頼んだよ」

「あ、は、はい」

高畑は柔らかい笑みを浮かべ明日菜の肩をポンと叩くと身を翻して廊下を歩いて行った。

高畑の姿が見えなくなるとポンと触られた肩をさすさすと撫でながら満面の笑みを浮かべる明日菜を見て、ネギはやっと明日菜がタカミチを好きな事に気が付いた。

「え～～、タカミチのこと好きなんだー」

その今更の鈍さにネギの横に居た木乃香は驚いてネギを見る。

「うるさいわね。大体なんであんたが高畑先生の知り合いなのよ。

言っとくけどあんたの面倒なんてみないわよ。あんたみたいな奴が先生だなんて絶対認めないんだから」

明日菜はネギの言葉に振り返ると先ほどの笑顔は鳴りを潜め、あかんべ、と舌を出したあとに木之香に連れられて他の生徒達に呼ばれて行ってしまった。

去り際に木之香が「気にすんなやーー」とフォローはしているがずどーんと落ち込んでいるネギには聞こえていない。

終業のチャイムが鳴り響く中、ネギは教師という初めての経験と見知らぬ環境に心身ともに疲れながら校舎を出た。

「ふーー、やっと一段落だ」

放課後は朝の大混雑とは違って下校する生徒の姿がちらほらと見えるのみだ。何処かに行く宛てもなく、歩いて辿り着いた広場の段差に腰を下ろした。

「……はぁ、初めての授業失敗しちゃったな。後でやっぱりタカミチに相談してみよう」

荷物を下ろして今日の出来事を思い出しながらリュックから水筒を取り出して飲む。

「それにしてもなんだよなー、あの子の態度。ひどいよまったくも

ー。え―とカグラザカアスナって言うんだ。・・変な名前。今日はこの子の所に泊まれって言われたけど、絶対泊めてくれないと思うな。どうしよう今夜」

水筒を片付けてクラス名簿を取り出して、問題の彼女の顔写真を見る。

親切で占いの結果を教えたのに、明日菜の態度を思い出して文句が口をついた。彼女の写真をしばらく眺めていたが、いいことを思いついてペンを取り出して彼女の写真に『いじわる』や頭に2本の角を書いて落書きする。

その落書きの出来を彼女にそっくりだと自画自賛して溜飲を下げ、満足して顔を上げた。

「フーンだ、ん?」

顔を上げると手すりの無い階段を大量の本を持ってヨロヨロ、フラフラと危なっかしく階段を下りる少女の姿が在った。

「あれ……あれは27番の宮崎のどかさん……たくさん本持って危ないなあ」

「あっ」

「!!　やっぱし!」

思った通り、足を踏み外したらしく大きく本が散らばり姿勢を崩した彼女は階段の外側に落ちた。

「きゃあああああ！」

とっさに手に取った杖が集中と同時に先端の布が解けていき、魔法を発動して地面に向かって落下していた宮崎さんの身体を浮かせる。

杖を放して駆け出し、魔法でゆっくりと落ちる彼女の身体を両手を伸ばして肩と太ももを下から抱きとめた。

「あでぼっ」

勢いが付きすぎてネギの体が地面に擦り付けられたが、彼女が怪我をするよりかはいい。

「アタタタ。だ、大丈夫？　宮崎さん……」

のどかに怪我が無いかと聞くが、落ちた衝撃で気絶していたのか反応がない。

そこでネギは直ぐ傍に人の気配を感じて顔を上げると、驚愕の色を浮かべた明日菜が立っていた。

「あ……いや、あの……その」

「う……せ、先生？」

落ちたことで気絶していたのではなく、ただ目をつぶっていたのどかはネギに助けられたと知り、驚いていた。

二人は互いに動かなくなったまま見つめ合いが続くが、明日菜は

落ちていた杖を右手で拾い、左手でネギを掴んで駆け出す。明日菜に見られたことでまだ固まっていたネギは上手く抵抗することも出来ずにお姫様抱っこの形に移行して攫われていった。

そして明日菜は木々が生い茂る場所でその木の一つにネギを叩きつけた。

「あああああんたやっぱり超能力者だったのね！！　「い、いやちがっ」誤魔化したって駄目よ。目撃したわよ。現行犯よ！！」

「あうう～～～っ」

明日菜はネギのコートの襟元を掴んで感情が高ぶってきたのか涙目で詰問する。

「白状なさい。超能力者なのね！　「ボ、ボクは魔法使いで……」　どっちだって同じだよ！！　！？　朝のアレも、アンタの仕業ね！？」

杖を振り回して白状させようとした時に、ネギの言葉に重大な事実を明日菜は気付いた。

「ゴ、ゴメンさない！　他の人には内緒にしてください。バレるとボク、大変なことに～～」

「んなの知らないわよ！」

涙目でバタバタとネギは明日菜に言うが、関係の無い明日菜にはどうでもいい話なのでネギの言葉を拒絶する。

「ううっ、仕方がないですね。「な、何よ」秘密を知られたからには記憶を消させていただきます！」

「ええっ！」

何かを決意した顔をして突然、物騒なことを言い始めて杖を構えるネギに、明日菜は先程の剣幕もなくうろたえている。

「ムニャムニャ、ちょっと頭がパーになるかもですが、許してくださいね」

ネギが呪文みたいなのを唱え始めたて、何か本当にされそうな雰囲気に思わず腰が引く明日菜。

「ギャ――――！！　ちょっと待って！！　パー――――って！？」

「消えろ――――！」

ネギが言いながら杖を突き出すと明日菜のスカートとパンツが消し飛び、そしてカッターシャツも胸の付近までが消し飛んだ。

「いやぁ――――――――――――――――――！！」

消えた服に明日菜はパニックを起こして左手でブレザーを隠しながら震える右手でネギを指差す。

ネギは疑問符を浮かべて首を捻っていた。

「あ……あれ？　ゴ、ゴメンなさい。間違えちゃっ……」

「お～い、そこの二人何やってるんだ？」

ネギと明日菜以外の第三者の、それも明日菜の思い人の声がして明日菜の顔が絶望に染まる。

その時に、朝と同じくまた明日菜にとっての救世主が現れた。

アスカは初めての授業も終わって少なからず落ち着き、やっと落ち着けた放課後に校舎の外の自販機で買った烏龍茶を飲んでいた。

授業はどれだけ理解しているのか学力を調べるために、小学生でも分かる問題から中学2年生全般の問題を記載したプリントを現在の理解力を知るためなので特に百点を取る必要はないから解答欄を空欄にしないようにだけ言って配ってやらせた。

２－Ａの結果は天才四人、次点が三人に普通より若干下が大勢で馬鹿次点が四人、最後に馬鹿五人と極端すぎるものだった。

回収した後はもう一枚プリントを配って幾つかの公式を教えてやらせた。

こっちは左半分が公式さえ分かれば簡単な問題で、右半分が公式を理解して初めてできる応用問題。

制限時間は授業が終わるまでで、次の時間には問題を当てた人に前に出て説明してもらうから、自分一人で分からないところは分か

る人に教えてもらうなりしておいてくださいと言って終わった。

それと罠を仕掛けた生徒には追加で宿題を与えた。文句を言ってきたが罠の事を引き合いに出して黙らせた。

アスカは自分が教師に向いているとは思えないから、学園主任の新田先生に相談してこのやり方でやっていく許可をもらい、成績がいい人は自分で勉強するように言って最低限の事だけを教えて下を切り捨てないようにすることしかできない。

授業も終わり、アスカが来た時と同じく歓迎会をやるみたいなので壁に寄り掛かりながら烏龍茶を啜って軽く休息を取っていた。

「ん？」

飲み終えたペットボトルのキャップを閉めて、そろそろ教室に向かおうかなと思ったときに少し離れた場所に知っている魔力を感じた。

この魔力は……ネギだ。

《ご愁傷様じゃ》

《主も大変ですね》

ネギがまた何かやったのかと嘆息しながら走って現場に向かう。

「いやぁ――――――っ！！」

明日菜のただならぬ悲鳴が聞こえたので、急ぐために身体強化を

して草木をかぎわけ、現場に着くとそこにいたのは杖を構えているネギとシャツもスカートもパンツも無く、文字通りブレザーだけしか着ていない明日菜が立っていた。

危急の事態と思って急いだのにあんまりな光景に、思わず走りながらこけそうになってしまったアスカは悪くない。

《女性としてこれは屈辱すぎじゃろ、そしてラッキースケベ３じゃ》

《例え男でもこれは屈辱だと思いますよ》

マメに数えている玉藻に呆れつつ、アスカも森の中とはいえ下半身裸になりたくはない。

「あ……あれ？　ゴ、ゴメンなさい。間違えちゃっ……」

記憶の変わりに服を吹き飛ばすなんてどんな間違いだ。

「お～い、そこの二人何やってるんだ？」

二人が向かい合ってる所に後数歩というところで、ネギは疑問符を浮かべて突き出した杖を見て首を捻っているが取り合えず、コトの元凶と判断した。

二人ではない成人男性の特有の低い声が聞こえて、この状態はまずいと判断し、踏み込みを強くして急いでネギと明日菜の間に入った。

「うりゃ！」

そして声の主を見るために後ろを振り返っているネギのスーツの首の襟を掴んで、強化した腕力にものをいわせて声の聞こえた成人男性の顔に目掛けて放り投げた。

「うわっ！？」

「オオゥ！！」

ギリギリで激突する前にネギを抱きとめた高畑の視界を遮れた事を確認して、着ていたスーツを脱いで羞恥心から涙を流す明日菜に渡す。

同じやり取りを朝にもしたな、と思いつつ、一日に二度もこんな場面に出くわすとは思わなかった。

「これを」

「アスカ！　あ、ありがとう」

「な、何するんだよアスカ！」

明日菜がアスカのスーツで前を隠したのを確認して、前を向くと高畑は明日菜の今の格好を見て何故そうしたのかを理解してくれたみたいで非難はなかったが、投げつけられた張本人は事の重大さを理解せずに文句を言ってきたが、それを無視してアスカはまた厄介ごとに首を突っ込んだと嘆息した。

今日だけで何回目だろうか？

文句ばかり言ってきてうるさいネギを連れて、高畑に明日菜の替えの制服を取りに行かせた。

その間に色々と扇情的な格好をした明日菜を見ないようにして事情を聞く。事情を聞いたら本当に頭痛がしてきた。

人を助けるために魔法を使ったのは問題ない。傍から見ていた明日菜の話でも、使わなければのどかが怪我をしていたのは間違いないというぐらいだ。

魔法を使う前に周りぐらい確認しろぐらいは言いたいが、緊急事態だったからその所為で魔法を使うところを見られたのは百歩譲って許せるが問題はその後の対応だ。

明日菜は超能力者だろうって問い詰めたのに自分で魔法使いと白状しておいて、上の許可も無く記憶消去の魔法を使って、何故か服が吹き飛んだとか勝手すぎるだろう。って、言うか初日に魔法バレするとか早すぎるだろう。

兄弟で片方が魔法使いでもう片方が何の関係もないとは普通思わない。当然の如く、ネギ?(つな)がりでアスカの事もバレて簡単に本当の事情を説明した。

戻ってきた二人が明日菜に制服を渡して3人でその場を離れる。

歓迎会に行く高畑と制服を着た明日菜、ネギの三人と別れて一人でネギの処罰を求めて学園長室に来て、学園長と向き合っていた。

「つまり、君はネギ君を今すぐに故郷に帰すべきだと……そう言うのかね」

事情を説明して僕の判断を話すと、学園長は日頃閉じている目を開いて重苦しく返してきた。

「はい。朝に自身の所為で、明日菜さんに掴みかかられたとはいえくしゃみで服を脱がせるは、生徒の前で魔力障壁を展開していた為に、落ちてきた黒板消しを浮かした為に何人かの生徒が不審がっていました。そして生徒を助ける為とはいえ、魔法を使うところを見られ、あまつさえ問い詰められたとは言っても自分で魔法使いと白状しながら、許可無く勝手に明日菜さんの記憶を消そうとして服を吹き飛ばしました。魔法の私的使用と魔法の漏洩、全て合わせればオコジョ刑になっても不思議ではありませんが？」

「それは……っ」

学園長がアスカの言葉に何かを言おうとして詰まる。

詰まるのも当たり前。今、アスカが上げたのは一例を別とすれば魔法で生徒を助けるのとは一切関係ないことに使っているのだから。

「僕も生徒を助けた事に対しては何も言うつもりはありません。だけど、他の行動は余りにも目に余ります。魔法は秘匿すべきもの。それが暗黙の了解にしても、実践できていないならもう一度学校に戻ってやり直すべきだと思います」

「だが、ネギ君はまだ9歳じゃ。そこら辺はここでも十分に教えられると思うが」

故郷へ戻るべきだというアスカの言葉に年齢を引き合いに出してくるのならこちらにも考えがある。

「現実問題に既に被害は出ており子供だからと済ませられる問題ではありません。魔法学校を卒業して”教師になる”という卒業課題に同意して此処に来た時点で、子供扱いするのは如何なものかと思います。学校外なら子供扱いも構いませんが、学校内にいる以上は一般教師、一般魔法使いとして同じ扱いをすべきです。そもそも子ども扱いするなら初めから教師になどするべきではありません」

「ぐ……」

反論しようもない正論に再度詰まる学園長。

そして言い合いの最中から何かを考えているのか、目を瞑って聞いていた学園長が目を開いてアスカを見る。

「……うむ。アスカ君の言い分は分かった。だが、ネギ君が子供であるのもまた事実。初犯じゃから今回はペナルティとして厳重注意と給料の減俸、それでどうじゃ？」

「当然、神楽坂さんの吹き飛ばした制服も弁償するんですよね？」

その内容に眉がピクリと上がる。確かに正論ではある。ネギが子供であることは変えようもないし、疑いを持たれたのは別にしてバレた理由が人助けをしてだからオコジョ刑や故郷送還までは行かなくてもよい。

つまり、人助けのためにしたし、他に方法がなかったからある程度は見逃そうということだ。それでも罰とペナルティは存在するが。

少なくとも明日菜に言い触らそうという感じが見えないから妥当な判断と言える。アスカとしては何となく同じ事が続きそうな気がするので再教育してくれた方が気が楽だが。

「もちろんじゃ。そして注意してもネギ君が直らんかったのなら、それ相応の罰を受けてもらう」

アスカとしても今はまだ不確定要素は出したくないから、ここらへんがお互いが妥協できるギリギリ妥当な範囲。己の心の不可思議な苛立ちに気づかぬまま、アスカは一人心中で納得する。

「そう言えばネギ先生と神楽坂さん、近衛さんとの同居を解消した方がいいのでは？　お孫さんに魔法の事を知られるのは不味いのではないでしょうか？」

「む、何故そう思うのじゃ？」

「関東魔法教会と関西呪術教会の両長の直系、膨大な魔力、とそれだけの狙われる理由がありながら本人は常に膨大な魔力を垂れ流している。これだけの事実があれば近衛さんには裏の事は知らされていないと判断できます。恐らくですがそれは裏に関わらせたくないという両親の希望なのではないですか？」

アスカ自身の判断としては両親の血生臭い裏に関わらせたくないという思いは、確かに尊いと思う。だが、それも両長の直系で膨大な魔力さえ持っていなければという注釈はつく。

その思いはただの裏の人間には通用するが、自身に狙われる理由がある木乃香の場合は害悪にしかならない。

これまでが大丈夫だったからって、これからもそうだとは限らない。何れ、ただ一人の跡取りとして何時か裏の事を話す時が来るにしても、せめて自衛の手段ぐらいは覚えさせるべきだったのだ。

本人が後を継ぐのを嫌がったしても狙われる理由は消えない。血と資質は死ぬまで消えないのだから、社会人になっても護衛を傍につけられる筈はない。

それでも裏に関わらせたくないというのなら、魔力や記憶を封印して自分達の傍から離すべきだ。中途半端にして何かあったらどうするつもりだったのか、聞いてみたいものだ。何かあってからでは遅いのだから。

「うむ、アレの親の方針でな。木乃香には魔法の事は伝えておらん」

「ならば、既に神楽坂さんに魔法がバレた事を考えれば同居は望ましくないと思いますが？」

「注意すればネギ君も頭のいい子じゃし、反省してくれるから大丈夫じゃろうて」

学園長はなにやら自身を持っているが絶対に何かやらかしそうに思うのはアスカだけなんだろうか。

と、いうか元々、他の部屋でもネギぐらいの子供なら無理をすれば入れないことはないのだから同居の必然性はないはず。

《ここが落とし所じゃろう》

《それとアレを出しておいた方がいいのではないですか？》

リインフォースの言葉で存在を思い出して、スーツのポケットからこのために作っておいた紙を学園長の前に差し出す。

「分かりました。コレを認めていただけば僕はこれ以上言いません」

学園長が今、手に取って見ている紙は簡単に要約すると「アスカに一般の教師として以外の仕事をさせない」というものだ。

今日働いてみて実感したが教師という職業は存外に忙しく疲れる。唯でさえ忙しいのにそれ以外の事など出来るはずが無い。

これには学園長もごねたけど、この不祥事を本国に通報するかもと言葉に込めたら渋々サインした。控えにもう一枚サインしてもらい片方ずつをお互いに持ち、話も終わり目的を果たせたアスカはネギを呼びに教室に向かった。

そして教室の前の踊り場に来たんだが、何人か集まって明日菜とネギがキスをしようとしているのを見てるんだけど、どうしたらいいんだろうか？

「みんな、何してるんですか？」

「ア、アスナさん。あなた……こ、こここんな小さい子を連れ出してあなたは一体何をやってんですか！！」

アスカの言葉を切欠として、二人がキスしようとするのを固まって見ていたあやかが我を失って走り出した。

明日菜とネギの二人を和美がパシャパシャっとカメラのフラッシュを焚いて、キス一歩手前を激写する。

「ち、ちが「何が違うものですか。こ、こういうコトだけは絶対にしない方だと思ってましたのに！」ご、誤解よ委員長。ほら、あんた……じゃなくて先生からも何か言ってくださいよ！」

「えうっ」

我を失ったあやかに詰め寄られながら一応は仲直りしたのかネギに敬語で助けを求めている。

あやかの暴走を始めた発端がアスカっぽいんだけど本人としては事情が分からず、止めた方がいいんだろうか、と悩んでいた。

何かネギが来てからこんなことばかりしている気がする――――いや、何時もこんなのばっかの所にネギの問題が加わっただけか、事実に気づいて諦観を抱いた。

「言い訳は見苦しいですわ、アスナさん！」

「え……いや……」

「ホラ、先生早く！！」

また止めなきゃいけないんだろうな、とアスカが考えていたところでネギの様子がおかしいことに気付いた。

「その……きっ……き……記憶を失え～～～っ」

「ええい、阿呆が！！！！！！！」

あやかが明日菜に詰め寄り、明日菜が兄に助けを求めるが、混乱したネギは記憶消去の魔法を使おうと杖を突き出したため、魔法を使わせないようにアスカが近寄って下から杖を蹴り上げて空中に飛ばす。

落ちてきた杖を掴んでネギに返しながらアスカの大声に固まった全員に指示を出す。

「これ以上騒ぐな、全員教室に戻れ！　ネギ先生は学園長が呼んでいるので学園長室に行って下さい！！」

多少は反省をしないネギに対する怒りがあったのは事実だが、共通の知り合いがいることが分かって仲良くなった新田先生から学んだことを活かす。

こういうときは強気に出るのが一番だと学習したので、実践すると生徒達はぶーぶーと文句を言いながらも従って教室に戻り、怒鳴られ慣れていないネギは混乱したままフラフラと学園長室に向かって行った。

アスカも教室に戻るために歩くが、みんなの一番後ろで明日菜に小声でネギが軽い罰とはいえ処罰されることを伝えた。

「処罰ってどんな？」

「初犯ですから厳重注意と給料の減俸、それと明日菜さんの制服の弁償です」

「……そう」

子供嫌いを標榜していても明日菜は優しいから、子供が処罰されるという事実にあまりいい顔はしないが、制服が弁償されるのは嬉しいようだ。

やはり学園長に養ってもらっている立場だから気にしていた。

「それと恐らく明日菜さん達の所にネギ先生を泊めるのは避けようがないと思います。後ネギ先生は寝ぼけて違う部屋で寝ている姉の布団に潜り込むぐらい寝相が悪いのと、その姉に明日菜さんが似ているんで、もしかしたら潜り込んでくるかもしれないので注意してください」

「そ、そうなの気をつけるわ」

穿り出した昔の記憶にそんなことがあったことを思い出し、まさか今もそうだとは思わないが念のために伝えておいた。

教室に戻ると高畑としずなが並んで座っていた。

「やあアスカ君、初日の授業お疲れ様だったね。ネギ君は？」

「高畑先生、しずな先生。ネギ先生なら学園長に呼ばれている、と私が伝えたので今は学園長室にいるかと」

事情を知らない高畑はネギが何処に行ったのかと聞いてきたので正直に答える。そうなのかい？　と呼ばれた理由が分からないからか高畑も学園長室に行ってしまった。

慌てて教室を出て行った高畑を見送ってしずなに今日あった授業中の出来はどうだったのかと話を始めた。

「ねぇアスカ君。アスカ君とネギ君ってホントに双子の弟なの？ネギ君と髪の色とか似てないよね」

しずなと話しているとメモを持ちながら和美さんが話しかけてきた。

遅かれ早かれ、何時か誰かに聞かれると思っていたから答えるのは吝かではない。他の人たちも気になっているみたいだし、いい機会だろう。でも、ネギには聞かなかったのか？

よく考えればネギも理由を知らないのだから答えようがないのだろう。

「簡単な話ですよ。ネギ先生は父親似で私が母親似なだけですよ」

「へ～」

和美は手元のメモにアスカが与えた情報を書きこんでおり、周りもそうかと納得している。

「でも兄弟の割りには今日一日二人でいるところを見てないんだけど？」

「僕は留学してましたからちゃんと顔を合わせて話をしたのは……彼是（かれこれ）六年振りになりますかね？　だからどう接したらいいのか分からないっていう単純な話ですよ」

「そ、そうなんだ」

以外に重いアスカの話にクラスの雰囲気が葬式もかくやという感じになり、話題を転換しなければならなかった。涙ぐましい努力で何とか雰囲気も回復して、ネギが青い顔で落ち込んで教室に戻ってくるまで歓迎会は続けられた。

歓迎会の片付けも終わり、解散して家が近くのエヴァンジェリンと茶々丸と一緒に帰る途中、ネギの処罰の事を伝えるとアスカがいない歓迎会の間にも高畑に読心術を使っていたと聞いてまた頭痛がしてきた。

高畑も読心術をされて気づかないはずがなく、止めないのだから救いようがない。

月明かりの照らす麻帆良の帰り道で、今日何度目か分からないぐらいに今後の先行きの不安を感じた。

――――――やっぱり追い出せば良かったかも

ポツリと呟いた一言がこれから何度も思い出すのは皮肉か、これからのことを暗示したものだったのか。

第三十二話　　ネギに困らされる少年（後書き）

これからの更新は大体週二回を予定しています。しかし、週一回になったり、週三回になったりと変動する場合があるので注意してください。

次回の更新は『水曜日』の午前0時に予定しています。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

第三十三話　　頭の痛くなる少年（前書き）

すんません、投稿し忘れてました。

急いでやったので誤字や間違いがあるかも。あったら報告してくれると嬉しいです。

文字数は１５７６０字と多めです。

第三十三話　頭の痛くなる少年

放課後、暖かな春の日差しの中で窓の外に桜が舞い散るのが見える教室前の廊下、壮年のスーツを着てポケットに両手を入れた男性と鈴の髪飾りをつけたツインテールの少女が向き合っていた。

少女の後ろには、まだあどけない笑顔を浮かべた少年がハートマークが大量に付いて、何故か煙を上げる奇妙なバケツを持っていた。

少女は頬を赤らめて俯いており、目の前の男性を見ないことから余程鈍感でなければ、少女が男性に恋をしていると誰でも気付くだろう。

少々カップル、と言うには年齢の差が気になる二人だが、少女の表情に浮かぶのは間違いなく恋する乙女のそれだった。それと何故か、窓は閉まっているのに廊下にも桜が舞っているのは突っ込んではいけない。

「高畑先生……あの、おいしいお茶が入ったんですが飲んでいただけませんか？」

そう言って少女は壮年の男性、高畑に両手に持っていた湯気を立ててハートマークに「ホレ」と書かれたコップを差し出した。なんじゃそれと突っ込める人間がこの場にいないことが悔やまれた。

「ふふ、コレはホレ薬だろ？　こんなもの必要ないさ」

男性は目を閉じ、右手でスッとコップを取り上げて年上の魅力を全面に出し、ニヒルに笑って少女に答える。妙に格好をつけすぎで

なければ。

「え……どういうことですか……？」

コップを取り上げられた少女――――――神楽坂明日菜は空いた両手を胸の前に持ってきて、男性――――――タカミチ・Ｔ・高畑の笑顔にハートを打ち抜かれながら言葉の意味を問うた。

何時の間にか後ろにいた筈の少年――――――ネギ・スプリングフィールドがいなくなっているが心を打ち抜かれた明日菜は気付いていない。

「はっはっはっはっ。何故なら元々、僕は君の事を愛しているからさ」

「ええっ！？」

腕を広げて笑いながら少女の問いに答える高畑の言葉に驚きの声を上げて、先程よりも頬を赤らめる明日菜。そしてネギと同じように高畑が持っていたコップが無くなっているのにも、明日菜は気付かない。

「あ……」

高畑は一歩、明日菜に近寄って左手をそっと伸ばして頬に添える。この動作が示すものはたった一つ――――――キスだけだ。

「明日菜君……」

「た、高畑先生」

桜が二人の間を舞いちり、高畑は少女、明日菜にキスをしようとぐぐっと顔を寄せていく。

自身が憧れの人にキスをされると悟った明日菜は、早鐘のように鼓動を鳴らす心臓が高畑に聞こえるんじゃないかと思いながら、目を瞑ってその時を待つ。

「タカハタセン・・セ・・」

明日菜は寝相が悪いのかうつ伏せの姿勢でパジャマの上着は腹まで捲くりあがり、ズポンは太股ぐらいまでに擦り下りて下着が見えている。

まあ、現実に高畑が明日菜にキスしようとすることはなく、さっきまでのは最初から最後まで彼女が見ていた夢である。

夢の影響か恋の相手である元担任の名前を口にしながら、唇を突き出してキスをしようとする。そこで本来なら相手もいないので枕か布団にキスするだけで済むのだが、今回に限り違った。

何故かそこにネギがいて明日菜に抱きしめられており、明日菜が右手でネギの頭を押さえてその額にキスをしていた。

「んん……」

明日菜の抱きしめる腕が苦しいのか、またはキスをされる感触に違和感を感じているのかどちらか分からないが、寝ながら苦しそうな声を漏らす。

「……！？」

そのネギの声に明日菜はピクピクと瞼を震わせてゆっくりと目を開けて、目の前のネギを寝起き特有の動きの鈍い頭で認識した。

「キャ――――――――――――ッ！？」

ネギが自分の布団にいることに気付いた明日菜は、早朝の麻帆良学園女子寮に響き渡るほどの大声で悲鳴が上げた。

その声にようやくネギが目を開ける。

「ちょっ、ちょっとあんた。何で私のベッドで寝てるのよっ！」

明日菜は飛び上がって起きて電気を付けると、自分の下の下着が見えている格好に気付いて、涙目で目の前の少年を睨みながら毛布で体を隠す。

「えう……お姉ちゃ……あ！？」

明日菜の声で目を覚まして甘えるような声を出しながら姿勢を起こして、左手で目を擦ってどうしたのかと姉を呼んで、涙目で自分を睨みながら毛布で体を隠す明日菜を見て、ようやく自分が姉と一緒に寝たのではないことに気付いた。

「ア、アスナさん！？　ススす、すいません！　僕、何時もお姉ちゃんと一緒に寝てたのでつい・・」

「な、何よそれ！？　自分の布団があるんだからそこで寝てなさい

よ！　やっぱりアスカの言うように注意しとくんだったわ」

ネギは慌てて手を振りながら謝り、明日菜は人の布団に勝手に入っていい理由にもならない、ネギの子供染みた言い訳を聞きながら、アスカの言葉を信じてネギを布団に簀巻きにでもしておくべきだったと後悔した。

そう思いながら、まだ何か言っているネギの言葉を無視してふと自身の足元の時計に目をやると、時刻は既に5時を指していた。

「わっ！！　もう五時じゃない。……行ってくるね、このかー！」

「アスナさん、どこへ？」

「ん～バイト」

寝過ごした事に気付いた明日菜は二段ベッドを降り、ドタバタと急いで着替えてネギの問いかけの声を無視し、途中で起きて来た寝ぼけ眼の木乃香に声を掛けてから、ネギの問いに明日菜の代わりに木乃香が答えるのを聞きながらバイト先に向かって慌しく部屋を出て行った。

「ネギ君。朝御飯作ってあげるよ。目玉焼きとスクランブルエッグ、どっちがええ？」

この数ヶ月は朝食作りは全てアスカがやっていたため、まだ眠そうに目をしょぼつかせながら寝巻きのまま、マイエプロンを付けながらネギに聞く。

「あ、じゃあ目玉焼きで」

そんな事は露知らずに後ろ髪に寝ている時は外しているゴムを括りながら少しの間だけ考えて、スクランブルエッグと違って食べたことがない目玉焼きを選択する。

「了解～」

ネギが考えている間に木乃香はまだ眠いのか目を擦りながら冷蔵庫から卵を取り出して、返答を聞いて料理に取り掛かる。

それを横目に見ながらネギはようやく日が昇り始めたが、まだ暗い窓の外の麻帆良市を窓から見つめ、昨日の出来事を振り返る。

（そうだった……。僕、先生をやるために日本の麻帆良学園って所に来て、昨日はアスナさんとこのかさんの部屋に泊めてもらったんだった）

ネギは昨日の事を思い出して溜息をつく。

（初日にアスナさんに魔法がバレて、歓迎会の後に何とか仲直りができたと思った後にアスカに言われて学園長室に行くと、魔法がバレた事や必要のない魔法を使ったからと怒られた。僕自身は卒業課題を中止にして仮免を没収されてオコジョにされる、と思っていたんだけど人を救ったということで注意と小遣いの減額と吹き飛ばしたアスナさんの制服の弁償というまだ軽い罰を受けることで許された。それでも直らなかったのなら、これからはもっと厳しくなるみたいなんだから気をつけないと）

気合を入れるように握りこぶしを作ったが、全てが空回りすると

はこの時のネギは思いもしなかった。

前日同じく、朝のチャイムが鳴る中で学校に遅刻しない為に走り続ける大量の生徒達の中で明日菜の怒りの声が響く。

「全くもー！　バイトも遅刻しちゃったし、ホントあんたなんか泊めんじゃなかった！！」

「えうっ、僕の所為じゃ……」

年上達の中を魔力で強化した脚力で本来在り得ないスピードで走りながら口を開く。

「仲悪いなー、二人とも」

明日菜がバイトに遅刻したのは自身が寝坊したのが理由なので自分の所為ではないというネギの言葉は、二人の横をローラスケートで走る木乃香によって遮ぎられた。

「いいこと？」

「は、ひゃい！？」

走りながら明日菜がネギの左耳を引っ張って、その耳に顔を寄せていく。

「私はあんたの正体が魔法使いだって知ってるんだからね。いい加減にしないと、マスコミやクラスメイトにバラすわよ！」

ポソポソとネギの耳元で周りに聞こえないように小声で話す。

明日菜としてはこれは脅しで、本当にネギが魔法使いである事をバラすつもりはない。アスカにも迷惑が掛かるからしないけど、さっさと自分達の部屋から出ていってこれ以上自分に関わって欲しくない。

「そうしたら大騒ぎになって魔女裁判で火炙りよ、火炙り！」

「ええ――――――っ！？」

自分が長い棒にロープで括りつけられて火に炙られる姿を幻想してネギは声を上げる。

明日菜がここまで言うのは、単純に自分の憂さ晴らしも兼ねている。自分の言葉で驚きの声を上げて、涙目になったネギを見て多少はスッとしたので溜飲を下げた。

「冗談よ。でも、私に逆らうんじゃないわよ」

「？」

（ううん。僕、先生なのに……）

投げやりに言う明日菜の言葉に分からない木乃香は疑問符を浮かべ、ネギは先生なのに生徒に逆らう事ができないことに心の中で泣き言を漏らす。

「……あの……昨日言った魔法のホレ薬はどうします？　ホントに４ヶ月で出来ますけど……」

ネギは怒らせたお詫びに、昨日、明日菜に魔法がバレて、アスカやタカミチと別れた後に明日菜が聞いてきたホレ薬をどうするのかと聞く。

「え……なっ……な……何言ってんの！！」

「わあっ！」

ネギの言葉に今朝方に見ていた夢を思い出して、心が揺れるが安易に魔法を使うのはよくないと言うアスカの言葉と、勇気がホントの魔法っていうネギの言葉をを思い出して、照れ隠しも兼ねてネギの背中に張り手を叩き込む。

「勇気がホントの魔法ってあんたが言ったんでしょ。自分の力で何とかするわよ」

「あ……」

叩かれて悲鳴を上げるネギから若干顔を赤らめて、視線を逸らしながら明日菜にネギは賞賛の眼差しを向ける。

「アスナさん、スゴイなぁ。僕も頑張らきゃ。３月までの間、立派に先生を務めて……おじいちゃんみたいな立派な魔法使い（マギステル・マギ）になるんだ」

何とか三人は遅刻せずに校門を潜ることが出来、下駄箱が教師と生徒では離れているので分かれてから、手袋を付けた手を握って再

度誓う。

「ん？　ん～と届かな……」

誓って直ぐに早速問題が発生した。本来、大人用に作られている下駄箱の上の方ではネギの背では届かないのだ。

小等部ならば背の高さも予め想定されているので大丈夫だが、中等部ではそんなことは考えられていない。中学生ならば楽に届くがネギはまだ十歳にもならない、日本で言うなら小学三、四年生ぐらいの子供だ。

左手に脱いだ靴を持って右手を伸ばし、背伸びをして頑張るがどうしても上の方にある下駄箱に届かない。

と、どうしようかと考え出したネギの横合いからすっと手が伸び、下駄箱の扉を開けた。ネギは誰が開けたのかと横を向いて開けた人を見ると、２－Ａ学級委員長の雪広あやかが立っていた。

「おはようございますネギ先生。途中まで御案内しますわ」

「ど、どうも」

ネギは何で居るのか気になったが助けられたのも事実なので言わないことにした。

あやかはネギに上履きを渡し、外靴を預かって変わりに下駄箱に入れてネギに笑顔で挨拶をする。

「おはようございます。いいんちょうさん」

「雪広あやかでございます。昨晩はよく眠れましたか？」

「ええ、とっても」

ネギはあやかにお礼と挨拶を言って、職員室に足を向けてネギの横にあやかが並行して歩く。途中まで一緒なので、二人の後を靴を履き替えた明日菜と木之香も後ろから付いていく。

何故あやかがいるのかは、明日菜も木乃香も何時（ショタコン）もの病気だろうと気にしていない。

あやかの「よく眠れましたか？」という言葉にネギの後ろのアスナの視線がキツくなる。木乃香は事情を知るが故にその様子を笑って見て、ネギも明日菜の視線に気付いたが振り向いて確認する勇気は出なかった。

一人空笑いするネギに首を捻るあやかの図は、ネギが途中で三人と別れるまで続いた。

昨日、学校から帰宅して授業とかよりもネギの尻拭いばっかしているような気がして落ち込んだアスカは、久方ぶりに玉藻が作った夕食を美味しく頂いた事で気を持ち直した。

そして何時ものように日も昇らぬ内に起床して、日課のランニングに出かける。

ランニングコースと明日菜の配達ルートが重なっているから、また会うかなと思ったが今日は会う事はなかった。どうしたのかと首を振りながらランニングを続け、家に戻り風呂で汗を流してから朝食を取って、部屋の時計の短針は7時を指しているが早めに学校へ行った。

まだ朝早く人が少ない道を歩いて職員室に入ると2年学年主任の新田先生が先に来ていた。

新田先生の担当教科は現代国語で学園広域生活指導員も兼任している。規則に厳しく、それ故に生徒からは「鬼の新田」と呼ばれて恐れられているが、麻帆良の教師は生徒と同じ立場に立っている人間も多いから、嫌われ役と分かっていても厳しくしているのを知る生徒は少ない。

麻帆良で2－Aの生徒を除けば、アスカが最も話しているのは間違いなく新田先生だろう。

授業の進め方をどうしたらいいのか悩んでいた時や、子供だから教師になった時に生徒に舐められないか思っていたときなど何度も相談に乗ってもらった。尊敬する先生であり、こうありたいと思わせてくれる人だ。

「新田先生、おはようございます」

「え、あぁ、アスカ先生、おはようございます。早いですね」

新田に挨拶して着ていたコートを脱いでハンガーに掛けて、自分の席に来て鞄を置き、椅子に座って机の上に置いてあるパソコンの

電源を点ける。

「早く起きたっていうのもあるんですけど、作っておいたプリントを人数分刷るのに時間が掛かるかな、と思って早く来たんです」

「なるほど、良い心がけですけど無理はしないでくださいね」

性格的なものもあるのだろうが用意周到なアスカに感心するも、子供であることは事実。それを気にした新田は無理だけはしないようにと伝える。

「ありがとうございます。大丈夫ですよ、自分の限界は心得ていますから」

《我達も見ておるからな》

《はい、そうです》

新田の言葉に礼を言って頭を下げてから、パソコンが立ち上がったの確認して鞄からＵＳＢを取り出して、パソコンに繋ぎウィルスチェックを行う。

その後も他の先生が来るまでの間、新田に初めての授業の感想を話しながら授業で使うプリントに間違いがないか何回も見直す。やってきた先生達に挨拶をしながら一枚ずつ印刷していき、自分の机に戻って出来上がったものを確認して、教科書を見て今日の授業内容を頭の中で確認する。

（今日も高畑先生は出張か）

チラリと壁に掛かっている予定表を見ると高畑は今日の午前中も出張のようだ。

（時間を過ぎたのに来ないな）

時間は過ぎて兄さんが職員室に来ないまま、ＳＨＲの３０分程前に職員会議とまでは言わないが、学年毎に毎朝恒例の簡単な挨拶や連絡事項等を伝える朝礼が始まった（司会を務める新田が２年学年の主任）。アスカにネギどうしたのかと、聞かれるがちゃんと朝礼の事は教えてあると答えると二人でどうしたのかと頭を傾けた。

遅刻か忘れたのか理由はどうにしろ朝礼は進み、アスカは終わった後に新田に許可をもらってから、ネギは携帯を持っていないと思うので、同室である明日菜に電話を掛ける。

「おはよう御座います、明日菜さん。アスカです」

『おはよう。朝からどうしたの？』

数回の呼び出し音の後に出た明日菜に挨拶をして自分の名前を出すと、朝から電話を掛けてきた用件を問うてきた。

「そこにネギ先生居ますか？　昨日、朝は早めに職員室に来るように行ったんですけど、まだ来てないんで」

『そうなの？　ネギなら普通に私達と一緒に学校に来たわよ。だからもう着くんじゃない』

それだけでアスカにはネギが朝礼の事を忘れていたと分かり、携帯電話を持ちながら天井を仰いだ。

そこで、明日菜の口調がいつもより少しだけきつい気がした。

（朝から何かあったのか？）

既に嫌な予感を感じていたアスカは口に出すべきか迷った。

「明日菜さん、何かありました？　何時もより少しだけ気が立っているようですけど」

しかし、またネギが何かやったのなら問題だと結局は聞くことにしたが直ぐに後悔した。

「ああ、アイツったら朝に私の布団に入って来てたのよ。その所為でしょうね。折角良い夢見てたのに全部台無しよ」

また明日菜に迷惑掛けて何やってんだ、兄さん、と再度天井を仰ぐ羽目になった。

《ピンポイントに明日菜だけに迷惑を掛ける対象を絞っているのも、逆に凄いの》

《いえ、主が尻拭いをしてますし、明日菜だけに被害というわけではないですよ》

《おお、そうじゃったの》

被害にあっているのが明日菜だけというのがまるで狙ってやっているみたいで凄い。ネギがわざとやっていると見るべきか、よほど明日菜の運が悪いのか、二人の相性が悪いのか。

ぶっちゃけ冗談のつもりで言ったことが真実であることを知って現実逃避気味のアスカ。

明日菜が髪を下ろしたらネカネに似ているのは結構会った初期からアスカも思っていたので、その影響はあるかもしれないが。

「愚兄が迷惑ばかり掛けて済みません」

あんなネギでも兄は兄。迷惑掛けてばっかの明日菜に深く謝罪。

「何も悪い事をしていないあんたが謝る必要はないわよ。悪いのは全部ネギなんだから」

明日菜さん、あなたのその男気に惚れてしまいそうです、とはアスカ談。

昨日の苦労もあって明日菜に惚れかけた心を奮い立たせ、その後も二言、三言話してから電話を切ると、ちょうど職員室のドアが開いてネギが入ってきた。

ネギは周りの先生達に挨拶しながらコートを掛けてアスカの横にある自分の席についた。

「あ、アスカ。おはよう」

「おはようございます、ネギ先生。それと幾ら兄弟でも学校内では先生をつけてください」

自分の席に座って挨拶をしてきたネギに書類を纏めながら心情的

につっけんどんな挨拶を返し、暗に公私の区別ぐらいはつけろと言葉に込める。

アスカがチラリと前髪に隠されたサングラスの下から見ると、ネギは不満そうな顔をしていた。

それはアスカに指摘されたことに対する不満か、そんな事は無いとは思うが兄弟として接することが出来ないからなのかは顔を見るだけでは本人以外に分からない。

《判断しづらいの》

《ネギがどう思っているのかが分かりませんからね》

「それと随分、遅かったですね？　朝礼はもう終わりましたよ」

「えっ？」

判断に困ったので、自分が遅刻している事をネギに言うと、何のことか分からないと逆にアスカに疑問符を返された。

これは完全に忘れてすっぽかしたな、とアスカは持ちたくもない確信を持った。

「昨日、『毎日、朝は朝礼があるから早めに来るように』と言ってあったはずですが」

「あっ！」

言われた事でようやく思い出したネギは自分の顔から血の気が引

いて青褪めていくのが実感できた。

予鈴が鳴って他の先生達が教室に向かうために立ち上がる中で、アスカが立ちながらはぁ～、と漏らした呆れたような溜息が心に突き刺さる。

職員室を出る人の流れに逆らって、未だ席に着いている新田の前にアスカに連れて行かれた。ようは連行だ。

「新田先生。ネギ先生はどうやら朝礼の事を忘れていたようです。私が代わりにＳＨＲをやっておきますので注意をお願いしてよろしいですか？」

アスカとしては同じ子供である自分が注意するよりも立場、年齢が上の人にしてもらった方が効果があると考えたからだ。

「最初が肝心ですからね、分かりました」

「ネギ先生。クラス名簿を」

「……はい」

アスカは新田に注意を任せて、まだ青い顔をしたままのネギからクラス名簿を預かり、机に置いていたＳＨＲで配る書類を持って職員室のドアに向かう。

「良いですか、ネギ先生。生徒と仲が良いのは良い事ですが、明日からは、チャンと……」

新田の言葉を背に受けながらドアを開けて廊下に出ると、目の前

にあやかが立っていた。思わず、二，三歩後退して距離を取ってしまうのはなにか苦手意識が出来ている証拠か。

「どうしたんですか、雪広さん？　もう予鈴はなっていますよ？」

「ネギ先生を待っているんですが、ネギ先生はどうかされたんですか？」

その問答だけであやかの病気（ショタコン）の事を思い出して、ネギがあやかの趣味にド真ん中のストライクなので朝から世話しているのかと考えた。

《何時もの病気じゃな》

《趣味は人それぞれですけどね》

《何事も行き過ぎは良くないということじゃ》

《そうですね》

アスカはどうやら外面と内面がボーダーラインギリギリのところにいるらしく、行き過ぎたり、反応しなかったりと微妙なラインをキープしている。それでも普通よりかは親切にはしてくれる。

昨日の歓迎会でネギの等身大銅像を送ったことを聞いて、さっさと適用範囲から抜け出したい思いを強くした。

「今は新田先生と話しています。僕が代わりにＳＨＲをしますので教室に戻ってください」

「そうですか、分かりましたわ」

アスカは故意にネギが新田と何を話しているのかは言わずに持っているクラス名簿を見せて、教室に戻るように促す。

そして二人で教室に話しながら向かう。

教室前まで来ると廊下側の窓から、日直ノートを持ったのどかが顔を出していた。どうやら胸元に持っているノートを見るに彼女が今日の日直らしい。

「あ……」

アスカを見て髪の毛の隙間から見える目が若干、残念そうに見えたのは二人とも見逃さなかった。

昨日に明日菜からネギがのどかを助けたのを聞いているので、アスカを見て残念そうにした→ネギが来るのを期待した→ネギに惚れてる？　いや、日直だから待っていたのかなとまでアスカは考えて、まあどれでもいいかと考えるのを止めた。

「おはよう御座います、宮崎さん」

「おは……おはようです」

アスカの挨拶にのどかも若干のつまり気味の挨拶を返してから顔を窓から引っ込んだ。

歩きながらアスカが教室に入ろうとドアの方を見るとまたちょっと空いていて黒板消しが挟んであった。

またかと嘆息しながらドアを開けて、落ちてきた黒板消しを手が汚れないように、持ち手部分で掴むと風香が舌打ちするのを僕は見逃さなかった。黒板の隅に黒板消しを戻して教壇まで進み、続いて入ってきたあやかは自分の席に戻る。

その間にネギがいなくて、アスカしかいないことに気付いた人たちが、ざわざわと騒ぎ出すが手を叩いて止める。

「日直、号令を」

「き、起立」

日直に号令を促してのどかの号令で一斉にクラス全員が立ち上がる。見る限り、相坂さんは以外は休みも無しでサボリ魔のエヴァンジェリンも出席している。

「気をつけ、礼」

「「「「「「「「「「おはよーございます！」」」」」」」」」」

性格的にエヴァンジェリンは絶対に言わないだろうな、と今まで声を出す側で初めて聞く側に回ったアスカは、相坂さよを抜いて３０人近くの挨拶の声に少しだけ圧倒されながら思った。

「はい、お早う御座います」

「着席」

のどかの言葉に従い、座っていく生徒を見ながらクラス名簿に出席の印を書いて行き、その間にあやかに持ってきたプリントを配ってもらう。時間は有限、あるならば生徒も使え、がアスカのモットーである。

クラス名簿に書き終わり、あやかもプリントを配り終わったので連絡事項を話し始める。

「……、と連絡事項は以上です。それとネギ先生は一時間目の授業には出ますので、心配しないように」

連絡事項を話している時から、何人かが聞きたそうにしていたので最後に付け足して締め括るのも忘れない。既に所作が慣れた教師並みとは委員長あやかの言。

「ネギ先生が来るまで騒がないようにしてください。他のクラスに迷惑を掛けない様に」

ちょうど本鈴のチャイムが鳴ったのでクラス名簿を教壇の上に置き、ネギが来るまで騒がないように言ってからアスカは教室を出ていった。

アスカの言いつけ通り、他のクラスに迷惑を掛けない程度に騒いでいたこと露に新田に怒られて溜息をつきながらネギがやってきた。少し気落ちした顔のネギの様子になにかあったことを察知した生徒達だった。

「「「

「お、おはよーございます」

ネギの元気のない姿を見た生徒達が、元気付けを込めて大きな声で挨拶をする。気落ちしていた所に朝から生徒達の元気な挨拶にネギは圧倒された。

ネギはその挨拶で暗い気持ちも少しは紛れ、気持ちを切り替えるために小さく深呼吸して教壇で生徒に顔を向ける。

「じゃあ、1時間目を始めます。テキスト76ページを開いてください」

左手にチョークと右手にテキストを持ってネギが言うと、パラパラとページを開く音が教室に満ちる。

昨日はろくに授業にならなかったので、大半の生徒がネギはどんな授業をするのかという、そういった好奇の視線を向けている。

全員が開き終ったのを確認し、ネギは英文を歩きながら読む。

「The fall of Jason the flower.
Spring came. Jason the flower was born on a branch of a tall tree. Hundreds of flowers were born on the tree. They were all friends.」

スラスラと本文を読むネギに生徒達は学力の高さに感心している。よく考えれば母国語なのだから上手くて当然なのだが。

（昨日はうまくいかなかったから、今日は頑張らないと……）

ネギもまた昨日の授業の失態を思い、今日こそちゃんとした授業にしようと気合を入れている。それでも気合が空回りするのが彼の実情と言うべきか。

「今の所、誰かに訳してもらおうかなあ。えーと」

成績が良く、英語の訳も分かる成績上位者の超やあやか等はネギに視線を向けられても、答えられる自信があるので視線を外さない。

反対に自身の学力に自信の無い者や、ネギが言った英語を訳す事ができない生徒はネギが視線を向けると、顔ごと視線を外して目を合わせようとしない。

全体的に後者の視線を外す生徒が多いのが、如実にクラスの学力を表している。

ネギから視線を逸らす生徒の中で、斜め下を向いて絶対にネギと目を合わせないようにしながら、クルクルとペン回して必死に当てられないようにしている明日菜にネギの視線が止まった。

「じゃあ、アスナさん」

「なっ……何で私に当てるのようっ！？」

当てられた明日菜は両手で机を叩きながら、あれだけ露骨に当てられたくないとポーズしていたのにと立ち上がってネギに抗議する。

「え……だって」

「フツーは日付けとか出席番号で当てるでしょ！」

明日菜が何故そんなに必死になって嫌がるのかが分からないネギは、その必死な態度に思わず後ずさる。

「でもアスナさんア行じゃないですか」

「アスナは名前じゃん！」

「あと感謝の意味も込めて……」

「何の感謝よっ！」

誰が聞いてもまともな理由で当てられたわけではないので、明日菜はネギの言葉に反論する。理不尽もいいところなネギの主張に反論する明日菜の主張は正しい。そもそも彼女が分からないのを別にすれば、だが。

「要するにわからないんですわねアスナさん」

ネギが仕方なく他の人に当てようかと思ったところで、最前列のあやかがお嬢様っぽく口元に手を当てて笑いながら間に入った。頭がいい人間特有の優越感を滲ませたあやかが見下すように笑う。

「なっ！？」

「では委員長のわたくしが代わりに……」

直球で言われて、たじろぐ明日菜に挑発するような口調であやか

は代わりを申し出る。どちらかと言えば明日菜を見下すよりも、ネギにいいところを見せようとする見栄であった。

「わ、わかったわよ訳すわよ。えーと……」

あやかの挑発の言葉に、対抗心から明日菜は意地を張り、冷や汗を垂らしながらも教科書を手に取って読み始める。

「ジェイソンが……花の上に……落ち、春は来ました。ジェイソンとその花は……えと、高い木で食べたブランチで……何百輪もの花……えーと……木の……」

内容はハッキリいってボロボロだが、そこに妥協やいい加減さはなく、本気で取り組んでいて、それでも分からずに的外れな答えを出しているのだとは容易に察することができる。普通の教師なら間違っていても最低限努力は評価しただろう。間違いを訂正して座らせるそれだけ終わる。

だが、明日菜の必死さはネギには全く届かなかった。天才肌であり、他者との比較や摩擦のなかったネギは術(すべ)からく自分を基準に考え、思ったことを素直に口に出すという子供なら当然の――――――教師としては間違った判断を下すことになった。

「クスッ。アスナさん英語ダメなんですねぇ」

「なっ……！？」

分からないなりに必死で訳した明日菜に、ネギはフォローするどころかくすりっと笑って遠慮も無く貶した。この一場面だけを見れば誰が見てもネギは教師失格――――――子供だという点を考慮すれ

ばもっと酷く、弁解のしようもないほどのレベルに達していた。

「「「アハハハハハハ」」」

ネギの言葉に精神的に大人な一部が顔を顰めて、そんな人達を除いたみんなが一斉に吹き出した。

「アスナは英語だけじゃなくて数学もダメですけど」

美砂の言葉に赤くなる明日菜に笑い続けている生徒達とその生徒達に呆れている一部の生徒。

「国語も……」

「理科も社会もネ」

美砂の言葉に続き、夕映と超が明日菜に追い討ちを掛ける。湧き上がる爆笑の声とクラスメイトからのからかいの言葉に、晒し者になった事で真っ赤になる明日菜。

「要するにバカなんですわ」

あやかの身も蓋も無い発言にアスナさんは顔を真っ赤にして震えていた。

「いいのは保健体育ぐらいで」

「「「「アハハハハハハ」」」」

こういうのを見るとクラスが仲良すぎるっていうのも問題である。

親しさの中にも礼儀あり。

親しくてもこの諺（ことわざ）の通りにやっていいことではない。百歩譲って何年もクラスメイトをやっていて気心が知れ、事実だとしても数日すれば笑って流させるぐらいの親しさが彼女たちにはある。

だけど、それでも傷つかないはずがない。公衆の面前で笑いものにされ、本来擁護するべき教師が真っ先に嘲笑った。

本人にその気はなくても、明日菜を選んだ経緯が経緯だけに彼女の怒りは真っ当で正しい。

「あ、あんたねぇっ！　朝あれほど私に逆らうなって言ったのにぃ！！」

「うひっ」

昨日、ネギの授業で筆箱をあやかに投げつけたように、癇癪を起こす一歩手前の涙目の明日菜は近くにいたネギのスーツの襟元を掴んで引き寄せ、小声で挑みかかる。

明日菜の剣幕にネギは悲鳴を上げて怯み、その際に明日菜の髪の毛がネギの鼻を擽る。それが悪かった。誓って言おう、ネギに悪意はなかった。

「うぷ、ハ……ハ……」

（げ……！？）

くしゃみの前兆のような反応を起こすネギに、昨日の初対面時のことを思い出して何が起こるのかを悟った明日菜の顔から血の気が引いていく。

「ちょっ……と……「ハクション！！」……」

くしゃみをしようとするネギを静止しようとする明日菜だが、僅かに間に合わなかった。定められた彼女の未来に合掌。

「うひゃあっ」

「キャアッ」

くしゃみからネギの周囲に突風が吹いて、数人の悲鳴と発生源の間近にいた明日菜の悲鳴と共に制服はスポンと脱げて飛んで行った。決まってしまった現在とはいえ、授業中の教室で一人だけ下着にさせられるとかどんな羞恥プレイだ。

「な……何……今の風？」

「わっ」

「ちょ……アスナさん。何を突然、服を脱いでいるんですか！」

突然吹いた風に原因を捜すために周りを見た生徒達は、そこで下着姿になっている明日菜に驚きの声を上げ、あやかが何が起こったのか分からない生徒達の総意である疑問を投げかけた。

魔法を知っている生徒は明日菜とネギを口を空けて呆然として見て、エヴァンジェリンは明日菜に気の毒そうな視線を向ける。

（こっ……殺す！！）

あやかの言葉に再度クラスが沸き、笑い声が響く中で明日菜は原因であるネギを憎しみを込めて涙目で睨みつける。想像してほしい。多感な思春期に衆人監視の中で下着姿にさせられる姿を。即座に実行に移さなかっただけで彼女の自制心に称賛の意を表する。

「ひっ……！！」

明日菜から背筋の凍るようなプレッシャーが放たれて、負の感情を向けられることに慣れていないネギは悲鳴を上げて後ずさった。

その後、ジャージに着替えて殺気を放ち続ける明日菜の眼差しは授業の間中、ネギの身体に突き刺さることになった。自業自得だが哀れと言えば哀れとも言える状況であった。

アスカは一時間目に担当のする授業はなく職員室準備をして、二時間目、三時間目と二年の別のクラスで授業をやってから四時間目に２－Ａで授業だ。他のクラスでの手応えはそこそこに無難という感じだろうか。

クラス名簿と授業で使うプリントと教科書を持って、本鈴のチャイムと同時に教室に入る。今回は罠も無く、教壇まで歩いて今日の日直であるのどかを見る。

「起立。気をつけ、礼」

「「「おはよーございます！」」」

「はい、お早う御座います」

「着席」

日直の号令で生徒達が立ち上がり、礼をしてからまた座る。ＳＨＲと同じくサボリ魔のエヴァンジェリンがも出席しているのはアスカの授業に興味があるのか、単に面白がっているのか。

と、言うか何で明日菜が朝はちゃんと制服を着ていたのに、今はジャージを着ているのか不思議に思っていた。

「さて、昨日言っていたように今から呼ぶ人は黒板に答えを書いてもらいましょうか。それと答えを書いたらどう解いたのか解説してもらいますから」

授業のやり方は初日と変わらず、そう言って生徒達を見渡すと数人が目を逸らせして、アスカと視線を合わせようとしない。当てる人は初めから決めているから目を逸らしても意味はないんだけど。

「それでは神楽坂さん、お願いします」

「な、何で私なのよ！　あんたもネギと同じで名前のアスナがあ行だからとでも言うの？」

最初に明日菜を指名すると立ち上がって抗議してきた。

ちゃんと苗字で呼んでいるし、そんな変な理由で当てたりはしない。

「そんな変な理由ではありませんよ。最初の問題は公式さえ当て嵌めれば簡単ですから、今回に限り成績順で神楽坂さんに当てたんです。分からなくてもいいですから、プリントを持って前に来てください」

「うう、分かった」

成績順というネギよりは真っ当な言い分に明日菜はまだ納得のいかない素振りながらも、右手にプリントを持って黒板の前に向かう。

「問題の順に佐々木さん、長瀬さん、古菲さん、綾瀬さんに次、解いてもらいますから、分からない場合は分かる人に教えてもらっておいてください」

黒板近くに明日菜を横目にそれだけ言って、答えを教えてもらうために慌しく動き出した4人を尻目に、黒板の前でチョークを持って唸っている明日菜の横に立つ。

「この問題はこの公式を当て嵌めれば解けますから、そんなに慌てなくても大丈夫ですよ（すみません、何か利用したような形になってしまって）」

まず落ち着かせてから持っている教科書の公式を指差して、小声で謝罪する。問題自体はそれほど難しくはない。それどころか公式を少し弄るだけでいいので簡単な問題だ。

「え～と、ここはこれでいいの？　（別にいいわよ。ネギと違って

変な理由じゃなくて、当てられたメンバーを見れば頭が悪い人間から当てたってのも分かるから）」

自分の後に当てたメンバーを見ればどういう理由で当てたのがよく分かる。納得と理解は別にしても理不尽でなければ受け入れるだけの度量が彼女にはあった。

「いえ、ここはこっちを当て嵌めて、これで引くんです（ありがとう御座います。そう言えば何でジャージなんですか？）」

アスカとの密談に明日菜も小声で話しながら黒板に式を書いていく。

間違いを指摘しながら、礼を述べてから何故ジャージ姿なのかと問うと、間違えを直して答えを書き終えたところで腕を止めて俯いてしまった。地雷を踏んでしまったようだ。

「……（またネギのくしゃみで吹き飛ばされたのよ）」

「（毎度毎度、愚兄が本当にすみません）」

搾り出すように答える明日菜に謝罪するしかアスカにできることはなかった。もう、今後は『愚兄』で通した方が通りがいいんじゃなかろうかと本気で考えてしまった。

《またか》

《お気の毒に》

本当に集中して被害が被っている明日菜に玉藻もリインフォース

も同情を禁じえない。昨日、注意されたはずなのに朝から問題ばかりを起こすというところが特に。

魔法関係だから、また後で学園長に報告しなければいけないだろう。

明日菜に答えを説明してもらって自分で書いたものを消してもらってから席に戻ってもらい、次に周りに答えを聞く時間のあったまき絵、楓、古菲、夕映に前に出てもらって、答えを書いて一人ずつ説明してもらい、最後に消してもらう。

「次は順番に朝倉さん、宮崎さん、雪広さん、葉加瀬さん、超さんお願いします」

最初の五人に公式さえ当て嵌めれば簡単に解ける基本の問題を解かせて、応用問題に確実に解けるクラス上位の五人を当てる。この五人はバカレンジャーとは違いすらすらと黒板に答えを書いて、どうやって解いたのかを解説していく。

「あ、あの」

「これも自己主張の練習ですから、宮崎さん」

「は、はい」

みんなの前で注目されて恥ずかしそうに固まってしまったのどかに、クラスの人間で慣れるようにと先を促す。全員が終わり、席に戻ったのを確認してから教壇に置いておいたプリントの束を手に取る。

「学校とは学問を学ぶ場所であり、他の人と交流を深める場所です。分からない事があるのは人間ですから、それも当然です。しかしそれを分からないまま諦めたり、分からないまま放置するのは良くありません」

プリントを廊下側から最前列の人に渡して、後ろに回してもらう。

「好きな事に打ち込むのもいいですが、もう少し勉強に力を入れるように心がけてください。成績が良ければ将来の選択肢も増えますから」

この典型が頭はいいのに他の事に興味を移して勉強をしない夕映。

語りながらプリントを配っていき、廊下側まで渡したら教壇に戻ってプリントが全員に行き渡るのを確認する。最後が即物的だけど、将来の選択肢は多いほうがいい。

「全員に行き渡りましたね？　次は成績で選びませんから、答えが分からなくても後で分かる人に教えてもらうなりにするように。後、早く終わった人は内職はＯＫですが喋らないように、それでは始めてください」

手をパンと叩いてプリントを始めるように促し、教壇から離れて窓際に立って広くて雲ひとつ無い、晴れた青い空を眺める。

太陽が照らす中でまだ2月とは言え肌寒いが、外で昼寝したい衝動に駆られるも、今は4時間目だから終われば昼食を食べた後にでもするかと思い、衝動を抑える。

でも、その前にネギの事を学園長に報告に行かないといけないと

思うと気が滅入る。

「ああ、そうそう。鳴滝風香さんは朝に人を罠に掛けようとしましたから宿題プリント＋5枚」

「嘘っ！！」

人に罠を掛けようとした風香に対する罰に多少は私情が入っているかかもしれないが、彼女の悲鳴にささくれ立った気持ちが持ち直す。

普段ならここまでしないのだが、ネギが問題ばかり起こすから疲れているのかもしれない。悲鳴を聞きながら授業終了まで、どこまでも青い空を眺めて現実逃避をしているアスカだった。

第三十三話　　頭の痛くなる少年（後書き）

次回の更新は『日曜日』の午前０時に予定しています。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

途中までやっておいていたんだが、更新は明日ではなかっただろうか？　別にいいか。

第三十四話　嫌悪する少年（前書き）

ちょっとだけ改定前と変わった部分があります。ほんの一部分だけですが。

文字数は前回同様に多めの１５０９２字です。

第三十四話　嫌悪する少年

午前中の授業を終えたネギは、食堂で御飯を食べてから昨日の放課後にいた広場の段差で膝下に手を回して座り込んでいた。

「はあ、またアスナさんにひどいことしちゃった……」

昼休みにネギがこうして一人で座り込んでいるのは理由がある。

一時間目の２－Ａでアスナを怒らせた事と、またくしゃみでアスナの服を脱がせてしまった事が原因だ。昨日の学園長の注意で、明日菜にまた迷惑を掛けた事は十分に理解している。

幾ら一般常識や経験が足りなくてもそれを察するぐらいの頭は残っている。時間が経って一人にならなければ気付かない致命的な遅さだが。

「あの後、授業中ずっとこっち睨んでたし……怒ってるよな～～」

服を吹き飛ばしてしまった所為で授業を中断し、明日菜がジャージに着がえた後に気を取り直して授業を再開したが、明日菜はずっとネギを射殺さんばかりに睨んでいた。そこまでされれば如何に鈍いネギでも気づく。

同室であるが故に距離を取って怒りの矛先を回避することも出来ないだろうから、ネギは暗澹とした気持ちになる。

「あの、ネギ先生……」

「え……あ、はいっ！」

考え事をしている時に第三者に話しかけられたので思わず、大きな声が出てしまった。

ネギが呼ばれた声の方を向くと、三人の女の子が立っていた。落ち込むネギに声をかけたのは麻帆良女子中等部の制服を着たネギが担任をしている三人の少女だ。

「スミマセン。ネギ先生、朝の授業について質問が」

ネギは自分に声をかけた三人の少女の内の一人が昨日、魔法を使って助けた生徒だと思い出した。何か言おうとしていた様子ののどかの横から、メガネの女の子の方、ハルナがネギに声を掛けてきた。

「あ、はいはい。いいですよ。えと……１４番早乙女ハルナさん」

「あ、私じゃなくてこっちの子なんですけど」

「あ、はい」

両脇のハルナと夕映に背を押されて、三人の真ん中にいるのどかがおずおずと一歩前に踏み出した。

明日菜の服を吹き飛ばしたりして、ネギ自身としても集中できた授業とは言えなかったが、そんな授業でも質問をしに来てくれた事がネギには嬉しかった。

彼女達の質問に答える為、ネギは手元のリュックからテキストを

取り出した。

「……あれ？」

「え？」

質問する為に顔を近づけてきたのどかの髪型を見て、ネギはある変化に気がつく。よく見れば、髪で隠されていたのどかの眼が以前よりもはっきり見えていた。

「宮崎さん、髪型変えたんですね。似合ってますよ」

「え……」

「でしょでしょ！？　かわいーと思うでしょ！？」

ネギがのどかの髪型の変化に気付いて褒めると、ハルナがテンション高く喋りながら夕映と二人でのどかの前髪を分けて、隠されていた素顔を披露した。

中にあったのどかの可愛らしい顔は驚いて目を見開き、みるみる顔が赤くなっていく。

「えっ……あ……」

「この子かわいーのに顔出さないのよねー」

ただでさえ恥ずかしがりやののどかは、ネギという少し意識している異性に隠していた素顔を見られ、顔を真っ赤に染めて走り去ってしまう。

「あ！？　宮崎さん」

「あん。ちょっとのどか！　ゴメンネせんせ！」

「のどかー」

「え……あ……」

そしてハルナと夕映も走り去ってしまったのどかを追う為、ネギを置いて行ってしまう。のどかの行動に驚いたネギは、残った二人に理由を聞きたかったが引き止められなかった。

「何だったんだろ今の……？　質問はいいのかな？」

ネギにはどうしてのどかが走り去ってしまったのかが解らず、質問をしにやって来た三人の少女が走り去ってしまって、ネギは開いたテキストを手に途方に暮れた。恋や思春期の特有の心の揺れを感じ取れないのは数えで十歳では仕方のないことだろう。

「う～ん、ああいうおとなしい人ばかりだったらな。それに比べてアスナさんは、トホホ」

ネギの脳裏に浮かぶのは怒り狂って角を二本生やし、爪を異様に伸ばしてキシャー吼えて詰め寄るアスナの姿。

「ふぅ、どうしよ。……ん？」

明日菜の部屋に居候しているネギにとって、何時までもアスナを怒らせていると何時か部屋を追い出されるかもしれないし、このま

ま部屋に戻っても待っているのは明日菜による針の筵で精神衛生上良くない。

ネギがどうするか悩みながら、結局取り出したが使わなかったテキストをリュックに片付けると、何かが中から零れ落ちてきた。

リュックの中には魔法関係の代物も入っているので、ネギは急いで落ちた何かを拾い上げた。これがまた問題の種となる。

「こ、これは!?　昔おじいちゃんがくれた『魔法の素丸薬七色セット（大人用）』……!?」

ネギが拾ったのは、七つの球が入った試験管だった。勿論、魔法関係の代物だ。大分前に貰った貰い物。

「こ、これがあればホレ薬みたいのを作れるかも!!　お姉ちゃんが袋に入れてくれたんだ!　よ～し!」

自分の精神衛生を守るために、怒る明日菜に許してもらう策をネギは手にした丸薬で出来る事をすぐに思いついた。

それは昨日魔法がバレた直後で教室に向かう時に、明日菜がネギにどんな魔法が使えるのかと聞かれた時に求めてきた物。だが、アスナが自分の力でなんとかすると言っていた姿がネギの脳裏に蘇る。

「確かに、こんなことで許してくれると思わないけど……これ位しか僕にはできることないし」

魔法しか取り得がない自分にはこれしかないとネギはホレ薬を作る事を決心した。他に彼女に許してもらえる方法がなかったネギに

他に取るべき手段はなかった。

思い立ったが吉日とばかりに、その場を移動して人気のない場所を捜してリュックから道具を出して準備する。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル　ａｇｅ　ｎａｓｃａｔｕｒ　Ｐｏｔｉｏ　ａｍｏｒｉｓ！！」

『魔法の素丸薬七色セット（大人用）』をビーカーに入れ、アルコールランプの火で沸騰させて溶かし、魔法の始動キーを言って呪文を唱えるとボンと爆発して煙を上げた。

「で、できた！！」

煙で蒸せながらビーカーを手にして出来を確認して、ビーカーに入っている液体を別の試験管に移し変える。

「これを飲めば人間はおろか、あらゆる異性にモテモテに……アスナさんきっと喜ぶぞ！」

明日菜がモテたいのは特定の個人に対してだけであり、断じてあらゆる異性にモテモテ……なんて状況は望んでいない。あらゆる異性にモテモテということは老若関係なくだから性欲を持て余した男子でも敬遠するだろう。

そんなことを分かりもしないネギは、昨日アスカに言われた『小さな親切、大きなお世話』を繰り返していることに気づけない。

試験管に入ったホレ薬を見つめながら、これで明日菜も喜んでくれて、今までの事を許してもらえると思って意気込むネギのはしゃ

ぎようを女生徒達に見られて、笑われていることにネギは気付かぬまま、急いで明日菜のいる教室へと走った。

災厄（ネギ劇場）の宴が始まる。

昼休みに明日菜は購買で制服を買ってジャージから着替えて、その後に学食で待っていてもらった木乃香と御飯を食べ、教室に戻って楽しく話している時に厄介ごとしか持ってこないネギがやってきた。

「アスナさん、アスナさーん！」

「……また来たわね、ネギ坊主」

完成したホレ薬を手にネギは２－Ａに駆け込んで機嫌良く明日菜に駆け寄っていくが、当の明日菜の機嫌はネギの登場によってレッドゾーンを突き抜けて下降の一途を辿っている。

「何の用よ」

アスカのお陰で多少はマシになってもネギ本人に会うと怒りが再燃してきた明日菜は、駆け寄ってきたネギをクワッ！と口を開いて食って掛かるように睨みつける。

その明日菜の剣幕に、ネギは教室に駆け込んできた勢いを失い怯む。若干冷や汗を掻いているのは負い目からか、それとも明日菜の迫力に押されたからか。

しかし、ネギは手に持つホレ薬の存在を思い出した。このホレ薬さえあれば大丈夫だと、ネギは明日菜の眼光に負けずに話しかけた。

「実はできたんですよ、アレが！」

「アレ？」

何やら自信満々の様子で意気込むネギだが、アレと言われても理解できないので疑問符を返す明日菜。

ネギは、周りを見回すと明日菜に耳打ちする。昨日の学園長の注意で最低限の人目を気にする位の分別はできたようだ。

「（ホレ薬です、ホレ薬。作ったんです！）」

カポッと試験管の縁を塞いでいる詰め物を取り、ニコニコと笑って出来上がったばかりの薬を差し出すネギ。

何ともいえない色の液体が試験管に入っていて、見た目からして嫌な感じをぷんぷんと感じる明日菜。ネギが持ってきた物など信用できないと判断した明日菜は、席から立ち上がってネギに背を向けて立ち去ろうとする。

「あ、待ってください！　本当に効くんですよ！」

「いらないって言ったでしょ……ったく」

「本当なんです！　ダマされたと思って、ちょっとだけでも」

いらないと言ってネギの前から去ろうとする明日菜に向かって、

自分で作ったホレ薬の有用性を説くネギ。

ネギはようやく明日菜に恩返しできると思っているので、必死にホレ薬を飲ませようとする。逃げているのにそれでも追ってくるネギに明日菜はイライラを更に募らせる。

「あんたが飲みなさいよ」

遂にイライラが限界に達した明日菜はその場で反転して、ネギが持っている試験管を奪い、ネギの鼻を摘み、無理矢理開けさせた口の中にホレ薬の入った試験管を流し込む。

「はもごっ」

吐き出せばいいのに、馬鹿正直にネギはそれを飲み込んでいく。

「間違えて、パンツ消しちゃうよーな奴の作ったモノ、飲むわけないでしょ」

明日菜は今、本人に流し込んでいるホレ薬を全く信用していなかった。

教師だ、魔法使いだ、と言いながらネギは力を振り回すだけで、のどかを助けた以外は授業もちゃんと何も出来ていないのだ。多分に自分に責任があったりもするが、元を正せば原因はネギに帰る。

明日菜の心証では、ネギは周りを振り回しながら、後片付けは全てアスカに押し付けているだけのただのガキだとしか思えなかった。

「……」

そして今また、確かにホレ薬が欲しいとは言ったけど、今更そんなものが信用できるはずも無い。

ホレ薬だから多少、気になりはするが。

「あうえ！」

試験管の中身を飲み干したネギは、試験管を吐き出して咳き込むが異性である自身がネギに対して何の感情も抱かないし、他に目立った変化は無い。やはりネギが作った物は信用できない。

「ホラ。なんにも起こらないじゃない」

「あれ……おかしーなー」

「何のつもりか知らないけどね、そんなことじゃキゲン直さないわよ。と、言うかこれ以上私に関わらないでくれる」

「ゴ、ゴメンナサイ」

明日菜とネギはホレ薬を失敗だと決め付け、ネギは涙目で謝罪する。しかし、ネギが気づいていないだけでホレ薬はちゃんと効果があった。

「ネギ君……」

ふと、明日菜の横でお菓子を食べていた木乃香が何時もとは変わった様子でネギの名を呼んで近寄る。

「ネギ君ってよく見ると……なんか、スゴイかわえーなー」

「ん？」

木乃香の様子は何時もと異なってその頬は赤く染まり、目には焦点が合ってなく、熱病に掛かったようにその身をゆらゆらと揺らしている。

その木乃香の様子を不審に思った明日菜は疑問符を上げる。

「ん～～～」

木乃香はネギに顔を近づけ、そのままネギ先生を抱きしめて頬ずりする。それを止めるべき幼い頃からの親友は今、トイレにでも行っているのか教室にいない。

「ちょ、ちょっと、何をやってるんですか、このかさん！？」

ふにゃけた顔で嬉しそうに頬ずりする木乃香に気がついたあやかが立ち上がって吼えた。

「先生に対してそのようないかがわしい行為……を……」

木乃香にズカズカと詰め寄って行くあやかの勢いが、声と共に無くなっていく。

「先生、どうぞコレを……」

ネギの目の前で立ち止まったあやかは肩膝をついて、その手には

どこからか出した大量の花束を持っていた。本当にどこから取り出した。

あやかがおかしいのは何時もの事だが、それでもいい加減おかしいと明日菜が気付いたときには、比較的近くに居たクラスメイト（チアリーダー３人娘）が我先にとネギに猛アタックを掛け始めた。

三人に近いが楓や真名といった実力者は影響を受けていないが、他の生徒達も多少の影響下にあり、眼前の光景をおかしいとは思わなくなっている。

「先生、コレ食べてー。家庭科で作ったのー！」

「先生コレもちょうど子供用の服作ってたとこで……」

ネギとの間にいたあやかを蹴り飛ばして桜子がケーキを差し出し、美砂がどう考えてもサイズ的にネギ用に作ったと思われる服を出してきた。

「はい、ぬぎぬぎしましょうねー」

「ああ！　やめっ……やめてくださいーっ！」

美砂が作った服を着せるために、美砂と円がネギの服を脱がしていき、桜子はスプーンでケーキを掬いネギの口元に持っていく。

木乃香はそのネギの姿をキャキャとして眺め、ネギの涙交じりの叫びは誰にも届かない。

（効いてる――っ！？　本物だったのか。……ちっ）

明日菜自身には何の変化も無いのだが、目の前の４人様子を見る限り惚れ薬が本当に効いているようで、おしい事をしたと少し後悔する。

そうしている間にネギは自力で拘束を振りきり、教室を出て行き、チア三人娘と木乃香もネギの後を追って出て行った。

「「「「ネギ先生―ッ！」」」」

「アスナさん、助けて―っ！」

クラスメイト達から追われてネギが助けを求めてくるが、どうするかと明日菜は思案する。

「ア、アスナさん。ネギ先生をどこへ～～」

「うぐぐ」

蹴り飛ばされてようやく意識が戻ったあやかが、いなくなったネギを求めて明日菜にヘッドロックをかましてきた。

「しっかりしなさいよ、委員長！」

「あ”」

ヘッドロックを外してあやかの頭を正気に戻れとポカッと殴りつける。

そして明日菜は正気を取り戻したあやかをおいて、ネギはどうで

もいいが追いかけて行った４人を助けるかと後を追っていた。

ネギがまた騒ぎを引き起こしている頃、アスカは職員室で玉藻が作ってくれたお弁当を食べて暢気に温かいお茶を飲んで一服していた。

生徒達の過ごす教室や廊下とは違った空気の中、コーヒーと紙の匂いが漂う職員室では同じように食事を終えて一服している先生方が多く、プリントや書類を相手に仕事をしている人は少ない。食堂や外で食べる人もいるため幾人かの教員の机は空っぽで、頭痛の種のネギもいない。

授業も終わり、生徒達から離れてようやく一息つけた。

授業の疲れよりも大きいネギの問題の後始末の疲れで思わず溜め息が漏れる。

まずは、初日に出会い頭の明日菜に、本人は親切のつもりでも、言われた当人にとっては余計な事を言って怒らせ、最終的には服をくしゃみで吹き飛ばしておいて、謝ろうともせずにそれどこか開き直って、自分は間違っていないとか言い出す始末。

次は言わなかったこちらにも責任があるかもしれないが、常時展開している魔力障壁で黒板消しを浮かして何人かの生徒に疑念を抱かせた。

その次は人助けで魔法を使ったのはまだいいけど、その場面を見ていた明日菜に問い詰められて、自分から魔法使いである事を白状しながら、ある意味逆切れ的に勝手に記憶消去の魔法を使用。

ここで一つ疑問なのが果たして兄さんの記憶消去の魔法は正しく作動したかどうかだ。

《少なくとも魔法学校主席じゃ……少ない記憶では才能はあった。無能ではないはずだが》

《なんらかの別の要因があったと？》

《あくまで可能性の一つ……だけど》

《だからと言って何で服が消えるのかは不明じゃが》

その場所にいれば分かったのだが、どうもタイミング良くその場面に居合わせなかったので今となっては分からない。

それに本当に学園長が自分の孫である木乃香の傍に一般人を置くか、という疑問もある。危険性も考慮するなら一人部屋、もしくは声である刹那との相部屋が望ましい。幾ら安全とはいえ、老獪な学園長が無駄なことをするとは考え難い、

明日菜の過去も気になる。

本人から聞いた話では両親がおらず、保護者が高畑だということもあって気になって調査したもののおかしな点などはない。ないのだが……。

（なにかあるような気がする）

状況や色んなもの一つ一つは気になっても無視していいレベルだが、全てを統合すると怪しさが見えてくる。

（気にしすぎか）

どうもネギが来る前なら放っておいた話題に過敏になっているような気もする。だが、放っておけば後に響くのだと長年の勘が警鐘を鳴らしていた。

（調査結果を待つしかないか）

再度の調査を決意し、気を取り直して続けるが、エヴァンジェリンに聞いた限りでは歓迎会で明日菜の要請とはいえ高畑に対して読心術を行使したらしい。

《絶対に高畑も未熟な魔法使いの読心術に気付いたはずじゃ》

《何もしなかったのは何故なんでしょうね》

日付は変わり、今日明日菜に聞いたのだが朝方に兄さんは明日菜さんの布団に勝手に侵入。

《確かに明日菜が何時もしているツインテールの髪を下ろしたらネカネに似ているが、だからといって会ったばかりの他人の布団に入っていいかどうかは別問題であろうに》

《女の敵ですね》

最後は授業中にまた明日菜さんの制服を衆人環視の中、くしゃみで吹き飛ばしたと。

《何でこんなに被害が明日菜だけに集中するのじゃろうな》

《謎です。こういうのを運命とでも言うんでしょうか》

《嫌な、運命じゃな》

思考を終え、二日目ではまだ慣れない教師の仕事で固まった肩を腕を回して解す。

取り合えずは予定通りにこの後、学園長にネギが起こした問題を報告に行かないといけないので、立ち上がって職員室から廊下に出て学園長室は上の階なので階段の踊り場に着くと、

「もうっ！　どこ行ったのよ、あのネギ坊主！」

「あれ？　どうしたんですか、明日菜さん」

どこか急いだというか、慌てた様子の明日菜が上の階段から降りてきた。その言葉からネギを捜しているのは直ぐに分かったが嫌な予感しかしないのは何故だろうか。

「あっアスカ！　ネギ知らない？」

「知りませんけど、どうかしましたか？」

明日菜の慌てようから聞きたくない、という気持ちが湧き上がるが立場的にそうもいかず、逆に問いかける。急いでいる様子からた

だ事ではないことが分かっていたし、苦難を先送りにしていいことなど一つもないことを知っていたからだ。

「ネギせんせー？」

廊下の向こう側から聞き覚えのある声がした。方角的に図書室の方からの声――――のどかの声がして、ドタバタと騒がしい音がして何かが倒れた。

ネギの名を呼んでいるみたいだからそこにいるんだろう。

「今のは、本屋ちゃんの声！？」

自分にしか聞こえないと思っていたのに明日菜に聞こえていたことに少々驚いた。のどかの声に明日菜が叫びを上げ、顔を見合わせて共に図書室に向かって走り出す。

「で、何があったんですか！」

「あの馬鹿がホレ薬を作って私に渡してきたんだけど、信用できなかったからネギに飲ませたらこうなったのよ！！」

走りながら明日菜に理由を聞くと、一息で話してくれたけど聞かなければ良かったと思わずにはいられない。昨日の再会時と同じように躓(つまず)きかけたのは仕方ないことだ。

《何でホレ薬なんて作ったんじゃろうな》

《大方、仲直りするためだんでしょうね。それで騒ぎを起こしてはいい迷惑ですが》

既にアスカはネギという人物が持っている特色も多く理解出来た。

基本的には善人なのだ。ただ、空回りが過ぎるだけだ。もっと他の人から情報を集めたりすれば、この惨事というか喜劇というかは避けられた。

呆れた二人の念話を聞きながら同時にアスカは一つの疑念を抱いた。

――――――何故、明日菜には惚れ薬の効果が効いていないのか？

抱いた確信に強い想いは当の明日菜の声によって一時心の隅へと追いやられた。

「げ、何よコレ。鍵がかかってる」

階段の踊り場で声が聞こえたのだから、図書室も近くすぐに着いて周りに人影は無い。明日菜が図書室を開けようとドアノブを回すが、鍵が掛かっているためドアが開かない。

「み、宮崎さん駄目ですよ！　教師と生徒がこういうことしちゃいけないってお姉ちゃんが……」

ドア越しの図書室の中から、かなり切羽詰ったネギの声が聞こえてくる。

【白眼】の能力の一つである物体の【透視】を使い、壁の向こうを除く。すると地面に寝転んだ二人が抱き合い、のどかがネギに圧し掛かってキスを迫っているのが見えた。

「明日菜さん、退いてください！」

明日菜がドアを蹴り開けようとするが修理費を考えるとまずく、今ならそれをしなくても何とかなるので明日菜さんを静止する。

周りに人がいないのを確認してあるが念の為に再度見渡し、アスカが手を振ると指先に小さな針が握られていた。その針を持って鍵穴に差し込んでガチャガチャと動かす。

「何やってるのよ、そんなことをしている時間は「開きました！」」

一刻も急ぐ事態にアスカの行動を理解できない明日菜が怒声を張り上げるも、その途中でアスカは鍵を開けてしまった。

「あんたなんでそんなことできるのよ……」

「昔取った杵柄というやつで」

立ち上がったと同時にガチャリと鍵が開いた音が聞こえて、明日菜は針で鍵を開けてしまったアスカに呆れた視線を送る。矢鱈と強かったり、勉強が出来て、料理も出来る。その他にも自分より年齢が下なのに多芸すぎるアスカに驚くことはあれど、今回の泥棒染みた技術には呆れた想いしか湧かなかった。

（こいつの過去が気になるわ）

今まで自分が親をいないこともあって知っている人間以外に詳しく話したことはない。親がいないというアスカも似た境遇にあること、年に似合わぬ聡明さ、教師にならなければならない状況から面倒なことだとは思って踏み込んで聞かなかったが、今ほどアスカ

の過去が気になったことはない。

明日菜がそんなことを考えている間にアスカは素早く行動していた。

「よっと」

「あうっ」

急いでドアを開けて中に入り、ネギにキスを迫っているのどかの襟元を掴んで止めて、軽い声と共に首の後ろを軽くトンと手刀を振って気絶させた。

「ア、アスカ！！」

「あ、本屋ちゃん！　……じゃなくて宮崎さんまで」

二人の混乱した声を聞きながらアスカは深々と疲れたような溜息を吐き、寝させたのどかをネギの上から避けて、床に仰向けになるように寝かせた。

「取り合えず、兄さん……こうなった訳を聞かせてください」

たった二日で心労が祟って頭痛がし始めた頭を抱えたい気持ちが強くなり、頭痛薬が家にあったかと若干の現実逃避をしながらいまだに状況を理解できていなさそうなネギに尋ねた。

アスカは少しの間だけ脱いだスーツを敷いた廊下にのどかを寝かせて、ネギと明日菜の双方に細かい事情を聞いた。

それから学園長に携帯で一報を入れてから、明日菜にのどかを保健室に運んでもらい、不味いことをしたという自覚はあっても悪いことをしたと理解していないネギを連れて学園長室に向かった。

その途中で自分達が何やっていたのか理解できていないチア三人娘と木乃香に、ちょうど予鈴が鳴ったので昼休みが終わるからと教室に戻るように促すのも忘れない。

幸いにもアスカもネギも五時間目の授業はない。

五時間目の本鈴が鳴り響いている時にネギを連れて学園長室に着くと、学園長から連絡を受けたのか高畑もいた。アスカはチラリと高畑を一瞥してから学園長の前にネギを連れて行き、二人で横に並ぶ。

「……以上です」

「うむぅ……」

アスカの説明に学園長は冷や汗を垂らして唸り、学園長の斜め後ろに立っている高畑もまたどうしても渋い顔にならざるをえなかった。

「学園長。ネギ君はまだ子供で、今回の事をしっかりと反省しています。何卒、寛大な処置を」

今まで黙っていた高畑はそんなふざけた事を言い出した。

既に子供だからと済ませられる問題を越えているのは分かっている。それでも知り合いだからこそ、恩人の子供だからこそ、友達だからこそ、赤の他人と対応が変わってしまうのは人の性なのかもしれない。

少なからずアスカは高畑の言葉に驚いた。

不思議そうな顔をして事情を理解しているとは思えないネギを見て、高畑なら大人で真っ当な判断ができると考えていたからだ。

「ホレ薬の製造、所持、行使。これだけの事から考えて普通はオコジョ刑、最低でも仮免没収の上で故郷へ送還するのが妥当だと思います」

「へ？……僕は別に悪い事は……」

アスカが並べ立てた正論に横にいたネギが何をおかしいことを言っているのかと反応して見てきた。

学園長と高畑は何か考えているのか何も言わない。ならば、アス

カは体を横に向けてネギに向き直る。

「ネギ先生。あなたは、ホレ薬を作って自分で飲んだ」

「それは、アスナさんが前に欲しがっていて……僕が迷惑をかけたから、そのお詫びにって。前におじいちゃんがくれた『魔法の素丸薬七色セット（大人用）』を使って出来たホレ薬を渡そうとしたけど、信じてもらえずに僕が飲まされて……」

「魔法の素丸薬」が大人用ではなく、子供用で作ったホレ薬なら「それなりの効果」しか得られなかったはず。

ネギが何か言い訳を言うがそれでホレ薬を作り、使ったという結果は変わらない。

どうも魔法にばかりかまけてずっと過ごしていたためか、一般人どころか魔法使いとしての常識も怪しいらしい。

――――――もっと自分がうまくやっていればこんなことにはならなかっただろうか。

――――――もっと素直な気持ちで接していればこんなことにはならなかっただろうか。

今更悔やんだってもう遅い。ネギは自分が何をしているのか理解できていない。

魔法使いが一般人に混じって暮らすのは中々に大事である。特に若い世代で隠れ里から出たことのない、もしくは少ない子供ほど必ずといっていいほど確実に問題が発生する。

それは何故か。

簡単な話だ。魔法使いと一般人の常識がずれているからである。

例えばネギの外見を見よう。

まず、十歳の子供がスーツを着ているという状態はあまり一般的ではない。これはアスカも同じである。

学校で教師をさせられるのだから、外見だけでも取り繕っておかなければならないので仕方ないことではあるが、一般的な価値観なら奇異な目で見られるのは間違いない。だが、学校の制服がスーツだとか言い訳は幾らでもある。

しかし、それはまだ一般人の範疇だ。奇異の視線を向けられても問題があるわけではない。

最(さい)もたる変な場所は、彼が背負っている杖だ。

布を巻いているとはいえ持ち歩くサイズの杖ではない。歩くのに杖が必要なわけではなく持ち歩くには必然性を感じない。

事情を知っているものから見れば彼が魔法使いであることが一発でわかるし、事情を知らないものが見れば不可思議に思うのは間違いない。

別にここが魔法使いの世界ならばさしたる問題にはならないのだ。けれど、ここは一般の世界であり、魔法は隠匿しなければならない。

他にも色々と突っ込みどころは多い。

教師としても授業当時に来てもらって直ぐに授業など出来るはずもない。アスカだったら学園内の地理や最低限慣れるまで数日は欲しい。ここら辺は完璧に学園長の所為であるが。

全てがネギの所為ではない。

だが、ネギと会ってからの正体不明の憤りや、今までの不祥事への怒りがいい加減に我慢の限界だった。

「何でもかんでも神楽坂さんの所為にするな！　全て自分の責任だろうが！！」

聞いた事もないアスカの怒声に、ネギは怒られることに慣れていないのか肩をビクッと震わせて俯いてしまう。

常にないほどに怒りを面に出すアスカに驚いたのは学園長と高畑だった。

二人が知るアスカはあまり感情を揺らすということはない。大抵のことは想定通り、予想通り、といった風情で流してしまう豪胆さというか鈍さというか、そんなものを持っている。

拳銃で撃たれても、いきなり襲われても、銀行強盗に巻き込まれても、車に轢かれかけた子供を助けた時も……。

多少の狼狽や動揺をしてもここまで明確に怒りを表すことは彼らの記憶の中にはとんとない。

「ホレ薬は作るだけでも犯罪と言う事を知らないのか！」

「へ？そ、そんな、だって、マホネットでもホレ薬は売っている……」

アスカの言葉にネギは驚いてそう言うが、傍らで聞いていた二人には衝撃的であった。

――――――まさか魔法学校での授業をちゃんと聞いていないのか？

「効力の問題だ！アレだけ効力の高いホレ薬は、作るだけで犯罪だ！」

確かにマホネットで売っているホレ薬もあるが、一番強力な奴でも効果はせいぜい一時間程度しかない。それも元々好意を持っている相手の好意を少しだけ増幅させる程度で、意思を捻じ曲げるほど強力ではない。

そこら辺は魔法学校でもきちんと教えているのに、聞いてなかったのか。

「えぇ、そんなの聞いた事が……」

聞いていないと言うネギが涙目で反論するのが、やけにアスカの癪に障る。

ネギは歪だ。

表面的には天才少年の名を欲しいままにするぐらいに魔法の実力が高いのに、その根本では普通の一般的な常識どころか魔法使いの

常識すら抜けている。まるで肉体や精神を置き去りにして魔法に特化しているようですらある。外身だけを貼り付けて中身がスカスカという歪さだ。

「それでも魔法学校を首席で卒業しているのか！　これは魔法使い以前の問題だぞ！」

アスカは苛ついていた。こんな子供が自分の兄だと。

根源は似ているという直感があった。あんなことをした奴らへの復讐――――その点だけを見れば確かに似ているかもしれない。だたそうなると、アスカは今自分がネギに対して抱く無様な感情もそのまま自分に向けなくてはならない。

（――――この俺が無様……だと？）

何も知らず悪くはないと己を慰めていた自分、ただ力を求めていた時の自分、手に入れた力を振り翳して人を殺した自分……。

そんな自分でも唾棄したくなるような昔の果てしなく無様な姿を直視した。本当に――――なんて格好の悪い存在なのだろう。

（……違う……）

アスカは必死でそれを否定した。自分がネギを無様だと感じたのは決して、過去の己に重ねたのではない。

「うぅ……」

アスカの指摘に遂にネギは泣き出した。それがまたアスカの精神

をささくれ立たせる。

「大体……」

「そこまでにしてくれんかの、アスカ君」

アスカが更に続けようとした言葉を発した瞬間に学園長が諫める。

流石にアスカがネギに憤りつつも、半ば八つ当たり気味であることが理解できたからだ。このままでは話が進まない。

「……分かりました」

正直言えばまた言い足りないが、多分に八つ当たりの気があるのも静止が入ったことで自覚して、ネギから視線を外して学園長に向き直る。

学園長はそんなアスカを見て一瞬だけ、苦味走ったように顔を顰めたが持ち直して、未だに泣いているネギに視線を向けて落ち着かせるように穏やかに微笑む。

学園長の微笑を見てネギは何とか涙を止める。それでもビクビクと怯えて戦々恐々しているが。

「……ネギ君」

「は、はい」

高畑は何も言わず、学園長が静かにネギに呼びかける。

声を掛けられただけでアスカのように怒られるのかとビクッと震えて答えるが、横にいるアスカにしか聞こえないぐらいの声しか出ていない。

口の動きから返事はしたのだと予測して学園長は言葉を紡ぐ。

「お主、魔法を秘匿しておるかね？」

「あ……っ！」

「昨日注意したにも関わらず、授業中に明日菜君の服を脱がせ、そのお詫びにとホレ薬を作った。これは本当に必要だったのかね？」

「っそれは……っ」

二日目では学園長も教師としてのネギに、それほど期待していない。でなければ、教師経験がないネギに担任なんていう重責をさせるはずがないのだから。

期待しているのは魔法使いとしてだが、ここで問題なのは教師ではなく魔法使いとしての部分なのだ。

「あのっ、明日菜さんの服を脱がせてしまったのは、くしゃみをしてしまって！」

「くしゃみとはただの生理現象じゃ。それで毎回武装解除しておって、それで魔法使いとしてやっていけると思っているのかね？」

ネギの言葉はただの子供の言い訳でしかない。どんな事情があるにせよ、実際に被害に遭っている明日菜からすれば、そんなことは

知ったことではないのだから。

学園長もいい加減にネギが天才にありがちな頭でっかちの坊やであると自覚した。

子供故の世界の狭さ、天才故の人に頼ることをしない思考。

ありがちと言ってしまえばそれまでだがここは旧世界の学園都市。魔法学校とは違うのだ。

「それは……」

「幾ら君が子供とは言え、昨日の時点で既に注意しておるのじゃからな」

「はい……」

また俯いてしまったネギを高畑もここまで落ち込んだ姿を見たことがないので心配気に見ている。アスカはそんな二人を我関せずと明後日の方向を見ていた。

「君は魔法に頼りすぎている。故にしばらく魔法を使わずに生活してみなさい。君に対する処分は魔力封印を一ヶ月と暫く生活費以外の今学期分の支給するお金はなしじゃ」

二日目で送還というのもあまりにも間抜けすぎる。かといって政治的にネギをオコジョにするには問題がありすぎた。

なので、本人に自覚を促して罰も同時に与えられる方法を取った。

「……はい、分かりました」

アスカは学園長の言葉を考える。

政治的な理由があることは来歴を知っているので理解している。が、それだけの処罰だけではネギに対する罰としては足りないとも思う。

「これで構わんかね、アスカ君？」

「……正直に言えば、まだ罰が足りないと思います。ただのくしゃみで魔力が暴走するようでは、何時、生徒に被害が出るかも分かりません。魔力封印が解けた後に最低限、くしゃみで魔力が暴走しないように訓練するべきだと思います。そして現状では全ての被害が神楽坂さんに集中していることを考量して、早急に部屋を変えるべきです」

無意識かどうかは知らないけど明日菜は普段子供嫌いを標榜しているにも関わらず子供に甘い。あれだけの事をされても徹底的にネギを嫌うこともない。

そこがまたアスカが不審を抱く理由の一つではあるが、今は関係ない。

明日菜に被害が集中しているのも事実、二人の関係改善のためにも少し距離を取ったほうがいい。

「むぅ……確かに生徒を思うなら現状では何時、暴走するか判らないネギ君を放っておくのは危険じゃな。封印が解けた後にはネギ君には最低限魔力を制御してもらおう。じゃが、他の部屋は空いて

いないから変えることはできんのじゃ」

よくよく考えてみればくしゃみで魔力が暴走して、服が脱げることを魔法学校側はネギの書類に書かなかったのだろうか。

「ネギ先生は自分が甘えん坊の非常識だという事に、「僕は甘えん坊なんかじゃ「黙ってろ！」ヒッ」このように本人は全くの無自覚です。昨日注意されたにも関わらず、魔法を使う事を自重するどころか、未だに魔法に頼りきっています。それに今朝も神楽坂さんの布団に入るなど精神的な甘えが目立ちます」

ネギにとって魔法は日常的なものであり、日常的にはもちろんのこと人助けのためなら使って当然のものなのだろう。そして今回の行動も明日菜にはもう魔法がばれているのだから、魔法を使って手助けしても問題ないという軽率な考えから導かれたものだ。

魔法で恩返しというところで、根本的に間違えていることに気づかない。本当に恩返しをしたいのなら魔法になど頼らなくてもできるのだから。

言葉を途中で遮るネギに怒鳴りながら自身の考えを述べる。

「し、しかしじゃな……場所が……」

場所がないと学園長は言うが、アスカが寮にいた頃に部屋がまだ残っている。

「僕が寮にいる頃に使っていた部屋をそのまま使えばいいと思います。何もそこだけで生活しろという訳ではありません。教師ならば生徒に見せられない書類もありますから、プライベートスペースは

必要です。それに食事は神楽坂さん達の部屋で取ってもいいですし、他の部屋で食事を取らせてもらうということも、交流を深める意味でプラスになると思います」

「う～む……」

学園長は唸りながら自身の判断がつかないのか斜め後ろの高畑を見る。

高畑は眉間に皺を寄せて考えているが、学園長の視線に気がつくと、しばし逡巡するがはっきりと頷いて返した。

「……あい、分かった。アスカ君の案を採用しよう。ネギ君もそれでよいな？」

「……はい」

学園長の言葉に、一人で寝たことのないネギは決して納得が言ったわけではなさそうだが、蚊の鳴くような小さい声で答える。

少なくともこれで一ヶ月の間は、魔法関連で問題を起こすことはないだろう。

その後は学園長がネギの魔力を封印して解散し、アスカは２－Ａに向かって五時間目が終わったばかりの教室から明日菜を呼んで、小声で全て伝えた。

ネギの寝室が前までアスカがいた部屋になることを木乃香にも伝えてもらえるように頼んで職員室に戻り、席に座ると隣のネギが睨んできた。

睨み返すと即座に萎縮し、それ以降絶対に目を合わせようとはせず、それからは元々話しかけて来る事が少なかったのにネギから話しかけてくること事態が稀になった。

アスカは元々事務的な事以外は話す用もないので、たいして困りはしない。

その日の夜からネギは寝る時だけは自分だけの個室に移る事となった。

後に聞いた話で今は止んだらしいが、ネギは夜中に廊下のトイレに行った後に、間違えて明日菜達の部屋に戻ろうと、寝ぼけたままドアを叩いた挙句、後で気付いて自室に戻るという事を数日間続けていたらしい。

第三十四話　嫌悪する少年（後書き）

改定前との変更部分であり、タイトルにも暗喩しています。

子供なネギに昔の自分を重ね合わせて嫌悪しています。

次回の更新は『水曜日』の午前0時に予定しています。偶に更新日を間違えて前後一日に投稿する可能性あり。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

第三十五話　　諫める少年（前書き）

今週の原作の呆気なさに拍子抜けの筆者です。もう少し続けて欲しかった。

文字数はギリギリの１００９５字です。

第三十五話　　諌める少年

昼休み、それは勉学に勤しむ学生にとっては授業という名の牢獄から開放され、学校の中で暫しの間、自由を満喫する事が出来る数少ない遊び時である。

それはここ、麻帆良学園でも例外ではない。

広大な敷地を誇る麻帆良女子中学の中庭では、昼食を取ったり、談笑をしたり、遊戯を行ったりと数多くの生徒達で溢れている。

様々な行動で昼休みを謳歌する学生の中には２－Ａの生徒達もいて亜子、アキラ、まき絵、裕奈の４人は、食後の運動に落とさないようにするだけの簡易バレーボールをしていた。

「ねー、ネギ君が来て、アスカ君が教師になってから五日経ったけど、みんな２人の事どう思う？」

順番通りに回ってきたバレーボールを器用におでこで返しながら、脈絡無くまき絵は他のクラスメイト達にそう尋ねた。

「ん……いいんじゃないかな？　ネギ君はちょっと頼りないけど可愛いし、アスカ君はその分頼りになるからちょうど釣り合いが取れてると思う」

まき絵が回したボールはアキラへと渡り、やってきたボールをさらに返しつつ、アキラはそう答えた。

「そうだね。バランスもいいし、二人とも教育実習生として授業も

頑張ってるしね」

裕奈がアキラの意見に賛成する。

スプリングフィールド兄弟の噂は既に麻帆良学園都市中に広がっているが、ネギは小動物系の可愛い等といった愛玩物的な意味合いで見られているのに対し、アスカは子供とは思えない教師然とした姿勢がカッコイイと言った意見が多い。

ネギとアスカは双子だが、その背丈や普段の様子から二人が双子と知らない生徒からは、アスカの方が兄と思われていることをネギは知らない。

会話は続いたがパスは続かずにボールは、ぼふっと音をたてて芝生の上に落下したが、元々時間潰しの様な物なので気にせず話が続行される。

「でもウチら来年は高校受験やし、やっぱり担任や副担任が子供先生じゃ、ちょっと頼りなくない？」

しゃがんで落ちたボールを拾い再び空中に放って、亜子が少し不安そうに言った。

「受験てあんた、私たち大学までエスカレーターじゃん」

不安気な亜子にお気楽な調子で裕奈がそう返した。

確かに麻帆良学園は大学までエスカレーター式ではあるが、学園内には多くの学校がある為、成績によって通える高校、大学がある程度選別される為、このメンバー内でも成績の良い生徒と、成績の

悪い生徒は違う学校に進学する可能性が高いのだが、言っている本人はそこまで深く考えていない。

「でもやっぱネギ君やアスカ君は十歳だし、大人の高畑先生と違って悩み事なんて相談できないよね～」

高畑のような大人の男性ならばいざ知らず、アスカが精神的に大人で頼りになると理性で理解していたとしても、感情が抑制をかけて相談しようと言う気にはならない。

と、言うよりはネギよりまだ異性を感じさせる分、高畑のように年の離れた大人でもないので相談「しづらい」相手であるのかもしれない。

「え、私はお父さんの事で相談に乗ってもらったけど……」

えー、とまき絵の言葉に苦笑しながら裕奈は答えた。

まき絵はそれに驚いて亜子が上げたボールを４人の輪の外に弾いてしまう。

休みのある日に偶々会って裕奈自身も相談する気はなかったのだが、ちょうど悩んでいたときに聞かれたので何も考えずに聞いたら、いい方法を教えてくれたので、その通りにしたら少しは父親のずぼらさが直ったのだから感謝している、と一通り事情を説明するとアキラ、亜子も苦笑せざるを得ない。

ころころと転がっていくボールを追いかけて、まき絵は中腰で進みながら同じように苦笑する。それだけ裕奈の父親好きはクラスでも周知の事実だからだ。

そしてまき絵が追いかけるボールは、誰かの足に当たって停止した。

「ちょっと、あなた達？」

「え？」

頭上から、声がしたのでまき絵はボールから視線を上げると、そこには女子高生の一団が腕を組んでまき絵を見下ろしていた。

「「「あ……、あなた達は……！！」」」

騒動を予感させる生徒達とは別に、アスカ達は職員室にいた。

「ううっお姉ちゃん、アーニャ……」

昼休みの職員室で、大半の先生が昼食を終えてリラックスした雰囲気が流れる中、ネギの従姉と幼馴染に助けを求める声が聞こえる。

自分の椅子に座っているがその身長故に下に足が届かず、キャスターに足を乗せながら綺麗に膝を揃えて両手を添え、目を閉じて目の端に若干涙を浮かべて震えるネギ。

そんなネギにどうしたのかと思った周りの先生達が、同じクラスの副担任であり兄弟であるアスカに目線で聞いてくる。

何でもないから大丈夫だと先生達に返して、先生達が二人の周りから離れてから、ネギが学園長に魔力を封印されてから起こった出来事を思い返す。

と、言ってもアスカ自身が何か起こした訳でも、全ての現場に立ち会ったでもないので又聞きの話もある。

最初の出来事はネギが魔力を封印されて、寝起きを明日菜達と別の部屋で過ごすようになった翌日の事だ。

朝礼があるから明日菜達より早く寮を出たネギだが、何時ものように体を動かそうとするが意思に反して体が上手く動かないようだった。それもその筈、ネギは幼少の頃から魔法の勉強に時間を費やしてきて、外で体を動かすという機会もほとんどなかった為、魔力を使わない身体能力は同年代と比べても著しく劣っている。

普段の運動能力は魔法による補助のお陰で、それがなければ同年代の子供よりも劣っている。更に魔法の補助を受けている時の感覚で体を動かそうとしたため、歩くだけでも多少不自然な動きをしてしまう。

それだけならまだいいが、走るとなると意思に反して体が上手く動かずにバランスを崩して倒れてしまう、という結果に？(つな)がったわけである。

この結果を予想していたアスカは、今日も早めに職員室に来て授業で使う資料の確認をしながら、予め影分身をして姿、気配を隠蔽しながら寮から出るのを待っていた。

流石に寮内を探るのは不味いので入り口付近で待機し、出てきたネギを見つけた影分身と【輪廻眼】の能力の一つ【視界共有】で監視していた。

この視界共有ができるのに気付いたのはつい数日前の事で、何時ものように玉藻との戦闘訓練中に突然、石化研究をしている分身の見ているものが視界に入ってきて、玉藻との戦闘を一時中止して能力の把握に努めることになった。

今まで分身には【瞳術】固有の能力が発揮することはできていなかったのだがどうやら違ったようだった。結論としては出来たのは【視界共有】だけ。ようは、【輪廻眼】の元の持ち主である長門が死体を使っているところを影分身で似たことができるということだ。

話を戻すと、ネギが魔力を封印されると起こる事態をおおよそ予測して、【視界共有】の実験を兼ねて分身で監視させたというわけだ。

「……うぅ……ぐす……」

魔力が封印されてさえなければ十分に朝礼に間に合っただろうが、何度も足を縺れさせて転んでいては間に合うわけもない。

そんなネギの様子を学園長が監視しているのを把握したアスカは一計を案じた。

「……というわけで、どうでしょうか」

間違いなく間に合わないと判断して、朝礼が始まる前に学園長室に向かい、魔力が封印された場合の行動予測を述べ、体と意思の齟齬に悩ませられるだろうという推測を学園長に話した。

そして、朝礼に間に合わないのなら今日に限り、朝礼の時間に重なるように学園長がネギを呼び出したという事にしてほしいと頼ん

だ。

「何故、今回に限って言うのじゃ？」

学園長が何故、今回に限ってそう言うのかと理由を尋ねてきた。

「周りに被害さえ与えなければ僕も問題にはしませんよ」

確かにアスカはネギが問題を起こすたびに処罰を求めてきたが、それはネギの行動によって被害にあった人がいるからで、周りに被害さえ与えなければあそこまでの事はしなかったと答えた。

学園長はアスカが個人的に嫌っているのだと思っていたのか、意外そうに片目を開いた。

（自業自得だけどあの様は流石に可哀想だったからな）

正直な話、倒れた際に着いた埃を払い、涙を堪えて歯を食いしばって必死に歩く姿を見ると、流石に可哀想に感じて優しくしようという気にもなったのが本音だ。それに今回の事は一般人の感覚を知る良い機会になる筈だし、誰にも迷惑を掛けていない。

最初だけは感覚の齟齬に戸惑うから見逃す旨を伝える。

学園長も意思を理解し、アスカが来るまでネギの様子を見ていたと言い、朝礼には間に合いそうにないから学園長が呼び出したということになった。

急ぎ職員室に戻り、新田にその旨を伝えて朝礼が終わった後にネギはやってきた。朝礼の後、職員室の前で待っていたアスカを見て、

また怒られると思ったのか、泣きそうな顔になるが学園長と決めた事情を話した。

「ありがとう、アスカ」

そして、今回限りは見逃す事を伝えるとホッとした顔を見せ、初めて礼を言われた。

その日の間、細かいミスや階段で躓く等を起こすが他の人には問題を起こしたわけは無いので、倒れそうなときに助けたりはしているが他に特筆すべきことはない。魔力封印のお陰で、少しは兄弟仲も修復することも出来たというのもまた皮肉な話だ。

次の日の放課後には、居残り授業をすることになり、副担任なのでアスカも同席することになった。

ちなみに、その対象は時折実施されている小テストの得点が余りにも低い生徒との事。

メンバーは明日菜、夕映、まき絵、楓、古菲の２－Ａバカレンジャーの五人だ。

だが、始まって直ぐにアスカの鼻は妙な臭いを感じ取った。具体的にはある種の発酵臭というか、何ともアレな悪臭ある。

（なんか臭う。こっちから？）

臭いの発生源を辿るとネギからだった。

「ところでネギ先生、お風呂入ってますか？　少し臭いますよ」

「え……いや、その……日本に着いてから色々と忙しくて、その……授業の準備とか」

「「「「「「「え”……！」」」」」」」

アスカがちゃんと風呂に入っているのかと聞くと、日本に来てから忙しく風呂嫌いだから入っていないという言葉に、バカレンジャーの脳裏には衝雷が落ちたかの如く、衝撃を受けていた。

風呂に入っていないネギから漂う、汗の臭いであった。女子校において、不潔な男性教師など存在自体が重罪である。

一般に女性はにおいに敏感と言われており、常人以上の嗅覚を有するアスカは尚のこと。

まあ、年頃の女の子だからそこら辺の事が気になるのは仕方ない。さり気なくネギから距離を取ろうと椅子を動かして離れている。

「……ああ、雪広さん。少しお願いが……はい、実は……」

生徒たちの対応からこのままではネギがいても気になって授業にならないと考えたので、携帯であやかに連絡を取り、ネギを風呂に入れてもらうように頼んだ。

「さあ、ネギ先生！　私（わたくし）が身体の隅々まで綺麗にして差し上げますわ！！」

「わあああっ！！！」

渋るネギに匂いが気になって授業にならないと説得し、連絡を入れてから超高速でやってきたあやかに悲鳴を上げながら連行されていった。

なんとなくあやかの今にも鼻血を出しそうな様子からネギの貞操が危ないと思ったがスルーすることにした。触らぬ神に祟りなしである。

そしてアスカは連行されたネギに変わりに授業を代行することになった。

「４番綾瀬夕映さん、九点合格。２０番長瀬楓さん、１２番古菲さん、二人とも八点合格です」

小テストを行うと夕映は一発合格して、古菲、楓も二回目で合格した。

二人とも約束を覚えていて、ちゃんと勉強しているみたいだ。この様子なら期末テストで合格点に行かなくても、教えるぐらいならしてもいいかもしれない。

社会人は結果を求められるが、学生の内は過程の努力を認めれば結果が振るわなくてもご褒美があってもいいと思う。

「うーん１６番佐々木まき絵さん、８番神楽坂明日菜さん共に６点ギリギリ合格です」

まき絵、明日菜もポイントを教えれば直ぐに合格した。

前から思っていたけど明日菜って、高畑の居残り授業に参加したくてわざと勉強しなくて、それが原因で勉強が分からなくなっていってしまったんじゃないだろうか。勉強を見たけど決して頭が悪いというわけじゃなくて、単に基礎が分からなくてそれが積み重り、今の状態になってしまったのではないかと推測している。

それでなくても素で頭が悪いわけではないから、こうなってしまった原因は高畑絡みの可能性が高い。少なくともちゃんと教えたお陰か、小テストで一桁の点数を取ることは少なくなった。

それでもクラスの底辺である事には変わりは無いが。

全員合格したのでみんなで帰ろうとした時に、高畑が現れ、居残り授業が早く終わったことを褒めたので、照れた明日菜がアスカの背中をバンバンと叩かれたのは痛かった。

そしてあやかに連行されたネギがあれからどうなったのかは分からないが、今日の朝のＳＨＲの時に見たあやかは物凄くツヤツヤして、昨日に何かあったのは間違いない。

《あやかに貞操でも奪われたんでしょうか？》

《それは分からんが、こうなるような何かはあったんじゃろうな》

《あやかさんの嗜好を知っているから、ないとも言い切れないのが怖い》

《《《南無……》》》

三人は心の中で、別に死んでないけどネギの冥福を祈って手を合

わせる。夜に電話で定期的に風呂に連れて行ってもらうように頼んだのは、間違いだったかもしれないとほんの少しだけ後悔しながら。

子供の風呂嫌いは頭を洗うときに洗剤が目に入るのが主な原因らしいから、今度シャンプーハットを買って渡そう。

――――――それで許してくれ、兄さん。

暴走状態のあやか、女王様オーラ全開のエヴァンジェリンには近づかないのが吉だから。

そう考えて座りながら背伸びをするとゴキッと身体の骨がなり、身体の違和感がなくなったので、机に置いていた水筒のカップに口を付けてお茶を飲む。

ネギが泣き言を言っている横で、お茶を飲んでのんびりしている最中、職員室の扉が勢いよく開かれた。

「うわあああ～～ん。先生～！！」

「ネギ先生～、アスカ先生～～っ！」

職員室中の教師の視線が扉に集中し、大声と共に亜子とまき絵が職員室に泣きながら入って来た。

「……はい？」

ネギは驚き、呼ばれたのでアスカがつい零した返事と言うか疑問の声に、二人は慌てた様子でこちらにやってくる。

「こ、校内で暴行が……！」

「見てください、この傷ッ！　助けて先生っ！」

かなりパニックに陥っており、目には涙を溜めて額や手の甲に負った小さな傷を見せてくる。

「え、ええ！？　そんなひどいことを、誰が……！？」

「何があったですか？」

ネギが憤慨しているが、アスカは慌てず騒がずに何があったのかとまき絵よりかは落ち着いている亜子に話を聞く。アスカが亜子に事情を聞いている間に、ネギは事件が起こっているという中庭へとまき絵と走って行ってしまった。

事情を聞き終えたアスカは引き出しに入っていた救急箱を取り出して亜子の傷を治療する。正直に言えば怪我というほどのものではなく、絆創膏で十分な傷である。治療が必要なレベルではないが念のために。

「はい、終わり」

「あ、ありがとうございます」

消毒して絆創膏を張っただけでお礼を言われるのもあれだが、喧嘩を放っておくわけにもいかない。早く現場に向かうために中庭を向いている窓を目指す。

「アスカ先生、ちゃんと出入り口を使いなさい」

「済みません。今回だけ急いでいるので見逃してください！」

アスカの行動を察した新田も状況が分かっていても窓から飛び降りる前に、一応叱ってくれる言葉に謝罪を返しながら、窓を開けて飛び出した。

そして中庭に出て魔力等を使わずに普通の速度で現場に向かって走る。良すぎる視力と聴力で現場の様子を垣間見ることができる。

中庭には裕奈、アキラと対峙するウルスラ女学院の一団の姿があったが、まだネギの姿はない。

どうやら魔力が封印されてまだ動きがぎこちないネギよりも、窓を使ってショートカットをしたためアスカの方が早く着きそうだ。

「いい加減におよしなさい。おばサマ方！！」

「ぶ！！？」

今のは制服から見てウルスラ女子高等学校の生徒の一人が、裕奈をその場から退けようと襟首を持ってずるずると引っ張っている時に、あやかの言葉と共に明日菜が力任せに投げて高速で飛来したバレーボールが後頭部を直撃した為に出た悲鳴である。

「な、何だとコラァ！！」

年頃の女子高生としては言われたくない言葉を言われた為に、不穏当な言葉を吐いて高等部の学生達はボールが飛んできた方向に、憤怒に染まった視線を向ける。

場の雰囲気が悪くなっているのは分かっているのだが、如何せん現場との間に他の生徒達がいるから迂回しなければならないので、強化していない身体では現場はまだ遠い。

「「アスナ、いいんちょ！！」」

高等部の学生達が視線を向けた先には明日菜とあやかが立っており、その姿を見た裕奈、アキラがその名を呼んだ。二人には頼もしく見えたかもしれないが、大分遠くにいるアスカには二人が余計に厄介にするだけのように思えた。

「ここはいつも２－Ａの乙女が使っている場所です。高等部の年増の方々はお引き取り願えます？　あまり運動するとお体にも毒でしょうし、おばサマには……」

あやかは左手にバレーボールを持ち、右手を口元に当ててそう言う背後には百合の花でも咲き乱れそうな優雅さで、神経を逆撫でるように挑発する。

あやかの年若さを強調する発言に、高等部の学生達の頭に血が上り、全員がはっきりと見える青筋をピキピキと立てた。

《本人は1年とちょっと経てば同じ立場になることを分かっていないんでしょうね……》

《その場のノリで言ってるじゃろうからな》

遠くから聞いているアスカでも怒るだろうなと思ったが、あやかのさっきの言葉を女の先生達が聞いたら、考えるだけで恐ろしい結

果になりそうだ。

「なっ、何ですって～！？」

高等部の学生達の彼女たちは十分若いのだが、これぐらいの年代は一歳の違いは大きい。

「とにかく皆さんは帰ってください。先輩だからって力で追い出すなんて、ちょっとひどいんじゃないですか！？」

《全く持って正論なんじゃがな》

《それで納得するなら、初めからこんなことはしないでしょうからね》

続いた明日菜の言葉は敬語で、それは至極真っ当な事で正論なのだが、前のボールを投げるのとあやかの暴言さえなければ、まだよかったのだが相手もそれでは収まらない。

「……ふん、言うじゃない。ミルク臭い子供のくせに。知っているわよ？　神楽坂明日菜と雪広あやかね。中等部のくせに色々出しゃばって有名らしいけど……先輩の言うことにはおとなしく従うことね。子供は子供らしく隅で遊んでなさい、神楽坂明日菜」

高等部の学生達のリーダー格の子供、という言葉にかちんと来たのが離れたここからでもはっきりと分かる。

《フルネームまで知っているって事はこちらが目的なんでしょうか？》

《そうじゃな、全くもって暇な奴らじゃ》

「そうそう確か貴方達の担任は可愛い子供だったわね、私たちに譲らない？」

その言葉にブチンと、真性ショタコン雪広あやかが切れたのも分かった。

距離も大分近くなったが、この雰囲気では声だけで収められるとは思えず、大変まずい。そこまで一瞬で判断して、物理的に止めるため彼女達の前に着地するように走ってきた勢いのまま跳躍する。

「誰がゆずりますか、このババァッ！！」

「今時、先輩風吹かせて物事通そうなんて頭悪いでしょ、あんた達！！」

「なによやる気、このガキーっ！」

ウルスラ側の激昂にも堂々とした態度の明日菜とあやかだが、相手側の挑発にあっさりと沸点を越える。

そして、取っ組み合いの喧嘩が始まる寸前に彼女達の前に左足で着地し、次に右足を震脚の要領で地に付ける。ズンッと音が辺りに響き、地面が震えたような気がして、その場にいた全ての生徒がアスカを驚愕の目で見て静寂が訪れる。

「双方共、矛を収めなさい」

既に双方共に動きは止めているがそう言い、両者をサングラス越

しに睥睨する。教師であっても子供であるが故に、こういう時は舐められないように高圧的に出なければならない。

「神楽坂さん、雪広さん、気持ちは分かるがわざととボールを当てたのとさっきの暴言は容認し得るものではない。彼女達に謝罪しなさい」

その時になってようやく二人が到着したが、ネギは思いっきり息を乱している。場の雰囲気を読んで何も言わないでいてくれるのはありがたい。

こういう場合、どちらが悪いとかはあまり関係ない。まずは、担当しているクラスの生徒からとあやかと明日菜を睨む。文句を言いそうな明日菜に顔を向け、視線を合わせて黙らせる。

両陣営は高等部の学生達はリーダーの後ろに、中学生は明日菜とあやかの後ろにそれぞれ集まる。

「は、はい。ゴメンなさい」

「ゴメンなさい」

場の雰囲気に呑まれ、サングラス越しでも視線の強さを感じたのか先程の剣幕もなく、二人は素直に高等部の学生達に謝る。

それを見て二人への視線を和らげて笑って頷き、次はいい気味だとニヤニヤと笑っている女子高生に厳しい視線を向ける。

丁度、亜子も息を切らしながら走って来たので丁度良い。

「何をニヤニヤ笑っている？　そもそも、あなた達が中等部の領域にちょっかいを出してきたのが原因で、実際に軽症だが怪我人も出ている。それを理解しなさい」

アスカの言葉に大人しく謝罪する明日菜とあやかに勝ち誇った表情で見ていた高等部の学生達だったが、その指摘に顔を伏せる。

「明石さん、和泉さん、大河内さん、佐々木さんこちらへ……さあ、あなた達も彼女達に謝罪しなさい」

絡まれた被害者である４人を呼んで加害者である高等部の学生達に謝罪を促す。が、高等部の学生達は俯いたままで何も言わない。

「仕方ない」

はぁ～と嘆息して植木の方へと顔を向ける。

「……高畑先生、彼女達には反省の色が見られないので学園長に報告してもらえますか？　中等部の生徒を怪我させたにも関わらず、高等部の生徒は謝罪をしなかったと」

「そうだね、流石に僕もコレは見逃せないかな」

植木の陰に隠れている高畑先生にそう言うと姿を現した。

「場合によっては退学もあり得ますよね？　実際に怪我人も出ているわけですから」

「「「「「ゴ、ゴメンなさい。申し訳ありませんでした！」」」」」

突然現れた高畑に驚く彼女達だが、退学もあり得るという言葉に慌てて４人に向かって頭を下げて謝る。

――――――うん、教師っていう権力はこういう時に使わないとね。

ちょっとその慌てようが面白いと思ったのは心の中に秘めておこう。

謝られた４人に、これでいいのかと聞く為に顔を向けると頷いてくれたので、この件はこれまでとする。

全てが計算されたアスカの行動と薄らと笑みを浮かべていたことに、麻帆良で付き合いの長い方の明日菜などは気づいていた。後日、悪魔の羽と尻尾があったと友人に零していたそうな。

「これで一件落着。もう昼休みも終わるから授業に遅れるぞ。皆、早く教室に戻れ！」

アスカの締めに、教室に戻っていく高等部の生徒達。

だが、何人かの生徒は心底納得したわけではないのは顔を見れば分かる。今後も何かいちゃもんつけて来る可能性は高そうだ。

後で彼女達の事を調べておこうとアスカは心に決めた。

高等部の生徒達を見送ると、まだその場を動かない２－Ａの生徒達が残っていた。

これはあやかの方はまだいいが、正しい事をしたのに謝らされた事に納得できない明日菜が動かないためだ。

「神楽坂さん、あなたの思いは決して間違ったものではなかったけど、わざと体にボールをぶつけてしまっては、始まりがどうであろうとそれはただの暴力でしかありません。ですが、その思いは尊いものです。今回は間違えましたけど、次は間違い得ないように心において生かしてください」

俯いている明日菜に語りかけて、励ますように肩をポンと叩く。

「うん、そうだね。ありがとう、アスカ」

それだけでやり方は間違ったけど心遣いと思いは間違っていなかったのだと分かって頷いた。

「……ほら、皆も教室に戻りましょう」

純粋に感謝の笑顔を向けられて、ちょっと照れくさくなったアスカは明日菜から顔を背けてみんなを教室に促した。

「ああ、それと雪広さん」

「はい、何ですか？」

生徒達と校舎に戻る途中で、あやかに言っておかなければいけない事を思い出した。

「さっき高等部の人達に年増と言ってましたけど、あなた達も後一年ちょっとで同じ立場ですよ？」

世界が凍った。

と言わんばかりにその場にいた全員（理解して苦笑している高畑と何のことか分かっていないネギを除いて）が固まった。

「それとあの場に女の先生がいたら、一体どんな反応をするでしょうね」

あやかがだらだらと冷や汗を掻き、他の生徒達はそんなあやかを気の毒そうに見ている。

「挑発するなら、もう少し周りや自分達に被害がいかない言葉を選んだ方がいいですよ？」

「……はい。たった今、骨身に染みて理解しましたわ」

校舎に入って教師陣と別れて、教室に向かうあやかの後ろ姿は、とても沈んでいたとだけ言っておこう。

第三十五話　　諫める少年（後書き）

次回の更新は『日曜日』の午前０時に予定しています。ドッチボール編の後編となります。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

第三十六話　　抜け目のない少年（前書き）

文字数は前回同様に本当にギリギリの１００７８字です。

第三十六話　抜け目のない少年

生徒達と別れて職員室に戻り、新田に騒ぎが収拾した事を伝える。

「高畑先生、彼女たちのこと知ってますか？」

「ああ、知っているよ」

次に高畑に問題を起こした生徒を知っているかと聞くと、アスカは知らなかったが彼女は特定の分野で有名人らしくクラスと名前を教えてもらった。

高畑が何もできなかったと落ち込んでいるネギを慰めている横で、教えてもらった情報を元にプライバシーに引っ掛からない程度に調べる。

スリーサイズとかを調べたわけではないので得た情報は、リーダーの子がドッチボール部に所属していて関東大会で優勝している事と担任の名前ぐらいだ。

「ネギ先生、アスカ先生、申し訳ありませんが体育の先生が急用で帰られてしまったので　代わりに監督してくれませんか？」

丁度二人とも五時間目は授業がないので、空いている。

「あ、はい。分かりました」

「少し遅れますけど構いませんか？」

「別に構いませんよ。それではお願いします」

新田の頼みにネギは直ぐに頷いたが、万が一の事を考えて、急ぎ高等部への電話番号を調べておきたいので遅れる事を言うが、それでもＯＫが出た。校舎が違うから電話番号も違うので、調べないといけない。

「じゃあ、行ってきます」

二人で授業内容を聞き、ネギは一足早く自習を行う屋上へ向かった。アスカも高等部の電話番号を調べから、少し遅れて職員室を出た。で、階段を登って屋上の前まで来たのだが……さて、目の前の状況を何と言ったらいいか。

「あんた達の方がガキじゃないのよーーーっ！」

「やる気!?　かかって来なさいよこの中坊ーーー!!」

「ネギ先生をお放しなさーい!!」

屋上特設コートの入り口で２－Ａ生徒達の後ろに立ち、昼休みのように取っ組み合いに発展しかけている彼女達の様子を伺う。

「一体、何があったんですか?」

「高等部の生徒が自習で先に来ていて、同じバレーボールということでダブルブッキングしてしまったようです」

「で、ネギ先生が彼女達に捕まってしまったということさ」

一番近くにいた刹那に聞き、刹那さんの横にいた真名が後を引き継ぐ。

何時か仕返しに来ると思っていたが、高等部の生徒達はアスカの思惑よりも早く動いたようだ。と言うか、何で捕まってるのさネギ。

「向こうは高校生で先に来ていたとしても、ここは高等部の校舎ではなく中等部の校舎で、自習である向こうとは違って、こっちは正式な授業なんですから使う権利があるのはこちらでしょう」

「「「「「「「「「「……」」」」」」」」」」

何故かタイミング良く全員の声が途切れた所に、横にいる刹那に言ったつもりのアスカの言葉で周りは静かになった。

その言葉を聞いた２－Ａ全員が成る程と、頷いて納得している。

《はて？　刹那さんに言ったつもりなんだけど……》

《タイミングが良かったと言うべきでしょうか、皆に聞こえたみたいです》

《どうせなら、このまま思った事を言ってしまったらどうじゃ？》

《それしかないか》

「それと、自習として体育をするつもりなら、制服のままなのはどう考えてもおかしいでしょ？　何か他に理由がありそうですが？」

ここまで証拠が揃うと、このダブルブッキングが彼女達の意図的

であるのは明白であった。

「ぐっ！」

推論に詰まるリーダー格の少女と悔しそうにしている高等部の生徒達。

それを勝ち誇った笑みで見ている２－Ａの生徒を傍目にアスカは思考を走らせる。

このまま彼女達を引かせるのも一つの手だが、リーダー格の少女の顔を見るにこのまま放置すると、何時かは暴発して暴力沙汰になる可能性がありそうだ。

《今、こっちは体育の時間で向こうはレクレーションだからの、両クラス対抗で勝負を決めるか？》

《爽やかな汗を流せば、つまらないいがみ合いもなくなると兄さんなら言いそうだけど……》

《それだと、どっちが勝っても綺麗に終わりそうもない気がしませんね》

後に遺恨を残さずに解決する妙案が思いつかず、どうしたものかと頭を捻る。

「あ、あの！！」

アスカの思考を突然遮って高等部の生徒の一人に抱き締められたままのネギが、彼女達の間に流れる不穏な空気を感じ取ったのか大

きな声を上げる。

《さっきから何か考えて俯いていていきなり顔を上げましたから、間違いなく空気は読んでいません》

《そうじゃな、我もそう思う》

折角、空気を読めるぐらいには成長したのかなとか思ったのに間違いだったようだ。

「……で、ではこうしたらどうでしょう？　両クラス対抗でスポーツで争って勝負を決めるんです。爽やかに汗を流せばいがみ合いもなくなると思うんですけど……」

《こちらが考えていたような展開になりそうじゃな》

《そうですね。後のことはこちらで始末をつければうまく纏まるのでは？》

《今は兄さんの案に乗って、こちらで上手く騒動を終結させるのが最善策か》

まだまだ詰めは甘いけど、教師としてのネギを少しは見直した。魔法使いとしては別の話だが。

現在のアスカのネギへの評価は教師＋１、魔法使い－３０となっている。ようやく＋に転じた時点でネギへの評価がどうなっていたか押して知るべし。

「いいわよ、面白いじゃない。私たち高等部が負けたら大人しくこ

のコートを出て行くし、今後昼休みもあんた達の邪魔はしないわ。それでどう？」

ポカンとして女子高生達は、正当性は本来中学生組みにあるのに、ネギの案に乗って高圧的に出てきた。

「そ、そんなこと言ったって年齢も体格も全然違うじゃん！！」

バレーボールだと体格の差が諸に出るからな。幾らこちらに中学生とは思えない身長の生徒がいるとしても、平均的に見たらトントンだから不利。

「ふん、確かにバレーではちょっと相手にならないわね。じゃあ、ハンデを上げるわ。種目は……ドッチボールでどう？　こっちは全部で１１人、そっちは倍の２２人で掛かって来ていいわよ。ただし、私たちが勝ったらネギ先生を教生として譲ってもらうわ。いいわね？」

「な……！」

「え～～～～～っ！？」

「……！」

ネギを譲れ発言にあやかやまき絵、のどか等のネギ大好き人間が抗議の声を上げる。

ちょっとだけその提案にアスカの心が揺れたのは秘密だ。

まあ、それは置いておいて、自分達の得意競技で来たって事は案

外初めからこれが狙いか？

しかも、このコートの広さでは倍に増えても逃げる範囲が狭くなるだけで、足枷にしかならないのは分かっている筈だ。中学生と馬鹿にしながらもその中学生相手にズルをするとは、やっていることはかなりせこい。

放っておけば明日菜辺りが挑発に乗って人数差を理解しないまま条件を認めてしまいそうだ。

「分かっ「待った！」」

予想通り認めかけた明日菜の言葉を途中で遮る。

また何かするのかと睨んでくる高等部の生徒達を無視して、彼女達の前に出る。

「このコートの広さで２２人は狭すぎて動きにくくなるだけですので、数的に上回ってもハンデを貰った事になりません。そちらの人数に合わせてこちらの人数は１１人として、そちらはハンデとして人数を減らして７人にしてください。いいですね？」

「くっ……分かったわよ、それでちょうどいいハンデだしね」

２２人という人数はハンデにならない事を理解した生徒達が、一歩前に出たアスカの後ろから彼女達を睨む。

迫力に押された高等部の生徒は一瞬怯んだが、直ぐに仕方なさそうに頷き、抜けるメンバーを決めるために固まって相談を始めた。

それを見届けて、生徒達とネギを近くに集める。

「と、言うわけですがメンバーを決めたいと思います。まず、出たくない人はあちら側の壁の方に寄ってください」

アスカがそう言うと裏の関係者と興味のない、応援の方が合っている、エヴァンジェリン、茶々丸、真名、刹那、楓、チア三人娘、ザジ、千雨が壁の方に行った。

残ったメンバーから選ぶとしたら、当事者と被害者は今後に遺恨を残さないために出したほうがいいだろう。

「綾瀬さん、宮崎さん。申し訳有りませんが審判をお願いできますか？」

「分かりました」

「は、はい」

審判の事を思い出して夕映とのどかさお願いすると快く承諾してくれた。のどかは未だにアスカに慣れないみたいだが。

「ネギ先生も出るんですか？」

「うん、僕も出たい」

ふと、出るのかどうか気になったので横にいるネギに尋ねると、何か燃えている目で頷かれた。ぶっちゃけ鬱陶しい。

《今は同年代にも劣る身体能力しかないのに、生徒を思ってのことかの》

《まあその心意気は買いますが、下手したら鳴滝姉妹よりも下じゃないですか？》

《だけど、これだけ張り切られると出さないわけにもいかないよ》

ネギを出すかどうかで玉藻、リインフォースと協議して、その熱意に折れる形となった。断じて面倒だからと思ったわけではない。

「出るメンバーは当事者の神楽坂さん、雪広さんと昼の被害者である明石さん、大河内さん、佐々木さん、和泉さん。そしてネギ先生は確定でいいですか？」

名前を呼ばれたメンバーはまき絵、亜子はちょっと消極的だが他のメンバーはやる気満々だ。この人選に、選ばれていない生徒も異論はないようだ。

「次は運動神経がいい古菲さんと超さんで、残り二人は……出たい人は手を上げてください」

「「「「「はい！」」」」」

「それでは希望者でじゃんけんをして決めてください」

《最後の選び方が適当です》

《後は皆、似たようなものじゃからな》

考えるのが面倒になって最後は希望性にすると、数人が挙手したのでじゃんけんをして、見事勝利した鳴滝姉妹が出ることになった。

メンバーから外れた生徒達は壁際に行き、アスカはメンバーを近くに呼んで事前に調べた情報を伝える。

「高校生にもなって、ドッジ部なんて……？」

「小学生ぐらいまでの遊びちゃうの？」

「関東大会ってあいつらしか出なかったんじゃない？」

彼女達がドッチボール部で関東大会優勝だと聞くと、純粋に凄いと思っているのはネギだけで他の生徒達は懐疑的だ。

「あれでも一応関東大会での優勝者です。私達よりかはドッチボールの事を熟知していて上手い筈ですから、気をつけてください」

「まあ、そうよね。でも、その割には手口がセコイわよね……」

一応は気をつけると言う明日菜だが、その発言には全員頷く。

出場しないアスカも壁際に寄って歩く。

チア三人娘は、体操服から着替えてチア服でポンポンを持ち、音楽を鳴らして応援を始めた。

《何時の間に着替えたんだ？》

《さっき話し合いをしている間でしょう》

《お祭り好きな２－Ａの生徒らしいです》

茶々丸がどこからか持ってきた花火を持って打ち上げ、それが合図となって試合が始まった。

「茶々丸、そんな物どこから取り出したんだ？」

「これはお約束、と言うものです。マスター」

横で制服から着替えてすらいないエヴァンジェリンが茶々丸に尋ねるが、返ってきた言葉は意味不明である。様式美という奴だろうか。

「ご苦労だったな、アスカ先生」

「先生が当て擦りにしか聞こえませんが」

お茶を飲んで万全の観戦体勢のエヴァンジェリンの横に座ると、薄らと笑いながらからかってきた。

笑うエヴァンジェリンを放っておいてポケットから携帯とメモを取り出し、メモの電話番号に電話を掛ける。

《先攻は高等部のようじゃな。お、ぼうっとしていたネギの後頭部に直撃した》

《落ちる前に上手く明日菜がキャッチして、高等部の生徒に当てました。これで１１対６ですね》

《相手に渡ったボールで後ろを向いて逃げていた鳴滝妹が当たった。１０対６じゃ》

マルチタスクを使って玉藻とリインフォースに念話で実況してもらいながら、数回のコールの後に出た相手に用件を告げて電話を切る。

一連の行動を見ていたエヴァンジェリンが心底楽しそう笑う。

「ククク、中々に手口が悪辣だな」

「使えるものは使う主義ですから。でないと勿体無いでしょ？」

「違いない」

そして余人に聞かれたくない話をするので、二人を包むように認識阻害その他諸々の結界を張る。

話がどこから漏れるか分からないので、申し訳ないが茶々丸も対象外にしている。秘密の計画とは知っている人間が少ない方がいいからだ。結界を張り終わり、これで傍目には世間話をしているように見える。

《おお、明日菜が全力で投げたボールを片手で取るとは》

《流石に痛そうにはしていますけどね。あ、学校の制服を脱いでドッチ部のユニフォームになりました》

《既に主が教えておるから、驚いているのは観戦組みだけじゃな》

《反応の薄さに逆に驚いていますね》

《トライアングルアタックというやつで、簡単にあやかがアウトになって9対6ですね》

《あやかはパスの軌道が読めないとか言っておるが、ただの三角形なんじゃが。意外と馬鹿なのか？》

《あ、そのトライアングルアタックで鳴滝姉が当たりました。8対6です》

「さて、さよさんの様子はどうですか？」

マルチタスクで玉藻とリインフォースの念話を思考しながら、材料費や機材費は出したけどエヴァンジェリンに事実上丸投げした形になっていたことを聞く。

さよの件はエヴァンジェリンに頼んである。協力はしているがほとんど丸投げなので対価として大分血液を求められたが。その他にも色々とある。

「何の問題もなく順調に成長している。普段は茶々丸の姉達が世話しているが、チャチャゼロもさよを気に入ったようで入り浸っているし、私や茶々丸も顔を出すようにしている。だが……」

《太陽を背にした状態で、投げた球が明日菜に当たってしまったの。だが、玉なのに太陽拳とはこれ如何に？　7対6じゃ》

《それらしい必殺技が欲しかったんでしょうね。む、既に明日菜はアウトなのに連続で当ててますね》

《明日菜がアウトになったことで士気が下がっておるな》

「やっぱり以前の記憶はない、ですか」

「ああ」

さよに普通の生活をさせるためにホムンクルスの肉体を与えた。

幽霊の時と同じ年齢の肉体を作れば良いという訳ではなく、それだと肉体から魂が乖離しやすいため、3歳ぐらいのホムンクルスの体を作ってそこに魂を入れた。肉体に魂を自然に定着させるためにエヴァンジェリンの別荘で過ごし、成長と共に魂が肉体に馴染んでいくだろう。

だが、最初の段階から危険性はあった。

アスカがしたことは人為的な輪廻転生。

上手く行くかは最初から不透明。さよに事前に危険性を説明して了承を得た上で行ったわけだが結果は……成功しなかった。確かに霊魂は肉体と上手く合致し、魔力が満ちた別荘にいたことで以降も乖離することなく順調に成長していた。

唯一(ただひと)つ、生前や幽霊時代の記憶がないことを除いて。

「魂という分野は魔法世界でも殆ど解明されていない。そんな中でお前の理論自体に問題ない。問題があるとすれば……」

「人の身で神の真似事などできない」

「そういうことだ」

神の真似事をしようが所詮は真似事に過ぎない。どれだけ理論を組み立てようと、どれだけ万全を期そうと、人の身で叶うことではないと言わんばかりに失敗した。

《下がっていた士気を、ネギが奮起を促して皆やる気になっていますね》

《審判の二人が相手の反則を取って、与えられたボールをアキラが当てておったな。流れが変わりおったな。これで7対5じゃ》

二人の念話が漂う空気を緩和しようとして、結局は果たせず、空しさを伴って散っていく。

「危険性（リスク）も全て話した上で彼女は認めた。だが、この結果は……」

「正直言えば止めたかったがな。だが、本人が新しい可能性を求めたのだ。哀れむな。それはさよに対する冒涜だ」

エヴァンジェリンとしては本音では止めたかった。

15年もの間、麻帆良に閉じ込められていたエヴァンジェリンだが、さよはその上を行く六十年もの時を過ごしてきた。

最後を共に過ごしたエヴァンジェリンは後悔している様子のアスカを認めることができず、内心の怒りを隠して窘（たしな）めた。

「もしかしたら自分が消えるのも覚悟の上で選んだのはさよだ。最後の言葉を忘れたわけではあるまい？」

「ああ、覚えてるよ」

準備を全て終えて後は霊魂を肉体に憑依させる前の最後の言葉。

――――――こんな私にも友達が出来て、それだけで十分に満たされました。ありがとうございます。

見たことがないほどの綺麗な笑顔で言ったさよの顔は、今でもアスカの脳裏に焼きついている。

「今いるのは相坂さよであり、そうでもない。以前のあいつを知っているのは少ない」

――――――だから忘れるな

続けられなかった言葉。口に出す必要すらなかった言葉をしっかりと心に刻む。

「忘れない。忘れてなるものか」

胸に手を当てて誓うアスカにエヴァンジェリンは自分よりも遥かに強い思いで望んでいたことを悟る。

その分だけ罪悪感を大きいだろう。それすらも纏めてアスカは忘れないとそう言っているのだ。

《相手にボールを投げるが亜子がダイレクトで蹴り返して当てました。ダイレクトで返してしまってはアウトな気がしますが。７対４です》

「そうか……そうだな、もう何も言うまい。それよりお前の方はどうなのだ、成果はあったんだろうな？」

自分が触れてはならない神聖なもののように感じて少し気圧されながら話題を変える。

「計画があるのは掴みました。そこから後は今後の調査次第ですね」

元々、騒動に巻き込まれる性質のアスカは、過去に経験した色んな事件で痛感したのもあって何よりも情報を大事にする。

教育実習の期間は三学期までだが、あの学園長だとどんな手を使って延長してくるか分かったものではない。そうなると騒動に種になりそうなのが新学期から少し経った修学旅行。

よりにもよって冷戦と言った方が適切な関係にある関西呪術協会の総本山がある京都が予定地に入っている。

他の候補地があるも、アスカの中にある何かが修学旅行先は京都で絶対に騒動に巻き込まれると、ガンガンに警鐘を鳴らしていた。

リインフォースが体内にいることで、今まで精神面、内面への干渉を防いでいた玉藻にある程度の自由が出来たことで探りに行ってもらったら計画を掴んでしまった。

《当たって上がったボールを裕奈が叩き落して相手に当ておった。あれも亜子と同じくアウトではないのか？　7対3じゃ》

「成る程……そう言えばあの計画はどうするのだ？」

どうやって、とはエヴァンジェリンも聞かない。

アスカが秘密主義なことは今に始まったことではなく、ただ他よりかは近くにいるから見えてくるものがあるだけで全容はようとしれない。

「全ては向こうの出方次第。十中八九あると思いますが」

あの計画とはエヴァンジェリンが考えていたネギ、もしくはアスカを襲う、というものだ。

だが、アスカの牽制によって血に搾取は行われておらず、そんな状態では襲えるはずもないので立ち消えるはずだった。

そこにアスカが自分が関わらなかった場合の可能性を示し、もしかしたら学園側は承知で見逃していたのではないかと推論を披露した。果たしてエヴァンジェリンが行動を起こした場合、学園がどのような行動を取るのかということを考え、アスカが計画を大幅に修正して実行することを決めた。

勿論、エヴァンジェリンがアスカの手の内で転がるはずもなく、彼女自身も内密に別の計画と目的を定めていた。

《裕奈が当てたボールに、まき絵が新体操のリボンを括りつけて相手に当てておった。あれはどうみても反則ポイな。7対2であと少しで勝ちじゃな》

「ククク、本当にお前は悪辣だよ。今は心底、敵に回さなくて良かったと思っているよ」

「僕はそこまで大したことはしてないんですけどね……それとお願いなんですが、明日菜さんの身元を洗って欲しいんですが、いいですか？」

今後の布石の一つとして彼女に頼んでおくことを考えておいた。

アスカだけが警戒しているには、もし発覚して学園を敵に回した時、スケープゴートが欲しい。

《古菲と超が二人でチャイナダブルアタックとか言いながら、投げて当ておった。残り一人》

「何故だ？　調べる理由が分からんが……」

「ある意味この麻帆良学園で一番重要度が高いと言える木乃香さんと、ただの一般人である筈の彼女が同室になるのはおかしいと思うんです。本人には身寄りがなく一定期間から昔の記憶がないし、身元引受人が魔法世界でも有名な高畑先生というのもキナ臭い。怪しいと思いませんか？」

そもそも、高畑先生が身元引受人というだけで、いらぬ疑問を与えそうな気がする。

「確かに怪しいが、それだけが調べる理由ではあるまい？」

エヴァンジェリンは全てを見通すような目でアスカを見てそう言う。

アスカは頭の回転も早く、着眼点も悪くない。一般に策士と呼ば

れるタイプの人間で、必要ならどんな悪辣な手も取れる戦いたくないタイプの人間だ。

そんなアスカがそれだけの理由で調べるとは思えない。何か確証か、確実な疑念を抱いていなければ。

「そうですね、他にも理由はあります。第一に初日に兄さんが明日菜さんに魔法がバレた時に、兄さんは記憶消去の魔法を使ったが何故か服が吹き飛んだんです。それだけなら兄さんの魔法が失敗したで済むんですけど、次の日に兄さんがホレ薬を飲んだときに周りは効いているのに、一番近くにいた明日菜さんには全く効いていなかったんです。だから、何か彼女には特別な能力があると僕は考えたんです」

「ふむ……いいだろう、茶々丸に調べさせよう（可能性として高いのは魔法無効化か？　面白くなってきたな）」

確かに最初の疑念だけであったなら見逃していただろうが、ネギが関わってから発覚した明日菜の特異性はエヴァンジェリンの興味を存分にそそった。

「お願いします。お、決着が着きそうですね」

エヴァンジェリンとの話が終り、結界を解いて二人して試合に目を戻す。

試合は最後の一人を当てて勝利した。

「やった――――ッ！」

「勝った――ッ！！」

「バ、バカな……」

「私たちが負けるなんて……」

まき絵や裕奈が勝ち鬨の声を上げ、負けた高等部の生徒達は地面にへたり込み落ち込んでいる。

彼女達の敗因は２－Ａを侮ったことだろう。幾ら超人的な面々が出場していないとはいえ無駄にハイスペックな２－Ａだった。

アスカが明日菜と裕奈がハイタッチしてるところに近づいていくと、高等部のリーダー格の少女が明日菜の背を睨み付けていた。

「まだよっ！！」

何かしそう気がしたので急いで明日菜に近づくと、リーダー格の少女がボールを上げて飛んだ。

そして空中にあるボールをバレーボールのサーブのように打った。

「危ない！　明日菜さんっ！」

放たれた強烈なボールが一直線に明日菜へと向かっていくのを見ていたネギが叫び、止めようと走るが魔力のないただの子供の身体能力しかないから間に合わない。

が、彼女の行動を予測していたアスカが間に入り、飛んできたボールを片手で受け止める。

「な……！」

「アスカ……！」

アスカは驚愕の声を上げるリーダー格の少女と明日菜を無視して、受け止めたボールを右手の人差し指に乗っけて回す。

「いけないなぁ、こんなことするなんて。これは先生に怒ってもらわないと」

「何を……」

アスカが今後の展開を予想して思わずニヤけながら言うと、リーダー格の少女は自分が先生なのに何を変な事をと言おうとして、突然屋上のドアを開けた主を見て声を詰まらせた。

「コラァア、お前達。何をやっとるかあああぁぁぁ！！」

「「「ヒィィ！」」」

やってきたのは彼女達の担任の先生で、怒り心頭の怒声に身を竦ませる高等部の生徒達。

２－Ａの生徒も比較的気の弱い数人の生徒が、巻き添えをくらって竦んで事情を理解できない２－Ａの生徒達は混乱している。

ただ一人、事情を知っているエヴァンジェリンだけが一人腹を抱えて爆笑していた。

「済みません、アスカ先生。私の生徒が迷惑を掛けてしまって……」

「いえ、先生の所為ではありませんよ。ですが、またこんなことがあると困るので指導を願いします」

急いでやってきたのか、息を切らしてペコペコと頭を下げて謝ってくる彼女達の担任の先生に、次はないと釘を指すのを忘れない。

慌てて頷いた担任の先生はリーダー格の少女を捕まえ、他の生徒達を連れて屋上から去って行った。連れて行った教師の様子を見ればそのまま説教に意向するのだろうと容易く予想できた。

同じように予想できた生徒たちも南無……と言わんばかりの表情で手を合わせていた。

「さあ、邪魔者はいなくなりました。授業を始めましょう」

出て行った人たちを見送って生徒達に振り返ってにこやかに微笑んで言うアスカに恐怖を感じて、皆は恐れるように必死に頷く。

《クックックッ、恐れられているぞ、主》

《流石にあそこでにこやかにされると怖いと思います》

《みんな、失礼だな。折角、綺麗に収まるように彼女達の担任を呼んだのに》

怖がられていることを自覚して少しだけ傷ついたアスカ。心中でのの字を書く。これで彼女たちが絡んでくることはないだろうから

と安心することで相殺する。

恐怖からか、きびきびと動く彼女達を見ながらそう考えていたが、皆の為を思った行動で怖がられて少し落ち込んだ。

第三十六話　　抜け目のない少年（後書き）

次回の更新は『水曜日』の午前０時に予定しています。偶に更新日を間違えて前後一日に投稿する可能性あり。

次は期末試験編となります。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

そろそろ初期構想からは大分離れれてしまったのでタイトルを変えたいなあと思っている筆者です。なんとなく「魔法忍者」って感じがしないですし。

案としては幾つか考えました。

？魔法戦記アスカ！（原作名を捩っただけですが）

？飛鳥物語（主人公の名前のホニャララが関係してます（アスカ物語でもいいかもしれませんが））

？勇気と希望の物語（マブラブの捩りです）

？現状の『双子の弟は魔法忍者』のままで

？もっといいのがある（読者様の希望があれば、というか切望）

？～？までのどれかを選んで頂ければ嬉しいです。期限は次回更新

までです。割と本気でいい案が来てくれると嬉しかったりします。

第三十七話　　期末試験と少年　１（面倒の始まり）（前書き）

文字数は１０８４９字です。

期末試験編は四話編成です。まずはその第一話をどうぞ。

第三十七話　期末試験と少年　１（面倒の始まり）

「そうか。なかなかうまくやっとるのか、ネギ君とアスカ君は」

「はい、学園長先生。先に来て生徒達と交流のあったアスカ君は別にしても、ネギ君も生徒たちと打ち解けていますし、授業内容も問題ありませんわ。とても１０歳とは思えません。アスカ君には何も言うことはありませんが、ネギ君に関しては最初の一週間は戸惑っていたようですが、最近は慣れてきて十分にやれていると思います。この分なら指導教員の私としても、二人には一応合格点を出してもいいと思っていますが……」

学園長室にて、ネギとアスカの指導教員であるしずなが二人の報告をしていた。

ネギが麻帆良学園に赴任して、アスカが教師になってから見てきたことを学園長に伝えた。

しずな個人の見解としてはアスカに教師として接する生徒が多いのに対して、ネギには先生と言うより、年下の友達として扱われてるようにも取れる。ここれは以前からいて高い能力を見せて信頼を得ていたアスカと、一般的には十分でもアスカと比べて年相応に見えてしまうネギに差が出来てしまうのは仕方のないことだった。

そんな訳でネギの授業では、勉強と言うよりは一種の遊びとして捕らえられているように感じられる。

だが、それは生徒達が追々慣れて行くか、ネギ自身が教師としてこれからどうして行くかで改善されるだろうと思い、しずなはそれ

について考えるのを止めた。

「フォフォフォそうか、けっこうけっこう。では4月からは正式な教員として採用できるかのう。ご苦労じゃった、しずな先生。おや？　どこじゃ？」

しずなからの評価を聞き、学園長は白く長い髭を片手で弄りながら、好々爺然とした笑みでコクコクと頷き、立ち上がってしずな先生と握手を交わしながら何故か狙ったように豊満な胸に顔を埋めた。

「上ですわ、学園長先生」

しずなは何時もの穏やかな表情のまま、自身の胸に顔を埋めたままの学園長の長い頭に手加減抜きの拳を落とした。セクハラ爺への鉄拳が振り落とされる。

「ただし、もう一つ」

学園長は殴られた額から血を流しながらふらふらと席に戻り、何事も無かった様に左手の人差し指を立て片目を開けてしずなに告げる。

「は？」

殴られたことにも、殴った方にも反応が薄いのはこれが常態と成ったからか。

「彼らにはもう一つ、課題をクリアしてもらおうかの。才能ある立派な魔法使い（ギステル・マギ）の候補生として」

学園長はしずなの疑問に答えるようにそう言いはしたが、正直なところアスカの事を計りかねていた。

元々、アスカの評価は人によって大きく変わる。

人助けの行動を褒める人もいれば、偽善者と蔑む人もいたり、大人びていると言う人もいれば、子供らしくないと言う人もいる。

魔法学校時代にネギと比べられて虐めにあっていたことはメルディアナの校長からの報告で学園長の耳にも入っている。それ以前からのこともあってアスカがネギを恨んでいても不思議ではない。

しかし、ネギにつらく当たっていたかと思えば、被害者がいないからとネギを助けるなど評価が安定しない。事実、ネギが周りに被害を出さなければ何も言わなかったし、それどころかネギの魔力を封印した後はフォローすら入れている。

心に一物を抱えていることは分かったが、果たしてどう思っているのか学園長ですら判断はつかなかった。

その様子や普段の態度を見た他の教師からは、もし正式採用するならアスカを担任にすべきではないかという意見も出ている。

二人を正式採用にするかどうかは学園長次第ではあるが、かと言って独断で全てを決められるわけではない。

二人が教師になる前、学園内の一部からは子供を教師にすることを反対する者もいた。それをゴリ押しして二人を教師にしたため、一ヶ月以上経った今でも反発はある。

だが、成績が万年学年最下位のクラスを脱却させる事が出来れば、子供である二人を正式採用しても実績があるため文句は出ない。

ネギは精神的にまだ未熟な部分はあり最初はミスもあったが、今はクラスにも馴染み上手くやれている。

また魔力制御では、まだ魔法先生や魔法生徒の存在をネギに教えるわけにはいかないので学園長自身が教えたとは云え、僅かな期間で制御に合格点を与えられる程になる等の才能の片鱗を垣間見ることができたのは嬉しいことだ。

反対にアスカは、ネギと違ってクラスの生徒とは既に交流があったので、友達感覚で接する可能性を危惧していたが周りが驚くほどに完璧に公私の区別をつけている。

そして高畑ですら難儀した騒動の塊である２－Ａを、新人のアスカが羽目を外しすぎないレベルで押さえている手腕には驚かされる。だが、教師としては十分に合格点を与えられるが、意図が読めない故に魔法使いとしてはどう対応すべきか悩む。

「本当にどうしたものかの……」

どちらも頭を悩ます存在には違いなく、二人の課題を書いてある紙をしずなに渡し退室させた後、学園長は一人、呟いた。

六時間目も終わり、職員室に日直ノートを持ってきた裕奈、桜子

を連れて、ネギとアスカは教室に向かっていた。

もう教師になって一ヶ月と少し経って、大分ネギも生徒達と打ち解けてきたようだ。魔力封印が解けた後には、空いている時間に学園長から直々に魔力コントロール訓練を受けているらしく、以前のようにくしゃみで服を吹き飛ばすことはなくなったようだ。

そのお陰で魔法関係で問題を起こさないで済んでいるのだから、アスカとしては助かっている。封印が解けた直ぐに魔力で身体強化するのはどうかと思うが、流石にそこまで言う義務も権利もアスカにはない。単純にこれ以上、ネギとの間に軋轢を増やすと面倒になるのが一番大きな理由ではあるが。

「ん？……何か他のクラスのみなさん、ピリピリしてますね」

今まで桜子と話していたネギが、通り掛った時に見えるクラス全てで放課後にも関わらず、切羽詰った顔でガリガリとシャーペンを動かしたり、ピリピリとした雰囲気で友人に教え請う生徒の姿を見て、何時もと違うから気になったのか聞いてきた。

「は？」

アスカは一瞬、何を聞かれた意味が分からなくて疑問符を上げてしまったが、直ぐにどういう事か理解した。

《まさか担任なのに学期末テストの事を知らんとは》

《流石に呆れ果てます》

最近は落ち着いていたのにネギが来てから頻繁に起こるようにな

った頭痛がしてきた頭を、左手はプリントを持っているので右手で支える。

日頃の作業が忙しくて気が回らなかったとしても、担任として学期末テストの存在を忘れるとは教師としてどうなのだろうか、と最近、見直してきたアスカの中のネギの評価がまた下がるのを感じた。

いくら毎日が忙しいからといって担任が試験のことを忘れるってどうなのだろう？

「あ、そだね。そろそろ中等部の期末テストが近いからね」

「来週の月曜からだよ、ネギ君」

「へー、学期末テストかあ。大変だぁって、ウチもそうなのでは！？」

「そうですよ。何で知らないのか逆に疑問ですが」

裕奈、桜子の言葉に他のクラスを覗き込んでいたネギは、ようやくその事実に気付いて驚いて二人に振り返る。

「あはは、うちの学校エスカレーター式だからあんまり関係ないんだ」

「特にうちはずーっと学年最下位だけど大丈夫大丈夫」

まさか、自分のクラスが最下位だったとは微塵にも思っていなかった様子のネギの驚きようを見るに、本当に知らなかったようだ。

しかし、担任であるにも関わらず、自身のクラスの成績を知らない

のは問題があるのではなかろうか。やはり、教師としての自覚が薄いのではないかと思わざるを得ない。

「あのお花みたいなトロフィーは？」

「あー、あれはテストで学年トップになったクラスがもらえるんだよ」

「このクラスが前回のテストで学年トップですからね」

「へー」

ネギが覗いていたクラスにある花の形をしたトロフィーを指差すのを見た桜子が答える。それに感心したような声を上げたネギは一人足を止めて、飾ってあるトロフィー物欲しそうに見る。

「いや……確かそういう時に効く魔法が何かあったような」

なにかあったら魔法に頼る癖は治っていなかった。

裕奈、桜子はネギが立ち止まっていることに気付いていないため、ぶつぶつと呟いている独り言は誰にも聞かれなかったようだ。

「ネギ先生、近くに生徒がいるときにその言葉を出すのを気をつけて下さい」

「え！　ご、御免」

アスカが小声で注意すると周りが目に入らないほど考え込んでいたネギは、また怒られると思ったのか此方が引くほどに謝る。日常

ではそうでもないけど、魔法関係ではアスカが何か言うのがトラウマになっているようだった。

「気をつけてください」

「う、うん」

前の二人は会話に夢中で謝るネギに気付いていないが、知られると理由を聞かれると面倒なので、それだけ言ってさっさと歩き出す。

後ろでほっと安心しているのを感じたながら逆にアスカの気分は暗澹としたものになっていく。

《はぁ～、全く怒られた理由を理解していないようじゃな》

《ホレ薬の件を考えても魔法ありきで物事を考えるのは分かりきっていたはずですが、学園長は矯正しなかったようですね》

《まあ問題さえ起こさなければ僕は何もしないけど、魔力封印されてこれはなぁ。と言うかいくら人がいないといっても、自分の生徒がすぐ近くにいるのに魔法とか言うなよな》

《全く持って成長しない奴じゃ》

《反省しないのであれば、いい加減見捨てるべきだと思います》

一ヶ月で修正されたネギの評価が更に下がり、あと少しで諦めの境地に達しそうだ。

本音を言えばさっさと見捨ててしまいたいが、これもまた血縁故

の甘さだろうか。あれだけ魔法学校で比較されたのに完全に嫌えないというのも可笑しなものだと、自分を笑いたくなる。

ダークな気分に陥りかけたが、後方から知っている気配が急いでやって来るのを感じてアスカは後ろを振り返った。

やってきたのは白いセーターに紺のスカートの大人の魅力あふれるしずなで手に二つの手紙のような物を持っており、珍しくどこか焦っているような感じが見受けられた。

「ネギ先生、アスカ先生」

「どうしたんですか？」

「あの……学園長先生がこれを貴方達にって……」

アスカがその深刻な顔に何かあったのかと聞くと、手に持っている封がされた手紙を二人に差し出した。

「え、何ですか。深刻な顔して」

どうしたのかと聞いているネギを置いておいて、アスカは嫌な予感を感じて先に渡された白いしゃれっ気も何も無い手紙を受け取って繁々（しげしげ）と眺める。

裏は蝋でとめてあり、蝋には学園の校章が押されていて表には『アスカ教育実習生　最終課題』と書いてある。

「最終課題ですか……」

「えっ！？　最終課題！？」

アスカの言葉を聞いたネギも急いでしずなから手紙を受け取る。

手紙を持って、目を牛乳のピンゾコのようにぐるぐると回しているのを見るに、どんな課題なのかと考えているのだろう。

《どうせ悪のドラゴン退治や攻撃魔法２００個習得とか考えているんじゃろうな》

《普通に考えて旧世界にそんなドラゴンがいるわけもないですし、そんなに攻撃魔法を覚えて仕方ないんですけどね》

全く魔法使い関係とは関係ないがこの時期と修行内容から考えて、せいぜい期末で２－Ａを最下位脱出ぐらいしか思いつかない。

そこまで考えてネギがあっちの世界に行っている間に丁寧に封を切り、中の便箋を取り出して目を通す。それにはこう書かれていた。

『　アスカ君へ

次の期末テストで、
２－Ａが最下位を脱出できたら
正式な先生にしてあげる

麻帆良学園学園長　近衛近右衛門　』

なんとも軽いノリの文章ではあるが、内容は決して軽くない。

ネギも全身を緊張で覆いながら、恐る恐る中の便箋を取り出して

いる。

それを横目に考える。

学園長は２－Ａが今のクラスになってから2年間、ずっと最下位を取り続けている事を理解しているのだろうか。

２－Ａの生徒達は決して頭が悪い生徒の集まりというわけではない。

通称『バカレンジャー』と不名誉極まりない呼び名で呼ばれる5人は最下位を競っていると言っても、クラスには学年1、2位がいるので、学年最下位になるのは一重に真面目に勉強する人が少ないためだ。

先程の裕奈、桜子のように無駄に楽天的で成績に興味がなく、試験前でも切羽詰って勉強する人は少ないので全体的に平均点が低い。

幽霊であるさよが試験を受けれないから全教科0点を取っているのも平均点を下げている理由の一つではあるが。

もちろん勉強が一番大事だとは思わないが、幾ら何でもこれはないんじゃないかと思っても無理は無い。

クラスのマスコットであるネギの進退が関わってくれば、生徒達もやる気を出す可能性があるので一概に無理だとは思わないが、一体どんな意図を持ってこんな試験を出したんだろうか。

それに例え最下位を脱出した場合、本職の教師である高畑でもできなかったことを教育実習生が出来てしまえば、高畑の教師として

の適正が問われるのではなかろうか。

最後はどうでもいいが、課題に他に書き方は無かったのだろうか？

「……」

「……」

「……」

ネギも現実に戻ってきて、便箋を開いて中を見て固まっている。

アスカもネギの課題内容が気になったので上から覗くと、同じ内容だった。

予想外（恐らく）の課題に固まるネギと、学園長の意図は何なのかと悩むアスカ、２－Ａの成績を知っているので課題の難しさを知るために何も言えないしずなの三者三様の沈黙が辺りを包む。

真っ先に沈黙から抜け出したのはネギだった。

「な、な～んだ。簡単そうじゃないですか、びっくりした！（竜退治なわけないよ。ココは普通の人間の学校だもん）」

「駄目かもしれません……」

「そ、そう？」

最下位脱出ぐらい簡単だろうと楽観的なネギは、いい意味で『想定の範囲外』だったらしくほっとしたような顔で言った。

それとは逆に2－Aの成績を知っているのでアスカは既に諦めモードに突入し、二人の反応の落差に引くしずな。

《最下位脱出より、竜退治の方が楽だよ。課題を変えて欲しい》

《それはネギには無理でしょう》

《そこら辺の竜程度なら主は楽勝じゃがな》

幾らバカレンジャー三人（明日菜、古菲、楓）の成績が若干（本当に微々たるもの）上昇傾向にあるとはいえ、アスカとしては竜退治の方が万倍も楽なのだ。

「え～!?なになに!?どーしたのネギ君、アスカ君?」

先に歩いていた二人がネギの声で戻ってきて、対照的な二人の様子を見て何かあったと気づいて、手元にある便箋を覗き込む。

「あー♪二人とも、本物の先生になるんだ!?」

「へー、なになに?」

「あっ、見ちゃダメですよう!」

見ようとする裕奈から必死で手紙を隠すネギとは反対に、アスカは見られて困る物でもないので便箋を投げ遣りに桜子に渡す。

《もう駄目かもしれない》

《ファイトじゃ、主！》

《そうです、諦めたらそこで終わりです》

完全に諦めモードに突入したアスカを鼓舞する二人がいたとか、いなかったとか。

「えーと、皆さん聞いてください！　今日のＨＲは大・勉強会にしたいと思います。次の期末テストはもうすぐそこに迫ってきています！」

あの後しずなは職員室に戻り、騒ぐ裕奈、桜子を連れて教室に着き、教壇に上がったネギは高らかにそう言った。

先生、というか立派な魔法使い（マギステル・マギ）を目指すネギとしては、何としてでも２―Ａには学年最下位を回避してもらわなければならないので、いつにも増して張り切りながら勉強会の開催を宣言する。

だが、ネギの張り切りようとは対照的に、クラスの喧騒は一瞬にして沈黙へと変わってしまった。

クラスの大半は、「で、何をどうするの？」といった空気が占めている。

アスカはそれを、さよの席近くの窓枠に凭れかかりながら聞いていた。

副担任ってこういう時やること何もないから暇だ。それならＨＲに参加しなくてもいいんじゃね？　という突っ込みはナシだ。

「あのっそのっ……実はうちのクラスが最下位脱出できないと（僕が）大変なことになるので、みなさんがんばって猛勉強していきましょ！」

肝心の主語がない言葉を聞いてクラス全体が騒然となる。

突然何を言い出すのかと騒ぐ生徒達の中で、あやか一人だけが「ネギ先生、素晴らしいご提案ですわ」とハートマークを振舞っているのが印象的だ。

《何という自分本位な頼みだ……》

《逆にここまで開き直られるのも凄いと思いますが》

《これでは生徒にいらぬ誤解を与えるだけじゃろうに》

隠された本音が分かってしまったアスカだけが騒然としたクラスの中で一人、溜息をもらしてしまうのは何故だろうか。

ネギが来てから、主にこちらの負担になりそうなものばかりな苦労が増えた気がする。

「はーい♪提案提案」

「はい！桜子さん」

ネギは手を上げた桜子の名前を呼ぶ。立ち上がった桜子の笑顔に不審なものを感じたのはアスカだけだろうか。何故か嫌な予感がした。

「では！！お題は『英単語野球拳』がいーと思いまーすっ！！」

その桜子の言葉を聞いたアスカは、そっと天井を仰ぐことで流れ落ちそうな涙を止め、どうしようもないこの世の無常を嘆いた。

《主、しっかりするのじゃ。傷は浅いぞ！》

《それは慰めになってませんよ、玉藻殿》

慰めてくれる二人だが、他に味方がいない。

「おお～～～～っ」

「あはは、それだーっ」

「なっ、ちょっ！？　皆さん！？」

否定してくれると願ったが、それを聞いた生徒の半分が声や態度で賛成を表明する。周りが意見に賛成してはしゃぎ立てて、止めようとしたあやかの言葉を聞く生徒はいない。

ノリが良かったり、負けても別に構わないと思っている生徒達が賛成している中で、表立って『英単語野球拳』を否定しているのはあやかぐらいだ。それも人数差に負けて結局『英単語野球拳』をやる流れになってしまっている。

《主、戻ってください！》

《流石にコレはちゃかせんな……》

余りのこの世の無常さに、意識があっちの世界に飛び掛けるがリインフォースと玉藻（？）に止められた。

「じゃあそれで「待ってください。ネギ先生」ど、どうしたのアスカ？」

しばらく考えていたネギだが、どうせ生徒が言う『英単語野球拳』が面白そうだからとかよく考えずに結論を出したようだ。

何考えているか凄く分かりやすいのは子供だからかなと、そんな事を思った。

もうアスカは辞表提出しようかなと本気で思い始めたが、現実逃避しても仕方がないとネギの言葉を途中で遮り、静かになった教室の中、教壇に歩み寄る。

「ネギ先生、あなたは『英単語野球拳』が何か分かって言ってるんですか？」

「え？」

《この反応だけで理解せずに言ったことは分かりました》

《教師なのじゃから自分の言葉に責任を持って欲しいのう》

分からないのなら、『英単語野球拳』がどういうものなのかを聞

いてから判断してくれと切に願う。生徒だからって全て真に受けて認められると、こちらに面倒ばかりがやってくるので勘弁して欲しいからだ。

「明らかに生徒がふざけ半分で提案してきたことを、どういうものなのかを理解せずに認めるのは止めて下さい」

「でも、折角桜子さんが言ってくれたから……」

いい訳染みた事を言っている途中に、アスカがはぁ～と目の前でこれみよがしに溜息をつくと声が萎んでいく。

２－Ａの担任になってもう一ヶ月も経ったんだから、いい加減このクラスがどういう人間の集まりなのか分かるだろうに人を信用するのはいいけど、それも場合によりけりだといい加減に理解して欲しい。

「『野球拳』とはジャンケンに負けた人が服を脱いでいくゲームです。それから考えて彼女達が言う『英単語野球拳』とは」

以前にハルナが吹き込んできた知識を口に出す。

「英単語を答えらないと服を脱いでいく……」

「そうです。そんなゲームが試験勉強の役に立つわけないでしょう」

ネギも頭がいいので途中でアスカが言いたい事を理解して、分かりやすいぐらいに顔から血の気がサァーと引いていく。

ショックを受けているネギを眺めながらアスカは別の思考に耽る。

教師として彼女達に認められていないからこんなふざけた提案をしてくるのかと考え、少なくとも二人以外の教師なら彼女たちもこんな提案をしない筈だし、やはり子供だからなあなあで済ませられると舐められてるという結論に達する。

とういうか公共の学校内でそんな事をやりたいと言う彼女達の正気を疑うが、考えてみれば成績下位の五人が負けるのが分かりきっているからできるのだと推測できた。

「そういう訳ですから私が持ってきたプリントをやってもらうことでいいですか？」

テスト対策にのために作って持ってきたプリントを見せる。アスカの担当教科である数学だけだが、『英単語野球拳』をやるよりかは何倍もタメになる筈。

「あ、うん。お願い」

まだショックが抜け切っていないように見えるが、ちゃんと言っている事を理解しているのだろうか。許可は貰ったのでさっさと配ってやってもらい、ＨＲが終わる前に答えのプリントを配り終わった時に終了のチャイムが鳴る。

「椎名さん」

「へ、　何？」

帰り支度を始めた生徒達の中で、アスカがさっき『英単語野球拳』を提案した桜子を呼ぶ。

「あなたは自分がさっき何を提案したのか分かっていますか？」

「え？　『英単語野球拳』だけど、それがどうかした？」

聞いても何も理解してない返答しか返って来ないことに、前任の高畑は何をやっているのかと聞きたくなる。あの先生は二年間このクラスの担任をやっていて一体何をしていたんだろうか。

多分、最初から騒がしいクラスだったんだろうけど、これはどうかと思う。２年間担任だったんだから、ちゃんと教育しておいて欲しい。

「幾らこの学校がそういう事に寛容でも教室でそんなことをやったら最悪の場合、退学もあり得るんですよ。それを分かって言っているんですか、椎名さん」

自分より年下に説教される学生って何かシュールだとそんな考えがアスカの脳裏に浮かんだ。

「え、そんなわけ……」

「ここは私立ですよ、ないと言い切れますか？　それに例え退学にならなくても内申が悪くなりますよ」

「……」

そうなる場合は、その前に二人が管理責任を問われて実習資格を剥奪されるだろうが、そこまでは言わない。それに気付いた生徒もほとんどいないし、ネギも分かっていないようだからそこまで彼女

達が気に病む必要もないからだ。

正論に何時も元気な桜子が俯いて黙ってしまった。そんな二人の様子を、ネギと帰り支度を止めて見ている生徒達。

生徒達の中には『英単語野球拳』を支持した者もいるから罪悪感を感じているのもいた。

「行動に移す前に止めましたからいいですけど、もっとよく考えてから行動してください」

「はい……」

周りにも言い聞かせるように言う。この言葉はアスカの本心だ。

このクラスは特に後先考えずに行動する生徒が多いが、それは麻帆良だからこそ許されている面も多いし、麻帆良を出てから問題を起こしても遅いのだからそれを理解して欲しい。

「放課後に新田先生の下に行くように。事情は説明しておきますから、存分に怒られてきなさい」

「え、そんな！」

「文句があるなら雑用を手伝ってもらいましょうか。不服ならもっと増やしますが」

「いえ、何でもないです！　それで十分です！！」

肩を落とす桜子をクラスメイト達は気の毒に見ている中、申し訳

ないが新田に事情を説明して怒ってもらおうと決める。多少は私怨が交じっているかもしれないが、アスカでは怒っても年下な分だけ反発心を招く恐れもあるので新田の方が生徒のためになる。

こういう何でも楽しめることはいいことではあるが、やっていい事と悪い事は区別はつけて欲しいから社会に出る前に分からせておくべきだろう。

雑用は……桜子は運がいいのでテストのヤマカンでも張ってもらってプリントを作るべきかと考える。

結局その日のみんなの帰宅の途は珍しく重かった。

生徒達を見送ってから二人も職員室へ戻り、ネギに連れられ人気のない森の中でどうするかを相談していた。

ちゃんと人が来ないように認識阻害の結界を張り、目の前に2―A生徒の学年順位を魔法で分かりやすく図にしてどうするかを考えている。

人に魔法を使うところを見られないような工夫はいいけど、アスカには魔法を使わないという選択肢はないんだろうか。確かに便利ではあるが、何も魔法を使わなくても成績分布ぐらい直ぐに調べられるだろうに。

（まあ、使ってしまったのものは仕方ないか）

と、成績分布に目を戻す。

その成績分布では主席である超鈴音を初めとして学年トップ5に

三人もいる一方で、最下層の者達が5人もいる。また、大多数は皆揃って中盤からか、それよりも下という物凄く極端な成績。

「地道にやっていくしかないと思いますけど」

「う～ん。でも、それじゃあ最下位を脱出できるかわからないし……ハッ！　そうだ、思い出したぞ。3日間だけとても頭が良くなる禁断の魔法があったんだ。それを使えば……」

このままでは故郷へ強制送還。と呟いていた兄さんが、良い事を思いついたと言ったのがそんな内容だった。

「ネギ先生……いい加減に魔法に頼るのを止めるべきではないですか？　そもそも、その魔法は副作用で1ヶ月程、頭がパーになるのでは使えないでしょう」

あれだけ説教されて、まだ魔法に頼るとは変な意味で尊敬するネギに苦言を呈する。そもそも魔法がバレたら故郷に帰される事を理解しているのだろうか。

《魔法依存症といえるぐらいですね、これは》

《魔力封印されて、更に悪化したのかもしれんの》

しかも、副作用で頭が一ヶ月もパーになっていたら周りにどんなことを言われるか。

「で、でもこのまま最下位だったら僕、先生になれないし、立派（マギス）な魔法使い（テル・マギ）にも……」

ここまで来ても動機が自分のことだと救いようがない。と、言うかそんな理由で頭がパーになったと知ったら殺されても文句は言えない。

「そうなったらそれまでの話でしょう？」

課題には「正式な先生してあげる」だけで、例え最下位のままでも先生をクビにするとは一言も書いていない。そもそも、たかが一ヶ月程度、教師をやっただけでそんな課題を出されても普通は出来るはずがない。

アスカがそう考えるのも
立派な魔法使い（マギステル・マギ）に興味がないのと課題失格になっても困らないからだろう。

「そんな中途半端な気持ちで先生をやっている人が教師になっても、教えられれる生徒からすれば迷惑だと思いますよ」

自身の言葉にショックを受けているネギを冷めた目で見る。

が、ネギがこんな調子ではこれでは埒が空かないと考え、そろそろ桜子が新田に怒られるのも終わるだろうし、職員室に戻ってテスト対策プリント（桜子ヤマカンＶｅｒ．）を準備をした方が百倍タメになる。

「先に職員室に戻ってテスト対策プリントを作りますから」

「……うん、分かった」

一人ショックを受けているネギを残し、早く作業を始めるためにアスカは急いで職員室に向かった。

第三十七話　　期末試験と少年　１（面倒の始まり）（後書き）

次回の更新は『日曜日』の午前０時に予定しています。偶に更新日を間違えて前後一日に投稿する可能性あり。

次は期末試験編となります。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

現在状況：

『双子の弟は魔法忍者』のまま・二票

『飛鳥物語』　一票

『勇気と希望の物語』　一票

候補・『魔法忍者アスカ』『魔砲忍者？ＡＳＫＡ』『魔法戦士は忍術使い』

このままいくと現状維持になりそうですね。

どうせならもう少し募集したいと思います。期限を８月末まで伸ばします。

?:魔法戦記アスカ！（原作名を捩っただけですが）

?:飛鳥物語（主人公の名前のホニャララが関係してます（アスカ物語でもいいかもしれませんが））

?:勇気と希望の物語（マブラブの捩りです）

?:現状の『双子の弟は魔法忍者』のままで　3票

?:もっといいのがある（読者様の希望があれば、というか切望）

?:読者候補：魔法忍者アスカ、魔砲忍者？ＡＳＫＡ、魔法戦士は忍術使い

割と本気でいい案が来てくれると嬉しかったりします。

第三十八話　　期末試験と少年　２（図書館島の変）（前書き）

劇場版公開記念ということで連続投稿を行いたいと思います。

土曜日公開なので三話連続となります。つまり期末試験編を纏めてです。

それでは期末試験編四話編成の第二話です。どうぞ。

ちなみに今話は差異はあれど、殆どが原作をそのまま踏襲していますので注意してください。

それと文字数は１０１４６字です。

第三十八話　期末試験と少年　2（図書館島の変）

夕食後、勉強で疲れた頭を冷やすために明日菜は大浴場『涼風』に入っていた。珍しく木乃香はおらず、なにやら祖父である学園長の下へ行っているらしく、この場にはいなかった。

明日菜と同じように今まで試験勉強をしていたのだろう、ふやけた頭をしたバカレンジャー全員が『涼風』に勢ぞろいしていた。

「明日菜、明日菜。大変や～」

「何？　木乃香～」

そう叫びながら同じ図書館島探検部の夕映、ハルナ、のどかと一緒に木乃香が大浴場『涼風』に駆け込んできて、湯船に浸かりながら試験勉強で疲れた頭と体を癒していた明日菜が振り返って聞いた。

「お、ちょうどバカレンジャー揃っとるな。反省会か？　実はな、噂なんやけど次の期末で最下位を取ったクラスは解散なんやて！」

「えーっ！　最下位のクラスは解散～！？」

木乃香から噂の内容を聞き驚いた明日菜は湯船から思わず立ち上がる。

「で、でも、そんな無茶なコト……」

「ウチの学校はクラス替えなしのハズだよ」

麻帆良はクラス替えなどないから、そんな噂は信じられないと消極的に明日菜たちは反論する。

「桜子たちが口止めされとるらしくて詳しいコトわからんのやけど、何かおじ……学園長が本気で怒っとるらしいんや。ホラ、ウチらずっと最下位やし」

二年間も最下位ならおかしいことではないと彼女たちの頭脳でも理解できた。

そんなことは普通はあり得ないと事実も、普段の学園長を知っているのであり得ることだと考えてしまう。一般常識よりも重い学園長の奇行の数々が木乃香の荒唐無稽な話に説得力を持たせる。

「そのうえ特に悪かった人は留年!!どころか小学校からやり直しとか……!!」

「え!?」

しかし、嘘をつかない木乃香の言葉と万年最下位という事実が噂の信憑性を高め、あり得るかもと不安に思ったところで、木乃香の言葉を継いだハルナの言葉に固まるバカレンジャー5人。

バカレンジャーの脳裏にはランドセルを背負ってみんな仲良く集団登校する絵が浮かんでいる。

「ちょ、ちょっと待ってよーッ!」

「そんなの嘘よーっ!」

想像もしたくない未来に悲鳴を上げる明日菜たち。

否定の言葉を発する明日菜とまき絵だが、明日菜の脳裏にはＨＲでネギが言っていた「大変な事」とはコレの事ではないかと考える。

騒ぎを聞きつけて、風呂にいたほかの生徒達もぞくぞくと集まってくる。

「今のクラスけっこう面白いしバラバラになんのイヤやわー、明日菜ー」

と、木乃香が自分に対しても当てはまると思って、湯船に浸かりながら心配そうに明日菜を見る。

「んー」

「ま、まずいね。はっきり言ってクラスの足引っ張ってるのは私たち5人だし……」

「今から死ぬ気で勉強しても月曜には間に合わないアル」

まき絵がおろおろと楓に向かってどうしようとうろたえて、古菲も今から必死に勉強しても間に合わないと深刻な表情を浮かべる。

特に楓、古菲はアスカとの約束があるので是が非でも何とかしたいと考えている唯でさえ勉強が苦手な上に、もうテストまで残り数日と時間が無いのである。

と、いってもほかに手が無いのもまた事実。こうしている間にも

時間は無常に過ぎていく。

学年トップ級（クラス）が三人もいるのに２－Ａが最下位を突っ走っているのは、自分たち成績下位組みが原因だと二年もあれば頭の悪い彼女たちでも理解できてしまう。誰かに責められたことがあるわけではなくても自然と理解できてしまったのだ。

明日菜も最近は少し成績が上がっているが、アスカとの約束があるので平均点を取らないといけないのに平均には遠く及ばないし、それにクラスで自分が一番足引っ張ってる自覚があるため必死に考える。

ネギやアスカなら頭がよくなる魔法を知ってるかもと思った明日菜だったが、ネギは魔法が成功した所を見たことが無いことに気づいて断念。アスカはそんなことを許しはしないだろうし、こと勉学において妥協という言葉を知らないからそんなことをしたらどんな目に合うか。考えるだけで恐ろしい。

「ここはやはり……『アレ』を探すしかないかもです……」

もはや手はない。そんな状況で夕映がぽつりと呟いたその一言にバカレンジャーだけでなく、そこにいた全員の視線が一斉に彼女に集まる。

「夕映！？　アレってまさか……」

なにか心当たりがあるのか、ハルナが夕映に驚きを含めた視線を向ける。

「何かいい方法があるの！？」

夕映の発言に続いてハルナも意味深な言葉を言うので、この壊滅的な状況を打破できるならと藁にもすがる気持ちで明日菜は夕映に問いかける。

「『図書館島』は知っていますよね？我が図書館探検部の活動の場ですが……」

「う、うん」

「一応ね。あの湖に浮いているでっかい建物でしょ？　結構危険な所だって聞くけど……」

同じバカレンジャーの四人に向き合い、夕映の図書館島を知っているかと問いに、同室の木乃香が図書館探検部なので話を聞いた事がある明日菜が答える。

勉強嫌いとは言わなくても頭が悪いので微妙に苦手意識があってあまり頻繁に利用はしなくても話は聞いている。

「実はその最深部に読めば頭が良くなるという『魔法の本』があるらしいのです」

一同はその突拍子もない単語に驚きの表情を浮かべるが、魔法と聞いてこんな反応をするのは当たり前である。

魔法などという御伽噺の中にしか存在しないものが、実在すると夕映が言い切るのだから。楓だけは夕映の飲んでいる「抹茶コーラ」に驚いているが。

「まあ大方出来のいい参考書の類だとは思うのですが、それでも手に入れば強力な武器になります」

夕映も魔法があるとは信じておらず、試験まで残り数日となった段階で焦った自分たちではそのようなものがあればラッキーぐらいの認識を持っていた。

「もー夕映ってば、アレは単なる都市伝説だし」

「ウチのクラスも変な人たち多いけどさすがに魔法なんてこの世に存在しないよねー」

「あー、アスナはそーゆーの全然信じないんやったなー」

シーンと一同は沈黙する。皆、魔法の本が信じられなかったのだ。

その沈黙をハルナが破って夕映の話を笑い飛ばし、まき絵も２－Ａを引き合いに出して魔法の存在を否定する。木乃香が明日菜を見て、こんな話しを信じへんなぁなどと笑っている。

「いや……待って……」

みんなが笑いながら思い思いのことを言う中、明日菜はその話を完全に否定できなかった。

アスカとネギという魔法使いがいるのだから、もしかしたら本当に魔法の本があってもおかしくないと明日菜は考えた。これ以上皆に迷惑は掛けられない。手段を選んでいる時間はない。故に僅かな可能性にも賭けてみようという思考になる。

例えその存在が魔法でなくとも、夕映の言う通り勉強が捗る参考書なら力になる。

「明日菜～どうするん～？」

考え込んでしまい黙った明日菜に木乃香が尋ねる。

決断した明日菜はくるりと皆の方を振り向くと満面の笑顔で力強く宣言した！

「行こう！　図書館島へ！」

こうして、図書館島へ行くことが決定した。

紆余曲折があったが、今晩早速図書館島に行く事に決めたバカレンジャー＋図書館探検部所属の木乃香、地上連絡係ののどかとハルナ。行くと決めたのなら善は急げとばかりに、割とさくさく話が決まり８人は速攻で寮に戻り支度を始める。

全員のリュックには図書館探検部の標準装備の携帯食料、テント、防水布、登山用具一式が入っている。ついでに明日菜がイマイチ頼りないが魔法使いなら何かの役に立つと考え、寝ていたネギを捕まえて連行した。

「水、冷たっ！」

「この裏手に私達図書館探検部しか知らない秘密の入り口があるです」

図書館島の裏手から侵入するには周りが水に浸かった場所を通る必要があり、まだ春には少し早い時期もあって靴に染み込んでくる水は冷たい。

「これが図書館島……」

バカレンジャーのように頭が悪い人間はあまり図書館島には近寄らない傾向があるらしい。

「でも……大丈夫かな―。下の階は中学生部員立ち入り禁止で危険なトラップとかあるらしいけど……」

「なんで図書館にそんなものが……」

図書館探検部なら下の階は未熟な中学生部員立ち入り禁止で危険なトラップがあることを知っている。当然、所属していない者が知るはずもなく、ただ島になるぐらいに大きいだけの図書館という印象を持っていたネギには驚きの事実であった。

「大丈夫、それはアテがあるから」

「へー」

自信満々な明日菜に木乃香が感心した声を上げる。

（ほら、ネギ出番よ！　魔法の力で私たちを守ってね）

自信満々な理由であるネギに小声で頼む。のどかを助けた魔法が使えるならコレぐらいなら大丈夫だろう、とホレ薬が失敗したことやその他諸々を都合よく忘却して頼む。

「え……あの……魔法なら僕、封印しましたよ」

しかし、そこは明日菜の意表を突くことに関してはアスカにも定評のあるネギ。見事に明日菜の期待を悪い意味で裏切ってくれた。そこに痺れもしないし、憧れもしない。

このように図書館島の入り口でネギが魔法を封印した事を聞いて明日菜との間で一悶着あった。ネギの魔法を当てにしていた明日菜が理由を聞くと、アスカに言われて自分で考えて魔法を封印したと言われてしまっては何も言えなかった。

タイミングが悪いと思ったが、明日菜はそれ以上何も言えない。図書館島が危険であることを聞いてから、護衛目的でネギを連れ出した明日菜の目論見は早くも潰えた。結局、今更ネギを帰す訳にも行かず、連れて行くことになったのは明日菜の失策であろう。

「おのれ、アスカ～」

間接的に自分の目論見を阻止したアスカに思わず呪いを込めるが、逆に悪寒を感じて辺りを見渡した。

「気のせい？」

「どうしたん、明日菜？　追いていくで～」

「いま行く！」

まさかアスカも来てたりはしないか、と辺りを見渡すも気のせいだと今の悪寒を忘れ、木乃香の催促に応えて走る。

この中では一番大きい楓よりも更に大きいドアが音を立てて開いていく。

「この図書館は明治の中ごろ、学園創立と共に建設された世界でも最大規模の図書館です。二度の大戦の戦火を避けるべく世界各地から貴重書が集められ、蔵書の増加に伴い地下に向かって改築が繰り返され、今ではもはや全貌を知るものはいません。そこでその調査を行うために麻帆良大学の提唱で発足したのが――」

夕映が図書館島の解説をしながら、薄暗いレンガ造りの螺旋階段を七つの人影がゆっくりと降りてゆく。

夜の図書館に怯えるまき絵、楽しげな古菲など反応はそれぞれだ。

「我々『図書館探検部』なのです！」

中を進みながら説明をしていた夕映が一際大きな木製のドアを押しながら最後の言葉を紡ぐ。

「中・高・大、合同サークルなんや♪」

どこか弾んだ声の夕映の言葉を引き継ぎ、木乃香が合同サークルであることを告げる。

ドアを開けて視界が開けると、かなり広いホールがあり、中世のダンスホールを思わせるような階段が遠くに見える。

果てが見えないような広大なフロアには何故か樹木があちこちに生えており、その合間に本棚が群れるように林立するように立っている。

「うあ～～～っ」

「わーーーっ!?　本が一杯、本当に凄い!!」

明日菜がその威容に感心したような声を上げ、ネギが目を輝かせて辺りを見ている。

一体どうやって本を取り出すのか分からない高さの本棚がまるで壁のように立ちはだかっており、数多ある本棚には世界にこれほど本があったのかと思う程に見渡す限りの本がある。しかも驚くことにほとんどの本棚が固定されているようには見えない。今にもこちらに倒れてきそうで恐ろしいことこの上ない。

至る所に梯子やら階段やらが無目的にかけられている為、更に混沌とした様相を示していた。

「ここが図書館島地下三階……。私達中学生が入っていいのはここまでです」

「あ、見てくださいコレ。コレなんか凄く珍しい本……「あ、先生」へ？」

わーわーと騒ぎながら物珍しさもあって躊躇なく、本を取ろうと本を引っ張ったネギに夕映が注意を促そうとするが遅かった。カチッという音と共に、本棚の隙間から一本の仕掛け矢がネギ目掛けて

飛び出す。

「うひゃ！？」

あわや、ネギを貫通するかと思われたその瞬間、傍に居た楓が難なく仕掛け矢を手で受け止めそのままパキッと折る。

「貴重書狙いの盗掘者を避けるために、ワナがたくさん仕掛けられていますから気をつけてくださいね」

「えええええええ？」

「うそー！」

「死ぬわよ、それー！　ホンモノ！？」

夕映が淡々として、学校の図書館にそんな物を作っていいのかと突っ込みたくなるとんでもないことを、さらりと言ってのける。

その話にネギは驚愕の叫びをあげ、まき絵とアスナが突っ込みを入れる。

現に楓が仕掛け矢を止めなければネギの頭に風穴が開いていたかもしれない。そんなものが学園の中にあるとは二人の埒外であった。

「ところで、あの……えーと……皆さん何でこんなトコに？」

死にそうになったことで怯えて涙目なネギは、地上に報告していた夕映に問いかける。こととここに至ってネギは寝ているところを連れ出された状況のままで全く知らない。

よく考えればまだ説明していない事に気がついて、実質リーダーである夕映がネギに図書館島を訪れた事情を説明した。

「えっ……ええ～～っ！？ここに読むだけで頭が良くなる『魔法の本』がある～！？」

「そうらしいえ」

「手伝ってセンセー」

此処に生徒達が来た理由を聞いたネギは叫びを上げ、それを肯定する木乃香と必死に助けを求めるまき絵。

ここまで頼まれれば元が優しいというか、甘いネギは直ぐに揺れる。

「あうッ……そんな、でも……」

「こ、今回は緊急事態だし、カタイこと言わず許してよ。このまま私たちの成績が悪かったら、大変なことになるし」

「大変なこと……」

まき絵の懇願に心が揺れるネギだが、明日菜の「大変なことになる」と言う言葉で二人の間に誤解が生じた。

明日菜の緊急事態とは自分達が幼稚園からやり直すこととアスカとの約束であったのだが、ネギはその事を知らない為、自分の大変な事である最下位だと学校の先生を首と解釈して、そのことを皆が

知って自分の為に頑張ってくれていると勘違いしたのである。

全くの誤解に気付かず、余りの感激に思わず涙ぐむネギ。

両者のすれ違いは正せることなく続いていく。

「ねぇ、夕映ちゃん。後どれくらい歩くの？」

「はい。内緒で部室から持ってきた地図によると、今いるのはここで……地下十一階まで降り、地下道を進んだ先に目的の本があるようです。往復でおよそ四時間。今はまだ夜の七時ですから……」

まき絵の問いに夕映は荷物から地図を取り出して開き、目的地を指で指し示しながら説明する。

「ちゃんと帰って寝れるねー。良かった、明日も授業あるし」

夕映の説明に明日も授業があるので、まき絵は徹夜せずに済んだとほっとした表情でコメントを入れる。

「よし……私も、試験でバイト休みだし。手に入れるわよ「魔法の本」！！」

「やっぱりココ怖いよーやめた方が……」

「大丈夫、ベテランのウチらに任しときー」

「遠足気分アルねー。にょほほ♪」

「んー♪」

（うーん。でも、そんな都合のいい魔法書が日本の図書館なんかにあるのかな？）

「では、出発です！」

「「「「「「「「「おーーーーっ！」」」」」」」」」

そんなやり取りがあったりしたが、気を取り直して一行は図書館島の深部へと進み始めた。

――――――ブルッ

翌日の授業の準備で遅くなり、そろそろベッドに入って寝ようかと思っていたアスカは風呂上りの体に走った突然の寒気に身を震わせた。

「なにか嫌な感じがするな……」

第六感か、単純にネギがやってきてから感じるようになった悪い予感か。

「こういう時はさっさと寝るに限る」

感じた悪寒から碌（ろく）でもないことを予感しながら、なにがあるのか

分からないので少しでも対処する体力を温存するため、そそくさとベッドに入って眠るアスカであった。

決してちょっとでも現実を先送りしようとする気持ちがなかったわけではない。

アスカが悪寒を感じていたその頃。

すれ違いのまま進むことになった一行はその後、本棚から落ちたまき絵がリボンを手足のごとく操って戻るが、誤って罠を発動させてしまい、落ちてきた身長の十倍はあるだろう巨大な本棚を一撃で蹴り飛ばす古菲。

本棚は古菲が蹴り飛ばしたが、本棚から本が落ちてその先にはネギ。何の力もないネギは悲鳴を上げて蹲るが、楓が落ちてくる本を落ち着いた感じで本を回収して事無きを得た。

三人の運動神経に驚愕するネギだが、魔力を封印していることを忘れてうっかり本棚から落ちてしまう。

そこを明日菜に助けられ、ただの子供でしかないネギを余裕のある人間がそれぞれ交代で手を貸す。

異常とも言える運動神経の持ち主が数人いるので、大学の図書館島探検部もびっくりの驚異的なスピードで全行程の半分ほどを踏破。

予定していた休憩地点に着いたと同時に荷物を下ろして、それぞれが思い思いの格好で疲れた体を癒す。

そこでネギは自分とは違う魔法の力を感じて、自分が魔法使いである事を知っている明日菜にそれを伝える。明日菜は魔法使いであるネギの言葉で「魔法の本」の実在を確信し、興奮して予定より早く休憩を終わらして先に足を進める。この段階に至っても二人の勘違いが正されることはなかった。

湖を渡り、本棚をロッククライマーの如く道具を使って降りて、這わなければ進めないほど狭い通路を通る。ここまで来ると人外魔境と言いたいほどの様相を呈しており、本当に図書館なのか疑わしくなってくる。

その果てにＲＰＧのラスボスのような部屋に一行は辿り着いた。狭い穴から躍り出た一行は、ただただその威風に圧倒されている。

「す、す、凄すぎるーっ!?　こんなのアリー!?」

「私こーゆーの見たことあるよ、弟のＰＳで♪」

「ラスボスの間アル！」

「魔法の本の安置室です。とうとう着きましたね」

「こ、こんな場所が学校の地下に……ハハハ」

皆が驚嘆の声を上げる中、夕映は拳を握り締めて達成感をしみじみと感じている。夕映の横では明日菜が、非常識さに冷や汗を垂らして空笑いを浮かべる。

はたしてもっとも現実的な反応をしているのは誰だろうか？

「見て！　あそこに本が！？」

それぞれの反応の中、まき絵が祭壇に祭られた本のようなものを発見して指差す。

「！？あ、あれは！！」

「ど、どうしたのネギ！？」

まき絵が指差した先にある安置されている本を見て、ネギが驚きの表情を浮かべて大声を上げたので、横にいた明日菜が驚きながら聞く。

「あれは伝説のメルキセデクの書ですよ！　信じられない！！僕も見るのは初めてです！！」

驚愕の叫びをあげるネギに、みんなの視線が集まる。

「てことは、本物？」

「ホンモノも何も、あれは最高の魔法書ですよっ！　確かにあれならちょっと頭を良くする位簡単かも」

伝説の魔法書を目の前にして完全に舞い上がったネギは、秘匿も忘れて喋りまくる。この様子では秘匿も何もあったのものではない。

誰もネギがなんでそんなものの存在を知っているのか突っ込まな

いのは、それだけネギの言葉に興奮していたからかもしれない。

「えー！？」

「ネギ君、詳しいなー」

そこにいた全員がネギのお墨付きをもらった本に、感嘆の声をあげる。あるかどうかも疑わしかった魔法の書が、本物らしいとわかると各々の目の色が変わった。

そもそも彼女たちが探しに来たのは『魔法書』なのだ。どんなものであれ、頭が良くなるならなんでも構わない。

誰が号令を掛けるでもなく、コレまでの苦労が報われたと歓声をあげながら本に向かって一目散に駆け出していた。

「あんな貴重な魔法書、絶対にワナがあるに決まってます、気をつけて！！」

と、道中では一番気をつけていなかったネギが、完全に浮かれて走る生徒達を木乃香と追いかけながら注意を促すが遅かった。そもそも走り出した発端が自分であるという自覚がないらしい。

「キャーッ！」

歓声が悲鳴に変かり、祭壇へと続く石橋が中央からぱっくりと二つに分かれて、追いかけたネギと木乃香も纏めて全員落ちた。

幸運な事に落とし穴にはほとんど落差がなかったので全員大きな怪我もないようだ。

全員が上部に『☆英単語ツイスター☆』と書かれており、平仮名の描かれた円が無数に並んでいる変な文様の石版の上で倒れている。

「コレって……？」

「ツ、ツイスターゲーム？」

明日菜とまき絵が足元の石版を見て、呆然とした声を上げる。

ツイスター（Ｔｗｉｓｔｅｒ）は、アメリカのハズブロ社が発売している、体を使ったゲームである。スピナーと呼ばれる、ルーレットのような指示板によって示された手や足を、シートの上に示された４色（赤・青・黄・緑）の○印の上に置いて行き、出来るだけ倒れない様にするゲームである。

形としては大分違うがそれでもツイスターゲームであることには変わりなかった。

「フォッフォッフォ……」

足元を不思議そうに見つめる一行に、突然しわがれた老人の声が頭の上から降ってきた。

飾りとした感じで立っていた筈の石像が突如動き出した。

「この本が欲しくばわしの質問に答えるのじゃ、フォフォフォ♪」

皆一斉に頭上を振り仰ぐと、そこには巨大な石像が２体、自分達を押し潰さんばかりに迫っていた。

「ななな、石像が動いたーっ！？」

「いやーん！」

「……！？」

「おおおお！？」

魔法書の左右にあったゴーレムの一体が動き、明日菜達の驚愕の叫びが部屋に響き渡る。まき絵が「あわわわ」と言い、ガクガクと震えて怯えるのも無理はない。

（動く石像（ゴーレム）！？　というかこの声どこかで聞いたよーな……！？）

驚く明日菜たちに対してネギは少しでも状況を把握しようと努めるが、一行を余所に石像は勝手に話を進める。

「では第一問。ＤＩＦＦＩＣＵＬＴの日本語訳は」

「ええーーーー！？」

「何ソレーーーー！？」

参加者たちは突然動き出した石像の言葉を聞いてパニックに陥っていた。

しかも、頭の良いネギや木乃香が石版に上がろうとすると、石像が威嚇して邪魔をする。

「み、みんな、落ち着いて！！　大丈夫です！　ちゃんと問題に答えればワナは解けるはず！　落ち着いて「ＤＩＦＦＩＣＵＬＴ」の訳をツイスターゲームの要領で踏むんです！」

石像の行動の意味するところを理解したネギは、すかさず全員を落ち着かせて指示を飛ばす。

「ええーっ、そんなこと言っても」

「えっと「デ、ディフィコロト」って何だっけ、先生ーーッ！」

「教えたら失格じゃぞ」

基礎的な英単語にも、四苦八苦なまき絵に聞かれて答えを教えようとしたネギを石像が遮る。

「いっ、ｅａｓｙの反対ですよ！！　えと「簡単じゃない」！！」

答えを教えることはできないので、ヒントの言葉で理解した生徒達がそれぞれ動き出す。

「む」「ず」「い、ね！」

そう言ってそれぞれの文字に手をつく五人に一瞬、ゴーレムはどうするか悩むが、渋々と「正解」と告げる。

「や……やった！」

「キャー！　これで本ＧＥＴだね！」

問題を答えて微妙な正解を出して、本を貰えると思ったがそうは問屋が卸さなかった。

「第2問――」

正解しても一問では終わらなく、問題も進んで11問が終わった頃には、石版の上でわたわたと動き回った所為で既に明日菜達は一杯一杯である。

「い、いたいです」

「死ぬ、死んじゃう～っ！」

「問題に作為を感じるです……」

みんなの手足が複雑に絡み合ってスカートは捲り上がり、その絡み合っている姿は男子にはとても見せられないようなあられも無い姿になっている。或いはこれが石像――――ツイスターゲームを作った何者かの狙いなのかもしれない。そうだとすればそいつはスケベであることは間違いない。

「最期の問題じゃ「やった最後だって」「D？SH」の日本語英語訳は？」

もはや限界かと思われたところで、石像が告げた。

「えっ……ディッシュ」

「ホラ食べるやつ！　食器の！」

「メインディッシュとかいうやろー」

全員がプルプルと震えて今にも崩れ落ちそうになっているところを、これが最後とネギと木乃香がヒントを出す。ここまでヒントを出してもらえばお頭（つむ）が弱い彼女たちにも分かった。

「わ……分かった！　「おさら」ね」

「「おさら」ＯＫ！！」

簡単だと明日菜が二人のヒントから答えを導き出し、まき絵がそれに答えてそれぞれが手足を伸ばして文字が書かれているところを触れていく。

「お！」「さ！」

「ら！」

そして最期の一文字、これで全てが報われると明日菜の足とまき絵の手が動くが、そこは「ら」ではなく「る」。本人達は「ら」のつもりなのだろうが、明日菜の足とまき絵の手は確かに「る」にある。「お」「さ」「ら」と文字を踏むはずが、明日菜のまき絵のケアレスミスによって「ら」の隣の「る」を踏んでいたのだ。

「おさる？」

明日菜達が踏んだ文字を繋げて読んだネギの言葉が固まった全員の耳に届く。

「ちがうアルよーッ」

「ハズレじゃな、フォフォフォ」

古菲の叫びでみんなは正気に戻り、嬉々として笑いながらゴーレムが高々と振り上げたハンマーを振り下ろす。

「いやあああああ～～～～～！！」

床を砕かれたネギ達は悲鳴をあげて落ちていくことしかできない。一瞬の浮遊感から始まる加速。全員が闇へと吸い込まれていった。

第三十八話　　期末試験と少年　２（図書館島の変）（後書き）

今週の原作を読んだ感想：「え？　これで魔法世界編終わり？！」でした。

次回の更新は明日の午前０時に予定しています。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

アンケート現在状況：

『双子の弟は魔法忍者』のまま　六票

『飛鳥物語』　二票

『勇気と希望の物語』　一票

候補・『魔法忍者アスカ』『魔砲忍者？ＡＳＫＡ』『魔法戦士は忍術使い』『魔眼忍者アスカ！』

このままいくと現状維持になりそうですね。

？魔法戦記アスカ！（原作名を捩っただけですが）

？飛鳥物語（主人公の名前のホニャララが関係してます（アスカ物語でもいいかもしれませんが））

？勇気と希望の物語（マブラブの捩りです）

?:現状の『双子の弟は魔法忍者』のままで

?:もっといいのがある（読者様の希望があれば、というか切望）

期限終了：８月３１日。

第三十九話　　期末試験と少年　３（巻き込まれる少年）（前書き）

期末試験編四話編成の第三話です。

文字数は１１４０２字です。

第三十九話　期末試験と少年　3（巻き込まれる少年）

時間は少し巻き戻る。具体的にはネギとアスカが森の中で相談した後辺りに。

自身の言葉にショックを受けているネギを置いて、アスカは一人でさっさと職員室に戻った。

戻る途中に職員室の隣りの教育相談室のドアが開き、中から新田が出て来て、ちょうど桜子への説教が終わった所らしく、中を覗くと、『あしたのジョー』ばりに椅子に座って「燃え尽きたぜ、真っ白にな」となっていた。

新田に『英単語野球拳』の話をした時は額にはっきりと青筋を浮かべていたから、その怒りは凄かったんだろうなと叱責の現場を見ていないアスカでも予想はついた。

「大丈夫ですか、椎名さん？」

「……もう、駄目。許してください」

「もう少しだけ頑張ってくださいよ」

少し哀れには思うが、アスカとしては彼女にまだやってもらうことが残っているので、中に入って揺り動かして少し正気に戻し、職員室に連れて行く。

「はい、どうぞ」

「ありがとう……うう、優しさが染みるよ」

まだ戻ってこないネギの椅子に桜子を座らせ来客用のコップにコーヒーを入れて渡す。コーヒーの苦さが心地良いらしく涙を浮かべていた。

「さて、と」

桜子がコーヒーを飲んで落ち着くまでの間に、テストのある教科書や対策プリントを机の上に広げる。

「え、と……ここと……ここと……あとここも」

「ふむ、成る程」

数分経って桜子が落ち着いたので、まずは教科書から出そうなところを勘で選んでもらい、後々分かりやすいように付箋を張っていく。教科書が終わったら次は対策プリントの方も同様に勘で選んでもらう。

「うん、思ったよりも早く終わりましたね。ご苦労様です」

「ありがとう、やっと終わったよ」

新田に怒られた後なので、流石に桜子もふざける気持ちにはなれないみたいで、予定よりも早く終わった。それが終わった後はご褒美にとジュースを奢り、桜子は帰っていた。

「後、三日。足掻いてみるか」

桜子が帰った後に試験までは残り三日しかないので、急いで資料を纏めてプリント作りに取り掛かる。集中力を高めてマルチタスクを最大限活用し、玉藻やリインフォースの知恵も借りて作業を進める。

――――――ガタガタガタ

食事と風呂に入って早々と眠りについた。

――――プルル、プルル、プルル

寝る前に悪寒を感じたものの、さっさと【狸寝入りの術】で布団に入って熟睡している中で携帯の電子音で目を覚ました。

「……誰だ、こんな時間に」

電子音で直ぐに術から覚めて、同じように起きた二人に謝罪しながら、枕元に置いてあった携帯の画面を見ると、ハルナからだった。夜中に掛かってきた電話なので無視しようかとも思ったが、中々鳴り止まないために通話ボタンを押して出る。

「はい、アスカです」

『アスカ先生、た、大変だよ!!ネギ先生とバカレンジャーが図書館島で行方不明に……!』

『途中から連絡が途絶えちゃったんですっ!』

横になったまま電話に出ると、かなり慌てた様子で聞き捨てならない事実を喚くハルナと錯乱気味ののどかの言葉に一瞬、理解できずに固まる。

《どうしたのじゃ?》

《……兄さんと五人が図書館島で行方不明になったらしい》

《何故試験前に行方不明になったのでしょうか？》

《聞かないと分からないね》

アスカの様子を訝しんだ玉藻が念話で聞いてきて、リインフォースが疑問を浮かべる。二人との念話で正気を取り戻し、ハルナとのどかに意識を向ける。

『ど、どうすれば良いんでしょう、アスカ先生！夕映が、夕映が……！』

『みんな、無事だよね！？絶対に無事だよね！？』

「落ち着いてください。まずは何があったのかを説明してください」

アスカが返答しないことを不安に思ったのか更に続ける彼女達を、落ち着かせてから事情を聞いて整理する。

事の切っ掛けは、皆が大浴場に入っている時に木乃香が仕入れてきた噂で、次の期末考査で最下位を取ったクラスを解散させ、特に成績の悪い生徒は留年どころか小学生からやり直しという意味不明なものだ。

普通ならおかしいと気付くのだが、２－Ａが万年最下位にであること、学園長が本気で怒っているという孫の木乃香からの確かな情報、ＨＲの時に兄さんが言った「最下位脱出できないと大変な事になる」等といったものが噂の信憑性を高めてしまった可能性が高い。

そんな噂なんて一切聞いた事がないし、学園長が怒っていたのなら間違いなくアスカの耳にも入ってくるはずだ。

そもそも二人課題に対して噂のタイミングが良すぎる。

そしてその場にはバカレンジャー5人が揃っており、夕映さんが麻帆良学園図書館島の地下深部にあるとされている、読めば頭が良くなる「魔法の本」の存在を話したのが不味かった。

「魔法の本」なんて本来なら笑い話で終わるのであるが、魔法の存在を知っている明日菜がやる気になって図書館島に行くことになった。

恐らく護衛のためか明日菜さんが兄さんを連れて合計7人で図書館島に入って行き、ハルナさんとのどかさんは地上からサポートをしてらしい。

順調に進んで「魔法の本」がある場所に出たのだが、それ以降は無線機からはツイスターゲームとかよく分からない事しか聞こえず、その後7人以外の声の後に悲鳴が聞こえてそこで連絡が途切れてしまった。地上の二人は何度も問いかけるが返答がなく、慌てて急ぎアスカに電話してきたと。

しかし何でネギ、明日菜ならともかく他の人まで「魔法」って単語を口に出しているんだろうか。

確かに図書館島になら「魔法の本」はあるが、読むだけで頭が良くなる本なんていう噂があるのは都合が良すぎだ。そんな噂が大っぴらに流れているのなら、アスカの耳にも入ってきてもおかしくな

いのに。

明日菜は魔法の存在を知っているから探しに行くと言い出しても不思議ではないが何か怪しい。何もかもが都合よすぎる、そう思って一つの推測に辿り着いた。

この状況で得をし、情報操作できる可能性が高いのは学園長だ。あくまで推測。しかし、この状況で得をするのも学園長しかいない。

「その7人以外の声の持ち主は何て言っていたんですか？」

『えっと、確か「この本が欲しければわしの質問に答えるのじゃー」とか「ハズレじゃな、フォフォフォフォ」と言っていました』

大分落ち着いてきたのどかの言葉を聞いただけで犯人が誰か分かってしまった。そんな特徴のある口調で話す人は、この麻帆良中を捜しても学園長一人しかいない。

「他には何か気になった事とかありますか？」

『あと明日菜が「石像が動いたーっ！？」とか言ってたよ。それにあの声にはどっかで聞き覚えがある気がするんだよね』

もっと情報はないかと聞くと、ハルナから推測を肯定する話が出てきた。課題に対して都合が良すぎるし、二人の証言から学園長が一連の騒動を仕組んだのは間違いない。

しかし、一般人の前で石像が動かすなんて学園長は魔法を隠す気はあるんだろうか。

アスカは苛立ちから頭をガシガシと掻きながら、ベッドから立ち上がって部屋の電気を点ける。

《企画したのは学園長ですか……》

《秘匿は一体どうしたんじゃろうな、学園長は》

「……事情は分かりました。これからそっちに向かいます。今どこにいるんですか？」

アスカの意図を理解した玉藻が外に現れ、箪笥から着替えを取り出してからまた体内に入った後、服を脱ぐ。

『私達は図書館島の裏口にいます』

「分かりました。直ぐに行きますからそこを動かないで下さい」

ハルナ達の今いる場所を聞き、玉藻が出してくれた前にポケットのついた黒のパーカーを着て電話を切る。

使えそうな物を影に入れて用意し、フェイク用のリュックを持って家を出て、自分に認識阻害を張ってから念の為フードで頭を隠し、身体強化を施して一般人には横を通り過ぎても風が通り過ぎたとしか気づかない勢いで走った。

壁を蹴り、屋根の上を走り、風を切り裂いて最短距離を疾走する。

――――――と。

鼻先を通り過ぎる風の中に、肌を粟立たせるような冴えた冷気が

一筋、微かに混じった。

（……！？）

奇妙な胸騒ぎを感じて、アスカは思わず止めていた。マンションの上空で足を

「――――――なんだ……？」

意識が戦闘レベルにまで引き上げられたアスカの研ぎ澄まされた感覚に何かが引っ掛かった。何か――首筋を冷たい手で撫でられたような戦慄が、ふいに彼の裡を駆け抜けたのだ。気のせいと片付けるにはあまり確固たる不安が、胸の奥に居座って動かない。

その場に留まり、感覚を全開にするとアスカの耳に、くぐもった微かな声を捉えた。それが女性の声だと気付くが早いか、行動を開始した。

麻帆良学園都市にある、とあるマンションの一室。

長らく干していないらしい湿っぽいベッドの上に、ウルスラ女学院の制服を着た少女が後ろでに縛られ、目隠しと猿轡をされた状態で転がされていた。

部屋には他に、そのベッドを取り囲むようにして数人の男たちがいた。人目で真っ当な職業についていない人種だと判る。獣染みた危険な雰囲気を発散している者ばかりである。左右からベッドにレンズを向けている二台のビデオカメラが、これから少女の身に降り

かかる非情な現実を無残に示していた。

「ボス、今回は中々の上玉じゃないですか」

「ああ、実に運が良い」

下卑な笑い声が響く中で少女は怯えるように瞳を涙で濡らして身じろぎした。皺一つない制服を着た姿は人目見るだけで格式の高い環境で育てられたものだと分かる。彼女は彼らに誘拐されたのだ。

「売る前に少し味見させてもらえやせんか？」

「ふむ……」

決まった言葉を繰り返し、それはまるで舞台で決められた台詞を喋っているかのよう。男たちが少女を見下ろす。好色に染まった眼で、少女の全身を舐めるように一瞥する。

「お前たちには悪いがこういうのは最初じゃないと良いのが撮れないからな、諦めろ」

「そんなぁ」

しかし、リーダーだけは情欲の欠片もなく、あくまでビジネスライクに応える。提案を突っぱねられた部下は残念そうに肩を落とした。

リーダーはそんな部下を見て、

「そう、しょげるな。撮影が終わったら好きにして構わん」

「ありがとうございやす、ボス！」

苦笑を浮かべ、囚われた少女にとっては悪夢としか思えない決定を下した。

「よし、始めろ……」

その場を仕切っているらしい強面のサングラス男が命じると、男優役なのだろう半裸の男が二人、ベッドの上に上がって少女の身体に触った。少女は自由な足をバタつかせて激しく抵抗するが、大人の男二人に押さえつけられ、両足を左右に大きく広げた状態でロープで固定されてしまう。

「いや……いやあ！　お願い……帰して！！」

少女は己の運命を悟ったかのように叫び声を上げた。準備が整ったので猿轡を外された少女は涙声で訴えながら身を捩るが、それは男たちの嗜虐心をさらに煽るだけだった。

しかし、どこに逃げるのか。逃げる場所などなかった。ただ残酷に真綿で首を絞めるかのように、残酷な運命が人間という形で襲い来る。その肢体に男たちの指が這った。

「構うこたねぇ……どうせガキなんて一発やっちまえば大人しくなる。それに派手に抵抗してくれた方が本物っぽいって良く売れるしな」

ねちゃりと音がしそうなほどにおぞましく男の一人が笑みを浮かべる。口が開かれて、唾液に濡れた歯が剥き出しになる。それが余

計に少女におぞましさを誘った。

「それに有名女子校のハメ撮りだ。高く売れるぜ」

ゲラゲラと笑いながら男優の一人が少女に馬乗りになり、ブラウスを力任せに引き裂いてその乳房を露出させ、羞恥に顔を紅潮させながらも必死に首を振るのを見ながら愉悦に浸る男。

「だが、あんまり喚かれると興が冷める。もう一度猿轡を嵌めろ」

「了解です」

敏感な胸を荒っぽく鷲掴みされて少女は悲鳴を上げる。もう一人の男がナイフでスカートを切り裂き、下着に指をかけると、少女はそれだけはどうしても我慢できずに狂ったように暴れだした。

再度猿轡を嵌められたことで話すことが出来ず、むーむーと唸り声を上げて必死に身体をよじらせながら、迫る男たちの手から逃れようとする。

「このガキが！」

いい加減に苛立って来たのか馬乗りになった男が少女の髪を掴んで、顔を殴りつけようとしたその時――――

『ガゴォン！！』と玄関の方から激しい物音が聞こえてきた。巨大なハンマーが叩きつけられるような音が何度も響き、部屋全体が地震のように揺れる。

「ちっ、お前ら、ちょっと見てこい！」

リーダーである強面のサングラスの男の命令で三人の手下が玄関に向った。何者かが扉を外から破ろうと体当たりしているようだった。

「誰だ、そこにいやがんのは！？」

手下の一人の怒声に、扉を叩く音が一瞬止んだかと思うと、今度はいきなり扉が比喩ではなく、文字通りくの字に折れ曲がった。二撃目で蝶番が外れ、最後の一撃でチェーンが千切れて、爆破されたように扉が内側に吹き飛んでくる。

「！？」

開いた玄関から暗い影が飛び込んできて、三人の手下たちの間を疾風のように駆け抜けた。一拍の間をおいて、三人は自分の股間を押さえたまま床に倒れ、だらだらと脂汗を流して陸揚げされた魚のように口をパクパクさせて悶え苦しんだ。

「おい、どうしたぁ？　誰が……」

戻ってこない手下を呼びに来たサブリーダーは玄関口に現れた者――――女を見て言葉を失った。誘拐してきた少女とは次元の違う、いや比べることすら神に対する反逆だと言わんばかりの着物姿の美女が立っていたのだから。

「喜べ、楽には死なさん。男として――――死ね」

着物姿の美女は男たちの男たる部分の死刑を宣告した。惨劇が始まった。

丁度、着物美女が玄関を突破して阿鼻叫喚の地獄を形成している頃、窓を割って別の侵入者が現われた。

窓を割って入ってきたのは、身長１５０センチメートルぐらいの体型から見て少年だった。ダークグレーのパーカーを着ており、フードを目深に被っているので顔は分からない。

「な……なんで子供（ガキ）がここに居やがる？」

少女を人質に取ろうにも玄関の方が気になって白けてしまい、全員が一時ベッドから離れていたところに少年が現れ、間にはいられたことでそれも出来ない。

「偶々、通りかかった――――――そうだな……【正義の味方】とでも名乗っておこう」

サングラスの男の疑問は至極もっともで、さっきまで男たちがしようとしていたことを考えるならあまりにもギャップがあり過ぎる。フードを被った少年は明らかに今、考えたであろう名乗りを上げた。

どう見ても自分を助けれるとは思えない少年に、救助が来たのかと希望の光が見えかけていた少女の心に絶望が染まる。

「少女の危機を正義の味方として名乗りを上げたからには、とても見過ごすことはできない。さあ、そうそうに観念した方が怪我をしないですむぞ？」

「……ブ、ブッ殺せ！」

薄暗い中でも不適に笑いながら言う少年に舐められたと考えて切れたサングラスの男の命令に、男優役とカメラマン役の計四人が、取り出したナイフとスタンガンを手に同時に襲い掛かった。

少女が少年に助けを求めるように頼む暇もなく、少女は確定された未来に目を閉じて背ける。

が、『ブォン！！』という部屋の中を駆け抜けた烈風に目を開くと、四人の男たちは僅か一歩踏み出したところで棒立ちになっていた。

「ゥ……ア……！」

三人の男が武器を放り出し、自分の股間を押さえていた。顔はみるみる土気色に変色し、男たちは膝から崩れ落ちる。

四人目の男はまだ倒れない。だが、それは自分の意思で立っているのではなかった。謎の少年の右手の拳が、男の股間に深々と突き刺さっていたからである。男は他の三人と同じく顔面蒼白で、だらしなく開いた口からダラリと舌をはみ出させたまま、裸で極寒の北極に放り投げられたように全身を震わせていた。

少年が拳を戻すと、男は棒のように倒れて動かなくなった。他の男たち同様に血混じりに血尿を漏らしたか、アンモニア臭が部屋に満ちる。

「な、なんだ！？　てめぇ……何しやがった！！」

「禁術・玉潰し。あんたたち、こんなことするのは初めてじゃなさそうだし、こんなことが二度と出来ないように金〇を両方潰しただけで、命に別状はない……はず」

最後以外、何をしたのか見えなかったサングラスの男の問いに、男からすれば実に恐ろしいことをしたのに簡単に少年は答えた。付け足した確定ではない言葉にサングラスの男は、ようやく目の前にいる少年が化け物だと理解した。

男が男たる部分を躊躇なく潰す。それが化け物でなくてなんなのか。

「ははははっ！　死にやがれ化け物が！！」

窓際の机に駆け寄って引き出しから拳銃を掴み出すと、銃口を少年に向ける。そんな男に、少年はその場で両腕を組んだまま、落ち着いていた。

男は引き金を引き、轟く銃声に思わぬ少年の強さに再度希望を持った少女が悲鳴を上げる。しかし、弾丸は壁に孔を穿っただけで、そこに少年はいない。

既にその瞬間には、サングラスの男の全身は石と化していた。自分の目前に立った少年の拳が、男の股間に突き刺さっている。一瞬で衝撃が脳にまで達し、男にしか分からない痛みと共に全身を硬直させていた。

「相手が悪かったね。まあ、自分の悪行を呪いな」

少年はそれだけ言うと、ガクガクと痙攣しだした男の股間に突っ

込んだ拳をグリッと一回捻じ込んでから引き抜いた。その瞬間、男はゴリッと何かが潰れる音とも共に全身に虫歯の数百倍の激痛に襲われ、意識が焼き切れた。

悲鳴を上げることもできずに床に転がり、白目を剥いて口からとめどめなく泡を吐きながら、末期の如くの痙攣を繰り返す。スーツの股間から、尿に混じってドス黒い液体が流れ出し、床に広がった。

「ふん！」

しかも、少年は駄目押しとばかりに倒れ付した男の股間を踏み抜くのも忘れない。この少年、男でありながら躊躇なく自分も持っている器官を完膚なきまでに潰すとかマジで外道である。

サングラスの男の身体がピクリとも動かなくなってから（本当に生きているか？）、玄関口で潰した男たちを連れてきた着物美女も手伝って部屋に転がっている全員を一箇所に集め、背負っているリュックから取り出したロープで順に縛っていく。

「これでよし……次は、と」

全員を縛り終えた少年――――――アスカ・スプリングフィールドは、少女の身体を縛っているロープを解いてやった。目隠しを取ってみると、可愛らしく十人七人は美人と称するだろう素顔が現れた。

アスカは、またリュックから男物のシャツを取り出して肩にかけてやり、まだ事態がよく呑み込めていない顔の少女に優しく微笑みかけた（暗くてフードで顔を隠していてよく見えないが口元だけは少女にも見えた）

「もう大丈夫。安心していいよ。よく頑張ったね」

「あ、ありがとう……ございます……うぇ……」

目の前の少年に助けられたことは未だに信じがたいものがあるが、少年の暖かい笑顔に自分はもう安全なのだと実感して、礼を言いながら嗚咽を漏らす。

アスカは突入する前に呼んだ警察のパトカーのサイレンが聞こえるまで、襲われかけた恐怖や助かった安堵等いろいろな感情から泣き出した少女が安心するように背中を撫で続けた。

後日、男たちが所属していた組織は、その末端に至るまで何者かに壊滅状態に追い込まれ、逃れようのない証拠と共に警察に突き出された。警察に突き出された男たちの〇玉が完全に潰されて使い物にならなくなっており、回復しても『正義の味方怖い』と連呼していたのは余禄である。

ちなみに、この半年で麻帆良でとある少年の周囲で問題を起こしたやのつく組織や不良と呼ばれる人間が捕まったり、こてんぱんにされた影響で治安が良くなっているのはもっと余談である。

「ええい！　寄り道をしていたら遅くなった！！」

警察が乗り込んでくるまで少女の傍にいたため予定した時間よりも遅くなった。玉藻が背後組織を追ったのを見送ってから飛び出したので超過分を取り戻そうと速さが増し、暗い夜空を疾風が駆け抜ける。

アスカが本気で急いだので、図書館島に着いた時の累計した時間は一般人が急いだ時間と大差ない。

そこからは走って橋を渡り、図書館島はかなり広くて裏口を捜すのも大変だが、白眼の透視を使えば直ぐに見つかったので最短コースを進み彼女達の元に着いた。

「あ、アスカ先生」

「早いね。まだ連絡してから３０分も経ってないのに」

「急いできたので……図書館島内部の地図ってありますか？」

途中で犯罪者をしばいたことで非常識な速さにならなかったのは皮肉か。

「これです」

この話題を追求されると不味いので言葉を濁し、のどかに地図があるかどうか聞いて渡された地図を見る。どこのダンジョンだと突っ込みたくなるような広さで、どう見ても一学園の施設の一つには見えない。地下に潜ったことはあるが、地図として見るとその非常識が良く分かる。

「僕が連れ戻して来ますから二人は先に寮に帰ってください」

「え、でも」

「待ってよ。私達も「新田先生に連絡して朝まで有難い説教を貰うか、今すぐ帰るか、どっちがいいですか？」今すぐ帰ります」

目的地までの道順を教えてもらい、地図を返して二人に先に寮へ戻るように言うが、のどかはついて来たそうに口篭る。ハルナは直接的について来ると言おうとしたのを遮ってどうするかを選ばせる。

アスカ一人の方が早く着くし、足手まといはいない方がいいという判断だ。そして寮に戻る二人を見送ってから扉を開いて螺旋階段を五段飛びで降り、図書館島内部に入る。

何度見ても目の前に広がった広大な空間とそこに置かれた乱立する本棚とその蔵書の数々には圧倒される。

《確かに凄いのう、ここは》

《私の記憶の中にもこれほどの蔵書を誇る建物はないです》

圧倒されたが目的を思い出し、魔力で強化して本棚の上を走り出す。

【白眼】の能力の一つ、【物質透視】で辺りを見渡すとあちこちが罠だらけな事が分かる。

【浮遊術】で飛んでいった方が早いが、万が一人に見られたら不

味いので走って行く事を選択した。目的地は地下１１階まで降り、地下道を進んだ先にある。

普通なら完全装備で片道およそ2時間掛かるそうだが、アスカなら走れば３０分もあれば辿りつく。

あっという間に地下3階に到着して先に進むと底が見えない本棚や、湖に浸かった本棚を見ながら水の上を走り、凄く狭い通路を匍匐前進で進むに至ってこの図書館を作った人間の正気を疑いたくなった。

《本当にここは図書館なのでしょうか?》

《何を考えて作ったのか分からんな》

図書館の中に轟音を立てる滝や完全に水に浸かっている本棚を見て、正気かと思うのはアスカだけはないと思う。

一応、本棚はあるが一体誰こんなところの本を読むのだろうかという思いは、恐らく先にここを通った彼女達も抱いた筈だ。

《やっぱり、魔法使いの為の図書館なんだろうか?》

《じゃが、いくら魔法使いに限定にしたとしても、態々こんな風にしなくてもよいと思うのじゃがな》

《玉藻殿の仰る通りです。全く持って理解に苦しみます》

匍匐前進をしなければ通れないような天井の低い通路にも本棚があり、誰が読むというのかと思わずにはいられない。横目に一段し

かない本棚を見ながら進み、天井が空いていたので覗くとそこには広大な部屋があった。

穴から部屋に上がり、体に着いた埃を払いながら見渡すと、祭壇みたいなものがあり、脇にハルナ達が言っていたと思われる身長４メートルはある重厚な石造りの重戦士像が１体立っていた。

ここに至るまでの見えたトラップの数々もそうだが、地底湖に本棚の断崖絶壁と一体何処のＲＰＧの秘境だと本気で呆れる。他には何も無さそうなので祭壇前に進むと、ぽっかりと穴が空いていた。

話に聞いていた通りに来たので、この部屋にいないとなるとここに落ちたとしか考えられない。魔法の処置をして安全だとしてもこの高さは恐怖を感じさせるので、こんなところを落ちたらトラウマになるかもしれない。

《行くしかないようなじゃな》

《ちょうどいい物もありますしね》

肩に引っ掛けていたリュックに右手を入れながら穴に身を躍らし、重力に従って落ちる。３秒程度の間、自由落下を楽しむと下に光が見えてきたので、リュックに貼り付けて【忍具口寄せ用の札】から自分で作った鎖分銅を取り出す。

厚く覆われた木々の枝や葉のクッションを突き抜け、鎖分銅の錘の方を大きな枝に向かって投げて巻きつける。落下は止まり、鎖分銅を持っている片手で体を支え、慣性の法則に従って揺れた反動を使って枝に飛び上がる。

枝に巻きつけた鎖分銅を外して反対の方法で収納し、変わりにテープレコーダーを出してポケットに入れておく。

周りを見てみると地下の筈なのにまるで木漏れ日のように光が差し、壁が淡い光を放っている。本棚が無秩序に並び水没しているのもあるが、魔法的な処置がされているためか痛んでいる様子はない。

（あそこか）

明日菜達を捜すと小島みたいな所に纏めて寝かされている。

《穴から落ちたにしては場所がずれていますし、学園長が運んだのでしょうか》

《一体何がしたいのやら》

枝を伝って木を降り、彼女達の元へ向かうが、その途中から誰かに見られているような感覚を覚えた。完全に戦闘のつもりで意識レベルを高めていたので察知できた。

恐らく学園長だとは思うが、麻帆良のどこかにいるアルビレオ・イマという可能性もある。

見られていると気がついている事を相手に気付かせないように、彼女達の元に辿り着き、一人一人問題はないかどうか確認していく。

《明日菜が左手を怪我しているが、何処かにぶつけたようじゃな》

《そうですね。ふむ、他は誰も怪我をしていないようですね》

明日菜が左手に怪我をしているが、誰も大きな怪我はしていないのは救いだ。

治癒魔法を使って治そうとしてその手を止めた。

《明日菜には悪いが、怪我人が出たという事実は後々の交渉のタネにできるからの》

《あまり気は進みませんけどね。悪いのは学園長ですから》

怪我がそれほど酷いものではないが、学園長と交渉する時にその事実が有利に働く。それに普通に手当てをするとなると服を脱がさないとできないので、起きるのを待つしかないというのもある。

（広いな）

見上げれば天井まで３０ｍはありそうで、天井付近には木の枝が張り巡らされている。

落ちてくる時に運悪く太い木の枝にぶつかれば大きな怪我を負いかねないし、下に水があったとはいえ、あれだけの高さから落ちたら体勢によっては打撲ぐらいはする。

魔法で着地したとは思うが大怪我をする可能性もあり、余りにも危険すぎる。

「みんなが起きるまで調べるか」

近場を調べると、この場所には全教科のテキスト、トイレ、キッチン（食材豊富）がある事が分かった。ここまで揃っていて風呂が

ないのは何故なのだろうか。

この湖に水没した巨大な本棚とその向こうに見える建物、天井を支えるような大きな木々に囲まれた暖かな南国ムード一杯の空間であることを考えると、学園長が噂を流してここに来るように誘導した可能性が高い。

学園長でなくても誰かが裏で意図を引いているのは間違いない。

リュックの【口寄せ札】から無味無臭の気付けの効果のある薬草を取り出して、同じく取り出したライターで燻す。

これで３０分もあれば目覚めるだろうと予測して出口を捜しにその場を離れた。

第三十九話　　期末試験と少年　３（巻き込まれる少年）（後書き）

次回の更新は明日の午前０時に予定しています。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

アンケート現在状況：

『双子の弟は魔法忍者』のまま　八票

『飛鳥物語』　二票

『勇気と希望の物語』　一票

候補・『魔法忍者アスカ』『魔砲忍者？ＡＳＫＡ』『魔法戦士は忍術使い』『魔眼忍者アスカ！』『魔導忍者の胃痛生活』

もう現状維持で確定じゃない？

？魔法戦記アスカ！（原作名を捩っただけですが）

？飛鳥物語（主人公の名前のホニャララが関係してます（アスカ物語でもいいかもしれませんが））

？勇気と希望の物語（マブラブの捩りです）

？現状の『双子の弟は魔法忍者』のままで

？もっといいのがある（読者様の希望があれば、というか切望）

期限終了：８月３１日。

第四十話　　期末試験と少年　４（降臨する修羅）（前書き）

期末試験編四話編成の最後である第四話です。

劇場版公開記念連続投稿も終わりです。

エヴァンゲリオン１２年秋公開か……遠いな。

文字数は１１３５１字です。

第四十話　　期末試験と少年　４（降臨する修羅）

１０分程辺りを見回りながら捜すと、綺麗な水が絶え間なく流れ落ちてくる滝の裏側に、魔法で隠されていた非常口を発見した。出口を見つけたので彼女達の元へ向かっていると、もう起きたのか明日菜の大きな声が離れた場所にいるアスカの元にも聞こえてきた。

「……って、ここはどこなの～～～～～！？」

明日菜の声が地下空間内を反響し、幾重にも木霊する。起きたのなら早く彼女達の元へ戻らないと考え、足を速める。

彼女達が見える位置にまで辿り付くとネギが生徒達を励ましているのが見えた。接近するアスカに真っ先に気付いた楓が驚いた顔をしていた。

「大丈夫ですよ！　根拠はないですけど帰れます！！　諦めないで期末テストの勉強をしましょう！」

「その前に帰ろうよ」

脱出が困難であるのならば、教師として生徒を不安がらせない対応には合格点を与えられるが、始めからこんなとこに来なければそんな問題も起こらないので落第点だ。

ネギの後に続いたアスカの言葉に沈黙が辺りを支配し、楓以外が後ろを恐る恐る見て、皆の後ろで気配を消して立っていたアスカとネギの視線が重なった。

「ア、アスカ！？」

「ハロ～、迎えに来ましたよ」

ネギが驚愕の声を上げて楓以外が慌てて振り返る中、今はまだその時ではないと内心の怒りを隠して笑顔で応対するアスカ。一斉に全員で何時の間に来たのか何やらと聞いて来るので、ここに来た経緯を纏めて説明する事にした。

「夜中に突然ハルナさんから電話が掛かってきて、貴方達が図書館島で行方不明になったと聞いたので追いかけて来た訳です。出口を見つけましたから帰れますよ」

「そうか。パルとのどかが救援を呼んでくれたんやな」

「そうみたいでござるな」

「これで一安心だわ」

「良かったアル」

「これで帰れるね、ネギ君」

「は、はい。そうですね」

説明して出口があることを言うと、みんながほっとして安堵の表情を浮かべる。まき絵がネギに喜色満面の笑みを向けるが、当のネギは言い澱み何ともいえない顔をしている。

教師として生徒を励まして、張り切っていこうとした時にアスカ

が現れて出口の存在を出してしまったので良いこととはいえ複雑なのだ。

「出口って何処です？　落ちた場所にはどこからも登れないようですが？」

「向こうの滝の裏に非常口がありました。そこから外に出られる筈です」

夕映さ出口がどこにあるのかと聞かれたので、出口がある方向を指差す。

「しかし、何でまた「魔法の本」なんて胡散臭いものに頼ろうとしたんですか？」

アスカはハルナ達から話を聞いているが、本当に学年最下位で解散なんて言葉を信じたのか気になって聞いてみた。

「実は期末で最下位だったらクラス解散の上、私達小学生からやり直しだって言うから」

「はぁ～」「は？」

申し訳なさそうな顔を浮かべる皆を代表して明日菜が言うと、アスカの溜息とネギの素っ頓狂な声を上げるのが重なった。

もうそれだけで何か見解の相違があったであろうことは容易に想像できた。

《二人の間に見解の相違があったようですね》

《どうせどちらも自分のためにと考えていたのじゃろうな》

「？　いやだから私達が留年って……」

「いや、僕がクビになるってコトしか聞いてないですけど……」

明日菜が教師である二人の予想外の反応に困惑を浮かべ、ネギが衝撃（？）の事実を告げると二人揃ってポカ～ンとなった。周りの皆も同じように目を点にして二人を見つめ、全員の間に沈黙が流れる。

やがて、全員がある一つの結論に辿り着いた。

「え、え～～～！？　っていうコトは」

「留年とか小学生っていうのはデマってことアルか！？」

「そうみたいやな」

「あの苦労は一体何だったんだろう……」

「骨折り損のくたびれ儲けです」

「ニンニン」

ここに来るまでの苦労が全て無駄であったことが分かり、全員が落胆している（楓はよく分からない）のをアスカだけが冷めた目で眺めていた。

《その前に学園長にそこまでの権限はないと何故気付かないのじゃ？》

《あの学園長なら在り得ると思ったんでしょう》

リインフォースの言う事が最も説得力があってアスカは天を仰いだ。思わず納得してしまった自分が情けないらしい。

「うあっ！　あ～もう！！　そんなんだったら、こんな謎の図書館なんか来なかったわよ！！」

「ええっ！？　そんなぁ！？」

「ったくも～！　やっぱり、アンタが来てから踏んだり蹴ったりよ！！」

「ぼ、僕だってそうですよう！！」

ネギは自分の為にここまでやってくれていると信じていたが、明日菜の言葉にショックを受けてお互いに罵り合いを始めてしまった。

今回の件に関して明日菜に責められる謂(いわ)れはないネギが全面的に正しいが、疲れきったアスカは止める気にもなれない。

「あ”……あた……あたたた」

暫くそんな口論を眺めていたが、明日菜が途中で左肩を押さえて蹲ってしまった。

「大丈夫ですか、明日菜さん」

「いや、大丈夫。何でもないから」

「そういう訳にもいきませんよ。楓さん、向こうに救命箱があったので取ってきてくださいい」

「了解でござる」

逸早く状況を察したアスカが明日菜に近寄ってその顔を見て、大丈夫だという言葉が強がりだと察して楓に救命箱を取ってきて貰えるように頼む。

「木乃香さん、治療を頼んでもいいですか？　怪我の場所から考えて、服を脱がないといけないですから男の僕がやるわけにいきませんので」

「了解や。ほな明日菜、服脱いで」

「あ、うん」

楓さ了承の言葉と共に走って取りに行き、怪我の場所的に服を脱いでもらわないといけないので、受け取った救命箱を木乃香に渡して治療を任せ、男二人は明日菜を見ないように後ろを向く。

治療が終わるまで二人で何を話すことも無く黙って待っていると、アスカの目にネギの右腕に手首を一周している三本の黒い線が見えた。それを見てネギが自分で魔力封印をしているのが分かった。

《見たところ効果はあと3日あるみたいです》

《恐らく、魔力封印したのは放課後に別れてからじゃな》

しかし、どうして自分で自分自身に魔法が使えないように制約をかけたのか、もしかしたらつい使ってしまうからかもしれないが、使いたくないのなら使わなくていいだけなのに理解に苦しむ。思わず使ってしまうからだろうとは思うが、何も封印しなくても思ってしまう。

（まあ、そこまで考えなくてもいいか）

と、考えることを止めて結論を出す。

そろそろ治療も終わるかなと思った瞬間、アスカは周囲の異変を察知して周辺に意識を配りながら振り返る。

ちょうど治療も終わったところのようで、明日菜も服を着終えている。

アスカの反応に異変を察知して数秒遅れて楓、古菲も同じ方向を振り返り、そんな三人を残りの五人が驚愕、不審、興味の視線を向ける。

「どうしたのですか？」

「……何かが来ます」

「「「「「え？」」」」」

どうしたのかと聞いてくる夕映にアスカが言葉少なく返し、五人が疑問の声を上げたのと同時に不細工な石の手が水面を押し上げ、

そのままま絵を掴もうと手を伸ばす。

「キャーッ！」

「フッ！」

アスカが事前に接近を察知していたので、手がまき絵を掴む前にお姫様抱っこで抱え、文字通り魔の手から逃れる。それと同時に湖から慌てたかのように手だけではなく、ゴーレムの全身が現れた。

「大丈夫ですか？」

「う、うん。ありがとう」

まき絵を下ろして怪我は無いか聞くと、お姫様抱っこされたことが恥ずかしかったのか顔を赤らめていた。アスカは石像に注意が行って気づいていなかったが。

「ま、またあのでかいの！？」

「動く石像（ゴーレム）ですよっ、明日菜さん！　一緒に落ちてたんだ！」

「フォフォフォフォ」

《学園長は一体、自分の学園の生徒に何がしたいのか》

《理解せん方がいい。理解できてしまうと同類になりそうじゃ》

何であんな特徴的な口調なのに誰も学園長だと気付かないのか不思議だ。しかし、ここまで一般人の面子が揃うと魔法はおろか、普

通に戦うことさえもままならない。

いや、ゴーレムなんかがいるのだから別にいいかも、と心の中で思ってしまうが学園長とは違うのだと考えて踏み留まる。あの石像を操っているのが学園長であるのなら、まさか生徒を傷つけるような真似はしないと思う。

だが、果たして本当にそこまで信用してよいものかが問題だ。

「ぼぼ、僕の生徒をっ！　いくらゴーレムでも許さないぞっ！　ラス・テル・マ・スキル・マギステル……くらえ魔法の矢！！」

「フォ！？」

アスカがどうするか悩んでいるのをよそに、ネギが幼い声に怒りの色を滲ませてゴーレムを睨み付け、威勢の良い啖呵を石像に切ったかと思うと、杖を振って即座に呪文の詠唱に入る。

止めようかとも思ったが封印があるので魔法は発動しないので傍観した。既に呪文を唱えていたところだったので、止める方が逆に不審だからだ。

それにパジャマ姿で身長より大きな杖を持っているネギに、余り近寄りたくないというのが本音ではあるが。

「ま……」

「まほーのや……？」

びしっとそれらしきポーズを決めて、石像に魔法の射手を叩き込

む……筈が、何も起こらないので固まるネギだったが、何かに気付いた顔をしたということはようやく魔法を封印した事を思い出したようだ。

何も起こらない事と「魔法の矢、何ソレ？」という感じで目が点になる魔法を知らない一同。

場がシーンとして何とも名状しがたい痛い沈黙が辺りを覆う。石像ですら、顔が動いたわけでもないのに戸惑いの表情を浮かべているようにすら思えた、

アスカが軽くついた溜息が辺りに響いてしまい、それが余計に空しさを誘う。

「フォフォフォ、ここからは出られんぞ。もう観念するのじゃ。迷宮を歩いて帰ると三日はかかるしのう～」

どうも石像はなかったことにするらしい。

石像の言う三日という言葉を信じるなら期末テストには到底間に合わない。だが、石像は「歩いて帰る」と三日かかると言ったのだから、別のルートがあると考えられた。

「み、三日！？」

「それではテストに間に合わないアル！」

「み、みんな諦めないでっ！　僕の魔法の杖で飛んでいけば一瞬だから……ハッ！！」

「魔法」という単語を、さっきからやたらと連発して暴走するネギの口を明日菜が塞いで、何か小声で言っているがアスカのところにまでは聞こえない。

《みんなネギの言動を訝しがってますね》

《当然といえば当然じゃな。誰が見ても怪しいわ》

魔法とか言い出して杖を振り回してたら誰でも怪しいと思う。何でもないと明日菜が精一杯誤魔化すが、やはり苦しいものがある。

「ん……？　あ！！　みんな、あのゴーレムの首の所を見るです！」

夕映の指差すところを見ると、魔道書らしき物が襟の部分に引っかかっていた。

見る限りでは本物のメルクセデク魔道書ではなく、写本のようだがそれでもかなりの魔力が込められているらしいとは幾つか魔道書を見たことのあるアスカの感想であった。写本でも、あんな物を普通の人間が読んでしまえば発狂してしまうぐらいに危険なのだ、魔道書という物は。

一応、封印はされているが、こんな雑な扱いをしていたら反応するか分からないから危険だ。

「本をいただきます！　まき絵さん、クーフェさん、楓さん！」

「「「ＯＫ！　バカリーダー」」」

三人がびっと親指を立てて、夕映の指示を受諾し、アスカが止める間もなく古菲が飛び出していく。

「中国武術研究会部長の力、見るアルよー！　ハイッ！」

気合の篭った声と重い踏み込みと同時に、古菲の拳が石像の足に放たれた正拳突きの一撃が、石像の甲冑に大きな損傷を与え、バランスが大きく崩れてその体を傾かせた。

「やっ」

楓がまき絵を抱き上げ、ジャンプしてまき絵は何処からともなく競技用のリボンを取り出し、石像の首元にある魔法の本を掠め取る。

そうして、あっさりと本を手に入れた。

途中で止めることもできたが、そのアイコンタクトすらないのに見事にできてしまうチームワークに見惚れてしまった。

《このチームワークは凄いな》

《何も言わず、アイコンタクトすらしていないのですけど……不思議ですね》

「逃げますよ！」

この後どうなるかを理解したアスカの一言に、全員が弾かれた様に駆け出した。その余りの行動の早さに石像は一瞬立ち尽くしていたが、慌てて追いかけてきた。

「キャーッ！　魔法の本取ったよーっ」

アスカしか出口を知らないので先行し、楓に抱えられながら、魔法の本を取れた事に対して歓喜の叫びを上げるまき絵。

アスカも今更本を捨てろとも言えず、彼女たちのその一連の行動の素早さ、見事なコンビネーションにただ感嘆の声を上げるしかなかった。

「ま、待つのじゃー」

石像だけに、その重量で動きは鈍くあまり走るのは早くないようで、一度開いた差は縮まらない。

だが、何時までも追いかけてこられても困るのでリュックの中に手を突っ込み、ゴソゴソと手探り出したかと思うと、いきなり地引網で使うような大きな網を取り出した。走ったまま振り返り、石像に向かって投げつける。

「フォ！？」

網に絡まり、手足をバタつかせている石像を放って、慌てようを無様だなと心の中で呟きながら非常口に向かって走り続ける。

「な……なんでそんなのがニョキと出てくるのですかっ！」

「もしかして四次元と？(つな)がっているのかな？」

あんぐりと口を開けて驚く一同を代表して夕映があまりの展開に突っ込み、まき絵が某アニメに出てくる狸に似た体型の猫型ロボッ

トが持っているポケットを連想したのか、夕映の驚きとは違って純粋な疑問を上げた。

「今の何処から出したのよ？」

「このリュックの中からです」

楓が怪しげに見ている中、何処から出したのかと聞いてきた明日菜に肩に掛けているリュックを指差す。

明日菜は勝手に魔法かと納得したのか、それ以上は追求してこなかった。

「あ！　あそこの扉やね？」

「そうです」

アスカの横を走っていた木乃香さんが滝の裏側に隠されていた出口を見つけて聞いてきたので肯定する。

その非常口の周りには以前はドアの形を成していた瓦礫が広がっている。最初見つけたときはちゃんとドアがあったのだが、ふざけた問題が書いてあった。

何故かアスカが答えを言っても何も反応せず、もしかしたらバカレンジャーにしか反応しないのではないかと考えたので、便利な【口寄せ札】から特大ハンマーを取り出して破壊したのだ。

ドアを破壊して中に入って螺旋階段を見上げると、同じような物が幾つかあったので必要になると思ったので特大ハンマーを置いて

おいた。

そんな事があったとはつゆ知らずに殺到する一同が、かつてドアだったものを潜ると目の前の空間が広がる。

「うわ、なにコレ！？」

「らせん階段！？」

全員が上を見上げると煉瓦造りの巨大な昇り螺旋階段が続いている。凄まじく巨大で高く、円周が１００ｍは優にありそうで中心に立って見上げても、どこまで続いているのか分からない。

「これ、上まで登るん？」

普通に考えれば確かにここまで天井まで遠いと登る気も薄れ、木乃香は弱音にも似た感情を声に滲ませる。

「それ、どうしたのアスカ？」

「さっき拾いまして、これから必要になるんです」

全員が階段を見上げている中、置いていた特大ハンマーを手に取ると近くにいたネギがアスカの持っているハンマーを指差して聞いてきた。

「さあ、行きますよ！」

「フォ～～～！？」

ハンマーを片手で持って、階段に足をかけながら言うと遠くから石像の声が聞こえた。どうやらもうあの網から逃れたらしく、追ってくるゴーレムから逃げるように急いで階段を登る。

何人かが何故アスカがハンマーを持っているのかと訝しげな視線を向けてくるが、階段を登るのを優先したのか聞いてくることは無かった。

「ならぬ、ならぬ！　本を返すのじゃ～！」

そんなに言われるとちょっと読んで見たいかも、と場にそぐわない感想を抱いている間に、皆の顔色が一目で分かるぐらいに変化していた。

「無理矢理追って来たアルよ！　随分と根性のある石像ネ！」

「と、とにかく、逃げましょう！　ここまで来て、魔法の本を返すなんて選択肢はなしです！」

だが、彼女たちの想いとは裏腹に問題のついた扉が前への通路を塞いでいた。

「『問２　英語問題。ｒｅａｄの過去分詞の発音は?』です」

「ええ～っ、何ソレ！?」

「そんなコトいきなり言われてもー！」

扉に書かれている文字を夕映が読み上げ、クラス最下位１，２のまき絵、明日菜が困惑の声を上げる。こんな状況では頭が働くはず

もない。

「退いてください！」

多分、この問題はバカレンジャー専用でアスカやネギ、木乃香では問題に答えても扉は開かないという予測を立てていたので行動を開始する。

三人に声を掛けながら両手で特大ハンマーを後ろに振りかぶり、三人が下がったのを見計らって扉に叩き付ける。ドグシャ！と破片を撒き散らしながら粉砕し、扉を瓦礫の山に変える。

「これで大丈夫です。先に進みますよ」

「あやー！　来たえ、無茶やなー」

「このためにハンマーを持ってきたんだね」

「待て～っ」

「急いでください、このままでは追いつかれますよ！」

皆、アスカが何故この特大ハンマーを持ってきたのかを理解した。石像も非常口を壊しながら入って来たので、皆を急かして走り出す。その後も何回か扉があったが同じように特大ハンマーで粉砕し、先に進む。

途中、夕映が木の根に躓いて足を挫いてしまい、教師の責任感からネギが背負うとするが魔力を封印した身では直ぐに潰れ、変わりに楓が軽々とお姫様抱っこで走ることになった。

《魔力のない自分の身体能力を把握していないのでしょうか？　余計に時間が掛かっているだけです》

《自分の事ぐらいは把握しておいてほしいものじゃ》

「ああっ、みんな見てくださいっ！！　地上への直通エレベーターですよっ！」

そろそろ運動系以外の人が限界近くになってきたが、ようやく辿り着いた。

ネギの言葉にへばっていた人も元気を取り戻し、ラストスパートとばかりに全員が駆け出して続々とエレベーターに乗り込む。

「早く、早くーっ！」

アスカがエレベーターの横で急かし、最後のまき絵さんが乗り込んだので特大ハンマーをその場に置いて乗り込むが、そこで低い電子音と共に音声が流れる。

『重量ＯＶＥＲデス』

無情にも乙女心に大きなダメージを与える事実を機械音が告げ、ブザーがなり続けている。

近づいてくる石像の声と、エレベータが重量オーバーで動かないと聞いて明日菜達はパニックに陥る。

パニックに陥っている彼女達を尻目に、アスカはスペースは余裕

で空いてるのに重量オーバーになるのはおかしいと思ったので周りを見渡し、定員数や重量を調べるがどこにも書いていない。

「みんな、持っているモノとか服を捨てて！！」

お互いの体重の探りあいになりかけるが、明日菜が片足を出すとブザーが止まる様子を皆に見せる。重いのなら減らせばいいという結論に達して、皆が明日菜の言うように服を脱ごうとする。

「ちょっと待ってください。夕映さん本を貸してください」

「？　はいです」

一つの推測を立て、脱ぎかけている彼女達を静止する。夕映に頼んで本を受け取り、一人でエレベーターから降りて閉じるボタンを押す。

するとブザーはピタリと鳴り止んだので、やはりこのエレベーターには本の窃盗防止に機能がついているのが分かった。重量オーバーと言っているが、この本があるからセンサーか何かに引っ掛かっているのだろう。

なので何事も無かったように扉は閉まり、エレベーターは動き始める。

「な！　ちょアス」

明日菜が上昇しだしたエレベーターの中から必死にボタンを押して止めようとするが、既に動き出したエレベーターが止まるはずもない。皆が慌てた様子で何かを言っているが扉が閉じているため何

も聞こえず、取り合えず手を振って見送る。

後で何か言われるだろうなと少し憂鬱になりながら、エレベーターが戻ってくるようにボタンを押しておく。

彼女達を見送った後に少し考え、壁を壊しながら登ってくる石像を待つ間に特大ハンマーをしまい、ポケットのテープレコーダーを作動させる。学園長には絶対に気付かれないように念入りに魔法を掛けて存在を隠すのも忘れない。

何故こんな事をするのかというと、運が良ければ学園長からこんなことをした言質が取れるかもしれないからだ。

「フォフォフォフォ、追い詰めたぞよ。覚悟するのじゃ！」

「……はぁ～、何時までこんな茶番をするつもりですか学園長？」

壁を削りながら螺旋階段を登ってきた石像が、そう言いながら手を伸ばしてくるのを冷めた目で見つめる。伸ばした手があと少しで届くといった時に、アスカが露骨に溜息をついてそう言うと石像の動きがピタリと止まった。

「何時から気づいておった？」

「最初からです。それで正体を隠しているつもりなら、せめて声ぐらいは変えてください、まぁ、みんなはそれどころじゃなくて気付いてないみたいですけど、魔法を秘匿する気がないのですか？」

「魔法の秘匿に関しては、あの程度で驚くような者はあの中にはお

らんから大丈夫じゃて」

アスカの問いに答えるが、軽い感じで誤魔化すように話す学園長に、心底の失望を覚えた。

「……まあいいです。それで何のためにこんな回りくどいやり方までして、勉強させようとしたんですか？」

「何のことじゃ？」

完全に学園長を信用する気を失くした僕は、こんなことをした理由を学園長に聞くが惚けるだけで答えようとしない。

「惚けないで下さい。僕と兄さんの課題、最下位のクラス解散と留年や小学生へのやり直しの話、そこに読むだけで頭がよくなるという「魔法の本」という都合の良い噂があり、目的地に学園長がいたとなれば関連を疑わないほうがおかしいと思います」

「さあの、わしは全然知らんが」

攻撃の手を緩めずに証拠を挙げるが、それでも認めようとしない学園長に、アスカは青筋がピキピキと額に浮かんでくるのを感じた余りこの手は使いたくはなかったが最終手段を使うしかないようだ。

「なら仕方ないですね。生徒達は図書館島に無断で侵入して、持ち出し禁止の本を盗もうとしたので警察に通報するしかないですね」

「なっ！　待つのじゃ、何でそんな話になる！！」

警察に通報するという言葉に学園長が激昂し、巨体が迫ってくる。

本来立ち入りを禁じられている図書館島地下3階以下に勝手に入った不法侵入と、持ち出し禁止の本を盗みかけた窃盗未遂という立派な犯罪だ。学園長が意図したことでないのであれば、全て責任は彼女達と担任なのに止めなかったネギが負わなければならない。

「そもそも、彼女達は不法侵入に窃盗未遂をし、教師であるネギ先生もそれに同行したんですよ。学園長が意図したことでないのなら全ての責任は自分で負わなければいけません。教育者ならば生徒が間違いを起こしたのなら、それを罰するべきです。今回のことは立派な犯罪です。ならば判断を公的な機関に委ねるのは当然の事です。ああ圧力を掛けてもみ消そうとしても無駄ですよ。そうなったらＰＴＡやマスコミにバラしますから」

「だが、そうすれば君の修行が中止になるのは間違いないのじゃぞ！　それでも構わんのか！」

「そうなったら、そうなったで僕は別に構いません。それよりも生徒が真っ当な道を歩いてくれる事を望みます。事実、怪我人も出ているんです。誰かが責任を取らないといけません」

「ぬうううぅぅぅ……」

アスカの言葉に動きを止め、唸り始めた学園長だが、この段階で学園長が取れる手段は少ない。

この一件が全て学園長が意図した事を認めるか、認めないのかの二択だ。だが、学園長が認めなければアスカは警察に通報し、間違いなく僕達の修行は終わるし、彼女達にも前科がつく。

別にアスカはネギと違って、この修行が終わっても別に構わないからどうとも思わない。

彼女達に前科がつくが、生徒が間違っているのならそれを正すのも教師の仕事だろうと思っている。もしかしたら警察に圧力を掛けてもみ消そうとするかもしれないが、そうなったらＰＴＡ、マスコミへとバラす事を明言しているからその手も使えない。

それは学園長の望むところは無いから、結局認めるしか道は残っていない。

この場でアスカをどうこうするには実力を把握していないので、強攻策に出れない。

「余り時間を掛けると上に行った人たちが戻ってくるので早く決めてください。認めるのか、認めないのか？」

「……認めよう、今回の一件は全てわしが裏から手を回して、彼女達を誘導した。これで良かろう」

「何のために？」

「図書館島の地下で強制合宿させるためじゃ。そうでもしなければ最下位脱出は難しいからの」

「そう、ですか」

急かすアスカの声に、暫しの沈黙の後に学園長は搾り出すような声で認め、吐き捨てるように締めくくった。学園長からしてみれば不本意ではあるだろうが、こちらが生徒を盾にしたので折れるしか

なかったのだ。

それには満足したアスカだが、もうどうでもよくなって学園長を置いて、タイミング良く戻ってきたエレベーターに乗り込む。

「あ、それとこれは返しますよ」

地上のボタンを押したが本を持っているため動かない事を思い出し、持っていた本を石像目掛けて思いっきり投げつける。人の安眠を妨害してくれた意趣返しも忘れない。

「なっ……！　フォ……ッ、フォ～～～～～～！？」

無駄に身体強化を効かせて勢い良く本を石像に投げつけたため、バランスを崩して螺旋階段から落ちていくのが見えて痛快な気分になりながら、ドアは閉じた。

「ふぅ～～～」

地上に向かって上昇していくエレベーターの中で、深い息をつきながらテープレコーダーを止める。

《此方に圧倒的に分があったにせよ、中々上手くいったの》

《まだ全て終わったわけではありませんが、上々の結果だと思います》

《そうだね、あとは朝にでも交渉に行くか》

玉藻とリインフォースの念話を聞き、ほ～と一息ついてどうやっ

て交渉するかを考えていく。さしあたっては彼女達にお仕置きを兼ねて地獄を見せなければならない。

「フフフフフフフフ……」

エレベーターの中で決して起こしてはいけない修羅が生まれ、産声を上げた。彼女たちに明日は来るのか！

ネギ＋明日菜たちが図書館島に侵入した翌日。

朝の教室に委員長あやかの叫びが木霊していた。

「何ですって!?　２－Ａが最下位脱出しないとネギ先生とアスカ先生がクビに～!?ど、どーしてそんな大事な事言わなかったんですの桜子さん!!」

ＨＲ前の他のクラスでは一分一秒が惜しいとばかりに勉強に励む中、２－Ａではちゃんと席に座っている人間すら稀である。

「あぶぶぶっ、だって先生に口止めされてたから～」

「クビだって」

「ネギ坊主が」

「アスカ先生が」

「む……」

「それはかわいそうやな～」

教室中にあやかの詰問の声が響き渡り、桜子の話に耳を傾けていたクラスメイト達が最下位だとクビという事実に騒然となる。あやかに詰め寄られてユサユサと揺すられている桜子はネギに口止めされた事を話すことでようやく離してもらえた。

それぞれが反応を返す中、エヴァンジェリンはアスカがこの地を離れるのは良いことではないので、今回に限り真面目にやるかと考え、茶々丸にもそれを後で伝えるかと思いついた。

茶々丸もアスカが大量に用意したプリントで大分国語などの文系も改善されてきたので、少しは平均も上がるだろうと考えている。

「とにかくみなさん！　テストまでちゃんと勉強して最下位脱出ですわよ。　その辺の普段真面目にやってない方々も」

自他共に認めるネギ贔屓筆頭の委員長は早速、普段真面目にやってないクラスメイトに発破をかけてまわる。

「げ……」

「仕方ないなあ……」

引き気味の千雨は、アスカはいいけどネギは、と少し嫌そうな声を出し、円は渋々気にやる気を出す。

「問題はアスナさん達、５人組（バカレンジャー）ですわね。取り合えずテストに出て頂いて０点さえ取らなければ……」

「そう言えばさあ委員長、バカレンジャーはどうするの？　まだ来てないみたいだけど」

「あれ～ほんとだ。ＨＲ前なのにね」

ちょうどその時、教室のドアが開き何故かドス黒い雰囲気を醸し出しているアスカが入ってきた。

そのアスカの様子に教室にいた全員が固まり、アスカの後に入ってきた真っ白になって憔悴した様子のネギ＋５人組（バカレンジャー）と、６人よりかはまだマシだがかなり憔悴している木乃香、のどか、ハルナ達がまるで強制労働させられている労働者のような感じで教室に入り、何も言う事無く各々の席に座る。

明日菜達がこんな雰囲気になっているのは図書館島から寮に戻った後、勉強道具を持って一室に入れられて勉強をしていたためである。

――――まさか図書館島に侵入できるぐらいの元気があって試験勉強が出来ないなんて言わないですよね？

笑顔なのにブチギレているのが分かるアスカを前に全員が逆らうことの恐ろしさを自覚した。この数ヶ月、ほぼ同棲に近い暮らしをしてきた明日菜は普段温厚なアスカが怒った姿を目にしたことがない。

だから、怒っても苦言程度だと勝手に思っていた。その結果がこ

れである。

ネギは教壇に上がるがアスカの斜め後ろに控え、決して頭を上げようとしない。

殆ど強制に近い形で勉強している彼女達を不憫に思ったネギはアスカに抗議するが、部屋を連れ出され戻ったらこの状態になっていた。何があったかは推して知るべし。

「座れ」

何時も丁寧口調のアスカの高圧的とも言える一言に全員が悪寒を感じ、反論する事無く全速力で自分の席に座る。葬式のように静かな教室の中、粛々とＨＲが始まったが後に神楽坂明日菜はこの後の事をこう語る。

「あの時期ほど生きていた心地がしなかった時はなかった。私達は決して起こしてはいけない修羅を呼び起こしてしまったのよ」

部屋の隅で膝を抱えてガタガタと震える明日菜の言には凄い説得力があったと言う。

期末試験から一週間経ち、運命を決める結果発表の日がやってきた。

試験後、試験結果を表示する巨大スクリーンがある入口ホールに

は多くの生徒達が溢れ返り、落ち着かない雰囲気がそこかしこから感じられる。

だが、そんな中で普段ならテストのことなど気にもとめない筈の２－Ａが尋常ではない様子でスクリーンの前を陣取っていた。

そのただならぬ気配に他所のクラスは近づくことも出来ず、少し距離を取って何事かと見守っている。だが、２－Ａの生徒達はそれらに意識を割く余裕は全く無かった。

彼女達の視線はこの場所に来た当初から何も表示されていないスクリーンを食い入るように見つめており、一切の私語がない。

やがてテストの集計が終わり、アナウンスが流れて緊張の渦が高まっていく。

『２年生の学年平均点は７５．９点でした！　では第二学年のクラス成績を良い順に発表しましょう！』

マイクとスピーカーを通してホール内に響いた声を聞き、そこに集まった生徒達はいよいよかと喉を鳴らす。

『な、なんと第一位は！　万年最下位の二年Ａ組！　平均点は８３．８点です！』

「「「「「「「「「「うおおおおおおぉぉぉぉぉぉぉ～～～～～～」」」」」」」」」」

放送部員の司会の下、栄えある第一位が読み上げられた瞬間、２－Ａが号泣と共に雄叫びを上げ、生徒数人が崩れ落ちる。

「良かった、良かったよ～」

「もう勉強は嫌、あの地獄には戻りたくない……」

「うう……ぐすっ……う……」

万年最下位のクラスがトップに上がった事もだが、この２－Ａの行動に他のクラスの生徒達から奇異の視線が向くが全員が気にすることもなく、思い思いの感情を爆発させる。

中には言葉に成らず、嗚咽を漏らし続ける者もいた。

何故ここまでの状態になったかというと、テスト２日前から始まったアスカ主導の下、寮の一室で行われた地獄の勉強会が原因である。

ＨＲで学園長から唆されたとは言え、バカレンジャー＋αが読むだけで頭が良くなる「魔法の本」を求めて図書館島に入り、遭難したが戻ってこれた事を教えられ、そんなに成績が良くなりたいなら教えてあげようと、アスカの尋常ならざる雰囲気に飲まれ、反論する事無く全員で寮に連れて行かれ、寮の一室に押し込まれた。

その後に一部の生徒が抗議をするが、学園長の許可を持ち出されては黙るしかなかった。

始まった勉強会で食事は運び込まれる物を食べ、トイレ以外では部屋から出ることも出来ず、出れたとしても逃亡した後のことを考えると逃げ出す事も出来ない。

異様なアスカの雰囲気に誰も逆らうことも出来ず、何故か学園長が協力しているので皆に逃げ場は無かった。

勉強会の内容はアスカが用意したプリントをこなし、分からないところをアスカとネギが教えて回る、というごくごく普通のものだが密度が半端ではなかった。

一日目は寝ることも許されず、ひたすらに勉強、勉強で食事時とトイレ以外に休みは無い。しかし、そんな荒行は成績下位者のみで成績上位者はＶＩＰ待遇、真ん中より上の中位者にはある程度の自由が与えられていたことが余計に下位（バカレンジャー＋予備軍）の気持ちを追い込んだという。

テスト前日は下位者も十分に寝る事を許されたが、もし最下位だった場合、学園長公認で全員春休みはないと宣告されていたので誰もが机にかじりついて勉強し、テストを寝不足で全員が血走った目で受けたので、担当した教師が驚いていた。

死ぬほどの勉強の結果としてその苦労は報われたので、歓喜を爆発させていたのだ。尚も、成績発表は続いているが彼女達の耳には入ってなく、ただただ地獄から帰ってこれた事を喜んでいる。

だが、一部の生徒にはそれも許されなかった。

「……神楽坂さん、近衛さん、綾瀬さん、長瀬さん、佐々木さん、古菲さん、宮崎さん、早乙女さん」

突如騒がしいホールに決して大きくはないのに声が響き、２－Ａの生徒どころか他の生徒の言葉すら奪ってしまった。

司会が異様なプレッシャーを浴びて冷や汗を浮かべながらもプロ根性を発揮して成績発表を続ける。群集の最後尾から人々がモーゼの如く割れ、コツコツと靴音をさせながら二人の教師が現れた。アスカとネギである。

アスカの顔には見るものを震撼させる冷たい笑みが浮かび、その後ろには生気のないネギが付き従うように歩いている。

名前を呼ばれた生徒達は心では逃げたいと思いながら体が動かず、8人を残して他の2－Aの生徒達が巻き込まれる事を嫌って傍を離れる。

アスカが辺りにプレッシャーを振りまきながら8人の前で静止するのを、周りは成績発表よりも注視していた。

「さあ、これから『お話』、しますよ」

「「「「「「「「「……はい」」」」」」」」」

お話なのに何故か別の意味に聞こえるアスカの拒否権の無い言葉に、何故かアスカの後ろにいるネギまでもが一緒に返事をした。

そしてアスカが先頭に立って歩き、その後を13階段を登る死刑囚のように死相が出ている9人がついて行った。

自業自得でありアスカの怒りに巻き込まれたとはいえ、後の地獄を想像し残った2－Aの生徒全員が胸で十字を切り、彼等の無事を祈った。

後に2－Aの生徒達だけでなく、事件の概要を知った生徒達は一

つの事を重く胸に誓った。

『どんなことがあっても修羅だけは決して目覚めさせてはならない』

第四十話　　期末試験と少年　４（降臨する修羅）（後書き）

次回の更新は『水曜日』の午前０時に予定しています。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

明日、劇場版を見に行ってきます。

アンケート現在状況‥

『双子の弟は魔法忍者』のまま　十票

『飛鳥物語』　二票

『勇気と希望の物語』　一票

候補・『魔法忍者アスカ』三票　『魔砲忍者？ＡＳＫＡ』『魔法戦士は忍術使い』『魔眼忍者アスカ！』『魔導忍者の胃痛生活』『右手には忍を、左手には魔を』

もう現状維持で確定じゃない？

？魔法戦記アスカ！（原作名を捩っただけですが）

？飛鳥物語（主人公の名前のホニャララが関係してます（アスカ物語でもいいかもしれませんが））

？勇気と希望の物語（マブラブの捩りです）

?:現状の『双子の弟は魔法忍者』のままで

?:もっといいのがある（読者様の希望があれば、というか切望）

期限終了：８月３１日。

第四十一話　　期末試験後の少年（前書き）

劇場版を見に行って気が向いたので投稿しました。しかも予約じゃなくて普通に投稿してしまった。まあ、いっか。

夜勤明けに休まずに見に行くという荒行。

文字数は１０９８４字です。

第四十一話　期末試験後の少年

「……アスカ、あんた」

「……」

エレベーターで地上に戻った後、一人残ったことに文句を言い掛け明日菜だがアスカが無言で発する威圧にピタリと追求の動きを止めた。

今までのネギの尻拭いで溜まりに溜まったストレスと、試験のためのプリント作りで疲れて寝ていたところを駆り出され、それが学園長の仕業とは……。多少はハンマーによる破壊活動で溜飲が下がったとは言え、完全にアスカ堪忍袋の尾が切れていた。

口調も戦闘用に近く、一人称が「俺」になっている。ここまでキレたのは久しぶりの事であった。その時の事を知っている玉藻曰く、暗黒よりもなお暗いオーラを放って周囲を萎縮させ、アスカの言葉に誰も逆らえなくなるらしい。

「寮に戻るぞ」

当の本人なのでよく分からないが、一人で残ったことに対する文句もなく、一言だけで羊飼いの羊の如く、大人しく着いて行く。

「ああ、勉強会をするから道具を持って談話室に来るように」

一言も話す事無く寮に着き、各々の部屋に戻ろうとした皆を呼び止めて、これから勉強会をするので勉強道具を持って談話室に来る

ように伝える。

「え、でも……」

「まさか図書館島に侵入できるぐらいの元気があって試験勉強が出来ないなんて言わないよな？」

「……分かりました」

まだ外は宵闇。これから部屋に帰って寝ようと思っていた面々はその旨を伝えようと反論しかけるも、アスカの冷笑を含んだ言葉を前に口を噤(つぐ)んだ。以前の付き合いからどうしても教師に向けるには馴れ馴れしい口調の明日菜も敬語であった。

本気でアスカが怖く、勉強会に参加するのは強制＆この状態のアスカには絶対服従と以心伝心して勉強道具を取りに部屋に戻った。

「……あ……ぅ……」

鈍いネギは何故皆がアスカの言葉に従うのかが理解できなかったが、ネカネが本気で怒った時以上に逆らい難いものを感じたので皆が心配になって着いてきた。

「ネギ先生、少し野暮用があるのでお願いします」

「あ、うん」

談話室に詰め込んで勉強をさせたが、少しの間だけ監督をネギに任せたアスカはその場を離れた。

そして向かった先は……学園長がいると思われる”学園長室”だ。寮を出て認識阻害を張って文字通りに空を飛んで学園長室に突撃する。

「どうも、学園長」

「う、うむ。こんな夜中にどうしたのかの？」

「まさか、分かっているでしょ？」

ここで無闇にキレていてもしょうがないので、アスカは暗いオーラは収めて学園長と交渉を始めた。

こちらの持ち札は２－Ａの生徒数人が夜中の図書館島に侵入したことと、持ち出し禁止の本を盗もうとしたこと。更にネギが教師であるにも関わらずに同行し止めなかったこと、更に更にそれらが全て学園長が裏で手を回したという四点。

学園長が裏で手を回していたと吐かせたテープレコーダーという証拠を提示し、要求であるテスト前に２－Ａ組出席番号１番相坂さよを存在しないとして除名することを呑ませた。

どこにいるのか、なぜ生徒として登録されているのか。

事前に手を回して戸籍や所在を持ち出して、既に相坂さよという人間が存在しないことを証明したアスカの方が一枚上手であった。

幽霊という論的な証拠を示せない学園長には成す術もなく、更に学園長には要求を飲まない場合は、ネギの修行に一般人を巻き込んだ事を魔法界には報告すると脅したので飲むしかないが。

苦渋の表情を表す学園長もまた、最下位脱出は望むところのはずだから、今回の穴埋めの為に寮での勉強会の許可を貰った。

「ちなみにさっきのは魔法界に報告しないだけです。表の処罰は受けてもらいますから」

こちらの要求が終わったので交渉も終えて帰ろうとした去り際に言ったら学園長が静止の声を掛けて来たがアスカは無視して寮に戻った。

「玉藻」

「うむ、分かっておる」

何か手を打たれる前に学園長には玉藻のアーティファクト「殺生石」で腹下しの呪いを掛けてもらった。この呪いは常時発動するもので不定期に激痛と共に腹が痛み、トイレに駆け込まずにはいられなくなるという恐ろしいものだ。何時間も何とも無い時もあるし、数分単位で発作が来るので安心できないだろうからいい気味だと鼻で笑った。

寮に戻った後は明日菜達の監督に戻り、厳しく教える。

「アスカ！　こんなのやりすぎだよ！！」

途中でネギが厳しすぎるとか文句を言ってきたが談話室の外に連れ出し、元を正せば教師であるネギが図書館島に行くのを止めなかったのが原因だと、現実を直視したのかショックで途中から真っ白になったが懇切丁寧に説明して理解してもらった。理解させた。

理由も分からず連れて行かれたとは言え、結果として引率していた自分に全ての責任はあると言われたら仕方ないだろう。

翌日、先に学校に向かったアスカは新田の下へと向かった。

「新田先生、お話が」

異様な僕の雰囲気に誰もが息を飲む中、朝礼で新田に昨日あったことを報告し、テスト後に職員会議を開いてもらうように頼み承諾を貰った。何で職員会議をテスト後にしてもらったのか、それは学年最下位を脱出させるためだ。

アスカにとって課題などはどうでもいいが、あのクラスの生徒達の弛んだ根性を叩き直さなければならない。

朝礼後に新田に寮で勉強合宿を開く許可を得た。これを得ることができたのは成績が万年最下位だったという事実が大きい。それを改善させるためだと言えば、納得してもらえた。

「学園長、判子を頂きたいのですが」

「う、おぅ、わ、判っ、た」

合宿の許可の書類を作って学園長室に行き、腹を押さえて苦しんでいる学園長に差し出して判子を貰う。あっさりと判子を貰えたのは、ちょうどタイミング良く痛い時だったようで意識が朦朧としていたからだ。

（計画通り）

笑みを浮かべながら職員室に戻って、前日に椎名に強運で選んでもらい作ったプリントを人数分擦り、ネギにも持たせてＨＲの為に教室に向かっているとこれまたタイミング良くバカレンジャー＋αが来てアスカの後ろを歩いている。

バカレンジャー＋α達を連れて教室に行き、ＨＲで彼女達が何をしたのかを話し、授業が終わった後寮に連れて行って談話室に押し込んで勉強させた。

過去数年のテストから出題者の出題傾向を解析して必ず出題するであろう公式・構文を分析し、それを元に創り上げたテスト対策プリントと、麻帆良ＮＯ．１とも言えるラッキーな椎名が勘を元に創り上げた２パターンをやらせた。

基本、アスカとネギが分からないところを教えるが、成績上位で人に教えるのが上手い超、雪広、朝倉、近衛、那波にも交代で手伝ってもらった。葉加瀬も頭はいいのだが如何せん性格的な問題で、人に教えるのが上手いとは言えないので任せなかった。宮崎はそうでもないのだが、恥ずかしがりやなので親友の綾瀬専門で教えている。

ちなみに成績上位者には下位者とは別に明らかな特別待遇をしている。拘束されっぱなしの下位者とは別に自由と明確な差別とも取れる優遇さであった。中位者は自由とはいかなくても、まだプレシャーは少ないので睡眠はちゃんと取れるので下位者の羨望の眼差しが強い。

学園長の許可証を盾に小テストで規定の点に達しない者にはトラウマになりそうなほどのプレッシャーがかかり、特製の疲労回復の

薬をふんだんに使いながら偶に休憩を入れつつ、次の日の夕方まで勉強し続ける。

試験前日に徹夜は流石に不味いと思ったので勉強会を終了して部屋に戻す。

テスト時に半分以上の生徒の目が血走っていたから徹夜した者もいるのかもしれないが、遅刻したわけでもないので何も言わない。

テスト後はネギ達の処罰を決めるために職員会議をしなければいけないので、教師全員がフル稼働で採点を行わなければならなかった（ネギを除く）普通なら7日掛かるものを5日で終わらせたのだから、腱鞘炎になりそうというぐらいに苦労は半端ではなかった。

そして、事が事なので公平な新田主導で女子中等部の教師が全員出席して職員会議が開かれた。

職員会議から二日経ち、成績発表が終わってから一連の騒動を引き起こした9人を、新田としずなと共に進路指導室に呼んだ（高畑は出張の為に出席できず）

「こ……のっ……馬鹿者達がぁぁぁぁぁぁぁっっっ！！！！！」

「「「「「「「「「「ひゃんっ（ひうっ）」」」」」」」」」」

開口一番、怒りに顔を赤黒く染めた新田の凄まじい怒号に全身を叩かれ、生徒たち＋ネギは怯えた子供のように身を竦めた。

肉声とは思えないほどの声量だった。信じられないほどの怒声が、進路指導室の窓をビリビリと震わせる。衝撃波とも言える声が部屋

全体に響き渡った。もしかしたら、窓に罅が入ったんじゃないか？
と思わせるだけの気迫が篭もった大喝だった。

隣りにいたアスカは深く息を吸い込んだ新田を見て咄嗟に耳を押さえたにも係らず、体で受けた衝撃波が骨伝導となり声がはっきりと聞こえた。こうなるのはわかっていたけど予想以上で、衝撃を受けた体は僅かに痺れすら感じた。しずなは予め予測していたのか一人だけ離れて耳を塞いで完全防備していた。

新田は横にいるはずのアスカに向き直り、一人で後始末をさせたことを詫びた。

「すまない、アスカ先生。あなた一人に全部押し付けてしま……どうしました？」

横に立っていたはずのアスカの姿がない。ふとなにげに下を見ると、先ほどまで座っていた椅子から転げ落ち、耳を押さえてひっくり返って痙攣しているアスカの姿に、新田は怪訝そうな視線を向ける。

「……い、いえ、なんでも」

怪訝そうに尋ねる新田に、アスカは呻くように掠れた声で答える。

数メートル離れていた生徒たち＋ネギでさえ、骨まで響くような振動を感じた大音量である。横とはいえ至近距離にいたアスカの衝撃はその比ではなかった。いや、アスカが感じたものは音というよりも衝撃波に近かった。手で塞いでも鼓膜は一瞬で麻痺したが、そんな事とはお構いなしに強烈な波動が身体を貫き、脳を揺さぶった。

常日頃から生徒たちを怒鳴り慣れている怒声の大きさを褒めるべきか、耳が良すぎた所為で呆気なくダウンさせられたアスカの不甲斐なさを嗤うべきか。

脳が崩れそうなほどぐらぐらと視界が揺らぎ、ふらつきながらも何とか立ち上がるアスカ。未だに頭の中ではパーカッションが鳴り響いていたが、生徒に説教する立場にいる人間が弱い姿を見せるわけにはいかないのだが……。

「――――――うっ」

「あらあら」

平静を装っても顔色の悪さは隠しようがなく、完全に予想外のことであったためと三半規管が麻痺している時に無理に立ち上がって所為もある。そしてこの時間を捻出するために削った睡眠時間が最(さい)たる理由で三重の責めが決め手となり、アスカは目を回して倒れこんでしまった。

椅子に座ろうとして出来ずに机に凭(もた)れかかってしまったアスカを、しずなは困ったよう感じに言いながらもにこやかな微笑を浮かべて並べた椅子に寝かせて自身の膝の上に頭を乗っけた。俗に言う膝枕である。

「それで何で「魔法の本」なんて胡散臭い物を捜しに行ったんだ綾瀬？」

ダメージが多すぎたのか、う～ん、う～ん、と唸るアスカに申し訳なさげな視線を向けた新田はまさか自分の大声で一般人には負け知らずのアスカをK・Oした偉業を知らない。

ここで一つの答えが出された。

即ち、『修羅も鬼には勝てない』と。

それはさておき、生徒たちを呼び出した以上は話を続けなければならない。

「後で誤解と分かりましたがテストで最下位だったクラスは解散、その中でも特に点数の悪かった人は小学生からやり直しだと聞きました。私としては、出来のいい参考書の類だとは思っていますが、それでも強力な武器になると思ったのです」

アスカほどのダメージを追ったわけではない生徒たちは、問われた夕映が粛々と応える。

「お前たちも同じ考えか？」

新田は彼女達を見渡しながら「相違ないか」と確認を取る。

アスカから予め事情を聞かされているが伝聞ではなく、本人たちはどうおもっているのかの確認の為である。

ネギ以外の全員が頷いた。

ネギの場合は最下位だとクビになると思っていたので認識の違いがあるのだが、今はあまり関係ないので置いておく。

新田が心底呆れたという風に盛大なため息をついて顔を手で覆うと、夕映や他の生徒達は自分たちの苦労を知らずに、と少しムッと

した顔になった。

が、続く新田の言葉にそれもなくなった。

「成績が万年最下位だからと言ってなぜ他のクラスも巻き込んでクラス替えする必要がある？　他のクラスからすれば２－Ａの所為でクラス替えされたらただの迷惑だろう。小学生からやり直す？　成績が悪いからと言って学年が下がるなんていうことがあり得ないなんて普通に考えれば分かることだろうに」

新田に理路整然と言われれば、そうだと今更気付いたように納得する生徒達を見ると、目先の事に囚われて何も考えていないことが良く分かる。

クラス解散よりも子供の先生二人の解雇の方がよっぽど現実的だが、一ヶ月程度しか経っていないのに解雇なんてしたら生徒を舐めているとしか思えない。

「で、ですがネギ先生やアスカ先生のように子供でも先生をしているではありませんか。学園長ならできるかもしれません」

「そんなことをやったら私と周りが黙っていない。唯でさえ彼らが教師をやっていることに反発があるんだ。そんな事になれば間違いなく学園長の首が飛ぶことは本人も理解しているはず。事実、職員会議では止めたアスカ先生は別にして、生徒を制止できなかったネギ先生を辞めさせるべきだという意見も出ていたのだぞ」

一重（ひとえ）に常識を考えろという新田に夕映がどもりながら、生徒よりも年下であるネギ達が教師をしていることを引き合いに出すが、裏事情を聞かされれば沈黙するしかない。

職員会議には主犯の学園長と出張から大慌てで帰ってきた高畑も居たが、ここにネギとアスカは出席していない。既に新田等の学年主任の先生が事情を聞いており、職員会議には出る必要はないと判断されたからだ。

職員会議には出席していなかったのでそんな意見が出ている事を知らなかったネギは「そ、そんな」と言って落ち込み、なにがあったかまでは推測でしか判断できなかったアスカの驚きようを見れば、それぞれの反応が分かった。

「いいか？　お前たちが今回やったのはどんな言い訳をしようと不法侵入、窃盗未遂っていう立派な犯罪だ。今回は内々で処分されるが、普通なら前科持ちになっていることを自覚しろ。図書館探検部だから不法侵入にならないなんて誤魔化しは効かないぞ。無断で夜の図書館島に入り、持ち出し許可のない本を取ろうとしたのだからな」

「「「「「「「「「「……」」」」」」」」」」

基本的に夜に図書館島に入るのは図書館探検部でも禁止されている。それが守られているかといえばＮＯなのが現状ではあるが、今回のことで制度改訂の話も出て来たのは極自然な話と言えた。

犯罪という言葉に何人かが異論を言おうと口を開いたが、続け新田の言葉に閉じて事の重大差を理解したのか俯いている。

特に落ち込みが激しいのはネギで、さっきのクビにすべきという意見があったというだけでショックなのに、立派な魔法使い（マギステル・マギ）を目指す者として、自分が知らずに犯罪に加担していた事を信じたくはな

いのだろう。

「アスカ先生が最下位脱出させてやりたいからと担当の数学だけじゃなく、他の先生方に頭を下げて全教科のプリントも作っていたのに何をやっている？」

新田は立ち上がり、項垂れた彼女達の前に行って、一人一人目線を合わせる。

「何が「魔法の本」だ！　それを使って良い点数が取れたとしても、カンニングと何が違う！　他のクラスは必死に勉強しているのだぞ、ズルする前に自分で勉強しなさい！！」

「「「「「「「「「「はい、すみませんでした」」」」」」」」」」

「特にネギ先生！　何時までも子供だからといって甘えて許してもらえると思わないでいただきたい！　次はないと思え！！」

「……ウゥ、はい」

新田の大声に肩を竦める生徒や気の弱い宮崎が涙を浮かべ、謝る彼女達を前に新田は深呼吸して落ち着き、さっき座っていた場所に戻る。

「これから各自の処罰を言います。まずはネギ先生」

「……はい」

一番右端にいるネギの名を呼んで返ってきた返事は、さっきの話がショックすぎたのか目に光がなく、返事にも覇気というものが全

く無いし、反応も遅く、声も小鳥のように小さい。

「最下位脱出という課題は達成できましたが、担任として生徒を制止できなかったことは大きいので正式な教員になるのを見送り、春休み中に再度、試験を行います」

「あ、ありがとうございます」

「しかし」

もう修行失敗で故郷に強制送還になるんじゃね？とアスカは思っていたんだけど、やはり子供だという意見が大半を占めたこと、授業自体は慣れてきたのか問題ないので再試験で判断する事になった。

勿論、課題を出すのも、試験をするのも新田である。

「え？」

「春休みの間は私の下で実習、それ以外は基本的に自室で謹慎してもらいます。そして高畑先生が担任に戻り、ネギ先生は源先生補佐、つまり副担任補佐に、アスカ先生は担任補佐になることが決定しました。何か異論はありますか？」

話には出ていないが、アスカは副担任として生徒達の行動を止められなかったので正式採用を断った。止められる立場ではなかったとして処罰はなしという周りの声を固辞したのだ。

ぶっちゃけ教師よりもフリーになりたいというアスカの打算があったわけだが、教師陣と学園長の説得により、最終的には非常勤講師として教師を続けるという結論に落ち着いた。

ネギにこのまま担任を任せるのは不安に思っていた新田たちとしては困った。担任をアスカにやってもらいたかったが非常勤講師に頼むのは流石に無理。

苦肉の策として高畑を担任に戻し、その補佐にアスカを配置して元々、副担任であるしずなの補佐にネギを置いた。高畑は出張が多いので実質的にはアスカが担任と変わらないので言葉遊びと言ってしまえばそれまでだ。

問答無用で故郷に帰されると思っていたのか疑問符を挙げたネギに、処罰を告げる言葉を続けて異論があるかと問うが、クビにされないだけでマシと認識したらしく勢い良く首を振って異論がないことをアピールする。

「次はお前達の処罰だ」

新田がネギから横に鋭い視線を移すとさっきの叱責が響いたのか生徒達はビクリと身を震わせる。

「反省文を原稿用紙１０枚書いて提出。そして児童文学研究会、哲学研究会、漫画研究会、中国武術研究会、占い研究部、美術部、新体操部、さんぽ部の春休み期間の活動停止。そして新学期から1ヶ月間参加停止と今日から3ヶ月間の間、大会の参加を禁止する。いいな？」

「「「

了承の返事を返す中、職員会議で決定された禁止される部や会の中に図書館探検部の名がないことを疑問に思ったのか、ハルナがおずおずと聞いてきた。

「図書館探検部は制度改定ができるまで無期限の活動停止。最低でも顧問が同行しなかった場合等の罰則を決めないといけないから最低3ヶ月、長ければ半年間は活動禁止だ」

今までが放任過ぎたので規制を掛けるに当たって一から議論を重ねないといけないので、恐らくそれぐらいの期間は掛かるのではないかといい加減回復してきたアスカは見ていた。アスカの感知することではないのでどうでもいいが。

これで説教も終わり、解散することになったのだが長時間正座していたため足が痺れて立てずに転げまわる面々に向けて一言。

「無様だな……それと今回の一件に関わった者は大量に春休みの宿題が出るので覚悟しておくように」

ほとんど同席しただけのアスカが去り際に放った一言がショックだったか、カエルの首を捻ったような悲鳴を聞きながら足早に進路指導室を出た。最後まで膝枕をしてもらってしずなに支えられながら言われても情けなさばかりが先に出て格好がつかないことこの上なかったが。

この説教の後に完全回復したアスカはカフェに明日菜を呼び出した。こちらを伺うようにびくびくとしてやってきたが約束通り平均点を取れても騒ぎを起こしたので、今やっているアルバイトを中学生の間は禁止すると伝え、高校生になっても平均点以上の成績を維持しないとバイトは認められないと言うとやはり落ち込んだ。

肩を落として去っていく明日菜と入れ替わりに古菲、楓を呼び出して弟子入りの件はなしと伝える。説教をされた事から予想がついていたのか、残念そうではあるがこの件に納得しているようだ。まあ明日菜と同じく肩を落として揃って去って行ったが。

それとだが学園長にも表裏両方で処罰が与えられている。

まず表は一部の生徒の成績が悪いからと優遇して危険な図書館島地下に誘導した事、裏では一般人を意図的に巻き込んだことが問題になった。結論として処罰は表側で給料3割カットが辞めるまで無期限、裏側は春休みの間の魔力封印が課せられることで落ち着いた。

表の人間を多数巻き込んだのだからオコジョでいいんじゃね？とアスカは思ったが、その場合に本国から後任が来たらどうなるか分からないのでこれで落ち着くことになった。

でも、学園長のオコジョ姿って後頭部が出っ張るのかなと少し気になったのは秘密だ。

これでちゃんと全員に処罰も与えたので大分溜飲を下げたし、多少は八つ当たりも出来たのでストレスもちょっとは解消できた。

あと、ちゃんと終業式の日にクラスへのアフターフォローはしてある。

ＨＲで皆に最下位から脱出させたくて厳しくしたと隠し持っていた目薬を使って嘘泣きし、２－Ａなら必ずトップになれるはずだから食券を２－Ａ一点買いしたと言って、頑張ったご褒美に食券トトカルチョで大当たりしたから全員に叙〇苑食い放題ツアーに招待したらあっさりと感動して騙されてくれた。

その簡単な騙され具合は奢り、食い放題と知って意気揚々と教室から出て行く生徒達を見て初めてこのクラスがバカばっかりで良かったと思った瞬間であった。まあどれだけ食うんだよっていうぐらい喰われて、食券の半分以上を持っていかれたのはそんなことを思った罰だと思って諦めよう。

春休みが始まっても生徒と違って教師には仕事があるが、アスカの立場は非常勤講師で担任補佐。実際には担任みたいなものだとしても仕事が増えるわけでもなく、変わらない日常を過ごしている。ちなみにネギは新田の下、先生の心得を叩き込まれているらしいと伝聞で聞いた。

平日は教師としての仕事をするために学校に行き、定時には帰宅して別荘で研究、開発、修行の毎日。

とある休日、エヴァンジェリンの家に招待されたアスカは自分で入れた紅茶を飲んでいた。

普段なら茶々丸さんが入れてくれるのだが、相坂さよ、いやかつ

ては相坂さよだった少女の引越しのために出ている。肉体に完全に定着した魂に問題がないと判断して外――――様子を見るために暫くは麻帆良で暮らすことになっている。

魂の定着に10余年もの時を使ったので高校生ぐらいの年代なので高校に通うことになっている。戸籍などは全てアスカが非合法な手段を使って取得したので問題は無い（犯罪という突っ込みはナシで）

二人が話しているのは新学期になってから本格的に指導するある計画についてだ。

「しかし、アスカも私に双子の兄を差し出すとは悪だな」

「今まで散々尻拭いをさせられたんです。元々兄弟って感じもしなかったから好きにしてくれって感じですけどね」

「そうだな、クックック」

よほど面白いのか笑い続けているエヴァンジェリンを尻目に、アスカは双子の兄を生贄として差し出したのに罪悪感を全く感じていない自分の心を確かめていた。どうやら完全にとは言わないが、今までネギが起こした騒動の尻拭いをさせられたせいで、元々薄かった家族意識が更に薄まったようだと結論を出した。

だが、真実はそんなものではない。ただ、ネギを見ていると昔の自分を感じさせるから邪魔に思っているだけだ。強烈な自己嫌悪。それこそがアスカがネギを厭(いと)う理由であった。

「……そう言えば京都の方はどうなのだ、2ヶ月前には計画

を掴んだのだろう？」

機嫌悪いような、心底憎い相手を考えているような、そんな顔をしているアスカを見て、気を回したエヴァンジェリンが話題を変えた。

現状のエヴァンジェリンはネギに対する興味をそれほど持っていない。

主観で学校の成績という文字で書き示した資料と実際に会った感覚から、自らの中に在る情報、知識、記憶、それら全てを検索し把握した結果として『才能の在る若者』という評価が妥当であろう。

確かにいまは未熟が目立つが、それの大半は年齢によるものが多い。あの魔力量は１０歳の見習い魔法使いとは思えない。経験を積めばいずれ誰もが羨む、『優れた魔法使い』になるだろう。

しかし、それで終わりだ。十中八九『優れた魔法使い』になっても、そこから先には行けまい。そもそもネギには、才気はあっても特異性が無い。理想的な魔法使いになるのは間違い無いが、『千の魔法使い』のように歴史に名を残すことは無いと確信を持って言える。

それこそ数奇な運命や優秀な師がいればまた別。確信も推測には違わず、これから先、どのように変化し成長していくかは神のみぞ知ると言ったところか。

「そう、ですね。実行犯は分かりましたし、黒幕まで辿り付くのも時間の問題でしょう」

その話題は決してアスカにとって気分のいい物ではない。必然的に渋い顔になってしまう。

「ほぅ、だがその割りには顔色が優れんな。何かあったか？」

「……」

アスカは問いかけの言葉を直ぐ返すことができなかった。

玉藻が探って得た事実は決して優しいものではなかった。知らなかったら良かったとも、知ってよかったとも思えない。ギシッと音を立てて椅子の背凭れに凭れかかり、溜息を一つもらしてエヴァンジェリンに問いの答えを返す。

「結末は誰にとっても優しいものなのかもしれない。だけど僕にとっては胸糞悪いものになる。ただそれだけの話です」

話すアスカの表情が今にも消えてしまいそうなほど透明で、エヴァンジェリンは内容もそうだが思わず引き込まれた。

「……そう言えば、ナギ・スプリングフィールドについて教えてもらえませんか？　なにぶん人伝ばかりなもので」

先程までの透明さが嘘のように通常時と変わらない顔で聞いてきたアスカにエヴァンジェリンは答えてやる。今も脳裏に残っているあの破天荒な男の事を……。

「お前の父親のナギは『サウザンド・マスター』などと呼ばれてい

たが本当は魔法など5～6個しか覚えていなかったらしい。魔力だけは桁外れにあったがな。……何せ私を倒したときなど、落とし穴を使って勝った位だからな。それに――――」

そうやってアスカが先程のことを忘れさせようとしていることに気づくことなく、エヴァンジェリンは過去の思い出に没頭していく。

彼女は最後まで時々、話に相槌をうちながらもサングラスの奥で暗い光を宿したアスカには気づかなかった。

第四十一話　　期末試験後の少年（後書き）

主人公は生徒たちに付き添うためにテストまで殆ど寝ておらず、試験後も査問のために奔走する時間を作るため睡眠時間をかなり削っています。

目標を達成して気が抜けたところに新田の怒声で倒れこんでしまいました。

次回の更新は今日投稿したので一週間後の『日曜日』の午前０時に予定しています。少し開きますがご了承下さい。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

明日、劇場版を見に行ってきます。

アンケート現在状況：

『双子の弟は魔法忍者』のまま　十一票

『飛鳥物語』　二票

『勇気と希望の物語』　一票

候補・『魔法忍者アスカ』四票　『魔砲忍者？ＡＳＫＡ』『魔法戦士は忍術使い』『魔眼忍者アスカ！』『魔導忍者の胃痛生活』『右手には忍を、左手には魔を』『災厄の魔忍アスカ』

もうこれで決まりかな？

?:魔法戦記アスカ！（原作名を捩っただけですが）

?:飛鳥物語（主人公の名前のホニャララが関係してます（アスカ物語でもいいかもしれませんが））

?:勇気と希望の物語（マブラブの捩りです）

?:現状の『双子の弟は魔法忍者』のままで

?:もっといいのがある（読者様の希望があれば、というか切望）

期限終了：８月３１日。

ここから先は劇場版のネタバレを含みます。見たくないという方はここで引き返すことをお奨めします。

これはあくまで筆者の独自の感想です。他の人が見て良かったと思うかもしれませんし、決して貶すものでもありません。そこら辺を承知の上で見ていただけると幸いです。

劇場版の感想ですが……なんと言ったらいいんでしょうか、なにこのご都合主義って感じでした。

魔法世界編で造物主を倒して、麻帆良に戻ってきたのは卒業式前らしく修行失敗じゃね、と思わざるをえない。

しかも、いきなり仮契約期間が終了というよく分からない始末。例えば桜通りの吸血鬼編で契約した明日菜と魔法世界で契約した茶々丸とかの仮契約期限が同じとか意味が分からない。

本契約に選ばれなかったら記憶を消されるとか、魔法世界に行った生徒に矛盾がありすぎるだろうに。

なんの前触れもなく火星＝魔法世界が地球に落ちてきて、解決策が

「ネギが本契約をした魔法」とかなに？　本契約したらマギ・ステルマギになるって明言しているし。

最終的には誰も選ばずに全員を選び、それでも失敗した。そこに全員と本契約したから超が「全員と本契約したからタイムマシンが作動した」とかいってやってきた。

最後は地球と魔法世界が融合して一つに世界になり、魔法が当たり前になった世界っぽい。あと、卒業式にナギとアリカが姿を見せてたっぽい。

特典の０巻もちょっと微妙です。情報が最新巻までの情報しかありません。

ハルナが金持ちなのはヘラスでＢＬ本を作ったからしい。

夏美の「完全なる世界」の夢の内容

刹那の「完全なる世界」の夢の内容が幼少期の木乃香と一緒にいる時か、木乃香が裸エプロンのどっちが。

ココネの「帝国移民計画実験体」は、麻帆良にいる時の体になにか秘密があるらしい。

後、２０１２年初春に劇場版ＤＶＤ付き限定版コミックスが発売決定って書いてあった。

ぶっちゃけ最初から映画にすることなく、限定版コミックスに付属していた方がよかったと思う。同時上映の「ハヤテのごとく」の方がよほど楽しんで見れた。

第四十二話　　竜と少年（前書き）

９月５日がメンテナスということなので一日速めに更新しました。

タイトルのアンケートはダントツで現状維持を望む声が多かったので、タイトルの変更はしません。

今話は完全なオリジナルとなっています。

文字数は１８１０５字とかなり多めです。

第四十二話　竜と少年

春休みのとある休日。

アスカは【次元転送】の魔法を使い、近くの次元世界を訪れていた。

この世界は貴重な鉱石や強い種が多く、偶に採集や実戦も兼ねて訪れていた。人が住んでいない世界なので力の出し惜しみをする必要がないので実戦の場に事欠かない。人の手の入っていないので自然豊かな風景が広がっている。オーロラが空を七色に染め、澄み渡った美しい水面が鏡のように世界を魅せる雄大な自然を前に感動を覚えない人間はいない。あるいは此方が本命かもしれない。

それはともかく。

この世界に訪れた直後に世界が崩壊するんじゃないかと思うほどの轟音（ごうおん）が轟（とどろ）いた。で、即座に現場に向かったわけだが……。

「……でかっ」

アスカの口から出た一言が轟音の発生元の大きさを示していた。

直径で数キロメートルはありそうな形から見て戦艦――――それも底部の武装から見て空を飛ぶ空中戦艦と呼べるタイプのものであろう。それが地面を抉って車が横転したような感じで横っ腹を見せていた。

《これは古代ベルカの空中戦艦です。何故こんなものがここに……

……》

リインフォース曰く、『夜天の書』の初代主が乗っていた古代ベルカの戦艦。当然メンテナンスもするから当時のデータが無事なら紛失してしまった基礎構造を修復できる可能性がある。更に現在作成中のデバイスにも大きな手助けにもなるだろう。

なんでも戦時中に発生した次元断層に乗員は直前に脱出したものの艦は飲み込まれたとか。見た目はボロボロだが致命的な損傷にまでは至っていないらしく、無事な可能性は高い。

しかし、

《確かに御誂(おあつら)え向きじゃが、コレは本当に偶然か？》

玉藻の言う通り、正に理想的で望むものであるが、だからこそ腑に落ちなかった。

あまりにも都合の良すぎる状況に、三人は唖然とする他なかった。なにかがずれた様な違和感、まるで誰かによって操られているような嫌な感覚。

運命。

都合の良すぎる展開を前にアスカの脳裏にそんな言葉が浮かんだ。それも預言者が言っていたことを考えればあながち間違いではないかもしれないのが、考え通りだとすると性質が悪い。

「……考え過ぎ、だよな」

そんな奇妙な感慨に取り付かれ、心中で思っていた考えを打ち切り、開いていた目と口を閉じると、アスカは我知らずはぁと息を吐いた。

良く判らない変化が訪れているのは確かだが、それに囚われ疑心暗鬼になるのはよくない。そして幸運は幸運として受け止め、この偶然を生かすべきだろう――そう考えたアスカの感覚になにかが引っ掛かった。

「！！」

なにか尋常ではない強大な力を放つものが近づいて来るのを感じ取った。

保有している力は間違いなく自分以上、その強大すぎる力はもしかしたら玉藻クラスかもしれない。十数キロ以上も離れているのに感じ取れるほどの莫大な力。隠す気が全くないのは自身を表しているのか。

「勘弁してくれよ……。でも、なにかあるとしたらこの場所は不味いか」

目指している場所は真っ直ぐこの場所。

しかも、向こうからは荒々しい敵意を感じていた。経緯はどうあれ、リインフォースを治す当てが出来たのだから失うわけにもいかない。向こうの思惑が分からない以上、アスカはこの場所で戦うわけにはいかないので、自分から向かってくる者へと近づいていった。

感じ取った場所からおよそ中間点でアスカはそれと対峙した。

「……」

言葉もなく、アスカは呆然とそれを見上げた。

大きい。

頭頂までの高さは、優に数百メートルを越えている。大きな首を支える雄偉な体躯。血のように紅い両眼が、苛烈な光を放っていた。

牙を剥き出しにした口腔から、灼熱の呼気が漏れた。

岩石を削りだしたような、直線と平面だけで構成された鋭角的な体躯。口腔には凶悪な牙が幾重にも並んでいる。そして、無骨な身体の中で、別の生き物のようにのたくる尻尾だけは、生々しく生物的な、野太い蛇のような形をしているのだ。

そして何よりも恐るべきは、そうした外観が分かってしまうということだった

件存在（くだん）――――――ドラゴンとも竜とも呼ばれるものはいまだ遥か遠方にいる。相互の距離は十キロ近い。しかし――――――それでも見える、ぎっしりと並んだ牙が、鱗の一枚一枚が、目の前にいるかのように克明に見て取れるのだ。

しかも大きさが大きくなるという事はこちらに向かって来ている。翼の羽ばたく音が徐々に大きく耳に入り、それに従って周囲の風が徐々に激しく乱れてくる。

単に巨大なだけではない。あまりにも圧倒的な力が、自身の存在

を繊細に意識に刻み込み、曖昧な認識を許さないのだ。

その圧力が、肌でも感じられるようだった。近くまで来た竜は目の前で見ると一層でかい。尻尾まで含めると、体長は優に百メートル以上。

《古竜？　いや、そんなレベルじゃない。力の格が玉藻クラスはあるぞ》

魔法世界では古竜とも呼べるクラス。いや、実物を見たことがないのでもしかしたら眼前の竜はそれをも遥かに凌駕しているかもしれない。

《間違いなく私がいた世界の真竜をも越えているでしょう》

リインフォースが言っているのは管理局のある次元世界の管理外世界における第一種稀少個体。言うなれば現代に生きる神話の怪物である。その強さは正に一騎当千で、最強種たる“竜”の中でも尚最強といわれる“真竜”クラスに匹敵するともいわれ、御伽噺に謡われし怪物級の強さを誇る。魔導師が束になろうと相手にならぬ“竜の王”。

数ある幻想種たちの象徴であり、畏怖である君臨者。

時に魔となり、時に神として現われる万獣の頂点。

一体なぜそれほどの存在がここにいるのか、それは分からない。だが、ともかくもその眼前にいる竜は極めて具体的な滅びそのものであり――――そして、自分はそれに晒されているのだと悟った。単純に感じる力だけでも玉藻クラス。どんな強敵もここまでの力の

持ち主はいなかった。間違いなく空前絶後の敵。

アスカはただ静かに、拳を固めていた。それがどの程度意味のあることなのか、それは分からないとしても、顎を引き、腕を絞り、そして腰を落とす。半身を退いた馴染みの体勢になったのは、具体的な滅びに対峙したことで少しでも何時もの感覚に近づけようとしたのかもしれない。

遥かな頭上を見上げると、こちらを見下ろす眼と眼が合った。どこまでも紅い――――――透明な瞳。

「ガアァァアアア……」

大気が震える。何かを激しく擦り合わせるような音。それが竜の喉の奥から響いて来ると気付いた。そしてそれに気付いた頃には、回避は間に合わなかった。顎が開き、極大の炎が降りかかってきた。

「ちっ！」

それよりも早く危機から体内から出てきた玉藻が両手の親指を口元に持っていて噛み切り、地面に叩きつけた。両手から奇怪な紋様が伸び、地を割って山のような三重の大門が瞬時に聳(そび)え立った。

頑とした構えと開かれた口が全ての攻撃を飲み込まんと待ち受ける防御壁。

【口寄せ・三重羅生門】

羅生門を三重に施す物理防御壁。真っ向から攻撃を受ける一重目の門、威力の減少に特化した二重目の門、圧力を拡散させる三重目

の門という、役割の異なる3つの門により、あらゆる攻撃は術者の元に届く前にその力を失ってしまう。

地獄より来たりし修羅の門は、楯突く者の叫びを嘲笑うかのように軽々と、その力をいなしてしまう……はずだった。

危機感を感じたアスカは左足を引き、腰を落とし、背筋を引き絞って満身に力を漲らせ、障壁という形で解き放つ。世界全体に響き、感じた者の魂を鷲掴みするような炎の塊が玉藻の守りを打ち砕かんと襲い掛かってきた。

眼前に生じた壁と同時に障壁がアスカと玉藻を包むと竜の炎が降りかかるのは同時であった。

「……熱ッ……」

あまりの眩しさに目を瞑った。瞼を通して赤い輝きが映る。全力で障壁を張っていても熱波が越えてきて息が詰まる。同時に竜が吐き出した炎流が空気を引き裂き、完全に受けきったはずのアスカと玉藻を衝撃だけで遥か遠くに吹き飛ばした。

何十メートルも地面を削り、馬鹿になったように耳鳴りのしている耳を抑えながらゆっくりと目を閉じ、開く。瞼から赤い輝きが消えて目を開けると視界に映る何もかもが、ぼやけた輪郭と曖昧な色彩に染まっていた。視界が晴れて見ると、炙られた大気が煮え立ち、地面が赤熱化して泡立っていた。

鉄壁を誇った門は粉々に砕け、アスカが障壁を張っていなければ余波は二人にまで及んでいただろう。門があった場所で割れるように左右に森を抉った後が視界の端にまで及び、それが竜が吐き出し

た炎の威力を物語っていた。

竜の炎が舐めた一帯の地面が溶けて煮立っている。その範囲は目測だけで数キロの広範囲に渡り、あんなものをマトモに受けたら、障壁を張ろうが骨も残らないところだ。

「こんな威力の攻撃を殆どタメ無しで撃ってくるなんて反則だろ……」

周りの被害状況を見て口から零れるのも無理はない。

「威力だけなら【尾獣玉】と同等じゃな」

単純な威力なら玉藻の【尾獣玉】と同等。タメも殆ど必要になしでこれほどの威力を発揮する攻撃をするのが敵ではアスカが反則と嘆くのも仕方ない。

「なにか怒ってらっしゃるような」

「あの轟音じゃからな。もしかしたら寝ていたところを邪魔をされたからか」

《理由はなんにせよ、私達が邪魔みたいです》

竜は低く唸りながらアスカ達へと視線を向けて吼える。防がれたことにご立腹のようで、真紅の瞳に怒りを湛えた竜がアスカ達に向かって羽ばたく。どうもアスカと同じように轟音によって招き寄せられ、大変ご立腹らしい。

風を切り裂きながら竜は一直線に二人に向かって飛翔する。

「くっ！巨体の割りに速いっ！？」

その巨体ゆえに大きく回避行動を取ろうとする二人だが、すれ違いざまに竜が不規則に翼をはためかせて発生させた気流の乱れに捉われ、動きを乱される。

特に【浮遊術】で空中に飛び上がったアスカの姿勢が大きく乱れた。

そこに竜が背後に流れたアスカに向かって尾が薙ぎ払うように振るわれた。

ブレスとは違って風を切り裂き物理的な衝撃を伴う竜の尾の一撃をやり過ごして、間髪要れずに近づいて目の前に聳え立つ脚を、【口寄せ】で出した刀で一刀の下に切断しようと振り切る。

鱗が一枚、弾け飛んだ。が、そこまでしかいかない。

「硬ったぁ！　何で出来ているんだ？！」

硬質の音を響かせて、刀は内部に傷をつけることも叶わず跳ね返された。鱗は恐ろしく硬く、またその下の分厚いゴムのような筋肉が打撃のほとんどを吸収してしまう。斬り付けた手に痺れを覚え、アスカは毒づいた。直上から吹き付けられた炎を、持っている刀を旋回させて防ぐが、熱気が迫って顔を灼く。

先程の一点集中のブレスとは違い、空中から四方へと巻き散らされるのは炎。着弾と同時に炎の形は崩れ、周りの空気を喰らいながら急激に燃焼する。つまり起こるのは爆発。

「っ！」

爆発に押されるように距離を取りながら幾つもの手裏剣を放つ。

飛来する手裏剣を前にしても竜は周囲を一切警戒しておらず、速度も易々と回避されるような速度ではない。完全に直撃コース。だが、手裏剣は竜に届く直前で光の壁のようなものに阻まれ弾かれた。

「シールドみたいなものか……それもかなり強力な奴だな」

接近すればシールドも関係ないが、遠・中距離の攻撃は肉体という高すぎる防御力を持つ竜相手では殆ど効かないことを示している。玉藻の力によるゴリ押しなら突破できるだろうがアスカではかなりの力が必要になるだろう。

守りの時だけ展開するようだから隙を見つければいいが、守勢に回られると突破するのは大変。

「ただでさえ硬そうな奴なのに……面倒臭いことじゃ」

以前から考えていたのか足元でチャクラを回転させて飛ぶ術を身につけた玉藻がおっかなびっくりとした感じで、アスカの隣りへと浮かび上がってきた。

竜は、ゆっくりとその頭をアスカ達へと向ける。

鎧のような鱗に身を包み、鋭い爪と牙を持つ竜。その真紅の瞳は自らの獲物を睥睨するかのように、二人の姿を映し出す。ただそれだけの行為で竜から放たれるプレッシャーが増大したように感じら

れる。

神話の時代より語り継がれる暴力の象徴、王権の裏づけ、自然の化身と言われる竜は伊達ではないということか。

アスカがそのスピードでかく乱し、それに気を取られた相手のバリアを玉藻が叩き割り、そこにアスカが攻撃を当てる戦法であった。アスカが竜の懐へと潜り込み、掌底でドラゴンの顎を突き上げる。

その大きさの対比は、蟻がアフリカ象を殴り飛ばすにも等しい。なかなかシュールな光景だったが、玉藻はその隙を逃さず、仰け反ったドラゴンの首を狙ってクナイを振り上げた。

狙い澄ました一撃が、首に埋まるほど切り裂いた。

「ガアアアアァ！！」

玉藻がクナイを抜くと、傷口から噴水のように鮮血が噴き出す。しかし、それも全体から見れば微々たる物でしかない。

「ふむ、竜とはいえ血は赤いのだな」

「そんなこと言っている場合？」

アスカが暢気な呟きを漏らす玉藻の隣りに着地する。

「グルルルアアアア

法円が描かれていた。

二重の同心円に内接した六芒星が、ゆっくりと回転している。砲声が高まるにつれ、光は一層輝きを増し、表面に稲妻を走らせた。

地表をのたうつ稲妻は無数の雷球を生み、竜の周りに漂わせる。それぞれが細い稲妻でつながれた雷球は、巨竜を戒める雷の檻のように見えた。

「グギャアアア！」

短く鋭い叫びを合図に、雷球が一斉に射出された。狙いも定めず、ただ漠然と前方にばらまかれた雷球の群れは、それ故に予測不可能な軌道を取ってアスカと玉藻を襲う。

二人は音すら置き去りにするようなスピードで、地を、空を奔った。

降り注ぐ雷球の間隙を縫うように、竜に比べれば小さすぎるアスカの身体が空を飛び回り、玉藻の身体が疾走する。

玉藻はスピードを瞬時に殺す急速停止と、慣性の法則を無視した方向転換。そして、停止から一気にトップスピードに乗せる驚異的な加速力が、奇跡とでも言うべき体捌きを可能にした。玉藻は無数の雷球に触れることさえ許さず、アスカは避けられないものを防御障壁で受け流し、虚しくエネルギーを散らしていく。

雷の奔流を潜り抜け、玉藻はアスカよりも早く竜の懐に潜り込んだ。叩きつけられる鉤爪と尻尾を容易くかわし、飛び乗った背中に全体重をかけてクナイを深々と突き刺す。

がぎぃん、とやたらと固そうな音を立て、クナイから【飛燕】で伸ばした切っ先が白銀の鱗を貫いた。

その程度の傷は、竜にしてみれば針に刺されたようなものでしかない。玉藻の狙いはその先にあった。

「――――――ふっ！」

呼気と共に、【飛燕】が切れ味重視の風属性から炎属性に変わり、切っ先から竜の体内に入り込んで点火。

「グウオオオオオオオオオ！」

強靭な鱗も、身体の内側で生じる爆発には無力だった。竜の背中に、人が一人ほど身を収められそうな大穴が開く。

「グルアアアアア！！」

流石に頭に来たのか竜が怒りの咆哮を上げて身を捩った。でたらめに振り回される鉤爪や尻尾を冷静に見切り、玉藻は再び距離を取る。

「……！」

無心に、ただひたすらに無心に、アスカは戦闘を行っていた。戦闘以外に何も考えず、迷わず、戦うことだけに意識を集中する。意思に呼応するように＜力＞が高まり、アスカは閃光と化した。

そのせいだろうか、かつてないほど亜高速で降り注ぐ雷球の軌道

さえ読めるほどに神経が研ぎ澄まされている。

怒涛のごとき攻撃を、最低限の体捌きと防御だけでかわし切った。

更に前へ。更に疾く。

苛烈にそして冷静に、爪を、牙をミリ単位の見切りでかわし、刀を尻尾の付け根に突き刺す。間を置かず、玉藻と同じ要領で切っ先から進入した炎が内部で爆発する。

「グウオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！」

爆発はアスカの何倍も大きい尻尾を抉った。尻尾を波打たせ、巨竜が咆哮する。が、爆発でできた痕は竜の巨体からしてみれば微々たる物しか過ぎない

とても小さな生き物が自身の障害となっていることへの煩わしさだけでなく、自身を滅ぼしえる牙を持つことを理解したのだろう。激痛による憤怒がアスカと玉藻の全身を刺し貫くように叩きつけられる。

刀を片手に、アスカは立ち向かう。＜気＞を込め、刀身が光り輝く。その光が、世界を照らすように光る。アスカはこの世界では、異邦者に過ぎない。戦いを回避できるのに、自分の望みのために選んだのはアスカなのだから。

「悪いがここから先へは行かせない」

そう呟いて、アスカは刀を正眼に構えて謝罪するつもりはないと、傲慢にも宣言する。人のいない世界の大地において王である竜と異

世界の小さな人間の両者の火蓋がここに切って落とされた。

抉れ、陥没した大地に轟音が響き渡る。轟音の原因は巨大な体躯の竜。竜と死闘を繰り広げるのは竜から比べればあまりにも矮小で小さな2つの影。アスカと玉藻の2人だ。

どれだけ戦っていたか、数分か、数時間か、はたまま数日か、アスカは既に時間の感覚がなくなりかけていた。

玉藻はまだ良い。肉体の性能(スペック)が人間とは段違いなので、まだまだ余裕がある。

酷いのはアスカだ。吐いた息が荒くなり、緊張や体の疲労から来る倦怠感は常人なら指一本すら動かすことができない領域に達している。身体強化で疲労を誤魔化してはいるが、いくら無視しようとしても疲れはついて回る。

＜魔力＞、＜気＞、＜チャクラ＞も限界に近い。もう長時間は戦えないだろう。

やけに浮く汗と体の奥底から込み上げてくるような熱にアスカは不快感を感じていた。だがそれに苛立たしいという感情を抱く暇は無い。一瞬の気の緩みさえ自分を死に運んでいきそうだ、とアスカは思っていた

アスカが如何に人間としては上位の力を持っていようとも、人に

は違いない。疲労は着実に蓄積していく。それでもアスカは止まらない。止まる時は死んだ時だと分かっているからだ。

竜自身の攻撃も随分も前からブレスだけでなく、翼や尾による直接打撃や翼の羽ばたきによって起こされる突風など多岐に渡るようになっている。オマケに固定砲台のようにその場で静止するのではなく、竜自身も空中を移動しながら攻撃するスタイルに切り替えてきたのだから始末に終えない。

常に移動は、玉藻はチャクラの身体強化と【瞬身の術】。アスカの場合は【浮遊術】、【虚空瞬動】、【瞬身の術】を併用した超高速移動。理由は単純、走るどころか普通の身体強化だけではアスカでも相手の速度に対処しきれないのだ。

巨体というのは『大男総身に知恵が回りかね』という言葉があるように、愚鈍なイメージがあるが、実の所巨体というのは想像以上に恐ろしい。

巨大な体は当然ながら莫大な質量を秘め、一撃一撃の破壊力を増大させる。当然、耐久力も桁違いで、強烈な一撃による被害を相対的に軽減させる。

そして地味に厄介なのが、巨体は小さな人の身と比べ、僅かな身動きであっても大きな移動距離を取る事が出来る、という事だった。これを現在の戦闘に当てはめてみれば、いくら横に回り込もうとしても容易に相手は修正が可能だ。

傍目にはスローに見えても実際の速度は1．5倍と考えていい。

「これでも大分、削ったんだよな」

改めて竜の体を見れば、体の所々に傷がある。血も所々から流れている。アスカと玉藻の攻撃によって産み出された傷だ。

「……まいったね。これは……キリがない……」

疲労の滲んだ声で、アスカは呻いた。息を弾ませ、身体のどこかしらに軽くない傷を負っている。

手も足も出ない、というわけではなかった。だが、傷をつけても僅かなもので、まるで大地に拳を振るっているようなもので徒労感を与えている。相手があまりにも巨大すぎて、攻撃しても意味がない。意味があるほどの成果につながらない。

勝負にならなかった。拮抗状態さえ持っていけない。一方的に体力を削られ、敗北の時を待つばかり――そんな絶望的な状況だった。

竜の後を追うように地面に点々と血の水たまりが出来ている。にも関わらず、まだ奴は動く。一体、あとどれだけ戦い続ければいいのか。どれだけの傷を与えれば沈むのか。いや、むしろ怒りや苦痛で最初に比べて戦闘力は上がっていると考えても良いだろう。

だが、考えている暇は無い。雑念は集中を阻害する。余計な思考を奥に押し込むようにして蓋をし、自分も玉藻に続こうとしたその時だ。

「グルアウオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！」

放たれた竜の竜の吐息（ドラゴンブレス）を、アスカは見栄も体裁もなく飛び退いて

かわした。

炎（ブレス）が途絶えた瞬間を見計らって玉藻が近づき、口寄せした巨大扇子を振って攻撃を放つ。

【大カマイタチの術】

巨大扇子から生み出される暴風を自在に操り、いくつもの気流をぶつけ合わせて真空状態を作り出す大技で攻撃にも防御にも優れる【カマイタチの術】の上位術。

巨大扇子が生む真空の刃が軌跡を残して竜の口腔に吸い込まれ、口腔内にある炎をことごとく刻む。

一瞬の後、竜の口で制御を失った炎が大爆発を起こし、首を滅茶苦茶振り回して炎を消そうとする。

「ぁぁあああああああああああああああああああっ！！！！！」

玉藻の咆哮が響き渡る。玉藻の持つ、もう何本目かも分からなくなったクナイに過剰にチャクラを注がれた結果、発熱して赤に染まっている。

凝縮されたチャクラの刃。玉藻が勢いよくそれを振り下ろした。竜の体に食い込む光の刃。鱗を突き破り、肉を抉るかのように深く突き刺さる。その瞬間、チャクラの刃が破裂した。

それは竜の体を抉り、血を噴出させる。噴水のように湧き出る血。竜が身を捩らせ悲鳴を上げた。

刃を振り下ろした玉藻がクナイから手を離す。振り抜いた勢いのまま玉藻の手から離れたクナイは地へと向かって落ちていき、溶けて消滅した。許容値を超えたが故のクナイの消滅。玉藻の力に金属が耐えられなかったのだ。

（このままではジリ貧。はっきり言ってこのままでは俺はいても邪魔になるだけだ）

速度を増す。頭に近寄り、雷光が走る剣で斬り付ける。鱗をやすやすと切り裂き、血飛沫が上がる。だが、竜は頓着しない。どれほど深く切り裂いても、自分の巨大な身体には些細な傷だと知っているから。巨大な尾をくねらせ、アスカを払い、打ち砕こうとする。

それをかわすも竜の意識の大部分が自分に向いていないことを悟る。玉藻程の攻撃力のないアスカよりも、より脅威度の高い玉藻に九割の意識が集中しているのだ。

（まずいか……？）

致命的な一撃を蒙っていないが、このままではジリ貧だ。何度か攻撃を加えてはいるが、効いたようには見えない。なにせ巨大すぎる。比喩ではなしに山ぐらいあった。

まだ致命的なものにまでは至っていないが、このままではいずれアスカが真っ先に力尽きてしまうのは明白だろう。それがわかっているからこそ焦りが生じ、隙ができる。

長時間の戦闘で息をついた影響で弱気になり、意識に隙ができた。その一撃は余りにも疾すぎた。風を斬る処ではなく、抉る、もしくは砕くと言った方が正解に近かっただろう。動きの止まったアスカ

を、竜の尾が薙ぎ払った。

――――――脳裏で、なにか乾いたものが砕ける音がした。

数十メートル、いや下手したら数キロ近くも宙を飛び、樹木を砕き、岩に叩きつけられる。弾き飛ばされた勢いのまま、岩壁を割って作ったクレーターの底に埋もれてしまった。

《アスカ、大丈夫ですか?!》

「――ッ!!　い、痛い。ゴホッ」

咄嗟に自分から跳んだことで大部分の威力を軽減したにも関わらず、身体中の何箇所かの骨に罅(ひび)と、その何倍もの打撲等が出来ている。内臓にもかなりのダメージが出ているだろう。

アスカが脱落したことで今は玉藻が独りで相手をしている。

再度、攻撃に加わるためにアスカは歯を食いしばり、痛む体に鞭を入れて体を起こし上げ始めた。身体を起こして治癒呪文を施し、打撲などは我慢できるので骨の罅(ひび)だけを優先的に治す。

竜はアスカに追い討ちをかけない。玉藻が邪魔をしているというのもあるが、自分を倒せるのが玉藻だけであることを直感しているのだ。

「舐められっぱなしでいられるか」

《しかし、アスカの力では……》

竜の脚が地面に叩きつけられる。それだけであまりにも圧倒的な質量が大地に叩きつけられ、大量の岩盤を巻き上げる。直撃していれば、骨も残らず爆散していたであろう鉄槌がたった一人の、竜に比べればちっぽけな玉藻に振るわれたのだと、現場を見ても誰も理解できないだろう。

「なら、今この場で限界を超えてみせる」

文字通り眼中にない。竜に致命傷を与える一撃の威力を持たないアスカだったが成すための方策が存在している。

《まさか！　やる気ですか?!》

「ああ、やってやる」

土壇場で開き直った意識が瞬時に先鋭化していた。

どんな人間であれ、ドラゴンが実在している知ったら打倒したいと誰もが一度は夢見ることである。同じ生物であるはずなのに、どうしてここまで圧倒的な差を持つのか、むしろそこに疑問を抱き、自分こそがついに理不尽を覆してやるのだと、誰もがそう思う。

だが、現実に古竜と引き分けた人間はいても退けた人間は存在しない。

（こんなことをしてなんになる――――）

それは彼の胸中の呟きではあったが――――彼自身の声ではなく、また胸ではなく耳に響いた。

この竜に勝てるはずがない。アスカの力でそのことは疑うべくもない。ドラゴン、竜と呼ばれる超越種は人の手に余るもの。しかも、目の前の竜はそれすらも遥かに凌駕している。敵とするならば間違いなく最悪の相手だった。

そこには言い訳も、容赦も、なにもない。

倒してくれる都合の良い武器もなく、ドラゴンを神として崇める人間すらいる――――この絶対の死に晒されることこそ己の汚れた生を濯ぐ唯一の方法であるとして。運命を受け入れる手段として。

まだほんの一瞬しか経っていない中でそこまで思考が回る。

常に心掛けている＜力＞の制御に更なる集中を加える。幼い頃から練磨し続けた＜力＞の通り道は筋肉の如く鍛えられており、アスカの要求する水準へとすぐさま到達した。

そして更なる高みを目指す。肉体の限界に挑戦するのと同じ意識で＜気＞、＜魔力＞を＜チャクラ＞を緩衝材として身体の中で調和させていく。調和させたエネルギーに更に＜自然エネルギー＞加えて練り上げる。まだ上があるはずだ。自分はこんなものではない。そう信じて＜力＞を限界にまで高めていく。

三つの＜力＞を調合した新たな＜力＞。名付けるなら＜仙力＞と呼べるものを強引に自身の肉体に流し込む。

限界ギリギリまで走り続けたマラソンランナーに短距離走のペースでもう一度はしってこいと言う行為に等しい。心臓は生物としての限界を超える勢いで鼓動し、激しい血流のせいで体中の毛細血管が破裂する。

「くっ！　うぉおおおおおおおおおおおお！」

苦しいどころの話ではなく、意識が吹き飛ばされそうになるどころか身体が爆散しそうなほどの＜力＞の奔出だ。

体外に吐き出されることなく、体内に留めた＜仙力＞の圧力に耐えた。本来ならば自らの＜力＞で最大限にまで拡張されているだろう経路に、更なるエネルギーが流れ込んでいるのだ。限界を強引に超えさせる行為は、痛みとして肉体を蝕む。

「ぐぐっ」

それでも、アスカは痛みに耐えてさらに力を求め、＜仙力＞を練り続ける。今、闘っている竜は間違いなく強敵。単純な力なら玉藻にも匹敵する怪物。より高い確実性を求めて、アスカは＜仙力＞を練り続ける。

中国で出会った仙人は、アスカが考案しながらも中々、実現できないコレ――――――名付けて【仙卦法】――――――の構想を聞いてアドバイスするようにこう言っていた。

『天に軌道があるが如く、人、それぞれに運命ってもんがあるんだ。分かるか、少年？　自然エネルギーってのはな、運命に逆らってちゃ身につかねぇぞ。自然エネルギーをだな、こう、蕎麦みてェにビヨ～ンと伸ばして、ズルズルと食っちまうわけにゃいかねぇんだ。粉骨砕身しなきゃ、けっっっして身になんかつきゃしないんだよ。光陰矢のごとし、少年老いやすく、学成りがたし、だ』

仙人の言葉を借りるなら、いま自分を飲み込もうとしているこの

エネルギーは、運命を担保にして、神様から掠め取っている自然エネルギーだと、アスカは思った。

今まで自分という枠に捉えられていた。

だが、今はこうして自分という人間も、自然の一部のように思える。それぐらいに、疲労とは別に自分の中に活力が満ちている。これが自然の力というものなのだろうか。

この自然の力に自分を埋没させることなく、己自身の力を燃焼させることにぬかりがないように、精神を研ぎ澄まし、感覚を鋭敏にさせる。衝突で起こるエネルギーを受け切る器と、己を信じずに誰を信じろと言うのか。

そう、アスカが憧れた常に自信そのものであったあの人たちのように――――――

「――――――っ」

……雑念が入った。

ぎしり、と、まるで背骨に突き刺さった鉄の棒が、入ってはいけないところにズレていくような感覚。

「っ、ぐ、う――――――！」

ここで呼吸を乱せば、それこそ取り返しがつかない。

反発する＜力＞は肉体を侵食し、体内をズタズタにする。そうなれば終わりだ。体内から破裂してアスカ・スプリングフィールドと

いう人間は死ぬ。

「は――――――ぐ」

胃が蠕動（ぜんどう）する。感覚が逆しまになる。視界は赤く。、破裂した毛細血管で眼球に血が染みこんで、見るもの全てが赤色に反転した。

気温はなにも変わっていないのに、体内から溢れ出すエネルギーによって異様に熱い。

息苦しい。喉が痛い。

「――――、――――――、――――――――――」

噛み砕きかねないほど歯を食い縛り、作業を再開する。

針の山を歩く鬩（せめ）ぎ合いの末、磁石のように同種であるが故に反発する己の内なる＜魔力＞と＜気＞を＜チャクラ＞を緩衝材として＜仙力＞を合成させ、外なる力と掛け合わせていく。

似て非なる二種の力は集約されて揺らぎなき闘志の下に束ねられる。

「――――――っは！　ついに、出来た」

肉体の限界まであと少し、そうなったところでアスカだけの固有技法【仙卦法】が完成した。

体内の熱が急速に冷めていく。体の中で荒れ狂っていた＜力＞が安定し、限界まで絞られていた肺が、貪欲に酸素を求める。

究極技法【咸卦法】は左手に＜魔力＞、右手に＜気＞を溜めて融合（気と魔力の合一）（シュンタクシス・アンティケイメノイン）し、体の内外に纏って強大な力を得る高難度技法。

対して【仙卦法】は体内で＜魔力＞と＜気＞という本来なら相反するエネルギーを、＜チャクラ＞を間に置くことで反発することなく合成していく。もちろん、合成に失敗すれば体内から爆発して即死するので、失敗＝死という危険な技法だ。

＜チャクラ＞を緩衝材とすることで反発させることなく合成するので、総合的なパワーでは【咸卦法】に一歩劣るものの、一度完全に安定させれば術者が解かない限り効果は永続する。とはいっても体内で合成する以上、アスカの鍛えても成熟していない体では負担は大きく長時間使うことは難しい。

今までは合成まではできても、安定させることができずにたった一歩すら動けずに集中し続けないといけなかったので、実戦ではとても使い物にはならなかった。

それを解決したのは新たに得たマルチタスクという技法のお陰だ。

＜魔力＞と＜気＞を＜チャクラ＞を使って合成する思考。外なる力を内に取り込む思考。膨大なる二種の力を束ねる思考。戦闘中では当然の如く敵にも意識を配らなければならない。

「主よ、確かに見せてもらった」

たった一人で古竜の相手をしながら驚きを通り越し、心底からアスカが成し得たことに感嘆して玉藻は呟いた。

アスカが成しえたことは成長とか、そんな次元の話ではなく『進化』だ。

構想自体は玉藻が生まれた世界の【仙術】のことを聞いたときから出来ていた。

【忍術】が内なるエネルギーを利用するのに対して、【仙術】はエネルギーを取り込んで利用する。

【忍術】とは己の内の＜精神エネルギー＞と＜身体エネルギー＞を練りこんだチャクラを利用するもの。この世界風に言い換えるなら＜魔力＞と＜気＞だ。【仙術】は己の内で練りこんだそのチャクラに、外からの＜自然エネルギー＞を更に加え練り込んで、新たな強い＜力＞を作り利用するもの。内なる＜精神エネルギー＞と＜身体エネルギー＞、そして外からの＜自然エネルギー＞、この三つのエネルギーを練りこんだ＜力＞から発動する術や技のことを【仙術】と呼ぶのだ。

確かに【仙術】を会得できれば強くなれるだろう。しかし、その強さは【忍術】を昇華した【仙術】しか使えないことを意味していた。＜仙術エネルギー＞は＜魔力＞と＜気＞の全てを＜チャクラ＞に回して昇華したものだから、必然使えるのは【仙術】だけで【魔法】【気の技術】は使えない。

アスカが求めたものは、【仙術】【魔法】【気の技術】を同時に、または平行して扱うことの出来る技法。＜魔力＞と＜気＞の特性を残しつつ、【仙術】のように大幅にパワーアップさせる。

そこで最初に着目したのが＜魔力＞と＜気＞を反発させて力を得

る【咸卦法】だが、ここで問題が生じた。【咸卦法】は確かに発動しただけで身体強化のみならず、加速、物理防御、魔法防御、鼓舞（精神の高揚）、耐熱、耐冷、耐毒などといった様々な強化・防御効果を発揮する強力な効果の反面、爆発的すぎる力は柔軟性に欠け、魔法などの精細な操作を必要とする技術には向かない。

そういう意味では【居合拳】ほど【咸卦法】に適した技術はないだろう。

苦労に見合うだけの効果はあっても、戦時化のような極限の強さを求められる状況でもない限り、魔法使いなら魔力の制御力（コントロール）と術式の改良をした方が遥かに手っ取り早く、効率が良いのだ。

だからこそ、その効果に反して使い手が少ない。勿論、究極技法と名がついているのだから習得難度は篦棒（べらぼう）に高いのも要因の一つである。

アスカが知る限り、【咸卦法】を使った魔法使いはいない。【咸卦法】状態で魔法を使いたいなら専用の術式が必要で、使う魔法が暴走しないように制御能力も鍛えないといけない。つまり、【咸卦法】用魔法の術式も一から作らねばならず、とてもではないが一代で出来るものではない。

（だが、主にはそれぞれの特性を保ったまま扱うことの出来る技法を考え出した）

アスカは【咸卦法】と【仙術】を組み合わせて改良した全く新しい技法【仙卦法】を編み出した。

便座上、練り上げた力を＜仙力＞と呼んでいるものの、各種の力

の特性を失わず、かつ体内に全ての力を抑えることに成功したことで【仙術】【魔法】【気の技術】を同時、または平行して扱うことが出来る。

理論的には。

＜チャクラ＞を緩衝材にしているとはいえ、体内で擬似的に【咸卦法】を発動させるということは、失敗すれば体内から弾け飛ぶことを意味している。

構想から実に五年あまり。

研鑽を続け、心を鍛え、多くの人と出会い、本物の仙人から助言を貰って、異界の技術を取り入れ、なおも届かぬ領域へと手を伸ばした。玉藻ですら実現は不可能だと判断した絶技を成したのだ。

「全く……何時（いつ）になっても主には驚かされる」

呟くような称賛の声は竜の咆哮に掻き消された。

高まり続けるアスカの＜力＞に脅威を感じ取ったのか、技法の発動のために無防備なアスカの隙を竜が見逃すはずもない。竜が口を開き、喉の奥、真っ赤に煮え滾った溶鉱炉のようなそこから、炎の気配が生まれる。胸の辺りがぽこりと膨らむ。

――――――――シィィィィイイイイイイイ――――――――――

洞窟の奥から吹き出す風のような音。それが見る間に高まり、無数の炎の玉が竜の巨大な顎に満ちる。水晶のように透き通った牙を

噛み合わせると、口の中で幾つもの火花が散った。

火球の一つ一つに、膨大な力を惜しみなく練りこんでいるのだ。あまりの高熱のためだろうか、牙の間から放射　される光は紅とともに白い輝きさえ帯びていた。　解放される前から強烈と分かるその火炎は、なおも渦を巻き集束する。

同時に、胸に満ちた空気を一気に吐き出す。死が満ちる。それが今、狙いを定めていた。

「やらせんぞ――――――！！」

尾獣玉では広範囲に渡る竜に炎に対抗することは出来ない。そう考えた玉藻は即座に【八門遁甲】の【第七・景門】までを一気に開けた。

「グウオオオオオオオオオオオオオオ――――――――――――――ッ！！」

「朝孔雀！！」

数十にも及ぶ上下左右からアスカを狙う炎の塊を、玉藻が高速の正拳で空気摩擦を起こして炎を宿し、空気を叩く衝撃波と炎で打ち抜いていく。

どこまでも速く、どこまでも強く己の拳を打ち込んでいく。日の出の如く明るく、孔雀の尾羽の如く鮮やかに拳から飛び散る炎が空を染める。

原理は【八門遁甲】を【第六・景門】までも開門して、ただでさえ常人よりも遥かに高い身体能力を飛躍的に高め、無数の拳で敵を

打ち抜く体術。摩擦により炎が生じるほどの速度と、食らった者に吹き飛ばす暇(いとま)すら与えぬ連撃が生み出す破壊力は、人とは超越したチャクラ量と身体能力を以って本家の『マイト・ガイ』を遥かに上回る。

拳から飛び散る炎と、竜の吐息(ドラゴンブレス)が正面から激突した。玉藻の拳撃は竜の炎を押し切ったものの、減衰した衝撃波に巨体を退かせる力は無い。

後出しで迎撃した玉藻とは違い、先行だった竜には時間的余裕があり、再度、口の中に炎を溜めていた。

「うおおおおおおおおおっ！！」

それを準備が終えたアスカが迎え撃つ。

アスカが吼えて限界の壁をさらに一歩踏み越え、持っている刀に＜仙力＞を注ぎ込み、技も何もなく、必然か偶然か雷に変換されて竜へと飛来する。

強大な電気エネルギーは、アスカの吼え声さえ飲み込むも、轟音がアスカの意思を受け止めてさらに轟雷を高ぶらせる。荒れ狂う雷は雷獣と化してその牙を打ち立てるべく飛び掛る。

「グルルルルルアウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！」

その雷が自身の脅威となると直感で察した竜は、対抗するように雄叫びを張り上げた。

直後、両者は激突し、轟炎と轟雷がその場を支配して周囲に爆砕の連鎖を生んだ。

それは京都神鳴流の人間が見れば、神鳴流決戦奥義　真・雷光剣と類似していると判断するだろう。それほどに剣先に帯電させて振り下ろし、一瞬で広範囲を破壊するさまは似ていた。が、単純なパワーではそれすらも上回っている。

しかし、それすらも囮。連発で間を空けざるを得ない竜とは違い、アスカの本命はこれから。

それはアスカが擬似真・雷光剣とも言うべきものを放った直後、込められた＜仙力＞に刀が耐え切れずに塵となって消滅した時から始まっていた。

（もっと薄く、鋭くだ）

左掌を上に向けて、その上に右掌を向け合うように重ねる。両掌の間には拳大の空間が開いており、尋常ではないエネルギーが渦巻いていた。

冬休みの時には失敗した【風遁・螺旋手裏剣】を今ここで成そうというのだ。

”風”の”性質変化”はチャクラを二つに分割して擦り合せるイメージが必要になってくる。そして二つのチャクラを互いに薄く研ぐような感じで練り込む。

行程に間違いはない。何度も構想し、実行し慣れた術。

強大な破壊を導き、もし邪魔されずに標的に届いたのならば、如何に竜の巨体といえでも粉砕できることは疑いもない。

術の発動に要する時間の中で、アスカは自制の上に自制を課した。これでは届かないという諦観の衝動を抑えつけ、己に命じ続ける。

――無駄な力はいらない――行程は最小限に――何時もの行程では届かない――効かせることだけを考えろ――最善の完璧を課せ――敵が誰であろうと関係ない――目指すのは威力の極大ではなく細緻の極限――

それらの言葉が全てが一瞬で煌めき、脳裏を刻んでいく。そして全てを一瞬の間に理解した。

一流と呼ばれる者たちとアスカの間に、それほどの差があったはずはない。それでも戦えば圧倒的な結果として現われたのはこの後一歩の踏み込みの差である。

刹那よりも短い間に更に無駄な行程を絞り込み、それでも最大限の効果を発揮するように術を発動する。

「は……！」

口から零れ出たのは吐いた息か叫びか、本人にも判断はつかなかった。

しかし、天空に差し上げた腕の先には十字に光る手裏剣の形をした――――【風遁・螺旋手裏剣】が風を引き裂いて生まれていた。

会心の出来だった。今まで発動したタイミングよりも、格段に速

く、【仙卦法】によって生み出された【風遁・螺旋手裏剣】は、ようやく本来の力を発揮できる喜びに歓喜しているかのように、キィイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイン、と金属的な甲高い音を辺りに響き渡せていた。

「このぉおおおおおおおおおおおーっ！！」

アスカの咆哮と共に【風遁・螺旋手裏剣】は放たれた。

術がシールドを容易く切り裂き、竜の身体に触れた途端、螺旋手裏剣を構成する無数の刃は一斉に全身を貫き、引き裂き、ずたずたにしていた。

【風遁・螺旋手裏剣】は攻撃回数が桁外れな技である。もはや攻撃というより、毒の効果に近い。細胞レベルにダメージを与える極小サイズの攻撃。”風”のチャクラを無数の小さな刀に形態変化させ、身体の細胞を全て攻撃するという術である。攻撃回数というより攻撃濃度で表した方が的確だった。

「グルァアアア

体勢を建て直しながら頭を振り、周囲を確認すると。

（限界を越えても尚――――――届かない敵なのかっ！）

全てを巻き込むように破裂した向こう――――巻き上がった土煙が晴れた先にある竜の両眼を睨み据え、アスカは心中で叫んでいた。

竜はなおも健在だった。体表を覆うかなりの鱗が剥がれ落ち、決して少なくないダメージを負ってはいるように見えるが、五体そのものは無事で戦闘は可能であった。

文字通りの全身全霊を傾けた術だった。もはやアスカに戦う術も力も残っていない。

しかし、それでも全てを出し切っても諦めずに逃れるための術（すべ）を思い描こうとする。

「グルゥ……」

それを思いつくよりも早く、小さく一鳴きした竜は背を向けてフラフラと飛び立っていった。

「なんだんだ……？」

「どうやら我らを下してこの先に行くよりも、ここで退いた方がいいと判断したのだろう」

呆然としたアスカの横に音もなく玉藻が立っていた。

この戦闘中の間に、何時の間にか出来なかったはずの空中浮遊が出来るようになっており、戦闘レベルに十二分に達してしまった竜に並ぶ化け物。

だが、アスカよりかは余裕があれど、その姿には隠しきれない消耗を抱えていた。

玉藻の言う事を考えてみる。

確かに竜は大なり小なり傷を負っていた。それも最後の【風遁・螺旋手裏剣】でかなりのダメージを与えた自負している。

満身創痍とはいかなくても、もはや戦えなかったアスカは別にして玉藻には十分な戦力が残っている。あのまま戦うよりも退いた方が無難と確かに考えたかもしれない。

「まあ、いいか」

理由をあれこれ考えるよりも疲労が先に来た。どんな理由があるにしても結果が全て。万事上手く収まるならそれでＯＫ。

地上に降りて力尽きたように大の字に寝転がる。指一本動かすだけでも億劫で気を抜けば眠ってしまいそうな眠気が襲ってきた。

《本当に呆れる人たちです。まさか撃退してしまうとは……》

「我も驚いておるよ。まさかぶっつけ本番で【仙卦法】を成功させただけに飽き足らず、【風遁・螺旋手裏剣】も完全な物にしてしまうとはな」

撤退を進言したリインフォースも玉藻も呆れというか、驚きというか、色んな感情を持った声が漏れる。

どちらも今までどうやっても成功できなかったものだ。戦闘の、しかも嘗(かつ)てない強敵を前に成してしまうとは、さしもの玉藻としても驚きを隠せない。

「……あぁ……眠……い……」

強敵と戦って生き残ることが出来た安堵、目的を達成できた喜び、新術を完成させた喜悦。

安心したアスカは内と外の声を聞きながら緩やかな睡魔に身を任せた。

第四十二話　竜と少年（後書き）

ハリポッターの映画を見てきました。

原作を先に見ていた分、ストーリーに物足りなさはあるものの映像化はそれを十分に埋めるものがあったと思います。

主人公の苦悩も感じ取れ、これがネギまの元になったとは思えない仕上がりでした。

次回の更新は『水曜日』の午前０時に予定しています。次回からは吸血鬼編となります。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

第四十三話　　闇の福音と原作主人公と少年　１（前書き）

最近どうもテンションが上がらない稲中卓球部です。自分でネーム名を出すことに違和感がバリバリしますな。

それはともかく、満を持してというか吸血鬼編です。

文字数は１０４２８字です。

どうぞ！！

第四十三話　闇の福音と原作主人公と少年　1

春休みも終わって新学期になり、始業式とか諸々あったわけだがこれといって語るべき事もないので省く。

アスカ・スプリングフィールドは引き続き2－A改め3－Aの担任補佐を受け持つ事となり、春休み中の試験で無事に正式な教員へと就任できた同じく双子の兄ネギ・スプリングフィールドも3－Aの副担任補佐として就任し、共に教壇へと上がっている。

補佐だけ、子供だけ、にクラス運営を任せる学園長の頭の中を覗きたい気分である。

「3年！」「A組！！」『アスカ先生～っ！　あ～～んど　ネギ先生ーっ！』

鳴滝姉妹が昨日の夕方に再放送していた金○先生のマネをし、新学期最初の日と言う事もあってか異常な位にテンションの高すぎる生徒達が追従する。

学年が上がってもクラス替えは一切行われず、登校していなかった生徒が一人だけ突然の転校ということに騒ぎはあったものの、寄せ書きを書いたぐらいか。使用する教室も全く同じなので教室のプレートが取り替えられるだけだが、それでもお祭りのように盛り上がれるA組の生徒達のバイタリティには驚かされるというか、呆れるというか。

数人、というかクラスの後方にツッコミを心でしている千雨と夕映が呆れ返っているが、アスカ以外に他に気づいた人はいないよう

だ。

「このクラスの担任補佐になったアスカ・スプリングフィールドです。宜しくお願いします。それと他のクラスの迷惑になりますからもう少し静かにするように」

『はーい、よろしくお願いします！』

騒いで新田に怒られるのは事実上の担任である自身なので挨拶の後に注意を促すと、生徒達も了承してくれたようで声を小さくして返事が返って来る。

テスト中の出来事が功をそうしたのか、アスカに対してはこういう注意に関しては素直に聞き入れてくれるようになったのは僥倖であった。いや、自分の不注意とかミスで怒られるのはまだいいが、暴走した生徒のせいで怒られるのは本音としては嫌だった。

教室を見渡して欠席がいないことを確認し、左斜め後ろに立っているネギを促して下がり、場所を明け渡す。

「えと……改めまして、3年A組副担任補佐になりましたネギ・スプリングフィールドです。よろしくお願いします」

はーい、よろしくー、などの声が返ってくるが、それが教師と言うよりも友達のような感覚で投げかけられた言葉だと思うのはアスカの思い込みであろうか。

みんながそんなネギをニコニコと嬉しそうに笑っている中、特にあやかなどは余程ネギが続けてこのクラスに関わるのが嬉しいのかハートを撒き散らしている。学期末の不祥事を思い起こせば辞めさ

せられる可能性もあっただけに仕方がないかもしれない。

ふと、アスカは自身に向けてではないが強い視線を感じたので、その視線の先を辿るとエヴァンジェリンがネギをジッと見つめていた。

アスカよりかなり遅まきながらその視線に気付いたネギは、挨拶が終わったので場所を交代しながら焦ったように予備の名簿を見ている。本来なら担任の分の名簿しかないのだが、まだクラス全員と交流がないので予備の名簿が与えられたのだ。

エヴァンジェリンはネギと目が合ったらすぐに逸らしたが、一瞬だけアスカを見てニヤリと笑ったことから十分に自分を印象付けることには成功したようだ。

「連絡事項は、既に春休みの間に通達してありますが、相坂さよさんが病気療養の為に転校しました。それとこの後は身体測定があるので順番が来るまで静かに待っていてください」

さよの件は春休みの間に各自に連絡してあるので、和美に何処に転校したのかを聞かれたぐらいで目立った混乱などはない。クラス全員で千羽鶴を作って来て渡された時にはどうしようかと困ったが、学園長に全て丸投げしておいた。

腹痛で苦しんでいて仕事がかなり立て込んでいるようだが、アスカの知ったことではない。自業自得だからだ。

それはさて置き、この後に新年度最初のＨＲは身体検査があり、男である二人は教室から出て生徒達に準備させなければならないのだがまだ順番が来ない。

まだかなと考えていたところでガラリと戸を開けてしずなが来た。

「アスカ先生、ネギ先生。今日は身体測定ですよ。３－Ａのみんなもすぐに準備してくださいね」

「はい、分かりました源先生。それでは皆さん私達が出た後に準備を始めてください……ネギ先生、この後は身体測定ですよ？」

「……あ、そうでした！ここでですか？　で、では皆さん、身体測定ですので、えとっあのっ、今すぐ脱いで準備してください！」

アスカがパタンと名簿を閉じてしずなに了承の言葉を返し、生徒達に出た後に準備を始めるように促して教壇を下りたところで、ネギが名簿を見ていて動いていないのに気付き、声を掛けると一連の行動を聞いていなかったのか慌てて名簿を閉じて頓珍漢な事を言い出した。

朝の朝礼で身体測定の事は伝えられたはずなのだけど、新学期に心浮かれて聞いてなかったのだろうか。

《自分がまだ教室にいるのに今すぐ脱げとは本性が現れておるな》

《案外、緊張して忘れているだけかもしれませんが》

直ぐにネギも生徒達の反応を見て、自分がどうしようもない発言をしたと気づいたが後の祭りである。アスカはネギが「今すぐ脱いで準備してください」発言をした瞬間には、不味いと思って先に教室を出ている。そつのない嫌味な男である。

「「「ネギ先生のエッチ～～～っ！！」」」

「うわーん、間違えましたー！！」

ノリが良すぎる女の子の楽しげな嬌声を浴びつつ、ネギがスタコラサッサと教室の外に出て来た。

そこでネギは先に教室を出て壁に寄りかかっていたアスカに気付いて、恨めし気に見るも自分が失言をした自覚があるので何も言えなかった。自分に非があるのに関係のないアスカに当たるほど理解のないネギではない。

「あ、ネギ先生」

それでもねちっこくアスカをずっと恨めしそうに見ていたネギだが、しずなに話しかけられてそちらを向く。

「昨日の夜に桜通りで気を失っていた生徒がいて今は保健室で休んでいるんですが、私は身体測定の監督をしなければならないので、申し訳有りませんが何時、目覚めるか分からないので私の代わりに生徒を見て頂けますか？」

「桜通りで……はい、分かりました。しずな先生！」

しずなは身体測定の監督、アスカは曲がりなりにも担任補佐として全体から目を離すわけにはいかない。そういう経緯で残ったのがネギなのだが、よほど頼られたことが嬉しいのか先ほどの恨めし気な雰囲気もなくなり、スキップでもしそうなほど嬉しそうに保健室に向かった。

しずなも身体測定の監督に行き、廊下に残ったのはアスカ一人となった。

《利用されていることにも気付かないとは哀れな》

《仕方あるまい。何も知らない舞台の役者はただの道化でしかないのじゃから》

ネギを誘導するためだけに、アスカは数ヶ月前から桜通りの吸血鬼の噂を振りまいて前から事件があったと嘘の情報を流して舞台を整えた。

双子の弟に踊らされ、幾人もの思惑が張り巡らされた舞台の上の駒でしかないネギを道化と言わずして果たして何と呼ぶべきか。

哀れだと思う感情はあるが本人に教える気も、どうにかしようという意思も現状では湧かない。なにもしなければ訪れる災禍をコントロールしているだけありがたいと思え、そんな上から目線の感情をアスカは本人は自覚のないまま持っていた。

それと先程、しずなが桜通りで生徒が気を失っていたと言っていたが真実は全く異なり、桜通りで気を失った訳ではなく、そもそも大前提である生徒ですらない。

エヴァンジェリンは適当にクラスの生徒を狙えばいいと言ったが、アスカがそれを許さなかった。

もしクラスメイトを襲った場合、人道的な問題と後々に問題になりそうな予感がビンビンしたので却下。

クラスの生徒を巻き込むことが学園側の望みである可能性もあるし、こちら側でそこら辺を調整できる以上は無駄に犠牲者を出す必要もない。

エヴァンジェリンには学園側につけ込まれる理由を作る必要はない等と延々と説得し、納得してもらった。その分だけアスカに皺寄せが来たが受け入れるしかない。

犠牲者を出さないためにさよに新しい肉体を与える過程で生まれた、一見すれば普通の人間だと錯覚するほどの精巧なホムンクルスを代わりとした。

これはエヴァンジェリンの協力の下、人工精霊を肉体に入れて一時的に生きているように偽装し、吸血鬼の仕業と分かるように吸血の痕と魔法の残滓をつけただけに過ぎないが、役割としては十分のはずだ。

ホムンクルスを今日の朝方に発見した広域指導員が保健室に運び、しずな経由でネギに情報を渡して誘導している。それが全て仕組まれたことだと知らないままに、首にある噛まれた痕から魔力の残滓を感じ、桜通りで昏睡していたとなれば正義感の強いネギは誰にも頼る事無く自分で調べようとするだろう。

情報を巧みに操って数ヶ月でネギの大まかな性格を把握して利用するアスカの手腕に恐れにも似た感情を抱いたのも無理からぬものがあった。現代において個々人の持つ力というのはそれほど重要視されない。最も重要視されるのは情報であり、人を動かす術である。

確かに魔法使いという人種は超越している。しかし、一個人では

なにごとにも限界があり、それは真祖の吸血鬼であるエヴァンジェリンにも該当している。だからこそ、魔法世界にも集団が集まり、国となったのだから。

今夜、ネギは６００年を生きた最強クラスの魔法使いと相対する事になる。

現在は封印されていて全力を出せないとは言え、優に６００年を越える経験は簡単に才能で覆せるものではない。

アスカが警戒していたから全く吸血していないとは言え、この数ヶ月の間にアスカが色んな契約の対価として何回か血を与えているので、全開時に遥か及ばなくてもそこそこの力は発揮できるようになっている。本人は病気や花粉に掛かる事がないことを喜んでいたが、万全の状態とは言えなくても魔法薬を使わずに魔法を行使できる。

例え次代の英雄と望まれるほどの才能があるネギでも、現状の実力が全く伴っていない状態では抗するのは難しい。

学園側がどう思っているかは分からないが、ネギが勝っても負けても何かしら得るものがあるだろうし、エヴァンジェリンにも１５年分の鬱憤を晴らすいい機会である。

天才肌であるネギ・スプリングフィールドは今までろくに挫折を知らない、とアスカは思っている。今回の一件では命と身の保障がされているので、最強クラスの魔法使いとの実力の差を知ることはいいことだし、本人は全く預かり知らない事だが挫折を知るにはいい機会だと考えている。

今のネギはアスカから見るとあまりにも温く甘い。

普通ならそれでもいいのだが、兄弟達の体に流れる血と力、そして親の世代からの因縁が安穏と日々を過ごすことを許さない。例えば六年前の事件がその最たる例であり、父親の後を追うネギは遅かれ早かれ否応なしに闘争の渦の中に自分から飛び込んでいく事になるのは間違いない。下手な思い上がりなど、ただの慢心にしか成り得ないのに。

考えても仕方ないとそこで思考を止め、生徒達が着替え終わるのを待つ間、窓の外から見える空を眺め続けた。

そこにネギに向けた隠れた悪意があるとは本人には自覚はなかった。

雲1つ存在しない綺麗な満月の夜、最後のHRで桜通りで生徒が気絶していたので噂もあるからとアスカは念のために早く帰るように伝えた。そして仕事を終えた後に一度帰宅してから私服に着替えてもう一度外に出る。

目的の桜通りに着き、時間を掛けて通りをゆっくりと歩く。

吹き抜ける風は満開に咲き誇る桜を浚い、自然の花吹雪となってゆったりと地へと落ちる風景は幻想的とも言えた。

「……」

その風景に見蕩れながらも急ぐわけでもなく、頼りない街灯と月明かりに照らされた通りを風によって揺れる桜の木の音を聞きながら歩く。途中で会った人達には、実際の目的ではないが桜通りの噂があったから見回りだと言ってあるので不審に思われることは無い。

そんな中で突然、不自然に風が止み、それを不審に感じたように立ち止まって何かを感じたように装い振り返った。

視線の先には、通りの両端に等間隔に置かれた街灯の上にいる黒い人影。

「今宵は綺麗な満月だな」

「……そうですね」

黒いマントに山高帽を被り、帽子から溢れる金色の長い髪が煌々と照らす月明かりを受けたエヴァンジェリンさんの姿はとても幻想的で綺麗だと誰にも感じさせるものがあった。

「アスカ・スプリングフィールド……悪いが少しだけその血を分けてもらうよ。リク・ラク・ラ・ラック・ライラック　氷の精霊17頭!!　集い来りて敵を切り裂け　魔法の射手・連弾・氷の17矢!!」

「な、ちぃ!」

エヴァンジェリンはマントをたなびかせながら飛び上がり、事前の打ち合せ通りに魔法を唱えたのでアスカはそれに驚いた反応を示し、手を前に伸ばして全力で障壁を張った――――ように見せか

けて、かなり手を抜いた障壁を張った。

わざと手加減した理由は学園長が監視している場合に欺くのと、桜通りの吸血鬼がエヴァンジェリンだとネギに分からせるためだ。

本気を出す必然性もなく、あっさりと負けて実力を誤認してくれればなにかと都合がよい。更に既に負けている事を知っていればネギもアスカ頼ってはこないだろうという一挙両得の作戦も兼ねている。

当たり前だがエヴァンジェリンが放った魔法の射手に手抜きの障壁が耐えられる筈もなく、着弾して簡単に突破された。

「くぅ、ガッ！」

「……封印された私にこれほどあっさりと負けるとは、これがサウザンドマスターの息子とは興醒めだ」

辛うじて手抜きの障壁で全弾防ぐも発生した爆風に吹き飛ばされて地面に叩き付けられ、その様子を見ていたエヴァンジェリンは心底呆れたという口調で地上に着地し、仰向けで気絶した振りしているアスカへと近づいていく。

アスカは気絶した振りをしているが、気配でネギが後方から近づいて来るのが見えた。

「待てーっ！」

「むっ、主賓が来たか」

アスカまで後一歩という距離まで来た時に聞こえた舞台の主役の声に、エヴァンジェリンは動きを止めてそちらを向く。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル」

アスカは気絶した振りをしながら薄目を開けて見ると、箒に乗って空を駆けるネギは杖から足を大地へと投げ出しながら警告も一切なしに詠唱を始めた。

エヴァンジェリンが予め周囲に魔力隠蔽の結界を張ってあったので、魔法同士が炸裂した音だけで魔力を感知していない筈なのに迷い無く魔法を使うネギに秘匿は何なんだと言いたくなったアスカである。

幾ら保健室で魔法の痕跡を見つけて、アスカが倒れ伏している現場と、この状況で疑わしき人がいたからといってそれが裏と何の関係のない一般人の変質者だったらどうするつもりなのかと聞いてみたかった。

しかも、救出すべき対象が敵のすぐそばに居る事などお構いなしに戦闘を開始するとはとても信じられない。戦闘では素人なのだから仕方ないかと思っても巻き込まれる側からしたら堪ったものではない。

「風の精霊１１人　縛鎖となりて　敵を捕まえろ　魔法の射手・戒めの風矢！！」

「氷楯……」

ネギから放たれた幾重もの捕縛系の風の矢は、複数の軌道を描い

てエヴァンジェリンに接近するが、彼女は目の前に大きな氷の盾を作ってネギの魔法を完全に全て弾き返し、盛大な効果音と衝撃波による煙が舞った。

「僕の呪文を全部跳ね返した!?　やっぱり犯人は魔法使い……!?」

ネギは道端に倒れこんでいるアスカが噛まれていたり怪我が無い事を確認したらしく、目の前に立つ彼女の正体に驚愕を露にしていた。

「なるほど。さすがに凄まじい魔力だな」

先の魔法の余波によって発生した風がエヴァンジェリンの顔を覆い隠していた三角帽子を吹き飛ばし、満月の光に晒される素顔。

「えっ……き、君はうちのクラスの……エ……エヴァンジェリンさん!?」

エヴァンジェリンの顔は、朝にしっかりとネギに印象付けられているので見間違えようもない。

「フフ……新学期に入ったことだし改めて歓迎のご挨拶といこうか、先生……いや、ネギ・スプリングフィールド」

魔法使いが関わっているのは予想できても、流石に自分のクラスの生徒が犯人だったことは予想していなかったネギは物凄く驚いていた。

エヴァンジェリンは驚いているネギに構わず一旦言葉を切り、挑

発的な笑みを浮かべながら話しを続ける。

「１０才にしてこの力……あっけなくやられた弟と違って、さすがに奴の息子だけあるな」

「えっ？」

三流とはいえ、腐っても魔法使いアスカの血を吸ったことで半年前に想定していた魔力を上回っている。それを上回って指先とは言っても傷つけたのは、ネギの親譲りの莫大な魔力と春休み中に研鑽した魔力コントロールの成果だろう。

予想していたよりも面白い成果にエヴァンジェリンはニヤリと笑り、黒いマントを風にたなびかせながらゆっくりと倒れたままのアスカとネギの元へとゆっくりと歩み寄って来る。

ネギは今の言葉を聞いて一瞬、傍目にも良く分かるほど動きを止めた。サウザンドマスターという彼が追い求めて止まない存在を出されれば、そうなってしまうのは仕方ないと言えた。

「な……何者なんですかあなたはっ！　僕と同じ魔法使いのくせに何故こんな事を！？」

「奴の息子」という気になるキーワードはあれど、それを問いただすのは後回しにしていきなり見当違いの事を問いだした。

半ば睨み付けるようにして本人は至って真面目に言っているが、アスカにはその言葉に込められた想いは全て魔法学校で教えられた事をただ言っているだけの薄っぺらいものにしか聞こえなかった。しかし、それも仕方ないかとも思い至った。

ネギの世界は言い方は悪いが狭い。アスカの記憶にある限りどこかに旅行に行った記憶はなく、恐らく海外に出たのは卒業課題の時が始めて。ほとんど魔法学校が世界の全てを占めていたといっても過言ではなく、世界を旅したアスカが薄っぺらいと感じてしまうのも無理はなかった。

エヴァンジェリンもアスカと同じ事を思って一瞬だけ失望の表情を浮かべるが、酸いも甘いも知ったアスカが異常なだけだと自覚して、自身の役割を遂行するために演技を続け、１５年の鬱憤を晴らすために楽しむ事にした。

「この世には……いい魔法使いと、悪い魔法使いがいるんだよ。　ネギ先生」

信じられないと目を見開いて狼狽するネギの有様を、エヴァンジェリンは余裕気な笑みを浮かべて楽しんでいる。そしてネギが二の句を口にする前に、エヴァンジェリンが先に魔法を繰り出す。

「氷結・武装解除！！」

「うあっ！」

エヴァンジェリンの手加減された魔法をネギは咄嗟に左手を前に突き出して抵抗（レジスト）するも、肩辺りまでの服は凍って砕け散り、その衝撃でバランスを大きく崩して慌てて杖にしがみついた。

砕け散った氷の破片が散り散りとなってアスカの頬を叩くが、気付かれないほど可能な限り薄い障壁を張っているので当たっても何とも無い。

ネギにダメージはないが、それは彼女がギリギリ抵抗（レジスト）できるように手加減したためだ。

ネギは正常な思考に戻った事で後ろにいる弟の事を思い出したようで慌てて振り返り、何とも無い事に安堵して前に向き直る。

「レジストしたか、やはりな……」

「何や、今の音!?」

「あっ、ネギ!」

誰にとってタイミングが悪いというべきか、戦闘の音を聞きつけてやってきたのは明日菜と木乃香。

「フフッ、人が来たか。アスカは口ほどにもないと思っていたところだ、サウザンドマスターの手がかりを得たければ追ってくるがいい」

二人の気配を察して、エヴァンジェリンは身を翻してネギの興味を自分に向ける。

急な話の展開に反応が遅れたネギだが案の定、その話題に引き寄せられて呆然とした瞳でエヴァンジェリンを見ている。

元より実戦経験どころか同年代の子供より人生経験が乏しいネギでは、これが策であると気づく事は難しい。何より今は己が追い求め続けているサウザンドマスターの情報を持っているとエヴァンジェリンが言ってしまったことで、唯でさえ急展開によって狭まって

いる視界が、この一連の事全てが策であると気づく事もなく唯一人に固定された。

「あんた、それっ！」

氷結・武装解除の余波で発生した煙によってアスカのことが見えていなかった二人。煙が意味をなさない距離に来た彼女達の目に映るのは地面に横たわるアスカと、呆然とエヴァンジェリンの方向を見て動かない片腕の袖が凍結して砕け散り、なくなったネギ。

「あう！？」

一連の流れを知らない者達からしてみれば、流れている噂から考えてネギ＝加害者（吸血鬼）、アスカ＝被害者（血を吸われた）と見えるだろう。

「ネ、ネギ君が吸血鬼やったんか～～～！！？」

「ち、違います！　誤解です！」

子供でも簡単な結論に至った木乃香の言葉にネギは必死に手を振って否定する。調査に来た張本人が犯人を目の前にして誤解を受けては堪らない。

あたふたとする、３人をよそ目に先程の衝撃波による煙に紛れてエヴァンジェリンは薄く笑いながら走って去って行った。

「え……今のは……？」

煙に紛れて去って行くエヴンジェリンが見えたのか、明日菜が疑

問の声を上げた。

「あっ、待て！　アスナさん、このかさん、アスカを頼みます。身体に別状はありませんから。僕はこれから事件の犯人を追いますので先に帰っててください！」

ネギはエヴァンジェリンに制止の声を上げるが当然止まる訳も無く、父への手がかりを見失わないために倒れて意識を失ったまま（のように見せているだけ）のアスカの事を二人に任せ、それが死地とも知らずに彼女の後を慌てて追いかけようとする。

「え、ちょっとネギ君……！！」

「じゃあ！」

犯人は分かっているのだから追わずに学園長にでも連絡して任せればいいのだが、ネギは魔法の秘匿よりも犯人を追う事を優先させたようだった。

ネギはそれだけを言うと、静止する木乃香の呼び止める声も聞かずに身体補助魔法と風の魔法を使って、通常では絶対にあり得ない自動車並の速度で、あっという間に三人の前から走り去って行った。

「ネギく……うわっ、はや！？」

幾ら求めて止まない父親の事を出されたとはいえ、この場合ではこれは最悪手に近い。事実、秘匿を無視して魔法を使うから、その余りの脚の速さに裏の事は全く知らない木乃香は驚愕していた。

「ちょっと、ネギ！　木乃香、私も行って来るからアスカをお願い

ね！　犯人をとっちめて来る！！」

「明日菜！？」

明日菜も静止しようと声を掛けたが、結局物凄いスピードで走り去っていくネギを追いかけて行ってしまい、流石にアスカを倒したような相手を一人で行かせるわけには行かず、こちらも木乃香が止める暇もなく行ってしまった。

それを薄目を開けて見届けたアスカがムクリと起き上がる。

「……止める暇もなく、行ってしまいましたね」

「あ、アスカ君大丈夫なん？」

「大丈夫です。初めから起きてましたから」

言いながらズボンの尻の辺りと肘についた砂を叩きながら払って立ち上がり、服を触ってどこも破れていないことを確認する。その様子を木乃香が驚くも、常識外な強さを知っているので驚きすぎるということはなかった。

アスカが二人の走っていった方向を見ると、彼の目をしても既に目では見えないくらい遠くにまで行ってしまったようだ。

「一体、何があったん？」

木乃香としてはそれだけが気になった。不良十人に囲まれても平気なアスカを倒せる人間などそういるとは思えなかったからだ。

「噂の吸血鬼に会ったんですけど、出会い頭に閃光弾を使われたんで他にも何か持っているかもしれないから、確実に捕まえるために気絶した振りをしたんですけど、後少しというところでネギ先生が来て後は見ての通りです。まあ、実際には服装から見て他には持っていなかったので撃退用に用意したスタンガンもいらなかったみたいですけど」

アスカは、この言い訳のために袖に仕込んでおいたスタンガンを取り出してスイッチを入れる。

「そ、そうなんや……」

電気をバチバチと鳴らすと木乃香も流石に少し引き気味でやりすぎだと思ったが、通り魔に遠慮するのもアレなので複雑な心境だった。

「……ん～、木乃香さん。寮まで送っていきますよ」

スタンガンのスイッチを切ってポケットにしまい、事態が少々思わぬ方向に動いているなと思いつつ、これからの事を考え始めた。

元々、今夜の件で他者が介入する余地はない。というか、介入させないように結界が操作されているはずだった。

エヴァンジェリンによって。

どうも作為的なものを感じ取ってアスカは眉間に皺を寄せた。

「二人を追いかけんでええの？」

木乃香に聞かれるも、アスカとしてはなにも心配はしていない。

さっきエヴァンジェリンが【氷結・武装解除】を使った時に、ネギのパーカーのフードの所に虫に擬態した分身を入れておいたし、木乃香には言っていないが何かあれば遠くから見ている分身が何とかするだろうと考え、木乃香を寮に送っていく事にした。

「流石に木乃香さんを置いていくわけにも行かないですから。学園長に不審者がいたと連絡をいれます。木乃香さんを送り届けたら急いで見に行きますよ」

安心させるようにアスカがそう伝えると、木乃香も安心して表情を緩める。

アスカに抜け目というものがないことは一緒に暮らしていたときから知っている。無駄に思える行動が後々になって意味を持つということを知っている。

アスカは学園長に携帯で不審者がいて自身が襲われ、駆けつけたネギと明日菜が不審者を追いかけて行ったから警備員なりを派遣してもらえるように頼み、任せた後は木乃香を寮へ送って行った。

第四十三話　闇の福音と原作主人公と少年　1（後書き）

全七話、既に出来上がっているので更新を忘れたり、面倒ぐざがらなければ週二回の更新は変わらないと思います。

9．5割が改定前と変わらないので早い事、早い事。読み直すのに一番時間がかかりました。

取り合えずの目標として改定前まで、つまり修学旅行編を年内に終わらせたいと考えています。改定前の修学旅行編は文字数が三万越えとかザラだったんで計算が出来んとです。週二回で余るような連続投稿になると思います。

次回の更新は『日曜日』の午前0時に予定しています。この続きです。基本というか殆ど原作沿い。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

第四十四話　　闇の福音と原作主人公と少年　２（前書き）

すみません、後書きで色々と書いてたらかなり遅れました。

吸血鬼編全七話の第二話です。二話かけて初日が終わるという顛末。

文字数は１０８０４字です。

どうぞ！！

第四十四話　闇の福音と原作主人公と少年　2

元々の作戦の段階からアスカはエヴァンジェリンを信頼しているとは言い難かった。恨み辛みというものの厄介さを骨身に染みて理解していることもあって過剰な信頼は禁物であると自分に言い聞かせていたからだ。

事前に桜通りに来る前に、遠方に本体になにかあった場合のことを想定して一体、ネギの様子を確認するために一体の【影分身】を生み出して備えていた。

遠方から全てを見ていた分身の一体は、桜通りから2キロ程離れた最も高い時計塔の上で姿や気配を隠蔽して作戦の推移を見ていた。本体が木乃香を女子寮に連れて行くのを見て、同じように作為的なものを感じ取っていた。

エヴァンジェリンが先行し、ネギが彼女を追いかけて常人では決して有り得ない速度を持って疾駆し、その後をかなり遅れて明日菜が走っているのが見える。この時点で以前から明日菜の身体能力に疑問を抱いていたアスカは確信を持った。

（強化なしで自動車並みの速度出してないか、アレ）

以前から明日菜の身体能力には疑問を持っていた。

近くにいると自分を基準にして判りづらいが改めて見ると異常だろう。これは本格的に調査結果が気になる。

結論を出すと、木乃香の近くにいる本体とのリンクを切り、ネギ

のフードに隠れてる分身とリンクを繋げる。

「世の中には良い魔法使いと悪い魔法使いがいるだって！　世のため人のために働くのが魔法使いの仕事のはずじゃないかっ！」

フードにいる分身にリンクを繋げると風を切る音と、ネギの憤然やるせないといった感じの言葉が聞こえてきた。

魔法学校の授業でもエヴァンジェリンとか普通に歴史の授業で出てきてたので、所謂『悪い魔法使い』という存在の事は教えているのだが何故知らないのだろうかとアスカは疑問を覚えた。

考えられるのは教師がネギが出ている授業だけ意図的にその情報を封鎖していたのか、本人が自分の都合よく記憶を改竄しているのか等いろんな可能性はあるが全て推論の域を出ない。

《幾ら身の回りにいたのが基本的にそんな魔法使いばかりだからって、それは早計でしょうに》

《そう思い込んでいるのか、それともこれが魔法学校の教師達の仕業なら完全に洗脳じゃな》

アスカたちの思惑も知らず、ネギはさっきエヴァンジェリンが言った父親の事が頭に浮かんできて、今は捕まえることに専念しようと頭を振った。

「いた！」

「！　はやい。そう言えば坊やは風が得意だったな」

玉藻たちが魔法学校の教育について論議をしているうちに、ネギが律儀に発した言葉を聞いてエヴァンジェリンは接近されたことを知った。事前に集めた情報を思い出して呟き、歩道橋の上で左方向に移動して手すりを足蹴にし、その身体を投げ出してそのまま闇夜に飛び立つ。

（杖も箒もなしに空を飛んだ!!　ただの魔法使いじゃないぞ……）

箒も杖も使わずに空を飛べる魔法使いは少ない。空を飛ぶとき、皆何らかの触媒を必要とする。典型的なのが魔女の代名詞である箒。ついで杖であるが、ナシで飛べるということはそれだけで優れた魔法使いの証明である。

ネギは驚きを覚えたが、手すりに手をついて飛び越え、直ぐに自分も愛用の杖に跨ってエヴァンジェリンを追って夜空を舞った。

（でも、おかしいな……）

杖に跨って上空を疾走するエヴァンジェリンを見て疑問が浮かび上がる。

杖も箒も必要としないほどの魔法使いは一流ということになる。なのに凄腕の魔法使いにしては彼女が使った魔法は威力が弱すぎた。春休みに魔力コントロールを徹底的にしたことで今までよりも魔法の威力が増したと本人も自負している。とはいえ、まだまだ自分は見習い魔法使いにすぎないのに凄腕の魔法使いの魔法に拮抗するのはおかしい。

「待ちなさーい！　エヴァンジェリンさん、どうしてこんなことを

するんですか！　先生としても許しませんよー！」

疑問が積み重なるも、未熟なれど先生として本人を捕まえるため、なぜこんなことをしたのかを問い質すために声を張り上げる。

「はは、先生。奴のことが知りたいんだろ？　奴の話を聞きたくはないのか？　私を捕まえたら教えてやるよ！」

「……本当ですね？」

エヴァンジェリンが顔だけを振り返って言った言葉に、納得はいっていないが、それよりも気になるものだったようでネギの目の色が変わった。

ネギの問い返す言葉に、エヴァンジェリンが肯定するようにニッと笑う。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル　風精召喚！！　【剣を執る戦友】！！」

ネギの詠唱と共に、周りに白色に統一され、それぞれが何かしらの得物を所持しているネギを模ったモノが八体出現した。

「分身！　いや、風の中位精霊による複製か」

エヴァンジェリンは顔だけを後ろに向け、詠唱を聞いただけでその分身じみた術の正体を看破した。

【剣を執る戦友】とはその名の通り、今回の場合は風の中位精霊を呼び出すためのもので難度的にはそこまで難しいものではない。

だが、本来ならばこれは決して十歳の見習い魔法使いが扱えるような魔法でもなく、また8体を同時に使役するなど甚だ不可能である事もまた事実である。

「捕まえて！！」

唯一実体を持つ本体であるネギが精霊たちに命令を下し、その指先がエヴァンジェリンを指した瞬間、八体の精霊が彼女の包囲を開始した。

精霊たちは各々の軌道を描いて瞬く間に包囲して、執拗にその得物をエヴァンジェリンに向けて振るって捕縛しようとする得物に当たれば風で捕縛されるので、捕縛しようとするネギの作戦などお見通しなエヴァンジェリンは上昇と下降を繰り返して避け続ける。

《エヴァは認識阻害を張っておるのに、アレはお構いなしに好き勝手にやっておるぞ》

《本当に魔法の秘匿という言葉を知っているのでしょうか？》

本体から玉藻とリインフォースの念話が中継されて届く。

エヴァンジェリンは認識阻害を張っており魔法も使っていないので誰にも見つかることはないが、幾ら飛行魔法に認識阻害の効果があるといっても人に見られたらどうするのだろうか。

アスカと同じ事を思ったのかエヴァンジェリンは認識阻害の結界を広げてネギも範囲に入れ、迎撃を開始した。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック　氷の精霊8頭！！　集い

来りて敵を切り裂け　魔法の射手・連弾・氷の８矢！！」

近づいてきた精霊たちに向けて、氷の魔法射手でそれぞれ迎撃していく。ネギはそれを目くらましにしつつ急加速し、エヴァンジェリンの側面へと回りこんで間合いを詰めた。

「追い詰めた！　これで終わりです！　風花・武装解除！」

「！！」

やはりエヴァンジェリンの魔力が弱すぎることに疑問に思ったネギが作戦通りに側面に回りこんで魔法を放つ。

武装解除の名を冠したその風がエヴァンジェリンを包むが、完全に抵抗（レジスト）したため身を覆っていた黒いマントを揺るがすことすらできていない。

黒いマントの下は下着と大差はない。他にも監視されている可能性がある以上は本人としても外でそんな姿になる気はなかったらしい。

魔法の勢いに押されてバランスを崩して近くの建物の屋根に着地し、結果的に誘い込まれていると知らないネギもそれに続いた。

彼女の顔が余裕に満ちていることを感じ取ったネギのフードの中に隠れていた分身は、恐らく予定通りの展開になっていることを察して飛び立って離れた所に着地する。

「……やるじゃないか、先生」

三メートル程の距離を隔てた先に降り立った兄さんに向けて、エヴァンジェリンは予想通りにここに降り立たせた事への全く違う意味での賛辞を向けた。見習いとはとても思えない魔法の腕に対する賛辞もある。よりよく魔力を熟成させる術を身につけたネギは予想よりも上質な獲物であり、格好の獲物だった。

そんなことを露とも知らず、先の一合の対決だけでエヴァンジェリンの魔力が自分よりも圧倒的に少ないと確信し、ネギは己が勝利を完全に確信して口を開く。これが仕組まれたことに過ぎず、最初から己が敗北しているとも知らないで。

「こ、これで僕の勝ちですね。約束どおり教えてもらいますよ。何でこんな事をしたのか。それに……父さんのことも」

ここまでの明確な敵意を向けられた戦闘が始めてだった事も影響したのか、思いのほか体力を削っていたようでネギは僅かに肩で息をしていた。

分身はどう考えてもヒトを襲っていたことの真意よりも父の情報の方を強く求めているのが分かり、襲われていたアスカの事など既に忘却の彼方にあるのだと変な確信を抱いてしまった。

「お前の親父……即ち、『サウザンドマスター』の事か。ふふ……」

息を乱すネギとは対照的にエヴァンジェリンは落ち着き払っており、対外的にはとても追い詰められたようには見えない。

(兄は父を求め、弟は父を拒絶する。対照的な兄弟だな)

こうやって改めてみると、その資質、容姿、考え方、求めるものなど、何一つ同一のものがない似ていない兄弟であった。

それを面白いと感じるエヴァンジェリンも大概であることに本人だけが気づいていない。

「これで、勝ったつもりか？　さあ、お前の得意な呪文を唱えてみるがいい」

エヴァンジェリンの言葉と同時に、最初からそこにいた茶々丸が彼女の後ろの屋根からズシャッと音を立てて屋根を砕いて着地する。

「新手！？　ラス・テル・マ・スキル・マギステル　風の精霊十一人、縛鎖となりて敵を捕まえろ」

はっきりと勝利の笑みを浮かべながらエヴァンジェリンを見て、落ちてきた人影は新手だとようやく思考がそこに思い至ったネギ。彼女に言われるまでもなく、二人をまとめて拘束できる【魔法の射手・戒めの風矢】の呪文を唱えていた。

目の前の二人を捕らえることが出来るという自信があったのだろうが、容易く制圧することのできる距離にいることに気付いていない。

呪文を唱えるネギの姿を、エヴァンジェリンはその様子を勝利の笑みというより嘲るように口の端を吊り上げて見ていた。

ネギが呪文を唱え始めたのと同時にエヴァンジェリンの背後にいた茶々丸が動き、素早く半身で間合いを詰めて、左手をネギの頭に向けて差し出し、溜めてあった指を弾き出した。

「サギ……あたっ！」

親指に引っ掛けた中指を溜めて放つ一撃、俗に言うデコピンである。

最後の一小節を唱え終わる直前でデコピンの所為で集中力が切れて、突き出していた左手からポヒュッと気の抜けるような音と共に煙が放たれた。端的に言って――――――魔法は失敗した。

デコピンを放ち終えた茶々丸は直ぐにエヴァンジェリンの魔法の効果範囲から一足飛びに離脱し、射線からも離れた位置に立つ。

「あたた？　え、あれ！？　き、君はうちのクラスの……！」

痛む額を抑えながら顔を上げたネギだが、それを行った人物が誰なのかに気付いて本日何度目になるのか驚愕の声を上げた。

茶々丸は驚愕の声を上げるネギに対してペコリと礼儀正しく頭を下げる。敵に対する反応ではないだろうが、機械とはいっても彼女がするとやけに様になっているように見えた。

「紹介しよう。私のパートナー、３－Ａ出席番号１０番“魔法使い（ミニステ ル・マギ）の従者”絡繰茶々丸だ」

「え……なっ……！？　ええ～～～！？　茶々丸さんが、あなたのパートナー！？」

エヴァンジェリンの口から語られた事実に、ネギが強い衝撃を受けているのは顔を見ればよく分かるだろう。

まあ、『桜通りの吸血鬼』の正体が自分のクラスの生徒で魔法使いであり、その従者もまたもや自分のクラスの一人だとあっては、この反応も致し方ないかもしれないが。

「そうだ。パートナーのいないお前では私には勝てん」

自身の勝利の絶対を確信してエヴァンジェリンは勝利の笑みを浮かべ、ネギを挑発する。

「なっ……パートナーくらいいなくたって、風の精霊十一人…あう”う”う”」

エヴァンジェリンの言葉を否定しようと再び詠唱を開始するネギだが、茶々丸がまたも近づくと、今度はデコピンではなく両頬を引っ張る事で詠唱を途中で妨げた。

抓まれた頬を摩りながら呪文を唱えないようにという直接的な妨害こそするものの、攻撃はしてこない茶々丸を不審に思ったのか見上げる。詠唱をしていない時にはなにもせず、再度詠唱を口にし始めると茶々丸は左手の指先で額を小突いてネギの言葉を詰まらせた。

詠唱が出来なければ当然魔法も発動しないので有効な手である。無詠唱の魔法という手もあるが、基本魔法のような簡単なものなら別だが攻撃魔法では出来ない。

《状況が好転するわけではないですが何故茶々丸から離れようとしないのでしょうか？》

《創意工夫をしようともせず、同じ手段で止められているのにのう。

謎じゃ》

経験のないネギでは単純に離れるという発想が浮かばなかった。初めての実戦、それも二人ということでなんとか魔法を成功させようと躍起（やっき）になって、余計に視野狭窄が起こって現状に固執してしまった。

「驚いたか？　元々「魔法使いの従者」とは戦いのための道具だ。我々魔法使いは呪文詠唱中、完全に無防備となり、攻撃を受ければ呪文は完成出来ない。そこを盾となり剣となって守護するのが、従者（ミニステル）の本来の使命だ。今では恋人探しの口実となってしまっているのだが、それはまぁいい。つまり、パートナーのいないお前では我々二人には勝てないという事さ」

両腕を組みながらエヴァンジェリンが告げた言葉は、単純であるが故にネギを絶望させるに十分な内容だった。顔を青褪めて泣きそうになっている。

しかし、さっきの『悪い魔法使い』もそうだが何故、魔法使いの従者のことを知らないのか傍で聞いているアスカの分身には不思議であった。

アスカとしても魔法学校の在学中に授業で習った覚えがある。「知らなかったよ～」と情けなくも言ってるが何で知らないのだろうかと疑念が積み重なるばかり。

詠唱を破棄できる『無詠唱』という技法も世には存在するが、それを身につけてはいない魔法使いが従者のいない状態で2対1のまま戦うなど、勇気を通り越して無謀でしかない。

ネギは完全にパニックに陥っており、少し前の『一人で何とかしよう』という決意も何のその、ついには目の幅の涙を流し出した。

「茶々丸」

「申し訳ありません、ネギ先生」

主の命を受けた茶々丸はネギに一言訳の分からない謝罪をして、泣いているネギの首に手を回して拘束して羽交い絞めにした。

「うぐっ」

「マスターのご命令ですので」

何故、謝るのか判らなかったネギだが直ぐに攻撃するためにしたのだと悟るも、口から出るのは苦悶の声。

茶々丸は武器を持っている可能性もあったので念の為にネギの上着を脱がして放り投げ、呻き声を上げているが無視して片腕を回すようにして喉を掴み上げる。

ネギは始めの勢いも空(むな)しくあっけなく捕まり、エヴァンジェリンは戦力が完全に無効化されたのを眺めた後、ゆっくりと足を踏み出した。

「……ふふふ、ようやくこの日が来たか。お前達兄弟がこの学園に来てから、今日という日を待ちわびていたぞ」

表情を愉悦に染めたエヴァンジェリンが茶々丸に捕まったネギに一歩、また一歩と近づく。

そもそもアスカが麻帆良に来たことによってなにもかもが躓いた。

少なくともアスカはエヴァンジェリンが関係のない一般人を吸血することを認めず、かといって挑むには初日の屋上での対話から封印状態での力の差を思い知っていた。

なんどか契約の対価として求めていたナギの直系であるアスカの血を飲んだが、それは事前に血を抜き取ったものを輸血パックに入れて渡されただけで決して望む領域には達しない。それでも一般人を吸血するよりかは効率が良かったが押さえ込まれているという状況は彼女の我慢できるものではない。

そんな中でアスカから今回の件を持ちかけられたが、ネギの麻帆良に来てからの所作とアスカに対する反発、鬱憤等、その他諸々が重なって言う通りにする気など毛頭ない。

確かにネギの吸血をして【登校地獄】からの解放を目的としているが、それは過程であり、最終目標は違う。最終目標は――――アスカと戦うこと。

本来のアスカの計画では、ここで茶々丸が登場することはなかった。下手な危機感を与えすぎてネギが逃げ出さないようにするためなのだが、エヴァンジェリンとしてはネギが逃げてくれた方がありがたい。

彼女はアスカの血を吸ったことで一つの確信を抱いた。

アスカの『血中魔力』――――血に含まれる魔力は輸血パックに入ったことで減衰しているものの、予測ではネギを凌駕し、木乃

香に匹敵するものがあることを。

それでどうして感じられる魔力が低いのかなど疑問はあってもアスカの血を吸えば封印からの解放がある以上、今まで押さえ込まれた憤慨（ふんがい）と15年溜め込んだ鬱憤（うっぷん）を晴らすならより強い相手の方が相応しい。

つまり、ネギでは役者不足。劇の主役でありながら役外の脚本家に席を奪われるだけの存在でしかなかった。

ゆっくりと一歩一歩距離を縮めていくそのやり様は、刻一刻と迫る命の灯火が消える瞬間を感じさせ、やたらと恐怖を煽っている。

「そう。全てはこの呪いを解くため」

「え……の、呪い……ですか！？」

ネギは話の中に気になる言葉を見つけて、オウム返しのように口を開いてはいるが必死に茶々丸の拘束を解こうともがいている。しかし、離れない。身体強化を施しても茶々丸の力に敵わないのだ。

「そうだ。真祖にして最強の魔法使い。闇の世界でも恐れられた、この私が舐めた苦汁……私はお前の父、即ちサウザンドマスターに敗れて以来魔力も極限まで封じられ、もう十五年間もあの教室で日本の能天気な女子中学生と一緒にお勉強させられているんだよ！！」

呪いがよほど屈辱だったのかエヴァンジェリンは腕をワナワナと震わせ、キッと目を鋭くしてネギの胸倉を掴み上げ、ガックンガックンと揺さぶりながら理不尽な怒りをぶつける。

【登校地獄】の呪いを掛けたのはサウザントマスターで魔力制限を掛けたのは学園長なのだが、サウザントマスターは一般では死んだことになっているし、学園長には直接言っても柳に風状態で受け流されるのでかなりの鬱憤が溜まっていたようだ。

で、溜まりに溜まった鬱憤（うっぷん）を吐き出せる相手――――もう一人のサウザンドマスターの息子であるネギへと吐き出していた。

「え……そんな……僕、知らな……ゲホ、ゴホッ」

「この馬鹿げた呪いを解くには、奴の血縁たるお前の血が大量に必要なんだ。悪いが、死ぬまで吸わせてもらう……」

理不尽とも呼べる憤りをぶつけられたネギは困惑しているが必須に弁解するも、エヴァンジェリンはそれを無視して口を大きく開けて吸血行為のための異様に長い犬歯がギラリと覗かせる。

ここで血を吸って呪いを解いてしまえば後から文句を言われようがどうとでもなる。実際に死ぬまでネギの血を吸い尽くせば呪いが解ける可能性はかなり高いと出ている。

アスカとしては別に呪いを解くのは構わないが、エヴァンジェリンが血を飲みすぎてネギを殺してしまうと後々面倒が起きる。それをさせないために妨害の準備をする。

この展開を予想していたので最初は分身体でエヴァンジェリンの前に出たアスカの行動は正解であったようだ。

「うわぁぁぁあん！　誰か助けて～～っ！」

告げられた死の宣告とそれを行うであろう異様に尖った犬歯を見て、ネギは恐怖に駆られて叫ぶ。何としてでも逃れようとなりふり構わず暴れるが茶々丸の外見に似合わない力に取り押さえられて、なおさら己が恐怖の火を煽る結果に終わってしまった。

ネギの叫びを無視し、エヴァンジェリンが首に噛みつこうと顔を近付けてゆくが、アスカの分身はそこで別の人の気配を感じた。

「ん？」

その気配はネギを追いかけていた明日菜だと分かり、もうネギが血を吸われすぎて死ぬことはないだろうと妨害の準備を取り止めた。

アスカよりも遅まきながら気配を感じたエヴァンジェリンは噛み付こうとした口を離して後ろを振り返った。普段なら隠そうともしない気配と足音にすぐさま気づいたはずだが、十五年に渡る束縛からの解放を目の前にして油断したのだろう。

「コラーこの変質者ども――――っ！！　ウチの担任補佐に何したのよ――――ッ！！」

どう考えてもエヴァンジェリンを追いかけてきた目的は、今現在捕まっているネギではなくて先程倒されていた（ように見えた）アスカの敵討ちにあったらしい。

明日菜は叫びながら5メートル手前で跳躍し、茶々丸はネギを拘束しているので動けないため、仕方なく変わりにエヴァンジェリンが受け止めるために障壁を張った左手を翳（かざ）す。

だが、明日菜は体勢的には飛び蹴りのはずなのに、蹴り足である右足を中々前に出さない。

「えいやあああああああっ！！」

このままではぶつかると思った時に、明日菜は気合いの雄叫びを上げて腰を捻り、右足をくの字に曲げたまま展開していたはずの魔法障壁を容易く破壊し、エヴァンジェリンの左頬に変形の飛び膝蹴りを叩き込んだ。

「あぶふぼけばぁーーーーーーーっ！？」

エヴァンジェリンは奇声を上げてドゲシャーーーーーッと顔面へッドスライディングをしながら面白いくらいに吹っ飛び、屋根の端まで滑っていった。

《シャ……》

《《《シャイニングウィザードッ！！》》》

明日菜の行動を見て念話で3人の叫びが重なり、そこで寮にいた頃に明日菜たちと年末に一緒に見ていた特番プロレスを思い出した。

何故プロレスを見ていたのかと言うと、プロレスラーには珍しく明日菜好みの渋めの人が出ていたからだ。そのプロレスラーが試合でシャイニングウィザードを使っていたので印象に残っていたのではないかと思うのだが、普通咄嗟に出るのだろうかと疑問に思わずにはいれない。

戦慄を感じているアスカを尻目に、エヴァンジェリンは茶々丸が慌てて駆け寄るのを静止し、頬を抑えながら起き上がった。

「わ、私の魔法障壁を破っただと！？　き、貴様は神楽坂明日菜！？」

エヴァンジェリンは幾ら封印されて力が弱くなっているとはいえ、６００年を生きた真祖の吸血鬼なのだ。

余程、魔力に差がなければ不可能なのに、魔法障壁をいとも簡単に明日菜が破ったのだから驚愕しないのはおかしい。

魔法障壁が破られる瞬間を見ていたが、明日菜の蹴りは魔法障壁を破壊したのではなく障壁は触れる直前に霧散した。

今まで推測だけで確証がなかったが、これで明日菜が魔法無効化能力（マジックキャンセル）を持っている可能性が高まった。

だが、その魔法無効化能力（マジックキャンセル）もどこまで無効にするのか分からないので過信は禁物である。

明日菜の能力の推測として図書館島地下で調べてみたが、能力を持った人間自体が少なくて文献にもほとんど残っていなかった。なので能力は何も分かっていないに等しい。

調べて分かったのは魔法を無効化する事と【無極而太極斬】という技だけで、何を基準にしてどこまで魔法を無効化するのか、その条件も分からないので能力の持ち主である（と思われる）明日菜に協力してもらい、調べてみないと分からない。

「あっ、あれ？　あんた達、ウチのクラスの……ちょ、どういう事よ!?　まさか、あんた達が今回の事件の犯人なの!?　何でアスカを襲ったのよ！　答えによってはタダじゃすまないわよ!!」

これで明日菜はさっきまで襲われかけていた（？）ネギではなく、アスカを襲った相手を追いかけてきたことが判明した。

アスカとしては説明する前に行ってしまったから、ネギを追いかけて行ったと思っていたのだが違ったみたいで少し気恥ずかしい。

それはともかく、明日菜もようやく襲っていた人物たちの顔が自分のクラスメイトだということに気付いたようで、何故か場違いに一礼している茶々丸と頬を押さえているエヴァンジェリンを見て威勢のいい啖呵を切る。

「ぐっ、よくも私を足蹴にしてくれたな。神楽坂明日菜、お、覚えておけよ～～～」

よほど腫れ上がった頬が痛むのか涙目で押さえながらエヴァンジェリンは、恨めしい視線を明日菜に向けながら三流悪党のような捨て台詞を残して、茶々丸と一緒に長居は無用とばかりに後ろ向きで屋根から飛び降りた。

「あ、ちょっと……」

魔法使いという夢物語の存在を知っても、現実的になにかが変わったわけではない明日菜は慌てて屋根の淵に立って下を覗き込んでいるが、二人の姿はどこにも見当たらないようだ。

「ここ、８Ｆよ……？　「うっうっ」　あっ、ネギいたの？」

明日菜が呆然と屋上の端から下を見ていると、誰かのすすり泣く声が聞こえたので振り向き、そこでようやくネギの存在に気付いた。今のいままで目に入ってなかったらしい

「うわーん！　アスナさ～ん！」

「わ！　ちょ、ちょっとどうしたのよ。あ、危ないってここ屋上なんだから。あんっ、もーそんな引っ付かないでよ」

ある意味ネギに対して薄情（？）とも言えるリアクションなのだが、ネギはそれにも気づかないほど追い詰められていたようで明日菜にしがみ付き、胸に顔を埋めて大泣きしだした。

唐突に泣き出したネギに抱き付かれたが明日菜は少し文句を言いながらも、泣かれては敵わないと思ったのか落ち着くまであやし続けた。子供嫌いを標榜（ひょうぼう）しつつも本質的に甘い彼女は受け入れた。

引っ付いて離れないネギを落ち着かせながら、優しい声をかけている明日菜。明日菜がいるなら大丈夫だろうと思い、アスカはこの場にいる虫型の分身を解いた。

木乃香を送り終えて家に着いたので、用のなくなった全ての分身を消し、自宅に帰る道すがらアスカはエヴァンジェリンの思惑を正確に読み取っていた。

「そんなに俺と戦いたいか、闇の福音」

エヴァンジェリンがネギを降したいだけなら茶々丸の手を借りなくても今の能力でも十分に可能。なのに計画外の彼女を引っ張り出

したということは別の思惑が存在していることを証明している。

ただでさえ、実力差があるのに更にネギからすれば敵を増やすということは味方を連れて来いと言っているようなもの。この麻帆良でネギが知っている魔法関係者は片手の指の数にも足りない。一番頼りになる高畑は出張が多く、麻帆良にいる日数が少なく妨害をすれば協力させないことは容易い。同じ理由で学園長にも頼らないようにさせれば残る消去法でアスカのみとなる。明日菜は知ってはいても関係者ではないから流石に戦闘には巻き込まないだろうというエヴァンジェリンの目論み。

舞台に上がらせれば後はどうにでもなると考えているのだろう。闇夜の中を歩きながら、茶々丸が出てきた時点で察していたアスカは今後の状況をどうするかを思案する。その頭にネギのことは一切ない。

こうして主役（ネギ）を置き去りにして計画は始まった。このことが後になってどう影響するか、この時点では誰も気づいていなかった。

第四十四話　闇の福音と原作主人公と少年　2（後書き）

次回の更新は『水曜日』の午前0時に予定しています。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

この先は思いつきで書いたものです。特に意味はありません。

そして完全にネタです。物凄く筆（？）が乗ってしまいました。

＜Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔ＋Ｆａｔｅ／Ｚｅｒｏとのクロスオーバー＞

【クラス】バーサーカー
【マスター】間桐雁夜
【真　名】アスカ・スプリングフィールド
【性　別】男
【属　性】混沌・善

＜パラメータ＞

筋力　Ｄ　魔力　Ｅ
耐久　Ｄ　幸運　Ｅ－－－
俊敏　Ｃ＋　宝具　？？

＜スキル＞

・知名度補正　Ｅ－

平行世界の英雄であることとで全パラメータが一ランクダウン。

・狂化回避　Ａ＋

、他のクラスの適正があったにも関わらず戦いにおいて怒り猛り狂

った英霊が該当する狂戦士（バーサーカー）にクラスに選ばれたが、狂化を回避することでバラメーターが一ランクダウン。その代わり、他のクラスが持つべきクラス別能力を保有している。

・対魔力　C

障壁魔法を使うことで物理的、干渉的な障害を防ぐことが可能。魔法を使わない場合の対魔力はE。

・騎乗　E－

特定の生物（玉藻）に対してのみ適応される。

・単独行動　EX

通常サーヴァントがマスターを失ってしまうと、現界するための魔力をどこかから補充しない限り、数時間でこの世から存在が消滅するが、アスカの場合は自身で大気の自然エネルギーを取り込むことで理論上では無限に存在し続けることが可能。

・陣地作成　E

魔法使いとして自らの工房を作ることが出来るがそれだけである。

・道具作成　C

薬草などを用いての道具や魔力を帯びた器具の作成を行うことが出来る。

・気配遮断　A

『ハサン・サッバーハ』のように完全に気配を遮断することは出来ないが、機械や人の感覚に引っ掛かることはなく、直感スキル『B』以上でなければ気づけない。

・狂化（尾獣化）　B～EX

理性の代償として能力を強化する。バーサーカーを特徴付けるクラス別能力。アスカの場合はランクEXなので、狂化＝尾獣化で尾増えていく度に全パラメーターの上昇を代償にして理性を失っていき、九本目になると理性が消滅する代わりに全てのパラメーターがランクEXに上昇する。この状態では令呪の命令すら受け付けず、九尾となって敵味方に関わらず全てを破壊する存在へと成り果てる。相性を別にすれば『アルクェイド・ブリュンスタッド』『世界の抑止力』でなければ打倒することは不可能。

・心眼（偽）　B

それまでに得た情報を元に、相手の行動を予測し、直感・第六感による危険回避能力。圧倒的な戦闘経験のみに裏打ちされたものであり、才能によるものではない。

・戦闘続行　C

大きな傷を負っても戦闘が可能。ちょっとやそっとの怪我では死ななくなる。

・魔法　B一

魔法使いとしては攻撃魔法を使えない三流だが、補助魔法など攻

撃以外に長けている。

・忍術　A＋

攻撃、防御、移動、とあらゆる局面に対応できる万能性を持っている。場合によっては宝具に勝るとも劣らぬものもある。

・我流神鳴流　C＋

アスカが刹那の技を見て盗んだ。我流なので技は荒く、刹那が使える技しか使えず、二の太刀は全く使えない。

・保有力　B

リンカーコアからは魔力、肉体からは気、前者二つの半分をチャクラに変換している。魔力が尽きようとも気がある限り存在し続けることが出来る。

・仙術　A

自然エネルギーを取り込み、忍術を格段にパワーアップさせる。事実上、大気中に存在する魔力を吸い込んでいるので術を使い続ける限り消滅することはない。発動状態は全パラメータが二段階ランクアップする。使用制限あり：聖杯戦争において三回のみ、十分以上の発動は不可能

・瞳術　EX

【万華鏡写輪眼】【輪廻眼】の特異能力を扱うことが出来る。

・従者召喚（玉藻）　Ｅ－

生前、最後までアスカと共にあったことで死後も共にある。しかし、その能力は強すぎたために召喚するだけでも一苦労、伴って戦いなど以ての外で、召喚した場合は丸一日は休息しなければならない。それでも玉藻を現界させ続けるには一時間が限界。

・中国武術：Ａ＋＋

才能なき身でありながら影分身によって超絶の修行と数え切れない実戦の果てに達人でも中位に至った。

＜宝具＞

・須佐能乎　Ｅ～Ａ＋＋　対人宝具であり、結界宝具

【万華鏡写輪眼】の開眼者のみ使用可能な術。使用すると人間の骸骨（主に胴体）のような像が浮かび上がり、最終的に鬼のような顔をした巨人に変化する。

右手に持っている霊剣十拳剣は、剣自体に封印術が施されており、突き刺した者を幻術の世界に飛ばして永久に封印する効果を持つ剣。突き刺された者には回避する手段はない。

左手に持っている霊器八咫鏡はある程度の物理攻撃や特殊攻撃を無効化する絶対防御をほこる盾。巨人の顔の中に隠れる女神が持つ。すべての性質変化を有し、受けた攻撃の属性に応じて自身の属性を変えることによって、あらゆる術を無効化する。

＜伝説＞

原作開始前まで同じだけどリリカルなのはA's とのクロスはなしで、当然リインフォースと出合うことがなかったために変わった未来のアスカ。

桜通りの吸血鬼事件は主犯のエヴァンジェリンを抑えたことで発生せず、修学旅行はリインフォースの存在がないことで玉藻が調査をしていないため殆ど原作通り。

アスカが関わる以外は木乃香が攫われる前までは同じで、鬼の相手は玉藻の独壇場、フェイトの相手をアスカ（本気のフェイトに終始押され気味）しているがリョウメンスクナノカミが封印から解放されたことでネギと明日菜に頼み、最終的に須佐能乎の十拳剣で封印。ネギ石化→木乃香と仮契約は原作と同じ。

ヘルマン編でネギたちと離別（本作ネタバレになるため伏せます）

学園祭編は一切関わらずに傍観者に徹した。

魔法世界には行かず、アスカは麻帆良を出奔。姿を眩ます。

ここからが原作との違いで、原作ほど明日菜と親しくないのでフェイトとの決戦時に手助けがなく、フェイトは消滅、ネギは重傷を負う。

そこに造物主が現れるが、遅れて現われたエヴァンジェリンらが

命がけで撃退（ネギと目覚めぬ明日菜は白き翼の手により撤退）。造物主は倒すものの、エヴァンジェリンは次代の造物主の器となり、学園長らは全員死亡。

殆ど完全なる世界は壊滅という状態で活動再開まで三年を要した。

五年の間にアスカは村人の石化治療を成し遂げたことで復讐に対する意義を見失い、目的もないまま世界を放浪していた。

が、平穏の時は破られ、活動を再開した完全なる世界、成長した白き翼、魔法世界の存続を諦めたメガロメセンブリア、試験的に導入していた帝国移民計画実験体技術を完成させたヘラス帝国、旧世界の各国や魔法協会など、様々な勢力が入り乱れて旧世界と魔法世界の両世界を巻き込んで戦争が始まった。

魔法世界を拠点として己たちが実現する世界を作り上げるため手段を問わない『完全なる世界』。

３－Ａの生徒たちで構成された、魔法世界の救済案を提示しながらも即応性がないことで聞き入れない各勢力に対して望まぬながらも武力を用いる『白き翼』。

魔法世界において唯一実体を持つが故に人の生存不可能な火星の荒野に投げ出される恐怖に狂った『メガロメセンブリア』。

帝国移民計画実験体技術を完成させてしまったこと、己たちが幻にすぎないことを知って狂気に取り憑かれた『ヘラス帝国』。

己が世界に居住を迫る異界からの侵入者たちに権益を求めたり、

生活を守るために戦う『旧世界の各国や魔法協会など』。

幾つもの思惑が絡まりあい、生存をかけて戦争が勃発した。様々な勢力が入り乱れての己以外の勢力の殲滅戦が始まった。

世界が狂気に囚われる中で、戦争に両世界中に拡大した戦いに滅びを予感して、戦争に巻き込まれる者たちを守るためにもアスカは否が応にも動かざるを得なかった。

どの勢力に加担しても意味がないことを悟ったアスカは、どこの勢力にも所属せずに独力での戦いを強いられた。

玉藻の力添えや少なからずアスカの思いに賛同した者もおり、次々と勢力を倒し、脅し、交渉して戦いを収めていった。

その戦いぶり、非道や容赦のなさから諫めた次第に仲間も離れていったが、アスカは止めようとはしなかった。

戦争は五年にも及び、最終的に【須佐能乎】の霊剣【十拳剣】でエヴァンジェリンに憑依した造物主諸共に幻術の世界に飛ばして永久に封印したことで戦争は終結した。

終結した時には新旧世界の人口は戦争前の三割にしか達しておらず、人口が減ったことで魔法世界人の旧世界移住が叶ったのは皮肉な話だ。

『完全なる世界』は完全に壊滅。

『白き翼』は長谷川千雨、宮崎のどか、朝倉和美、早乙女ハルナら3－Aでも非戦闘員が戦争の最中に死亡、綾瀬夕映は戦争の影響と親友二人を失くしたことで心を壊した。多くの者の心に闇を宿った。

『メガロメセンブリア』は主だった元老院議員が死亡して解体された。国民の実に九割が死亡と殆ど国としての機能を残していなかった。

『ヘラス帝国』は王族が全員死亡、貴族も大半が死亡や行方不明。国民の死亡率は七割とメガロメセンブリアよりは少ないが、残っているのは帝国移民計画実験体技術が合わなかったものや拒否したもので、魔法世界と共に滅びることが決まっているようなものだった。

『旧世界の各国や魔法協会など』もかなり酷い。主だった先進国は国土を焼かれ、形骸化している。

仮初とはいえ一年と六ヶ月の間、世界は復旧に追われていたが魔法世界の崩壊と共に平和は壊れた。

あまりにも、あまりにもいまだ嘗て歴史にないほどの酷い戦争だった。

世界は、民衆は戦争の原因を求めた。

不毛な戦争に疲れ果てていた人々は全ての不満と憎しみを押し付けられる『生贄』を欲していた。

そして『生贄』として選ばれたのが『英雄』と崇められていたアスカだった。

戦争を終結させた能力、特異すぎる力、なによりも戦時中に行われた非道の数々が全ての責任を押し付ける『戦犯』に適任であった。

かつての仲間の裏切り、責任を追及されたくない複数の勢力が手を組み、アスカを陥れた。

本当に世界を救ったのはアスカだというのに、皮肉にも母アリカと同じ道を歩んだのであった。

その力を恐れられて世界中から憎しみを向けられ、味方のいない状態になり、アスカは人知れず姿を消した。が、捜査網は文字通り世界各地に張り巡らされ、何時までも隠れ通せるはずもなく、やがて追い詰められる。

アスカは何年も逃げ続け、追い詰められた。玉藻は極力被害を減らしてアスカを逃がすなど消耗を強いられ、アスカの中で休眠を余儀なくされた。

最終的に追い詰めたのがネギ・パーティー（白き翼）というのも皮肉な話だろう。彼女たちは身内を人質に取られたりして逆らうことは出来なかった。

十年近く立って強くなった彼女たち相手に、消耗しすぎて彼らを殺すことがでしか逃げることができなかったアスカは希望を失い、最終的に己の魔法無効化（マジックキャンル）を使いこなして心を闇に落とした明日菜の手に掛かって死んだ。最後まで己の目的を持てないまま。

アスカの死後数年後、戦犯扱いに納得できなかったアスカに助けられた人たちが真実を暴き、世界は震撼した。アスカの行動がなけ

れば結果的に被害はもっと拡大していたであろうこと、手段を選んでいる余裕など全くなかったのだ。

あらゆる情報を統合した結果、アスカの行動がなければ人類は完全に消滅していただろうという結論を前に情報を鵜呑みしたことを悟った民衆は悲嘆に暮れる。特に魔法世界崩壊に関わった『白き翼』、それも直接アスカを手にかけた明日菜の悲嘆は酷いもので、狂った果てに自殺を図って死んだ。残った者も周りの非難や罪悪感から命を絶つ者、俗世を捨てた者さまざまだが幸福な者は誰一人いない。

後に『英雄戦争』と呼ばれた戦の完全な終結だった。今度こそアスカは『英雄』として崇められた。

＜Ｆａｔｅ／Ｚｅｒｏ＞

世界を救ったにも関わらずその生涯は報われることなく、かつての教え子の手によって命を落とす。それでも誰一人恨まなかった彼は、世界規模で崇められたことで死後にその魂を英霊となった。

英霊としての彼に与えられた役割は、人々を虐殺することで人類全体を破滅から救う「守護者」であった。拒むこともできないまま永遠に望まぬ虐殺を繰り返し、さらにはそれを通して人々の醜い面を延々と見せつけられた結果、目的を持たなかったアスカが持っていた唯一の「人を救う」という信念が崩壊し、他者優先の想いを自己優先に切り替えるに至った。生前は他者が困っているのを見れば助けた男が、己を至上として優先するようになったのは皮肉か。

そんなアスカが聖杯によって聖杯戦争のサーヴァントとして召喚された。マスターは間桐雁夜。クラスは『バーサーカー』として。

『英雄戦争』において制御できない『九尾化』を用いたこと、非道な手段を数多く取ったことから『狂った英雄』という見方もされており、『バーサーカー』のクラスが適応された。

が、『狂化』することが必須な『バーサーカー』のクラスで召喚されながら完全な理性を保っていた。代償として全パラメーターのランクが一ランクダウンしており、平行世界の英雄ということも合わせて二ランクダウンしていた。

召喚に立ち会った間桐臓硯はアスカのあまりの能力の低さに失望。そうそうに息子雁夜共々に見放すが、アスカは召喚された蟲蔵と臓硯が気に入らないと【天照】を使って塵も残さず殺害。

ただ己が気の向くままに行動するアスカだが、蟲蔵にいた桜も殺そうとした時、雁夜が「ありとあらゆるモノから桜を守れ!!」と令呪を発動させて止めた。

令呪によって桜を殺せず、自身に逆らったマスターである雁夜に小指の先ほどの感心を抱いたアスカは、卑屈な鶴野を追い出して三人で奇妙な共同生活を始めた。

雁夜が発動した令呪によって桜の害になる桜の心臓に巣くっていた臓硯の本体も【白眼】の【透視】と【万華鏡写輪眼】の【天照】によって跡形もなく消滅した。

邪魔者のいなくなった間桐家だが、新たなる問題が発生した。

傍若無人なアスカによって毎日家の中は騒がしい。アレが気に入らない、コレが欲しい、と自身の欲望に忠実なアスカに引っ張られるように桜にも徐々に感情を表すようになってきた。雁夜は聖杯戦争に参加することよりも桜が幸福になることを望むようになっていた。

アスカは『バーサーカー』でありながらマスターを必要としない能力を有しており、戯れに作った薬や道具に雁夜の【刻印虫】は取られたことが未来を望んだのであった。

だが、聖杯戦争が始まるとそれも一変する。

自己中なアスカが勝手に聖杯戦争に参加。

セイバーとライダーの戦いに乱入して場を引っ掻くだけ引っ掻き回し、全てのサーヴァントとマスターに強い印象を残して去っていった。

独自に捜査を開始して衛宮切嗣に対してどうしようもない反発を覚えた。更に万能の釜たる聖杯にも不審を抱いた。世の中にそんな都合の良いものがあるはずがないと考えて調査を開始する。

キャスターの外道な行いを前にして僅かとはいえ、生前の心の疼きを感じて討伐を決断。セイバーとランサーからの共闘の申し出があるも拒否して後一歩というところで取り逃がす。

ライダーが主催した【聖杯問答】に王でもないのに勝手に参加し、セイバーの答えを前に、僅かに光を思い出すも全ての王の答えを否定する。大義もなく、理想もなく、我欲のままに今を生きるアスカ

の在り方はライダーに近いものがあるも、在り方が近いものがあるが故に相容れなかった。アーチャー、ライダー、セイバー、と戦う道を選ぶ。

二度目のキャスターとの戦いを前にアスカが追い立てていたことで『海魔』は原作よりも遥かに強かった。明かされるセイバーの宝具、アスカの宝具と能力が跳ね上がった仙術の異様性。その間、時臣への憎しみを捨てきれなかった雁夜が戦いを挑み、敗北。後に綺礼によって助けられるも単独能力を有したアスカは気づかない。

独自網によってランサーの主の居場所を突き止めたアスカは仙術を駆使してランサーに戦いを挑む。途中で到着したセイバーたちが息を飲んで見守る中で切嗣が乱入し、サーヴァントとしての利によって動きを止めたアスカの前で、マスターの令呪によってランサーは自害。

英霊となったアスカなら切嗣の外道な手段も許容していた。が、何故か気に入らないと心が反発した。

自己強制文によって殺せない切嗣に変わって、ケイネスとソラウを殺そうとした久宇舞弥の凶弾から心に従うまま二人を守り、治療をして町の外に出した。

アスカがライダーと戦っている頃、聖杯戦争に没頭する中で雁夜は綺礼に利用されて葵を殺しかける。

ライダーとの戦いは引き分けに終わり、お互いに満足に覚えて酒宴を行う中で街を覆う怪異は増して行く。

やがて決戦の時は訪れる。

アスカはセイバーと、ライダーはアーチャーの激闘の幕が切って落とされた。

アスカとアーチャーが勝利し、セイバーとライダーの敗北で戦争は終わりを迎えた。

アーチャーは実力で勝利したが、アスカは違う。戦いの最中で令呪によってセイバーが転移させられ、二個目の令呪によって聖杯を破壊することを求められた所為で決着はつけず仕舞い。彼女は慟哭の果てに座に戻っていった。

しかし、本来なら二個の令呪の重ねがけでは足りず、セイバーの抗う力によって宝具の威力が減じた所為で聖杯は完全な破壊を免れた。

必然、聖杯の真下にいた切嗣は泥を浴び続け、理由を問いに現われて事実を悟ったアスカに助けられた時には虫の息であった。

聖杯を求めた理由、娘を頼む、生き残りを探してくれ、と初めて会話を交わしたアスカに末期の願いと聖剣の鞘（アヴァロン）を託して死んだ。その最後の意志に感化された生前の想いを思い出したアスカは、聖杯を完全に破壊。

切嗣の願い通りに生き残りの少年を見つけ、聖剣の鞘（アヴァロン）を埋め込んだ。

少年を病院に運んだ後に間桐家に戻ると死に掛けの雁夜の姿。アスカが治癒したことで減った魔力で無理に時臣に挑み、消耗した身体にアスカが戦った影響で負担がいき、もはや末期の状態。

自身の行いに悔いを悟ったアスカの慙愧の念に雁夜は自身が時臣への憎しみを忘れらなかったことを上げ、最後に桜の事を託していった。

最終的に助け出した少年――――士郎と桜をアスカが引き取り、切嗣の最後の願いとしてイリヤを拉致して、切嗣らが最後に使っていた屋敷を譲ってもらい、三人で暮らすことになった。桜は間桐のまま、士郎は記憶を失くしていたことから切嗣から苗字を貰って衛宮の名乗り、イリヤはアインツベルン（衛宮の名前を入れて、イリヤ・フォン・E・アインツベルンだが）、アスカは元の名前のままという奇妙な家族生活が始まった。

そして10年後――――第五次聖杯戦争が始まった。

何故か妄想が掻きたてられてしまった。妄想の産物なんで書かないけどね。突っ込みどころ一杯でしょうけどスルーしていただけるとありがたいです。

第四十五話　　闇の福音と原作主人公と少年　３（前書き）

また後書きで妄想が爆発しています。

吸血鬼編全七話の第三話です。主人公が色々と動いています。

文字数は１０２４１字です。

どうぞ！！

第四十五話　闇の福音と原作主人公と少年　3

エヴァンジェリンがネギを襲った後、家に戻って少し時間をおいてから明日菜に電話をかけた。

明日菜に電話を掛けたのは話の辻褄を合わせるためでもあり、あそこにいなかった筈の自身が何があったのかを聞くためである。

電話でエヴァンジェリンや茶々丸が自身やネギを襲った犯人だということを聞き、明日に二人に話を聞くから今日のような迂闊な行動はしないように言い含めた。

「危ない、危険だ」と明日菜は心配して言ってくれたが学校内で話をするから大丈夫だと伝え、放課後に話をすることを約束して電話を切った。

電話を切った後、明日菜に嘘をついている事に対して罪悪感を感じたが必要な事だと割り切り、エヴァンジェリンに電話を掛けて決めていた通り昼休みに時間に会う約束を取り付けた。

今後の展開を考えながら眠り、朝になって郵便受けを見るとネカネから手紙が来ていた。

まだ関係を修復できたとは言えないので魔法を使っての物ではなく、文章だけではあるが最初に比べれば大分マシになったと思える。最初はお互いにどこまで踏み込んだらいいのか分からなくて、思いっきり当たり障りのないことしか書いていなかったが、最近はもう少しマシになってきた。

感慨に耽(ふけ)りながら内容を見るとネギの知り合いのオコジョ妖精、アルベール・カモミールが下着泥棒で収監されている牢獄から脱獄して日本に向かったらしい。

そのことは直ぐに意識の片隅に追いやられたが、後に思い出すことになる。後々のアスカの面倒事の五割を担う元凶として。

出勤して職員室で授業の準備をしていると、ある意味予想通りの展開というべきか、ネギは明日菜に連れられてやってきた。

「お、おろしてください～っ！　エヴァンジェリンさん達がいたらどうするんですか！？」

「学校で暴力振るってきたら退学にすればいいじゃない」

「そ、そんな簡単な話じゃ……」

朝礼前の職員室では授業の準備などで雑然とした雰囲気になっていたのだが、そんな中に廊下からネギと明日菜の大声が聞こえてきて「何とかしろ」と言わんばかりに自身に周りの視線が集中したので、廊下に顔を出さざるをえなかった。

まだ生徒が登校するには早い時間ではあっても何人かの生徒が歩いている中、明日菜はじたばたと足をバタつかせて暴れているネギを米俵でも担ぐかのように片手で軽々と担ぎ、木乃香は二人の後ろで苦笑いをしていた。

明日菜に担がれて暴れるネギの姿は、傍目には登校拒否をしている小学生にしか見えない。子供を学校に行かせたい母親（明日菜）と学校に行きたくなくて抵抗する子供(ネギ)の図が頭に思い浮かんだが、

しっくりきてしまうのは何故だろうか。

ネギの年齢的にはその姿は可笑しくはあっても間違ってはいないのだが、教師が生徒に担がれて登校というのは如何なものかと思うも、こういうクラスに関係の無い事ではアスカは関わらない事にしている。

最低限の注意ぐらいはするが、３－Ａの事だけで十分だと先生方から認められているのでほとんどを新田に丸投げしていた。なのだが、今回は流石にそうはいかない。

「お早う御座います、神楽坂さん、近衛さん……で、何やってるんですかネギ先生？」

「アスカ先生、お早う御座います。ネギ君は何か昨日怖い目に遭ったらしくて、布団から出ようとしなかったんです」

「お早う御座います、ネギったら仮病まで使って登校拒否しようとしたので連れてきたんです」

終わらない声にいい加減、後ろの先生方の何なんだと問いかける視線がアスカの精神の許容量を超えたので、職員室を出てドアを閉めながら問いかけると、何かに怯えるようにビクビク震えて辺りを見回しているネギの代わりに木乃香とネギを降ろした明日菜が答えた。

予想していた通りなので納得できたし、エヴァンジェリンの所為で命の危機を感じたのだろうから仕方のないことであった。

「ア、アスカ先生、何があったのかね？」

「体調も悪くないのに休もうとしたらしいです。一過性のものですからお気になさらず」

明日菜達に礼を言ってから、まだ怯えているネギの首元を掴んで職員室に入り、他の先生方の質問をのらりくらりと避ける。

朝礼が終わった後に教室に向かおうとしたのが、エヴァンジェリンを怖がっているネギが断固として動こうとはしなかったので誠意ある説得（周りから見たら脅迫だったと後になって聞いた）をして手を引っ張りながら教室に向かう。

「や、やっぱり僕……！」

「はい、逃げない。学校では手を出してこない筈だから」

教室に着いて、ネギはエヴァンジェリンと茶々丸がいてパニックを起こして逃げ出そうとしたが、アスカが学校では何もできないと懇々と言っても、逃げようとするので襟首を掴みながら引き摺って教室に入る。

「おはよ～。ん？　アスカ君の後ろに隠れて、どうしたのネギ君？」

「あっ！　アスカ先生、ネギ先生。おはよ～」

「お早う御座います。色々ありまして」

生徒達はネギの今にも泣きそうな様子を見て疑問符を浮かべているが、アスカは気にせずに教壇に上がり連絡事項を伝える。

「マグダウェルさん、絡繰さんの二人は昼休みに生活指導室に来るように」

最後に昼休みに話し合うため、二人に生活指導室に来るように伝える。事前に連絡していたので二人も直ぐに了承し、アスカは一時間目はネギの担当である英語なので一人で教室を出て職員室に戻る。

一時間目から三時間目は他のクラスで授業で、四時間目は３－Ａで何時もの通りにプリントを配り終わって始めようと言う時に和美が話しかけてきた。

「アスカ先生はこのクラスでパートナーにするなら誰がいいですか？」

一般の知識ではパートナーと聞くと恋人のことを連想するが、それなら普通に「恋人にするなら……」と聞いてくる筈だから違う。裏の知識では魔法使い（ミニステル・マギ）の従者が該当するが、裏の事を知らない筈の和美が知っているとは思えない。

となれば、教えた誰かがいるということになる。

可能性の尤も筆頭が――――――――ネギ。というか、昨日のことも考えるとネギしかない。

エヴァンジェリンがいるのにそんなことを聞くわけが無いと思ったので出席簿を見るとネギの授業はサボタージュしていた。

（余計なことを）

果たしてその言葉は授業をサボタージュしたエヴァンジェリンへ

か、迂闊なことを言ったネギへのものかは自分でも判然としなかった。

みんなもパートナーのことが気になるのかアスカへと興味津々の目を向けてきた。

特に噂好きな和美やハルナと年下好みそうなあやか、まき絵といったネギ大好き人間が少し危ない目つきで見つめてくる感覚は少し気持ち悪い。

「それは何のことですか？」

「ネギ先生が授業中に聞いてきたんです。結局答えて貰う前に授業が終わっちゃったんで聞けずじまいですけど」

「詳しい経緯を話してください」

明らかに授業とは関係ないことなので本来なら注意するところだが、何でそんな事を聞くのか気になったので詳しい経緯を問うと、ネギが授業中にボーっとしたりため息をついて様子がおかしかったようだ。

そして突然亜子に「パートナーを選ぶとして、１０歳の年下の男の子って嫌ですよね？」と言い、彼女あたふたして答えると次はのどかに聞き、ＯＫしそうになったところであやかが立候補して、最後に和美があやかを押しのけてクラスでよりどりみどりだって話したところで授業が終わり、ドアに当たっても気にする事無く溜息をついて出て行ったらしい。

ネギが言ったということは裏の意味、つまり魔法使い（ミニステル・マギ）の従者のこ

とを指しているのは、昨日のエヴァンジェリンとの問答を考えれば間違いない。もう一度エヴァンジェリンと対峙する事を考えれば、パートナー（魔法使いの従者（ミニステル・マギ））を求めてもおかしくはない。

だが、それを授業中、つまり仕事している時に一般人が多い自分の生徒達に聞くのは間違っている。

「……ハァ、結論から言えば全員Ｎｏです」

「ウチのクラスは特にノー天気なのばっかだし、私の調べだと大体４／５くらいのやつらは彼氏いないと思うよ。恋人が欲しいなら２０人以上の優しいお姉さんから選べるよ？」

ネギの迂闊さに溜息をつきながらも、元を正せば計画した自身に返って来るのだから恨むことも出来ない。

全員Ｎｏと答えると何人かの生徒が女性としての矜持に引っ掛かったのかムッと雰囲気になり、その雰囲気を読んだのか和美がクラスの中からどうかと薦めてきた。

「まず大前提からして違いますが、パートナー＝恋人というわけではありません。特にネギ先生が言っていたのはね」

「え、そうなの？」

実はあながち間違いという訳でもないのだが、ネギが望んでいるのはエヴァンジェリンと対峙する時に一緒に戦う、もしくは自分の盾になってくれる存在だ。決して恋人を求めているわけではない。

《実体を知らなければそう勘違いしても仕方ないがのう》

《まさか一緒に戦う従者など気付けるほうがおかしいですしね》

ネギが恋人を求めているわけではないと知ると、一部の生徒が目を丸くしていた。

「パートナーは私達の地域限定の風習なんですけど、最初は仕事上のという意味だったらしいんですけど今はかなり形骸化しています。最近は恋人探しの口実になっていますが、私としてはあの地域以外の人にはお奨めはできません」

「どうして？」

「１０歳の子供に教師をやらせるぐらいかなり偏執的で、かなり価値観が一般と違うんです。もしかしたら変な事をさせられるかもしれませんので、無理強いはしませんが止めておいた方がいいというのが私の意見です」

実際は価値観に大きな違いはないので少し極端すぎる言い方ではあるが、まかり間違っても戦いに参加されたら困るので苦言を呈す。

「あはは……それは恐いね」

裏の世界のことを地域限定とぼかして誤魔化し、巻き込まれないように注意を促しておく。１０歳に教師をさせるという暴挙を前例に出して、何をさせられるか分からないと脅かしておくのも忘れない。

「第一に私達は子供といえど教師です。厳しい言い方になりますが教師でいる間は教師と生徒、それ以上でもそれ以下でもないです。

これは私の考えですからネギ先生にまで強制するつもりはありませんが、私は教師でいる間はこの関係を崩すつもりはありません」

そこで一拍間を置いて息を吸う。

「さあ、無駄話はこれぐらいにしてプリントを始めてください」

プリントをやり始めた生徒達を見て。願わくば彼女達がこちら側に関わらないですんでほしいと切に願った。

授業が終わった後に生活指導室にエヴァンジェリン達が来てから覗かれないように結界を張り、時間が無いので先に食事を食べ終える。食事後に傍らに傅く茶々丸が気分転換の紅茶を入れ、辻褄を合わせる為に情報を共有することから始めた。

ポカポカと春の温かい陽気が二人を包んで眠気を誘う中、最初に口火を切ったのはエヴァンジェリンの方だった。

「それにしてもあの坊やの無様な様は何だ？　仮にもナギの息子にも関わらず、あれでは面汚しとしか言えんぞ。私のような“悪い魔法使い”が存在し、“立派な魔法使い（マギステル・マギ）”になる気の無い者だって存在しているのに、それを否定している時点で終わっているぞ」

「まあ、あの年代ならそんなものじゃないかと思いますが」

『英雄の子』という事で周りにチヤホヤされ、更にその才能故に

誰かと競うという事がほとんどなかったネギは敵意を向けられることに慣れていない。

あの年代なら教えられたことを信じているのが普通であり、アスカのように現実を知って清濁を併せ持っていることの方が異常なのだ。

「ふん！　せいぜい私のストレス発散の役に立ってもらわんとな！」

窘めるようなアスカの物言いが気に入らなかったのか鼻を鳴らしたエヴァンジェリンはその様を想像して笑みを浮かべた。

「やりすぎは困りますよ。例えば――――茶々丸さんを投入するなんて当初の計画ではなかったはずですが？」

「保険だよ、保険。封印された身では魔力量の違いは如何ともしがたかったからな。その必要がなかったとはいえ、用意していたのなら使わないわけにもいくまい？」

その気に入らない言葉とは裏腹に楽しそうなエヴァンジェリンに、アスカは苦言を呈しながら埒外になっていたことを問う。

問われることを解っていたのか澱みなく応える彼女の言には確かに頷くものがある。が、ネギの視点で見ていたアスカには彼女が初めからそれを分かった上でやっていることを知っている。

「ならば、次は気をつけて下さい。茶々丸さんがいなくても大丈夫なんでしょうから一人で戦うわけですし」

「心配される所以はないわ」

言外に次はないぞ、という意を込めたアスカに、エヴァンジェリンも分かったもので肩を竦めるだけで了承した。

最初の印象さえあれば後は幾らでもやりようはあると、言わなかった言葉を心中に収めながら。

いまにも一触即発な緊張感を伴った会話はそこでお終い。

ここからはお互いの情報を共有する。

「それはそうと学園長（じじい）が孫の傍に置くからには何か理由があるとは思っていたが、まさか神楽坂明日菜が魔法無効化能力（マジックキャンセル）の持ち主とはな」

「障壁を越えられたらしいですけど、魔法無効化能力（マジックキャンセル）なんて貴重な能力の持ち主だと決め付けるのは早計ではないですか？」

学園長の思惑に、今度は本当に気に入らなさそうな話すエヴァンジェリンにアスカが訝しげに問いかける。

アスカでさえ推測の域を出ていないモノを彼女が断定していたからだ。

問いかけられた彼女は興奮しているのか淹れ立てで、まだ熱い紅茶を頓着することなく一気に嚥下しようとして、喉を火傷したのか痛がっていた。

「ケホッ、ケホッ……ちゃ、茶々丸アレを」

「はい、コレです」

エヴァンジェリンの命令で咽る彼女の背中を摩っていた茶々丸が事前に用意していたらしいＤＶＤを取り出して、生活指導室のレコーダーに入れて再生する。

始まったのはエヴァンジェリンがネギに吹き飛ばされて屋上の屋根に着地した場面だった。

「これはあの時の映像ですか？」

カメラの視線が茶々丸の視点なので昨日の夜か、今日の朝に彼女が編集したものらしい。

咽（むせ）たのが恥ずかしいのかエヴァンジェリンの耳が少し朱に染まるが、それを口にする様な者はこの場所にはいなかった。

だからか、エヴァンジェリンは場の空気を払拭するように声を張り上げ、アスカの言葉に「そうだ」と頷き、映像を早送りして彼女が明日菜に蹴り飛ばされる直前で元に戻す。

「ここだ、この箇所を注意して見てみろ」

蹴り飛ばされる直前からコマ送りで再生された映像では、今まさにエヴァンジェリンが突き出した手の障壁に明日菜の右膝が触れようとしている。

これが普通の魔法使いか一般人なら、障壁に阻まれてそこで止まるのだが、コマ送りに進む映像の中では明日菜の進行を阻む事無く、強固なはずの障壁が呆気なく砕け散った。

「やけにあっさりと障壁を破壊していますね。成る程、事前の情報と合わせてこれを見れば魔法無効化能力（マジックキャンセル）であることは間違いない。……では、やはり明日菜さんは」

これだけなら障壁突破に特化した能力である可能性はあるが、ネギの記憶消去魔法の不発、ホレ薬の無効化といった不可解な現象にも説明がつく。

「彼女は天涯孤独の孤児として8年前に高畑先生に連れられて麻帆良学園に来ています。それ以前の記録は染み一つ無い綺麗なものです。名前はどうやら『紅き翼』の『ガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグ』の『カグラ』を取ったようです」

「あのタカミチがココに連れて来て身元引受人をやっているんだ。能力と保護者からみて十中八九、魔法使い側の人間であることは間違いない」

推測を交えた茶々丸の報告の後にエヴァンジェリンの断定の言葉。

彼女ですらアスカに言われて注意していなければ気づかなかっただろう。

「そうですか……」

自身が調べたのと同じ結果に疲れたように溜息を漏らして温くなった紅茶を一気に飲む。先程までは美味しかったはずのそれは酷く不味かった。ただ、それだけがどうしても悲しかった。

その後も細々とした事を話し、最後に今朝のネカネからの手紙か

ら考えてオコジョ妖精が来るので助言者がつく可能性もあり、各個撃破されるかもしれないので二人に注意を促す。

「むっ！　何か来たな……。結界を越えた者がいる。学園都市内に入り込んだか。アスカの言った奴が来た可能性が高いな」

話の途中でエヴァンジェリンが空中を見て侵入者を感知したのがアスカの話の信憑性を高めた。

「特に茶々丸さんは気をつけた方がいい」

「私、ですか？」

「各個撃破するなら、まず従者を狙いますから」

アスカが視線を茶々丸に向けて特に注意を促すと、彼女はどうして自分になるのか分からないように首を傾げた。が、続いた言葉に納得するように頷いた。

最後にエヴァンジェリンに事前に採取していた血液パックを渡して解散し、午後も他のクラスで授業をしてＨＲが終わった後に明日菜を呼んで屋上に向かった。

日陰に並んで座り、認識阻害その他諸々の結界を張ってエヴァンジェリンとの交渉の結果を教える。

サウザントマスターの情報とアスカの血液を渡す事を条件に他の生徒への吸血と二人の命を保障してもらったが、１５年間封じ込められていた怒りは大きく、ストレス解消のためにネギとの決戦は避けられない、と。

「でも、どうしてアスカには？」

「僕は魔法使いとしては出来損ないですから」

何故、アスカは対象外なのか。明日菜の疑問は尤もであった。

アスカの回答は端的ですらあった。何も嘘は言っていない。

アスカは魔法使いとしては間違いなく三流で、精霊魔術を使えない出来損ないという言は正しい。幾ら明日菜がアスカが強いと知っていても確かに格闘技によるもので、魔法を使ったところを一切見たことがない。

納得できないが少なくともアスカが一嘘をつくはずがないと信じている《・・・・・・・・・・・・・・》。

（なにか隠しているっぽいんだけど聞けそうな雰囲気じゃないわよね）

明日菜も納得出来たわけではないが、「魔法使いとしては出来損ない」と言ったアスカの表情が傷ついているように見えて、他に被害が行かないのならと矛を収めるしかなかった。

「ま、いざとなったら僕も戦いますよ。魔法使いとしては出来損ないでも戦えないわけではないですし」

「え、でも魔法が使えないと危ないんじゃ……」

出来損ないということから魔法が使えないと勘違いした明日菜が

戦おうとするアスカを心配して声を濁す。

「ああ、出来損ないといっても魔法が使えないわけじゃないですから大丈夫ですよ」

「あれ、そうなの？」

「まあ、出来る事は限られてくるので武術を活かした接近戦が無難だとは思いますが」

明日菜はアスカが一言でも魔法を使えないと言っていないのに自分が勘違いしていることに気づいて少し頬を赤らめ、続いた言葉に多いに納得した。現場は見ていないが明日菜の知る限りで一番強いと思っていた古菲すら容易く退けたと聞いた。

彼女は知らない。極限に至りし魔法使いの恐怖を。だからアスカの言葉を容易く信じ、任せることに決めた。それだけ彼の強さを知って体験してきたのだから疑う余地はない。

（よく言う。彼女と戦うのは自分かも知れないのに）

だが、アスカは知っている。魔法使いの恐ろしさを。強さを極めたものの果てしなさを。

真祖の吸血鬼ということもあってエヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マグダウェルの名は魔法界において恐怖の対象となっており、６００万ドル、日本円で大体５億円前後の賞金首となっていた。

だが、十数年前にナギ・スプリングフィールド（サウザンドマスター）に危機を救われ、一目惚れでもしたのか以来追い続けていた。

しかし、悪事をやめさせるためナギに「登校地獄」の呪いを掛けられ、麻帆良学園に封印されてしまう。

３年で呪いを解く約束をしたが現れず更に１０年前に失踪してしまい、ナギの魔力は強大で（力任せに術を使ったため）誰もがその呪いを解くことができずに１５年間学園に女生徒として登校し続けて現在に至る。

３年で解くという約束も果たされず、例え仲良くなっても卒業ごとに生徒の記憶から消去されてまた一年生からやり直し。呪いを解ける人間がいないから１５年も中学生生活を強制されれば誰でも恨むだろう。はっきり言って初対面時に殺されないだけで恩の字。封印からの開放という理由がなければどんな手段に訴えただろうか。

自身が告げた約束事を反故にするには、見掛けは子供だが真祖の吸血鬼で太陽を克服した半端じゃなく強い相手では、自分で自分の首を絞めるだけだろうと思う。

自分に惚れているから恨みはしないだろうと考えたのかもしれないが、愛情と憎悪は表裏一体のものだ。その愛が深ければ深いほど、反転すれば強大な憎悪へと変わる。現在はまだ未練が残っているが、何時その未練が憎悪に変わるか予想はつかない。

約束を守って待ち続けたのに、少なくとも死んだと噂される１０年前までは何処かで生きていたのに3年立っても果たされることはなかった。呪いを解けるものはおらずに結局１５年もの長い間、彼女はこの地に縛り続けられた。

サウザントマスターが責任を取ればいいのだが公式では死亡、行

方は全く分からない状態では向けられる先は行方の分かる関係者、息子の子供達だ。三年経った時点で呪いの解呪に来れないようなら、手紙でも良いから呪文の構成くらいは書いて送ればこんな事にはならなかった。

或いは送ったが学園長が秘匿している可能性もあるが、真偽は分からない。

全てを語ったわけではないが、何故エヴァンジェリンがアスカたちを狙うのか、それを明日菜に話した。

「え、１５年も中学生をやってるって。じゃあ何、エヴァちゃんって今何歳なの？」

１５年間の中学生生活という言葉で見た目と年齢が合わない事に気付いた明日菜が、疑問を投げかける。普通に中学生をして留年していたとして二十代後半。彼女の容姿は中学三年生というには幼すぎるからどちらにしても不自然さが残る。

「僕が調べた限りで生まれは百年戦争の頃、つまり１３３７年～１４５７年らしいですから６００歳前後のはずです。本人に確認したわけじゃないので合っているかは分かりませんが」

「ろ、ろっぴゃくさい……」

疑問に応えてもらうも、明日菜の頭では６００年というスケールの大きさに目を回さずにはいられない。

「麻帆良から出られる手段もなく、普通の人間なら１５年も幽閉されたらどうなるか分かりません。呪いを掛けた本人以外に解くとし

たら直系の血液が必要になります。１５年も幽閉されて呪いを解ける可能性がある息子達が現れたら嫌がらせもしたくなるでしょ？」

「まあ、確かに嫌がらせの一つもしたくなるわね」

勉強嫌いの明日菜としては１５年も中学生をやらされることを考えれば、エヴァンジェリンの行動も一応の納得がいった。だからといって容認することはできないが、想像するだけでも嫌気が差すのに実際にそんな目にあった彼女が嫌がらせしたくなる気持ちも理解できた。

「ネギ先生が一対一を望むならエヴァンジェリンさんも一人で戦うと言ってましたから他の人に被害が出ないのが唯一の救いです」

確かに彼女はそう言った。

だが、その本心が別にあるのは間違いない。そしてその本心もアスカは正確に理解しているので、他人に被害がいくことはない。

「どうしても戦いたくないのなら学園長達に言えばいいんですけどね。幾ら彼女が事を起こそうとしても学園長に制されれば止めざるをえませんし」

明日菜にはそう言ったが、アスカは多分父親の手掛かりを求めている兄さんは引かないだろうと思っていた。

アスカの内なる衝動と同じく、ネギのそれも自分では止められない類（たぐい）のもの。責めることも、止めることも、アスカには許されない。そうさせてしまった責任の一端がアスカにもあるが故に。

「それと故郷から下着２０００枚を盗んで投獄されていたオコジョ妖精が脱獄して、知己である兄さんの下へ来るかもしれないので見つけたら捕まえて連絡して下さい」

「オコジョ妖精が下着泥棒２０００枚、ね。もう何て言ったらいいのやら……」

明日菜もオコジョ妖精――――――つまりオコジョが下着泥棒、しかも二千枚も盗んだという話に呆れざるをえない。見つけたら捕まえて連絡することを約束した。それと仮契約はしないようにと伝えるのも忘れない。

（現状で一番仮契約をしそうなのが明日菜さんだからな）

最後に現段階で一番立場的に頼まれそうなので、オコジョ妖精に誑かされて魔法使い（ミニステル・マギ）の従者になる仮契約はしないように念押しした。高畑、学園長、アスカ以外でネギが魔法関係の話を出来るのが明日菜だけとなれば仮契約を迫る可能性は高い。

危険性を説明されずにあやかやまき絵辺り（のどかは微妙だが）は、喜んで仮契約を結びそうだから性質（タチ）が悪い。

授業中に漏らした言葉とあの性格では五分五分だが、誰かが甘い言葉でも囁けば簡単に気持ちを切り替えて教え子を従者にする可能性はかなり高い。そこに潜む悪意に気づかぬままに純粋に信じて。

話も終わったので明日菜は先に帰ったが、アスカは彼女に嘘はつかなかったが真実を言わなかった罪悪感と今後の展望の難しさに、しばらく一人で空を眺め続けていた。

第四十五話　闇の福音と原作主人公と少年　3（後書き）

次回の更新は『日曜日』の午前０時に予定しています。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

特別編　姫騎士物語（仮）（前書き）

すみません、本編の更新ではありません。妄想が爆発した特別編です。

休みなのに今日一日かけて作ってしまいました。前話の後書きで書いたものを纏めて一話にしてあります。

今回のはあくまで特別編であり本編となんの関係もありません。そこら辺を注意して見て下さい。

特別編　姫騎士物語（仮）

それは必然の出会いだったのかもしれない。

神楽坂明日菜は人生を変えるほどの出会いというものを二度ほど経験している。

一度目の出会いは、魔法学校を卒業して立派な魔法使い（マギステル・マギ）になるための課題として麻帆良に教師としてやってきた少年――――――ネギ・スプリングフィールド。

数えで１０歳（満年齢で９歳）だが、麻帆良学園中等部で英語教師を務める天才少年であるが、その正体は魔法使いであり、行方不明の父親を捜すために日々修行している。

着任初日にネギが魔法使いであることを知ってしまい、魔法使い達の事件に関わっていくことになる。

そして二度目の出会い、これこそが神楽坂明日菜の人生に最も影響を及ぼしたであろうことは間違いない。

中学二年生三学期の学期末で、最下位を取ったクラスは解散、その上特に悪かった人は留年どころか小学生からやり直しとの噂を聞いた明日菜らは、図書館島の深部にあるという、読めば頭が良くなる「魔法の本」を求めて忍び込んだ。

クラスの成績最下層の五人――――通称バカレンジャーと図書館島探検部の三人＋明日菜が魔法使いの能力をアテにして保険として連れてきたネギ（初っ端からネギが魔法を封印したといざこざがあったが）の九人で図書館島に入った。

人外魔境の道程を越え、彼女たちは遂に魔法の本の安置室に辿り着くも立ち塞がったゴーレムが化したツイスターゲームで負け、更に下層へと叩き落された。

地底図書館で目覚めた彼女たちは出口を見つけることが出来ず、ネギの励ましで試験勉強を始めた。

図書館島に進入して二日が経過した明日菜は水浴びの途中で、水中に沈んだ棺らしきものを発見した。

厳重に錠が掛けられ、この時の彼女には知る由もないが幾重にも魔法的な封印が成されていたそれに、彼女は好奇心から触れてしまった。

本人が自覚していない魔法無効化能力（マジックキャンセル）によって解（ほど）かれる封印。錠も魔法に連動するかのように解（と）けていく。

驚愕する彼女の前で棺が開き、中に入っていたモノが浮かび上がった。

それは――――人であった。

大人と比べることすら間違いな小さな体。未だ大人になっていない自身よりも小さな体。数えで１０歳のネギよりも小さな体。

見た目の年齢から見るに七～八歳頃の少年であった。

小さな体が浮力によって浮かび上がり、棺を開けた直ぐ近くにいた明日菜の腕の中へと収まる。

彼女が直後に驚きで水中にいるにも関わらず、口から大量の水泡と共に叫び声を上げてしまったのは少年が下着すら着ていない、正真正銘の素っ裸であったからだ。

一度目の出会いによって明日菜は魔法と関わり、二度目の出会いによって己が過去と運命に向き合う事になる。

こうして出会いとしては衝撃的でありながらいまいちシリアスになれない彼と彼女の出会いであった。

これはアスナの、神楽坂明日菜としての生きるための物語である。

衝撃的な出会いをした二人だが、明日菜は困った。多いに困った。

まず目を開けない少年を水中にいるわけにはいかず、抱えて浮上するも丁度その場に居合わせたネギに見られ、他の者たちも集まって件（くだん）の少年の周りで喧々囂々。

そこに彼女たちを地底図書館に落としたゴーレムが現われ、なんやかんやで魔法の本を奪取し、置いていくわけにはいかないので明日

菜が少年を抱えて滝の裏口で見つけた非常口から逃走。

最終的に本を捨てることで逃げ切ることが出来たが、少年は体格的にダボダボなネギの服（もっとも体格が近いから）を着て試験を迎えるその時まで未だに目を覚まさなかった。

まさか厳重に封がされていた棺の中から出てきましたとは誰にも言う事が出来ず、最終的に浮かんでいたところを見つけたと苦肉の策として周りに説明した明日菜であった。身元を示すものは何も見つからず、目を覚まさない。学園長に相談した明日菜は見つけた自分の責任もあって世話することを決めた。

少年が目を覚ましたのは試験から一週間後、試験結果が発表されて一悶着あったもののネギが正式に教諭として認められた日のことであった。

しかし、目覚めてからが困った。

本人曰く、自分が誰か分からない、ここはどこ、と典型的な記憶喪失であった。

身元も自身が誰かも分からない少年の行方は順当に行けば施設になる――――はずだった。

明日菜が自分が引き取ると学園長に申し出たのだ。結局は未成年である彼女が引き取れるはずもなく、法的な後見人は明日菜同様に高畑となっている。

何故、彼女が少年を引き取ると言い出したのか、それには幾つか理由がある。

まず第一に少年の容姿だ。

どこか似通った顔のパーツに髪は明日菜と同じ色で、瞳の色が左右で違う虹彩異色症（オッドアイ）で色が左右逆と、並べば姉弟と言えるほどに似ていた。

次に最初に少年を見つけたという思いから。

棺から出てくるという衝撃的な出会い、家族のいない自分にそっくりな容姿、少年から感じられる不思議な既視感に衝き動かされた結果である。

明日菜達の部屋で一緒に暮らすことになった少年――――――神楽坂明日香（戸籍上、明日菜の弟になっており名前がないと不便だからだろうと明日菜の名前を捩ってつけた）は記憶がないことも関係しているのか純真無垢を体現しているような子供であった。

見た目明日菜に似ていることで生徒たちも可愛がり、皆の愛情を一身に受けた。

嘘を言われても簡単に信じ、知らないおじさんについておいでと言われれば素直についていくような、まるで生まれたての赤ん坊のような子供だった。

そんな明日香を心配して明日菜がどんどん過保護になっていくのはある意味必然で、基本的に子供は嫌いと言っていた彼女の変わりようにショタコンではないがあやかにからかわれるのは仕方ないだろう。その現場を明日香が見て泣いてしまい、二人が慌てて協力したのは予断ではあるが。

自分と一緒に寝ると怒る明日菜が明日香と毎日一緒に同じ布団で寝ていることに、明日菜に姉のネカネを投影しているネギは嫉妬した。が、自分を兄と慕う明日香を前に、今まで自分よりも年下と接したことがないので若干見栄を張った部分はあるも、年上として成長した部分を見せた。

春休みは親鳥の後を追う雛の如く明日菜に明日香という存在が付随し、なにごともなく進んだ。

吸血鬼編では、明日香との出会いで兄としての矜持に目覚めたネギが奮起し、若干ではあるが原作よりは前向きに事を成して情け内面は減っている。ちなみに明日香の後押しもあって明日菜とネギの仮契約は行われた。

修学旅行はブラコンに目覚めてきた明日菜の勢いに押された学園長の計らいで明日香も京都に行けるようになった。

流石に木乃香が誘拐されて明日香が一緒に行くわけにもいかず、初日の出来事は全く同じ。精々、明日菜と木乃香が風呂に行く時に一緒にいたぐらいであろか。

二日目もラブラブキッス大作戦以外は同じ。

ラブラブキッス大作戦の最中、明日菜達と風呂に入っていた明日香は先に上がり（ネギの影響で風呂が苦手）、なにやら騒いでいた和美とカモを発見した。

明日香に見つかった二人はテンパリ、キスをすると賞品が貰えるのだと表の真実を暴露してしまう。

簡単にゲロしたが、それはカモが明日香を苦手としていたからだ。腹黒く、コと称するのが適切なカモは金銭に弱くネギを好意はあれど利用しようとしている観点から見て、明日香の簡単に人の嘘を信じる純真さは自身の汚さを浮き彫りにさせるため良心を物凄く痛める。それは和美も同様である。

二人が後悔した時には既に遅く、明日香は見つけた人にキスをしてしまった。

カモや和美がルールとして対象に選んだネギ――――――ではなく、明日香の大好きな明日菜に。

その後のことを語るのは無粋というものだろう。夜叉が降臨し、二人の命運は星の彼方に。

次の日、ネギがのどかと説教する明日菜だがその顔に締まりはない。その腕の中には明日菜に抱えられてご機嫌な明日香がおり、どうやら明日菜は完全にブラコンに目覚めてしまったようだ。

それはともかくズタボロのカモが仮契約カードの説明をしたのだが、問題が起こった。

明日香の仮契約カード（明日菜が主で明日香が従）は真っ黒に染まっており、人物が描かれているであろう部分に剣のようなシルエットが見えた。

アーティファクトを出して明日香に見せて喜んでいる明日菜を前に、仮契約が失敗したのではと考えたカモはそのカードを出すことはなかった。

この時、カモがもっと真剣に考えていれば、明日菜達が仮契約カードを追及すれば何かが変わったかもしれない。しかし、それはもはや終わった話であった。

その後、ネギと明日菜、明日香は総本山に向かい、刹那達と別れた。囚われた鳥居で明日香に良いところを見せようとして失敗した明日菜以外に出来事の差異はない。

総本山を訪れたネギたち。密使を知らない生徒たちもついてきてしまうアクシデントはあったが、関西呪術協会の長と会う事が出来た。

その時、関西呪術協会の長――――近衛詠春の目がアスカで止まると驚愕に目を見開いた。明日菜達に聞かれても誤魔化そうとした彼だが動揺は著しい。

しかし、問われても答えることはなく、その胸の内に仕舞われた。

宴会をして、風呂に入り、と楽しい時を過ごすも長くは続かなかった。

襲来する侵入者、奪われた木乃香、追撃するネギ、刹那、明日菜＋オマケの明日香（一人で置いておくのも危険なので）。

誘拐犯に追いついたところで召喚された鬼達、仮契約するネギと刹那。単身誘拐犯を追っていたネギと残った刹那、明日菜＋明日香の戦いが始まる。

ブラコンパワー全開で刹那を上回る動きを見せて明日香を守りながら戦う明日菜。明日香を守りながら怒涛の活躍を見せる明日菜に木

乃香を奪われた自責の念に駆られながらも奮起して戦う刹那。

現われる助っ人達。激突するネギＶＳフェイト。

だが、一足遅く召喚されてしまったリョウメンスクナノカミ。

ネギが仮契約カードで刹那、明日菜を呼んだ。うっかり明日香を置き去りにしてきてしまった明日菜は、自分たちが仮契約をしたことを思い出してカードを掻っ攫い、明日香を呼ぶ。

禁じられた白鳥の羽を晒し、木乃香を助けに向かう刹那。再度激突するフェイトＶＳネギ＋明日菜＋明日香。

しかし、実力差は如何ともしがたく簡単に圧倒され、石化の魔法【石化の邪眼】が三人に向けて放たれる。

ネギと明日香を庇って石化する明日菜の服。明日菜の魔力完全無効化を確信したフェイトだが、一つの異常な光景を目撃した。

明日菜の身体だけではネギと明日香の二人を完全に庇うことはできない。偶々、石化の魔法からは明日香を間に挟んでいたので被害はなかったが、明日香の半身は諸に石化の光線を受けた。

――――なのに、明日菜と同じく服しか石化していない。

窮地に陥っていた二人は気づかなかったが魔法を放ったフェイトは当然、気付いた。

驚愕を露にして固まるフェイト。

そこに石化した服を割って明日菜のアーティファクトが障壁を無効化し、接近したネギの魔力が籠もった拳がクリーンヒットした。

反撃しようとしたフェイトの手を掴み、現出したエヴァンジェリンが一撃で下した。

が、誰もが注意を払っていなかったリョウメンスクナノカミガ術者を失って暴走し、服が固まって動けない明日香に向けて一撃が迫る。

距離的に誰もが動けずに見ているしかできない状況の中で、誰よりも早く行動した明日菜が知らないはずの瞬動術を行使して奔る。

だが、間に合わない。

どれだけ速く奔ろうとも明日香を連れて一撃から逃れる術はなかった。

彼女に出来たのは奇跡を願って明日香に覆いかぶさることだけ。

リョウメンスクナノカミの一撃は二人を覆い潰し、もはや死は確実である――――はずだった。

叩きつけられた腕の下から現出する黒。

徐々に競り上がっていった腕の下から現われたのは黒に染まった禍々しい大剣を持った明日菜。明日菜が大剣を振り上げると、体格差などお構いナシに揺らぐリョウメンスクナノカミの体躯。

そして大剣から広がった黒の波動が行き渡ると魔力が消失して浮かんでいることが出来ずに地上に降りるエヴァンジェリン。

それが二十年前の大戦末期に起こった魔力消失現象であると知るものはいない。

両腕で持った大剣を肩の後ろに力を込めるように息を吸い、振り下ろすとリョウメンスクナノカミの体が斜めにバッサリと斬れ、まるで存在できないように消失していった。

誰もが異常な光景を前に動けない中で大剣を振り下ろした明日菜の体が崩れ落ちる。同時に大剣が光り、剣としての形を失って明日香となった。

異様なことの前に倒れた二人の安否を心配して傍に近寄る。

そこに潜んでいたフェイトによって放たれた凶弾がエヴァンジェリンと意識を失った明日香に迫る。エヴァンジェリンの方は自分で対処するも、明日香には何の対策もない。

明日香は石の槍に貫かれるかと思われたが、肌に触れたと同時に槍は塵となって消えた。

それをエヴァンジェリンに切り裂かれて見届けたフェイトは満足するように消えた。

その後の展開はそう変わりばえしない。右手が石化していたネギの症状が悪化し、助けるために木乃香が仮契約し、夜が空けてナギの別荘に行った。

終始、詠春は明日菜や明日香に対してなにかを含んだような視線を向けたままで別れる時までそれは変わらなかった。

物語は麻帆良へと戻る。

修学旅行後、明日香が剣となったことに不安を感じた明日菜は彼を連れてエヴァンジェリンの元を訪れた。

そこで自分が叶わなかったフェイトに不意打ちとはいえ、あっさりと勝ったエヴァンジェリンに弟子入りを申し出ていたネギと鉢合わせした。

弟子騒動は一悶着あったものの、試験することで決着がつき、明日香の剣化については興味があったエヴァンジェリンは明日菜の申し出を簡単に受けた。

弟子試験は茶々丸相手にふんばりを見せたネギが一撃入れることがクリアして、ハレてエヴァンジェリンの弟子となった。

その裏で明日香の体の様子がおかしくなっていくことに誰も気づいていなかった。

南の島に遊びに行っても明日菜と一緒に楽しく遊んでいる様子を見て誰も気づけなかったのは無理からぬものがあった。ちなみにネギと喧嘩はしていない。兄としての姿を見せようとするネギと、ブラコン全開で最優先が明日香の明日菜では自分に黙って図書館島に潜ったからと言って喧嘩することもなかったわけだ。

別荘でも殊更変わったことがあったわけではない。ネギの記憶を明日菜と一緒に見た明日香がボロ泣きして二人を困らせたぐらいだろうか。

皆が別荘を出たその頃、麻帆良に黒い影が進入した。

随一の戦闘能力を持つ刹那が真っ先に拘束され、浴場で魔法のことを知っている生徒も捕まった。

第六感とも言うべきか、なにかを感じ取ったネギは外を見に行ったが、ネギが出て行った後の部屋に影が進入した。

その影が真っ先に狙ったのは明日菜――――ではなく、明日香。戦闘能力皆無で同年代よりも非力な明日香は抵抗する間もなくあっさりと捕まり、木乃香も捕らえられた。

明日菜だけは京都の経験もあってなんとかかわすことができたものの、二人が連れ去られるのを止める事ができなかった。

その頃、千鶴に助けられた小太郎は悪魔ヘルマンによって倒され、かけつけたネギの前で千鶴を拉致して消えた。

共同戦線のネギ、小太郎と合流した明日菜はヘルマンが指定した決戦の場へと向かう。

水牢に囚われた生徒たち、一人だけ別に両腕を拘束された明日香の姿を見て、ネギと明日菜がキレた。

先制攻撃で魔法の射手を放ったネギ。しかし、障壁かなにかでヘルマンの直前で弾かれた。

奇襲が失敗し、ステージ上部に着陸するネギと小太郎。

だが、明日菜だけは止まることなくアーティファクトのハマノツルギを手にヘルマンに攻撃を開始する。ネギと小太郎にはスライム三人娘が迫り戦闘を開始した。

鬼神の如き攻撃を重ねる明日菜の攻撃を難なくかわすヘルマン。そこに小太郎が影分身でスライム三人娘を相手をしてフリーになったネギが背後から封魔の瓶を発動する。

しかし、封印は成されることなく、明日香の絶叫だけが響き渡る。

封印の呪文が掻き消され、ヘルマンの実験は成功した。

ならば後の仕事、学園の調査が主な仕事だが、ネギとアスナとアスカが今後どの程度の脅威となるかの調査を開始した。

始まるヘルマンの蹂躙。

魔法が効かないヘルマン相手に放出系の術や技は効かない。残るは肉弾戦しか残っておらず、三対一という数的には有利な状況でありながら手加減している様子でもなお圧倒した。

期待外れの様相を呈するヘルマンはネギを挑発しだす。

過去のトラウマを穿り出されたネギは暴走。魔力の暴走（オーバードライブ）でヘルマンを圧倒する。

そして自身が持つ最強の魔法【雷の魔法】を放つも無効化され、悪

魔化して本性を出したヘルマンの石化光線が放たれようとしたその瞬間――――世界が切り替わった。

無理やり己の能力を利用されるということはかなり負担を明日香に強いた。

魔法の射手クラスならまだしも、魔力の暴走（オーバードライブ）させて莫大な魔力の大半を次ぎ込んだネギの【雷の暴風】を受けたことで明日香の許容量は限界を超えた。

声にならぬ絶叫を上げた明日香の姿が修学旅行同様に変わっていく。姿が漆黒の大剣に変わると同時に拘束が弾け飛んだが、それは些末な出来事に過ぎなかった。

明日香だった大剣はまるで主を見出したかのように明日菜の元へと跳び、彼女が剣を掴むと同時に黒の波動が拡がり世界から魔力が失われいてく。

この空間において魔力や気といった超上の力はその存在を許されない。

飛んでいたネギは纏っていた魔力を失って墜落。石化光線を放とうとしたヘルマンは対象と魔力を失って放たれずじまい。

誰もがそれを成した明日菜と彼女が持つ明日香だった大剣を注視する。

明日菜は注目されていることを一顧だにせず、大剣を地に突き刺し、なにかを呟いて両手を合わせた直後に発生した莫大なパワーと共に

空を跳んでヘルマンへと迫る。

先程までの彼女ではない。感情を失ったかのように目からは色が失われ、淡々とヘルマンに攻撃を加えられる彼女からは常からの元気な様子は皆無。まるで機械の如く精密さでありながら瀑布の如き苛烈さをもって三対一で圧倒されたヘルマンを逆に圧倒していく。

詰め将棋のようにヘルマンを追い詰めた明日菜は大剣をヘルマンに突き刺して仕留めた。

ヘルマンの身体は魔界に帰ることなく、大剣の能力が発動して跡形もなく消滅した。

誰もが変貌した明日菜の狂騒に動けない中で、彼女の身体がぐらりと揺らぎ倒れこんだ。地に倒れると共に大剣は裸の明日香へと戻り、動きを見せない二人の元へと急ぎ集まる生徒とネギたち。

目を覚まさない二人。

それらを見ていた二人の人物はそれぞれの反応を示していた。

一人は己の目論見どおりに能力を覚醒させていく二人に罪悪感を抱きながらも歓喜を覚えていた。

一人は当初の危惧通りに能力を覚醒させていく二人に危機感を覚えてある決心を固めていた。

まるで空だけが二人の今後を物語るように益々荒れ狂っていた。

ヘルマン戦以降、体調を崩しがちの明日香に付き添う明日菜はまるで高畑への好意を失くしてしまったかのように少年を優先させていた。ヘルマンとの戦いを覚えていた彼女も不安を覚えていたのかもしれない。どこへ行くにも明日香を連れ、学校以外には離れない二人。

深まる疑問、生まれ始めた確執が続々と関係を蝕む中で学園祭が始まった。

様々な人間の思惑が入り混じる中で始まった学園祭は当初から一部の人間――――この地に所属する魔法使いは多忙を深めた。

接触するネギと超。ネギは助けた謝礼で超からある物(時計のようなもの)を貰うが、これが彼女の策謀の手だとは気づかずにある物――――タイムマシンを便利さから何度も行使する。

その中でのどかの願いによってネギが「キスプレデター」化した。

そこに明日菜＋明日香と刹那が助けに入ったものの、明日菜は自身の失言から狙われてしまう。

刹那を庇った明日菜はネギに拘束されてしまい、彼女の貞操は風前の灯と思われた。

だが、そこで明日香登場。

明日香の前で無様な姿を見せられない明日菜はブラコン魂を全開に

してネギを跳ね除けにし、ボッコボッコにしてしまった。姉は強し。ブラコン姉はもっと強しであった。

始まるまほら武道会。

明日菜は自分と明日香の分まで学園長に養って貰っている状況に、１千万の優勝賞金に目が眩んで出場を宣言。直ぐに出場する面子を前に尻込みするも明日香のタメにと奮起。予選を危なげなく突破。

始まる本選。

明日菜は刹那と試合に予想以上の健闘……いや、大会のルールの上で本気を出した刹那を相手に全くの互角の勝負をしていた。技量では劣るものの総合的な面において明日菜の戦闘能力は刹那に迫っていた。

横合いからちゃちゃを入れたフードの男の所為で反則負けになるも、彼女の能力の伸びには刹那やエヴァンジェリンにしても驚きを禁じえなかった。そのまま戦っていた場合、明日菜が勝つ可能性も十分にあったのだから。

決勝戦、ネギＶＳクウネル。

幻影の父との再会を果たして戦ったネギだが破れた。最後にネギに声をかけて消えかけた幻影のナギだが、明日香を見た瞬間、驚愕から目を見開いて驚愕を露にした。高畑を救出するために救援を依頼されるも、明日香を危険な場所に連れて行くわけにはいかずに残った明日菜もその場にいた。

近くにいたネギになにかを伝えようとしてそのまま消えて、クウネ

ルへと姿を変えてしまった。

明日香のことを問いかけたネギにクウネルは誤魔化してその場からいなくなってしまった。ネギと明日菜の胸に大きな不安を残して。

時間は流れ、それぞれが過ごす中で明日香を連れた明日菜は黒尽くめの青年と対峙する。

明日菜と同年代の青年。だが、その容姿はまるで明日香がそのまま成長したような、明日菜を男にしたような顔をしていた。

青年の狙いは明日菜ではなく明日香。まるで宣戦布告のような言葉だけを残して去っていく青年を見届け、明日菜は明日香を抱えて膝をついた。圧倒的な力の差を感じ取り、戦う前から敗北を実感したのだ。

そして夕方か夜の時間帯、激突する超とネギ。

だが、始まった超のお別れ会によって闘いは中断。

お別れ会後、思わせぶりな発言と共に消えた超の対策を立てるために別荘に入ったネギたち。エヴァンジェリンとの話で決心を固めたネギは超を止めることを決心する。生徒たちもネギの思いに賛同して共に戦う意思を見せた。

その中で明日菜だけが黒尽くめの青年の事を考えていた。自身だけで戦えば間違いなく負ける。だが、超との決戦を控えたネギたちに頼ることが出来ない状況でいた。

別荘を出るネギたちだがここで超の策謀の結果が一つの形となって

現われる。

別荘を出た明日菜と明日香だが他の者たちの姿がない。別荘に超のものらしき書置きが残されていた。

超の勝利宣言とタイムマシンにかけられていた罠によって未来に送られたネギたち。

書置きは再生された直後に燃え尽き、なにが起こるかを知っているわけではない明日菜の話を学園が無条件で信じるには証拠が足りなすぎた。超を疑っているのは学園側も同じだが確たる証拠がない。

エヴァンジェリンは中立を宣言と、ネギたちの想いを守るため、明日菜は戦闘能力皆無の明日香と孤立無援の戦いを迫られた。

明日菜の努力も虚しく始まる超の機械軍勢による侵攻。学園側の抵抗も虚しく五個所の魔力溜まりは占拠された。

唯一明日菜の話を信じた高畑の手助けで超の元へ迫る明日菜。その間に高畑は絶望的な戦力差の元で唯一残った魔力溜まりを守る。

タイムマシンを駆使する超、スナイパーの真名という圧倒的不利な状況において明日菜は己の能力を駆使してよく戦った。

だが、敗北。

強制転移弾を放とうとする超に、明日菜は嘗てないほど力を求めた。

そして明日香は明日菜の求めに応じて己を漆黒の大剣と化して彼女の願いに応じた。

絶対能力圏ともいうべきフィールドを構築した明日菜によって強制転移弾は意味を成さず、タイムマシンすら使えない。

盛り返した明日菜。

だが、そこに黒尽くめの青年が強襲する。

明日菜だけが能力を発揮できる空間内において青年も能力を発揮できた。明日菜と明日香と同一にして同質。

対峙したことのない己のみの能力で迫る青年。基礎の実力が違う。強さが違う。更に青年に超が協力したことで圧倒され、ズタボロになっていく明日菜。

明日香は更に能力を振り絞る限界を迎えて剣化を維持することが出来ずに人間状態へと戻ってしまった。

絶対絶命。

明日菜にはもはや力は残されておらず、戦えない。もはや覆す手段はないと思われたその時、未来に飛ばされたはずのネギ・スプリングフィールドが駆けつけた。

未来において魔法が世界にバラされ、明日香と明日菜が死んだことを知ったネギたちは、未来の高畑の手引きで世界樹地下の最後の魔力を使って過去に戻って来たのだ。

戦闘を開始する超とネギ。

真名は楓が抑え、魔力溜まりの守りを生徒たちに任せた高畑が黒尽くめの青年と対峙する。

タイムマシン同士の超絶の闘いを制したのはネギ。しかし、彼女は呪紋を発動させ、魔法を放つ。だが、こと魔法戦闘においてはネギの方が圧倒的に上だった。打ち負けて敗北する超、勝利するネギ。

反対に高畑と黒尽くめの青年の闘いは、膠着状態に陥っていた。単純に実力では本気を出した高畑が青年を一歩上回る。だが、青年は己が持つ明日香、明日菜と同一の魔法無効化能力を発動させ、状況は均衡状態に入っていた。

意識のない明日香を抱えて戦いを見守る明日菜。

しかし、そこに新たな魔の手が迫る。

修学旅行では彼女たちの前に立ち塞がり、ヘルマンを使役して麻帆良に送った張本人、フェイト・アーウェンルンクス。ヘルマンが消失した所為で情報を得られなかったフェイトは独自に麻帆良に進入していたのだ。

彼の狙いは「黄昏の姫御子」たる明日菜――――ではなく、明日香であった。

怪我を負っていた明日菜は簡単に意識のない明日香を奪われるも、闘う力を失っていようと関係なく向かって行った。

そんな彼女にフェイトは一切の情なく淡々と降し、重傷を負って動けない明日菜を置いて明日香を連れ去った。

目的である明日香が連れ去られたことで戦う理由を失った黒尽くめの青年は撤退し、超が負けたことで機械群も停止した。

明日菜の慟哭だけが夜空に響いた。

学園祭の終了後も騒動の輪は治まりを見せていなかった。

なんとか一連の騒動を麻帆良祭のイベントとすることで決着は見るも、破壊された街、残された機械群、圧倒された魔法使いたち、攫われた明日香、重傷を負った明日菜など問題は山積みであった。

超はネギらに未来に帰ったことで首謀者への対応などが楽な分はマシかもしれないが、彼女が去り際に残した言葉は生徒やネギたちの心に影を残した。

彼女の目的は「魔法を世界にバラす」ことであり、それ事態はまだ良かったのだが、その後が問題だった。「神楽坂明日菜、神楽坂明日香の抹殺」も彼女の目的に含まれていた。いや、それどころかこちらこそが本命であると告げて彼女は未来へと帰って行った。あらん限りの憎悪の面持ちと共に。

明日菜の治療も難を極めた。

明日香を攫われたことで悲嘆にくれる拒絶の意思に呼応するように治癒魔法すらも打ち消してしまうのだ。

そんな重傷な有様の明日菜を寮においておいくわけにはいかず、エヴァンジェリンの別荘に連れて行かれた。時間をかけて自然治癒を待つしかないのだ。

別荘に籠もった彼女に多くの魔法を知る生徒たちが励ますも明日菜は変わらない。そんな中でネギだけは彼女の元を訪れず、エヴァンジェリン師の下で修行を続けた。

明日菜の傷が治った頃、エヴァンジェリンがある命令を下した。

ネギと明日菜との勝負だ。

皆が見守る中で始まった戦いは一方的にネギの圧倒に終わった。明日菜には怪我のブランクもあるだろうがネギは強くなっていた。

明日香が連れ去られたことで悲嘆にくれたのはなにも彼女だけではない。

大事な決戦でありながら超の罠に引っ掛かり、明日菜を孤立無援の戦いに向かわせたこと。自分は遅れて現われ、超と戦って勝利したものの明日香が攫われるのを止める事が出来なかった。

明日香が一番に懐いていたのは明日菜なのは誰が見ても同じであろう。二番目に懐かれていたのは聞かれれば誰もがネギの名前を出す。

年齢が近く同姓ということもあって女子寮、それも同じ部屋で暮らすなら仲良くなるのは必然であった。

ネギの明日香に対するものは並々ならぬものがある。周りが年上ばかりの中で唯一の年下であり、今までいなかった自分を兄と慕う存

在を守るという思いは決して明日菜にも負けていない。

そんなネギが明日香が攫われたと聞いて黙っていられるはずがない。だが、攫ったのは今のネギよりも間違いなく上にいるフェイト。更に正体不明で高畑と互角の戦いをした黒尽くめの青年が明日香を狙っている。

彼らと対峙して明日香を助けるには、いまの自分は非力すぎる。父のように強くなりたいという思いはある。だが、それよりも目の前の明日香を助け出したいと熱意がエヴァンジェリンすらも驚くほどのスピードで上達する原動力となっていた。

ぶつかり合ってネギの想いを知った明日菜は立ち上がる。

明日香を助け出せるだけの力を求め、目の前に立つネギと共に明日香奪還を心に決める。

その想いに同調した生徒たちと決心を露にする中、エヴァンジェリンが告げる。フェイトが魔法世界に渡ったという目撃情報があったと。

クウネル――――――アルビレオとの茶会で、何時か魔法世界に行くつもりだったネギは夏休みが始まったら向かうことを表明する。

ここに魔法世界行きが決定した。

明日菜の強き意思に興味を惹かれたエヴァンジェリンの下で二人はどんどん強くなっていく。

そして時は来た。

夏休みが始まり、アーニャという襲来者はあったもののウェールズへ渡り、ゲートから魔法世界にやってきた。

しかし、そこにフェイトが仲間を連れて襲撃した。彼らが巻き込まれたのは偶然であるものの、存在に気づいてしまったネギ、明日菜に気づかれ、先制攻撃を断行した。

それによってネギが負傷、刹那たちは簡単にあしらわれる。

強くなった明日菜だからこそフェイトとの力の差を自覚してしまい、迂闊に動けない。だが、明日香はどうしたのかという問いかけに答えないフェイトに激昂しながらも彼女とネギだけはやるべきことを見失っていなかった。

怪我を押してフェイトに奇襲するネギ、皆の目がネギに向いた瞬間に武器やカードが収められた箱を破壊した明日菜。

ネギの代わりにアーティファクトを発動した明日菜がフェイトと対峙する。他の生徒たちも参戦し、その間に木乃香がネギの治療を行う。

ネギが回復して彼女たちは体勢を立て直すも既に遅く、フェイトらは目的を果たした。

ゲートは破壊され、彼らは強制転移され、バラバラに魔法世界各地へと散らばっていく。

拳闘大会で自分の存在を全世界に晒したネギの下に続々と集まっていく生徒たち。

カゲタロウとの戦いで自身の無力さを自覚し、出会ったジャック・ラカンの指示を仰ぎ、闇の魔法を習得した。

フェイトとの再度の対決。

互いに譲れぬ一線のために争うネギ＋明日菜ＶＳフェイト。

曼荼羅のような魔法障壁も明日菜の魔法無効化の前には意味を成さない。魔法世界に来てからは旧世界にいた時よりも異常な速度でまるで初めから知っていたことを思い出すような上達した明日菜の戦闘能力は、闇の魔法を使うネギと二人で挑めばフェイトに迫るところにまでいた。

それでもフェイトとの実力差から二対一でようやく互角の戦いを繰り広げた。

ラカンの乱入に自身の不利を悟ったフェイトは逃走。

その後、ラカンによって意図的に伏せられた過去が語られる。

途中で信じられないほどの頭痛に冒された明日菜の意識が混濁する。倒れた明日菜が忘我の果てに見たものはラカンが語らなかった過去。

まるで自身が見てきたかのように流れていく過去に彼女は慟哭する。

目覚めた彼女はラカンに詰め寄った。ラカンならば彼女の過去を、真実を知っているだろうと思ったからだ。

だが、ラカンは黙した語らず。答えさせたければ実力行使でしろと

だけしか言わない。

ラカンは明日菜にだけ自分が拳闘大会に出場する意向を伝えた。事実、カゲタロウと組んで現われ、ネギたちを混乱に陥られる。

そして決勝、小太郎と選手交代をした明日菜とネギがラカンと対峙する。

ラカンの気弾、アーティファクトは明日菜の魔法無効化の前に意味を成さず、発動するネギの切り札、雷天大荘。魔法使いに絶対なるアドバンテージを以ってカゲタロウを圧倒する明日菜。

しかし、一度は追い詰めるも本気になったラカンに圧倒されるネギと明日菜。

倒れるもネギは己がやるべきこと思い出し、明日菜は明日香を取り戻すために二度と敗北しない誓いを胸に立ち上がる。

ネギのもう一つの切り札の発動のため、「咸卦法オーバードライブ」という自殺技で二人を相手取る明日菜。

雷天双荘を発動させたネギに、時間稼ぎをしながらカゲタロウを倒した明日菜はバトンタッチして意識を失う。

明日菜からバトンを受け取ったネギは圧倒的スピードで翻弄し、オリジナル呪文すらも囮として最後の奥の手、敵弾吸収した。ラカンのパワーをも取り込んで倒す。

勝利を確信したネギに、しぶとくラカンは復活するも肉弾戦の末に引き分けに終わる。

試合後、明日菜の強さを認めたラカンの口から語られる彼女の過去。

それでも明日菜は揺らぐことなく、明日香を取り戻す意思を固めていた。ラカンが語らなかった部分に気づくことなく。

パルらの働きによってフェイトらのアジトを突き止める。

協力してくれたリカードらに挨拶に向かう途中、オスティア総督クルトと対峙してしまったネギたち。明日香の存在を仄めかし、他にも色々とネギと明日菜を挑発するクルトの間で戦闘が起こる。

乱入者のお陰で事無きを得るも、クルトから舞踏会への招待状が入っており、ネギらはそれを受けた。

舞踏会に参加したネギたち。

クルトに認められた従卒は三名までだが、明日菜だけは特別扱いで同行した。

再度対峙したクルトの揺さぶりが始まった。

トラウマを抉られて心奥を暴かれたことでネギが暴走する。クルトをボロボロにしたネギの前に立ち塞がったのは明日菜。のどか、和美、千雨の助けもあってネギは、芽生えたものは復讐だけではないと大切なことを思い出した。

クルトが用意した「父と母の物語」そして「人の狂気の物語」。

ラカンが見せた過去と大体に関して差異はない。

だが、墓守り人の宮殿の最終決戦からは違う。

投入されるまるで意思を感じさせない数百人に及ぶ十代前後の子供たち。まるで消耗品のように続々と敵に突っ込んで消えていく彼らを止めようと赤き翼の面々も墓守り人の宮殿に進入する。

対峙する完全なる世界と赤き翼と数多の犠牲をかけても止まらぬ子供たち。

赤き翼の静止を振り切り、完全なる世界へと特攻かけて死んでいく子供たち。声では止まらず、実力で止めるには場が悪すぎるため彼らは完全なる世界を倒すことを選択した。

だが、彼らが勝利した時に子供たちは残らず死に絶えて死骸を晒していた。

無力感に苛まれたナギは初代アーウェンルクスを捕まえ、黄昏の姫御子の居場所を吐かそうとした。

そこに突如、魔法世界の神たる造物主が現れ、彼らを一蹴する。

ラカンは両腕を失い、詠春とアルは重傷と満身総意であった。

まだ傷の浅いナギとゼクトは造物主に戦いを挑む。

が、ゼクトは攻撃を受けて戦闘不能。ナギが一人で造物主と戦い、倒しかけたところそれはやってきた。

暗黒を背負い、世界を塗り替えていくソレを前に造物主が恐怖の叫

びを上げる。理性ではなく本能で実感したのだ。アレは不滅たる彼を殺し得る存在なのだと。

造物主は戦いを止め、己が宿っていた身体を犠牲にして逃亡した。ゼクトの身体を乗っ取って。

造物主を圧倒したソレは逃げた彼を追うことなく、暗黒を消してその場に姿を現した。そして――――落ちた。ナギの腕の中へと。

ナギは瞠目した。

造物主を苦もなく圧倒したソレが5歳程度の子供であったからだ。この戦いに乱入してきた子供たちよりもなお幼い。更にその容姿はどう見ても性は違うが幼くしたアスナそのもの。驚かぬ方がおかしい。

だが、驚いている暇はない。儀式は完成し、世界の始まりと終わりの魔法は発動した。

それをアリカが自らの国を犠牲にすることで事無きを得た。

しかし、アリカは逮捕拘束されて二年後に処刑が決定。

二年間の間、ナギは世界を回りながら人々を救っていった。その間に最終決戦で拾った少年の調査も行っており、信じられないことがわかった。

全ての始りは数十年前。

錬金術師と研究者の研究から始まった。

研究者は魔法世界に関することを調べており、ふとした段階で魔法世界が人工世界であることに辿り着いてしまった。そう遠くない未来に崩壊することまで気づいてしまったのが災厄への始まりであった。

彼はその事実を世界中、といっても国のトップに伝えるも彼らはなにもしなかった。

警鐘を鳴らし続けた彼を疎み、各国と共謀した造物主の指示によって謀殺してしまう。

それを知った錬金術師は唯一の理解者である研究者を失ったことで狂気に取り付かれ、世界に対する復讐を決心した。

研究者の研究結果は全て錬金術師の手元に渡り、彼は己の知識を下に狂気の研究を始めた。

神を殺す、ただそれだけのために。

各国もまた完全なる世界に協力しながらも、不滅たる造物主を疎んでいたので彼の研究に少なからず協力した。

止めるものもなく進み続けた彼の研究は常軌を逸し、人体実験ならまだ可愛いもので、悪魔や人などといった異種族との配合、脳髄を取り出して肉体の取替え、改造などといった常人ならば話を聞いただけで吐き気を催す段階を簡単に超えてしまった。

始まった大戦によって人がいなくなろうとも戦争によって誰も気づかない。気づいてもどうしようもない現状であった。

黄昏の姫御子が造物主の末裔であることに気付いた彼は、協力者の手によって採取した細胞を培養してヒトクローンを完成させた。

数多のクローンによる実験で神を殺す武器「アゾットの魔剣」を精製した彼は間違いなく天才であっただろう。

「アゾットの魔剣」は魔法無効化フィールドを形成し、装備者以外の発露を許されない絶技の剣であり、造物主の不滅を突破して消滅さしえる唯一の武器であった。

だが、問題はそれを行使する者がいないことであった。

造物主は間違いなく世界最強。

それを相手取るには武器があろうとも届かなければ意味がない。

その思想に下に錬金術師たる彼が生み出した人工生命体（ホムンクルス）「一デモンズ・チルドレン《神を殺すべき悪魔となりし子供たち》」。

彼が神を殺す武器「アゾットの魔剣」を振るうに足る器を要するものであった。

「デモンズ・チルドレン」は墓守人の宮殿に投入され、簡単にその命を散らしていった。

そしてナギが拾った少年はロット？６６６。獣の数字を冠された製造番号を担う少年は最後発でありながら彼をして「最大の失敗作にして最高傑作」と称した存在であった。

己自身をアゾットの魔剣と化し、その能力は開発者の彼をして驚嘆しうるもので武器という一点おいて少年に叶うものは誰一人いなく、足元にすら届いていない

だが、反面。自身を武器化するということはつまり攻撃できないのと同じ事。それならば誰かが担い手になればいいのだが、そうはいかない。

なんと力が強すぎて担い手すら呑みこんでしまうのだ。能力は最高でありながら使えない失敗作。それが彼に冠された称号であった。

しかし、造物主の居場所がはっきりと分かった墓守人の宮殿には、少年の力がどうしても必要だった。だからこそ、少年以前のロット？を囮にし、彼自らが少年を以って造物主へと挑んだ。

結果として後一歩でありながら造物主には逃げられ、彼は剣に呑まれて死んだ。

その事実はアリカ救出後まで調べたガトウと少年の世話をしているナギ以外には秘匿された。

そしてアスナ救出後に皆に話されるも、未だに造物主が生きていることを知っている赤き翼の意見は真っ向から割れた。

まだ子供な高畑、クルトにはこの事実は伝えらなかった。

少年を闘わせることに反対なナギ、アリカ、ガトウ。

非情であっても闘わせるべきだというアルビレオ。

判断を下せない中立の詠春、ラカン。

結局のところ、多数決で少年を戦わせないことに決まるも、黄昏の姫御子たるアスナだけでなく、各国や造物主を滅ぼしうる少年――――一番懐いていたアスナから名前を取ってアスカと名付けられた子供を狙う者たちは後を絶たなかった。

そして大戦から十年後、完全なる世界の策略に嵌り、赤き翼は散り散りになってしまった。

ガトウは死亡。造物主をその身を犠牲にして封印したナギとアリカは行方不明。アルビレオは重傷を負い、麻帆良学園地下で休養を余儀なくされた。アスナは神楽坂明日菜となり、アスカは造物主同様に麻帆良の地下に封印された。

衝撃の事実に圧倒された者たちの中で明日菜は思い出す。

自分をお姉ちゃんと呼んだアスカと昔にも会っていたことを、そして今まで忘れていたことを。

――――――この子を守ろう。

感情の乏しかった自分に懐いたアスカを前にアスナが最初に抱いた願望。

皆の困惑を前にクルトの独壇場は続く。

自力で真実に辿り着いたクルトとアルビレオから話を受けた学園長は一計を案じ、調査から一つの答えへと辿り着いた。

「アゾットの魔剣」を振るえるのは同じ魔法無効化能力を持ち、元となった細胞を持つ明日菜のみであると。

いまは封印されていても何時かは解けるかもしれない造物主の封印。

それを考えて何時でも造物主を滅せる人間を作り出す。それが彼らの思惑であった。

彼らの思惑通りネギが明日菜を魔法世界へと関わらせていった。

明日菜がアスカを見つけたのは決して偶然ではなく、彼らに謀れた結果であった。明日菜が見つけられるように地底図書館に棺を置き、失った記憶が関係しているのか引き取ると言い出した。しかも封印前と同じ名前をつけるということまで成していた。

明日菜が感じた明日香への思いは過去の記憶が関係している面もあったが驚くほど上手く行った。

そして修学旅行においてその能力を発揮し、かつ明日菜は呑み込まれなかった。ヘルマン戦においても能力の一端を垣間見せた。

このまま順調に担い手としてレベルを上げていく明日菜。

だが、彼らの目論みも学園祭によって潰えた。

超の麻帆良への侵攻、同じ能力を持った黒尽くめの青年の介入、更にフェイトの乱入と彼らは見事に裏を掛かれた。

最終的にフェイトによって明日香が連れ去られたことで彼らの思惑は破綻した。

明日菜たちの魔法世界行きを学園長が止めなかったのは明日香を連れ戻すことを期待しての事だ。

明かされる真実を前に明日菜は「そんなことはどうでもいい」と一蹴し、彼女に引き摺られるようにクルトと対峙するネギ。

父の跡を継ぐと宣言したネギと対決するクルト。

乱入する高畑や生徒たち。

外では完全なる世界の召喚魔の襲撃。

混乱の坩堝（るつぼ）と化した会場から抜け出したネギたちは途中でフェイトと闘っていたラカンと遭遇。ネギと明日菜に言葉を残し、ラカンは塵となって消えていった。

会場から撤退したネギたち。しかし、のどかが貴重な情報を得ていた。

別荘においてネギは闇の魔法の制御、明日菜は自身の過去と向き合った。

その果てにネギは答えを見つけ、明日菜は過去のアスナを受け入れて一つとなった。

潜入した月詠によって始まる最終決戦。

向かうは墓守人の宮殿。

立ち塞がる召喚魔を潜り抜け、到着した墓守人の宮殿。しかし、そこにはザジそっくりの少女の姿が。

展開されたアーティファクト「幻灯のサーカス」によって取り込まれるネギ・パーティー。

もしも二十年前にフェイト一味が全滅していたら、という世界において幸福を感じるネギと明日菜。だが、これは本物でないと拒否し、ザジの手助けで抜け出した。

戦闘を開始するネギとポヨ。

明日菜が能力を使って皆を起こしている中で、ポヨはフェイトたちの計画通りにしか世界が救われる方法はないと語る。

明日香と明日菜の存在こそが世界を危うくする元凶である、と。

元々、明日菜の力によって世界を「完全なる世界」を実現しようとしたところに、能力ならば明日菜を遥かに超える明日香。

二人が完全に同調し、その能力を全開に使った先の世界こそが超鈴音のいた未来。魔法世界は滅び、世界から永遠に魔法が死に絶えた不毛な火星の大地に生きるしかなかった生存者は彼らを憎んだ。

魔法世界が滅んだのは寿命だったからと納得は出来よう。だが、魔法が滅んだのは彼らの所為だと。

魔法があれば自分たちはこれほどに苦しまずにすんだ。魔法があれば死ななくてもよいものが死んだ。

だからこそ、超は魔法を世界にバラすことを念頭に置きながらも二人を抹殺しようとしたのだと。

違う未来を作って見せると言い切った二人に真名が同意し、真名と本当の姿を露にしたポヨで戦闘が始まる。

真名に任せて先に進み、デュナミスとフェイトガールズ……そして学園祭の時に現われた黒尽くめの青年――――ロット？６６７と呼ばれた青年ネロが立ち塞がった。刹那は月詠と闘っている。

ネギがデュナミス、フェイトガールズを楓、古菲が闘う。

ネロは明日香の後に生まれながらその能力の低さゆえに疎まれ、最終決戦に加わることすら出来なかった存在。

己がオリジナルである明日菜を憎み、己よりも能力が上の明日香を憎み、自身を認めなかった世界を憎んだネロの憎悪に対峙した明日菜はそれに飲み込まれた。

しかし、暗黒の中で見出した明日香という希望を頼りに闇を振り払い、ネロを打ち倒した。

フェイトを倒し、明日香を救い出したネギと明日菜。

だが、そこにフェイト以降のアーウェンルンクスに麻帆良を強襲させ復活した造物主が現われた。

造物主の圧倒的な力の前に敗れたネギ。

そこに目覚めた明日香が剣化し、明日菜は闘う。

造物主の……いや、魔法使いの天敵と化した明日菜、そしてネギや仲間の手助けの前に造物主は敗れた。

完全に明日香を使いこなした明日菜によって造物主を滅ぼしながらもナギを救った。

が、そこに明日菜が倒したはずのネロが現れ、死にかけの造物主を取り込んで儀式を発動した。ネロは自身を基点とした発動した儀式で消滅した。

グランドマスターキーを使おうとも魔法世界の崩壊は止まらず、一度取り込まれたものたちも戻せない。造物主が最後に残した呪い出会った。

どうしようもない状況に明日香が提案する。

自身がグランドマスターキーの代わりを担うと。

元々、明日菜で行われるはずだった儀式を完全なる世界が明日香を攫って行ったのには幾つか理由がある。

第一に、造物主の天敵たる「アゾットの魔剣」をこの世界で唯一持つ明日香が明日菜の代役足りえたのは血と能力があったから、だか

ら彼らも天敵と知りながら生かしていたのだ。

第二に、「アゾットの魔剣」の創造主たる錬金術師すら気づかなかった本質。破壊と再生は同義である。「アゾットの魔剣」はグランドマスターキーに近い存在になっていたのだ。

明日香単体ではどうやっても上手くはいかない。

しかし、壊れたとはいえグランドマスターキーがあり、対たる「アゾットの魔剣」。そして担い手たる明日菜と完全に同調すれば世界は元に戻る。

だが、それは同時に明日香の消滅をも意味していた。

ただでさえ、「アゾットの魔剣」の使用は明日香に負担を強いる。今まで明日香が剣化した後の不調はこのためであり、いまも倒れそうな身体を明日菜が支えている状態なのだから。

説得を重ねる明日菜に明日香は首を横に振る。

平気たる「デモンズ・チルドレン」はホムンクルスであり、元々短命である。自分に残された命はもう長くない、と語る。更に「アゾットの魔剣」を使うごとに寿命が縮み、もはやもっても後数日の命であると。

明日菜に出来る事はなかった。他の誰も二人の間に入ることが出来ず、見守るしかない。

世界か、明日香か、究極の二者択一を明日菜は迫られた。

苦悩の果てに明日香の願いを受け入れる形で明日菜は選択した――
――世界を救うと。

明日香が剣と化し、明日菜の右手に収まる。そして明日菜は左手にグランドマスターキーを持ち、詠唱を開始すると両手の二つは合一した。

――――白き清浄なる剣

明日香の純粋さを現したような剣を明日菜は泣きながら地に突き刺した。

世界は白に包まれた。

明日香の犠牲の果てに世界は救われた。

魔法世界から旧世界に戻り、明日菜はただの学生へと戻った。ネギは魔法世界の新しき英雄となり、その立場を利用して自身の救済案を実行に移そうとしていた。

そんな中で明日菜だけは現実に耽溺し、俯瞰していた。

まるで明日香との日々を思い出すように生きる明日菜に誰も言葉をかけれない。そして彼女は世界樹の下へとやってきていた。

空っぽな日常、明日香がいない世界は膿んでいた。

世界樹によりかかる彼女の瞳から今まで決して流さなかった涙が堰を切って流れる。

そして声を上げて慟哭した。

樹の幹に拳を叩きつけ、思い、願い、叫び、懇願した。

明日香を返してくれ、と。

他にはなにもいらない、差し出せるものならなんでも出す、だから返してくれ、と。

声は誰にも届かない。

彼女の願いはどこにも行き場所がない。

誰もが希望に満ちた明日を生きているのに自分はあの日に囚われたまま、一歩も前に進めない。

あの選択を後悔しているわけじゃない。それでも明日香がいなければ明日菜は永遠に心をあの日に囚われたまま前に進めない。

慟哭する明日菜に、或いはいもしない神が哀れんだのか、それとも世界樹が明日菜の願いを叶えたのか。明日菜の肩にひらひらと白い光が落ちる。

涙を流したままの明日菜がそれに気づき顔を上げる。世界樹が絢爛と輝き、彼女の頭上で光が集まっていく。

光は一つの形を成していく。彼女が求め、焦がれ、追い求めた希望。

世界が、世界樹が、まるで魔法世界を救った彼女のご褒美に彼女が最も求めた人を帰そうとするように。

明日菜は形を成して下りてきたモノ――――――明日香をその胸に抱く。

「ただいま」

「おかえりなさい」

二度と離さないように、手放なさないように二人は互いを抱きしめた。

特別編　姫騎士物語（仮）（後書き）

主人公は神楽坂明日菜、ヒロインがオリジナルキャラの神楽坂明日香です。

女が主人公で、男がヒロインという変わった物語となっております。

アルビレオ、学園長が黒いです。

それに最後がちょっと端折っています。疲れたとも言いますが。

それでも文字数が２０４１３字もありますが。

近作はあくまで筆者の妄想が爆発したものであり、ぶっちゃけ自己満足の作品です。設定などあってないようもので思いつきで書いています。粗もあると思うのでそこら辺を念頭に置いて読んで頂けると幸いです。

本編の次回更新は変わらず「日曜日」の午前０時です。

第四十六話　闇の福音と原作主人公と少年　４（前書き）

吸血鬼編全七話の第四話です。基本的にネギサイド中心の話となっています。

文字数は１００７６字とギリギリです。

どうぞ！！

第四十六話　闇の福音と原作主人公と少年　４

ネギ・スプリングフィールドは朝から、いや昨日の夜のエヴァンジェリンの襲撃から丸一日中悩み続けていた。

何故そんなにもネギが悩み続けているかというと、それはもちろん彼女の生徒であるエヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェルについてである。

彼女はかつて自分の父であるサウザンドマスターの手により麻帆良の地に閉じ込められる呪いを受けたらしい。それを解呪するためにネギの双子の弟アスカを襲い、そこに現れた自分も襲われたらしいのだ。

ネギは今日一日どうするか考えに考え込んでいたわけだが、やりきれない思いが深い溜め息となって吐き出されているのを見れば、だれでもその心境の程は芳しくないと分かる。

ネギは襲われないように仕事が終わったら真っ直ぐに帰ってきて、寮の自室からは一歩も出ていない。

だが、ネギに３０分遅れて帰ってきた明日菜から聞いた話が余計に心労を深めていた。

父とエヴァンジェリンとの間に遺恨があるから自分は狙われ、１５年もの長き間封印されたことに対する憂さ晴らしの対象として選ばれたと聞いても戸惑いしか生まれない。

明日菜からは学園長に頼ってみてはと言われたが、これ以上周り

に迷惑を掛けるのはネギの本意ではない。

いざとなったらアスカが共に戦ってくれるとも聞いたが、言ってはなんだが魔法使いとしては魔法学校時代の落ち零れていた時のことしか知らないから頼りになるとは思っていなかった。幾ら人伝で武術をやっていて誰よりも強いと聞いても、ネギは幸か不幸かアスカが戦う現場を見たことがない。ネギの中での魔法使いとしてのアスカのイメージは遥か昔に固定されていて信用にならなかったのだ。

ここら辺が現在のアスカと昔のアスカしか知らない明日菜とネギの違いで、後でネギが明日菜に従者を頼んでも彼女は自分よりもアスカに頼った方がいいと思う差であった。

「どうしよう……」

もう何度目か分からない溜め息を吐くネギを見て、流石に哀れに思った明日菜が声を掛けようとするが、

「景気の悪そうな顔してるじゃんか、大将。助けがいるかい？」

「だ、誰！？」

「え」

悩み悶えるネギは突如どこからか聞こえてきた自分以外の声に慌て、俯かせていた顔を上げて辺りを見渡しても人は見当たらず、そこには影も形もない。

「そこじゃねぇよ、兄貴。下だよ下」

自分の足下から聞こえてくる声に見下ろすと、いつの間にかネギの足元に一匹のオコジョが鎮座していた。

「あーーーーカ、カモくーん！」

「おうよ！！ネギの兄貴、恩を返しに来たぜ！！」

そこにいたのはネギが昔ウェールズで罠に掛かっていた所を助けた、古くからの知り合いであるオコジョ妖精のアルベール・カモミールがいた。

「――――――という訳なんだ」

一人と一匹が五年ぶりの再会の喜びを分かち合っている間、明日菜は携帯でこっそりとアスカに件のオコジョが現れた事を伝える。

明日菜の行動を尻目に、ネギが昨日からあったことを正直にカモに向かって包み隠さず話した。

木乃香は部屋備え付けの風呂に入っているので、魔法関係のことも普通に話せた。エヴァンジェリンの事、呪いの事、双子の弟のアスカが交渉して他人を標的にしないようにしたこと全てを話した。

「く、国へ帰らせましていただきます」

「コラ」

その説明を受けたオコジョ妖精であるカモの顔色はどんどん悪くなり、６００万ドルの賞金首だと知った時にはどこから取り出したのか帽子とカバンを持って何処かに行こうするが、明日菜に尻尾を

掴まれ下着泥棒の罪で投獄されて脱獄したのだと詰問されたが、嘘か本当か分からない昔話を始め、明日菜には明らかに嘘だろうとツッコミ入れたくなるような話でも、どうやらネギの心の琴線には触れたみたいで、勝手に盛り上がり熱血友情物のドラマのように熱い抱擁を交わしている。

「いや……まあ、いいんだけどね……」

一人と一匹が盛り上がっている中で明日菜は一人頬を掻いて呆れている。本人（本獣？）が下着泥棒をしたことを認めたので一切の情はない。乙女の下着を盗む不届き者は須らく極刑なのである。

暫く立って一人と一匹は落ち着き、ようやくカモは来日の目的を切り出した。

「パートナー選びっスよ、パートナー選び！！　いいパートナー探さないと立派な魔法使い（マギステル・マギ）になるにもカッコがつかないでしょー！？　そしてネギの兄貴と姐さんがサクッと仮契約を交わして、相手の片一方を二人がかりでボコッちまうんだよ！」

「僕とアスナさんが仮契約ーー！？」

「嫌よ、あたしは」

ネギはカモの言う通り現状では片一方を倒すにしても、従者の存在が無い自分一人では何もできないのを昨日の時点で自覚している。

それでも明日菜をパートナーという選択肢を考えていなかったので驚きの声を上げたが、明日菜に素気無く拒否されて膝から崩れ落ちるネギ。

明日菜は崩れ落ちるネギを可哀想だとは思うが、好き好んで他人の八つ当たりを貰う気はないので割り切る。自分よりも圧倒的に強いアスカがいるのにしゃしゃり出ても邪魔にしかならないと自覚していたのだ。

「何でッスか、姐さん！　兄貴を可哀想とは思わないんですかい！」

ネギは唯一魔法関係者以外で自分が魔法を使う事を知っているし、大分仲良くなれたと思ったのに何故と縋るように明日菜を見る。

「はぁ～、さっきの話聞いてた？　向こうはネギと一対一で戦う事を望んでいるのよ。そこに他の人間が入ったらどうなるか分かったものじゃないわ」

カモは二本足で立ち上がって明日菜の前まで行き、問い詰めるが返って来たのは呆れたような言葉と共に吸っていたタバコを奪い取られて火を消される。

それを聞いてさっき言っていたのをネギも思い出し、やっぱり駄目かと肩をガクッと落とす。

「姐さんが駄目なら、さっきここの風呂場で兄貴のクラスの面子を調べてきたっスけど、すごくいい素材だらけで……良い！　すごく良い！　この中に運命的なパートナーが必ずいる！！　いけるぜ３－Ａ！！」

悦に浸ってネギに熱弁しているカモは気付かなかったが、ノックの音がしたので明日菜が席を離れてドアを開け、呼んだ客を招き入

れた。

彼らにとっての修羅が部屋へと入ってくるのをオコジョは気づかない。

「この中にきっと兄貴のパートナーが「よう、アルベール・カモミール」ひっ！」

「あ、アスカ……」

出席簿を持って仮契約しまくって金持ちになっている夢想を描いて有頂天になっていたカモは、突然聞こえてきた声の主に体を掴まれ、放たれた威圧感に恐怖の声を上げた。

微かに自分にも向けられた威圧にネギは過去の恐怖の日々を思い出し、ガタガタと震えてズリズリと尻を擦って下がる。

今回は威圧の対象外にいる明日菜も過去を思い出して遠い目をしたが、ブルブルと首を振って忘れようとする。我関せずの態度を装うもお茶を啜る手の震えは隠しようがないが。

修羅降臨のトラウマは彼女たちの心奥深くまで根付いていた。

「下着泥棒２０００枚、そして脱獄だ。逃げられると思うなよ。このまま強制送還されるか、この場で3枚に卸されるか。二つに一つだ。さあ選べ、さあ、さあ、さあ」

最後通牒のように放たれたアスカの言葉だが既にカモの体には力がなく、意識はまだ失っていないが口から泡を吹き失神寸前である。

答えられる気力がないカモに、何も言わないのなら3枚卸し決定だと告げて、早速実行に移すつもりなのかアスカは踵(きびす)を返す。

「ま、待ってアスカ！　カモ君は僕が責任を持つから許してあげて！？」

急ぐアスカを呼び止めたのはネギ。

半修羅モードと言えるアスカに話しかけたネギに尊敬の眼差しを向ける明日菜と奇妙な空気が生まれていた。

「……このオコジョ妖精が起こす全ての責任を貴様が取ると？」

踵を返したアスカにネギは自分が全責任を持つからと止め、振り返ったアスカは間違いないなと確認を取る。

威圧と握り締めた手を緩めていたので、何とか気を取り直したカモはネギの言葉に感動している。

「しばし待て……学園長、夜分遅くに申し訳有りません。今よろしいでしょうか？　はい実は……」

ネギを見たアスカは、カモを握り締めているのと反対の手で携帯を取り出して電話を掛けた。

相手は学園長のようでカモの事を報告し、ネギの頼みを伝える。

「はい、分かりました。失礼します。……ふぅ、アルベール・カモミール」

2分ほど学園長と話して電話を切り、アスカは心底不本意そうに握ったままのカモをネギの前に下ろして溜息を吐く。

「へ、へい！」

アスカがカモの名前を呼ぶと、少し前から気がついていたカモが裏返ったような声で返事をする。

「麻帆良での滞在は許可するが、ネギ先生の使い魔だからといって同じ事をして赦されると思うなよ？　次に同じ事をすれば俺の手で容赦なく処分する。そして一般人には魔法を隠匿するという原則を破る貴様の行動の如何によっては、ネギ先生が罰せられるつもりでいろ。そしてネギ先生、あなたの現在の立場は崖っぷちだということを自覚するように、あなたにはもう次などないのですから」

アスカがそう告げるとネギもカモも正座してコクコクと神妙な顔をして頷く。

それを見たアスカはまたふぅっと溜息をつき、用は済んだと明日菜に礼を一言告げてから、今度こそ踵を返して帰ろうとする。

「何や何やさっきから騒がしいな。誰かきとるんか……って、アスカ君！　ゴ、ゴメンな直ぐに着替えるから！！」

ドアに向かっていたアスカと、騒がしい部屋が気になって風呂場から出てきたバスタオルを巻いただけの木乃香がタイミング良く（？）鉢合わせし、数秒停止して木乃香は顔だけでなく体全体真っ赤にして慌てて風呂場に戻っていく。

流石に罰が悪くなったアスカも、途中からは目だけではサングラスをしていて分かりにくいので首ごと逸らしていた。

「直ぐ帰りますから慌てなくてもいいですよ！　……ああ、それとネギ先生にエヴァンジェリンさんから伝言があった。『エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルの名に誓って、坊やが1人で私に挑んでくるならば私も茶々丸抜きで1対1で戦おう。だが、他の誰かを連れてくるなら命の保障はしない』だそうだ。戦いたくないのなら学園長に言えばいいが、変な気だけは起こさないようにな」

首を前に戻して風呂場に戻った木乃香に一言掛け、ドアの前に来たアスカは今思い出したように振り返りエヴァンジェリンの伝言を伝える。

それを聞いたネギとカモは、最後の希望も燃え尽きてしまった。

ちゃんと服を着て風呂場から出てきた木乃香が見たものは、既にアスカは帰った後で燃え尽きて真っ白になってしまったネギと、元から白いのであくまで比喩表現でそう見えるカモ、事情を知るが故に苦笑いを浮かべる明日菜の姿だけだった。

眠れぬ夜を過ごした次の日、寝坊したネギはエヴァジェリンと茶々丸の二人に遭遇したのだが、恐怖から直ぐにその場を走って職員室に逃げた。

この朝の遭遇だけでも負担なのに、朝礼に出なかったことを新田

に怒られた事、更にカモを学校に連れてきた事をアスカに怒られ、唯一の味方といえるカモを外に放されてネギの精神は一杯一杯だった。

休み時間に明日菜を呼んで仮契約をしてくれる様に頼んではみたものの、昨日の夜同様に素気無く拒否されたネギだが、学園長に頼るという選択肢は浮かんで来なかった。

明日菜にも頼んでみてはと言われたが、もし学園長に言った場合、自分の不始末ということになって修行失敗になることを恐れたためだ。ネギの思い込みに過ぎないとしてもアスカの「次はない」という言葉が思い込みに拍車をかけた。

本人も自覚していないが、この地に来てからは自分のミスとはいえ上手くいかないことだらけで、かなりのストレスを抱えていたのが今回の吸血鬼事件でそれに拍車をかけていた。自分よりアスカを信頼している明日菜という誰にも頼れない状況がネギを追い込んだ。

だから、授業のない時に中庭で誰にも頼ることができず、一人で膝を抱えている時に合流したカモが言った「真祖の吸血鬼が約束を守るなんてありえね！　封印されて油断している今の内に相手の片方をボコッちまいやしょう！！」という言葉に乗ってしまったのだ。

「おーい、エヴァ」

（うっ……タカミチ……）

そして仕事を早く終わらせ、エヴァジェリンと茶々丸を尾行して別れるのを待っていると、エヴァジェリンが高畑に呼び止められた。

「……何か用か、仕事はしているぞ」

「学園長がお呼びだ。一人で来いってさ」

高畑が下っ端のようにメッセンジャーなのは他の人間では無視されると知っているからだろう。学園側の思惑を計りかねるエヴァンジェリンとしてはトップである学園長の呼び出しなら応じないわけにもいかない。

「――――――分かった。直ぐ行くと伝えろ。茶々丸、直ぐに戻る。必ず人目のあるところを歩くんだぞ」

自分が離れて茶々丸を一人にすることに一抹の不安はあったが、ネギにはそんな根性はないと判断して高畑と一緒に学園長室に向かった。

「何の話だよ？　また悪さじゃないだろうな？」

「うるさい、貴様には関係のないことだ」

二人が都合よく別れたことを好機と見た一人と一匹は、この行動の結果は必ず良くなると疑っていなかった。

（やっぱりこんなことするなんて追って正解だったわ）

実は休憩時間のネギの様子のおかしいが気になった明日菜が念のために尾行していることを、茶々丸を追いかけることに集中しているネギとカモは全く気付いていない。

エヴァンジェリンと別れた後、茶々丸は脇に木や草といった緑が

青々と生い茂った川沿いの道を、片手に沢山の缶詰が入っているレジ袋を提げた茶々丸が一定の速さで歩いていた。

「茶々丸って奴の方が一人になった、チャンスだぜ兄貴！　一気にボコッちまおう！」

「だ、だめ！　人目につくとマズイよ、もう少しまって！」

茶々丸の２５メートル後方の草むらの中に隠れている中でカモが尾行している目的を達成させようとネギを促すが、麻帆良に来た頃よりは秘匿の重要性を知っているので何時、人に目撃されるか分らない場所で事に及ぶ訳にはいかないので慌てて宥（なだ）める。

ネギとカモよりも後方に隠れている明日菜は、一人と一匹が何をするのかを正確に把握しているわけではないが、聞こえてくる会話からまるで辻斬りしに行くみたいだと感じている。

「うぇ～ん！　アタシの、アタシの風船が～」

茶々丸が進む先に大きな木の下で泣いている、まだ小学校低学年ほどの小さな少女がいた。

買い物袋を片手に持った茶々丸はその女の子の前で足を止め、風船が木に引っ掛かっているのを見て、背中の一部が文字通り開いてブースターのようなものを生やして飛び上がり、その風船を掴んで降りてくる。

風船を掴むときに木に頭をぶつけていたのだが、どうやら痛みはあまり感じていないようだ。

「ありがとー！　おねえちゃん！」

空を飛んで風船を取ってくれた茶々丸に少女は嬉しそうに礼を言いながら元気に手を振って走り去り、また茶々丸も少女が見えなくなるまで手を振りかえしていた。

その後も大きな道路を横断する為の歩道橋の階段で、苦労していたお婆さんを背中におぶって反対側まで渡り、人気があるのか幼稚園の子供達が囃し立てている。

更に進むと、子ネコが入った箱がどぶ川に流されているのを見て自分の身を省みず川に飛び込んで救出、戻ってきた茶々丸の元に集まって来た人たちの拍手を一身に浴びていた様子から町の人気者と言うのが良く分かる。突発性騒動巻き込み機であるアスカと同じく彼女に助けられた人は多い。

そして現在は、救助した子ネコを頭の上に乗せたまま人気の少ない教会に集まる猫たちに、聖母のような優しい笑みを浮かべた茶々丸が餌をやっている真っ最中だった。

ネギ達とは別の場所に隠れていた明日菜は茶々丸の行動に感動し、ロボットであることには驚いたがこんないい人ならネギも変な行動はしないだろうと楽観視した。

「いい人だ」

「ちょ……待ってください！　ネギの兄貴は命を狙われてんでしょう!?　しっかりしてください！　ほら、ここなら人目もないし、チャンスっす！　心を鬼にして、一丁ポカーっと！」

「そ、そうだね」

茶々丸の行動を隠れて見ていたネギは素直に感激するが、カモの言葉を受けて襲うなんていう卑怯なことに心が痛むが、『命を狙われてる』という言葉を聞いて血を吸われそうになった時の記憶を思い出し、その恐怖に勝つことができずに了承してしまう。

そして茶々丸の前へと姿を見せた、見せてしまった。

「……こんにちはネギ先生。一人になる所を狙われましたか、油断しました。でも、お相手はいたします」

二人は向かい合い、茶々丸はネギの追い詰められた眼を見て此処での戦闘が避けられないと後頭部のネジ回しを外す。

茶々丸の近くにいたネコ達は二人の間に流れる剣呑な雰囲気を感じて離れて行き、明日菜は出て行って止めるべきかアスカに連絡して急いで来て貰うか悩んでいる。

「茶々丸さん、あの……僕を狙うのはやめていただけませんか？」

「……申し訳ありませんネギ先生。マスターの命令は、私にとって絶対ですので」

ネギは最後の希望と考えて狙うのを止めてもらうように頼むが、それを承服できない茶々丸は静かに頭を垂れて拒否する。

茶々丸は明日菜が隠れていることには気付いたが、戦う気はなさそうなのでネギ一人が戦いに来たのだと考え、逃げるという選択肢

もあったが、この状況ならば対処できると判断した。

のっぴきならない状況に明日菜もこれは流石に不味いと思ってアスカを呼ぶ事を選択し、急いで携帯を取り出して電話を掛ける。

ネギは力ない瞳を引き絞り、覚悟を決めたが未だに泣きそうな顔で茶々丸を正面に捉えた。

「では、茶々丸さん」

「……はい、では行きます」

電話に出たアスカに急ぎ用件を伝え終えた時点で、戦闘は始まってしまった。

ネギの言葉の後にわざわざ返事を返し、茶々丸は戦闘するにもネコ達が逃げる時間を稼ぐために先手必勝と走り出そうとした瞬間、ネギの肩に乗っていたカモが飛び出した。

「オコジョフラーッシュ！！」

「……！！」

カモは叫びと共に手に持つマグネシウムをライターで燃やして化学反応で発生した即席の閃光弾を炸裂させた。

即席の閃光弾はカメラのストロボよりも激しい光を生みだし、茶々丸のセンサーを僅かの間とはいえ狂わせ、その動きを止めさせた。

（やるしかない……僕がやるしかないんだ！！）

「ラス・テル・マ・スキル・マギステルっ！」

作戦通りにネギは、カモが飛び出した瞬間に閃光に眼をやられないように後ろを振り返って、茶々丸から距離を取りながら詠唱を唱える。

これが外れればパートナーがいない自分には次などないと理解できてしまった頭脳が、半ばパニックを起こして茶々丸を確実に仕留めるために自身の膨大な魔力の大半を魔法に込めていく。

明日菜は二人と一匹から遠くにいたため、カモが起こした閃光も多少眩しかったという程度で済んだのだが、ネギが茶々丸から距離を取って何かを言っているのが見えた。

（どうしたら……なにか、なにか！）

杖を持って構えていることから魔法の呪文だと理解し、何とかしなければという危機感が携帯からの声が聞こえないほどに自身を急かす。

そんな中で、もしかしたら茶々丸が死ぬのではないかという思いが心的外傷による記憶再生のフラッシュバックを引き起こす。

再生された記憶には、どこか高畑に似た壮年の男性が口から血を吐き、腹にも穴が空いているのか多量の血を流して岩場に凭(もた)れていた。その顔は泣いている自分を安心させるためにか笑顔だが、体から流れた血は致死量近くまで達しており死相が浮かんでいる。

『幸せになりな、嬢ちゃん。あんたにはその権利がある』

念入りに消された筈なのに、このままでは知り合いが死ぬのではないかという思いから呼び出された大切な人を失った死の記憶。

「来たれ雷精・風の精・雷を纏いて吹きすさべ・南洋の嵐っ！！」

ネギの恐怖から裏返った声で紡ぐ呪文が響き渡る中、消されたはずの記憶から生まれた唯一つの思いが体を動かした。

「やだ……いなくなっちゃやだ！！」

持っていた携帯を落として体を無意識に動かして左手に「魔力」、右手に「気」を生み出し、合成させて【咸卦法】を発動する。

（逃げる……わけにはいきませんか）

茶々丸も直ぐにセンサーの異常から回復したが、距離とネギの詠唱スピードから途中で阻止するのは不可能と判断して魔法の発動前に撤退しようとするも、自分の後方にさっき助けたネコがまだ残っているのを見て断念した。

茶々丸だけなら回避できるが、ネコがネギの魔法に巻き込まれる可能性が高い為である。

ネギが詠唱している魔法から考えて、避けなくても結果は変わらないかもしれないが茶々丸にはネコを見捨てることができなかった。

ネコの下に下がって連れて回避する時間は既になく、茶々丸は覚悟を決めた。

「【雷の暴風】っ！！」

「すいませんマスター、アスカ先生。私が動かなくなったら、ネコのエサを……」

せめてネコだけは助かって欲しいと僅かでもネコの生存の確率を上げるために、体の前で腕をクロスさせて防御の体勢を取り、マスターのエヴァンジェリンとアスカに遺言と取られてもおかしくない言葉を呟く。

「ダメ――――――――――――――――エッ！！！！」

ネギの魔法が放たれた瞬間、明日菜は何故自分にこんなことが出来るのかなんて疑問に思うことも無く、体が動くままに知らないはずの【瞬動術】を使って二人の中間線上よりやや茶々丸側に飛び出しながら叫ぶ。

ネギから放たれた稲妻を纏った暴風が二人の姿を飲み込んで着弾し、爆発音が響き渡って地面に地震の如き地響きが周囲に伝わった。ネギの魔法が着弾した事によって発生した粉塵が、着弾した場所だけでなく辺りも覆いつくす。

粉塵で視界を閉ざされたが、ネギは魔法の射線上に飛び出した明日菜の姿をはっきりと見てしまった。そして同時に理解してしまう。

自分はいま出来る全力の【雷の暴風】を放った。それを魔法使いでもないただの一般人である彼女がどうにか出来るはずがない。明日菜よりかは可能性は低いが完全に防御の体勢に入っていた茶々丸も同様。

ネギがしたかったことは目の前の危険を排除することだけ。例えこれが茶々丸であったとしても至る結末は同じであっただろう。恐怖やストレスによって狭まった視野によって短絡に決定されたそれに、現実を許容できるだけの度量はなかった。

つまり――――ネギは神楽坂明日菜と絡繰茶々丸を殺した。

その事実に気付いたネギはパニックを起こした。

「うわあぁぁぁぁぁぁぁぁ――――――――――――――――っ!!!!!」

「っ!……兄貴、落ち着いてくだせぇ!!　うぉ!」

カモは何とか魔法を放つ前にネギの肩に乗れたが、同じように明日菜が巻き込まれるのを見ていたのでパニックを起こしかけるが、自分が殺したと思い込んだネギの叫びで正気に戻る。

だが、カモが静止するも生徒二人を殺したと思って完全にパニックを起こしたネギは空を飛んでその場から逃げ出した。

ネギが飛び立って数秒後、

「一体、何なん今の!?」

「あかんてこのちゃん、危険や!!」

爆発音を聞きつけたのか日本人形のような艶やかな長髪を持つ少女と、この場所に連れて来たくなかったのか顔を顰めたサイドポニーの少女が現れた。

余程慌ててこの場所に来たのか長髪の少女は息を乱し、息が整いかけてきた頃には徐々に粉塵も晴れてきた。

粉塵が晴れた先には二人の同級生である変わった髪飾りをつけている少女と、長髪の少女と同室のオッドアイの少女が折り重なるように倒れている。

そして少女達は二人から視線を動かして、それを見てしまった。

「見たら駄目や、このちゃん！！」

「……ぁ……」

それの惨たらしさに逸早く気付いたサイドポニーの少女が視界を遮るも、その行動は既に遅く長髪の少女は全てを見てしまった。

完全に粉塵が晴れた先には折り重なっている二人の少女の他に少年が一人、地面に仰向けに倒れていた。

少年は僅かに開いた口からたらりと血を流し、胴体の前面部分が抉れて肋骨の一部や傷ついた内臓が遠目からでもやけにはっきりと見え、更に右腕の肘から先は辛うじて薄皮一枚だけで？がっている状態。左腕も右腕と似たような状態で肘の部分が半分抉れて赤い肉を覗かせている。

服は上半身全てが存在しておらず、下半身はあちこち破れてギリギリ服の役割を果たしているにすぎなかった。

倒れている体の下には流れ落ちた血が海といえるほどに広がり、

今も出血が続いてその範囲を広げている。最早、死体と言われても信じてしまいそうなその体の持ち主は、さっきまで自分達が一緒にいた担任補佐の姿。

「いやあああぁぁぁ

第四十六話　　闇の福音と原作主人公と少年　４（後書き）

次回の更新は『木曜日』（指摘があったので表記を変更しました。今まで通りの更新です）の午前０時に予定しています。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

修学旅行編まで吸血鬼編を合わせて残り六話、修学旅行編は１９話となっているので、改定前に追いつくのは今話を抜かして２５話となります。

年内に追いつくのが目標だったわけですが、週二話のペースだとちょっと足りないです。多分、１２月になったら週一回の更新に戻るかと。

『特別編　姫騎士物語（仮）』の各キャラクターの今後とか載せた方がいいでうすかね？

第四十七話　闇の福音と原作主人公と少年　５（前書き）

原作の魔法世界救済案に納得がいかない筆者です。

世界レベルの魔法バレならそもそも超の案を実行に移していた方が後々の戦争になる可能性が低いのではなかろうか？

まあ、テラフォーミング自体は問題ないと思いますが、火星を緑化したら魔法世界崩壊がなくなるっていうのは納得いかない。

そもそもそれだと魔法世界崩壊の理由ってなにって話になりますし、火星って元から不毛な大地なわけですから。

魔法世界自体が火星の位相がずれた異世界にあるわけで火星をテラフォーミングかしようが意味がない気もする。

最新話で明かされた情報が救済案の全てだったら原作に絶望するしかない。きっとまだ明かされていない情報があるはずだと信じたい。

原作の愚痴はここまでにして吸血鬼編全七話の第五話です。ぶっちゃけちょっと暗い。

文字数は１０２２４字です。

魔法世界編の最後ら辺がバトルばかりで最近の学園ラブコメに違和感を感じている筆者ですが、どうぞ！！

第四十七話　闇の福音と原作主人公と少年　5

アスカが明日菜から危急の電話を受けた時、その場所には木乃香と刹那も一緒にいた。

何故か急いで仕事を終わらせたネギに遅れること数十分後、帰宅しようと昇降口に行くと猫缶を持った二人が待っていた。

女子寮にいる頃、今は使われていない教会にネコが集まっていて茶々丸が餌を与えている事を木乃香に教えてから、偶に行っていると聞いていたからこの機会に刹那にも教えたいのだそうだ。

折角だから、親友二人で行けば良いのにと思うのだが、酷い時期と比べれば大分距離が近くなったとはいえ、未だに時折刹那が逃げ出してしまう事があるので、こうして偶に呼ばれることがあるのだ。

特に同行を断る理由もないので、二人の昔話を聞きながら目的の場所へ向かう。

基本的に喋るのは木乃香だけでアスカは完全に聞き役、時々刹那が合いの手を入れるぐらいだ。

それでも刹那と一緒にいれることが嬉しい木乃香は、普段の様子とは違って活発な印象を周りに与える。刹那も木乃香と同じ気持ちで、控えめながらも嬉しそうに口元が綻んでいた。

教会まで残り１００メートルという距離で、そんな和気藹々とした雰囲気を破ったのはアスカに掛かってきた一本の電話だ。

アスカが鞄に入れていた携帯電話を取り出して着信相手を見ると明日菜からで、どうしたかと思って電話に出ると大声が返って来た。

『アスカ！　ネギが教会で茶々丸さんをネコが！！』

「落ち着いて！……ゆっくりと何があったのか話してください」

電話口で混乱して支離滅裂な事を話す明日菜に対して、アスカは最初の一言を張り上げる事で落ち着かせてから、何があったのかを話させる。

聞こえてくる声の調子とアスカの深刻そうな雰囲気が、何か大変な事があったのではないかと木乃香を不安にさせた。刹那も断片的に聞こえた単語から只事ではないと感じ、不安気にしている木乃香の気持ちを和らげようと寄り添う。

『休憩時間にネギの様子がおかしかったから、後を追いかけたんだけど教会で茶々丸さんと物騒な雰囲気になって！！』

アスカは懸念の一つが当たったと考えながらも、いざとなれば前衛のいないネギ相手なら茶々丸でも十分逃げられる筈なので安心できるはずなのに、どうしてか嫌な予感を感じていた。万全のはずなのに何かを見落としているような気がしてならないのだ。

「？　もしもし明日菜さん。……明日菜さん？　明日菜さん！」

数秒、考え事をしている間に電話から声が聞こえなくなったのを疑問に思い、呼びかけるも返事が無い。

その様子を不審に思った木乃香と刹那が黙って見守る中、アスカ

は耳を澄まして向こうの状況を知ろうとする。

『やだ……いなくなっちゃやだ！！』『来たれ雷精・風の精・雷を纏いて吹きすさべ・南洋の嵐っ！！』

携帯の向こう側から届いた音声と、先程から教会の方角から魔力の高まりが最悪の状況を示している。

ネギが魔法の詠唱を続けているということは、逃げられるはずの茶々丸が動いていないということ、明日菜のセリフからは何らかの異常事態が発生していることを読み取った。

アスカは木乃香と刹那の訊ねるような視線を無視して、【白眼】の【透視能力】を発動して１００メートル先の教会を見ると、明日菜が何故か【咸卦法】と思われる光を纏って二人の間に飛び込み、ちょうどネギが詠唱から考えて【雷の暴風】を放とうとしている瞬間だった。

「チィッ！」

秘匿をどうこうと言ってる暇もなく、舌打ちをしながら張られていなかった認識阻害その他諸々の結界を指を鳴らして発動する。

「ちょっ……！」

「え……？」

刹那の静止の声と木乃香の疑問の声を置いて、その場からアスカの姿が消えた。

【瞬身の術】と【虚空瞬動】を繰り返して僅か二、三秒後という驚くべき速さでアスカの姿は教会にいる茶々丸の眼前にあった。

一瞬で把握した状況は、明日菜が【咸卦法】と思われる光を纏い、何らかの方法（瞬動の可能性が高い）を使って、ネギの魔法の射線上に出てしまっている。

集中によって広がっている視界で、後ろにいる茶々丸が逃げなかったのは後ろにいるネコを庇ったのだと知った。

茶々丸は防御の姿勢を取っているがネギの【雷の暴風】の前では、防ぐどころか木っ端微塵になる可能性の方が圧倒的に高い。

だからと言って茶々丸の意思を無視して避けるわけにもいかず、変わりに【雷の暴風】を受けることを選択するしかなかった。

ネギの【雷の暴風】はかなり、というかほとんどの魔力を注ぎ込んでいるようだが、込められている魔力は莫大でも術式が荒く、無駄も多かったので全力で防御すれば辛うじて耐えられると目算を立てた。

そもそも明日菜の魔法無効化能力（マジックキャンセラー）で無効化されるのではとも考えた。

瞬時にそこまで判断したが、そこで明日菜が本当に魔法無効化能力（マジックキャンセラー）持ちで【雷の暴風】が無効化されるのだろうか、という疑問が生まれた。

そこで先程までの即断即決とは違い、どうするかを迷ってしまい、それでも1秒にも満たない時間ではあるが、この時の逡巡が後の大

惨事に？がる要因となった。

（ちっ、迷っている時間はない！！）

迷っている間に【雷の暴風】は明日菜に迫っていて、絶対に無効化すると言えなかったため、アスカが取った行動は【万象天引の術】を使って明日菜を自分の下に引き寄せる事だった。

術を使い明日菜を引き寄せていくが、急いでいてもそのスピードはネギの【雷の暴風】と同程度。

引き寄せている途中で気がついたが、【咸卦法】の影響なのか、明日菜は気を失っているようで目の焦点が合っていない。

それに気がついてしまったので、慌てて近づいてきた明日菜に手を伸ばしたのが二個目の誤算となる。

――――――パリィィィン

慌てていたため魔法無効化能力（マジックキャンセラー）の事を忘れて手を掴んでしまった為に、展開していた防御障壁――――――【パンツァーシルト】がガラスの割れる音と共に呆気なく消滅した。

想定外の事態に流石にギョッと眼を剥く。

（ええい、ままよ！！）

【雷の暴風】はもう目と鼻の先だが、事ここに至って手を放して【パンツァーシルト】を壊した明日菜を当てにして盾にするわけにもいかず、余裕がないため思いっきり彼女の手を引いて後ろに引き

倒す。

結果、背後に流した明日菜が茶々丸と激突する。

「あぐっ！」

「……！」

後ろの二人が激突した音と悲鳴を認識する事無く、顔の前で右腕を前にしてクロスしながら余裕をかなぐり捨て、全力で障壁を張り直して僅かでも時間を稼ぐ。

「ぐうぅぅ！！」

接触までの０コンマ数秒で障壁を再展開できただけでも奇跡に近いが込められた魔力は僅かに過ぎず、僅かな均衡の後に呆気なく突破された。

しかし、僅かの間でも障壁を展開したことで玉藻が【チャクラの衣】を展開する時間を作ることに成功した。

展開した妖気の衣がアスカの体を包み、接触した【雷の暴風】をどんどん削っていく。

だが、ここで三個目と四個目の誤算が生じた。

まず三個目は、くしゃみで【武装解除】を起こすのを止めさせるために訓練させたのが裏目に出た事だ。ネギが麻帆良に来た時ならまだしも訓練の結果、まだまだアスカから見れば術式の荒さや魔力の無駄は多いが、以前よりも威力が格段に向上している。

そして四個目の誤算はネギの精神状態を理解していなかったことだ。

大半が自分のミスとはいえ、麻帆良に来てからは叱責される日々。社会人ならミスをして叱責されることは別に珍しいことではないが、はっきり言ってネギは今までの人生で怒られたことはほとんどない。

故郷にいた時はどんな無茶をやろうと周りの大人はナギにそっくりだと笑って済ましていたし、ネカネは怒るのではなく諌めていると言っていい。

アーニャは年齢的に注意しても喧嘩になり、アスカはそもそも機会自体がほとんどなかったし、あっても弟という立場的に聞き入れることはなかった。故郷が悪魔に襲われて魔法学校に入学してからは、褒められるか煽てられるだけでアスカがいなくなった心労で元気のないネカネから諌められることも少なくなっていた。

麻帆良に来てからは慣れない環境、一人部屋、今までと違い自分のミスとはいえ怒られる日々にネギは少しずつ、確実に目に見えないストレスを抱えていった。

極めつけはエヴァンジェリンの襲撃、逃げ場は用意されていたが、次に不祥事を起こしたら修行終了だと勝手に思い込んでしまったことが、ネギから正常な判断を奪ってしまったのだ。

そしてカモの誘惑ではあったが茶々丸と対峙したことで、弱りきっていたネギの精神の均衡は完全に崩れた。

本来ならネギの性格的に奇襲は向かないのに様々な要素が折り重

なってしまった。初めから殺すつもりなど無いから魔法の矢でも十分の筈なのに、恐怖その他諸々の感情から過剰ともいえる魔力を注ぎ込んだ【雷の暴風】を放った。

結果的に過剰ともいえる莫大な魔力を注ぎ込み、訓練された魔力コントロールで放たれた【雷の暴風】は、アスカの同意なしでは玉藻の【チャクラの衣】といえど咄嗟に展開したレベルで防ぐには到底足りなかったのだ。

《むぅ――！！》

妖気の衣は【雷の暴風】の大半を削り取っていくが、完全に相殺とまではいかない。

過剰といえる魔力を注ぎ込まなければ、魔力コントロールの訓練を受けていなければ、明日菜を助けるかどうかを迷わなければ、焦って手を伸ばさなければ、という以上のどれか一つの要素が欠けただけで防げていただろうがそれは最早ｉｆでしかない。

妖気の衣で大半を削り取られたとはいえ、未だ健在の【雷の暴風】は容赦なくガードした腕を抉ってアスカの体に着弾する。

「ガアアアア――――――――――ッ！！！！」

《――――アスカ！！》

《くっ――！！》

体を襲った痛みにアスカは思わず獣の如き叫びを上げ、念話での二人の悲鳴も届かずに痛みと衝撃で意識を失いながら、後ろにいる

二人と一緒に吹き飛ばされる。

ネギの放った【雷の暴風】とアスカの障壁、玉藻の妖気の衣が衝突した所為で土を巻き上げて粉塵が辺りを埋め尽くした。

アスカが地面に叩きつけられる直前、玉藻が再展開した【チャクラの衣】が彼を優しく受け止めて下ろす。

アスカがこの場に現われて合計すれば5秒程度の電光石火の如き出来事であった。

並行してアスカの治療も行っており、【雷の暴風】が直撃した胴体では心臓に穴が空き内臓の一部が抉られるなど即死してもおかしくは無かったのだが、持ちこたえたのは玉藻のお陰である。いや、直ぐに稼動したといっても一瞬とはいえ心臓は止まり、その後も断続的に止まっては再稼動を繰り返していた。

現状は予断を許さない。玉藻の治癒力なら傷は時間を掛ければ治るが、流れ落ちた血は決して戻りはしない。このままでは出血死は免れない。例え出血死までは至らなくても血を流し続ければ後遺症が残る可能性もある。

「うわあぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーーーーーーーーーっ！！！！」

「っ！……兄貴、落ち着いてくだせぇ！！　うぉ！」

ネギの叫びやカモの静止の声が聞こえるが、玉藻にはそんな事を気にかける余裕はない。

《アス――カ！　しっ――――――かり――し――――てくだ――――――さ――い――――》

玉藻みたいには外界に働きかけれないリインフォースは、意識を失ったアスカに呼びかけを続けるもノイズが奔ったように言語が不明瞭になっていた。アスカの危急の事態に彼女にもなにかしらの異常が起こっているようだが、呼びかけを止めない。

アスカの意識が戻れば、自力で治癒術を使えるので生存確率を高められるからだ。そもそもアスカが死ねば彼女も諸共（もろとも）に死ぬ。はやてとの約束もあるが、純粋に彼女はこのお人好しな少年に好意を抱いていた。勿論、恋愛的な意味ではない。死なせないためには呼びかけを止めるわけにはいかない。

明日菜は何らかの理由で気を失っており、明日菜と激突した為か、魔法によって発生した衝撃かは分からないが何らかの理由でフリーズした茶々丸と共に倒れたままで動きはない。

「一体、何なん今の！？」

「あかんてこのちゃん、危険や！！」

アスカが突然目の前から消えた事に混乱していた木乃香を、アスカが指を鳴らした後に結界を張ったことで魔法関係の何かで問題があったのだと予測した刹那が落ち着かせようとする。

アスカが目の前から消えたのに動揺していない刹那の行動を不審に思った木乃香は、直後に起こった教会の方角から響き渡った爆発音と煙に驚きながらも何かしらの関係があるのだと直感的に感じた。

普段はのんびりしている木乃香だが、こうと決めた時の行動は早い。

爆心地を見ていて自分から目を離した刹那の一瞬の隙をついて、後ろからの静止の声を振り切って現場に走る。

刹那も何があったのかを詳しく知るわけではないので、爆心地を見てしまった隙をつかれた。

基礎運動能力が違うので刹那は直ぐに追いついたが、魔法関係が原因だから木乃香を止めたいが適当な理由が思いつかず、結局は引き摺られるように一緒に現場に向かうことになり、それでも焦りから幼い頃の呼び方になりながらも遠ざけようとするも果たされる事は無かった。

「見たら駄目や、このちゃん！！」

そして、逸早くそれを見てしまったがために木乃香の視界を塞ごうとするも少しだけ遅かった。彼女はそれを見てしまった。

「……ぁ……」

玉藻は外界の情報を一切遮断し、治癒、いや最早再生と呼べる作業を続行する。

この時点で心臓などの内臓の治癒は終了しており、このままのペースで行けば最悪の場合でも死にはしないが、このまま血を流し過ぎると何らかの障害が残る可能性が高い。血が流れすぎれば出血死の危険性は変わらない。

かといってこれ以上は再生スピードを上げることもできない。

リインフォースも呼びかけを続けているが、彼女自身になにか異常が起こっているせいで言語不明瞭で届かず、アスカは完全に意識を失っており直ぐに目覚める可能性はかなり低い。

（どうしたらええんや！！）

外面の状態はそのままなので死体とすらいっていいアスカの状況に、刹那は危急の事態でありながら直ぐに次の行動を移せずにいた。

裏の事を知っている刹那でも、ここまでの惨状は見たことはないが木乃香の存在が途切れてしまいそうな精神を支えている。それでも顔面を蒼白にして、体はカタカタと震えていた。

平穏な生活をしていた木乃香にとって、最早死体とすら言っていい惨状を見たことがある筈もない。

玉藻の再生力を知らない人間では、腕が千切れかけ内臓が見えるほどの傷では助かるとはとても思えない。

当然、玉藻の事を知らない木乃香は既に死んでいる、もしくは助かる筈が無いという結論に至ってしまうのも無理からぬ事である。

半年にも満たないとはいえ、一緒に暮らしていた人が、そんな状態になれば精神の均衡を崩しても何もおかしくはない。

「いやあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーーーーーーっ！！！！！！！！！」

叫びを上げる木乃香の両の目は見開かれアスカを見つめる眼差しは、どこか危ういように思われた。

「このちゃ――――――！」

尋常ではない木乃香の様子に危険な物を感じ、落ち着かせようと刹那が名を呼ぼうとした時、不意に木乃香の体から柔らかな淡い光が溢れ、特に仰向けで倒れているアスカの身体を集中して包み込んだ。

「っ！　こ、これは！」

刹那はそれが何かに気付いて声を上げるが、木乃香から放たれた柔らかな光が、その場に居た全ての者の目を貫いた。

近衛木乃香は、極東最大級の魔力保持者である。その潜在能力を持ってすれば、例え単なる感情の爆発であっても何らかの効果を発揮することは不思議ではない。

更に年明けに起きた『コックリさん事件』で雑霊に憑依された所為で既に潜在能力の片鱗を見せていた。今まで機会に遭遇することがなかったが感情の昂ぶりによって完全に目覚めた。

元々の本人の特性か、現状で単純に治って欲しいと願ったからかは定かではないが、今回は治癒という形で現れた。

時間的問題で焦っていた玉藻は渡りに船とばかりに、木乃香の力に上乗せして一気に傷を治していく。

玉藻の再生の上に木乃香の治癒が加わったことで、真祖の吸血鬼

並みのスピードで千切れかけていた腕は？(つな)がり、抉れていた胴体は元通りになった。

だが、瀕死の重傷者を一瞬で完治させるほどの治癒能力。きちんと術式を整えて施される『魔法』であっても難しい効果を、強引な力技とも言える方法で発揮した木乃香は、代償として潜在する魔力の急激な放出は心身ともに大きな負担を掛け、意識はなくなっていないが体から力が抜け、ペタンと尻餅をつく。

代償はそれだけではなく、精神防衛が働いたのか先程のアスカのグロテスクな姿が記憶から消えていた。だが、完全に消えたというわけではなく、そういうことがあったという認識は残ったままだ。それでもトラウマになるような映像を忘れられたのは十分に幸運と言えるだろう。

「はぁ……はぁ……はぁ……・なんやのこれ、せっちゃん？」

「それは……」

息を乱して根こそぎ力を持っていかれたような感覚を受けた木乃香だが、自分が何かをしたことでアスカの怪我が治ったことは何となく理解していた。

問われた刹那も、既に魔法関係の事を話さないと説明できない状況になっているが、自分がその事を言うわけにもいかず、どう答えるべきかが分からずに答えを濁してしまう。

「……う……ぅん……？」

木乃香の叫びか、それとも溢れた光に当てられたのかは分からな

いが、アスカの後ろで倒れている明日菜が茶々丸の上から起き上がるが、どこか寝起きのように目がぼんやりとして状況を認識できていない。

「……再起動開始……これは一体？」

その直ぐ後に茶々丸が再起動するが、さっきまでいなかった刹那と息を乱した木乃香、アスカは血の海に沈んでいるが見た限り怪我はなく、明日菜が自分の目の前にいるのだから現状を理解できずに質問するが、答えるものはいない。

誰もが状況を理解できずに困惑する中、突然倒れているアスカの隣りに煙が発生し、そこからとてつもない美貌の金髪の女性、玉藻が現れた。

「やれやれ、何とか一件落着かと思ったんじゃがな。いろいろと話を聞きたいのじゃろうが、先に主を病院に連れて行くが……構わんな？」

その場の全員は素直に玉藻の言葉に従うしかなかった。

アスカの傷が見た目的には完全に癒えているので、玉藻がアスカの使い魔である事を説明しても混乱は起きなかった。

その後、玉藻がまた煙を立てて皆を驚かせたが、眼にも止まらない速さで【影分身の術】をして分身体が姿を消して別の場所へ向か

ったことに気付いたものはいなかった。

「刹那よ。病院に行きたいが、主がこの格好じゃから認識阻害を掛けれぬか？」

玉藻には当然のことだが認識阻害の魔法は使えない。

アスカは上半身裸、ズボンをあちこちが破けていて髪とかにも血がついて赤く染まっている。そんな状態で往来を歩けるはずもない故の刹那への頼みであった。

「はい、確かにそうですね」

こっそりと玉藻がこのメンバー以外には自身が別の人物に見えるように幻術を掛け、刹那はアスカの服装が服装なので頼まれた通りに認識阻害の札を発動させる。

刹那の術が発動したので、これで周りにはそんなに特異な集団には見えないだろう。

「茶々丸よ、エヴァンジェリンと学園長に連絡しておいてくれぬか？　ここは荒れておるから修繕せねばならん。それと用があるから学園長室に残っておくようにとも」

「分かりました。用は何と伝えればよろしいでしょうか？」

玉藻がネギの魔法によって彼方此方の地面が抉られているのを見ながら言うと、茶々丸も同じ気持ちなので頷き、二人を残す用とは何なのかを問う。

「ネギとオコジョを連れて行く、とだけ伝えてくれればよい」

「畏まりました。伝えておきます」

玉藻は意識の戻らないアスカを抱え、力が入らず動けない木乃香を刹那が背負い、ようやく意識がはっきりした明日菜は時折アスカを心配気に見つめながら自分の足で歩き、茶々丸はマスターであるエヴァンジェリンに連絡しながら皆の後を歩く。

気になったのは傷が癒えたはずのアスカの体に走る数多の傷跡。

「ねえ、アスカの体中の傷跡って一体……？」

「ざっと見るだけでも切り傷や焼き跡があります。とても尋常とは思えません」

「そうやね。どうしたん、この傷跡？」

「答える必要は無い……と言いたいが必要になったら、主が言うだろうからそれまで待っておれ」

途中で傷跡だらけのアスカの体を見た明日菜達の間で問答があったが、玉藻はアスカに関わる事でもあるので、必要になれば自分で言うだろうと考えて答えなかった。

茶々丸から連絡を受けたエヴァンジェリンは学園長と囲碁をしていた時に電話を受け、事情を聞いた学園長が慌てて病院とネギの魔法によって荒れた地の修復の手配をする。

電話の途中で玉藻が茶々丸に、二人には学園長室に残ってもらえ

るように伝言を頼み、理由を聞いた二人は残る事を選択する。

茶々丸の案内で6人は手配された病院に向かい、話が通されているので玉藻立会いの下（何を言っても離れようとしないため）、外傷がないので一通りの検査をされた（この時玉藻の姿は別人に見えている）

「私達も検査を……？」

「別に何ともないんやけど……」

「明日菜はさっき様子がおかしかったし、木乃香は魔力を放出した影響を調べるためじゃ。体に何かしらの影響があるかもしれん。念のために受けておけ」

明らかに様子のおかしかった明日菜や、木乃香も急激な魔力の放出した事を考え、二人とも念のために検査を受けることになった。

3人が検査を受けている間、ネギとカモを探していた玉藻の分身は裏山の森にやってきていた。

「……僕は……僕は……僕は……」

幼少の頃より、常にネギ・スプリングフィールドは他の子供たちより一歩抜きん出ていた。どんな課題も、ネギより上手く早くこなすことができる者はいなかったし、彼と競い合って勝ちを取れるよ

うなライバルも存在しなかった。

確かに父の跡を追うという執念染みた向上心で並外れた努力を積んだというのもあるが、彼の成し遂げる成果が何時如何なる時も他者よりも立ち勝っていたという、それだけの事でしかなかった。

当然の結論として、ネギ少年は自分が”天才”と呼ばれる人種であるものと無意識に了解した。それは自他共に認める認識だった。誰も異論を挟みもせず、またライバルのように脅かすような存在も決して現われることはなかった。だから彼は驕りもせず、誇りもせず、ただ当然のように天才であり続けた。

壁に突き当たることも、限界に悩むこともなく、ネギの世界はまさに彼自身の支配下にあった。その認識には疑念の余地など何一つなかったのだ。麻帆良に来るまでは――――という注釈がつくが。

修行で麻帆良を訪れてからは失敗の連続だった。特に最初はやることなすことが裏目に出て周りに、特に明日菜に迷惑ばかりをかけていた。最近で言うなら学期末の図書館島の侵入の件などそうである。

なまじ人並み外れた才能に恵まれ、失敗や挫折とは無縁の人生を送ってきただけに、怒られ、間違いを正される日々は彼に容易ならざるストレスを与えていた。それは生まれつき成功を約束され、祝福ばかりを一身に浴びて育ってきた者ならではの脆さといえた。

教師という職業に対するストレス、見知らぬ土地ですごすストレス、修行を完遂させなければならないストレス、その他にも色々な要素が重なっていた精神苦は本人の自覚がないほどに肥大していた。

あまりにも最初にぶつかった壁が大きすぎた。エヴァンジェリンという伝説級の真祖の吸血鬼。それに全力を尽くすのは当然であり、人数で劣るネギが取れる最善の手段であった。それが目の前の脅威から少しでも目を逸らすための方法だとしても、だ。

それが自身の成した結果とはいえ、誰かがお膳立てして舞台で踊らされた被害者にすぎない。勿論、他にも道はあったのに事を起こしてしまったネギの責任も大きい。

だが、誰も彼もが間違った中で一番の犠牲者が誰かとアスカに問えばネギと応えるだろう。それが利用していたという弱みがあるにせよ。

「兄貴しっかりして下せぇ！！」

玉藻の分身体は森で壊れたように何かを呟き続けるネギと、様子のおかしいネギに呼びかけ続けるカモを発見した。

「ふむ、あの様子では壊れたか？　眠らせてさっさと連れて行くか……幻術【涅槃精舎の術】」

一人と一匹を発見した玉藻は、様子がおかしいことに気にはなりはしたものの、さっさと用事を終わらせるために術の範囲を限定して印を組、【涅槃精舎の術】を使った。

「……僕は……スゥ……」

「……何でぇこれは……急に眠くなりやがっ……グゥ～……」

ネギはあっさりと幻術に引っ掛かり、白い羽の幻影を見たカモは突然の睡魔におかしい事に気付くも、本能が睡眠を欲し、抗うこともできずに深い眠りについた。

「さて、行くか」

彼女自身、伍するものがあってもそれを表に出すことはなく、与えられた役目だけを粛々とこなす。

深い眠りについたネギを脇に抱え、カモを掴んで幻術で姿を隠しながら魔法使いでも見えないスピードで学園長室に向かい、そのまま一人と一匹を遠慮も呵責も無く窓から学園長室に放り込んだ。

第四十七話　闇の福音と原作主人公と少年　５（後書き）

次回の更新は『月曜日』午前０時に予定しています。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

筆者の魔法世界救済案の原案

・陰陽遁（想像を司る精神エネルギーを元とする陰遁の力、それを使って無から形を造る。生命を司る身体エネルギーを元とする陽遁の力を、ソレを使って形に命を踏み込む（ＮＡＲＵＴＯ５４巻より抜粋））

想像を生命へと具現化するうちはの禁術【イザナギ】など色々と活用の使用はありそう。

読者の皆さんはなにか救済案はありますか？

『特別編　姫騎士物語（仮）』キャラクターの本編後

・神楽坂明日香（男なのに本作における公式のヒロイン）

復活後、完全に力を失くしており、剣化することや裏関連の能力を全て使えなくなってただの子供となっていた。

その後はただの子供として麻帆良小学校に入学し、順調に成長。純粋ながらもポヤヤンとした感じの青年へと成長する（イメージ：ガンパレード・マーチの速水厚志（暗い面なし））

だが、１３年後の１８歳の誕生日になんと姉である明日菜と結婚。しかし、周りは姉大好きの弟と弟大好きの姉だったので納得顔だったそうな。

特徴：シスコン、ぽややん、純情

・神楽坂明日菜（女なのに本作における公式のヒーロー）

最後に明日香を犠牲にして世界を救うも本人は悲嘆に暮れる。だが、明日香が復活したことで彼女の機嫌も急上昇。木乃香が止めなければ明日香の貞操は危なかったかもしれない。

実は魔法世界のお姫様であることが分かるも本人は「なに、それおいしいの？」と言わんばかりに放置。明日香が帰って来た後はこれ以上の面倒は御免と裏関係に一切関わらず、念願の弟との日常を満喫する。

１３年後、明日香１８歳の誕生日に入籍（入籍前日に明日香の寝込みを襲って逆に手篭めにされたそうな）。幾つになっても離れることはなく、子沢山に恵まれ、二人仲良く老衰で手を繋いだまま亡くなった。

特徴：ブラコン、弟の前では乙女

・ネギ・スプリングフィールド（原作主人公だが本作ではライバルポジション）

明日香消滅後、自身の能力の低さを自覚しながらも世界を救わんとした意思を継ぎ、ナギの息子と仮初とはいえ英雄の地位を利用して奔走。それと万が一のことを考え、火星の緑地化に着手するなど歴史に残る活躍の数々を残す。

明日菜同様にブラコンに目覚め、嘗て明日香を作り出した連中や利用しようとした連中を己の地位を使って徹底的に殲滅。その筋では大層怖れられたそうな。神楽坂姉弟が日常に戻れたのも彼のお陰。

原作よりも圧倒的に男気を増した彼に惚れる女性は数知れず、二代目サウザンドマスター、千人と仮契約した男、ハーレムを築いた男、などとそういった方面ばかりの異名も残した。

特徴：ブラコン、本作中最も熱い人、怒らせたら怖い

・ナギ・スプリングフィールド、アリカ・アナルキア・エンテオフュシア

復活後、アルビレオと学園長が明日香と明日菜を利用した事を知って大激怒。だが、結局は自分たちが終わらせることが出来なかったこと、結果的には彼らの思惑通りに進んだお陰で終結したことに責任を感じ、割と本気の一撃を二人に放つだけで終わらせた。

明日香復活後に養子に取る話が上がるものの明日菜のブラコン振

りに断念。

ちなみにナギは原作ほどファザコンではないネギの雷速瞬動でボッコボッコにされた。

生涯、ネギのサポートを続け、年になって後任に任せられるようになると隠居して静かに暮らしたという。

・アルビレオ、学園長

割と本作では腹黒かった二人だが苦悩がなかったわけではない。長い時を生きたアルビレオですらバグと言い放ったナギですら造物主に敵わなかったことから、唯一の天敵である明日香を利用することは当然の帰結であった。

結果的に上手くいったものの二人は復活後の明日香に誠心誠意謝罪。事情が分かる明日香はあっさりと許して和解。

学園長は職を後任に徐々に譲りながら一線を引き、偶に訪れる孫のような明日香の成長を楽しみにして老後を静かに暮らした。アルビレオは変わらず図書館島の地下に籠もりっぱなし、偶に来る明日香とのんびりと紅茶を飲むのが楽しみだとか。

・タカミチ・T・高畑

本作では割と阻害され気味なある意味で可哀想な人。

赤き翼は全員明日香の裏事情を知っていて隠され、クルトは独力で辿り着き、アルビレオと学園長は高畑に秘密で計画を進めていた。

明日香消滅後に全てを知り、消沈していたところにしずなに助けられて結婚。明日香関連以外では実は一番幸福だったんじゃないかと思われる。

第四十八話　闇の福音と原作主人公と少年　６（前書き）

設定と特別編を抜けばこの話で五十話。

本当に長いですね。

このペースでいくと終わるまでこの４倍はいきそうな予感。後、何週間というより何年掛かるかってレベルですよ。

マジで修学旅行編が終了した段階で読了時間が約２０００分を越えたらどうしよう……。

吸血鬼編全七話の第六話です。今話を抜くと次で最後ですな。

文字数は１０９０６字です。

どうぞ！！

第四十八話　闇の福音と原作主人公と少年　6

突如として窓をぶち破って部屋に侵入した一人と一匹を前に、エヴァンジェリンは渋面をした学園長に尋ねた。

「それで爺（じじい）。ボウヤをどうするんだ？　原因の一端である私が言うのもなんだが記憶を消すのが無難だと思うが」

「確かにそうじゃが……」

指摘された通り、状況を把握するために仕方なくネギの記憶を見て、このままでは不味いと思っていた。

特に明日菜を殺したと思い込んだことが、精神状況の悪化に拍車を掛けており、処置をしなければ最悪の精神崩壊等の結果に成りかねない。

心と身体はどちらかが失われれば必ずもう一方もバランスを崩し失われる。つまり、死だ。身体が死ねば、一瞬の死を。精神が死ねば、緩やかな死が待っている。

大きな怪我をした時、身体の場合なら使い物にならなくなった腕を肩から切り落とすといった種類の処置というものがあり、末端を切り捨てる事によって本体を守り、命を繋げると言う方法がある。

これは心にも当てはまり、今回のケースは心が負った傷を、その傷ごと消去してしまうのだ。

別に記憶の操作とは、魔法の秘匿のためだけに行う事ではない。心のケアが必要だと判断した場合にも行う物である。暗示と言う意

味でなら、科学的に解明されており、催眠療法として使われる事もある。

だが、この魔法にも当然の如く限界は存在する。何でもかんでも消去したり変形させたり出来るわけではないのだ。

その条件を大まかに言えば、記憶が新しいこと。そしてあまり情報量が多くないこと、となる。行使者の力量によって許容範囲は上下するが、基本的にはそれが守られていないと改竄できない。たとえ出来てもそう遠くないうちに自己修復される。

心を守るために魔法を行使すれば一時的な混乱はあるかもしれないが決定的な破滅は迎えない。

特にネギの逃げ出した後の精神状態を思えば行使しなければ精神的に壊れるかもしれない。

「このままネギ君を放っておけば壊れてしまう……仕方あるまい、か」

他に方法が無い以上、取るべき手段は一つしかなく、エヴァンジェリン立会いの下でネギとカモの記憶消去と改竄を行うしかなかった。

記憶操作を終えた一人と一匹を、来てもらったしずなに運んでもらい、木乃香が魔法に目覚めたという一大事、アスカが重傷を負ったということもあって直ぐに病院に向かった。

学園長たちが病院に到着した頃にはアスカ達の検査も終わり、アスカの外傷は木乃香の力によりほぼ完全に癒されたが、消耗した体

力、気力、精神力と流した血は戻らず、魔力酔いなどの副作用が見られていた。

更に左腕は千切れかけていた影響から、若干のマヒが残っており、場合によってはリハビリが必要で『一週間は絶対に安静にし、激しい運動はしばらく控えるように』というのが医者の診断だ。

明日菜は異常なしで、木乃香は急激な魔力の放出で力が抜けただけで体に異常はなく、それも時間が経った今は回復している。

木乃香に一部の記憶障害が起こっているが、精神の防衛機構が働いただけで問題はないと診断された。

「さて、まずは何も知らない木乃香の為に裏の事から説明せねばなるまい」

検査が終わった後は個室に移されたが未だにアスカの意識が戻ることは無く、事情を中途半端に知っている明日菜、全く知らない木乃香、エヴァンジェリン関係の事は知らないが裏の事だと予測している刹那、全て知っているがあの後の事を知らない茶々丸、の４人に玉藻がまず何も知らない木乃香に裏の事から説明を始めた。

刹那としては、正直裏の事を知ってほしくは無いが既に完全に魔力が発現してしまったし、木乃香本人の強い意向もあって渋々認めるしかなく、玉藻の話に横から詳しい説明を入れるしかなかった。

「そう……なんか。お父様が……」

「お嬢様……」

「大丈夫、大丈夫やから。それとお嬢様やなくてこのちゃんやで？」

「……はい、このちゃん」

木乃香は話を聞いて、父親の意向とはいえ、自分だけ知らされていなかった事や刹那が護衛であるという事にショックを受けたものの気丈に対応している。

裏の事を話し終えた後はエヴァンジェリンの話に入り、二人の表情がどんどん強張っていった。

ここここに至ってアスカが黒幕というのも明かさざるをえなかった。どうしてネギがこんな行動を起こしたのか、アスカがなにを思って計画に加担したのかを全て。

「「「「……」」」」

全てを知っていた茶々丸は別にして、まさかアスカが計画の黒幕だったとは思いもしなかった明日菜、アスカがエヴァンジェリンに襲われていた現場を知っていたので被害者だと思っていた木乃香、もっとも関わりの無かった刹那と心中は別にして、そこまで話すと病室は葬式のように静まり返り、そこでちょうど学園長とエヴァンジェリンが到着した。

「お爺ちゃん！！　一体どういうことなんこれは！！！！」

木乃香が学園長に普段の温厚な姿は何処に行ってしまったのだと思うぐらいの剣幕で詰め寄る。

身内ならではの甘えもあったのだろう。行き場を失くした想いを

ずっと自分に隠し事をしていた祖父へと向けられた。

「すまんかった、木乃香」

誰もが木乃香の様子に呆気に取られる中で、ただ一人学園長は全てを分かった上で孫娘の癇癪を受け止めた。

学園長もネギがこんな強行手段を実行するとは思ってもいなかった。確かに人気がないからと言って結界も張らずに事に及んだのは頂けないが、単純にこれが魔法使いとの戦いであれば決して戦法としては間違っていない事を理解している。

初めに生徒であることを止めて敵になることを望んだのは彼女たちの方だ。ネギだけが教師という立場に縛られるのは、不公平である。敵は全力で排除しなければならない。例えネギが戦いを避けようとしても、エヴァンジェリンの方が襲ってくるとなれば戦って生き残るしか方法はない。圧倒的な力があれば、上手くはぐらかすことだって出来るだろうが、まだまだ力不足で、敵に温情をかけられるほど余裕がない。頼れるはずのタカミチは出張中でいない。

エヴァンジェリンが無用に脅しつけたりしなければ、ネギがこんな行動を取る事もなかっただろう。

血を吸わせて欲しいと頼めば、それで解決していた可能性だってあるのだ。

ネギだけに責任があるわけではなく、方法を間違えたエヴァンジェリン、なんの対策も取らなかった学園長と皆等しく責任があることはよく理解していた。

それを考えればネギにばかり負担を強いたアスカの方がまだマシであろう。そして本人はその報いを十分に受けた。

だが、完全な部外者である木乃香、刹那、明日菜にそれは関係ない。彼女たちは純粋な被害者だ。特にトラウマな映像を忘れたとはいえ、ずっと隠されていた衝撃の事実を知らされた木乃香は最大の被害者と言えるだろう。

「ううぅ……」

「このちゃん……」

自身の胸の内で木乃香の途中から泣きながらの言葉に、気づかぬ内に耄碌していたのかと思わずにはいれない。

学園長が周りを見渡せば、やるせない表情で寝ているアスカの顔を見ているエヴァンジェリン。

唇を噛んで泣きながらネギの行動を止めることができなかった所為だと後悔している明日菜。

自分を庇った所為でと無表情の筈なのに落ち込んでいると一目で分かる茶々丸。

泣いている木乃香を抱きしめて憤りを感じている刹那。

一般人と変わらないのに関わってしまって泣いている孫娘の木乃香。

5人を見て、人死には至っていなが劣悪な事態に学園長はため息

を吐いた。

「悩んでいるところ悪いが、ここにいる全員に今回の一件に関して暗示を掛けたいのじゃが。構わんかな？」

「どうしてだ？　記憶消去すれば何の問題もなかろう」

玉藻としてはまだ知られるわけにはいかない自分の事や、この事件の口止めも兼ねてはいても記憶操作云々は勝手にしてくれという気持ちだったのだが、エヴァンジェリンの言葉に元から裏の関係者である刹那以外の、明日菜と木乃香の体がビクッと震える。

「嫌や！　うちは忘れたくなんかない！！」

「あたしも、もうこれ以上忘れたくない！！」

自分が記憶を消されるかもしれないと思った二人が、叫びながら学園長とエヴァンジェリンから距離を取る。

木乃香は別にして明日菜の言葉がおかしいことに気付いたのは玉藻だけで、学園長は二人の精神状況を考えて記憶消去も一つの手だと思っていたのだがエヴァンジェリンの余計な一言で不可能になってしまい顔を顰(しか)める。

一般に魔力が高ければ高いほど、気付かぬうちに魔力で抵抗(レジスト)してしまうため記憶操作魔法の効果は薄い。魔力が高い人間に記憶操作の魔法を施す場合は、魔法で睡眠状態等にして意思を弱くしないと意味が無い。

ネギの場合は魔力は高いがほとんどを使い果たし、明日菜を殺し

たと思い込んで精神が薄弱になっているから十分に効果を発揮したが、木乃香の場合は弱っていても意志がはっきりしているし、ここまで記憶を操作されることを強硬に嫌がられると学園長としてはやり辛い。

木乃香の場合は魔力を発現してしまった段階で、記憶を消したとしても、その潜在魔力から何時思い出しても不思議ではない。

明日菜の場合は学園長を持ってしても完全に能力を把握できている訳ではないので、強硬に記憶を消そうとして消せなければ後でどうなることか。

記憶を消して二人の精神を安定させるというメリットはあっても、本人が拒否している以上はデメリットが多すぎる。

「流石にここまで嫌がられたらせんよ。安心せい」

「だが、我の暗示は受けてもらうぞ。今回の事は口外せん方がいいし、ネギの記憶を消した以上は罰を与えられんから普段と同じように過ごす以上、警戒し過ぎないようにしないといけないしの」

学園長が溜息を尽きながら言うと二人も緊張していた肩を撫で下ろし、続けた玉藻の言葉に学園長もこれからの学園生活を送る上で必要だと判断した。

記憶を消されないのならと玉藻と学園長の言葉に納得して、明日菜と木乃香は大人しく暗示を受ける。

刹那や学園長やエヴァンジェリンも玉藻の暗示は強力だからすんなりと掛かり、唯一ガイノイドで暗示の効果を受けない茶々丸だけ

は対象外だが、自分でデータを消去しているから話せないのは一緒である。

これでネギが起こした事件は、暗示の為他の人には話せないので今、病室にいる人間以外が知ることはない。

「……うっ……く、此処は？……」

「「「「「アスカ（君）（さん）！！」」」」」

「大丈夫か、主？」

そんな中でアスカが僅かに呻き声を上げ、少しだけ顔を左右に動かして辺りを見渡して見覚えの無い場所にいるので問いかけるも、玉藻以外の全員がベッドに詰め寄って名前を呼ばれ、サングラス越しに目をパチクリとさせる。

普段なら寝起きははっきりしているのだが、血が足りないのとショックでアスカの意識は半ば混濁しており、今が何時で此処が何処なのかをはっきりと認識できていない。

故に、

「…こ……こは……病…院？……嫌、だ……玉藻……ここに、いたくない……」

確かにアスカは目を覚ましたが、血が足りないせいか朦朧とした意識のままで病室にいることを嫌がる。これは僅かな前世の記憶が強く蘇って病室にいると自分がこのまま死んでしまうと錯覚してしまったからだ。

アスカの様子がおかしいことに気付いた玉藻が他の面々を下がらせて、枕元に身を寄せる。

「そうか、分かった。安心するがよい、今は何も考えずに眠れ」

「うん……スゥスゥ……」

恐怖を和らげるように玉藻は急いでアスカの下へ走って手を握り、見下ろす瞳を優しく細めた。

玉藻の手は、温かく柔らかい。彼女の脈動が、まるで夜泣きする赤子を寝かしつける母の子守唄のように、手のひらの温もりを通じて溶け込み、アスカの心を静めてゆく。

母親のような優しい微笑を浮かべた玉藻がゆっくりと頭を撫でながら言うと、アスカは誰も見たことが無い年相応の少年のような笑みを零して安心したように再び眠りつく。

長年のパートナー玉藻が傍にいてくれることで、アスカはようやく落ち着きを取り戻して眠りに落ちた。

アスカの寝顔は母に抱かれた子供のように安心しきっており、優しく頭を撫でる玉藻の姿に病室にいる皆が本当の家族であるように錯覚してしまう。

そこには完成された家族の形があったのだから誰も何も言えない。

結局、その後に玉藻は医者から退院許可は出ていないが、アスカを大事そうに抱えたまま、誰も止めることができずに強引に退院し

て家に帰ってしまった。

誰も止めることもできず、病室を去っていく二人を見届けた後、病院にいた面々は学園長室に場所を移して話を続けた。

あんなことがあった後で、部屋は違うが寮でネギと一緒に暮らすことはできないという木乃香の意見で、ネギはその日の内に女子寮を出て高畑の部屋に住む事になった。

荒事なんて今まで関わったことのない木乃香にとって、そこに至る行動の理由を理解できても今回のことは余りにも悪い意味で衝撃的過ぎたからだ。

高畑は出張などで麻帆良にいることが少ないため、その場合は近くの部屋の教師が面倒を見ることになり、ネギが部屋にいることに出張から帰ってきた高畑は困惑したが、学園長の説得と一緒に暮らせる事実に喜んでいたのでこうなった真実を知ることは無かった。

学園長は義息子の詠春に事情は話せないが、木乃香が魔法の事を知ってしまった事を伝える。

先に娘から尋常でない様子で涙ながらの電話を受けていたから、自分には事情を話せない何か非常事態が有ったと予測していたので、責めることも無く義父を本心は別にして許した。

寮に戻って休日の間は、木乃香が父に電話した以外で部屋から出る事も無く外と関わらず、刹那は自分の部屋ではないが二人を心配してずっと傍にいた。

記憶処置され何も不思議に思わないネギは高畑と一緒に暮らせる

事を喜び、休日明けから普通に出勤した。

明日菜達がネギに最初に会った時、暗示の効果も有ってぎこちないが普段通りの対応でやり過ごしたが、それから接触の機会はかなり減っている。

学校とネギやクラスの生徒にはアスカが交通事故に遭い、重症ではないが大事を取って一週間自宅療養するため休むと説明され、見舞いに行くという話が出たが、意識がはっきりとしたアスカが事前に察知して『大事を取っているだけだから見舞いに来なくていい』という伝言を伝えられた為、無くなった。

数人の生徒が、アスカの事故や明日菜達のネギへの対応を見て疑問に思ったが、関係者が話すことが出来ない以上は真実に至ることは無い。

ネギが暴走した事件（４月１０日）から４日目の夕方、次の日には決戦だから自分の従者茶々丸を襲い、助けたアスカに重症を負わせたネギをどうやって再起不能にしようかと考えていたエヴァンジェリンは、初めてアスカの家に入ることができた。

アスカは今まで自分の家に誰も入れようとせず、それは隣りに住んでいるエヴァンジェリンですら例外ではなく、如何なる手段を持ってしても招かれねば入るどころか覗くことすら出来ず、故に存在は知っていても家以外で姿を現すことの無い玉藻の事を知らなかったのだ。

カーペットも、カーテンも、アスカが今横になっているベッドも、しごく当然に清潔を保たれていた。家具は少ないが、これも必要な物は全て揃えてある。アスカがここで生活しているのだから、当たり前といえば当たり前だが。

大体十畳ほどの広さにＴＶ、テーブル、キッチン、本棚、食器や香辛料の入った棚、ベッドと小さな冷暖房がある簡素な家だった。

本棚には年頃の子供のような漫画は一切無く、特に医療系の専門書がぎっしりと詰まっていた。

棚には様々な香辛料や酢、酒、味噌などの調味料が所狭しと並んでいるが、ほとんどが輸入品らしくラベルは外国語である。明らかに言語が違うものがほとんどなので、世界各地から集めたと思われる。日本の一般家庭には珍しい調理器具も幾つかあり、一見しただけではどこの国の台所なのか見当もつかない。壁に貼り付けられた世界地図に書かれた印が何かを予感させていた。

「何！　今回、坊やがやったことを全て見逃せというのか！！」

初めて家に入れた事にご機嫌のエヴァンジェリンと、彼女に付き従う茶々丸も無表情に見えるが若干口端が上がっているので嬉し気にしている。

だが、椅子に座って最初にアスカが放った「今回の一件に関して兄さんがやったこと全てを忘れて欲しい」という言葉にエヴァンジェリンが用意されていた椅子から立ち上がって吼え、茶々丸が倒した椅子を直しながら真偽を確かめるように静かに見つめる。

「エヴァンジェリンよ、少し落ち着け。主は病み上がりじゃぞ。それに淑女が裸の男に詰め寄るとはなにごとじゃ」

興奮した様子のエヴァンジェリンを諫めたのはキッチンでなにかをしていた玉藻。

それでいま自分が上半身裸で針治療を受けていたアスカに近寄りすぎていたことに気づいた。いまアスカは長く細い針を経絡に刺して回復を促している状態なのだ。必然、上半身は裸になっている。

エヴァンジェリンは彼を一瞥すると、裸を正視するのが気恥ずかしかったのか、心なし頬を桜色にして直ぐ目を逸らした。

「ほれ、薬湯じゃ」

「ありがとう、玉藻。じゃ、いただきま――――――って、うっ……」

寝たままであるが陶器に入れられた薬湯を飲もうとしたアスカの動きが、ぴたりと止まる。器からは、嗅いでいるだけで頭蓋が割れそうな、強烈な刺激臭が漂っていた。

（これは、師父の漢方薬湯か）

中国にいた頃に大怪我をした時に剣星が漢方を調合して作り出した薬湯。玉藻もアスカと一緒に作り方を学んでいる。

そしてその抜群の効果の程は自身の身でよく知っている。

アスカの米神（こめかみ）を、たらりと汗が一粒流れる。ちらりと中身を見れ

ば薬湯は黄土色に澱んでいた。

外面は癒えているように見えてもアスカの内面は完治していない。幾ら木乃香の資質が治癒に特化していようが解放された魔力波動だけで完治はしない。

だからこそ、早く傷を癒すために飲まなければならない。アスカは仕方なく覚悟を決めて、薬湯を一口だけ口に含んでみるが、

「～～～～～～～～～～～～！」

口一杯に広がる味のえぐさたるや、凄まじい。二度目なのでまだ耐えられるが、初めて飲んだときは咽て汁を拭いてしまったほどだ。

地獄を長引かせないために一息に全部飲む。

「○×△○△○×○×△○×○△！」

その威力は凄まじく、アスカの口から言語化できない言葉が迸った。

数分間、悶えた後に薬湯を飲む前よりも幾分回復したアスカは針を抜き取り、上の服を着てテーブル越しに二人と向き合った。

「それで調子はどうなんだ？」

間が開いたことで落ち着いたエヴァンジェリンが開口一番に尋ねた。

「まあ、両腕に多少の痺れが残ってますし、血が足りないのでしん

どいですけど暫くしたら治るでしょう。心配してくれてありがとうございます」

確認するように拳を閉じたり開いたりを繰り返して現状を伝える。

医者の診断よりかは玉藻が体内にいて治癒に専念することで完治までの時間は縮まるが、どうも木乃香の魔力が体内に残っているせいで自身や他者の治癒魔法が働かない所為でトントンといったところか。

体内に残留した魔力を吐き出せば即座に解消するが、かなりの量が残っているため戦闘レベルで行使しないと無理だろう。現状の血が足りないのと麻痺でとてもではないが数日は戦闘なんてもっての他で絶対安静だ。【増血丸】を使っているが自然治癒に任せるしかない。

「ふん。誰も貴様の心配なぞしておらん。で、奴は茶々丸を襲い、結果的にせよお前を殺しかけたのだぞ。それを見逃せだとふざけたことを言っている」

素直に礼を言われたことが気恥ずかしかったのかエヴァンジェリンの顔が朱に染まる。

そんな感情を隅に追いやり、冷静になったことで一時だけの激情は勢いを失ったことで彼女の頭は冷静に思考し、それでも結果的に死に掛けたのに許せというのに不審を覚えて問う。

「確かにそうですが、精神状態を把握できていなかった僕の不始末です」

「下等生物に唆されようが行動したのは坊やで、精神状態云々は自業自得だろう。フォローする人間が必要だったかもしれんが、それを用意すべきは学園長（じじい）だ。お前が気にするべきではない」

ネギに対して逃げ道は作ったとはいえそれ以外の道を絶ち、結果的に追い込んだというアスカの言葉を、エヴァンジェリンが真っ向からぶった切る。

茶々丸もそれを肯定するように頷き、自身にも油断した責任はあると思っており、だから庇ってくれたアスカが責任を感じるのは許容できない。

「……正直な話、明日菜さんの能力があったので僕が庇ったのは実は無駄だったんじゃないかと思うわけですよ。実際に障壁を壊されましたし」

「しかし、それは……」

病室でその話を玉藻から聞かされた面々が微妙な顔をしてしまったのはこの為である。庇って死にかけたのに明日菜の魔法無効化（マジックキャンセラー）で行為自体が無駄だったという話になれば言葉を濁してしまうのも無理は無い。

これも結局のところは結果論でしかないわけだが、アスカも後悔はしていないが大怪我した当人としては「俺の犠牲って一体……」と肩を落とさざるを得ない。

「私を助けてくれたのは事実なのですから、そんなに肩を落とさないで下さい」

茶々丸の慰めの言葉にアスカは少しホロリと目から心の汗が流れかけたが、なけなしの根性で耐える。

「私にも緩みがあったのは事実だ。油断して茶々丸を一人にしなければ、こんなことにはならなかったかもしれんが、だからといって許せることではない」

「ハァ……結局の所、直接的な被害を受けたのは僕だけなんです。間接的に被害を受けたのは他にもいますが」

「神楽坂さん、近衛さん、桜咲さんの事ですね」

頑固だなと思うべきか、懐に入れたら傷つけられることを許せないという優しさと思うべきかと少し悩むが、考えても詮無きことだとアスカは一つ溜息をつき、肉体的犠牲者が自分だけであり、精神的犠牲者の3人の名前を茶々丸が引き継ぐ。

「つまり今回の一件に限り、あなた達は何の被害も受けていない。これは事実です」

「だが、茶々丸が襲われてというのもまた事実だ」

お互いの意見が対立しあうのは仕方が無いことかもしれない。

エヴァンジェリンも計画を実行したとはいえ、先に襲ったのは自分だという負い目はあるが、それはサウザントマスターの息子であるなら仕方がないと思っているし、先に茶々丸が襲われる可能性は十分に予測していたから、襲ったという事実そのものをそこまで重視してはいない。

重視しているのは自身の油断によって、従者を庇いアスカが死に掛けたということだけだ。

「ならば、言い方を変えましょう。ネギを追い込んだのにはあなたにも責任の一端があるんですよ、エヴァンジェリン」

「ふん、襲ったことを言いたいのなら貴様も同罪であろう」

「違いますよ。僕が言いたいのは最初に襲った時点で茶々丸さんを出さなければ今回のことは起こらなかったのではって話です」

計画に加担していたのはアスカも同じ。いや、それどころかアスカの存在で行動に移せなかった彼女に万全のお膳立てをしたアスカの罪こそが最も大きい。

だが、アスカが言いたいのはそんなことではなく、当初の計画から外れた茶々丸を連れていったこと。

「しかし、それは結果論だ」

「ですが、今回の一端を担っているのは事実でしょう」

茶々丸の件は今回との明確な関連はないとエヴァンジェリンは断じるも、アスカの言もまた真実であった。

結果論にすぎないとしても今回のネギの暴走には少なからず従者の存在が関わっている。襲撃の時に茶々丸がいなければここまでのことにならなかったのでは、と推測を立てるのは容易い。

「そっちに実害はないんですから、ここで手打ちにして下さい」

「お前はそれでいいのか……」

アスカの言う通り、茶々丸が巻き込まれたが損傷することなく確かにエヴァンジェリン側に目立った被害はない。

言ってしまえばエヴァンジェリンが拘(こだわ)っているのは心情的な思いにすぎず、言ってしまえば気持ち次第でどうとでもなる。

「良いも悪いも今回のことは因果応報ってことでしょう。報いってことですよ」

惨憺(さんたん)たる心情のアスカは自嘲の笑みを浮かべた。

物事はそうそう、頭の中で引いた図面通りには行かない。ましてや――――人が胸の内に秘めた思惑など、容易に分かるものではない。

人の心とはままならないものだ。

自分自身の心でさえ満足にコントロールできないというのに、他人の心を理解しようとなると、その努力は困難を極める。

目に見えるもの、耳に聞こえるもの、肌で感じられるもの――――それらを通して接触を試みるより他にないわけだが、人の間には理解や協調よりも誤解や感情の縺れの方が生じやすい。

アスカが、アスカこそがこの世の誰よりもネギをネギとして見ていない。『ナギの息子』『英雄の息子』と偏見に満ちた目を向けてきた。

事件中、ネギの心情を思い計ろうとしなかった。いや、或いは意図的にしようとしていなかったと言うべきか。

盤上の駒、利用すべき相手、路上の石粒。

エヴァンジェリンの思惑を計り、最終的には戦う算段ばかりに気を取られて、二人の間で邪魔者として放って置かれたネギ。

それらを理解しながら目を向けようとしなかった。

事ここに至ってようやく無意識にネギに抱いていた無意識の隔意を自覚した。

そしてその代償は大きかった。

（リインフォース……）

眼を閉じて胸に手を当てて、内奥にいるはずのリインフォースへと意識を向ける。

しかし、語りかけた声に返って来る返事はない。

ネギの【雷の暴風】によってアスカが瀕死の重傷を負った直後から様子がおかしかったらしく、アスカが目を覚ましてからは何度語りかけても反応がない。内奥に沈んでも彼女は眠ったまま目を覚まさない。

間違いなくアスカが死に掛けたことでなんらかの影響を受けたのだ。眠っていても存在を感じるから死んだわけではない。しかし、

目を覚まさない。そして目を覚ます手段は――――――いまはない。

アスカにとってこれ以上の罰はない。

求めた学園側の思惑を知ることは出来ず、利用しようとした、眼中に無かった報いを受けた。

八つ当たりだとは分かっている。だが、いまネギと向き合って私情を挟まずに対応できるか、その自信がアスカにはなかったからこそ責任を問わなかった。責任を問えば自身がどのような行動に出るのか、自分でも分からなかったからだ。

「「……」」

胸に手を当てたまま沈黙するアスカに、二人は反応に困ってしまう。

「……分かった。そこまで言うのなら忘れよう」

「ありがとうございます」

結局、最後はエヴァンジェリンが折れる形となり、交渉は終結した。

アスカがその旨を学園長に伝え、その日はもう遅いのでエヴァンジェリンはアスカが作り、茶々丸が手伝った料理を食べてご機嫌で隣りの自分の家に帰って行った。

第四十八話　闇の福音と原作主人公と少年　6（後書き）

喧嘩両成敗……はなんか違うけどそんな感じの終わり方です。

アスカが死にそうな目に合ったのでリインフォースにもなにか影響が出たようです（何故か他人事のように語る筆者）。

大体は本編で語っているように主人公がネギに罰を与えようとしたら八つ当たり的に何をするか分からなかったため、本人もネギを利用していたという言い訳から無罪放免（？）です。

次回の更新は『月曜日』午前0時に予定しています。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

第四十九話　闇の福音と原作主人公と少年　７（前書き）

昨日と今日と二連休だったので昨日、ゲームや本を大量に売りに行きました。

あまりに量が多かったので午前と午後の二回に分けました。

午前はゲーム機本体（Ｘｂｏｘ３６０（あまりやらず、一年ぐらい放置）、ＰＳＰ（結局一度も起動させず））と高価買取の本。

午後は量が多く、ゲームソフト三本とＤＶＤ一本。

そして本が大量に、

背中のリュックサック、尻の下、足元に買い物バック二つに袋が一つ、右脇にカバン、左に手提げカバン。

合わせて１６２冊。これをバイクで運んだんだから凄ぇ。

午前、１０９５０円。午後は１２２５０円。一日で合わせて２３２００円。

まだＰＳ３とニンテンドウＤＳがあるし、全部売ったら一ヶ月は仕事しなくてもいいかも……と誘惑に駆られました。

それはさておき。

吸血鬼編全七話の最終話です。今回はなにかと物議を醸し出しそうな話しになっています。

文字数は１５２３６字とかなり多めです。

どうぞ！！

第四十九話　闇の福音と原作主人公と少年　7

『こちらは放送部です。これより学園内は停電となります。学園生徒の皆さんは極力外出を控えるようにしてください。繰り返します……』

あちこちにあるスピーカーから麻帆良全体に響いているだろう声が、停電の始まりが近いことを告げる。

何時もならばまだ街中に明かりが灯っている時間帯、この日の麻帆良学園は少々異なる雰囲気に包まれていた。

麻帆良全域に、重い闇が垂れ込めている。年に二度、機械の大規模メンテナンスのために行われるこの麻帆良大停電は、街中から光を奪い、そこに住む人々に普段とは異なる、ささやかな興奮と恐怖を与えていた。

学園都市内の全体メンテナンスによる停電の時間は夜八時から深夜十二時まで、科学に頼った現代において実質的に都市機能の麻痺である。

毎回停電時において学園都市の結界は通常よりも弱体化してしまうので、魔法関係者は襲撃に注意しなければならない。

何故ならば世界樹の膨大な魔力、図書館島の貴重な魔導書、特定人物への襲撃、関東魔法協会に何らかの恨みを持つ等、麻帆良は狙われる理由を挙げればきりが無いからであり、事実もっとも襲撃が多い日だからだ。

と、いうよりこの停電の日の襲撃数が一年の間で大半を占めていると言っても過言ではない。

それらを迎撃する為に、魔法先生・生徒達はこの４時間もの間、身を粉にして必死に働かなければならないのだが、それを知る一般生徒は一人としていない。

そして麻帆良大橋の外周部分の方で、外部からの侵入者を阻止する為にチャチャゼロが待機している。

入り口である麻帆良大橋も魔法先生、魔法生徒が守護する場所ではあるが、麻帆良大橋を含む半径数ｋｍを担当するのは麻帆良のナンバー2、タカミチ・Ｔ・高畑である。

こちらは学園にいるエヴァンジェリン排斥派が関わってこないように、だが介入しようとした場合を考えて学園長以外で適任を、ということで現在の形になった。

表向きは知られていないが、これはネギとエヴァンジェリンの『仕組まれた決闘』に邪魔が入らないようにする為の物でもある。

今回の一件はエヴァンジェリンに対して好意的な人間にしか伝えられていない。

大人でも賞金首だったエヴァンジェリンを嫌悪している人間と、見習いの立派な魔法使い候補生たちにまで情報を与えられていないのは、無駄に正義感が強すぎる人間の下手な介入を避ける為だ。

無事ネギがエヴァンジェリンを討ち破れば事後の一件として伝えられたのだろうが、それも末端にまで行き届くものではない。

だが、それもネギが起こした行動によって学園側は介入することができなくなり、やり過ぎないように高畑が近くに待機しているが、どのような結果になろうとエヴァンジェリンがネギを害しすぎなければ、ただ見届けるしかなくなった。

それと誰も気がついていないが動けないアスカの代わりに、高畑と同じように学園長にも気付かせぬ隠遁の術を使った玉藻の分身が、二人の決戦場である麻帆良大橋の上で監視している。

麻帆良大橋は念のため、学園長の手で人払いや防音の結界が張られており、周りを気にすることなく存分に戦える環境を作り出されている。

舞台は既に整っており、後は役者を残すのみとなった。

誰もが停電のため外出を控える中、街の中央に聳え立つ時計塔の屋根の上に一人の人影があった。

ゴオオオ…と、嵐の前触れを思わせる重い音を轟かせて風が夜闇を走る。

屋根の上に立つのは真祖の吸血鬼エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル。

自身の第一の従者チャチャゼロは、外部から物理的介入をされな

いように別の場所で久方ぶりの戦闘を楽しんでいた。

第二の従者茶々丸は学園側が結界を途中で張り直さないようにシステムを掌握し、監視している。

闇の眷属であるエヴァンジェリンには、暗闇の中でも学園の境界である今宵の決戦場である橋の影まで見えていた。今なら魔法で簡単にそこまで飛べる距離だが、１５年前からその先へ行くことができない。だが、その時はまだ今ほどには辛くはなかった。

「狭いものだな」

夜こそが自分の時間という自分のような吸血鬼でも、暗いとそんな風に感じ入ってしまい闇に不気味さを感じる。

そのおかしさに自嘲して笑う。自分は闇の種族、太陽が輝く昼ではなく暗黒に沈む夜を生き場にして、死なず老いず時間を呼吸しない種族のはず。なのに、そこまで自分は光の下に慣れてしまっていたのか、と自嘲は苦笑に変わる。

『卒業する頃にはまた帰って来るからさ、光に生きてみろ。その時、お前の呪いも解いてやる』

思い出すのはサウザントマスターによって呪いを掛けられ、この地に連れられてきた時のことだった。

不貞腐れているエヴァンジェリンに苦笑しながらサウザントマスターが言った言葉は、今でもついさっきのことのようにはっきりと覚えている。

3年経ち、卒業しても呪いを解きには来なかった。もしかして忘れているのかとも不安に思ったが、きっと来てくれるとサウザントマスターを信じた。

5年経って死んだという噂を聞いて、そんなはずはないと否定した。

9年経って、3度目の卒業式をボイコットしながら、サウザントマスターには二度と会えないのだと絶望した。

12年経って、5度目の入学式では茶々丸という従者ができ、今までとは変わったメンバーではあったが、心がどんどん朽ちていくのを感じた。

真祖の吸血鬼である我が身は老いも死もない。このまま縛られたまま麻帆良という箱庭の中で永久に飼い殺しされる。そんな思いを常に抱き続けていた時、暗闇の中に一条の光明が差した。

『サウザンドマスターの息子達が麻帆良に来る』

一足早く双子の弟アスカが来たが、どこか自身と同じ臭いを感じた。

サウザントマスターが生きている事を知ったが、その同類ともいえる男と共にいる時間は意外と心地良く、いろんな話をし、共謀して相坂さよを蘇らせたりした時間は15年の時の中でもっとも輝いていたと言えるだろう。

今年の二月にネギが来たが持った感情は失望。

幾ら顔が似ていようと、あらゆる意味で型破りだったサウザンドマスターと比べて、ネギは良くも悪くも魔法学校をいい成績で卒業した優等生に過ぎなかったのだ。

正攻法で魔法を学び、正攻法で魔法を使う。正しいことを正しい手段で行う。だが、所詮は温室で育てられた花でしかない。

それ所か秘匿をろくに守れない甘ちゃんな坊やとしか認識していなかった。

そういう意味では、方向性は違えどアスカの方がサウザントマスターとはまた別の突き抜け方をしていた。

『こちらは放送部です。これより学園内は停電となります。学園生徒の皆さんは極力外出を控えるようにしてください。繰り返します……』

思考している時にアナウンスが流れ、始まった停電と共に戻った莫大な魔力が全身へと駆け巡る。

長年失っていた物を取り戻した充足感を感じ、久しぶりに甦った懐かしの感覚に笑みを浮かべながら自分の手の平を見つめる。

「ふむ。まあ、満月でもないし、この程度だろうな。だが、やはり直ぐには全盛期とまではいかんか」

１５年もの長い間、ほとんど魔力を封印されていたのでいきなり魔力が戻ったことで幾分か持て余し、その扱いきれない分が大気へと垂れ流されている。

その垂れ流している魔力だけで見習い魔法使いレベルなら腰を抜かし、何もしなくても許しを乞うだろう。

「まぁ。その辺りは直に慣れるだろう」

見習い魔法使いとしては目を見張るレベルにあるとはいえ、ネギが相手ならば多少魔力を持て余すぐらいはハンデにすらならない。少し戦えばすぐに当時の感覚を思い出すだろうと考え、ばさりと漆黒のマントを広げて飛び上がり、闇の中に沈む麻帆良を見る。

この戦いは彼女のナギに対する八つ当たりでしかない。終わった時、どんな形であれ気持ちに決着をつけなければならない。自身が望んで始めた戦いだ。終わらせるのもまた自身の役目。

いまは戦いだけに集中し、難しいことは考えずにこれから始まるであろう、甘美にして殺伐たる時間に胸をときめかせながら空を飛ぶ。

「では、始めようか！」

これより僅かな時間、最強の悪の魔法使いが甦る。

そんな事をエヴァンジェリンが思っているとは露知らず、その頃ネギは使い魔であるアルベール・カモミールと共に決戦場である麻帆良大橋に向かっていた。

停電の為、明かり一つ無い道で懐中電灯を片手に歩いていると、巨大な魔力がネギとカモを貫いた。

「えっ！？　これって……魔力！？」

「分からねぇけどかなりの大物だ……まさか、エヴァンジェリンの奴じゃ……」

「えぇっ！？　そんなまさか……」

この事態は余程予想外だったので狼狽（ろうばい）を隠しもしない表情で右往左往しながら、どうやって対応するべきかと話し合っていた。だが、ネギが魔法使いだと知っている明日菜に頼むという選択肢は魔法や暗示によって制限されているため、その案が浮かぶことはなかった。

どれだけ考えても案がないので、少しでも勝率を上げるために、道の角から用意していたガチャガチャと音のする大きな袋を取り出す。

そしてその中に入っていた多種多様の剣や杖、試験管やアンティークの銃を身につけ、杖に跨り覚悟を決め、地面を蹴り上げてカモと一緒に決戦場を目指して飛び立った。

「エヴァンジェリンさん！」

ネギが麻帆良大橋の入り口に到着した時には、見る限り誰もいなかった。

ネギはてっきり待ち構えているとばかり思っていただけに少々意表を突かれたが、もしかしたら罠かもしれないと、杖を握りしめな

がら大声でエヴァンジェリンの名を呼んだ。

だが、返事はなく周囲を見回しても、僅かな月明かりしか光源がないために魔力を消して隠れでもされたら、目視しか捜す手段がなく見つけるのは難しい。

やはり相手の出方を待つしかないのかと再度声を上げようとした時、

「……ここだよ坊や」

「っつ！」

神経を張り巡らせていた状態だったから、唐突に背後から響いたその声に橋の入り口に立ったネギの足は凍りついたように止まった。エヴァンジェリンの声は呟いた程度の声の大きさだったのだが、その声はどんな大声よりもネギの耳に響いた。

咄嗟に先程まで自分がいた筈の背後へと振り向くと、そこには空に浮かんでネギを見下ろすエヴァンジェリンの姿があった。

「満月の前で悪いが……今夜ここで決着をつけて、坊やの血を存分に吸わしてもらうよ」

「……いいですよ、分りました。でもそうはさせません。今日は僕が勝って、悪い事するのは止めてもらいます」

薄い笑みを浮かべて、エヴァンジェリンが宣言した言葉を跳ね除けるように、ネギは１０メートル先にいるエヴァンジェリンを睨み返しながらハッキリと抵抗の意を表した。

この強い意志もまた記憶封印の結果と言える。

今夜戦えるようにストレスの元であるあの日感じた恐怖を薄め、溜まっていたストレスを軽減したことで生まれた余裕。元来、正義感が強い少年だ。意思あれば強大な敵とも戦える強さを確かに少年は持ち得ていた。

恐怖を克服することなく、覆い隠すことで現われた強さ。これ以上の皮肉はないだろう。

「兄貴！　頑張って下せぇ！！」

カモは体重の軽い自分では簡単に吹き飛ばされる為、魔法戦になるので決めていた通り、ネギの肩から降りて離れていく。一対一の勝負で成すべきことは既に成した。直接の対決をする以上は助言者でしかない自身はネギを信じるしかない。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック。氷の精霊１７頭。集い来りて敵を切り裂け、食らえッ！　魔法の射手、【連弾・氷の１７矢】！」

ネギの言葉に笑みを浮かべたエヴァンジェリンは開始の合図もなく魔法を放った。

このままでは不味いと思ったネギは咄嗟に杖に跨り大地を蹴って杖に乗り、斜め上に飛び上がって避ける。

避けられたことで急に目標を失った氷の矢はその殆どが大地を抉ったが、残った五本の矢は直角に近い角度で急上昇しネギの後を追

う。

「くっ！」

ネギは追ってくる魔法の矢を見て腰元から魔法銃を抜き、杖に乗りながら後ろを向いて引き金を引いた。

飛びながらの狙撃ではあるため精度は悪いと考え、数を撃てば当たる論理で大量に撃つことにより、魔法の射手を全て撃ち落とす事に成功した。

そしてネギは上昇から角度を変えて、そのまま全速力で橋の向こう側へと飛んでいく。

「あの方向だと……学園の外に逃げる気か、それとも罠か」

エヴァンジェリンはすぐには追いかけず、ネギの向かった方向を確認し、身に纏う外套を蝙蝠の羽のように大きく広げ、我が物顔で夜空を進む。

十五年分の鬱憤を吐き出すかのように大きく外套を羽ばたかせてネギを追いかける。急加速をして3秒で一心不乱に空を飛び続けていたネギを射程圏に捉えた。

「氷爆！」

「あぐうっ！」

エヴァンジェリンによって作り出された氷の爆弾がネギの左後方で爆発し、凍気と爆風が同時にネギに襲い掛かる。

咄嗟に伸ばした手の先で障壁を展開し、最低限地面に叩きつけられることだけは回避したが、携帯していた魔法具のほぼ全てが今の衝撃で吹き飛ばされ、左半身の所々が氷付けになってしまった。

「ハハハ、どうした逃げるだけか？　もっとも呪文を唱える隙もないだろうがな！」

凍った体の箇所もそのままにすぐさま態勢を立て直し、再び今までと同じ方向へ飛び出した。

その先には今日の為にネギが張った策があるためだ。

ネギは自分が魔法使いとしての力量で、エヴァンジェリンに大きく劣っているのを自覚しているので敵わない事など百も承知だった。

そういった力の差を補うために魔法の道具マジックアイテムを大量に用意していたのだが、大部分はさっきので吹き飛ばされたので、最初から付け焼刃的な意味合いしかもっていなかった。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック　来たれ氷精　大気に満ちよ。白夜の国の凍土と氷河を　こおる大地！」

「わ――――ッ！」

一つ一つの氷が全長五メートルを楽に越すその氷山を間一髪で避けたネギだが、無理な動きをした代償に杖から放り投げられて、何度も跳ねながら悲鳴を上げて橋の上を転がる。

手加減したとはいえ自分の魔法を避けたことに僅かに賞賛の眼差

しを向けながら、橋に降り立ったエヴァンジェリンはネギの企みを看破した。

「ふ……なるほどな。この橋は学園都市の端だ。私は呪いで外には出られないから、ピンチになれば学園外へ逃げれば良い、か。意外にせこい作戦じゃないか。え？　先生」

地面に這い蹲るネギを見て、エヴァンジェリンが腕を振るうと、こおる大地が消え去る。

真っ直ぐ過ぎたネギが多少なりとも努力した事を認め、ネギへと歩を進めていく。

ぐぅ、と唸りながらネギは近づいてくるエヴァンジェリンを、悔しげな表情でただ見ているだけのようではあるが、如何せん顔に出過ぎで、エヴァンジェリンにはネギの態度と間の地面から僅かに漏れる魔力で、何処に罠があるのかは分かっているが、それもまた一興だと気にせず進む。

ネギは息を呑んでエヴァンジェリンがその場所へと足を踏み込むその時を待った。

「これは……！」

その場所に一歩踏み入れた途端、アスファルトに刻まれた術式が起動する。

これは陣が敷かれた上に、対象が足を踏み入れた時に発動する、対象を絡め取る結界。魔法円が浮かび上がり、そこから伸びる幾重もの光の縄がエヴァンジェリンの身体に巻きついて自由を奪ってい

く。

だが、当のエヴァンジェリンは逃げ出そうという気配はなく、最初は驚いていたが僅かに感嘆の声音を漏らすなど落ち着いたものである。

「ほぉ、捕縛結界か。よく考えたな」

「や、やったー！　エヘヘヘ引っかかりましたね、エヴァンジェリンさん！」

完全にエヴァンジェリンが結界に捕らえられた事を確認すると、ネギは跳ねるように飛び起きて両手を挙げ、喜びを全身で表現し始めた。止めも刺さずに、そうしているのはネギがまだ十歳にも満たない少年であるが故に仕方のないことかもしれない。

「もう動けませんよ、エヴァンジェリンさん。これで僕の勝ちです！　さぁ、大人しく観念して、悪いこともう止めてください！」

ネギはこの時のために夕方に設置しておいた切り札である捕縛結界が、上手くいったことに喜びながら自信満々に勝利を宣言し、余りの興奮に鼻息を荒くしながら、得意顔でエヴァンジェリンにまくし立てる。

「……やるなぁ、ぼうや。感心したよ。ふ、あは、アハハハ！」

紡ぎだされた最初の言葉は罠に嵌めた事への純粋な賞賛。今まで未熟ばかりが露呈していたが、こと数えで１０歳の少年が本気でないといっても伝説の相手に戦い、罠に嵌(は)める知略を見せ付けた。魔法使いとしてネギは才気溢れる少年であり、前途有望だと彼女自身

も認める。

しかい、後に続いた笑い声はさっさと止めを刺さないネギの甘さへの嘲笑。確かに真っ直ぐ過ぎた少年が罠を張り、自分を一瞬でも追い込んだ手際、見事と言えよう。だが、年齢からの未熟か、人間としての未熟か、或いは己の力への過信か、ここで直ぐにトドメを刺さなかったのは致命的であった。

「な、何が可笑しいんですか！？　ご存知のように、その結界に捕らえられたら簡単には抜け出せないんですよ！」

称賛と嘲笑。そのどちらにも、敗北を認めるような色は欠片も混じっていなかった。

「……坊や。貴様、まさかこの程度の罠で私が屈すると本気で思っているのか？　サウザントマスターに負けたとはいえ、私は最強クラスの魔法使いだぞ？」

「え？」

込められた嘲笑には気付かずとも、正の感情で笑われたことでない事を悟ったネギは、エヴァンジェリンに問う。だが、返って来た言葉を理解する前にエヴァンジェリンの身体から魔力の濁流が迸り、体を押さえつけている鎖がギシギシと軋む。

ネギは自分で最大にして最後の勝機の時を失ってしまったのだ。

「私はエヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェル。最強の『悪の魔法使い』だ！！」

言葉の後に力のままパキンッ、とガラスが割れる様な硬質の音を響かせて鎖を引き千切った。

常識外れの力技を目にしたネギは唖然とするばかりで声にならない声が自然と零れ落ちる。

そんな常識外れを成すのがエヴァンジェリンであり、英雄と言われたナギである。ネギはそれを実感させられた。

「そ、そんな……っく！」

内心で卑怯だと感情的な批判を浴びせながらも、再び捕らえようと詠唱を始めようとしたネギだったが、何時の間にか体を、夜目ではほとんど見えない糸で拘束されていた。

「あ……っ！」

拘束されてほとんど動けないネギに、近づいてきたエヴァンジェリンは簡単に杖を取り上げた。

魔法使いは特殊な事がない限り、杖がなければ魔法が使えなくなる。糸で拘束されていることも合わせて既に死に体と言っていいだろう。

「フン、奴の杖か」

ネギから奪い取った杖を、過去を連想させる忌々しさと郷愁から思い起こす僅かな懐かしさを混ぜた目で見つめること、数秒。

「ああっ！？」

ポーン、と子供が興味の失せた玩具を放る様に、或いは過去の未練を断ち切るように橋の下に広がる湖へ無造作に投げ捨てた。戦闘において敵の戦力を減らすのは常套手段。彼女がそれを成すのに果たして何を思ったのか？

エヴァンジェリンの行動に杖の持ち主のネギは元より、遠くから見ていた学園長や高畑にさえその行動は予想外の事で、放物線を描いていく杖をただ呆然と見届けるだけだった。

「エヴァンジェリンさん！　あ、あれは僕の何よりも大切な杖……ひ、酷い、酷いですよー！　本当なら僕が勝ってたのにー！　ズルイですよもう一回勝負してくださーい！！」

今、自身が口にした通り、自分が何よりも大切にしている杖を投げ捨てられて、半べそをかき始めたネギは、完全にただの十歳の少年と成り果てた。駄々をこねながら両手を振り回して、エヴァンジェリンに詰め寄ろうとするが糸で一歩も動けない。

杖を投げ捨てた本人であるエヴァンジェリンは、ネギの情けない姿に苛立ちを感じていた。

だが、それと同時に自身がネギにサウザントマスターの影を重ねていたことにも気付かざるを得なかった。目の前にいる子供はただの１０歳にも満たない見習い魔法使いにしか過ぎないのだと。

「あうっ！？」

パシンッ、と乾いた音がネギの頬から響いた。苛立ちが限界に達したエヴァンジェリンの平手打ちが、ネギの頬を殴打したのだ。打

たれた衝撃でネギの眼鏡が音を立てて橋の上に転がっていく。

「一度戦いを挑んだ男がキャンキャン泣き喚くな、馬鹿者！　この程度でもう負けを認めるというのか！？　お前の親父ならばこの程度の苦境、笑って乗り越えたものだぞ！」

苛立ちから指を突きつけてエヴァンジェリンはネギを罵倒する。

これが見習い魔法使いだとしてもサウザントマスターの息子がこんなものでどうするのだと、そんな思いが表面に出てきた。あの誰にも屈しなかった男の息子がこんなにも弱いことを認められない。

ネギはエヴァンジェリンに気圧されたように力なく、糸に拘束されまま項垂れる。

「あ、ぅ……」

「はっ！　所詮、奴の息子といえどこの程度か。最早血を吸う価値もない。いや、サウザントマスターもその程度だったということか」

ネギの怯えた視線を受けて、ふと感情を荒げている自分に気づいたエヴァンジェリンは、冷静さを取り戻した後、改めてネギへの正しい評価を口にした。

ネギは自分達の実力が違うのは初めから分かっていた。

その差を埋めるための策を用意したとは言っても、負けるかもしれないという思いは少なからずあった。だが、エヴァンジェリンを罠に掛けた時に勝ったと慢心せず、止めを刺していれば結果は変わっていたかもしれない。

今更にそんな思いがネギの胸中に広がるが、後の祭りである。

「ちっ、これぐらいでもう心が折れたか。存外に脆かったな」

ナギならば決して諦めず、例えどんな窮地に陥ようとも常に勝利を渇望し、そして勝ち取ってきた筈だ。

そもそもこの考え自体がネギを見ていないのかもしれないが、今更変えるつもりも無い。元々大してネギに期待していたわけではないが、それでもやはりナギの息子がこの程度と言うことには一抹の失望を感じずにはいられない。

糸を解いてネギの拘束を解き、踵を返した後ろで地面に落ちた音を無視して、ゆっくりと空を飛んでネギから離れていく。

ネギは見逃された事に安堵の息を漏らすが、未熟な自分と違い尊敬する父を侮辱されることは何よりも許せなかった。

――お前の親父ならばこの程度の苦境、笑って乗り越えたものだぞ！

エヴァンジェリンに言われた言葉が蘇る。高畑と一緒に住むようになってからは、良く強請って父の話を聞いた。身近にいた人から聞いた父の姿は誰よりも輝いていて、誰よりも強くて、誰にも負けない人だったのだと高畑はよく言っていた。

――サウザントマスターもその程度だったということか

その心底の失望を感じさせる言葉が、ネギの心に漂っていた暗い

気持ちを吹き飛ばしていく。

父への思いは、ネギ自身の中にあるどんな思いよりも優先される。

恐怖は怒りへ、諦めは闘志へ、ただ父への思いだけが折れていた心を繋ぎ合せ、伏せていた体を起こさせる原動力となった。震える体を鼓舞して立ち上がり、唯一残っていた子供用練習杖をポケットから取り出し、去って行くエヴァンジェリンの後姿を見据える。

躊躇(ちゅうちょ)は一瞬、不安を吹き飛ばすように杖を掲げ、全身から放出した魔力が風となって竜巻を引き起こす。

「ぬっ、まだやる気が残っていたか」

ネギから発生した風に体を煽られるも、エヴァンジェリンはすぐに体勢を立て直す。

立ち直ったとしても戦力差は歴然、ゆっくり待てばいいとエヴァンジェリンは気楽に考える。

心が折れたまま無様な抵抗を繰り返すのか、それとも……。

「……ふん」

空中にいるため物理的にも、そして心情的にもネギを見下しながら、エヴァンジェリンは尊大に腕を組み、立ち上がった『魔法使い』を見やる。

ネギの方は、まだ表情に緊張が見受けられ、足もガチガチに固まっていた。情けなくも震え、目は今にも逃げ出したいと叫んでいる

のが見て取れた。決して恐怖を克服したわけではないが、父への思いがネギの体を支えていた。

それでも立ち上がったネギを、かつての愛しい仇敵の姿に重ね、エヴァンジェリンはキッと目を細めて見据える。

確かにナギよりも圧倒的に弱い。アスカよりも遥かに弱い。自身よりも天と地ほどの差があるほどに弱い。

その姿を見れば、恐ろしくて、怖くて、みっともなく逃げ出したいことは、どんな惨めな姿になっても許しを乞いたいことは分かった。

痛い思いをしたくない、怖い思いに合いたくない。だけど、逃げ出さない。恐怖に抗い、命の危険に立ち向かって見せた。

生まれたての小鹿のように全身を恐怖で震わしているいまのネギの姿は情けないだろう。だが、エヴァンジェリンは笑う気にはならない。

どんな情けない姿でも抗って見せたのだ、このエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルに。

果たしてこの学園に本気となった自身に抗って見せようという気概のある者が何人いるだろうか？　どんな動機であろうと、どうやっても勝てない力の差を理解した上で折れた心を抱えて抗う者を笑うことなど出来ようか。

「よく立った。ネギ・スプリングフィールド！」

彼女はいまこそ『ネギ・スプリングフィールド』という人間を認めた。

自身が戦うに値する人間だと、『ナギ・スプリングフィールドの息子』としてではなく、『ネギ・スプリングフィールド』としてその存在を認めた。

そもそもこの場を尤(もっと)も切望したのは他ならぬエヴァンジェリン・A・K・マクダウェル自身。

ネギの性格を考えれば、事前に真正面から呪いのことを説明すれば協力を得られる可能性は高かった。きちんと説明して、必要ならそれなりの報酬――――この場合なら京都にあるナギの別荘のことや秘蔵の魔法具を渡せばかなりの確率で協力を得られただろう。

少しだけ献血して血に込められた魔力を血に込められた魔力をきちんとした処理で保存、それを何回か繰り返せば解呪できるだろうし、この方法なら何処にも角が立たず簡単な解呪方法である。

事実、アスカは彼女にこの方法を勧(すす)めた。

しかし、エヴァンジェリンが拒否したからこそこんな状況に陥っている。

茶々丸を襲い、アスカを傷つけたからといってネギを憎んだり厭う資格が彼女にはない。

だからこそ、この戦いの場に来るにおいて今までの偏見を捨てて真っ向から向き合おうと決めたのだ。

茶々丸を襲った前後の記憶を消しているとはいえ、この場において伝説の吸血鬼を前にしてネギは勇気を示し、いまなお立ち向かおうとしている。

「行くぞ。私が生徒だという事は忘れ、本気で来るがいい！！」

言葉を放つエヴァンジェリンの姿は少女の姿をしていても、そこにいるのは何者にも媚びぬ覇者の風格を備えた最強の魔法使いだ。

あれだけ脅したにも関わらず、己に牙剥くものに胸が躍る。闇夜に咆えるその咆哮は、獲物の枠にとらわれぬ、敵と認識できる者と出会えたことへの喜びの声。

「……はいっ！」

エヴァの呼びかけに、ネギは圧倒されながらも、今までとは打って変わり強い意思を持って踏みとどまって叫び返した。

自らの意思をはっきりと乗せた言葉で戦いの開幕を迎え入れたネギは、この勇気を与えてくれた父に感謝の念を抱いた。

辺りから音が消え去り、嵐の前の静けさを思わせる刹那の静寂が辺りを押し包む。

子供用練習杖はエヴァンジェリンに投げ捨てられた父の杖に比べれば余りにも頼りないが、―我侭≪わがまま≫は言っていられない。

そして二人は呪文を唱え始める。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！」

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル！」

二つの始動キーが絡み合うように、唱和しながら夜空に響く。

「ハハハッ！　何だ、その可愛い杖は！　食らえ、魔法の射手・氷の１７矢！」

「雷の精霊１７人！　縛鎖となりて　魔法の射手、連弾・雷の１７矢！」

氷と雷、異なる属性の十七の魔力の矢が二人の間で花火のような光と音を轟かせてぶつかり合う。

同数の魔法の矢が空中で激突し相殺するということは、威力は互角ということだが、打ち手の方はそうでもない。

「ハハッ！！　中々やるじゃないか！　だが、詠唱に時間が掛かり過ぎだぞ！！　リク・ラク・ラ・ラック・ライラック。闇の精霊２９柱！」

空を飛びながら、初手の段階で既に一杯一杯のネギとは違い、言葉にも表情にも余裕がありありと見えるエヴァンジェリンが、ある意味アドバイスとも取れる事を言いながら次の魔法の詠唱に入った。

楽しそうに上空を飛びながら笑い声を上げるエヴァに対して、ネギの表情は必死そのものだ。

実戦経験が、潜り抜けた修羅場が、修練に費やしてきた時間が圧倒的に違う。ネギとて魔法の矢の術式は体に染み付いたと言っても、

十年と六百年という時間の差がそのまま錬度の差となる。

「くっ！？　ラ、ラス・テル・マ・スキル・マギステル！　光の精霊２９柱！」

二十九という精霊の数に驚くも、今度は素早く詠唱を完了させ、エヴァンジェリンに遅れる事無く魔法の射手を撃ち出した。

「魔法の射手、連弾・闇の２９矢！」

「魔法の射手、連弾・光の２９矢！」

光と闇の相反する属性で、さっきの二倍近い矢が召喚され、再び宙でぶつかり合う。高威力の反対属性の魔法同士は相殺し、派手な爆煙をあげる。

人を助ける『立派な魔法使い（マギステル・マギ）』を目指して光の道を歩むネギと、人を脅かす『悪の魔法使い』という闇の道を歩むエヴァンジェリン、魔法の属性が、そのまま二人の道を表しているようであった。

相殺した魔法の射手の余波が、威力で劣った地上にいるネギに襲い掛かる。

「うくっ……！」

「アハハ、いいぞ！　よくついて来たな！！」

十五年ぶりの呪いという戒めからの解放が、魔法使いとしての戦いが、久しく忘れかけていた戦場の高揚が、エヴァンジェリンの体内を駆け巡っていた。

どれだけ力の差を感じさせようとも些(いささ)かの戦意の衰えも見せず、必死で喰らいついてくるネギを称賛する。街にまで届きそうな程よく通る声で笑いつつ、ネギの評価を殊更に高め、エヴァンジェリンは次の一手を心待ちにする。

（強い！　これが父さんと同じ領域にいる人の力！！）

魔法の衝突が生んだ余波の風を腕で庇いながら、ネギは改めてエヴァンジェリンの恐ろしさを確認していた。

まともに魔法を打ち合ったのは先程のたったの二回、それも初歩の魔法である魔法の射手だ。しかし、一矢に込められた魔力の純度は、それだけで相手の実力を伝えてくる。

エヴァンジェリンの精緻にして大胆な術式の構成と、無限とも思えるほどの強大な魔力。既に限界ギリギリの自分とは違い、エヴァンジェリンは今も余裕に満ち満ちている。

未だにネギが無傷でいられるのは、一重にエヴァンジェリンの戯れにすぎない。

エヴァンジェリンは余裕を以って、ネギは必死を以って対峙する。

このままでは負けると判断したネギは今、自分が放てる最強の魔法、切り札を切る決意をした。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル！　来たれ雷精、風の精！」

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！　来たれ氷精、闇の精！」

必勝の覚悟を決めて唱え始めたネギの詠唱を聞き、瞬時に放たれる魔法を看破したエヴァンジェリンは見習いが習う魔法ではないと驚きながらも詠唱を紡いだ。それは呼び出す属性の差はあれど、間違いなく同種の呪文。

エヴァンジェリンの唱える呪文が、今の自分が使える最強の魔法と属性は違えど同じ魔法であることに気付いたネギは驚きを隠せない。

だが、萎えそうになる心を叱咤してネギは呪文を唱え、術式を編む。

（あ、あれは兄貴の一番強い魔法！　しかも、エヴァンジェリンのほうも同種!?　撃ち合いをする気かよ!!）

安全な場所で二人の戦いを静観していたカモも驚きと共にエヴァンジェリンの狙いを理解して、心の中で絶叫した。

「雷を纏いて吹きすさべ、南洋の嵐！」

「闇を従え吹雪け、常世の吹雪！」

全く同じ速度と調子で、二人の詠唱は紡がれていく。それぞれの手に、今までとは比べ物にならない、視認出来る程の魔力が集まり始めた。

ネギの足下に風が渦巻き、魔力が収束する右手は放電が起き始め、対するエヴァンジェリンは周りの温度が急低下し、吹雪のような冷徹（れいてつ）さをもって手で渦巻いていく。

「来るがいい、ぼーや！」

風雷の精霊と吹雪の精霊が、それぞれの手に集まる。そして、エヴァンジェリンのその言葉を皮切りに、二人は同時に魔力を溜めた手を振りかぶる。

「雷の暴風！」

「闇の吹雪！」

地上と上空から放たれた白い嵐と黒い吹雪が激突した。

高まった魔力が放たれ、二人の中間地点でぶつかり合って互いを消し合い、完全に拮抗していた。

「ぐうっ……！？　くくっ……！」

事ここに至り、エヴァンジェリンもネギの並外れた魔法の才能だけは認めざるを得なかった。

精神的な甘さや惰弱な精神を抜きにして、才能だけを見ればサウザントマスターに匹敵、いや、アンチョコを見て唱えている父と比べれば更なる上に到達する可能性を今、ネギは示している。

少なくとも、身に宿す魔力の量で言えば、自分と肩を並べる事ができる事をエヴァンジェリンは、少しの苛立ちと共にネギの評価を大幅に改めた。

（自分ならば、この魔法使いをどう育てる？）

心の強さを、才能を見せたネギ。これだけの才能、自分で育成というのもしてみたくなったエヴァンジェリンである。いまの未熟さなど自身が鍛えれば簡単に叩き直せる。

普通、魔法学校では【魔法の射手】クラスまでしか教えることはない。ならば、ネギが【雷の暴風】を使えるということは独学ということになる。その優等生染みた性格とは間逆の力を望む執念と歪み具合はエヴァンジェリンの好むものであった。

（す、凄い力。だ、駄目……打ち負ける）

そして驚いていたのは、ネギにしても同じである。

ネギの膨大な魔力は魔法学校でも比肩する者などほとんどいなかった。いたとしても校長などの大人だけで、魔法の撃ち合いで自身が負けたことはほとんどない。

初めての経験でこのままでは負けると考えてしまったら、魔力発生の基点となっている右腕がガクガクと震え始めた。

『まだだ！　父さんはこんな程度で逃げない！』

諦めが胸中に漂うが、父ならこんな程度で逃げないと、今までで最大の気迫を放つ心の言葉を持って、恐怖を打ち払った。

自身の体、後のことなど考えずに限界を超える程に魔力を注ぎ込む。

「えぇいっ！！」

目一杯の魔力を杖に注ぎこむが、そのあまりの量に子供用練習杖では耐え切れなかったか、先端の星に皹が入っていく。

「くぅっ！！！」

それによって、僅かに押されていた分を押し返すが、そこまでネギとエヴァンジェリンの魔法は完全に相殺された。

ただでさえ慣れない戦闘、それも圧倒的強者との戦いで精神もすり減らし、更に無茶をした所為でネギは盛大に息を乱して膝から崩れ落ち、地に手をついた。

「はぁ、はぁ……」

「ふぅっ……やるじゃないか、坊や。まさか、完全に相殺されるとは思わなかったぞ。だが、まだ決着はついていないぞ……」

ネギは地に着いていた手を離して片膝をつき、息を整えているが体に力が入らない。

疲労で額には汗が浮かび、心臓は早鐘を打ったようにガンガンと鳴り響いていて、とても戦いを続けられる状態でない事は、誰が見ても明らかであった。

だが、体は動かなくとも闘志は今だ健在と眼だけが戦う意思を示していた。

「先程までとは打って変わって、随分と良い顔をするようになった

じゃないか。正直、見違えたぞ。先程の言葉は撤回しよう」

ネギの行動を褒め、賞賛するようにエヴァンジェリンは言葉を紡ぐ。

その言葉にネギは驚くように目を見開き、安堵したことで精神の緊張が切れたのか目の焦点が失っていく。

「そこそこは楽しめたよ、坊や。血を吸いはしないが、今はただ自身の未熟を理解し、世界の広さを知れ。そして最強と呼ばれる者の力を知るがいい……闇の吹雪！！」

ネギは薄れていく意識の中でその言葉を聞き、自身の未熟を痛感し、明日からは頑張ろうと心に決めた。

そして迫ってきた、十分に手加減された【闇の吹雪】に吹き飛ばされながら完全に意識を失った。

枯葉のように軽々と吹き飛ばされたネギの体を隠れて待機していた高畑がキャッチし、顔を上げるとエヴァンジェリンの姿は既にそこにはない。

ネギを高畑のいる方向に飛ばした後は、エヴァンジェリンは全開の力を揮える残りの時間を楽しむために、麻帆良への侵入者を狩ろうと高速で飛んでいた。

高畑は腕の中にいるボロボロなのに満足そうに眠るネギの成長を確認して大事そうに抱え、治癒術師の下に向かって歩き出す。

そこまでを見届けた玉藻は分身を解き、観戦していた学園長は大

きな怪我をしなかったことに安心して胸を撫で下ろす。

当初の予定と違い、ネギが負けはしたが結果的に得る物は多かっただろうと思うが、学園長は後の事を思うと眠れそうにはないと嘆息して書類仕事に戻った。

自宅で玉藻を通じて戦いを見ていたアスカも肩から力を抜き、体はまだ完全復調していないので早々と眠りについた。

双子の兄が起こした事件は弟の願いで無かったものとして隠蔽され、表に出ることはなかった。記憶を改竄された少年は最強の魔法使いと戦い、敗れたが得るものは大きかっただろう。

満足したものは戦った二人のみ。関わったものたちに少なからずの傷と悩みを残し、有耶無耶（うやむや）のままに事件は終息した。

この事件で当人達が望む望まないに関わらず英雄の息子達の道は別たれ、別々の道を歩むこととなった。

だが、本筋の物語でもっとも近くにいた者たちは離れ、既に運命は変わり始めている。

この先の物語がどう変わっていくか――――――誰にも分からない。

第四十九話　闇の福音と原作主人公と少年　7（後書き）

今話のネギは記憶消去によって、

茶々丸が従者であることを知っていても何故か戦闘には関わらない。

自分が茶々丸を襲ったことを忘れている。

となっています。

それによってストレスの大半が削られ、万全に近い状態になっています（それ以前のはやはり自分が悪いというのは分かっているので）

それと高畑との同居で父への憧れが増しています。それによって馬鹿にされたりすると常にない精神的強さを見せるようになっています。

だからといって怖さを克服できたわけではなく、ようは「父さんを馬鹿にするな！！」で心と身体を支えている状態です。

魔力コントロールの訓練もやっているので魔法使いとしてのレベルも原作より上。

だからといって代償で、先生として、人間として、劣っているというわけでも有りません。そこら辺は新田先生が頑張りました。

極限まで追い詰められさえなければ強いかも？

実際、原作でもいろんな人に助けられたとはいえ伝説級のエヴァン

ジェリンに一人で立ち向かったんだから勇気はあると思いますのでこのようになりました。

ぶっちゃけ筆者は歴史に残るような犯罪者と対峙する勇気はありません。

前話のネギとカモの対応について納得できていない方もいるようなので説明を。

まず第一に前提条件として『主人公』が黒幕です。

第二に茶々丸を襲った件に関して以外は全てネギは純然たる『被害者』です。

ネギが茶々丸を襲ったのは、カモに唆されたこと、従者のいない自分では殺されるという恐怖があったためです。

で、ネギへの対処ですが、話にあったように記憶を消さない場合、明日菜や茶々丸を殺したと思い込んでいたので精神崩壊の兆しが見えていました。

結果、学園長は記憶消去を選択。カモにも施したのは万が一でもネギに真実を教えて同じ事を防ぐ目的もありました。

で、記憶消去したので当然、ネギには茶々丸を襲った記憶は全く有りません。そうなると対外的に罰を与えるのが不可能という事にな

ります。学園長はアスカやエヴァンジェリンからネギを守るための意図もありました。

そして何故、主人公がネギに罰を与えなかったのか。

やはり自身が計画して利用したことの負い目があります。ネギの暴走を許した時点でやはり責任が発生するわけで、もし、茶々丸や明日菜になにかあったらどうなっていたことか。

ネギに対する諸所の感情は複雑なものがあります。肉親に対するもの、子供に対するもの、そして父の似姿であること。

誰も話さない母親のことは言ってしまえば自身の中で折り合いがついてしまうことであり、主人公が直接的に悩まされてきたことの大半は「父」のこと。前世の記憶もあって家族のことは何時までも引き摺っている主人公です。

つまり、諸々の感情の上に父への想いも重なれば複雑怪奇なものにならざるをえず、斬り捨てるに斬り捨てられない惨めな思いへとなっています。

どこまでいっても主人公の本質は変わらず、旅をしたところで根本は変わっていません。力は大きく成長しても、人間としては凡俗の域を未だに出てはいません。

主人公の心の源泉はあくまで過去であり、未来にはありません。そういう意味ではネギよりも大きく劣っていると言えるでしょう。なにしろ主人公には夢もなにもないですから。

と、まあ色々と書いてますが何時までもこのままというわけではあ

りません。

主人公が今回ネギに対してなにもしなかったのは罪悪感やなんやらだけではありません。リインフォースが目覚めないこともあって、下手に手を出すと本気で殺しかねないからです。丁度よい罰というものを与えられず、やりすぎると不味いので手を出さないと考えていただければ。

例えるならばネギから向き合う事を避けて完全に背を向けたという感じでしょうか。これが後々の伏線の一つとなりますが。

なにかと暗い主人公ですが、学園祭で大きなターニングポイントを迎えます（現在の構成では）。今までの鬱憤を晴らすように変わります。

そして本作のネギの扱いの良さはぶっちゃけ修学旅行編までです。現在の構成では魔法世界編終盤にならないと不憫な状態……ネギにとっての欝展開となります。

本作では魔法世界編終盤以外はネギが立てばアスカが沈み、アスカが立てばネギが沈むという展開に筆者の意図ではないのにそうなっています（何故こうなった？）

何故か既に４万字を越えた、対造物主戦。本当に何故こうなった？

後、三話挟んだら修学旅行編突入ですわ。

次回の更新は『月曜日』午前０時に予定しています。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

第五十話　　準備を始める少年　前編（前書き）

夜勤明けで六時間は昼寝をした所為で寝れず、何故かテンションが上がってしまったので投稿しました。

そして重大報告をすることをここに宣言します。

詳しくは後書きで。

あ、更新停止とかネガティブ系じゃないのでご安心を。

さて、吸血鬼編が終わり修学旅行編に向けて動き出します。

文字数は１４１２６字と前回同様に多めです。

どうぞ！！

第五十話　準備を始める少年　前編

茶々丸を庇ってから一週間経ち、アスカは驚異的な回復（自身の治癒力＋薬＋色々な方法）で医者から職場復帰の許可を貰って職場復帰を果たした。

朝のＨＲで事故の経緯や何やらを聞かれたが、事前に学園長と打ち合わせしていた通りに話すことで切り抜け、一日を過ごし帰りのＨＲを行った。

いまだ指先に麻痺が残るアスカがここまで復帰を急いだのは来週からの修学旅行の為だ。

麻帆良学園において、中等部の修学旅行は他の学校と違い三年生の春に行われる。

普通の学校では修学旅行は二年生の時に行うのだが、麻帆良学園はエスカレーター式学校なので特別に受験のために時間を割く必要がなく、外部の学校を受験する生徒以外は高等部への進学は決まっているため三年の時期に行っても何の問題もない。

また、小等部と高等部の修学旅行と重ならないように４月という時節となる。

もし、受験が重視されていれば新任の子供先生が三年の担任に選ばれることなどなかった筈だろう。

それと中等部だけでも人数が多いので、クラスごとに数箇所の目的地から選択する方式が取られている。

そんな中で敢えて修学旅行の定番である京都を選んだ理由は幾つかある。３－Ａには留学生、帰国子女が多く担任補佐、副担任補佐の先生も外国人ということで日本の観光名所である古都京都と奈良が選ばれた。

これを最も喜んだのは副担任補佐のネギ・スプリングフィールドだ。

決闘は負けたが父に並ぶ圧倒的な強さに憧れ、再三に渡ってエヴァンジェリンに弟子入りを申し込んでいたが断られ続け、それでも諦められないネギは、事情を知っている明日菜達から見るとストーカーではないかと思うぐらいに追い掛け回していた。

サウザンドマスターをも越えるかもしれない才能だけは認めるが、面倒くさいなどといった理由から弟子にする気がないエヴァンジェリンは、何度断ってもまるでゴキブリの如く復活して迫ってくるネギにほとほと困り果てていた。

「京都にサウザンドマスターが一時期住んでいた別荘があり、そこなら何か手がかりがあるかもしれん。ああ、それと修学旅行も京都だったな」

ネギの矛先を変えるために態と聞こえるように呟いたのであった。

「き……京都！？　あおの有名な、ええと日本のどこでしたっけ……困ったな、休みも旅費もないし……」

「私達の修学旅行が京都だろうが」

「あ、そうでしたね！！」

それを聞いたネギにとってはまさに渡りに舟であり、意思の向き先が変わり修学旅行が終わるまでだが、エヴァンジェリンは自身に向いていた矛先を変えることに成功したのだ。

ネギはエヴァンジェリンからその事を聞いて以来、初めて得れた父の情報と、修学旅行で直ぐに行くことができるという事でテンションは最高潮となり、午後に担当授業があったとしてもろくに授業にならなかっただろう。

「来週から３－Ａは、修学旅行で京都・奈良に行きますがもう準備はできましたか？　まだ準備が出来ていない人は、早めに準備するようにしてください。忘れたからと言って引き返すことはできませんので」

『は――――い♪』

アスカの問いにクラスの大半が笑顔で勢い良く元気な声を返し、残りは小学生かこいつらと内心ツッコミを入れる葛藤する千雨や、アホばっかですと呆れている夕映のように苦笑するか醒めた表情でその様子を眺めるかしていた。

何故か副担任補佐のネギも生徒と一緒に返事を返すという事をしているが、京都にサウザンドマスターの手がかりがあると聞き、其処へ修学旅行でいけると知ってからはクラスに負けずハイテンションになっており、完全に浮かれているのでアスカも突っ込むだけ無駄かと諦めている。

「この学校は人数が多いので修学旅行の目的地はハワイ等の数ヶ所

からの選択式となっていますわ、うちのクラスは留学生も多くネギ先生やアスカ先生も日本は初めて……日本文化を学ぶ意味でもクラスの総意で京都・奈良を選択させて頂きました」

「あ、ありがとうございます。いいんちょさん！！　いいですよね、京都！！」

ネギは行き先を最終的に京都にしたあやかの手を物凄い喜びようで握って感謝を表す。

担任補佐のアスカより先にネギの名前を出す辺りにあやかの本心が出ているが、ショタコンであることを良く理解しているのでアスカは全く気にしていない。

「あ、あらそんなにお喜びに……」

あやかはネギに手を握られて顔を赤らめているが、日常茶飯事な光景のため誰も不審に思わない。

「うわ――――――楽しみだな、修学旅行！！　早く来週が来ないかな！！」

教室から見える日の光も傾いている中、副担任補佐のすごく嬉しそうな声が教室に響く。

ネギはとうとう感極まってテンションが変な方向に振り切れたのか、京都京都と連呼しながら鳴滝姉妹と一緒に、もう待ちきれないという様子で手足をバタバタ、ドツき合いだした。

この場合ネギの反応を年相応だとすると、それと同レベルな鳴滝

姉妹って一体……と教壇に立ちながらアスカは思ってしまう。

最近の授業で見せる様になった知的な雰囲気はどこへやら、もう歳相応の遠足・お泊まり会が楽しみな子供にしか見えない。

対して連絡事項を伝え終えたアスカが呆れたように溜息を吐いているのが、双子なのにやけに対照的な光景であった。本当にこの二人は双子なのだろうかと、クラスの生徒達は全身で喜びを表すネギを生暖かく見守りながら思っていた。

鳴滝姉妹と共にネギがテンションを上げているとクラスの皆とアスカが呆れながら、或いは微笑ましく見ていると、教室前方の扉が開いてしずなが入ってきた。

「アスカ先生、ネギ先生。学園長がお呼びですよ」

「あ、はーーーい」

「分かりました」

しずなの声にネギはそのままのテンションで元気に、アスカは普通に答え、ＨＲの終了を告げて帰り支度を始めた生徒達を背に学園長室に向かった。

しずなに連れられて意気揚々と学園長室に出向いたネギを待っていたのは、ある意味で非情な宣告だった。

「え……！！　修学旅行の京都行きは中止～～～！？」

修学旅行を後数日に控えての学園長からこの言葉を言われた途端に、ネギは目を見開いて「きょ、きょ～と～……きょうと……きょ～とぉぉぉぉ……」と、この世の終わりを目撃したような声を上げながら波に遊ばれる木端のようにフラフラとしたあげく、壁に手をついて項垂れて落ち込んでしまった。

学園長の「うむ、京都が駄目だった場合はハワイになるの」と言う言葉も全く聞いていない。

京都へ行けばようやく父の手がかりを掴めるかもしれない、と期待を胸に抱いていたネギは激しくショックを受け、明るいはずの部屋とは対極的に暗さを醸し出す。

「マクダウェルさんに、なんでも父が住んでいたことのある家が京都にあるのだと教えてもらってからかなり楽しみにしてましたから」

「そういえばそうじゃったか」

明らかに様子のおかしいネギを学園長が目を丸くしているのを見て、事情を知らないと察したアスカが説明すると、手をポンと叩いて納得する。

「それで京都行きは中止なのですか？」

一方で修学旅行先に関して先が見えているアスカは項垂れるネギを無視して、このままでは話が進まないので単刀直入に学園長に尋ねる。

「まだ中止とは決まっとらん。ただ先方がかなり嫌がっておっての」

「先方？　京都の市役所とかですか？」

学園長が胸元辺りまで伸びた白いひげを撫でながら言うと、この一言だけでネギは瞬間的に立ち直り、　アスカは団体旅行で受け入れを拒む先ということで、思いついた事を口にする。

「関西呪術協会ですか」

「ふぉ、知っておるのか？」

「修行先の国の大きな魔法組織ぐらいは知っておくべきだと思ったので調べました。といっても分かったのはトップの名前ぐらいで詳しいことは何も分かりませんでしたが」

アスカが思いついた組織名を呟くと学園長はネギから視線を外して驚いたように見るが、尤(もっと)もな理由を聞くと納得した。

逆にネギは自分が目先の事に囚われて調べる事を怠っていた事を今更ながらに自覚する。

確かに日本の事を調べはしたが、日本はどういうとことか、そこに住む人たちはどんな人なのか等だけで魔法組織の事など全く頭になかった。

それはアスカの準備が良すぎるだけで誰も責めはしないのだが、生真面目な性格というか内罰的というべきかネギは自分を責めてしまう。

俯いてしまったネギを見て学園長はしまった、という表情を浮かべて、興味を湧かせようと慌てて説明する。

「実は儂、関東魔法協会の理事をしているんじゃが、関東魔法協会と関西呪術教会は昔から仲が悪くてのう……」

学園長が指を1本立てて、詳しい説明を加えていくとネギも興味が移ったのか一転真剣な顔になる。

日本における魔法使いの組織というのは麻帆良を拠点とした関東魔法協会だけではなく、京都を本拠地として西日本を統べる組織である関西呪術協会が存在する。

歴史を紐解けば関東魔法協会と関西呪術協会は昔から仲が悪かった。

呪術という日本独自の形態の異能は古くから存在していたが、時代が進むにつれて西洋の方から魔法というものが日本に伝わり、結果として西洋の魔法が日本の呪術の領土を侵すような形になってしまった。

関西呪術協会の歴史はともかくとして、陰陽師や土着の道士は概ね『古来』と言って差し支えのない歴史を持っている。

だが、一千年をゆうに越える間胡坐(あぐら)をかいていた場所を、西洋魔法使いたちが多く流れ込みその勢力を伸ばされ、それが時の流れだと頭では理解できていても西洋魔法使いたちを快く思わない者は決して少なくない。

それと元々呪術の家の者である現在の関東魔法協会の長である近衛近右衛門が西洋魔法に被れたのも問題である。

それだけならここまで拗れることはなかったが、魔法使い同士の大戦で関東魔法協会と関西呪術協会の両陣営から多数の死傷者が出てしまい、その亀裂を今まで以上に深める事になってしまった。

特に魔法使い同士の諍いで西洋魔法使いに身内を殺された者が多い関西呪術協会にすれば、とても許せることではない。

今の関西呪術協会の長、大戦の英雄でもある『サムライマスター』近衛詠春が務めるようになってからは大分マシにはなったが、未だ両陣営の関係は改善されていない。

両トップが親子関係もあって仲が良いのだが、関西側の下の人間の関東側に対する気持ちは良いとは言い難い。

裏切り者である東の長である近衛近右衛門と西の長である近衛詠春は義理の親子な事と、詠春の近右衛門に対する弱腰な態度を歯痒く思う者も多いのもまた事実である。

如何なる相手でも礼を忘れない詠春を人として好ましく思う者も多かったが、長の娘でありその資質と血筋から関西呪術協会の次期長筆頭の近衛木乃香を東に送ってしまったことが、東に人質に取られたと思うものも多く問題をややこしくしている。

反西洋魔法使い派の中にも木乃香が麻帆良にいるから、奪還に動く人間も現在に至ってもいる程だ。

元々、関西の出である刹那が木乃香の護衛という形であるにしろ、

麻帆良に行ったというだけで裏切り者扱いされるほどなのだから、その気持ちは重症だ。

「今年は君達二人の魔法先生がいると言ったら、修学旅行での京都入りに難色を示してきおった」

このような背景はあっても態々修学旅行に魔法使いが同行するとしても、そこまでの問題にはならない。京都は修学旅行の定番とも言えるので、明確な理由と害することがなければそこまで目くじらを立てるほど関西側も狭量ではない、

今回問題になっているのは「西洋魔法使い」ではなく、「サウザンドマスターの息子」であるということが深く関わってくる。

大戦の英雄である「ナギ・スプリングフィールド」を関西側の恨みの象徴とするには十分であり、それゆえに同じ紅き翼のメンバーであった詠春は一部の者からは軽視され、詠春も性格上配下の気持ちも理解できてしまうが故に、強いことも言えない。

だからといって詠春が組織の長として無能という訳ではないが、配下の者や重鎮達を完全に掌握仕切れていない部分があり、それが木乃香を東に送った理由とも？がっている。

「えっ……！　じゃあ僕達の所為ですか！？」

「言わなければいいのに」

「……むぅ」

二人が名目上ただの見習いであれば、報告なしでも押し通せたと

思うのだが、『英雄の息子』というネームバリューは、本人（ネギ）が思っている以上に強力だ。

伏せておいたことが発覚すれば、さらなる火種となりかねない。

学園長としても選択肢はなかったのだ。

「まぁ聞きなさい」

話の内容から考えて、ネギにはそうとしか考えられず驚きと絶望の混じった声を上げるが、学園長は落ち着かせて話を続ける。アスカのボソリとした正論の呟きには唸ったが。

横で一連の流れを見ていたアスカは、学園長がネギに自分が原因だと思わせるように提示して要求を通そうしているのだと思えた。

「儂としては、もう喧嘩を止めて西と仲良くしたいんじゃ。そのためにネギ君には特使として西へ行ってもらいたい」

落ち着いたとは言えないネギに、落ち着かせるような泰然とした態度で学園長は話し、高級なマホガニーの机の引き出しから1通の封書を取り出してネギに差し出す。

それの封蝋には麻帆良学園の校章が捺されて封印されていることから、それは公式文書なのだろう。

降って沸いた大役に、自身に差し出された親書を見てネギの顔が強張る。

「ふぉふぉ。そう難しいことではない。この親書を向こうの長に渡

してくれるだけでいい。ただ道中向こうからの妨害があるやもしれん。彼らも魔法使いである以上、生徒達や一般人に迷惑が及ぶようなことはせんじゃろうが……ネギ君にはなかなか大変な仕事になるじゃろが……どうじゃな？」

学園長も関西呪術協会が関東魔法協会を嫌う大半の理由である大戦の傷跡は理解できていても、それまででしかない。

結局のところ学園長は「勝者」「強者」という立場で、直接的な被害者（加害者でもあるかもしれないが）に、「過去の事は水に流せ」と言っているようなものに気付いていない。

本来なら長い時間と恨みや憎しみを継承させない後進教育を続けていくことが、無用の軋轢や危険を回避することに？がるのだが、学園長はそれを善しとせず、「仲良くしたい」という理由を掲げてネームバリューだけは抜群なネギに『密書』を託し、修学旅行にかこつけて京都に送り込む。

確かにネギが和平の使者として訪れれば、形だけとはいえ和平の道を歩まざるをえない。それは強硬派にとって歓迎したくない事態だ。では、それを邪魔し、失敗させたら？　失敗の状況にもよるのだろうが和平の道は断念。更には関係悪化となり、一気に抗争へとなる可能性もある。そのことを知っているアスカは心の中で嘆息した。

これだと、まだ十歳のネギを使う事で手を出しやすくさせたのじゃないかと邪推することも出来るし、見方を変えれば挑発とも取られるから、和平を望むとか言いながらアスカには向こうに挑発行為しているようにしか感じない。

「……」

どうかと訊かれて、直ぐに返事を返さずにネギは考える。

これを断って修学旅行の行き先が変われば京都に行くには休みの日しかないし、小遣い程度の給料しかない自分ではそもそもの交通費が足りない。

だが、親書を届けるという役目を引き受けて届ければ二つの組織も仲良くなるかもしれないし、自分は父の手掛かりがあるかもしれない場所に無条件で行くことができる。

ここまで考えてみれば、ネギには断るべき理由も迷うべき要素も何一つない。

横で徐々に明るくなっていくネギの顔を見ていたアスカからしてみれば、何を考えているかなど想像するまでもない。

それが良きにしろ、悪にしろ、ネギは元々サウザンドマスターが絡んだ時は恐ろしく短絡的になることがある。

自分が親書を届けることで東と西が仲良くするのは良いことで、それに自分も京都へ行って父の手掛かりを探せる。せいぜいそんなところだろうとアスカはネギの頭の中をシミュレートし、学園長の筋書き通りに事は進んでいると確信した。

ネギに与えられた任務は、互いのトップ同士が親戚関係によって結ばれている状態では茶番もいいところだ。

魔法先生が修学旅行の面子に入ってることなんて麻帆良では珍し

くもないし、魔法先生である瀬流彦先生がメンバーに入っている時点で何の意味もない。

「分かりました、任せてください学園長先生」

手紙と学園長を見たネギは毅然とした表情で頷き答えた。

ネギのその様子を見て、学園長は視線を緩め、上げるようにしていた眉から力を抜いた。

父親の手がかりを探すために京都に行きたがっていたネギからしてみれば、一度叩き落されたところに希望の光が差し込んだ状態だから断る理由がない。

ネギは学園長から親書を受け取り、こんな重要な事を自分に任せてもらえることが嬉しかった。

これで名実共に京都行きが確定したのに加え、自分が東西の確執を和らげるための架け橋になるという大役を仰せつかったのだから、張り切るなという方が無理というものだ。

しかし、ネギは何故見習い魔法使いに過ぎない自分が親書を渡すという重大な仕事を任せられるのかまでは頭が回ることはなかった。

ネギも落ち着いて考えれば不審なことに気付く頭を持っているが、父の手掛かりと学園長の話術にペースを完全に崩された為気付く事ができない。

黙って学園長とネギのやり取りを見ていたアスカは、条件がイーブンか少し良いぐらいでは交渉しても負けるだろうと考えていた。

今まではこちらの条件が圧倒的に有利だったからこそ、こちらの思惑通りに進んだのであり、そうでなければあそこまで上手くいかなかったのだと容易く想像できる。

「うむ、では修学旅行は予定通り行おう。頼むぞ、ネギ君。アスカ君はもう少し話があるから残ってくれないかの？」

「はいっ！！」

「はい」

受け取った親書を内ポケットにしまうと、ネギは元気よく返事し、退室許可を貰うと早速扉を開けて退室するネギ。

ネギが退出するのを見届けたアスカは振り向いていた首を前に戻し、サングラス越しに学園長と視線を合わせる。

「それで私に何の御用でしょうか？」

「ふぉふぉふぉ、そう警戒せんでもよい……木乃香のことじゃ」

自分一人だけ残されたことで若干肩に力が入っているアスカを安心させるため、最初はおどけるように話しながらも孫の名前を出す時にはどうしても沈鬱になってしまう。

アスカにしてみれば木乃香のついてはほとんと自分には与り知らずのことであり、もう一週間も経っているのだからとっくに解決しているものだと思っていたのだ。

「あれの親の方針でな、こっちの世界の存在すら知らんかったのは知っての通りじゃ。既に向こうには魔法がバレた事は伝えてあるが、どうするにしろ修学旅行で実家がある京都に来る時に一度木乃香を帰らせて欲しいと頼まれたのでな、一緒に行ってくれんか？」

アスカは何故自分にという思いが湧き上がるが、直ぐに魔法がバレた事情を話せるのが暗示を掛けた玉藻か、被害者である自身しかいないことに気付く。玉藻が行くなら主である自分が説明しないといけないので行かなければならない。

だが、修学旅行の予定表では親書を持っていくと考えられる日と帰省する日が重なる可能性はかなり高い。

そうなれば間違いなく巻き込まれるとアスカの勘が危険だと囁いている。

「行くのは構いませんが恐らくネギ先生が親書を届ける日と重なると思うので、その次の日で構いませんか？　説明するだけなら一緒に行く必要はありませんし」

「何故じゃ？　一緒に行ったほうが手間は省けると思うが……」

惚(とぼ)けて聞いてくる老人を前に言葉を続ける。

「お忘れなのですか、六年前に何があったのかを。私達を公式の場に出すという事はサウザンドマスターを憎む者を呼び寄せる可能性もあります」

六年前の事を出されて学園長はそれ以上何も言えない。

ネギ・スプリングフィールドが和平の特使として親書を向こうの長に渡せば公式の記録に残り、敵対者の目に止まる可能性だってある。

そうなればナギを恨む者が麻帆良に来る可能性も増え、最悪の可能性も出てくる。

ネギが親書を渡す時に一緒にいればアスカの事も同じように記録に残るだろうし、そうでなくてもネギの事を調べれば芋づる式にアスカのことも知れ渡る事になるのは間違いない。

そもそもアスカの場合は名前などを別にすれば、旧世界において知られているいるのだが正式な書類に記録が残ってしまうのは出来れば避けたい。

「ですから私が修学旅行に行く場合は別人に偽装するようにお願いします。これがその為の資料です」

「……まあいいじゃろう。言ってることも最もじゃし」

アスカはそう言って手に持っていた数枚の紙を渡し、受け取った紙を見た学園長は準備の良さに呆れるべきか驚くべきか悩んでしまう。紙にはアスカの使い魔（と聞いている）の玉藻とその弟となっているアスカの詳細な情報が事細かく書いてある。

ちなみに玉藻の名前が「玉藻・夜天」でアスカが「アスカ・夜天」なのは、単純に名前が思いつかなかったのでリインフォースの夜天の書から取ったのだが、学園長には由来は分からない。

これだけ準備がいいとネギが特使になることも、アスカは事前に知っていたのではないかと邪推してしまう。

「それとネギ君の補助、木乃香の護衛の手伝い。そして道中であちらの人間が何かしら仕掛けてくるやもしれんから、君達で生徒を護ってほしい」

学園長としても最初は木乃香の事についてもネギに任せるつもりだったのだが、あんなことがあっては護衛の刹那どころか木乃香とも上手くやれるとはとても思えない。

流石に不安に感じたのでアスカなら直接的に関わる事はできなくても、二人を近づけた手腕や今までを見る限り、助言や精神的に助けることができることを見込んでの頼みである。

その前に人手を増やせればいいのだが、ただでさえ「英雄の息子」で過敏になっているのに、封印状態とはいえ「闇の福音」も一緒なのでこれ以上人員を増やすのは困難だったのだ。

直前に人員を増やすのを前もって説明したとしても、中には何かしらの意図があるのではと勘ぐる者も出てくる可能性もあり、そして、それを理由にいざこざを起こす者が出ては本末転倒だ。

その為、護衛は必要最低限となり、現状ではこれが限界なのだ。

「……仕事多すぎじゃないですか。というか以前に一般の教師以外の仕事をしないと確約を頂いた筈ですが」

「そこを曲げて頼む。今回の修学旅行に乗じて、親書か木乃香かどちらかが狙いか分からんが関西呪術協会の一部の過激派が動いてお

るという報告も入っておる。まあ、あちらも一般人の居る手前、あまり過激な事をしてくるとは思えんが、用心のためじゃ」

代々受け継がれてきた血脈の中でも木乃香の持っている潜在魔力は膨大であり、最強の魔法使いと呼ばれるサウザンドマスターをも凌ぐ程という。

偶発的に関わってしまったとはいえ本人にはまだ魔法の知識が無い。が、その身に眠る膨大な魔力は切り札となるし、関西・関東両協会の長は共に木乃香の身内だから、十分に人質としての価値がある。

それはアスカも理解できるが、だからといって自身の体は一つしかなく担任補佐として（高畑が出張の為、実質は担任）引率がある以上はそちらだけで手一杯である。

「なら行き先を変えたらいいじゃないですか。学園長が言っているのは希望的観測に過ぎませんよ。子供先生に修学旅行のついでで親書を届けさせるなんて、向こうからしたら挑発としか受け取れません」

「う……そうなんじゃが。親書をネギ君が届けるのは大分前から決まっていたことなんじゃ。組織間のやり取りである以上、既に一部だが向こうにも知れているので辞めることは出来ん。ちゃんとした辞める大義が無い以上、それで不信感の様な感情を持たれてはそれこそ終わりじゃ」

学園長も挑発していると感じると分かってはいるが、「英雄の息子」という最高のネームバリューがあれば襲撃もしないという推測していたのが、真っ向から希望的観測に過ぎないと言われると唸る

しかない。

ネギが起こした事件で考えも変わり、親書を渡す役目を変えようかとも思ったが、次の適任であるアスカは病み上がりなので襲撃を受けたらネギよりも危ない。その秘めた実力、従者の能力に期待するには不確定要素が多すぎる。

襲撃があっても自力で突破できる高畑は、別件のためにとても手を放せない。

最低限代理を立てる事はできても、親書を渡す事を辞めることは組織の都合上不可能だから、回り回って結局ネギに帰ってきたのだ。

ネギでは今までの事から考えて、どうしても不安が先に出てしまう。エヴァンジェリンの戦いでは灯火を見せたが、やはり不安は残る。

長の娘である木乃香へ襲撃があると予測すると、そこまでになると単独犯の可能性は低いから刹那一人だけで護衛するのは危険。

瀬流彦先生は他の生徒達を守るため、手は放せない。

そうやって一つずつ考えていくと、どんどん自分の見通しの甘さが出てくる。

「木乃香さんの問題だけでもなければ楽なのですが、西の長の娘を関東に呼んだのは失敗だったのでは？」

近衛木乃香と言う少女は生まれ付いて並の能力者では太刀打ちできないような強い力を持っている。

その上、本人は無自覚のため非常に無防備で、彼女を狙う者が後を絶たない。

何より、木乃香の父親は京都を本拠地とする関西の裏側の組織『関西呪術協会』の長なのだ。権力目当てに彼女を狙う者も多い。

「そうなんじゃがのう。あの娘をあのまま関西に置いておいても政治の道具になりかねんから婿殿と相談して決めたんじゃ」

それが結果として今にまで縺れて問題をややこしくして、後になってつけが回ってきているのだから笑うしかない。

「……ハァ……こちらの条件を呑んで頂けるなら受けます」

アスカも語られない裏まで推測できるが故に断ることが出来ず、重い息を吐いて条件付の承諾の意を示す。

「そうかそうか。して条件とは？」

了承を得たことに学園長は嬉し気に頷き、条件を問う。

「第一に私を魔法先生としてではなく傭兵という立場でお願いします。それとアスカ・スプリングフィールドの情報を徹底的に秘匿し、ネギ先生よりも情報の重要度を上げてください。修学旅行後からここを出て行くまでに外部に情報が漏れた場合は賠償を払って頂きます」

「うむ、それなら構わんよ。第一ということは次があるのじゃろ？」

これはアスカにとって生命線の為厳重にしてもらわないといけなく、賠償云々は漏れた場合の保険で、実際は魔法学校や他の場所から漏れるかもしれないので、どう転んでも自分に利があるようにするためだ。学園長もここまでは分かっているだろうから予定調和みたいなものだが。

「第二に協力者として龍宮真名、長瀬楓への依頼。そして最悪は古菲も。後者の二人に関しては魔法バラしてしまいますが、親書か木乃香さんを狙う場合単独犯は考えにくく、そのための保険です」

「忍者の長瀬君は兎も角、力は別にして一般人の古菲君もかね？」

「基本的に近衛さんのことは刹那さんに任せますが、不足の事態は起こりうるものです。遠距離の龍宮さん、近距離の桜咲さん、遊撃の長瀬さんの布陣で備えるためです。古菲さんに頼む時は最悪、手が足りなくなった時だけで何も無ければ教えません。まあ依頼する時には最悪の場合ですから多分ないとは思いますが、絶対とは言えないので念の為です」

「……まあ、良かろう。依頼料は全額此方で持つから後でいいから上げてくれればよい」

敵の本拠地へ行くのだから、どう考えても手が足りないので裏の関係者である真名と、関係者ではないが力が有る楓を協力者として依頼する。

そして最悪の場合を想定し、二人よりか力は劣るが実力者の古菲もメンバーに入れる。

学園長としては気にし過ぎだとも思うが、アスカの言っていることは最もであるので受け入れる。

「報酬については活動を見て査定して出来高でどうじゃ？」

「構いません」

報酬は修学旅行後に挙げる報告書から、それに見合った金額を払うことで合意。

両者共にその時は熾烈な争いになるだろうと予感を抱いてたりするが。

「第四に今後ネギ・スプリングフィールド、もしくはその関係者（仮契約者、協力者）へ裏の事に関して基本的に不干渉を認めて頂きたい」

「フォ！　どうしてじゃ？！」

「例えば修学旅行で親書を届ける時に勝手に生徒が無断でついて来るとか、仮契約者に関わってネギが起こす騒動に巻き込まれるっていうことがあるかもしれません。それで怪我してこちらに管理責任を取れと言われないためです。というか裏関係でネギ先生にこれ以上関わりたくありません」

ネギとネギに関わる者に不干渉と言われて学園長も驚くが、先の事件やネギが麻帆良に来てから起こした騒ぎを思い出し、火消しをしてきたのがアスカである以上、そう思ってしまうのは仕方のないことかと学園長は若干の哀れみの思いを抱く。

アスカの最大の障害であった学園長がそんなことを思っても仕方のない事には気がついていないが。

（どう接したらいいか分からないからな）

アスカはネギに対すると私情に奔(はし)りすぎる傾向がある。それを今回の件で認識したわけで、感情がはっきりとするまで互いのために関わり合いにならないのがベストだと考えたのだ。うっかりまともに向き合うとリインフォースのこともあって殺しかねない。

「あ～、まあいいじゃろう。君に大本の理由がなければ責任を問うことはしない」

学園長の言葉にアスカはこれで言質は取れたと安心し、話を続ける。

「そして本当に最悪の場合マクダウェルさんの封印解除の許可をお願いします」

「許可？　それでは君に呪いを解呪出来る手段「ありますよ」何じゃと!?」

盤面を引っくり返せるＪＯＫＥＲ(ジョーカー)として、いざという時のアスカがエヴァンジェリン解放の許可を求め、学園長はその「許可」という言葉を聞いて、まるでアスカが解呪出来る手段を持っているのかと問うている途中で認められ、思わず声を荒げてしまう。

「あくまで限定的ですが、マクダウェルさんの【登校地獄】が厄介なのは呪いが変質しているからです。息子の私達がかなりの血液を提供すれば一回限りですが私でも呪いを誤魔化すことが出来ます。

今回のように修学旅行みたいに学業の一環でなければ無理ですが」

これはアスカが以前から【登校地獄】を研究し、封印したナギの血縁であること、呪いの研究者であることが大きい。

吸血させて体内側から魔力を循環させ、ネギとの決戦時の封印開放状態の時にエヴァンジェリンの協力と外部からのアスカの手助けがあって初めて出来たことである。

これだけ環境と条件を整えても学業の一環である修学旅行に参加できるように呪いを弄ることしかできなかった。これも一回限りで、二度目は効かず、修学旅行が終わるまでは余計に悪化することを防ぐために弄ることも出来ない。

勿論、エヴァンジェリンの力を封じている【学園結界】の方は干渉することは出来ない。

今回一回限りで二度目は効かないと聞いた学園長は、いい加減驚き疲れていた。

「もし、エヴァンジェリンの封印を解く時は事前に儂に必ず連絡するように。呪いを解くかどうかの判断は儂がするからの」

何時かアスカがエヴァンジェリンの封印を解くかもしれないので釘を刺しておくのを忘れない。改変するという前例があるだけに解いてしまう可能性があるからだ。

「分かりました」

学園長の言葉にあっさりと頷いたアスカには勝手に解呪するつも

りはないし、責任を負う気はないのでこの言葉はありがたい。

「ネギ先生に桜咲さんが近衛さんの護衛である事を話しておいてください。向こうで何らかの妨害があった場合、名簿に京都神鳴流と誤解の受けやすいことが書いてありますから疑われるので」

「それもそうじゃな、後で必ず伝えておこう……他にはまだ何かあるかの？」

学園長の言葉に頷き、ネギが持っている名簿はアスカが持っている物のコピーだから、前担任の高畑が書いていたものがそのまま残っているので、頭がいいから逆に勘違いや誤解をしやすいため、事前にある程度の情報を伝えておけばそれもなくなるだろうと思う。

「付け加えるならネギ先生の手伝いにしろ、近衛さんの護衛にしろ、基本的には当人達に任せてこちらは何かあるまでは手は出しませんが、構いませんか？」

「必ず襲撃があるかは分からんのだから、そこら辺の采配は君に任せる。それでは特使と護衛の件、しっかりと頼んだぞ」

必要とあらば、アスカの裁量で好きにやって良いとの事だ。

現場の裁量を全て任せるのは剛腹というべきか、単に人材がいないのか、果たしてどちらであろうか。

「分かりました。万が一、向こうで対処の判断が難しい場合は連絡しますので」

「うむ、すまんのぉ。本来なら君も楽しんでくるべきなんじゃが…

……」

流石にアスカに負担をかけ過ぎではないかと思い頭を下げる学園長。

アスカは「それなら行き先を変えてください」と口に出しそうになるが、言っても仕方ないし頭を下げている人間に追い討ちをかけるほど非情でもないので「気にしないで下さい」とだけで留める。

「明日か明後日には詳しい内容を上げますので、それまでに契約書と戸籍の用意をお願いします」

「うむ、分かった。用意しておこう」

学園長とのやり取りを終えると、アスカは失礼しますと頭を下げ学園長室を出る。

そして一度職員室に戻って仕事を片付け、携帯電話を取り出して真名に電話を掛ける。

「もしもし、アスカです。仕事を頼みたいのですが明日時間ありますか？　……はい、それでは明日の午後に」

一度電話を切り、続けて楓に電話をかけて似たようなやり取りをして約束を取り付け、携帯をしまい窓越しに見える夕焼けに染まる空を見上げながらアスカは盛大な溜息を吐いてしまう。

「生徒よりも自己保身に走る……まったく度し難いとはこの事だな」

アスカは自分の右手に視線を落として、呟いた。

彼には学園長ですら知りえない情報が山程ある。事件は必ず起こる――――――それを知っているから。

それを思ってなにかを考えているが余人には苦みばしった表情以外に悟れるものはない。

教員用の下駄箱で靴を履き替えて前庭に出れば、もう外は随分と薄暗く。見上げた空はすでに深い蒼に、太陽は西へと消え、淡い月光が、星一つ無い東の虚空に寂しそうに弧を描いている。周囲に生徒の姿は無く、校舎の向こう側、グラウンドや体育館の方から部活動の喧騒が僅かに届くのみ。

それら現実の事象が、どこか遠く、希薄に感じられたのは錯覚だろうか……？

虚空から視線を戻せば、校内と校外とを隔てる境界線。それはあたかも日常と非日常の境界なのだとでもいうように人のいない道が続くのみ。

心の中にどんな思いを持つのかは本人と内部にいる玉藻しかなく、どこか足取りも重く歩きながら家路についた。

第五十話　準備を始める少年　前編（後書き）

さて、重大報告ですが何故か上がったテンションで宣言します。

『溜まったストック大放出』

で、ございま――――――――――――ッすッ！！！！！！！！！！！！！

驚くなかれ、今話を含めるとストックは２２話分。それを大放出するということは「２２日連続投稿」を敢行することをここに宣言します。

準備編２話＋明日菜誕生日編＋修学旅行編全１９話となっております。終わった時に読了時間が約２０００分越えているだろうか。ちなみに全部一万字越えてますよ？

注：諸事情＋面倒くさいなどといった理由で更新が一日、二日遅れる可能性はあります。

全放出するわけで連続投稿の後は更新速度が遅れるわけですがご容赦を。場合によっては二週間に一度とか。

てなけわけで次の投稿は明日午前０時です。今話の後編です。

それと『キーワード』の一つである『アンチかも？』を削除しました。

いい加減眠くなってきたから寝よう。それでは皆様、お休みなさい。

あ、誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

第五十一話　準備を始める少年　後編（前書き）

今日は家族と墓参りに行ってきました。前話の投稿時間から分かるように眠い眠い。

墓は比叡山にあるんですけど何故か墓参りのついでに山の上の方に行くことに。でも、結局はちょっと風景を見ただけで終わりと「なんか時間と金の無駄じゃね」と思わずにはいられませんでした。

入場料１６２０円の風景ってシュールだ。

しかも山道がいりくねっているから酔ってしまって昼食残すし。

さて、修学旅行編まで今話を含めて残り二話です。準備編の後編ですな。

文字数は１１０１５字と前回同様に多めです。

どうぞ！！

第五十一話　準備を始める少年　後編

次の日の土曜日、アスカは半日授業を終えた後から修学旅行対策の協力者集めに動いていた。

そこいらの地方都市よりもよほど街としての体裁を整えている学園内のカフェテラス『ＳＴＡＲＢＯＯＫＳ　ＣＯＦＦＥＥ』の片隅のテーブルで、昨日約束した龍宮、長瀬の両名と席を共にしている。

余人に聞かれたら不味い話なので認識阻害の結界を張るのを忘れない。

認識阻害の効果は例え目に映ったとしても、それに意識を向けていなければ、それを見たとは言えない。言い換えれば、例え目に映っても、相手に意識されなければ姿を消しているのと同じ……いや、消えているということすら目撃されないのだから、完全な隠行である。

「魔法使いって本当にいるんでござるなぁ。まぁ、拙者も人のことは言えんのでござるが」

「忍者も人のことは言えないからな」

結界を張って、魔法使い、修学旅行云々の話を黙って聞いていた楓は、そう言って自分の頬を掻いた。菩薩相とでも評すべき、常に笑みをたたえているその顔には、今は、苦笑に近いものが浮かんでいる。

麻帆良学園中等部３－Ａ組出席番号２０番、部活はさんぽ部。そ

れが、楓の表立った肩書きである。年齢から考えると末恐ろしいプロポーションを抜かせば、表立った肩書きだけを見るならば何処にでもいそうな女子中学生。

だが、彼女には余人に秘している裏の肩書きがある。

現代人の視点からすれば、魔法使いと同じレベルでファンタジーな存在である忍者という肩書きだ。

だからこその言葉であり、真名に突っ込まれての苦笑だった。

まあ、普通に教室でも「ニンニン」や「ござる」と言っていて、周りには全然忍んでいないから忍者であることは周知の事実ではあるが。

「ふむ、中々に便利でござるな。魔法とは」

土曜日の昼間、人通りの多いメインストリートに面するカフェなのに、視線がほとんど向かない。

だが、最低限見えていることを証明するように、偶に視線を感じる。

「それで依頼は受けてくれますか？」

「ま、報酬が出るのなら私は仕事として引き受けるよ」

アスカから話を聞いた真名は依頼元が学園長だということで即決で依頼を引き受ける事を承諾する。

「で、楓さんはどうします？」

「別に構わないでござるが、拙者には何かくれないのでござるか？例えば修行に付き合ってくれたりすると嬉しいでござる」

真名の返事にアスカは一安心と頷き、次に楓に問うと自分には何か無いかと言いながら以前に頓挫した修行に付き合うように求めてきた。

例えばと言いながらやけに具体的な内容に苦笑を禁じえない。

アスカとしては前回の事をそこまで引き摺ってはいないが、かといってここで簡単に認めてしまうというのも何となく良くない気がする。

ブラックコーヒーをストローで啜りながら、アスカはつらつらとそんなことを考え、そこで新学期に入ってから行った小テストでの成績を思い出す。

「……楓さん、この前の小テスト。あまりよろしくないみたいですね」

「な、なんでござるか。今はそれは関係ないでござろう」

「学生の内は学業が本分。依頼を引き受けてくれるなら今学期の中間と期末で学年平均を超えたら付き合いますよ。ちなみに必ずしもあなたの手が必要と言うわけではないので交渉の余地はありません」

アスカが前回の小テストを持ち出すと楓は、思いっきり動揺してどもって関係ないと言うが、続いたアスカの言葉に異議を申し出よ

うとするも、言う前に封殺されて目論見は頓挫する。

本音では楓の力がなければ正直厳しいのだが、そんなことをおくびにも出さず、アスカに楓は追い込まれていく。

こちらが頼み込む側といってもそれで足元を見られるつもりはない。伊達に修羅場を潜ってはいないのだ。

「何も一人で勉強しろとは言いませんし、分からなければ聞いてくれれば教えますよ。条件的に去年の学期末前に戻ったと考えてもらえればいいです」

ふっと微笑んで請われれば教えると言われれば楓としても逆に断るのが悪いような気持ちになり、そんなことはないのだが真名から白い目で見られているようにも感じてしまう。

「むぅぅぅ……分かったでござる。拙者としてもクラスメイトが危険に合うのは承服できないでござる。依頼を受けるでござるよ」

呻き声を上げ、去年の学期末で禁止されたのを思えば、格段の進歩だと自身を納得させて渋々とではあるが依頼を承諾する事を伝える。

クラスメイトの危機を放っておくほど非人情的な人間でもない。真名と聞けば刹那も関わっているとかで、麻帆良武道四天王の内三人が入っていても、先程のように自分が必要という言葉にも納得できる。それで黙って見逃せるかは別問題で、義理人情に厚い彼女に拒否の二文字はない。

「それで刹那はどうする？」

「僕の方から伝えます。何もなければそれでいいですし、向こうが手を出して来るまでは二人を動かす気もありませんので、基本的には傍観します。何かあったら直ぐに呼びますから、何時でも連絡がつくようにだけはしてください」

「了解でござる」

「分かったが、エヴァンジェリンは？」

自分達も修学旅行であるので出来れば楽しみたい。それを考慮して向こうが手を出してくるまで遊軍扱いだと分かり、楓は頷いた。

反対に真名は学園長、高畑を抜かした学園トップスリーに入るエヴァンジェリンのことを尋ねた。在り方などを別にしてその全力があればどんな敵も怖れるに足らないことを彼女は知っている。その彼女が手伝ってくれるならかなりの手助けとなるだろうことを考えることは容易い。

「いざというときは封印解除の許可も学園長から貰ってますが、彼女が出張る時は最悪のケースになります。なので戦力としては当てにはしないで下さい」

「成る程、ね」

エヴァンジェリンが登場する最悪のケースということは自分たちが歯が立たない相手か、彼女の手も借りなければならない状況に陥っていることを指している。そんな状況に至っているということは敗北に近い状況だということも。

「古菲は呼ばないのでござるか？」

「力はあっても裏との関わりはないので出来れば巻き込みたくはないです。一応手が足りなくなった時の当てにはしますが、その時までは秘密です」

武道四天王の三人が揃い踏みの状況で、最後の一人である古菲を呼ばないことに疑問を以つのは当然。

しかし、彼女は楓のように忍者という非日常に関わりのある人間ではないので可能な限り関わらせようとしないのがアスカの方針である。

投げかけられる質問に答えていき、話す内容がなくなったと同時に認識阻害の結界を解き、、改めて頼んで解散した。

二人を見送ってまだ別件の約束が残っているので飲み物の注文をして、受け取りまた席に戻って暫しの間、待ち人が来るまでコーヒーを飲みながら思索に耽る。

「……という訳でして、強制はしませんがネギ先生を嫌わないで頂けたらと思ってます」

真名、楓が席を離れてから１０分程して待ち人の神楽坂明日菜、

近衛木乃香、桜咲刹那がやってきて、改めて事件の詳しい内情やネギがそこに至った経緯を説明し、最後に一言言ってから頭を下げるアスカ。

その前に再度認識阻害の結界を張ることも忘れない。

「アスカ君はそれでええの？」

ネギの行動による犠牲者であるアスカが認めるとは普通は思えない。

木乃香が偶然にも力を発現したからこそ助かったものの、そうでなければ間違いなく死ぬほどの怪我に見えたからだ。そもそも必ずしも木乃香の力の発現が偶然だと言うことはない。去年の学期末の『コックリさん事件』で彼女は力の発現をしていた。それが感情の昂ぶりによって完全な覚醒に至るのはある意味必然と言えた。

しかし、彼女たちは知らないが玉藻がいたので必ずしも死ぬとは言わないが確立が戦ったのは事実。それでもネギに責任を求めないのにはそれなりの理由がある。

「もう過ぎたことですし、多少なりとも僕にも責任がありますから」

ネギを矢面に立たせて自身の身の安全を確保したと、エヴァンジェリンの事情を知った上で利用していたことまで１００％全て話せることは話した。

実際の被害はアスカの方が上だが、玉藻に聞いた話では精神崩壊寸前だったと言う。

ようは喧嘩両成敗で有耶無耶の内に終わらせてしまおうという腹だ。

そこで一度言葉を切り、

「まあ流石にこれ以上、教師として以外は関わりたくありませんが」

言葉を聞いて少し考えた木乃香が聞くと、アスカは本当に気にした風もなく左手を振って返すが、最後に付け足した言葉こそが本心だと三人は感じた。

単純にどう接するべきか決めかねているだけなのだが誤解を招く言い方だったので彼女たちは言葉通りに信じた。

「それでなんでエヴァンジェリンはあんたたちを襲ったの？」

病院では流石に襲った動機までは触れられていなかったので彼女たちが気になるのも仕方ない。

「それには僕達の父親が大きく関係しています」

「あんた達の父親？」

何で二人の父親が関わってくるのか分からない明日菜は首を傾げ、その様子を見たアスカが続けて口を開く。

２０年前に魔法使いの世界、魔法世界で大きな戦争があってその戦争を終わらせる切っ掛けを作り、その結果戦後に英雄と呼ばれている『紅き翼』、特にリーダーを務めた二人の父『サウザンドマスター』。

反対に、真祖の吸血鬼ということもあってエヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マグダウェルの名は魔法界において恐怖の対象となっており、６００万ドル、日本円で大体５億円前後の賞金首となっている。

片や英雄、片や大悪党。

係わり合いのない彼と彼女が出会ったのは十数年前にまで遡る。

エヴァンジェリンが―ナギ・スプリングフィールド《サウザンドマスター》に危機を救われ、一目惚れでもしたのか以来追い続けていたのだ。

しかし、悪事をやめさせるためナギに【登校地獄】の呪いを掛けられ、麻帆良学園に封印されてしまう。

３年で呪いを解く約束をしたが現れず更に１０年前に失踪してしまい、ナギの魔力は強大で（力任せに術を使ったため）誰もがその呪いを解くことができずに１５年間学園に女生徒として登校し続けて現在に至る。

解きに現われなかったので封印解除の望みを血縁者の血液を吸うことで成そうしたわけである。

ネギが来るまでに吸血しようとしたのをアスカが止め、その計画に乗っかかる形で加担したのだ。

今回の件に関して学園側の思惑が知りたかったから加担したわけだが、これ以上ない盛大な失敗と言える。

「なんで学園の思惑が知りたがるのよ」

大本を辿ればアスカの考えが発端となれば誰を恨んだらいいか分からなくなった明日菜が問いかける。

「なにかと不自然な点が多すぎたもので……」

秘匿に甘いネギを放り込んだり、学園長のお遊びが引き込みにしか見えなかったり、因縁が深い人間を近くに置いたり、となにかと怪しい要素が多すぎた。

今回の件にしても推測になるが、ネギに実戦を経験させるためという可能性があった。彼女が本気になれるのは停電時だけ。いざとなれば停電復帰時間を操作してエヴァンジェリンを態と負けさせる事もできた。

「だからと言って、何もこんな事をしなくてもいいと思うのですが……」

幾ら父親が『英雄』で将来を嘱望されていると言っても、１０歳にも満たない子供に元高額賞金首と戦えとは無理があるとしか刹那には思えない。

それに対してアスカは苦笑しか返せない。

『サウザンドマスター』に対しての憧れは一種宗教の信仰みたいなものか感じたものしか分からない。だから、その英雄の息子だからと過ぎる期待を寄せる人間の気持ちなど分かろうはずもない。

ネギの今後を考えれば決して悪いという訳ではない。

例えば今後父親関係の事で逆恨みしたり、今のネギではどうしようもない様な実力者が、襲うかもしれない。

だけど、本人は父親を捜す事を第一と考えている節がある以上、何時かは必要になる。だから結果的に思いっきり裏目に出たとはいえ、今回アスカが取った行動は性急であったこと、フォローをしなかった欠点はあっても大まかには間違っていない。結果的には大失敗だったが。

アスカとしてもネギには確かな才能があり、ちゃんと育てば将来一角の人間になるのは間違い無いと思っている。

話のスケールの大きさに戸惑う三人を他所に、アスカは微笑み口を湿らせるためにコーヒーを飲む。

「……事情は分かったけど、それでもうちは昔みたいに戻れんよ」

始めからそういうものだと知っていては計画が緊張感のないものになってしまうし、ネギも精神的に成長することができないようになるのは分かる。

ネギがそうした経緯や事情を知っても、だからと言ってしたことを容認することは木乃香にはできない。

ネギがした行為も、アスカの思惑も。

アスカの思惑はまだ納得がいけるものが多い。被害を最小限にして、彼女たちを別にすれば他人に被害を与えず、最終的に人的被害

は自分だけなのだから罰を受けたとも取れる。

暴走したネギも被害者という観点で見れば同情すべき点は多い。追い込まれなければ、もっとアスカがフォローしていればこんな結果にはならなかった。だが、追い込まれたとしてもあの行動をとったのは間違いなくネギ自身。

追い込まれればまた同じようなことをすると考えれば以前のようには戻れない。暴走したという前例が出来てしまったが故に。

「このちゃん……」

木乃香の言葉を隣りで耳にした刹那は心配気に見つめ、一人心の中で思い悩んでいる。

既に裏の事や護衛の一件はバレてしまっていて、昔みたいに仲良くできるようになったのが嬉しい反面、困惑してしまう。

自身が烏族と人間のハーフである事が引っ掛かり、昔通りに近づかれてもこちらは後一歩が近づけない。

それを解消したいのなら話すべきなのだが、刹那にはそんな勇気はなく、ならば知られる前に今まで通り、距離を取ろうと考えるもそんなことをしようものなら、泣かれる可能性が高い。

適度に距離を取りつつ護衛というのが楽なのだが、衝撃的な事があったので自分の所為で更に傷付かれるのは避けたい。

それに魔法と、裏と関わるということは秘匿されている世界だけに非合法な事は結構多く良い事ばかりじゃない。

同じ世界の住人になるのは確かに嬉しいし、傷ついている大切な親友を放っておけないが、逆に近付き過ぎて烏族のハーフだと知られたくない気持ちの二律背反を起こし、結局は現状維持を選択している。

（ごめん、このちゃん。うちの所為で危ない世界に足を入れさせてしもうた）

その結果が今の刹那には非常に重く圧し掛かり、どうしても木乃香に対して弱腰にしか出れない。

「最初に言ったように強制はしません。最低限心掛けてくれればこれ以上は何も言いません」

アスカの言葉に3人共安心してさっきまで緊張していた空気が弛緩し、各々飲み物で乾いた口の中を潤す。

少しの間、世間話をして和んでいたところにある話題が出てきた。

「えっと、アスカ。高畑先生も魔法使いなの？」

アスカが養生している間の事を話している時に明日菜は一人、ずっと考えていただろう一人の人間の名前を出して尋ねた。

よくよく考えてみればネギと知り合いで、学園長も魔法使いなら関わりがあって当然だろうと考える。そうでなくても少しの疑いを持つのは当然といえた。

「厳密には違いますが、そう思ってもらっても問題はありません。

魔法世界ではかなりの有名人です」

明日菜は憧れている高畑が魔法使いであることに戸惑う様子を隠せない。

「ずっと前から面倒見てもらってるけど、全然気付かなかったわ……」

「まあ魔法使いのことは基本的に秘密ですから、ネギ先生みたいに簡単にほいほいとバレるようじゃ、今頃世界中に知れ渡ってますよ」

幼少の頃から面倒を見てもらっていたのに高畑が魔法使いであることに全く気がつかなかったことに、明日菜は呆然とした様子で手に持つカップを見て、過去を思う。

ショックを受けている明日菜に言うのは忍びないが、アスカとしては首を突っ込んで欲しくないのだが修学旅行で木乃香と同グループなので放っておいたら関わりそうなので本人に能力の自覚ぐらいはさせておくべきかと思いつく。

例え知らなかったとしても魔法界ではかなり希少能力だから、狙われる危険と誰かに利用させる可能性がある以上損にはならないと思う。

「少し気になることがあるので明日菜さんに拘束用の魔法を掛けてもいいですか？　拘束用なので怪我の心配はありませんが、嫌なら拒否してくれて構いません」

「それは私に何か関係があること？」

真剣な表情で問われれば明日菜としても気になるもので、反対に何故かと聞き返す。

「そうです。何もなければそれでいいんですけど、あったら本人にそれを自覚してもらおうかと思いまして」

「……何のことか分からないけど、それは私に必要なことなのよね。ならお願い」

明日菜としてはアスカが何をしたいのかは良く分かっていないが、拘束用で怪我の心配もないというし、何より必要なことではないのかと感じたから逆に頼む。

アスカの言葉を信じるなら怪我の心配はないようなので、別に損にはならないだろうと考えたからだ。

その言葉を聞いたアスカは頷き、念のために認識阻害の魔法を二重に掛ける。万が一にでも外に漏れるようなことがないように。

「それではいきます。……チェーンバインド」

一声掛けてからアスカは明日菜に手をかざして魔法を唱える。

すると地面からアスカの魔力色である白で出来た魔力の鎖が伸び、明日菜を捕まえるように本物の鎖のように音を鳴らす。

デバイスなしでも、静止した相手、それも戦闘時でなければ行使するのは容易い。

ミッドチルダ式捕獲系魔法チェーンバインド。

魔力の鎖を生成し、対象を縛り付けることで拘束するバインド魔法。

この鎖の強度、射程、本数は術者の魔力に比例する。

発動や伸長の速度は優れないが、拘束力に長けており、特に動作が遅い複数対象の同時制止に適している。また、威力や精度を高める事で、軟質な対象であれば引き千切る事も可能となる。

対象は実体に限らず、限界を超えると本物の鎖が切れるように解ける。

まるでそれを証明するように、捕まえようとした魔力の鎖は明日菜を縛ろうと触った瞬間にパシンと弾かれるように消滅した。

「弾かれた!?」

「何よ、わたしは何もしてないわよ」

「へ～不思議やね」

「成る程、やはり……」

そのありえない光景を見た刹那は、彼女にしては珍しく動揺の声を上げ、何が起こったのか分からず明日菜どうしたのかという表情を浮かべていた。決して彼女が見たことのないはずの魔法に驚いたわけではない。京都神鳴流の使い手である彼女は自身が知らない魔法だろうと思ったからだ。

純粋に魔法が消滅したことに驚いている刹那と何もしていないのに魔法が解けたことに疑問符を浮かべる明日菜、よく分かっていない木乃香に納得した顔のアスカと、それぞれの反応をしている。

「僕が放った魔法を無効化されたんでしょうね。まあこれで確証は持てましたが」

一番適切な言葉で説明し、大事な話の為に座り直して居住まいを正す。

アスカの空気が変わった事に三人、特に視線を向けられている明日菜の体に緊張が走る。

「明日菜さんは魔法無効化能力（マジックキャンセル）、魔法界においても今までに片手で数えられる程しか確認されていない希少能力を持っています」

「魔法……無効化？」

「文字通り魔法を無効化する能力です。そのスキルは使い方次第で、魔法使いに絶対のアドバンテージを得られるが故に魔法使いからすれば放つ魔法全てを消される天敵と言える存在。裏を知っている刹那さんならそれがどれだけの脅威か分かるでしょう」

明日菜や木乃香より裏の事情を知っている刹那からして、先の光景を見た後だけにその能力がどれだけ異常かが良く分かってしまう。

「そんな訳で実は僕が庇ったのは無駄だったんじゃないかと思うわけですよ。実際に明日菜さんに触ったら障壁を壊されましたし。まあ、結局は結果論ですけど明日菜さんがそこまで気にしなくていいですよ」

「……気づいてたんだ」

病室で既に聞いていたが事件から明日菜が気にしていたのは無理もない。自分が飛び込んだ所為で状況が悪化したと聞かされればなお、気に病んでしまう。

「気づきますよ。そりゃあ」

当人たちは気づいていないが直後は眠っていて、復帰して明日菜たちと会ったのは一週間振りとなれば前後の変化に気づく。勘のいい生徒や教師も気づいて、事情を知っているアスカが気づかないはずがない。

「気にするなとまでは言いませんけど、気にしすぎる必要も有りませんよ」

「でも、私が飛び込まなければアスカもあんなことにならなかったのかもしれないし」

手を振って本当に気にしていない様子のアスカを前に、やはりそう思わずにはいられない明日菜の気持ちを落ち込むばかり。

「言ったでしょ。結果論だって。僕がいいって言ってるんですから気にしないで下さい。はい、こんな辛気臭い話はオシマイ」

落ち込む様子の明日菜に、何時もとは違って強引に話を纏めてしまったアスカは手を叩いてさっさと打ち切ってしまう。

気にしすぎる自分に気を使ってくれていることを察した明日菜は、

何時までも気にしていた方が逆に迷惑をかけるのだと察して、

「うん、ありがとう。アスカ」

笑みを浮かべてお礼を言った。

それに自分の内心を悟られたことが分かったアスカは珍しく頬を僅かに赤く染め、矛先を変えるように話題を変えた。

「そういえば明日菜さんって昔の記憶がないんですよね。能力があると推測した時点で調べさせてもらいました。ですが、許可を得ずに勝手に調べて申し訳有りません。謝罪します」

「え”！？　あ、うん。必要だったから調べたんでしょう。別に謝らなくてもいいわよ」

いきなり話が変わり、自分の昔を調べられて流石にいい気はしないが、そんな能力があるなら気になって調べるのも仕方ないかという思いもあり、次からはちゃんと許可を取ってから調べるようにと明日菜は少し複雑そうに話す。

疑問に思った経緯を聞けば気になっても仕方ないと思えたからだ。同時にネギの騒動ばかりに巻き込まれた明日菜に同情を覚える。

明日菜が幼い頃の記憶がない事を聞いた刹那は、アスカが言った意味を瞬時に悟ってしまう。

裏でも有名人である高畑・T・タカミチが何処からか連れてきて、過去の記憶が無い。高畑の経歴を顧みて、何やら不自然な何かを感じ、明日菜が魔法使いが起こした事件の被害者なのかもしれないと

思った。

「分かったのは8年前、高畑先生に連れられて麻帆良に来たということだけ。それ以前の物は当たり障りのない綺麗なものです。もしかしたら魔法使いが起こした事件に巻き込まれ、隠蔽工作による記憶消去を受けたのかもしれません。もちろん今後の事を考えて忘れたほうが良いと判断したのかもしれませんが、ここで矛盾が生まれます」

「矛盾ってどういう事なん？」

アスカは刹那が考えていたのとほとんど同じような納得できる理由を述べるが、最後の言葉にそこで今まで黙って聞いていた木乃香が不思議そうに尋ねる。

「学園長や高畑先生は間違いなく明日菜さんが魔法無効化能力（マジックキャンセラー）を持っていたと知っていて、記憶まで消したのなら魔法使いを近づかせるのはおかしくありませんか？　しかも二人続けて、特に秘匿意識の低いネギ先生を同じ部屋にするなんてバレる可能性が高いじゃないですか。実際ネギ先生の場合初日に明日菜さんにバレてますし」

「確かにそうやな、記憶まで消したんやったら関わらせるんはおかしいし、矛盾しとるな」

「そ、それは……」

「関わらせたくないのなら遠ざけるべきやし、裏の事を知られたくないうちにしても明日菜と同じの筈や」

木乃香の言った通り、何らかの理由で記憶を消されたのにまた関

わらせるなんて考えてみれば変な話だ。

邪推すると明日菜の能力を利用したいのかと思ってしまう。

親が関わらせたくないと言う木乃香の事にしても同様で、真に関わらせたくないと考えているのなら遠ざけるべきである。

西の長の娘にして東の重鎮の孫である木乃香と同室にしたのは護衛がしやすいようにとも考えられるが、そもそも狙われる立場の木乃香と同室の時点で一般人と考える人間は少ない。

これではまるでわざと関わらせるために同じ部屋にしたのでは…

……と三人が同じ考えを抱く。

明日菜からしてみれば当事者ということで、何時の間にか自分が大変な立場にいる事を嫌でも自覚せずにはいられない。

「勿論、記憶を消したのは明日菜さんの幸福のためにだと思いますよ。二人とも明日菜さんを大切に思っているのは間違いないですし」

慌ててアスカが言い訳のように言うが、高畑の事にしても、まるで全部知っていて無意識に関わらせようとしているみたいで、そんなことはないと思っても明日菜の中に不審の芽は根付いてしまうのは避けられなかった。

「魔法無効化能力（マジックキャンセラー）は裏の人間から見れば危険であり有益です。もし露呈すれば裏の人間は明日菜さんを最悪の場合殺そうとするかもしれません。どちらにせよ平穏な生活には二度と戻れないことだけは確かです。裏と関わってしまえば望む望まないに関わらず、この先の人生にそれは大きく影響してきます」

「じょ、冗談でしょ？」

明日菜は目を見開いたまま固まり、冗談だと言って欲しいその声は引き攣り顔が青ざめていることから嘘を言っていないということが分かってはいるようだった。

そこまで気にしなくていいと、アスカは気楽に流そうとするが明日菜からしてみれば堪ったものではない。

顔を青くしている明日菜を見て、木乃香と刹那は心配気に見つめる。

「知られてしまえば明日菜さんは好もうと好まざるとも魔法には関わる事にはなる可能性が高い」

それは明日菜だけでなく木乃香にも言える事だ。力があれば望んでいなくても注目されるというのはある意味当然。

そうでなくてもアスカのように騒動に巻き込まれるタイプがいるが、こっちは例外。普通はその価値を知らずに狙う人間はいない。狙われるにはそれに相応しいだけの理由があるのだから。

「外部に明日菜さんの情報が漏れていないのは間違いないみたいですし、今は気にしなくてもいいです。麻帆良にいる限りは他の魔法先生も守ってくれますし、そこまで深刻に考えなくても大丈夫です。どうしても気になるなら修学旅行後にどうするか決めましょう」

「そ、そうね」

流石にアスカも脅しすぎたかと思い、頭を下げながら言うと明日菜も考え過ぎかと少し安心する。

結局は問題の先送りなのかもしれないが、心配事があっては身近に迫った修学旅行を楽しめないからだ。

「そんな訳で修学旅行を楽しみましょう。あ、木乃香さんだけ少し残ってもらえます？　ちゃんと女子寮まで送り届けますんで」

アスカが木乃香だけを残るように頼むと、少しだけ刹那との間で問答があったがアスカを信用しているため二人は先に帰って行った。

「うちだけ残すなんてなんの用なん？」

二人を見送り、木乃香の疑問に答える前に残っているコーヒーを全部飲んだアスカだったが、存外に冷えたコーヒーは不味く、顔を顰めた。

「そうですね。正直、気が進まない話しなんですが……」

アスカは本当に気が進まないと思いながらも口を開いて話し出す。

第五十一話　準備を始める少年　後編（後書き）

どうして連続投稿の告知を出してしまったのだろうか……。

本当なら年末まで時間をかけて投稿してストックを増やすつもりだったのに、夜中のハイテンションに身を任せたらいけませんね。

まあ、告知してしまった以上はちゃんと連続投稿しますが。修学旅行編の修正が終わったので昨日なんですけどね。なんとなくこちらに掛かりきりになって更新が滞りそうな予感。

次回更新は明日午前０時です。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

第五十二話　誕生日と少年（前書き）

連続投稿第三弾。

修学旅行編前の最後のお話です。

連続投稿だと書くことが……。

文字数は１５２０８字と前回同様に多めです。

どうぞ！！

第五十二話　誕生日と少年

原宿とは厳密に言えば表参道の北側を指す地名で、南側は穏田（おんでん）と呼ばれるのだが、現在は穏田でも原宿と呼ばれることが多く、「原宿」の名を入れた施設も多く見られる。

尚、原宿と呼ばれているエリアは、１９６５年の住居表示変更前まで、「原宿」「竹下町」「穏田」という三つの住所表記をしていたが、変更後は「神宮前」という住所表記で統一されたため「東京都渋谷区原宿」という住所は存在しないが、南北合わせて原宿と呼ぶのが今では普遍となっている。

それはさておき、この地区は様々な若者向けの施設が昔から立ち並び、それ故に先端流行発祥の地として日本、そして諸外国に知れ渡っており、まさに若者の街と言える。

よって、忙しそうに携帯と話すサラリーマン、夫婦や家族連れで楽しそうに歩く者、友人同士で笑いをあげる若者、多くの観光客等で賑わうのは必然であった。

都心のビルの谷間、区切られた空は青く湿度は低い。都心で数えるほどしかない爽やかな晴れ間で休日であることもあり、いつもよりも多様な人々が行き交う。

修学旅行直前の週末、この街中を修学旅行に持っていくものを買い込むために３－Ａの生徒、三人が歩いていた。

修学旅行だからといって事前に買出しをする必要はないと思うのはずぼらな男子だけで、女子ならばオシャレに気合を入れるのは当

然の事である。

四泊五日の旅行中には何度か班別の自由行動の機会があり、その時には私服行動も認められているので、この機に乗じて服を新調しようと思うのは、オシャレに熱心な女子中学生には当たり前の事で、中には下着にまで気合を入れる者もいるだろう。

もちろん買い物だけなら麻帆良の中で十分に事足りるが、例え同じ品が置いてあったとしても、それぞれ街の空気が違う。

普段と違う空気に触れることは、退屈が最大の敵の一つである少女たちにとって必要なことであった。

「やっほ――――っ！　良い天気♪」

活気溢れる原宿の街に、前髪をヘアピンで止めた椎名桜子が背筋を伸ばしながら、底抜けに明るい一際元気な声を放つ。

まるで山彦（やまびこ）を発生させようとしているような声は、ビル風にも負けずに周囲に散り、雑踏の音に紛れてすぐに消える。

桜子の隣には同じくチアリーダーの二人、ジーパン姿の釘宮と、キャップを被った柿崎の姿もある。

「ん―、ホント♪」

桜子の言葉に、美砂もこういった天気が良い日はそうないだろうと同意して頷き、無言だが一緒に歩いている円も同じ気持ちだ。

「ほにゃらば、早速カラオケ行くよ～～～っ♪　９時間耐久～～～

♪」

「よ～～～っし！　歌っちゃうよぉ、いくらでも！」

「こらこら違うでしょ。今日は明後日からの修学旅行に自由行動日で着る服を探しに来たんでしょ。予算も少ないんだから何時もみたいにテキトーに遊んでると……」

余りの気持ちのよさに暴走しかけている友人達を止める為に円が真顔で突っ込むが、

「ゴーヤクレープ一丁～～～♪」

「あ、私もー」

「話し聞け――ッ！　そこの馬鹿二人!!　もう怒った！　私も食べるっ！」

最早遊ぶ気満々の二人には馬耳東風で全く話を聞かず、ブツブツ言う円を放って何時の間にか近場のクレープ屋に飛びつき、買い食いを始める始末。

結局全く話を聞かない二人に切れた円も交えて、冗談で頼んだゴーヤクレープの苦さに驚き、ウィンドウショッピングで可愛い服を見つけて騒ぎ、ナンパしてくる男を一刀両断しながら何時もの通り遊び始める。

今時の少女らしい言動のまま町を歩く三人は「女三人寄れば姦しい」と言う諺をそのまま体現するように、そのままワイワイと雑談を交えつつ順調に資金を減らしていく。

「あ―ん、楽しい。私達普段、麻帆良の外に出ないからね―」

「――ん？」

「どしたの、柿崎？」

賑やかに街を歩く彼女達だったが、美砂がある一行を見て動きを止め、不思議そうに彼女を見た円がその視線の先を見ると、ピシリと彼女も固まった。

「ち、ちょっとあれ、アスカ先生と木乃香じゃない！？」

「ホントだ――……こんなところで何やってんだろ」

驚いた三人だが、思わず担任補佐であるアスカと同級生の木乃香に見つからないように、道端で新聞を立ち読みしているサラリーマンらしきスーツを着た男性の後ろに隠れて身を潜める。

「なな、コレなんかどやろ、アスカ君」

「いいですね。よく似合いますよ、木乃香さん」

「あんもー、アスカ君たらちゃうてー」

「いやいや本当ですよ」

流石に迷惑そうにしていた男性に謝りながらそこを離れ、改めて電信柱と大きめのマスコットの裏に隠れて二人を視界に納める。

三人の視界の先には私服姿の木乃香とアスカが楽しそうに話しながら洋服を選んでいる。

そして木乃香が手に取った一着の服を両手に広げ、似合うかどうかを聞き、アスカが似合うと褒めた途端、木乃香の顔が嬉しそうに綻ぶ。

その光景は、人種の違いがなければ仲の良い姉弟と見えなくもないが、アスカの身長が年齢の割に背が高いので、まるでデートのような様相をみせる二人に、三人は一様に顔を付き合わせる。

「「「これって、もしかしてデートじゃないの……？」」」

三人共同じ事を思ったのか揃ってその単語を口にし、頭をつき合わせて事の真偽を話し合う。

「で、でもアスカ先生１０歳だし……ちょっと姉弟感覚で買い物に来ただけじゃ」

「それでわざわざ原宿までは出てくる？　アスカ先生はただの１０歳じゃないよ。偶に年齢を偽ってるって思う時もあるし」

「それに二人とも服装に気合入れすぎだよ。特にアスカ先生の服、全部ブランド物だよ！！」

円の意見を美砂が否定して、桜子が二人の服装の気合の入れ具合、特にアスカの服等を見て一般的な金銭感覚を持っている彼女は驚きを露にする。

木乃香が余所行きの何時もよりかは上等な服を着ているのはいい

としても、アスカは黒のレザーブルゾンに白のシャツを着て、下のジーンズは知る人ぞ知るというタイプのビンテージ物、幅広ベルトのバックルはシルバーアクセを流用しており、頭から足先まで着ている物から装飾品に至るまで全てがブランド物ばかり、果たして全部を合わせたらどれだけの金額になるのか。

オシャレに敏感な三人は、アスカの普段のスーツもブランド物で高い事を知っているが、１０歳の少年である事と双子の兄であるネギを見れば、同じくスーツだけは高級なのを考慮して親か誰かからの与えられたのだと思っていたのだ。

装飾品や鞄も高級なものを使っているアスカと、一般的な物を使っているネギとの違いは良く見れば分かったのだが、流石にそこまでは見る機会もなく、私服姿を見るのも初めてだから驚くなと言う方が無理だ。

「あ―わわわ、たた大変かも―！　生徒に手を出すなんて、バレたらアスカ先生クビだよー！？」

驚きで天元突破した桜子が飛躍した言葉を口にしたので、色々と三人の頭の中に浮かんでくる教師と生徒の禁断の恋愛模様を妄想しつつ、ワーワーギャーギャーと騒ぐ。

「と、とにかく当局に連絡しなくちゃ！！」

妙にリアルにアスカが木乃香を押し倒すシーンを想像してしまった三人は、流石にそれは色々とマズイと美砂が携帯電話を取り出して、木乃香の同室の明日菜に電話を掛ける。

「ととっ、当局って！？　職員室！？」

「バカ！　んなとこ連絡したら、即クビ&退学でしょ！」

先程の驚きが残っているのかまたぶっ飛んだことを考えた桜子を円が宥め、美砂は木乃香がいないので昼間で寝ていた明日菜に証拠写真を当の本人達にバレないように撮影して送信したが、明日菜は見ても信じずにさっさと携帯電話を切って二度寝してしまった。

「も、もしもし明日菜～～～っ！？」

「あんもー、信じてないのかなー明日菜」

「あっ、二人が動き出した！　早くつけないと！」

美砂が明日菜を呼び、桜子は電話が切れたことから証拠写真を送っても信じていないようだと考える。

その間に二人は洋服屋を離れ、何も袋を持ってない事から服は買わなかったようで円が二人を急かして後を追う。

修学旅行が明後日に迫った休日、アスカは木乃香と二人で原宿に来ていた。

そもそもの発端は、木乃香から掛かってきた一本の電話が始まりである。

アスカの休日は、修行＋研究＋開発＋ｅｔｃと影分身をフルに活用して過ごす事が比較的多い。

もちろん完全休養日を決めて休んだり遊びに行くこともあるが、その日は朝も早くから本体は別荘に入っていた。分身の内の一体が代わりに修学旅行の準備をしていたのだが、アスカの携帯に木乃香から電話が掛かってきて、明日は明日菜の誕生日との事なので、そのプレゼントを一緒に買いに行ってほしいと頼まれた。

本当なら刹那と一緒に行くつもりだったのだが、急に学園長に呼ばれて何時終わるか分からないのでその代役というわけだ。

刹那が学園長に呼ばれたのは修学旅行の件で、明後日に控えているため断ることもできず、明日菜と親しくしているアスカにお鉢が回ってきたということだ。

やることは多いが特に断る理由もないので了承して、電話を切った後に別荘に入って修行していた本体に伝える。

分身と交代して本体は別荘を出てシャワーで汗を流し、余所行きの服を着て出かけた。

服に関してアスカの美的センスは悪くないのだが、ほとんど頓着しないから実用品を好む。だが、それを認めない玉藻が服から装飾品に至るまで全て一級品のブランドで誂えている。流石に考えるのがめんどくさいという理由だけで、寝巻きから余所行きの服までジャージだけですまそうとするのだから玉藻としても許容できなかったのだ。殆ど母親感覚である。

幸いにも金は今までの多種多様な仕事の報酬と自サイトで売って

いる魔法薬で貯蓄は多い。

贅沢をする性格でもなく、大抵の物は能力や技術で自作できる器用さがあるので実生活において教師の給料でも余る始末。最近はデバイス作成のために使っているが、それでもかなりの余裕があるので玉藻が悪乗りして最高級品の物を揃えてしまったのだ。

アスカ本人に自覚はないが、全身ブランドの物で包んでいるので注目を集め、更にそれを普通に着こなしているので、目敏い女性は木乃香に羨望の眼差しを向けていた。本人が嫌味なく着こなしているので余計に衆目を集めていた。

木乃香も最初にアスカを見た時に、その格好いい系の服装に見惚れてしまった。

木乃香自身、昔からブランド物等を見慣れているから目はかなり肥えている為、着ている服の価値を一目で見抜き、珍しく羨望の眼差しを向ける周りに誇らしげにしている。

話は変わるが原宿に来るのは初めてのアスカは、その人の多さに色々と驚いていた。

色んな国を周ったが、日本ほど人の密集率が多い国はない。

原宿は日曜で人も多く、ショウケースからも活気が溢れているようで、その混沌とした力強さと洗練されたお洒落さが鬩(せめ)ぎ合うこの街はとても新鮮なものだった。

若干とはいえ周りの熱に当てられてアスカも高揚し、木乃香と一緒にウィンドウショッピングを楽しんでいる姿は、アスカの年齢の

割りに高い身長から察して誰の目にもデートであることは否定できないだろう。

勤務時間外なので「先生」も敬語も必要ないという事を事前に伝えてあるので、事情を知らない者から見ればそう見えても仕方が無い。

時間をおいてアスカも自分の浮かれ具合に気がつき一人で赤面し、木乃香には理由が分からずに疑問顔であったが上手くエスコートしている。変なところで紳士ぽいところはイギリス生まれだからか。

（なにやってんだか……）

刹那の代わりの護衛も兼ねているので辺りへの警戒も怠る事なく、何だかんだで服屋を出て歩いている途中で、後ろから覚えのある気配と視線を感じたアスカは、自分のクラスの生徒のものだと感づいていたが危険もないだろうと無視する事にした。

「これなんてどうやろか？　明日菜に似合うと思うんやけど」

「うーん……悪くはありませんけど、少し早い気がしますね。明日菜さんもそうですけど木乃香さんも美人ですから、少しオシャレするだけで充分だと思いますよ」

「ややわぁ、照れるなー」

服屋を出て目に付いた次の店に入り、目に付いた木乃香が指差す物は口紅だが、中学三年生では少し早い気がしたアスカは、思った事を素直に言いながらも自覚なく褒め、美人だと褒められた木乃香は頬を赤く染めて照れる。

アスカはこういう女性を褒める仕草が妙に形になっていた。誰かに指導でもされたのだろうか。

「身に付ける物ならイヤリングとかなんですけど、明日菜さんはしてませんから髪留めやリボン……は不味いですね」

「明日菜がつけてる髪留めは、想い人からの贈り物やからな」

口紅が売っている店から離れてアスカが何を買うべきかで髪留めやリボンでもと考えるが、明日菜がしている髪留めがどういう物なのかを思い出して除外し、別の店に向かう。

「あ～、これなんかええかもな」

幾つかの店を回り、そう言って木乃香が手に取ったのは今の流行りからは外れているが明日菜が好きな曲が流れているオルゴール。

「オルゴールですか？　明日菜さんの趣味とは思いませんが」

「これに明日菜の好きな曲が入ってんねん。どうかな？」

オルゴールが明日菜の趣味とは思えなかったアスカが否定的な意見を出すが、木乃香の話を聞いてそう言えばとそうだと思い出す。

値札を見ると中学生のお小遣いくらいでは厳しいものがあるが、一番今までピンときた物のようで木乃香も悩んでいる。

アスカとしては一生徒を優遇するわけにもいかないので、精々アドバイスするぐらいしか考えていなかったのだが悩む木乃香を放っ

ておくことも出来ない。

結局アスカは女子寮に住んでいた頃に世話になったお返しだ、とこじつけっぽいが自分を納得させる。

「高いみたいですから僕も半分出しますよ。二人からのプレゼントということにしましょう」

「……ええの？」

折衷案と言うことでお金を半分出す事を伝え、修学旅行前なので全額を一人で支払うことに悩んでいた木乃香にとって在り難い話ではあるが、教師としてアスカがどう在ろうとしているか知っているが故に躊躇してしまう。

「まあ女子寮に住んでいた頃に世話になったお返しってことで。他の生徒達には内緒にしてくださいね」

「うん。ありがとな、アスカ君」

人差し指を立てて口元に持っていってみんなには秘密だと笑うアスカに、木乃香は自身の信条を曲げてくれる心遣いに感謝する。

そんなどこの甘酸っぱい青春を謳歌しているのかと突っ込みたくなるような二人を見て、後をつけていた三人が砂糖を吐いていたのだがあまり関係の無い話である。

それから費用を折半してオルゴールを買い、綺麗に包装されてアスカが持っている。

「……ん？」

そろそろ昼かなという時間、どこかでお昼を食べようかと店を探していた時にアスカがシャッターの閉まった店の前で露天を開いているアクセサリー屋に目を留めた。

正確にはその前にいる数人の高校生らしき少女たちの一人に目線が釘付けになった。

（あれは……）

アスカは露天に近づき、珍しい様子のアスカが気になってそれに付き従う木乃香。

（そうか、彼女は上手くやっているようだな）

少女たちとすれ違いざま、元気にやっているだと分かって安心した。彼女のことは気になっていたし、偶に様子は見ていたが実際の目で見たのは初めてだ。

突然に機嫌の良くなったアスカとそれを疑問に思った木乃香の二人は、少女たちと入れ違いになるように露店の前に出た。

「いらっしゃい！　恋人かい？」

店を開いていた少しチャライ雰囲気はあるが、中々に男気のある若い男性がにこやかに笑って二人を迎え入れ、人種や背格好から兄弟ではなく、かといって恋を知る年頃らしき少年少女が二人っきりで街中を歩いているのだから、そう思ってしまうのも無理からぬことである。

年の割に身長が高いと言ってもアスカの年齢を知れば別ではあるが、アスカ自身の精神の成熟さもあって初見で見破れる者はほとんどいないので勘違いしても仕方のないことである。

簡単に流したアスカは別にして、木乃香は言葉を理解する一瞬の間をおいて頬を赤く染める。

そんな木乃香を見て笑う男性とアスカ。

二人に揶揄(からかわ)れた木乃香が膨れるのは無理は無かった。その様子ですら男性とアスカに微笑を浮かばせるほど可愛らしいものであったのは秘密である。

「こりゃ参った。少年、ご立腹のお嬢様のためになにか買って行くといい。サービスしとくぜ」

そのチャライ雰囲気とは違い、並べられている商品の作りはかなりの上質であった。

「そうします。なにかお気に入りはありますか？」

「これなんてどうだい。お奨(すすめ)めだぜ」

芝居がかった男性の商業精神に満ちた進めに敢えて乗ったアスカがお気に入りはあるかと問い、初めから決めていたように並べていた商品から一つのイヤリングを差し出した。

水晶で作ったらしい透き通ったイヤリングは宝石としての価値はそう高くないだろう。

「……綺麗」

物が物だけに値段は安いが木乃香は大層気に入ったようだった。

「じゃあお兄さん、それ頂戴」

「毎度あり♪　御馳走様お二人さん」

そんな二人をクスクスと眺めながら、男性はアスカからお金を受け取りながら後半部分を誰にも聞こえないような声でこんな事を呟いていた。全てアスカの耳には聞こえていたのだが、藪蛇（やぶへび）になりそうなので突っ込むことは無かった。

木乃香は受け取ったイヤリングを大事そうに鞄に入れ、丁度昼の時間になったので近くの喫茶店に入る。

軽食を頼み、木乃香がふざけて一つのジュースを二本のストローで飲もうと言い出すが、流石にこれは断り、自分で頼んだコーヒーを飲む。

後をつけてきている三人の目もあるので変な事をするわけにはいかないからだ。

まあ、教師と生徒が休日にデート紛いの事をしていて、説得力はないのは自覚しているが、これ以上は不味いと考えたのだが既に手遅れだった事を知るのを、この数時間後に知ることとなる。

二人の後を追って喫茶店に入り、木乃香が頼んでウェイトレスが持ってきたジュースを見た美砂はニヤッと笑って携帯を取り出して、女子寮のロビーで昼食を取っていた明日菜に電話するが信じていないので反応は芳しくない。

『今、写真送るから待っててて！』

今度こそと美砂は、ウェイトレスが気を利かせたのか二人の間にジュースを置いて、二本の内の一本に木乃香が口をつけた瞬間という、何とも誤解を招きかねないタイミングで撮影して、撮った写真を明日菜の携帯に送信した。

『ブッ！？』

『何ですのこれは～～～～っ！』

「ひあっ！」

この時、明日菜が吹き出したのは別にいいとして、食事中に偶々出くわしたあやかが美砂の送った写真を見てしまったのだ。

美砂が突然携帯から響き渡ったあやかの大声に目を白黒させながらも、携帯を落とさなかったのは幸運と言える。

『３－Ａクラス委員長として命じます！　先生と生徒の不純異性交遊は絶・対・厳・禁！　断固阻止ですわ！！　柿崎さん、釘宮さん、桜子さん！　あの二人が必要以上に接近しないように見張っててください！」

「え～～！？」

「そんなぁ～。応援するのが私達の役目なのに～～～」

クラス委員長としてのあやかの命令に、チアリーダーとして二人の恋を応援する事を考えていたところなので不平不満を口にする桜子と美砂、円は何も言ってはいないがやはり不満そうな顔をしている。

ここら辺はお祭り好きの３－Ａの気質が濃く出ているので、伊達に2年と少しの間あやかもクラス委員長をしているわけではない。

――――――ピロロ♪

その時バックの中の円の携帯がメールを受信し、携帯を取り出してメールを確認するが口元を引き攣らせる。

円は黙って携帯の画面に表示されたあやかの憤怒の表情を撮った写メの映像を二人に突きつけた。

『よ・ろ・し・いですわね！？』

「はふっ……！　り、了解いいんちょ！！」

直ぐにでも液晶を突き破って噛み付いてきそうなあやかの迫力と、携帯から聞こえてくる地獄から響く怨念のような声に、恐怖に屈して了承の意を返す美砂。

美砂の言葉を聞いて、あやかは現場に向かう事を伝えて電話を切

る。

「もう仕方ないなぁ」

「じゃあ正体がばれないように……」

半ば脅されたとはいえ、お祭り好きであり恋愛話が大の好みである女子中学生としてはあやかに命令されたと言う大義名分もできたので、困ったと言いながらもその顔は緩んでおり、言うが早いが三人はパーティーグッズ売り場に駆け込んで着替える。

「「「チアリーダーの名に賭けて！いいんちょの私利私欲を応援よ！」」」

数分後、一世代前に流行ったコギャルの如くセーラー服に身を包んで顔黒にした美砂と桜子、そして何故か一人だけ学ラン姿の円の姿があった。

こうして勘違いしたチアリーダー三人娘による、デート妨害大作戦が始まったのだ。

昼食後、学園長の用事も終わっただろうと考えて刹那に合流するか電話で聞いてみたのだが、そのまま真名達と打ち合わせをするためにできないということで、その後も二人で遊ぶことになった。

明日菜へのプレゼントはもう決まっているのだが、二人は目に付

く店があれば覗き込み、何も買わず出てくるのを繰り返して今は立ち止まってショーウィンドウの中を覗き込んだ。

「なー、アスカ君。これなんかどやろ？」

「ペアルックはちょっと恥ずかしくないですか」

見ているのはデザインがほとんど同じなペアルックの洋服のようで、肩から太もも辺りまでのマネキンに着せられている。

「あーっ！　コレいいなー、買ってー釘男君！」

「ははは分ったよ。おーい店員さんこれ一組！」

「うひゃあ！」

いきなりセーラー服を着た女子校生と昔風の学ランと学帽を着たカップルらしき二人組みが、木乃香を突き飛ばす。

「おっと……」

木乃香の隣りにいたアスカが突き飛ばされたのを受け止めている間に、カップルらしき二人組みは会計を済ませ、またダッシュで走り去って行った。

気配と変装しても二人組みが誰か分かっているので、行動が理解できないから疑問符を浮かべながらも、別の店で商品を見ていると、また別のセーラー服を着た女子校生に先に買われてしまった。

（何をやりたいのだろうか、あの三人は……）

先程から買う気はないのだが妨害してくる美砂、桜子、円の行動に、もうプレゼントは買い終えているので特別支障は無いのだが、元気でも有り余っているのだろうか、とその奇行の理由を考えるが如何も理解できない。

だが、こちらの買い物を妨害して代わりに買って邪魔をしているのだけは分かる。

折角楽しんでいるところに邪魔が入ったので、少しばかりの悪戯心を出して利用しようと考えても別にいいだろうと一人ほくそ笑んでいた。

三人娘はデート妨害大作戦を開始したのだが、直ぐに暗礁に乗り上げてきた。

「ねぇ美砂。これ面白いけどお金かかるよ～」

「後でいいんちょに請求すればいいでしょ。それより次いくよ！」

最初は上手くいっていたのだが、何故か途中から二人が見ているのは一点物やブランド物ばかりで、必然的に彼女達が横から無理矢理に奪って買うのでかなり財布を直撃している。

そして三人は全く気付いていなかったが、二人とも敢えてそういう店の商品を見ているだけで何も買う様子がない。

基本的にいろんな商品を見て談笑しているだけだし、横から突き飛ばして商品を奪う時も、アスカがさり気なく木乃香の手を引いて避けていることに気がついていない。

それで余計に二人の間ににこやかな雰囲気が流れているので、デートを邪魔するつもりが本末転倒だろう。

そんなある意味均衡状態を破ったのはアスカだった。

装飾品の店に入って商品を色々見ていた木乃香に声をかけたかと思うと、一人で離れていく。

アスカが離れた後も暫くは商品を物色していた木乃香だが、個人的に気に入った物があったのか手を伸ばす。

「あ、木乃香が動いた?!」

「あー！　コレコレ下さい!!」

まず桜子が言葉を発して、条件反射的に美砂が妨害のために木乃香を突き飛ばして横取りし、これで札がなくなってしまうことに心の汗を流しながらお金を支払う。

「痛っ!?」

今日何度目とも知れない妨害にあい、さっきまで手を引いて避けてくれたアスカがいないので突き飛ばされてしまった木乃香はもんどりうって倒れる。

「大丈夫ですか、木乃香さん！？」

そこにトイレに行く為離れていたアスカが戻ってきて倒れている木乃香を心配そうに覗きこむ。

「痛っ、あかんわ。足ひねってもうたかも」

木乃香は立ち上がろうとするが、足首に怪我をしたのか一人で立つことができず、アスカの方に倒れこんでしまう。

簡単な触診をして怪我の具合を確認し、捻挫ではないことを確認しながらしばし考える。

「……仕方ない。もうプレゼントは購入出来た事だし……木乃香さん、少し我慢して下さい」

「ひゃっ！」

魔法で治すかともアスカは考えたが衆人環視の中でやるべきではないと思い、木乃香に荷物を預けて一言入れて、肩を支えながら腰を落として両膝を抱えて木乃香を抱きかかえる。

日頃から裏の関係者ですら異常といえる程に鍛えているアスカにとって、女の子一人を抱えることなど造作もなく容易いことだ。

アスカにも人並みの羞恥心があるので、恥ずかしい気持ちはあるが背に腹はかえられず、自身が恥ずかしがると木乃香にも気を使わせてしまうと考え、強靭な自制心を発揮して一切顔に出していない。

突然に生まれた浮遊感に木乃香は驚きの声を上げ、その意味を理

解したと同時に顔所か全身を真っ赤にして恥ずかしがってしまう。

その体勢は女の子が一度は憧れる世に言う『お姫様抱っこ』である。流石に憧れてはいても衆人環視の中でやられれば羞恥の感情が先に来てしまうのは無理からぬ事だ。

隠れている三人が大慌てになっているが、二人には関係の無い話である。

「何処か休めるところに行きます（怪我を治さないといけませんから我慢してくださいね）」

「う、うん」

ポーッと顔を真っ赤に染めた木乃香を抱えたままアスカは、周りの賞賛、奇異、嫉妬の視線を受けながらショッピング街を後にした。

すっかり傾いた太陽に照らされて辺り一面は夕焼けの色に染められていた。

ショッピング街をお姫様抱っこしながら抜け、アスカが木乃香を治療できる場所として見つけたのは国立代々木競技場第一体育館前の階段で、人気もなく傾斜の緩やかな階段で腰を落ち着けて休むのにもうってつけと考えたからだ。

階段の一番下の段に腰掛けさせて木乃香の前に座り、万が一の事

を考えて軽い認識阻害の結界を張りながらアスカ自身の体で茂みの中に身を潜めている三人の視界を隠して、医療忍術【掌仙術】で患部に手からチャクラを送り込み、その怪我した部位の治癒力を高めて飛躍的に回復させる。

「どうですか？　もう治ってると思いますが」

「あ、うん……もう大丈夫や。これも魔法なんか？」

先に結界を解いてから、治療のために患部に当てていた手を放してアスカが木乃香に具合を聞き、怪我の具合を確認するようにゆっくりと立ち上がるが痛みが無いことに驚く。

茂みの中で隠れている三人は、シチュエーション的にキスでもするのかとエキサイトしているが、全てアスカに聞こえている。

これも魔法なのかと疑問に思って木乃香が聞くがアスカは笑うばかりで肯定も否定もせず、突然振り返って別の方向を見る。

「コラ～～～ッ！！　お待ちなさい～～～～ッ！！」

「あれー？　いいんちょにアスナまで」

「そうですね」

アスカが見ている道の向こうから、どうも怒り心頭という顔をしているあやかと困惑顔の明日菜が凄いスピードで走ってきたのだ。

汗をかいて息を切らしているあやかと息を全く乱していない明日菜を見て、体力というか運動神経の差が出ているなと、アスカはそ

んなことを考えていた。

この時点でアスカは、あやかの様子と三人娘の行動から何か勘違いをして、妨害でもする命令でも出して自らも原宿にやってきて、明日菜はその巻き添えかと限りなく正解に近い答えを出している。

「どうしたんや、二人ともそんなに慌てて？」

「ハァ……ハァ……私たちは……その……」

と、木乃香が二人に朗らかに問うが、息を乱したあやかが明らかに様子の違う二人に勘違いしたのではないかと考え、ばつが悪そうに口篭る。

「あちゃー。もしかしてバレてたんか？」

「少し違うと思いますよ。そこの草むらに隠れている三人が原因でしょう。出てきなさい」

「「「はぅ！？」」」

明日菜にバレたのかと思った木乃香の言葉に、大体の予測がついているアスカが最初から隠れている場所に向けて声を掛けると、気付かれているとは思っていなかった三人は驚きの声を上げ、茂みを掻き分けて気まずそうに出てくる。

恐らく彼女達が話が拗れた根源だと予想をつけているアスカは美砂、桜子、円に向き直る。

「で、何でずっとつけてきていたんですか？」

「「「ばれてるっ！？」」」

アスカが溜息をつきつつ言うと三人はギクリと身体を震わせ、あやか、明日菜、木乃香の三人に見つめられて口を開かないワケにもいかず、代表して美砂が口を開いた。

「えっと、いつから気付いてたの？」

「最初からです。というかあれで変装していたつもりですか」

「「「そんな……」」」

本当は気配できちんと分かっていたのだが、実際に変装と呼べるものでもなかったがアスカは、そんなことを臆面にも出さずに、嘘はついていないが全て真実を言ったわけでもなく、端折ったものを伝える。

三人娘は最初から変装を見破られていたことに気付き、膝をついて項垂れる。

「さてどうします、木乃香さん？　流石にこの様子では、黙っているのは無理そうですけど……」

「こうなったら、しゃあないな」

アスカがこのまま黙っているままでいることは無理だろうと話し、木乃香にどうするかの選択を任せる。

木乃香は計画が失敗してしまった事を残念がりながらも、確かに

ここで無理に隠すのは不自然すぎるから、渡すとしたら今しかないだろうと考える。

明日菜とあやかは、『やはり二人は付き合っていた?!』等と考え、それを伝えられるのかと目に見えて狼狽え始める。

慌てている二人の反応を特に気にせず、木乃香は手に持っていた紙袋からラッピングされた小さな箱を取り出し、明日菜に差し出した。

「ハイ、明日菜。一日早いけど4月21日の誕生日、おめでとう」

「……へ?」

「「……」」

と、そこで二人の買い物の目的が明かされ、プレゼントである明日菜の好きな曲が入っているオルゴールをお祝いの言葉と共に渡す。

あやか、桜子、美砂、円は木乃香の余りに予想外の言葉に目が点になり、あやかも一文字出す事が精一杯。

突然の事で呆気にとられて包みを受け取ったまま硬直している明日菜も同じで、本人もすっかり忘れていたことだった。

「今日は朝からずっとアスカ君とプレゼントを選んでたんや。今日は20日やから、明日渡す予定やったんやけど中身はアスナの好きな曲のオルゴールやで」

「本当だったら刹那さんが同行する筈だったんですけど、急遽用事

が出来たため僕がその代役というわけです」

まず木乃香が行動を説明して自分は刹那の代役だと補足すると、ようやくあやか達は彼らの目的を理解する。

すなわち『教師と生徒の禁断の恋』などではなく、『明日菜へのプレゼント探しのお買い物』だったのだ。

あやかも「そういえば……」と明日菜の誕生日であることを思い出したて椎名がポンと腕を叩く。

「ああーーーッ！！　そうそう！　私達もプレゼントあるよ、アスナ！」

呆然とまだ理解が追いついていない明日菜に、三人娘は直ぐに立ち直り、尾行中に横取りするように買った色々な物を明日菜に渡していく。

自分達の事を誤魔化すように、妨害した時に購入した品物をどんどん渡す三人に明日菜もようやく理解する。

「あ……ありがとう、アスカ、木乃香、みんな……こんないきなり……わ、私……私、嬉しいよっ」

呆けた状態から回復した明日菜は、余りの感激に少しどもりながら、同時に目尻に嬉しさで涙を浮かべて懸命に言葉を紡ぐ。

アスカと木乃香は、そんな彼女を見てとりあえず結果オーライいうことで満足気な笑みを浮かべた。

本来ならここで一件落着のはずなのだが、そんな雰囲気の中、気まずそうにしているのはチアリーディング三人娘である。

「いやー良かった良かった」

「ちょっとあなた方？」

こそこそ逃げようとする今回の騒動の原因とも言える三人娘に、あやかはソレを許さずに声を掛ける。

声を掛けられた三人はギクリッという擬音が似合いそうな感じで足を止め、誤魔化すような笑みを浮かべて振り向いた。

「い、いや～　ごめんね、いいんちょ。勘違いだったみたいね♪」

「全く、あなた方はいつもいつも人騒がせなんですからー！！」

声を掛けられたことでギクッと反応して引きつった笑顔で振り返る美砂達に、あやかが怒鳴る。

「まあまあ、あやかさん落ち着いて。彼女達は既に罰を受けていますから」

「罰ってどういうことですの？」

アスカが間に入って取り成すが、あやかにしてみれば罰を受けているとは思えず、三人娘にしても心当たりはない。

「最初から尾行や妨害に気付いていたと言いましたよね。つまり、途中で妨害に気付いてからはわざと高い物とかを見て買わせていた

んですよ。ねぇ木乃香さん？」

「そうやで、うちには尾行なんて分からんかったけど面白いように引っ掛かってくれたから、もうほとんどお金残ってないとちゃうか」

「「「嘘ーーーーー！！！！」」」

二人の告白に、自分達が二人の手の平で踊らされて財布を空にしてしまったことを知った三人娘は絶叫を上げて膝から崩れ落ちた。

アスカと木乃香は「大成功！」と笑いながらハイタッチを交わし、あやかは少し気の毒ではあるが自業自得と考え、明日菜はいい物を貰って喜んでいいのか判断をしかねている。

「ええい、もう自棄だぁ。せっかくだしこのままいいんちょの奢りでカラオケ行ってアスナの誕生会やろーよ！！」

「おーー！！　いいねソレ」

少しは落ち込んだ彼女達だが、そこはそれお祭り好きな３－Ａの一員なので直ぐに立ち直り、自棄といいながらあやかの奢りだと言っている時点で十分に余裕を残している。

あやかは三人に対してまだ文句はあるが、明日菜の誕生会については賛成のようで前向きな姿勢を示している。

木乃香はそんな彼女達の様子を苦笑交じりに見ていたのだが、そんな中アスカがつかつかと盛り上がっている美砂の前まで歩き、両肩をガシッと掴む。

「え、な、何アスカ先生……？」

「プライヴェートなので先生は無しでいいですよ」

明らかに普段とは違った行動をとる担任を不審に思った美砂が尋ねるが、流石に二人の間には身長差があるのでアスカが見上げる形になるのだが、アスカは優しく微笑んで話しているのに、美砂にはその笑みが歪んでいるようにしか見えない。

「実は木乃香さんが、とある女子校生に変装した某３－Ａの生徒に突き飛ばされた時に怪我をしてしまったんですよ。幸いにも大したことはないので直ぐに治りましたけど、やっぱり罰は受けないといけませんよね？　ね？　ね？」

「ちょっと待って！！　それなら円と桜子も！？」

美砂は即座に自分は逃れられないと考え、一人でも多く道連れをと近くにいる仲間の服を掴むと「いやー！　離して！！」「あの時突き飛ばしたのは美砂なのに！！」と逃げようとした二人が叫びを上げる。

傍観している三人は哀れにも思うが、アスカを怒らせた場合は『触らぬ神に祟りなし』なのを知っているので止めようとはしない。

「まずは……あやかさん！」

「は、はい！」

「明日の夕方、麻帆良で女子寮に最も近いファミリーレストランＪｏｕｆｕｌｌに連絡して貸し切って下さい」

突然自分の名前が呼ばれたことに驚き、少し慌てるがアスカに素直に従って携帯電話を取り出して電話を掛ける。

いきなりの指示にまさかという最悪の考えが三人の頭に浮かぶ。

「次に木乃香さん！　誕生日会の参加者集めです。クラス全員とネギ先生、高畑先生、源先生に明日が明日菜さんの誕生日である事と全額奢りであることをメールで連絡してください」

「「「全員分奢り！？」」」

「了解や」

木乃香は事態を理解できてきた三人に向かってゴメンといった感じで手を合わせながら、三人の悲鳴もなんのその、手慣れた手つきで携帯を操作して一斉送信。

明日菜は苦笑しながらごめんなさいといった感じで右手を上げているが、半ば燃えつきかけている三人には届いていない。

木乃香を怪我させた時点で、この運命は既に決定付けられていたのだ。

結局その晩は燃え尽きた三人を引きずってカラオケで遊び通してアスカが歌の上手さを披露し、「こいつに欠点はあるのか？」と全員に疑問を抱かせ、翌日のＪｏｕｆｕｌｌを貸し切った誕生日会には、乗りのいいクラスメイト全員が参加し（高畑のみ一足遅く出張に出かけ欠席（欠席しようとした生徒には情に訴えるなどして強制参加））、盛大なパーティを行った。

あの一件以来高畑に僅かとはいえ不審感を抱いてしまった明日菜は、高畑がいないことに本人も気付いていないが安心していたりする一幕があったのに気付いたのは、偶々その様子を見ていたアスカだけだった。

そこに各々持ち寄ったプレゼントを明日菜に渡して、忘れさせて感動させてまた泣かした。

周りが楽しむ中で余りの出費する金額の多さに頭を抱えている三人娘。

彼女たちにドッキリで、実は参加費ありだということを教えて今までのが罰だと盛大にネタ晴らしをして驚かせ、三人娘は腰を抜かすほど安心し、みんなに笑いが巻き起こった。

修学旅行前日にこうして騒がしいながらも笑いに満ちた日が過ぎ去っていき、気がつけばもう半日もしないうちに修学旅行が始まる時間になっていた。

第五十二話　誕生日と少年（後書き）

はたして露店で見かけた少女が分かる人はいるでしょうか？

次回更新は明日午前０時です。

遂に修学旅行編に……！！

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

第五十三話　　修学旅行一日目と少年　１（前書き）

予約投稿の日を一日間違えていることに気がつき、慌てて投稿。

今日かなりショックなことがありました。

昨日、仕事が終わって帰ろうとしたらバイク（筆者はバイク通勤です）の後輪がパンクしていました。時間が時間なので仕方なく押して帰ったんですけど、何時もの倍は掛かりましたね。

それだけならまだ良かったんですが、今日修理のためにバイクを取りに来てもらったんですけど修理自体は2時間程度で終わりました。

ですが……金額が。

なんと１３，６５０円も取られました。

なにぶん五年以上前に買ってから一度もタイヤを交換していなかったのでパンクをしていない前輪も変えたんですけど、前後のタイヤを交換だけで４５００円、工賃で４０００円、消費税が６５０円。

なんかボッたくられたような気がするのは何故でしょうか？

でも、タイヤが変わって凄く早く感じるから謎です。

愚痴はそれまでにして修学旅行編全１９話の第一話目です。文字数は多いくせして殆ど展開が進まないという謎展開。

文字数はギリギリの１０１８１字です。

あと、後書きで少し連続投稿の修正報告があります。

長い、長い修学旅行編、それではどうどッ！！

第五十三話　修学旅行一日目と少年　1

２００３年４月２２日火曜日、アスカは麻帆良学園女子中等部の修学旅行当日の朝であっても何時もの通りに起きてランニングに出掛けていた。ようやく前日になって手の痺れは完全に取れ、自分で作った造血丸で血の足りなさから来る貧血に悩まされることもなくなった。

鍼や薬湯＋その他諸々を使うことで医者である治癒魔法使いもびっくりな回復速度を見せたアスカ。とはいえ、流石にまだ全開戦闘を行うには不安が残る。大体、全開時の八割ぐらいといったところだろうか。

何時もよりペースを上げ早めに切り上げて帰ってくると、人の家の前で修学旅行が楽しみで寝れなかったのか目元に隈を作ったエヴァンジェリン（推定６００歳でも見た目１０歳）が、変なテンションで仁王立ちして高笑いをしていた。

幼女とも言える小学生に見える外見のエヴァンジェリンが中等部の制服に身を包み、腕を組んで高笑いする姿はとてもシュールであった。

「クックック、アハハハハ、アーッハッハッハ！　十五年ぶりの外の世界。ああ、しかも行き先が京都、奈良♪」

「……モウ、好キニシテクレ」

「こんなにもお喜びになるマスターは初めてです」

エヴァンジェリンにとっては15年ぶりの外界へのお出掛けだった故に、起きてからずっとハイテンションだ。エヴァンジェリンのはっちゃけぶりにチャチャゼロは真祖の威厳は何処に行ったのやらと呆れかえっていて、茶々丸は感無量とばかりに感動している。

「遅い！　遅すぎるぞ、アスカよ！！」

「いや、まだ六時にもなっていないじゃないですか」

一緒に始発の電車で行くためにかなりの時間待っていたらしく、愚痴愚痴と文句を言ってくるエヴァンジェリンに現在の時間をクールダウンを兼ねた足踏みを止めずに返事を返す。

「アスカ先生、その格好は？」

「ハハハ――――と、そう言えば珍妙な格好をしているな」

冷静な茶々丸が珍妙な格好をしっているアスカに問いかけ、修学旅行で興奮していたエヴァンジェリンも気になったのか聞く。

それもそのはず。

今のアスカの格好は、ジャージを着ているのはランニングしていたのならおかしくはない。変なのは口元と鼻を覆う白い布。病人の証、あのマスクである。それと足踏みをするたびに、カンカン、と独特の音を鳴らす『一本歯の下駄』だ。

「風邪を引いているならゆっくり休んだ方が……」

病人に早朝からのランニングなどもっての他だ。

そもそも今日は修学旅行の日。そうなると事実上の担任が風邪でいないという変わった事態になりかねない。

だがアスカは、心配そうに見つめる茶々丸に苦笑を浮かべながら手を振る。

「ああ、これですか。ありがとうございます。別に風邪とか病気ってわけじゃないです。これは……」

心配してくれた礼を言いながらマスクをしている説明する。

マスクをしているのは結構簡単な理屈である。

濡れたマスクをつけて息をするのは意外と大変で、息がしづらいのに動きまわれば当然消耗も激しい。

しかし、それに慣れて行けば体力もつくし肺活量も上がる。普通に生活している分には気にならないが、激しく動けばその負荷はかなりの物。

しかも、このマスクは通常の倍の厚さで内側に水を含ませているので最早拷問にも等しい息苦しさになっている。普通なら日常生活を送るだけでもしんどくなる代物だ。それをつけてランニングをするなどもっての他だ。

「オイオイ、ソリャヤリスギダロウニ」

笑って言うアスカに突っ込むチャチャゼロに同意する二人。

しかし、アスカがしているのはまだまだそんなものではない。

アスカが履いているのは靴ではなく『一本歯の下駄』。

歯が一本しかない下駄だと慣れていなければ立つこともままならない。

武術の基本は、まず『立ち方』からきている。つまり、バランス感覚が何より大切であり、この一本歯の下駄はそれを養うための重要アイテム。

別名『天狗下駄』とも呼ばれ、山中で修行をする修験者が使っていたとされている。

日常生活でも常に垂直を意識している。筋肉の力ではなく、骨の上に骨を重ねる感じで、骨盤の中心で重力を感じるようにして、頭の頂上からロープで吊り下げられているイメージを持つ。箒(ほうき)を手に逆立てる要領で、腿の力を抜いて肝で立つのだ。

鍛錬の結果、『正中線』を身につけられる。

『正中線』とは身体の中心を垂直に貫く『線』に例えられるもので、いうなれば『究極のバランス感覚』。武術における正しい身体の使い方、その基準といえる感覚のことである。

例えば絵の上手い人は下手な絵の欠点を見抜くことが出来るように、『正中線』のある人は無い人のバランスとその動きを見抜けるようになる。

そして『正中線』の力はそれだけではない。放たれた蹴りを捕ら

えられようとも、より強い『正中線』を持っていれば捕らえられたまま相手を振りぬくことも可能である。

人間は二本足で立って動く。左足から右足へ、右足から左足へ。左右の体重移動が起きる瞬間、回転（遠心力）が生まれる。すべてのスポーツや武道もこの左右の体重移動の応用。回転が生まれる場合、安定した軸が必要となる。

動きに無駄が多ければ、必然的に消費する体力も増える。逆に言えば、無駄が少なければ動ける時間が増すのだ。ただでさえ息切れを起こしやすいあのマスクをつけて動くには、スタミナの強化だけでは足りない。動きの無駄を減らし、スタミナを長持ちさせる工夫が必要となる。

『濡れたマスク』で無駄な動きを減らし、『一本歯の下駄』で軸を定める。

このランニング方法を開発した中国にいる剣星＋秋雨曰く、スタミナ強化以外にも『動きの最適化』が目的らしい。こうやって時々送られてくる鍛錬メニューをこなすのが、？がりを感じることが出来るアスカの楽しみの一つである。

「これらをつけたまま走っていたのか？」

「ええ、これらをつけていると□○×までしか行って帰って来れませんが」

と言いながら、アスカにざっとコースを説明する。

「そんな距離を走ってるのか……？」

封印状態のエヴァンジェリンでは通常状態でもどれだけの時間がかかるか分かったものではない。

否定してくれることを願って問いかけたのだが返って来たのは無常にも肯定の頷き。

「やりすぎだろうに、それは」

呆れた様子で返すエヴァンジェリンだが、トレーニング法としては実に理に叶っていることを認めざるをえなかった。

こんなトレーニングを今までずっと続けてきたのならアスカの身体能力の高さにも納得がいった。

が、やりすぎであることには変わりなかった。

だが、さしものエヴァンジェリンもアスカが痺れは取れており、血は造血丸で戻っているが病み上がり＋修学旅行ということで距離＋重さ（ジャージの重さを一番軽くしている）のに気づかない。

勿論、最初からこれら全てをつけてしたわけではなく、『一本歯の下駄だけ』↓『一本歯の下駄だけ＋普通の薄さのマスク』↓『一本歯の下駄だけ＋二倍の厚さのマスク』↓『一本歯の下駄だけ＋二倍の厚さで濡れたマスク』↓『一本歯の下駄＋二倍の厚さで濡れたマスク＋重量倍のジャージ』と段階的に難易度が増していっている。

流石にアスカといえど、最初から全部つけてこれだけの距離を走れはしない。

『一本歯の下駄』ではバランスを崩してこけかけ、『マスク』をつけて走れば意外と体力切れが速いと慣れるまでは大変であった。

現に今もクールダウンしているが、滝のような汗とゼェハァと息を乱した状態であった。それも時間を置いたら収まってきているのだから信じられない回復力だった。案外、この環境適応能力と回復力が旅の中でついた最も大きな能力かもしれない。

「直ぐに準備をしますので待っていて下さい」

特に待ち合わせの約束していたわけでもないので謝らない。

それでも待ってもらっているのでさっさとシャワーで汗を流して支度をし、玉藻が作ってくれたお握りを片手に食べながら二人と二体で集合場所のＪＲ大宮駅へ向かう。

アスカが持って行く荷物は１つ、着替え等の表向き必要な物と裏の理由で必要になりそうな物を入れた手提げの旅行リュックだけである。

麻帆良学園都市と外部を繋ぐ橋の上、学園都市を囲む結界の端ではおそるおそる一歩を踏み出し、結界を越えても自分の身に何も起きていない事を理解するとこれが本当に真祖の吸血鬼かと思うぐらいに狂喜乱舞した。

「ワーハッハッハッ！　遂にやったぞ！！」

それは修学旅行が学業の一環であるから外に出ても呪いの影響はないが、もし修学旅行の日程を終えて学校に戻らなければ、呪いは容赦なく彼女に襲いかかるであろう。

後日、茶々丸がこの記念すべき瞬間を余す事なく記録して記憶ドライブに収めていたため、見たエヴァンジェリンは七転八倒して消そうとするも、周りにいた全員に抑えられ果たすことはできなかった。

「今日は待ちに待った……修学旅行の日♪　楽しみだな♪　楽しみだな♪」

その後、落ち着いてきたエヴァンジェリンと電車に乗ると、途中で乗りこんできたネギと会った。

背中には子供サイズのリュック、ポシェットと手荷物サイズのバックはいいのだが、幾ら関西呪術協会の妨害があるかもしれないとはいえ、修学旅行の引率に杖を持っていくのは果たして如何なものか。

（まあ、いいけどね。他人の振り、他人の振り）

父親の手掛かりが得られると余りのハイテンションなネギにアスカは何も言えない。というか朝早いとはいえ、人がいる電車の中で踊りだす人間と知り合いと思われたくないので離れて他人の振りをしていた。

「私は一体なにを……」

そしてスーツでなければ小学校の遠足にしか見えないテンションのネギに、エヴァンジェリンは自分の行動を省みて一人落ち込んでいた。人の振り見て我が振り直せ、と言うが人が自分と同じ行動、しかもそれが他人から見たら恥ずかしい場合、大抵は自己嫌悪に陥

るか、恥ずかしがるものである。

「ああ、マスター。お気を確かに……」

エヴァンジェリンの場合は前者で、６００歳が１０歳と同レベルな事に耐えられなかったらしく茶々丸が慰めていた。

そんなこんなで各々、纏(まと)まりが無いまま集合場所に着いたのは集合時間の2時間前の午前7時。

集合場所の大宮駅構内は早朝、ということもあって人影はそう多くないが、あちらこちらに見える人影の中には、気が早い３－Ａの生徒達の姿。

大宮駅までは個人個人で行くことになっているのだが、生徒達の場合はほとんど全員が同じ寮に住んでいるため、幾つかのグループに分かれて行くのが通例となっている。

「おはようございまーす！！」

「おはよう御座います」

「アスカ先生、ネギ君おはよー」

「おはようアスカ先生、ネギ先生」

早朝の大宮駅にネギの元気な声が響く。その後にアスカが挨拶をするとしずなや、早めに来た生徒がそれに答える。

既にいるのは古菲、木乃香を抜いた図書館組に加え鳴滝姉妹とそ

の保護者の楓、運動部組のまき絵、裕奈、亜子、アキラの十人程度と数人の教師。

ネギは生徒達の輪に入りながら、さっそく修学旅行の話題に盛り上がる。

待ちきれなくて始発で来てしまったと手を振りながらハルナは言うが、実際にはその始発すらしばらく待たなければ来なかったほどに早く来ているのだ。

ここで普通の感性を持っている人間ならば、修学旅行でそこまでする事に呆れるか訝しむかするだろうが、同じかそれ以上に浮かれるネギは、気にすることなく明るく笑う。

枕を抱えて頭を下げる夕映とのどか。枕が替わると眠れなくなる二人は、自分の枕を持参していた。

「とりあえず、他の先生方にも挨拶しとくか」

楽しそうな生徒達とその輪にいるネギを横目に、アスカは他の先生方が集まっている固まりを見つけたので足早に近づき、新田、しずな、瀬流彦に朝の挨拶を交わす。

担任の高畑がいない上は担任補佐であるアスカには生徒達の点呼や、当日の予定の確認、教師間の連絡事項の伝達、ホテルや見学先への連絡などやらなくてはならないことが多い。

そのため、教師には生徒達に伝えられている集合時刻よりも早く来るよう通達されているのだ。教員の集合時間よりも1時間早いのだが、新米＋子供であることを考えて仕事を早く始めるのがアスカ

である。

その後続々と集合時間が迫るに連れて生徒達が集まる。人が増えれば喧騒が絶えることなどあるはずもなく、その喧騒たるや普段の教室での騒ぎが大人しいと思える程だ。

京都行きにはA組の他にもD組、H組、J組、S組が選んでいるが、京都に到着し、清水寺の見学を終えてからはそれぞれのクラスが別行動となり、宿泊するホテル、自由時間の行動も全て別々になる。

その分、怪我や迷子等のトラブルが多く発生するため教師陣に掛かる負担は大きいが、この辺りは折角の修学旅行なので生徒達の楽しさ優先と言うことなのだろう。

「それでは京都行きの3A、3D、3H、3J、3Sの皆さんは各クラスの班ごとに点呼を取ってからホームに向かいましょう」

「では、1班から6班の班長さんお願いしまーす」

予定時間が迫り、しずなが柔らかく出立を促してこの場で一番張り切っているであろうネギが「3－A」と書かれた旗を振りながら大声を出す。

新幹線の乗降口から各クラスの生徒達が班ごとに分かれて乗り込んでいき、3－Aはネギが入り口に立って誘導して、アスカはそこ

で出席の最終チェックするという役割分担をしていた。

最初に乗り込んできたのは第1班鳴滝史伽、椎名桜子、釘宮円、柿崎美砂、鳴滝風香のチア部三人娘＋双子の五名。

「あ、風香さん。3－Aはこっちですよ！」

早速というかなんというか、双子の姉である風香は新幹線に乗り込むなり、ちょこまかと動く。挙句には別の車両に突撃しようとしていた。

一人で別のクラスの車両の方に入って行きそうになる風香を、ネギが声で誘導する。

先頭で「京都」と書かれた三角旗を振るのは風香の双子の姉妹である史伽。

鳴滝姉妹は真祖の吸血鬼であるエヴァンジェリンと違い、れっきとした中学三年生なのだが、傍目には小学生にしか見えない。クラスの年齢より上や下に見られたりする中で、下の方に挙げられる二人である。

姉の風香は少しツリ目で髪は所謂ツインテール。妹の史伽はツインのシニヨンにしているのでそれを頼りに見分ける事ができるのだが、この二人揃っていたずら好きであるため、時折互いの髪型を交換していたりするので注意が必要だ。

「この双子と一緒だとうるさそー」

「いいじゃん。楽しくて」

その騒がしい面々を見ながら、美砂がぼそっと呟いた言葉にすかさずフォローするのは肉まんを頬張っている円。

この班は言うなればその場のテンションで動くタイプが多く、担任補佐のアスカからすれば注意が必要である。

次に2班の古菲、超鈴音、葉加瀬聡美、長瀬楓、春日美空、四葉五月の超一味＋αは超包子の関係者に楓と美空がくっついてきたという形の六名。

電車に乗り込んで早々、湯気上がる蒸篭を持っている五月に他のクラスの生徒が肉まんを三つ求め、値段を小さいながらも何故か絶対に聞き漏らさない声で答えている。

その修学旅行でも商売に精を出している五月の姿を見ていた美空は、一筋の汗をたらしながら一言ポツリと感想を呟く。

「何処でも肉まん売ってるのね」

「あいあい」

「春日さんも食べますか～～～？」

美空の言葉に頷くのは自身も肉まんを頬張っている楓であり、ちゃっかりと美空に売込みをするのは超包子の一員でもある葉加瀬。

「アスカ先生、ネギ坊主も大変アルね。これ食うとよろしアルよ。力出るネ！」

「それじゃあ一個だけ」

「えっと……ど、どうも。僕、朝はちゃんと頂いたので気持ちだけで」

そう言って古菲は目の前に超から受け取った肉まんを両手に一つずつアスカとネギに勧める。見た目よりも大食漢なアスカは早朝から運動していたこともあって余裕があったので一個だけ受け取って口に運び、ネギは張り切りすぎて朝食を食べ過ぎてしまったため、これ以上食べると吐くのでやんわりとそれを断る。

（イギリスにも肉まん広めてやるネ）

古菲の後ろでは超が何やら笑みを浮かべながら意気込んでいる。そんな彼女たちを見ながら、ネギは時間を気にしつつも席の方へと促す。

何処でも商売を忘れないのは流石というべきか超一味がいる2班は、何処までもウルトラマイペースな面々が揃っている。

2班に続いて入ってきたのは3班雪広あやか、那波千鶴、村上夏美、長谷川千雨、朝倉和美の比較的常識人で構成されている――――ように見える五人。

「ささ、ネギ先生こちらへグリーン車を貸し切ってありますので、其方の方でゆるりとお寛ぎを……お供しますわ。二人っきりで……♪」

真っ先に新幹線に乗り込んでホホホと、妖しげな笑みを浮かべながら早速暴走するあやかは、強引ながら実に優雅にネギの手を取り、

この為だけに貸し切ったグリーン車へと引き込もうとする。

「また、あやかったら……♪」

そのあやかの姿を見て、千鶴はニコニコと微笑ましい目で見ているだけで全く止める気はないようだ。

「あ、あのいいんちょさん!?　僕、まだ仕事が……」

「雪広さん、昼間から犯罪行為に走らないで下さい。それから後ろが詰まっているので早く行くように」

「っは、申し訳有りませんアスカ先生」

連れて行こうとするあやかに必死になって抵抗するネギを見兼ねてアスカが注意する。担任に注意されて瞳をきらきらと輝かせながら、どこかトリップしていたあやかも空気が読めない人間ではないので、移動を開始した。

あやかは雪広財閥の令嬢であるためか一般人とはかけ離れた金銭感覚をしているが、普段の彼女は常識人でもネギが関わると途端に理性が吹き飛ぶのだけは困ったものである。

「はいはーい、撮るよ」

そんな彼女達を和美はデジカメを構えて思い出の一ページを確保といった感じで撮る。

和美が写真を撮るのに驚いたのか、それとも写りたくないのか夏美が「わっ」と言いながら屈む。そんな彼女達のやり取りを、千雨

は我関せずとばかりに耳にイヤフォンを挿して音楽を聴いている。

この班は基本的に大人しい班だが、各々とある方面に暴走する面々が多すぎるので、それさえなければ一番安心できる。しかし、一度暴走すると止めるのに生半可な苦労を要する班でもあった。

更に続いて４班佐々木まき絵、明石裕奈、和泉亜子、龍宮真名、大河内アキラの運動部四人組に龍宮がくっついてきた形の五人。

「ネギ君！自由行動日、私たちと一緒に遊びに行かないー？」

「いえ、あの……」

「佐々木さん！ぬけが……いえ、ネギ先生は忙しいですのよ！？」

真っ先にまき絵がネギの前に飛び込んで、がしっと手を握ると顔を近づけて早速自由行動日のお誘いを掛ける。その勢いに困惑してしまったネギは言い淀むだけに終わり、そうはさせじとまき絵の先手を前の車両から戻ってきたあやかが牽制して迎撃する。

二人と巻き込まれた一人が騒ぎ出した後ろから、何故か新幹線に乗る前から顔が真っ青な亜子を介護しながら残りのメンバーが入ってくる。

「あー、うー」

「乗る前から酔うなんて……弱いんだから」

「……大丈夫なのか？」

「お水買っとく？」

優しく背中をさするアキラと、表情が動いていないので声だけしか心配そうに見えない真名、飲み物の自販機を見つけると裕奈が問いかける。

「どうしたんですか？」

アスカは乗る前から乗り物酔いってあるのかと少し疑問に思ったので率直に聞いてみた。

「ちゃうねん、肉まん美味しくて食べすぎた」

心配してくれる二人に亜子はフラフラとしながらも返事をするが、傍から聞くと情けないことこの上ない理由であった。それでも彼女が辛い事は分かっているのか、全員級友を心配するスタンスは全く崩れていない。

「それならこれを。さっき買った奴ですけどまだ封は開けてないので。それと乗り物酔いの薬と消化薬も、飲んでから五分もあれば効いてきますから席に着いたら飲んで下さい」

アスカが買っておいた水と、鞄からこんなこともあろうかと準備しておいた二種類の薬――――――酔い止めと消化薬を取り出して手渡す。

「ありがとうございます、アスカ先生。ほら」

「あ、ありがと～御座います」

アスカの申し出にアキラがお礼を言いながら代わりに受け取り、亜子は若干涙目になりながらお礼を言いながら座って飲むために席へ向けてゆっくりと前へ進む。

この班はまき絵と裕奈さえ暴走しなければ他の班よりかはマシなので一番安定感がある。

次は最後から一歩手前5班の近衛木乃香、神楽坂明日菜、綾瀬夕映、早乙女ハルナ、宮崎のどかの図書館島探検部に木乃香と親交の深い明日菜の五人。なにげに図書館島侵入の主要メンバーが揃っているだけに要注意である。

「ホラ、チャンス！　自由行動日一緒にどうですかって！！」

「で、でもー」

「先生は頼み込めばイヤとは言わないと思うのですが……」

修学旅行の自由時間にネギと行動するためにのどかに恋の後押しをするハルナと、今までのネギの行動を考えて結果を推測する夕映の三人の中でこの現状に、一番やきもきとしているのは誰だろうかとどうでもいいことをアスカは考えてしまう。

ちなみにネギは未だにあやか、まき絵の包囲網から抜け出せていない。

「アスカ先生、自由時間うちらと一緒に周らへん？」

「すみません、仕事があるので一緒と言うわけには……見回りがあるので途中で会うかもしれませんが」

「そっか残念やわ」

「仕事じゃ仕方ないわよね。まあ途中で会うかもしれないんだし、いいんじゃない」

どうでもいい事を考えていたアスカに木乃香が自由時間に一緒に周らないかと誘うが、アスカは見回りの仕事があるためやんわりと断る。誘った木乃香だけでなく明日菜も残念そうな表情を浮かべるも仕事と言われれば無理に誘うわけにもいかず、途中で会う可能性もあるので潔く引いた。

順調にとはいかないまでも、それでも滞ることなく各自が席に着いていく中、最終班である6班桜咲刹那、ザジ＝レイニーデイ、エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル、絡繰茶々丸のある意味コメントしずらいメンバーの四人。

3－Aは三十人いるが、修学旅行は四人～六人で班を決めたので二班が一人多い六人のため、6班は四人と他の班より少ない。

「おおぉ～っ！　これから旅行だということがひしひしと解かってくるぞ！！」

6班の先陣を切ってエヴァンジェリンが大股でシートに向かい、さっさと席に着くと窓に手と顔をぺたっと貼り付けて歓声をあげている。

エヴァンジェリンは自己嫌悪よりも旅行の楽しみの方に天秤が勝ったのか、それとも余りの楽しみに忘却してしまったのか定かではない。どちらにしてもとても元高額賞金首に見えない。

エヴァンジェリンの後ろを茶々丸がついていきながら、優しげに見ている。その姿は旅行が楽しみで仕方ない子を見る母か、騒がしい妹を見守る姉か。その姿に思わずホロリと来てしまったのは彼女の苦労を知っているからか。

「本当に張り切ってますね、エヴァンジェリンさん」

「はい、あのようなマスターは初めてです」

ネギもそうだが、傍目には完璧に見た目やそのテンションの高さからして小学生にしか見えないことは心の中に秘めておいた方が本人のためになるだろう、とアスカはそれ以上の口を閉じた。

温かく見守ろう――――――そして時が来たら思いっきり弄ってやろうと心に決めるアスカであった。幸いにも茶々丸に確認したら「ただいま録画中です」と有り難い言葉を賜っている。

茶々丸の背後から無言でエヴァンジェリンを見ているザジは指先に小鳥を乗せて後に続き、最後に相変わらず身の丈程の夕凪が入った竹刀袋を背負った刹那が入ってくる。刹那に関しては銃刀法違反で引っ掛からんのかと疑問に思ったり。

「アスカ先生。六班全員乗車しました」

刹那は言いながら横目であやかとまき絵の間に挟まれて、あうあうと慌てている小さな副担任を見る。安心感のある担任補佐と違い悪い意味で漏れそうになる溜息を飲み込む。

無論あんなことをしたネギが何故特使をするのか、という疑問点

や符に落ちないことは大量にあるが自分が考えることでもないと思考を止める。

実は安心感のある担任補佐が自分に銃刀法に引っ掛からないか疑問に思っているなど彼女に分かるはずもない。

「はい……親書の件に関してはこちらへ任せて、刹那さんは木乃香さんの護衛に専念して下さい」

「……解かりました、お願いします」

刹那は以前の事もあって本当にあんな少年で特使を務められるのか不安に駆られるが、信用できるアスカの言葉を信じて自分の座席へと歩いていく。

アスカは去っていく刹那の背中を見送り、はっきり言って生徒がこんなことをしなければならない事態と、そんな選択しか出来ない自分に嫌気が差していた。

幾らやり手とはいえまだ中学三年なのだから、他にもすべきことはあると思うが、そんな感傷に足を引っ張られて最悪の事態になっては元も子もないと何とか自分を納得させる。

以上が３－Ａの班構成でネギの肩の上に陣取るカモは生徒一人一人を捕捉し、使えそうな人間、修学旅行中に仮契約してくれそうな人間をピックアップしていた。

『ＪＲ新幹線、あさま５０６号。まもなく発車致します』

全てのクラスの生徒達を新幹線に押し込んで、時間になり新幹線は大宮駅を出発した。

第五十三話　修学旅行一日目と少年　1（後書き）

『一本歯の下駄』の鍛錬方法の元ネタは、少年画報社、月刊アワーズ連載の『ツヌマダ格闘街』です。

連続投稿ですが少し形を変えたいと思います。

具体的には筆者の仕事が次の日休みの場合は投稿『なし』となります。当然、読者の方々は筆者の休みの日など分かるはずもないので、次回更新の日付をきちんと確認して下さい。

次回更新は『明日』午前0時です。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

第五十四話　　修学旅行一日目と少年　２（前書き）

久しぶりになにもなかった一日でした。

でも、明日は１０月入ってから業務内容がかなり変わった夜勤が。

修学旅行編全１９話の第二話目です。本当に前話同様、文字数は多いくせして殆ど展開が進まないという謎展開。はたして一日目だけで何話を使うのか。

文字数は１２３３０字とマズマズです。

それではどうぞッ！！

第五十四話　修学旅行一日目と少年　2

途中、東京駅でひかり２１３号に乗り換えた後は目的地の京都駅につくまで悠々自適。それぞれが旅行の醍醐味の一つの移動時間を満喫中である。

走り始めた新幹線の中で３－Ａが大人しくしていることなどできるはずもなく、早速車両内の空気は活発化していく。これは不味いと考えたアスカが他の車両にまでその騒動が看破されそうになる前に一喝して全員を席に座らせたが。

当然、楽しくなってきたところを邪魔されて不満そうな生徒もいたが、ネギと委員長のあやかが声を掛けることで沈静化した。何とか一時的にではあるが、話を聞く姿勢にさせた。

「さて、皆さん１５年度の修学旅行が始まりましたが、修学旅行の名目は学業の一環って事になっているので、さっきみたいに羽目外し過ぎて人の迷惑にはならないようにして下さい」

『は～～い♪』

絶対に反省していない満面の笑みで返す3年A組の生徒達に、ネギより立場が上の副担任のしずなは苦笑いを浮かべつつバランスの取れた担任補佐、副担任補佐だと考える。

担任補佐のアスカは前任の高畑に比べれば厳しめではあるが、人に迷惑を掛けなければある程度のラインまでは許容しているので、生徒達も怒られる時は人に迷惑を掛けている時だと分かっているからか素直に聞いている。

要点のみを押さえた簡潔な授業内容と纏めたプリントを使い、ややスパルタ式ではあるが通称バカレンジャー達と呼ばれる者達も担当の教科の成績が少しずつ上がってきているのは評価できる事柄である。

やはり先生とはいえ、最初は子供ということで大いなる心配の的であったが、制御不能と思われた３－Ａを纏め上げているので教員の評価は高い。

だが、月に何度か新田と二人で未成年なので酒を飲んでいないが飲みに出かけているのを見るにやはり疲れているのだろう。若年者に苦労をかけている現状に新田が周りに文句を零すほどアスカの苦労話というか愚痴が多かったらしい。

副担任補佐のネギは、アスカに比べれば教師として頼りない部分はあるが、立場的に厳しくせざるを得ないアスカに代わって生徒達の不満を抜くフォロー役として仕事を果たしている。

最初は問題行動が多かったが今ではそれも少なくなってきたし、総合的に見れば１０歳という年齢を鑑みれば十分良くやっている方だ。

抑え役のアスカと纏め役のネギ。多分にアスカが役割的に貧乏籤（くじ）を引いている分があるが上手くはいっているようだ。

「麻帆良学園の修学旅行は班ごとの自由時間も多く取ってあり楽しい旅になると思いますが、その分ケガや迷子、他の人に迷惑をかけたりなどしないよう一人一人が気を付けなければいけません、特に怪我には気をつけるように」

担任補佐、副担任、副担任補佐の三人で通路に陣取り、アスカが話すのは修学旅行における注意事項だが、はっきり言って誰もまじめに聞いてなどいない。

喋っているアスカもそれは知っているが、それでも引き締めという意味でどうしてもやらなければいけない慣例のようなものである。

「それでは皆さん、修学旅行の始まりです！この旅行で楽しい思い出を一杯作って「え――お弁当「あぶっ！」あっ、すいません」」

アスカに変わってネギが話している時に後ろから売り子がやって来てカートで轢かれてしまったが、みんなに笑いを提供するオチで話は終わった。

ネギの体を張ったギャグ（？）で車両内を笑い声が支配し、有耶無耶の内に生徒達のいつものテンションになっていく。

流石に車内を駆け回るなどはしないが、座席は一応班毎に決まっているが両者の同意があれば座席を変わっても良い。座席を回転させて対面式にしてカードゲームに興じる者、談笑する者、景色を眺める者と、騒がしいことを除けば各々自由に新幹線の中の時間を過ごしている。

席を変わる為に周りと同じように刹那も動き、木乃香が空けていた席に座って明日菜も交えて楽しそうに話し出す。

これは最近よく見られるようになった風景なので誰も不思議に思うことはない。

それを見届けたアスカは一度割り当てられた自分の席に戻り、予定を確認するために３－Ａの修学旅行日程表を開き、一言誰知らずと呟く。

「自由時間が多いよな、とても修学旅行とは思えん」

呆れたことに、４泊５日の修学旅行の内、ほぼ３日間が自由行動なのだからパック旅行の方がまだ集団行動と言えるだろう。

気にしても仕方ないと諦めて予定を確認して、各々を見て回るとエヴァンジェリンがそれはもう熱心に景色を見ていた。

「ふはははは！！　新幹線から見える流れる景色を見るのは最高だな！！」

エヴァンジェリンは真祖の吸血鬼としての誇りはどうしたと思うぐらいに楽しんでいる。これを映像に撮って流したらみんなエヴァンジェリンを見る目が変わるのじゃないかと思ったが、そんなことをすると殺されそうなので止めておく。

まあ１５年間も遠くへいけなかったのならこうなっても仕方ないかと、そう考えることにしてさっさと次に行くことにした。

新幹線が発車してから数十分が経ち、ネギはカードゲームをして旅行を満喫しているみんなの姿を見て笑いながら、取り合えず列車を一度巡回しようと３－Ａの車両から抜け出す。

「あはは、皆元気だね」

「よーよー、兄貴。　そろそろ周囲に気を付けた方がいいんじゃね

ーか？」

自分は引率教師で関東魔法協会の特使たる機密任務を請け負っているのだが、自身も日本の文化を色濃く残している土地にして、父の手掛かりがあるはずの場所に行けることで浮かれていてネギは軽く気が抜けていた。

「え？　どういうこと？」

「じじいが言ってたじゃねーか。　道中で妨害が起こるかもしれねーってさ。もしかしたら、すでに入り込んでいるかも」

「ええーっ！？」

車両と車両の間の人気がない場所で指定席である右肩にいるカモに注意されるまで、まだ観光気分が抜け気っていないネギは妨害が起きるかもしれないことをすっかり忘れていた。

それも既に入り込んでいると聞かされ、驚くが事態はネギの事情など関係なく動き出す。

「キャ……キャー！！」

「カ、カエル～～～～！？」

悲鳴が上がりネギが急いで３－Ａがいる車両に戻ると、お菓子の箱・バスケット・水筒などいたる所からわらわらと、緑色で妙な滑りを持った皮膚、愛らしくピョンピョコ跳ねる仕草だが、一部女性に嫌われるカエルが湧いて出てくるのが見えた。

「どうしたの？」

「カエル！？」

何処からともなくカエルが大発生して３－Ａのいる車両は混沌の坩堝と化す。

３－Ａの生徒達も騒々しいとはいえ女の子だ、突然両生類が湧き出れば無理も無く悲鳴を上げて逃げる生徒がいれば、物でカエルを払う生徒や気絶している生徒もいる。

「なっ……なんですか！？　このカエルの団体さんは――っ！」

「助けてネギ君――ッ」

妨害があることは予想していたが、想定の斜め上を行く事態にネギは大声を上げ、まき絵が助けを求める。

アスカは事前に妙な気配を感じていたので、感知した瞬間に認識阻害の魔法を張って販売員らが車両に入ってこないようにそれとなく妨害していた。

カエルを一見するだけでアスカはそれらを幻術、もしくは陰陽道の一つである式神だと看破し、近くに術者か術の要となるものを探す。そして全ての力の基点が車両の一番前の左端にある席の下からであることを感じ、急いでそこへ向かう。

ネギや生徒達が通路に四つん這いになったりしてカエルを捕まえている間に、目的の座席に辿り着き下を探ると一枚の札を発見し、剥がして破るとカエルは跡形もなく消えた。

「落ち着け！　各班長は点呼を取って報告を。それと気絶した人の近くにいる人は座席を倒して横にして、靴と上着は脱がせて服の第一ボタンと袖のボタンを外し、首周り、袖周りを楽にさせて体を楽な姿勢にして下さい！　それと体を冷やさないように毛布をかけるのも忘れずに！！」

生徒達はカエルが突然、消えたことに驚きを隠せないでいる。車両の端から真ん中に向かって歩くアスカは気絶した人の対応は保険委員に任せようかと思ったが、保健委員の亜子が失神しているため近くにいる人へと指示を変えてきびきびと指示を出し、それに従って動くことで落ち着きを取り戻し始めた。

「あ、兄貴間違いないぜ！！　関西呪術協会の仕業だ！　堅気を巻き込むたぁ下種な！」

アスカが指示を出して混乱した生徒達が落ち着いて動くのを見て、何とも言えない表情を浮かべていたネギだったが、カモの言葉にハッとする。

「う、うん。でも、どうしてカエルとかなんだろう？」

「うーん、只の嫌がらせかそれともこの騒ぎに乗じて何かを狙っているのか・・」

「ハッ……！　あ……あれっ！？　ないっ！！　学園長先生からあずかった親書が……！？」

カモにそう言われて、頭の回転が早いネギは狙うとしたら親書だという可能性に思い至った。確認の為に慌ててポケットに手を突っ

込むがそこには何も無い。

「なに！？」

その言葉にやられたと、そんな感想がカモの頭をかすめた瞬間、

「ほっ……何だ下のポケットにあった」

「び、びっくりさせんなよ兄貴」

慌ててスーツの別の内ポケットを探って親書を見つけてカモに見せる。ただの杞憂だと安心したのも束の間、次の瞬間に一羽の燕が親書を咥え飛び去った。

「あ――――――っ！」

ネギの叫びと同時に、アスカが雪広から報告を受け終えた時に、車両の後方から飛んでくる物体に気付き後ろを振り向く。すると手紙を咥えて高速で飛行する一羽の燕が視界に飛び込んできた。

何故新幹線の中に燕がと疑問に思ったが、交差する一瞬にアスカは余人には眼にも留まらぬ速さで手を動く。瞬きほどの間に飛行する物体を握り潰すと燕は手の中で、その姿を一枚の紙に変える。

「親書……か」

どうやら燕は簡易式神だったようで、燕からひらひらと宙を舞う見覚えのある封蝋の刻印の入った手紙を、床に落ちる前に掴む。

「あ、アスカ！　大切な親書を取り返してくれてありがとう！！」

燕を追いかけようとした瞬間にはもうアスカが捕まえたことに、ネギは一瞬驚いた表情を見せるが、腕をパタパタ振ってはしゃぎながら礼を言う。

騒ぎがあったのに暢気に親書を出すネギの迂闊さに失望した表情を浮かべるが、アスカは直ぐにその表情を打ち消すと、自分が回収した手紙を差し出す。どちらかと言えば狙ってやったというより条件反射的に掴んだだけなのでここまで喜ばれると少し複雑なのだ。

「気を付けて下さい、ネギ先生」

「うん、術者がいるかもしれないから見回りに行って来るよ！」

忠告に頷いて親書を受け取ってスーツの内ポケットに入れるとネギは騒ぎを起こした術者がいることを考えて、アスカが止める間もなく見回りに出かけてしまう。

敵からすれば、木乃香を人質にして関西を乗っ取るよりも東からの特使の妨害をした方が余程楽であり、ネギが失敗すれば元々魔法使いを毛嫌いしているのだから、これ幸いにと親書の件を盾に東に食って掛る事も考えられる。親書を渡せなければ特使であるネギが吊し上げに遭い、木乃香が捕まっても担任や副担任であるアスカやネギの所為ということになる。

どっちに転んでも関西呪術協会には責任は回らないのだから、何気に嫌な立場に立たされている事を自覚せざるを得ないアスカである。

ネギは未だに自分の立ち位置の危うさに気付いてなく、その懐に

仕舞う親書を狙って妨害どころか最悪の場合、暗殺者を送られてもおかしくない立場だということを理解していない。

それが今の時点での政治的配慮を理解できない十歳児のネギの限界であり、幼い頃から知識ばかりで人付き合いも少なく揉まれることのなかった故の弊害だ。

本人の感覚としては今までした事の無いお使いよりかは真面目ではあるが、その親書の行方に多くの命が左右されることに気付いているか怪しい。

今のネギにそこまでを望むのは不可能であるが、必要最低限の警戒ぐらいはしてほしいものだとアスカは嘆息する。

果たして今回、このイタズラをあくまでイタズラと取るべきか、それとも警告と取るべきか。

一番可能性が高いのは、イタズラも兼ねて誰がどのように捌(さば)くのかによって今後の対処を決める威力偵察だろう。

対応で後手に回ったが、最低でもネギに警戒心を植えつけられたことを収穫とし、騒動が治まったことを確認して学園長にＪＲ側に伝えるかを確認するために携帯で報告する為に車両の間へ向かう。

向かう途中でエヴァンジェリンの席の近くを通ったが、未だにぺたっと窓に張り付いていてカエル騒ぎに気が付いていたのかすら怪しかった。

アスカが学園長に関西呪術協会らしき妨害の事を伝えたが、事を余り大きくしないように、と学園長に言い含められ麻帆良の教師連はこの騒ぎを車掌やＪＲ側に伝えなかった。

その旨を、瀬流彦を探して伝え、そこまで回すほどの気の余裕のないネギには知らされることも無く、裏工作で闇に葬られた。

そして遂に到着した京都だが、生徒の自主性を重んじてガイドはいない。というより、麻帆良のように有り余るパワーを発揮する生徒達をガイドするなどというのはどこの旅行会社なども敬遠してしまい、結果的に麻帆良の修学旅行にはガイドがいないというのが通例だという噂がある。

これは表向きの理由でガイドがスパイであったりするという可能性があるのでガイドはいない。

だが、例えガイドがいても麻帆良一騒がしい３－Ａを引率したら、「話を聞かない」「勝手に行動する」「それで自分が怒られる」の三重苦の心労で潰れるのではないかとアスカは予測している。

そんなこんなの理由でガイドも無く、京都駅からバスに乗って最初に着いた目的地は清水寺であり、観光の前にやったのは全員での集合写真である。

集団行動より班単位での自由行動の時間が多いため、限られた選択肢の中で時間のかかる清水寺が選ばれたのはもちろん理由あってのことだ。

京都駅からほど近く、京都を代表する歴史的建造物として、今や国内外を問わず名が知れ渡っている。ユネスコ世界遺産にも登録されている寺院なので、毎年多くの学生達が修学旅行で訪れる場所であり、現代において修学旅行先にこの場所を選ぶのはもはや定番となりつつある。

なので「京都」の代名詞として生徒に触れさせるにはもってこいの古刹であった。また、若い生徒たちの興味を惹きそうなものもある。

もっとも秋には紅葉の名所として知られる場所であったが、四月の末という行楽や修学旅行シーズンとは違い時期が時期だけに人の気配は少ない。

本堂に差し掛かる頃にはクラスの興奮は最高潮に到達していた。

「京都ぉ！！」

「これが噂の飛び降りるアレ！！」

「誰か！！　飛び降りれっ！！」

「では拙者が」

「おやめなさい！！」

「（テンション高けーなーこいつら）」

常のテンションを倍加させた状態にある３－Ａの生徒たちは実に姦しく、桜子の絶叫が見晴らしのいい場所から京都の街へと響く。

それに裕奈が続き、変なテンションになった風香がビシッと指す。
それで楓が故事の如く飛び降りようとするのを彼女たちのストッパーを勤めているあやかが怒鳴って止め、その余りのテンションの高さに千雨が一人心の中で突っ込んでいた。

「わ――凄い。京の街が一望ですね――♪」

「はしゃいで落ちないで下さいね、ネギ先生（これが京都か……分身が来たことはあるけど、やっぱりいい）」

ネギも柵まで駆け寄り、少し身を乗り出してそこから見える景色を眺めて生徒と一緒にはしゃいでいるが、はしゃいでいるのはアスカも同様であり初めての京都ということで周りには分かり難いが感動している。

感動を覚えながらも人が多いということは、スリなんていう古典的方法で親書を奪う事もできるから周囲には気を配ることを忘れない。

しかし、出来るなら桜も散ってしまい殆どの木々は青々とした葉を生やしている春より、紅葉に映える秋に来たかったが、世間一般の修学旅行シーズンに重なって凄く混むらしいので何事も考え方次第だ。

「フハハハハーーーー！！　これが夢にまで見た彼の有名な清水の舞台か！！」

天気は良く、新緑に彩られた山には、命の躍動する生き生きとした魅力がある。風がそよぐと辺りの木々の枝がサワサワと音を奏で

歩くものたちの心を和ませるのだが、無粋にも手摺の上で仁王立ちして高笑いをする吸血鬼は、そんな事を言っていた。

学園でも茶道部と囲碁部に所属するぐらいに日本の文化が好きなようだが、どう考えてもやり過ぎである。

そんな主人の様子を撮影する茶々丸。まぁエヴァンジェリンならば、落ちても怪我を負うこともなかろうが、だからといってこのままやらせていいわけではない。

「は～い、皆さん騒いだり危険な事は止めて下さいね。じゃないとあんな痛い人だと思われますよ～」

欄干に立って叫び続けるエヴァンジェリンの脇を掴んで子供のように下ろす茶々丸を見て、飛び降りようとしていた楓は渋々と引き下がる。

他の人達も少し落ち着いて一様にエヴァンジェリンから目を逸らして他人の振りをする辺り、ああいう風には見られたくはないらしい。

「ここが清水寺の本堂いわゆる『清水の舞台』ですね。本来は本尊の観音様に能や踊りを楽しんでもらうための装置であり国宝に指定されています。有名な『清水の舞台から飛び降りたつもりで……』の言葉通り、江戸時代に実際に２３４件の飛び降り事件が記録されていますが、生存率は８５％と意外に高く……」

「うわっ！？　へ、変な人がいるーー！」

「夕映は神社仏閣マニアだから、詳しいよね」

微妙な空気になった一部の３－Ａの面々を尻目に、聞かれもしないうちから延々と清水寺に関する自慢の蘊蓄（がんちく）を披露する夕映。そのほとんどの人が夕映の言葉の半分も理解できていないだろうが、語る本人の表情は普段の無表情に近いものでもどこか生き生きとして見える。

神社仏閣マニアという彼女の趣味を知る何人かは、またか、というように肩をすくめているが、突然意味不明な言語を喋りだした夕映に裕奈が呆れとも驚きともつく表情をしている。

意外な知識を見せる夕映の言葉に、外国人ながらも感心して聞く超やネギのように興味深げに耳を傾けて素直に聞く人間は稀であろう。

本来の『修学旅行』という事をいうのなら実に勉強になる話ではあるが、やはり大半の生徒は舞台からの景色が面白いみたいだ。

しかし、清水寺で飛び降りて生存率８５％とは江戸時代の人が頑丈と考えるべきか、それとも木々の覆い茂り方が現代とは違うと考えるべきか、はたまたこれが神の加護というものなのか。

何はともあれ、それだけの高所故に眺めは絶景であったりする。

清水寺の周囲に生い茂っている緑の数々の向こう側に、京都の街並みが全て見渡せる。その向こうには同じく緑に包まれた山々も連なり、抜けるような青空と囀る鳥の声、サワサワと風が木を揺らす音が、より一層の趣を添えていた。

「そうそう。ここから先に進むと、恋占いで女性に大人気の地主神

社があるです」

夕映としては説明し忘れた事柄を何とはなしに口にしただけだったのだが、恋占いというフレーズが、一部の３－Ａ生徒に衝撃を走らせた。

「ではネギ先生、恋占いを私と」

「あ～！　いいんちょ、ズル～イ！　あたしも～！」

「あ、私も……」

「は、はぁ……」

夕映の言葉に真っ先に反応したのは言わずもがなネギに好意を抱いている者達で、敏感に反応したあやかがネギを連れて行こうとするのをまき絵とのどかが反応して後に続いた。

「ちなみに、そこの石段を下るとあそこ！　有名な『音羽の滝』に出ます。あの三筋水は飲むと、それぞれ健康・学業・縁結びが成就するとか……」

「縁結び！？　それだ！　ホラ、行こ行こネギ君ー！」

続いた下に縁結びの神社があるという夕映の言葉に真っ先に反応したのはまき絵で、他のライバルを差し置いて強引にネギの背中を押して音羽の滝に向かおうとする。

何故か鳴滝姉妹もまき絵がネギを押す手助けをしているが、こちらは恋愛云々と言うより、ただ『面白そうだから』という理由が大

きい。

「あ、コラまき絵さ……そこの人達！　抜け駆――いえ、団体行動を！」

その団体行動を真っ先に乱そうとしていたので、あやかの面子と欲望にまみれた制止は彼女たちに通用せず、慌ててネギの後を追いかける。

「全く委員長ったら」

「じゃあ、我々も行きましょうか」

「そうやなぁ。ウチも音羽の滝の水を飲んで、恋占いしよっと」

場所が変わっても相変わらず騒々しさに包まれている彼女達のやり取りに静観者に徹している他の面々は、苦笑いを浮かべながら、団体行動を乱さないために後に続く。

ネギを先頭に移動し始めたので、アスカは最後尾から生徒達について行ったのだが、何故か先程から悪寒が止まらず辺りを見渡すが何もなく、何なのかと頭を捻るが理由が分からない。

最後尾でゆっくりと石段を上がって縁結びの神で有名な地主神社に着く。注連縄を張られた岩が二十メートル程の間隔を開けて置かれた『恋占いの石』があり、岩と岩の間を結ぶ中間点であやかとまき絵が落とし穴に落ちていた。

「こんな所に落とし穴が！？」

「だ、大丈夫ですかまき絵さん、いいんちょさん！」

穴にはゲコゲコと鳴き喚くカエルがいて這い上がろうにも落ち方が悪かったのか、二人とも自力で這い上がれない状況でネギがまき絵、明日菜があやかに手を貸して落とし穴から引き上げる。

「何やってんのよいいんちょ。ズルでもしてバチでも当たったんでしょ」

「なっ……私はズルなどいたしませんわ！！」

「私が薄目を開けていたからかなー」

「こんな人為的なバチがありますかっ！」

泣き顔の二人を引き上げるとカエルを観察する、新幹線車内のカエルと同じように魔力と同じような物をネギは感じ取っていた。

そんな中、のどかだけが何事もなかったようにゴールしたことに気付いているのは木乃香・夕映・ハルナだけだった。

「確かにこんな人為的なものはないでしょう」

「アスカ先生！　分かって頂けますか！」

最後尾から生徒達の間をすり抜けて思ったことを言うと、あやかは理解者を得て何故かアスカの手を握り喜びを露にする。

「え、ええ……これは観光客を狙った悪戯かもしれません。ネギ先生、雪広さん、私は新田先生にこの事を伝えて来ますから、

その間、引率を頼めますか？」

「ええ、任せてください！」

「あ、うん」

十中八九、関西呪術協会の妨害であることは想像に難くないが、一般生徒に被害が出ている以上、放っておいたら他の人間にも被害は出るので上（新田）に報告する義務がアスカにある。

普通なら副担任補佐のネギだけに頼めばいいのだが、ネギでは上手く説明できるか不安で今も人の話をちゃんと聞いているのか分からないためだ。

新田に報告するにはアスカは３－Ａの引率が出来ないので、離れている間ネギだけでは一抹の不安を拭えない。なので委員長であるあやかにも頼んだのだが、余程理解者を得ることが出来たのが嬉しかったのか、その余りの意気込み具合に引いてしまう。

だが、ネギが妨害の方に意識を裂かれて返事が中途半端な分、足して二で割ったぐらいでちょうどいいか、とどうでもいい事を考えながら皆に見送られて報告に向かう。

新田に報告して後の対処を任せて急いで３－Ａを追ったのだが、音羽の滝に近づいてくると変わった匂いがアスカの鼻をひくつかせた。

「……これは酒の匂い？」

料理を作る時に使用したこともあるし、新田と飲みに行ったこと

があるのでこの匂いは知っている。本来なら香るはずのないそれが、あろうことか音羽の滝から漂ってきている気がしたのだ。

真偽を確認しようと、急いで現場に向かって見たものは道端に、『死屍累々』と言う言葉が何よりも似合いそうな感じで、寝転んでぐったりとしている３－Ａの生徒の約３分の１にもなる十人の生徒達だ。

周囲にほのかに香る匂いはアルコール臭で、倒れている生徒達の中で裕奈が柄杓を持っていることから滝水のどれかに酒が混入されていたのだという推測が成り立つ。

音羽の滝と言っても瀑布などがあるわけでもなく、ただ三条に分かれた水が流れているというだけに過ぎない。

その三条の水流一つ一つに、学業成就、健康祈願、縁結びの御利益があり、どれか一つを強く念じて飲めば叶うというのが音羽の滝の特徴だ。

「いいんちょさん、起きてください！　バレたら修学旅行中止の上、停学ですよ！」

夕映の起こし方は中々ハードでビビビビビビビビッとあやかの頬を連続ビンタしていた。

ネギとあやかに引率を頼んだはずなのだが、何でこんなことになるのか。頼む人選を間違えたかとアスカは思わずにはいれない。

「もしかして酔い潰れてるんですか？」

「はい、皆さんが飲んだ水の中にお酒が混ぜられていたようで」

少しばかり現実逃避していたアスカは横にやってきた刹那に聞き、何で酔い潰れるほどに飲むのかと溜息を漏らす。

滝の上を見ると「酒」と書かれた樽が置かれていて、縁結びの水に混ざるように混入されているのが見える。

そして先ほど『恋占いの岩』で大騒動をしたことから簡単に予想できる通り、恋愛にしか皆が集中していないのは、年頃なのだから仕方が無いだろう。

「アスカ先生、やはりこれも……」

「まあそうなんでしょうね、程度は低いですが」

彼らの目の前には、音羽の滝の水を飲んだはずが知らぬ間に酒を飲んで、通りのど真ん中で顔を赤くして酔いつぶれたクラスメートが倒れている。

遠目から見たときは少し心配もしたが、よくよく見れば実に気持ちよさそうな顔でこちらの気持ちも知らずに寝こけている。

あやかなどはイメージ的に食前酒とかで千鶴と普段から酒飲んでそうなのだが、そうでもないらしい。

そんなことを考えた瞬間、背筋にゾクリと来るものを感じて辺りを見渡すと千鶴がこちらを見て頭を傾げていた。

「ネギ先生！！」

「あ、アスカ!?　どうしよう、みんなが!!」

もしかして千鶴に考えを読み取られたのか、はたまた単純に勘なのか。どちらでもいいが恐ろしくなったので呼びながら倒れている生徒達の下へ行くと、ネギは生徒以上に慌てていて使い物になりそうにない。

「あなたは誰でもいいですから他の先生方を呼んできて下さい。私がその間に彼女達を見ておきます」

「え、あ、うん！　行ってくる」

ネギへの指示を出して、急いで他の先生方を呼びに行ったのを見届けずに倒れている生徒を一人一人見ていく。

未成年が酒を飲んではいけないというのは、法律や大人が飲ませたくないという下らない理由ではない。

未成年者の飲酒で危険なことに急性アルコール中毒がある。未成年者は自分が酒を飲める体質なのか、飲めない体質なのかをまだよく知らない人が多い。飲めない体質の人が、アルコールを多く飲むと急性アルコール中毒を起こしやすく、命に危険があり、その典型的な例がいわゆる「イッキ飲み」による死亡だ。

それに体が出来ていない子供では成長にも問題が出てくる可能性が高い。

他にもいろいろと理由はあるが長くなるので割愛する。禁止するにはそれなりの理由と言うものが必ずあるものだ。

一人一人見たが、酒飲みを見た経験は以前に数人見ただけでほとんど素人の判断に近いが、彼女達は単純に酔い潰れているだけで急性アルコール中毒ではなさそうだ。

そんなことを考えているうちに、意外と近くにいたらしくネギが新田やしずなを伴って戻ってきた。

「これは……何かお酒くさくないですか？」

「あぶぶぶっ！！　こ、これは……！？」

ネギは事情を説明せずに連れてきたようで、やってきた新田は倒れている生徒と酒の匂いを嗅いで疑問を覚える。ネギは何も考えずにアスカの指示に従って連れてきてしまい、遅まきながら事態を把握するが、飲酒のことが学園広域生活指導員の新田にばれたら、それこそ修学旅行が中止になってしまうと考えて言い訳をしようとする。

「どうやら音羽の滝の縁結びの水にだけ酒が混ぜられていたみたいで生徒達は気付かずに飲んでしまったようです。素人判断ですけど酔い潰れているだけで、急性アルコール中毒にはなっていないようです」

アスカはネギの言葉を遮り、下手に誤魔化すよりはマシだろうと考えて全てを話す。

新田はアスカの指差した先に証拠となる酒樽とホースが音羽の滝に設置されたままで、被害にあった生徒が学年でも指折りの優等生のあやかやのどかであるのを見て、念の為証拠の水を一口飲んで確

認して眉間に皺を寄せる。

生徒達は修学旅行ということで浮かれていただろうし、未成年なので酒を飲む機会もそうはないので、霊験あらたかな味と勘違いした可能性が高い。

先程の『恋占いの石』の件もあって修学旅行などの観光客を狙った悪質な悪戯と考えられる。

アスカとは飲みに行った時の帰りに酔い潰れていた人を見て、自分には分からなかった急性アルコール中毒になっていたのを看破したので信頼できるし、勿論後でしずなにも診てもらうつもりではあるが。

「全く、何て酷い悪戯だ。とにかく関係各所への連絡や対応は私がしますから、今日の予定では後はホテルに帰って夕食までは特に予定もないので、このまま旅館に向かいましょう。アスカ先生とネギ先生は生徒達をバスに。しずな先生は旅館の方に連絡して水を用意してもらってください。それと、しずな先生も生徒を見ておいてください」

「分かりました」

「はい！」

「はい、分かりました」

新田も生徒が浮かれて自分から飲酒したのなら罰則に基づいて修学旅行を中止して強制送還もありだが、今回は巻き込まれただけである以上は罪に問わない。

新田は『恋占いの石』の対処を頼んだ瀬流彦と急いで合流して、この事件の事も合わせて関係各所に連絡するため足早に去っていく。

しずながその場で旅館に連絡して、倒れている生徒を一人ずつ見ていく。

「そういうわけなので、皆さん酔い潰れてしまった人を歩けそうなものは自分で、そうでない人は手分けして運んでバスに乗ってください。それとまだ意識の有る人には、ジュース・ドリンク類は飲ませずに水を。寝かせる時は吐くと呼吸が危ないので顔と体を横に向けて……」

酔いつぶれた者達の近くを右往左往している生徒達に、アスカがしずなから見ても完璧な指示を出し、ネギも手伝って酔い潰れずにすんだ生徒達が酔い潰れた生徒に肩を貸しながらバスへと乗り込んでいく。

「さて……この分だと今夜辺りに動きそうだな」

取りあえず修学旅行中止は避けられ、酔いつぶれた少女たちを皆で手分けしてバスの中へと押し込み、ずっと清水寺で感動していたエヴァンジェリンと同行していた茶々丸をアスカが慌てて連れてきてホテルへと向かった。

第五十四話　修学旅行一日目と少年　2（後書き）

次回更新は『明日』午前０時です。その次は夜勤明けの休みなので投稿はなしとなります。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

第五十五話　　修学旅行一日目と少年　３（前書き）

夜勤なのに投稿を忘れていて出勤前に慌てています。

見直しも出来ていないので誤字などが沢山あるかも……

修学旅行編全１９話の第３話目です。

文字数は１１３５９字とマズマズです。

それではどうぞッ！！

第五十五話　修学旅行一日目と少年　3

修学旅行一日目の行程が終了した麻帆良学園の修学旅行生は、修学旅行中の宿泊施設“ホテル嵐山”に到着した。

嵐山は京都市街の西に位置し、国の史跡および名所に指定されていて春には桜、秋には紅葉の名所として多くの見物客が集まる。本来地名としては西京区（桂川の右岸）を指し、左岸は右京区嵯峨であるが、観光案内等では嵯峨地区を含めた渡月橋（とげつきょう）周辺全域を一纏めに嵐山と称する事が多い。

嵐山の中心部を流れる桂川にかかる渡月橋は嵐山の象徴になっており、渡月橋を挟んで上流が大堰（おおい）川で、下流から桂川となる。

バスで旅館に着くと軽く注意事項を伝えられた後、酔い潰れて眠ってしまった生徒達をそれぞれの班部屋に放り込んだ。

二、三、五、六班は酔い潰れたのが一人、二人の割合なのでそこまでの問題はない。

だが、四班は無事なのはアキラと真名の二人だけで亜子と裕奈、まき絵の三人が潰れ、一班に至っては美砂を除いて全員が潰れている。これは流石に修学旅行の初日に一人や二人だけでは可哀想だと他の先生方と協議して判断され、一班の美砂と四班のアキラと真名に限り、初日だけだが他の班の部屋へ移動する許可が出た。

酔い潰れた人も合わせて全員を部屋に押し込む。アスカの部屋は集まることが多いと思うので希望通り一人部屋に入って荷物の整理を一通り終えると、ホテルのロビーで今回の騒動について考えてい

たのだが、しずなに言われて大浴場に入っていた。

麻帆良女子中等部一行が滞在しているホテルの風呂は混浴の露天風呂なので、新田や瀬流彦、子供とはいえアスカやネギといった男性教員がいるので生徒たちと鉢合わないように、教員は生徒達より早く入浴するようにして時間帯をずらして入浴することになっている。

二つに別れた入り口に掛った暖簾を潜り、脱衣所の棚に備えられている籠に浴衣と下着を入れて、手拭のタオルだけ持って大浴場に入る。

「ふぅ～～～」

先に頭や体を洗ってから浴場に身を沈めると、その気持ち良さに風呂とは古くから心と体を休める場所であり、命の洗濯とはこういう事なのかということを強く実感した。

優しく自分を包み込んでくるような温泉の暖かさに、現在進行形で感じている心身の疲労が体から抜けていくように癒されていく。

４月というまだ比較的涼しい気温のためにできる湯気、演出効果を狙った天然の岩風呂。完全に日が落ちて青みの掛かった夜の空。自然に流れる風を感じながらお湯に浸かるという、何時ものお風呂では味わえない感覚は実に良いものである。

独り占めしているのでつい行儀悪くも身を委ねる様に水面に体を浮かべ、空を眺めながらアスカは時間も忘れて満喫していた。

家の風呂も決して狭くはないが、外の風景を楽しめる露天だとい

うこと、湯煙の間を縫うようにして夜空から降り注ぐ月明かりと星明りに照らし出されて風情があって『日本の風呂』というものを感じさせてくれる。

京都の空は麻帆良よりも人工の灯りが少なく自然が多いせいか、吸い込まれそうな夜が空を覆っている。

空には千切れ雲が浮かんでいるだけで、空気が綺麗な国で見た時ほど鮮明ではないが、それでも多くの星が暗い空に光っていて手を伸ばせば届きそうな錯覚を覚える。

「さて、どうするかな」

そんな子供染みた感傷を抱く自分に苦笑しながら、身を起こして軽く伸びをしながら今日の事を考える。

妨害というには余りにも温く、やっていることは小学生のイタズラと大差はない。

最初の電車でのカエル騒動でネギが親書を取られたが、あれはネギの不注意が招いたのが半数を占めているので、せいぜい相手も取れればいいな、ぐらいにしか考えていなかったと思われる。

『恋占いの石』は良く分からないが、『音羽の滝』は一般人を眠らせると意図は見えるが確証は無い。

普通に考えて、別段、酒樽に呪術の類でも仕掛けてあったわけでもなく、水と味が違うのだから一口目で気付かなかったのかという思いが浮かぶ。しかし、普段から騒々しいが素行においては比較的真っ当な３－Ａの生徒たちはアルコールに触れる機会がなかったの

だろうと判断する。

単純に考えられるのは一般人を巻き込んでやるという意思表示か、ここで止めろという警告なのか。

少なくとも複数の一般人が酔い潰れて寝ている以上、今夜直接的に動き出す可能性が高い。

「これ以上考えても仕方ないか」

と、現状は実害がない以上、済んでしまったことに頭を使っても仕方が無いし、そうなったらそうなった時も考えているのであっさりとこの件に関する考えを打ち切る。

「うん？　……流石にこれは不味いか」

女子脱衣所の方角から人の気配がしたので、どうやら考え事をした所為で思ったよりも長く入っていたから生徒の入浴時間になってしまったようだ。

これは不味いと急いで立ち上がり、念のために手拭を腰に巻いて急ぎ男子脱衣所に向かうが、動揺していたのと湯の中では思ったよりスピードは出ない。更に脱衣所から一番遠い場所にいたのが災いして、湯から出て脱衣所まで後少しというところでガラリと、女子脱衣所の引き戸が開かれてしまった。

「「あ」」

出した言葉は同時に。

開かれた扉の向こうには、３－Ａ出席番号１５番桜咲刹那の一糸纏わぬ文字通り生まれたままの姿。

月光の中に浮かび上がるようにまるで日に当たった事がないかのように透ける白く美しい肌に、その瞳と髪だけが肌とは対照的に夜のように黒い。

年相応な小さな手が握る白木の野太刀と同質の危ういまでの美しさがあり、まだ慎ましい膨らみや均整の取れた体つきが彼女が将来身につけるであろう今以上の美しさを予感させる。

引き締まってすらりと伸びた裸身を晒しながらも刃を構え微動だにしない凛然とした姿に、アスカは自らの置かれた状況も忘れ、一時我を忘れて見惚れてしまう。

思わぬ遭遇にお互いに向かい合ったまま、数秒の間、硬直された時間と沈黙が流れる。

「あ、あ、あぁぁっ……」

刹那は直ぐにタオルを巻いたが、全て見られたと考え羞恥から見る間に顔を真っ赤にしていき、条件反射的に手に持った野太刀、夕凪の柄を握る。

全裸を見られたことで絶賛混乱中の刹那は、見られた相手が誰かを認識しないまま現状を打開するべく、体は単純明快に慣れた命令を下す。

「斬が――――」

即ち、見敵必殺！　見られたから殺れ！　ぶっ飛ばして忘れさせろ！　何でもいいからとにかく殺れ！

「ちょっと待った――ッ！」

刹那が夕凪を抜き放って一太刀浴びせようとしたところで、アスカが一足で間合いに踏み込んで鞘から抜こうとしている腕の手首を掴んで阻む。

「っ！　何でアスカさんがここに！？　男湯は女湯はっ！？」

オーバヒートしていた刹那は途中で技を止められて、そこでようやく相手の正体を悟り、顔から険の色が消失する。それでも羞恥心が消えた訳ではなく、機関砲の如く何故生徒が入浴している時間、それも女子風呂にいるのかと疑問の言葉を捲し立てる。

「え～と、ここは混浴みたいです。男湯も女湯もありません。どうやら僕が長居し過ぎたようです」

まだ刹那が混乱しているのでアスカは掴んでいる手を離さないまま、暴れないように言葉での説得を試みる。

まだ女子脱衣所に人の気配があるので、この状況を外部に知られることは実力云々など関係なく社会的にアスカの敗北が決定してしまう。

「直ぐに出て行き「ひゃあああぁ～～～～～っ！！？」「この悲鳴……このかお嬢様！？　っ、まさか奴ら、お嬢様に手を出すつもりか……！？」……って聞いてないか」

アスカが言葉を続けようとしたが、開きっぱなしの脱衣所の奥から木乃香の悲鳴が響き渡った。刹那は慌てて悲鳴の聞こえた方向へと顔を向け、咄嗟にアスカが緩めた腕を振りほどいて向かって駆けて行く。

「お嬢様！！」

「あ、せっちゃん！？」

「何なのよこのサルっ！？」

刹那に遅れること数分後に脱衣所に入ってきた木乃香と明日菜に、どこからか出てきたデフォルメされた子猿達が二人の下着を剥ぎ取ろうとしていた。

刹那が脱衣所の奥にいた二人の下につき、その余りの光景に流石の刹那も呆けた様に口をあんぐりと開けて絶句してしまう。

「あっ、やっ、やーんっ」

その間に木乃香は抵抗も空しくブラも下着もサルに完全に脱がされ、え～～んと涙目になる木乃香。その周りを下着を持って踊るように飛び跳ねる小猿達を見て、刹那の堪忍袋の尾が盛大にブチ切れて大爆発した。

「こ、この小猿ども……！！　このちゃんに何をするかァァァァッ！？」

「きゃっ、桜咲さん、何やってんの！？　その剣、ホンモノ！？」

危ない光を放つ野太刀とブチ切れた刹那を前に、纏わりつく小猿に難儀していた明日菜は驚きの声を上げる。

刹那は斬る！！っと額に青筋を浮かべながら鞘からすらっと野太刀を抜き放ち、クラスメイトに引かれるのも構わない。中段に構えて全身に気を行き届かせ、跳ね上がった身体能力を活かして全力で地を蹴って突貫する。

その瞬間に刹那の裸身を覆っていたバスタオルは解けるが、意に介さず僅かな滞空時間に充分に気を高める。間にいる小猿を払いのけて着地と同時に木乃香を左腕で抱き抱え、夕凪で周りを円を描く様に振るった。

「神鳴流奥義、百烈桜華斬！！」

二人を中心にして剣から飛ばされた“気”の花弁が舞う。花弁はほんの瞬きにも満たぬ間に辺りにいた小猿を全て逃がすことなく斬り刻み、両断された小猿はその形を半ばから断ち切られた紙型に戻す。

幻想的な光景に傍で見ていた明日菜は見惚れ、刹那はその手に抱いた怪我一つない木乃香を見て一安心する。

「何かようわからんけど、せっちゃんが助けてくれたんやね。ありがとう……」

「あ……いえ……」

目を点にして呆けていた木乃香は、事情はよく分からないが刹那にはにかんだ様な笑顔を浮かべて礼を言う。刹那も同じような笑み

を浮かべて、言葉を濁しながら抱いていた腕を下ろして木乃香を解放する。

最近になって普通に話せるようになったが、護衛の件で木乃香に喜ばれたことがないので礼を言われると、刹那はどこか面映く感じてしまう。

刹那の頭には先程会ったアスカの存在は忘却の彼方へ行き、木乃香と二人で女同士全裸で向かい合って頬を赤らめている百合な光景に明日菜は問題は解決したようなので一人でそそくさと風呂に入る。

脱衣所に残っている二人が現状に気付くまで、残り3分。

脱衣所に突貫して行った刹那を見送り、どうしようかと悩んだアスカは、取り合えずこの騒動が外に知られないように結界を張ってガラガラと開いたままの引き戸を閉めることを選択する。

そしてさっさと男子脱衣所に入って浴衣に着替え、何かあった時に動けるように待機していた。しかし、壁の向こうから気の高まりを感じて何らかの技を使うと考え、壊したら不味いので女子側の壁に手を着けて脱衣場全体に防御結界を張って強化を掛ける。

その直後に何かを切り裂くような音が聞こえて静かになった。

落ち着けば感じられた式神の気配もなくなったので騒動は収まったと判断した。結界を解いて玉藻に確認を頼み、脱衣所を出ると風

呂に入りに来たらしいネギと鉢合わせする。

「これから風呂ですか、ネギ先生？」

「うん、見回りをしていたら遅くなっちゃって」

しずなに早目に風呂に入るように言われたのだが、行きの電車や清水寺の妨害で自分は何もできなかったからネギは念のため旅館の中と外を見回りしていて入浴時間が遅れてしまったのだ。

「ここは混浴ですし、今は生徒の入浴時間ですから入るならその後にしておいた方がいいかと思いますよ」

「……そうだね、それなら仕方ないか。時間になるまで、もう一回見回りに行ってくるよ」

アスカの言う事を考え、生徒と一緒に風呂に入るわけにはいかないので、ネギはもう一度見回りしようと考えて脱衣所から離れて行った。

ネギの背中が廊下の角を曲がって見えなくなると、アスカの後ろに忽然と玉藻が現れる。

「で、どうだった？」

「子猿の式神が木乃香を攫おうとしたが、刹那が切り払って増援もなく問題なしじゃ。術者は遠くから操作する遠隔式か、特定の時間か木乃香の魔力に反応して発動する遅延式らしく感知できんかった」

「こちらでも捕らえ切れなかったからね。と、なると遅延式の可能

性が高そうだ」

前者だとすると玉藻の感知エリアの中で力を発する事が出来るということになる。

探査の結界には何も反応はなく、電車の時と違って前兆と呼べるものは何もなかった事を考えるに、陰陽術にそんなことができるかどうかは分からない。それでも玉藻の感知を潜り抜けるとは考え難く、そうなると後者の可能性が高い。

「木乃香は若干の混乱はあるが予想の範囲内じゃが、明日菜は可笑しい事に気付いたじゃろうから後で聞きに来るじゃろうな」

「ふむ……分かった。明日菜さんはこちらで対応する。そっちは手筈通りに頼むよ」

「うむ、任せておけ」

そう言い残して玉藻はその場から姿を消し、アスカは脱いだ服を置きに部屋に戻りながら思考を続ける。

攫(さら)うにしては遠隔操作の式神だけで手緩いが、これを挑発と見るべきか。それとも二度目の襲撃はないと考えさせるための油断を誘う罠か。

例えさっきのが罠だとしても、その為の準備は独自に施して有るので抜かりはない。だが、敵よりも不確定要素（ネギ、明日菜）が入り込みそうなのが問題だ。

「どう出る？　……さん」

絶えず思考を続けながら、部屋へと一人歩みを向ける。

夜も更け始め、就寝までの長くも短くも無い時間。就寝時刻が近いというのもあるだろう。騒がしい３－Ａの生徒の半数、特にそういった行動に出るタイプの生徒の大半が酔い潰れているためか、ホテルの中は意外なほどに静かだ。

その為、覚悟を決めていた教師陣の肩を透かす形となった。

露天風呂を出たアスカは一度自室に戻って事前に調べた調査報告書を読む。少し時間を潰してからホテル内を見回りながら未だに起きている生徒達に部屋に戻るよう注意しながら一階のロビーへ向かう。

ロビーに到着するとホテルの正面玄関の上に刹那が小さな脚立の上に乗り、背伸びして何らかの符を貼り付けているのが見えた。

旅館の浴衣を着て、腰に夕凪を差しながら作業をしている刹那の姿は殊更に目立っている。

「これは式神返しの結界ですか？」

「え、あ、そうです。先程、露天風呂で西の術師による襲撃を受けましたので」

アスカは声をかけながら彼女の傍へ歩いていくと、刹那は振り向く。

アスカの顔を見て刹那は先程露天風呂で全裸を見られた事を思い出してしまい、顔を真っ赤にして少しだけしどろもどろになる。が、連想して襲撃されたことを思い出して意識して真面目な顔を作って言葉を続ける。

でも表情は真面目でも顔が赤いままなのでイマイチ締まっていない。

謝罪と合わせて刹那の代わりに脚立を片付け、ロビーに戻ってくると少し不満そうな顔をした明日菜がソファーに座っていた。

明日菜の隣りにいる刹那からすまなそうな視線を向けられ、アスカは大凡（おおよそ）の事態を予測できた。

電車での騒ぎや清水寺の出来事を不審に思っていたところに、露天風呂での事で何かあると思い、事情を知ってそうな刹那を問い詰めて吐かせたのだろう。

事実、先程アスカが脚立を戻しに行っている間に現れた明日菜に「私達友達じゃなかったの？」と言われて、最初は抵抗していた刹那もあっさりと折れてしまったのだ。

事情を説明された明日菜は「えぇっ！　私たち３－Ａが関西の魔法団体に狙われてる！？」と驚きの声を発し、刹那が消音の結界を張っていなければ周囲に木霊していただろう。

関西呪術協会や関東魔法協会の事がエヴァンジェリンの事件の時

に単語だけは聞いていたが、西と東は仲が悪いという内情は全く知らなかった。今回ネギが東西の不仲を解消するための学園長からの親書を預かり、今までのはその妨害だと、所謂警備責任者がアスカであることまで全て話してしまったのだ。

ぶっちゃけると刹那は小さい頃からの経験で自分の輪の中に入れる人間はかなり少なく、親しくなった人には木乃香のように頼まれると断れない性格をしているのが原因である。

ちなみに木乃香は酔い潰れたクラスメイトをバスまで背負っていたのもあって、疲れたのか部屋で寝てしまった。刹那は明日菜の報告を聞いて、木乃香はそれほど体力がある方ではないので素直に受け入れている。

「――――――――敵のいやがらせがかなりエスカレートしてきました。　このままではお嬢様にも被害が及びかねません。それなりの対策を講じなくては……」

「それで式神返しの結界というわけですか……手口から考えるに相手は関西呪術協会の呪符使いですからね」

アスカは二人の対面のソファーに座って話し出したのだが、呪符使いと言われても詳しい事情を知らない明日菜にはちんぷんかんぷんである。

疑問符を浮かべる明日菜を見て、刹那は話していなかった事を思い出して詳しい説明を始める。

呪符使いとは、古くから日本の京都に伝わる日本独自の魔法「陰陽道」を基本としており、呪文を唱える際に無防備になる弱点は西

洋魔術師と同じ。それ故、西洋魔術師が従者を従えているように上級の術者は善鬼や護鬼という強力な式神をガードにつけているのが普通で、それを討ち破らぬ限りこちらの呪文も剣も通用しないと考えた方がいい。そして刹那の流派である京都神鳴流は関西呪術協会と深い関係にある事、呪符使いの護衛として神鳴流剣士がつくこともあってそうなったら非常に手ごわいという事を刹那は話した。

更に、関西呪術協会は刹那が所属する京都神鳴流と親交が深い。京都神鳴流とは元々京を守り、魔を討つために組織された掛け値なしの力を持つ戦闘集団。呪符使いの護衛として神鳴流剣士が付くこともあり、そうなってしまえば非常に手強いと言わざるを得ない。

「うわわ……ちょっと何かヤバそうじゃん？」

「まあ、今の時代そんなことは滅多にありませんが……」

淡々と、その恐ろしさを説明されて全ての神鳴流が敵なのではないかと考えて焦る明日菜に、刹那がやや表情を緩めて一言を付け加えてフォローを入れる。

現代では昔に比べて公になっていないので魑魅魍魎が跋扈する闇が少なくなっている分、神鳴流と呪符使いのセットで仕事は減っているのは事実ではある。

「絶対にない、とは言い切れないですから、可能性として頭に入れておく事だけはしておいた方がいいでしょう」

今まで黙っていたアスカが戒めるように口を開き、一瞬だけ刹那は呆気に取られたような顔になる。かつて自分が所属していた神鳴流が、こんな事に関わることはないと思っていても絶対にないとは

考えられ無い以上、それで油断してしまったら元も子もない。

如何に神鳴流の大部分が関西の主勢力に味方しているとはいえ、フリーランスの連中が敵に回る可能性は十分にあるのだ。

「……そうですね。呪符使いがいる以上、十分に在り得ることですし」

そう答えながらも自身が所属していたが故に、無意識に信用していた事を自覚して刹那の顔に緊張が走る。

内情を知らない明日菜には何の事を言っているか理解できず、神鳴流が味方なのか敵なのか判断できない。

「結局神鳴流って言うのは、敵なの？　そうじゃないの？」

「彼らにとって見れば、西を抜け東についた私は言わば『裏切り者』でも、私の望みはこのかお嬢様をお守りすることです。仕方ありません。私は……お嬢様を守れれば満足なんです」

淡々と、刹那はテーブルを見ながらかつての仲間を敵に回した身の上を説明して、最後の言葉と共に儚い笑みを浮かべる。

裏切り者という汚名を甘んじて受け入れ、それを代償に木乃香を守ろうとしている彼女の献身的な姿勢に、前半の話の途中における重い空気から一転、場の雰囲気が幾分か和らぐ。

「よーし、分かったよ刹那さん！！　私も協力するわよ」

刹那が話し終わって訪れた沈黙の中、明日菜は不意に立ち上がっ

て刹那の肩にバンと一発入れるとそんな事を言い出した。

明日菜の好意に、協力を惜しまないと申し出てくれたことに刹那は嬉しく思う。

それらを黙って見ていたアスカは心の中で思っていることはあっても、別段何かを言うことはない。

「さて、そろそろ明日菜さんは部屋に戻ってもらえますか？　これから刹那さんと打ち合わせしないといけないので」

アスカはそう言いながら目の前の机の上に何枚かの詳細な京都市内の地図を広げる。

マップには３－Ａのメンバーの二日目や三日目の自由時間に使用する駅や通路等、西日本魔法協会本部に至る道や重点的に警戒すべき場所にマーカーが塗られている。

「ちょっと待って、私は?!」

協力すると言った矢先に外されている明日菜は思わず激昂するが、

「はぁ～、これから話すのは警備状況の確認や実際に行動を起こしてきた時どうするかですよ?　能力を持っているとは言っても、対抗策は幾らでもありますし、ただの素人でしかない貴方に何ができるというんですか?」

激昂をアスカにばっさりと即切り捨てられ、明日菜は言葉を続けられなくなる。自分が何か希少な能力を持っていても、ろくに武術や剣術を習っていたわけではないので素人であることに否はない。

だが、だからといって親友の木乃香や３－Ａのみんなが狙われているのに座して待つのは性分に合わない。

「前に言ったでしょう、あなたはこちらに関わるべきではないと。それに相手は同じ人間で、場合によっては殺し合いに発展する可能性があります。明日菜さんにそういう覚悟ありますか？」

他の生徒の力を当てにしているアスカでは説得力はないが、それでも彼女たちの戦力は明日菜を圧倒的に上回る。

確かに彼女の力も使いようによっては役に立つし、少しのアドバイスと背中を押すだけで簡単に戦力になってくれるだろう。

面倒見が良く、変な所で責任感の強い明日菜はこの事態を黙って見過ごす気にはならないだろうし、このまま強引に首を突っ込んで来そうだと簡単に推測できる。

だが、彼女が軽い理由で、人に言われたから、誰かを助けたいというだけの理由で舞台に上がってはいけない。

舞台に上がる時は覚悟を持った時でなければ、何時か明日菜は後悔する時が来る可能性がある。そこまで考えるのはアスカの杞憂かもしれない。それでも明日菜がこちら側に来るのなら「あの時、ああしておけば良かった」と後悔することがないように、そして覚悟を持ってからにしておきたい。

「でも、私にだって何か……！」

「分かっています。ただ、明日菜さんは積極的に関わらなくてもい

いだけです。複数の協力者もいますし、明日菜さんは木乃香さんの近くで何か起きないかだけを注意していてくれるだけで十分です。だからお願いです。これ以上、こちら側に関わらないで下さい」

ゆっくりとではあるが、断固とした口調でそう言って深々と頭を下げるアスカに明日菜は何も言えない。

明日菜はアスカが何も自分を邪魔に思って遠ざけようとしているのではなく、自分を思ってくれるからこそ、そういう場面から遠ざけるためにしてくれているのだと理解しているからだ。

戦力というのも、何でも真祖の吸血鬼だっていうやたらと強いエヴァンジェリンがいるのだから、と納得できてしまう。

アスカとしては本当ならば、来るべき時の為に彼女にもっと積極的に戦う術を教え込んだりすべきなのだろうが、今はまだ明日菜の覚悟はそこに達していないと考えている。

「……解ったわよ。何かあったら直ぐに教える。けどね！私は木乃香やみんなに何かしようとする連中が来たら容赦なく殴るからね！！」

「あ、明日菜さん！」

渋々とした感じで積極的に関わらないことは認めたが、周りに危害が及ぶなら殴る。それだけは譲れぬとばかりに明日菜は拳を握り締めて宣言して去って行った。

刹那は明日菜を止めようとするが、立ち上がったときには既に走り去った後で伸ばした手が虚しく揺れる。

「……ハァ……くそ……！」

もう少し明日菜に配慮した方がいいのではないかと思って、アスカに言おうとしたが後ろから微かに聞こえた溜息と小さく苛ただし気な声に振り返る。

が、そこには常と変わらない落ち着き払ったアスカの姿。一瞬、さっきのは聞き間違いかとも思ったが、確かに聞こえたのは間違いない。

だけど、アスカが普段通りにしているので聞くに聞けず、そのまま打ち合わせを続けた。

ロビーに二人を残して走り去った明日菜だが、直ぐに失速してとぼとぼと俯きながら5班の部屋へ向かう。

「私は、木乃香やみんなを助けたいと思っているのに……！」

思わず廊下を歩きながら少し大きな声が出てしまい、就寝時間を過ぎているので誰もいない廊下で口を押さえる。少し経っても誰も部屋から出てこない事から、聞かれなかったと判断して口を押さえていた手を下ろす。

アスカの言っていることは理解できる。修学旅行前に能力の希少性を散々説明されて、あそこで頭まで下げられたら積極的に関わろ

うという気にはなれない。

それでも何かがしたいと思って出たのがさっきの最後の言葉だ。

漏れる溜息を飲み込み部屋のドアを開けると、何故か部屋中に酒の匂いが充満していた。

そう言えば、夕映が水筒に音羽の滝の水を汲んでいたから、縁側に置いてあるのを見るに飲んだのだろうと当たりをつける。

のどかとハルナは酔い潰れていたのでぐっすりと眠っている。酒を飲んだと思われる夕映は、部屋にある備え付きのトイレの前で内股になって顔が真っ赤になり、生まれたての子鹿の如くプルプルと震えていた。

「……えと、夕映ちゃんどうしたの？　木乃香がいないみたいなんだけど……」

「こ、このかさんが、さっきトイレに入ってから全然出てこないのですう”～。私もう～～～～！」

その様子からどうしたのかは分かるのだが取り合えず夕映に聞くと、涙目のままで後ろにいる明日菜に振り向き、こうしている理由を話す。

それを聞いて何故木乃香が布団にいないのかと、一瞬誘拐されたのかと思っていた明日菜は一人納得して胸を撫で下ろす。

どうやら夕映は酒を飲んでトイレに行きたくなったらしい。

最初はまだ余裕があって夕映もちょっとだけ声が詰まるだけだったのだが、最後は掠れた声になり最早我慢の限界だとドンドンとトイレのドアを叩き出す。

「入っとりますえ～」

「うう”う～～～っ。漏るです～。わ、私にも我慢の限界とゆーものが……」

必死な夕映に返って来たのは無情の返事。それに夕映は泣きそうになるが、女の沽券に掛けて漏らすわけにはいかず、諦めずにドアを叩き続ける。

傍で見ている明日菜は、そんなに必死なら別の部屋のトイレを借りるかホテルのを使えばいいのではないかと思い、夕映に言おうとする。しかし、また「入っとりますえ～」と返事が返ってきて、流石におかしい事に気付く。

仮にも木乃香と2年以上一緒の部屋で暮らしているのだ。友達が必死になって催促しているのに、こんな暢気にしている訳が無く、もう少し慌てた声を出してもいい筈だ。

「このかさぁ～～～ん！！」

「木乃香～～～！！」

夕映は限界から、明日菜は現状の不審から躊躇など微塵も無く、二人でトイレのドアを蹴り開ける。

「お、お札が喋ってる～～～～！？」

「何でもいいから私におしっこさせて下さい！」

そこには木乃香の姿はなく、「入っとりますえ～」とトイレの蓋に張ってある奇妙な文字が描かれた札から木乃香の声が聞こえるだけだ。

明日菜にはそれは見覚えがないが、刹那が言っていた呪符という単語が脳裏を過ぎり、容易に何なのかを想像がついた。

夕映が急いでドアも閉めずにしだしたのを横目に、さっきトイレに入ったばかりだというならばまだ近くにいると考え、布団の枕元に置いておいた携帯でアスカに木乃香がいないことをメールで知らせながら、縁側に行って外を見る。

メールなのは近くに夕映がいるので電話で話すと聞かれる恐れがあるからで、見渡すと窓の真下を走り抜ける人よりも大きい猿と、その手に抱えられた木乃香の姿。

こういう時、明日菜が取るべき選択は既に決まっている。

「待て～～～～！！」

ただ自分の心のままに従って、木乃香を取り戻すため後を追った。

第五十五話　修学旅行一日目と少年　3（後書き）

次回更新は『明後日』の午前0時です。

明日は更新しないのでご注意を

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

第五十六話　　修学旅行一日目と少年　４（前書き）

今日は夜勤明けの次の日の休みで本当になにもなく、一日ぐうたらと過ごしました。

良きかな良きかな。

偶にはこんな日があってもいいよね？（基本休みはこんなばっかの気もするが）

修学旅行編全１９話の第４話目で一日目終了です。

文字数は１１７５５字と最近はこれいくらい？ですな。

それではどうぞッ！！

第五十六話　修学旅行一日目と少年　4

明日菜が去った後も薄暗いロビーで二人は打ち合わせを続けていた。

直近の護衛に刹那、何かあった時のフォローに回る明日菜、魔力感知や全体を司るアスカという布陣で対応することになる。

他のメンバーもいるが、それは何かあった場合のみ動くので普段関わることは無い。

所詮この少人数では限界があるので当然隙もあるがこれ以上を望むことはできない。

相手が転移を使えば簡単に拉致されるが、それでも痕跡が残るので逆探知することができる。逆探知を防ぐにはある程度転移を重ねなければならないし、連続転移ができない術者でも転移魔法符を使えば代用は可能だが、一枚数十万もする符を何枚も使い捨てにできるとは考え難い。

「二日目で届けることができればよかったんですけどね。面倒事はさっさと片付けたいですけど、やはり自由時間が短すぎますか……」

「そうですね。半日で行って帰って来れるほど近いわけでもないですし、簡単な場所でもありませんから。やはり予定通り三日目に行くべきかと……」

地図の上に修学旅行のしおりを広げて考えるが、二日目の班別行

動では奈良を回ることになっているので行って帰ってくるには時間的に厳しい。

元々予定で三日目の自由行動で京都を選択しているので、木乃香と刹那の二人だけで総本山に向かうつもりだった。

普通なら班別で動かねばならないが、学園長から特別に許可を貰っているので班の残りの生徒たちまで巻き込むことはない。

妨害してくる関西呪術協会の総本山に行くなんて危ないと思われるかもしれないが、立場としては反対しても実際に動きに出る人間は少ないだろうとアスカは当りを付けている。

実際、表立って妨害したり抵抗したりするよりも、形だけは穏健派を気取っていた方が上手くいった場合の実入りがいい。強硬派に裏から手を回していれば、上手くいった時に自分の発言力や権力を得られるだろうと考えている立場の人間は多いとアスカは得た情報から感じていた。

「誘拐が目的なら今夜来る可能性はかなり高いと思います」

「どうしてそう言いきれるんですか？」

打ち合わせも終盤に近づき、ふとアスカが漏らした言葉に刹那が食い付く。露天風呂の事で今夜はもうないだろうと安心していたので気が抜けていたと言っていい。

「電車や清水寺での事で相手に先回りされています。これはこっちの修学旅行のコースとその予定は向こうに知られていると思った方がいいでしょう。三日目の行動も漏れているとしたらその前に動く

と思います。更に一度襲撃した直後という事で気が緩んでいるかもと思って木乃香さんか親書を狙ってくる事は十分在り得ます」

あなたのようにね、とアスカに言われて気が緩んでいた事を見透かされ、刹那の背中が氷柱が入ったかのようにゾクリと鳥肌が走る。

動揺している刹那を冷静な目で見ていたアスカは言葉を続ける。

「今、向こうの策によってクラスの半分が酔い潰れてダウンしています。一般人を巻き込みたくないと考えているのなら、これ以上に絶好の機会は……」

アスカの続けていた言葉が途中で途切れ、何かに気付いたようにいきなりあらぬ方向に顔を向ける。

「どうかし「木乃香さんの魔力が部屋から移動しています」そんな馬鹿な?!」

どうしたのかと聞こうとした刹那の言葉はアスカによって遮られ、それを聞いた刹那は在り得ないと立ち上がって狼狽する。

アスカは刹那の狼狽を放っておいて集中するように顔の位置を戻し、眉間に皺を寄せて探査に意識を傾ける。

「今、旅館を出て渡月橋の方向に移動しているが速すぎる。ちっ!攫われたか。刹那さん、直ぐに後を追ってください!!」

「はい!」

何故侵入者がいたのに探査に引っ掛からなかったかはさておき、

刹那に後を追うように指示を出す。言われた刹那は持っていた夕凪を手に、脱兎の勢いで木乃香を取り戻すために正面玄関から外へ出て行く。

「さて、こちらも動かないといけないか……」

相手が行動に出た以上単独犯とは考え難く、複数犯だとすると一人で追って行った刹那の身が危ない。何も刹那の実力を過小評価しているわけではないが、何事も備えあれば憂いなしだ。

今回の目的も偵察であった場合、こちらの戦力を晒すことになるが背に腹は変えられない。一人思考して結論を出し、救援を送るため袖から携帯を取り出して電話を掛けようとしてメールが届いてくることに気がついた。

「先走ったか、明日菜さん」

『木乃香いない。攫われた』と一文だけのメールが明日菜から数分前に送られている。それだけで明日菜が追っていっただろうことは容易に察することが出来た。

今さら止める手段はなく、他に方法はないアスカは急ぎ救援を送るため電話をかけた。

木乃香を攫った下手人が渡月橋を渡っている時に刹那が追いつき、その直ぐ後に窓から目撃した明日菜が合流した。

街灯に照らされる相手の姿に一瞬唖然としてしまうも、追いかけながら刹那が帰るように言う。しかし、明日菜はこれを拒否。

追いかけながら問答をするが、明日菜から強烈な意思を感じてそれどころではない刹那は説得を断念する。最優先は木乃香の奪還。仕方なく協力して木乃香を取り返す事となった。

刹那としても油断した隙をつかれたので、明日菜に強くものを言えなかったのだ。

故に木乃香を連れ去った大きな猿を射殺すような視線で捉えながら、刹那は唇を噛み締め自身を責める。

新幹線での蛙、恋占いの石での落とし穴、音羽の滝での酒混入。どれもアスカに言われるまで一般人を巻き込んだ酷い悪戯、その程度にしか思っていなかったのだ。

露天風呂での出来事にしろ、左程本気だと思えず、直接誘拐などという手に出てくるとは考えていなかった。

木乃香を害するということは所属する関西呪術協会や関東魔法協会も敵になるいうことだから、アスカに言われていてもどこかで大丈夫だろうという思いがあった。

刹那の思いはちりぢりのまま術者を追い、駅に入ったのだが、まだ終電の時間になっていないのに人がいない。

如何に終電間近とは言え、客はおろか駅員すらいないのは人払い

の呪符が原因だ。術者が事前にこの呪符を準備した上で誘拐に及んだのであろうことは直ぐに分かる。

駅の柱に貼り付けられた人払いの呪符に気付き、逃走経路をきっちりと確保して行動する等の計画性のある行動に組織的な動きでは、とその表情は険しくする。

人っ子一人いないホームに停車している列車の中に、無人なのに明かりが点いている電車が止まっており、術者が駆け込む姿が見えた。

「逃がすか！！」

術者の後に続いて閉まり掛けのドアの隙間に身を滑り込ませ、刹那と明日菜はギリギリ電車に乗り込むことができた。

電車で逃げられれば追跡は不可能になっていたが、電車に乗ってしまえば最早相手は袋のネズミ。乗り込んだ二人は走る大猿を追いかけて、最前部の車両へと追い詰めようとする。

「フフ……。ほな、二枚目のお札ちゃん、いきますえ」

追い詰められてる筈の術者は横滑り式の電車の扉を越え、車両と車両の繋ぎ目を渡ってから突然振り返り、ひょっこりと現れた小猿の式神が一枚の呪符を追ってくる二人に投げて扉を閉める。

何の札かは分からないが、密閉空間となった車両であれを発動されては拙いと判断した刹那が扉と式神ごと呪符を両断にすべく、駆け出すも間に合わなかった。

「お札さん、お札さん。ウチを逃がしておくれやす」

小猿が札を投げて術者の詠唱と共に術が発動し、発光と共に堰を切ったように洪水が迸る。水は刹那達が乗り込んだ車両だけではなく、その後続車両全ての内部を溢れ返させ、ドアや窓の隙間から漏れた水は風圧に圧されて、幾筋も後方に流れていく。

術者は札の発動後、別の車両に避難しているので被害はない。

これで別に殺すまで行かない。何れは到着する駅で扉が開いて水は流れ出てしまうが、それまで息が持つことは無い。

「な、何この水!?」

「くっ！」

あっという間に車両内は水でいっぱいになり、二人はゴボゴボと水の中でもがく。特に裏事の経験がない明日菜は突然水中に囚われた事に慌てふためき、パニックを起こしている。

刹那は自分の非力さを嘆きながらも、現状の打開策を必死に模索していた。呪符より発生した水量から推し量れる術師の技量は猿の見た目に反して相当に高く、自身が使える補助程度の術ではこの水を破る事はできない。頼みの綱である夕凪も、水の抵抗で満足に振る事ができず、正に八方塞りであった。

その時遠い昔、まだ剣を握る前の事を思い出し、目を見開いて夕凪を握る腕に集中して気を纏わせる。

肺に残った少ない空気を音にならない声で吐き出して夕凪が振る

われ、その剣先から【神鳴流奥義・斬空閃】が放たれた。

研ぎ澄まされた気の刃が水を切り裂いて奔り、そのままの勢いで電車のドアを打ち破る。未だ増え続ける水が隣の車両にも流れ込み、術者を同じく水中に引きずり込む。

その後、少しして別の駅に着き、扉が開きホームへ全員が流れ出て、辛うじて溺死を免れる。

「ケホッ。み、見たかそこのデカザル女。嫌がらせは諦めて大人しくお嬢様を返すがいい」

「ハァハァ、なかなかやりますなあ。しかし、木乃香お嬢様は返しませんえ」

刹那の降伏の要求を猿の口から顔を覗かせた女は笑って突っぱね、小猿に抱えさせていた木乃香を再び抱えなおして刹那達を置いて駅の出口へ走り出す。

「ま、待て！！」

着ぐるみはかなり水を吸っている筈なのに、それを感じさせないほどの軽やかさと速度でどんどん遠ざかっていくのを二人は慌てて追いかける。

「む、ここにも人払いの呪符がっ！　やはり最初から計画を！　くっ、私がついていながら！！」

追いかけながら途中で先程の駅と同じく人払いの呪符が貼り付けられた柱を見つけ、この誘拐が予め計画されているものだと知る。

元々、関西呪術協会は裏の仕事も請け負う組織であり、こういった強行に出る者がいても不思議ではない。

この強行を予想し、アスカが途中で木乃香の誘拐に気付かなければ、自分は何もできなかった事だろうと考える。

学園長と打ち合わせをした時に組織的に行動して動く事はないだろうと言われて、あっさりとそれを信じた自分の予測が如何に甘いものか思い知らされた。

詰めの甘さに自分自身を責めながらも、刹那は改札を飛び越えて飛び出し、明日菜はついていくのが精一杯。

辿りついたのは京都駅の外。と言ってもこの駅はショッピングモールも兼ねているビル型の駅なので、厳密にはビルの外には出ていない。

ついた場所は京都駅の名物と言える百を軽く超える長い長い大階段。その中頃にある踊り場に術者が待ち構えていた。

「フフ……よーここまで、追ってこれましたな。そやけどそれもここまでですえ」

式神を防護服代わりにしていたのを脱いで刹那達を見下ろす術者は、美人と言っても差し支えの無い眼鏡をかけた二十半ばといった女性。腰まで届く長い黒髪をしており、肩が見えるデザインをした着物を着ている。

彼女の名前は天ヶ崎千草。関西呪術協会に所属する呪術師だ。

着ぐるみに空いている口の穴から水が浸入したのか、服も水浸しでピッタリと張り付いてふくよかな胸や括れた腰といった女性としてのラインを浮き彫りにしていた。

だが、その反面彼女の目は冷たく光っており、傍目には追い詰められたようであるが微塵もそんな気配はない。

「おサルが脱げた!?」

「私は貴様と問答する気は無いぞ、覚悟ッ!!」

明日菜が見当違いな感想を出しているが、刹那は階段を一気に駆け上がって居合いの構えで千草へと詰め寄る。

二人の距離は十数メートル以上、刹那なら気を使えばこの距離を二、三歩で詰められる距離。

「このかお嬢様を、返せぇーっ!」

何かをさせる前に千草を潰すため、疾風もかくやという速さで踏み込む。夕凪を振りかぶって飛び掛る刹那だが、無防備な千草は避けようともせず余裕とした表情を崩さない。

「えーい!」

あと一跳びで剣の間合いに千草を射程に収めようとした時に、千草の背後から唐突に第三者の人影が飛び出す。飛び出した人影は、刹那の跳躍の軌道に合わせるように両手に持った二刀を構えてそのまま突っ込んでくる。

「くっ」

辛うじて反応した刹那は慌てて防御の為にその脚を停めざるを得なくなり、刀と刀が衝突して金属がぶつかり合う甲高い音が響く。刹那は刀同士で反発しあって離れ、体勢を崩しながらも素早くバックステップを踏んで現れた第三者から間合いを取る。

相手は、空中からの勢いを殺しきれずにごろごろと地を転がり、服についた埃を払いながらゆっくり立ち上がる。

刹那の視線の先にいたのは、眼鏡をかけた小さな少女の姿だった。フリルやレースの飾りがついたゴシックスタイルのピンク色のワンピースに鍔広の白い帽子。そして眼鏡を掛けた愛らしい容姿とは裏腹に両手には太刀と小太刀が握られていた。

刹那はぶつかり合った時に、乱入者の剣筋を見て最悪の状況になった事を知ってしまう。

（しまった！　まさか神鳴流の遣い手が護衛についていたのか！？）

自分の太刀筋と似通った一撃を感じて刹那は、頭の中に可能性として入れていても、まさかアスカに言われていた神鳴流剣士が、このような謀反紛いの仕事に護衛として付いていることに驚愕を禁じえない。

自身が神鳴流剣士の見習いであるが故に刹那はその恐ろしさを良く知っているので、易々と呪符使いを捕らえることはできそうにない。

素人の明日菜がいることを考えればこちらが圧倒的に不利だ。

「あいたたー、どうも～神鳴流です～～～。おはつに～」

「え……お……お前が、神鳴流剣士……？」

「はい～～、月詠いいます～～」

と、乱入者は間延びした声で自己紹介する。刹那は目の前の少女が同門という事もあり唖然として思わず聞き返す。

間延びした口調で挨拶をするところを見れば、両手に持っている太刀と小太刀を抜きにしても、想像していた神鳴流剣士と著しく違う容貌に刹那はとまどいを覚える。

「見たとこ、あなたは神鳴流の先輩さんみたいですけど、護衛に雇われたからには本気で行かせてもらいますわ～」

「こんなのが神鳴流とは……時代も変わったな」

剣を構えなおしながら、そう思ってしまうのは刹那が正当な神鳴流を学んできたが故に仕方のないこともかもしれない。

剣士として奇態な格好のことばかりではなく、武器を選ばないと言っても対化生専門といえる神鳴流にも稀な二刀使い。木乃香を誘拐した賊の手先でもあり、大手を振って自らの流派を名乗るとあれば内心穏やかならざるものがある。

だが、現状では対化生を前提とした野太刀の使用を旨とする正統派神鳴流の刹那に対して、太刀と小太刀という二刀を持っていると

いうことは対人を前提としている月詠では相性が悪い。

「ふ……甘く見ると怪我しますえ。ほな、よろしゅう月詠はん」

二人の後ろに立つ千草は、表情の変わった刹那を見て注意とも挑発とも取れる言葉を発して月詠に頼む。

「で、ではいきます。ひとつお手柔らかに――」

そう言うと同時に、笑みを浮かべたまま月詠は刹那に斬り掛かった。

予想通り、魔物相手用の長い野太刀を使う刹那は対人用の二刀を使う少女相手ではやはり相性が悪い。

刹那が持っている『夕凪』は、彼女の小柄な体格に比べてかなり大振りな野太刀なので月詠の小太刀のスピードに追いつけないのだ。

刃渡りの短い二本の刀を使い、死角を突くように刀を繰り出し対人に特化した月詠の連戟は、ほとんど同門や化生相手しか戦ったことのない刹那にとって慣れない戦闘スタイルの為、かなりやりずらい相手である。

「え～い、やぁ、たぁ、とぉ～」

どこか間の抜けた掛け声だが、その剣筋はそれに似合わぬほどに速く、苛烈で刹那は攻めるどころか防戦に追い込まれて焦りを隠せない。

間合いを詰め寄られて本来の距離を取れないので野太刀を思うよ

うに振り回すことが出来ず、更に手数の差で刹那は押される。

刹那の野太刀と月詠の二刀が火花を散らし、風を断ちながら左右から、突き、袈裟、唐竹、逆袈裟、払い、切上、虚実を交え、緩急をつけながら剣と殺意を交し合う。

（い、意外にできる……まずいぞ！！）

今の時代神鳴流を修める人間は昔ほど裏の仕事は多くない。死に物狂いで修めても表ではろくに使えないため実のところ、そう多くないのだ。

なので、特殊な出自と確固たる目的を持っていた刹那は同年代でも飛び抜けた力を持ち、それなりに神鳴流内で名が知られていた。弱ければ幾ら幼い頃の知己であっても護衛に選ばれる筈もなく、本人もそれなりの力があることを自負している。

二刀流や刹那と互角に以上に渡り合う技量の持ち主ならば、京都にいた頃に耳に入ってもおかしくない。だが、月詠という名を刹那はついぞ聞いたことが無い。

「ざーんーがーんーけーん！」

「くっ」

間延びした声だが奥義の威力も申し分なく、刹那は飛び退いて何とか避けたが流れは完全に月詠に傾いている。

実力的には、そう大差はないが木乃香を取り戻さなければという焦りが刹那の剣を鈍らせ、防戦一方にさせている。

先行した刹那に出遅れ、現れた月詠と戦闘を開始している間、明日菜も行動を起こしていた。

「木乃香を返しなさ――――――い！！」

術者に向かって精一杯の威勢を込めて吼えながら、木乃香を取り戻すために走って階段を昇り始める。だが、術者は明日菜の威勢など何処吹く風で表情を変える事無く、懐から二枚の呪符を取り出す。

「猿鬼！　熊鬼！」

千草の呼び声と共に現れたのはファンシーな見た目の猿と熊のぬいぐるみ。

これだけなら一見にして可愛らしい姿で終わるのだが、その大きさが二メートルを越えていると可愛らしい外見も不気味に見え、ある種の圧迫感すら感じさせる。特に熊鬼と呼ばれた方の熊のぬいぐるみには、殺傷力のありそうな鋭い爪を備えており、道端で会ったら一目散に逃げる事を推奨されるだろう。

「ウチの猿鬼と熊鬼はなかなか強力ですえ、ほら遊んでやり。まあ、命だけは助けといたるわ」

「くっ、卑怯よ！」

実質三対一の状況に、明日菜はさっきの威勢とは逆に弱気を滲ませる。それでも気を取り直して突っ込もうとした瞬間、何時の間にか接近していた猿鬼のボディブローが無防備な脇腹に入り、吹き飛ばされて階段を転げ落ちる。

「……ハッ……うう、い、痛い……」

衝撃で意識が飛びかけたが、体中の痛みで急速に引き戻される。

着ぐるみの丸い手は柔らかいのと、かろうじて脇腹に入る前に防御が間に合った。実質のダメージは階段を転げ落ちた時にぶつけた怪我のみで大事には至っていないが、心はそうではない。

喧嘩はしたことがあっても平和な日常を生きてきた明日菜は当たり前の如くこのような戦闘などした事などない。希少能力があっても戦闘する術も知らず、攻撃手段も持っていない明日菜の心は容易く折れかける。

心のどこかで裏の世界や戦闘に関しても楽観視してしまうのは、喧嘩レベルしかしたことがない明日菜では仕方のないことだ。

そしてさっきは猿鬼だったが、殺傷力のありそうな鋭い爪を持った熊鬼だったらどうなるか、それが理解できないほど明日菜は愚かではない。

逃げ出さないだけでもほんの数ヶ月前まで裏を知らなかった少女からすれば驚きだ。恐怖から体を動かすことは出来なくても、目だけで抗っているのだから十分に驚嘆すべきことだろう。

「所詮は見習い剣士と素人中学生。足止めはこれで……」

千草は簡単に撃墜された明日菜を見てただの素人であると言う確信を強めるが、まだ力のある目で見てくることに驚いていた。それでも自身の障害にはなりえないと判断し、追撃はしないが起き上がってきても対応できるように近くに熊鬼を待機させている。

月詠と戦闘を続ける刹那は横目に見て焦るが、目の前の敵に精一杯で駆けつける事ができない。二人は木乃香を救出することもできぬまま、完全に追い詰められていた。

これでは勝てないと刹那の戦闘者としての部分が、冷静にそう判断している。

自身は月詠に抑えられ、明日菜は戦意は衰えていないが戦力にならない。前方には符を構えた術者と式神、この状況下を切り開けると思うほど、刹那は自身の力に自惚れてはいない。

「ほな、さいなら。木乃香お嬢様はもらっていきますえ～」

戦況の有利を実感し、くるっと背を向けながら術者と猿鬼が、木乃香を肩に担いで去ろうとするのを見ていることしか出来ない刹那と明日菜に絶望感が満ち溢れた時だった。

――パン！　パン！　パン！

何処からか軽い発砲音が聞こえると同時に二体の式神の頭が吹き飛び、術者の体中に仕込んであった守りの護符が発動して銃弾と拮抗する。

「むっ！」

千草の護符が発動した瞬間に何者かがやってきて、頭が吹き飛んで消滅した猿鬼から落ちた木乃香をひったくる。

「楓ちゃん!?　どうしてここに!?」

「真名もいるでござるよ」

木乃香を助けたのが楓だと分かり明日菜は驚くが、楓の言葉も聞いて何故二人がここにいるのかと疑問が先に立つ。何もかもがいきなりすぎて混乱してしまう。

月詠と打ち合って少し離れ、先程の発射音と楓がいることから目の前の事に集中しすぎて、ようやくアスカと援軍の事を思い出した。

恐らく、自分がホテルを飛び出した後に何らかの方法を使って二人を送り出してくれたのだろう。

「ちっ、……の差し金かいな。潮時やな。月詠はん、退きますえ」

「それは残念ですけど仕方ないですね～」

望みの者は奪われ、相手に援軍が来て自身も式神を倒されてしまっては自分達が不利だと、千草は冷静に考える。

新たに現れた者の言葉と先程の発砲音から、もう一人はスナイパーと思われる。木乃香を奪われ、戦力的にこちらが不利ではこれ以上戦っても益はないと判断して千草は潔く撤退を選択する。

意識が自身から離れていた刹那から大きく後ろに飛んで術者の脇に立ち、その間に千草は新たに出した呪符から式神を出している。

「今夜はここまでにさせてもらいますわ」

「せんぱ～い、また殺り合いましょうね～」

刹那が月詠に詰め寄ろうとした時には、別れの挨拶を残して式神に乗り、跳躍して瞬く間に京都の夜の闇に消えてしまった。

「あっ、逃げたっ！」

「向こうが逃げるのであれば深追いをする必要はないでござるよ」

明日菜が声を上げ、刹那は一瞬追撃を考えたが木乃香の存在もあるのと、罠に引き込まれる可能性は否定できないので楓の言葉に頷く。

大事な木乃香の状態が心配になり、抱えている楓の傍による。顔を見ると何か術を掛けられたのか、意識こそないものの、騒動にも気付かずに寝息は穏やかで規則正しくこれといった問題もなく無事な様子だった。

敵が去ってようやく動けるようになった明日菜を介抱するために楓から木乃香を受け取り、アスカがいなければ木乃香を連れ去られていた自身の不甲斐なさを責めていた。それでもライフルを持って現れた真名に驚きの声を上げる明日菜を横目に、今はただ木乃香を取り戻せた事を喜んだ。

時は刹那がホテルを飛び出し、アスカが携帯で呼び出した楓と真名に転移魔法符と木乃香の浴衣につけていた発信機を受信する装置を渡して見送って暫くした後。アスカは見回りの一環で一つ一つの部屋を見回り、最後に六班の部屋を訪れていた。

部屋では縁側で音羽の滝から水筒に入れてくすねてきた酒を飲んでいるエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルとチャチャゼロ、そして傍に控えている絡繰茶々丸と布団で寝ている二人の少女。

寝ているのはザジ＝レイニーデイと誘拐されたはずの近衛木乃香。

寝ている二人を避けて縁側まで歩き、茶々丸が対面の席を勧めるのを手で断ってエヴァンジェリンの斜め横に立つ。

「異常なし、ですか」

「はっ、私がいるのだぞ。見縊(みくび)ってもらっては困るな」

「信用していますよ。それでも確認と言うものは必要です」

二人の周囲にだけ消音結界を張っても、夜という事でアスカは思わず小声で話しかけるがエヴァンジェリンは割り切って普通に話す。

今、攫われているのは木乃香に化けた玉藻で、例え取り返せなくても自力で帰還することなど容易い。

つまり最初から木乃香は攫(さら)われてなどなく、【変化の術】で化け

た玉藻と摩り替わって彼女はこの六班の部屋でエヴァンジェリンと茶々丸に守られていたのだ。

何故こんなことをしたのかというと目的は、敵の本当の狙いの確認と敵の炙り出し。

実は他にも玉藻に頼んで色々してもらっているが、今は関係のない話である。

露天風呂での事は判断できず、旅館内に隠れていることも考えて炙り出す為にこの作戦を思いついた。

「上手く引っ掛かってくれたようだな、敵は」

「予想通り、と言うべきですかね。向こうも中々の手練で、実際に動かれるまでほとんど把握できませんでしたし」

「恐らくこちらの予定を知られているのもあるのだろう。そうなると奴(やっこ)さんは術者としても、戦闘者としても中々にやるようだぞ？」

全てはアスカの推測になるが、手口から見て修学旅行の予定は向こうに筒抜けになっており、こちらが着く前にホテルに先回りしていたのだろう。

露天風呂の騒ぎで、こちらに今日の襲撃はないと油断させてずっと潜んでいた敵が行動を開始した、とアスカは見ている。

少なくともホテルに着いてからはアスカの結界や、露天風呂騒ぎの後に刹那が設置した式神返しの結界があったのだから突破したとは考え難(にく)い。

外部から来たのなら必ず結界で探知できるはずだし、唯一の引っ掛からない可能性である外と中の入れ違いも無かった。

となれば、敵は結界を張る前からホテルに潜伏していたと考えられる。アスカの結界を潜り抜けるほどの術者だとしたらもはや手に負えないが。

アスカは露天風呂の騒ぎの段階で、その可能性に思い至ったので玉藻と木乃香を摩り替えたのだ。

案の定、木乃香に変装した玉藻に護衛をつけずに一人にしたら動き、恐らくアスカ達が到着する前から隠れていたと思われる術者を炙り出す事に成功した。

「お前は中々に悪辣だよ。私の敵に回したくないタイプのな」

エヴァンジェリンとしてはアスカのように二重、三重に罠を張り、どうにか破ってもまだ保険を掛けていそうな相手と好き好んで戦いたいとは思わない。こういうタイプの人間は隙が実は囮だとかいう厄介な手合いで、どちらかといえば真っ向勝負で相手を屈服させることを好むエヴァンジェリンからしてみれば戦いたくない相手だ。

事実、ここまで事情を話し協力させていながら【変化の術】の存在を秘匿している。あくまで周囲の目からは姿が変わって見える幻術だと説明してあり、彼女もそれを信じた。

まさかその人そのものの姿形に変われるなど誰が考えられるか。

彼女の前では幻術で通し、離れてから【変化の術】を行っている

ので真実を知るものはいない。

実行犯にしても同様で、【変化の術】はそれほど難しいものではない。よく見知ったものなら、型通りに術を使えば容易に化けることが出来る。変化したまま他の術を使ったり、格闘をしようと思えば、あとは別の話にはなるのだが、いずれにせよ玉藻には単純に化けることは簡単なことだった。

「それは光栄、と言ったほうがいいですかね」

当然、こんな作戦のこと刹那達には話しておらず、バレなければ話す気もない。お陰で相手に戦力を知られたのは痛手ではあるが、【変化の術】のことは極力知られたくないので仕方がない。

楓に持たせた盗聴器から耳に付けたイヤホンから木乃香（玉藻）の奪還に成功した事を聞いていた。

「ギリギリのタイミングで奪還に成功したようです」

明日菜が攻撃された時には叫び声を上げかけたが、聞こえてくる会話から大きな怪我はしてなさそうなので胸を撫で下ろす。

「別に奪還しなくても自分で帰ってこれるんだ。わざわざ戦力を晒さなくても良かったんじゃないか？」

「さあ、どうでしょうか」

「ふん……狸め」

エヴァンジェリンの言う通り本当ならもっと楽な方法もあるのだ

が、刹那達に、特に明日菜に現状を教える為でもある。

大体の明日菜の性格は把握しており、放っておけば必ず足を突っ込んで来るだろう事は容易く予想できる。流石に殺されそうになれば玉藻に救援を頼んであるが、そもそも向こうにその気がなかったのは僥倖だ。

少なくとも今回、何もできなかった彼女はこのまま関わるか、関わらないかを決めなくてはいけない。

それがどんな選択であれ、彼女には後悔しない道を選んでほしいとアスカは思っている。

六班の部屋を出てホテルの前で待っていると、刹那は木乃香を背負い、楓はボロボロな明日菜を支え、一人やれやれとした表情の真名が帰ってきた。帰りの分の転移魔法符も渡していたのでホテルの近くに転移して、そこから歩いてきたのだろう。

「見事にボロボロですね。治しますから動かないで下さい」

「……あ、うん」

「……はい」

ボロボロな明日菜と切り傷だらけの刹那を治癒魔法で治し、木乃香を部屋に寝かしてから許可を出して風呂に行かせる。

上がってきた面々の髪を魔法で乾かし、部屋に戻っていくのを見届けてアスカは一人ロビーで寝ずの警備を続ける。

こうして、麻帆良学園中等部三学年の修学旅行の一日が終わったのだった。

第五十六話　修学旅行一日目と少年　４（後書き）

今日からようやく修学旅行後の執筆？に入りました。改定前のないのは久しぶりなので中々思うようにいかないです。

構想では上手くできているんですけど文章にするのが難しい。

次からは二日目突入です。

次回更新は『明日』の午前０時です。明日はまた夜勤なので、その次の日は更新しませんので注意を。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

第五十七話　　修学旅行二日目と少年　１（前書き）

現在時刻　１５時０５分、今日も夜勤頑張ってきます。

修学旅行編全１９話の第５話目で二日目が始まります。

文字数は１０４８３字と少なめです。

それではどうぞッ！！

第五十七話　修学旅行二日目と少年　1

天ヶ崎千草による木乃香（実際は変化の術で化けた玉藻）の誘拐未遂事件から一夜明けた翌日、麻帆良女子中等部３－Ａの面々が宿泊する【ホテル嵐山】の五班の部屋で、一人の少女が細々とした声で何かに向かって話し掛けていた。

「あ……あの――」

その声の主は出席番号２７番宮崎のどか。

彼女が話し掛けているのは、画用紙に描かれて書かれて切り抜かれて二頭身ほどに可愛らしくデフォルメされているが、赤い髪に実用性の無さそうな丸眼鏡を掛けたスーツを着た少年。つまり好意を寄せる副担任補佐――――ネギ・スプリングフィールドの姿が、絵は土台に突き刺さった固定された針金に貼り付けられてみょんみょんと揺れている。紙の横には「パル作」と書かれた紙が付けられていることから考えて早乙女ハルナが自作した物であろう。

「ネギ先生――」

『ハイ、何ですか――？』

横にピョンピョン動いているネギの顔が書かれた紙に、まるで教会で礼拝しているかのように、両膝を突いてのどかは話しかけていた。

絵なので当然帰ってくるのはネギの声ではなく、マネした自分の声である。傍から見ると一人遊びのようだが、彼女にはこれをする

ちゃんとした理由が存在している。

そもそもの始りは二月初頭の、ネギが修行のために教師をするため麻帆良にやってきた日にまで遡る。

放課後にネギの歓迎会があるので図書委員の仕事を早く終わらせるために本を何冊を運んでいた時のことであった。彼女の非力な力では１５冊を纏めて運ぶのは大変で、傍目から見てもフラフラとして危なかった。

そして広場の手すりの無い階段を下りている時に足を踏み外してしまった。

そこから先は落ちる恐怖で眼を瞑ってしまったのどかには定かではない。もしかしたら若干とはいえ意識を失っていたのかもしれない。

取りえず気がついた時には自分はネギに抱えられて怪我一つない。どうやらネギに助けられたらしいことは直ぐに分かった。

助けてくれた礼を言おうとしたら当のネギは何故か明日菜に連れ去られてしまったが歓迎会でお礼と図書券と渡すことが出来た。

その後ののどかの気持ちが周りに促された面があるのは否めない。なにしろ彼女たちが通っているのは女子中だ。異性との関わりなど家族や教師などといった限定的なものになるので囃し立てるのは当然と言えた。彼女の親友二人も恥ずかしがり屋で、いつも前髪で目を隠しているような引っ込み思案な性格ののどかの常ならぬ積極的な行動をここぞとばかりに応援した。

初めて好意を持った異性、と言えば聞こえはいいが最初から異性に向ける好きといったものではなかった。彼女の中の想いが変わっていったのは、時々自分たちよりも年上なのかと思うくらいに頼りがいのある大人びた顔をすることに気がついた頃からだろうか。

普段はみんなが言うように子供っぽくて可愛いのだけれど、そういう表情を見せるのはネギが自分たちにない目標を持ってそれを目指して何時も前を見ているからだと分かった時、彼女の想いは淡く実り始めた。

それだけで勇気を貰えるから本当は遠くから眺めているだけで満足だった。

でも、今日こそは自分の気持ちを伝えてみようと想った。

「よろ……よろしけれべ、き、今日の自由行動――――……私達と一緒にまげ……まご……もご」

元来の恥かしがり屋であるため、彼女はネギを本日の自由行動の同伴者として誘うために事前に声を掛ける予行練習をしている。しかし、上手く話せずに口が回らないので間違ってしまい、結果は芳しくは無い。

練習なのに噛み噛みで絵を前にした練習でさえこの惨状。これでは本番など出来るはずもない。

「その……私達と一緒に回りませんかー？　回りませんでしょうかー」

修学旅行二日目は奈良へ行く事になっており、ネギに自由行動を

一緒に周らないかと誘う練習をしたことで、最初、絵なのに緊張して何もいえなかった状態に比べれば格段にマシになってきている。

折角の修学旅行なのに一日目の途中から何故か記憶がないだけに、今日こそは一緒に歩いて色々と話したりして仲良くなりたいのだ。まさか酒を飲んで泥酔したとは思うまい。

「のどかー朝食だよー」

「一階大広間に集合です」

練習していたのどかの耳にふすまを開けて入ってきた綾瀬夕映と早乙女ハルナ、同じ図書館探検部という部活に入っているのもあって気心知れた友人達の声が届く。

『はい、いーですよー宮崎のどかさん』

「よ……よ～し～」

一応練習で言えるようになったのどかは、ネギの声真似をして自分に気合を入れる。浴衣を脱ぎ急いで制服に袖を通して、戦場に出る若武者の様に髪を後ろで短く結い上げ、身支度を整えて数多のライバルがいる大広間という名の恋の戦場へと赴いた。

修学旅行二日目の朝御飯の時間。大広間に生徒だけでなく嵐山のホテルに泊まっている麻帆良の関係者が全員、朝食を取るために揃

っていた。

膳の上に並ぶのは、浅く焼き目のついた皮に香ばしい匂いの鮭の塩焼き。その横には炊き立てらしくつぶつぶと米の立った真っ白なご飯に、漆塗りの椀に若布と豆腐が入った味噌汁が並び、小皿にはほうれん草の御浸しに柔らかそうな厚焼き玉子が添えられている。

それは海外の人や一昔前の日本人が思い描くような和の食卓の伝統的といって差し支えないメニューである。

「それでは麻帆良の皆さん。いただきます」

『いただきまーす！！』

シーズン以外は主に団体客の宴会に供されるその広い畳敷きの部屋に、マイクとスピーカーによって拡声されたアスカの声と、日本人でも食欲をそそり、お腹を減らすメニューを前に麻帆良の生徒達の元気の良い声が木霊する。それを合図に、大広間に幾つもの食器と箸を鳴らす音、朝食を咀嚼する音が控え目に響き始めた。

徐々に話し声が大きくなっていき、昨日の夕飯は率先して騒ぐ生徒達が皆、酔いつぶれていた為静けさは病的といっても良かったが、この騒々しさこそが３－Ａらしいと言える。

「うー、昨日の清水寺からの記憶がありませんわ」

「せっかくの修学旅行の初夜だったのに、くやしー」

まだ、二日酔いで苦しんでいる者もいるが、それよりも初日の夜に寝てしまった方を悔やむ者が多い。

お祭り好きで構成される３－Ａの生徒達が修学旅行の初夜という騒ぎどころを逃したのだから、所々で嘆きの声が聴こえてくる。

この様子では、初日の分も楽しもうと今夜は荒れるだろうなと容易に予測できる。教師たちは静かだった昨夜の分も合わせて今夜は騒がしくなると予想して、止めなければならない立場にあるので朝から憂鬱（ゆううつ）な気分であった。

アスカは話には聞いていたが本当に日本の関東と関西では味付けが違うことに驚きつつ、手に持った箸で白米を口に運びながら辺りに目を移すと、何処か覇気が無く落ち込んだ様子の明日菜と刹那と、二人の間に座る木乃香が心配そうな視線を向けているのが見える。

特に落ち込みようが激しい明日菜は何かを考えているのか眉間に皺を寄せながら溜息を吐く。溜息の合間に食事を口に運んでいるので、明日菜の様子に気付いた人も声を掛けづらい。

原因は言うまでもなく昨日の一件で、刹那は自身の油断や未熟さを、明日菜は敗北と何もできかなった無力感が原因だ。

帰ってきた二人を見て、性格的に考え込むだろうと予測したアスカが露天風呂から上がった二人に、旅館の人に許可を貰って眠れるようにホットココアを作って二人に飲ませる。ホットココアには遅効性の睡眠薬が入っており、ミスや油断を考え込んで布団に入っても寝れなかった筈の二人は容易く眠りに落ちた。

睡眠薬を入れたのは疲労回復だけが理由ではなく、ぐっすり寝てもらわなければ木乃香本人と変化した玉藻を交換できないのだ。まあ睡眠薬もあって快眠した二人は肉体面では全快しているので、交

換が理由だとしても彼女達にも利益はある。

「どうしたん、せっちゃん？　明日菜？」

「な、なんでもないわよ……」

「そ、そうです。何でもないです」

「それならいいんやけど……」

彼女達を挟んで座っている木乃香は、刹那と明日菜を心配して声を掛けるが二人は曖昧に笑って返すだけ。木乃香も納得はしていないが、そう言われては無理に聞き出すことも出来ずに渋々と引き下がる。昨日は寝ている間に全てが終わったので彼女は事情を知らないので二人の様子がおかしくとも理由が分からない。

そんなやり取りをする三人から視線を外したアスカだが、表情や雰囲気に出ていないので誰も気付いていないがかなり不機嫌だ。

元々警備のために瀬流彦と一日交代で寝ずの番をするので、徹夜明けだからという理由で不機嫌になったわけではない。皆が寝静まっている深夜に関東魔法協会、関西呪術協会の両者に木乃香が誘拐されかけた事を伝えて増援や支援を要請しても、結果は芳しくなかった。

関東魔法協会の方は、そもそも送れるなら始めからしている筈。ある程度予想していたのでそうでもないが、関西呪術協会の対応がアスカをどうしようもなく苛つかせている。

連絡しても増援だけでなく、支援すらなしで犯人達への対応もほ

とんどしない。独自にアスカが調べて人手が出払っているからだと知らなければ、ただの怠慢か関西呪術協会自体が関係していると思うだろう。

それでも他の生徒を巻き込むわけにはいかず、向こうに抗議を言っていた途中に電話を切られた。人が話していた時に勝手に切られ、アスカは思わず携帯を握りつぶさなかった自分を褒める。

自分達の管轄内で起こった事なのに碌に対処をしようとせず、人手が足りないということを理由にして犯人への対応もこちらにほとんど丸投げしてくる関西呪術協会に怒りを持っても致し方ないことであろう。

犯人に対する捜査はしているだろうがこれでは根本的な解決にはならない。

唯一の救いは、二日目は初日の襲撃で向こうもこちらの分析や準備もあるだろうから、直ぐに手を出してくる可能性が低い事だけだろうか。

だからといって油断はするつもりはないが、寝る前に刹那から犯人の話を聞いているので、相手同様こちらも独自に動ける時間がある。

アスカは、まだ半分残っていた味噌汁を飲み込みながら今日の予定を頭の中でシュミレートする。

『ごちそうさまー！！』

朝食を存分に平らげて大広間を後にし、それぞれが自由行動の準

備に自室へ戻ったり、ロビーで話し合ったりと様々。

そんな中、自分はどうしようかと悩んでいるネギに緊張気味に近づく生徒。親友達の発破により、ネギを誘おうとしているのどかだ。

普段は顔を隠してしまっている前髪も、後ろでポニーテールに結んでいるので素顔が丸見えの為に真っ赤になっているのがよく分かる。

「あ、あの……」

「ネギくーん！！　今日ウチの班と一緒に見学しよー！！」

「わー！！」

のどかが自分なりにかなりの勇気を振り絞り、小さいながらもネギに声を掛けた途端、横からまき絵が大声で誘いながらネギに抱きついてしまったため、遮ぎられる形となった。

魔力で身体強化しているとはいえ１０歳の子供の体では１４歳の体を抱きとめる力が足りず、まき絵のタックルというか抱きつきにネギの体が大きく傾く。

「ちょっ、まき絵さん！　ネギ先生はウチの３班と見学を！！」

「あ、何よー！！　私が先に誘ったのにー！！」

「ずるーい！　だったら僕の班もー！！」

まき絵を押し退けてあやかと鳴滝風香もネギに迫り、一瞬でロビ

ーの中が大騒ぎになる。

激しい押し問答にネギはあわあわと慌てるだけで役に立たず、普段なら制止する他の教師はその場にはいなく、彼女たちの争いは激化していくばかり。抱きしめ、引っ張り、触り、摩(さす)り、と収拾がつかない状態にへと発展していく。

ネギを中心とした騒動の後ろでのどかは懸命に声を絞り出しているが、如何せん彼女の前方に居る三人は声も動きも大きく、彼女の想い人までその声は届かなかった。

気付けばこの騒ぎを聞きつけた殆どの班の人間がロビーに集合し、結果のどかは押されて人混みの外の方に追いやられてしまう。

「あ、あの、ネギ先生！！……よ、よろしければ、今日の自由行動……私達と一緒に周りませんかー！？」

最早誰が何を言っているのか解らない喧騒の中、のどかが勇気を振り絞り、必死の決意で叫ぶと同時にロビーが静まり返る。ネギの奪い合いをしていたあやか達も普段大人しいのどかが声を張り上げた事でピタッと止まるが、そんな周囲の反応を当の本人には気にする余裕は無い。

「宮崎さん……」

声の主がのどかとネギも分かり、一緒に行って関西呪術協会の妨害ではないかを考え込む。ネギには特使として親書を関西呪術協会の総本山へと持っていく仕事があるが、それは京都であって奈良ではない。

昨日の清水寺以降何の妨害もなく、親書は常に持ち歩いている以上は簡単に奪えないし、元よりどうしようかと考えていた誘いを受けて断る理由はない。

「わ、分かりました、宮崎さん。今日は僕、宮崎さんがいる五班と一緒に回ります！」

『おー！！』

普段は大人しく引っ込み思案、おどおどした印象が強かったのどかがネギをゲットしたことに一部始終見ていた他の生徒も、この結果に驚く。

積極的な行動に周囲の人間は驚きながらも彼女の成功を祝福し、喜びに笑顔を綻ばせるのどか。

ちなみに、アスカは事前に特定の班と一緒に回らないと明言しているので誰かに誘われることはない。

ネギと同様に教師とはいえ子供なので、仕事ではなく特定の班と一緒に回ってもいいという許可は出ている。それを断ってアスカは仕事（見回り）をする事を選択したので食事後は自室に戻って準備をしていたのだ。

京都同様、奈良にも吉野や飛鳥など見るべき場所は多い。

紀伊半島中央の内陸部に位置し、北西部に奈良盆地、北東部に大和高原、それ以外は大台ケ原や近畿地方最高峰の八経ヶ岳（八剣山）といった紀伊山地が広がる。県土が海域と接することのない内陸にある県では全国で最も面積が小さい。また、可住地面積も全国一狭い。

平城京が置かれていた奈良時代には、シルクロードの終着点として国際色豊かな天平文化が花開き、大伽藍が建ち並ぶ都として数々の貴重な文化財が創り出された。国宝建造物数は日本最多。

文学の面では古事記、日本書紀、万葉集、風土記など国内最古の史書や歌集が編纂され、平安京への遷都以後も南都と称されて、日本の宗教・文化の歴史において大きな影響を与えた。

現在は年間を通して新旧の行事で賑い、国際観光文化都市として国内外から多数の観光客が訪れている。

ネギを含めた五班と最近刹那と仲が良い木乃香と明日菜の願い（護衛等も含めて）で一緒にいる六班が来たのは有名な奈良公園。

太政官布達により明治１３年（１８８０年）２月１４日開園。都市公園としての正式名称は「奈良県立都市公園　奈良公園」といい、総面積は５０２ヘクタール。周辺の興福寺、東大寺、春日大社、奈良国立博物館、なども含めると総面積はおよそ６６０ヘクタール（東西約４キロメートル、南北約２キロメートル）に及ぶ。通常はこの周辺社寺を含めたエリアを奈良公園と呼ぶことが多い。

公園内には多くの国宝指定・世界遺産登録物件が点在し、年間を通じて日本国内のみならず外国からも多くの観光客が訪れ、日本を代表する観光地の一つとなっている。奈良の大仏や鹿（約１２００

頭）は国際的にも有名で、奈良観光のメインとなっており、修学旅行生の姿も多く見られる。東大寺修二会やなら燈花会、正倉院展、春日若宮おん祭など古都ならではの見ごたえのある行事も数多い。

塀・柵・門などがなく入園料も不要なのでどこからでも、３６５日・２４時間散策することができる。

ここを起点とすれば、さほど移動に時間を費やすことなく奈良を満喫できるという学校側の思惑もあって、この奈良では行動範囲と服装に制限は設けられていたもののある程度の自由行動が認められている。

奈良公園には平日だというのに多くの観光客が訪れており、麻帆良と同じように修学旅行と思われる制服姿の一団も存在している。自由行動が主体で班行動の麻帆良中学とは違って、彼等の行動単位はクラス単位で移動しているようだが。

「ほほぉ～これが大仏か」

一緒に来た六班、エヴァンジェリンは「奈良の大仏」等の歴史的建造物に興味を移し、茶々丸を連れて早々に離脱。ザジは公園内にいる鹿にジャグリングを披露しており、六班は刹那以外、班としての纏まりがない。

とはいえ、それほど離れていないが五班も二つのグループに分かれており、必ずしも仲が良いといえる状態ではない。

人通りの中にも平気で出没している鹿に先頭でネギがはしゃぎ回り、その横をハルナと夕映に背を押されながらのどかが並ぶ。四人に数歩分遅れながら明日菜、木乃香、刹那が付いて行く形となって

いる。

明日菜と刹那も気持ちを切り替えて楽しもうと無理矢理にでも元気を出し、それぞれで鹿に餌を与えている。

「わあー！」

「えへへ……ネギ先生……♪」

鹿に餌を与えて驚いているネギを、周りが呆れと仕方が無いなといった感情の入った目で見る中で、のどかは微笑みながら熱の入った目で見つめる。

古来より「恋は盲目」な物であると先人達は言うが、傍から見るとスーツを来た小学生ぐらいの少年を熱い目で見つめるのどかの姿は少し危ない。

「よくやったー！！　のどかー！！」

「きゃー！！」

恍惚とした表情をしてネギを見詰めていたのどかは、ハルナとパックのジュースを飲んでいる夕映に蹴られるように飛びつかれる。

「見直したよ！　あんたにあれほどの度胸があったなんて！！」

「感動したです」

「え、えへへ……うん、ありがとー♪　ネギ先生と奈良を回れるなんて幸せー……もう、今年は思い残す事ないかも……」

ホテルでのやりとりを改めて彼女達は褒め称え、のどかは幸せそうに頬を赤く染めて満足気な笑みを浮かべる。

「バカァッ！！」

「はふう！？」

ハルナがのどかの前で両手を叩くという、細かい芸をしつつ怒鳴る。

ハルナは自分の両手を叩いただけなので、顔には何の痕跡も残ってなく、のどかには何ともない筈が思わず頬を押さえてしまうのはびっくりしたからだろう。

打たれた振りをしたのは左の頬のはずなのに右の頬を押さえている辺り、実は余裕があるのかもしれないが。

二人の直ぐ傍に夕映も佇んでいる。が、ハルナの悪い癖が発揮されていることを悟り嫌な予感を感じた。

「この程度で満足してどーすんのよ！！　ここから先が押し所でしょっ！！」

イマイチ締まらない空間だったが、ハルナは直ぐに真面目な表情になりのどかにグイッと顔を近付けながら説明する。

「――――――告るのよ、のどか。今日、ここでネギ先生に想いを告白するのよ」

「……え～～～～！？　そ、そんなの無理だよぅー！！」

ハルナによって落とされた爆弾にのどかもそこまでは予定どころか、想像もしていなかったので悲鳴を上げて驚くのも無理もない。

幾らホテルで同行する約束を取り付けれたと言っても、そこまでの勇気は持てないようだ。誘えた現状に満足してそれ以上踏み込めないのだ。

しかし、狼狽するのどかにハルナは反論を許さない勢いで言葉を並べて丸め込もうとする。二人について来た夕映も二人の接点を増やすべきだと判断して励ましの声を掛けたのと、恋人になれば明日の班別完全自由行動日に私服デートを出来ると言う認識をのどかに与えた事が決定的となった。

「よし、木乃香にも話して協力してもらおう！！　夕映、ネギ先生とのどかを二人っきりにするわよ！！」

「ラジャです」

「あっ、ちょっまだ心の準備が――……」

それでも簡単に決心なんて付くはずもなくもじもじと身をくねらせたのどかが多少は傾いてきた反応を出す。それを見て、ここは強引にセッティングした方がいいと判断する二人はのどかに背を向けて一目散に駆け出す。引っ込み思案なのどかに対してハルナのように引っ張っていくタイプの人間が傍にいることは、彼女にとっての幸運か不運か。

慌てた様子で駆け出した二人の行動を止めようとするのどか。で

も、スイッチが入った二人をのどかが止められるわけもなく、伸ばされた手は誰も掴むことはない。

顔を真っ赤にしながら遅れて暴走気味の二人を慌てて追うのどかであった。

その道にいる人は明日菜と刹那だけで鹿や他の人の姿はなく、小鳥の囀りや木々のざわめきが耳に響く。

「全く、パルと夕映ちゃんは何を考えているのかしら」

「まあまあ」

明日菜達はのどかとネギを二人っきりにするためにハルナと夕映に追い出され、当の四人は何処かに行ってしまい姿はない。

この場に木乃香がいないのは飲み物やお菓子を買いに行っているからだ。明日菜が買いに行くと言い、木乃香は落ち込んでいる二人をリラックスさせるために一人で買いに行ってしまった。

売店は気で強化した刹那なら秒で行ける距離にあり、かつ木乃香の傍には式神が常にいるため何かあったら直ぐに対応できるので木乃香に任せたのだ。

それに、先日の襲撃で大なり小なり二人は思うことがある。

刹那の、まさか狙われるはずはないと楽観していたところでの襲撃で、アスカがいなければ何もできなかったという思い。木乃香を守るのは自分だという自負を持っていた刹那は力不足を思い知らされたが、そこまで深刻に考えていない。自分で守りたいという思いはあるが、裏に関わる者としてもう気持ちの切り替えはできている。

深刻なのは誰が見ても何かあったと分かる明日菜だ。刹那のように気持ちを切り替えることができず、まだ表面上は普通を装っているが、その心中は焦りや無力感に苛まれている。

つい数ヶ月前まで、魔法無効化能力（マジックキャンセラー）という能力はあれど、本人にはその自覚がないので神楽坂明日菜は普通の女子中学生に過ぎなかった。

中学二年の二学期からアスカ来訪という環境の変化はあっても、大きく何かが変わることはなかったが、2月に自分のクラスの担任教師となったネギが彼女を非日常へと誘う切掛となる。

それが運命なのか誰かが望んだものであるかなどは明日菜には判断はつかなかったが、それでも普通だが少し変わった日常が続いていく筈だった。

だが、この修学旅行で木乃香が何者かに攫われたのだ。アスカに事前に言われていたが目の前で攫われてジッとしていることなど明日菜には不可能。

だが、意気込みとは裏腹に敵に一撃で伸されて何もできず、下手したら邪魔をしただけかもしれない。

「ねぇ、私、どうしたらいいんだろ……やっぱり関わらない方

が良いのかな？」

どうにかしよう、どうにかしたいと思いながら何も出来無いばかりか、足を引っ張るだけかもしれない。そんな思いが明日菜を支配していた。

「……それは私にも判断は付きません。正直なところ私はお嬢様をお守りするのに手一杯で、あなたの事まで手が回りそうにないのです。というより、その、むしろ……すいません」

言いにくそうに言葉を紡ぎ、最後に謝る刹那を目にして自分は足手纏いにしか過ぎないのだと理解し、明日菜は肩を落とす。

希少な能力があっても、命の奪い合いに発展するかもしれない戦いに身を投じるには余りにも力が足りず、腕力にはそれなりの自信があるものの、まともに実戦経験もない人間など何の役にも立たない事ぐらい、誰に言われなくとも分かっている。

「明日菜さんよりも強い龍宮や楓もいてくれますし、万が一の時にはエヴァンジェリンさんも協力してくれます。アスカ先生も怪我の影響で戦えなくても補助や作戦面を一手に引き受けてくれています。何も明日菜さんが戦う必要はないんです。穏やかにいることに何の負い目も感じなくていい筈です」

「分かってる、分かってるけど……っ！」

刹那も幼い頃から木乃香を守りたい一心で、恐らく自分などには想像も浮かばないような厳しい鍛錬に励んで来たと前に聞き、他の皆も明日菜など歯牙にかけないほど強いのだ。

それでも事情を知りつつも守るどころか守られ、親友のために何もできない自分が不甲斐なく、何よりも腹立たしい。

「明日菜さんの能力の事もあります。裏の世界に関わらずに済むのならば、それでも良いんじゃないですか？」

それは刹那の半妖としての生まれから出てきた言葉でもある。木乃香にしろアスカにしろ生まれの関係上、その世界に身を置くしかない。

でも、能力はあっても明日菜は違う。少なくとも外部に存在を知られなければこのまま普通の世界に生きていくことができる。能力を知られなければ自分から関わったり、巻き込まれたりしなければ一生を平穏無事に過ごせる。それが本来あるべきだった彼女の未来だと刹那は思っていた。

明日菜自身、自分達がいる京都・大阪・奈良ではそんな風な組織間の戦いが起きているのは分かっている。ファンタジーだの何だのと言おうとしても、それが魔法使いといっても人である以上は色々な違いがあってぶつかり合うこともあると理解している。

自分は足手纏いに過ぎず、みんな自分よりも強いのだから任せてしまえばいい。それを理性では理解しているが、感情が認めようとしない。

木乃香は自分の親友だ。親友が危ない目にあっているのに座して待つことなど自分にはできない。無力なことが情けなかった。

俯(うつむ)いて拳を握り締める明日菜を刹那は心配そうに見ているが、お互いに何かを言える状態ではなく　二人の間にしばらくの間に沈黙

が続く。

「せっちゃーん、アスナー！」

その時木乃香がお菓子とジュースを持って戻ってきて、心配させないために明日菜は無理にでも元気を出す。三人は近くのベンチに座り、お菓子とジュースを囲みながら談笑していた時に、のどかが走って目の前を通過して行く。

「今の本屋ちゃんよね」

「そうやね、何を急いでたんやろ」

「泣いていた様にも見えましたが……」

こちらに気付いた様子もなく走り去ったのどかが気になり、三人は広げていたお菓子やジュースを片付けて、走って行った方向に向かった。

第五十七話　修学旅行二日目と少年　1（後書き）

修学旅行後、昨日一日かけて一話完成させました。思ったよりサクサクと。

さて、今回から二日目突入です。どうなるやら

次回更新は『明後日』の午前0時です。明日は明けで次の日は休みなので更新はお休みです。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

第五十八話　　修学旅行二日目と少年　２（前書き）

現在時刻　２３時４０分、明日は早出（７時からなので６時起き）なのでそろそろ寝ないと。

修学旅行編全１９話の第６話目で二日目の二話目です。

文字数は１１３７７字と少なめです。

それではどうぞッ！！

第五十八話　修学旅行二日目と少年　2

今日の行き先は奈良なので刺客も昨日の今日、流石に奈良で襲ってくる事も無いと思われる。今日一日を使って準備を整え、明日にでも襲撃してくると考えた方が現実的だ。

班別行動はおよそ六時間強。指定した場所を回っての観光を終えればホテルに戻り待機となっているが、保険だけは掛けている。

刹那の式神とアスカの影分身（こちらは周りに秘密）を班毎に派遣して二重の監視を行っていた。影分身ならば緊急時の対応も万全である。

幸い危険度が高いネギと木乃香が同行することになる。エヴァンジェリンも奈良に行きたがっていたので、ザジには悪いが木乃香の護衛である刹那に行動を共にさせるために六班の行動を合わせて貰った。

アスカは一人で巡回の予定のルートを見回っていた。

金閣寺では運動部四人組と真名の四班と一緒にバックに一般の人に写真を撮ってもらった。

奈良の大仏で海外からと思わしき多くの観光客がカメラを向けている中、真祖の吸血鬼（エヴァンジェリン）が大仏を拝んでいる姿は物凄くシュールだった。

日本通であるエヴァンジェリンは合計して四回も修学旅行に行き損ねてようやく奈良を訪れた。念願敵って大仏に見惚れていても仕方のないことだろうと考えて声は掛けない。

大仏を拝んでいるエヴァンジェリンの斜め後ろで、茶々丸が「録画中……」とボソッと呟いていたのをアスカは聞き逃さなかったが、知らぬ振りをする。

清水寺の事も含めて何時か上映会をしたら楽しい事になりそうだと含み笑いをしつつ、正倉院に国立博物館等を見回った後、アスカは吉所庵という茶屋で暫しの休憩を取っていた。

注文したぜんざいを口に運びながら、昨日の慌しさが嘘のように穏やかな空気を全身で感じる。歴史的建造物とこの空気のお陰で張り詰めていたものが少し抜けて気が楽になる。

「ハア、ハア……アスカ、先生……？」

「宮崎さん、どうしたんですか？！」

支払いを済ませて、そろそろ見回りに戻ろうかと思っていたアスカの前に、横の茂みからのどかが現れた。式神達には何の異変もなかったので、息切れしながら何故かポロポロと涙を流しているので何かあったのかと思い、慌てて駆け寄る。

泣いているのどかを長椅子に座らせて落ち着いた後に経緯を聞くと、彼女なりに頑張ってネギに告白しようしたが、空回りしてしまう自分が情けなくて逃げてしまったらしい。

流石に告白しようとしたのを異性に知られるのは恥ずかしくてのどかはもじもじしているがどうしようもない。

「成る程、告白しようとして……」

「は、はい――いえ、しようとしたんですけど、私トロイので失敗してしまって……」

再度落ち込むのどかをアスカは多少の驚きと、やはり無理かという気持ちを持つ。朝の行動を知っているとはいえ、流石に一足飛びにそこまでいけるほど勢いはないだろうと考えていたので、途中で止めたとはいえ驚きだ。

「私も人の事は言えませんが、あなたより四歳以上下の十歳の子供ですよ？」

「そ、それはですね、ネギ先生は……」

どうしてネギが好きなのか気になったアスカは、座っているのどかに問いかける。それはのどかを追いかけてきて何となく茂みに隠れてしまった明日菜達も同感だ。

少し呆気に取られたような表情を浮かべたのどかは一瞬だけ考え込んで視線を空に向ける。そして少し俯き、顔を赤らめて恥ずかしがりながらもはっきりと今の自分の想いを紡ぎ始めた。

「普段は皆が言うように子供っぽくてカワイイですけど。時々私よりも年上なんじゃないかな―って思うくらい、頼りがいのある大人びた表情をするときがあるんです」

のどかは羞恥心と恐怖心をゴクリと唾と共に胸の中に押し込んで、思いを言葉にする。

のどかにしてもアスカかネギのどちらが大人に見えるかと聞かれた

ら、迷いなくアスカと答えるだろうと思う。二人に持った思いの違いは切欠があったかどうかの違いにしか過ぎないだろうと、冷静になって振り返ったのどかは考える。

「そうですか？」

失礼になるが、どうしてもアスカにはのどかの言っていることが理解できず首を捻る。記憶を思い起こしても１０歳の子供にしては良くやっている方だと思うが、大概アスカの前ではおどおどしているだけだ。単純にアスカがその場面にいないだけなのかもしれないが、どうしても「子供」という単語が先に出てくる。

「それは多分ネギ先生が私にはない目標を持ってて……それを目指していつも前を見ているからだと思います。本当は、遠くから眺めてるだけで満足なんです。それだけで私、勇気をもらえるから。でも今日は自分の気持ちを伝えてみようかと思って……」

喋りながらのどかはネギの好きなところを思い浮かべて段々と声が大きく、自然と笑顔になっていく。

そしてのどかは自分がどれほど恥ずかしい事を言っているかも痛感し、煙も出そうなほどに真っ赤にして俯いてしまう。

隠れている刹那としてもこの、勇気を持って自分の事を語るという事は方向性は違っても他人事ではないから少し茂みの中で落ち着きをなくす。

のどかはそこで言葉を切るが、チラリとアスカが見た彼女の目には確かな『想い』があった。

だからだろう、いらないお節介を焼いてしまうのは。

「確かにネギ先生は夢を持っていますが……果たしてその夢は純粋なものでしょうかね？」

「え……？」

確かにネギは父親のような『立派な魔法使い』になりたいという目標を持っている。しかし、それはネギが目指したものか、誰かに望まれたものか。六年前のこともあり、その夢や目標の全てが真っ当なものであるとはアスカには思えなかった。

アスカはのどかの好意は、ネギに助けられたことに対する刷り込みに始まり、彼が作ったホレ薬の影響下に長くいすぎたのが発端だろうと考えていた。でも、それは間違いで彼女の思いはこんなにも真っ直ぐだ。心の中で謝罪しながら彼女の思いはまだ淡いものだとしても真剣だ、こちらも真剣に答えるべきだろうとアスカは胸に鈍痛を覚えながら決意する。

のどかの疑問の声に僅かな間をおいて、アスカは一度大きく息を吸うと、ゆっくりとだが重苦しく話し始めた。

話したのはアスカ達が生まれてからの事。物心ついた頃には既に親はなく、父親は公式には１０年前に死亡したがその筋の人間にはかなりの有名人と誤魔化す。

物心ついた頃に周りには父親はヒーローだと教えられ、純粋にそれを信じたネギは危機（ピンチ）になれば父親が来てくれるのだといたずらを起こした。最初は他愛のないいたずらだったが徐々にエスカレートし、アスカの制止も聞かず、しまいには真冬の池に飛び込むなど命

に関わるものになっていった。

「それも従姉に泣きつかれて止めましたが、危機（ピンチ）になれば父親が来てくれるという思いは、ネギ先生の中に常にあったと思います。当時は機嫌が良くなると何時も鼻歌でそんなことを言ってましたから」

そして今から六年前、住んでいた村に悪魔の群れが襲来し、住人のほとんどを石化していった。勿論話すときには悪魔の群れではなく細菌兵器、永久石化ではなく昏睡状態と一般人ののどかにも話せるように単語を変えている。

のどかや隠れていた明日菜達は、アスカ達兄弟の壮絶な、あまりにも現実離れした話に言葉を失う。

特に、一時期とはいえアスカと一緒に暮らし、他よりも?がりが多かった明日菜と木乃香はその思いが強い。

生まれてきてから普通に生きてきた者達にとって痛ましい悲劇であることは理解できても、実感としては想像することさえできなかった。

「多分、その時こう思ったと思います。「自分が危機（ピンチ）になったら父親が来てくれる何て思ったから」と。当然、そんなことがあるわけもないですが、村から逃げる途中で従姉が細菌に感染して倒れ、どうにもできなかった時に……父が現れました」

感情がないように淡々と喋るアスカの言葉に、え、と疑問符を隠れていた明日菜達とのどかは浮かべる。何故そこで死んだはずの父親が出てくるのかが分からない。

「何故父がそこにいたのかは分かりません。ですが、従姉を治してネギ先生に杖を渡して去って行ったそうです。そして渡された杖はネギ先生が良く持っている物がそうです」

そう言われてのどか達は何故ネギが何時も杖を持ち歩いているのかを理解する。子供が持つには大きすぎるし、常に杖を持ち歩くなんて可笑しいとは思っていたのだ。

「その後救助されましたが、助かったのは私達兄弟と従姉だけ。後は運良く街を離れていた幼馴染ぐらいです。昏睡した村人達は今も植物状態が続き、回復の目処は立っていません。事件の内容から表には隠蔽されました。ネギ先生は父親に会いたい、父親のようになりたいという目標を持った……」

ネギはがむしゃらに力を求めて立ち入り禁止の禁術書庫にまで入って魔法を学び続けた。それは果たして過去からの逃避か、圧倒的な力を誇った父を求めるが故か、或いはその両方か。

少なくとも普通の子が親に憧れるような純粋なものではなく、そこにはいろいろな理由が絡みついている。ネギ自身はそれを自覚してなく、ただ父に会いたい、父のようになりたいというところで思考を停止してしまっている。

「そ、それはいいことじゃないんですか？　お父さんに憧れるのは別におかしいことではありませんし……」

傍で聞いている明日菜達も、助けてくれたのだから憧れてもおかしくないのではないかと思う。それほどの父親で、尚且つ命を助けられたとなれば子供が憧れるのは寧ろ当然だと。

「そうです。確かに子が親に憧れるのは何もおかしいことではありません。ですが、救助されて学校に入った後は一心不乱に勉強をしたそうです。それは父に憧れたからか、逃げるためか。とにかくネギ先生の場合、その憧れは普通と違ってかなり複雑です。そもそも……」

――――こんな過去があってあんなに純粋に何の影もなく真っ直ぐ育つと思いますか？

と、続けられたアスカの言葉にのどかだけでなく隠れている明日菜達も固まる。固まったのは何の感情もなく紡がれた言葉だけが原因ではなく、一般人で運動が苦手なのどかですら感じられたアスカの体からホンの瞬きにも満たない一瞬だけ溢れたどす黒く固められた負の感情。

アスカは肉体的、精神的に異常が出る前に、思わず出た感情に直ぐに気付いて消したが、その言葉に嘘などはないとのどか達の心に結果的にその言葉は刻みつけられた。

自分の不始末で気まずくなったアスカは長椅子から立ち上がり、一歩進んでから振り返ってのどかと向き合う形になる。

「……私は宮崎さんが告白する事を止めはしません。今までの事は宮崎さんの思いが真剣だと思ったからこそ話しました」

「あ、ありがとうございます……」

これがアスカの教師として出来るレッドゾーンぎりぎりの事だ。のどかの思いは真剣だ。それに答えなければと思ったのだ。

まあ、のどかに告白されれば色恋とは無縁だったネギは、その感情を理解できず、恐らく友達から始めようと言う可能性が高い。

それは別に悪いことじゃない。のどかがネギに関わろうとした場合、魔法の世界とは切っても切れない関係になる。ネギの近くにいるあのオコジョ妖精のカモが何をするか判断できず、恋心につけ込んで仮契約をしそうな気がする。

何も裏の世界全てが危険と言うつもりはないが、アスカ達には父親と母親が理由でいろんな所から狙われる可能性がある。つまりアスカ達に関わるということは、それだけで格段に危険度が跳ね上がるということなのだ。

のどかがアスカの担任している生徒である以上、アスカには彼女を守る「義務」がある。が、何ものどかに関わるなと言うつもりはなく、生徒だからといって自由意志を妨げるつもりはない。でも、ネギに関わるなら、流されるのではなくそれなりの覚悟を持って貰いたい。

特にのどかの場合は一度でも向こうの輪の中に入ってしまえば、学園長との契約があり、アスカは口出しができなくなる。

「ネギ先生も、少なくとも今見えている綺麗な部分だけではなく、心の奥深くは醜い闇があると思います。そしてその闇は普通の人よりも濃く深い」

私は自覚してますがね、と話しながら皮肉気に唇を歪めるアスカは、涙など流れていないのにまるで泣いているようにのどか達には見えた。

ここまで言われればアスカやネギには闇があるのだと理解せざるを得なかった。今、見えている部分が見せ掛けではないが、全てではない。つまりアスカは「深く付き合うのなら、その闇とも向かい合う日が来るかもしれない。闇は醜悪で見るに耐えないものかしれない。それでも覚悟はあるのか？」と問うているのだ。

「今、私達が麻帆良で教師をしているのも、此方の世界の政治が関わっています。麻帆良を出た後は命に関わる危険な世界に身を置き続け、周りの人間もそれを望みます。父の後を追うネギ先生には誰が何を言っても止まらないでしょう。もし、ついていくというなら生半可な気持ちでは止めておいた方がいいです。こちらに関わっても辛く、苦しいだけでいい事なんてありませんよ？」

正面に立つアスカの真剣な表情と言葉に、のどかは自分の事を思って言ってくれているのだろうと感じ、落ち着いて考える。

頭に思い浮かぶのはまだ可愛いといった表現が相応の、十歳に満たない男の子。

のどかのネギへの想いは、決して半端なものではなく、好きな気持ちではクラスの誰にも負ける気はしないと断言できる。

出会ってまだ2ヶ月ちょっとの、教師で年端もいかぬ男の子に対して普通はと思われるだろうが、好きになったことを間違いだなんて思っていない。

人と争ったり、傷つけたりすること何て出来る筈もない。何の力もなく、政治なんて分かるはずもないし、アスカが言うような危険な世界に行く覚悟なんてない。それでも、

「私には覚悟なんてありません……でも、ネギ先生が好きだという気持ちだけは嘘ではありません」

純粋な、あまりにも純粋な言葉と気持ちに憧憬を抱いたのははたして誰か。

「――――――――――そう、ですか」

のどかの覚悟の篭った言葉を聞いたアスカは、一度瞑目して沈黙する。その思いを知るものはなく、一呼吸おいて目を開けて踵を返す。

「なら、私から言えるのはこれぐらいです。教師という立場上、応援も手伝いもできませんが……頑張ってください」

新田辺りならばそうしたことを止めるだろうが、真剣な子の邪魔をするのは気が引ける。命短し恋せよ乙女、と歌にもあるぐらいだ、真剣な思いを見逃すぐらいは許されるだろうとアスカは心の中で結論を出す。

「はい！！」

意思の篭ったのどかの返事を聞いてアスカは茶屋から離れていく。アスカを見送ったのどかは長椅子から勢い良く立ち上がり、ネギの元へ向かって走り出す。

残された明日菜達はアスカ達の衝撃的な過去にショックを受け、暫くの間動けずにその場で固まっていた。

その後、のどかも最初こそ中々言えなかったが、最後には見事告白。その後、恥ずかしさにのどかは走り去ってしまい、ネギは脳がショートして倒れてしまった。

単純な消去法で一番力のある明日菜に担がれてネギはホテルに帰ってきた。

夕方、日程を終えて旅館に帰って来た３－Ａの生徒達が見たのは、電話ボックス前のソファーに座って異常行動をするネギの姿。

少し遅れて戻ってきたアスカは大体の事情を知っているので、悩み捲くっているネギに呆れの視線を向け、溜息を吐く。

アドバイスをするほどにアスカはネギと親しいわけでもなく、教師という立場上、アドバイスも出来ないので何もしない。せめて告白されて思ったこと感じた事を、そのまま口にすればいいのだが１０歳にそれを望むのは酷というものだろう。

アスカも恋愛どころか初恋すらまだなので簡単なアドバイスしかできないが。

そんなネギの奇行を、帰ってきてからずっと目の当たりにしたあやか達クラスメイトが何事かと心配して物陰から様子を伺い、本人に尋ねるが思わせぶりな事を言って逃亡。

真実を知りたいあやか達は、まほら新聞報道部突撃班、通称“麻帆良のパパラッチ”の異名をとる朝倉和美に調査を依頼する。大よ

その予測がついていた和美は気が進まないが調査を開始し、予想されるのどかから話を聞く。

一途にネギへの想いを恥ずかしそうに話すのどかを見た和美は記事としてはダメだと思いつつ、録音した一通りの会話をレコーダーから消去した。ゴシップネタを記事にするのも嫌いではないが、誰かを傷つけるような記事を書くのは和美の本意ではない。

なまじ最初の一歩で燃えてしまったので不完全燃焼な事この上なく、何処かにスクープでも転がっていないかと思っている時にネギを発見し、本人にもインタビューをしようかと思い、追跡を開始した。この選択が自身にとってどのような道を選んだことになるのか、この時の彼女には知る由もない。

この後、ネギを追いかけた和美は魔法を目撃し、真偽を確かめるために潜入スパイのようにネギへと近付く。しかし、既に許容量の限界に達したネギはパニック状態になり、風呂場で風の魔法を暴発させて局地的な暴風が発生し有耶無耶にする。

その他にも騒ぎがあったが当事者達が揉み消した為、アスカの与り知らぬことであった。他の先生方との打ち合わせや各種調査の纏め等、ぶっちゃけネギは何もしないのでアスカのやることは存外に多い。なので魔力反応は感知していても、また何かやったんだろうと思い、これ以上の問題を抱えたくない。そう考えて関わろうとしなかったのをアスカは後に悔やむこととなる。

ネギはトラックに轢かれそうになった猫を咄嗟に助ける為にトラ

ックの前に飛び込み、魔法を使って助けた。それを偶々通りかかったクラスの生徒、報道部の朝倉和美に見られてしまい、温泉内で追及を受けた。その際自制が効かずに魔力が暴発してしまい、和美を吹き飛ばした為、思わず飛行魔法を目の前で使ってしまったので完全に言い逃れができなくなっていた。

「あぅううう～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～」

今回のケースの場合、多少の不可抗力はあったが、またまたネギは一般生徒に“魔法”の存在を知られてしまったのだ。何時もなら真っ先に相談できるカモがいないため、他に魔法関係を相談できるほど親しい人間がいないネギは一人で悩みまくっていた。

ネギが知っている魔法関係者は、双子の弟のアスカ、敵対したエヴァンジェリンと茶々丸、そして初日に知られた明日菜のみ。魔法を知っているだけで素人と大差のない明日菜に相談する気にはなれない。エヴァンジェリンとはそこまでの仲ではなく、茶々丸も同じ。となると消去方的にアスカしかいないのだが、以前の事もあって知られれば学園長に報告され、自分の修行中止のビジョンが浮かぶので却下。

記憶操作系の魔法が苦手で、明日菜の時もあって今まで成功した例がない。「あれ、僕って実は“魔法使い”に向いてないんじゃないのか？」とまで考えてしまい、ネギができるのはええうえう～～と嘆く事だけである。

この時点でネギは社会人として間違った行動を取っている。社会人には『報告、連絡、相談』の義務というものがある。

独自の判断で動くべきことも多々あるし、一々全てを報告、連絡、

相談していては進む仕事も進まないが、それでもすべき時とそうでない時の判断は会社人には必須のスキルであり、それを違えると「独断専行」と糾弾される羽目になる。これを俗に『ホウレンソウ』と言う。

『ホウレンソウ』を念頭に置いて今のネギの行動を見てみると、第一の報告を怠っているのは明白である。

それは何故か？　現時点のネギは教師を『仕事』と捉えてなく、あくまで『試験』の延長線として見ているからだ。ネギが求めているのは『父』だけであり、『教師』はあくまでその過程、腰掛けでしかない。親書の件に関しても『仕事』よりも『頼まれたから』という面が濃い。

本来それらの重さは世間を肌で感じ、実際に働くことで学び取っていくものなのだが、極めて閉鎖的な空間にしかその身を置いたことのないネギに理解しろというのは難しい。

ネギと言う人間は確かに成績も良く、頭も回る。しかし、それの大半はあくまで机上のものにしか過ぎない。普通の生活の中で魔法が当たり前のようにあったほとんど隠れ里と言っていい場所で育ち、その中ですら人と関わる事無く自分の殻に閉じ篭っていたのだ。自身の異常性や危険性、一般社会や人との摩擦、機微など理解できる筈もない。

ネギは自身の最善を選ぼうとはしても、その場における最善を選ぼうとしない。ネギの最善は周りに知られることなく揉み消したい。この場における最善は上司（この場合は学園長）にどうすればいいか、伺いを立てればいいのだ。

今、ネギに指摘できる者はこの場にいない。それが問題をどんどん大きくする原因になるのだとネギは気付けない。

「おーい、ネギ先生――――」

「ここに居たか兄貴――――♪」

噂をすれば何とやら。そこへ現れたのは、やけに上機嫌な件の“朝倉　和美”と、何故かその肩に乗っているカモ。左肩にオコジョ妖精のカモを右肩に乗せる和美の姿は、まるで『こちら側』の関係者である。

「うわっ、あ、朝倉さん!?」

ネギに和美とカモが居ることに疑問に思う余裕は既に欠片も無く、驚いて逃げ出そうと身体を引く。

「兄貴、兄貴。このブン屋の姉さんはオレたちの味方になってくれやしたぜ!」

「え……？　味方？」

何故か仲のいい二人（一人と一匹？）の言葉で、急な話の変わりように呆気に取られてネギは首を傾げた。

「報道部突撃班“朝倉和美”カモっちの熱意に絆されて……ネギ先生たちの秘密を守るエージェントとして、協力していくことにしたよ」

「え……え～～～～～!?　本当ですか!!?」

そう言って和美は最後に「よろしくね♪」と、軽くウインクする。
それにネギは驚きながらも喜ぶ。

「今まで集めた証拠写真も返してあげる♪」

「わ、わぁ～い！　やった～～～！！　ありがとう御座います、朝倉さん！！」

渡された写真の束を受け取ると、ネギは先程の落ち込みっぷりがウソであったかのようにはしゃぎ、漸く諸手を上げて喜んだ。

確かにそこには不鮮明ではあるが、杖に乗って飛び去るネギの姿が写っている。これが公表されていれば、ネギはオコジョにされて魔法界に強制送還されてしまった可能性が高い。

頭を悩ませている問題に見かねてカモが動いて解決してくれた、とネギは純粋に信じている。

ここにカモの性格を知っているアスカがいたら、こう言うだろう「嘘臭い」と。ネギは心の底から信じているようだが、何とも純粋である。人を信じれる素直は美徳と言えるが今回のケースに関しては間違いであったとしか言えない。、

（ねえ、カモっち）

（なんだい、姉さん）

（アスカ先生も魔法使いなんでしょう、そっちはいいの？）

一人で喜んでいるネギを余所に、和美はアスカには話さなくていいのかとカモに小声で聞く。

（ああ。けど、姉さんが下手にバラそうとしたら、問答無用で記憶消去や口封じしようと考えても無理はないっス。実際此方関係ではかなり厳しいと兄貴に聞きやしたし）

（成る程ね。確かにそういう方面ではかなり真面目そうだしね。いや、よく解ったよ）

和美としてはアスカが、そこまでするとは思えないが関係者がそう言うのならそうなのだろうと、カモの言葉に顔色を微妙に悪くして頷いた。

カモの意見も当たらずとも遠からずだが、いくらアスカでも問答無用で行動に出たことはないし、きっちり上に伺いを立てている。それに記憶を消す、という一点に関してアスカは昔の体験から必ずしも積極的ではない。しなければならない状況に追い込まれない限り他の手段を探すようにしているのだから。

ネギも自分が悪いとは内心分かっているが、一度出来た苦手意識によって、伝聞する時に自分の勝手な推測まで交えてしまったのだ。

普通にネギが緩すぎるのが問題なのだと気付けないのは、そちらの方がカモに取って都合がいいからである。そもそもネギの使い魔をしているのも、昔の恩があるにせよ、自身が罪を逃れるのと仮契約をさせて小金を手に入れたいという欲求が強い。カモは確かにネギの助言者としての能力はあるのに即物的過ぎる部分が多い。

その後、風呂上りのあやか達がやってきてひと悶着あり、就寝時

間が近づいていることもあって全員、新田に言われて部屋に戻る。

教師も部屋の中で大人しくしている者まで取り締まるつもりはない。仲間とのせっかくの旅行だ、そこまで干渉するのは無粋というものであろう。だが、部屋に戻った彼女達は前日の分までとばかりに、ホテル中に響き渡るほど騒ぎ捲くる。盛り上がるのは大いに結構だが、彼女達がいるのは決して、広野の一軒家ではなく、公共の宿。学園長が手を回して一般の利用客はいなくてもホテル側の迷惑になる。となれば……。

「コラァ、３－Ａいいかげんにしなさい！！」

騒ぎ捲くる３－Ａの生達を一喝の下で廊下に出した学園広域生活指導員の新田は烈火の如く怒り、朝まで自分の班部屋からの退出禁止、さらに出ているところを見つかればロビーで朝まで正座させるとまで言い渡される。

皆、不満があったが新田の横にいるアスカが、頭を痛そうに抑えているのを見ては流石にばつが悪く不満を口に出せない。

先生方が去っていく際、しずなが小声で謝っていたが皆の中に燻りが残り、そこに悪魔の囁きをするものさえ現れなければ、静かな夜を過ごせた筈だった。

この結果の被害の大半がネギではなくアスカに行くのだから世の中は大概に不条理である。

「申し訳有りません。新田先生」

生徒達から離れた廊下で、アスカは新田に頭を下げていた。担任である以上は生徒が起こした騒ぎを止める立場にありながら、彼女達を止める事ができなかったのだからだ。

「あなたがそこまで気にすることはありません、アスカ先生」

「しかし……」

「一人で全てを背負うことはありません。その為に私達がいるのですから」

本気で申し訳なさそうな顔で言葉を続けるアスカに、新田は微笑み、その眼鏡を外してポケットから出した眼鏡拭きでレンズを拭く。

「こういう嫌われ役は私のように偏屈で頑固な年経た教師の仕事です。あなたがそこまで肩肘を張る必要はありませんよ」

どこか静かな威圧感を感じる言葉に、アスカは呆けたように新田を見ることしか出来なかった。誰も好き好んで自分から嫌われたいとは思わない。決して人気があるわけでもないが、アスカはそこに教師としてあろうとし続ける姿を垣間見た。

「ありがとう、ございます」

今度は謝るためではなく、純粋に感謝の気持ちで頭を下げる。この人は間違いなく教師であり、そして自分にとって間違いなく尊敬できる人であると思ったからだ。

「アスカ先生も昨日は遅くまで見回りをして疲れているでしょう。今夜の見回りは我々に任せてそろそろ部屋に戻られて休まれては？明日も修学旅行はまだ続くのですから」

「はい……お言葉に甘えさせていただきます」

先程と生徒達を怒鳴っていた時とは全く違う優しい言葉にアスカは素直に頷いた。昨日は警備のために徹夜で、今日も見回りや調べ物をして疲れているのは事実だ。

危機的な状況下だからこそ隙を見計らって休みを取り、いざという時に万全の姿勢で臨めるコンディションを維持するのが、戦闘のプロの心得だ。

しかし、いまアスカが自身に課しているのは戦闘者以外の面ばかり。クラスのこともあって休息を取る余裕がなかった。

最後に睡眠を取ってから三十時間以上が経っているが、依然、張り詰めたままで休息を求めようとしない神経を別にして、動いていないとはいえ肉体は休息を必要としている。

本当なら見回りをしたいところではあるが、疲れているのは事実。新田の言葉に素直に甘えることにした。

「それじゃあ、新田先生。生徒達が何かすると思いますけど、よろしくお願いします」

「分かりました。任せてください」

ある意味酷いことを言うアスカに、新田はそれもそうだと笑みを深くして頷く。アスカは自分の部屋に戻り、新田は姿が見えなくなるまでその場に立ち止まって優しい笑みで見送った。

第五十八話　修学旅行二日目と少年　2（後書き）

次回更新は『明後日』の午前0時です。一日行ったら休みなので。

でも、その後は魔の6連勤（遅出、夜勤、明け、遅出、夜勤、明け）というこの仕事始めてから初めての超ハードスケジュールです。

立場が低いからって安受けあいしたら駄目ですね。本当なら夜勤明けは休みなのに頼まれると断れなくて本当なら三勤なのに六勤になってしまった筆者でした。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

第五十九話　　修学旅行二日目と少年　３（前書き）

気が向いた＋六連勤でちゃんと更新する自信がない＋『ネギま』で検索して週間ユニークアクセスがトップになって気が良かったので更新しました。

現在時刻　２１時５０分。昨日が早出で睡眠時間が短かったせいかもう眠い。

修学旅行編全１９話の第７話目で二日目の三話目です。

文字数は１３３８７字とかなり多めです。

それではどうぞッ！！

第五十九話　修学旅行二日目と少年　3

３－Ａの面々の多くは昨日の音羽の滝によって酔い潰れてしまい、修学旅行初日の夜にバカ騒ぎが出来なかった。

元来お祭り好きが揃っているクラスなので、初日の夜に騒げなかった鬱憤は溜まりに溜まっていた。そうなると貴重な一夜を取り戻そうとばかりに騒ぎまくれば怒られるのは当たり前の事で、新田の厳命により各自班部屋からの退出禁止令が出されてしまう。

皆一様に新田からの叱責をもらえばその場はしょぼんとするが、本音はもっと遊びたいと思っている。そこに彼女達とは別行動を取っていた和美がふらりと現れ、とあるゲームをしないかと提案した。

当初、あやかは当然委員長として断固反対の姿勢をとったが、そのゲームの勝利条件にネギとのキスがあると知ると一転、己の欲に負けてあっさりとＯＫサインを出してしまう。

そして彼女達はゲームのために騒ぐ事無く、静かに時間になるまで時を待つ。

退室禁止にしたから今夜はもう何も起こらない、と新田とアスカ以外の引率の先生は、そう考えていた。実際、目に余るようなドンチャン騒ぎは表向きだけは成りを潜めているからだ。

しかし、少女達は息を殺し、各々の部屋の中で枕を寄せ合ってテレビにかじりついている。

そして時間が近くなり、３－Ａのそれぞれの班のテレビには彼女

達に取って見慣れたクラスメイトの顔が映し出される。

「それじゃ、修学旅行特別企画！！『くちびる争奪戦！！　修学旅行でアスカ先生&ネギ先生とラブラブキッス大作戦ー！！』始めるよー！！」

夜の１１時に各班の部屋の中にあるテレビから、テンションの高い朝倉和美の熱の入った実況が部屋に響く。イベントの開始を今か今かと待ち望み、画面を食い入るように見つめていた非参加者達は抑えた声で歓声を上げる。

何時も以上のテンションの高さを見せながら、和美は今回の企画のルール説明を始める。

・各班から二人ずつ選手を選び、見回りの先生方の監視を掻い潜り、旅館内の何処かにいるアスカ先生、ネギ先生の唇をゲットする事が目的（ゲットする相手は各人の好みに任せる）

・それぞれの得物は両手に持った枕のみで妨害や戦闘も可能

・上位入賞者、勝者には豪華商品をプレゼント♪

・教師に見つかって玄関前で正座となっても、このミッションについての他言は無用、救済はないので屍は黙して語らない。

・直接参加しない生徒達は自室で観戦し、トトカルチョで班と個人で誰が勝つかを予想する（賭ける物は食券）

・尚、アスカやネギに最初にキスをした二人を当てるトトカルチョも同時進行（キスできず全滅の場合は親の総取り）

・開始時刻午後十一時、終了時刻は翌午前一時までの二時間とする。

テレビ画面は上下三つずつ、計六つに分割され、左上から順に１～６班それぞれの代表参加者が枕を持って廊下を歩いている姿が映し出されている。無駄に凝っているが、その信じがたい技術の高さもまた３－Ａたる由縁の一つなのかもしれない。

参加者は以下の通り。

・１斑　鳴滝風香、史伽（自信満々の風香に対して史伽は罰の正座がいやなのか半べそをかいている。双子ならではのコンビプレイがあるので結果は未知数！）

・２班　古非、長瀬楓（嬉し恥ずかし初キッスを想像しながらも、さり気なくアスカの実力査定も考えている古菲。微妙にのんびりした様子の楓は珍しくやる気があるのか目が開いている！？　戦闘力は全チーム中間違いなくダントツ！！）

・３班　雪広あやか、長谷川千雨（過剰なまでの使命感で突き進むあやかに対して、やる気無しという空気を纏う千雨はネギとするぐらいならどうせならアスカと……とそのシーンを想像してしまい顔を赤らめて頭を振り乱している。ネギの最有力候補のあやかもここまでチームワークが見事に噛み合っていないと難しいか？）

・４班　明石裕奈、佐々木まき絵（まき絵はネギ狙いだが、裕奈の方はどちらかというと勝負に燃えているようだ。バランスの取れた運動部の二人組はやる気、能力ともに安定感あり！）

・５班　宮崎のどか、綾瀬夕映（唯一ネギに告白したのどかと親友

の為に勝利へと貢献しようとする夕映。戦闘力は低いがチームワークという点では最高かもしれない！）

・６班　エヴァンジェリン、茶々丸（アスカを従者にして従えようと考えているエヴァンジェリンと、何時ものように無表情な顔を浮かべて付き従う茶々丸。普段はこういうイベントに参加しない二人はどんな大穴になるか！）

アスカの部屋とネギの部屋、教師の部屋は一箇所に集まっているためかなり危険なのだが、それでも参加者六組はやる気満々そうである。

それを見て悪どい笑みを浮かべるカモと和美。

（金のために！！）

（ネタのために！！）

特にカモはただ余興としてこのイベントを企画したわけではない。そこには仮契約（パクティオー）カードの大量ゲットという裏の目的があった。

ホテル全体を仮契約用の魔法陣で取り囲む事により、ホテル内でキスした者全てを仮契約させてしまおうと言う作戦で、ネギかアスカが誰かとキスすればパクティオーが即成立する。全員とキスしたとして単純計算で１２×５万オコジョ、と考えて夢のような気分になるカモ。

余りにも短絡的な思考で目先のことしか考えていない。自分達が得る物しか見えてなく、それによって起こる代償を全く想像していない。目先の事に囚われて、先を見ようとしない。そういう意味で

は二人はとても似ているかもしれない。

こうやって平和な時間を享受できている幸せに気付かぬまま、二人の欲望を満たすための宴は始まる。

「さて、誰がアスカ先生とネギ先生に最初にアタックできるか！？実況は報道部、朝倉がお送りします！！では、スタート！！」

和美の合図で、カモも書いていた仮契約用の魔法陣を発動させる。先に発動させたらアスカに感知される恐れがあったので、邪魔されないように念には念を入れて魔方陣を書いただけで発動はさせていなかったのだ。

発動させなければ魔方陣もただの落書きと大差ないためカモがちょろちょろ動いていたのは知っていたが、一々身内がする事まで考えている余裕のないアスカも気付けなかった。

そんな事は露知らず、和美の開始の合図と同時に参加者達がそれぞれの部屋を目指して動き出した。

『ラブラブキッス作戦』が始まり、慎重に周囲を警戒しつつ裕奈、まき絵のコンビはホテルの廊下を歩いていく。

「ゆーな、ゆーな」

「はいな」

「ネギ君やアスカ先生は教師部屋に居るけど、その近くは鬼の新田が見張ってるに違いないよ～どうするの？」

「ふふ、敵は実力で排除するのみ！」

まき絵のごく当たり前の質問に対して裕奈は雄々しく返事を返すが、よくよく考えると後の事や新田の事は全く考慮してない意見だった。

そして廊下の角を曲がろうとしたその瞬間……。

「ん？」

「――――――っ！　いいんちょ！？」

「まき絵さん！　勝負ですわっ！！」

まるで示し合わせたかのように同じタイミングで角を曲がろうとした三班と四班が顔を見合わせる形になった。

突然の出来事に思わず唖然としてしまった二人とその後ろにそれぞれついてきていた千雨と裕奈。最大のライバルとの遭遇に即座に反応したのはあやかだが、まき絵も反射的に行動して手にした枕を振り被る。

「も〝っ！！」「ぷっ！！」

先手を打ったあやかに対して、持ち前の運動神経でカウンター気味に攻撃をしかけたまき絵も速さでは決して負けていない。結果、

互いにその手に持った枕がほぼ同時に顔面へと叩き合う形となり、仰け反るようにバランスを崩す。

「もへっ……」

「でかした、まき絵！　トドメだよ、いいんちょ！」

相打ち気味の状態で倒れゆくまき絵のフォローに裕奈が入り、枕を振りかぶって今まさに襲いかろうとする。しかし、そんな裕奈に呆れた目を向けた千雨が足を出して足を引っ掛けて転ばせる。

ここは二対二の状況下となるはずだったが、そこにタイミングが良いのか悪いのか混迷の度合いを深めるように飛び込む第三勢力が現れた。

「チャイナピロートリプルアタ――ック！！」

階段の上から下の獲物達を発見し、古菲は両手と左足の指で枕を掴み残った右足で高く跳躍し、挟んでいた枕を投げてあやか、千雨、裕奈の三人にダメージを与えた。

「にょほほ♪」

「ぐぐ、やりましたわね～～～」

膝をつきながらあやかは気迫を全身に漲らせて古菲を見つめる。かくして三つの班で乱戦が始まった。

表立って闘っているのはあやか、まき絵、裕奈、古菲の四人で楓は先程から完全に傍観者、千雨はこっそり逃げようとしている。し

かしそんな常識人にこそ災難というのは降りかかるもので、

「コラ長谷川！　何やっとるか！」

「ぎゃぴぃぃぃぃ――――っ！」

悲鳴に品性がないが、千雨は運悪く新田先生に発見され、顔も見られてしまった以上ここで逃走しても何の意味もない。

「逃げるでござるよ」

「そうアル」

新田の怒鳴り声と千雨の悲鳴を聞いた楓と古菲は即座に反応して逃げ出す。遅れてあやかとまき絵も反応したが、裕奈は古菲に踏み台にされて当たり所か悪かったのか、フラフラとよろける。

「う～～～～ん」

「コラー！　明石、さっさとたたんかっ！　ロビーで正座だ！」

回復していないところに背後から現れた新田によって捕縛され、裕奈は千雨同様にロビーで正座する羽目となった。

三班と四班が鉢合わせし乱闘になり、更に二班の乱戦になっていた頃。あやかの対抗馬であるのどかがいる五班は軒下の縁伝いに外からのルートを進んでいた。

「ゆ……ゆえ～～～。何でネギ先生のところに行くのにこんなとこ通るの～～？」

地図を片手に屋根を匍匐前進して進む夕映に、その後ろで「あうあう」となりながらのどかが今更ながら尤もな疑問を述べた。最初にするべき質問だと普通は思うが。

「私の見立てでは、このルートが最も安全かつ速いのです。ネギ先生の部屋は端っこですので、どうやっても必ず敵や新田先生に当たってしまいます」

聞かれても特に不満を見せることなく、他の班に比べてどうしても体力的に劣っていることを理解して確実に勝つ為にこのルートを選んだのだ、と夕映はスラスラと説明をしていく。

「で、でも、非常扉って内側からじゃないと開けられない仕組みなんじゃなかったっけ……？」

図書館探検部の鍛えのお陰か、身軽に縁から下の屋根に降りた夕映に比べて、おっかなびっくりで縁から降りながら疑問を口にした。

それに関しても事前に鍵を開けておいた、と落ち着いた声で夕映は丁寧に答える。防犯の問題上、勝手にそんなことをすれば問題になる事を理解しているのなら性質が悪い。理解していないのなら問題になった時、夕映は果たしてどうしたのだろうか。

非常口の前に立ち、扉を開けてゆっくりと周囲を警戒しながら先に進む二人の目の前に縄梯子が降りた。縄梯子が何故こんなものがこんな場所に？　と二人は疑問に思い、下から上へと視線を巡らし

ていくと天井の一部（天井裏に通ずる５０ｃｍ四方の板）が開いており、そこから降りてきたのは、鳴滝風香＆史伽の双子姉妹。

「ふ、ふーちゃんに、ふみちゃん～～～～！？」

「あッ、５班！？」

「しまった！　……やるよ、史伽！！」

見つかってしまった双子は颯爽と縄梯子を伝って降りると、『鳴滝忍法・分身の術』と双子であることを利用しているだけで、全く意味のない事をしてのどかに心の中で突っ込みを入れられる。

続けて『甲賀しゅり……』と続けようとした鳴滝姉妹の片割れに、枕が直撃した。無論、それはのどかの傍らに居た夕映の仕業である。

「のどかは早くその扉から中へ……！！」

枕の上から本で殴るという反則技まで使い、たった一人で、二人を足止めしてのどかの背を押して先に行かせる夕映。

今はまだ子供のため失敗は多いがそれでも教師として、ネギは英国紳士として振舞おうと頑張っている。このまま成長できるのならきっとのどかを任せても大丈夫だろうと夕映は思っている。

友達の恋を応援するという、涙を誘いそうな友愛を見せる二人だが、高々イベントで何人もの女性のターゲットにされてしまっているネギを思えば、普通は素直に感激もできないと思う。

「ゆ、ゆえっ……！」

夕映に背中を押されて部屋に入ったのどかは後ろを振り返るも、扉を閉められてしまった。

「あ、あれ……ネギ先生？」

覚悟を決めたのどかだが、部屋には布団が敷いてあるだけで肝心のネギの姿がない。隠れる場所など押入れかトイレしかないが人の気配は感じられない。

時間は『ラブラブキッス作戦』開始前に遡る。

――ゾクっ！！

「ううっ……？　何だろ……この寒気は？」

ようやく一日が終わると安心して教員用の部屋で休憩していたネギは一息吐いたが、背筋を駆け上がってくる悪寒に一抹の不安を感じていた。

「あ！　宮崎さんのことどうしよう……」

自分の教え子である宮崎のどかからの告白を思い出して、ネギは思い悩む。考えてみれば明日菜に魔法のことがバレたのも、のどかを助けたことに起因する。何か縁があるのかも知れない。

ネギは故国を後にする時に、姉に『女の子には優しく』と言われた言葉を思い出していた。

『優しく』というのは難しい言葉だとネギは悟った。さして人生経験が多いわけではないネギにとってひどく難しい。考えても簡単に答えは出ず、パトロールという建て前を作って現実逃避のために出掛けたのだ。

これがのどかが部屋に入った時、ネギがいなかった真相である。

「ゆえ～ネギ先生がいないよ～」

「「えっ！」」

扉を開けて未だ格闘中の夕映に言うと廊下での戦闘は中断する。慌てて部屋に入った全員であちこちを確認しても、布団が敷かれているだけで誰もいない。

「ま、窓から逃げたんだ！」

「史伽、追うよ！！」

当たらずとも遠からじ。夜風に揺れるカーテンを見た風香はすぐにベランダに出て史伽と一緒に飛び出して行く。

「のどか、玄関前に向かいますよ。他のメンバーが見つけられなかったという事は外に出ていることですから」

「うんっ」

責任感の強いネギの事だから初日に起きたイタズラが起きないように気をつけていると判断し、眠る前に周辺の様子を見て回っているのだと考えたのだ。

部屋を出て、二人は急いで一階ロビーに向かった。

「これは！　仮契約の陣!?　カモか!!」

就寝時間が過ぎて新田に勧められて早目に寝る前、露天風呂に入って寛いでいたアスカは、旅館を覆うように仮契約の魔方陣が発動されたのを感じて慌てて風呂から出る。身体を拭いている間に玉藻にとある事を頼む。

「う、うぅ……ッッッ!!?!?」

急いで浴衣を着て、廊下に出たアスカの背をぞくぞくと這い上がる冷たい悪寒が走り抜ける。思わず立ち止まって辺りを見渡す。

「まさか風邪か？　いや、そういうのとはまた違うような気が。それに旅館全体にギスギスというか、まるで戦場のような雰囲気が漂っている……何故？」

本来なら生徒達は寝静まって静かな筈なのに、ホテル中が肉食獣

を放したようにピリピリしている。それは敵意とも違うが、明らかに『正のベクトル』ではない異様な気配で、無視するには余りにも不気味すぎた。

旅館のあちこちに隠しカメラが設置されているのだ。何かをしているのが丸分かりである。

それに何らかの形で仮契約が関わっているのは分かっても、魔方陣を消すという選択肢が浮かばない辺りアスカも混乱している。

歩きながら視線の先にあるのはカメラ、元々あったものではなく誰かが取り付けた物だ。それは和美とカモが今夜の中継のために取り付けたものなのだが、アスカはそんな事知る由もない。

一応目立たない位置に取り付けられてはいても、初日に事があってから旅館内を虱潰(しらみ)しに見て回ったアスカの目は誤魔化せなかったようだ。

何となく姿が映るのは不味い気がしたのでカメラに映らないように死角死角に回る。

そして天井に取り付けられた明かりだけが爛々(らんらん)と光を降り注いでいる中、風呂に入っていた事で火照った体を冷ましながら、最も人が動き回る気配の多い場所、ネギの部屋に足早に向かう。

館内の動いている気配はどれもが素早く、時にはゆっくりと確実に移動している。一瞬、関西呪術協会の手勢かとも思ったが、結界に異常はないし、何よりも気配が露骨過ぎてどう考えても素人のものだ。

敵ではないにしても味方でもないように思える。いざとなれば浴衣の帯を利用したり、動きにくければ浴衣そのものを脱ぐ事もできるが流石に不味いかもしれない。何かあってそういう事態になっても旅館の中を半裸で闊歩するなど、そんな趣味はないので勘弁してもらいたい。かといって一旦部屋に戻って着替えている間に何かあったら事なので、その選択肢も取れない。

「む……あれは？」

階段を上っている途中でネギの部屋の近くにいた気配が散開するのを感じ、その気配の内の二人が、アスカが今いる場所に向かってきている。アスカは能力の無駄遣いをするように気配を消し、可能な限り壁に同化して身を隠すと、廊下の角を曲がって忍者服らしきものを着た鳴滝姉妹の姿がやってきた。

「「わっ！　だ、誰……」」

目の前を通り過ぎたところで姿を現して後ろから襟首を掴んで持ち上げる。突然、持ち上げられ悲鳴を上げながら鳴滝姉妹は後ろを見上げたが、アスカの顔を見た瞬間に固まる。

「……やあ、就寝時間を過ぎて何をしているのかな？」

「「ひぅ！！」」

アスカは静かな威圧感を以って睥睨し、当てられた双子は寒さに震える小動物のように身を寄せ合う。

普段は元気一杯な二人の顔も一瞬で青ざめ、史伽にいたってはすでに泣き始めている。その様は、狩人の罠にかかった獲物のようで

あった。

「修学旅行で羽目を外したいのは分かりますけど、明日の自由行動をホテルで潰したくなかったら大人しくロビーで正座してくださいよ？」

「ひぐっ、ぐすっ……は、はいです～～！」

「うえぇぇ、わかったよ～～～！」

「よろしい。それじゃあ一階ロビーで正座しておくように。着替えるぐらいならいいですけど、行かなかったら……分かりますね？」

泣き始めた二人を下ろして頭を軽く叩くように撫で、ロビーに行くように促す。最後が脅しに聞こえた二人は急いでこの場を離れ、アスカはその背を見送り、他の気配の場所へと向かう。

気配が一階ロビーの近くに集まっていくのを感じ、階段を下りて廊下の角を曲がろうとした時……。

「――――――っ！」

前後に現れた気配と、続いて生まれた首に走った危機感に従い、脱力して身を下げることで避ける。下がった頭の上を手が二本通過するのを見ながら、そのまま流れるような動作で重心を後ろに下げ、弛(たゆ)んだ膝に力を入れて後ろに飛ぶ。顔が廊下につきそうになるぐらい低い姿勢で回りながら、足から着地して更に一歩、大きく後方に飛びながら顔を上げる。

「今のを避けるとは思わなかったアル！」

「やるでござるな、ニンニン」

攻撃を躱わされたことで何かのスイッチが入ったのか、やけに生き生きとした目をした古菲とやたらと嬉しそうな楓の姿。事実は簡単、気配を殺して廊下の角に隠れた古菲と天井に張り付いていた楓が降りてきて、若干焦っていた事で気付くのに遅れたアスカの首を狙ったのだ。二人の力だと首が撥ねるかもしれないのに、避けなかったらどうするつもりだったんだろうか。

最早、口に出すまでもないような強烈に嫌な予感に、アスカは思わず助けを求めて視線を巡らすが誰もいない。

「……一応聞きますけど、何の真似です？」

既に得意の八卦掌の構えを取った古菲と、その隣りに悠然と立つ楓に無駄と思いつつも一縷の希望を持って問いかける。

「今なら一戦やってもらえるかもしれないアル！」

古菲の即答に頭痛を感じつつも、楓に真偽を確かめるために視線を向けると物凄く嬉しそうな顔をして頷かれた。

楓は別段、あやかのようにショタという性癖を持っているわけではないので、アスカの唇を狙っているというわけではない。アスカは顔に火傷を負っているという話だが、楓は容姿で人を判断するつもりはないし、それ所かあの年であれだけの器、後数年もすればどれだけの男になるのか楽しみに思っているぐらいだ。

だが、楓がそれよりも気になっているのは冬のあの日に見た【分身の術】。里でもついぞお目にかかったことのない程の完成度だった。

楓の見たところではアスカにはまだ上があると確信している。戦闘技術にしても古菲を簡単にあしらうほどの物があるとなっては、戦う者として琴線に引っ掛かり捲くっている。

忍術に自分よりも精通しているのなら教えてもらいたいし、そうでなくても思う存分戦いたい。しかし、強引な手段は自身もアスカも望むものではないのは理解している。

そんなところでアスカに協力を求められ、その対価として修学旅行後に願いを叶える事もできるが、今宵の乱痴気騒ぎは目の前に餌をぶら下げられたようなものだ。

自制心も働いたが、火の付いた戦いを渇望する感情はどうにもならず誘惑に負けて飛びついてしまった。

「女難の相でも出ているんだろうか？」

「失礼アルよ」

「言うに事欠いて難とは……」

「私はバトルマニアじゃありませんから、人の了解もなしに仕掛けたりしません（場合によりけりですけど）」

アスカが呟いた一言に不満をぶつける楓達だが、続いた言葉に押し黙る。心の中では別の事を思っている辺り、アスカも中々に強(したた)か

だ。

このまま言葉で二人を押し切れるか、とも思ったが世の中そんなに簡単にはいかない。

「「もはや、問答無用　（アル）（でござる）！！」」

言葉では敵わないのは重々承知している二人は、そうはさせじと強攻策に打って出ることを選択した。

元々キスがどうこうというより、とにかく遊べればそれで満足な二人である。それでも多少は和美の言っていた豪華商品にも多少は興味があるのだ。どうせなら商品も手に入れてみせると行動に移す。ここまで自分の欲望に忠実というのは、ある意味幸せなのであろう。巻き込まれる側からしてみれば、ご免被りたいが。

一気に緊迫し始めた雰囲気に、アスカも面持ちを変えて身体を僅かに曲げる。詳しい事情は知らないが最早、言葉で止まるような空気ではない。

「ハイィッッ！！」

まず先手を取ったのは古菲。楓に一歩先んじて屈んだような構えから頭を一切浮かせる事なく、獲物に飛び掛る肉食動物のように一気に踏み込む。

そして踏み込みの勢いを乗せて、アスカの胴体掛けて右の崩拳を放つ。成人男性すら容易く昏倒させる威力を持つそれはさながら弾丸のように放たれ、アスカは僅かに体を左に開きつつ突きを払って内側に捌く。

攻撃を捌いた後、古菲の直ぐ後ろにいた楓の攻撃を避けるために頭一つ分だけ身を屈め、首を刈り取らんばかりのハイキックをアスカの髪の毛を掠める程の紙一重の距離で避ける。

しかし、楓の攻撃を避けた次の瞬間には、払われた瞬間に体を捻って回転した古菲の左の拳が、アスカの身体を起こそうとボディーブローに近い形で迫っていた。普通なら完全に視界の外から飛んできた拳だが、アスカは楓の攻撃を避けながらも古菲から目を放していない。

古菲のアスカの腹を狙った拳を掌で受け止め、屈んだ姿勢のままのサイドステップで壁際に寄ろうとする。壁を背負うのは好ましい事ではないだろうが、それでもこの二人の挟撃を受けるよりはマシだと判断したためだ。

「ハイッ！」

「はあっ！」

そうはさせないと楓が壁際に先回りして防ぎ、古菲が繋いで拳打、蹴撃と矢継ぎ早に攻撃を仕掛ける。顎、こめかみ、水月、脾腹、膝、足の甲、一般人なら一発でも貰えば動けなくなりそうな暴力の嵐をアスカは避け、時には捌く事でやり過ごしていく。

（全く、理不尽アル。二対一で圧倒できないとは……）

攻撃を続けながら古菲は心の中で呟く。流石のアスカも何時もの余裕の表情ではなく、少しずつ追い詰めている。決して侮っていた訳ではないが、圧倒できていない以上、前回のはまだ実力の一端で

しかなかったようだ。だが、それが面白い。

倒すには徹底的に追い詰めて、これ以上ない隙を作る必要がある。その思いの下、古菲の攻め手はより苛烈さを増していく。

手数をある程度まで抑え、速さと正確性を高めた拳を上下に打ち分け、楓と協力してアスカの意識を全身に散らしていく。

下段に放たれた右突きを上半身を後ろに逸らしながら捌くアスカ。そうして突き出された腹部に目掛けて、古菲の左拳が最短距離を通って振るわれた。体勢が後ろに傾いている以上、アスカは後ろに下がって避けるしかない。

「はっ！せいっ、りゃあっ！！」

「せあぁっ！！」

「むっ！」

後ろに下がったところに踏み込んできた楓の繰り出した膝蹴りを受け止めた所為で、アスカの体が浮き上がる。その瞬間、アスカは己が罠に絡めとられたことを直感した。

「しまっ――――」

「――――ハッ！」

楓の攻撃に一瞬だけ古菲から意識を離したことによって生まれた隙。ズンッ、と床を踏み抜く勢いで古菲の足が振り下ろされ、浮いたアスカを越すような勢いで踏み込む。活歩と呼ばれる強大な突進

力を誇る八極拳の歩法だ。

そこから放たれるのは、突進の力をそのまま力に変える肘打ち。一見、何の変哲もないただの突きに見えるが、その実、恐るべき威力が込められている。左肘を突き出すように体全身を捻り、古菲の持てる力の全てが集約された一撃がアスカの鳩尾目掛けて迫る。

これで詰みだという事実を前にしても、一切気を抜かずに古菲は必殺を込めて肘をアスカに打ち込んだ。

「……え？」

古菲の目の前で吹き飛ばされた筈のアスカは、少しの間だけ空を飛んで空中で見事な後ろ宙返りをし、まるで何事もなかったかのように着地した。着地したアスカは目立ったダメージもなくしっかりと立っており、最適のチャンスと渾身の一撃を受け止められ古菲の目が大きく見開かれる。

呆然とする古菲を余所に、二人の近くで客観的な視点から見ていた楓にはアスカが何をしたのかが大体分かった。

避ける事も捌くことも不可能と判断したアスカは足に瞬時に気を集めて中空で後ろに飛んだのだ。しかし、それだけでは全くダメージがないのは説明できないが。

「虚空瞬動でござるか」

「――――――ハァ、……ふぅ。残念、違いますよ」

空中で【瞬動】、即ち【虚空瞬動】であると楓は予想するもアス

カは息を吐きながら否定する。

生身だけでは耐えられないと判断したアスカは、打撃を受ける際に極限まで脱力して、風に揺れる柳のように逆らわずに自ら吹き飛ぶ事で大半の威力を殺したのだ。

古来より中国武術では高級技とされる消力（シャオリー）。洋の東西を問わず、武術、護身術の要諦は古来より、かの剣豪宮本武蔵の自画像にも表現される脱力にある。

戦闘という命のやり取りの最中に、全ての筋力を総動員させるはずの緊急事態に、赤子の手を扱うかのように、手にある卵を潰さぬように、かように抽象される脱力の開眼に古今の術者は腐心を余儀なくされる。

危険が身に迫ると硬直する。動物である限り、必然の生体反応。しかし、その本能こそが事態を悪化させる。巨大な樹木が突風に倒れる。然るに柔らかな草木は風に影響されない。

うっかりコケて骨折してしまう大人。高所から落下しても無傷でいられる赤子。それは自然から学んだ知恵。ボクサーは永き訓練を経て、やがては打たれる際にも瞬（まばた）きしなくなる。

緊急事態に脱力を、とは言うは易し、行うは難し。大の格闘家すら一発でＫＯするような打撃を知りながらの脱力は、まるで宙に浮くティッシュペーパーに剃刀を振り下ろすような心許なさ。

それを成して耐えたわけだが、それでも完全に威力を殺すことができず、身体の芯にダメージが入っている。ノーダメージに見えるのはいま追撃されるとノックアウトされるのでやせ我慢しているだ

けだ。

「ふぅ、さすがアスカ先生。拙者たち二人を同時に相手にしてここまで持つとは、さすがでござる」

「反撃してこないのはあれアルが……」

二人は予想したものよりも実力が上であることを喜びながらも、そう言ってアスカの隙を探す。逆にアスカは呼吸を深めて内気功を行い、少しでも時間を稼いでダメージを回復させる。

「いやいや、もう止めません？」

「「嫌（アル）（でござる）」」

見た目よりも余裕がないアスカはここで終わらせないかと提案するが、二人は揃って拒否する。当初よりも目を爛々と輝かせている二人に駄目元で言ってみたが、予想していた通りの返答が返って来る。

会話で僅かながらも時間を稼げたのでダメージは抜けているが、現状では打開策を見つけられない。目の前の二人に集中しながらも方策を考えていたアスカは周囲、特に後方の注意を逸らしてしまった。

「――――――！」

後方から近づいてくる風切り音に気付いたときには間際にまで接近を許し、アスカの浴衣の襟首を掴もうと誰かの手が伸ばされていた。これだけ近づかれて気配を感じなかったことに驚くアスカ。し

かし、油断していても身体は即座に反応し、後ろに振り返りながら出した肘で伸ばされた手を弾く。

その時ようやく伸ばされた手が茶々丸のワイヤー付きのロケットアームだった事を知るも、完全にバランスを崩してしまう。

「茶々丸！！」

「了解しました。マスター」

何とか倒れはしなかったが床に片手をついたアスカが見たものは、残った片手で茶々丸によって放り投げられ、真っ直ぐこちらに向かって落ちてくるエヴァンジェリンの姿。

エヴァンジェリンは魔力が封印された現状では、アスカの唇はそう簡単に奪えないと判断し、開始直後から隠れて隙が出来るのを待っていた。幸い茶々丸のお陰でグッドタイミングな時に駆けつけることができた。

後方の注意が逸れたところを茶々丸のロケットパンチで牽制し、アスカが弾いてバランスが崩れたところに茶々丸が残った手でエヴァンジェリンを唇が重なるように投擲したのだ。

（フフフ、私の勝ちだ！！）

勝利を確信したエヴァンジェリンを地球の重力が引きずり落とし、アスカに覆いかぶさるように落ちていく。互いの視線がやけにがっちりと重なるのを、二人は自覚する。

（どうする、どうする！！）

バランスが崩れて力が入りにくい体勢になっているので、直ぐに今の位置から動けないアスカは大いに焦る。避けるとエヴァンジェリンが怪我をする可能性があり、後方にいる古菲と楓も動き出したのを感じて、下手に動くと不味く完全に進退が窮まった。

焦りとは裏腹にエヴァンジェリンとの彼我の距離が一メートルを切った時には、集中力が高まってアスカの世界はスローモーションのように距離が刻まれていく。

どうしようもなくなったアスカの脳裏に、この状況を打破できる物が呼び起こされた。これだ、と心の中で叫びを上げながら態と自分から支えていた手を放して廊下に倒れる。

顔同士の距離が５０ｃｍにまで近づいたところで、そんな行為を取ったアスカにエヴァンジェリンは訝しげな顔を浮かべ……。

「んなっ！」

「およっ！」

「ござっ！」

次の瞬間には腹部に衝撃が来て、押し上げるようにアスカの頭越しに投げられた（？）。それは自分から倒れこんだアスカの足がエヴァンジェリンの腹を受け止めて、蹴り上げたのだ。形としては柔道の巴投げに近い。

エヴァンジェリンはアスカの後方に投げられたので、やってきた楓と古菲は避ける事もできずに受け止めざるを得なかった。

「世界柔道、見ておいて良かった……」

頭の上に両手をついて、全身のバネを利用して一息で立ち上がったアスカの脳裏に浮かんだのは、以前にテレビで見た世界柔道の映像。何事も知っているだけでも、閉塞した状況を突破できる切欠になるのだと知ったアスカ。

立ち上がったばかりのアスカにエヴァンジェリンを投擲した後、腕を収納した茶々丸が迫る。

「こちらの都合は関係なしですか！」

「申し訳ありません、アスカ先生。マスターの命令は絶対ですので」

拳打を交えながらも、茶々丸は命令ではなく自分自身の意思で行っているという論理と矛盾した意識活動が顕在化するのを感じていた。

起動して数年だが、茶々丸は奉仕活動の過程で数々の個性的な人々と触れ合ってきた。量子コンピュータを思考中枢に採用している茶々丸は、従来のデジタルコンピュータと異なり、矛盾や曖昧さというカオス的要素を許容して物事を判断できる。

（アスカ先生……）

メモリ内からアスカの映像を取り出す。その厳重にかけられたロックは、それが茶々丸がその映像に対してどれ程執着しているかを表していた。アスカは嫌がっている、なのに自分はしたいというロボットにあるまじき矛盾を抱え、思考が堂々巡りになる。計算不能

というのは機械としては恥ずべき事態なのだが、何故かそれを快く思っている部分がある。期待している、と言い換えてもいい。

（私は、壊れてしまったのでしょうか……）

アスカの後方から三人が向かって来る。マスターが望むならと分かっていても、アスカと過ごすこの時間が長く続いて欲しい、とも思った。幾らエラーチェックを掛けても発見されたエラーはゼロ。戦闘を続けながら茶々丸は何度もエラーチェックを繰り返す。

様々な想いが交錯する夜はまだまだ終わらない。

第五十九話　　修学旅行二日目と少年　3（後書き）

次回更新は多分『明日』の午前０時です。

更新する場合は午前０時になります。それ以降過ぎても更新がない場合は、その日は更新がないと思ってください。

改訂前との変更点：主人公は【虚空瞬動】どころか身体強化すら使っていない完全な素の身体能力です。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

眠い、もう寝よう。

第六十話　　修学旅行二日目と少年　４（前書き）

ああ～明日から魔の六連勤が～

体が持つんだろうか？

修学旅行編全１９話の第８話目で二日目の四話目です。

別名、改定後に違う意味で苦労した回です。

理由は改定前のを分けるとこの回は８０００字くらいしかなくて増量させるのに苦労しました。

文字数は１０１２１字と本当にギリギリです。

それではどうぞッ！！

第六十話　　修学旅行二日目と少年　4

アスカを巡る戦いは朝倉和美の情報基地を通して各部屋のテレビで六つに分割された画面の一番右上で流されていた。

分割された画面の一つであっても、そこらのアクション映画よりも迫力のある攻防に、各部屋は大いに盛り上る。

中国武術研究会の部長を務め、沢山の大会で優勝を収めた古菲や、同じ武道四天王と呼ばれている楓の猛攻を捌き切った事や、乱入してきたエヴァンジェリンと茶々丸も合わせた四対一の状況になってもアスカは逃げ回っているのだ。

思いがけない本格的なバトル。エンターテイメントとしては上々であり、下手なドラマよりよほど面白い。　思わず別口でトトカルチョを組んで欲しいと思わせるほどのものだ。

アスカが強いと知っているのは実際にチンピラに絡まれたところを助けられた運動部四人組や、体術面での隠した実力を見破った者達などはよく知っているが、それ以外の面々は見たことがないので更に面白さを引き立たせている。

皆が盛り上がる中、二班の部屋で超鈴音は難しい表情でテレビを眺めていたが、自分の知っている“過去”とは決定的に違う事にどこか焦った表情を浮かべる。

未来から過去に来る時に調べたが、「アスカ・スプリングフィールド」という人間は存在していなかった。しかも一般人最強である古菲と、楓の連携を見事に防ぎ、茶々丸や幾ら封印状態にあるとは

いえエヴァンジェリンの猛攻すら躱している。四人の猛攻を受けて、重力を無視して壁、天井を蹴ったり走ったり張り付いたり、時には人を盾にするなど使えるものは全て使って回避している。古菲に出来るとは聞いていたが、これほどの手練だとは思っていなかった。流石に余裕は無さそうだが、未だに捕まっていない。

確かに、物事には絶対など存在しない。様々な因子が絡み合い、決まっていた未来を覆す事は充分あり得る。ということは自分が未来から来たことによって生まれた矛盾か、それとも……。

彼というたった一つの不確かな因子の為に、これから起きる出来事が全く予想予測出来ない。

「……アスカ・スプリングフィールドか、私の計画を完遂させるには彼の攻略は不可欠か」

そう周りに聞こえないように小声で呟く超の瞳には、揺るがない決意が秘められていた。

周辺のパトロールという名目だけの見回りを終えてネギはホテルへと帰ってきて、玄関を通り抜けてロビーに入る。

「あ……宮崎さん……」

直ぐ近くにいた人を見て少し距離をおいてお互いに見詰め合う。

顔を見合わせた途端、お互い気まずそうな表情で向かい合うが、ネギからすればいま返事をどうするべきかと悩み最も顔を合わしたくないというか、悩んでいた相手であるのどかが立っていた。

監視カメラで二人の邂逅を知った主催者や観戦者達も、アスカの戦いから目を離して色めき立つ。

「せ……ネギ先生……」

「あの……お昼のことなんですけど……」

「えっ……い、いえ――あのことはいいんです……聞いてもらえただけで――」

「すいません……宮崎さん……ぼ、僕……まだ誰かを好きになるとか……よく分からなくて」

慌てまくるのどかは答えを聞くのが怖いのでネギを止めようとするが、ネギの方も止まらない。

ネギは今の正直な自分の想いを口にするが、中学校の教師をしているとはいえ、彼はまだ数えで十歳の子供なのだ。確かに知能面では大人顔負けではあっても、昔から魔法に傾倒し過ぎた事もあって情緒面では同年代に圧倒的に劣る。

つまり、ネギは初恋どころか異性に興味すら抱いたことがなかったのだ。もし、異性に興味を抱いていたら自身の魔力の暴発を何としても押さえ込もうとするか、逆にオープンになるのか果たしてどっちだったのろうか興味は尽きない。

「いえっ……もちろん宮崎さんのコトは好きです。で、でも僕、クラスの皆さんのコトも好きだし、いいんちょさんやバカレンジャーの皆さん、そういう好きで……あ、それに、その、やっぱり教師と生徒だし……」

「い、いえ……あの、そんな、先生――」

「……（そうですね。まだ10歳なのですからこれが普通でしょう。私は何焦っていたのでしょうか）」

のどかは自身の考えが纏まっていないのか、時々詰まりながらに思いつくままに話しているネギを止めようと声を掛けるが、一杯一杯で彼女の声は聞こえていないようだ。

それを聞いていた夕映は、自分が先走ったのだと悟って反省する。しどろもどろになりながら答えるネギを見て、如何に教師をしていようが10歳の子供に過ぎないのだとようやく理解できたのだ。

「だから僕、宮崎さんにちゃんとしたお返事できないんですけど……その……――あの、と、友達から……お友達から始めませんか？」

そこでネギは俯きながら話していた顔を上げてまっすぐとのどかを正面から見据えて、意を決して自分の気持ちをのどかに告げた。

真っ赤な顔でのどかにマジメに話すネギに夕映はネギの言い分に納得している。のどかも今のネギにはこれが精一杯の返事であろうと思い、嫌われていないとことは分かったので、返事は保留という形だが今はこれで十分。

「……はいっ♪」

ネギの言葉にのどかは充分に満足できる答えなので、まず一歩ネギとの距離が近付いた事が嬉しくて満面の笑みを浮かべていた。

夕映もホッと一息し、片手に持った超神水という何の味がするのか非常に気になるジュースを飲み始める。

新田によって正座させられている裕奈と千雨もロビーにいるのだが、三人はそれに気付いていない。二人とも何を話しているのか耳を傾けるが距離と声の関係上、聞こえなかったからあまり意味はないが。

「えーとじゃあ、戻りましょうか」

「は、はい」

そう言って歩き出すネギ。のどか達もそれについて行くが、そこで夕映は一計を案じてのどかの足に自分の足を差し出して引っ掛ける。

勿論、そうなれば決して運動神経が良いとはいえないのどかはバランスを崩し、ネギのいる方向に倒れこみ……。

「あっ!?」

――――――ンチュ!

このままでは倒れそうなのどかに気付いたネギは支えようとするが、二人には身長差がある為、支えるとちょうど唇と唇を合わせて

しまう。

「あっ……すすすす、すいませっ……！！」

「い、いえ、あのこちらこそ……」

慌てて離れて真っ赤になり謝るのどかと、同じように真っ赤になりつつフォローするネギ。

互いに謝る二人を夕映は微笑ましそうに見守っていたが、この小さなお節介がのどかにとって運命の分かれ道だった事を彼女は知らない。

「「「「！？」」」」

ネギとのどかがキスした瞬間に忍者服から浴衣に服を着替えて来た鳴滝姉妹が現れ、合わせたようにあやか、まき絵もロビーに到着した。

これでアスカを追っている四人以外の、脱落した千雨と裕奈も含めてゲームの参加者がロビーに集まったことになる。

運がいいのか悪いのか、新田は三階を見回りに行っている。つまり、今の彼女達を止める人物はいないということだ。

夕映の後押しによってキスしてしまってあわあわと二人の世界を作っているネギとのどか。二人の間に何かあったと直感して固まるゲームの参加者達。

「ネギ先生～～！」

あやかとまき絵が互いに相手の様子を伺っていた最中、最初に動いたのはまき絵だった。新体操で使うリボンで近くにいたネギを捕獲して手繰り寄せようと動く。　のどかの邪魔はさせないと夕映が動こうとするが……。

「くっ！　させません！」

「いいんちょ！！」

そうはさせないとあやかがまき絵のリボンを途中で掴んだので、無駄骨になった。

「っは……遅かったか……！」

二人が争っている間に漁夫の利を得ようか、でも怒ったアスカは怖いと鳴滝姉妹が悩んだその時、古菲、楓班とエヴァ、茶々丸班に追われながら自分以外に仮契約の主になりそうなネギを探していたアスカが包囲をなんとか突破してロビーに現れた。

ネギとのどかの様子と先程仮契約が結ばれたのを感じ、慌てて包囲を突破してやってきたのだが一足遅かった。アスカを追ってきた残るゲーム参加者が現れるも、纏う雰囲気が変わったことに気付いて足を止める。

「……ククク……アハハハハハハハハハハハハハハ！！！」

ネギに飛び掛ろうとしていたあやか達も突然のアスカの笑いを聞き、その場で固まる。自分達の世界にいたネギやのどかもようやく

外部に目を向け、一人高笑いを続けるアスカに皆が固まるがその声は徐々に小さくなり、やがて消えた。

「全員……ロビーで正座していろ……俺はやることがある……」

静まり返ったロビーの中にサングラスをしているのに目から光を放って喋るアスカの声だけが響く。何時もなら丁寧な言葉なのに命令口調で、更に一人称が仕事時の”私”から”俺”に変わっている。

「ア、アスカ先生？」

明らかに様子のおかしいアスカに代表してあやかが恐る恐る話しかける。彼女達の脳裏には2年学期末の光景が思い起こされる。思い返して見れば、あの時と雰囲気や言動が似ていることにあやかだけが気付いた。

あやかの問いかけは、我慢の限界を超えて沸点の低いアスカを苛立たせるだけだった。

「早く、正座しろと、言った筈だぞ。聞こえなかったのか？」

『は、はい～～～～っ！！』

その有無も言わさないような言葉に、ロビーにいる全員（ネギも含めて）が『ブンブン』と擬音が吐くほど首を縦に振って急いで正座する。

それを見届けたアスカは監視カメラの方を向くと、笑顔でたった一言。

「……アハ……♪」

その口はニタァ、と三日月の形に開き、身体からはどす黒い暗黒のオーラを放っていたと現場を目撃していた少女達は後に語る。

『アーメン……』

ゆらゆらと不気味に身体を揺らしながらロビーから去っていくアスカを見て、正座した者達は和美に訪れる地獄を思い、胸の前で十字を切って冥福を祈ったという。

予定外ながら、ネギのパクティオーカードまで手に入れた和美とカモは複雑な心境ながら、貰える報奨金の多さに浮かれていた。監視カメラに映ったアスカを見るまでは……。

『……アハ……♪』

――――プツン

アスカの嫌な意味での笑顔とオーラで歪んだ姿が画面に映ったと共に、全ての映像が突然消えた。

「……ゴクリッ」

「ちょ、ちょっとどうする？　アスカ先生本気でキレてるじゃないの！　謝って許して……くれないよね、やっぱ」

二年学期末の事を思い出し、もう謝って許してもらえる段階にはないことを和美は自覚せざるを得なかった。

首謀者の和美は単なるゲーム感覚でやっていたのでまさかこんなことになろうとは考えていなかったのだが、もう後悔するには全てが遅い。

「お、おれっちに聞かれても～！　あんなの初めて見たっすよ～～！」

カモの不幸は学期末の悲劇「修羅降臨」を知らなかったことだろう。『ラブラブキッス作戦』が単なるゲームで、カモが暗躍して『仮契約』の魔法陣を仕込んでいなければこんなことにはならなかった。

いや、この時点で逃げて時間を置けば怒りも冷めるだろう、と希望的観測を持っている時点で終わっていることに二人は気付いていない。

「姉さん！こうなったらほとぼりが冷めるまで逃げるしかねえぜ！」

「ＯＫ、カモっち！そうと決まればとっとと脱出～！」

カモは和美と一緒に、トトカルチョ用の食券や機材を即行で纏めて、撤収の準備を始める。結局パクティオーカードは一枚しか手に入らなかったが、命あっての物種だ。真面目に今のアスカに会った

ら殺されると思っているカモである。

二人共、幾ら逃げてもアスカは地の果てまで追ってくることに気付いていない。つまり、何が言いたいかと言うと……修羅からは逃げられないのだ。

トントン、と逃げる準備をしていた二人の後ろの扉から突然ノックする音が聞こえる。もう来たのかと固まるが、どう急いでもさっきまでロビーにいたアスカが、直ぐにこの場所まで来れる筈がないと考えてしまった。そう、考えてしまったのだ。

「は～い！　だ～れっかな……」

疑いもなく、和美はクラスの誰かと思って扉を開ける。そしてそこに居た人物を見た瞬間、和美とカモの顔から血の気が一気に引いた。

「見～～～つけた～～～～～」

和美の目の前に居たのはほんの数秒前にロビーに居たはずのアスカだった。全身から物理的に感じる瘴気を発し、何故かサングラスからに隠れた目から怪光線を出し、口からは得体の知れない煙のようなものが溢れ出ているようにも見える。

「ひいっ！！！！？」

「あ、あああああ旦那！？」

そこにいたのはニタァと笑うアスカ。開いていたドアを閉めてゆらりゆらりと幽鬼のように一歩、また一歩と一人と一匹に近づいて

いく。アスカが一歩進める事に和美は全身を震わせながら後ずさって部屋の中に戻る。

「た、頼む。ゆ、許してくれ旦那！　で、出来心ってやつなんだよ！！　そうだ俺っち、姐さんに脅されて仕方なく！」

「あ～！　何、自分ばっかり責任逃れしようとしてるのよ！　元々はあんたの発案でしょうが！」

逃げられないと悟った二人が始めたのは醜い罪の擦り付け合い。目の前に瘴気を発する人間がいれば、そう思ってしまうのも当然といえば当然だが。

「言いたい事は……それだけか？」

「「ひぃっ！？」」

二人の言葉を遮って囁かれたアスカの声は、それだけで部屋の体感温度を十度近く下げる。下手なホラー映画よりも怖く、二人が思わず詰まったような悲鳴を漏らす程の迫力が、今のアスカにはあった。

「どちらが悪いのかなんて、どうでもいいんだが……やはり、カモ。貴様の方が罪は重いよな……」

思い起こせば夕方頃に何回か魔力反応を感じたことを思い出し、色々と考えることが多すぎて些事（さじ）だと思って放置したことが最悪手だったようだ。

しかし、幾らネギが魔法バレしたとしても和美が、自分から見た

目単なる小動物であるカモへと接触するとは考え難い。となれば接触したのはカモの方からだという方が説得力がある。

アスカはそう言いながらちらりとカモを見ると、目にも止まらぬ速さで右手を伸ばし、カモの首を掴んで引き寄せた。鼻がくっつきそうなほどの距離で向き合ったカモは、アスカの髪の毛とサングラスに遮られた双眸が野獣の如く猛っているのを感じて、ゴクリと唾を飲み込んだ。

逃げろ逃げろ二げろ逃げロニゲロニゲロニゲ

カモが何のことかと尋ねるようとした瞬間、露天風呂から出た直後に首謀者(カモ)を懲らしめる為、玉藻がスチールロッカーを持って現われた。外に出ていた玉藻に頼み、超高速で持ってきた別荘から取って来てもらったのだ。壮絶な能力の無駄遣いだった。もっと能力は有効なことに使うべきである。というか何故スチールロッカーが別荘にあるのやら。

「ありがと」

玉藻に礼を言いながら、アスカはカモをそのロッカーに放り込んで扉を閉めた。

何をするのか分からないが恐怖で腰が抜けてペタンと女の子座りをした和美が見守る中、アスカは解す様に手を振ってから両手に力を込めてロッカーに向けて拳を振り被る。

「オラアアアッ！！」

――――――ガコォン！

「ヒィッ！」

気合と共にロッカーに右の正拳を打ち込むと、轟音と共に拳の跡をくっきり残して陥没する。一撃でドアはひしゃげて歪んでしまい、普通に開く事は二度と無い。

アスカは続け様に無数の拳をロッカーに叩き込み、その度にカモの悲鳴が生まれる。中からカモらしき悲鳴が聞こえるが、アスカは聞こえなかったのか、それとも聞こえてもわざと無視しているか連

打を続ける。

時折僅かに開いた隙間からカモが渾身の思いでロッカーの中から脱出しようとするも、察知したアスカによって行動に移す前に隙間を塞がれて逃げれない。

「懐かしいのぅ。これを見るのも五年振りか……」

思い出されるのはまだアスカが事件を起こし、復帰してから我慢の限界を超えて報復行動に移して下手人が残り数人という頃。アスカを苛めていたと自覚はあったが、無駄にプライドだけは高かった一人が身の程も知らずにアスカに突っかかってきた時にこの刑は行われたのだ。

「い……以前もあんなことを？」

和美は玉藻の事を知らないが、目の前の恐慌から少しでも目を背けるために尋ねずにはいられなかった。カモを助けようという気はない。というかもし、助けて自分が巻き込まれた事を考えると、正直恐怖でちびりそうなのでできない。

そもそも和美が逃げようと思っても窓側にはアスカ、入り口近くには玉藻がいてはとても無理なのだが。

「あの＜鋼鉄（アイアンメイデン）の処女の刑＞を考案したのは五年も前の事じゃが、奴のようにいらんことをする阿呆が多くてのぅ。当時はまだ魔力で身体強化しても拳を痛めるから、近くにあった椅子とか物で殴っておったからな。昔に比べると随分と成長したものじゃ」

突っかかってきた奴に黙ってやられる気などないアスカは、初手

を相手に譲って正当防衛という建て前を作ってから行動に移す念の入れ様。殴ってきた腕を掴み、正当防衛を主張してから当身一発で相手を悶絶させ、近くにあった掃除用具入れのロッカーの中身を出して閉じ込める。そしてこれまた近くにあった椅子を魔力で強化して閉じ込めたままいやというほど殴りつけ、強化した力に物をいわせて止めは教室の外側の窓から真下にある池へ投擲。

自重で沈んでいくロッカーを見たアスカは晴れやかな顔で、掻いてもいない汗を拭っていると生徒から連絡を受けた教師達が慌てて救助を始める。どうも神父と暮らすようになってから起こった一事件から開き直ったらしい。

その後呼び出された校長の前でアスカは正当防衛を主張。偽りを語ったら自分も同じ事をされると考えた他の生徒の証言もあり、結果的に過剰防衛ということで停学になるが、あれから誰もアスカには近づかなくなった。

ちなみに問題の奴は、ぎりぎりの所で救助されるも余りの恐怖にアスカと同じ学校にいることに耐えられず、魔法世界に引っ込んだらしい。

「そういう成長の仕方もアリなんですか……」

遠い目をして懐かしげな口調で語る玉藻に、冷や汗が止まらない和美は原型もなく潰されていくロッカーを眺めるしかない。

まさか、次は自分の番なんじゃないかと戦々恐々としながら。

「オラァ！　オラァ！　オラァ！　オラァ！　オラァ！
オラァ！　オラァ！オラァ！　オラァ！　オラァ！オラァ！　オ

ラァ！　オラァ！オラァ！　オラアアアアア……ッ！！」

玉藻と和美が喋っている間にも、アスカの猛攻は止まらない。アスカがカモをロッカーに叩き込んでから僅か十秒で、ロッカーはまるで粘土で出来ているような錯覚を覚えるほど簡単にみるみる変形していき、やがて、小学生ぐらいのサイズにまで叩き潰されていく。

これを生身で魔力を一切纏わずに行っているのだから恐ろしい。玉藻以外の人間が成長したと言われても納得できないところであった。

剣星などの中国にいた頃に出会った達人たちや俗物っぽい仙人が見たら馬鹿みたいに笑う光景であろう。神父なら……スルーして見て見ぬ振りをしただろうか。微妙な成長の仕方に嘆く知り合いがいないというのも考え物であった。

ロッカーは『屑鉄製の巨大ミノムシ』としか表現できない謎の物体と成り果て、それが元は掃除用具などを収めるロッカーだと誰も気付けないだろう。

「どれ……」

殴り続けて多少は気が晴れたのか、口調から若干剣呑さが薄れていた。

手を休めてロッカーに耳を近づけると、『シクシク……』と中からすすり泣く声が聞こえてくる。しかし不満顔のアスカはロッカーを掴んで激しく上下にシェイクし、すすり泣きが号泣に変わったのを確認すると、ようやく納得して怖いほどにニッコリと微笑む。

「さて、仕上げだ！」

アスカは鉄の棺桶と化したロッカーを軽々と担ぎ上げ、部屋の窓を開けて砲丸投げの要領で放り投げた。弾道を描いて飛んだロッカーは、ホテルの外の林に突っ込み、枝をへし折る音が続き、最後に地面に落ちたと思われる地響きが鳴り響く。

勿論、事前に近くに人がいないことは確認している。何かと音は大きいが、内部はカモが死なないように保護されているので、ロッカーの見た目よりか肉体的ダメージはない。肉体的ダメージはなくても閉鎖空間に閉じ込められ、どんどん壁が迫っていくような恐怖に晒される精神的なダメージは別にして。

「さあ、朝倉さん♪　ロビーで朝まで正座ですよ♪」

「はい……」

やけに機嫌が良いというか、機嫌が悪すぎて反転した感じがするアスカの言葉に大人しく和美は頷く。内心、自分もカモと同じ形になるのではと考えていたので朝までとはいえロビーで正座なら容易い……そう考えていた時期が和美にもあった。

結局トトカルチョの結果、勝者はのどか一人だけ。

カモは＜鋼鉄の処女（アイアンメイデン）の刑＞に処され、和美はアスカにロビーに連行されて既に正座している生徒達の中に入れられた。

「新田先生、生徒達の説教をお願いしてもいいですか？」

「ええ、任せてください。アスカ先生はさっき言った通り休んでも構いませんよ」

新田は主犯を捕まえて来た事から、アスカにもう夜も遅いから部屋に戻るように促す。

アスカに事前に休むように言っていたので、今晩の生徒達の行動を止めるのは不可能だと判断する。何故かネギも他の生徒達と一緒に正座していたことから一緒に遊んだと新田が思ってしまったのはネギの不幸だろう。しかし、ゲームに参加していなくても使い魔であるカモの行動を止める事ができなかったので、アスカは敢えて新田の勘違いを正さずネギに一緒に罰を受けさせている。

「いえ、担任補佐としてせめて同席させてください」

「そうですか……分かりました。ですが、何時でも部屋に戻って構いませんので無理だけはしないように」

今回の騒ぎで担任として止めることのできなかった責任を追及するつもりはなく、部屋で休むように言うがアスカの言葉に感銘を受けてこの場に残る事を認めた。

「はい、ありがとう御座います」

アスカは新田にお礼を言い、一度正座している生徒達（＋ネギ）を見て後ろに下がる。

「全くネギ先生も生徒と一緒になって遊んで……！」

説教が始まったが、何故かアスカは後ろでやたらと大きい仏像（興福寺の阿修羅像や東大寺の金剛力士立像、広目天像等の各種国宝クラスの仏像に激似）をどこからか持って来た。

新田の後ろで「仏像、膝に乗っける？　乗っける？」と書かれたプラカードを取り出して笑顔で掲げるので、やたらと生徒達の不安を煽る。今のアスカならブチギレ具合だと本当にやりそうで怖い。

特にアスカに重点的に見られる和美には堪ったものではない。

実は玉藻の趣味は彫刻である。元の世界にいる時に出来た趣味であるが、何回も京都に行っている内に仏像の彫刻を作っていたのだ。持ってきた別荘に入れてあったからといって精神的に追い込むためにやっているから性質（タチ）が悪い。

「ん？　どうしたお前達？」

恐怖を浮かべる生徒の顔を見て不審に思った新田が振り返っても、アスカはプラカードを隠して知らん振り。新田は何故仏像があるのかと疑問を呈しても、アスカによって誘導されて説教を続ける。

「ささ、続けてください。新田先生♪」

新田が追求するのを避けて説教に戻ったのは、何となくアスカの雰囲気が怖かったというわけではない、きっと。

そして、その場の全員が朝になるまで、もしかしたら膝に見覚えのある国宝級の仏像を乗せられるのではないかという精神的プレッ

シャーに耐えながら正座し続ける。最も憔悴が激しいのは和美なのはお約束である。

ちなみに明日菜、刹那、木乃香は過去の話の衝撃が大き過ぎて、夕食を食べたら直ぐに寝てしまった為、みんなが叱られている時も寝ていた。

こうして、一部の関係のない者には平穏を、残り多数の者には苦悩を与えた『ラブラブキッス作戦』が行われた夜は幕を閉じたのであった。

第六十話　　修学旅行二日目と少年　４（後書き）

今気づきましたけど一日目と二日目がキリよく四話で終わってました。ということは残り１１話は三日目と？　どんだけ～

次回更新は『明日』の午前０時です。多分、三連勤ぐらいは連続で更新できると思います。その後はちょっと保証できかねますが。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

最近、オリジナルのも読むようになってきた筆者でした。

修学旅行後、一話作ってから全く手付かずなんですけどどうしましょう？

追加設定：玉藻の趣味【彫刻】（プロローグ前編　九尾は物語を外れた（ＮＡＲＵＴＯ）に伏線あり）

元ネタ：鋼鉄の処女　（リアルバウトハイスクール）

第六十一話　修学旅行三日目と少年　１（前書き）

連続勤務はまだ始まったばかり。残り五勤なり。

学旅行編全１９話の第９話目で三日目の最初目です。

文字数は１１５５２字と本当にギリギリです。

それではどうぞッ！！

第六十一話　修学旅行三日目と少年　1

昨夜の『ラブラブキッス作戦』によって、ほとんどの生徒は徹夜で説教されて寝不足になっていた。

しかし、そこは変なプレッシャーを掛けられ続けて精神的に疲労していても、今日、修学旅行三日目は完全自由行動日。私服でおしゃれもできるし、出来るだけ班行動で決まった予定に沿って行動するようにとは言われているがそれも強制ではない。となればテンションは否が応でも上がらざるを得ない。それが、蝋燭（ろうそく）が燃え尽きる前が最も燃えるようなものだとしてもだ。

昨日のラブラブキッス大作戦の興奮も覚めやらぬ３－Ａは、明確な勝者はいないが実質のどかの一人勝ちという結果に終わったので会話も盛り上がった。

朝まで正座させられた生徒の中で最も憔悴した様子の和美から、豪華商品として仮契約カードが渡されているのどかの周りには人だかりができ、皆が我先にとのどかのカードを覗き込む。

「本屋の絵が書いてある――」

「あ、凄い。これは欲しかったな――っ」

彼女たちは一部の生徒を除いてこのカードが魔法の産物であることは知らない。彼女達はただ華麗なカードのイラストに魅せられているだけだ。

それでも一般人にとっては確かに物珍しいだろう。それにのどか

にとってはファーストキスの証という意味合いが強い。

「宮崎のどかさん、なかなかやりますわね！　今日からあなたを私の正式な好敵手と認定いたしますわ」

「次は負けないからね――。本屋ちゃん」

「い、いえー、そんな私……」

後ろに白いバラの幻覚が見えるあやかにライバル宣言され、それに便乗するようにまき絵も続いたことで、のどかは驚いてあたふたしていると朝食の時間が終わりしずながやってきた。

「皆さん、今日三日目は完全自由行動日よ。部屋に戻って準備してね！」

しずなの号令で、みんな待ってましたとばかりにそれぞれ移動を始める。

あやかや佐々木、明石といった面々はネギを誘うために探す中、ご機嫌なのどかもカードを大切に持ちながら移動する。その途中……。

「あれ――――……？」

その先の休憩所でネギ（カモ付き）・明日菜・朝倉が会話しているのを見て咄嗟に壁に隠れてしまう。

騒がしくも、一部の人々にかけがえの無い思い出を残した二日目の夜が過ぎた、翌日の午前八時半。

ホテル内の小さな休憩スペースに明日菜、ネギ、カモ、和美の四名は食事を終えると直ぐに集っていた。刹那は初日の事を考えて木乃香の傍で護衛をしており、アスカは教師の集まりに出ている為、この場にはいない。

カモは当然の如く、朝にネギに助け出されるまでロッカーに入ったまま森に放置されていた。しかし、人格の保護機能でも働いたのか気絶していた。和美に教えてもらい慌てたネギに助け出された時には、都合良く「そういったことがあった」という事実以外の全ての事を忘却している。ロッカーの中で押し潰されかけた恐怖は余程堪えたらしい。

「ちょっとどーすんのよネギ！　仮契約なんてしちゃって一体どう責任取るつもりなのよ！？」

昨夜の騒動で、ネギの予期せぬ場所で出来上がっていた正式な仮契約カードを突きつけながら明日菜が詰め寄る。

明日菜達が事情を知ったのは朝起きてから部屋に人がいないのを不審に思って同室のハルナに聞いてからだ。明日菜は多少でも裏とはどういうものなのかを知っている。

カモと朝倉が行った行為は最悪の場合、クラスの三分の一がアスカかネギの従者になる可能性があったからだ。幾らお祭り気質の３－Ａ生徒でも何名かは魔法のことに気が付いてしまうかも知れないし、何より今は西からの妨害もあるため巻き込んでしまうかも知れ

ないのだ。

アスカからネギとカモには木乃香が誘拐された事を言ってないと聞かされている明日菜だが、カモを多少なりとも知っているので例え知ったとしても同じ事をしたと思っている。

「えうっ！？　僕ですか！？」

自分の全く預かり知らぬところで出来上がったものなのだから、当然といえば当然の反応ではある。使い魔の監督責任があるので主人としての責任を取らなければいけないことは埒外にあるらしい。

「まあまあ姐さん」

「そーだよアスナ。もーかったってことでいいじゃん」

響き渡る明日菜の怒号にビクリと身体を震わせて狼狽するネギを見て、流石に不憫に思ったらしく昨夜の首謀者達が擁護するも、それが自己弁護のためであることは見え見えだった。

「朝倉とエロガモは黙っててて！」

当然、それは明日菜の怒りの火に油を注ぐだけであり、即座に二人を怒鳴りつけた。

流石に今回はやり過ぎたというのは理解しているのか、すごすごと引き下がる和美。カモは明日菜のエロガモ発言にショックを受けていた。

「本屋ちゃんは一般人なんだから、厄介ごとには巻き込めないでし

ょ。魔法使いという事もバラさないようにしなさいよ！」

「アスナさんも一般人じゃ……」

「私には色々と事情があるのよ」

ネギに決して自分が魔法使いである事をのどかに教えないように念押しする。それを聞いたネギは言っている当人は魔法を知っているだけの一般人ではないかと突っ込むも、ややこしい事情がある明日菜は言葉を濁す。

「大体、こんなカードで何ができるのよ。ただ本屋ちゃんの絵が書いてあるだけじゃない」

仮契約がどういうものかよく知らない明日菜には、それはただのカードにしか見えないので大したものないようにしか思えない。明日菜にしてみれば自分の絵柄が入ったファンタジーなカードを持って何ができるのかと思ってしまうのも無理からぬことだ。

その明日菜の言葉に反論したのはカモ。

「このカードがあれば『従者への魔力供給』『念話』『従者の召喚』『アーティファクトの召喚』が出来るんだよ！　アーティファクトは素人でも出し方は簡単、カードを持って『来たれ（アデアット）』って言うだけ。しまう時は『去れ（アベアット）』だけでいいんだぜ！　一石二鳥どころか一石四鳥じゃねえですかい！！」

「て、言われてもねぇ……」

エキサイトしたカモにどれだけ仮契約したことで得られる利点を

説明されても、明日菜には今一ピンと来ない。従者への魔力供給で何ができるかも知らないし、そもそも念話って何ってレベルだ。どれだけカモが説明しようと、もっと詳しく話さなければ理解など得られる筈もない。

「つまり「アホか――――――――――っ！！」ぼぎょうう！！」

魔法の知識がないものにこれだけでは理解できない事に気付いたカモが詳しく話し出そうとした次の瞬間、叫びと共に現れたアスカの掌底というか張り手によってカモは壁に叩きつけられた。叩き付けられて変な悲鳴を上げたカモは、血を擦りつけながらズルズルと壁に沿って落ちる。叩きつけられた壁に罅（ひび）が入っているのを見れば威力は推して知るべし。

「カ、カモ君！　アスカ、何……を……」

壁に叩き付けられたカモの名を呼びながら立ち上がったネギは、加害者のアスカに抗議の声を上げるも顔を見て尻すぼみになる。それも当然、昨日よりかは幾らかマシでもアスカが苛立っているのが分かったからだ。

日本には触らぬ神に祟りなし、という諺がある。　関わり合いを持ちさえしなければ、災いを受けることはない。余計な手出しはするなという教えである。神様と関わり合わなければ、神様の祟りを受けることはない意味だ。まあ、ネギはある意味、当事者なので余り意味はないが。

「何でこんな人が普通に通るところで人払いも掛けずにそっち関係の話をしている！　誰かに聞かれたらどうするつもりだ！」

小声なのに鋭いという器用な事をしているアスカは、まだ怒りが収まらないのかピクピクと断末魔の如く痙攣しているカモを睨んでいる。その怒りように明日菜だけではなく和美も声を掛けづらい。

「……スゥ、ハァ……ネギ先生。新田先生が呼んでます。部屋に戻ってください」

「あ、うん。分かった」

「カモは置いて行ってください。話しがあるので」

「それじゃ……」

流石に周りの様子に気付いたアスカは、怒りを深呼吸することで吐き出してネギに向き合い用件を伝える。ここに来たのも新田に頼まれてネギを探しに来たからで、近づいたら魔法関係の話をしていたので何やら熱弁していたカモを吹っ飛ばしたのだ。その後に周囲に人がいないか調べて誰もいないことに人知れず安堵した。実際はのどかが話を聞いていて、アスカが乱入したことに驚いて去ってしまったので気付かなかった。

それはさておき、新田に呼ばれていると聞いたネギは潰れたトマトみたいになっているカモを連れて行こうとするが、大事な話があるのでアスカが置いていくように言う。

ネギは心配気にカモを見て新田の部屋のある二階に階段を上って行く。ネギを見送ったアスカ達は人目に付く休憩スペースから、人払いの結界を張ったアスカの部屋に場所を移す。その際、明日菜は自分の部屋に戻した。

部屋の中では、胡坐を掻いたアスカにテーブルを挟んで正対して昨日の件によりカモ、和美が正座している。

オコジョのカモが器用に正座をしているのは中々にシュールな光景ではあるが、考えてみれば彼は普段から胡坐をかいたりもしているので、今更かも知れない。幾ら正座していても机の上では締まらない。

「まず二人の処分ですが、アルベール・カモミールはネギ先生が麻帆良で修行中は学園長の許可なく仮契約を禁ずる。学園内の移動に関してはゲージに入る事を義務化。宮崎のどかの契約については修学旅行後に破棄。当然、今回の仮契約の報酬も没収。朝倉和美は他の参加者同様に反省文の提出、一ヶ月間の地域奉仕に参加……何か異論は？」

昨日の騒ぎに何らかの形で参加した者には反省文という形で処罰が行われる。それは非参加者でも例外ではなく、罰がないのは完全に関わっていない者のみ。

後、アスカに拳を向けてきた古菲、楓、エヴァンジェリン、茶々丸には特別課題（大量の宿題など）を出す予定。個人的な意趣返しではない、断じて。

ちなみにネギは使い魔の監督責任ということで、正式採用されても担任を持つことはない（副担任も同じく）。

とどのつまりは現状維持とアスカの全く望まぬ結果となったわけだ。

「「いえ、ありません」」

「なければ詳しい内容は書面に起こしてあるので目を通しておくように」

二人の前に一枚ずつの紙を差し出す。朝一番にアスカが学園長に連絡して事情を説明して出てきた処罰を持ってきたノートパソコンで起こしたものだ。学園長には和美の記憶消去やカモの強制退去など、もっと厳罰を求めたが却下され、今のものとなった。

カモはネギの助言者として、和美はその補佐としてのメリットを説明されたが、今回のようにデメリットの方が多いと言っても学園長命令だと突っぱねられた。アスカは強硬に行動を起こすだけのメリットとデメリットを秤にかけ、納得がいかなくて歯軋りしても学園長の処罰で行くことにした。

既に最後の睡眠から五十時間以上が経過しており、どうしても思考能力というより堪える気持ちが低下していた。

迫る決戦の時。しなければならない決断。圧し掛かる責任。

玉藻に調査を頼んでいる以上は頼れる人材もいない。アスカの判断によっては最悪の場合、人が死ぬ可能性もある。事情があって己が表だって動けない状況では一つのミスも許されない。

そういう状況と睡眠不足もあって、言い方は悪いがこのような過急な懸案でない本件に対して構っている余裕がアスカにはない。でなければ、強硬にでもカモや管理責任としてネギ、和美にももっと重い罰が下されていただろう。結果的に救われた彼らには皮肉であろうが。

「さて、それでネギが魔法を使う所を朝倉さんに見られ、問い詰められたところを暴走し、カモが取り成したと……」

「へっ、まぁアニキのサポートをするのが俺っちの仕事ですからね、この程度の事は……」

昨日の騒動に至る経緯を聞き、冷たい視線を器用に正座しているオコジョに向けるアスカ。その視線を真っ向から受け、本人はニヒルぶっているのか軽く笑っているが、タバコを持つ手が震えているので様になっていない。

ネコを助けるためにネギが魔法を使ったのは、それ事態は別に問題はない。もっと魔法ではなく別のやり方があるだろうとは言っても、救うという行為は否定しない。

風呂場で暴走したのは完全にネギの過失だ。少なくともそこで白を切り通せば誤魔化すことが出来たかもしれない。そういえばとアスカは夕方に魔力反応があったなと思い出す。その時点で忙しさにかまけず調査をしていればと、アスカは後悔する。

話を聞いているだけでも最早、誤魔化すことが出来る段階ではないことは分かる。カモが取り成したのは悪くない。問題は……。

「それで何で昨日の夜の騒動に？がる？　口止めしたのなら何も起こらない筈」

「いや、でもよぉ旦那。兄貴に仲間が増えればその分戦力になりやすぜ」

口止めしているのなら何故、あんな騒動を起こすのかというアスカの至極最もな疑問に、カモはネギに仲間が増えれば戦力になると言う。

「確かに使えそうな仮契約者、アーティファクトを探すという考え自体は悪くない。だが、今がどういう事態にあるか分かっているのですか？」

一応、犯罪者のカモを学園長が滞在を認めているのは、それを推奨している部分があるとアスカは予測している。それ事態は本人達の了解諸々があればアスカが干渉しようとするのは筋違いだ。

しかし、今はそんな事態ではないのだが、初日に何があったのかを教えていないのでカモが分かっているとは思っていない。

「関西呪術協会の妨害ですかい？　そんなの初日のイタズラしか「初日の夜に近衛木乃香が呪術師と思われる者に誘拐されてもか？」な！？」

「ど、どういうこと？　木乃香が誘拐されたって……」

案の定、ホテルに着くまでの妨害といってもイタズラレベルの物しか理解できていなかった。木乃香が誘拐された事を話すとカモは驚愕を露にして声を荒げ、何も知らないと言っていい和美は物騒な話に困惑するだけ。

「相手が何を狙っているのかはまだ分かっていない。昨日何もしてこなかったのはこちらの戦力を見て計画の修正をしていたのだろう。そうなれば今日、間違いなく奴らは動く。資料を作ったから見るといい」

困惑する和美を置いておいて、近くに置いてあった鞄から数枚の資料を取り出してカモの前に出す。この資料はアスカが纏めた物で、独自に調べた物から自身の推測も混ぜて他人にも見せられるレベルに編集した物だ。

和美を放っておいて話を進めているが、ぶっちゃけるとアスカは改めて説明するのが面倒くさい。カモが後で説明するだろうと気楽に考えている。

数分の間、カモは齧り付くように資料を読み進め、時たま紙を捲る以外は三人の間に静かな時が流れる。カモが読み終わるまでアスカはその間入れたお茶を飲む。

「これは……マジですかい？」

「情報に誤りがなければ」

カモが読み終えたのを確認して、資料を回収する。その動作を見ていたカモは押し殺したような声で問いかけるも、アスカの返す言葉は逆に不自然な程に軽い。

「何で俺っち、いや兄貴に教えてくれなかったのか……」

「信用の出来ない味方は敵より厄介っていうのもある。が、親書を抱えているネギにこれ以上は無理でしょう。そっちは親書だけを考えていてくれた方がこっちも楽だったと言えば納得するか？」

カモの疑問にアスカは本当に簡潔に答える。そもそもネギには親書という仕事がある。これ以上を抱え込ませるのは無理というもの

だ。

アスカからしてみれば、ネギがこの件を知ったら何だかんだ言って関わろうとするのは目に見えている。そして明日菜達と衝突するのは自明の理だ。事件当初に比べれば良くなっていても、三人とネギの間には表には出にくいが、まだ隔意が存在している。

そんな状態で共同戦線なんて不可能に近いので、最初から教えることもなかったというわけだ。

「それはそれとして、そろそろ話を戻しましょう。ネギ先生のパートナーだが、現状の状況では宮崎さんでは難しいと私は思います」

「なんでっすか？」

完全に置き去りにされた事で和美は部屋の隅で三角座りしているのを放っておいて話を進め、アスカはきっぱりと戦力にはならないと断言し、理解できないカモは首を傾げて見せる。

「今、ネギ先生が求めているのは、自分が魔法の詠唱をする間、相手の従者から自分を守ってくれる前衛。適性云々は置いておいて、彼女に即戦力になる力はないし、そもそも前衛向きの性格ではない」

「ああ……ムリッすね」

そんなカモに説明すると、言われて気付いたとばかりに声を萎ませるのを見て、アスカは目を細める。実際、のどかは決して運動神経がいいというわけではなく、大した身体能力は見受けられない。性格的にも前衛というよりも戦いに向いているとも思えない。

「そもそも事情を全く知らない一般人からパートナーを選んで如何するんです」

当人達が納得し、危険性も理解して仮契約をするならアスカも文句は言えない。そこまで口を出しては、本人の自由意志を捻じ曲げては意味がない。そこまでする権利はアスカにはない。しかし、今はいけない。

学園に帰って、平和な結界の中で魔法使いとして危険など無い状況でやるならまだしも、今のネギは学園長からの別件を抱えている。それに関わってこようとしたら、もし契約とやらで力を得たとしてものどかでは絡め手一つで即死亡、である。

「しかも、よりにもよって契約した相手はネギ先生ときた。あなたも英雄の負の遺産位は知っているでしょう。ただでさえ繋がりがあるから危険なのに、ネギ先生と契約したことで彼女が狙われる可能性は跳ね上がりますよ」

サウザンドマスター（ナギ・スプリングフィールド）は英雄として多くの人々に憧れの対象とされている。しかし、戦争で生まれた英雄というものは賞賛があっても大なり、小なり憎まれて当然だ。分かりやすい例を挙げるなら、エヴァンジェリンの件がそうだ。彼女自身は戦争に関係ないが、結果的に残した負の遺産ともいえる存在だ。

それにネギは知らない事ではあるが二人の母は災厄の女王だ。何時、命を狙われてもおかしくないのだ。実際にアスカは故郷を飛び出してからナギ関連で騒動に巻き込まれたことや命を狙われたことが何度かある。

確かに3－Aには一般人ではない人物も何人か居るが、大半は魔法を知らない一般人に過ぎない。そこからパートナーとして選ぶのはおかしな話だ。

それをようやく自覚したカモは脂汗を出して固まった。

「い、いや～アスカ先生は大袈裟なんじゃないかな？　そんな命を狙われるとか、そんな物騒な事……」

「六年前、僕らがいた村は何者かによって壊滅しました。生存者は僕を含めて僅か三名、それでもそんなことはないと言えますか？」

「え”？」

命を狙われるとか物騒な話になって、和美は冗談、大袈裟だと言って流そうとするも、続けられたアスカの言葉に声を上擦らせる。

「それで、カモミール。朝倉さんに何処まで事情を説明しました？」

「ど、何処までって……兄貴の現状を……」

顔を青褪めた和美を放っておいて静かにそう聞くアスカの機嫌が悪くなった事を悟り、カモは震えながら答える。

「裏の世界や、ネギ先生に関わったことでできる危険性や、魔法がばれた時の意味の重さや罰は？」

「いや、その……」

アスカの問いにちゃんと答えずにカモは言葉を濁す。カモは、そ

こまで深く考えていなかったし、昨日の騒ぎにしても『ラブラブキッス作戦』を提案したのは小遣い稼ぎの側面が大きい。

「大馬鹿者めが。朝倉さん、あなたもですよ。こちらは興味本位や面白半分で暴き立てていいものではない。本来ならあなたの記憶は消されるか……最悪の場合、存在自体を抹消されますよ」

「へ？　そんなうっそだー！　ねえ、カモっち？　う、嘘なんだよね……ねえ！？」

「……」

アスカから投げ掛けられる言葉を当初は朝倉も信じなかったが、ジワジワと実感してきたのか、恐る恐るという感じで確認する。しかし、同意を求められたカモは沈黙したままで、その問に答えない。

魔法使いの犯罪者など無数に存在するし、魔法使いが金を稼ぐ為に傭兵をやっている事も普通にある。一般人は非現実的な世界に夢を見すぎる。

意外と魔法をすんなり受け入れられる人は少ない。魔法を目撃した九割の人はトリックか気のせいだと思い込むからだ。人は見たいものだけを見る。自分の常識や世界観を強烈に揺さぶられる物に対しては、無意識のうちに認識することさえ拒むものだ。

そして残りの一割は、あっさり順応する人とパニックを起こす人に別れる。そしてそういった人たちは大抵、記憶を消去することが多い。前者は周囲に触れ回るのを防ぐため、後者は本人の精神の為にだ。忘れてしまったほうが幸せということもある。

ネギの場合は、その立場故に周りが庇う。普通、魔法の存在を知ってしまった人に対しては例外なく記憶を奪うというのが掟なのに。

何故そこまでして魔法使いということを隠すのか、幾つか諸説があり、第一に中世ヨーロッパで行われた魔女狩りがある。

魔女狩りとは、キリスト教国家で中世から近世に行われた、宗教に名を借りた魔女とされた人間に対する差別と火刑などによる虐殺のことを指す。魔女かどうかを判別するために、被疑者に鉄球をつけて湖へと落とすのだとか。その判別も浮かんできたら魔女、浮かばなかったら魔女ではないという随分な適当な代物が多い。

魔女狩りとは、教会の権威と威光を示すためのデモンストレーションみたいなものだったにしろ、教会の人間にとって、奇蹟とは信仰に厚い聖人のみが行えるもの。だから神を信じない魔法使いの魔法は奇蹟ではない。神の力ではないのならば悪魔の力を借りたものだ。故に魔法使いは悪魔の使徒である、と言われてきた。

教会により多くの魔法使いが殺され、それまでは普通に暮らしていた魔法使いたちは人里離れた地へと移住するしかなくなった。最近魔法使いが激減した事件は、二十数年前に勃発した大戦がそれに当たる。どちらにしても、魔法界が受けた被害は尋常ではなかった。

魔法が世間に知られれば、また魔女狩りが起こる。これが一般の魔法を隠匿する根拠。

もう一つは公開された場合の兵器転用や民間被害。魔法と聞いてファンタジーなモノを思い浮かべる者が大多数だろう。だが、現実の魔法使いなど、人間兵器と言っても過言ではない存在だ。魔法学

校で習う魔法の矢を一つ取っても、込める魔力によっては簡単に人間を殺せる代物だ。

自分が関わる事になっても、それこそ生死の境を潜る段階になれなければ自分が死ぬかも知れないっていう可能性に気が付きにくい。

皆が最初にイメージする魔法は、危険の無い何でも叶えられる便利な力。そんな気持ちで万一、本格的な戦闘にでも巻き込まれたら、死なないで済めば御の字。

一般人が偶然魔法などの特別な力を手に入れてしまった場合、ほとんどの場合において手に入れた力で何か問題を起こし、それが切欠でその存在が知れることになる。そして引き起こされる問題のほとんどが力を悪用するか、力を扱い切れなかったための暴走によるものだ。特別なものを手にしたという優越感や高揚は、あるべき冷静さと自制心を麻痺させてしまう。しかし、それは何も普通の人々だけの話ではない。魔法使いの中にも、魔法を使えぬ人々を見下す風潮が事実として存在している。

そして広域攻撃魔法を使えば町の一つ二つ簡単に更地に変える事が出来、兵器として転用されれば被害は莫大なものになる。

「裏の世界では魔法を一般人に知られた場合、殆どが記憶を消すと言う方法を使う。魔法を世間にバラした魔法使いは、罪状に応じた期間オコジョにされてオコジョ収容所行きというのが基本的な罰則となっています。もしあなたが魔法の存在をバラそうとした場合は言わなくても分かるでしょ？」

前世の記憶を失うという経験から記憶に対して一種の神聖さを以っているアスカですら、止むを得ない事情で魔法（？）バレをして

しまって相手の事情もあって記憶消去をしたことがある。

「う、うん……」

自分は記憶を消され、ネギはオコジョにされて麻帆良から魔法世界に強制送還。下手したらもっとひどくなる事を考えて、和美はゴクリと唾を飲み込む。

「そもそも専門の対策組織があるので、バラそうとしても無駄ですけど」

そのアスカの言葉にはっとする和美。魔法なんていうものをそう簡単に信じる人間はいない。そんな空想じみたモノが簡単に浸透するならオカルトの本なんて発売されないし、それほどの影響力を持つなら出版社やマスコミはもっと気を使うだろう。考えてみればそれも当然のことで、子供の自分が知り得たのに何故、今この世界に魔法の事が知られていないかと言えばそれは魔法使い側が隠蔽しているに違いないという事は容易に想像がつく。

そしてその先は報道関係に詳しい和美だから分かる事。魔法使いの側はこの事についてなにかしら対策を打っている。今回のネギの様に、ついやうっかりで魔法の事が世間に洩れてしまうのは少ないにしても絶対にない、という事ではあるまい。それでも尚、世間に魔法の情報がこぼれていない事を鑑みれば、報道管制が敷かれているのはほぼ間違いがない。

世間に魔法というスクープを広く知らせる為には、まずはその魔法の世界そのものと戦わなくてはいけない。どんな方法で魔法の事を伝えようとする情報を察知し、どんな方法でそれを防ぐのか。それを知る為のとっかかりすら朝倉は手に入れていない。彼女が今、

知りえている事は余りにも少ない。

「全てが危険というわけでもありませんし、裏に関わること事態を無理に止めるつもりはありません」

それで死んだり何かあっても自己責任ですが、と続けられた言葉に、和美は何を言っていいのか分からなくなった。

「ですが、僕達に関わるって事は、自分の命のみならず最悪、家族知人の命も危険に曝しかねない。魔法世界なんて、はっきり言って一般人の観点からすれば犯罪組織や大国の裏と大差ないと思っていた方が無難です」

一人で如何こうなるほど、魔法使い側の対応は甘くはない。アスカが聞いた話ではネットを監視する人もいるらしい。

確かにＮＧＯ等人の為になることをしていても一般に出てこない以上、どんな理由があるにしてもヤクザな商売だと考えておいた方がいい。

「話はそれでいいとしてカモミール。昨日出来たカードは？」

「これっす」

アスカがカモから受け取ったカードを見ると……。

左上と右下に『２７』右上に『色調―藍』左下に『星辰星―水星』上部に『従者のカード』中央、上から『宮崎のどか』『恥ずかしがり屋の司書』『徳性―勇気』『方位―西』これらの事が、全てラテン語で記されている。

1、当書は、人の心の表層を読むことのできる魔法具です。
2、標準効果範囲　半径5パススパススはラテン語。1パススは1．5メートルと等しい）
3、対象者の名前を呼び、この本を開くことにより、対象者の表層意識が書物の精霊の力によって絵および文字となって記されます。

「読心系か……宮崎さんは完全に一般人だから魔法の事を知っている訳ではない。出来たカードも渡すわけにいかないし……」

読心系統は使いようによっては便利な物であっても、いや、便利であるが故に対処方法はかなりある。初見でしらない者にはかなり有効であっても、対策ある者には決して脅威とは呼べない。

カードを眺めながら呟いていたら、明らさまに和美が身体をビクリと震わせた。その反応を見たアスカは嫌な確信をしつつ、内心諦めが混じる。

「さっき宮崎に会ったとき、景品だって言ってカードのコピー渡しちゃった……」

「いや、豪華商品って事だから、コピーを作って和美の姉さんに渡しちまって」

「何やってるんですか貴方達は。豪華商品だって言うなら、学校に戻ってから似せた物でも作って渡せばいいでしょうに。何時の間に作ったのか、って聞かれたらどうするんですか？」

和美とカモが揃って「あっ」と声を上げた。何時渡すとは言って

いなかった訳だし、そっちの方が現実的だ。そもそも、ゲーム自体が初日に騒げなかったからという側面があるので、簡単にメンバーが変わる可能性が高く、どうやって用意したのかという問題がクリアできていない。

「渡した物は仕方ないですけど、絶対に知らせないようにして下さい」

「「はい……」」

思わず顔に手を当てて天を仰いだアスカだが、注意を促しても既に手遅れなことを知らなかった。

しかもこの件を後回しにすることが後々に響いてくるとは、この時のアスカには知るよしもない。

第六十一話　修学旅行三日目と少年　1（後書き）

次回更新は『明日』の午前０時です。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

第六十二話　修学旅行三日目と少年　2（前書き）

今日は夜勤、頑張ってきます。

修学旅行編全１９話の第１０話目で三日目の二話目です。

文字数は結構余裕ありの１３６２８字です。

それではどうぞッ！！

第六十二話　修学旅行三日目と少年　2

カモと和美が退出して暫くしてから入れ替わるように明日菜を先頭にして木乃香と刹那が部屋に入ってきて各々の場所に座った。

「さて、木乃香さんは今日、総本山に向かうわけですが何かキナ臭いんですよね」

「キナ臭いとは？」

「ここ数週間で西日本の妖怪などの封印が解かれたりで、関西呪術協会の戦力の大半が各地に散っています」

「この時期に都合が良すぎる、ということですね。やはり強硬派が……」

全員分のお茶を入れ終わった後にアスカが口を開くと、疑問に思った刹那と問答を交わす。西日本の状態は、まるでこの時を待っていたかのように活発に動いている。これらを関連付けしないのは余程の馬鹿か、楽観的な人間ぐらいだろう。

「その可能性があるので少しの間、ホテルで待っていてもらいます」

「何か策があるのですか？」

「親書っていう上質な囮がいるじゃないですか」

「ネギ先生を先行させて囮にするというわけ、ですね」

詳しい作戦としては、まず親書を持っているネギを囮として先行させる。その後ろに刹那の式神がついて行き、万が一の事を考えて分身の玉藻も同行させる。相手にとって親書がどれだけの価値があるかは不明でも、敵が引っ掛かってくれるなら上々。なければそれでも良しだ。式神にまほネットで購入した転移魔法符を持たせれば、総本山の近くに木乃香達を転移させるだけで済む。

囮のネギが最も危険度が高いが、影ながら絶対の護衛もつけるのだから死んだり大怪我する心配はない。

そう説明すると明日菜達は安心したのか頬を緩める。流石に子供を囮にするのは気が進まなかったのだ。

「まあ、そんな訳で刹那さんと木乃香さんはホテルで待機して、明日菜さんは班行動に戻ってください」

刹那と木乃香は素直に頷いたが、明日菜は動かない。

「ねぇ……アスカ」

「何です？　まだ何かありますか？」

問いかけられるが何となくアスカには明日菜が何を言いたいのかが分かったような気がした。こういう時の勘というものは、アスカは幸か不幸か何故か良く当たる。

「私も仮契約をしたら戦うことができるかな？」

「いえ、別に仮契約をしたからって戦えるわけではないです。パワーアップするといっても力が強くなった程度で戦えるわけじゃない

んですよ？　そうですねぇ……重量挙げと柔道。そのくらい違うといえば、分かると思いますが」

柔道は力だけでなく、相手の重心を利用する技術が必要なのである。重量挙げもバーベルを上げる技術が必要となるが、それとは全くの別物なのだ。勘違いする人間は多いが、戦いとは力が強ければいいとか、そんな単純なものではない。

「何でそんなに戦うことに拘るんです？　木乃香さんを守りたいなら戦力は十分に足りていると前に言った筈です。今回の一件はあなたが考えている以上に大事です。何もできずとも、誰も責めはしません。そもそも、誰もあなたに戦う事を期待などしていません」

魔性は魔性を引き寄せる。あまりにも条理の外側に突出しすぎた適正を持つ者は、必然的に日常の外側にあるモノを”引っ掛けて”しまうのである。そこに本人の意図が介在する余地はない。そんな運命に対処しうる手段はただ一つ――――自らが意図して条理の外を歩むことだけだ。

その魔性に誘われて現われた怪異の数々は容赦なく災厄を齎（もたら）すだろうし、そんな”一般人”を見つければ、連中は嬉々として彼女を”研究”の名の下にホルマリン漬けの標本にすることだろう。

ここで彼女に決心を促し、こちら側への道を促すのは、自らの人生を切り拓いていけるだけの手段を得るのだから間違いではない。

だが、果たして本当にそうなのか？　――――自問すればするほどに、アスカの胸が苦しくなる。

明日菜がこちらの世界に関わるのは本当に彼女のためとなるだろ

うか？

明日菜の能力と資質は、もしかしたら誰よりも強くなるものを秘めているかもしれない。

だが自ら選び取った運命としてその道を歩むのに比べれば、逃れられざる宿業として決定された道を辿るのは、どれほどの辛苦があることか。

「うっ……でも……分からないけど、私はこのままじゃいけない。そんな気がするのよ」

まるで心の傷を抉るようなアスカの指摘に明日菜は言葉を詰まらせる。

確かに、京都駅での戦いに関しても、自分がいなかった方がもっと楽にこなせたのではないか。そう考えたからこそ、明日菜は昨日あれほど落ち込んでいるのだ。だからこそアスカは指摘している、明日菜が焦らずとも今回の一件から身を引けば済む話だと。

しかし、明日菜はこのままじゃいけないような気がした。このままじゃ、みんなに置いていかれそうな……そんな気がしてならない。それが嫌だ。みんなの傍にいたい。それを表に出さず、だけど明確な意思を持って願い出た。

今も明日菜には覚悟も意志もないかもしれない。そう、胸にあるのは大事な人を喪ってしまって抱えた欠落だけだ。そしてその欠落からさえもずっと目を逸らして生きてきた。だけど何時までそうして生きる事はできないのだという予感がする。

木乃香を助けたいという思いは主軸にある。しかし、ここで置いていかれたら何もできない。それが自らを脅迫するように締め付けてくる。何故かは分からない。分からないけど、何も出来ないままなんて嫌だから。何も出来なかったから誰かが傷ついた。あの時だって、あの時のこととは何のことなのか？　そのことには考えが至っていないが――一種の強迫観念に似た何かが明日菜を追い詰める。

それが明日菜を動かす。今、動かなければ自分は後悔すると。

「前にも言った筈ですよ。あなたの能力が外部に知られれば捕まって魔法に対する盾とか実験材料とか、そういう風に使われますよ」

「そうだとしても、私は木乃香を助けたい」

「明日菜……」

知られた場合の例を挙げたが、明日菜は怯まなかった。その覚悟を聞いた木乃香は感動して胸の前で手を組み、刹那と一緒に明日菜を見る。

「私、頭が悪いから上手く言えないんだけど決めたの。確かにこのまま関わらなければ、普通に生きれると思う。でもこのまま見て見ぬ振りをすれば、私はきっと後悔すると思う。私にはみんなみたいな戦う力は無いけど……後悔だけはしたくない！　だから例えアスカが止めても私は関わっていくよ」

明日菜の目には強い意志が宿っている。その目を見てアスカは止めても無駄だと悟ってしまった。同時に羨(うらや)ましくもある。

アスカが力を求めたのは彼女のように誰かを守るといった綺麗な

想いからではない。恐怖からの逃避、決して許さない復讐心といった負の感情からだ。

多分に別の感情が混じっているとしても彼女の始まりが光であることに変わりはない。それでも諦めきれないものがある。

「もしかしたら普通に死ぬのが幸せだと思うような事をされるかもしれませんよ？」

「上等じゃない、そんなモン振り払うわよ、火を被ろうが水を被ってでも突っ込むわ」

「きっと後悔すると思いますよ？」

「何処かで友達が傷ついてるのに、何も知らずに、何も気付かずにのうのうと暮らすなんて、私には耐えられない、そんなの死んでもごめんだわ。私は自分が選ばなかったことを後悔するぐらいなら、選んで後悔したい」

きっと何時か辛くなる。戦いになど行ってほしくはない。危険な事はしてほしくはない。安全なところで、健やかでいてほしい。これはアスカが３－Ａの生徒全員に持っている思いだ。

大切だから大事だから、それでも危険を承知で戦いに行こうとするその意思を捻じ曲げたりなんか、出来ない。

明日菜はどれだけ止めても、どれだけ説得しても、それでも行くと言う。ならば、するべき事は食い下がる事じゃない。五体満足で生きて帰る、その手助けをする事。

明日菜は頑固者だ。あれは天性の頑固者だ。きっと言葉通り戦う術がなくても拳を握り締めて脇目も振らずに行くだろう。アスカの説得など道に落ちている小石の如く、視界にも止まらず耳にも届かない。そういう人なのだ。それをアスカは知っている。二ヶ月間一緒に暮らし、身近にいたから知っている。同情や一時の感情で、不用意に踏み込んでいい世界ではないと知っていても拳を握り締めたら、きっと行く。

その意志は強固だ。何を言ってもその意志は変わらないと、悟ってしまったアスカは口元を歪めながらも黙って聞く。

「ただ、私は私自身の心に嘘を吐きたくない」

アスカの問いに揺ぎ無い意思を持ち、色彩の違う双瞳を揺らしながら、明日菜は言葉を紡いでいき、そして最後に、そう答えたのだった。

「戦うことなんて止めておけばいいのに損な性格をしてますよ……馬鹿ですよ。本当に」

アスカはどうやっても明日菜の考えが変わる気が無さそうだったので、深いため息を吐きながら薄く笑みを浮かべた。

「……」

明日菜はアスカの笑みを見て「ああ、私って安い女なのかな」と思う。その笑みがとても綺麗で優しくて見蕩れた。この二日あれだけ悩んで苦しんでいたというのに、アスカの笑顔一つでどうでも良くなるなんて絶対どうかしてる。

何となく気恥ずかしくなって視線を横にずらすと同じように木乃香と刹那もアスカに見蕩れていた。

「……分かりました」

アスカは笑みを消し、諦めたように疲れたように一度深呼吸して了承を出す。

「じゃあ……！」

「なら、思いを示してみろ。いま、ここで」

認められたのかと喜色を表した明日菜を前に、突然、別人のような冷たさで、目前の少年は言った。

「ここから先、戦いの場に出れば二度と日常には戻れない。知るのと、使うのでは意味合いが全然違う。戦場に立てば、誰かを殺すかもしれない。こちらが殺されるかもしれない」

明日菜が急ぐのを止めて、最後にその思いを問う。

ここが文字通り明日菜の境界線。乗って越えたら最後、明日菜は日常を捨て去り、死ぬかもしれない戦場へ身を委ねることになってしまう。

それは明日菜がなまじ強大な力に恵まれているために、より顕著に現れる。

「アスカ……？」

明日菜は自身の足が動かないことに気付いた。

座っていてはまずい、と立ち上がろうと力を入れたのに、体はアスカに魅入られたように動かなかった。

手足に力を入れるが、一向に動かない。どんなにもがこうとも、身体は動かない。むしろ入れれば入れるほど固まっていく気がする。横目で木乃香や刹那を見れば同様に動く目だけで互いの状況を認識し合った。

アスカがゆっくりとサングラスを外す。

かつて一度だけ見た目元の火傷に変化はない。

――――――あの目だ。

アスカの深い緑色だった目が赤く染まっていくのを見ていると、体が麻痺していく。歯を食い縛って、とにかく全身に力を込めても指先はぴくりとも動かない。もはや神経という神経が、がっちりとアスカの視線に絡め取られている。

アスカは赤く染まって目を輝かせ、その内に六芒星に二重の円が描かれた文様を浮かび上がらせながらゆっくりと立ち上がり、手を伸ばす。

「地獄を見せてやる」

「！！」

その言葉と同時に明日菜の視界が途切れた。手足の感覚はとうに

無く、視覚さえ無くなった。

気がつけば明日菜の眼前に広がるのは白と黒の色しかない異様な空間。とてもこの世のモノとは思えない未知なる異界。

光も射さない闇の牢獄に閉じ込められ、十字型の石柱に磔（はりつけ）にされ、両手足を固定されて身動きが取れない。

「この世界（月読）では、空間・質量・時間……全ては俺が支配する」

誰もいなかったはずの空間に突如現れたアスカ。

しかしそれは一人だけではなく、その周りには数えることすら無駄と言わんばかりに数十人、数百人と　刃物を持った無数のアスカの姿があった。

「これから２４時間、お前を刺し続ける……」

アスカは明日菜の腹部に向かって凶器を向け、構える。

「いまなら止めることもできるが、どうする？」

最後通牒として問いかけるアスカ。

異様な光景、異様な事実、異様な世界。

なにもかもが異様な空間においてアスカが事前に言った「地獄を見せてやる」という言葉に偽りはないのだろう。ここで止めなければあの凶器に２４時間もの間ずっと刺し続けられる。

きっと痛いだろうことは簡単に察しがつき、恐怖から人前でもあられもなく泣き喚きたい。

だが、それでも決めたのだ。

「どんな地獄でも……耐え切って見せるわよ！！！！」

拘束された状況で囁(ささや)かれる解放への甘美な誘惑にも怯むことなく言い切った。

明日菜の決意に対するアスカの返答はなく、凶器を持っていない片手を上げてまるでなにかの合図のように下ろすだけ。

その意味するところが明日菜にだけは直ぐに分かった。己の体を貫く痛みとして。

「ああっ！！！」

凶器が着ていた制服を貫いて脇腹を刺され、今まで感じたことのない壮絶な痛みに絶叫する。

しかし、そんなものはこれから始まる地獄を前にして単なる序章でしかない。

「ぁぁあああああああああああああ……！！！！」

脇腹の凶器が抜かれたと思ったら次のが、それが抜かれてまた次のが、と永遠に続くような痛みの連鎖に明日菜は絶叫を上げることしかできなかった。

明日菜にとって永遠とも思える時が流れ――――――

「どうしたん明日菜……！」

２４時間が経過したのか気がつけば元の空間に戻っており、体が畳に横たわっており、自分に駈け寄る木乃香の姿が見えた。

「……戻って……来たの？」

肉体的には全く疲れていないのに先程の空間での疲労が圧し掛かり、息を乱した明日菜は己が現状を把握した。

「大丈夫ですか？　急に倒れて」

心配する木乃香の手を借りて起き上がった明日菜は、続いた刹那の言葉に先程の空間での出来事が此方では一瞬にも満たないことに直ぐに気付いた。二人には突然、明日菜が倒れたようにしか見えなかったのだろう。

「神楽坂明日菜。よく持ち堪えたよ」

声に反応して視線をずらすと、再度サングラスをかけたアスカがこちらを見ていた。

その視線に含まれているのは紛れもなく賞賛。

「手加減したとはいえ【月読】に耐えたんだ。君は確かに意思を示した。認めよう、君が此方に来ることを」

【月読】というのが先程の異空間に関することは直ぐに察しがついた。あれですら手加減されてことに畏怖の感情が浮かび上がるも、認められたことを理解して自然と口元に笑みが浮かんだ。

「誰も君に強制しない。求めない。請わない。君の自分の人生だ。自分で決めろ。その選択を無かった事にするな。間違えても良い。後悔しても良い。けれど、後ろに下がる事だけは決してするな。それでも関わると決めたのならこの手を取れ。君に生き残るための力を、戦うための武器を与えよう」

宣誓のような言葉を聞いて、本当に自分の事を心配してくれているんだ、と明日菜は思う。最初から一貫してアスカは明日菜を関わらせようとはしなかった。

その気持ちを純粋に有り難いと感じながら、だが、こうも思う。それでも自分は思いを抱いて前へ進むと。

明日菜は万感の思いを胸に噛み締めて立ち上がり、しっかりと伸ばされた手を取った。

そして時間は過ぎ、ネギは明日菜と木乃香のいない五班の面々と京都市内某所にあるゲームセンターに居た。

ネギは一人（カモは一緒）でホテルの裏口から秘密裏に抜け出して関西呪術協会の総本山に向かうつもりだった。明らかに自分の身長より高い杖を持つ少年は隠れているというか、むしろ見つけて欲しいのではないかとアスカなら突っ込んでいただろう。差に在らず、ホテルを出る際にハルナに見咎められ、ネギの作戦は敢無く水泡に帰した。

元々、学園長の許可もあって木乃香は、三日目は別行動になっている。随伴するのは刹那だけだったが、急遽、アスカから連絡があり、明日菜も同行するため五班は三人となっていたところだ。

修学旅行三日目は自由行動なのと、ネギが上手く誤魔化す事が出来なかった為同行する事となった。

適当に付き合って、機を見て、親書を渡しに行こうと考えをそう改めて、勧められるままに魔法使いのゲームを始めるネギは飲み込みも早く、とても初心者とは思えないくらいだった。

そんな中、学ランを着た一人の少年が勝負を申し込んできた。

「隣り、入ってええか？」

「あっ……うん、いいよ」

勝負を申し込んで来ただけあって、バトルは白熱するがネギが負けてしまうが、初めてにしては上出来だとハルナからお墨付きをもらう。

対戦した少年は椅子から立ち上がり、ネギへニヤッと笑うもその笑顔に嘲笑はない。

「なかなかやるなぁ、アンタ。でも……魔法使いとしてはまだまだやけど」

「え……うん……どうも」

「ほなな。ネギ・スプリングフィールド君」

「えっ？ど、どうして僕の名前を!？」

『魔法使い』の言葉にも多少動揺があったが、見ず知らずの相手にいきなり自分のフルネームを言い当てた事には驚いてしまう。

「だって、プレイ前に自分の名前を入れたやろ？」

少年がネギの名前が分かったタネは単純明快。少年が指差した先の画面『ＧＡＭＥ　ＯＶＥＲ』と書かれている下に『ネギ・スプリングフィールド』とはっきりと名前が出ている。

「あっ……そっか」

納得したネギはそう言って、舌をぺろりと出す。

そんなネギのボケっぷりを笑ったその少年は、片手を挙げて立ち去ろうとして、余所見をしていたのでのどかとぶつかってしまうアクシデントがあった。

「ま、いいや。このパル様がお手本を見せてあげようかな」

「お相手しますよ」

「よーし！！関西限定レアカード全部集めちゃうよ！」

「おー」

盛り上がっているハルナと夕映は自分のデッキを取り出してセットし、ゲームを始める。

（兄貴、今だぜ）

「う、うん」

皆が盛り上がっている隙に抜け出そうとカモが小声で言い、ネギも頷いてコソコソと見つからないように身を隠してゲームセンターを出て予定通り関西呪術協会を目指す。

「ネギ先生……何処行くんだろうー……」

ネギは後をついてくる一人の少女に気付けず、その運命すら捻じ曲げていく。

近代的なゲームセンターを抜け出して裏路地に人目を憚るように入った少年は、滅多に人が入らないような路地のどん詰まりで彼を待っていた者達と合流する。

そこに居る人間は合流した少年も合わせて４人。白髪学ランの少

年、帽子を被ったやんちゃそうな少年、ゴスロリ服を着て刀を2本携えた少女、そして煽情的な和服を艶かしく着こなしている女性。年齢や何やら纏まりがなさ過ぎの集団である。

「やっぱ、名字、スプリングフィールドやて」

集団の中心に陣取っている聊か露出の多い和風な衣装に身を包んだ若い女――関西呪術協会強硬派の一人である天ケ崎千草は少年の報告に成る程と頷く。

視察の為に連中と接触する以上、顔が割れてないのが選考の第一条件。既にこの時点で千草と月詠はアウト。残る候補は二人しかいないのに、年に似合わぬ白髪に濃い空色の瞳、色素の薄い肌に学生服にも似た詰襟姿を着ており、一見して美少年だと断ずることが、感情を覗かせない硝子のような眼が、その幼さと端整な容姿からは想像もつかぬほどに冷たい気配を放っている少年――――フェイト・アーウェルンクスはゲーム未経験ということで早々に視察の候補から外れた。

つまりほとんど消去法で、思いのほかゲームの経験はある黒髪に学ランの少年――――犬上小太郎が斥候役に選ばれたというわけだ。

どのみち月詠、フェイト共にゲームセンターという場に合わないので最初から決まっていたようなものだが。

「サウザンドマスターの息子、か……」

桁違いの魔力、赤い髪の毛、面影を残す顔立ち。考えれば考えるほど、あの少年はナギ・スプリングフィールドに生き写しだ。

言葉を切った千草は路地の向こうに見える空に視線を移す。果たしてその胸中に浮かんでいるのはどんな感情か、他の三人には分からない。

「それやったら相手にとって不足はありまへんなぁ」

空を見上げて物憂げな表情を浮かべていた千草は、数秒後には視線を下ろし不敵な笑みを浮かべた。その変わりように、他の二人はともかく傍で見ていた小太郎は声には出さないが驚く。

「そうやな。あ、せやけど千草のねーちゃん、問題のお嬢様がいいひんかったで」

闘志を燃やす千草に小太郎は、そう言えばと思い出したように声をかけた。

「何やて、お嬢様がいない？」

おう、と頷く小太郎を見て千草はどういうことかと顎に手をあてしばし考え、不意に浮かんだ人物の姿に、「やってくれる」と心中で呟く。

千草は事前に３－Ａの「修学旅行の栞」を入手している。

それは学園の清掃員の一人に、金を握らせて手に入れたものだった。協会がいかに厳重な警備を敷こうとも、それは魔物や他の魔法使いたちなどの、神秘に関るものに対してのみ有効なものだ。一般人、それも学園に出入りすることが許された関係者に対しては何の効力も発揮しなかった。

予定を把握していたので行く先々でイタズラを起こして気を散らさせ、千草は彼女達がホテルに着く前から符を使って完全に隠れていた。そして木乃香が入浴する時間を見計らって時限式に符が発動するようにして、夜中に油断させたところを奪還するつもりだったが、思ったよりも向こうの戦力は充実していた。

それ事態は別に問題ではない。元々、初日は戦力評価の意味合いが強いから上手くいけば儲けものという意味が強かった。何故なら向こうは必ず襲われると知っていたから。

しかし、今日は違う。明日には関西呪術協会の主力も帰ってくる。相手の手はまだ予測できないが見事に裏を掻かれた。

「まあ、ええわ。予定通り小太郎はサウザンド・マスターの息子を追い。何かの罠かもしれんから、うちら三人は待機「僕も行こう」ほか？　それじゃ二人に頼むわ。月詠はホテルにお嬢様がいるか確認してきてや」

頭の中で素早く戦略を練り、木乃香の件に関しては姿が見えない以上、後手に回るしかない。なので先手を取れるネギの方の対処を導き出す。

事前の計画通り、千草が小太郎一人にネギを任せようかと思った時、感情の読み取り辛い顔に僅かな興味を浮かべたフェイトが同行を申し出た。珍しく自分の意見を言ったフェイトの意を汲み、千草は小太郎と二人でネギを追いかけるように指示を出し、月詠には木乃香が見つかったら行動を移せるように待機を命ずる。

「おーう」

「分かりました～」

「了解」

小太郎は首の後ろで手を組んで行儀悪く返事をする。月詠は何時も通り戦闘以外ではほわほわと、フェイトは首だけを動かし、小さく了承を返す。

各自に役割を言い渡した後、小太郎が真っ先に路地から出て行き、フェイトが後を追って音もなく去っていく。ホテルを見てくるように言われた月詠は二人とは別の方向へと向かっていく。

「お嬢様がまだホテルにいるとなるとサウザンドマスターの息子は囮か」

千草は一人路地裏に残り、壁に背を預けて晴れ渡った空を見上げる。

「●●●はん、すまんな。それでもうちは、止められんのや……」

空を見上げた彼女の眼は空虚で何も映していなく何を考えているのか、それを知る者は今、この場には誰もいない。

アミューズメントセンターを抜け出して関西呪術協会の総本山へ

と向かったネギとカモ。

関西呪術協会の本山は、嵐山より少し離れた地点にあって歩いていくにはかなり遠い。しかし、タクシーで行くにはネギの所持金は、小学生よりかはマシというレベルしかないので使えない。となると残る交通手段はバスか電車しかなく、ネギは電車を選んで目的地を目指すことにした。

それから数十分後、道中予想された妨害もなく、ネギは無事に関西呪術協会の本山の入り口に辿り着いた。

関西呪術協会の本山の入り口は、如何にもといった様子だった。短い石段の先には大きな門が立っており、門の脇にある石碑に刻まれた名は『？毘古社（かがびこのやしろ）』と書かれている。

小高い山が丸々敷地らしく、鳥居の後ろには鬱葱と生い茂った森を横断するように石畳の階段が伸びており、まるで人目から隠されているかの様になだらかな石畳の階段が終わるとひたすら奥へと道が続いている。その道をまたぐように竹薮に囲まれた無数の朱色の鳥居で形作られたトンネルは、思わず吸い込まれてしまいそうに深く、長く、どこか別の世界へと繋がっているかと錯覚してしまうほどだ。辺りに人気は無く、風が吹くたびにごおごおと不気味な音が辺りに響きわたる。

興味本位で入ることが憚れるほどに、目の前の土地は異様な雰囲気を醸し出していた。

それは一般人を寄せ付けないように人払いの結界が張られているためだ。それだけでなく、妖怪悪霊の類を侵入させないための結界も張られている。

「ここが、関西呪術協会の本山……」

「伏見神社ってのに似てるな」

鳥居が何個も連なっている長い階段の下で、ネギとカモはその階段を見上げ、それぞれ感想を漏らす。

「ここの長に親書を渡せば任務完了って訳だな。兄貴、走ったりせず、周囲を警戒しながら進もうぜ」

「え、何で？」

「甘いぜ、兄貴。新幹線で妨害してきた術者も、恐らく元々はここに属する陰陽師だ。それに組織である以上、関西呪術協会も一枚岩じゃねぇ」

流石にここでの襲撃はないだろう、と言おうとしたネギをカモが制する。ガイドブックを手にしたカモは、逆に彼はここでこそ襲撃があると考えていた。

カモは、ネギに関西呪術協会の長やその側近が東からの使者を歓迎するとは限らないので罠に気をつけるようにと言いたいのだと考えている。

関西呪術協会内部では、和平を求めている現在の長に対する対抗勢力が存在している。そして何より彼等は『東の魔法使い』を嫌っているのだ。表立って妨害する者は少ないだろうが、親書が届く前にネギに協力する事はできない。それがアスカの推測だ。

一般人に対してその存在を隠匿している関西呪術協会としては、白昼堂々と襲撃して、その姿を衆目に晒すと言うのはあまり褒められた事ではない。しかし、ここならば総本山の人払いの結界があるため、一般人の目を気にする事なく襲撃を仕掛ける事ができる。

それをカモは説明し、きちんと掃き清められた鳥居のある入り口を見つめるネギは頷くと慎重な足取りで竹林の石段を進んでいく。それが自分達の首を絞めるとも知らず。

それから三十分後、緩やかな石段を登って幾つもの鳥居を潜り抜けてから、一人と一匹はおかしなことに気がついた。行けども行けども本山にたどり着く様子が無く、延々と竹林に挟まれた石畳の通路が続いているのだ。どれだけ抜けている人間でも可笑しいと思う。

「もう、三十分は歩いているよね」

歩きとはいえ、三十分も警戒しながらでは幾ら普段から魔力で身体強化しているネギでも疲れは隠せない。

「これはもしかして」

「え!?　どうしたのカモ君?」

「ちょっと先を見てきやす。兄貴!」

「う、うん。お願い」

しばし思案していたカモはとある推測を立て、訝しがるネギに答えずに肩から降りて一匹?で鳥居の奥へと進んで行った。

カモの後ろ姿を見届けたネギは、長時間警戒して疲れた精神を解す様に少し息を抜く。が、数秒後に後ろから「兄貴！」っとカモの声が聞こえて飛び上がった。

「うわっ！？　あ、あれ！？　何でカモ君が後ろから！？」

「やっぱり……！　次は横の竹林から脱出を試みます！」

「あ、ちょっと待って！」

ネギが事情を聞こうと止める間もなく再びカモは駆け出すが、結果は先程と同じく駆け出した反対方向から戻ってくるだけだった。

流石におかしい事に気付いたネギが杖に跨って上空から脱出を試みるも、一定の距離を進むとその場で待っていたカモの直ぐ上空に現れ、此処に至って自分達が罠に嵌ったと気付かされた。

「……間違いねぇ、恐らくは無限回廊の類の呪術だ。今、俺っちたちがいるのは大体半径５００メートル程の半球状のループ型結界の内部。つまり、この千本鳥居に閉じ込められちまったってことだ」

無限回廊、即ち永久ループの呪法はどれだけ進もうとも永遠に同じ場所を回り続けるという破る術がなければ出られない質の悪いものだ。今回の場合、ネギ達は知らないが無間方処の咒法と呼ばれる種類のもので、カモの推測の大筋に違わず、一度取り込まれると脱出は困難を極めるとされる。

つまりは前に進むのも駄目、後ろに戻るのも駄目、横に行くのも駄目、上も駄目では完全な手詰まりに陥った。

説明するカモの声音に、一段と重い響きが含まれる。その声に呼応するかのように、周囲の竹が風に撫でられ不気味に騒めいた。

その場に何時までも留まっている訳にはいかず、少し進むと鳥居の脇に時代劇に出てくるような和風作りの茶屋と自動販売機があった。明らかに怪しく罠かもしれないが気を張りながら歩いて疲れたネギは一休みすることにした。

「兄貴、これはちょっとマズイぜ」

「そうだね、カモ君。これって脱出するには結界の基点を破壊するしかないんだよね？」

「それしかないだろうな……」

自販機があったので椅子に腰掛け、飲み物を買って飲みながら作戦会議を始めるネギとカモ。

西洋魔法、陰陽術の違いはあれど、結界を作る際には基点となる場所がある事に変わりはなく、まずはその場所を探す事から始めようと考えたみたいだった。

「でも、何処に基点があるんだろう……」

「やっぱり、一番怪しい鳥居に基点があるんじゃねえか？」

周囲を見渡しながらカモが一番高そうな可能性を指摘すると、他に思いつかないネギがその指示に従って鳥居を探ろうと足を運ぶ。

「おっと、そこまでにしといてもらうで」

鳥居を探るというネギの行動を遮るように、その少年は唐突に現れた。

年の頃はネギより少し上か、同じくらいといったところであろうか。頭にはニット帽を被って納まりきらずに溢れた髪を後ろで結んでおり、前を開いた学生服に身を包み、学ランの下には白いTシャツを着ている。

「生憎やけど此処から出られるのは困るんや。つー事でちょっと遊んでやるで」

そう言って茶屋の屋根の上で、少年――犬上小太郎は拳を胸元に翳し、好戦的に歪む唇が開戦を告げた。

「ほな戦ろか、西洋魔術師――――――いや、ネギ・スプリングフィールド！」

「き、君は……」

少年を見たネギの表情には若干ながら驚きの色が浮かんだ。何故なら、今日ゲームセンターでネギが出会った少年だったからだ。

しかし、ネギには悠長に考えている暇などない。小太郎は言葉の後、屋根を勢いよく蹴りつけ、真っ直ぐに向かって来ている。ネギは慌てて詠唱を開始した。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル　風花・武装解除」

始動キーを唱えて魔力を掌に集中させ、詠唱終了と共に翳したネギの掌から突風が吹き荒れる。だが、ネギが魔法を唱えている段階で小太郎はゴソゴソと学生服の内ポケットから数枚の呪符を取り出していた。

「ハッ！効かんわ、そんなん！」

放たれた凄まじい突風が小太郎にぶつかる。しかし、小太郎を吹き飛ばすはずだった風は彼の手にある呪符とニット帽を吹き飛ばすだけで終わり、ネギに肉薄する。

「もらったぁっ！」

「風楯……あぅ！」

ネギが慌てて引き絞られた拳を風の楯で受けようとするが詠唱は間に合わず、左頬を強い衝撃が貫く。障壁も突破されて視界が急転し、石畳に勢いよくバウンドして右半身を強かにぶつける。

小太郎の一撃で口を切ったのか、口の中が不快な錆びた匂いと味で一杯になり、ネギはペ、と口内に溜まった不快なモノを唾と一緒に唾を吐き棄てる。僅かな粘性のある真っ赤な血が、小さな音を立てて地面を跳ねた。

「へへっ、どや障壁抜いたで。今のは効いたやろ」

小太郎は、歯を食いしばってなんとか立ち上がろうとするネギに嘲笑を向ける。

小太郎が千草の誘いに乗ったのは、西洋魔法使い相手に思う存分

暴れたいという願いがあったからだ。いけ好かない西洋魔法使いを倒す事もそうだが、闘いを、特に強敵との闘いを渇望してやまない小太郎に願ってもないことだ。

本当ならフェイトと二人で攻め込むという手もあったが、正々堂々を好み、卑怯な事を嫌う小太郎は一対一の状態にするために、何があっても手を出さないように言い含めて一人で出てきたのだ。

「ハハハ、やっぱ西洋魔術師はアカンな、弱弱や。この分やと、お前の親父のサウザンなんとかゆーのも大したことないんやろ、チビ助」

その言葉が耳に届くと同時に、口元の血を拭っていたネギは眉を吊り上げて怒りも露わに振り返った。

西洋魔術師としての誇りを貶されただけならまだしも、自分がもっとも尊敬する父を侮辱されたのだ、その怒りは計り知れない。

ネギは父である『千の呪文の男』を神聖視している。ここにいるのがアスカだったら小太郎の言葉を鼻で笑うが、ネギは父を侮辱されて黙っていられることなどできない。

しかし、悲しいかな今のネギには小太郎の言葉を撤回させるだけの力は無く、睨み付けるだけで何も出来ない。

「ハッ！　これで終わりやぁっ！」

当然、睨み付けられても攻撃力など全くない。小太郎は言葉と共にネギにトドメを刺す為に飛び掛った。

「待てェィィィッ！！」

――――――ピカッ！

「くっ　目晦ましか！」

だが次の瞬間、目の前に閃光が生まれ、目が眩んだ小太郎はその動きを止めざるを得なくなった。小太郎は目を擦るが、閃光を諸に直視したので直ぐには回復しない。

「兄貴ッ！　ここは一時撤退だ！！」

カモが必殺技（？）『オコジョフラッシュ』で閃光を生み出し、ネギに声を掛けて急いでその場を離れる。ネギは父を侮辱した相手から逃げたくなどなかったが、分が悪いのは理解しているのでカモの言葉に大人しく従う。

「この臆病者がーーーーっ！　俺から逃げてもこっからは出られへんねんでーーーーっ！！」

小太郎の叫びを背中に聞きながらネギは、悔しさで血が出るほどに唇を噛み締めてざわめく竹林に吸い込まれて消えて行った。

第六十二話　修学旅行三日目と少年　2（後書き）

次回更新は『明日』の午前0時です。敢えてタイトルをつけるなら『ネギ君、頑張る』です。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

第六十三話　　修学旅行三日目と少年　３（前書き）

夜勤明けで明日も仕事だと！！　こ、腰が？！

後三日も体が持つだろうか。

修学旅行編全１９話の第１１話目で三日目の三話目です。

文字数は１０５４６字です。別名：【ネギ君、頑張る】です。

それではどうぞッ！！

第六十三話　修学旅行三日目と少年　3

何とかカモの策で小太郎から逃げ切ったネギは休憩場からそれほど離れていない、小さな滝のある岩場に隠れていた。普通、逃げるとしたら遠くに逃げると考えているであろう小太郎の裏をかく為に、敢えて先程の場所から直ぐ近くの所に隠れることにしたのだ。

持っていたタオルを出して、水に浸して濡らしてから顔に当てて傷の手当てを始め、冷たい感触が思いの外気持ち良いのでネギはようやく一息つけた。その間にカモは作戦を練る。

「……ねぇカモ君。僕は父さんを探すために戦い方を勉強したんだ。父さんを探すうちに、必ず戦う力が必要になると思ったから」

何時に無い真剣な表情で語り始めるネギに、カモは作戦を考えていた思考を止めて聞く。

「エヴァンジェリンさんに負けたし、僕は未熟だよ。でも、強くならなくちゃ父さんを探し続けることなんてできない……」

ぽつり、ぽつりと内心を吐露するネギ。声を大きくして言っている訳ではなかったが、カモはネギのその言葉から強い意志を感じていた。

カモはネギの強い言葉に、この決意に水を差す真似をしてはいけない、と言葉を挟むことができない。

「だから、僕はここであいつに勝たなきゃ！！」

ぐっと拳を握り締め、小太郎に必ず勝つ、と強い決意を込めたネギは宣言する。それをカモは目を見開いて見ていた。

「で、でもよ、だからって無策で行っても勝てる相手じゃないぜ！　どうやって奴に勝つんだ兄貴！？」

大体戦闘スタイルは二つに分かれる。「相手が近寄れないようにして、遠・中距離の魔法で弾幕を張って撃墜」か、「自分自身の体に魔力等を付加して、身体を強化しての肉弾戦」だ。

そしてネギのスタイルは前者の「魔法使い」で「魔法」を使用しての遠距離攻撃が基本だ。これは、呪文を詠唱する為にある程度の距離を稼がなくてはならないが故の「魔法使い」の戦い方として半ば必然的なものだ。詰まるところ。言い換えれば遠距離攻撃を凌がれ、呪文を唱える間もなく距離を詰められ、近距離攻撃を仕掛けられた場合、成す術が無くなってしまうのが「魔法使い」の弱点。その為に、前衛として「従者」の助けが必要不可欠なのだが、ネギには仮契約をしていても前衛を担当してくれる「従者」がいない。

逆に小太郎のスタイルは見ての通り後者の「戦士」で近距離攻撃が基本だ。なので、この状況では考えるまでも無く、二人の戦闘スタイルが全く噛み合わない。無策で行っても距離を詰められて先程と同様の結果になるだけだ。

「大丈夫だよ、カモ君。僕に勝算がある」

勝算は有るのか？　と言外に尋ねるカモの言葉に、ネギはやけに自信ありげな笑みを浮かべるとグッと親指を立てて見せた。

作戦を練り、少ししてから颯爽と竹薮の中から飛び出したネギは杖を手に握って石畳に降り立つ。

「行くよ、カモ君！　広い場所で迎え撃つ！！」

「兄貴考え直せ！！　その作戦は危険すぎる！！」

ネギの語った作戦を考え直させようとしたカモだったが、それより速く竹と竹が不自然に擦れ合い、不気味なざわめきが起きた。

それにより、ネギは敵が近いことを確信し、心の奥底に押し込めたはずの恐怖が再び自分に纏わりついてくるのを感じた。

（上手くいくかどうかは五分五分……だけど、父さん見ててください……！）

ネギは自身の作戦は分が悪い事を自覚している。ネギには偉大な英雄の息子であるということは誇りであり、父親の存在は最早精神の支柱に達した屋台骨だ。

それら全てをあの少年は貶した。勿論親書を届けたいという思いもあるが、それは逃げ道というだけで、認めさせてやるというのがネギの本音だ。

それを撤回させる為にはどんな危険を冒してでも彼に勝つ必要がネギにはあったのだ。

例え今、横道に逸れても結果さえ出してしまえば大概の事は大目に見てもらえるという事を、ネギは経験で知っていた。魔法学校で幾ら問題を起こしても結果を出したネギが咎められた事はない。確かに結果を出した、というのもあるが、「英雄の息子」だからこそ見逃された部分が多い事をネギは知らない。誰も知らせなかったというのもあるし、何時も結果を出してしまったことがネギを増長させる結果に？がった。だが、それが今回は良い結果へと？がる。

「ラス・テルマ・スキル・マギステル　風精召喚　剣を執る戦友！！　迎え撃て！！」

詠唱するネギの右手に魔力が集う。次いでネギが右手を前方に突き出すと、七つの風の中級精霊達が杖・剣・槍・杖とそれぞれの武器を手に取ったネギを模した分身が数体、鳥居の上を高速で移動する小太郎へと突撃を開始する。

「ハハッ、よーやく本気か！？　チビ助！？」

犬歯を剥き出しにして歓喜の声を上げる小太郎は、それを面白そうに笑いながらも足を止めることなくネギの魔法に向かって真っ直ぐに突っ込んで行く。

「こんなもん！！」

左右から迫り来るのを両手の裏拳で一体ずつ叩き潰し、前方への鋭い前蹴りで更に一体蹴り飛ばす。続いて背後に回りこんだ一体を見もせずに殴り飛ばして、時間差攻撃を仕掛けようとした残りの三体を懐から取り出した棒手裏剣が狙い過たず貫いた。

やっぱ大した事ないな、と小太郎は呟くが、その口角は吊り上がっている。闘いを愉しんでいるのだ。

瞬く間に全ての精霊達が撃破されるも、それより前にネギは次の一手を打っていた。

「魔法の射手　連弾・雷の十七矢！！」

小太郎の死角から十七の電の矢が撃ち抜かんと迫る。それに気付いた小太郎は懐から取り出した防御用のお札により、迫る雷を間一髪で直撃を避ける。取り出した護符は今の一撃により全て焼き尽くされるのを見て、その威力に小太郎は冷や汗を掻く。

数本程度しか直撃コースに入っていないので狙いは粗いが、その威力は充分脅威に値する。魔法の矢は基本的な攻撃魔法であっても、数が揃えば驚異となり得る。特に雷属性には雷撃による痺れという付加効果があり、小太郎にとっては威力よりもそちらの方が厄介だった。

直撃を食らえばダメージはともかく、足が止まり大きな隙ができる。その間に強い呪文を唱えられたら耐えられるかどうかは分からない。

当たりどころが悪ければ、一撃でも危険だ。　接近すればどうとでもなるも、この距離は不味いと小太郎は距離を詰める事を選択するも既に遅い。

そうネギの攻撃はまだ終わっていない。この魔法の射手を防いだことによる一瞬の停滞こそがネギの狙いで、小太郎が体勢を整える間を与えず次の詠唱を始めていた。

「ラス・テルマ・スキル・マギステル　闇夜切り裂く一条の光　我が手に宿りて敵を喰らえ　白き雷！！」

「うがああっ！？」

ネギの掌より放たれた白雷が、硬直する小太郎に直撃した。流石にこれは効いたらしく、小太郎は力なく鳥居の上から倒れ落ちる。

「なかなかやるやないかチビ助！！　今のはまともに喰らったらヤバかったわ！！」

しかし、次の瞬間には巻き上がった土煙の中から弾丸の如きスピードで小太郎が飛び出してきた。小太郎は持っていた取っておきのお札を使い、先ほどの魔法を防いでいたのだ。

彼の手には無残に焼き尽くされた護符が握られており、それでも多少の余波を食らったのか、身体のあちこちが焦げ煤けていた。しかし、護符のお陰でダメージはほぼ無いに等しい。

「ラ……ラス・テル・マル・マキル」

「へっ」

ネギが慌てて呪文を唱えようとするが、小太郎がそのような暇など与える筈もない。

「ッは……！！」

呪文を詠唱していたネギの数メートル手前で、小太郎は残像が残

る程の速度で駆け抜けて側面に回り込み、回転運動を加えたボディーブローが障壁ごと始動キーの段階でネギの腹部に突き刺さる。

障壁でダメージは緩和できたが、衝撃までは殺しきれずにネギの横隔膜に激しい衝撃が走って肺から根こそぎ空気が抜ける。当然、詠唱は止まり、痛みで直ぐに詠唱し直すこともできない。

「がっ、あ……かは……！」

必死に耐えるネギを嘲笑うかのように、小太郎は先の一撃で身体が浮いたネギの後頭部に小太郎は上から叩きつける拳打を放つ。

「お前等、あのオコジョと遊んでやれ！」

小太郎の足下から無数に狗を象った影が出現してカモへと飛び掛り、地面に踏み付けて身動きの取れない状況へと追いやる。それによって何とかネギを助けようとしたカモは完全に手が出せなくなる。

痛む体を叱咤して立ち上がろうとするネギだったが、容赦無く降り注いだ小太郎の鉄拳により、その身体を砕けた石畳の中に沈ませられる。

「オラ、オラッ！　反撃してみんかい！！」

「ぐっ！」

魔法使いであるネギではその動きに対応できず、展開している魔法障壁が衝撃を緩和してダメージを抑えているものの、小太郎のラッシュから逃げることができない。魔法使いである以前にネギは誰かと殴り合いの喧嘩すらしたことがない。防御の体制を取ることも

できず、タコ殴りにあう。

「ま、まずいぜこりゃ……」

風切り音が唸るように周囲に響き、幾つもの打撃音が戦闘のためにネギの肩から下りていたカモの耳に入ってくる。

ネギを殴り飛ばし、岩に叩きつけると小太郎は彼の赤髪を乱暴に引っつかみ、容赦ない拳打の嵐を見舞う。拳がネギを捉える度にネギの血が撒き散り、石畳を赤く染め上げていく。

打撃を浴びるネギの様子にカモは危機感を抱いていた。それはネギ自らが自分へと掛けた魔法障壁の持続時間の限界。素人の攻撃なら障壁によって中和されるが、相手が「気」を使う者であれば話は別へと変わる。「気」によって強化された膂力が生み出す一撃一撃の破壊力は、容易く岩壁をも砕く程だ。

その破壊力を持つ猛攻を受けてネギが無事でいられるのは、偏に展開している魔法障壁のお陰であった。

しかし、魔法障壁があるので致命的なダメージには至っていないが、気のこもった拳を何発も連続で障壁に受けては何時までも持たない。もし、岩壁も砕く攻撃を生身で受けたのならばどうなるか、想像に難くない小太郎の猛攻はネギを捉え続けていた。

「護衛のパートナーがおらへんかったら、西洋魔術師なんてカスみたいなもんや！　遠距離攻撃をしのぎ、呪文を唱える間をやらんかったら怖くもなんともない！！」

理屈でもネギが不利だが、やはり戦闘経験の違いが如実に表れて

いた。

侮蔑を込めた嘲笑を上げながら小太郎は、攻撃の反動で背中を浮かせたネギを鋭い回し蹴りで岩に貼り付ける。

その衝撃にネギの痛む肺が空気を強要するが、もはや彼には意味の無い呻き声を出すしか出来ないでいた。ネギの魔法三連撃も通じず、今は肉弾戦に持ち込まれて呪文詠唱ができずにサンドバック状態だ。

「あ……う……」

無数の打撃から蹴りへと繋がり、岩に背中をぶつけて意識を朦朧とさせるネギを眼前に捉え、ネギにトドメの一撃を食らわせるべく小太郎は右腕を振りかぶる。

「勝ったで！！　とどめぇ！！」

「兄貴！！」

カモの悲鳴が聞こえる中で、小太郎の大地を揺るがす力強い踏み込みで振るわれたトドメの一撃がネギの顔面に肉薄する。意識が途切れ、構成が甘くなった障壁では防ぎきることは出来ないが……。

「（ここだ！）契約執行０・５秒間　ネギ・スプリングフィールド」

小太郎が決めの一撃を放とうとした時、ネギは狙いすましたかのように静かに呪文を唱える。唱えた呪文は自分自身への魔力供給を行う契約執行。これこそがネギの切り札だ。

エヴァンジェリンとの戦いの後、従者がいない自分が一人で戦わなければならない時の為、自身の体に魔力を付加したら強くなれるのか、という発想から編み出した。ネギが普段１０歳にしては足が速かったりするのは、この縮小版に過ぎない。魔法使いは魔法に専念すべきかもしれないが、それでも魔力による身体能力強化という選択肢を考えていた。

見る者が見れば稚拙なそれでも今は役に立つ。ネギは強化した左手で大振りになった小太郎の右ストレートを逸らす。

「な……」

ただ自分に殴られるだけだったネギに自身の渾身の一撃を片手で逸らされ、小太郎の顔は驚愕に染まる。

呆然と、今起きたことを理解しようとする小太郎だったが、突然かなりのスピードで目の前に踏み込まれる。攻撃だけを考えていた小太郎には反応しきれず、その頬に鈍い痛みが走ったと感じた瞬間には彼の視界に竹薮で隠れた青空が映る。ネギの魔法使いのものとは思えない威力の右拳が小太郎の頬に叩き込まれ、彼を上方へ殴り飛ばした。

「ラス・テルマ・スキル・マギステル。闇夜切り裂く一条の光　我が手に宿りて敵を喰らえ　白き雷！！」

続けてネギは、追撃と言わんばかりに吹き飛んだ小太郎と石畳との間に割り込み、背中を魔力の篭った右手で押す。そしてネギは呪文の完成と共に、手の平に集めた白雷が零距離で炸裂し、小太郎を凄まじい轟音と共に撃ち抜いた。

その雷は小太郎の体だけに留まらず、小広場全体に攻撃の波動を散らせる。

「おおお、やった――――ッ！」

作戦が上手くいったとカモの歓喜の声が辺りに響き渡り、雷を受けた小太郎は地面を滑る。

「ぐあ……が……」

さっきの【白き雷】の時とは違って今度は護符の加護無しで、しかも零距離で受けたので小太郎は呻き声を上げ、体中が全身麻酔を受けたかのようにプルプルと震えて立ち上がることが出来ない。小太郎は立ち上がろうとしているが、殺傷能力の高い雷のダメージは大きく、無理のようだ。

ふと小太郎が気付くと、自分の傍らにネギが立って見下ろしていた。その姿は血と埃に汚れ、体中に打撲痕を残していたが、そういった無残さを微塵も感じさせないほど、彼は誇らし気だった。

「……どうだ！　これが西洋魔術師の、僕の力だ！！」

高らかにネギは言い放つ。それは奇しくも前の戦いの焼き写しのようである。ただし、違いを一つ上げるのならば見下ろされる者と見下ろす者が逆転していた。

小太郎もそれを理解しているので、悔しげに声を漏らす。

「ふぅ～～。ひやひやさせやがるぜ、兄貴は。さぁって、とっととこっから脱出するぜ！！」

【白き雷】の余波で狗神もいなくなり、動けるようになったカモが体から出ていた冷や汗を拭き取りながら一人言ちたその時だった。

「ま……待てェッ！！」

突如として響き渡った怒声に、二人が振り返る。もう動けないはずの小太郎がよろよろとしながらも懸命に立ち上がろうとしているのを見て、勝利が確定したと思っていたネギとカモは眼を見張った。

「た……ただの人間にここまでやられたのは初めてや……さっきのは……取り消すで……ネギ……スプリングフィールド。だが……まだや！　まだ終わらへんで！！」

小太郎が一言喋るたびに回りの空気が渦巻き、それに伴うかのように小太郎の姿がどんどん変わっていく。

脱ぎ捨てられた学生服が舞い、シャツは小太郎自身の手で引き裂かれる。その下から現れたのは白銀の体毛で覆われた細く引き締まった獣の如き肉体。爪は伸び、黒髪は伸びて体毛同様白銀に染まり、髪に隠れていた獣耳は鋭角的な成長を遂げた。腕が太く、長くなっていき、足の形も獣の脚へと変化し、臀部からは犬や狐のような尻尾が垂れ下がる。

その様は正に童話に聞く狼男と呼ぶべき姿で、放たれる力も先程よりも増していた。

「獣化！！　変身した？」

「がぁあああっ！！」

驚く周りを余所に変化を終えると、雄たけびと共に獣人と化した小太郎はネギに向けて拳を振るった。

ネギは慌てて後ろへ跳ぶことで躱したが、元居た場所に小太郎の拳が突き刺さり、衝撃により石畳がまるで爆撃されたように粉砕される。その余波だけで体が軽く宙に浮き、先程とは比べるまでもないその威力にネギの背に戦慄が奔った。

「くっ……仕方ない！」

「兄貴!!　やばいぜ!!　相手にすることはねえ!!」

応戦しようと、ネギは杖を構える。しかし、それをカモが見かねて止めようとするのも無理は無かった。

ネギのダメージは既に限界近くまで蓄積されており、その上、先程見た一撃は平時でも直撃すれば一発でネギの障壁を破られかねない一撃である。そんなのを今のネギが食らえば、当然命の保障は無い。

「契約続行十秒間！　ネギ・スプリングフィールド!!」

しかし、ネギはカモの忠告を聞かずに、また自分に魔力を供給した。それは父を侮辱した相手がまだ立ってくることに対しての義憤か、単純に子供特有の敵は倒さなければならないという使命感か。

それはさておき疲労困憊の肉体に、魔力が注ぎ込まれ限界が近いネギの体に僅かながらの活力が生まれる。

「兄貴ってばよ！」

ネギが自らの体を強化するのを見て小太郎は、そう来なくては面白くない、と満足そうに笑って加速する。

ネギは獣人小太郎の驚異的な身体能力が生み出す高速移動についていけず、姿を見失い一気に肉薄される。身体能力を強化したとはいえ、強化した動体視力でネギが小太郎を補足できなければ何の意味もない。

（！！視界から消えた、速すぎる……右！？）

自分の視界外から襲い来る一撃を予想したネギが息を呑んだその時、

「左です先生――――っ！！」

ネギの耳に聞き覚えのある少女の叫び声が聞こえ、その声に従って反射的に飛び退れば、眼前に左へと回りこんだ小太郎の拳が石畳みを打ち砕いている。

「の……のどかさん！！？」

ネギは目前の敵を忘れて……小太郎も同じく行動を停止して呆然としていたが、声の主へと振り返る。そこに立っていたのはここにいる筈がない本を携えた宮崎のどかの姿があった。

かなりの長距離を走って来たらしく、酷く息を切らせ中腰になってしまっているのどかだが、ネギのピンチに駆け付けられた為かのどかは安堵の表情を浮かべている。

「ホッ……ネギ先生……」

「どうしてここに！？」

朝食後、旅館でネギ達が休憩スペースで話している内容を偶然聞いてしまったのどか。途中でアスカが乱入して最後まで聞けなかったが、彼女達の話に出てきた呪文を半信半疑で同じように呪文を唱えてみた結果、自分のカードが変化して手に持つ古臭い本に変化したのだ。

最初は只の白紙の本と思っていたのどかだが、本が自分の思考を浮かび上がらせ、更にその場に現れた夕映の思考まで読み取った為、これが名前を呼んだ相手の表層意識を、読み取ることが出来るという何か常識では説明出来ない不思議な力を持つ代物と判断したのだ。

その後ゲームセンターでネギが一人抜け出して何処かに行くのを気になって追いかけ、尾行するように着いてきた。彼女はただ、興味本位という分かり易い言葉からネギの行動を知りたいと願っているだけで悪気はない。見失ったが、途中で小太郎にも会い、アーティファクトを使ってネギの下に辿りついてしまった。

「え―とあの、それはその―この本が……あ！！」

ネギの言葉に答えようとしたのどかだったが、開いていた本の一ページに視線を落とすや、再びネギの方に視線を戻し回避の指示を出す。

困惑しながらもネギは彼女の言葉に従うと、全ての攻撃が見事に風を切り、一撃毎に小太郎にカウンターを返していく。

「あ……ぐ……」

しかし、攻撃を受けた小太郎とは裏腹にネギ自身も苦痛に呻く。

ネギは彼女の指示通りに動くことで、小太郎の目にも止まらぬ速さの打撃を辛うじて躱すことはできても、今までに受けたダメージが多過ぎる。反対に獣化した小太郎に大きなダメージはなく、ネギの反撃の反撃ではさほどダメージにはならない。

「やべえ、兄貴のダメージが大きすぎる！　このまま戦り合うのは危険だぜ！」

「あのっ……カカカモさん。私、大体の事情は理解してます。とにかく、ここから出れればいいんですよね？」

「お、おうっ。そ、そうだけどよ」

カモの中では自分の事を知らない筈の少女が何故自分の名前を知っているのかと疑問が彷徨っていたが、それに構わずのどかは立ち上がった。

そして一度大きく息を吸い込んで、彼女にしては珍しく小太郎に向かって普段出さないような大声で呼びかける。

「あ……あのぉ――小太郎クーン！　ここから出るにはぁ、どうすればいいんですかー――――！？」

「な……何やて！？　アホか姉ちゃん！　俺がそんなこと言うわけ……ハッ！？」

余りにど直球な問いに、それを聞いた小太郎は一体何を言っているのかと呆れ気味にのどかの方を振り向きながら答えて、先程から彼女は自分の行動を先読みしていなかったか、と気付いた。

疑念を覚えた小太郎の視線が、のどかから徐々にその手元の本に移される。小太郎の推測通りで、のどかの持っている本に絵日記風に脱出方法が現れていた。

「こ、この広場から東へ六番目の鳥居の上と左右三箇所の隠された印を壊せばいいそうです！」

「お、おおおおおおおおおおおおお！！？」

のどかの口が、的確に結界の起点を言い当てる。その本の項には、彼女に問われた際咄嗟に思い浮かべた小太郎の思考が映し出されていたのだ。

それにカモは白目を剥き出しながら驚き、自ら教えた訳でもない敵の小太郎でさえも口を大きく開き唖然としていた。

「な、何ィィ！？　……あ！待てぇ！！」

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル……」

ネギはそれを聞くと直ぐに杖に乗って呪文を唱えながら、目を皿の様に丸くして絶叫を上げた小太郎の隙を突いて脇を擦り抜け、離脱した。

「魔法の射手　光の三矢！！」

「ああ～～～～っ！！」

ネギの掌から撃ち出された魔法の弾丸が、のどかの指定した鳥居にある三つの印を的確に破壊すると鳥居の空洞の所が光の壁のように光った。

それを見た小太郎は絶望の声を上げ、ネギは杖に跨りながら途中でのどかを抱き抱えて低空飛行で飛ぶ。ネギに抱きかかえられたのどかは顔を赤くする。

「光って見えるのが空間の亀裂だ！！」

「魔法の射手・光の一矢！」

カモの言葉にネギは今一度詠唱し、魔法の矢を放つ。すると何かが割れたような澄んだ音がし、結界に穴が開く。

「「脱出ー！！」」

「待てー！！」

全員が歓声を上げ、小太郎もネギ達を逃がすまいと自分も出口に走ってきている。

「兄貴、止まるな！このまま逃げ切るんだ！！」

「うん！」

全員結界を出てから、飛びながら一度後ろを振り返ると小太郎が

まだ追ってきていた。その動きはかなり早い。結界を閉じる手段がないのでカモは逃げを選択し、ネギもそれを承諾して止まらずに飛び続ける。ネギの後ろ姿が遠くなり、小太郎が後少しで鳥居を抜けようとした時……。

「無間方処返しの呪!!　ヴァン、ウーン、タラーク、キリーク、アク」

「なっ！　待てコラ……」

今まで隠れていたちびせつなが現れて素早く印を結びながら呪文を唱えると空間に梵字が現れ、結界は閃光を放ちながら集束を始めて間一髪で再び結界が閉じられた

その結果小太郎の姿は見えなくなり、逆に結界の中に閉じ込められる事となった。

「これで暫く時間が稼げる筈です」

「本体が来るのはもう少し時間を置いてからの方が良いな。まだ白髪の小僧が近くにおるかもしれんからな」

「了解しました」

実はちびせつなや玉藻が、最初から姿を隠してネギの近くにいた。同じように白髪の少年――――フェイトもいたが、気付かれていたのはちびせつなだけで完璧な隠行をしていた玉藻には気付かなかったようだ。分かりやすぎる気配の横に別の気配があるとはまさかフェイトも思わないだろう。

ネギの直ぐ後に結界を脱出したフェイトはちびせつなが結界を張ったのを見届けて去って行った。小太郎の言葉通り、何があっても手は出さず、流石に結界に閉じ込められるわけにはいかないので一人で出てきたのだ。本人が知ったら助けるぐらいはしろと言いたいだろうが。

そしてフェイトが去ったのを確認して、玉藻が姿を現したというわけだ。

助力されていたとは露知らず、自分達の力だけで逃げ切れたと思っているネギ達は川辺にある適当な広さの岩場の上に座り、一息ついていた。辺りには川のせせらぎの音が響き、小鳥たちの鳴き声が聞こえており、二人は向かい合ってジュースを飲んでいた。

ネギは殴られてダメージを受けていて、かなり疲労が溜まっているので総本山に向かう前に一休みしているのだ。

そんな二人の間の話の話題はのどかに魔法がバレてしまったことだ。

「あの、黙っててすみません……。魔法のことは秘密にしなくちゃいけなかったので……」

「いえ、前から薄々は……」

「えっ……!?　そ、そうなんですか!!」

どうやらのどかはまえからネギが魔法使いではないかと感づいていたようだ。というか初日の件で疑っていたのだろう。それからも何かと怪しいことがあったので予想はしても、表に出すことがなか

ったけだ。

「でも……でもネギ先生が魔法使いなんて……こんなのって図書館の本の中だけの話だと思ってましたから……私なんだかドキドキしちゃって……」

魔法使いの存在を結構あっさりと受け入れるのどか。

今の事態は正にのどかの好きな冒険小説のようであり、興味津々なのだ。危険性を知らなければ「まるで物語の中のよう」と言うフィルターを通してものを考えるため、こういう事態に対する適応力が極めて高い。

適応能力は高くても彼女に取っては現実のように辛く、苦しいものだとは実感できていない。ネギが怪我をしていても重傷というわけではないのと、実際に戦いを見たのが終盤なのでのどかには道端の喧嘩の延長程度の認識しかない。

「しかし、こいつは使い方によっちゃ異常に強力なアイテムだぜ。今回は彼女がいなければ切り抜けられなかった。でも、アスカの旦那に止められてるし。ああ、俺っちはどうしたら……」

カモがのどかのアーティファクトの本に体を乗せて、思わぬ予想外に喜ぶべきか、それとも嘆くべきかと前足で頭を抱えて悩む。

「あ、ネギ先生まだ血が……」

一人頭を抱えて悩むカモを余所に、のどかはハンカチを取り出すと怪我は治ったものの血がついているネギの顔を拭き甘い空間を作り出す。

「俺っちはどうしたらぁぁぁぁぁ！！」

「ネギ先生、少し休んだ方がいいと思います」

「はい、じゃあちょっと……だけ……」

悩みすぎて叫ぶカモを無視したのか、それともいない者と思っているのか二人は話を進める。

ここでようやく小太郎との戦いの疲れが押し寄せてきたのか、ネギは岩の上に横になると直ぐに眠りについた。これがまたややこしい事態になるとも知らずに。

第六十三話　修学旅行三日目と少年　3（後書き）

意地があるんだよ、男の子には

何故か意地張って六連勤なのに連続投稿する筆者でした。

次回更新は『明日』の午前0時です。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

第六十四話　　修学旅行三日目と少年　４（前書き）

……（動かない。死んでいるようだ）

修学旅行編全１９話の第１２話目で三日目の四話目です。

文字数は１０４７１字です。それではどうぞッ！！

第六十四話　修学旅行三日目と少年　4

和風情緒溢れる石畳の道を行く男女の一団がいた。この道は関西呪術協会総本山へ続く道であり、何も知らない一般人の通る道ではない。それにも関わらずこの団体には明らかに一般人が混じっている。綾瀬夕映、早乙女ハルナ、宮崎のどかの三人である。

こうした一般人が付いてきたことはカモにとって頭の痛いところであった。まさかネギが眠り、カモが混乱している間にのどかに電話が掛かってきて夕映やハルナが来るとは夢にも思わなかったのだ。

夕映達が合流するが、そこにはボロボロになってアザだらけで寝ているネギとのどかの姿があり、怪我に驚いた早乙女たちは驚いて駆け寄り「「大丈夫、ネギ先生!?」」と心配そうに尋ね、その慌しさにネギは飛び起きた。

子供が怪我をしていたら誰だって心配するので何も問題はない。カモは自分のミスを悟る。アスカなら口八丁、手八丁で上手く彼女達を帰すことができても、ネギでは下手したら事情を暴露しかねない。

カモの考え通り、ネギはどうして怪我したのか上手く説明できず、カモは秘匿の関係上話すことができないので結局、夕映達も同行することになった。

ネギは魔力コントロールが麻帆良に来る前よりもかなりマシになっているのと一休みできたお陰で、小太郎との戦いのダメージは大きくても普通に歩くぐらいはできる。四人と一匹で鳥居を潜り、わいわいと賑やかに歩いているとちびせつなに持たせていた転移魔法

符でやってきた明日菜達三人が追いついてしまう。ネギは怪我や疲労の影響で歩けるといってもかなり遅く、後ろを普通に歩いてきた明日菜達が追いついてしまったのだ。

そして合流して困ったのは明日菜達三人の方だ。一般人である図書館島探検部三人を一緒に連れて行く訳にはいかないが、上手く追い返す理由を思いつかない。結局、方角から目的地が同じである事を悟られ、なら一緒に行こうという事になり、明日菜達は消極的ながらも同行することになった。

ネギ達と明日菜達で明らかな温度差を作りながら暫く歩くと、ハルナが騒ぎ出す。

「あ！　見て見て。あれ、入り口じゃない？」

森の中に開かれた石畳の道を抜けると、見えてきたのは歴史と人の想念の積み重なりがあり、宮殿の門のような煌びやかさはないが、重厚さと荘厳さを十二分に持つ木造建ての和風の門。

門だけでも城や大きな神社のような、かなり大掛かりな造りのものだ。その奥に見える範囲でも何棟もの建物が建ち並び、大きな鳥居まである。構造から見てまだ見えない奥の方もかなり広そうだ。

「うおー！！　何か雰囲気があるね～～～♪　レッツゴー！！」

門を見てハルナは驚きの声を上げ、ネギが止める間もなく、ハルナ、夕映、のどかが一目散に走り出した。

「ああー！！　ここは敵の本拠地なんですよ、いったい何が出てくるか……！！」

ネギは危険だと杖を構え、慌てて走って行った三人の後を追う。
しかし、そこにはネギの想像に反した展開が待ち構えていた。

「「「「「「「「「お帰りなさいませ木乃香お嬢様―ッ」」」」」」」」」

恐る恐る、ネギが門を越えると門の内側はまさに別世界だった。
既に京都付近でも散ってしまった桜がそよ風に吹かれ舞い踊り、石畳は綺麗に整えられ、正面には朱色の鳥居。その先には神社の拝殿を思わせる建造物。その全てに手入れが施されていて、外と内の格差がとても広い。

そして両側に並んだ十人前後の巫女服を着た女性達が、木乃香に向かって深々と頭を下げていた。

「へ？」

ずらっと両脇に並んだ巫女装束の女性達に想像していたのとはまるで違った盛大な歓迎に、理由が分からないネギは目が点になる。
それもその筈、ネギは今の今まで自分達は敵の総本山に届けに行くのだと思っていたのだ。

巫女達に頭を下げられている木乃香は気後れすることなく笑顔で受け止めている。つまり、これが割と当たり前の光景なのだろう。

「うっひゃ～～～、コレみんな木乃香のお屋敷の人？」

「家広ーーいっ」

「すご〜い」

通路を抜けて本堂へと入るその道すがら、余りにも豪勢な展開に一般人の生徒彼女達は大騒ぎであった。いいんちょことあやかの家で多少は大きな家には慣れているとはいえ、和風の屋敷はまた別の凄みがあった。

「カ、カモ君！　これってどういう……」

「ここは、関西呪術協会の総本山であると同時に、近衛の姐さんの実家でもあるってわけだ」

「ええ〜〜〜っ！？」

ハルナなどは、目の前の現実を早くも受け入れていても、ネギはそうもいかず、事情を知っていそうな、というか唯一聞けるカモに聞き、敵の本拠地だと思っていた所が木乃香の実家だと知って驚愕の絶叫を上げる。　カモとしては別に秘密にしておくつもりはなかったのに、一般人がいた為、教えることができなかったのだ。

「へ〜、ここが木乃香の実家か〜」

明日菜は予めアスカに説明を受けていたのでネギのように驚くことはなかったが興味深そうに周りを見回す。見る者が見れば東洋的な思想に基づいて厳密に計算され尽くした聖域といった感のある敷地であると気付くが、そんな知識のない明日菜に分かる筈もない。

「明日菜……ウチの実家おっきくてひいた？」

そんな辺りを見渡す明日菜に、木乃香は気を悪くしたんじゃない

かと心配して恐る恐る尋ねる。いかに郊外とはいえ、京都にこれ程広大な屋敷を持つなど金だけ有れば出来る様な事ではない。

「ううんっ……ちょっとビックリしたけどね」

確かに少しは驚いたもののあやかの家で慣れている、と多少は面食らったものの明日菜は笑って答える。家の事情と自身の持つ力の事で親友だった刹那が距離を取るという行為に及んで、ちょっとショックだった木乃香は、中学からずっと一緒だった明日菜まで距離を取るのではないかと気になっていた。

今は刹那とも昔の関係に近づけても、家の事を知ったら離れるのではないかという恐怖があったが、明日菜の言葉に木乃香も安心したように笑みを見せた。

使用人に本殿らしき建物の中へ、案内されるままに入っていくと辿り着いたのは数十メートル四方はある大広間。

大広間には屋敷の中であろうと気にするコトもなく、桜の花びらが宙を舞っており、微かに香木の香が漂う。側面にいる者達が奏でる和楽器の音色が流れ、風流の中に厳格な雰囲気を作り出す。天井は格天井で奥には御簾が掛けられている。

大広間にも十数人の巫女がいて正座で待機する者が座り構え、正面の祭壇の脇には矢筒と和弓を携えた者が立ち構えており、まるで時代劇のワンシーンを思い出させるような雰囲気である。側面では

琴・小太鼓・篳篥などを演奏して、大広間の造りや巫女姿の女性達や楽器のせいでネギ達は平安時代にタイムスリップしたように感じられた。

その大広間の中央には七枚の座布団が前に四つ、後ろに三つ敷かれていた。前列に左からネギ、明日菜、木乃香、刹那、後ろにのどか、夕映、ハルナと座布団の上に座って段から降りてくるだろう西の長を待っていた。初めは明日菜も後ろに行こうとしたのだが、とある事情があったため断念する。

指定された席で座り、関西呪術協会の長が来るのを待つ。まもなく、正面の祭壇の御簾のかかった階段から誰かが降りてきた。ゆっくりと、一段一段足を踏みしめるたびに木がきしむ音が聞こえる。今回、ネギが会おうと躍起になってた西の長その人だろう。

その人物は、四十過ぎの神社の神主のような格好をした男性であった。眼鏡の下からは柔和な色を湛えた瞳が覗いており、その温和な人となりを良く表している。お世辞にも美形とはいえず、長身なのと心労によるものか顔色が悪いので「ひょろ長い」と言った印象を受け、心なしか実年齢よりも老けて見えていた。彼こそが関西呪術協会の長でもあり、木乃香の父である近衛詠春その人だ。

多少、不健康そうな印象を受ける痩せた表情でありながら、一組織の頂点に立つ人物だけがもつことのできる鋭くも柔和な雰囲気によって、人に決して悪い印象だけは与えることはない。

普通の人は細面に眼鏡をかけ、服装以外は特に目立ったところもない普通の優しそうな中年男性だと思うだろう。生徒達やネギでは気付けないが、戦人の雰囲気で立ち振る舞いに一切の隙が見当たらない。麻帆良側で詠春の身のこなしや風格から佳境な戦線を乗り越

えてきた人物なのだと分かるのは刹那のみ。しかし、それも長と成った今は政治的部分に重さを置かなければならなくなった影響で、色褪せてしまっている。

それはともかく何故あの祖父である学園長や父である詠春から、木乃香のような可愛い子が生まれるとは世の中摩訶不思議である。余程、母親の遺伝を引き継いでいるのだろう。

詠春は皆を目にすると、柔らかく微笑む。

「お待たせ致しました。ようこそ、明日菜君。木乃香のクラスメイトの皆さん、そしてネギ先生」

長の言葉に側面で座している巫女の一人の眉がピクリと反応して一ミリだけ動く。しかし、次の瞬間には元に戻っており、それに気付くものは誰一人いなかった。

「お父様～♪　お久しぶりや～！！」

「ははは、これこれ木乃香」

木乃香は久しぶりの親子の再会に感極まったらしく、微かに涙も滲ませて嬉しそうに詠春に思い切り飛びついて抱きつく。詠春も皆の前という事もあって少々苦笑い気味だが、久方振りに会う愛娘を優しく抱きとめた。

ハルナと夕映がお屋敷の割に普通の人だの、顔色が悪いだの言いたい放題に何人かが長に対しての無礼な言葉に青筋を立ててる人もいるが、客人ということで見逃すことにしたらしい。

そんな中、明日菜はストライクゾーンど真ん中の渋い中年の筈なのに何も反応しない自分に頭を捻っていた。

「あの……長さん、これを……」

木乃香と詠春の感動の対面を見ていたネギは再会の抱擁が終わったのを見計らい、失礼と思いながらも親子の会話の間に口を挟む。

「東の長・麻帆良学園学園長、近衛近之衛門から西の長への親書です……お受け取り下さい」

二人に歩み寄って、背後の生徒達からは見えない角度で懐から取り出した親書を手に西の長、近衛詠春に親書を両手で差し出すように掲げる。

「確かに承りましたネギ君」

ネギの言葉に詠春もまた姿勢を正して向き合い、スッと両手を伸ばして受け取る。

手紙を受け取った詠春は、その場ですぐさま封を開き、そこから数枚の紙を取り出して開くと一瞬固まったが直ぐに平常に戻り、少し読むと再び手紙をしまう。

緊張で身を強張らせるネギ。暫くして、詠春は口を開いた。

「……いいでしょう。東の長の意を汲み、私たちも東西の仲違いの解消に尽力するとお伝え下さい。任務ご苦労!!　ネギ・スプリングフィールド君!!」

「あ……ハイ！！」

詠春が手紙を片付けると声高らかに言い放ち、最後に任務御苦労と付けくわえてネギへ労いの言葉を与えた。

無事に親書を届け終え、ネギは表情も綻ばさせて嬉しそうに返事をする。

自分に与えられた役割をきちんとこなすことができたという達成感、これが切っ掛けとなって関東魔法協会と関西呪術協会の軋轢が少しでも減れば自身が目指す立派な魔法使い（マギステル・マギ）への第一歩が踏み出せると考えれば嬉しくない筈がない。

カモは得意げな顔でネギの方に掴まっており、ネギの背負っていた親善大使の任はここに完了した。

実際のところ、ネギはほとんど何もしていないわけだが、ツッコミを入れるのは無粋というものだろう。妨害を独力で切り抜けたのは間違いないのだから。

ネギの後ろでは、色好い返事に何のことか知らぬ生徒達は取り合えずめでたいと、ハルナ、夕映、のどかがネギの下に駆け寄りはしゃぎ出す。主に囃し立てるのは当然ハルナであり、任務の意味を一番分かってなさそうな人物でもある。

「今から山を降りると日が暮れてしまいます。君達も今日は此処に泊まっていくと良いでしょう。歓迎の宴も御用意致しますよ」

「やったー！！」

持て囃されるネギを微笑ましく思いながら、詠春は今から歓迎の宴を開くので泊まっていくように、と彼らに勧める。

『宴』という詠春の言葉に反応してハルナが喜びの声を上げる。

しかし、そうは言われても、ネギ達は修学旅行中で生徒が旅館に帰ってこなければ問題になる。それをネギは心配するが、詠春の『旅館の方には身代わりを立てる』ということに安心する。そうなると断る理由のないネギは二つ返事で了承し、素直に長の誘いを受けた。

夜も更けてきたホテル嵐山のロビー。まだ夕食前なので人が何人か屯って自由時間にどこに行き、楽しかったのかを話していた。

「ＵＳＪ良かったよ」

「私はネギ君と行きたかったな～」

その一角で四班が行ったＵＳＪの話を聞いていたアスカは、結界に侵入者を感じて表情を引き締める。

「すみません。僕はコレで」

「え～行っちゃうの」「もっと話そうよ～」

「仕事なんで」

そう言って引き止めてくる生徒を振り切り、階段を上がって一度自室へ戻って認識阻害を張って窓から外へ出る。

＜瀬流彦先生、侵入者です。この反応は……式神みたいです＞

＜分かった。僕が向かうよ＞

＜いえ、もう外へ出ているので他に侵入者があるかもしれないので、そちらをお願いします＞

＜ん、無理はしないでね＞

＜了解＞

瀬流彦に念話で侵入者が来た事を伝え、スーツを破かないように移動して向かう。

「あれは……！」

侵入者から距離を取って待つと、ホテルに六つの人影が近づいてくるのに見えた。アスカはそれが何であるかに気付くと、隠れるのを止めて近づく。

「関西呪術協会の長は何を考えてるんだ……」

アスカは式神達を前に疲れたように溜息を吐く。アスカの前にいる人影は、赤毛に大きな杖を背負ったスーツ姿等、見覚えのある者ばかり。

眼の前には木乃香の実家に行った筈の面々。しかし、何故か妙に眼が虚ろで、その上変にテンションが高い。実はこれらは長が型紙を使って用意したネギ達の身代わりなのだが、アスカはそれを知らない。

しかし、目の前の式神達は放っておいたら暴走しそう気がする。

「いや、まぁ、いないのを誤魔化すのに替玉を用意するのはいいけど、本山にいる娘達の中には魔法を知らない娘だっているのに、こっちでの事をどうやって辻褄を合わせる気なんだろうか？」

西の長はどうするつもりなのかと頭を捻りつつ、とある方法で発生させた衝撃波で全ての式神を破壊する。その光景を見ている傍から見たら生徒を殺しているようにしか見えないんだろうなと少し現実逃避。

そして懐から携帯を取り出して学園長に電話を入れる。

『どうしたんじゃ？』

「ホテルに西のものと思われるネギ先生達の式神が来ました。余りにも出来が悪く、暴走する危険性が高かったので処分しました。本山にいる娘達の中には魔法を知らない娘だっているんです。迂闊なことはしないように抗議をお願いします」

起こった事をそのまま伝えるとアスカは電話の向こうから驚きの余り唖然としている雰囲気を感じる。アスカはそのまま言葉を続ける。

「それとまだ実行犯が捕まっていない以上、一般人を狙われる可能

性の高い本山に置いておくのは危険です。護衛をつけて下ろすべきです」

『うむ、確かにそうじゃが、本山から出てくると関係者と思われて狙われる可能性も高い以上、留めておく方が安全じゃ。強力な結界もあるからの』

学園長の言う事も最も。

本山が強力な結界で守られているのなら学園長の言が正しい。だが、本山に留まるということは襲撃された場合は狙われる可能性が高まることを意味している。

結界が突破されるか、帰山時に狙われるか、それこそ可能性の問題でしかない。

（歯痒いな）

学園長と電話をしながらアスカは心中で一人ごちる。

己が動けないことが、届かない想いと思い通りにならない現状が本当にもどかしい。

「それが決定なら文句は言いません。しかし、申告した以上は例え生徒に被害が出ても責任は学園長が取ってください」

『は！　ちょ、ま』

アスカは自分の意見として上告し、学園長はそれを否定した。アスカが使っている携帯には録音機能がついているので何か被害が出

ても言質は取れたので問題は無い。

被害が出た場合は責任を取ってもらうと言って、学園長の返事も聞かずにプツンッと通話を切る。

「さて、新田先生に綾瀬さん達が木乃香さんの実家に泊まることを伝えないと」

振り返って携帯を懐にしまい、瀬流彦に何があったのかを報告して刹那にも電話を掛けないといけないなと考えながらホテルに戻る。

アスカが去った後には焼き残った呪符の破片だけが残った。

部屋を移して宴会場。今度は畳敷きの広間で、やはり広い。関西呪術協会、詠春の催した歓迎の宴は、それはそれは盛大なものだった。

宴会場として設置された場には大きな机が並べられ、大量の高価な色とりどりの山海の美味、珍味の料理が所狭しと机に置かれていた。

それらは全て食欲をそそるいい匂いをしており、少女達のテンションは高く、巫女さん達も一緒になってのドンチャン騒ぎだ。ハルナは日の丸の描かれた扇子を持った巫女達と楽しげに舞い踊ってのどかに絡み、何時の間にか侍女達の奏でる楽器達は厳粛な囃子から明るいテンポの戯曲に取って代わっている。

そんな中で、両脇を巫女さんに固められてお酌され、ネギは身動きがとれないでいた。経験のないネギは、初めての宴会で上司に酒を勧められて断ることができない新入社員のように、促されるたびに一気飲みをして器を空けては注ぎ込まれるという無限ループに突入してどんどん飲まされていた。このペースで行けばネギが潰されるのは時間の問題だろう。

ハルナ等は「のどかもあれぐらいの積極性があれば……」と苦笑しているが、そんな場合ではなく、まさに乱痴気騒ぎと呼べるものだった。

「ね、ねえ木乃香。これってお酒じゃないの？」

「らいじょーぶ。お酒とちゃうよ～♪」

宴会が酣になってくると漂い始めたアルコール臭に、明日菜が気付いて木乃香に問いかける。明日菜は真面目とは言い切れなくても、真っ直ぐな性格なので宴会だからと言って中学生の身で自分から飲酒しようとは思わない。

二人の間に座る夕映はすでに顔を真っ赤にして、酔っぱらっているように見えるし、木乃香の返答も呂律が回っていない。明らかに怪しいので明日菜は二人のコップを取り上げて別の飲み物と交換する。

そこに電話が掛かってきたので部屋を出ていた刹那が戻ってきた。

「刹那君」

「こ、これは長……！　私のような者にお声を……！！」

部屋に戻ってきても騒ぎの輪の中に入らず、考える事が多すぎて浮かない顔をしていた刹那の下に、詠春が近づいて刹那に声をかけた。長に声を掛けられ、考え事をしていて反応が遅れた刹那は慌てて片膝をついて頭を下げる。

「ハハ、そうかしこまらずにいてください。昔からそうですね君は。……この二年間、木乃香の護衛をありがとうございます。私の個人的な頼みに応え、よく頑張ってくれました。苦労をかけましたね」

声を掛けられて慌てて畏まる刹那を、詠春はやんわりとそれを止める。責任感の強く真面目な刹那が気負い過ぎないようにする意味も込め、長は自分の責任を確認する。

詠春は刹那が出自をコンプレックスとしてしまい、麻帆良に行く頃には周りと壁を作っていた事を思い返す。

木乃香の安全を守るためとはいえ、対立する東側の拠点である麻帆良に行く。いい顔をする者などそうは居ない。それを刹那は裏切り者扱いされると分かっていながら受け、木乃香に知られること無く勤めてくれた。詠春は一人の娘の父としてはもっと助けたかったが、西の長としての立場がそれを許さない。応援を送る事も出来ない中、刹那は本当に良くやってくれたと思っていた。

麻帆良に護衛として向かっていった時には木乃香と触れることで、刹那のその壁を溶かせればと思うもそれは叶わなかったが、最近は木乃香との旧交が再び温められて来たと聞いていた。それ以外にも以前に比べて大分、壁が感じられなくなっている。

「ハッ……このちゃん……いえ、お嬢様の護衛は元より私の望みなれば……勿体無いお言葉です。しかし、申し訳ありません。結局、お嬢様に『こちら側』のことを……」

長にそう言われるが、だからといって刹那は姿勢を崩す訳にはいかず、一転して表情を曇らせた。結果として失敗だったと思っている刹那は項垂れて頭を下げる。彼女としては木乃香を完全な平穏に置きたかったが、自分の過失ではないと言っても責任を感じてしまうのは責任感の強い刹那だからだろう。

「木乃香の力の発現のきっかけは聞いてもいいかな？　お養父さんは教えてくれなくてね」

「私の口からは……」

詠春としては気になったので聞いてみるも、刹那は自分の口からは言えないと口篭る。宴の空気に乗っての興味本意だったので、それ以上は詠春も突っ込んで聞こうとはしなかった。そもそも木乃香が力を発現した理由は明日、アスカの口から語られることが決まっているからだ。

「長……あの先程、アスカ先生から連絡がありまして『連中に残された時間がそうない以上、総本山であろうが急襲してくる可能性が高く神楽坂明日菜、桜咲刹那以外の無関係な生徒に護衛をつけて山から下ろすように求めます。もし、下山させずに生徒に被害が出た場合、相応の対応をさせて頂きます』との事です」

「それは……大丈夫ですよ。ここには結界がありますから」

言い難そうにアスカに言われた事を話し出す刹那に、詠春は驚い

たような顔を見せる。とても１０歳にも満たない子供がする発想ではない。しかし、驚きを持っても詠春の考えはそこで止まってしまう。

事実、関西呪術協会を守っている結界はかなり強度を誇り、余程のレベルでなければ突破することはできない。そして強硬派にはそんなレベルにいる術者はいない、詠春はそう報告を受けている。

「さあ、しめっぽくなっては宴になりません。重い話は宴が終わってからにしましょう。折角来たのですから皆さんも楽しんでください。ここの料理は中々のものですよ」

詠春は結界を過信していると言ってもいい。しかし、それも言い方は悪いが長いこと現役を退いていた詠春では気付けないのも無理はないだろう。

それとアスカが幾ら嘗ての友の息子とはいえ、子供というのが大きい。所詮は子供の言う事、詠春は本人も気付かぬ内心でそう判断し、無関係の生徒達を下山させることはせず、結界も強化しなかった。

もし、此処で結界をより一層強化していれば、この後の事は起こらなかったかもしれない。悲劇など起こらなかったかもしれない。

詠春がそれを思い知るのは全てが終わった後になる。

関西呪術協会総本山ではどんちゃん騒ぎが終わったのか一気に静かになり、そのせいで辺りの虫の音がやけに夜の空に響く。

流石にまだ寝る時間ではないため、広大な和風の屋敷のあちらこちらでは明かりが灯っている。

「わー夜桜、綺麗ねー」

「うん。ここ結構遅くまで咲いとるんや」

屋敷の周囲は桜の木でどれもが満開。舞い散る桜を夜空が照らす風景は、思わず見とれる程の幻想を映し出す。そんな中を明日菜と木乃香は並んで廊下を歩いていた。

「せっちゃん何の話やろね」

「きっと私達にとっていい話よ」

宴の後、明日菜は刹那と風呂に入った時に木乃香を連れてきて欲しいと頼まれ、待ち合わせ場所である浴場へと向かっていた。　明日菜には理由は分からないが、必要なことであるらしい。

実は刹那は一大決心をして、半妖の証である翼を二人に見せようと考えていた。

刹那は麻帆良にいる間、木乃香に魔法をバラしてはいけないという思いで避けてきたが、本音では仲良くしたいと思っていた。それを自分が半妖だと知られることの恐れもあり、その思いを塞き止め

ていた。アスカの計略で木乃香と昔程とはいわなくても接することができ、結果的にせよ木乃香は魔法の存在を知ってからは昔に大分近づいても半妖という引け目が最後の一線を越えさせなかった。

何故、刹那は決心したのか。それは木乃香が今後、魔法関係に関わっていくのはもはや必然であり、避けえぬことだと理解したというのが大きな理由だ。

利用できるもの、使えるものはとことん利用するというアスカのやり方に感銘を受け、そして明日菜の木乃香を守るという決意を目の当りにして自分もこのままではいけないと感じた。

というのが建て前で刹那は本人も気付かぬ内心では、木乃香が魔法の事を知ってから話す切欠をずっと欲しがっていたのだ。

当然、嫌われるのではないかという恐れはあっても木乃香に隠し事をしたくない、それが刹那の本音だ。以前の刹那ならそうはしなかったのに何故か。それは以前、アスカに翼があっても木乃香は嫌わないと言われたことが大きい。アスカが寮にいた頃、何回か刹那の下に来て翼を気持ち良さそうに触りながら言われれば、そうかな、という気になってしまう（同じ部屋にいる真名曰く、やり方が洗脳染みていたという）

浴場を見せる場所に選んだのは翼を広げるスペースがあり、尚且つ人の良く通る場所を避けて選んだ為である。魔法関係の拠点であるここでは下手に人払いなど張ったら逆に目立ちかねないという配慮もある。

明日菜にも見せるのは木乃香の親友であり、刹那の友達だというのもあるが別の理由もある。それは追々、分かるだろう。

「あたっ」

ボ～ッと風景を見ながら歩いていて、明日菜の頭に何か硬いものが当たってしまった。何だろうと思って廊下に突然現れた障害物の方に目を向けると、それは硬いがまるで人の手のよう形をしている。

「な、何よ、コレ……」

「せ、石像？　こんなのあったっけ？」

良く見ると開きっぱなしになった障子の向こうでは、何人もの巫女達が、まるで何かから逃げるような格好で文字通り、石像と化して固まっている。

木乃香にしてもこのようなものがあるとは聞いていなく、ただの石像にしては精巧すぎやしないか、と衝撃で目を丸くする。

余りに衝撃が大きすぎて、二人共、直ぐにはその場から動けなかった。

この瞬間から衝撃の夜が幕を明ける。

第六十四話　修学旅行三日目と少年　４（後書き）

諸々の事情により次回更新は水曜と木曜の間の午前０時です。

気力が持たないッス。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

第六十五話　修学旅行三日目と少年　5（前書き）

復ッ活――――――――――――――――！！！！！

魔の六連勤を乗り越え、我はここに再誕した！！

なんてテンション割高でお送りしました。

今日は夜勤明けの休みで、昨日は0時前に寝たのに何故か6時過ぎに起きてしまい、睡眠時間が足りなくて昼寝してしまった。三時間ほど。

さて修学旅行編全19話の第13話目で三日目の5話目です。

文字数は10893字です。それではどうぞッ！！

2006

第六十五話　修学旅行三日目と少年　5

一緒にお風呂に入って木乃香に大切な話があるから一緒に風呂場まで来てくれと頼んだのが少し前。先にお風呂場へ移動し、木乃香が表れるのを待っている内に刹那は何となく嫌な予感を感じて、二人を迎えに行くことにしたのだった。奇しくもこの行動の所為で入れ替わりになってしまうが。

そんな彼女にも異変が近づく。

『きゃあああー！！』

「っ！？　今のは悲鳴！？　綾瀬さんたちの部屋から！！」

遠巻きの悲鳴が聞こえた。その発生源である方向には一緒に付いてきたクラスの面々がいるはずの部屋があり、急いで駆けつけるも既に手遅れだった。

「こ……これは！？」

明かりも消えている暗い部屋の襖を開けると、そこにはまるで人を石に変えたかのような、そのまま時を止めたかのような口元を押さえているのどかと何かを庇うように手を広げているハルナの石像が立っているのみ。

あまりな光景に刹那は混乱するも、一度深呼吸して、気を落ち着かせる。

「石化している。まさか敵が攻めてきた！」

気を落ち着かせた事で一早く状況を理解した刹那は、脳裏に木乃香と明日菜が石化された光景が思い浮かび、夕凪を抜き放って走り出す。

恐らく木乃香達がいるであろう浴場を目指して走る。年月の経過で何も考えずに駆ける事ができない程に忘れてしまった本山を、刹那は走るというより跳ぶと言った方が正しいスピードで疾走する。

通りがかった部屋を見るも、屋敷内の使用人たちが石像にされている光景があった。走りながら落ち着いて状況を見ると、わざわざ『石化』を使ってきたということは表の人間を巻き込むつもりはないということが分かる。だからいって安心できるわけではないが。

「せ、刹那君……」

「長っ！？」

廊下の向こうから微かな物音が聞こえ、警戒しながら見ると詠春だった。聞こえてきた声に安堵したが、その下半身はすでに石化され、壁に手をつきながら何とか体勢を保ち、足を引きずりながら苦しげに眉を顰めて刹那のところにやってくる姿を見て凍りついた。

急いで駆け寄った刹那は、苦しそうに呻き声を上げる詠春の姿を見て息を呑む。

「申し訳ない……本山の守護結界をいささか過信していたようですね。平和の時代が長く続いたせいでしょうか……不意を食らってこの様です。レジストはしたのですが……忠告を受けていたのに申し訳ない。大戦が終結して二十年……私も衰えていたようです」

詠春は自らを恥じるかのように顔を伏せる。レジスト（抵抗）しても、侵食が若干遅くなるだけで最早、幾ばくの時間も無い。もう間もなく、全身を覆うだろう。

「長！！」

「白い髪の少年に気をつけなさい……格の違う相手だ。並みの術者ならば、本山の結界も、私も易々と破られは……しない」

刹那も声を掛けるが、詠春は忠告を続ける。もはや完全に石化するのは時間の問題だ。今すべき事は、できる限りの情報を刹那に伝える事。詠春は苦しげな表情ながらも、そのために最後の力を振り絞って気力で言葉を伝える。

関西呪術協会の本部をぐるりと包み込む「結界」を信頼していた。過去何度となく外敵を退けてきた物理的な抵抗を伴うその壁を、文字通り信じ頼り切っていた。それはある種、依存といってしまってもいい。しかし依存していたとしても、平穏に慣れてしまっていても、詠春が非凡な戦士であるということに変わりはなかった。そう相手が並みの術者でさえなければ。

「長……」

石化の侵食がもう肩を通り過ぎ、詠春の首、そして顎のあたりまで石と化す。最早時間が無い。

「あなただけでは辛いでしょう。学園長に……れん……らくを……木乃香を……頼……み……ます……」

そして、ついに詠春は完全に石化してしまう。

刹那は暫し無言で立ち尽くしていたが長の最後の言葉に決意を新たにし、再び残る可能性として一番高い浴場にいるであろう木乃香の下に走りながら携帯電話を取り出し学園長に電話をかけた。

「学園長、桜咲刹那です！　本山が襲われ西の長までも石にされてしまいました。至急応援をお願いします！」

刹那は学園長に電話をかけながらも応援は期待してはいない。緊急を要する出来事であるため、分かり難いのを承知で簡潔に用件を述べて電話を切り、別の場所に電話を掛ける。

その頃、ネギとカモは宴会で飲まされて酔い潰れてしまい、巫女さん達に運ばれて客間で布団に寝かされていた。妨害をした小太郎が捕まったことを聞いて完全に安心しきったネギは勧(すす)められるがままに、カモは美女に酌をされることに気を良くしてつぶれてしまった。

皮肉と言えば皮肉であろう。

ネギは親書の邪魔をしたのが小太郎だけであることしか知らない。その小太郎が捕まったと聞いたなら親書を届けた以上はなにも心配することはない。

気に病んでいた親書の重責から解放されたことで気が緩んでしまったのも無理からぬ話であった。

邪魔にもならないと判断されたのか石化もされず、すやすやと寝ていた。

石化した巫女達を見て嫌な予感を感じ取った明日菜は、木乃香を連れて急いで走って刹那よりも先に浴場に到着していた。

「来たれ（アデアット）。大丈夫だからね木乃香。刹那さんが来るまで私が守るから。何たって私は木乃香の従者なんだから」

明日菜はアスカに言われて木乃香と仮契約を交わしている。明日菜には百合の趣味はないのでキスではなく血液での契約だ。本来なら見習いとはいえ魔法使いであるアスカとした方が効率は良い。しかし、アスカは明日菜の隠された過去を考えて関西呪術協会の長の娘であり、関東魔法協会の孫である木乃香を薦（すす）めた。それには多分に政治的意味が関わってくる。

今の明日菜の動機は木乃香を助けたいというもの。ならば、仮契約の相手として真っ当なものだ。勿論、アスカは木乃香に、もしかしたら自身には関係のない騒動に巻き込まれるかもしれないというリスクの説明をしている。

それを込みで二人は契約を交わした。途中でキスでないと仮契約できないと思い出して明日菜が混乱したが。刹那とも仮契約を、という意見もあったが、刹那の主戦力の気と魔力は反発するので麻帆良に戻ってからということで決着した。

そして明日菜が契約して出てきたアーティファクトは「ハマノツルギ（エンシス・エクソルキザンス：ＥＮＳＩＳ　ＥＸＯＲＣＩＺ

ＡＮＳ）」。漢字表記は「破魔の剣」称号は「傷付いた戦士」

普段はスチール製のハリセンだが、本来の姿は、身の丈以上の長さを持つ片刃の大剣。恐らくどちらの形態でも魔法無効化能力と同じ効力を持ち、対象を叩くことで召喚された魔物を一撃で送り返したり、他者にかけられた魔法を解除したりすることもできると推測した。

もしかしたら二日前のように木乃香を狙っている奴らが来たのかもしれないと考え、明日菜は今にも震えそうになる身体を叱咤するように頬を両手で叩き、気合を入れてアーティファクトのハリセンを手に木乃香を後ろに庇って辺りを警戒する。

「明日菜……」

辺りに気を張っている明日菜に、不安を隠せないのか怯えた様子で寄り添う。

そんな二人の背後に何時の間に現れたのか白髪の少年――――フェイト・アーウェルンクスが宙に浮いており、ゆっくりと明日菜達に手をかけようとしていた。

「……！」

後少しでフェイトの手が彼女達に触れようとしたその時、明日菜は僅かに動いた空気か、それとも気配を感じ取ったのか弾かれたように反応して瞬時に反転。背後から木乃香に迫る影に反転した動きのままハリセンを叩き込む。

その明日菜の一連の動きにフェイトは対応しきれず顔面に鋭い一

撃を食らう。

「え……」

「！」

「凄い、訓練された戦士のような反応だ。でも、お姫様を守るには役不足かな。君も眠ってもらうよ」

しかし、フェイトは僅かに上体を逸らすだけで目立った傷はない。フェイトは若干の驚きを持って明日菜を見るも、自身には取るに足らない相手だと判断して呪文を唱える。

「魔法っ！　ならっ！？」

詠唱が完成したのかフェイトは明日菜を中心に白い煙を発生させた。

詠唱していることから明日菜は魔法と判断し、自身の能力が効くかどうかは判らなくても、こんな近距離ではどんな効果でも避けきれない。ならば、煙を浴びながらも踏み出した勢いのまま明日菜は視界を埋める煙の中に突っ込んで攻めを選んだ。

両手を交差して煙から顔を庇うも、着ている浴衣がビキビキと音を立てて石化していく。パキャアンという音と共に石になった着物が砕けて明日菜は全裸になってしまうが、肉体のほうは無事である。明日菜は石化の効果がある煙を確かに無効化した。彼女の持つ魔力完全無効化能力が正常に働いたからだ。しかし、これには肉体だけで服までは無効化してくれなかった。

全裸になって羞恥を覚えるよりも先に敵を倒そうという意気が勝り、敵に踏み込む。

「何っ、レジストしたっ！？」

今度はフェイトが表情こそ変わらないが驚く番だった。反応の早い明日菜を確実に捕らえ、かつ広がりやすい煙で木乃香を巻き込むのを避けるために石化させるつもりだったのだ。なのに、煙で浴衣は石化したのに肉体は何ともない。

煙を突っ切って自身に迫ってくる影にフェイトは僅かに目を見開いた次の瞬間、肉を打つ打撃音が浴場に響いた。

「……が……あはっ……」

自分の魔法を受けて石化しなかった明日菜にフェイトは確かに驚いた。それでもフェイトは、一瞬驚きの表情を浮かべても直ぐに気を取り直し、放たれた一撃を冷静に捌いてカウンターで明日菜の腹に肘を入れていた。

「驚かされたけど騎士（ナイト）にしては力不足だね」

フェイトの足元で全裸のまま、明日菜は打たれた腹を押さえて蹲って呻く。カウンターという事もあって、そのダメージは大きく直ぐには動けそうにない。

「明日菜！　きゃあっ」「くっ、木乃香！？」

蹲（うずくま）った明日菜に駆け寄ろうとした木乃香を、フェイトの指示を受けていた額に札を張った翼のある式神が背後に降り立って捕らえる。

腹を抑えながらも、木乃香の悲鳴に首を上げた明日菜が捕らえられているのを見て名を叫ぶ。

「明日菜！　明日菜！」

「……じゃあ、お姫様はもらっていくね。行って、ルビカンテ」

「ま、待ちなさい。木乃香ァッ！！」

ルビカンテに抱えられながらも必死に自身の名を呼ぶ木乃香に、倒れて咳き込みながらも明日菜は手を伸ばす。しかし、フェイトは全く意に返さず式神に命じる。必死な明日菜を尻目に翼のある式神――――ルビカンテは翼を広げ飛んでゆく。

木乃香の姿が見えなくなり、明日菜は伸ばした手を下ろして悔しげに床を叩く。

そんな明日菜をフェイトは何かを確かめるように観察する。

「服は完全に石化している。なのに体は完全に無事。アーティファクトの力だけじゃない。僕の石化魔法を抵抗（レジスト）、いや無効化した……？」

明日菜の浴衣は完全に石化し、明日菜の動きで砕けて床に散らばっている。通常のレジストならばこうはならないはずだ。

フェイトは魔法を放った自分の手と、自分の一撃でまだ動けない明日菜を見比べている。その目は信じられないものを見たかのようだ。

明日菜の着ていた浴衣が石と化して粉々に砕け散ったことから魔法は間違いなく正常に発動している。そうなると明日菜自身が魔法を弾いたと考えるのが自然。

「……！」

明日菜を見て思考していたフェイトに刹那が一足の内に迫る。

「……」

刹那は詠春の忠告を守り、明日菜に気を取られているフェイトの後ろから全力で斬りかかる。しかし、フェイトはそれを予め知っていたかのように反応し、刹那の渾身の一撃を半身になることで容易く躱してカウンターを放つ。

決めるつもりの一撃を躱され、逆にカウンターを貰った刹那は、ガンッという人間の肉体で生まれる音だとは思えない重低音と共に弾き飛ばされて床と壁にぶつかり、斜めに跳ね返った先の壁にもう一度叩きつけられて止まる。

「あ”……かはっ……う”……」

背中から強かに壁に打ち付けられ、肺の空気が全て逃げる。激突の衝撃で罅割れた壁からずる、と刹那はずり落ちる。たったの一撃で余りの衝撃に呼吸もままならず、反撃しようにもまるで身体がいうことを聞かない。

「それじゃ」

「！！」

それを見届けたフェイトに浴場の床に浮かぶ水が身体に巻きつくように浮き上がり、次の瞬間には水を利用した空間転移でその場から去っていく。その水が重力に従って崩れた時、そこにはもうフェイトの姿はなかった。

「くっ……あ、ああ……！　私がっ、私がついていながら……っ！」

強過ぎる、と思いながら痛みに顔を歪ませ、木乃香の身柄を奪われてしまった刹那の悲痛な叫び声が響き渡る。

「落ち着いて、刹那さん！　早くアスカに連絡しないと！！」

どうにか足に力を込めて身体を起こした明日菜が、嘆く刹那に行動を促す。悲観に暮れている場合ではない。木乃香を追い、一刻も早く取り戻さねばならない。まだ敗北したわけではない。ここから逆転を狙うのだ。

「はっ！　そうでした。動けますか明日菜さん！　気の跡を辿れば……ぐっ！」

「刹那さん！」

明日菜の言葉にハッとなった刹那は、ブルブルと首を振って正気に戻る。くしくも、フェイトにやられた痛みが刹那を冷静にした。事前に一撃を貰う覚悟をしていなければ、骨にヒビぐらいは入っていたかもしれない。それでも響いているのか打たれた脇を抑え、痛みに顔をしかめる。

刹那はこれまで以上に敵の強大さを感じ取っていた。月詠と比べてもアレは、間違いなく次元が違う存在だ、と。だが、いつまでもうじうじと悩んでいるわけにはいかない。立ち止まる猶予はなく、事態は今も取り返しのつかない方向に進んでいる。

相手の一人は自分よりも圧倒的に強い。闇雲に飛び出していったところでどうなるかは目に見えている。

「私はアスカ先生に連絡します。これから厳しい戦いになるでしょう、明日菜さんは……」

「私も行くわよ！！　直ぐに着替えてくるから！」

直ぐに自分では状況を打破することは不可能と判断し、アスカに連絡するために携帯を取り出して明日菜には待っていてもらおうとする。しかし、明日菜は刹那が声を掛けている途中に「行く」と表明して、服を着替えに浴場を出て行ってしまった。

あの様子では止めても無駄だと考えて、ダメージが治まってきたのを感じながらアスカに電話を掛ける。

丁度、木乃香が攫われた頃、総本山から離れていない森の中を綾瀬夕映は息を切らせて走っていた。

刹那が部屋に入ったとき彼女の石像は無かったのだが、皆が石に

なっているという先入観で見逃していたのだ。

「ぜえ、ぜえ」

整備されていない林の中を、星と月の僅かな明かりだけで息を切らせながら、靴も履かずにただひたすら深夜の山道を駆け下りていた。闇の中を走る事はとても困難で、図書館探検部で暗い地下を歩いた経験と仲間たちを助けようとする必死さがそれを成していた。

木乃香の実家で歓待を受け、客間に通されて夕映とのどかをハルナを合わせた三人でカードゲームをして盛り上がっていたところにコンコンと襖が叩かれた。

この家の人間かと思い、一番近かったのどかが何の危機感もなく扉を開けてしまった。

「君のアーティファクトは危険だからね。眠っていてもらうよ」

そこにいた少年が見えたと思ったとたん煙が湧き出しのどかが石になった。のどかが石になったという信じがたい光景が目の前に広がった時、ハルナが自分を少年の視線から隠すように立ち塞がった。そして……。

「ゆえ、あんたは逃げな」

普段の雰囲気とはまるで違う真剣な声。夕映はハルナが自分だけを逃がそうとしている事に気づいて反論しようとするが、自分の前に被るようにして立って外に突き飛ばされた。それによって彼女だけが事なきを得ていた。

屋敷の人間に知らせようとするも他も同じように石となっており、恐らく屋敷内は皆同じようなものだろうと思い、急いで屋敷から駆け出した。数分前まで友人と楽しく笑っていたのに、今はその面影すらなく、突如現れた白髪の少年によって友人たちは石に変えられてしまった。一人逃げられたのはいいが、状況を整理するだけでも困難。

「しかし、警察はおろか、こんな非現実的な事態に対処してくれる所など、日本のどこにも……」

脱出は成功したかもしれないが、人を石に変えるような相手に誰に助けを求めるべきか。

こんなときに限って国家権力たる警察に言っても信じてもらえるのか。ならば怪しい霊媒師でも見つけて連れてくるか。いや、信じられても対処できるのか。どれも現実的じゃない。この状況も含めて全て。

そのとき彼女の脳裏に過ぎったのは、方向性は違っても人間離れした身体能力を持つ常識を超えた者たちが浮かんだ。

夕映はこれが夢でも、まずやるべきは問題への対処だと考え、この状況をなんとかしてくれると信じ、携帯電話を取り出した。

懐から取り出した携帯電話で思い浮かんだ人物への短縮ダイヤルをコールする。

木乃香が誘拐された直後で楓がロビーで夕映から電話を受けている時、アスカは自室で調査結果を纏めた書類を見ていた。そこには最近起きている裏がらみの凶悪事件をまとめたモノで、事件の数は半年ほど前から増加の一途を辿り、すでに今月に入ってから十数件発生している。これは前年の同じ時期に比べて、約5倍にも上る。

それに対応するために本山の腕利きは西日本の至る所に散らばり、呼び戻すにも最低一日は掛かるだろう。

剣を交える前から戦いは始まっている、その言葉通りに計画を進めたのが良く分かる。

証拠集めに奔走していたものの最早間に合わない。そう考えて物憂げにしている時に電話が掛かってきた。

「はい、アスカです」

『アスカ先生!!　大変です!!　屋敷が強襲され……!!』

切羽詰った刹那の声にアスカは事態の変化に気付き、興奮している刹那を落ち着かせて詳しい話を聞く。

総本山は急襲を受けて長を含めて刹那、明日菜、木乃香以外が全員石化したが無事。ネギは酔い潰れて寝ている。そして恐らくやったと思われる白い髪の少年に木乃香は誘拐された。その白い少年は自分ではとても敵わないと。

アスカは情報を整理する為に少し沈黙し、すぐに考えを纏めて救

援を送ると伝えて電話を切る。

「そうか……止められなかったのか」

僅かの間、携帯の画面を見て呟き、続けてエヴァンジェリンに念話を掛ける。

＜エヴァンジェリンさん＞

＜どうした？＞

＜総本山が急襲を受けて刹那さん、明日菜さん、木乃香さん以外、全員が石化。そして木乃香さんが下手人に誘拐されました＞

＜何！　もしや詠春もか！！＞

＜はい、そうです。油断していたんでしょうけど、敵の一人はかなりの実力だと思われます。封印解除の申請をしますので準備をして部屋に来てください＞

＜分かった＞

＜それと茶々丸さんの装備も整えておいて下さい。予想通りなら鬼神を相手にすることになります＞

＜鬼神だと？　１５年の錆を落とすには十分な相手だな。直ぐに準備させる＞

エヴァンジェリンとの念話を切り、続けて真名に電話を掛けて楓と古菲を連れて部屋に来てもらうように頼む。向こうでも石化を逃

れた夕映から楓に連絡があったらしく、準備をしていたのでそう時間は掛からない。

電話を切ると学園長から連絡が来た。刹那から情報が回ったらしく、長が石化したこと、刹那が自分では勝てないと言っていた事を伝え、独自の調査結果と共に鬼神の封印を解除する可能性が高い事を伝え、エヴァンジェリンの封印解除の申請をすると許可が下りた。

「ふぅ～」

「今、帰ったぞ」

連絡し終えて息をついていたら、どこかに行っていた玉藻が帰ってきた。

「どこ行ってたの？」

「ああ、本山で巫女に化けて偵察をな」

実はネギ達が詠春と会談していた時に巫女に変化していた玉藻がいたのだが、当然の如く誰も気がついていなかった。

「……ま、いっか。それよりも場合によっては玉藻にも出てもらうよ」

「どうするのじゃ？」

「基本は多勢に無勢の時だけでいいから手助けを頼む」

玉藻の返答にアスカは呆気に取られるも、頼んだ仕事分の働きは

してもらっているので別にいいかと追求もしなかった。それよりも、もしもの場合は玉藻に出てもらうように頼む。

玉藻はあっさりと了承し、人が部屋に近づいてきたのでアスカの中に戻る。

最初に来たのは真名、楓、古菲の三人が部屋に入ってくる。

行く気に逸る三人を座らせて状況を説明。合わせて古菲に魔法の事も話す。驚いているが割とすんなりと受け入れている。

「楓さんは夕映さんの保護を。真名さんと古菲さんは刹那さん達と合流してください」

「「了解（でござる♪）（アル♪）」」

能天気な笑顔を浮かべながら面白そうに目を光らせわくわくしている古菲と楓の様子に、こんな場合でもないのに不謹慎ながら笑みが浮かぶ。

「ところで一ついいかな？　アスカ先生」

嬉しげな二人を見ながら小さく笑みを浮かべた真名は問いを発した。　アスカは言葉出さずに先を促す。

「刹那達の居場所をどうやって探すつもりだい？」

「それはこれです」

真名の尤（もっと）もな疑問にアスカが取り出したのは三枚の札。これはア

スカがまほネットで購入した遠距離用の転移魔法符。近距離用は５００メートル以内の見える範囲で、遠距離は対になってる小さい札に転移する。

厳密には近距離用は正確に転移場所のイメージが出来てれば大丈夫なのだが、目に見えてるところの方が確実だ。見えないところに転移する場合は気をつけなければならない。

「これは大盤振る舞いだね。差し詰め対となる方は刹那が持っているんだろうね」

「正解です」

真名が札を持って感心したような声を上げ、推測を述べる。

長距離用転移符３枚、計６００万。この件が終わり次第、購入費用を学園長に請求する気満々である。

「準備ができたならば急いで下さい。ここは結界を張っているので誰かに見られる心配はありません」

「ん、分かった」

立ち上がった真名が三枚とも札を持って、楓と古菲が肩に手を置く。真名が札に魔力を通すと三人の姿は部屋から消えた。続けて玉藻がアスカの体内から消えたのを感じた。何らかの手段で後を追っていったのだろう。

そう間を空ける事無く、エヴァンジェリンと茶々丸が部屋に入ってきた。

「首謀者が復活させようとしているのは１８年前に紅き翼に封印されたリョウメンスクナ。相手の目的はこれを復活させる事が目的のようです」

「成る程、私の相手には相応しいな。しかし、ナギが封印した鬼神か。因縁めいたものを感じるな」

急いでいるので世間話はなしで、資料を渡してエヴァンジェリンに説明しながらアスカは封印解除の準備を進める。といっても結界を張ったりするぐらいだが。

エヴァンジェリンは渡された資料を流し読みし、出来の悪い運命のようなもの感じて嫌な気分になる。

「始めます。直ぐに済みますから少しじっとしていて下さい」

思い出に拭(ふ)ける間もなく、アスカは言葉を紡ぐ。

「……ああ」

当初の契約通り、アスカに手を貸す代償として「【登校地獄】の解除に協力する」を果たす時が来た。

呪いを解くのに絶好なタイミングは今この時しかないとアスカは事前に断言した。

だが、その時を前にしてもエヴァンジェリンの顔には歓喜といった喜びの表情は浮かんではいなかった。

「これを」

アスカが取り出したアンプル――――――アスカの血液を無菌操作で充填した容器を受け取り暫しの沈黙。

心の準備が出来る間もなく、力を封じている【学園結界】が解除されてエヴァンジェリンの体には全盛期の魔力が戻ってきた。

遂に呪いが解けるその時が来た。なのにアンプルを持ったエヴァンジェリンの腕は動かず、決心は固まらない。

「……」

時間はない。チャンスはもうない。

そんな思いに急かされたエヴァンジェリンの腕は、固まらぬ決心、定まらぬ意思とは裏腹に動き出す。

蓋を外し、アンプルを口につけて傾け、ゆっくりと以前とは全く違う濃縮された血流魔力を持ったアスカの血を嚥下していく。

「はっ……！」

こちらも己の内なる＜力＞を高めたアスカが、エヴァンジェリンが血液を全て飲み干した瞬間に【仙卦法】を発動し、全ての＜力＞に方向性を与えながら彼女に叩きつけた。

現在の【登校地獄】の状態はアスカが手を加えたことで正常に近い状態になっている。それは今まで参加できなかった学外の修学旅行に来れていることが証明している。

とはいえ、ナギがかけた呪いは膨大な魔力に任せた力尽くだったせいか融通が利かない。これはあくまで一度だけの手段で二度目は耐性がついてしまって使えない。

しかし、いま正常な状態に近いということは、別の見方をすれば解呪しなくても現在の状態が正しい状態だと呪いに錯覚させてしまえば卒業と同時に呪いは自然に解ける。

呪いを錯覚させるにはどうしたらいいか。

アスカが考えた策は以下の通りである。

まず彼女の力を封じている【学園結界】を解き、呪いをかけた術者の息子であり、血中魔力ならばナギを越えるアスカの血をエヴァンジェリンが飲み、外部からアスカが【仙卦法】の莫大な力を用いて呪いに干渉する。

アスカの血とエヴァンジェリン自身の力による内部からの干渉と同時に外部からアスカによる呪いの上書き。

博打的な要素はあれど成功率は高いと踏んでいた。

「……あ……」

この時、エヴァンジェリンは何を言いたかったのか自分でも分からなかった。しかし、呪いが本来あるべき正しい形へと変質していく事実を前に胸にあるのは喜びよりも哀しいような、不安なような気持ちだった。

何故かそんな思いが胸に溢れて気がついたら、エヴァンジェリンの目には涙が溢れていた。例え呪いという自分に取って煩わしいものであっても、確かに好いた男との唯一の？がりだったのだ。

全てが終わり、呪いが本来あるべき形へと変わってしまったのは１５年もの長い間縛られていた彼女には直ぐに分かった。

瞬間、視界が曇る。鼻の奥が熱くなって際限もなく涙が溢れてくる。

喪失感と悲しみから生まれた涙。

それは呆れるほどに止めどなく彼女の目から流れてゆき、

「ぅぅぅ…ぐぅぅぅぅ…ぅぅぅぅぅぅっ！！」

くぐもった声が彼女の口から漏れていく。

呪いは約束であり絆だった。囲む結界は光に生きるために爪牙を封じられた自分のために用意してくれた守護だった。封じられた力も、限られた範囲も、自分を守ってくれるものだった。

ここまでナギを思っていたのかとエヴァンジェリンは自分で驚く。

時がくれば自然に呪いが解けるは間違いなく嬉しい。でも、繋がりが消えたのは悲しい。そんな矛盾した思いを抱え、エヴァンジェリンは心の動きに戸惑い、抑えきれない感情が涙となって溢れていく。

己の手を見たままポロポロと涙を流すエヴァンジェリンを茶々丸

が抱きしめる。そこにいたのは自身の心に戸惑う１０歳の少女過ぎなかった。

アスカは元の場所に戻り、エヴァンジェリンが泣き止むまでずっと待ち続けた。長い前髪とサングラスに覆われた顔からは如何なる感情も読み取れなかった。

第六十五話　修学旅行三日目と少年　５（後書き）

次回更新は『明日』の午前０時です。

もう直ぐ飛び飛びの連続投稿が終わりそうです。なんとか１０月ギリギリまで引き伸ばしたい。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

第六十六話　修学旅行三日目と少年　６（前書き）

文字数は多いくせに展開は進まないという不思議。

修学旅行編全１９話の第１４話目で三日目の６話目です。

文字数は１０７８６字です。それではどうぞッ！！

第六十六話　修学旅行三日目と少年　6

森が僅かに途切れた場所、皮肉にもネギが小太郎と戦って休んだ大岩の上に千草はいた。

淡い桜色の簡素な着物を着崩し、大きく露出させた白く細い肩。その肩から繋がって細身ながらも豊かな曲線が流れているのが着物の上からでもよくわかる。長い黒髪が首の後ろで結わえられて背中に垂らされ、何かを睨みつけることに慣れてしまったような鋭く切れ長な目を、丸いレンズの大きな眼鏡が覆っていた。

本山からさして離れていない川の中で岩の上に立ち、千草は一心不乱に空を見上げていた。

「ほんま、ままならんもんや」

物憂げに空に浮かんだ月の形に一人ごち、本山の方から近寄ってくる気配に振り返る。

「連れてきたよ」

相も変らぬ無表情なフェイトの言葉に、ルビカンテと呼ばれた魔物が木乃香を貢物のように千草に差し出す。それが木乃香である事を確認して直ぐ傍に控えていた式神・猿鬼に受け取らせる。

木乃香は暴れて逃れようとするが、どれほど潜在能力が高くても今はまだ唯の少女に過ぎず、手足を縛られ口も札で塞がれて思うように動けない。木乃香の顔には恐怖と不安から涙を滲んでいた。

「ようやった新入り」

関西呪術協会は麻帆良よりも遥かに長い年月の蓄積を持つ。故に本部への侵入者に対する備えは当然厳重になっている。しかし、一度入ってしまえば呆気ないものだ。

このために本部の実戦戦力を削り、前以っての準備もしてきている。千草の策は万全であった。

「あなたの作戦があってこそでしょ。お姫様を攫ってくるぐらいあなた一人でもできたんじゃないか？」

千草は狡猾で冷静、そして策士だった。

表情を全く変えないフェイトが、見掛け相応の実力に収まっていないだろう事を考えて事前に彼に結界に入れるかを確認し、木乃香が本山を訪れる前に奪取できなかった時点でこの作戦に切り替えていた。

関西呪術協会の結界に入る手段は幾らでもある。そして結界内に入ったら今、本部に残っている実力者は長の詠春ぐらい。

個人の能力任せで博打の要素はあるものの、千草の計画通り上手くいった。関西呪術協会に残っている戦力を無力化し、残っているのは外来の人間のみ。

「いやいや、あんさんの力があってこそやで。例え結界内に入れても、うちでは不意打ちを仕掛けても長には勝てん」

千草がフェイトを褒めるも、彼の顔はやはり無表情のままで変わ

らない。それも何時もの事と割り切って木乃香に目を向ける。

「急ぐで。お嬢様を連れてあの祭壇に行けば……」

「んーんー」

口を塞がれた木乃香が目端に涙を浮かべて何かを言ってくるが、千草は何時も通りの笑みを浮かべて木乃香の顔を覗き込む。

「安心なはれ、木乃香お嬢様。何もひどいことはしまへんよ」

「んん!!?」

千草の口調は優しいが、目が笑っていない。いや、冷静なようで目の奥には狂気が渦巻いていた。猿鬼（エンキ）に捕まっている状態の木乃香は僅かなりとも、それを感じて何とか逃れようとするも、手足を縛られ身じろぎ一つできない。口は札を貼られて防がれており、助けを呼ぶ事すらできない。

「さぁ、祭壇へ向かいますえ」

すっと木乃香から顔を離して向かうべき方向に振り返り、両腕を開いて言葉を紡ぐ。

「待て!!　そこまでだ、お嬢様を放せ!!」

千草が上流の湖に向おうとした時、そこに攫われた木乃香の気配を追いかけてきた刹那と明日菜が追いついた。

「……また、あんたらか」

やってきた二人に千草は視線を向けると、坦々（たんたん）とした余裕を持った言葉で見つめる。

「天ヶ崎千草！！　もうじきお前を捕らえに応援が来るぞ。無駄な抵抗はやめ、投降するがいい！！」

包囲網を敷いた警官隊の指揮官が立て篭もった犯人を説得するかの如く、刹那は夕凪を構え、大声で降伏を呼びかける。

「その程度の事でうちはもう止まらん」

しかし、千草はそれに何の圧力も感じなかった。

千草には応援に来る腕利き達すら蹴散らすだけの戦力に当てが有り、木乃香がいればそれを使える。

一度動き出した歯車が止まることなど、いや、止めようなどとは考えてはいない。既に制止を振り切って自分はこの道を選んでしまったのだから。

「応援が何ぼのもんや、あんたらにもお嬢様の力の一端を見せたるわ」

口の端を嘲笑するように持ち上げて刹那の降伏勧告を気にせず、千草は岩を降りた。余裕すら見せて川の水面にすっと足を乗せても、足が水中に沈み込まず、千草は水面の上に立っていた。

「お嬢様、失礼を」

千草が呪符を一枚投げると、それは吸い込まれるように木乃香の胸元に張り付いた。札がパァと光を放ち、魔力を行使するときの快感が体を駆けめぐり、木乃香は眉を顰める。

これによって木乃香の魔力が、千草の術に行使されることになる。

刹那はそれを見て思わず夕凪を強く握りしめるも、千草が何をしてくるのかわからない今、飛び込んで助けようとするのは迂闊な行為。

「オン、キリ、キリ、ヴァジャラ、ウーンハッタ」「ん〝んっ……！！」

千草の呪文と共に彼女の足元と周囲に幾つもの光とそこに陰の梵字が浮かび上がり、木乃香に貼り付けたお札から木乃香自身の魔力が流れ出る。

千草が唱えたのは、奉献供養の真言。仏菩薩鬼神などの霊格に献げられるお供え物を浄化する呪文。

朗々と紡がれる詠唱、そして結ばれる印に呼応するように千草の周りに幾つもの真言が浮かび上がり、そこから幾多の異形が姿を現す。千草は木乃香の持つ魔力を鬼神達に献げ、召喚するためにそれを唱えた。

次から次へと光が増えて、そこから鬼のみならず大量の物の怪が溢れ出てくる。

そして半ば無理矢理その身に内包されていた力を吸い取られる木乃香の体も光を帯び、身体をビクリと跳ねさせその感覚に悶える。

千草は一通り召喚し終えると再び大岩の上に戻った。その時になると周囲には無数の妖怪が集まって刹那達を取り囲んでいた。

千草の式神・猿鬼等とは違う、如何にもな化け物どもだ。赤銅色の肌、二本角の典型的な鬼から一つ目、鎧武者、鴉の頭部を持つ武者、狐の女妖怪……見ただけで正体の分かるものから、明らかに人間ではないが正体不明の良く分からないものまで、瞬く間に周囲を埋め尽くした。

人と変わらない声も有れば獣のような唸り声もある。

明日菜達を取り囲むように出現した鬼の数は、およそ５００体。大から小まで様々な妖怪が犇めき合って余りにも数が多すぎて、周りの景色がまったく見えない。

「ちょっと、ちょっと、こんなのありなの――――！？」

初めて目の当たりにする異形の群を前に、明日菜が顔を青ざめながら絶叫する。　明日菜はこのような状況にあったことが一度もないためにその数に圧倒され、動揺した。顔色は青くなり、アーティファクトを持つ手は震え、目には恐れの余りか涙が浮いている。それでも逃げだそうとしないのは、彼女の正義感の強さと攫われた木乃香を救おうとする友達思いの表れだった。

魔法関係に疎い明日菜だけでなく、刹那も思わず額に汗がにじみ出る。個人の持つ力で一定以上の力を持つ妖怪の三桁同時召喚なんぞ、一流と呼ばれる者でもありえない。はっきり言って規格外。なるほど木乃香が潜在能力だけなら伝説の魔法使いを超えるレベルだと納得させるものがある。

「ふふふ、あんたらにはその鬼どもと遊んでてもらおか。子供やからな、一応、死なん程度にしといたる。安心しときぃ。ほな」

それだけ言い残して千草は懐から札を出し、フェイトと木乃香を連れて転移した。

残ったのは大量の妖怪と、たった二人の人間。千草達を追おうにも無数の鬼が行く手を阻んでいる。鬼達は少しずつ刹那達を取り囲む輪を縮めていく。

「何や、何や久しぶりに呼ばれたと思ったら……相手はおぼこい嬢ちゃんかいな」

「悪いな嬢ちゃん達。呼ばれたからには召喚者には逆らえんのや……恨まんといてな」

鬼達の中でも、際だって巨躯の鬼が刹那達に声を掛けた。この鬼と比べれば、他の鬼でさえもさして強くは見えない。大量に召喚されたものの中で、いくらか存在する別格の一鬼だ。

「せ、刹那さん……こ、こんなの私っ」

「大丈夫です、落ち着いて」

刹那はそれなりに場数慣れしているが、その声と大量の異形を前に明日菜は身震いした。歯の根が合わず、がちがちと音を立てる。

そんな明日菜を落ち着かせようとするも、そう言う刹那の額にも汗が浮かんでいる。５００対２ではどう考えても勝ち目はない。こ

れ程の絶望的な戦いは刹那も経験はない。

震える明日菜は自然な反応だろう。つい最近まで魔法など知らず、戦いも知らなかった女子には想像もできない。それが当たり前。だが、そんな言い訳が通じる程甘くはない。殺しはしないという命令も、果たしてどこまで信用できるものか。

二人の間に絶望感が漂う。そこに……。

「刹那、らしくない。近衛を取り戻すんじゃなかったのか」

「な、何！　もしかしてまだ敵がいるの!?」

「違います。私達の応援です」

突然、掛けられた声に明日菜は新手かと思って顔を更に青褪めハリセンを構えたが、刹那は逆に希望が見えてきたと腕を横に突き出してそれを制した。

「え?」

関西呪術協会の応援部隊は明日にならなければ来れない筈だ。アスカに救援を頼んだが来るには早すぎる。ならば、誰が来るのだろうかと明日菜が思っていると人影がだんだんはっきりと見えてきた。

こちらに走ってくるのは真名・古菲の二人だった。

「ええ～っ!?　龍宮さんは分かるけど古菲まで何でここに!?」

「アスカ先生に頼まれたアル。しかし、本物のオバケなんて私、初

めて見たアルよ」

背後に振り返って、初日の出来事で真名が応援として来るのは納得できても古菲が来るとは思っていなかった明日菜は驚いて聞く。古菲は理由を説明しながら辺りを見渡して暢気な声を上げる。

「さて、どうする刹那？　楓は救援を求めてきた綾瀬を探しに行ったから戦力にはならない。私達、二人が加わっても多勢に無勢は変わらないぞ」

「綾瀬さんを楓が？　くっ、戦力が足りない！」

一刻も早く千草達を追わねばならないが、最初は真名達の出現で止まった歩みを再開して、どんどん距離を詰めてくる妖怪達がそう簡単に逃がしてくれるとは思えない。それを防ぐには千草達を追う者と、ここで鬼達を防ぐ者、限られた戦力を二分するしかない。

よしんば、楓が合流したとしても戦力が足りない。いや、戦力があったとしても、下手に千草を追い詰めると、それだけ木乃香の身が危険となるだろう。

真名達の登場でも現状が好転したとは考え難い。鬼達はじりじりと近寄り、もう少しで接触するかどうかとなった時に……。

「颶風水渦の術」

それでも必死に考えている刹那の耳に以前に聞いた事のある声と共に、自分達を中心に高い濃度の霧の中を強風が渦巻き、妖怪達の視界を一瞬にして奪い取った。

「一体、何が……！」

突然、発生した現象を前に刹那だけでなく、他の者達も困惑する。

「ふむ、助けが必要かな？」

「きゃあっ！」

そんな中で明日菜の真後ろから何者かの声が聞こえ、驚いた明日菜は悲鳴を上げて飛びずさる。全く気配もなく現れたので気付かなかった刹那達は慌てて振り返り、武器を向ける。

「あなたは……！」

「確か……玉藻、さんだっけ？」

そこで刹那と明日菜は現れた人影がアスカと何らかの関わりのある玉藻だと知った。当然、面識の無い真名と古菲は誰か分からないので警戒する。

本来なら玉藻も近くの木の枝の上で静観するつもりだったが、明らかに戦力差があるので出張ってきた。あるいは玉藻のことを知っていた千草はそれすらも考慮してこれだけの鬼を召喚したのかもしれない。

説明する時間が必要だと感じて、右手に【風遁・螺旋丸】左手に【水遁・破奔流】を生み出して組み合わせた【合成忍術・颶風水渦の術】を発動させた。【水遁・破奔流】による水流を、【螺旋丸】の乱回転に巻き込むことで大量の水蒸気を発生させ、高い濃度の霧の中を強風が渦巻き、術や攻撃を弾く堅固なる障壁と化すと同時に、

【螺旋丸】の超回転によって生まれた霧が、一瞬にして敵の視界を奪い去るという効果を併せ持っている。逃走時の目眩ましはもちろん、霧に紛れての不意打ちなど、非常に応用性に富んだ術だ。

「我は主アスカの僕、玉藻。質問は後にしてくれ。これだけの鬼を召喚し、足止めを行なうという事は奴らが何かを成すのに時間がかかるにしても悠長にしている暇はないのでな。それとホレ、明日菜」

「何を？って、コレは！」

何か聞きたそうな刹那達の言葉を先んじて玉藻は止め、霧も数分しか持たないと続ける。最後に明日菜に向けて袖から出した何かを投げる。

それを受け取った明日菜は顔を真っ赤にし、皆から少し離れて霧の中に入ると姿が見えなくなり、少しして戻ってきた。その手はアーティファクト以外、何も持っていない。

「どうしたアルか？　明日菜」

「何でもないから！　何でも！！」

明日菜の行動が理解できなかった古菲が聞くも、顔を真っ赤にした明日菜は絶対に聞くなと目で訴える。皆が理解できない中、玉藻は一人で頷いていた。

「人質の救出を優先するなら二手に分かれるしかありません。ここの残る者と人質を奪還する者。問題はその面子です」

「そうなると空を飛べる者がいいじゃろうな」

切羽詰った状況で作戦会議が行われる事になり、刹那が濃い霧の中で代表して発言し、それに答えたのは玉藻だ。

千草はいざとなれば、木乃香が生きている限り何度でも妖怪達を召喚する事ができる。となると、猛スピードで強襲し、一気に木乃香を奪還するのが望ましい。しかし、現在のところ、それだけのスピードを出せる者は玉藻を除けばいないのだ。

「私は残ろう。そういう仕事には向いていないからな」

「私も空は飛べないから無理アル」

「私も」

ガンナーの真名、格闘家の古菲、ほとんど素人の明日菜には空を飛ぶ術はない。明日菜などは行きたいとは思っていても移動手段がない。玉藻は敢えて何も言わないが。

手詰まりかと思われた均衡を破ったのは真名だった。

「刹那、お前が行くべきだろ？」

「龍宮。でも私はあの鬼たちの相手をした方が……」

「攫われたのはお前の守るべき人だろう。お前が行かなくて誰が行くんだ？」

確かに真名の言う通り、刹那は木乃香を救い出すために千草を追い掛けたい。だが、そうなると鬼たちの相手をするのは明日菜達だ

けになってしまう。真名は問題ないが、古菲は幾ら強くても一般人、明日菜はほとんど素人というのが刹那を押し留める。玉藻の実力は知らないので判断できない。

「刹那さん、龍宮さんの言う通りよ。私たちに任せて木乃香を追って！」

「大丈夫アルよ。私たち、あんなお化けなんかには負けないアルよー！」

「こちらは任せておけ。誰一人死なせはせんよ」

「み、皆さん……」

こんな状況ではあるが、刹那は自分を気遣ってくれる明日菜達の言葉に思わず目に涙を滲ませた。

以前に比べて忌避感が薄れても半妖の翼を使うことはなるべく避けたい刹那は、折角得られた友人を失いたくないという想いと木乃香を失いたくないという想いが激突していた。それでも決心をつけた。

「ありがとう、ございます。私は木乃香お嬢様にも秘密にしていたことがあります。この姿を見られたら……もうお別れしなくてはなりません。でも、今ならあなたたちになら……」

滲んできた涙で声が掠れながらも自分を信じてくれる皆に礼を伝える。

そう言うや否や刹那は、屈んで大切な何かを抱き締めるように腕

を交差する。その行動に事情を知っている玉藻と真名以外の二人が怪訝に思ったその瞬間、

「ええーっ！？」「！？」

一瞬の後、彼女の背中から美しい純白の翼が生え、まるで花が咲くように鮮やかに大きく羽ばたいた。一点の曇りもない、無垢な純白の翼が羽ばたく度に白い羽が風に舞い、幻想の風景へと作り変えていく。

刹那の正体は、烏族と人間のハーフ。しかも、基本的に黒い羽を持つ烏族との混血であるのにその羽の色は白い。それは禁忌の証。

明日菜が驚きの声を上げた事に夕凪を握る手に力が入っているのかすら、今の刹那には分からなかった。

「……これが私の正体、奴らと同じ……化け物です。でもっ、誤解しないでください。私のお嬢様を守りたいという気持ちは本物です！……今まで秘密にしていたのはこの醜い姿を見られて、お嬢様に嫌われたくなかっただけ……！　私っ……宮崎さんのような勇気も持てない……情けない女です！！　「ふぅ～ん」ひゃ！」

声を詰まらせ、涙を流しながら刹那がいきなり素っ頓狂な声を上げた。そんな声を上げさせた感触を受けた所を慌てて見ると明日菜がいた。

「……って、あ……あの、明日菜さん？」

明日菜は刹那の言葉を意に介さずに近寄り、羽に触れた。翼の生え際を指で撫でたり、顔を埋めてみたり、匂いを嗅いでみたり、撫

でる、抱きしめる、匂いを嗅ぐ等のとにかくいじくり倒した。

己が好奇心の赴くままに刹那の翼を堪能した明日菜は自分の行為に納得したのか、不審な行動を止めた明日菜は一歩下がると、戸惑う刹那の後ろに立ち、思いっきり腕を振りかぶり刹那の背中を張っ倒した。

「きゃうっ！？　な、何をするんですか！？」

いきなり背中を叩かれて気の抜けた声を上げて驚いた刹那は抗議の声を上げるが、明日菜はそれに取り合わずカラカラと笑う。

「なーに言ってんのよ！　こんなの背中に生えてくるなんてカッコイイじゃん」

「え……」

きょとん、とした表情を浮かべる刹那に向かって、明日菜は不敵で素敵な笑顔で言い切った。

「あんたさぁ……木乃香の幼馴染でその後二年間も陰からずっと見守ってたんでしょ。その間のあいつの何を見てたのよ。木乃香がこの位で刹那さんのことを嫌いになったりすると思う？　ホントにもう……バカなんだから」

明日菜は刹那の真ん前へと出て肩を掴んで、顔を合わせる。自分の悩みをこの位の一言で済まされて刹那は複雑な表情を浮かべるも、木乃香は嫌いにならないとはっきりと言ってくれるのを嬉しく感じる。

「私は行けないけど、木乃香を頼んだよ刹那さん」

明日菜はそう言って刹那の肩をポンと押す。明日菜ではこの場所を越えて行くのは難しい。翼を持つ友人に攫われた友人を助けてもらうしかなかった。情けないが、頼れるのは彼女だけ。お願いするように、明日菜は刹那へと言葉を送っていた。

「……ハイ！」

明日菜が浮かべるのは屈託のない笑顔。心の底からそうなんだと、そこに嘘があるとは全く感じさせないほどの笑顔がそこに在った。刹那も安心したせいなのか一層と涙を溜め込んでいるが、精一杯の笑顔で応えた。

「急ぐのはいいが、二人とも怪我をしておるな」

早く追いかけようとした刹那と明日菜に玉藻が近づき、患部と思われる場所に手を当てる。玉藻は傷口・患部に手からチャクラを送り込み、その部位の治癒力を飛躍的に高め回復させる医療忍術【掌仙術】で治療を行う。

「……よし、終わった。さあ行くがよい」

2，3秒だけ手を当てていた玉藻は、そう言って翳していた手を離す。刹那と明日菜は治療箇所を触り異常がないか確認したところ痛みはなく、それどころか痣もきれいに消えており驚く。二人が玉藻に礼を言っている内に術の効果が切れて霧が晴れてくる。

「道は我が作ろう。準備をしておけ」

「頑張ってね、刹那さん！」

「迷っている時間など無いぞ！」

「こっちは任せるアル！」

それぞれが刹那に声を掛け、玉藻は目にも止まらぬ素早さと正確さで、驚くべき量の印を結び始めた。結印が終わると突然、周囲の水面が生物のように盛り上がる。

「水遁・水龍弾の術！」

盛り上がった水面が巨大な蛇のように鎌首（かまくび）を擡（もた）げると、龍の形に変貌しながら、妖怪たちに向けてその顎を開いて襲い掛かった。巨大な水流が進行方向にいた妖怪達を数十体飲み込み、刹那の前に道が開けた。

「ありがとうございます。行ってきます！」

刹那は言葉を置き、白い翼を広げ、木乃香を救い出すために空を翔けて行った。見る見る内に遠のいていく刹那を、明日菜達は見つめていた。

「オヤビン！　逃がしちまった」

「五十体は食われたか。逃がすな、追え！」

手下らしい鬼が大鬼に報告し、命令を聞いた烏族の一体が黒い羽を広げて刹那を追おうとした次の瞬間。

「ぐおっ！？」

烏族の内の一体が飛ぼうと後ろを向いた時、魔力を秘めた弾丸が烏族の頭を貫く。致命傷を受けた烏族は消滅し、他の妖怪達に弾丸が降り注ぐ。

「これは、術の施された弾丸か！？」

「刹那が折角、勇気を出したんだ。行かせはしないよ」

使い込まれた風情を醸し出している硝煙が噴出しているスナイパーライフルを担いで真名は不敵な笑みで答えた。

しかし、やはり中・長距離専用の武器であるスナイパーライフルを持っている姿を見られれば。

「図に乗るなよ、小便臭い小娘共が」

「こん距離じゃテッポウはつかえんやろ」

当然、相手は距離をつめて真名を取り囲むように陣形を組み直す。鬼は銃など距離を稼がなければ意味はないと笑う。しかし、その考えは甘い。その油断、一瞬の隙が命取りだった。

真名は全く慌てることなく、迫り来る鬼を一瞥して不敵に笑うと足元に置いてあったギターケースを踵で軽く蹴った。

すると、如何なる仕掛けが施されているのかギターケースから二挺の拳銃が飛び出してきた。飛び出した拳銃の名はデザートイーグル。世界最強とも謳われる自動式拳銃である。

一瞬にしてライフルを投げ捨てると同時に、真名はデザートイーグルに目を向けず、慣れた動作で空中にある間に掴み取ると同時に発砲した。

本来片手では扱いきれないと言われるデザートイーグルを易々と使いこなし、真名は精密な射撃で一切の容赦は無く、鬼たちの眉間を貫き次々と妖魔達を屠っていく。

流石にライフル弾よりは威力が低く、一撃で仕留めるということは出来ない。が、真名はそれを物量で補う。反撃を試みる相手の剣戟をスライドで受け止め往なし、銃把で勢いを殺した相手の得物の腹を殴りつけ砕き、再び銃弾の暴風を吹き荒ばせた。

それは演武と言ってもいい。ガン＝カタというものがある。これはある映画で紹介された架空の武術で、銃（ガン）と武術の型（カタ）を組み合わせたものとされている。これを聞くと銃を用いた武術と聞こえそうだが、実際はそうではない。この武術のコンセプトは『銃弾を避けるのが無理ならば、撃たれる前に避けてしまえ』というものだ。相手が撃つ前に向いてる銃口の向きから当たりにくい位置を把握し移動、回避し、なおかつ自分が優位な位置に移動し相手を射止めるというものである。

高い戦略的技能と空間把握能力を要求されるもので、銃だけでなく刀剣や格闘技なども織り交ぜることも可能。ついでに言えば銃などの武器はこの型の補佐的なものである。使いこなせれば複数の相手を同時に出来るほどに飛躍的に戦闘能力が上がる・・・・・・というのは映画での話だ。

至近距離から打ち出される銃弾にはとてもではないが反応出来ず、

次々と倒れていく鬼達。この決着、僅か五秒。

「龍宮さん、強っ！！」

「アイヤー。流石、真名は凄いアルねー！」

援軍として現れた真名の強さに衝撃を受けた明日菜。真名の隣に居た古菲は呑気な調子で戦いぶりを賞賛した。一種、凄惨といえる光景はそのような言葉では言い表せないのだが、そこは流石、古菲と言うべきか、その声は実に楽しそうだった。

「クー。お前は人間大の奴だけ相手すればいいぞ。あとは私が片付ける」

「あっ、バカにしてるアルね～～！中国四千年の技なめたらあかんアルよ！」

そう言っている古菲の背後から襲ってくる一匹の妖魔が鉄の棍棒を頭目掛けて振り下ろした。がしかし、それは目論見通りに彼女の頭部に当たらなかった。

棍棒が振り下ろされた瞬間、古菲はまるで背後が見えているかのように振り向いて、妖魔の腕に自分の腕を当てて受け止めたのだ。

「馬蹄崩拳！！！！」

驚愕する妖魔に対して地面に足を擦る独特の歩法で間合いを詰めると、その勢いをつけた拳でがら空きになった腹部を殴り飛ばした。殴り飛ばされた妖魔は後の妖魔達を巻き込んで吹き飛んでいく。体格差などまったく関係なく大鬼は、一撃で大きく殴り飛ばされる格

好となった。

「さあ、もっと強いやつはいないアルか？」

再び油断無く構える古菲は異形の群れに向けて不敵に言い放つ。その表情には好戦的な笑みが浮かんでいた。鬼達は当然の事ながら怒りの表情を露にして我先にとにじり寄る。

「さて、明日菜よ。本当に戦えるか？」

玉藻は戦い始めた二人から視線を外すと真っ直ぐに明日菜の目を見つめる。周りの妖怪達は玉藻に牽制され、僅かずつしか近寄ることが出来ない。

「……正直言って物凄く怖い。だけど、このまま逃げ出すなんて出来ないよ。もしここで逃げたら一生後悔すると思うし、木乃香の友達なんて言えなくなっちゃう。だから怖くても大丈夫。私は木乃香のために戦う」

「そうか。なればこれ以上、言う事は無い。存分に戦うが良い」

「はい！」

先程まで怯えていた明日菜は、言葉を出すことでまるで自分に言い聞かせるようで、それは戦う覚悟が込められていた。

「左手に魔力、右手に気。心を無に……」

明日菜はハリセンを脇に構え、仮契約をした後に教えてもらったある技法を行う。

それは咸卦法という技法。

相反するエネルギーである気と魔力を融合させることで爆発的な力を得ることができる技法。非常に高度な技法であるため取得にはかなりの時間を要するが、習得難度に見合った効果があり、発動しただけで身体強化のみならず、加速、物理防御、魔法防御、鼓舞（精神の高揚）、耐熱、対冷、対毒、などといった様々な強化。防御効果を発揮。その強力な効果ゆえ、究極技法とも呼ばれている。

「――――――合成」

合成した瞬間、一瞬強い風が吹いて明日菜の身体を咸卦のオーラが纏う。

明日菜はこれをアスカの口頭の説明だけで一発で成功させた。簡単に習得出来る技法ではないと説明され、明日菜はより一層に自身の過去に疑いを深めてしまう。

初回なのでオーラは直ぐに切れてしまったが、何回か練習して数分ぐらいなら安定化させることはできた。

アーテイファクトという戦うための武器、咸卦法という生き残るための力を得た明日菜は、これで日常に戻れなくなってしまったが後悔はしていない。

「じゃあ……鬼退治と行きましょうか！！」

明日菜はハリセンを構えて突っ込んだ。ハリセン――――ハマノツルギは当たるを幸いに鬼達を還して行く。掠った程度ではダメらし

いが上手くハマノツルギが直撃すれば召喚された鬼は呆気なく消えていく。

迫る鬼を叩き、すれ違い様に滑らせて還して行く。その姿は堂に入っており、今の彼女を見たものの誰もが今日、初めて戦場に立ったなどと信じてくれぬほどの勇猛さだった。

第六十六話　修学旅行三日目と少年　6（後書き）

次回更新は『明々後日』（日曜日と月曜日の間）の午前0時です。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

第六十七話　　修学旅行三日目と少年　７（前書き）

修学旅行編全１９話の第１５話目で三日目の七話目です。

そろそろ章分けとかした方がいいですかね？

文字数は１１６３２字です。それではどうぞッ！！

第六十七話　修学旅行三日目と少年　7

明日菜を見送り、玉藻はまるで近くに散歩に行くかのような気安さで歩み出す。

「さて、我も行くとするか」

接近してきた鬼たちが迫るも玉藻に戦闘特有の緊迫した緊張感はない。

全方位から接近した鬼たちを前に歩みを止めることなく高速で印を結び、下方から猛烈な勢いで吹き上げる水の壁により、敵からの攻撃を完全に遮断した。

突然の水壁を前に獲物を弾かれる鬼たち。

水壁は円を描くように吹き上がるため死角なく防御ができ、池の水を利用しているので水量や時間の長短も容易い。

この術の名は【水遁・水陣壁】。防御中も視界を確保できるので、次の行動に移りやすいのが大きな利点である術だ。

事実、玉藻の動きは止まっていない。

【水遁・水陣壁】によって噴き上がった水の壁より、圧縮した水に回転を加えて殺傷力を増強した高速の弾が発射された。３６０度全方位にばら撒かれた【水遁・水牙弾】が攻撃を弾かれた鬼たちの身体を抉っていく。

吹き上げた水が全て落ちる頃には彼らは既に元いた場所へと還っていた。

あまりにも速すぎる一連の流れを前に、召喚された鬼たちが二の足を踏む中で玉藻の歩みは最初から一度も止まっていない。

その両手には何時の間にかクナイが握られており、チャクラが流されていた。

これは【飛燕】といい、クナイや剣などの武器にチャクラを宿し、殺傷力を増強させる付加系の術。具現化された力は刃の一部と化し、触れたモノをたちどころに切り裂く。刃に宿す力の量を調節することで攻撃範囲を変えることも可能だ。

玉藻は右手のクナイを逆手に掴み、近づいてきた妖怪達に横薙ぎに一閃。瞬き一つした次の瞬間には十体の鬼があっさりと二倍の肉の塊に増え、またその次の瞬間にはその死体が霧と消える。

振り切ったそのクナイの持ち手を順手に変えて大上段に持ち上げると、刃がずずっと１０メートル近く伸び、今度は縦に振り下ろす。

間にいた妖怪は悲鳴もなく真っ二つになって地面に着弾。轟音と爆音が起こり、土煙が立ち上る。刃が叩きつけられた地面は割れ、幅一メートルの亀裂が出来ている。

「んな……アホな……」

一連の動作を僅かでも見えたものはいない。いや、或いは殺られた者なら微かに見えたかもしれないが、周りにいる者達はそうではない。

たったそれだけで、玉藻の近くにいた烏族の戦士は絶望と諦観を綯い交ぜにしたような声で嘴から声を漏らす。そう漏らした瞬間には既に上半身と下半身が生き別れしていたが。

そんな玉藻に向かって来るは鬼と妖怪の軍勢。次は数体ではなく、１００を越える物の怪が三方から攻め入る。互いに行動は攻め、片方は数にして一。それは最小の数字。だが、圧倒的な脅威の数字の差。

上がる怒号は数で押す鬼・妖怪共のモノ。

「ちょ、ちょ、ちょっと玉藻さん――！」

一番近くいた明日菜が玉藻に声を掛けるも、物の怪達は止まらない。

だが、

「す……凄い……」

それを見た明日菜の声は萎む。戦況は一方的なまでに玉藻が場を掌握していた。片腕を一つ振るえば伸縮自在の刃が鬼を真っ二つに両断し、まるで舞い流れるが如く動いているので四方八方から飛んでくる得物でも着ている着物すら掠ることができない。

近づいても水の壁に弾かれ、離れても術や【飛燕】による遠隔攻撃。地の利や間合いを生かした圧倒的な武勇。

明日菜たちというある意味で足手纏いがいる所為で勝負を一気に

決める大技を使えないものの、数の差をものともしない個人の力の前に集団が圧倒される。

「アレは敵に回したくないね」

「何をやったのか見えなかったアル」

玉藻が進むごとに閃光の如き連撃は囲む妖怪にも恐怖を感じさせるモノであり、休む間もなく攻め続ける妖怪達が煙となって消えていく。

下位の霊格の者の中にちらほらと上位の者も混じっている、それですら傷どころか、着物を汚すことすらできない。鬼の主格クラスや戦闘を続けながら横目で見た真名だけが力の底どころか、実力の一端だけを垣間見せているに過ぎないことに気付いた。

状況は５００対４という圧倒的に不利な状況でありながら全力を出さずに圧倒している、そう鬼の主格は戦舞を眺めて予測していた。

それはまさしく風。縦横無尽に駆け巡り、暴風のようになぎ払っていく。そこに……。

「まさか……こないとこで。はぁ、センパイ逃したんは残念やけど～。ウチ嬉しく嬉しくてイってしまいそうやわ～！さあ、ウチと死合おう！！」

ようやく到着した月詠は、刹那を逃がしたのは惜しかったが、それ以上の得物を前にフルフルと小刻みに震えた。最早、歓喜を通り越し、狂い兇った笑みを浮かべた月詠は途中にいて邪魔な妖怪達を斬りつけながら、一直線に玉藻の下へ疾走する。

「玉藻さん、危ない！！」

「邪魔じゃ」「ギャン！」

明日菜が危険を知らせようと声を掛けるも、月詠は玉藻の前に出た途端、両手の太刀と小太刀を砕かれ、ピンボールのボールの如く前蹴りで蹴り飛ばされた。自分で開けた道を吹っ飛び、背中から木に激突して地に落ちた。起きて来ないのを見るに気絶したか、死んだかしたみたいだ。

「はっ？」

明日菜は目の前で繰り広げられる非常識な力を見せ付けられ、思わず呆けた声を漏らした。今までにも刹那の剣技に感銘を受けたりしてきたが、これは完全にレベルが、いや、次元が違う。余りにも凄過ぎて、何が凄いのかわからないほどであった。

呆けてしまった明日菜は咸卦のオーラも解け、後ろに狐の面をつけた妖怪が迫る。その時、明日菜の頭上を閃光が走り、火の【性質変化】で投じられたクナイは狐の面をつけた妖怪どころか、その後ろにいた何体もの妖怪が纏めて吹っ飛ばす。

「明日菜よ、油断は禁物じゃぞ？」

「は、はい。すみません」

戦闘を続けながらも周りを見ていて気付いた玉藻が力を纏ったままのクナイを投げ、狐の面をつけた妖怪を射抜いた。少々、威力が強すぎて後ろの妖怪も巻き込んだが想定の範囲内である。

明日菜は自分が助けられたことに気付き、慌てて謝りながら【咸卦法】をする。その頬が赤いのは羞恥か、はたまた別の意味があるのか。

【咸卦法】を発動するために心を無にすると、最初に【咸卦法】を発動したときに見たものが思い起こされる。暗いトンネルをくぐり抜けるように閉ざされてしまっていた本人も知らない過去の記憶。

朝焼けのなか、まだ幼い明日菜は港の埠頭に腰をかけていた。

遠くには、エキゾチックな街並に囲まれた丸屋根の荘厳な建築物が見える。　港に停泊する船舶の多さを見ても、なかなか隆盛している街であることが窺い知れる。

しかし、明日菜にはその街に関する記憶はない。どこか分からないし、行った記憶もない。

そもそも……。

「いいか？　左腕に魔力！　右腕に気……」

「左腕に魔力、右腕に……うわっ」

聞こえてきた二人の男性の声に幼いアスナが振り返る。

現在の明日菜好みの背広姿で低い声をした渋いおじさんに相対するのは、Ｙシャツにネクタイといった出で立ちの今よりずっと若いというか青臭さが抜けていないタカミチの姿があった。

渋い男性の動作を真似するように胸の前に持ち上げていたタカミチの両手のひらの間から、火花が飛び散って集まっていた光が消失する。

「駄目だ駄目だ。いいか、タカミチ。自分を無にしろ、そんな調子じゃ5年はかかるぞ」

「は、はい」

名も知らぬ咥え煙草の男性の駄目出しにしょげるタカミチの姿など今からは想像も出来ない。

「よぉ♪　姫様は今日も元気か？」

そこへ投げ掛けられた聞き覚えのないのに懐かしいと感じる若い男の声。

その声の主を今の明日菜は知らないが、彼こそネギとアスカの父にして巷ではサウザンドマスターと呼ばれた男――――ナギ＝スプリングフィールドである。

若かりし頃の木乃香の父親・近衛詠春と、ナギに似た白いフード姿で束髪を胸に垂らすすまし顔の男性が、ナギの両側を固めている。

「あっ、ナギさん、皆さん、おはようございます！！」

「バーカ、タカミチ、さん付けはやめろっつってんだろ、ナギでいーっての」

慌てて立ち上がり挨拶するタカミチに、ナギは呆れたような半笑いで答える。

ナギたち3人がやって来るに伴い、集まってきた仲間たちを見て時間的に頃合かと修行を終わらせ「飯にすっか」と腰を上げる渋い男性。

「何やってたんだ」

「あ、いえっ、ガトウさんに少し修行を……」

タカミチがナギの質問に答えている間、手持ち無沙汰の幼いアスナは、渋い男性やタカミチの真似をしてみる。特に何も考えず、ただ暇だったからという理由で。

「左腕に魔力……右腕に気……」

「おおっ！？」

幼いアスナの両手の間に光が生まれ、タカミチのように無様に四散することなく、渦巻いて固定された。

「……！！」

「はっはっは、抜かれたな、タカミチ君」

それを見て驚きのあまり固まってしまっているタカミチの肩を、詠春が軽く叩いて愉快そうに言う。

「スゲースゲー、さすが姫様」

珍しいものを見てはしゃぐ子供のように、ナギも感嘆していた。

「これなら将来、良い魔法使いの従者になれますね」

「ハハハ、嬢ちゃん。おじさんのパートナーになるかい？」

フードの男性が幼いアスナがしたことに驚きながらもその資質を見越し、その発言に乗っかった渋い男性が冗談めいた口調で問いかける。

「ん？」

問いかけに対して幼いアスナは今と違って感情の薄い目をしたまま否定するように首を横に振り、

「……ナギでいい」

そんな爆弾染みた発言を投下した。

「げ……」

「お……？」

アスナの意外な発言に渋い男性とナギの声が同時に上がり、フードの男性が顔を背けて笑っていた。

「いーぜ、いーぜ！　アスナ、幾らでもおしめが取れたらな！！」

「なんであんたはそんな全方位にモテモテなんだ！」

「やっぱおっさんはダメか――ッ！」

「ククク」

「おしめしてない……」

「アスナちゃん、タバコ嫌いなんですよ師匠」

ナギの破顔と共に爆笑が巻き起こり、詠春の嫉妬、渋い男性の中年故の慟哭、フードの男性の含み笑い、アスナの的外れな反論、タカミチのアスナが渋い男性をパートナーに選ばなかった理由を言ったりと確かな幸福な光景が展開されていた。

明日菜の視界が白光で覆われた。

我を取り戻したときには、現在の１４歳の肉体。

だが、垣間見た記憶のように胸の前で手のひらを向かい合わせていた両手の間には明日菜の身体に力を染み渡らせるような凄まじい力が循環していた。

現実に意識を戻した光は、今、両手の間に生じているエネルギーの光だったのである。

明日菜は己を確かめるようにハリセンを握り締めた両手を見下ろす。

知らない記憶、知らない力、知らない過去。

「わあああぁぁぁっ！！」

知らない尽くしでも目の前に立ち塞がる脅威、攫われた親友木乃香を助けるために横においやって鬼の群れへと突っ込んだ。

一人で大多数を相手取る玉藻、一体一体を確実に倒す古菲、遠、中、近と暴風の如き猛威を振るう真名、戦線に復帰した明日菜。

たった四人よって瞬く間に返されていく鬼たち。

しかし、大分削ったが彼らは減った様子も見せずに後から後から湧いて出てくる。

『お、オヤビンありゃ反則ですぜ。お嬢ちゃんのハリセンのミス無しはともかく、あの姉ちゃんマジで強過ぎでっせ！？』

『ご……500体の兵が僅か数分で半ばでも……！？』

鬼達が呻く。絶えることなく響く爆発音と撲殺音と仲間の断末魔に、鬼達はそっと涙した。

「全く、よくもこれだけ呼んだ物だ」

そんな鬼達の前で玉藻が呆れたようにため息を一つ付く。しかし、彼女は息一つ乱していない。周りにいる妖怪達は僅かな時間で彼女一人に三桁の仲間をあっけなく討たれ、流石に怯む者が出始めていた。

「ば、化け物か……」

烏族の一体が思わずその言葉を漏らす。いや、お前たちが化け物というか、という突っ込みは無粋である。下の下の雑魚だけなら兎も角、ここに呼ばれたのは皆が皆、相応の力を持つ。それが抗うことも出来ず、一蹴されている現状にそう思わずにはいれない。

「貴様たちは我と……いや、主と敵対したことがそもそもの間違いなのだよ」

玉藻は言葉を返し、鬼達を還して行く。そこから続くのは戦闘とすら呼べないその行為は既に虐殺でしかなかった。

考えてみれば不思議だ、と儀式を行いながら千草は心の中で一人ごちる。復活させてはいけない大鬼神のはずなのに、復活させるための台座が存在しているという矛盾。どうも調べた限りでは復活させる事を前提とした封印である可能性が見え隠れしているのだ。

これを不思議ではなく何というべきか。

「……誰か来るよ」

「うちは手が放せへんからあんたに任せるわ」

「分かった」

精神を集中させて目の前の岩に施されたあるモノの封印を解いて

いた千草の耳に、直ぐ近くで直立不動の姿勢を保っていたフェイトの声が響いた。

彼女は封印の解除で手を放せないため、千草はフェイトに迎撃を一任する。

了承してフェイトは黙って森の一角を見ると同時に森の中から猛スピードで何かが飛び出してきた。

「……烏族……いや、ハーフか」

向かって来る少女を見て、理解したかのように呟く白髪の少年。相手が何であろうが関係ないと、未だ無感情のまま相手を見据えていた。

「ルビカンテ。あの子を止めて」

フェイトは学生服の懐から呪符を取り出して素早く呪を紡ぎ、召喚した鬼に命じる。命じられたルビカンテは頷きを一つ返して、己の翼を羽ばたいて夜空に飛び上がった。

ルビカンテは翼を広げると刹那を目掛け、一直線に向かう。

「はあぁぁぁぁ――――――っ！！」

刹那は翼を羽ばたかせた横に刀を構えて、ルビカンテへ突っ込んでいく。

「神鳴流奥義・百烈桜華斬！！」

二者の接触まで後少しという距離で刹那は奥義を放ち、その余波で局所的な強風が起きると周囲の水が巻き上がり、霧状の水煙を巻き起こす。

「目晦ましか、甘いよ」

式神の?がりから今のでルビカンテが倒された事を感じとったフェイトは、見えなくても分かる刹那がいる方角へ向けて片手を掲げる。刹那の作戦はフェイトには幼稚すぎた。事前の技でフェイトの目晦ましをして、自分に仕掛けると見せかけてその隙に木乃香を奪取するつもりなのだろう。

フェイトが【障壁突破“石の槍”】を放てば間違いなく刹那を貫く。しかし……。

「――――残念、今のお前の相手はソイツじゃない」

「っ――――!」

突如、自身の影から現れた第三者の小さな手が、今にも魔法を放とうと伸ばしたフェイトの腕を掴む。フェイトの耳へその言葉が届くと同時に、転移してきた人物の莫大な魔力を纏ったもう片方の拳が少年を襲う。一瞬の内に文字通りのソレが起こり、その細い腕から考えられない威力をもって障壁ごと殴り飛ばされ、フェイトを風にさらわれた紙切れのように湖の彼方まで弾き飛ばした。

「ふんっ」

バサバサッと音が響き、コウモリがエヴァの背後に集って一枚のマントとなって、エヴァの身体を包み込む。

「エ、エヴァンジェリンさん！」

刹那に名を呼ばれた少女――エヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェルは、壇上の役者の様に優雅な仕草で振り向くと不適な笑みを浮かべる。

一寸、早く到着したエヴァンジェリンは刹那に連絡を取った。

囚われていたはずだが助け出されたらしい小太郎によって邪魔された刹那は、実力的には圧倒できても木乃香を助けたいのと明日菜たちを残したことで実力を発揮できずに焦って梃子摺っていた。

そこに丁度、夕映を保護した楓が現われ、小太郎の相手を頼んで飛び立ったところにエヴァンジェリンの連絡を受けた。

エヴァンジェリンは確実にフェイトを仕留めるために刹那を囮にした作戦を立てた。刹那を囮にし、一撃で仕留める。ものの見事に嵌ったものだ。しかし、儀式には間に合わなかった。

「ほう……これは中々」

強大な力により、千草と木乃香の身体が重力から解放されて宙に浮き始める。復活の儀式が完了したのだ。

祭壇よりも先にある、湖の中に存在する大岩。注連縄が巻かれているそれは、太古の大鬼神が封印されているものだった。天ヶ崎千草は、木乃香の持つ膨大な魔力を用いて、それの封印を解いたのだった。

封印の祭壇から現れる、光に包まれた巨大な身体。まだ上半身しか出てきていないが、この時点で明日菜達が戦っている鬼達の何倍もの大きさがある。

前面には二本角の鬼の面、背面には一本角の鬼の面があり、全身は甲冑のような硬質の外殻で覆われているようだ。四本の腕のうち前方の二本を下ろし、後方の二本を天に掲げるその姿は見る者を圧倒している。

その名は『リョウメンスクナ』。

二面四手の巨躯の大鬼。千六百年前に打ち倒された、飛騨の大鬼神。まだ上半身しか大岩から現れていないが、それだけでも高さが三十メートル以上ある。

巨躯、巨大という言葉では足りまい。空高く聳え、山よりも広い。半身にてこれでは、完全に召喚されたら一体どうなってしまうのか。

漢字で書くと両面宿儺は上古、仁徳天皇の時代に飛騨に現れたとされる妖怪である。

その身体にはローマ神話のヤヌスのように頭の前後に顔が二つ付いており、おまけに腕が前後一対の四本、足も前後一対の四本あったとされる。手には弓矢、剣を持っている。動きは俊敏で怪力とされる。

『日本書紀』に拠ると、飛騨国に現れ、朝廷に背いて民衆を苦しめていたが、仁徳天皇６５年、朝廷が差し向けた武将・武振熊命により退治されたとされている。

そんな『両面宿儺』だが、飛騨国、美濃国では英雄、恩人と考えられ、信仰の対象となっているそうだ。飛騨国に仏教を伝えたとされており、『両面宿儺』を開基としている寺も存在する。

かなり強力な大妖怪である事は間違いないが、日本神話を代表する神妖の一柱と言っても過言ではあるまい。

だが、この地に封印されていたのはあくまで鬼神の分御霊。

分御霊とは、神道の用語で、本社の祭神を他所でも祀る際、その神の神霊を分かちたもののことである。分祀（ある神社に複数の祭神が祀られている場合に、そのうち一部の祭神のみを他所に移して祀ることを指す分遷の語義で使われる場合もある）ともいうが、分祀については分遷の意で使われることもある。

神道では、神霊は無限に分けることができ、分霊しても元の神霊の神威は損なわれず、分霊もまた本社の神霊と同じ働きをすると考えられている。

幾ら分御霊とは言え神の欠片、少なくとも人間では対応が難しい相手だ。嘗てはサウザントマスターが封印したが、少なくともこの場に彼に匹敵する魔力の持ち主はネギと木乃香しかおらず、ネギは本山で酔い潰れ、木乃香には技術力が足りていない。倒すどころか足止めも難しいと普通は思う。

事実、刹那はその存在を目の当たりにして、本能で悟った。その巨大さを。目の前に現れた存在の強大さを目の前に竦んだ。

「……」

鬼神の咆哮が夜の森に高々と木霊する一方、千草の顔には喜びどころか何の感情も浮かんでいない。

「桜咲刹那ッ！　近衛木乃香ごと始末してもいいのなら、今すぐ私たちがアレを片付けるぞ！！」

ここにいるのは最強種の一つ真祖（ハイライト・デイ・ウォーカー）の吸血鬼。幾ら英雄と言っても人間に出来たことが彼女に出来ない通りはない。

「はっ！　却下です、直ぐに私が助けますから待っていてください！！」

「なら急げ、私の気は短いぞ」

エヴァの焚きつけに、刹那は大急ぎで木乃香の下へ飛び立つ。

刹那は空を翔け、巨躯の鬼よりも高い位置で、一度空に体を固定した。そして、目視するは己が敵と守る対象。

「天ヶ崎千草！！　お嬢様を返してもらうぞ！！」

「ん、翼？　成程、ハーフやったって訳か」

刹那の激情とは逆に千草の感情は平坦だ。僅かに高い位置にいる刹那を見上げ、一目見て、フェイトと同じように相手の正体を見極めた。

刹那は千草の目を真正面から見てしまった。そこには喜・怒・哀・楽の感情が何も無い虚無。或いは諦めもあったのかもしれない。

幾ら『リョウメンスクナ』といえども、人が寝起きに頭が働かないように復活して直ぐには全力を発揮できない。そこに現われたのは最強種の一つ真祖の吸血鬼（ハイライト・デイ・ウォーカー）であり、英雄に比肩する力を持つエヴァンジェリン。

彼女の存在を知っていた千草にはこの後の展開がどうなるか、もはや自明の理であった。

刹那は千草の虚無に一瞬、引き込まれしまいそうになってしまうも自分がすべき事は変わりないと考え、思うままに翼持つ少女が空を走った。

「猿鬼、熊鬼。行き」

近すぎて鬼の力が使えないので呼び出したのは自分が最も慣れ親しんだ、最も信頼する二体の式神。しかし、主を護る為、或いは襲撃者たる刹那を倒す為、鋭い爪を振り上げるもその動きは初日よりも緩慢。不審に思うも、刹那は二体の式神を切り捨て、木乃香を救い出した。

雌雄は決した。勝ちを掴んだのは翼持つ少女。勝利を掴んだ証として少女が抱きかかえるは、囚われていた姫、近衛木乃香。それを見届けた千草は懐から一枚の符を取り出し、転移する。敗者を余所に、桜咲刹那は巨躯の鬼の腕でも届かぬ所へと最速で離脱した。

「お嬢様、お嬢様、ご無事ですか？」

刹那は横抱きに抱えた木乃香に呼びかける。口元に張られていた呪符を引き剥がし、短く呪文を唱えて木乃香を呼び掛け続けた。

戒めが解けたお陰か、やがて木乃香の瞳かゆっくりと開かれる。その瞳は寝起きのせいか、焦点が定まらず、まだ意識が朦朧としているのを窺わせた。

「う……ん？　ああ……せっちゃん。へへ……やっぱりまた助けに来てくれたー」

瞳の焦点も徐々に定まり、木乃香は小さく唸りながらその瞳に刹那の顔を映しこみ、ゆっくりと口を開く。刹那への深い信頼を感じさせる、声。それが刹那には堪らなく嬉しかった。

「お嬢様、どこか痛い所は？」

「え？　あ……あー。なんやあの人の言う通り気持ちええだけやったわ。はずかしー」

必死の形相で問い掛ける刹那に対し、木乃香は恥ずかしそうに顔を覆いつつ、顔を赤らめて恥ずかしがる。とくに異常がなさそうなのを見て刹那は今度は心から安堵する。

ふと、その時木乃香の視線が自分の顔より後ろにあることに気付き、顔色を蒼くする。

「せっちゃん、その羽は――？」

刹那の背から生えている白い翼。木乃香は、コレが自分達が空を飛んでる原因だと気付く。

「コレは……」

木乃香問いかけに自分が何であれ、悪く言う事はないと分かっている。それでも、翼については木乃香にとっても少なからず驚く事は違いなく、どう説明すればいいのかと、刹那は話を切りだせないでいた。そんな刹那を見て木乃香はクスリと笑って言った。

「ううん、キレイな羽やね。せっちゃん、天使みたいや」

「ありがとうございます、お嬢様」

その言葉を聞いた刹那は泣き笑いのような表情を浮かべ、刹那は自分の心が一気に軽くなるのを感じて木乃香の体を強く抱きしめた。

にっこり、と満面の笑みを浮かべる木乃香に、刹那は全て杞憂で何も悩む必要なんてなかったのだと思う。

何年もの間、心が離れていた二人の少女がまた再び心を通わせた、記念すべき瞬間だった。

「くくく……さて、久方ぶりに暴れさせてもらおうか！」

刹那達が十分に離れたのを確認して召喚途中で制御する者がいなくなり、暴れだした鬼神を前に不適な笑みを浮かべた最強の助っ人は、戦いの舞台へと上がった。

「マスター結界弾セットアップ。（やれ）了解」

後方の上空に、茶々丸が全長２メートル３０センチは、あろうかというアンチ・マテリアルライフルを大鬼神へと構えていた。そしてマスターであるエヴァンジェリンの号令と共に発射。

普通の人間が立ち撃ちしたのなら反動で肩が吹っ飛ぶが、茶々丸は反動をモノともしない。

放たれた弾丸によって拘束された大鬼神は逃れようともがき苦しんでいる。茶々丸が撃った弾丸が、ソレを引き起こしたのだ。

大き過ぎるので長時間拘束することはできない。だが、今はそれで十分。

「リク・ラク　ラ・ラック　ライラック　契約に従い　我に従え氷の女王！　来れ　とこしえのやみ！　えいえんのひょうが！！」

１５０フィート四方にも及ぶ広範囲完全殲滅呪文は科学でも未だ成しえない絶対零度。未だ完全に封印から抜け出せていないスクナでは避けることはできない。

スクナの足元に発生した氷は自然にはありえない速度で宿儺の足を始点とし、膝を伝い、あっというまに腰まで侵食する。

「全ての命ある者に等しき死を　其は安らぎ也」

外面は冷静だが、ここに来る前の出来事があったことに反発するように内面はこれまでにないハイテンションだ。テンションに比例するようにエヴァの両手に宿る魔力が氷の結晶となって次第に大きくなっていく。

「おわるせかい……フッ、砕けろ」

エヴァが指を鳴らすと同時に氷漬けになったスクナは体の各場所に罅が入り、断末魔も、派手な爆発も無く巨体がぼろぼろと崩れ落

ちる。それはある意味荘厳な風景だった。

「中々強かったぞ、鬼神よ。十五年ぶりの私の相手としては合格点だ」

マントを翻し、エヴァンジェリンはご満悦の笑みを浮かべて呟き、茶々丸と共に祭壇まで降りる。その後ろでは砕けたスクナの氷塊が次々と湖の底へと沈んでいった。

そんなエヴァンジェリンを吹き飛ばされた水面から僅かに顔を出したフェイトが遠くから見ていた。

「やはり、彼女は千草が言っていた吸血鬼（ハイ・ディライトウォーカー）の真祖。流石に分が悪い。今回は退こう」

千草がどこからか取り寄せた書類に書かれていた要注意人物のことを思い出し、彼我の戦力を計算して分が悪いことを認めた。

そうしてフェイトは水の転移魔法を使ってこの場から姿を消した。

違う場所でも狂乱は終わりを見せていた。

「ふむ。どうやら勝負あったみたいやな」

「あんたら勝ちや。どうする？　ねーちゃん」

妖怪たちは大鬼神が光の帯と共に消し飛ぶのを見て、事態の趨勢を知った。彼らは知性のない獣ではない。必要とあれば容赦はないが、力の振るう時を弁えている。そして退くときも知っている。彼らの数は当初の５００から、両手の指で数えられるほどにまで数を減らしていた。

玉藻一人が大部分刈り取ったのは余談だ。

「こっちも助っ人なんでな。そっちが退くなら戦る理由はない」

妖怪に問いかけられたガンスリンガー・龍宮真名はクルリと手に持つ拳銃を回す。彼女の体には何箇所か目立つ切り傷、裂傷があるがいずれも軽く、実質無傷に近い。

「ハァ……ハァ……私は、もう勘弁」

「もー終わりアルかー。暴れ足りないアルね。明日菜はちょっと貧弱アル」

「あんたが元気すぎるだけでしょうが」

疲れ果てた明日菜はもう疲労で立ってられないと濡れるのも構わずに腰を下ろし、反対に古菲はまだまだ暴れ足りないというように不満を口にするが、終局する事態を受け止めてもおり、だからこそ名残惜しむ。さっきまでの心踊る戦いの時間を。

「ほななー嬢ちゃん達」「なかなか楽しめたぞ大陸の拳法使い！」「さっきの嬢ちゃんにもよろしゅうなー」「久しぶりに愉快やったわ。今度、会った時は酒でも飲もう」「でも、金髪の着物ねーちゃんにはもう敵として会いたないわ」「「「「同感！！！！」」」」」

周囲を舞う桜の花弁に紛れる様に消えて霧になって行く妖怪達。この世界に喚ばれた目的は果たされた。彼らはただ『還る』、今までやられた妖怪も『還る』だけで、ならば楽しんだもの勝ちということでこの狂騒に呼ばれた一夜の客だったのだ。

一人（？）の鬼の金髪の着物ねーちゃん＝玉藻とは敵として会いたくない発言に全員が同意する仕草など先程まで敵だった者たちとは思えないシュールさだった。　まあ、それだけ恐ろしさが身に染みたということなのだろう。

だからこの騒ぎも彼らにとって一時の宴会みたいなものだった。どこまでも陽気な彼等の去り際に明日菜、真名、古菲も苦笑を浮べていた。

「ふ……私達はまだ未成年なんだがな」

「結構いい人（？）達だたアルね」

顔を合わせて笑いあう龍宮と古、明日菜は息を整えている。もう、この場には彼女たちしかしかいない。後には祭りの後のような寂しさが残った。

「あれ、玉藻さんは？」

「そういえばいないアル」

「さっきまでいたのにな」

何時の間にかいない玉藻にまず明日菜が気付き、真名と古菲も辺りを見渡すも姿がない。いないものは仕方ないので立ち上がった明日菜達は湖に向かう小道に一向かっていた。

ちなみに月詠は、誰もいなくなってから気付きましたとさ。

天ヶ崎千草は、祭壇の近くの森に転移してからは夜の森の闇の中を駆け、広場のように開けた場所でずっと天を仰いでいた。

長い事そうしていると近くで不自然に木の葉が舞った。千草が目を向けると、そこにはさっきまでいなかった一人の少年の姿。

「……アスカはん」

「……千草さん」

この戦いを演出した二人の出会い。これから本当の夜が幕を明ける。

第六十七話　修学旅行三日目と少年　７（後書き）

次回更新は『明日』の午前０時です。次回は欝展開、暗い、救われない、の三拍子でお届けします。

今日、修学旅行後の二話目が出来ました。休みの日の気が向いたときしか執筆しない筆者でした。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

第六十八話　修学旅行三日目と少年　8（前書き）

後書きで色々と書いてたらちょっと遅れました。申し訳有りません。

今週の原作ＮＡＲＵＴＯを見て「え？　仮面の男ってマダラじゃないの？」と本作設定との違いにどうしようかと困惑しています。

まあ、ぶっちゃけ本編に関係ないので独自設定にしてしまえばいいんですけど、どうしましょう？

今話は「麝展開、暗い、救われない」の三拍子でお届けします。

色々と張った伏線の回収。後の話の伏線を仕込みつつ、修学旅行編全１９話の第１６話目で三日目の八話目です。

文字数は１５０８５字と結構長いです。それではどうぞッ！！

第六十八話　修学旅行三日目と少年　8

天ヶ崎千草は自身の幼い頃に起きた大戦で両親を亡くし、それからはずっと1人ぼっちだった。両親を失くしてからは原因となった西洋魔術師を憎み、復讐する為に青春を犠牲にして力を求め続けた。

裏から身を引き、只の女として生きる道も確かにあった。そうすれば幾許かの幸せは手に入れる事ができただろう。

けれど、そうするには千草には陰陽師としての才が在り過ぎた。そして、何よりも彼女は両親が大好きだった自分が全てを忘れて生きる事を許せない。だから、がむしゃらに力を求め、その中で何度も転び、それでも這い上がり続けた。

力を求めれば求めるほど闇が迫り、深くなって千草の四肢に絡みついて飲み込んでいく。そして闇に飲まれ消えてしまう。強過ぎる思いが千草を狂わせたのか。思いに溺れて千草が助けを求めて伸ばした手を誰も掴まない。誰も掴めない。

そんな事を続けた彼女の瞳は何時からか暗く淀んでいく。過去の悲劇に囚われ、復讐を支えにした心は歪んでしまう。両親が死ななければ、又は傍に支えてくれる人が居たなら、彼女の心は歪まなかったろう。だが、千草が道を外そうとしているのを止めてくれる人は、誰も居なかった。

千草の環境は西洋魔術師を怨み易い状況だった。自分だけで無く周りも同じような思いを人間が多く、そして所属していた関西呪術協会の上層部にも何人もいたことが、それに拍車を掛ける。

本当はただ、自分が一人になった事を認めたく無かった。最初は両親の死の否定から始まった憎しみは、ズルズルと千草を堕としていく。

それが逆恨みだと気付くこともなく、ずっと夜のような闇の中をずっと駆け続ける。

だって、そうしなければ千草は一人で生きることができない。どんなものでも彼女には生きる目的が必要だ。ただ、悲しいことにそれが復讐だっただけ。

それでも憎しみに凝り固まった千草でもきっかけがなければ、きっと何もしなかった筈だ。それどころか、誰かが本当の意味で手を伸ばしてくれただけで救われただろう。

しかし、そんな機会はなく最後（ピース）の切欠が千草の歯止めを失わせる。

最後（ピース）の切欠は怨敵関東魔法協会がある麻帆良学園の修学旅行。それに付け加えられたような英雄の息子が運ぶ親書による和平。

修学旅行のついでに和平をするなんて許せなかった。それでは自分の両親の命は何だったのだ。確かに将来的には和平を結ぶのはいい事なのだろう。だが、まるで失ったモノに価値がないかのような事は許せなかった。

千草はただ東が憎かっただけ。だけど、事を起こす切欠がなければ憎しみを募らせても、昔の優しい思い出が拮抗して行動を起こすことはない。

きっかけは修学旅行。止めようと思えば止められた。だけど止め

られなかった。何時からか自身の意思ではなく、憎しみが先行して物事を考えるようになっていた。

利用されていようが別に構わない。憎き西洋魔術師に自分のこの思いを晴らせるなら何でも良い。

そう、どうしようもなく狂っていた。それも中途半端に。

過去を捨てて全てを賭けるには思い出は優しく、今を生きていくには辛すぎる。

『大戦』と呼ばれた戦争を治め、世界の危機を救った紅き翼アラルブラのリーダー。サウザンドマスターこと、ナギ・スプリングフィールド。その功績は、成る程千草をもってしても認めるところだ。事実、『大戦』時は、本当に世界が崩壊する危機に瀕していたらしい。

そんなナギを英雄と讃えている連中に、その英雄様が封印した大鬼神を差し向けてやれば、西洋魔術師はどんな顔で死んでいくのだろう。

もう一度封印してくれと、新たな英雄の登場を求め泣き叫びながら死ぬのか。それとも、ちゃんと消滅させなかった英雄に非難の言葉を浴びせ、憎しみの表情のまま死ぬのか。そんな事を考えて暗い愉悦に浸っていた。

計画の発動まで残り1ヶ月を切り、準備を勤しんでいた時にアスカと出会った。いきなり「初めまして、天ヶ崎千草さん」と声を掛けられた時は、心臓が止まるかと思った。そうなるのは当然だ。声を掛けてきた少年は千草が狙っているクラスの担任補佐だったのだ

から。

しかし、何故か、そう自分でも理由は判らないが初めて会った時から、アスカに何か通じるものを感じていた。

千草とアスカはある一点に限ってよく似ていた。癒しきれぬ悲しみを、失った苦しみを呪いに変えることでしか生きられなかったというその一点について。

だから両者は互いが分かる。どの道やらずにはこれ以上生きていけないことを。人は復讐と呼び、謀反と呼び、馬鹿げたことをと笑い、愚かだと罵るだろう。だが、どれも違う。これは必要な儀式であり証明だ。

同類相憐れむ、とでもいうべきか最初は探るように会話を交わしていたのに、気付けばお互いに驚くほど馬が合った。初対面は顔合わせに過ぎなかったが、二人はそれから会う度に色んな話をした。

千草は初めて式神を呼んだ時の話、依頼を受けた悪霊を退治にしにいった武勇談など。

アスカは世界中を旅をしていた時のこと、失敗したことや楽しかったことを面白おかしく。

お互いに話すネタの時系列に脈絡はない。ただ、思う様に自分を吐き出す。お互いに境遇に泣き、楽しかった事を笑い、理不尽に怒り、失ったものを思って哀れむ。

短ければ一時間もせず別れ、長ければ一日中一緒にいた。

千草はもしかしたら、苦しみを、悩みを誰かに聞いて欲しかったのかもしれない、と考えるようになる。「傷の舐めあい」そんな言葉が似合う関係でもアスカと一緒にいるのは居心地が良かった。

千草はアスカと会う様になってから「弟がいたらこんなんかなぁ」と思うようになる。そんな自分に驚き、悪くないと思う。

しかし、二人が関係を育むには時間が圧倒的に足りなかった。千草が貯め続けた憎しみは一ヶ月という僅かな時間では晴らされることはない。

そして――――――――――計画は実行された。

アスカと会ったことによって憎しみで眩んでいた目ははっきりとし、より怜悧に冷静に物事を見るようになり、幾つか計画の修正を行った。

初手は対象の３－Ａと一緒の新幹線に変装して客として乗り、車両に貼り付けていた式神の符を発動させる。

それ事態はせいぜいが宣戦布告ぐらいで余り意味はない。なのに一瞬とはいえ、簡単に親書を取れた事には逆に千草の方が驚いたぐらいだ。

直ぐアスカに取り返されたが、あれが期待の英雄の息子では西洋魔術師に未来はないのではないかと憎いはずの千草が心配に思ってしまった。

京都駅に到着した後は、先回りして事前に仕込んでいた罠を仕掛け、先にホテルに向かう。仕込んだ罠にはアスカ以外の人間にただ

のイタズラと思い込ませるのと夜のために一般人を寝かせておく、という理由があった。

対象の護衛にイタズラだと思い込ませて油断を誘い、一般人を寝かせておけば誘拐しやすくなる。

最後に時限式の符を浴場に張り、対象が来る時間に発動させれば今夜はもうないと考え易い。

そして見事、対象の誘拐は成功。その後の経過は大体予想通り。一般人らしき生徒と増援が来たのは予想外だったが、最低限の目標は達成した。

二日目は準備と向こうの戦力を考慮しての計画の変更に務める中、隠れ家でアスカからの連絡が届く。自分を助けようと、止めようとしてくれるアスカの気持ちは素直に嬉しい。だが、自分はもう止まることはできない。

三日目、班行動なのに対象の姿が無い。どうやらアスカに裏を掻かれたようだ。それでも止めるつもりは無い。そして別の作戦を実行して対象を誘拐し、リョウメンスクナの召喚に成功する。しかし、リョウメンスクナの召喚前に闇の福音が新入り――フェイトを弾き飛ばしたのを見て、計画の失敗を確信した。闇の福音はサウザンドマスタークラス、召喚が完遂していたら別だろうが、途中では勝ち目は薄い。

対象を奪還された段階で最後の一枚の転移魔法符で近くの森に転移し、リョウメンスクナが敗れるのを見届けてその場を去った。

対象に負担を掛けない様に５００もの鬼達の召喚。ほとんど時間

を空ける事無く鬼神の召喚を行った千草の心身は、今にも倒れて意識を失いそうな程の疲労の極地にある。ともすればその場に頽おれてしまいそうになる身体に鞭打って、千草は引き摺るようにして木々の合間を縫うようにして歩く。

やってきた場所は、辺りを覆い隠すようにして繁っている木々が開けた——有り体に言うならば一種の広場のような所だった。深い新緑の葉をつけた枝々が天を覆うようにしているお陰で昼ですら薄暗い周囲と違い、夜空を彩る宝石箱の中身を撒き散らしたような星々や月が煌々と輝く様を充分に見て取れる場所になっていた。

地上では周囲を遮るようにしている木々のおかげか、未だ冷たさを残す風は枝を微かに揺らし、葉を少しばかりざわめかせる程度にしかふいていない。が、高空では話が違うらしい。空の高みで吹き荒ぶ風が、夜空にたゆたう捉えどころのない雲たちを思うままに弄び、千切り、押し流している。そうして風に弄ばれる雲たちが、ときたま天然自然の広場に差し込むささやかな、陽光にはけして持ち得ぬ柔らかみと冷たさを同時に備えた月明かりや星明りに強弱をつけていた。

「……フゥ……」

木々に繁る青葉を揺らす季節から考えると聊か冷たすぎる風に、疲労の極地にある身体を一撫でされて、千草は呻きとも溜息ともつかぬものを口から漏らす。

じっとしていると倒れそうになるので空を見上げる。何時から月を好きになったのかは分からない。

気付いたのはこんな月の綺麗な夜だった。

アスカと一緒にいる時に、自分たちは何をするでもなく、月を見ていた。

冬だというのに、気温はそう低くはなかった。隠れ家の屋根の上は僅かに肌寒いだけで、月を肴にするにはいい夜だった。

「よく見とるけど、月が好きなんか？」

ふと、自分の横に腰掛けてアーティファクトもしていない素顔のアスカが、月夜に一緒にいる時はよく月を見ていることに気がついて尋ねた。

いまさら自分の存在に気がついたみたいに少し驚いた顔をしてこちらに顔を向けた。風もなく、虫の声もなく、辺りは静かだった。

「昔、辛かった時に見た月が本当に綺麗だったんだ」

その時のことを思い出したのか懐かしそうに笑って、遠い月を仰いだ。

どんな絶望の闇が深くても生きてさえいれば、太陽みたいに近づいたものを焼くこともなく、ただ上を見上げればそこには月がある。その光は暗き夜道の道標を照らす。躓き惑い彷徨う心の希望。

まるで、その姿がどれだけ手を伸ばしても届かない光を見ているようで――――――

「――――――」

それで、思い知った。

強いくせに、こんなにも弱い。

背筋を伸ばした姿は、誰の手も借りずに生きていける証だろう。それなのに手を伸ばせばすり抜けてしまいそうなほど儚い。

まるで、『どうして、僕はここにいるんだろう？』と迷った子供のような、決して届かぬ光へと手を伸ばす求道者ように見えた。

その強さを凄いと思った。その弱さを哀れと思った。

だけど、そんなどんな感情たちよりもアスカの表情が千草の心を揺さぶった。

この子の人生が楽しいことだけで埋められればいいのに、と子どもでも思わないことを思ってしまった。

こんなにも月を綺麗だと思った夜は、生まれて初めてかもしれない。こんな景色を、アスカと一緒に想い出の中に刻み込んでくれることが、たまらなく嬉しかった。

それからは夜に時間がある時は一人で何時も空を眺めていた。決めたことをやり通すために。

そんな事を考えながら千草はどれぐらいの間、空を見ていたのか分からない。

「……？」

ふと、近くで不自然に木の葉が舞い上がった。ある予感を感じてそちらに目を向けると、そこにはさっきまでいなかった、目立つ金髪以外は上から下までの夜の闇に沈みそうな漆黒で統一された服を着た少年――――アスカ・スプリングフィールドが立っていた。

「……アスカはん」

「……千草さん」

視線を交わす二人の間にあるのは複雑な感情。特に片方ができれば会いたくはないと思っているのなら仕方の無いことだろう。

千草は敵だったから、というのと自身が望んでいるもの故に気まずさを覚えていた。アスカの場合はある種の諦観というべきか、その明晰過ぎる頭脳は千草が何を望んでいるのかに辿り付いてしまったが故に。

「中々、面白かったで。特に親書をダミーに摩り替えておくとかな」

最初に言葉を発したのは千草。飄々としているようで、疲れを隠せておらず立っているのが辛いと、見ているアスカでも分かる。

しかし、それを制止したりはしない。いや、どうしたらいいかアスカにも分かっていないのだ。

「保険ですよ。何かと不安が多かったので」

「そうか、実の兄を信用できないとはクックック……」

初日の新幹線での事もあり、不安に思ったアスカは、外面はそっ

くりに似せて作っておいた偽の親書を玉藻に頼んで摩り替えてもらった。

摩り替えた方法は至って簡単。見回りから戻ってきたネギに、玉藻がわざとぶつかってスリよろしく摩り替えただけ。そんなことは露知らず、ネギは生徒の入浴時間が終わったので露天風呂に入って行った。

木乃香を誘拐したと同時に露天風呂に入っていたネギの服から式神があっさりと親書を盗って行った。それを感知したアスカがまた偽物を入れておいたので、ネギは全く気付いていない。

実はネギが詠春に渡したのは偽者の方。だから、渡された詠春は固まったというわけだ。単純に忙しさにかまけてネギが渡す前に本物と入れ替えるのを忘れていたと知ったら彼らはどう思うだろうか。

あくまでネギが親書を西の長に渡した、という事実が大切なわけで親書自体には大したことは書かれていない。せいぜいが長同士の話し合いレベルでしかない。

本物も明日、アスカが渡してしまえば問題はない。

「千草さん。もう、終わりにしませんか？」

未だに笑ったままの千草にアスカは終結の提案をする。その提案は関西呪術協会の反乱が失敗に終わった事を考えれば妥当なもの。

しかし、返って来たものは、首を横に振るという行為。つまり提案の拒否ということだ。

普通に考えてみれば魔法協会の特使に対する数々の妨害行為に始まり、一般人がいるにも関わらず大規模な騒動を起こしては秘匿義務を怠り、更には本山を襲撃して人員を戦闘不能状態まで追い込み、あまつさえ関西呪術協会の長の娘を誘拐する。

呪術協会に属する身として、千草は余りにも協会に刃向かいすぎた。罪状が多すぎるのである。温厚な近衛詠春が西の長を務めるとはいえ、他の幹部が黙っているはずはない。問答無用で主犯の千草の処罰は決まるだろう。

小太郎の場合は、まだ幼く更生する余地はあるだろうという判断が働いて観察処分がいいところ。

上の人間にも支援してもらったので、捕まれば千草は口封じに過激派に殺される可能性は高い。組織に属してるからといって、高位の者達のスケジュールを全部分かる訳が無い。

今回の事は裏から糸を引いた人間からしたら体の良い駒。上手く行けば自分達は今の長を蹴落として関西呪術協会を牛耳る。上手く行かなければ千草の口からイロイロと出る前に切り捨てて口封じが落ち。シンプルだけど、権力を持ってる人間がやれば恐い事だ。

故に、捕まればどんな経緯を辿ろうが必ず千草は存在を抹消される。

例え裏で糸を引いていた人間を炙(あぶ)り出しても、結果は大きく変わらない。後ろで糸を引いていようと彼女がやった行為には違いないのだから。

「捕まった後の事を考えているなら安心してください。関西呪術協

会の弱みは握って有りますから」

そう言いながら手を後ろに回したと思ったら、何処からか取り出した書類の束を出す。

アスカはエヴァンジェリン達を見送った後、結界を張って影分身を出して一人で関西呪術協会を目指す。残った影分身は瀬流彦にエヴァンジェリン達、手練が出払った事を伝え、他の戦力が向けられる可能性があるので美空も戦力に組み込んで備える。美空本人は戦力とされるのを嫌がっているのは分かっていたので万が一の場合、一般人の防衛と撹乱が役目ということで納得してもらった。元々、戦えるのは瀬流彦しかいないので順当ではある。

勿論、いなくなった真名達の言い訳も万全である。

影分身に後を任せた本体は、全員が石化している（ネギ&カモ以外）関西呪術協会に到着した後は只管家捜し。暢気に寝ているカモネギコンビに呆れ、遠目にリョウメンスクナが召喚される光が見えても気にしない。外部にバレないように接しなければ分からないほど薄い結界を張り、影分身どころか全能力を活用して後々、交渉しやすいように関西呪術協会の弱みを捜す。

膨大なエヴァンジェリンの魔力と、その少し後に予想通りリョウメンスクナが消滅していくのを感じた時には既に十分に集める事ができた。

事が終わって戻ってくる可能性が高いので、そろそろ旅館に戻ろうかと感じていたその時、何かの予感を感じたとでもいうべきか、ふらふらと森に入って一キロ以上離れた場所で空を見て立ち呆けている千草を見つけ、【瞬身の術】でやってきたというわけだ。

「これがあれば交渉如何によっては千草さんを無罪にすることも可能です。それが無理でも逃がす手段はありますから」

事件前の盟約でアスカは自分が表だって動くことが出来なかった。それも当然で千草はある程度、アスカの実力を知っている。

行動に起こそうとした彼女が『決して人死を出さぬこと』を条件としてアスカの動きを牽制するのは必然であった。アスカが最初から表だって動ければ恐らく初日の時点で決着は着いていただろうから彼女の危惧は正しかったという事だろう。

表立った行動を封じられた彼が取れた行動はかなりの制限がかけられた。過去の大半の事例においてここまでもどかしかったことはない。

状況によって彼女が行動を起こすことを牽制して止めさせるか、終わった後のことを考えるかの二択しかない。

推移した現状において最早行動の制止は意味をなさず、なれば事件後の展開を正確にトレースしたアスカは必要になる事を考えて関西呪術協会を家捜ししたというわけだ。

弱みはかなりの物でアスカの交渉能力ならば十分に千草を無罪にすることは可能。それが無理だとしても身柄を引き渡させることができると見込んでいる。

それに次元転移を使えば他の世界に逃がすこともできる。アスカならば手段はいくらでもあった。彼女にそれを受け入れる余地があればの話だが――――

「そんなん余計なお世話や。うちは止まれん。邪魔しんといて」

しかし、千草はアスカの提案を一言で切って捨てる。ここで止めるつもりはないと、懐から二枚の呪符を取り出してアスカを威嚇する。

単純な能力で言えば、千草はどちらと尋ねるまでもなく優秀である。でなければ彼女に湖に眠る鬼神の封印を解くことが出来る筈が無い。

かつて18年前に一度復活した際にも、あのサウザンド・マスターと現、長である近衛詠春という、世界最高の術者が二人がかりで再封印を施している。

例えどれほどの魔力があろうと、凡百の術者に解けるような封印ではない。それが可能だというこの事実だけで、彼女の術者としての力量の高さを証明しているといっていい。

「千草さん!!」

「諄(くど)いで！　どうやっても、うちは止まらん。それを止めたかったら、どうしたらええか分かってるやろ?」

「くっ!」

アスカの叫びは千草には届かない。

そう――――結末など始めから決まっていたのだから。

千草の言葉にアスカは悔しげに、悲しげに顔を歪めながら僅かに腰を落とすと、素早く両手を組むように短く印を切った。その途端、アスカの全身から、凄まじいまでの量のチャクラが右手に向って集中していくのが分かる。印を結び終えたアスカは、鉤爪のように指先を曲げた右手の手首を左手で掴む。

左手を添えられたアスカの右手が、空気の引き裂ける音を発した。それは、目に見えるまでに高められ、一点に集約されたチャクラそのものだった。目ではっきりと見えるほどに高まったチャクラのためにぼうっと光り始め、さらに小さな稲光のような閃光が、周囲に纏わりつくように広がっていく。「チッチッ、チリチリ」とか細い、鳥のような音を周囲に響かせながら。

チャクラが放つ「チッチッ」という音が、鳥の声に例えられたこの術の名を【千鳥】と言う。

「猿鬼、熊鬼！！」

「――――――――――ッ！」

千草は呪符から式神二体を召喚して臨戦態勢をとるとアスカは少しの間、まるで決意を固めるように目を閉じてまた開く。

チリチリと空気の弾ける音を響かせながら、チャクラの宿った右手を構え、アスカが疾走する。後方に引いて構えた右手には、いまやはっきりと輝いて見える高密度のチャクラが雷光を発していた。

それと同時に猿鬼や熊鬼も得物や腕を振り被りながら駆け出す。

しかし、肉体活性による圧倒的なスピードと如何なる刃物より鋭

利な刃と化したアスカの右手によってさしたる抵抗もできず、式神二体は拍子抜けするほど呆気なく貫かれた。

式神が消滅しても千草は、慌てることもなく突っ込んで来るアスカの雷によって光る手を見返すだけ。無数の鳥の囀(さえず)りにも似たギッギッ……という音と共に、輝く手が突き出てくる。

その千草の様子を見たアスカは一瞬、逡巡して突き出した右手の軌道を変えるも、逡巡はあまりにも遅すぎた。加速のついた攻撃は止められず、肉に食い込み、骨を切り裂き、そして突き抜ける感触があった。

「ガハッ！！」

心臓に向っていたアスカの右手は狙いを外れ、千草の右胸を貫いた。アスカは咄嗟に外そうとしたが、右手は外から内へ向っていたので内側にしか逸らせず、千草の右肩に近い胸を貫く結果となった。

右肺は完全に潰れ、千草の口から大量の血が吐き出される。鮮血が飛び散り、千草から溢れた真紅の液体が巫女装束の白い上衣を染めていく。

アスカは貫いた張本人とは思えぬ程に、慌てて右手を抜いて崩れ落ちる千草の体を抱えて座る。

「これでお仕舞いどすか……ゲホッ！！　ゴホッ！！」

咳き込む音と共に溢れかえる真紅。堰を隠すように口元を抑えるが、それで押さえられるわけでもなく荒い息遣いと、溢れ出る水音。

だが、彼女の表情、瞳は変わらない。その顔を彩るすべての表情が、今まで通り鮮烈な色で飾る。濁った瞳の奥も決して光を失わない。

思い出されるのは、どんな障害に阻まれようとも家族でもない少女を必死に助けようとしていた敵対者達。そして生まれつき強大な魔力を持っていながら裏の事を全く知らず、汚れた事を教えられずに育った少女……。

何故、家族でもない他者のためにあそこまでやる事ができる。何故、あれだけの力を持ちながら汚れずに生きてくる事が許された。

何故、あの頃の自分にはあのような他者がいなかった。もしいたら……両親が死んでも全てを失う事は無かったかもしれない。そして今、自分を抱えてくれているアスカともっと早く出会えなかったのだろうか。

両親は間違いなく自分の幸せを望んでくれるだろう。あの優しかった両親が無関係な少女を巻き込み、他人を傷つけ、鬼神を復活させて混乱を引き起こすことなどを望むはずがない。

分かっている。分かっていた。復讐など、両親が望んでいないだろうことは。だが、それでも千草はこの道を選んだ。

千草はアスカと出会ってから何時からか計画の実行が怖くなって、もっと今の時間が長く続いて欲しいと願うようになっていた。アスカと絆を深めた事が結果的に、両親がいた頃の暖かさを思い出してしまったのだ。

力を闇を、それが千草の求めた物だった筈。そう考えていたのに、

自分は一体何に復讐したかったのか分からなくなっていた。

ある意味、皮肉な話でもある。復讐の対象として尤も分かりやすかったサウザンドマスター”ナギ・スプリングフィールド”。その息子に共感を得て、打ち解けたのだ。これを皮肉と言わず何と言う。

元々、非情に徹するには、天ヶ埼千草という人間は優し過ぎた。そして戦いには向いていなかった。全く持って向いていなかった。

幾ら非情を装ってみせても、敵が子供であるというただそれだけの理由で、内心では傷つけまいと必死になっている気の優しさ。戦闘に向いた式神など他に幾らでもいるというのに、両親が遺したぬいぐるみに式を括ったあのファンシーな熊と猿を使い続けるその心。彼女が最後に頼るのは何時だってあの二体だ。そんな彼女が、どうして戦いに向いていると言えるだろうか。

そして今までの事を振り返って気付いてしまった。気付いてしまえば復讐に生きてきた彼女には、友も大切と呼べる人も誰もいなく、利用されるか利用するような関係の人間しか傍にいなかった。本当に欲しかったものは何も彼女の下には残ってはいなかったのだ。

妄執に取り付かれて狂っていた。憎悪に踊らされて狂っていた。だから、疲れたと思ってしまった。何にも囚われずに軽くなりたい。何にも縛られずに歩きたい。何にも寄せられずに許したい。

自分はアスカに十分に救われた。もう終わりにしてもいい。

依頼人には別の意図もあったようだが、自身の西洋魔術師への復讐、そして大戦を忘れようとする協会へ警鐘が千草の計画の目的だ。そこにもう一つ個人的な目的もある。

残酷なようでも、自身の願いを阻むだろうアスカにどうしても自分の事を覚えていて欲しかった。

始めから勝つ気が無いというならば、確かにその通りなのかもしれない。

千草にとっての本当の目的とは、関西呪術協会を支配することでも関東魔法協会を滅ぼすことでもなく、それらはいわば手段でしかない。彼女の真なる目的は――――――アスカの手にかかって死ぬこと。

たとえ負けようが別に構わない。ただ、自分自身の想いに逆らうようなことはできなかった。たとえ目先の目的を果たしたとしても、そのことで負い目を残すようであれば、全てを終えたその先にまだ救われないものを残すことになるからだ。

「今、治療を……！」

「ええんや、これで」

血の気を失い、真っ青になっていた唇を染める鮮血にアスカは慌てて治療しようと患部に手を伸ばすも千草が掠れたような、濁ったような声と共に途中で掴んで阻む。

今にも存在さえ掻き消えそうなほど痛々しいのに、千草の存在はアスカには余りにも大きく見える。

『戦い』は決して二人の勝者は作らない。たとえ敗者が二人出ようと、その逆はない。片方が生きれば片方が死ぬ。片方が叶えば片

方は叶わぬ。片方の夢が続けば片方の夢は終わる。それこそが戦うということ。

そしてこの場における勝者はアスカ、敗者は千草。なのに千草が纏う覇気は敗者の者では無い。

「でも……！！」

「これがうちの望んだ結果や。助ける必要はない」

千草の視線は夢見のように宙を彷徨い、口元に半笑いのような曖昧な笑みを浮かべて喋るたびに口から一滴、一滴と血が落ちて巫女装束を紅く染めていく。

それを成した少年は、微々たる物でも血を止めるために傷口を抑えて泣きそうな顔をする。

「嫌な役目押し付けてごめんなぁ……ゴホッ！！」

言葉の途中で千草の口を塞ぐように溢れる鮮血。それを気にするでもなく千草は双眸から一筋の涙を零しながら続ける。

それは自分を抱いているアスカに向けたものであり、記憶の中ではもう、その顔すら思い出すことが出来なくなりつつある自分の大事な人たちに詫びの言葉でもあった。

失われた血液と比例するように霞む目は、千草に失われた血の量と反比例して命が減っていくような感覚を与える。

「ほんま、ごめんなぁ」

「謝るぐらいなら生きてください！　そっちの方が１００倍嬉しいですよ！！」

もう一度詫びの言葉を口にした千草に、アスカが必死な口調で声がかかる。

修学旅行が始まる直前に会った時、千草に退廃的ともいえる感じを覚えていた。似たような雰囲気の人間を以前に見たことがあるので、こういう結果になるだろうと薄々、予測していた。

手紙等の消極的な止め方はしていたが、全力で止めることはできなかった。それは自分が復讐を止められようと決して止めるつもりはないから。自分は止めるつもりはないのに人に言える資格はないと考えていた。

だから、終わらせるつもりで【千鳥】を使った。しかし、実際にその時になって、何故もっと止めなかったのか、もっと致死性のない術でも良かったではないかと後悔している。

結局、アスカの覚悟なんてその程度しかなかった。決意はあった……と、断言するには、その覚悟は虚ろに脆すぎた。

「ふふ、そうか……」

アスカの常ならぬ激昂に一瞬呆然とした千草は貫かれた胸が痛くても、ここまで思ってくれることに嬉しさから笑みが零れ落ちる。

違う出会い方をしていれば、もっと早く出会えたら、立場が違えば……こんな事にはならなかっただろう。だが、もはやｉｆ（もし）

はない。

これが結果であり、結末である。こうならなければ何れ協会内で殺されていたのだから、この結果に後悔していない。寧ろ、もっとも親しい者の腕の中で死ねるのだ。終わり方としては十分に上等なものだと血を失い過ぎて薄れてきた意識の中で千草には思える。

「うちの……ことで泣かんといてや」

「だって……」

アスカを知るものがこの場にいたら驚愕するだろう。普段は大人びているアスカが年相応の子供のように駄々を捏ねているのだから。

ポロポロと涙を流して千草を強く抱きしめる。そんなアスカの頬に千草の震える左手が触れる。

「これから先……どんなことがあっても……迷わず進むんやで……」

奇しくも千草の言葉は神父の末期の言葉と似ていた。

アスカの脳裏にフラッシュバックするように当時の光景が頭に浮かぶ。

「分かった。分かったから、千草さん！！」

言葉と共にどんどん千草の目から光が薄れていき、言葉が途切れ途切れになっていく。

また自分の前から大切な人がいなくなる。その恐怖から引き止めるようとアスカが声を掛けるも、千草は壊れた笛のような音が空気を揺らして呼吸を繰り返すだけ。

「アスカはんなら……それができるから……」

アスカの言葉を聞こえていないかのように言葉を繰り出す千草を前に、アスカは自身が出来る事はもはやなにもなく、最後を看取ることしか出来ないことを悟った。悟らざるをえなかった。

「……くっ！　大丈夫。僕は大丈夫だから――――もう休んでもいいんだよ」

悟った現実を前にアスカは零れ落ちそうになる涙を堪えた。何故なら千草に心配をかけたくなかったから、安らかに眠ってほしかったから、そのために泣くことはできない。虚勢であろうとも通すべきものがある。

かなりの血が流れ、体の感覚が薄れてきた千草の耳に、その秋の落日を思わせるような穏やかな言葉ははっきりと聞こえた。

「そう……か……ウチ……は……もう、眠っ……て……も……ええ……んやな……」

彼女は薄れてきた意識の中で過去から、縛られ続けた思いから解放され、薄く笑みを浮かべて静かに目を細めるようにして頷いた。

他の誰にも聴こえない。傍にいたアスカの耳にだけ辛うじて聴こえた言葉。本当に安心したように言葉を呟く。

それが本当に最期だった。アスカの頬に添えられていた千草の左手が離れて地に落ちる。彼女の体中から力が抜けたのが、アスカには分かった。

戦争によって生まれた歪みに翻弄され続けた天ヶ崎千草は、アスカの腕の中で眠るように息を引き取った。

その顔には、苦悶の表情は無く笑みを浮かべ、どこまでも穏やかで幸せそうだった。彼女は報われた、とアスカはそう信じる。それでも――――――。

「今だけは、今だけは泣いてもいいよね？」

呟いた瞬間、心が真っ白になった。

忍耐という名の鋼で編まれた檻の中に押さえ込んでいた激情が虚空に消えるシャボン玉の様にあっさりと弾けていく。

それは嵐の前の静けさの様な刹那の空白。

ゆっくりと白い思考の中にゆっくりと染み渡る哀惜が、感情を激しく揺さぶりながらアスカの胸に溢れ、自責、呵責、喪失感、怒り、やるせなさ、悔恨、その全てが激しく渦巻いていく。

真の知恵、真のアイデアとは、複数の問題を一挙に解決に導くものだという。

あちらを立てればこちらが立たずという状況に置かれた時、何らかの犠牲を伴う決断を下すのは勇気ある決断と評されることもある

が実際には知恵のないやり方だ。

何かを犠牲にして問題を解決するという選択を繰り返しているうちに、犠牲を払うことが当然になってしまい、それ以外の道を模索することを忘れてしまう。

これは一般的ではないがアスカ自身のことでもある。

つまり『自分が動けば解決すること』については、招かれる結果を考えずにそれを選択してしまう。自分だけが背負うリスクについては危険を度外視する思考が染み付いているのだ。むしろ自分がリスクを負うという犠牲を払うことで責任を果たしたと思い込みたいだけなのかもしれない。

これは本当の知恵からは程遠い。第三の選択を放棄した人間の判断は、それが英断に見えても多くは過ちであり、結果的には人を幸福にしないものだ。

今回のように制約があるにしてもだ。

自分で戦えば、何よりも強くなれば、誰よりも頭が良くなれば全てが解決する。そんなものは所詮、幻想に過ぎない。

ちっぽけな拳で掴めるものなど……所詮はその程度。足掻いて足掻き抜いても、己の力で掴めたものなど、如何程のものであったか。

アスカは誰よりも強くなりたかった。傷つけられないように。傷つけないように。大切な何かを守るために、この二本の足だけでしっかりと歩いていけるように。

しかし、強いって何なんだろうか。体は幾ら鍛えても――――――ある時は未熟で、またある時は病気や老いで、その人が真に”強い”と言えるのはほんの僅か。もしかすると一生の内、ほんの数秒間だけかもしれない。

精神の強さも、また同じ。心や体の強硬さは、アスカの求める「答え」ではない。

自身が神様でないことなど重々承知している。苦しんでいる者を助ける方法なんて、そう幾つも知っているわけじゃない。

そして、苦しんでいた彼女の心を救うことはできても、命を助ける事ができなかっただけ。人によっては復讐に沈んだ彼女の心を救うことができただけでも十分と言うかもしれない。だけど、生きていて欲しかった。笑って欲しかった。幸せになって欲しかった。

「……うっ……ぐすっ……ふっ……ひっく……う……えっ……くっ――――」

思い出があった。ちゃんと、今でも生きている温かさがあった。忘れようのない、彼女の体温が直ぐ近くにあってくれた。

生気を失い、どんどん冷たくなっていく千草の体の熱を少しでも留めるように強く、強く抱きしめる。誰にも奪わせぬように抱きしめながら大粒の涙を零し、誰にも聞かれないように声を押し殺して嗚咽を漏らす。

喪ったものに見合う幸せを、一生涯求め続ける、ツケは溜まっていく一方で、何時かは動けなくなるのは目に見えている。

それでも――――みっともなく、滑稽で無価値なまま、奪い続けた責任を果たしてみせる。幸福が何処にあるのかは判らない。ただ、終わりが見えなくても、諦めることだけはしないと永遠に眠る彼女に誓った。

月という気紛れな演出家が作る照明のもと、親を求めて彷徨う幼子のような静かな嗚咽が、辺りのひっそりとした夜気に溶け込むようにして響いていく。

何時までそうしていただろうか。既にアスカが接触していた部分以外、千草の体が冷たくなるほどの時間は経過していた。

「……」

千草を抱きしめて動かないアスカの後ろに戦闘を終わらせた玉藻が何時の間にか立っていたが、声は掛けない。

アスカには死んだ者を蘇らせる【外道輪廻天生の術】は使えない。術者の全チャクラを媒介として、対象者に生命力を分け与える転生忍術【穢土転生】も同じく使えない。玉藻でも死んだ者を生き返らせる術は使えない。

アスカは玉藻に言葉を返さずに千草を、一度地面に下ろして傷を治療する。まだ微かに残った生命の息吹があるからこそ傷の治療も可能だ。と、いっても既に千草は息を引き取っており、文字通り傷を治すだけ。

何故、死んでいるのに傷を治すのかというと女性なら最後まで綺麗なままでいたいだろうと配慮からだ。

アスカの治療の腕もあって傷は元通り、痕もなく綺麗なものになる。治った痕を一度撫でて服を綺麗に整え、両手を持って胸の前で組み合わせ、最後に愛し気に千草の頬を撫でて動作とは反対に狂気に染まった目を上げ、この結末に至るしかなかった元凶を求めて立ち上がった。

アスカの中で、ざらりとした何かが、猛然と膨れ上がっていく。それはアスカ自身の精神を食い尽くすかと思えるほどの、ドス黒く、ドロドロとした感覚を放つものだったが、それを敢えて抑えるつもりはなかった。

それが例え八つ当たりにしか過ぎないものだと分かっていても。

「玉藻。彼女を頼む」

「行くのか？」

千草の事を任せられた玉藻は、背を向けたアスカに問いかけながらも返事は期待していない。事実、アスカは言葉を返す事無く、舞い上がる木の葉と共に姿を消した。

玉藻はそれを見届け、地に寝かされている千草の体を抱え上げ、同じように姿を消す。

誰もいなくなった森に冷たい風が吹き、葉が擦れて音を立てる。それはまるで森が泣いているようだった。

第六十八話　修学旅行三日目と少年　8（後書き）

さて、【第四十一話　期末試験後の少年】から散りばめた伏線の回収です。実は主人公はこの時点でこの結末を予想していました。

主人公が千草と出会ったのは実は一、二ヶ月しか経っていません。リインフォースが仲間に加わったことで内面のフォローを任せたことで離れても大丈夫な玉藻が主人公のトラブル体質のことを考えて事前に調べたことから?がってきます。

しかし、吸血鬼事件でリインフォースに異常が出てきたことから調査を途中で中断しています。もしかして吸血鬼事件でネギが暴走しなければ、そもそも修学旅行での事件が起きなかった可能性もあったりします。間接的に足を引っ張っているのかな?

作中であるように、主人公が表だって動けなかったのは『決して人死を出さぬこと』を条件として牽制した千草の策略です。理由は作中参照。

千草はもしかしたら主人公が辿ったかもしれない可能性です。玉藻というパートナーがおらず、神父や剣星という導いてくれる師もおらずに復讐に狂った末に救われてしまった（誤字にあらず）結果です。

復讐が全てであり、それを成せない空虚な存在。自分が生きていた存在を愛しきものに刻むことが望んだ結末です。第一目標は勿論、復讐です。

でも、心のどこかでこの結末を望んだ部分がありました。

主人公もそれを理解した上で千草を殺すことで救おうと覚悟していましたが、もしかしたら初恋かもしれない人を殺すことなど決意できるはずもなく、後悔に塗れています。

千草の死は主人公に大きな傷を残し、これを切欠にして後の物語に大きく影響して行きます。死には引き摺られませんが別の物に引き摺られます。

作中に出てきた主人公の【月】に関するエピソードはまた今後に。キーワードは「異常な力で人殺しをして果たしてその力を受け入れられるのか？」です。

次回更新は『明々後日』の午前０時です（木曜日と金曜日の間）。次回は今話よりも更に欝展開、暗い、救われない、残酷描写あり、と駄目駄目な方向へと進んでいます。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

現在、折角機能があるので章分けをしようかなと考えています。

大体、序盤から原作開始までの【プロローグ前編　九尾は物語を外れた（ＮＡＲＵＴＯ）】～【第三十話　戦力評価とお風呂と少年】。

次が原作開始から魔法世界編まで。

最後に魔法世界編と。

最初が、成長編とか立身編。次が模索編。最後が革命編？

筆者が考えるとなにか変なんですよね。どなたかいい案はないでしょうか？

第六十九話　　修学旅行三日目と少年　９（前書き）

前話の更新予告を間違ってました。前回更新日の午前二時三十分は修正しましたけど確認できなかった人は申し訳有りませんでした。

今話は前話よりも更に今話よりも「欝展開、暗い、救われない、残酷描写あり」でお送りします。

心の準備をしてから見る事をお奨めします。

修学旅行編全１９話の第１７話目で三日目の最終です。

文字数は１１３９４字です。それではどうぞッ！！

第六十九話　修学旅行三日目と少年　9

関西呪術協会の総本山からそう離れていないとある屋敷では混乱が起きていた。

「どうだ！？　」

「駄目です！　完全に外部と空間が隔離されています！　如何なる手段を使っても外に出れませんし、連絡も取れません！　！　」

「馬鹿な……そこまでの結界なら基点の一つや二つの穴はあって当然だろう！！」

「げ、現在のところ基点自体が見つかっておりません！　基点を探すにはもっと時間を掛けるしか……」

「くそったれ！　！　」

部屋の中で、一際大きく叫んでいた男が忌々しいとばかりに歯を食い縛って机に自身の拳を叩きつける。

つい数分前までは酒を飲んで思い思いの笑い声が響いていた筈の広間。しかし、今は幾人もの人間が慌しく行き交うようになったのにはとある理由がある。

先程、机に拳を叩きつけた男は天ヶ崎千草に支援しており、トカゲの尻尾切りの如く親書が長の下に届く前に事前に協会に情報をリークしていた。

それほど支援に力を入れていたわけでも無いので、さっさと見切りをつけて最初から千草とは関係ないことにして、裏切り者を見つけたということで功を得ようとしていたのだ。

その前祝いにと同じように支援をしていた者達を集めて酒宴を上げていた。

しかし、宴も盛り上がってきた頃に突然、外部と空間を隔離された。救援を求めるために連絡を取ったり、外に出ようとするもどちらも果たせていない。

平常時なら部屋の中にいる人間の数人が男に視線を向けて行動を止めるのだろうが、混乱は広がるばかりで落ち着きが無い。男が必死で打開策を考えている中、そこでいきなり屋敷中の明りが突然、落ちた。

「珍しい、停電か？」

座っていた男が驚いて疑問符を上げると同時に何かが暗闇の中で閃き、辺りに水っぽいものが巻き散らされる。

「あ……」

「何だ！　何があった！？」

誰かが消えそうな呟きを発した後に、ドスンと人が倒れるような音と共に同じ現象が次々と相次ぐ。

何人もの手練がいるのに何かをしたと思われる下手人の気配一つ無い。何かが可笑しいと気付いた者達が次々に符を取り出し、倒れ

る音が響いた場所に幾つ物の呪が放たれる。

「ひ――――――っ！」

炎の呪があったのか、僅かの間だけ灯されたものを見て誰かが喉の奥で悲鳴を上げる。そこには、連絡が来るまで共に酒を飲んでいた術者数人が首を掻き切られ、血を流して死んでいた。

先程、自分達に掛かった水っぽいものが血であることに気付き、既に実戦から離れて久しい年配の者や死体を見たことが無い新人数人がパニックを引き起こした。

パニックを引き起こした術者たちは見境なく呪を放ち、パニックは起こさなかったが意識に空白が出来て無防備に立っていた者や運悪く流れ弾に当たった者が絶叫を上げて次々と死んでいく。

その間にも正体不明の何者かによって命を刈られ、広間にいる人間がどんどん減っていく。

その中で関西呪術協会の重鎮でこの酒宴の纏め役である男の護衛であり、何れも精鋭の呼び名を拝してはいる術者達は、男を中心に置いて守ろうと背中を向けて円陣を組んだ。

普通の相手ならこれで十分だったが今回は相手が悪すぎた。男の護衛は次々とその数を減らしていき、遂には最後の一人にまで減ってしまった。

「イヤアアアアアア！！」

護衛の最後の一人、神鳴流の末席に連なる男は気配一つ無い下手

人を燻り出すために、このままでは埒が明かないと考えて持っている大太刀に気を注ぎ込む。それによって神鳴流特有の雷が辺りに迸り、そうすることで辺りが明るくなりかけた瞬間。

「がッ！――――ヒュ――――」

神鳴流の男の視界は、喉仏に衝撃を受けて猛烈な勢いで後ろに流れていく。男は部屋の障子を突き破り、外に吹き飛ばされた。その首には忍者が使うようなクナイが突き刺さっており、男の意識は霞んだ声と共に暗闇に沈んだ。

男は不思議そうな顔をして死んでおり、自分がどうやって殺されたかに気付くことはなかった。

そして障子が破られたことで、結界の影響か色の異なる月の光が部屋に入り込む。

「こ、こん、な――ば、馬鹿な……ぁあぁッ！？」

月の光で照らされた広間を見た男が信じられないと、悲鳴に似た声を上げる。

ほんの一時間前まで彼らの中にあったのは、この事件が終わったあと手に入る自分達の新しい地位と権威の分割の落としどころだけだった。

長年に亘る東西の緊張状態は西の術者達を好戦的にさせるのに充分で、表立っての反抗はなくなったがその分、表に出ない部分の根はどんどん深くなった。

そこに湧いた今回の事件、鬱々（うつうつ）としながら行動できなかった人間達がそれに目を付けるのも仕方が無いことだろう。だが、彼らの重い腰はこの好機を見て尚、積極的に動こうとはしなかった。

彼らにとっては幸いなことに天ヶ崎千草は以前の大戦の頃に両親を共に亡くしており、その戦争開始の責任の一端を担った西日本魔法協会支部を転覆させて復讐をするという誰にとっても分かりやすい動機を持っており、扱いやすい人間だった。

成功しようが、失敗しようが自分に利がある。成功すれば利用し、失敗すれば切捨てるだけの存在。まさか千草を利用した事が自分の首を絞める結果になったことに男は気付けない。

「ば――ばけ、も――」

男は一歩足りとも動けず、広間の死体達の中で唯一立っている血塗れの少年を見て、うわ言のように呟く。

地獄。それは、そこにあるソレラは、そう呼ぶに相応しい。いや、そうとしか呼べないものだった。

男の目の前にいるまだ少年と言える年齢の人物以外は全て死に絶え、死の大地をイメージさせるような死骸しかない。

そこは正に死が充満する地獄のような光景だった。かつて人であった者達がその身から血を流して、力尽き……一人の例外もなく完全に絶命している。

鉄の匂い、血の香り、肉の臭い、死のニオイ。全てが綯い混ざった、喩えようもなく濃厚なソレが部屋にたゆたう闇を侵していた。

「ま、待て、待て待て待ってくれッ。金なら幾らでもやる！　だから助けてくれ！！」

男が年端も行かない少年が地獄を作り上げたと確信できたのは、少年――――アスカ・スプリングフィールドの全身から放射されている気配は熱気ではなく、皮膚を刺す冷気にも似た、不吉な死の匂いであったからだ。

その両手や服は血に染まり、生気の失せた幽鬼の如き顔色も相まって人の死を運ぶ死神のようにも見える。アスカの顔には、何時も掛けられていたサングラスが外されおり、頬と衣服を染めた返り血より紅い眼が髪の毛の間から覗いていた。

男は経験から一瞬で理解してしまった。自身を見る眼が屠殺場で精肉される豚を見るような眼だと。人間を人間と認識せず、空気を吸うように平然と凄惨に殺す人外化生の眼だと――――。

自身の惨たらしい末路を悟った彼は必死に命乞いをし、一筋の望みに賭ける。

「い、命だけはッ！！」

必死の願いは空しく、アスカの身体は直立の姿勢のまま、足元から吊り上げられるように前方に跳躍して、間にあった術者の死体を飛び越えて男の頭部を掴む。

「……？」

直ぐに殺されると思った男は、閉じていた眼を恐る恐る開くと、

其処には血塗れのアスカが自身の頭を掴んで立っているだけ。

男が感じたのは幾多の戦いを経て克服したと、慣れたと思っていた“死”への恐怖。唇から尾を引く涎。間断なく動く口は酸素を求める肺の欲求に応え続けており、それは生きている証。心臓は過剰労働への不満をあげ続けている。

しかし、その主たる男にはそれらの言葉を聞き届けるだけの余裕は毛の先ほどもなかった。涙が視界を遮り、鼻水が呼吸を妨げるが、それをどうこうすることもできない。

考えるのは如何に助かるか、ただそれだけ。だが、それは無駄に終わる。

――――死ね。

隠そうともしない溢れんばかりの憎しみを内包した眼つきが無言で呪詛を吐く。

「……っ！」

生物としての生存本能が恐怖となって男の心を抉り、情けない悲鳴を上げさせようとしたが出来なかった。

「――――――ァガッ」

再度、命乞いをしようとして唐突に感じた痛みで、できなくなる。最初は窮屈な感じを覚え、次第にアスカの手が男の頭を締め付けていく。

アスカの手が頭蓋骨をギリギリと締め付け、男は痛みから逃れようとともがくがビクともしない。３０秒程、そんな事をしていたアスカが眼を細めた次の瞬間……。

「グギャアアああアァアああアァ――――――!?」

奇怪な悲鳴と共に、アスカは実に呆気なく男の頭を握り潰した。頭部が柘榴（ざくろ）のように破裂して最早、原型を留めていない男の体はゆっくりと崩れ落ちる。頭部に当る部分からは血以外に脳漿（のうしょう）らしきものが流れ出す。

現場を見ていない人間がこの死体だけを見たら一体如何なる鈍器を用いればこうなるのか、と考えるだろう。しかし、在り得ない事を成し遂げたアスカは全くの無手であり、右手は血や脳漿らしきもので酷く汚れていた。

アスカはそれを見ても何も感じた様子もなく、腕を振るって簡単に汚れを落として部屋を出て行く。

アスカが屋敷を去った数分後、気絶させられて安全圏に寝かされていた給仕係などの協会と直接の関係のない人間達が焼け落ちる屋敷を前に途方に暮れていた。

その様子を忌々しいほどに透き通った夜空と、気持ち悪いほどにはっきりと見える美しい月が見ていた。

アスカは屋敷を去った後、返り血で重くなった上着のまま近くの森に来ていた。

服だけでなく、全身から漂う濃厚すぎる血の匂いがアスカの頭を蕩かす。そして足が震えていた。

一日で人の死を見過ぎた。生と死の境界線があやふやになってくる。どこからが死なのか、どこまでが生なのか。首が離れていれば死、肌がまだ黄色ければ生。もう、どうでもよくなってくる。

「ぐっ！」

歯をきつく、強く、血が出るまで食いしばった。舌に感じる血の味だけがアスカに冷静さを与えてくれる。覚ましてくれる。全てを――――憤りすら。

全ての感情が消えたような気になった。血の匂いに酔っていた。夜なのに、視界から深紅の色は消えはしない。

「――――は、ははははっ、ははははは！」

唐突に笑いの衝動が沸きあがって来た。馬鹿げていた。今更何を恐れることがあるというのか。本当に今更な事を自覚してアスカは壊れたように笑う。

何時から自分はまともな人間だと思ったのかと、笑わずにはいられない。だって――――もうこんなにも狂っているというのに――――。

中国と麻帆良の生活で忘れていたもの。

平穏だった、幸福だった。だから、精神はそちらに引っ張られてアスカ・スプリングフィールドは、人を簡単に殺せる人間だという事を忘れていた。

今も、人を殺したという罪悪感が無い事に罪悪感を感じているくせに何をまともな人間の振りをしていたのか。

自分と同じ血が流れている人間を、表情一つ変えず惨殺した自分が何を人間面していたのか。これこそが、化け物であることこそが自分の本性。

心が軋みを上げる。それに気付く事無くアスカは壊れたように笑い続ける。

こんな人間が誰を救おうというのか、誰を導こうというのか。

人を容易く殺せる人間に千草を救えるはずがない。そんな人間がなにを高尚な理屈を明日菜に語ったのか。

何時の間にか笑いの衝動は去り、別の衝動が湧き上がっていた。

「……ごめん、なさい……」

声に無き慟哭に喉をつまらせながらも、詫びずにはいられなかった。誰に届くこともない声と知りつつ、少年は繰り返し懺悔した。

「ごめんなさい……ごめんなさい……俺が、僕なんかが……ッ……」

終わらない罰を自身に科して、贖(あがな)いきれぬ罪に怯えて詫び続ける。

余人が見れば明らかに様子の可笑しいアスカ。このままでは精神的に壊れる、そう思われたが……。

「大丈夫、大丈夫じゃ。主は決して一人ではない。我が、我らがおる」

「あっ……」

現れた玉藻がアスカを包む込むように抱きしめ、母が我が子を子寝かしつける時のように背中を優しく撫でることで壊れる事を防いだ。温かい言葉にアスカは気の抜けたように声を上げて、されるがままになっていたが……。

「駄目、だよ。玉藻、着物が血で汚れちゃう」

腕の中から、か細い声が訴える。玉藻は抱きしめる腕に力を込めながら、頷いた。

「気にするでない」

抱きしめたことでアスカの全身についていた血が玉藻の綺麗な白い着物を紅く染めていく。弱弱しい力でアスカは手を突っ張って離れようとするも、玉藻はより強く抱きしめる腕に力を入れる。

「今は楽になれ。誰も咎めはしない」

それ以上は言えなかった。

「――ぁ、」

決して離さないという意思が込められた行為と自身を労わる言葉に、アスカの視界がぐにゃりと歪む。安心したのか、何なのかは分からない。ただ、目に涙が浮かんでくる。

今度は自分から抱きしめて、玉藻の胸の中で千草が死んだ時のように声を押し殺して泣く。

玉藻も叶うならより違う言葉で慰めてやりたかった。だが、それは出来ずに無言で抱く腕に力を込める。

既にアスカは絶望と諦観で精神（こころ）を傷つけることで、精一杯に自分を守っていた。耐え難い苦痛に抗するためには、そうやって”痛みを感じている自分”を認識しなければ耐えられなかったのだ。

そんな人間に、『希望を持て』だの、『自分を大事にしろ』だの、『お前の所為ではない』だのと――――そんな残酷な言葉を投げかけられるわけがない。そういう気休めの台詞は、口にした当人だけしか救われない。

今のアスカに、希望を、赦しを与えるというのは”絶望”という心の鎧を奪い去るのと同じこと。そうなれば弱っているアスカの心身は呆気なく壊れるだろう。

意外に思えるかもしれないが、アスカはあまり人と深く付き合おうとしない。十年かけてアスカが自分から事情を話したのは一握りで、その中でも本当の本音を話しているのは実は麻帆良には一人もいない。

特に状況に迫られて以外に自分から話した人間は世界中を探しても片手にも満たない。

そして千草はアスカが自分から話した稀有な人間であり、もしかしたら……似たもの同士ということもあってもしかしたら初恋というのもあったのかもしれない。

自身の胸で泣き出しても変わらずに背中を撫でながら玉藻はふと、アスカが最後に声を上げて泣いたのは何時だったか、とそんな益体（えきたい）も無い事を考えていた。

涙が枯れ果てるまで泣いた後にアスカは血まみれの服を脱いで新しい服に着替えた。血塗れの服はその場で消し炭も残さずに燃やし尽くした。

そして鴨川に程近い、古びた日本家屋。この家は千草の隠れ家でアスカも何度か入ったことがあるので鍵の保管場所を知っている。鍵を開けて内部に入り込んだ。

アスカがいる部屋は書斎なのか本棚が幾つもあって呪術、符術、陰陽道の本がぎっしりと詰まっている。

千草の遺体も、玉藻の分身によってこの家に運び込まれてベッドに寝かされており、寝室に向おうとして机に幾つかの手紙と書類が置かれている事に気付いた。

「これは……」

気になって内容を確認すると、サングラスの下の目を細くする。それらには関西呪術協会の幹部と思われる者から送られた命令書。和平反対派とのやり取りの手紙や、駅に人払いの結界を張るための手回しの際にもらったと思われる指示書があった。

それらの重要書類が綺麗に並べられているのは明らかに作為的なもの。ここが誰の隠れ家であるかを考えれば、用意したのが誰かは推測するのは容易い。

「ん？」

上から順に見ていくと最後に他の者とは違い、宛名や送り先のない手紙があった。気になって開けた様子のない封を開き、中身を傾けて取り出す。

出てきたのは数枚の写真と便箋。写真の一枚を手に取り、見ると見覚えがあった。

それは今から二週間程前に、戯(たわむ)れで千草と固定カメラで取ったものだ。その写真を見て言葉では表現しにくい表情を浮かべ、次を見る。

他の写真は両親と思われる二人の間で幸せそうに笑う子供らしき少女が写っていた。それに写る少女にアスカは千草の面影を見つけた。写真を一度置いて、便箋に目を通す。

この便箋はアスカに宛てたもので、彼女には最初からこうなるだろうと予測できていたのだろう。自分が死んだ後の事が事細かく書

かれていた。

自分を殺させてしまったアスカへの謝罪や、自分が全ての責任を取るということ、隠れ家にある全ての物の譲渡。特にアスカが求めていた呪い関係についても詳しく書かれており、【永久石化】に関する彼女なりの考察やこの隠れ家以外の財産を全て使い込んで集めた書物の在り処などが書かれていた。

「謝るなら、始めから生きていて欲しかった！」

たっぷりと深い自嘲を込めて吐き捨てると、アスカは自身の顔に爪を立てた。浮かべた■■の表情を剥ぎ取ろうとでもするように、強く、強く……。

ズキリと響いた痛覚は、爪が皮膚を裂いた痛みか、それとも大切な人を失った心の痛みか、どちらであるにせよ、そんな生温い刺激で何が紛れるわけもない。

これが強くなるための道なのか。

苦しくて、悲しくて……人は己の気持ちに自分の心を刺し貫かれてまで、だからこそ人は戦いつけるのだろうか。

誰にも負けぬように、己の刃に負けぬように。

憤りも深く、だけど心遣いに心を痛め、大切そうに便箋と写真を仕舞う。

「玉藻、頼みがある。……もし、怪物に落ちたら僕を殺してほしい。人のままで死なせて欲しいんだ」

千草の末路はアスカにも当て嵌まる。

もし、と仮定して自身と同じ役目を誰かに課すことは出来ない。それを成すことが出来る実力を持ち、近しい人となれば適任は一人しかいない。

「――――――――分かった。主を一人で逝かせはせんよ。我も一緒じゃ」

手紙を懐に仕舞うと後ろに振り返る事無く、立っていた玉藻に声を掛ける。アスカが何を頼むかなど、とうに分かっていた玉藻は地獄の底までついていく覚悟を示す。

そもそもこの命はアスカに救われたもの。己が存在がアスカの運命を歪めたのだから責任は取らなければならない。勿論、理由はそれだけではないが。

「ありがとう……」

間髪入れずの即答に笑みを浮かべたアスカは感謝して、まずは玉藻と二人で影分身を使って隠れ家にある本などを全て家に転送する作業に入る。

３０分後、本などを家に転送したアスカは隠れ家を燃やし、玉藻と千草の遺体と共に夜の闇へと消えて行った。

……夢を見ている。

血が熱を帯びて、体中が脈動しているせいだろう。

思い出す必要のない光景を、また、こんな風に繰り返している。

眺める自分が「夢である」と断じているにも関わらず、その光景は仮そめの時を刻んで流れてゆく。止めることも、目を閉じることもできない。そもそも夢とは“目”で見るものなのだろうかとも思う。

これは夢なのだと彼も理解していた――――――なにしろこれが初めてではない。

この悪夢は、もう数え切れないほど見ている――――――だからこそ、思う。

（また……か……）

殺戮者となり、誰とも知らぬ人々に襲いかかる。肉を切り裂く手応えがあり、骨が砕ける鈍い音が聞こえ、飛び散る鮮血に酔い、撒き散らされる臓物の臭いに顔を顰め、怨念が篭る断末魔に微笑み、破滅的な叫びを張り上げていく。

そんな、全てが生々しい悪夢を、あの時から何度見たことか。

同時に、一生切り離せない記憶もである。普段は思い返すこともないくせに、決して消し去れない光景。

忘れていたわけでもない。忘れたいわけでもない。どうしてなのか、はっきりとした原因は分からない。考えたくもない。

だからこそ目覚めている間の彼は、努めて悪夢のことは考えないようにしている。故に近しい者以外の誰かに話そうと考えたこともない。

だから特別、痛いと思うこともなく、それは殊更、悲しみに震えることでもない。過ぎ去ってしまった事は、もうそれだけの話だ。やり直すことは出来ないし、引き返すことだって出来ない。

そもそも自分は誰かに頼ってはいけない存在だ。なにしろ自分は……。

（これを見ると悪い方向にばかり考えが行くな）

思考が悪循環に至りかけたところを、心に防波堤を作って堰き止める。

こんな自分に出来る事は、ただ前を見て進むことだけだ。

……誰に教えられた訳でもない。

ただ漠然と、昔から思っていた。

過去を忘れず、否定せず、ただ肯定することでしか、失ったモノを生かすことなど出来ないのだと――――――それが過去に縛られることだ分かっていても己に出来る事はこれだけだと知っていたから。

千草の隠れ家を燃やして夜の闇に消えてから色々と動き、アスカはやることを終えてからホテルに戻ってきた。自分の部屋に入って身代わりの影分身を解いた直後にエヴァンジェリン（正確には茶々丸の携帯）から電話が掛かってくる。内容は総本山にいる人間が石化しているので解く方法はないかというもの。

昼に着くという話の応援部隊なら治せるだろうができるならやってほしいという頼み。

真名は銃使い（ガンナー）、古菲は拳法使いなので専門外。明日菜は魔法無効化で石化は解けない。刹那は陰陽術を使えるが剣士なので同上。唯一の魔法使いであるエヴァンジェリンは、その吸血鬼の不死性ゆえに治癒系統が苦手。ガイノイドである茶々丸にそんな機能はない。属性が癒しである木乃香なら可能性が高いが力の使い方を知らないので無理。というわけでアスカにお鉢が回ってきたというわけである。

「何でエヴァンジェリンさんは使えないんですか？」

「私は不死身だからな。治癒系の魔法は苦手なんだよ」

流石にそこまで頭が回らず、色々あったから応援部隊に任せて寝

ようかなと思っていたところに影のゲートを通って現れたエヴァンジェリンが手はないかと聞いてきた。そして６００年も生きていたなら治癒系ぐらい使えるのでは、という疑問に返って来た返答がそれである。返答は実に単純な理由で納得できるものだった。

「まあ、家に帰れば永久石化でなければ解ける薬があるので送ってください」

「分かった（これは血の匂い？　しかもかなり濃い。一人や二人ではなく下手したら十数人）」

『永久石化』でなければ普通の解除薬でも問題ないので、エヴァンジェリンに影のゲートでホテルに戻ってもらって麻帆良の自宅に送ってもらう。その時に吸血鬼ゆえに血の匂いに敏感なエヴァンジェリンは、洗い流して薬品も使って巧妙に隠されているが僅かに残っている血の香りを嗅ぎ取る。血の臭いから何かしていたのだろうと推測したが問いただすことはなかった。注意してみればアスカの様子がおかしい事に気付いたからだ。

「増援組みはあまり長時間ホテルを離れられると誤魔化すのも大変なので、これで帰ってくるように言ってください」

「綾瀬はどうする？　あいつも連れて帰ってくるのか」

「魔法で寝かせておいて下さい。記憶処置は関西呪術協会に纏めて任せます」

幾つかの石化解除薬を持ってホテルに戻る。追加の長距離転移魔法符をエヴァンジェリンに渡す。誤魔化しているに過ぎないので増援として行った者は直ぐに帰ってくるように伝言を頼む。

夕映は寝かせておけば、こんな非現実的なことは夢だと思うだろう。そうでなくても関西呪術協会が纏めて記憶処置を行うはず。これが後に面倒なことになることにアスカは気付いていない。

「はい、疲れているでしょうから薬湯です。飲んでください。それと怪我をしていたら言ってください。治しますから」

「助かる」

「美味いアルな、これ」

「そうでござるな」

エヴァンジェリンを見送った後、数分後に帰ってきた者達に労いの言葉と薬湯を渡す。怪我の治癒を終えてそれぞれの部屋に戻るのを見送った後は、ニ徹して今日の事でも疲れていたのでアスカも床につくことにした。

「……っ！」

しかし、寝付いて僅か五分後に悪夢で声無き悲鳴を上げて飛び跳ねるように布団から飛び起きた。

アスカは激しい動悸に喘ぎつつ、震える腕で自分の腕を抱きしめた。恐怖――――というよりも圧倒的な寒気で、思うように身体が動かない。

全身が汗で濡れていた。湿っているのではなく、濡れていた。寒気を覚えたのはその所為だったのだろう。身体の中心は、むしろ内

臓が痛くなるほどに熱を持っていた。

息が上がっているのが自分でも分かる。なにか無性に恐ろしくなって、アスカはきつく目を閉じた。

そして直ぐに、先程まで見ていた悪夢を思い出し、さらに身を震わせ備え付けのトイレに駆け込んだ。疲れていたことで【狸寝入りの術】を掛けるのを忘れていたのだ。ごほ、ごほっと咳き込むようにして胃の中身を全て吐き出し、胃液しか出なくなるまで繰り返す。水を流して、トイレから出る。洗面所で口を濯いで、

「――――――――――!」

洗面台の鏡に映る自分の顔を見た。酷い顔だった。まるでホラー映画のゾンビのように目に光がなく、頬の辺りが痩せこけていた。拳を作って、力なく壁を殴って込み上げて来た吐き気を押し殺す。

汗を掻いていて気持ち悪かったので、部屋に備え付けられている風呂場でシャワーを浴びる。熱いお湯が体を洗浄して行く中、熱いお湯で手をこすり合わせるが、アスカの目には汚れが落ちているように見えなかった。

洗っても洗っても手にこびりついた……そう、血の跡が落ちない。

お湯で流されていく血。だが、その血は止まることなくどれだけ洗おうとも流れて行く。アスカはこの現象が精神病の類である事を良く理解していた。

それがさっきの悪夢であり、今も消えない血の跡なのだろう。殺

人を犯した、というのもあるだろうが、今回のは千草を助けることができなかったのが原因の一つ。表面上は平静を保てていても自分を許せていない。今も、そして昔からも。

五年前、始めて人を殺してから何とか日常生活は問題なく過ごせているが【狸寝入りの術】を使わなければ毎日、夜中に悪夢で起きていた。悪夢を見たのは久しぶりなので、かなりキテいた。

「ふぅ……」

風呂場から上がって体を拭いて浴衣に着換えると自然と溜息が漏れた。理由は疲れているからだ、精神的にも肉体的にも。

アスカの肉体はどれだけ鍛えても間違いなく子供であることには変わらない。子供の体では二日も徹夜して夜中に起きてこんなことをしていれば嫌でも疲れてくる。精神が幾ら大人のつもりでも肉体は子供。大人と比べて絶対的限界値は低い。

しかし、今の自分は教師。ならば生徒の前で弱っている所を見せるわけにはいない。

だが、人殺しが教師などと自嘲する。

そんなことを考えて部屋に戻ると此方に背を向けた玉藻が窓の外を見ていた。

「どうしたの？」

意図したわけではないが口から出る言葉が何時もより少なくなってしまう。夜なので必然的に小声で話しかけると玉藻はアスカに振

り返る。

「何、二日ぶりに主の体温が恋しくなっての。一緒に寝ようではないか」

「……そっか」

気付かれていたのかと思ったが、よくよく考えてみれば一心同体の関係なのだから気付いて当たり前だ。そんなことにまで思考が回らないほどアスカは参っているのだと自覚せざるを得なかった。咄嗟には何も思い浮かばず、必然的に素っ気無い返答になる。

「ほれ、さっさと寝るぞ」

「……あ」

素っ気無い反応にも玉藻は気にした様子も無く、いや全てを分かった上で布団を踏み越えてアスカの手を掴んで引っ張る。手を離さないまま、掛け布団を退けてアスカを伴ったまま横になる。掛け布団を被り、自身の胸にアスカを抱き締める。

玉藻は何も言わず、ただアスカを強く抱き締めて頭を撫で続ける。その優しさや慈愛はこびり付いた罪を洗い流してくれるよう。

「――――――ぁあっ！　……くっうっ！　ぁ――――――」

玉藻はアスカの声を漏らさないように強く胸に抱き、外に漏らさないようにしてくれている。アスカは玉藻の胸の中で、ただ嗚咽を漏らしながら泣き続ける。走馬灯を脳裏に映すのは、何も死に逝く

者だけではない。それを看取る残された者もまた走馬灯を映すのだ。

アスカは何時までも泣き続け、やがて玉藻の胸の中で疲れて深い眠りに落ちる。今度の眠りは、悪夢ではなく千草と二人でいた頃の優しい夢だった。

こうして、激動の夜は終わりを迎えた。

第六十九話　修学旅行三日目と少年　９（後書き）

次回更新は『明日』の午前０時です。詠春との話し合いです。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

第七十話　　修学旅行四日目と少年　１（前書き）

主人公よりも目立つ存在――――――それはエヴァンジェリンだ！

今話限定ですが。

修学旅行編全１９話の第１８話目で四日目の最初です。遂に終わりが見えました。

文字数は１６２９７字とかなり長めです。それではどうぞッ！！

第七十話　修学旅行四日目と少年　1

近衛詠春。２０年前の魔法世界での大戦を終結に導いた紅き翼の一員で旧姓、青山詠春。剣技では右に並ぶ者はいないとまで言われたサムライマスターの異名を持つ神鳴流剣士。

彼は終戦後に近衛家の娘と結婚し、婿養子になった。そして関西呪術協会の長となったわけだが、先の大戦で英雄と呼ばれるに至った事もあり、大半の人間は詠春が長になる事に賛同した。だが、それでもそれに反対する一派も確かに存在した。それには魔法世界の戦争に参加したこと、しかも西洋の魔法使いのグループにいた事も大きい。彼の使う「神鳴流」は京都を守護し、鬼などの魔を討つ為の剣。それを戦争で人殺しに使ったことについて、破門という意見もあった。それも長になったことで立ち消えたが冒険や武者修行の際の自己防衛のためでなく、戦争に参加したという事実は消せない。人殺しは実際に裏の事ではあることでも、人殺しをするしかない戦争で使ったことが問題なのだ。現在では詠春の人柄を知って考え方を変えた人間も多いが、それでも潜在的に良く思わない人間も少数ながら存在している。

そして近衛詠春という人間の本質は政治家ではなく、どこまでいっても武人なのだ。何十年も政治という魑魅魍魎蠢く世界に浸っている人間を相手にできる事は限られてくる。それでも十数年この地位についているのだから、それに見合う能力は自然とついてくる。とはいえ未だ甘い部分が多々あるのも事実であり、今回の襲撃は今までの付けが回って来たと言えるだろう。

まだ早朝と呼べる時間帯、約束通り関西呪術協会に来たアスカをたった一日で妙にやつれてしまった詠春が出迎えて一室に案内した。

アスカの石化解除薬が効果抜群でも流石に石化していた人間全てを賄える筈もない。

まずは、長や石化を治せる術者に優先的に使われ、対応に当たっている。エヴァンジェリンによって倒されたリョウメンスクナの封印、犯人達の確保などやるべき事は多い。休みなく働いていてさしもの詠春も疲れを覚えてしまうのは、よる年波には勝てないという事か。

案内された部屋は、純粋な木造建築でその至る所に和の趣が感じさせられ、畳独特の香りが鼻孔に感じられる。その畳の香りは不快では無く、自然と落ち着いた気持ちにさせてくれる。

同席しているのはアスカが来たのに気付いたエヴァンジェリン（個人的な会談のため茶々丸は参加していない）のみで、明日菜達は昨日疲労もあってまだ寝ている。

「初めまして、アスカ先生。貴方の影の尽力で犠牲らしい犠牲が出ずにすみました。本当に何から何まで本当にありがとうございます」

「いえ、実際に頑張ったのは現場の方達ですから、私は手を貸しただけで大したことはしていませんよ」

頭を下げて礼を言ってくる詠春に、アスカは「それならもっとマシな行動を取れよ！」という本音を押し隠し、ぶっ飛ばしたいのを我慢して表向きは謙遜しながら当たり障りの無い返答をする。

「君には色々と迷惑を掛けてしまったね、修学旅行の時間もかなり使わせてしまった」

「お気になさらずに。これが本物の親書です。お受け取り下さい」

「確かに承りました。しかし、何故偽物をネギ君に？」

「……いえ、実はこれには事情がありまして」

アスカが親書を摩り替えた理由は極単純、ネギが余りにも無防備すぎたからだ。初日、風呂に入っている間服に置きっぱなしで式神が取ろうとしたのを玉藻が潰した。二日、三日目も寝ている時や観光中や風呂の時等、四六時中という言葉が適任なほど式神がやってきた。ネギにその事実を知らせれば良いのだが、それはそれで問題が起きそうな気もしたので断念した。ずっとネギの傍で張っているわけにもいかないので、万が一取られても大丈夫なように摩り替えていた。

「――――というわけです」

が、問題は摩り替えを指示した本人がそのことを忘れ、ネギが偽物の親書を届けた後に玉藻に「ちゃんと本物に戻したのか？」と聞かれて思い出すなんてことがあったわけで。

全面的な責任はアスカにあり、こればかりは陳謝せずにはいられない。

「成る程、そういう訳でしたか」

頭を下げるアスカの説明を聞いて、表面上は普通でもそこまでとは思っていなかった詠春は、内心冷や汗だらだらのまま答えて親書を開く。一枚、二枚と手に取った紙を真剣な表情で読み、三枚目に

なって「下も抑えられんとは何事じゃ、しっかりせい婿殿！！」とぷんすか怒っている近右衛門の絵を見て、思いっきり下の者にクーデターを起こされた現状では苦笑いというか口の端がヒクヒクと震えるのを抑えられない。

その間にアスカは用意された茶碗を手に取って茶を飲む（流石に親書の中を見るほど不粋ではない）。それは本物の玉露だったので少し驚く。見回してみれば部屋の調度品もどれも立派なもので、趣味が良い。詠春が親書を片付けるのを見て茶托においた。

「それで木乃香が魔法を知った経緯を教えて欲しいのですが……」

「分かりました。それは――――――」

詠春が話の口火を切り、もっとも気になっていた木乃香が魔法を知った経緯を聞く。

訊かれたアスカが話し出したのは、封印を解除するためにエヴァンジェリンがネギを狙った桜通りの吸血鬼事件。経緯はどうあれ暴走したネギが茶々丸を襲い、結果的に木乃香は魔法を知ることになった。

「まさか、ネギ君がそんな行動を起こすとは……」

「元高額賞金首、それも真祖の吸血鬼に襲われたら一人前の魔法使いでも暴走してもおかしくないと思います」

「まあ、よくよく考えたら見習い、それも１０歳にも満たない子供なら逃げ出さないだけでも上等だろう。襲った本人が言えることで

はないがな」

昨日会ったばかりとはいえ、父と違い真面目で本当に息子かとも思える印象を与えたネギが、まさかそんな行動に出て娘の魔法バレの原因だったとはさしもの詠春も思いもしなかった。

普通に考えたら、封印されて全盛期ではないといて元賞金首＋真祖の吸血鬼に襲われて逃げ出さないだけでもマシな部類だろう。

カラカラと笑うエヴァンジェリンも襲った本人が言えることではないことを自覚している。結果的に逃げ出さなかったことが悪い結果になるというのも皮肉な話ではあるが。

「それで近衛詠春、娘の事はどうするのだ？」

生まれた時から膨大な魔力を持っていた娘なのに、親の意向で何も知らずに育てていたのは見方を変えればただの我侭とも取れる。

娘には平穏な生活をさせたかったにしても、本人が全て事情を知った上で嫌と言うならばある程度の人間は諦めもつく。幾ら才能があっても、この世界はそんな気持ちで大成できるほど甘くはないからだ。

しかし、長の娘という本来なら次世代の柱になるはずの人物を魔法使いの下に預けるのは不味い。それでは関西呪術協会の術者が信用できないと言っているようなもの。陰陽師である事を捨てて魔法使いへと鞍替えした男に預け、傍目には最初から魔法使いへと進ませるような真似をして組織に対する背信行為と言われても仕方がない。本人は自身の力を知らず、魔法使いの土地で覚醒してしまえば事情を説明するのは魔法使いだから、自然に魔法使いになろうとす

るだろう。

しかもそれも、よりにもよって表向き対立してる組織の本拠地である麻帆良に送った理由がエヴァンジェリンにはよく分からない。

「……ああ、それでエヴァンジェリンに折り入ってお願いがありまして。娘に魔法を教えてやって欲しいのです」

最初から木乃香に魔法のことを教えていれば、陰陽師として修業させていれば、魔法使い達の町である麻帆良に行かせなければ、遡ればもっと早く、積極的に関係の修復を行っていれば或いはこんな結果にならなかったのかもしれない。結果だけを見れば確かに間違っていたのだろう。

例え魔力を持っていなくても、木乃香には関西、関東両長の直系の血縁と家柄だけでも十分価値がある。更に父親は世界的な有名人となればもはや普通など望めない。木乃香の子が陰陽師としての高い才能を持って生まれることも十分有り得る。

しかし、木乃香は彼(か)のサウザンドマスターすら超える魔力を持っている。

幾らひた隠しにしても、事実は消えるわけではない。内心では、もちろん分かっていた。それでも詠春はどうしようもない位に親馬鹿で、愛娘を辛い目に遭わせることなどしたくなかった。危険から可能な限り遠ざけて置きたかった。

「……何故私が、そんなことをやらねばならん」

この話題では突っ込みどころの多いエヴァンジェリンが話題を転

換するも、返って来た返答に手で顔を覆い隠す。覆い隠した指先で、軽く額を叩いて、何故自分がわざわざ魔法を教えなければいけないのかと自問自答する。

しかし自問自答しても何も答えは出る事無く、バラした責任はあっても自身が教えなければならない理由も義務はないので、その旨を率直に吐き出す。

「旧友の誼（よしみ）と貴方以上に適任がいなかったということでは駄目ですか？」

「……そう思ったのは今回の一件に何か思うところでもあったのだろう？」

元高額賞金首で魔法界ではナマハゲ扱いされ、悪の魔法使いなどと言われていても悪評を抜きに考えればエヴァンジェリンは６００年という経験を持った大魔法使いなのだ。その経験に裏打ちされた実力を考えればこれほど優れた師匠はいない。性格もサドっぽいのを我慢すれば意外と面倒見も良さそうであることを詠春は知っている。

「魔法の世界のことさえ教えなければ、木乃香に災厄が降りかかることはない。そう、思いたかった。本当はそんなことは無理だと分かっていたんです。それでも私は木乃香に関わってほしくなかった」

事件が解決した後、短時間ではあるが木乃香と護衛の刹那と従者の明日菜も含めて話をしている。内容は主に裏に関わらせないっていう教育方針について。木乃香は、そこに全く自分の意志が反映されてない事と、その所為で刹那と疎遠になったことでかなりのお冠だった。特に刹那と疎遠になったことはかなりキテいたらしく、横

にいた刹那が顔を青褪めてガタガタと震えて明日菜に心配されるほどである（顔は笑んでいるのに目が笑っていない状態で、詠春も青くなってる）

勿論『こちら側』に関わらず、何も知らないままでいなければならない理由まで全て説明したが、今更、自分の力の事も忘れて日常に戻れというのは、既に力に目覚めている以上不可能。

本人も意欲を見せていることから詠春は認めることとなった。決して怖かったからではないと後に述懐している。

「それは分かりますけど、家の事を考えるなら陰陽師としての修行をした方がいいのでは？」

「確かにそうですが麻帆良では陰陽術専門の者はいません。かといって派遣するのも難しいですし、こちら(関西)に戻すのは現状では危険が伴います」

アスカか最も疑問を浮かべるも、麻帆良で陰陽術を教えられるとしたら関西出身の葛葉刀子か桜咲刹那の二人しかいない。その二人にしても陰陽術は補助程度で神鳴流が専門なので、どうせなら専門の者に教わるべきだろう。

かといって関西に戻すのは、木乃香が陰陽師となれば関西呪術協会の後継者として扱われる事となり、今後も学生でいられるかも定かではない。

長の娘である木乃香を教えるのも派閥などのいらぬ問題も多く、直ぐに派遣することはできない。

「そうだとしてもこちら[関西]の人間が納得しないだろう。後継者候補を東に取られたと感じるかもしれん」

「最悪、高校を卒業して帰ってきたら、こちらの修行をしてもらうということで納得してもらうしか有りません。一応、木乃香を自由にする手段もあります」

木乃香を自由にしたければ一つだけ簡単な方法がある。詠春が次の長を指名して、木乃香に後を継がせない事を宣言すればいいのだ。

しかし、それをするには東西の確執は根深く、関東魔法協会に対する恨みは大戦が終結して二十年経った今でも燻り続けている。天ヶ崎千草が両親の仇を討つために実力行使に出たのもそのためだ。

今回の一件でも協力こそしなかったものの、黙認する者も多かった。そのことからも分かるように、彼等の本音は「関東魔法協会憎し」なのだろう。そんな者達の中から次の長を選んでしまうとどうなってしまうのか。今は詠春がいるからこそ、かろうじて東西のパイプが繋がっているのだ。関東魔法協会に憎しみを持つ者が長となってしまえば、両者の関係は完全に絶たれてしまうだろう。大戦再び、などと言うことには流石にならないだろうが、仲違い解消の芽が踏みにじられてしまう事は間違いあるまい。

詠春が組織内を安定させ、「関東魔法協会憎し」ではなく詠春並みに影響力のある次の長を決めることは困難を極める。数十年単位の時間を掛ければ、或いは可能かもしれないが木乃香を自由にさせることは難しい。

父として、関西呪術協会の長として、二つの立場の狭間で悩み苦しむ詠春。父として長の座を捨てられればどれだけ良いだろうか。

しかし、長の座に居ることが父として娘を守ることでもあるのだ。

仮に女ではなく男子の後継ぎが生まれていたならば、そのような事をあまり考えることも無かっただろう。自分達の誇り高き使命への理解を求めていたはず。

だが、生まれたのは女であり、戦いの場には相応しくない血塗られた自分が抱くにはあまりにも可憐な容姿であった。その顔を見た瞬間から詠春には無理だった。

そのような人生を彼女に教えてもいいのか。そうすることが正しいのかと。

「ふん、親馬鹿な事だ」

皮肉げな口を叩きながらも、充分に詠春が悩んでいるのが分かったのでエヴァンジェリンの口元には薄らと笑みが浮かんでいる。

「ははは、それで引き受けてくれますか。報酬は弾みますよ」

「報酬次第だ。私は安い女ではないぞ？」

詠春はエヴァンジェリンの言葉に自覚しているので笑い、話を進める。技術、経験では最高の師であるエヴァンジェリンに習うならこれ以上はない。冗談交じりになりながらも、エヴァンジェリン自身の誇り（プライド）もあって報酬に妥協はしない。

ああでもこうでもないとやり合う二人を、アスカはずずっとお茶を飲みながら眺める。暫くして条件が合意に達したらしい。

「さて、前置きはこのぐらいにしておこう。それで事後処理はどうなっている？」

「無事、スクナの再封印は無事完了しました」

エヴァンジェリンに倒されたかに見えるリョウメンスクナは死んだわけではない。リョウメンスクナは神に準ずる存在なので、肉体を破壊されても滅びることはない。特殊な方法を用いない限り、死なないので封印するしかない。

「うむ、ご苦労。面倒を押し付けて悪いな。それであの白髪のガキについてはどうだ？」

動きに人工的なものを感じたので、人間ではなく人形かその類だとエヴァンジェリンは判断した。今回は不意打ちで仕留めたが真っ向から戦えば自分でもそれなりに苦戦する実力がある者だと感じ、何故そんな奴が関わっていたのか疑問に思っていた。

「いえ、こちらこそ。今回は本当に感謝を。現在調査中ですが、今の所彼が自ら名乗った名が『フェイト・アーウェルンクス』である事と……一ヶ月前にイスタンブールの魔法協会から日本へ研修として派遣されたということしか……」

エヴァンジェリンの問いに詠春は僅かに顔を曇らせて口を開き、最後に「おそらく偽者でしょう」と付け加える。その詠春の言葉にエヴァンジェリンはその程度では特に何もわかっていないのと同じだと、ふんと鼻を鳴らした。

アスカも調べはしたが他にやることが多く、優先度の関係から情報量は詠春と同程度しかない。

（しかし、「アーウェルンクス」とは。何かの皮肉か？）

「アーウェルンクス」とは、ローマ神話で、災いを幸福に変える神の名前。情報通りイスタンブールの魔法協会に所属しているとしたら変わった名前である。「フェイト」を運命とすると「災いの運命を幸福に変える者」とも解釈できるので大それた名前なのだから。

あれほどの力があったのなら従う必要はないはず。ただ考えるだけでも今は情報が少なすぎる。憶測に憶測を重ねてもどうにもならない事をアスカは過去の出来事で理解していた。

「……他の者達、天ヶ崎千草や月詠、犬上小太郎の処分は？」

「犬上小太郎君は、それなりの処罰はあるでしょうが年齢を考えて重くはならないでしょう。月詠君は行方不明ですが神鳴流から雇われた護衛なので今回の件で注意などを受ける事はあっても特に処分などはありません。天ヶ崎千草についてですが現在も行方は掴めていません。もっか捜索中です」

何時の間にかエヴァンジェリンが主導する形になっているが、アスカが気にした風もないので気にせずに詠春も答えていく。

千草の件に関しては関西呪術協会の決死の捜索も実らず、現在も行方不明のまま。

それは当然だ。

千草は既に死んでおり、昨日、隠れ家を辞したアスカが火葬して

遺骨と遺品を両親が眠る墓に入れているのだから見つかるはずもない。既に死んだ人間を探したところで無駄な行動でしかなかった。

アスカはそれを詠春に、関西呪術協会に伝える気はない。これがただの我侭だとしても分かっていても。

「しかし、どうして彼女はこんなことをしたんでしょうね」

呟くように言うアスカの言葉に反応したのはやはり詠春。

「――――彼女は事件前にこう周りに漏らしていたそうです。「和平をすることは悪いことではない。しかし、修学旅行のついでに。しかも子供が使者など、過去を軽んじられて赦せるものではない」と」

事件の調査の段階で早期に判明していた動機。

この千草の動機に共感する者が多かったのもまた事実。それが人を呼び、人が集まったことで一つの流れを作ってしまったのは皮肉か。

「事情を知らなければ東からの勝利宣言に聞こえるからな。大切な者を失った者には耐えられなかったのだろうよ」

大戦は過去のことかもしれないがそこで多くの命が失われたのもまた事実。肉親、恋人、友を失った者も多い。ならば日本の終戦記念日のように死者を悼み、祈りを捧げ忘れないようにするのが普通ではないだろうか。

なのに、東も西もそれを忘れようとしている。全てを過去のこと

として水に流そうとしている。風の噂では東西の合併も囁かれていた。大事な人たちの死が過去へと追いやられ、意味無いものにされ、忘れ去られることに千草は我慢できなかったのだろう。

「何時までも過去の柵に縛られていては前には進めないという私の考えは間違っていたのか」

「それは勝者の、失っていない者の言い分だ。過去のことは水に流して仲良くしましょう――――失った者がそうそう納得できる理屈ではない」

額に手を当てた詠春の言い分にエヴァンジェリンは一刀で断じる。加害者は直ぐに忘れ、被害者は何時までも忘れない。それが現実だ。

戦争の不平不満は平和の時でも出てくる。まして戦争が終わった後なら燻ったままで残りかねない。実際に二十年前の大戦で身近な家族を失った連中なら火種どころか憎しみの炎が残っているのだ。

それを踏まえれば彼女がこのような暴挙に出た理由は聞かずとも簡単に見当が付く。そして彼女と同じような傷を持つ者も関西呪術協会には多いということか。

詠春からしてみれば既に大戦は終わったものだという認識でもおかしくはない。しかし、周りが同じだと思ってしまったのが間違いだったのだ。

和平をするのに今である必要はどこにもなく、修学旅行のついでやネギが使者である必要もない。

時期尚早。

確かにタイミングは良かったのかもしれないが時期として和平は速すぎたということなのだろう。

「私が調べた限りでは彼女を支援していた人間もかなりいます。しかも使者が総本山に近づいたら簡単に情報を渡して無関係を装い、その功を得ようとする下衆達が」

表情には出さず――――それはもう良質のお茶をのほほんと美味そうにすすっては幸せを感じているような表情のまま――――その表情とは対照的にアスカの視界は怒りのあまり紅く染まっていた。が、一時の激情を静かに深く息を吐くことで抑える。

「はっ！　中々、関西呪術協会も腐っているな詠春」

アスカの言う通りなら話は変わってくる。

結局の所、天ヶ崎千草は利用されていただけであり、その大元は支援していた者たちが原因なのだということが。

「くっ……」

エヴァンジェリンの嘲笑に何の疑いもなく情報を受け取り、功を与える予定をしていたので詠春は何も答えられない。

組織というものは一枚岩ではない。様々な考えの者が集まって組織というものが成り立っている。故に組織の意向とはまったく別の、それに反抗するような者達が現れて勝手な行動をする者が出ても、それは不思議ではない。組織なんてものは、えてしてそういうもので単純なものではない。一枚岩の組織なんてものはまずありえない

し、あったとしても大抵ろくなものではない。

それは組織が大きくなればなるほど多彩になり複雑化していき、組織のトップといえども飾りとまでは言わなくても、一人で一から十まで把握して運営するというのはまず不可能なのだ。それでも下の者がそんな行動を取ったことについては詠春の責任に違いない。

「私の従者が辿りついた時には、功を独り占めしようと仲間割れを起こし、既に屋敷に火が回っていて無関係な者を助け出すだけで精一杯だったようです」

「因果応報ということか（案外、アスカが殺ったのかもな）」

「それはこちらでも確認しています。その節は助けて頂いたこと、長として感謝します」

助けられた者達の中で目撃した者達の証言から仲間割れをしたことは間違いないと詠春は思っている。もちろん、記憶を改竄された事も考えて検査されており、その痕がないことは確認されている。

その証言をした者達には実際になにも知らないのだから記憶の改竄も意味がない。

頭を下げる詠春を横目にエヴァンジェリンは、昨日アスカに纏わりついていた複数の血の香りから事実は違うだろうと予測する。しかし、それを詠春に言うつもりはエヴァンジェリンにはない。それを教える義理も義務も彼女にはないのだから。

「それで天ヶ崎千草の目的は結局、何だったのだ？　後先考えない復讐者とは思えなかったが」

エヴァンジェリンの見立てでは、千草は甘いと評している。ほとんどの情報が又聞きなのではっきりとしないが復讐鬼になって周りの犠牲など関係なく事件を起こすことはしなかった。今までのことを振り返れば妨害工作も、ほとんどいたずらレベルで本山を襲撃した時も石にしただけで鬼達を召喚した時も殺さない様に命じていたのだ。実際、怪我は負ったが重傷を負うことも無く、更には石にされた人からは一人の死者だって出ていないのだ、これほどの大事件なのに。それらを含めてエヴァンジェリンは甘いと評した。

「手段を選んで手加減されているレベルですらアスカがいなければ奴は目的を成就しただろう。それ程の奴だ。何をしようとしたのか興味がある」

木乃香の事にしても、ヘロイン等の有名どころの麻薬を使えば簡単に虜に出来たはず。しかも幾ら膨大な魔力を持っているといえど、碌に力の引き出し方も知らぬ木乃香が鬼神を呼ぶ生贄にされても壊れずにすんでいることを考えれば安全にも気を使っていたのだろう。

「まだ調査中ですがリョウメンスクナで関西呪術協会を占拠。後に関東と戦争をするつもりだったと思います」

詠春も油断して石化された身。手段を選ばなかったのなら既に石化の状態で後顧の憂いを断つ為に破壊され、この世にいなかったことは簡単に想像がつく。それが悔しく、また良かったと相反する感情を覚える。

その感情は一先ず置いておき、エヴァンジェリンに自身の推測を述べる。

「ふむ、大体そんなものか……アスカはどうだ？」

「推測でよければ――――」

アスカとて全てを知っているわけではない。状況と集めた情報から推測するしかない。

親書が届けられるまでの騒動を上げると以下のものになる。

・新幹線内で起きた蛙騒動

・地主神社における落とし穴

・音羽の滝では縁結びの水に酒が混入されていた

・終電間際の電車を占拠して近衛木乃香の誘拐。

これらは表沙汰になれば普通に全国区のニュースになりかねない事件である。特に問題なのは新幹線の蛙と電車の占拠。日本でこの様な騒動が起きた場合、絶対にニュースになる。特に新幹線の蛙はお菓子の中とか等から出てきたから、運行中の新幹線を停止して菓子類を販売していた会社や工場は徹底的な調査が行われるだろう。修学旅行は中止にはならないだろうが、様々な弊害が出てくる事に違いは無い。ニュースになっていないのは情報操作を行ったからで、洒落にならない状況には違いない。

「――――――以上のように、どうも総本山に入るまでは騒動を起こす場所が人の目の多い場所なので、わざと派手な行動をしていると考えられ、初日の行動は全て「修学旅行を中止して帰れ、もしくは和平を中止しろ」という意図が見えます。二日目はその決断の猶

予期間と、もし動く場合の戦力評価ではないかと」

「筋は通っている。確かに納得できるな」

関西呪術協会は総意として魔法先生の受け入れに難色を示している。にもかかわらず、西の長詠春は下を纏めないまま許可を出した。親書を携えているとはいえ、正式な使者のかたちをとったものではない。コトのついで、子供の使いというのは麻帆良に対しそれほど悪印象を持っていない者ですら眉を顰めた者は多い。オマケに詠春とその側近しか知らぬことだが麻帆良の公式通達とは異なり、魔法先生はネギとアスカの二人だけではない。

「しかし、修学旅行は中止されることなく親書は届けられて、和平の宣言がされたことで彼女は直接的な行動に出た。もし、リョウメンスクナが妨害もなく関東に侵攻すればどうなるか――――」

リョウメンスクナほどの巨体で動き回れば秘匿することなど不可能。麻帆良へ乗り込んで、魔法使い達と派手に一戦を行えば最強の戦力である高畑が海外で行っていていない以上、学園長が出張れば別だが魔法使い側にもかなり被害が出る。

そしてその戦いは一般社会に対してどれ程の権力を有していてマスコミを抑えても隠せるはずがなく、巨大ロボットというのも実物を前にしては説得力が無くなるだろう。その前にあれだけの巨体なら自衛隊やら米軍やら飛んで来て、隠すという発想がなくなりそうだ。

例え事件を収められても社会的にかなり大きい騒動になって西洋魔術師は多大なダメージを負い、新世界から旧世界への干渉はかなり制限される事になるはず。その結果、止められなかっただけでな

く関わった学園長以下かなりの数がオコジョ刑となり、最悪関東魔法協会の崩壊の可能性もある。

「――――と私の推測なので、ここまで考えていたかは分かりませんけど」

「恐らくその通りの展開になったでしょう。そこまで考えていたとは頭が痛い……」

「クックックッ、私達は魔法を隠匿するものとばかり考えていたから勘違いしていたわけか。直接的に手を下すわけではないが、西洋魔術師にダメージを与えるという点では、個人でできる最も効率的な手段と言える。正に逆転の発想ということわけだ」

アスカの推測交じりの予測にエヴァンジェリンは破顔し、そこまで現状を対処するだけで考えている時間もなかった詠春は頭を抱えてしまう。

アスカは詠春が頭を抱えている間に喋って乾いた口を、美味いと思いながら玉露で湿らせる。

「結果的に今回の一件で和平反対派は減り、関西呪術協会は穏健派が実権を握ることになる。しかし、事件を解決したのは私達外部の人間――――これでは関西呪術協会が関東魔法協会の下部組織になり兼ねない事態ではないか詠春」

「そんなことは――――」

ないとは言い切れない。今の関西呪術協会の戦力はかなり落ちており、解決したのはあくまで外部の人間。近右衛門が東の長で、義

息子である詠春が西の長になってからは、そういう風に見られる事を関西の人間は危惧していた。

元々、近衛家は関西呪術協会内においても、それなりの発言力を持つ名家。近右衛門が詠春を通じて、何かと意見を出せるのは間違いなく、内政干渉する気はないかもしれなくても結果、そうなる、そう見える事もある。

「流石に爺もここまでの大事になるとはおもっていなかっただろうが、この一件で過激な思考の持ち主は排斥されたのは間違いない。解決したのは私達だが関東魔法協会の有利なままで和平は進むだろうよ。そもそも近衛木乃香とナギの息子が二人という狙われる要素満載でかつ、修学旅行のついでに和平など反対派の炙り出しとしか思えん」

例えそうでなくても、近右衛門が関西に嫌われているのはこういう独断専行な部分だったりする。名家の近衛家でありながら関東魔法協会の長の立場に収まるなど、その目的が野心などでなく、偏に日本の魔法界の発展と進歩なのだとしても反発する者は多い。

「何かと辻褄は合うんですよね。そもそも孫が大事なら敵地に近い京都に送り出すなんてことするとは思えませんし。恐らく元々は木乃香さんの魔法バレを考えていたのでは、と思います」

「近衛木乃香の性格と嗜好から鑑みると、バレたらネギかアスカのどちらかとなし崩しに仮契約をする事は想像に難くないからな」

「そもそも本当に魔法をバラしたくないのなら魔法関係者を傍におかないでしょう。同居なんてもってのほかですし」

親と祖父で教育方針が違っていたのかトラブルの結果、魔法の事を認識すれば護衛もし易くなるというメリットがある。前のように何も知らないのと知っているのでは守る立場からすれば雲泥の差がある。学園長の手駒になる可能性もあるだろう。

本来は二人は極めてデリケートな扱いを要する問題のはず。騒動の種を1ヶ所に固めて監視の目を行き届かせる……にしては、むしろ厄介ごとが連鎖することのリスクの方が大きい。

「お養父さんがそんなことをするとは思えないのですが」

「メリットは幾つもある。護衛のし易さ、英雄の息子達との個人的コネクション、何より優秀な魔法使い候補が一人誕生する。ざっと考えてこんな所だな。お前が甘すぎただけなんだよ」

「いや、それは」

「特に坊やがいる以上、確実に夏までにはバレていたはずだしな。知っているか？　あいつは麻帆良に来た初日に神楽坂明日菜にバレているんだよ。まあ爺は力が覚醒しても傍に助けとなるべき駒――それも魔法界にとっても軽視しえない実力のある人物を配することで、孫を襲うリスクを少しでも軽減しておきたかったのかもしれんが」

あくまで近右衛門は麻帆良学園都市の長であり、同時に関東魔法協会の長でもある。それはとりも直さず人間界における魔法使いを束ねる組織の重鎮のひとりでもあることを意味するが、逆に言えば”重鎮のひとり”ではあってもナンバーワンではない。まして、魔法使いの組織として言えば、魔法界に属するそれの方が遥かに巨大だ。

「全ては推測であり過去になってしまったが故に今となってはもはや意味はない。しかし、あまり爺を信用しすぎない方が無難だぞ」

「むぅ……」

状況証拠ばかりで確たる証拠はなくても、そう推測させるものは揃っている。本当に木乃香を魔法から遠ざけたいのならネギやアスカを近づけるのは御法度。なのにクラスの担任、副担任。更には同居させるなど執拗に近づけている節がある。

状況からの推測だが邪推させてしまうのもまた事実。

「学園長もそうですけど、貴方達も門前で犬がうろついていたのに対処できていないってどういうことですかね？」

案外、詠春も近右衛門とグルかもとはアスカも考えたがそれだと関西側の動きは余りにも無様。

特使の来訪を事前に承知しておきながら自分の家の門前での騒ぎを放置している状況など監督不届き以外の何物でもない。しかもネギ達が到着した時には巫女達が出迎えたという。事前に知っていながらネギの行動を見たかったがために見逃したのか、それとも気付かなかったのか。どちらにしても良い意味になることはない。

「しかもこちらが注意をしていたのにも関わらず、結界の強化もすることなく突破され、あまつさえ民間人を巻き込んだ」

結界の堅剛さは玉藻も認めるところ。突破するのは容易ではない。

突破するには幾つかの方法がある。

裏技を使うか、数を頼りに結界を破壊するか、突出した術者が侵入するか。先に挙げた三つの他にも幾つか方法はあれど、アスカだけは敵方の情報をかなりの深度で理解しているからこそ突破されることが予測できた。

だが、その根拠はどちらかと言えば戦士としての勘の部分が多い。他人に伝えて理解してもらえる類のものではなく根拠として示せるだけの証拠がない。

一人の人間の勘などという確たる証拠もない換言では手薄の本山を守る術者を護衛につけて下り(おお)させるには危険性(リスク)が高すぎる。

或いはこれらを伝えていればまた変わったかもしれないが今となっては意味を持たない。

初日の深夜の時点で事前に連絡していたにも関わらず、東との友好条約に反対する分子が妨害活動までしているというのに、友好賛成派の長側が人手不足を理由に親善大使の迎えや護衛を用意しない。

それに反対派が捕まっていないのにも関わらず、使者が総本山に逗留しながら、その総本山に腕利きが長以外にほとんどいない状態。英雄たる長一人で充分と考えたのかもしれないが結果的に石化されて役立たず。関東からの使者がいるのだから何時有事が起きてもいいように最低限度の腕利きぐらいは総本山に残しておくべきだろう。

「宿に身代わりを送ったのもどうかと思います。普通に連絡を入れてくれればいいのに、身代わりの方が教師として面倒が多いです。術式はしっかりしてましたけど、それが上手く起動してなかったの

か明らかに変でしたし、暴走する危険が高かったので潰しました。身代わりを用意した人に修行し直すように言っといて下さい」

普通に引率の教師に不在の事前承認を取ってくれた方が記憶の齟齬も起きないし、いらぬ心配をしなくていい。下手に魔法によって記憶を操作したり、事あるごとに式神で身代わりを立てるより手間もかからず、場合によっては却って何事も無く事を運べるといのがアスカの考えであった。

（珍しく言いたい放題だな。それほどストレスを溜めていたということか）

余程ストレスが溜まっていたのか、溜まっていたものを吐き出して少しスッとした顔のアスカにエヴァンジェリンは苦笑する。

「……」

魔法使いとしてではなく、教師としての意見には眉間に皺を寄せて眼鏡のずれを整える詠春。彼の言葉は正論であり、今回の事態そのものが自分の無能が招いたものに他ならない事を理解しているからだ。

とはいえ彼にも口には出さずとも言い分はある。

先ほどアスカが言っていた初日の連絡だが、当時の協会は襲撃犯の調査に忙しく連絡を受けた人間がアスカの立場（傭兵＋西洋魔術師）を軽んじて詠春にまで連絡を上げなかったのだ（当然その連絡を受けた人間は厳罰に処されている）

アスカのミスは関西呪術協会には連絡しても学園長には連絡しな

かったことにある。学園長なら詠春に直接ことを伝えることも出来たからだ。

人手不足は深刻なレベルにまで落ち込んでおり、それは事件が起こった当日の戦闘員の数が最低限の本山防衛ほどしかいなかったことも証明している。

そんな状態で生徒たちを危険に晒してまで下山されるわけにもいかなかった。確かに結界を過信していた面はあったがアスカが言うことは全て結果論に基づいており、恐らく同じ状況であったのなら他の人間でも詠春と同じ判断を下しただろう。

だが、結果論であれ、いちいち相手の言い分が正当性さえあるせいもあり二の句が告げず、暫しの沈黙が流れる。

「……もっとしっかりしてくださいよ」

だが、その沈黙もアスカの口からぼそりと小さな声で文句が漏れる事で終わる。最初の方こそアスカとしても彼なりに真摯に対処理由を挙げていたものの、後になるにつれ、その対応の悪さにだんだん腹立たしくなり、ついにはこの一言である。流石に言った後に余計な一言だと気付いて口を抑えているが。

「ッ……！」

対する詠春の耳にその呟きは届くが、それに反論は出来無い。指摘されたこと全てが結果論に過ぎなくとも正論で真っ当であり、全く以て頭が悪い自身が嫌になるくらいだ。

しかも自身が用意した身代わりの式神の件で修行し直せと言われ

て詠春はかなりへこんでいた。

「それとこれを。私が今回集めたものです」

へこむ詠春にアスカが差し出した書類には、関西呪術協会の組織として外に晒してはいけない物の数々が記されていた。

「これは！　どこでこんなものを！！」

「私の従者は優秀ですので」

書類を読んだ詠春は長である自分も知らないようなものを出されて声を荒げてしまう。対するアスカの返答は予め用意していたように速い。確かに優秀なのには違いないが、その返答に真実は含まれていない。実際は、皆が戦っている間にアスカが関西呪術協会に忍び込んだり、千草が用意していたもの。あとは地道に調べたものなど、良く見つけたなと言いたい物ばかりである。

「これがあれば組織の膿み出しも容易いのではないですか？」

元々は千草の助命を願って集めたもの。

千草亡き今となっては無用な長物ならば有効活用出来る人間に渡してしまうのが最善の行動であろう。

「それは確かにそうですが……」

手元にある資料があれば組織の膿み出しも格段にしやすい。

だが、自分達の不始末を全て解決してもらっている現状では借り

ばかりを作っている状況。

「その証拠があれば色々脅して、言う事を聞かせられる筈ですから頑張ってください」

「お、脅すって確かにいい方法かもしれないがそれは人としてどうかと。組織の正常化に使うつもりだが……」

渡しながらの言われたアスカの言葉に詠春は冷や汗を流す。確かに弱みを握ってうまく脅して操れば組織運営が楽になるだろうが、それをやるのはやはり躊躇いがある。同時に自分も後ろ暗いところを作ってしまうわけでもあるのだ。

「そうですか？　それがあれば言う事も聞かせられますし、組織を安定させれば、木乃香さんが高校を卒業するまで４年。それだけあれば自分で長候補を作って育ててしまえば、木乃香さんが家の騒動に巻き込まれることもないと思ったんですけど」

「その手があったか！！」

（まあ、次の長を決めてしまえば関西の騒動からは離れられる。魔法を習う以上、関東の方に絞られるがな）

追い詰められた詠春が光明を見出すのを見たエヴァンジェリンは心の中で呟く。

根本的な解決策ではないが、それでも完全に長候補から外れてしまえば関西の騒動の枠から離れられる可能性が出てくる。それを成すためには手元の資料は大いに役立つ。それに気がついた詠春は暗闇の中に光明を見つけた気分になった。

それでも関東の方が残っているがいい加減、昨日から休みなく働いている詠春の疲れてきた頭はそこまで回らない。冷静なエヴァンジェリンは、喜ぶ詠春を横目にその事実に気付いていたが、アスカがそういう風に誘導していたことに詠春が気付くことはないだろう。

「ここまでしてもらっては私たちの立つ瀬がありません。私個人からもなにか報酬を渡さねば」

というか半ば弱みを握られ、貸しばかりを作っている状態は組織の長としてあまり好ましくない。だが、ここまでの借りに見合う報酬があるのか。

「別になにもありませんけど」

真実、アスカとしてはこれ以上、関西呪術協会と関わる意思がないので関わらないことを明言してくれた方が嬉しい。

「そうはいきません。ここまで借りを作りすぎては長としての沽券に関わります」

ここまで言われると逆に困ってしまうのはアスカの方でであった。

正直、金輪際関わるのは避けたいのだが詠春が言うことも分かる。

一組織の長が一人の人間にここまで低姿勢なのは問題あるが言っていることは質実最もなので断りすぎるのも問題になってしまう。

「分かりました。なら――――――」

逆らうという選択肢は取れないのでアスカは酷く疲れた顔で、報酬の希望を出す。

アスカの報酬希望がよほど以外だったのか驚いた様子の詠春だったが、借りに見合うだけのものはでないが今回の一件で金銭は出来れば避けたい身となれば否はない。

納得した両者とエヴァンジェリンは一室から出て行った。

第七十話　　修学旅行四日目と少年　1（後書き）

さて、主人公が詠春に求めた報酬とはなんでしょう？　ちなみに組織としての報酬とは別です。

次回更新は『明日』の午前0時です。ナギの別荘での話を以って連続投稿を終わります。その後についてはまた次回に。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

第七十一話　　修学旅行四日目と少年　２（前書き）

昨日、仕事が終わってから寝てばかりでした。１７時に帰ってきてから晩御飯まで寝て、晩御飯を食べても直ぐ寝て翌朝６時まで寝てしまい、投稿が大幅に遅れました。

遅れに遅れた投稿、申し訳有りません。

連続投稿最後となる修学旅行編全１９話の第１９話目にして四日目の最後です。遂に、遂に終わってしまいました。

文字数は１０２３４字とギリギリです。

それではどうぞッ！！

第七十一話　修学旅行四日目と少年　2

ネギが目を覚ました時――――――そこは見知らぬ部屋だった。

最近、女子寮から移った男性職員寮にある高畑の部屋のような洋風独特の無機質な天井ではなく、木目調の飾り板が張られた暖かな天井であったからだ。静寂の中、居間の壁時計の秒針が動く硬質な音が響く。

不規則な木目の並んだ天井に、和風建築特有の木の匂い、畳の上に敷かれた布団――――さして広くもない部屋にある調度品は全て和風な趣をしていた。

「ここは……？」

ぼやけた視界を拭いながら、目覚め切っていない頭で半身を起こして辺りを見回す。間違っても自分の家ではない。現在地を把握できずに呟き、自分は何でこんな所にいるのだろうと記憶を模索すると関西呪術協会の総本山に来た事を思い出した。

宴会も障子越しに見える日の光から考えて既に昨日の出来事だ。ネギには寝かされていた部屋に見覚えがなく、昨日の宴の記憶も途中までしかない。まだ朝も早い時間に起きたのは、昨夜早く寝てしまったからだろう。

どこか分からずに混乱して未だ寝ているカモを手に寝ぼけ頭のまま屋敷の廊下を歩いていた。

「ネギ君、起きていたのかね？　ちょうど良かった。今、起こしに

行こうと思っていたところだよ」

会談を終えて約定をこなした詠春がアスカ達を誘い、ネギより先に部屋の近い明日菜達を起こす。最後にネギを起こしてナギの別荘に向おうとしていたところで行き違いになることなく、運良く遭遇することができた。

「皆さん、揃ってどうかしたんですか？」

このメンバーがいる理由が解らずにネギは首を傾げた。改めて記憶を模索してみるが、該当する用件はない。

「ああ、これからナギの別荘に行くんですよ」

詠春は後ろにいるアスカ達を見て、成る程確かに魔法を知っていると知らなければ共通性がないメンバーだと納得してしまう。

「あ、そうでしたね」

その言葉が引き金となって、ようやくネギは寝起きの頭がしっかりして自身が京都に来たかった理由を思い出した。

また本来ある流れならば和美やハルナに夕映・のどかもいる筈なのだが、図書館探検部三人娘は学園の許可なく勝手に泊まったという事で、今日一日ホテルで謹慎と反省文の作成をしている。そして和美はそもそも関西呪術協会に泊まっていないので、普通に班行動をしているので同行していない。

ようやく起きたネギを連れて事前の約束通り、ナギ・スプリングフィールドの別荘に向かうことになり、未だ寝巻き姿であるネギが

着替えるのを待ってからだが。

「あっ、タバコあかん」

ネギより一足速く洋装に着替えた詠春が待ち合わせ場所である関西呪術協会の入り口でタバコを吸おうとすると、木乃香が駆け寄ってタバコを取り上げる。木乃香がタバコを嫌いというよりも、詠春の身体を思ってである。吸いたいなら避ければいいが詠春はタバコをあっさり手放す。立場から来るストレスから時々吸って癖になっていたが、木乃香が傍にいてくれる方が彼には良く効く。

これからこの一行でナギの別荘を訪ねる訳だがエヴァンジェリンやネギが居る事もあって、案内は詠春自らが受け持っていた。

ネギも到着して総本山から現地までは少し歩くので、ネギと詠春が先頭でその後は数人ずつの纏まりになって話をしながら一行は進んでいく。

別荘に向かう道すがらネギは詠春の横に並ぶと、気になっていた事を質問した。

「長さん、小太郎君は……」

そもそも故郷では同年代の子供がアーニャ以外にいなく、魔法学校では勉強に没頭していたため友達自体が稀なネギには小太郎の事が気になっていた。魔法使いであるネギとは戦闘方法が違っていたが、同い年であれほど強い少年と会うのは初めてだった。それにネギには彼が悪人だとはどうしても思えない。

それを察したのか詠春は困ったような顔をしてネギを見る。

「それほど重くはならないでしょうがそれなりの処罰はあると思います。その辺りは私達にお任せ下さい」

狗族の少年、犬上小太郎はあくまで雇われただけなのと年齢を考慮して、そこまで罪は重くならない。それなりの処罰はあるが、事件の裏側のこともあってネギが気にするほどの事にはならないだろう。

「この奥です。三階建ての狭い建物ですよ」

どうして小太郎が雇われたのか、関わったのかを聞かれると答えづらい。それに人が大勢死んだのを話すのも、まだ幼いという年齢であるネギに話すのは忍びないと考えて、話を逸らすためにネギの興味を映すように前方を指差した。

それが功を奏して、ネギは話題から意識をずらしてくれたが詠春からしてみればいい気持ちではない。結局のところネギを子ども扱いしながらアスカに負担をしいているような気がしているからだ。

「さ、ここです。１０年の間に草木が茂ってしまいましたが、中は綺麗なものですよ」

その後、山道を進みながら自身がナギと腐れ縁の友人であることを教えたらネギが驚いたりしている間に目的地に到着したので立ち止まり、詠春は右手の草木が茂り白い壁がほとんど見えなくなった天文台付きの家を示した。

その建物は、敷地面積そのものは小さいが３階建てほどの高さがあり、外観はコンクリートそのままで、所々に窓があるようだが、

十年の年月で自由に生い茂る草木によって隠されてしまっている。その所為で何処か隠れ家じみた様相を呈している。

建物そのものは、コンクリートむき出しの武骨な外観の三階建ての建物だったが、屋根の一部分には金属製の半球が被さっており、本格的な天文台があるのが特徴的だった。個人の建物であれほどの設備をつけるとはかなりの趣味のようだ。下からはよく見えないが開閉可能らしく、星でも見たのだろうか。

一言で言うなら天文台が備え付けられている洋風建築の一軒家。それが魔法界の英雄ナギ・スプリングフィールドの別荘だった。

様々な理由で、彼らはこの家の内部に思いを馳せていた。

「京都だからもっと和風かと思った」

明日菜は京都にある隠れ家と言うことで、和風の屋敷をイメージしていたのだが、意外にもそこに建っていたのは、鉄筋コンクリート製の建造物であった。

アスカは中がキレイだと言う割には外の草木を放置しすぎではないかと首を傾げ、年代的に死んだと思われている災厄の女王（アリカ・アナルキア・エンテオフュシア）と一緒に暮らしていたはずだから天文台なんて目立つものがあることに更に首を傾げる。それとナギ・スプリングフィールドが天文台なんて本格的な施設を個人で所有しているのだから天文学に興味があるのか、と事前の情報と合わない人物像と比較して重ねて疑問符を抱く。

エヴァンジェリンは想い人である彼が住んでいた場所であるが故に複雑な顔をしていた。

「どうぞ。ネギ君、アスカ君」

詠春はポケットから鍵をとりだし、鍵穴に差し込んで玄関の鍵を開ける。扉を開けて彼らを招きいれた。詠春に促されてきょろきょろと、辺りを見渡しながら高鳴る興奮を抑えきれないネギを先頭に奥にある入口へと向かっていく。

ネギを先頭にぞろぞろと中に入り、ドアを支えていた詠春は最後になった。

「わ――――」

中に入っていくと其処は最後に主が去った時の姿のままで、皆が興味深げに見てネギの歓声が高い天井に吸い込まれていった。京都にありながら西洋風だった建物はモダンな内装が際立ち、中に入れば整頓されており中々に良いセンスをしていると伺える。

間取りそのものは詠春が言ったように内部はキレイなままで狭い三階建てだった。一階から三階までの中心に吹き抜けがある構造で、個室や区切られた部屋はほとんど存在しなかった。窓から入る光が明るく柔らかい雰囲気を演出しており、明かりをつけなくても十分明るい。吹き抜けになっているエリアの一面の壁には、天井まで届く巨大な本棚が据え付けられている。本棚の両側を挟む様に二階と三階が作られているが、各階層の天井は結構高い。

不自然なほどに壁の少ない家は、空を飛べないと利用し難い造りになっており、魔法使いの隠れ家だったと納得させるものがある。梯子はあるが下から数段分にしか届かない。梯子が届かない場所にまで本が置いてあるのは、恐らく本棚の裏側にある階段側からも取れる様になっているからだろう。それならそっち側からも取れる様

にしておくべきであろうがそこまで手が回らなかったのか。

大量の本に囲まれたそこはまさに本好きにとってはこんな所に住みたいと思わせる佇まいだ。

「彼が最後に訪れた時のままにしてあります」

「ここに……昔、父さんが……」

詠春の言葉に感動したように言葉を漏らすネギ。彼の持つサウザンドマスターの痕跡は、六年前の僅かな記憶と杖、その他は僅かに伝え聞いた話位。しかし、ココには確かにナギ・スプリングフィールドの過ごした月日が残っていた。

目を輝かせて父が住んでいた家を見て回ったり、少しでも父の事を知るために、願わくば彼の足跡の手掛かりを得る為に本を調べたりしている。貯蔵された魔術書の量、それだけでネギは自分の父親の功績を感じているようだった。

明日菜達もたくさんある本を興味深げに見て回っているし、エヴァンジェリンは感慨深げにナギが使っていたであろう家具などを手にとって見ている。

「……日記とか残ってたら良いんだけど」

その中でアスカは何か父親の手掛かりになりそうなものを探し始めた。あるかは分からないが探しているのはナギの日記。行方自体に興味はないが彼が何を見、何を感じたか興味がある。世界最強と呼ばれた男が世間的に死んだことになっているということは、それだけの何かがあったということだからだ。

棚を見上げたまま、立ち位置を奥にずらしていく。ざっとタイトルを眺めていくと英語は勿論の事、ラテン語やギリシア語。適当に手に取った本には難解な魔法理論や、アスカが未だ踏み入れた事の無い本国・魔法世界についての記述が書かれている。

「う～ん？」

ここでまた事前の情報との齟齬に傾げる。個人で調べた限りでは魔法学校中退の劣等生で、覚えている魔法も６つと少ない為、アンチョコの存在やメモが必須などエヴァンジェリンから裏付けも取れている。事前に把握した人物像からはとても勉強をする人間には思えない。天文台の事といい、まるで何か目的があるかのような感じが見受けられる。

「どうですか、ネギ君？」

「見たいものや調べたいものがたくさんあって……時間がないのが残念です」

アスカが本棚を見上げながら内心で首を傾げている頃、三階の一室で資料を見ていたネギの所に詠春が登ってきて尋ねる。いろいろと探してみるが、如何せん本の量が多く、修学旅行中なので時間が足りない。

「ハハ……またいつでも来ていいですよ。カギをお渡ししますので」

「あの……長さん……父さんのこと聞いていいですか」

少し微笑んでここの資料について軽く話した後に本以上に知りたい事……父ナギのことを教えてほしいと詠春に頼む。

「……ふむ、そうですね。アスカ君、このか、刹那君こっちへ……明日菜君も。あなた達にも色々話しておいた方がいいでしょう」

ネギからの言葉も半ば予想していたため大した反応も見せず、詠春は顎に手を当てどの辺りからどの辺りまでを話すかを考える。少し考えて下にいる者達にも声を掛けた。

声に応えてアスカ達四人と、呼ばれても無いのにエヴァンジェリンと茶々丸の主従も何かと三階に上ってくる。

「……この写真は？」

面子が揃った所で詠春が指し示したデスク前のアクリル製のスタンドに収められていた一枚の写真を見て、ネギが疑問の声を上げる。

「紅き翼の写真ですか」

何故、ネギは父の事を求めているのに紅き翼を知らないのかと疑問に思いながらアスカが答えを口にする。

「え！」

「ええ、そうです。サウザンドマスターの戦友たち……黒い服が私です」

アスカの返答にネギが驚き、詠春が正解だと答える。

それを見ると、写っているのはネギと同じ赤毛の少年――――ナギ・スプリングフィールドを中央に六人の男が写っていた。今、皆の傍にいる近衛詠春、旧姓青山詠春の若かりし頃の姿もある。他にもタバコくわえたスーツ姿のガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグ。褐色の肌で巨大な剣を持っているジャック・ラカン。ローブ姿の男性とも女性ともとれるアルビレオ・イマ。ナギに頭に手を置かれている十歳ぐらいの子供、ゼクト。

「私の隣に居るのが十五歳のナギ。サウザンドマスターです」

「……父さん」

写真の中心にいるナギは幼さが残っているにも関らず、このメンバーの中心的存在だと分かる。顔がそっくりなネギに比べるとナギのほうは野性味が入っている。ネギが優等性タイプだとすると、こちらは人に憎まれない悪ガキタイプといった感じだろうか。

「わひゃー。これ父様っ！　わかーい♪」

木乃香が覗き込んだのに続いて、他のメンバーもその写真に群がっていく。エヴァンジェリンも気になるようで覗き込もうとしている。

「え……」

木乃香達と一緒に写真を見ていた明日菜が不自然に動きを止めた。そしてまるで夢でも見ているかのように目がぼんやりとなる。

「明日菜さん？　どうかしました？」

「え？　ううん、何も」

写真の中の人物を見た明日菜の頭の中に何かが浮かびかけたが、アスカに声を掛けられて霧散する。

写真にそれほどの興味の無いアスカは皆の後ろで明日菜の様子がおかしい事に気付き、気になって思わず声をかけると夢から覚めたような表情で焦りだす。何でもないと答えるが何かが明日菜の頭に引っかかり、その後も不思議そうな表情を浮かべていた。

「私はかつての大戦で、まだ少年だったナギと共に戦った戦友でした……」

一段落ついたところで、詠春さんの話が始まった。語りが始まると皆は自然と口を閉じる。

その話によるとナギがサウザンドマスターと呼ばれるようになった英雄の話。そこで成した数々の活躍により彼は英雄、サウザンドマスターと呼ばれることになったという。

純粋に父親の活躍に目を輝かせるネギ。だが反対にアスカはまるで人形だと言われても信じそうな無感情。今回の件を起こした天ヶ崎千草の両親もその戦いで命を落し、それが今回の件の？がったというのは容易く想像できる。つまり、言うならば今回の事件はその大戦の延長みたいなものだったかもしれない。

その後も詠春の話は続くが、その締めは残念な事にネギの望んだものではなかった。

「しかし……彼は十年前、突然、姿を消す……彼の最後の足取り、彼がどうなったかを知る者はいません。ただし公式の記録では１９９３年死亡。それ以上の事は私にも……すいませんネギ君」

詠春は申し訳なさそうにそう言って一息つき、情報を求めてきたネギの方へ向いて申し訳なさそうな表情で詫びる。

「い、いえ、そんな……ありがとうございます、長さん」

詠春の謝罪にネギはお礼を言い、手摺を掴み改めて部屋を見渡す。

ネギの顔は曇らない。その後に彼は父に会っているのだから。詠春に礼を言うとネギは手すりに持たれる。

「結局、手掛かりなしか。残念だったな、兄貴」

「ううん。そんなことないよ、カモ君。父さんの部屋を見れただけでも来た甲斐があったよ」

吹き抜けになった空間を眺める。壁の一面を占める本棚。父の情報はなかったからネギは少し残念そうな色を浮かべているもののそこに絶望はなかった。残念と思ってはいるけど諦めてはいない。

そのネギの後ろで、詠春がアスカに話し掛ける。

「アスカ君、これを。ナギが最後にここに来た時研究していた物です。何かの手掛かりになれば良いのですが」

その手に先程は持っていなかった、筒状に丸めた紙の束。詠春はポスター大の大きさの紙を丸めた物をアスカに手渡す。事前に危険

があるかどうか、学園長に渡して判断してもらうことになっている。学園長に渡す役にアスカが選ばれたため詠春は渡している。

「見ても？」

「ええ、いいですよ」

どうも別荘に来てから不審な点が多く、確かめるために詠春の許可を貰ってアスカがその場で広げると、それは地図。書かれていた場所は麻帆良学園、それも地上部分だけではなく地下までもが記されていた。というより地下が中心に描かれている、という印象を受ける。当然、一般的な麻帆良の地図に地下まで書かれている物は無い。例外は図書館島探検部が持っている図書館島深部の地図ぐらいか。

それはさておき、地図には何か下手糞な獣みたいな絵と鳴き声らしき「ＧＡＡＡＡ」と危険だといいたいのか「ＤＡＮＧＥ」と書かれている。その下に「コッチ」と方向が示されて、その先には更に地下へ続く階段がある。ピースして笑っているナギらしき似顔絵と「オレノテガカリ」と日本語で明らさまなヒントがあった。

手掛かりというなら図書館島地下にいると思われるアルビレオ・イマのことなのだろう。しかし、何故ナギが麻帆良の地下を調べていたのか疑問を覚える。それに父の行方を捜しているネギにとっては都合の良すぎる手掛かりだと思える。まるで、誰かが事前に用意していたような……。

「分かりました。学園長に渡しておきます」

アスカは疑念を覚えたが今は横に置いておき、内容を頭に叩き込

んでから詠春に言って地図を畳む。麻帆良の地図である以上、学園長に渡しておけば必要になったらネギに渡すだろうという判断から。

「それじゃあ、さっさと始めますか」

その後、未だにネギが感慨深げに天井まで続く本棚を眺めている間にどこからともなく大量のダンボールを持ち出して来たアスカは、どんどん本棚の本を詰め込んでいく。しかも手でやっていては手間が掛かるので、魔法関係者しかいない事もあり物体操作の魔法を使っているので速い速い。

それを見た詠春とネギは、何事かとアスカの下に駆け寄ってくる。

「何事ですか、一体」

「エヴァンジェリンさんも協力してくれるので、ここにある本を全て麻帆良の自宅に持ち帰ろうと思いまして」

聞いてくる詠春に、アスカは魔法の操作をしながら横にいるエヴァンジェリンを示す。

「なっ！？」

「ちょ、ちょっと待ってください。ここにある本はネギ君も受け継ぐはずのもので……」

エヴァンジェリンが頷いたのを見たネギは驚きの声を上げ、詠春は戸惑いを露にして、突然始まった不穏な空気に明日菜達は遠巻きに眺める。

「ああ、見て写したら元に戻しますよ。僕は遺産を一切貰うつもりはありませんから」

アスカが興味があるのは、魔術書と多少の好奇心だけ。ネギと遺産を共有する意思はなく、それどころか逆に拒否する意思しかない。

一度見て写したらもう興味はないので元あった場所に返すだけ。そこに是非はない。

ネギが父がいた別荘を手放すわけがないから遺産として残るとしたら魔術書だろう。魔術書も売り払えば一角の金にはなるがアスカにはナギの恩恵を受ける気がない。ただの一つの恩恵もアスカは受ける気がない。それがアスカの意地であった。

アスカがナギに抱いているのは、憎しみか、愛情か、それとも……。

本人すら判別できない感情を持て余した彼の取れる行動は一切の拒絶だけ。

既にナギが法律上は故人であることを考えてアスカに否(いな)がある場合は、例えば裁判所に持ち込んだとしよう。

裁判所は当事者や利害関係人の言い分を聞いて、色々な調査をして、具体的な分割の審判つまり決定をする。だが、相続する片方が全てを拒否するというならネギが全部を相続することになる。

詠春もアスカを説得しようとするも、全くその気がないことが分かりどうするか悩む。兄弟仲良く共有して欲しいが、アスカにその気が全くないのが分かるので認めるしかない。

独り占めすることに嬉しいような気まずいような気持ちを表しているネギ。かといってナギの遺産を独り占めできるなら是非もない。

さっさと作業を終わらせるため全員に手伝ってもらったのでそう時間も掛かる事無く、全ての本をダンボールに詰め終わってエヴァンジェリンの影のゲートで麻帆良の自宅に送って皆で旅館へと戻った。

修学旅行も表向きは無事に終わり、午前中のうちに麻帆良学園に戻るために東京へと向かう新幹線に乗り込む。乗り込んで十分もしない内に寝息が聞こえ出した。それから数十分たった今では、３－Ａも旅の疲れが出て殆どの者が眠りにつき、行きのような騒がしさは無い。

「やれやれ、あれほどうるさかった３－Ａが静かなものですな」

車両入り口で、ほぼ貸切といっていい状態になっている車内を見渡しながら新田が寝ている生徒達を起こさないように気を利かせて声を顰めながら呟く。

やはり修学旅行の様な行事では、普段よりトラブルが起きる可能性も高い。それを生徒達が大過なく過ごしてくれた事が嬉しいのだ。

「ふふ、ホントに……ハシャギ疲れたんでしょうね」

新田の言葉にしずなは頷き、眠っている生徒達を眺める。

しかし、その場にアスカと木乃香の姿は無い。二人はその頃、車両と車両の間で向かい合っていた。

「解！　これで思い出せましたか？」

「……うん。思い出した」

エヴァンジェリンの事件が終わった直ぐ後、魔法の説明した日に修学旅行で起きる事を話した。もちろん何が起こるかなんてアスカにも分かっていなかったが、何かが木乃香を中心に起こり、その結果、人が死ぬだろうと。

話したのは完全にアスカの自己満足。どうしても嫌だというなら、あらゆる手段を使って回避しただろうが、アスカは卑怯と知りながら人生がかかっているだなんだと説得したのだ。

「いろんな人が死んだのは、うちのせいなんやろうか？」

「あなたの所為ではない……と言うのは簡単でしょう。それでも言います。あなたには責任はないと」

特定の記憶を思い出せない暗示の封印が解かれ、事前に言われて

いた事を思い出した木乃香は、事件のあらましを考えて悲しげに問いかける。

両手でスカートを握り、聞いてくる木乃香に言い聞かせるアスカは敢えて感情を消している。この話題は彼にしてもあまり好ましいものではなく、進んで話題にしたいとは思わない。

それでも俯いたままの木乃香に、アスカは嘆息して髪を掻く。

「事件については２０年以上前の火種が積もりに積もって再燃したものです。責任の所在を求めるなら関東魔法協会と関西呪術協会、両長の責任のもの。あなたの立場はあくまで巻き込まれただけで、責任を求めるのは筋違いです」

「でも……！」

言い聞かせるようなアスカの言葉に、木乃香は自分が京都に来なければこんな事件は起こらなかったのではないかと考えてしまう。しかし、彼女に一体なにができただろうか。親の意向で裏の事も、自分に秘められた力も知らなかった。家柄の事を抜きにすれば普通の子供と大差はない。

それが分かっていながらも木乃香が認められないのは生来の責任感の強さと、間違いなく今回の基点は自分にあったという考えから。

「どうしても納得できないなら……天ヶ崎千草という一人の人間がいたことを覚えておいて下さい」

「あの猿のお姉さんを……？」

「そういう人がいた、とそれだけでいいんです」

今回の首謀者の事を覚えておいてどうするのかと聞こうとして、木乃香は踏み留まる。アスカが涙は流れていないのに、とても悲しそうに見えたから聞ける雰囲気ではなかった。

僅かな悲哀と愛情を湛えるアスカの顔に、木乃香は一瞬、目の前の少年が年齢以上に大人びていると、老いていると感じるのであった。

思い出してみれば、どうしてアスカは事件が起きると知っていたのか疑問が浮かび上がる。そしてまるで最初から千草の事を知っていたかのような言葉。

「もしかして、アスカ君はあの人を知り合いやったん？」

「……さあ、どうでしょうね」

表向きは愛想の良いアスカだが、その実あまり人に内心をほとんど明かさないことに木乃香は気付いていた。そしてそれを悟らせることのないアスカが僅かに返答が遅れた。それだけで短いながらも付き合いのある木乃香には、二人には親交があったのだと確信できた。

それで何かが変わるわけではないが、少なくとも覚えておかなければいけないよう気がした。

「うん、分かった。覚えておくわ」

「ありがとうございます。そろそろ戻りましょう。あまり空けてお

くのも心配ですから」

木乃香の返答にアスカは僅かに笑みを浮かべて席に戻ろうと促す。断る理由のない木乃香も頷き、二人で車両へ戻る。

物語の本筋から離れた少年は、父の友人や足跡を追えた事に満足していた。

自身の意思で物語の本筋に入った少女は、戦いを経験して力が必要だと感じた。

本来なら関わるべき少年との縁(えにし)を持たぬ少女は、自身を取り巻く因果を認識して辛い現実を知った。

秘密を抱えていた少女は、戦友を得て、大切な少女に秘密を打ち明け得て前へ進む事ができた。

本来の物語にいないはずの少年は、幾人もの命を奪って多くの苦悩と悲哀を抱え、心に決して癒えぬ傷を残した。その心に一つの決心を宿し、今は心と身体を休める。

こうして数多くの人の運命を変え、影で幾つもの命の灯火が消え

た激動の修学旅行は終わりを告げた。麻帆良学園は新たな展開を用意して少年たちを待っている。

それはまだ何十にも分かれた断片（ピース）のままで、それらが一つになった時、どんな帰結（カタチ）になるのか……誰も知らなかった。

けれども、その運命という名の断片（ピース）は冷たい機械のように容赦なく組み上がり始めていた。

第七十一話　修学旅行四日目と少年　2（後書き）

今話の改定前との違い。

改定前：ナギの遺産（魔導書）を受け取る。

改定後：遺産の受け取りの一切の拒否。

となっております。

後々のフラグを散りばめつつ、連続投稿もこれにて終わりです。

次回更新は二週間後（日曜日（１１月１３日）と月曜日（１１月１４日）の間）の午前０時です。

章訳やら整理やらで少し時間を空けたいと思います。既に次話は出来ているのでお楽しみに。

一年かけて遂に改訂前に追いつきました。次からようやく先に進みます。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

もう少しで読了時間が約２０００分を越えます。どんだけ～ｗｗｗ

第七十二話　　生まれた疑念と少年（前書き）

ようやく改定前より先に進めます。

でも、その前に『第二十八話　帰還するも苦労は変わらない少年に』の修正報告を。

主人公が【アルビレオ・イマ】の存在に気付いた部分を削除して、【謎の術者】がいたことに気付いたに修正しました。ようは、干渉には気付いたけど正体は分からないと。

【第六章：修学旅行編】が終わってから章訳をしてまして、今話から新章【第七章：亀裂編】が始まります。

修学旅行によって生じた主人公の変化。主人公は魔法に関わる生徒たちとの違いを自覚させられる。僅かに生まれる亀裂。

それによって亀裂は現われる過去からの来訪者によって決定的なものとなる。

彼と彼女が下す決断とは……？

なんて格好つけてみました。

今話のタイトルには二重の意味があります。多分、本編を見たら分かるでしょう。

前後で主人公から感じる感触が１８０。変わります。シリアスとギャグくらい？

文字数は１５２５６字です。

第七十二話　生まれた疑念と少年

春の寒気も去り、風も温み始めた五月も末。麗らかな午後。

爽やかな陽気が道行く人の気分を高揚させる。外出日和とはこういう日の事を言うのだろうと万人が認める天気である。

学校が終わって遊びに行くのだろう、私服姿の生徒たちが笑いあいながら歩いてゆくのが見えた。

なにをそんなに笑うことがあるのだろう。スーパーの袋を持った買い物帰りらしいベビーカーを押す若い女性が一人、彼らの傍らを行き過ぎるのを見たアスカは、ふと不快感を覚えた。この通行人たちもふとした切欠で万一の事態に巻き込まれるかもしれない、と想像したからではない。巻き込まれる時は一瞬、死ぬのも簡単なことなのに、彼らはそんなことが起こるとは夢想だにしていない。意識的にも無意識的にも自らの死を考慮の外にし、昨日と変わらない今日が続くと信じている。

（どうしてこんなにも今日は苛立つ？）

所詮はそうした集団錯誤で成り立っているのが平和という状況であり、それはどうしようもなく脆いものらしいという理解が、この時のアスカには酷く癪（しゃく）に障（さわ）った。

（変わったのは俺だ）

己が殺伐としているだけなのだと自覚している。

修学旅行前まで当たり前に埋没できた日常という時間が、どうしようもなく色褪せて見える現実。多少の齟齬を含みながらも、問題なく回ってきた歯車が修学旅行での出来事を境に軋み始め、いまや完全に止まってしまったという実感。そういったものが自分を焦らせ、苛立たせてているのであって、周囲の所為にするのは筋違いとだと思う理性はアスカも失くしていなかった。

「……」

だから、視線を外して見えない防壁を張り巡らせる。現実を見ないように、苦しむ自分から目を逸らすように。

周りを意識から除外し、彼は歩みを進めた。

麻帆良学園学園長室。

修学旅行が終わって午前中に麻帆良に到着したアスカは荷物を自宅に置くこともせず、職員室で仕事をした後に休みもせず学園長室に出頭した。

「以上が、修学旅行での報告です」

修学旅行から帰ってきた当日、部活も修学旅行後で疲れているだろうということで休みだ。生徒たちは興奮冷めあらぬと遊んだり、疲れた体を癒すために休んだり、と理由は違っても皆それぞれ疲れを癒すことには違いない。

教師には残った後始末の雑務があれど翌日が休みであることを考えれば気は楽である。

そんな中で先に仕事を終わらせたアスカは学園長室にやってきた。

時刻は既に夕方。放課後さえも終わろうかという時間。そんな時でも学園長には仕事があるのか、この部屋の灯りは点いたまま。

「うむ。ごくろうじゃった」

学園長、近衛近右衛門はただ寂然とした顔を向けて満足、といった感じに髭を撫で付けながら答えた。

「京都では本当によくやってくれたのう。まさかスクナの封印が解けて被害がゼロですむとは思わんかったわい。改めて礼を言わせてもらうぞい」

それは当の関東魔法協会長である近衛近右衛門にしてみても、ここまでの事態は全くの寝耳に水のことであった。

そもそも関東魔法協会と関西呪術協会の関係はある種の暗黙の了解の下に成り立っていたと言ってもいい。

両協会長が義理の親子関係にあることも、本人にその自覚がないとはいえ魔術協会の重要人物である木乃香が麻帆良に在学してることも、お互い過剰に手出しをしないという無言の取り決めのようなものだ。

言ってしまえばネギに持たせた親書など、端から茶番だったのだ。

暗黙の了解は暗黙のうちだからこそお互い都合がよく、それを明文化しようとすれば余計な反発ばかり生まれるに決まっている。が、親書をどうにかされたからといって両者の関係が致命的なまでに悪化することなどありえない。

だが、関西側の動きは学園長の思惑を完全に上回っていた。

当初想定されていた妨害の域を遥かに超えた所業。

極めつけは西の総本山の襲撃、及び長も含めて石化して壊滅。そして紅き翼ですら封印することしか出来なかったリョウメンスクナノカミの封印からの解放。

状況から一概に言えないがアスカがいなければ全てが後手に回り、帰ってきて直ぐに彼が先に提出したレポート通りになっていた可能性もある。

「……本当にご苦労じゃったな」

一気に老け込んだように沈鬱な表情で近右衛門は言う。

正直なところ、自分達の判断の甘さが二つの組織の関係を危険に晒してしまったも同然だった。

「仕事ですから」

労い(ねぎら)の声に返って来たアスカの声は常と変わらず、本当にそう思っていると分かるものであった。

だが、だからこそ不審に思うものがあった。

今回の一件でアスカが果たした役割は大きい。

名実共に麻帆良側の司令塔（リーダー）であり、最後に出張った従者の玉藻のことは別にして殆ど表に出ていないものの、諜報面、防御面共に彼一人に依存していたとも言っていい。

彼の采配には一切の無駄は無く、それどころか関東、関西の両協会が足を引っ張っている。

更に彼が独自に調査した資料によって主犯天ヶ崎千草の裏に手を引いていた者たちの存在が明るみに出てきた。既に彼らは己だけで権益を独占するために仲間割れを起こして死んでいることも確認されている。

それによって天ヶ崎千草のことも見方が、ただの「テロリスト」から「両協会に振り回された被害者」という風に変わって広がっている。

先のレポートのこともあって事件の根本が見直され、両協会の付き合い方も以前とは別の物にならざるを得ない。確かに和平はなったが互いに道を模索していくことになるだろう。形だけの和平とは違って共有するものがあるのでより良き形となるは間違いない。妨害した彼女の行動こそが真の和平へと？がったのは皮肉と言える。

しかし、事件を止めた立役者であるアスカがまるで何かに迷っているかのような素振りが見えたのは年の功であろう。

（迷っていても何かを決めている、という感じかの？）

それでも敢えて尋ねなかったのは迷いの中に硬い決意を見て取れたから。

「それであの地図はどうするのでしょうか？」

「ん？　ふむ、あれか……どうしたもんかのう」

束の間だけ物思いに耽っていた学園長はアスカの問いに困ったように言葉を返す。

ここで言う地図とは彼が詠春から貰った図書館島の深部が描かれていたナギの残した物。

アスカ本人としては興味がなさそうで、本来なら父の手掛かりを求めているネギに渡すべきなのだが……。

（あそこにはアルビレオ・イマがおるが、門番として竜種もおるしな）

ネギにはまだ早いと思いながら、知った場合の彼の行動を推測して近右衛門は顔を顰めて唸る。

今のネギの力で図書館島を攻略するのは難しいどころではない。あそこは防犯上の理由から下層に入れる者はそれなりの実力者でなければ危険だった。

まだ見習いの域から出始めたネギには荷が重く、さりとて行くなと言っても聞き届けてくれるかどうか怪しい。父親の生存の手掛かりがあると知った以上は是が非でも挑戦する可能性が高いので慎重

にならざるをえない。

「まあ、それはおいおいと考えておくわい」

「分かりました」

それだけしか今は言えない。

当のアルビレオ・イマは学園祭でなにやら行動を起こすらしいので正直に言えば何もしないといった方が正しい。どうにかするにしても今すぐ答えを出せる問題ではないのでそう言うしかないのだ。

「用件は以上じゃ。報酬は既に口座に振り込んである。後の事は儂らに任せて君も休むといい」

ここまで時間が掛かってしまったのは、現状でこの事件に対して麻帆良側で最も理解しているのがアスカだけということがあったからだ。

これからのことは両組織の問題となるためアスカでなくても十分に行える。

いい加減に疲れているアスカにも疲れた体を休んでもらいたいと純粋な好意だった。

「はい、失礼します」

「うむ」

何時ものように礼儀正しく頭を下げたアスカに頷き、彼が身を返

して返ろうとしたその時、

――――――ゾクッ！

ドアに向かおうと振り向き、身を翻した一瞬だけサングラスの横側から長い前髪から覗いたアスカの目を見た瞬間、学園長の背中に怖気が走るほどに冷たい光を見た。

学園長室に入って一目見た瞬間から感じていた違和感。

人の良い笑みの裏側に見え隠れするナニか。

そして何よりも修羅場を生き抜いてきた者特有の匂いが少年から感じ取れた。

あまりにも一瞬ことだったので、学園長も自分の味わった感覚が単なる気の所為かと混乱するほどだが、思わず精神的に身構えた自身の心が事実を証明している。肉体は衰えたので精神よりも反応するのに時間が掛かったことで肉体を押さえ込むことが出来た。

アスカの鈍い光を放つ目と学園長の老獪な観察眼があって初めて気付いた事実。

（何じゃ？　一体、彼に何があった？）

ツゥと、アスカが学園長室から出て行った後も額から流れ落ちる汗にも気づかず、学園長は人知れず自問した。

――――神楽坂明日菜は夢を見ていた。

（……あれ？　ここ、どこ？）

「ん……」

体は仰向けになっていた。眠っていたのだから当然だと、その時は思う。

とはいえ、初めはそれが夢とは分からなかった。目は開いていて、最初に目に飛び込んできたのは満天の星空。こんな場所に来た記憶は無く、コレほどまでに綺麗な光景ならば記憶に残っているはず。

となれば、やっとこれが夢だと理解した。

今のところ、別段悪夢と言うわけではない。そんな時は、いつも早く目が覚めないかと念じるものだけれど、もうしばらく眺めていてもいいと思う。そう、夢とはドラマを見るような第三者の視点から見る感じと似ていた。

（砂漠……？）

今いる平らな岩の向こうは夜のために判別はしづらいものの砂の

海、砂漠のように見えた。

近くで、パチ、パチと何かの弾ける音が聞こえた。　焚き火の中で木が爆ぜる音だろう。人の営みを感じさせる明るさと暖かさに上半身を起こしてそちらを見ると、そこに、灰色のスーツを来た男が座っていた。

焚き火を眺めながら煙草を吸う彼の顔は、赤く染まっている。何かを考えている様子であったが、明日菜が出した声に気付いたらしく、彼はこちらに視線を向けた。自分の好みである渋い顔の彼は、同じく好みの渋い声を発した。

「よお……起きたか嬢ちゃん」

（……げ。誰、この渋いオジサマは！？）

自分好みドストライクの相手が直ぐ傍にいることに驚きつつ誰だろうと内心で首を捻ったつもりだったのだが、それに反して体は動かない。精神と肉体がそれぞれ別行動をとっている感じで、不思議な気分に襲われた。

夢なので思い通りに動かないと言ってしまえばそれまでであるが、どうしても惜しい気がした。そう、何故かどうしても惜しい気がしたのだ。

「顔、洗うならあっちだ」

渋い男性が咥えタバコのまま指差したのは、直ぐ近くにあった顔が洗える水場がある所。

「うん」

（あ、ちょっと何処行くのよ。もちょっと見させてってばオジサマを！？）

夢の中の明日菜は素直に頷き、脳内の明日菜の想いとは裏腹に男性の言葉に従って移動する。

どうしてか懐かしい気がする彼の顔をもう少し見たかったけれど、体は勝手に水場へと向かうも何故か視点がいつもより低い気がする。

向かった先には浅い水場があった。水を掬おうと膝をついた時に、夢の中の自分をはっきり見ることができた。

（……ん？　これ、私……？　小さい頃の……私……？）

水面に映ったのは、あまり昔の自分の姿というのは記憶に残っていないものだが、今と同じツインテールをした毎日見ている自分を幼くしたような姿だった。

幼い時の自分、愛想の欠片もなかったころの自分が、そこにいた。着ている服は小学生の頃の制服に似た上と下が一体化した服。今と違うのは鈴のついた髪留めがついていないことだろうか。

（キレイな星空……。何で私、こんな所にいるんだろ）

水場で顔を洗った小さな明日菜は満点の星空を眺めていた。

記憶にない出来事に混乱していたのもあるだろう。地上に光が少ないからか、麻帆良で見るそれより星の数はかなり多く感じる。

「帰ったぜー」

そろそろ夜明け前。空が白く、明るく。1日の始まりの光に照らされていく中で彼はやってきた。

「おっと……早かったな」

「ネズミみたいなのが三匹取れた」

「みたいのって食うのかソレ」

遠くで、先程の渋い男性とは若い男性の声が響いた。

徐々に朝日に塗り潰されていく夜空を見上げていた明日菜が視線を下ろすと、焚き火の側でその二人が何やら話しているのが見える。

「お♪　お早いお目覚めだな」

（あれ――――――私……この人、知ってる……）

ネズミらしい生き物の尻尾を持ってプラーンとさせて食えるかどうか悩んでいる渋い男性は別にして、朝日の逆行で時間的に朝食を探しに行っていたらしい男性の表情は窺えないがどんな服装なのかは分かった。黒のインナーに、白いロングコートである。

「オハヨー、ナギ……」

（でも、ちょっと待ってよ。何で私が知ってるの？）

その彼がこちらに近づいてきたので、その顔をちゃんと見ることができた。ぼんやりと目をこすっていたけれど、顔をはっきり見た自分は何がどうなっているか、全くと言っていいほど分からない。

だって、その顔は、あの家にあった写真立ての中でしか見たことがないはずなのだ。

それに幼い自分の口から親しみのある慣れた口調で出た目の前の男性の名前を口にしたことが関係していることを表している。

「向こうの空見てみな、アスナ。夜明けがキレイだぜ」

そう、まるでネギを大人にしてワイルドな成分を混ぜたような男――――ネギとアスカの実父であるナギ・スプリングフィールドが自分に向かって笑みを浮かべていた。

「……変な夢」

そこで、夢は途切れる。そしてその時にはもう、まるでまだ真実を知るときではないと謂わんばかりに夢の内容はぼやけてしまっていた。

後に残ったのはひとつ。可笑しな夢だという印象だけだった。

「……そっか、修学旅行から帰って来たんだ」

ゆっくりと身体を起こす。

修学旅行から帰ってきて興奮冷めあらずに木乃香と話し込んでしまい、目覚めてみればとっくにお昼も近い時間になっていた。

「今日は日曜日か……」

幸い、今日は日曜日。お昼近くまで寝過ごしてしまっても罰は当たらないはずだ。

うーん、と腕を伸ばして身体の筋を伸ばす。寝起きだと言うことを差し引いても、身体の芯に重さがこびりついているような気がする。

まだ、修学旅行の疲れが抜けきっていないのだろうか。

考えてみれば激動の修学旅行だった。

以前から知ってはいても本格的に関わることになった裏の世界。

踏み込んだのは自分自身の意思。そこに後悔はないけれど目を瞑れば召喚された鬼などと見(まみ)えた剣戟を今でも思い起こせる。

恐らく、というか間違いなく一生記憶に残る修学旅行になったことだろう。そんな修学旅行を無事に終わらせたのだ。疲れていないはずがない。

「よしっ！」

疲れた体に気合を入れるように声を出し、立ち上がる。

今日は大事な約束と、決意を告げる日なのだから万が一にも遅れるわけにもいかない。

「でも、その前にお昼ご飯を食べないとね」

起きてから自己主張を繰り返して鳴らしまくるお腹を頬を紅くして押さえ、誰に言うでもなく言い訳のように呟くのであった。

同じく日曜日の昼、珍しく鍛錬をせずに自宅にいるアスカは、読書魔法を展開して複数の書物を読んでいた。

その書物は千草が集めた呪いに関するものが書かれている。

呪いとは、人あるいは霊が、物理的手段によらず精神的・霊的な手段で、他の人、社会や世界全般に対して、悪意をもって災厄・不幸をもたらす行為をいう。

日本では既に死んだ人・動物や神霊がなす呪いを特に「祟り」と呼び分けることが多い。呪術（まじない）とも関係が深いが、呪術という言葉は意図および結果の善悪にかかわらず用いられるのに対し、呪いという言葉はもっぱら悪い意味で用いられる。

呪いは生きた人間による場合には、呪文、祈祷、その他の言語的、呪術的または宗教的な行為によって行われるとされることが多い。

具体的には宗教・文化的背景によって様々な違いがあり、神・悪魔その他の強力な霊の力を借りてなされると考えられたり、あるいは自己の霊能力によると考えられたりする。日本では、丑の刻参りが呪術的な行為によるものの代表的なものである。

呪いともなれば貴重な物が多く、扱いが難しい。本来ならば外部の人間に与えることなど出来るはずもない。

呪殺と呼ばれる呪術、『死』に至る呪いには目を見張るものが多い。

何時、何処で、誰が、誰に、全ては殺された誰かが解かった時点で手遅れ。集団の中でなら疑心暗鬼も起こせるだろう。そうすればガタガタになった集団は機能しなくなる。

「次は……」

一冊を読み終えたので読書魔法を展開しながら、集中できる姿勢である座禅をしたまま検索魔法を使用して次の書物を呼び寄せて開く。

ここまでならば、ミッドチルダ式の魔法を少しでもかじったことがある者になら誰にだって出来ることだ。

読書魔法に検索魔法――――――そのどちらも便利ではあるが大きく精神に負担をかける魔法だ。あまりに多用しすぎると数時間使っただけで自衛本能が働き、頭痛を引き起こす魔法だが適度に使う分には問題ない。

ただし、アスカには無限書庫で「闇の書」を調べたユーノ・スク

ライアのような検索魔法や読書魔法の多重同時使用という、ただの基本魔法の同時展開でしかないがある種レアスキルとも言える才能はない。

デバイスなしでは3冊だけしか同時平行に出来ないので時間的にあまり大差はない。

本人曰く、「こっちの方が早く終わるから」である。ぶっちゃけ【影分身の術】で分けてやった方が早いのだが。ようは覚えたての魔法を使いたいだけなのであった。

知識を蓄え、自分のものとする。それは今までアスカがしていたことと大差ない。

「ん……？」

そろそろ持って帰って来た本を全て読みきろうかという時になって、微かにだが気配が引っ掛かった。

「帰ったぞ」

そして丁度、読み終わったと同時に家の玄関が開いて着物姿の金髪の女性――――玉藻が書類袋と数冊の本を持って入ってきた。

「お帰り、どこに行ってたの？」

「なんじゃ、忘れたのか？　図書館島の地下じゃよ」

「ああ、そういえば」

問いかけに返って来たのは呆れたような返答。

思い返してみれば出て行く時にそんなことを言っていたことを思い出した。そも、図書館島の深部が描かれていたナギの残した地図を探ってくるように頼んだのはアスカ自身。当の本人に忘れられていたとあっては玉藻が呆れてしまうのは無理はない。

「まあいい。いくぞ」

「OK。何時でもいいよ」

どうも疲れた様子なので気にしないことにしたらしい玉藻が人差し指をアスカの額につける。

これから行うのは二人だからこそ可能な記憶の共有。魂を共有しているからこそ何時からか互いの記憶を読み取れるようになったので、玉藻が探った情報を見せてもらうのだ。

「……ん」

瞳を閉じたと同時に流れ込み、脳裏に浮かんだ幾つもの風景。

学期末のように図書館島の地下に潜り、幻の地底図書館を越えた通路には、それ一本が平均的な街路樹の幹の太さに匹敵する根が張り巡らされていた。

恐らく世界樹の根っこであろう。麻帆良の住人なら、規模からして世界樹と結びつけるのは至極妥当な推論であった。

根に沿って通路を進むと広い空間に出た。そこは球状の広間で吹

き抜け状になっており、あちこちに通路があり、壁には大きな木の根が広がっている。四方から伸びる通路が繋がるのは、六芒星（ヘキサグラム）の魔方陣が描かれた円盤。真下から柱が伸び、その周囲に数本の円環が浮遊する。全てのパーツが宙に浮いて存在する、「魔法の遺跡」と呼ぶに相応しい代物。

更に風景は流れていく。

辿り着いたのは世界樹の根に囲まれるように聳（そび）え立つ、優に五メートルはある古い立派な門と石造りの扉。

地図が示していたのはこの先。結界もあって普通の人には辿り着けない仕組みになっていた。

その門の近くには十メートルは軽く超えている巨大な翼竜が控えており、野良がいるとも思えないので門番か何かのだろう。

「これ以上は無理……か」

そこで映像は終わり、離れていく玉藻の指先と共に現実へと回帰した。

「あの竜を倒すのは難しくないが流石に戦闘を行ってバレない自信はなかったからの。引き上げてきたわけじゃ」

如何な玉藻とて不意打ちをかましてもバレない自信がなかった。学園長だけならまだしも、麻帆良にはもう一人彼クラスの術者がいる。所在が分からない学園長クラスの術者を誤魔化すにはアレ以上先に進むことは不可能であった。

「仕方ないよ。しかし、巨大遺跡に手掛かりらしきものねぇ」

ナギの残した手掛かりというのは恐らくその術者か、扉の向こうにある何かに秘密があることは予測がついた。

しかし、巨大遺跡のことも考えると他の可能性も考えられる。

「大概にこの麻帆良も怪しい気がする」

「確かに。世界樹然り、巨大遺跡然り。ただの学園都市とも思えぬ」

二人揃って頭を捻って考え込む。

「そう言えば、それ何？」

考えても答えが分からず、読み終わった書物を【影分身の術】で出した分身に別荘にある書庫に収納するのを任せ、カーペットに胡坐をかいていた姿勢から立ち上がって椅子に座りながら問いかける。

「依頼しておった調査報告書じゃよ。こっちはまあ、後でな」

へ～とアスカは分厚い書類袋を自分に渡し、本をテーブルに置いてお茶を入れに台所に立った玉藻の後姿を見つつ、袋を空けて中身を取り出す。

「あれ？　あ、そっか」

取り出した書類の『ナギ・スプリングフィールドに関する第十五次報告書』という見出しに思わず疑問符を上げるが直ぐに納得する。

『神楽坂明日菜』『フェイト・アーウェンルンクス』と調査対象は増えたものの、最初に調べていたのは『ナギ・スプリングフィールド』だけだったのだ。最近は明日菜の調査報告書ばかりだったものだからうっかり今回もそうだと勘違いしていた。

「なにか新しいことは分かったかな」

少し検索魔法と読書魔法を使って疲労したのか、何時もよりかは間延びした、本当にリラックスした声を上げながら表紙を捲って中の文章を読んでいく。

元々、旅時代もその場所にナギとの縁があれば調べはしていた。

麻帆良に来てからは個人的興味で伝手を使って調べていた。旅時代と半年かかって調べられたことはそう多くは無い。

当時の記録を調べると１０年前にトルコ共和国西部に位置する都市イスタンブールで行方を眩ましている。死体などは見つかっておらず、考えられるとすれば最後は魔法世界に渡ったのか。

「ん～、イスタンブールに魔法世界に行くゲートってあったっけ？」

イスタンブールに魔法協会があることはフェイトのことを調べた段階で判明している。だけど、そこにゲートがあるかまでは調べていないので分からない。

そもそもゲートは世界中に数ヶ所しかなくない上に扉が開くのは週に一度、酷い時は一ヶ月に一度なんてこともある。元々さして魔法世界に興味が無かったので放っておいたのだがこれならば調べておけばよかったと後悔。

「そう言えばフェイトも一ヶ月前にイスタンブールの魔法協会から日本へ研修として派遣されたんじゃったな」

玉藻が言いながら沸いたお湯を急須に入れ、出来上がったお茶を湯のみに入れて書類を捲るアスカの前にそっと差し出す。

「そうだったね。あ、お茶、ありがとう」

「ふふ、どういたしまして」

猫舌なので息を吹きかけて冷ましながら頷き、お茶を入れてもらった礼を言う。

お茶が飲めずに冷ますアスカの年相応に少年らしいところが好きな玉藻は微笑を浮かべて体面の席へと座った。

（しかし、これは偶然かな？）

ナギが行方を絶ったのはイスタンブール。フェイトが派遣された魔法協会があるのもイスタンブール。

単なる偶然と片付けてしまえばそれで終了な話題。

フェイトの見た目はその実力に反してネギと同じぐらいの年齢。年齢から考えればどうやっても符合しないナギとフェイトの二人だがこの時のアスカにはどうしても気になった。

第六感というかなにかそういうものが囁く。

そもそもアスカは写真と書類の中でしかフェイトのことを知らない。実際は顔すら見たことがないにも関わらず、ナギやネギとは別にフェイトの存在はアスカの中の何かを刺激していた。

「う～ん……ん？」

その何かが分からずに書類を読み進めながら頭を捻っていたアスカは気になる単語を見つけた。

「天文学……？」

どうも天文学を調べていたらしく、どうも事前に聞いたナギの人物像と当てはまらない。

（はて？　直ぐ前にも同じ事を思ったような）

極最近に似たようなことを考えたことを思い出し、なんだったかを記憶を辿れば直ぐに分かった。

修学旅行でナギの別荘に行った際に天文台を見て、本格的な施設を個人で所有しているのだから天文学に興味があるのか、と事前の情報と合わない人物像と比較して疑問符を抱いていたのを思い出した。

事前に話を聞いて構築していたのは豪快で大雑把な人物像。

「特に火星に興味あり……か」

そう締め括られた書類を机の上に投げ出し、ようやく猫舌のアスカでも飲めるぐらいの温度になったお茶を口に含む。

……天文台……天文学……火星……

お茶を飲みながら疲れているのか、キーワードが頭の中でリフレインしていく。

初めて使った読書魔法と検索魔法の疲労は意外に重く、重責から解放されたこと、修学旅行で溜まった疲労を癒すために昨夜は爆睡したこと、今日が休みということもあってリラックスして頭が全然働かない。

麻帆良に帰ってきてからも抜けなかった修学旅行中の緊張感は一日経つと安全な領域（テリトリー）にいることで抜けすぎたようで、逆に腑抜けた有様になっていた。それだけ自宅がリラックスできる場所ということだが、昨日と今日で落差があり過ぎだった。

……趣味……合わぬ人物像……ナギ・スプリングフィールド……

いい加減に考えるのが面倒になってきたのか途中からは連想ゲームのようにキーワードを羅列しているだけでなんの意味もない。玉藻もお茶に息を吹きかけながらやる気のなさそうに書類を見ているアスカに苦笑しているだけだ。

……魔法使い……大戦の英雄……魔法世界……

……火星……

他に何かないかと放り出した書類をパラパラと斜め読みしている途中で、最後のページでまた目に入った「火星」をキーワードに加えると何かが？がった。

「魔法世界、火星？」

待て、と己に言い聞かせるように閉じかけたページをもう一度開いて思わず呟いた情報を精査する。

アスカが思い描くナギの人物像は彼と接した多くの人の話を聞いて構築したもの。その人物像では天文学という趣味はどこか彼に合わない。

勿論、趣味は人それぞれであり、似合わない趣味を持っていても別段不思議ではない。

だが、最初の前提を変えてみたらどうだろうか。

趣味ではなく必要に迫られたものだとしたら、そこにはなにかの必然があるはず。

そもそも魔法世界（ムンドゥス・マギクス）とは旧世界（ムンドゥス・ウェトゥス）と対になって存在するもう一つの世界である。獣人や妖精などが存在し、魔法技術を基盤とした独自の文明が発達している。魔法の世界といっても夢とメルヘンにあふれているわけではなく、地球と同様の現実的な世界である。総人口は人間・亜人合わせておよそ１２億人程度。

魔法世界に地球から移住してきた人間、新しき民はメガロメセンブリアを盟主とする北の連合（メセンブリーナ連合）を、先住の獣人ら古き民は南の帝国（ヘラス帝国）を形成し共存してきた。しかし、２０年前に「完全なる世界」が対立を煽り両者は戦争状態になった。真相を暴き、世界を滅亡の危機から救ったのがサウザンド・マスターに率いられた「紅き翼」であった。

魔法世界は『異界』にあるとされている。

一般魔法理論によると『異界』とは現実世界に重なり合うように、或いは現実から半歩足を踏み出した場所にあるのだとされている。なので現実世界が岩だらけでも問題は無い。

妖精や死者たちの住まうこの世ならざる場所『異界』。

日本では竜宮城や高天原……最近ではトンネルを抜けた先にあるお風呂屋さん付きの不思議な街などが有名だが、問題なのは広大な異界はそれに見合った現実世界の広大な土地を必要とする。

『異界』では竜宮城でも、『現実』ではただの海底という風に。

魔法使いの常識として魔法世界は魔法世界としてあることになんの疑問も抱かなかったが、改めて考えてみると総面積が地球の三分の一ほどでしかないにしても広大な魔法世界に対応する現実世界上の空間はどこにあるのか？

一番の可能性である地球では大き過ぎる。

仮定してみよう。

火星が魔法世界とするならば広さの問題は解消して大きさも手頃。

だけど、

「魔法世界が火星の異界であると証明できる証拠は何もないし、そもそもどうやって火星に行くんだよ」

結局はそこに行き着く。

確かにナギが火星を調べていたことは魔法世界のことを調べていたのだとするならば納得がいく。

だけど、火星が魔法世界だと証明する証拠はなにもなく、そもそも『異界』を作るにしても火星に行かずに作ることは出来ないだろう。これではまだナギの趣味が天文学だったという方が納得がいく。

「いい線をいってたと思うんだけどな……」

そしてなんともなしに玉藻が置いて行った本を手繰り寄せて広げた。

「ふ～ん、え～と、なになに……なんだこれ？　なにかに似ているような」

図書館島の印があることから借りてきたらしい数冊の本（勿論、ちゃんと正規の手段で借りてきたものである）を先程同様に肘をついて顔を支えてやる気のない姿勢で見ていたアスカは、その内の一冊のページにあったそれにどこかで見たような既視感。

「う～ん」

どれだけ頭を捻っても解答が思いつかない。先程と違って記憶を探っても思い出せないということは重要なことではないのか。

真剣に面倒くさくなって放り出そうかという段になって、考え事をしている間に何時の間にかお茶は全部飲み終わったらしく、なんとなく自分で動く気がしなくて玉藻に頼もうとして……

「あれ、いない？」

これまた何時の間にか対面に座っていたはずの玉藻の姿が無い。

「どこか行ったのかな……」

家の中に気配は無く、考えに耽っている間に買い物にでも行ったのかと考えて仕方なく自分でお茶を入れようと湯のみを持って立ち上がる。

急須に入っていたお茶を湯のみに注いでまた椅子に座った丁度その時に出かけていたらしい玉藻が帰って来た。玄関ではなく、壁際に置かれたボトルシップのような丸い瓶から突然、現われた。

なにやら『別荘』に入っていたらしい玉藻の手には、使いすぎて草臥（くたび）れた一冊の本があった。

「どうしたの？」

「ちょっと『別荘』に用があってな」

もう考える気もなくしてだらっと椅子に凭（もた）れたダルそうな問いかけに、外とはまた違った姿を自分だけに見せるアスカに頬をこれ以上ないぐらいに緩ませた玉藻が答える。

彼女が人前でここまで緩んだ顔を見せるのもまたアスカの前だけである。

それはさておき。

何故彼女が『別荘』に行っていたかというとアスカの呟きを聞いて情報を補完するものがないかと探しに行ったのだ。

全ての行動が計算尽くしのようでどこか抜けたところがあるアスカを助けるのが自身の役目であると玉藻は常々考えている。導けるほどの経験は、いっては悪いがたかだか数十年しか人間世界で生きていない玉藻に出来るはずもない。

出来るとしたら傍に寄り添って悲しみを和らげ、足りない所を補うことである。

それはさておき、玉藻が持った本に見覚えがあったアスカが顔を顰めた。

「それって魔法学校の初等教育の本じゃない。なんでまたそんなものを」

「いや、我も少し気になったものでな。調べてみればビンゴじゃ」

アスカよりも先に調査報告書を読んでいた彼女は、確信に近づいているのだろう。アスカにも自分で気づけるように図書館島から本を借りてきたり、あまりにも使いすぎて手垢がついた本を書庫の奥から穿り出してきたようだ。

呆れて問いかけるアスカに、書庫で埃を被っていた本を出してきたことでムズムズするのか、形の整った鼻を気にしながら本のページを開いて差し出す。

「これは……まさか？！」

玉藻が差し出した本のページに映ったものを気怠そうに見つめていたアスカは、急に元気になって玉藻が図書館島から借りてきた一冊の本のとあるページを急いで開き、両者を物凄い形相で比較し始めた。

「そうか、そういうことだったのか！！」

それだけでさっきの既視感の正体を理解した。

魔法学校に通ったことがあるものならば一度ぐらいは目にしたことがあるそれと玉藻が図書館島から借りてきた本に載っていたそれ。細部に違いはあるものの大部分が似通っている。

「――――――――――まさか魔法世界が火星にあるなんてっ！！！！！」

ありえない現実を前に頭から直ぐに追い出した可能性が実は正しかったのだ。

そういま手元にある魔法学校初等教育に載っている魔法世界の地

図と、火星の地図はこうやって横に並べて比較してみれば一目瞭然。

ヘラス帝国＝ヘラス盆地など地名や無名の火星との類似はかなりの数に登る。

火星の大地を触媒に、その上に重なり合うように存在する幻想世界――――それが『魔法世界』という推論が成り立つ。

「まあ、だから何って話なんじゃが」

分からなかったことが分かってテンションが急上昇して思わず立ち上がったアスカの熱を冷ますような玉藻の一言だった。

「そうなんだよね～」

舞い上がった自分が恥ずかしくてそそくさと座って同意する。

その真実自体、恐らくは知っているものは多いだろうことは直ぐに分かる。アスカが辿り着けたのは幾つかのヒントと運、手助けがあったとはいえ、まさか個人に辿り着けたことが組織に辿り着けないはずがない。

「火星に偶発的に異界が出来て、偶々地球とゲートが？がった……とは考えにくいの」

「なんらかの方法で火星に辿り着いた誰かが魔法世界を作った……と考える方が自然なのかな？」

玉藻の言う通り、偶然と言うには奇跡が起こりすぎている。かといってアスカが言ったことも荒唐無稽すぎて説得力に欠けている。

二人は同時に頭を捻り、

「「考えても仕方ない」」

どれだけ考えても二人には情報を埋める断片（ピース）が足りない。この状況で考えても千日手。推測ばかりで答えが出るはずも無い。

「調べてみよっかな、魔法世界」

こう、後少しで分かりそうで分からない状況はアスカとしては非常に面映（おもはゆ）い。

あまり勉強が特異ではなさそうなイメージのあるナギがわざわざ調べていたのだから、そこには調べるだけの理由があるはず。推測は出来るが先程までの『火星＝魔法世界』説と同様に証拠はない。

どうせ修学旅行が終わって少しだけ手が空いたのも事実。これを機会に調べてみるのもいいかもしれない。調べる理由はそれだけではない。

「どうも都合が良すぎる気がする」

詠春が渡した地図がナギが残したものだとして一体何時、誰が、誰の手に届けるためなのか。

もし、ネギとアスカの子供たちの手に届けるための物だと言うのであれば、その者は、イギリスはウェールズに通じるゲートに程近い旧世界に暮らすネギや、世界を放浪していたアスカが京都に来る事を知っていた事になる。

そもそも、『千の呪文の男』が消息不明となり、死んだとされたのは、二人が生まれる前後の話だ。そんな微妙な時期に残したものだとすれば、彼に繋がる何かしらの情報であり、それを預かっていた詠春は何かを知っていると言う風に考えられる。

これはナギが詠春に預けたと仮定すればの話であり、別人が仕掛けた罠という可能性もある。

しかし、それもまた変な話になる。罠だとすれば、一体何を目的としているのか。二人を誘き寄せるにしても回りくど過ぎるというより、確実性が無さ過ぎると言うべきか。

何時彼らの手に地図が渡るか、何時地図の場所に行くかは分からない。仮に罠だとすれば、仕掛けた相手はずっと図書館島の地下深くで待ち構えているとでも言うのだろうか。

疑って掛かればキリがないが、最悪の場合、図書館島地下深くで待ち構えている者、詠春、近衛近右衛門、果ては二人の日本行きを決めた魔法学校の校長まで、関係者全員がグルとなって行動を誘導していると言う可能性も有り得る。ネギが麻帆良に来てからの珍事でも強制送還されない理由がそこにあるのだと言われてしまえば妙な納得をしてしまう。

疑い出せばキリがなく、思考の迷路に嵌ったアスカを呼び戻したのは玉藻の声。

「その前にもう少ししたら約束の時間ではないのか？」

「あ」

玉藻が指した先にあるのは壁掛け時計。現在時刻は昼過ぎ、おやつ少し前という時刻。思いの外、物思いに耽っていた時間は長かったようだ。

待ち合わせの場所は麻帆良女子中から程近い、修学旅行前に真名と楓を呼んだカフェテラス『ＳＴＡＲＢＯＯＫＳ　ＣＯＦＦＥＥ』にて待ち合わせの約束があるのだ。

アスカたちが住んでいる家は麻帆良女子中からかなり遠く、電車でも目的地まで少し時間がかかる。

で、約束時刻はおやつ時間きっかり。現在時刻はおやつ少し前という時刻。

つまり、

「遅刻だぁぁぁあああああああああ――――――――――――――っっっ！！！！！！」

間に合うには今すぐ全速力で走り出すしかない。

先程の気怠（けだる）そうな仕草をかなぐり捨て、家を飛び出して走った。

そりゃあもう全速力で。

この日、麻帆良学園都市では凄い形相で爆走する少年の姿が目撃されたとか。

第七十二話　　生まれた疑念と少年（後書き）

順番に、

？主人公がなにかを決めたようです。

？学園長が主人公の異変に気づき、疑念を持ちました。

？主人公が麻帆良に対して疑念を持ちました。

？【魔法世界＝火星】に気づきました

【魔法世界＝火星】はご都合主義でしたかね。出来るだけの伏線（修学旅行終盤）を張って回収しましたけど。

ですが、魔法世界崩壊には気づいていません。可能性として挙げてはいますが。

次回更新は一週間後（日曜日と月曜日の間）の午前０時です。弟子入りでのアレコレです。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

第七十三話　　発端と少年（前書き）

オリジナル新忍術案を活動報告に移しました。

今話は主人公サイド四割、ネギサイド六割って感じでしょうか。フラグみたいなのを入れましたけど丸わかりでしょう。

文字数は１２４８６字です。

それではどうぞ！！

第七十三話　　発端と少年

修学旅行明けの休日、時刻はおやつ頃の１５時。

「それではこのことは内密に……」

アスカはなんとか時間通りにカフェテラス『ＳＴＡＲＢＯＯＫＳ　ＣＯＦＦＥＥ』に着いた。

変わりに『人外の速度で爆走する少年』という新たな麻帆良伝説を作った張本人であるアスカは、全力疾走で荒れた息を整えながら京都で助っ人に来てくれた三人にお礼を述べていた。

「わかってるよ、アスカ先生」

「私達口堅いアルよ♪」

「あいあい」

上から巫女服を着た龍宮真名、チャイナ服を着た古菲、私服の楓の３人だ。

休日なので私服なのは問題ない。古菲は持ち前のキャラクターもあってチャイナ服を着ていても何も違和感はないが、何故に真名は巫女服という私服には不似合いな服を着ているのか。幾ら『龍宮神社』の娘で普段はこの仕事をしているといっても巫女服で出歩く根性は凄い。

それぞれ軽く答えているがその辺りは信用できそうである。

その理由は彼女たちのテーブルに並んでいる各種デザートが証明していた。

彼女たちの前に並んでいるのは餡蜜、クリームあんみつ（ホイップした生クリーム、もしくはアイスクリーム（またはソフトクリーム）を乗せたもの）、白玉あんみつ（白玉を乗せたもの）、フルーツあんみつ（カットした果物（キウイフルーツ、サクランボ、パイナップル、ミカンなどを乗せたもの）や、空のグラス、各種ケーキやクレープの皿が何枚か積まれている。

先程格好良くクイッと上げた真名の口の端にもちょびっとチョコレートが付いていたりして、懐柔されたことがよく分かる。

そりゃあこれだけ頼んだら中学生の小遣いなんぞあっという間に吹っ飛ぶのだから奢りということもあって、流石は甘いものに眼がない女子中学生、容赦がない。

都合、京都での関係者六人（真名、楓、古菲の京都で助っ人に来てくれた三人＋明日菜、木乃香、刹那）によって食い散らかされた惨状を前にアスカの口端がひくつかせ、思わず財布の中身を確認してしまったのは関係のない話である。財布から諭吉さんが旅立つことは確定していた。本当にどうでもいい話だった。

女性に奢りでなんでも食べていいとは言ってはいけないとアスカが学んだ瞬間であった。

「飲み物、買って来たでー」

更に追加で飲み物を買ってきた木乃香と刹那に絶望した。

「まずは……」

二人が飲み物を配って席につき、いい加減に積み上がった屍皿たちを店員が片付けた後、本題に入るために口火を切った。

「お礼を、京都での協力、ありがとう御座いました」

「私は依頼を受けて動いただけだ。礼を言う必要はない」

「こちらこそ役に立ててなにより」

「強い者達と戦えて満足アルよ！　また機会があれば呼ぶアル！！」

目の前の惨状を勤めて考えないようにして頭を下げるアスカに、それぞれが気にするなとフォローする。

「これは報酬です」

頭を上げたアスカは、そう言って袖口から封筒を取り出した。それも複数。

「「「「「……」」」」」

その封筒の分厚さに全員が目を見張った。も、あるが、どうやって袖口から三つも取り出したのか謎である。

右手を左手の袖に入れて出したら指の間に挟まっていたのだから無駄に奇術染みていた。同じやり口で反対の手にも三つの封筒。それらを六人の前に差し出す。

「ちょっと多すぎないか」

「と、言いながら返す気ないでござるな、真名」

「さて、なんのことやら」

六人の前に置かれたのは明らかに百万円ぐらい入ってそうな分厚さの封筒だ。

だが、口調は遠慮がちにお断りを入れる真名だが既に封筒は着ている巫女服の懐に仕舞い込んでいた。なら返せといっても返す気はないだろう。楓のツッコミにも動揺はない。彼女は貰える物は貰っておく主義なのだから。

「ちょ、ちょっとあ、アスカ、い、一体、な、な、なんのよ！　これは！！」

「ちょい、落ち着きや明日菜。目が釘付けやで」

「お嬢様、明日菜さんの反応が普通だと思います」

「流石は木乃香アル。これだけの札束を見ても動揺一つ見せないとは」

真名とは逆に慌てすぎな明日菜。言葉が一つ一つどもり、「私、現在混乱してます」と分かりやすい反応を見せていた。

木乃香は真名とは違う意味で落ち着いており、隣りの席に座って大金を前に慌てる明日菜を落ち着かせようと声をかけていた。刹那

は常識的に突っ込み、古菲だけは何故か違う意味で感嘆していた。

「京都の件での報酬です。少し大目ですが気にしなくてもいいです。正当な対価ですから」

本来ならばこんな大金になるはずことはない。ならば何故、こんな大金が報酬なのか？　それは偏(ひとえ)に口止めという意味合いが大きい。

まさか日本に覇を唱える二大組織が一傭兵（対外的には）に事件を解決してもらい、自分たちが足を引っ張ったなどと公表できるはずもない。

対外的にはネギは親書を届け、関西勢と協力して事件を解決したことになっているので、アスカに口を出されると困るのだ。そのためのお金（口止め料）なのだから。

そんなことをおくびにも出さず、アスカはお金を差し出す。

関西、関東の両協会からの報酬から掛かった諸経費（転移魔法符代等）を引いた上に分割した金額ではあるが、下手したら両組織壊滅、多数の魔法バレの可能性があったので一人一人の金額は破格である。

特に弾丸といったお金のかかる真名には少しだけ他の者より色をつけてある。

返って来た反応は大別すると二つ。

受容か拒絶か。

前者は真名一人だけ。傭兵であり、仕事人である彼女は報酬を貰うのが当然であり、正当な評価である。そもそも断る理由がない。

残り五人は後者。

といってもそれぞれの感じは違う。

楓と古菲は金銭に対する執着はなく、それよりも修行相手などになってくれた方が嬉しい。

木乃香はそもそも事件の張本人の立場で、報酬を出した立場（両組織の長）の関係者＋攫われただけでなにもしていないので貰う資格はないと考えている。刹那も似た様なもので木乃香の護衛である彼女が今回のことで報酬を貰う理由はない。

だが、この中で唯一人明日菜だけは微妙な立ち位置にいた。

分類的に言えば刹那の立ち位置に近いが表だって正式な立場はない。かといって木乃香の従者なので全く違うとも言い切れない。

京都での働きを思えば十分に報酬を得る資格はある。事実、苦労学生である彼女の本音は手に握るお金が欲しい。これだけあれば学費もかなり返せるし、バイトができなくなった分の穴埋めも出来る。

だが、自分の働きは全て与えられた力によるもの。労働の対価というなら既に貰っている。だけどお金は欲しいと彼女の懊悩（おうのう）は続く。

「まあ、今すぐ受け取る必要もなし、必要になったら渡すということで」

「それがええんやろうな、明日菜がこんな調子やし」

こんな調子で悩んでいては何れ悩みすぎて禿げそうな明日菜に、アスカはまた奇術染みた仕草でそそくさと金を入った封筒をどこかにしまってしまった。

木乃香も同意見らしく頷く。

結局、受け取ったのは五人中一人、真名だけとなったのであった。

で、その後に始まったのは休日といこともあってただの雑談。

「――――修行？」

その中で明日菜が発したのはそんな言葉。

「そう……お願いできないかな？」

京都で戦ってみて一つ間違えれば取り返しがつかない事もあることを理解し、人よりも体力があるって言っても戦いの中じゃそんな事全然関係無いことを分かった上で戦い方を教えて欲しい、と瞳に相応の決心を込めて言われれば戦う術を教える事に対しては吝かでは無い。

動かさない体に贅肉がつくように、熟練した戦闘者でも安穏とした生活を続けていれば、どんな高潔な魂にも贅肉がつく。だからこそ自分から首を突っ込むかそうではないかは別にして、明日菜が自分である程度の戦闘を潜り抜けられるようにするべきだとも考えた。

明日菜のアーティファクトは大剣。つまり、使うのは必然的に剣

術ということになる。

アスカも剣術を扱えなくはない。

忍術の師である玉藻、魔法の師である神父、拳法の師である剣星など多くの師匠がいるが剣術の師はいない。

どちらかといえば玉藻がその立場に近いが、実際の所、彼女は己が能力（スペック）を前提とした戦い方を特異としている。小手先の技術に頼るよりも力尽くの方が手っ取り早いのだから、教えるにしてもそれが前提となってしまうので細かな技術などは望むべくもない。

既にアスカはチャクラコントロールや忍術の技術で玉藻を上回っている。が、彼女の恐ろしい所は、術の発動までの速さと発揮される威力という戦闘に特化されているところである。制御や技術で劣ろうとも速さと莫大なチャクラ量を当てにした戦闘能力が全てをひっくり返してしまう。

そんな彼女に教わったアスカにも過去、その傾向が顕著に現れていて戦闘で追い込まれたら切り札に頼るなどしてしまっていた。なまじそれで勝ってしまうから改善もされずにいたが、神父が軌道修正をして下地を作っていたことで、剣星が鍛えることで改善したのだ。

例えば玉藻が明日菜に教えると仮定すれば大剣という武器を考えるに強（あなが）ち間違いという程でもないが適任とも言えない。繰り返して言うが彼女の戦闘方法は己が能力（スペック）を前提としているので同程度か、似た傾向がなければ向かない。

ならば、アスカならどうだろうか。

これも決して適任とは言えないだろう。玉藻よりかはまだ常人向きではあるが、そもそも剣術など習ったこともなく実戦の中で磨いてきた我流、即ち正道ではない。

この場にいる面々で明日菜に剣を教えるのに最も適しているのは神鳴流を収めた桜咲刹那のみ。

巨大な野太刀を使用する一刀での技法であり、大剣のアーティファクトを使う明日菜には神鳴流云々は関係なく剣術を学ぶなら適任と言える。

ならば何故、明日菜が刹那に言わずにアスカに申し出たのかというと答えは簡単。修学旅行での玉藻が見せた五百もの異形をその辺に散歩を行くような気軽さで圧倒した高すぎる戦闘能力が原因である。

教えてもらうなら誰がいいかと考えると一番強そうな人と考える辺り単純というか何というか。

しかし、アスカには彼女に自身の技術を教えられないとある理由がある。他人から見れば何の意味もなくつまらない感傷であることが分かっていても。

それにアスカにはある種の予感があった。遠くない未来に麻帆良を出て行くという予感が。

だが、かといって断って彼女の意思を折りたくもない。

「お～い、アスカ～、聞こえてる？」

先程の金を前にした明日菜のように悩むアスカに明日菜達が声をかけるも、どうやら気づいていないようで考え込んでいた。

（あ！　いいこと思いついた）

脳裏に浮かんだ案にアスカは思わず心中で声を上げた。これが後の厄介な事に結びつくと知らずに。

アスカが生徒たちと話している頃、修学旅行の件で力不足を実感したネギは『とある人物』の下へ向かっていた。

ついたところは森の中にある木製のログハウス。

「これはネギ先生、ようこそいらっしゃいました」

扉をノックして出てきたのは黒と白のツートンカラーのメイド服を着た絡繰茶々丸。

それもそこらの量販店で売っているような安物ではない。一見しただけでも上質な生地を使っていることがよくわかる。縫い目をし

っかりとしており袖口やスカートの裾のフリルなどには、細かな意匠が施されている。

オーダーメイド……それも一級の技術を持った職人が手ずからに作った職人芸によって編まれたメイド服。

案内されたのは居間。

しかし、エヴァンジェリン邸はちょっとした人形屋敷だった。

目の前に人形、テーブルの上にも、並べられたソファの上にも、床の上にも、タンスの上テレビの上にも、とにかく大小様々なたくさんの可愛らしい人形たちが思い思いに座って所狭しと飾られているので、まるで大量のぬいぐるみを詰め込んだ玩具箱のようであった。壁面には大きな暖炉が備えられており、その中の炭と置かれた薪が、それがただの飾りではなく実際に使用されていることがわかる。

よく整理された食器に、整えられた調度品。居間に据えられた木製のテーブルには真っ白なテーブルクロスがかけられ、四脚の椅子がそれぞれ並べられている。そのうちの二つの上にも、他と比べて少しだけ大きい人形が腰掛けられていた。

しかし、人形が雑多にあっても何らかの均衡が保たれているのか、不思議と散らかっているという印象は受けない。態とそう配置しているのが分かる、その証拠に人が動く生活動線は十分以上に確保している上、目に騒がしくない様な配置がされているのかもしれない。

吸血鬼の棲家がこれでよいのかとかとも思うのだが、当の本人にしてみれば余計なお世話だろう。

長いプラチナブロンドの髪が印象的なこの家の主たる少女――――エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル。

確かに見かけは普通の少女に違いない。彼女はネギが担任を勤めるクラスの一員だが、クラスの中でも鳴滝姉妹に次ぐ背の低い方。数えで十歳であるネギとほぼ同じ背丈であるという事は、女子中学生――それも中学三年生――となれば、かなり低いと言えるだろう。実際、クラスの大半はネギよりも頭一つ以上高い者で占められていたのだから。

しかし、彼女がその見かけを大きく裏切る内面の持ち主である事を、ネギは良く知っていた。

「童姿の闇の魔王」「悪しき音信」「禍音の使徒」「闇の福音」と呼ばれる多額の賞金を懸けられた魔法使い。ナギが15年前に封印した間違いなく世界最高の位にいる存在。

だが、そんな彼女はぬいぐるみ達に抱きしめられるように、ソファに全身を預けていた。一般的な吸血鬼の住処のイメージとは天地ほどかけ離れたファンシーさに、思わずカモの警戒心も緩む。

茶々丸の勧めに従って、ネギはエヴァンジェリンの対面に配置されたソファーに腰掛けた。

「何？　私の弟子にだと？　アホか貴様」

茶々丸に紅茶を出された後、居住まいを正したネギが弟子にしてくれと言うと返ってきたのはエヴァンジェリンの呆れたような言葉だった。

「前も言ったが戦い方などタカミチにでも習えばよかろう」

このやり取りは既に修学旅行以前にされている。今回も返す言葉は同じ。

「一応、貴様と私は敵なんだぞ。貴様の父サウザンドマスターには恨みもある。だいたい私は弟子など取らんしめんどくさい」

言っていることは最もなのだが、最後が一番の本音っぽいのは何故だろうか。

「はい！　それを承知で今日は来ました。タカミチは海外に行ってることが多いし、時間も十分にとれません。それに、魔法使いの戦い方を学ぶならタカミチよりも強いエヴァンジェリンさんしかいないと！」

京都で小太郎に一方的にやられていたのは格闘経験が全く無かったというのが大きい。エヴァンジェリンと戦った時には手加減されても一矢すら報いることも出来ない実力差を感じ取った。麻帆良に来てから力不足を実感して、このままではいけないとネギは思う。

誰かに弟子入りを志願する多くの人は、まず自信を失くしている。だから志願するのだが、習得においては謙虚さは都合がいい。ただ発揮する時には邪魔になるが。

父を探す。言葉に出すと短いが、探さねばならない相手は世界最高の魔法使いの一人サウザンドマスターと呼ばれる男なのだから簡単なようで非常に難しい。だからこそ、自分は力を上げねばならない。

最も求めていたモノ、それは戦う為の確かな力であり、魔法使いとして、より確かなレベルアップを求めるネギにとって最も習いたいと思ったのはエヴァンジェリンであったのだ。というか、この地における魔法使いはエヴァンジェリンとタカミチ、学園長しか知らないネギが選ぶのは必然、実際に戦って圧倒的な実力を見せ付けた彼女に他ならない。

無論、それは一筋縄ではいかない相手だと承知の上で頼み込みに来たのだが。その為に頼み込むと同時に床と平行になるほど頭を下げ、彼女の自尊心をいい意味で刺激するのを忘れない。

「ほう……つまり私の強さに感激したと？」

あくまでも本気の様子を見せる真剣な表情のネギの言葉にピクリ、とエヴァンジェリンの鼻が動いた。

褒められて悪い気がする人はいないだろう。それも想い人の面影を持つネギなら尚更。ネギの言葉に気をよくしたのか、エヴァンジェリンは少し態度を改めネギに話しかける。といっても表面上は足を組んで紅茶を一口飲んで表さなかったが。

「はいっ！　僕と段違いで精密な魔法構成、それでいて大胆で迫力のある魔法。エヴァンジェリンさんのところに弟子入りを志願しました！　その為ならなんでもします！！」

なんでもする、というネギの無防備な一言にいい響きを感じ取って思わずエヴァンジェリンの口の端がニヤリと吊り上ってしまう。土下座までしかねない勢いのネギを見つつ、ソファにもたれ掛って足を組み直す。

「ふふふ……そうかそうか、本気だな？」

「はいっ！」

（へっ、真祖の吸血鬼って言っても所詮は小娘だぜ、ちょろい、ちょろい過ぎる！）

エヴァンジェリンを言葉の限りに煽てるネギ。その肩に乗ったカモは一人（一匹？）で予想通りの展開にほくそ笑む。

修学旅行前と同じように突撃しているだけでは「暖簾に腕押し」にしかいならないことは百も承知。だが、純情ボーイ（？）のネギに騙す腹黒さを求める方が無理というもの。

こういう時にこそネギの使い魔であるアルベール・カモミールの役目。

エヴァンジェリンの性格を考え、煽ててその気にさせようと作戦を立てて理解できないネギに教え込んだのだ。

現状、その作戦は上手くいっているので内心である程度の成功を確信した。

しかし、ここで今までとは違う笑みを浮かべるエヴァンジェリン。

「ふん、よかろう。そこまで言うならな。「え……」ただし……！　ぼーやは忘れているようだが、私は悪い魔法使いだ。悪い魔法使いにモノを頼む時はそれなりの代償が必要だぞ？」

「よかろう」と言われて思わず顔を綻ばせるネギだが、次のエヴァンジェリンの言葉でその顔が不安そうに歪む。

「まずは足を舐めろ。我が下僕として永遠の忠誠を誓え。話はそれからだ」

己の失策を悟ったカモが何かを言う前に、エヴァンジェリンの見た目の年齢相応の小さな足が緩やかに動き、スカートの裾から伸びる白く細い太ももがゆっくりと露になり、ネギの前に差し出され、見下ろして笑みを浮かべて一言言い放つ。

くくくっと漏れるエヴァンジェリンの笑い声に、ネギの顔も引き攣っている。まさかのアダルトな要求にカモの顔も引き攣っていた。

そこへ、

「何を子供にアダルトな要求をしてるんですか」

サドステッィクナ笑みを浮かべたエヴァンジェリンの横に、何時の間にかいたアスカが額にデコピンを食らわした。余程、デコピンの威力が強かったのかエヴァンジェリンは「へぶう!?」と変な悲鳴を上げる。そしてヒットした額からは威力が強かったのかシュウシュウと煙が上がっている。

「あああアスカ、何をする!!　というか後ろの神楽坂明日菜！貴様も何時の間に来た!!」

デコピンで後ろに跳ね飛んでソファに後頭部を打ち付けてフリーズしていたエヴァンジェリンは、未だに痛む赤くなった額を抑えながら突然、現れたアスカに文句を言う。学園結界で弱まってるとは

いえ、真祖の魔法障壁の上を突破したデコピン恐るべし。

「普通にドアをノックして茶々丸さんに入れてもらいました。ねぇ？」

「うん、エヴァちゃんが気付かなかっただけよ」

アスカと明日菜が普通に返すと「何！」とエヴァンジェリンが後ろに振り返って茶々丸に聞こうとして、さっきまでいたはずなのに誰もいない。変わりに台所に人の気配が複数

「あ、茶々丸さんならお茶を入れるって台所に行ってたわよ。それと人数が多いと運ぶのも大変だろうからって木乃香と刹那さんも手伝いに行ったし」

アスカと明日菜だけでなく木乃香や刹那もいて、茶々丸が自分に知らせなかったことにオーマイガーといった感じで落ち込むエヴァンジェリン。

更にそこに自身の痴態（実はエヴァンジェリン同様に突然現われたアスカたちに驚いているだけ）を呆けて見ているネギの視線が突き刺さる。

「くっ……まぁいい。今度の土曜日に弟子にするかどうかテストをして決めてやる。それでいいだろ？」

エヴァンジェリンは周囲に味方がいない事を悟った。

気に喰わない事ではあるが、こっちから折れるしかないようで弟子入りの試験を承諾する。

これなら難易度を高くすれば、ネギは弟子入りを諦めざるを得なくなるし、万一試験をパスするようなら、それはそれで面白い。

実際はエヴァンジェリンのアダルトな要求に呆れていただけで話の展開などチンプンカンプン。アスカだけが単語から予測がついたものの何かを言うことはなかった。

「え……あ、ありがとうございます！！」

何時の間にか自分の手から展開が離れているものの、テストをしてもらえるだけでも修学旅行前と違って収穫があったのでネギは嬉しそうに叫ぶと頭を下げた。

面倒くさい事になった、と思いながらエヴァンジェリンは喜び勇んで扉から出ていくネギの背中を見送っていた。

「……で、お前たちは私になんのようだ？」

今だにジンジンと痛む額を摩りながら醜態を晒してしまった所為かぐで～とソファに凭(もた)れかかって尋ねる。本当にやる気のない態度である。

「タイミングが良いのか悪いのか……実は頼みたいことがありまして」

言い淀むように口をまごつかせたアスカは、言うべきか悩みながらも重い口を開いた。

「……」

頼みごとを聞いたエヴァンジェリンはただ笑った。

健康的な清々しい笑みなどではない。ニヤリやニタリといった何かを企んでいる笑みに嫌な予感がした、と後にアスカは語っている。事実、悪巧みしているエヴァンジェリンの考えはアスカの予感通りであった。

修学旅行明けの月曜日。

快晴な空の下、四泊五日の修学旅行後の休みを挟んだ実に一週間ぶりの久しぶりの学校に向けて路面電車や走る生徒達に囲まれながらも、父親からもらった杖を背負ったネギは意気込みを包み隠さずその小さな体で現しながら走る。

「よ～し、今日からまた頑張るぞ～～！！」

修学旅行も終わったのでもう直ぐ中間テスト近く、教師としての心構えも忘れていない。また自分のクラスが最下位にならないように、テスト対策もしなくてはいけない。

（そう言えばエヴァンジェリンさんも土曜日にテストするって言ってたな。弟子入りのためのテストかあ……何だろう？）

テストという単語に、ネギはふとエヴァンジェリンに弟子入りのためのテストを土曜日に受けることを思い出し、弟子入りテストは何をするのか考えた。

（でも、先生の仕事と強くなるための修行、大変だけど頑張らなきゃ。父さんに追いつくために……！）

更に立派な魔法使いになるための、大切な一歩。

よくよく考えてみればテスト内容を詳しくエヴァンジェリンから聞いていなかったが、どんな内容でもテストに合格しなければならない。

決意を新たに走りながら拳を強く握り締めて誓う。

（それと……）

決意と同時に頭に浮かんだのは修学旅行で戦った小太郎の姿。

小太郎は魔法単発で勝てるほど甘くはなかった。体力があり策もあって攻撃をいなすことができたからこそ、辛勝を得た。

だがそこで出てきたのは、拳を振るう相手、剣を使う相手などと

いった接近戦を得意とする者に近づかれた時の対処法という自身の欠点。そういう敵と戦うのは今まで通りの魔法だけでは足りない。

エヴァンジェリンの魔法の師事を願い出たものの、それなりの『戦いの型』は必要だった。

「何か……魔法と併用しながらの戦い方……」

肩の上に乗っていたことでカモはそんなネギの呟きを耳にして、小太郎との戦いも一緒に居たので予測がついて溜息をつく。

強くなりたい。その気持ちはよく分かる。

だが焦りは禁物であると思う。確かに自分の主であるネギは天才であり、【二束の草鞋(わらじ)】を履いても上手くいきそうではあるが、もっとゆっくり進んでほしいと思う。

（……と言っても、聴かないんだろうけどな）

一度決めたことを翻さないことをよく知っているので心中で呟きながらカモはある種の諦観を抱いた。何よりも特に父関連のことでは、そのご執心振りを知っているので言ったところで聞かないだろうということは簡単に予測がついた。

自分で頑張るのは悪い事ではない。

だがそれでは自分で気付かないうちに無茶することもあるだろう。

だからこそ、きちんと導いてくれる師が必要だ。

そういう意味ではエヴァンジェリンに師事を願い出たのは僥倖と言えるだろう。とはいえ、ネギの師匠として正しい教え方ができる人ではあるが、無茶をさせないというのは彼女の性格的に無理そうな気がする。どちらかというと限界まで虐めて楽しむSだとカモはエヴァンジェリンの性格を正しく理解していた。

「ケンカだケンカ！！」

「部長に五十枚！！」

そんなネギの気合とカモの憂慮は聞こえてきた声で一瞬で霧散した。

「あれ……？　あれは……」

騒がしいと思い、気になって声のした方に視線をやるとなにやら人だかりが目に付いた。

ネギがいる場所はグラウンドと校舎を分けるように建てられている路面電車の通路のために作られた石段の上。登校する学生と事故が起きないように比較的高めに作られているので必然、人だかりの場所を見下ろす形となる。そんな高めに作られている石段のおかげで、どんな騒ぎが起きているのか、ネギのいる場所からはよく見えた。

そこには推定五十人超の大勢に囲まれた一人の少女がいた。

随分とガラが悪く不良っぽく制服を着崩したのや、逆に空手着を着た者、剣道の胴着を着た者などの武道家らしき者が多数といった千差万別の人間が揃っていた。

共通しているのは格闘技を得意としてそうなことと、皆それぞれ殺気立っていることだが、当の少女は怯えるでもなくいたって涼しい顔だ。

ネギは彼女を知っていた。

その少女とは――――――

「くーふぇさん!?」

出席番号１２番古菲。

成績は芳しくなく、バカレンジャーの一人でバカイエロー。日本語を覚えるので精一杯なためと言っているが、目下のところ格闘技にしか興味がない様子。反面、スポーツ全般に強い。

騒ぎの中心である威圧されそうな人数に囲まれても余裕の笑みを浮かべている古菲の状況に当然ネギは慌てる。生徒を想うネギにとっては、例え本人が余裕の笑みを浮かべていても心配せずにはいられない。

「た、た、大変!?　く、くーふぇさんが何か悪そうな人達に囲まれて～!?」

「アレは何時もの事にござるよ」

あわわと慌てるネギに、ひょっこりとどこからかなんの脈絡もなく沸いて来た長瀬楓が説明する。着ている制服と持っている鞄から登校途中らしく騒ぎを見つけたか聞きつけたのか。

「「「「「今日こそ勝たせてもらうぞ、中武研部長、古菲！！」」」」」

古菲が構える前に、囲んでいた連中が一斉に飛び掛って合図すらせず乱闘が始まった。

が、そんな会話が終わる頃には古菲は挑戦者たちを一蹴していた。四方から繰り出される攻撃を受け流しつつ、一人一人確実に「ドカバキズガッガッガッポカスカバキッ」という擬音と共に沈めていく。

「古は学園の格闘大会で優勝しているからな、ああして挑戦者が後を断たないのでござるよ」

古菲は麻帆良学園都市で毎年秋に催される大格闘大会「ウルティマホラ」の２００２年度チャンピオンであり、麻帆良中の格闘技系の部活動者達から憧れられ慕われる存在である。そのためか毎朝、男子学生の挑戦者が後を絶たない。戦いに勝つことより強敵と全力で戦うことを望む性格。

そう解説をし始めた楓に返す言葉もなく、ネギは圧倒的な数をものともせず、一人、又一人と沈めて行く古菲の姿を呆然と見ていた。

「弱いアルネ。さぁもっと強い奴は居ないアルか？」

瞬殺、死屍累々、という単語が似合いそうな圧倒的な力の差が其処に具現化された。順当に沈められた五十人近くいた挑戦者は暫くは動けそうになく、このままでは遅刻確定だろう。

「ネギ坊主、ニーツァオ！」

「おはようございます、くーふぇさん」

周りが歓声や拍手をする中、騒ぎの元であった場所へと歩を進めたネギ。この騒動を止めなかったが今回に関しては彼に非はない。今は暢気（のんき）に朝の挨拶をしているが驚きのあまり止める暇がなかったのもまた事実。

そこへ、

「ま、まだじゃぁ！菲部長！！」

「うひゃぁ！？」

どうやらKOしきれてなかったらしい「麻帆高空手愛好会」と書かれたシャツを着た学ランツンツンヘアーの男が立ち上がって殴りかかってきた。

男が古菲に殴りかかったそのライン上にはネギの姿。意識が半分飛んでいる所為か、それともネギが小さすぎて気付かなかったのか。

「うひゃあ！？」

遅まきながらネギも気づくも既に男は腕を振りかぶっており、魔法を使っても避けることは難しい。障壁を張れば防げるが一般人が多くいる場所でそんな不自然な現象を起こすわけにもいかない。

大人しく攻撃を受けるしかないネギが悲鳴を上げる。

「炮拳（パオチュアン）！！！」

「ごはああっ！？」

ネギを庇って古菲が咄嗟に中国拳法の「形意拳」の基本である「五行拳」の一つで、本来は相手の攻撃を上段で受けながら中段に向かって突きを繰り出す技、炮拳（パオチュアン）で男を一撃で撃退する。

完全ＫＯするだけの一撃を放ちながらもネギを守るようにしていたのは流石。ウルティマホラで優勝した実力に偽りはなし。

「だ、大丈夫だたアルか？ネギ坊主スマナイネ……」

とはいえ、流石に焦ったのかどもりつつネギの頭を撫でる。古菲がネギの頭を撫でている後ろで「なんでじゃああ！」と倒れていく大男の姿は大変シュールなものであったが。

「いえ、どうも…」

元はといえば射線上に飛び出したのは自分の責任。巻き込まれた形だが助けてもらったので責めるつもりはない。カモが「やるな」と目を輝かせたりしているが。

「強いですねくーふぇさん。」

「ンニャハハ楓や真名にはかなわんアルよ。もっと強いなりたいアル」

古菲を交え雑談をしながら一行は登校中。

アスカのことや修学旅行のこともあって強さを求めることに余念がない古菲は、心気一転早めに学校に行こうとして何時ものように待ち伏せされたらしい。

「私の得意は形意拳に八卦掌アル。あとはミーハーで八極拳と心意六合拳をちょっとネ。」

「へ～…中国拳法にも色々有るんですね。」

（――う～ん…くーふぇさんか…）

いくら魔法を会得しても、小太郎のように接近戦を得手とする者と相対した場合、近づかれたら不利なのは目に見えている。魔法と併用しながらの戦い方を考えると格闘技、それも純粋な体術を覚える必要がある。

自己流では限界がある。魔法をエヴァンジェリンに学ぶように誰かに師事することは必然であった。

一般人である古菲に頼むというのは気が引けるが、別れて一人で職員室に向かっているネギの中で彼女を格闘の師とする考えが纏まりつつあった。

第七十三話　　発端と少年（後書き）

次回更新は一週間後（日曜日と月曜日の間）の午前０時です。次回は『ボーリングと少年』です。

弟子入り云々は分かりやすいけど。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

第七十四話　　ボーリングと少年（前書き）

今話はタイトル通りです。

読了時間が今話で約２０１２分と２０００分を越えました。累計文字数１，００万５，８５４文字。

自分で書いといて何ですけど凄けぇ。

ちなみに文字数は１０４５７字です。

それではどうぞ！！

第七十四話　ボーリングと少年

授業の終了を知らせるチャイムと共にキリの良いところで終わったのでこのまま授業は終了。

この時間は英語で当然担当はネギ。

麻帆良を訪れて数ヶ月が経ち、教師に慣れて来たのと春休みからの新田の指導を糧にネギも教師として頑張っていた。元々、常識知らずなところや経験不足を別にすれば色んな方面に並外れた才能を持つので、既に普段の授業ならば監督役の新田からも合格点を貰っている。

まだまだ未熟な少年の授業は生徒からも好評で本人もようやく教師という職業にやりがいを感じ始めていた。

「ここはテストに出ると思いますので復習してくださいね。では今日は以上です」

「起立――――」

バインダーを閉じてお決まりの挨拶に日直が号令を掛ける。

「――――礼」

授業が終わり、やっと終わったと生徒たちは喜色の笑みを浮かべながら立ち上がり、日直の号令に合わせて礼をする。よほど酔狂な人間でなければ堅苦しい授業が終わって教師もいない休み時間に向けて背を伸ばす。礼の後は次の時間の準備をしたり、友人と喋った

りと教室は途端に騒がしくなっていた。

修学旅行が終って数日経っても彼女達のハイテンションが下がる気配は無く、何時も通り賑やかだった。だが、何時もなら授業が終わった後に職員室に帰るはずのネギが突然声を上げたことで変わる。

「あ、あの、クーフェさん、ちょっとお話があるのですが、良いでしょうか？」

終了の礼が終わったと同時に、ネギが古菲に『話がある』とクラスの注目を集めるような発言に教室内にざわめきが起こるが、当の声をかけた本人はよほど大事な用件なのか古菲にばかり目をやっていて其れに気付かない。

「へ？　ワ、ワタシアルか？」

突然のご指名に授業の片づけを終えて友人とお喋りをしていた古菲も流石に眼をキョトンとさせて答えている。自慢ではないがバカレンジャーの一画を占める立場。委員長のあやかのように立場でもなければ勉強や何かしらの不始末以外で教師から呼び出されることはないので驚きを隠せない。

「あ……でもみんなの前だと不味いかな……」

何やら真剣にも見えるその眼差しにあやかを始めとした一部の生徒がざわめき始めた。ネギの言い方だと皆の前で言えないようなことらしいが、古菲がなにか仕出かしたような悪い意味での呼び出しではなさそうだった。

しかし、それは別な意味で彼女たちの、特にネギ大好きな少女達

の脳裏に嫌な光景を想像させた。

彼女たちの懸念に気づかないネギは口元に指を当てて少し悩んだ後、口を開いた。別名：爆弾投下ともいう。

「う～ん、よし！　世界樹広場前の大階段に放課後来てもらえますか？」

「いいアルけど？」

思案して出したネギの提案に、古菲は戸惑いながらも特に用事があるわけでもないので断る理由もなく了承を返した。呼び出されるのが職員室でないということは、教師としてではなくなにかしら個人的な事情であることは殆どの者に察しがついた。

「どうも！　じゃあ、後で」

快い返事に小さく微笑むと、ネギはそれだけ言うとさっさと教室を出て行ってしまう。

「「「「「……」」」」」

静まり返る教室内にネギが閉じた扉の音が木霊する。残された者達は一瞬の沈黙。ただ、これは嵐の前の静けさに過ぎなかった。ネギがドアを閉めた直後にどっと教室が沸いた。

用事があるにしても何も他に人がいる状況で、言わなくてもいいのに言うだけ言って出ていってしまった。残された方としては目的が分からないだけに色々と考えてしまうもの。

「どどど、どーゆうことです!?　なぜくーふぇさんにネギ先生からの個人的呼び出しが!?」

静まり返っていた教室だったが、我を取り返したあやかの叫びを皮切りに、再び爆発するかのような騒がしさに見舞われて一気に教室の一箇所に集まって騒ぎ出す。

放課後の個人的な呼び出しに加え、そこが告白の名所と呼ばれる場所ということから、さらにざわめきを大きくしていたのだった。

今朝の騒ぎを知っていた生徒もいて、もしかしたら襲われそうだったところを助けてもらったことで一目惚れをしたのではないかという意見も飛び出した。特にお相手が武術馬鹿と思われていてノーマークだった古菲だから尚更。

わいわいがやがやと話し合うネギに比較的高い好意を持っていたり、単純に騒がしいことが大好きな一部の３－Ａのメンバーが一通り自分の意見を出したところで、小さな騒動の渦中にいる古菲はというと、

「?」

不思議そうな顔をして首を傾げており、取り合えずクラスの意見は全員一致した。

「でも……くーちゃんバカだよ。そんなことないって」

「だよねー。格闘馬鹿のバカイエロー。色気もないし、ありえないか」

美砂の意見にうんうんと頷くクラスメイトたち。何気に鳴滝風香は同じように頷くまき絵に「まき絵も馬鹿だろ」と辛辣（しつらつ）な意見だった。とはいえ、彼女は２００２年度（彼女たちが二年生の時の）の平均テスト順位はクラス８位。クラスの大半が学年順位の半分以下の中で数少ない中位以上のことを考えれば中々に否定できない。

何気に恋に恋する年頃の女子中学生としては致命的なことを言われている張本人は、

――――――できたよ。今日は新作です♪　試して

「おっ、待ってたネ！　アスナたちも食うアルよ！」

「「わーさんきゅー」」

五月の作った新作肉まんをほおばり、色気より食い気全開の様子であった。

明日菜や木乃香に食べるように進める古菲を見て、雪広を筆頭とした生徒が溜息を吐く。とはいえ、やはり愛しのネギの個人的な呼び出しが気になって仕方ないあやかやまき絵、そしてのどかをはじめとする面々は放課後こっそり、ついてゆくことになってこの騒動は先延ばしにされた。

放課後の麻帆良学園都市内にあるボーリング場「ＴＯＲＩ　ＢＯＷＬ」に何故かアスカの姿はあった。ボーリング場だというのに仕事上がりでスーツから着替えてもいない。本人としてははっきりといって場違いに感じていた。

そこはかつて無い熱気に包まれていた。

麻帆良学園女子中等学校の制服を着た騒がしい少女達が大量にいる。そしてその少女達の中に男はアスカと私服のネギのみ。女に縁のない世の男共ならば嫉妬のあまり藁人形に五寸釘を打ちつけるところであるが、当の本人であるアスカとしてはこれだけ女がいると居づらいものを感じていた。

学校という限定空間の中でなら教師という建て前を持って意図的に忘れることも出来るのだがボーリング場という共用空間にいるとそうもいかない。

何でも刹那はボーリングやカラオケに行ったことが無いそうな。それで最近トミに仲良くなった明日菜と木乃香の提案で遊びに行こうという事で、どうせなら人数も集めようということになり、職員室で仕事を終わらせて帰宅しようとしていたアスカも誘われ、もとい事情を聞く暇もなく連行されたというわけだ。

帰るところだったので仕事を理由に断ることも出来ず、かといって他に適当な用事を思いつかずに困っていたところで、周りにいた教師たちからも遊ぶように勧められ（子供なのだからもっと遊べと）、外堀を埋められたことで仕方なく同席しているのだがどうしても場違いな感じがして仕方がない。

生徒と遊ぶという先生も珍しいものの、生徒と歳が近いから問題はないのだがこれも職業意識というものだろうか。

明日菜、木乃香、刹那が発端となってどんどん人が増えて行き、最終的にはボーリング場にクラスの大半の二十五名が集まった。来ていないのは、こういう遊びに興味の無さそうなエヴァンジェリンの主従と真名、後は他に用事のあった生徒ぐらいだろうか。フロアの半分を貸切っているといっても過言ではない。

真後ろにいて程近い場所にいる所為で、先ほどから生徒たちのスカートが短いので見えてはいけないものが見えてしまいそうになり、微妙に視線が上を向く今日この頃。長い前髪とサングラスで見ていても気づかれることはないだろうが周りは気にしていなくても気になってしまうのがアスカクオリティ。

――――――パッキャアアン

ここが家の縁側で手元に緑茶があれば正座して啜っていそうな雰囲気を一人醸し出すアスカの目の前で、軽快な音が鳴り響き古菲が投げたボールが見事に１０本ピンを全て倒す。つまりストライク。

「うおおっ。すげっ、７連続ストライク！！」

裕奈と亜子が適当なフォームで脅威の連続ストライクを取った古菲に驚く。

「そ～れっと！」

隣りのレーンで古菲が連続ストライクを取った中で、自分の順番

が来たので上のスーツを脱いでＹシャツの袖を捲り上げたアスカが見様見真似で適当にボールを投げた。

古菲のように適当ではないが綺麗ともいえないフォームで投げられたボールは真っ直ぐ転がり、中心から僅かに離れたピンに当たって１０本の内の半分の七本だけ倒れた。ボーリング初心者としては上等な部類か。投げた本人としては分からないが。

「うち、全然ダメやわ～～。２１点やし」

同じレーンでアスカの後に投げ終わった木乃香が苦笑して横に座りながら、自分の成績のボードを見て悲鳴を上げた。そしてアスカが座っているのとは反対に顔を向け、

「せっちゃんはウチと同じでダメダメやな～」

「ハハハ、力加減が難しいですね。私は５５点です」

裏関係者なので必然的に運動神経はいいのだが力加減が分からずに初心者としてはボチボチなスコアに留まった刹那は照れくさそうに頭を掻いた。

「そんなものじゃないですか。僕も大差ありませんし」

一ゲーム終えた二人の言葉を聞いて、アスカも彼女たちに習って点数ボードを見上げる。

４６点と同じ初心者である刹那よりも下。序盤は全てガーター、中盤辺りで数本、終盤で慣れて来たのか半分倒せるようになった塩梅（あんばい）だった。二ゲーム、三ゲームと続けてやればスコアは伸びるだろ

うがそれは初心者なら誰もが同じ。

「でも、ちょっと意外やわ。アスカ君て何でも出来そうなイメージがあったんやけど」

「そうですね。普段が普段なので初心者といっても凄いスコアを取ると思ってました」

同様に隣りに座った二人も点数ボードを見上げ、アスカのスコアがよほど意外だったのか木乃香が心底驚いたと謂わんばかりに頬に手を当てた。

それは刹那や周りの生徒たちも同様のようで口々に声を漏らして同意する。

「はは、初めてやればこんなものでしょう」

実際に色々出来る事に異議を唱えるつもりはないがアスカとて決して完璧超人ではない。当たり前の話だがやったことのないものまで最初から完璧に熟(こな)せるはずもない。

人間は大別して三つに分かれる。

言われずに出来るのが『天才』。言われたら出来るのは『優秀』。言われても出来ない『凡人』。

よく自分には才能無いとか向いてないとか言っている人間がいるが、それでも言われたら大抵のことは出来るようになるものである。実は十分『優秀』な奴が多かったりするものだ。逆に何も言われずに出来る真性の『天才』っていうのはそんなに居ないのだが。

本当に才能が無くて向いてない者は言われても出来ない。何故だと聞かれても理屈ではないのだろう。そもそも理屈が分かっていれば苦労はしない。

アスカは『天才』ではない。かといってこの分類では『凡人』とも言えない。

だから、能力や資質には先天的な差があっても平等なまでに不平等な現実に嘆く暇があるのなら出来るまで繰り返すしか無いと、割と早い段階で学んだ。秀でた才能を持たないにも関わらず強くなるしかなかった彼に出来るのは反復だけ。

繰り返していけば何時か実る事もある。成就が遅い事は多々あれど、完全に無理なんて状況は実はそんなに多く無い。才能には恵まれずとも『人』と『能力』には恵まれたのか、多くの師と多数を学べる『影分身の術』があったから周りが錯覚するような能力を得ることが出来た。

アスカが何でも出来るように見えるのは今までの経験と休まぬ鍛錬の成果に過ぎない。本人としては決して要領がいいとも思えないので、やったことがないもの、初めてのことは下手したら常人以下かもしれない。

「スゴイスゴイくーふぇさん」

「にょほほほ任せるアルよ～～～」

ネギに褒められてピースサインをする古菲。

古菲と違って全然倒せない木乃香と刹那、アスカは揃って苦笑を浮かべた。上手く力加減が出来ない刹那と、自身の運動能力をボーリングに応用できないアスカは特に苦笑いが濃かった。自身の運動神経を如何なく応用できる古菲が羨ましかったのかもしれない。

「ん？」

そこでアスカの目に、古菲に向けてなにやらドロドロしい気を発しているあやか＋のどか＋まき絵（気配を発しているのは殆どあやか一人だが）の姿が目に入った。

襲うような負の気配ではないものの正の気というには重苦しいというか、古菲も気になるのか辺りを見渡している。彼女が振り返るとドロドロしい気を消してそっぽを向くのだから中々に役者というべきか。

「……？」

こうなる事情を知らないアスカにはなにがなんだか全く分からない。

（問題は古菲さんですわ）

傍から見ているアスカには丸分かりだが視線をずらした古菲を再度ぎろっと睨むあやか。同じ事を考えているのか隣りに座るのどかとまき絵も「むむむ」と唸りながら考え出す。

学校と世界樹広場での出来事からネギが古菲の事を好きなのではないのか？と邪推している数人の生徒達。その中でこの三人は特にネギ争奪戦レースの先頭を突っ走っていると言われている。

ショタコンであり、礼儀正しい少年をこよなく愛するあやか。可愛いもの好きでネギが学校に来た時から気に入ったまき絵。修学旅行でのラブラブキッス大作戦の優勝者であるのどか。

「やっぱり納得できませーん!!すでにネギ先生の気持ちが決まっていても!!このまま座して運命を受け入れるなどたとえ神が許してもこの私、雪広あやかが許しませんっ!!」

やはりネギへの愛が溢れすぎて我慢が効かなくなったあやかが真っ先に動いた。

涙目で両手を広げて立ち上がって叫ぶあやかに皆が驚く。

「という訳で古菲さん勝負ですわ!!!」

なにが「という訳」なのか分からないが白い手袋を古菲に投げるあやか。西洋では白い手袋を相手に投げるのは決闘の証だという。

しかし、どこから出したそんな白い手袋を出したのか、そもそも何故白い手袋を持っていたのだろうか、疑問は絶えない。これもお嬢様クオリティなのか。

「むむっ!?勝負か?勝負はいつでも受け付けるアルよ」

古菲は白い手袋を律儀に受け取った。本当に意味を理解しているのか怪しいが。

「いいですわね、お二人とも!!　負けたものは諦める!!恨みっこなし」

「ええ～」

「ちょっと待ってよ、いいんちょ」

突然のあやかの暴挙に静止しようとする二人だが今の彼女には何を言っても無駄でしかない。半ば暴走している彼女によって忽ちの内に流れに流されてしまう。

「なんか知らんアルがいいのか？　いいんちょ。私は勉強以外は強いアルよ」

ニヤリとドヤ顔で笑う古菲。勝負事だからと簡単に受けすぎであった。

その愚直さというか単に人の話をちゃんと聞かない姿勢がバカレンジャーの一員の素質なのかもしれないと、アスカは傍観者なことをいいことに割と失礼なことを考えていた。

「ふふふふ。ホエ面かかせて差し上げますわ」

自信満々の古菲によほどボーリングに自身があるのかあやかは目を輝かせる。

そして三人でのネギをかけた（古菲は知らない）ボーリング１ゲーム勝負が始まった。食券を賭け始める者も出てきてわいわいと騒ぎ始める。

そんな感じで相変わらず騒がしい生徒達を見てアスカは一言。

「緑茶が飲みたい」

親が子を見守るどころか、まるで庭で遊ぶ手のかかる可愛い孫のヤンチャを縁側で緑茶を啜って眺めている御爺ちゃんのようだと木乃香と刹那は苦笑いを浮かべながら思った。

そんなこんなで始まった勝負。

ボーリングに慣れているからか運動神経がいいからか、序盤からストライクをガンガン出しているまき絵とあやかと古菲。

だが、中盤になってくると明確な差が出てきた。

「すげ8連続ストレイク！」

「何あの子！」

古菲だけは変わらず連続ストライクを更新中と周りの観客も驚きの様子。相変わらずフォームは滅茶苦茶なのに凄い。

あやかとまき絵も頑張って好成績を出しているが、流石に一歩後れを取っている。体力の無い上ボーリングも初めてなのどかは、転がす事すら重労働で連続ガーター。

これは勝負は見えたかなと思い、尿意を催したアスカがトイレに行って戻ろうとしたら、そこへハルナ・美空・五月がそそくさと近づいてきた。

ボーリング場の裏手でこっそりその二人の関係について語り合う。のどかやあやかを中心にクラスの人気者と言えるネギが誰かと特別

な関係になるかもといった話題は、こと女子中学生にとってはとても興味深い話題であったのだ。

話を聞くと英語の授業が終わった後にネギが古菲を放課後に呼び出したのだそうだ。

で、呼び出した場所が告白スポットして有名な世界樹広場前。気になった彼女たちが団体で後を追った（別名：のぞき）。

抱き合って告白寸前にまで行ったとはハルナ談。

「はぁ」

ハルナ主観の話を聞いたアスカの口から出たのは溜息ともなんとも判別のつかない声。

真実は、突然殴りかかろうとしたネギの腕を素早く抑え込む古菲、だがその様子は少し離れた位置にいるあやかたちには抱き合っている様子にも見えていただけ。まさかと思ってついては行きはしたものの、その事態がおきていたとは。彼女たちの中で、今、大きな危機感が生まれつつあった。丁度その時に明日菜と木乃香発端となって遊びに行く話しが回って来て、肝心な話を切り出そうとしたところにあやかが乱入。話の腰が折られつつもそのまま一緒に行こうと思うネギ、何やかんやとその場にいた野次馬も引き連れてボーリング場へと向かうのであった。

で、今はその勝負中というわけである。

「何故、僕にそんな話を？」

自分が事、色恋沙汰において疎いとまで言うつもりはないが、かといって優れていると言えるはずもない。聞かれても上手い答えを出せない。逆に年頃の彼女たちの方がマシな答えを出せるだろう、と思っている。

「だって、アスカ先生はネギ君の兄弟だし。どうしたらいいと思う？　くーちゃんに言う？」

――――――くーさん色恋疎いから

そんな思いを込めた問いに返って来たのはハルナの「兄弟だから」と簡潔にして分かりやすい理由だった。思わず納得してしまったアスカに、古菲に言うべきかと隣りの五月も心配そうにしていた。

「――――――まあ、しばらく様子を見ましょう。なにかあったらまたその時はその時で」

「う、うん。そうだね」

ネギの性格と告白されたのどかとの関係を考えるに彼女たちの疑念は的外れな気がする。だが、それを彼女たちに言ったところでネギが怪しい行動を取っていることは事実なので納得はしないだろう。

古菲に言うよりも行動を起こすまで静観。なにかあったら対応する形を取るのがベストであるとアスカは判断し、彼女たちも納得して戻ると、ボーリング対決は終焉を迎えていた。

その結果は、あやか２６９点、まき絵２２９点、のどか１７点。

プロレベルの驚異的なスコアを出すあやかとまき絵に別の意味で

凄いスコアを残したのどか。普通に考えて二人に勝つのはプロでも相当難しいのだがここにいるのは常識外れの権化である【麻帆良武道四天王】の一人。常識で測ってはいけない。

古菲のスコア全球ストライクしないと出せない３００点。

「勝ち～～～～アル♪」

パーフェクトを出されては勝てるわけがない。涙をためて悔しがるまき絵とのどか、その横であやかは頭から煙を出しながら気絶していた。勉強以外は強いという本人の言った通り、結果は古菲の圧勝で幕を閉じた。

「お疲れ様ーまき絵さんも凄かったですよ」

「ネギ君の恋。私、応援するからね……！　頑張って！」

「は？」

涙ながらにネギへの恋を諦めて（勘違いして）応援するまき絵。突然、自分の手を握ってそんなことを言われても分かるはずもない。

ここで終われば綺麗に終了なのだが諦めの悪い（悪ノリし過ぎな）少女がここに一人。

「２人きりになって押し倒すだのキスだので挽回するのよっ！　略奪愛よ！」

勝負に負けてしまい落ち込むのどかに駆け寄るハルナと夕映、ハルナが中学生としては少々問題のある発言をする。

「お……おした……」

傍にいる何時もの珍妙なジュースを飲む夕映はデマだと思うのだが、あまりにハルナの勢いが急すぎて二人に届いていない。ハルナの勢いに押されて流されるままに、トイレに行ったネギを追うのどか。

十歳児相手にどこまで行けばいいのかという夕映の的確な突っ込みに、勢いで物を言ったことを大人しく認めたハルナの姿がありましたとさ。

「……結構かかってるわね」

携帯の時計を確認するハルナ。すでに七分近く、二人はトイレに行ったままだ。もしやと妄想逞しいハルナの脳裏に１８禁な光景が。

「あ、戻ってきたです」

ハルナが携帯から目を離して前をみると、なんとのどかとネギが楽しそうに話しながらこっちに来ていた。

「あれれ――――!?　いい雰囲気じゃない！」

自分で煽っておいてそういう言い方はないんじゃないだろうかという突っ込みはナシで。ネギと別れたのどかが真直ぐ二人のところへ戻ってくる。

「だ、だ、大成功でした～」

「マジ!?　で、どうしたの!?　キスしたの?」

たった七分で出来ることはたかが知れている。それすらのどかの返答から気付かないほどテンションが天元突破したハルナは興奮していた。だから、

「ネギ先生と一杯世間話しちゃいました～♪」

と、今年はもう死んでもいいかもと言い出すのどかの目の前で吉本の芸人ばりに大仰にハルナがコケた。

脳裏に18禁の光景が展開されていたところに「世間話していました」では、天元突破するほど興奮していたところに興醒めを通り越してしまう。ずっこけるハルナの隣りで「世間話七分……新記録ですね」と笑っている夕映の姿があったりなかったり。

「違うでしょ――――!」

「ごめんなさ――――!」

自分の手を張って音を出すハルナに付き合って、頬を叩かれたように吹っ飛ぶのどかも実はノリがいいのかもしれない。先程のズッコケ具合といい漫才としての完成度の高さが窺える。

「二人とも漫才してる場合じゃないですよ。ネギ先生がくーふぇさんのところに」

「「ええっ!?」」

夕映が指差す方向には、確かに古菲と向き合うネギが居た。

慌てて二人の声が聞こえるところまで駆け寄る三人＋どこからか現われたあやかとまき絵が追随する。やはり諦めきれなかったようだ。

実は当の二人は今まで使っていたレーンの近くにいるので、普通にしていれば聞こえるのだが気づいていないらしい。他の生徒たちやアスカも気になるようでゲームを一時中断して二人の会話に耳を澄ます。

「あのーそれで、さっきの続きなんですけど、改めてくーふぇさんにお願いしたいことが」

世界樹広場前に呼び出したもののボーリングへ行く誘いで中断した話。いま改めてネギは彼女の前に立つ。

（しまった、とうとう本気の告白タイム!?）

事情を知らずに聞けばハルナが思ったように聞こえなくもないネギの台詞。全然姿を隠しきれていない手すりから身を乗り出す五人。

「あの……その」

「ネギ先せ――――!」

「こらいいんちょ、邪魔はアンフェア!」

遂に我慢し切れずに飛び出そうとするあやかを必死に抑えるハルナ。彼女があやかに対してアンフェアを語る資格はないが、この行

動だけは拍手を送ろう。実は意味がなかったりするのだが。

「僕に、中国拳法を教えてください！！」

渦中のネギは、一瞬のためらいの後――――彼女らの考えとは全く違うことを叫んだ。

「「「「へ？」」」」

ネギがそう告白した瞬間、夕映を除いた四人の顔があまりの真実に口を大きく開けて目が点となる、誰が見ても分かりやすい呆然とした顔になった。

「ほう、中国拳法を？」

「はい。今朝のを見てくーふぇさんに教えてもらおうと」

「……つまり、強くなりたいアルね」

「はい」

ミーハーや武術に対する単なる好奇心と疑う古菲だったが、ネギの真っ直ぐな目を見て考えを改める。少し照れながらも、決意を込めてネギはきっぱり頷いた。

修学旅行で闘った近接戦闘では同世代でも遥かに強い小太郎への対抗心に燃えるネギの瞳を見据えて気持ちを感じ取った古菲。その瞳は彼女にとっても非常に好意を感じられるものであった。

とはいえ、自身よりも強くネギの近くにいるアスカの方が頭の悪

い自分よりも教師という職についているので適任と考えてそちらに視線を向けるも、返って来たのは首を横に振るという拒否の返答。

そもそも身内だからとかという理由で教えるなら古菲がその恩恵を受け取れているだろう。自身が拒否されている現状を考えるならある程度予測できたので落胆といった感情はない。本人は未だ諦めきれていないが。

未だ未熟な身なれど真剣なネギの気持ちに答えることが出来る彼女の返答は一つ。

「ハハハ、オーケーアルよ!!　強い男は大好きアル!!」

「は、はい!!　ありがとうございます!!」

その決意に満ちた申し出を受け弟子入りを快諾する古菲の色よい返事に頭を下げるネギ。ここで終われば綺麗なのだが、そうはいかないのが３－Ａ。

「「「人騒がせな～～!!」」」

「わひ～!　私が何したアルか～～!?」

野次馬爆発。特に真っ先に勝負をしかけたあやかや一時は諦めたまき絵、何気に振り回されたハルナの三人が騒ぎながら古菲を追いかけだした。元々勝手な妄想が暴走した結果なのだからこの爆発は果てしなく理不尽なのだが、追いかけられる古菲はご愁傷様である。

「なーんだ」

「ま、こんなもんでしょ」

追い掛け回される古菲に呆れて苦笑いを浮かべる美空の言葉に、「チャンチャン♪」とオチがついたと言わんばかりに締め括るアスカの姿があった。実はこの後、騒ぎすぎて店員に代表で怒られて頭を下げるアスカの姿で本当のオチがついたりするがまた別の話である。

第七十四話　　ボーリングと少年（後書き）

次回更新は一週間後（日曜日と月曜日の間）の午前０時です。次回は主人公の出番なしです。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

第七十五話　　短気は禍の元と少年（前書き）

夜勤明けで今日から三連休で気が向いたので投稿。

さて、全く主人公が登場しないというオリ主物なのにあるまじき話です。基本的に今話は原作の再現です。が、中には結構重要なシーンもあります。

ヒントは「エヴァンジェリンの言葉」です。

特に弟子入り試験で明確な差異を示すシーンがあります。二重の意味に気づく人はいるでしょうか？

分かり易いと思いますけどね。原作と見比べたら一目瞭然です。

文字数は１０１３１字です。

それではどうぞ！！

第七十五話　　短気は禍の元と少年

修学旅行から一週間が経ち、そろそろ残滓も薄れてきた5月1日。4月も終わって五月病（新人社員や大学の新入生などに見られる、新しい環境に適応できないことに起因する精神的な症状）だとかいうものが発祥する月が始まった。

「……はぁ～～」

朝のジョギングをしながら麻帆良学園中等部三年佐々木まき絵14歳。ちょっと（かなり）成績は悪いけど運動神経抜群の元気一杯スポーツ少女は心の底から憂鬱なため息を朝の大気へと吐き出す。

何時もの明るさは鳴りを潜め、仄かに漏れ出る暗鬱なオーラが彼女の表情を曇らせて見せる。

そんな普段の元気印らしくないほど憂鬱そうな溜息を漏らすかというと、五月病とは全く関係ない。先日、偶然にも新体操部の顧問が同僚の源しずなと話していた内容にショックを受けたまま早朝まで引き摺っているのだ。

「子供っぽいかかぁ……私……何が足りないんだろ」

好きなものはネギ、でもそれ以上に大好きなものは新体操と公言する彼女である。

五歳の頃からやっているから結構自信を持っていて、勉強や他のことはともかく新体操なら誰にも負けないと思っていた。

思い出すのは昨日の出来事。顧問の二ノ宮がいる中等部にある生徒数に比例するような大きな体育館の中にある体育教官室を訪れた時だった。

「しずなが体育教官室（こっち）に来るなんて珍しいわね？」

その時、新体操部の顧問である二ノ宮は珍しく来たしずなと共にコーヒーを飲んでいた。彼女は二ノ宮と同じく中等部を担当することもあって数年来の友人であるが体育系の顧問でなければ体育教官室に来ることは滅多にない。

その後話題は噂の子供先生達などの話題を経て、話しこみながらも二ノ宮が見ていた去年の新体操部の大会のビデオに話の種が向けられた。

「あら？　まき絵ちゃんね。去年の大会のビデオ？」

アスカとネギに任せきりだがしずなもまた３－Ａの副担任にであるのでビデオに写った少女――――佐々木まき絵が映っていたので問いかけた。

「日曜日に部内で夏の大会の選抜テストやるの。その参考にね」

丁度、ビデオではリボンの演技をしているまき絵の姿が映っていた。しずなの言う通り、去年の大会のビデオで夏の大会の選抜テストがあるため、顧問として出場テストを選ぶ身として準備をしていた。

「まき絵ちゃん部活頑張ってるものね。どうなの？　彼女は」

あまり新体操のことは詳しくないなりにビデオ越しでも彼女の演技に感心するしずな。だが、二ノ宮はその言葉を聞いて少し難しそうな顔をして口を開く。

「二ノ宮センセ……「まき絵か～～正直、まき絵は大会ダメかもな～」」

そこにまさしく最悪というタイミングで開いていた体育教官室の扉を通って声をかけようとしたまき絵。前の時間に居眠りをして全国大会優勝の夢を見て有頂天になっていたまき絵は二ノ宮の率直な考察を聞いてしまって「ステーン」とズッコけた。

彼女の話によればまき絵は、技術は正確、運動神経は抜群、練習も熱心と非の打ち所のないのだが、長所である明るさと単純なところが逆に仇になって短所になっていると言うのだ。

良く言うと天真爛漫。悪く言うと中学三年生でありながら子供っぽいというか、彼女から見ると小学生の演技に見えてしまうのだ。その所為で素質はあるのに今イチ壁を突き抜けられていない。

しずなとしては厳しい意見に感じるがまき絵の普段からすると彼女の言っていることも多少なりとも理解できる。バカレンジャーの一角に数えられるほどに勉強が出来ず、そのことに焦りもせずに暢気にすごしているのを見れば納得も出来てしまう。

「あの……まき絵……」

顧問の言葉の一つ一つがまき絵の頭に重くのし上がってゆき、途中で競争して傍にいた亜子の声すらも耳に入らず、

「うわあああ～～～～ん！」

「まき絵――――っ！？」

ポロポロと涙を流しながらその場を逃げるように走り去るまき絵、自身の最も得意とするものを否定された現実が受け入れられなくて、その晩は一晩中泣いて過ごした。

だが、朝になっても落ち込みは変わらず、気分を変えるために自主トレでランニングをしていたのだが効果は薄そうだった。

自分の性格が子供っぽいのは何となく分かっていた。そして一朝一夕で変えられないだろうとも感じている自分がいる。今すぐ得る必要があっても、方法が分からない以上はどうにもならない。

技術が足りないのなら練習を増やして覚えて行けばいいが、子供っぽいことを変えるために何が足りないのかが分からなかった。

――パシン、パシ――ン

「ん？　あ、ネギ君だ」

一応の目的地である世界樹広場前まで来たので足を止めて息を整えていると、どこからか判別できない音が聞こえた。

見に行くと手摺（てすり）の小さな幅の上でなにかの型を行うように拳を突き出したりして動くネギの姿を見つけた。

ようやく陽も昇り始めた早朝の時間帯、ただ一人黙々と型の練習を行うネギの姿があった。朝日が広場を照らす中で真摯な表情で練

武を続ける姿は、飛び散る汗が光を弾き、虹にも似た光彩を辺りに散らして少し幻想的な気配を辺りに振り撒いていた。

「――ふっ」

一通りの型をやり終えたのか、ネギは動きを止めて吹き出る汗もそのままに息を整えている。

エヴァンジェリンと、修学旅行での小太郎の二つの戦いで魔法と体術両方の力不足を実感したネギ。

魔法に関してはエヴァンジェリンに、体術に関しては中国武術研究会部長である古菲に師事する事に決めた。エヴァンジェリンへの弟子入りは土曜のテスト次第、古菲への弟子入りは数日前に一騒動あったものの認めてもらい、中国拳法を習い始める事になった。

「よしっ次……」

とにかく、ネギは目指す高みへの指針を見付けて意気揚々と鍛錬に励んでいた。息を整えて別の型を行おうとして、

「ネーギくんっ♪」

背後から声と共に背中をぽーんと叩かれて思わずびっくりして、行おうとした型が崩れてわたわたと手を振り回してしまった。手摺（てすり）の向こうは数メートル下の地面。誰かがいる状態で魔法を使えないので落ちたら危ない。

「あ、あれれ？　まき絵さん朝のジョギングですか！？」

「ネギ君、何やってるの――？　それってこないだ言ってた中国拳法？」

「ハ、ハイ。一昨日から古菲さんに教えてもらって……」

「へ――、それにしてはキマってるよー、すごーい。……ねぇねぇ、ネギ君、学園格闘大会にでも出るの？」

なんとか体勢を整えて振り返るとそこにはジャージのまき絵の姿。

危ないので手摺（てすり）から降りたネギに頭を撫でたり、頬をふにふにしたりと好き放題のまき絵の勢いに押されたネギは、聞かれたことに素直に答えていく。

「い、いえ、そーゆー訳じゃ……」

「ふ――ん。ネギ君……修学旅行から帰ってから、ちょっとカッコよくなった？」

別段、大会に出る気とかはないネギはまき絵の言葉を否定し、特に理由は気にならなかったらしいまき絵は先程の姿を思い出して頬を少し赤く染めて訊ねる。

「えっ……そ、そうですか？」

格好よくなったと言われても本人に分かるはずもないが修学旅行の話題に少しだけビクついた。

「ね、ね。今のもっかいやってよ♪」

いえー♪　とばかりに今見たものが良かったのかテンションを上げてお願いする。

「あ、はい」

まき絵のテンションに押されるネギ。だが、見様によっては楽しそうにしている2人の会話に割って入る声があった。

「フン、カンフーか……ずいぶんと熱心じゃないか、ぼーや」

声の主は腰に手を当てているエヴァンジェリンで、その横でぺこりと頭を下げたのは頭にエヴァンジェリンの初代従者であるチャチャゼロを乗せた茶々丸だった。

「あ、おはようございます」

「あれー？　エヴァちゃん、茶々丸さん、おはよー♪」

暢気に挨拶する二人だが、エヴァンジェリンの発するむすっとした不機嫌な雰囲気に気づいていなかった。

「カンフー（そっち）の修行をする事にしたのか？　じゃあ、私への弟子入りの件は白紙ということでいいんだな？」

エヴァンジェリンの言う事も尤もで、普通は「二束の草鞋」は履くものではない。先約である筈の自分を差し置いて、全く別の者に弟子入りし、教えを請うているというのだからそう考えても不思議ではない。

彼女は不機嫌と顔に書いたかのように、ふんと顰め面を歪ませて皮肉気な口調。どれだけ鈍くても機嫌が悪いと一目で解る。

もしかしたらサウザンドマスターの息子であり、大きい魔力容量を持って豊かな才能を持つネギを教えるという事を楽しみにしていたのかもしれない。

ネギは、エヴァンジェリンの言葉に「えうッ!?」と、もしかして弟子入りを拒否されるのではと目を見開いて慌て始めた。

「ちょっとー、エヴァちゃん、何でネギ君にイジワルするのー?弟子くらいしてあげればいーのに。……なんの弟子か知らないけどー」

誤解を解こうと慌てるネギを見てエヴァンジェリンは多少愉快になるが取り合おうとしない。それを見かねたまき絵が恐れも不安も考えも無く、思ったままの言葉を口に出した。

「ヤキモチだそうです」

これまた、茶々丸も思ったまま自分の意見を言う。汚れていない茶々丸の言葉が、逆に痛い。

「ちがうっつーのコラァァァ!!」

茶々丸のネクタイを絞って息を止めようとする顔が真っ赤にしたエヴァンジェリン。しかし、元々茶々丸はメカなので無意味だった。よほどエヴァンジェリンはテンパッているようだ。

「フン、子供の遊びに付き合う趣味はないんだよ。お前みたいなガ

キっぽい奴と話すのもな、佐々木まき絵」

「な〝……」

赤らむ頬を誤魔化すかのように高圧的に言い放つエヴァンジェリンの言葉は、昨日顧問である二ノ宮に演技が子供っぽいから夏の大会の代表はダメかもと言う評価を聞いてしまった、「子供」と言う言葉に敏感になっていたまき絵を怒らせた。

「何よーエヴァちゃんだってお子ちゃまみたいな体型じゃん。ふーんだ。いいもんねー。ネギ君ならエヴァちゃんになんか教えてもらわなくてもすぐに達人だよーだ！！」

売り言葉に買い言葉、ついでに不要な煽り言葉と共に青筋をおったてたまき絵が言い返す。

ここにアスカがいれば、エヴァンジェリンが明らかにムキになりかけているのを感じ取って、肉食動物に見つかった草食動物のようにじりじりと後退して安全圏に入ってから全速力で逃げていただろう。

「えっ、ちょっ、まき絵さ……」

哀れ、ネギの静止は間に合わず、エヴァンジェリンの額にもまき絵同様にびしりと青筋が浮き立つ。

本人としては気にしていないつもりでも、体が成長しないエヴァンジェリンにとってみればお子ちゃまな体型は禁句だ。子供と見下した相手に見下されるのは彼女の誇り（プライド）が許さない。

良いことを思いついた言わんばかりにエヴァンジェリンはニヤリと笑みを浮かべた。

「ぬ”……　いいだろう。たった今、ぼーやの弟子入りテストの内容を決めたぞ。私が指定する相手に有効打を一撃でも入れてみるがいい。それで合格にしてやろう。……ただし一対一でだ」

本人は認めたがらないだろうが挑発されて返す姿は、正直、エヴァンジェリンの反応は６００歳前後とは思えない程に子供っぽい。それと相手をするのは従者の茶々丸ではなく、別人らしい。

只一人、状況も事の重大さも理解していないまき絵はドンと薄い胸を叩いて、

「いーよ♪　わかった！！　そんなのネギ君なら楽勝だよー♪」

「ま、ま、ま、まき絵さんっ」

売り言葉に買い言葉でネギ本人を置き去りにしたまま、エヴァンジェリンの弟子入りテストが告げられてしまった。まき絵の発言に、マジ泣きであわあわパニクっていたネギとしては堪ったものではない。

マジで泣くネギの様子をエヴァンジェリンは楽しそうに嗤いながら見やりつつ、

「揉んでやれ、茶々丸」

「ハ、しかし「いいから行け。怪我せん程度でいい」……ハイ。失礼します、ネギ先生」

茶々丸はというと、ケケケと楽しそうに笑う義姉を頭に乗せたまま、突然の命令に如何したら良いか解らずオロオロして難色を示したが、主の念押しに動き出した。

「へ？」

「！！」

未だ状況を受け入れられないネギだが、失言に気づかないまき絵の間抜けな声を尻目に茶々丸の動きに反応して見せた。

一瞬にして間合いを詰めて懐にもぐりこんだ茶々丸の右手刀を辛うじて防いた。三日前なら反応も出来ずに受けたであろう一撃。早速鍛錬の結果が出ているようだ。

だが、間髪入れず放たれた右の蹴りには瞬時に反応することまでは叶わず、碌（ろく）に防御も取ることも出来ずに吹き飛ばされ、鈍い音をたて背中から壁に叩きつけられて目を回してダウンするネギ。

モロに受けて衝撃が強すぎてナルト目に為って気絶するネギの姿を見て、せせら笑うエヴァンジェリン。これで６００歳前後とは本当に大人気ない。

「この程度ならどの道貴様に芽はない。テストの場所はここ、時刻は日曜日午前０時にまけてやる。ま、せいぜい頑張ることだな、ハハハハハ！」

高笑いを残して背を向け立ち去っていくエヴァンジェリンと礼をしてからその背を追う茶々丸。

その光景を見ていて二人を見送りながら、自分が余計な事を言ったせいでマズイ事になった事を察したまき絵は、自分が何をしでかしたか今更ながらに理解して顔を青くしていた。

通りから外れてちょっとした林に囲まれ、少し傾斜になった広い野原。世界樹が遠くに見える、麻帆良の広場の一つ。

放課後、春の陽気が眠気を誘う広場で散歩する者、遊ぶ者、昼寝する者がいる中でネギは褐色の肌とクリーム色の髪が特徴の女の子――――――自分の生徒であり中国武術の師である古菲と修行していた。

――――――パン、パン、パパンッ

肉の音色や打撃の音色といった渇いた炸裂音が何度も響く。

ネギの掌打を古菲が受け流し、踏み込めば退き、退けば踏み込んでくる。流れるような攻防、息も吐かせぬ痛みと苦しみを伴う闘いの舞がそこにあった。

「むう、流石に二日だけではどうにもならんアルよ」

向かってくるネギをいなしつつ、古菲は早朝の顛末を聞いて如何ともし難い時間のなさにぼやく。

「ネギ坊主は恐ろしく飲み込みが早いし、才能もある思うが……」

才能と努力に熱意、それらに加えじっくりと磨きこむ時間があって初めて武道は成就するのである。

僅か数日の鍛錬で脅威の飲み込みの速さを見せるネギならば一定の期間があったなら古菲も余裕があっただろう。どれだけの才能があろうと二日という時間はあまりにも短かった。

これが一ヶ月先とかならば古菲も安心できたが三日では不可能というより無理な話だった。というかエヴァンジェリンの試験が無理難題過ぎた。

聞いた話では茶々丸はネギよりも間違いなく二段も三段も格上。師としてはどんなに頑張っても勝率は１０％を越えない。

「正直、二日だけではどうにもならんアルよ。ホイ、負け」

攻防の最中、ネギは右足を思いきり踏み込んで同時に右肘を突き出すが古菲の左手によって軽く流されてしまい、彼女の右手がネギの目を覆った。

ぐい、と頭を後ろへと倒され足を軽く払われてネギの体は「すぽーん」とでも擬音がなりそうな程に難なく転ばされた。

「あうっ！」

「ヨシ弟子よ、少し休憩するヨロシ」

「は、はい……」

ネギは尻餅をついて、痛そうな顔をして摩りながらゆっくり立ち上がる。草原なので草がクッションになったとはいえ、勢いがあったからあまり意味がなかったらしい。

そこで、ようやく古菲が小休止を入れた。

「ネギく――――ん！　お弁当たくさん作ってきたよ――――――――！！」

そこにタイミング良く現われたのは今回の騒動の引き金役の一人、佐々木まき絵である。その手あるのは重箱の山、山、山。後ろに控える亜子の手にも、どっさりと重箱の群れが抱えられていた。

「えっ！？　あ……ありがとうございます？」

ネギがまき絵を見て最初に上げた驚きは、彼女が現われたことか、それともその手に持つ重箱の山の多さか、はたしてどちらであろうか。

「一杯作ったあるネ」

ネギと違ってたらりと一筋の汗を垂らすという分かりやすい反応を示す古菲。軽く１０人前はありそうな重箱、ここにいるのは四人、となれば考えられることは一つ。

「勝負に勝つにはまずスタミナつけなきゃね」

料理を作ったならば食べさせるのが目的。

「わーおいしそうー」

言うだけあって、特盛りの量は別にしても横で見ていた古菲が感嘆の目で見ているぐらいお弁当はかなり豪華で美味しそうだ。というか、たかが弁当に海老は入れすぎである。どこの老舗の高級弁当か。

「みんなも食べてや」

まき絵と一緒に重箱を運んできた亜子も個人で食べられる量ではないことを考えて皆で食べることを提案する。それにしたって四人分にしては多すぎるが。

「ほら食べて、焼肉美味しいよ」

「あ、ハイどうも」

そして始まるまき絵の攻勢。

好意で作ってもらって勧められる料理をネギが断れるはずもなく、アレもコレもと口に運んで飲み込む……というか詰め込むとどうなるか。

「よ……余計に弱くなってしまたアル。小太りカンフーファイターアル」

体重が気にかかる年頃の少女たちが無理して食べるはずもなく、殆どをネギ一人で処理した。

当然、許容量を遥かに越えた摂取量の結果、ネギの腹は妊婦のように出っ張り、顔は倍に膨れ上がって端整なマスクが見る影もなくなり、縦ではなく横に数倍伸びてしまった。

「ご、ご、ごめんネギ君！」

「大丈夫デフよ」

涙目で謝るまき絵に片手を億劫そうにして上げたネギの声は掠れている。それに口から出る言葉の語尾に「デフ」がついてしまったネギはもう駄目かもしれない。

「で、で、でも大丈夫だよ！　我が部に伝わる秘密のダイエット術で！」

そして始まった新体操部に伝わる秘密のダイエット術。全身にラップをぐるぐる巻きにして、その上に毛布を三枚被って、学園サウナで三時間……ｅｔｓ。

結果、

「あああ、更に弱く……」

「いやああ～～～～ん！？」

無茶なダイエットにより今度は人としてどうなのよ、ってくらい

に痩せ細り、骨と皮だけによろよろと動くネギにまき絵が悲鳴を上げる。激やせどころかミイラと言われた方がまだ納得がいく。

まき絵の情熱は本物何だが悲しいかな、やることなすことが全て裏目になってしまっていた。

しかし、新体操部に伝わる秘密のダイエット術、その効果は予想以上に恐ろしいものだった。なんでそんなダイエット術が新体操部に伝わっているのか謎だが世間に広めれば多くの女性が泣いて喜ぶかも。

「ホンットにゴメン、ネギ君。私の所為でー。手伝おうと思ったのに迷惑掛けちゃって……」

「アハハ、大丈夫ですよまき絵さん」

涙目で両手を合わせて謝るまき絵にネギは回復しているものの、未だにガリガリでフラフラな状態では説得力も何もない。今にも倒れそうな状態では逆に危ないので古菲も暫くは鍛錬の続きは無理だと考えていた。

「で、でも日曜日まであと二日しかないんだよ？　……あれ？日曜？」

更に言い募(つの)ろうとして弟子入り試験の曜日に引っ掛かりを覚えた。

その瞬間、夕焼けが始まった空の向こうで烏(カラス)が人を馬鹿にしたような「アホー、アホー」と泣き声を上げていた。

「あ――――――っ、忘れてた！！　私も日曜に大会の選抜テストが

あるんだった――――――！！！！！」

（やっぱり忘れてたんか……）

ようやく思い出したまき絵に、もしかしたらと思って弁当作りやらを手伝っていた亜子は少し呆れていた。だから、彼女はまき絵に付き合っていたのだ。

「大丈夫なんですか？！」

「そ、それがその……そっちの方も全然自信なくて……」

「えっ！？　どうしてですか？」

「私の演技『子供だ』って先生が……。ネギ君にも迷惑かけちゃうし、もー私ダメ……」

こうして自分に関わっていて大丈夫なのかと驚いて問いかけるネギに返すまき絵の声はどんどん小さくなっていく。それどころか泣き出してしまった。

直接言われたわけではなく、教師同士の会話からたまたま聞こえてしまったためかまき絵のショックは大きかった。

今朝の出来事があるまでそのことで頭がいっぱいだったのにも関わらず、すっかり頭の中から抜け落ちていた大事なことを思い出したことで、ダブルパンチでへこんでいたのであった。

「なっ、何言ってるアルか、バカピンク」

「そうやで、まき絵らしくないよ」

何時も元気なまき絵が表情を暗くして涙を目に湛えている。普段の彼女はまさしく天真爛漫。そんな彼女の落ち込みように、周りも心配せざるを得ない。慌てた様子で二人も励ます。

「――――そうだ、まき絵さんの演技見せて下さいよ！」

励ましの甲斐もなく落ち込んだ様子のまき絵を見てネギは良案を思いついたといわんばかりに提案した。

「え――――っ、でも……」

完全に自信を失くしたまき絵は、人に自分の演技を見せる気にはならない。しかしネギには負い目があるので、まき絵はそれを即座に断れなかった。

「まき絵さんの新体操見たことないし」

「う……ネギ君……じゃ、じゃあ…ちょっとだけね……。コホン」

最初は少し躊躇した様子のまき絵だったが、ネギの顔を見て少しもじもじしながらも常に持ち歩いているリボンを鞄から取り出し靴を脱いで演技を始めようとする。

リボンを手にまき絵が靴下のまま芝生を蹴った。

そこから始まったのは素人目にも伸び伸びと動くまき絵。流れるように体を動かし、その体の周りを風に乗り輪舞を刻むリボンが回

る。途中からまき絵も演技にのめり込んで楽しそうに体を動かし、リボンが体の上や横でまるで生き物のように動く。

やがて舞いが終わる。

芝生の上に、静かに着地して最後にポーズを決めてまき絵の演技は終了した。恥じらいを見せるまき絵は、日の光よりも紅く染まった顔で、恐る恐る問う。

「えと……こ、こんなカンジなんだけど……」

「全然いいじゃないですか――――――!!」

少し恥ずかしいのかリボンをいじりながら少々自信なさげにまき絵が尋ねると、問題などないと謂わんばかりに喝采の拍手を送るネギ。同じく感動した亜子や古菲も拍手している。素人から見ても、それが優れた演技であると一目でわかるものだった。

「でも先生が子供っぽいって……」

「そんなコトないですよ!!　僕、新体操は分かりませんがとっても良かったです!　まき絵さんらしい素直でまっすぐな、美しい演技だと思います!!」

自信なさそうなまき絵にネギは外国人らしく照れの無さで褒め言葉で溢れんばかりに褒める。

しかし、考えてみて欲しい。

ネギはまき絵の演技から一切目を逸らすことなく余すとこなくバ

ッチリと見ていた。

新体操とは足を上にあげたり跳んでみたりと結構激しい。

ということは、現在制服姿で演技中のまき絵のスカートが捲くれ上がり、下着が丸見えに近いということだ。つまり、動くたびにパンツ丸見えでありながら目を逸らすことはなかったのだ。

英国紳士の心は何処に行ったのだろう。子供だからと言ってしまえばそれまでだが。

「ホ、ホント……？」

「本当ですよ、驚きました！」

しかし、それでも顧問に言われた『子供っぽい』という言葉を気にして素直に褒め言葉を受け入れられないまき絵に他の誰よりも絶賛するネギ。その言葉が自信を喪失しているまき絵の胸を打つ。

「あ……ありがとー、ネギ君……。でも、もうテスト明々後日なんだよね――……」

そんな微笑ましい光景をよそにまき絵はテストが近いという現実に落ち込んでいた。

「それはそうですけど、ここまできたらもうやるしかないですよ。後二日、一緒に頑張りましょう！　まき絵さん」

しっかりとまき絵を見つめ、力づけるネギに思わずまき絵はドキリとして頬をほんのり染める。

自分と同じくらいしか時間が残されておらず、自分以上に厳しい課題を突き付けられているにも関わらず、真摯に受け止めているネギの眼差しにまき絵は今まで可愛いとしか思っていなかった彼に格好いいと感じ始めていた。

「よしネギ坊主、そろそろ続きやるアルよー」

「はいっ……て、アレ？」

古菲が特訓に戻ると言うので立ち上がろうとして力が入らず、バランスを崩して倒れこんでしまった。

「きゃっ、ネギ君たら」

――――まき絵の膝の上へと。

「すみません、直ぐにどき……あれ？　立てない」

全然嫌がっていないまき絵の膝から直ぐに立ち上がろうとするも力が入らずにまた崩れ落ちる。

「さっきのダイエットの所為アルな」

「あれだけ太ったりヤセたりしたら体に悪いもんね」

古菲と亜子が批評する中でネギが奮闘し、まき絵が紅くなるというのを見守っていた。別に二人はあやかとかあやかとかあやかとかみたいにネギが好き過ぎて暴走するような性質（タチ）ではなく、初々しい二人を眺めてほのぼのしていた。

「何なのこの状況？」

「さあ？」

「なんや楽しそうやからええんとちゃうの」

アーティファクトのハリセンと木刀を持った明日菜と刹那は二人して理解できない状況に頭を捻り、どたばたと騒ぐ四人を眺めた木乃香が楽しげに締め括った。

ネギは回復するまで時間がかかるらしく、回復するまで結局はまき絵の膝枕で横になって休むことにしたらしい。如何に魔法使いといっても急激な体重の増減は地味に体にキタらしい。

第七十五話　　短気は禍の元と少年（後書き）

次回更新は元々予告していた日曜日と月曜日の間の午前０時です。
次回はオリジナル要素？ありです。兄弟の互いに向ける想いもありますので意外と重要です。

前のシフトから何気に夜勤が何時もより一回増えていることに気づき、「あれ？　これって可笑しいんじゃないか」と想い始めた筆者です。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

第七十六話　　才能と強さと少年（前書き）

今日忘年会があって何でかテンションが上がったので連続投稿。

前回の続きで、実は話の中で結構の重要なターニングポイントがあったりなかったり。

前話で上げたヒントである「エヴァンジェリンの言葉」の二重の意味に気付いた人は今の所いないようです。

表の意味には気付いた人は多いですけど隠された意味に気づくと弟子入り試験の難度が激下がりしたりします。

文字数は１１０７６字です。

それではどうぞ！！

第七十六話　才能と強さと少年

ネギは回復するまでまき絵の膝の上で休憩。亜子と古菲は残った料理を始末すべく（十人前以上あったので半分も残ってしまった）、重箱を持って友人行脚（適当に誰か見つけたら食べさせる）に出かけていてここにはいない。

「それじゃ刹那さんお願い」

その間に後から来た少女達はココに来た目的を果たすため明日菜は刹那に呼びかけながらハリセンを構えた。

「こちらこそよろしくお願いします。」

刹那も一礼して持っていた木刀を構える。そして明日菜が打ち込みを始めた。素人ゆえに無軌道な太刀筋だが、刹那はそれをきっちりと見極めて捌いて時々、明日菜に対してアドバイスをしていた。

木乃香はそんな二人を見守っている。

ただ剣を打ち合わせる簡単なものだが、素直にアドバイスを受けるので明日菜の上達は早く、センスもいいのだろう動きが見る見るうちに精錬されていく。

「アスナも刹那さんに剣道習ってるの？」

「え、うん」

膝枕しているネギの頭をこっそりと撫でつつ、まき絵は気になっ

て訊ねた。

打ち合わせながら会話をするといった他に意識を割くことは難しいようで明日菜の剣筋が乱れて行く。それでも止めないのは、まだ始めたばかりなのと修学旅行での経験で剣だけでなく余所にも意識を配るようにしているから。

「よっ、はっ、わっ！」

――――――パ、パッ、パパンッ

「やはりなかなか筋がいいですよアスナさん」

空がうっすらと暗くなっていく時間帯にハリセンと木刀がぶつかりあう音が鳴り響く。

刹那の言うように明日菜の元々の運動能力に加えて修学旅行での戦いを経て出来た実戦仕込みの生きた動きというのは一般人のレベルからすれば上等と呼べるものであった。まき絵の方に意識を割きつつであることを考えれば中々の動きである。

「ネギ君もだけど……何でイキナリ？」

修学旅行が終わったと思ったらネギは古菲の下で中国武術を学び始め、明日菜も刹那から剣道を学んでいるのだから気になって当然。

「ネギはなんでか知らないけど、私は……色々とあるのよっと！」

最後にいいのが入りかけて語尾が強くなったが、魔法関係を知ら

ない彼女に説明できず、ようはまき絵には言えないことだということだ。

「ふ～ん」

明日菜の返答に納得したわけではないが踏み込みづらい雰囲気を感じ取ってそれ以上の追求はしなかった。

そろそろ回復したネギが起きそうな感じがして来たその時、残飯処理に出かけていた二人が帰ってきた。もう一人――――――アスカを連れて。

仕事帰りに残飯処理をしていた二人と出会ったアスカは、小腹が空いていたこともあり一人で軽く三人前はあったのに全て食した。で、食べさせてもらったお礼を言いに彼女たちに着いてきたのだ。

まき絵に美味しく頂いたお礼を言い、動けないネギの状態についての説明やらなんやらを受ける。アスカが現われたことで一休みするらしく明日菜達も話しに合流してきた。

「茶々丸さんと戦って一発でも入れることができれば合格、か」

早朝の話を聞いたアスカは訝しげに顎を撫でながら呟く。

「流石に厳しいと思います。二日で中国拳法を極められるわけでも、古さんみたいになれるわけでもありません」

「んー……弟子をとる気はないってことなんかな？」

実際に少しだけ戦ったネギの感想では可能性はかなり厳しいとの

こと。一撃でも当てれば合格だが、その一撃はとてつもなく難易度が高い。

一緒に話を聞いた刹那が素直な感想を述べ、木乃香がエヴァンジェリンが無理難題を吹っかけたのは、真意は分からないが普通に考えれば弟子に取りたくないということなのか。

「カウンター主体の作戦で一撃だけを狙うつもりアル」

普通なら様になるのに一ヶ月かかる技を三時間で覚える反則気味の飲み込みの良さならば十分に可能性はある。カウンターこそは中国拳法の得意中の得意なのだから。

長引けば付け焼刃のネギが不利だが、一撃当てれば勝利条件なら油断させといて奇襲するか、相手の初手を誘っての狙いすましたカウンターを当てるしかない。いずれにしても最初の一撃を外せば後はないと思う気持ちが大切だった。

「なにか気になる事でもあった、アスカ？」

ああでもこうでもないと意見を出し合う皆の輪から外れて一人黙考しているアスカが気になって明日菜は問いかけた。

「――――いえ、なんでもないです」

そう返しながらもアスカの表情はまるで苦虫を潰したような顔をして優れない。

気になってもっと追求しようとして、明日菜の横を疾風の如く誰かが飛び出してアスカに迫る。

「隙ありアル！」

明日菜の横を飛び出した誰か――――古菲が素早い動きで、一瞬でアスカの懐へ入り込んで拳を突き出した。

考え事をしているらしく古菲の動きに気づいていないアスカに慌てて刹那が飛び出そうと足に力を込め、明日菜が声を出そうとして、

「甘い」

彼女たちの心配を余所に、古菲を見もせずにまるでそこに収まるのが当然だというように広げた掌に拳が収まった。

古菲も防がれるのを予測していたのか、連続で蹴りを含めての連続攻撃する。

「ハイィ！」

「残念」

しかし、確実な一打は入らずに彼女の攻撃を簡単に受け、捌き、避けきるアスカ。

余裕を持って攻撃を捌くアスカと必死な表情で攻撃を繰り出す古菲。そこには誰が見ても明らかな実力差があった。彼女は後ろへ跳び、仕切り直す。

観戦者たちは修学旅行などのことでアスカの実力が古菲よりも上であることが分かっているので大人しく離れて静観の構え。

「全て避けるアルか……自信喪失するアルよ」

「懲りませんね。まだやるんですか？」

曲がりなりにも中国武術研究会の部長であり、前年で「ウルティマホラ」で優勝した彼女が一撃も浴びせられずに悔しそうに顔を歪める姿を誰が想像できようか。

最初に殺気を放ってから隠すことなく不意打ちをしてきた分まだマシであるがアスカとしては堪ったものではない。呆れた様子を隠すことなく問いかける。

「まだまだアルよ！！　というより、そっちも攻撃するアル！！」

「しかし……」

彼女としてはアスカにも「ウルティマホラ」に出場して貰いたかったが逃げられてしまい、他の武道四天王も出場していなかったので不服を覚えていた。

それに今まで何度かこのように不意打ちで戦いを挑んだが年末の一撃以外にアスカから攻撃したことは全くない。アスカとしては言い分はあるものの、個人的なことで古菲が納得するものではない。

古菲の得意とする拳法は形意拳と八卦掌。後はミーハーで八極拳と心意六合拳を少しばかり齧（かじ）っている。

形意拳と八卦掌得意というだけあって古菲が取った構えに隙はなく防御に攻撃、どちらも効率的にできるいい構えだ。

今までの動きを見る限り、八極拳と心意六合拳の動きに粗があるものの独学で学んだことを考えれば及第点を越えている。無意識に『気』を使っている面もあるので一概には言えないが一般人の領域を超えかけている。

単純な技量だけでいうならば弟子級（ディサイプル）の上位にいる。

だが、悲しいかな。経験の足りなさと身体能力がその位階を落としている。『気』を使わない身体能力は武道家から見ると物足りなさ過ぎる。

互いに動かない二人。古菲はアスカが動くのを待っていたが、この男と戦いたくてウズウズしていたのだ。もう我慢はできない、自分の力を全力で叩き込むのみ。

「こないならこっちから行くアル！！」

そう言って今度も先手を取って地を蹴り、アスカに向かい一直線に飛び込んでいく古菲。その勢いを利用した拳がアスカの顔面目掛けて飛んで行く。

これを喰らったら一溜まりもないと思う。

騒ぎに気づいて起きたネギが見ている中、果敢に攻める古菲。本人はまだ背後にいるネギが起きたことに気づいていないが出来立てとはいえ弟子の前でいい格好がしたいようだ。

踏み込みから打ち込みまで速さがネギの相手をしていた時よりも段違いに速い。

なのに、アスカは首を僅かに傾ける事によってこの攻撃を簡単に躱す。

「ちっ」

攻撃した直後の隙がある自分に攻撃してこないアスカに苛立って古菲にしては珍しく舌打ちして、先程以上の連撃を繰り出す。

。これでもかと何度も何度も古菲が攻撃をけしかけるが、アスカはそれを手による捌きと体移動することによって悉くを回避する。

「動きに無駄が多い。技の繋ぎも雑だ」

必死に、本当に必死に攻撃を続ける古菲。攻撃してこないのではカウンターも意味がなく、小技では防御を突破できないからと単発の大技をしても無駄なことが分かる。

「その攻撃の繋ぎ方だと自分より強い者には簡単に読まれてしまいますよ」

攻撃を簡単に払われた古菲は、バク転して態勢を立て直すと今度は中国拳法の八極拳の秘伝【箭疾歩】でアスカの懐に入り込もうとする。【箭疾歩】は元々は六合螳螂拳の技だが、八極拳にも取り入れられている。

「踏み込みが甘い。これでは簡単に避けられるぞ」

【箭疾歩】は構えの状態から僅か一歩で敵へと近づく歩法で、敵の距離感などを狂わし、勢いのついた強力な突きを繰り出すものだが横に回りこまれたアスカによって突きは空を切った。

「はぁ、はぁ、なんで攻撃、しないアル」

アドバイスとも助言とも取れる発言を受ける古菲だが、自分だけが攻撃をしている状態が長く続いて肉体的にも精神的にも疲れが見えた。攻めてもすべて防がれてしまうのだ。それぐらい力の差は歴然としていた。

それでも諦めずに踏み込み、更に技を含めての連続攻撃。

残りの体力を考えずにピッチを最大限に上げたせいか、アドバイスを聞いて即座に動きに反映させたお陰か、それとも己よりも上の実力が持つ者相手に引っ張られるように動きに鋭さが増しているからか定かではないが、事実アスカは避けるよりも攻撃を捌く回数が増えてきた。そして、遂にガードを抉じ開けたのか隙が生まれる。

「そこアル！！」

古菲の必殺の一撃――――――と見せかけて途中で止める。

フェイントに引っ掛かってアスカの両腕が上がった。

腕が上がったことで体の中心部の防御が開いた。始めて出来たアスカの隙。

ここだけが勝機と古菲は自分の体を縮め固めながら肘を体の中心に立て、上がった腕の下に潜りこみながらそのまま踏み込みと同時に肘鉄を繰り出す。

「はぁぁ！！」

八極拳、八大招の一つ【硬開門（こうかいもん）】である。八大招は相手の動きに対するカウンターの動きの一つのことで、【硬開門（こうかいもん）】は相手の攻撃を逸らしながら打撃を加える一連の動きの事である。

アスカの腕は上がっており、防御は不可能。避けられる距離ではない。これで決まるはずだった。

「な！？」

古菲は驚いた。確かに当たったはずなのにアスカは存在しなかった。

「フッ」

「！？」

アスカの息吹が古菲の耳の直ぐ近くで聞こえた。

本気を出したアスカの動きは、風に揺れる木の葉のように澱みがなかった。

古菲に耳に息吹の音が聞こえると同時に、深く踏み込んだ左足が払われる。同時に古菲の背後の空間にごく自然に入り込み、指で服の裾を引っ張り、踵の後ろを踏んづけて残った足で軽く浮いたままの古菲の軸足を払う。まだ左足が宙に浮いたままの古菲は、払われたことで崩れた体勢を立て直そうとした動きと後押しされた勢いのまま、激しく地面に叩きつけられた。

無様に尻餅をついたまま、古菲は信じられないという面持ちでア

スカを見る。アスカは必要最小限のポイントを押さえるだけで相手の重心を崩してみせたのだ。その技の鮮やかさは、まさしく魔法染みていた。

「ここまで、かな」

「……降参アル」

尻餅ついた所で目の前には拳。つい受け身で腕を使ってしまったので受けることは出来ない。実際に完敗だったので、彼女もこれ以上続けようとはしない。

「やっぱりアスカは強いアル」

「それでも不意打ちは勘弁して欲しいですけど。思わず本気を出してしまいましたし」

差し伸ばされたアスカの腕に掴まり立ち上がると古菲はニッコリと気持ち良く笑う。時間にすれば短かったが身になる立ち合いと助言、最後に本気を出させたことに古菲的には多いに満足したようだ。

「いやいや、これで実戦に慣れたらどうなることやら」

思わずと言った調子でアスカの口から零れ出るのは感嘆。

アスカは古菲が諦めてくれるまで粘るつもりだったが良いのが入りそうだったので少し本気になってしまった。今は経験と技量差で勝っているものの数年後にはどうなっていることやら。

その後はアスカの下に興奮した様子の明日菜や刹那、木乃香、ま

き絵、亜子が集まって話し出した。

その中で古菲は輪に入らず、一人考え込んでいた。

古菲にしても今まで出させることが出来なかったアスカの本気に満足し、修学旅行やアドバイスを聞いた事で自身の技量が以前よりも上がっていることを実感して次に胸を躍らせた。

そして改めてアスカが自分よりも遥かな高みにいることを実感した。

麻帆良に来て以来、彼女を満足させる輩はいなかった。

確かに周りには数人自分より強い奴がいたが、例えば刹那は剣士、真名はガンナー、楓は忍者とタイプが違う。だが、アスカは中国武術だけではなさそうだがタイプ的に酷似していた。

古菲には自ら課した掟がある。格闘家として、武道の名門古家の跡取りとして自分より強い者を婿とし、負けを認めた者にのみ唇を許すと。

古菲とて勉学はともかく武道においては馬鹿ではない。

アスカとの力の差は歴然。

今までは楓といった他人も一緒に戦ったことで言い訳が出来ていたが、今回は正真正銘の一対一での敗北。もはや言い訳の余地はない。

強さに関しては申し分ないが年齢がネックになっている。しかし、

年下にも関わらず体格は古菲と殆ど変わらず、子供らしくヒョロヒョロに見えて攻撃を打ち込んだ体は思ったよりもガッシリしていた。

年齢の割りに自分よりも大人びており、人格も良くて仕事をしている。

（あれ？　年齢以外は問題ないアルか？）

突き当たった事実に一人で紅くなった頬を押さえて悶え出した。

強いからといって好ましくは思っていても決してアスカに惚れたわけではないと断言できる。

だが、武道の名門ともなれば相手が選り取りみどりというわけにはいかない。本人が自ら課した「自分より強い者を婿とし、負けを認めた者にのみ唇を許す」というように、場合によっては自分よりも強いが嫌いな相手、という可能性もある。

今はアスカに対して恋愛感情に至っていないだけでこれからもそうならないとは限らない。簡潔に言ってしまえばアスカを『婿候補』として古菲の頭の中にインプットされてしまったのである。

そんなことを一人考えて悶々としている古菲とは別に思い悩む一人の少年がいた。

「どうして……」

ネギ・スプリングフィールドである。

古菲と同じく皆の輪の中に入らず、二人の戦いを見て複雑な顔を

したネギの口から疑問が零れ落ちる。

ネギの目には二人の攻防が半分も映っていなかった。あまりにも速すぎて捕らえることが出来なかったのだ。分かったのはアスカが自分がいま学んでいる中国武術を習得しており、師である古菲よりも高位の位置にいること。

アスカが故郷を出て麻帆良に来るまでの間、何をしていたのかネギは全く知らない。今までに気になったことがなかったわけではないが、魔法学校時代は魔法を覚えることに熱心だったこと、ネカネの前ではアスカの話題が禁句だったことで聞けなかった。

アスカがいなくなってから夜に時々ネカネが泣いていたことをネギは知っている。だから――――聞けるはずもなかった。

麻帆良に来てから教師として劣っているのは滞在期間の長さから来ているものだと思っていた。春休みに新田からの特別指導を受けた時に、アスカがどれだけ入念に準備していたかを聞いたからだ。

それに半年近く早く生徒たちと親交していたのだから彼女たちからの信頼度も当然変わってくる。

教師として劣るのは当然であり、最近慣れてきたことで生徒から信頼されるようになってきて芽生えた思いだった。

一重にそう思うようになったのは、桜通りの吸血鬼事件で初めてエヴァンジェリンと戦った夜が関わっている。

ネギは封印状態の彼女に茶々丸さえ出てこなければ勝っていたと考えている。だが、アスカは僅か一撃で倒されていてその現場を目

撃している。ネギはアスカよりも魔法使いとして優れている。

これらを算出した結果、

――――時間さえあればアスカに負けない

最近になってネギの心の奥底で生まれた思いだった。

実はアスカが僅か一撃で倒されたのは演技だったなどとネギは知るよしもない。勘違いが錯覚を生み、抑圧された感情は反転して自尊心へと変化していた。

そんな中で学び始めた中国武術でアスカが師よりも己よりも高みにいることを知ったネギの心の中に一つの感情が湧きあがる。

――――それが『嫉妬』なのだと本人は気づかなかった。認めたくなかったのかもしれない。

「あ、ネギ坊主は何か掴めたアルか？」

「……いえ、まったく」

悶えていた古菲が正気に戻って一人輪から外れたネギに問いかける。茫洋とした視線が自分に向けられているのを感じ取り、見られたと思って慌てていたせいでネギの様子に気付くことはなかった。

「見るのも修業アルよ」

「段々速くなってよくわからなかったんです」

離れすぎていると分かるものも分からなくなる。見て学ぶには二人の攻防は始めたばかりのネギにはまだ速過ぎた。

「まだネギ坊主には早かったみたいアルな」

見ることもまた見取り稽古というように修行の一環。

修行の一環といっても中国武術を学び始めて一週間も経っていないネギにそこまで求めるのは無理があった。古菲もそこら辺のことは承知しているので残念という様子もない。

「……！」

それでもその言葉はネギの心を期せずして抉った。

「まあ、いいアル。今は体を動かしたい気分だから再開するアル！！」

古菲はネギの様子に気づかない。気づけない。

悶えていたのを見られたという羞恥から急いていたとしても致命的なミス。

本格的に武術を教える師として彼女の経験はどうしても浅かった。武術的なものだけではなく人間的にも足りないものだらけだった。

だけど、決して彼女を責めるべきではない。本来ならば古菲もまた師の下で研鑽を積むべき時期。気づけなくても無理はない。

「あ、はい」

先程の戦いで体が疼くのだろう、はち切れんばかりの笑顔で体をしきりに動かしながら休止を終えて訓練の再開を宣言する。ネギは体を動かせば心の疼きも消えるだろうと考えて一にも二にもなく、張り切っている頷いて古菲の後を追った。

古菲と武術を学び始めて三日目とは思えない打ち合いをするネギ。

明日菜と刹那もお喋りを止めて打ち合いを再開し、アスカは木乃香、まき絵、亜子の三人と並んで見ていた。

「なんというか天才ってのはいるもんですね」

隠すように深く細く溜息を吐き出してアスカは呟いていた。

「カウンターを幾つか教えるネ。カウンターこそは中国拳法の得意中の得意アルよ！」

「ハイ、くー老師！」

古菲に向かってキレのある攻撃を繰り出すネギ。

「ええい！」

両手でハリセンを振り回すアスナ。その動きは初心者には到底見えなかった。錬度から見て高いのはネギの方だが、彼女もまだ粗い面が目立つもののなかなかに様になっている。

もっとも、これはネギがある意味異常だからだ。鍛錬の後も反復練習を重ねていたとはいえ、三日でここまで出来るというのは異常

なペースである。

人は強くなっていく時、三つの段階があると言われている。

一つ、筋トレなどで体力（筋力）を上げる。二つ、技を覚える。

ここまでは何か格闘技を始めれば殆どの人が到達できる場所だ。

では同じ体力、同じ技を覚えて何故、個人差が大きく表れるのか？

そえが三つ目の段階――――技の力学を理解し、それを感じながら実践出来る、だ。

例えばストレートは、腰、上体を回転させ、腕を振る。ボクシングをやっていれば誰でも知っていることだ。

しかし、下半身で発生した勢いを体幹の回転によって増大させて拳を打ち出す、ということを完全に実践できるものは、格闘技をやっていても完全に実践できる者は意外と少ない。競技者でも時に腕から振ってしまいがちになってしまうもので、ここで大きな差が出る。

第三の段階をクリアすることは、感覚的なことなので教えるのが困難ということもあって非情に難しい。これが一流と二流の技の差を分けることになる。

ネギはたった学び始めて三日目でありながら三つ目の段階に突入している。

アスカが同じ場所に到達するまでに要した時間は【影分身の術】を使っても現実時間で一年近く。経験蓄積の時間を足したら果たし

て何十年になるか。

自分にもアレだけの才能があれば、と思わずにはいられない。

（未練だな。我ながら無様なことだ）

益体も尽かない考えだと頭を振って心の中で呟く。

それでも思わずにはいられない。あれだけの才能をもし持っていたら自分は色んなモノを失わずに済んだのではないか、今のような強さを持っていたら奪わずに済んだのではないか、と。これまで何千回、何万回と思ったように。

天下無敵――――

およそ武術を志す者なら、男なら誰もが目指し、渇望する境地だろう。

武術に関わらない者でも強い人間には憧れを抱く。いっそ人間なら誰でも、と断言してもいい。何者にも屈することのない強さを求めるのは人の、特に男の本能のようなものだ。

しかし、その強さにもいろいろとある。若い頃は強ければ何でもいいと思うが、年を経ればその本質について考えるようになる。

ただ強いだけの純粋な力なんてものはない。

何のために力を求めるのか――――その目的、強くなる理由が問題だ。

己の存在を世に知らしめるため。自分に誇りを持つため。自分の可能性を追求するため。不安を克服するため。何かを守るため。他の何のためでもなく、ただ生きる延びるため。

『強くなりたいか――――――？』

手段など二の次。とにかく強くなりたい。強くなれさえすれば、なんでも良かった。その理由が何であるにせよ、アスカはそう問われれば頷かずにはいられないだろう。

この日、夕焼けの染まる空の下、奇しくも双子の兄弟は互いに似たような感情を相手に抱いた。

――――兄は弟の強さに

――――弟は兄の才能に

まるで鏡合わせのように互いの足りない部分に目を向けて羨む。

現在の強さを求める兄と、過去にあれだけの才能があればと願う弟。現在と過去とベクトルは違えど根本的な所で似ているのは兄弟だからか。

このことが二人の仲にどんな影響を及ぼすのか、この時誰も気づいていなかった。

――――――プルルルルル♪

アスカの鞄から鳴り響く携帯の着信音がネギの弟子入り試験に暗雲を齎す凶報となる。

２００３年５月３日土曜日の午後２３時４５分の世界樹広場。弟子入りテストの約束の時間、約束の場所。

世界樹広場は告白スポットとして有名で、学園生たちの憩いの場として活用されているが深夜ともなれば人影はない。こんな時間に開いている店はコンビニなどの２４時間営業の店しかないため、近くにある大半の店は閉店を迎えて既に閉まっている。

例え告白するにしても学園祭を一ヶ月ちょい後に控えているこの時期この時間に用がある人間はいないだろう。逢引き場所として昼間は重宝されていても、夜間この辺は不便でしかない。

そんな中で、広場の一番高いところに陣取る少女の姿は異質に映った。深夜という時間にしては余りに不釣合いな白いワンピースを纏った少女――――エヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェルの姿が己が従者二人と共にあった。

「オイ御主人。コレジャ死合ガ見エネーゾ。モットイイ位置ニ座ラセロヤ」

人気の絶えた大広場を照らす街燈の真下に置かれた殺人人形――――チャチャゼロは能面のような表情で、無気味な声を上げた。

「全く役立たずの癖に口うるさい奴だ」

「仕方ネーダロ。動ケネーンダカラ。御主人ノセイダゼ」

ぴしゃり、と従者の無駄口をたたっ斬り、エヴァは微かに嘆息する。

文句を言い合う主従の後ろにそ茶々丸が控えていた。

「――――しかし良いのですか、マスター。あの人が相手ではネギ先生の勝率は概算一％以下……ネギ先生が合格できなければマスターとしても不本意なのでは……」

「……おい、勘違いするなよ茶々丸。私は本当に弟子などいらんのだ」

最早勝機はないどころではなく、限りなく不可能に近い勝率を挙げて問いかけた茶々丸に対してエヴァンジェリンは唇を歪ませた。

「その勝率は真っ当にやらせた場合だろう。当然、試合になるようにハンデはつけるさ」

言葉だけを見れば勝負を公平にするためのように聞こえるが事実ではないと顔が物語っていた。楽しげにその時を待っている彼女を見れば何を考えているのか良く分かる。

エヴァンジェリンは視線だけを動かして従者を見る。

「不満か？」

「……いえ」

あまりにも端的過ぎる言葉。

茶々丸も何をとは聞かない。端的過ぎる言葉であろうと二人は欠けている単語を知っているのだから。

揶揄（やゆ）するような言葉に、初めて茶々丸の表情がほんの僅かだけ揺れた。

「言ってみろ。怒りはしない」

機械の肉体を持つガイノイドである彼女の場合、微妙な感情を表す表情は把握しづらい。エヴァンジェリンにそれが分かるのは己が従者のことを知らいでかという思いから彼女の表情を観察する癖がついているから。

まるで母が子の他愛のない隠し事を聞き出すような温もりを持って重ねて問いかけると、微かな逡巡の後、茶々丸は口を開いた。

「不満……はありません。ただ――――」

「ただ？」

言いづらそうに戸惑った茶々丸に先を促す。

「マスターのご意向が、私には理解しかねます」

「――――――ふむ」

暫し黙考するような態度を見せてから、エヴァンジェリンは語りだす。

「言いたいことは分かる。だがな、この試験の結果がどうなろうとどちらにしても私の手間は変わらん。ならば経過を楽しんでも構わんだろう？」

言いながら彼女が浮かべたのは苦笑とかそういうものではない。自身の掌の上で脚本通りに踊る愚者を見るような、そんな笑み。

「私には……分かりません」

得々と語る主を見つめ、唇を震わせて、小さく、ゆっくりと言葉を紡いだ茶々丸はそれきり言葉を続けられずに沈黙してしまった。

エヴァンジェリンは黙ってしまった彼女を静かに見つめる。その眼差しには、紛れもなく愛情に類するものが宿っていた。

「迷うがいい。悩むがいい。その経験がお前の心を成長させる」

「……イエス、マスター。御意のままに」

戸惑いながらも従順に、茶々丸は頷く。

その人形染みた返事と、対照的に困惑を宿した表情とのギャップは、殊の外エヴァンジェリンを満足させたものだった。

「悪趣味ダナ、御主人」

今まで黙っていたチャチャゼロが唐突に口を開いた。

言葉とは裏腹に楽しげで、まるで懐かしいものを見るように主であるエヴァンジェリンをからかうチャチャゼロ。

「ふん、悪かったな」

「ケケケケケ……ダケドヨ、今ノ方ガラシイゼ」

拗ねたようにそっぽを向くエヴァンジェリンにチャチャゼロは笑みを深くする。

それと同時に、狩場へと獲物が飛び込んでくる。

「エヴァンジェリンさん!!　ネギ・スプリングフィールド、弟子入りテストを受けにきました!!」

ネギからは背を向けていたことで決して見えなかっただろうが、正対していた茶々丸はその時の主の顔を見た。

浮かんでいるのは身も凍るような狂笑。誰もが思い浮かべる『悪の魔法使い』の姿がそこにあった。

第七十六話　　才能と強さと少年（後書き）

今話は古菲の師としての未熟や心の中に生まれつつある想い。

ネギが抱えていくことに心の闇の一端と主人公の抱える葛藤が出てきます。

誰もが思いますよね？　過去に今の能力や経験があったら上手くいったミスがあると。

それとエヴァンジェリンと茶々丸主従の問答です。これは個人的な見解ですが悩むことと失敗することが成長への第一歩だと考えています。茶々丸の成長に説得力が出ればいいなと。

次回更新予告があまり当てにならない筆者ですが、どうせならと弟子入り試験編はこのままノンストップで行きたいと思います。つまり連続投稿ということです。

弟子入り試験編は後三話続ける予定です。

最近になって気付きましたけど、原作に入ってから主人公の思うとおりに進んだことがないんですよね。

原作序盤はネギの行動で、桜通りの吸血鬼編ではネギの暴走、修学旅行では千草を救えず、と上手く行った試しがない。大半はネギが原因ですけど。

つまり、弟子入り試験もまた上手くいくはずがないという可能性があったり。

明日も更新するので長々と書くのはここまでにして、次回更新は明日の午前0時です。

次回予告をば。

明かされる驚愕の試験内容、

対峙するありえぬ対戦者とネギ、

始まった試験は荒れに荒れ

果たしてネギは勝利を手にすることが出来るのか？

次回を待て！！

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

第七十七話　弟子入り試験と少年　前編（前書き）

二話連続投稿。

今日は家族と風呂屋に行ってきました。うっかり塩風呂に長居しすぎてちょっと疲れてしまいました。でも、風呂上りにマッサージチェアを使うのは外せぬ。

今話の文字数は１０７５１字です。

それではどうぞ！！

第七十七話　弟子入り試験と少年　前編

「エヴァンジェリンさん！！　ネギ・スプリングフィールド、弟子入りテストを受けにきました！！」

哀れなる愚者が魔女の張り巡らされた罠にも気づかず、『ネギがカモを背負って』来た。諺（ことわざ）の『鴨が葱を背負ってくる』とは何の関係もないのであしからず。

「――――よく来たな、ぼーや。威勢だけはいい。だが、それもいつまで続くか見物……と言いたい所だが」

エヴァンジェリンは、にぃっと可笑しそうに嗤うも、その笑みは階段を少し下りたところに立っているネギの方向を見た瞬間に瞬く間に引き攣った。

「そのギャラリーは何とかならんかったのかぁぁぁぁ――ッ！！」

何故なら激情するエヴァの指差した、その先にはギャラリーがいっぱい居た。

この試験の関係者である明日菜、木乃香、刹那は問題ない。ネギの拳法の師匠である古菲も結果が気になるだろうから我慢できる。

しかし、最後の四人組――――まき絵、亜子、アキラ、裕奈は問題がありすぎた。

「はぁ、着いて来ちゃって……」

ネギも困ったような顔をして何か申し訳なさそうだがなんとも気抜けした言葉を返す。

試験を告知した時にまき絵も一緒にいたので自身が引き起こしたこの試験に来るのは彼女にとっては当然で、まき絵から話を聞いた三人は、八時間前に話を聞いていた裕奈・亜子・アキラが持ってきた豪華特製夕御飯弁当を皆で食べた後、シャワー室に行き汗を流す時に一騒動あったものの、三人も好奇心から着いてきた。

三日前に会った明日菜たちは時間か場所を変えたのか会う事はなかったが。

本人としてもまさか着いて来るは思っておらず、彼の心中を知ってか知らずか、

「やったれ、ネギ君!!」

「ネギ先生がんばって!!」

と、裕奈が身を乗り出して、亜子が控えめながら、アキラは言葉がなくとも真摯に声援を送っていた。

そんな中でただ一人佐々木まき絵はネギを心配そうに見ていた。

「ネギ君、大丈夫?」

「任せてください、まき絵さん。練習の成果を出し切ってきます」

落ち着きなく問いかけるまき絵に、ネギは片目を閉じて笑顔で親指を立てながらそう言って身を翻してエヴァンジェリンが待ってい

る広場へ向かった。

「ネギ君、大丈夫だよね？」

ネギの背中を見送ったまき絵が古菲に訊ねる。

「いや、聞いた話だと茶々丸はかなり強いアル。長引けば不利アル。最初の一分でカウンターを当てられなければネギ坊主に勝ち目はないアル」

「そっそんな……」

古菲の少々悲観的な意見にまき絵はさらに不安げな表情をする。

彼女たちがそんなやり取りをしている中でエヴァンジェリンはネギが近づいてくるのを見ていた。

ギャラリーのことを無視することにしたエヴァンジェリンは口元を歪ませて改めて試験の内容を伝えるために一歩前へ出る。

――――彼、彼女たちにとっては驚愕の試験内容を。

「ぼーや、試験の内容を改めて伝えるからしっかり聞いておけ……
……と言いたい所だが、貴様の相手がまだ来ていない」

「え？　茶々丸さんならそこにいるじゃないですか？」

対戦相手は後ろに控える茶々丸のはずなのに、そんなことを言うエヴァンジェリンを少々怪訝そうに見つめる。その困惑の眼差しにエヴァンジェリンは小悪魔のような笑みを浮かべた。

「ん？　私がいつ、相手が茶々丸だと言った？」

ネギの言葉に獲物を嬲る捕食者然とした笑みを浮かべるエヴァンジェリン。

「で、でも……」

「私は『私が指定する相手に一撃入れてみろ』とは言ったが、一言も『対戦相手は茶々丸』とは言っていないぞ？」

「「「「「あ！？」」」」」

エヴァンジェリンの言葉に自分が勘違いしていることを悟ったネギと観衆（ギャラリー）たち。

状況から茶々丸が相手だと錯覚してもおかしくはないが、確かに彼女は一言も彼女が相手だとは言っていない。勘違いすることを分かった上で言っているのだから始末に終えない。

驚くネギと観衆（ギャラリー）たちの中で明日菜・木乃香・刹那は平常のままだった。何故なら彼女たちはネギの対戦相手が誰かを知っている。

「でも、なら相手は……」

「――――すまん、遅れたか？」

その時、聞こえてきた声の持ち主が広場に姿を現した。

観衆（ギャラリー）たちがいる階段とは反対側、エヴァンジェリンたちの背後に

ある階段を下りてくる金髪の少年――――――アスカ・スプリングフィールドの姿。

「いいや、まだ時間はある」

動揺するネギたちの姿をエヴァンジェリンは楽しそうに眺めながら問いかけに答える。

事実、時計が指し示す時間は約束の0時5分前。

平常時のアスカなら15分前や下手したらもっと前から来ているだろうが今回は彼女が時間ギリギリまで来ないようにしたのだから。

「あ、アスカ!?　もしかして僕の対戦相手って……」

「そういうことだ」

二人がそんな会話を交わしている間にもアスカが階段を下りて近づいてきたことで服装などがはっきりとしてきた。

流石に完全な時間外ということでスーツではなくネギと同じく私服だが真っ黒のジャージで、大きく息を乱していて大量の汗を掻いていた。

長すぎる前髪からポタポタと汗が垂れるのを見て茶々丸が持ってきていたバックからタオルを取り出す。

「アスカ先生、タオルを」

「ありがとう」

近づいてきたアスカに茶々丸がタオルを渡すと彼は手早く汗を拭き、無言のままその場で柔軟を始めた。

「……不思議な動きだな」

直ぐ傍で舞踊とも、太極拳の套路ともつかぬ動きを始めたアスカに、エヴァンジェリンが口を開いた。

「よく言われます」

言われることに慣れているからかアスカは動きを止めず体を解しながら苦笑を浮かべる。

中国にいる頃に内養功系武術の套路と柔軟・準備体操と掛け合わせたオリジナルなので何回も言われてきた。

異常な鍛錬を行う上で体を壊さないために入念に体を解すにしても、それだけに多くの時間が掛かってしまっては本末転倒。その考えから生まれたので短時間とはいえ、体にかかる負荷は見た目よりも大きい。

ゆるりと始めて、徐々に早く。

肉体に負荷を掛けると、成人であれば身体が出来上がっているので問題ないが、子どもの場合身体を軋ませてダメージとなる。その時、必要なのが身体の柔らかさ。肉体にかかる負荷を抑え込むか、身体全体で吸収して負荷を逃がすかだ。

もし人体への負担を無視すれば身体が出来上がっていても意味は

ない。その場合の柔軟さでもある。かといって完全に雲散できるかというとそうでもないが柔軟なことで損することはない。

動きの中で足を１８０度縦に開いたり、横に開いたりしても特に顔を歪ませることもなく、座り込んでべったりと体を折り曲げても余裕の表情。

アスカが準備をしている間、古菲がエヴァンジェリンに詰め寄っていた。

「何でアスカが対戦相手をするアルか！　勝ち目が無いアル！！」

古菲の強い叫びは対戦相手がアスカであることを考えれば当然。古菲よりも高位にいるアスカではネギに万が一の勝機もない。

古菲ですら修学旅行の『ラブラブキッス大作戦』で二対一の数的不利、不意打ち、場所の有利、といった状況下でやっと一撃を入れただけで他には一度もない。才能があっても習い始めて数日で彼女よりも遥かに下位のネギでは勝ち目は全くないと言っていい。

が、明日菜たちは事前に知っていたため驚きはしないものの苦い表情を浮かべていた。ネギと同じように弟子入りが掛かっている明日菜は特に。

三日前にアスカの携帯に掛かってきたのはエヴァンジェリンからで、用件は「ネギの試験相手をしろ」とのこと。当の本人である明日菜はアスカや玉藻（特に玉藻に熱烈に）に頼んでいたが本人達から説得され、若干不本意ながらエヴァンジェリンへの弟子入りを受諾していた。明日菜のことを彼女に頼んでいたのでそれを条件にされては断ることも出来ず、相手をすることになった。

「だが、この条件を受けたのはぼーやだ。外野は黙っていろ」

古菲の抗議を遮ったのは冷たい声。

エヴァンジェリンの反論に言葉を詰まらせるも、ジト目で非難の視線を送るのは止めない古菲。いや、古菲だけではない。ネギを応援に来ていた全員が、エヴァンジェリンへジト目で非難の視線を送っていた。五人分の非難の視線にちょっとたじろぐエヴァンジェリン。

「そういう訳だ。どうする坊や？　何なら止めてもいいぞ。私には別に構わん」

非難の視線を避けるようにネギに試験を受けるかを早口に問うエヴァンジェリン。若干ヘタレだった。

「……やります」

誰も彼もが自分が負けることを前提に考えていることを仕方ないと理性は考えつつも、感情がどうしても納得がいかないネギ。そこに掛けられたエヴァンジェリンの問いの裏にある意味を感じ取ったネギは、自分を奮い立たせながら挑む事を宣言した。

「よし、というわけだ。本人がこう言ってるんだ。外野も文句はあるまい」

ネギの返答に僅かに口角を上げたエヴァンジェリンに観客（ギャラリー）たちは何も言えない。本人達が了承してしまった以上は外野が文句を言っても仕方がない。

動きを終えたのか、アスカが最後に調子を確かめるように屈みこんで飛び上がった。

その高さは――――――――――この面子の中で一番背が高いアキラの頭の上まで足が上がっていた。

誰もが驚異的な跳躍力に瞠目する。

着地したアスカが、よし、と最後に首をじっくり回し、大きく深呼吸をして動きを終わらせた。荒れていた呼吸もだいぶ落ち着いてきたようである。数分しか経っていないのに呼吸を整えていた。

体力に関することは戦士として重要なことである。

常に自分のペースを維持して戦い続けられるだけの体力。呼吸が乱れてもすぐに整えることができるという事。戦場ではどちらも必要な事ではある。

それらをアスカは習得していた。

「それでは2人とも、位置につけ」

アスカの準備が終わったのを見届けて、試験の合否を判断するエヴァンジェリンが広場の中央に立って呼びかけた。

「ね、ねぇ、ネギ君は、アスカ先生に勝てるの？」

広場中央に向かって歩み寄るネギを心配そうな眼で見ていたまき絵の言葉に、古菲が答える。

「さっきのアスカの汗や荒れた息を見た限りではハンデはあると思うアルが……それを加味しても真っ当に戦えば勝機はないアル」

あのアスカの汗と荒れた息は準備運動の域を完全に超えている。

恐らく試合のために事前に激しい運動をすることで消耗させてハンデとするのだろうが、それでも真っ当に戦ったとしても愕然とした腕の差がある。

古菲の言葉に、まき絵が心配そうな顔をする。真っ当に戦ったら勝機がないなどと言われれば心配もするだろう。

エヴァンジェリンの一声で、アスカとネギがエヴァンジェリンを挟んで五メールの距離を取って向かい合った。

ネギの顔は自信に溢れ、勝つ気マンマン。対照的にアスカの顔は勝負事なのにも関わらず、精神の昂揚も緊張もないような何時も通り平静に見える。

階段を挟み、少年達の瞳が交差する。

闘志を燃やすネギ、冷たく光るアスカ。

二人を面白そうに見やったエヴァンジェリンが冷たく笑う。

「いいか、ルールに変更は無いからその辺りは省く。ぼーやがくたばるまでにアスカに有効打を当てられれば合格だ」

「分かりました……その条件でいいんですね？」

嫌味ったらしくエヴァンジェリンが告げるも、ネギの顔には笑みが浮かんでいた。

「ん？　ああ、いいぞ」

ネギの顔に浮かんだ笑みに疑問を覚えるも気にすることはなかった。

「では、もう語ることもあるまい」

エヴァンジェリンはゆっくり右手を眼前に持ってくる。特徴的な形をした指を軽く振って、

「始めるがいい！！」

パチンと、小さくそれでいて広場全体に響く合図を出すと同時に天を衝く鐘楼が０時を指し示した。

エヴァンジェリンが開始の声を掛けたものの、両者共に中々動き出そうとはしなかった。

ネギは最初アスカの様子を見るために攻撃をさせるはずだったのに、相手は予想に反して構えたまま動こうとしない。

アスカが握っていた拳を解いて手の平をゆっくりと開いた。細く長い、器用そうな五指は間近で見るとゴツゴツと頑くなった皮膚。

二人は睨み合う。だが、この均衡も徐々に崩れ始め来た。

ネギが構えや姿勢を変えてみるも微動だにしない。それどころか、一挙手一投足をサングラス越しでもじっと見られているのを感じて攻め辛さを感じていた。

武の道では。「静」は「動」よりも多くの意味を持つ。

武とは本来、己が身を守るための術。即ち、「守」こそが武の本質。

『中国拳法に攻め手なし』と云う。つまり全ての型は防御から始まり、決して己からは手を出さない。曰く『護身術であるが故に』という題目が冠につく。しかし、その本質は耳に聞こえるほど慈悲に溢れたものではない。

『相手の攻め気を誘い、隙を生ませ、間合いを殺し撃つ』……血も涙もない徹底した合理主義が生んだ戦法。四千年もの間、相手が武器を持っているのが当たり前という民族が磨いてきた殺人術。

アスカが学んだものは活人拳とはいえ、発する空気は獣が獲物を狩る前にじっと伏せているのと同じ。

「……くっ……」

己は泰山の如く動かず、敵を木の葉の如く散らす。

エヴァンジェリンのように百獣の王ライオンのような覇気とも違う。小太郎のように飢狼のような剥き出しの殺気とも違う。

アスカのそれは獣が獲物を狩る前にじっと伏せているのと同じで、少しでも隙を見せれば喉元に喰らいつく。その姿、発する威圧は正しく狩猟者（ハンター）。

「はぁっ……はぁっ……はぁっ……はぁっ（や……やりづらい！攻めて来る気が無いのか！？）」

攻めてくる相手というものは、逆に言えばその分だけ間合いも詰めやすいとも言える。打撃のない格闘技・例えば柔道の試合では密着して投げるまでに時間が掛かるが、打撃ありの総合格闘技では案外タックルが決まりやすいのはその所為でもある。

しかし、守り抜くというのは攻め抜くよりも数倍難しい。攻め手は打ち始めから拳が到達するまで、時間にすれば0．1秒もかからないが。受け手はどんなに鍛錬を積んだ者でも守備の動作に0．2秒以上の時間がかかる。つまり「守」に回った方が圧倒的に不利。

だが、世の中には何事にも例外というものが存在する。ここにいるアスカがそうであるように。

無言の圧力が寧ろ息苦しいほどの存在感を持ってネギを押し潰す。少しでも隙を見せれば喉元を喰らいつかれる。そんなイメージを抱いてしまい、ネギは何もせず対峙しているだけで体力を消耗していた。

（それならこっちから行くだけだ！）

対峙しているだけで体力を消費する。アスカに動く気配は見られない。

ならば、自身から向かうまで、とネギは即決した。

「契約執行九十秒間　ネギ・スプリングフィールド！！」

携帯用の杖を手に小声で呪文を唱え、修学旅行で身につけた自己流の自分への魔力供給を発動して身体能力を上げる。

これが試験相手を茶々丸と想定したネギの切り札にして、対等に戦える唯一の方法こそが我流魔力供給による肉体強化。この程度ならば魔法を知らないまき絵達の前でも使える。他は派手な上に飛び道具なので使わない。

「ふん……我流の自分への魔力供給か。なんつー強引な術式だ」

エヴァンジェリンから見れば無理遣りすぎて話にもならないレベルで、膨大な魔力による強引なものであった。

ネギは携帯杖を仕舞い、習ったばかりだが時間を惜しんで何度も練習を繰り返してきた歩法で、魔力供給で増した身体能力に任せてドンッと勢いの付いたスピードで接近する。接近スピードは練習していた時よりも断然疾く、アスカは反応できていないのか開始位置から全く動いていない。

そして踏み込み、魔力供給のされたそれはスピード、パワーともに素晴らしい。

（いける！！）

突き出される肘に避ける様子のないアスカにネギは少々あっけない勝利を予感する。だが寸前でアスカは上体を捻りネギの攻撃をやり過ごす。

続けて近づいて何発か拳を放つも、アスカは上半身の動きだけで容易く躱した。

（遠い！？　もっと詰めれば！！）

躱されて彼我の距離が遠いように感じたネギは、先程よりも一歩深く踏み込んで「フッ、フッ、フッ」と呼気を発しながら連打を浴びせるが。

「な！！？」

放った拳撃は冷静に両手で全て叩き落とされた。

一発は当たるだろうと思っていたので、ネギの口から驚愕の声が上がる。

アスカがした基本的な原理は難しいことではない。

水平に打ち出された力に対し、水平な力で対すると五分以上の力が必要になる。だが、水平に受けるのではなくて、手の平から腕の腹で受けて相手の手首から腕の背辺りを押して叩いて落とせば、比較的容易く力を逃すことが出来る

この原理の理想は、突いてきた側の腕で対角方向へ力を逃すだけでいい。

（悩んでいる時（ヒマ）はない。受けて直ぐにアスカは反撃に来なかった。受けるだけで一杯だったのかも……！？）

試合の最中で悠長に悩む余裕がネギにはない。なので思考は単純に、もっともあり得る答えを見つけ出す。

（なら、もっと速く強く打ってやる。受けきれない位に何発でも打つんだ！）

ネギ・スプリングフィールドは自分がアスカ・スプリングフィールドと互角に戦えていると確信した。

自分の動きがアスカの動きに対応出来ている。その事がネギの心に勇気を与え、勢いを増す。

アスカが攻めてこなかった理由が別であろうと、さっきよりも強く攻め続ければいいという結論に達したネギは停滞から攻勢に乗り出すことを選択した。後一歩でアスカの防御に穴を穿ち、一撃を加えられると思い、手数を更に増やしていく。

次に放たれるのは、無数の爆撃に等しい豪乱打。

身体強化によって強化された筋肉と神経伝達速度によって大幅に上昇した速射砲にも似た高速の拳。ネギの打撃は一連の動作が淀みなく、攻撃を防がれてもその次の型にすぐさま派生して追撃を怠らない。それは中国武術を習って数日の人間の動きではなかった。

しかし、

（当たらない！！　横の動きに加え、懐が深くて……！　腕を拳が通らない！！！）

アスカは悉くネギの攻撃をいなして、横の動きというどんな武道にもある普遍的な動きで回り込む。

横への動きだけではない。

裸拳の場合、ボクシングのように拳を顔につけたようなガードは衝撃を吸収することもなく不利でしかない。更に攻撃する側から見て距離感や打撃スペースのストレスが少なく攻撃しやすい。

体から腕を離すことによって一つ壁が出来、相手から見て距離感が遠く感じる効果や打撃スペースも狭まるのだ。

しかし、そこは僅か数日とはいえ古菲に師事したネギ

アスカのそれは大幹を崩さない武の動き。追うべきは相手の大幹。腕の影に囚われず大幹を捕らえる。

大幹の中心を狙った一撃は払われることなく体の中心に吸い込まれて行く。

（まただ！　僕の拳が……！　分厚い真綿を殴ったみたいに感触が無い）

だが、広げられた掌によって捕まれ、まるで分厚い真綿を殴ったかのように衝撃が吸収されるのを感じて困惑を深める。

それでも攻撃を止めるわけにはいかず、至近距離での激しい拳打

が打ち出される。

「ななな何やコレー!?」

「ボコボコ殴り合うかと思ってたのに何者、この二人!?」

「あのスピード!! やるアルよ!? ネギ坊主!! アスカも凄いが」

映画顔負けの凄まじいアクションを眼のあたりにして度肝を抜く運動部四人組、単純に身体能力が強化されているだけでなくネギの動きのそれは確かに中国拳法の様相を身につけていた。

だが、アスカも負けておらず、それどころか猛攻を捌ききって上を行っている。

二人の攻防を騒ぎ立てる少女達の中、試合をする二人の息吹と靴が地面を擦る音と攻撃を受ける無機質な音だけが酷く静かに鳴り響く。

同時、少し離れた場所からは小さな舌打ちを漏らしながら苛立ちと失望に満ちたエヴァンジェリンの声が響いた。

(……チッ、この程度か。つまらん)

数えで十歳の少年に対しては辛口の批評ではあろう。だから、失望に塗れた内心の呟きとは別に彼女の口から零れ落ちたのは妥当という納得の評価だった。

「ふん……まあ、こんな所だろう」

彼はまだ魔法使いではない……仮免の魔法使い見習いなのである。他の魔法使いよりも少し成績のいい程度の、誰しもが見る夢を目指しているだけの子供でしかない。

エヴァンジェリンとしては、不本意ではあるが自分が惚れた男の息子の教育だ。

鍛えるとなるとスパルタになるだろうが、彼が父と比べられても恥ずかしくないほどの力を持つ所までいけるだけの自信がある。が、自分が求めているのはこのような付け焼刃の力を披露しようとする姿ではない。

この後に起きる泥沼じみた展開を想像する。エヴァンジェリンの目にはネギの身体が深い底なし海の底へ沈み込んでいく光景が実際の光景のように脳裏に浮かんでいた。

傍らで悪魔人形が御機嫌ナナメダナーと、ケケケと不気味な響きで嗤う。

「アスカ先生……」

主や先輩従者と違って茶々丸は複雑な面持ちで彼らの戦いを見つめていた。

彼女はこの戦いのために科せられたアスカの枷を知っている。確かにハンデがなければネギの勝率は概算一％以下。しかし、ハンデがある状況では決してアスカも楽観できない。もしかしたら大怪我、下手したら死ぬ可能性もあるのだから。

皆の視線の先には一方的に攻撃を続けるネギと猛攻を受け続けるアスカ。

攻撃が通らないと悟ったネギは、ならば、と受けきれないほどの超近距離に接近する。

身体強化の恩恵を最大限に活かして一瞬にして懐に飛び込むと無防備な腹に向かって拳を突き出すがそれをアスカは間一髪で躱す。だがネギもそれを読んでいたかのように上体を回転させ上段廻し蹴りを放つ。

アスカはその蹴りを身体を捻って回避する。ネギは着地したと同時に再びアスカへと迫る。

傍目にはアスカが碌(ろく)な反撃も出来ずにネギの攻撃を何とか躱すのが精一杯のように見える。

観衆は優勢であるネギに声援を送る。それはネギに力を与え更にアスカに迫る。

「くーふぇ、ネギ君が押してるよね！　このままいったらもしかしたら……」

「このままいったらいいアルが……」

一方的に押しているように見える状況にまき絵は希望を込めて古菲に聞くが彼女の返答は不安を煽るものだった。

どう見てもネギがアスカを圧倒している、彼女たちはそう思っていた……古菲と明日菜たち三人以外は。その古菲らしからぬ態度

と表情にまき絵の中にある不安は徐々に増していくのであった。

あれから一刻、戦いは尚も続いていた。だがその展開は大半の予想と反しネギが優勢であるように見える。

未だ衰えぬ戦意で攻撃を仕掛け続けるネギと何も浮かばぬ無機の表情を保って防御し続けるアスカと、時間とは違って戦況には何の変化もない。

変わったのは互いが流す汗と漏らす息の量。

試合前は多量の汗を流して荒い息を漏らしていたアスカは時間が経つごとに収まっていき、今は少し運動したぐらいにまで回復している。

反対に体は温まっていたものの汗を流すほどでもなく息も乱していなかったネギはアスカとは逆に、荒い息を漏らし滝のような汗を流していた。

一刻もの間、休まずに攻撃をし続ければ誰だって疲れてくるのは当然だ。

「は――――っ！　は――――っ！　は――――っ！　はっ！　はっ！！」

ネギは片時も休まず、尚も突き進む。だが、悲しいかな。その拳は、届かない。

二十分、三十分過ぎたところから徐々に可笑しな展開になってきた。依然としてネギが攻め続けているのだが彼の動きにキレがなくなってきていた。術者である本人は契約執行が切れていることを知っていたが、その度に何度か距離を置いて魔法をかけ直して猛然と突き進む。それでもネギの動きにキレがなくなってきたのはつまり、魔法とは関係なく即ち体力が落ちてきたということ。

どんなに鍛えたところで期間は僅か五日、それにネギは未だ十歳の少年なのだ。アスカも同じ十歳だが二人の前提条件として基礎体力に差があり過ぎる。

二人には一流マラソン選手と一般人ぐらいに差があった。この勝負に時間制限はない。決着がつくまで勝負が終わることはない。ネギはそれを当てにして長期戦に持ち込む腹だったが果たして彼だけがそう考えるだろうか？

必要最小限の動きで攻撃を避け、受け、捌くアスカと、常に攻撃を仕掛け続けるネギでは消費体力も違う。動きの無駄やら何やらの要素も足すとネギは良く持った方だろう。

「どうした、息が上がっているぞ？」

衰えようとも猛攻には変わらず、攻撃を続けるネギにアスカが防御しながら気の抜けた声で挑発してくる。

「そんなことない！」

ネギは息を乱しているが気力十分といった状態で否定する。乱れた息を一度距離を取って少しでも整えようとした所に声をかけられた所為で、また一気呵成に踏み込んで攻撃を仕掛けさせて回復の機会を奪うアスカだった。

ここで時計塔の時間が午前1時の時間を刻んだ。

それを見たエヴァンジェリンが遂に動く。

「――――――時間だ。アスカの攻撃を解禁する！」

攻防が続く最中で放たれた一声。

「「「「「「「「「な？！」」」」」」」」」

それはこの試合に掛けられたアスカの枷。二人に実力差がありすぎるのでエヴァンジェリンによって開始６０分間は攻撃を禁じられていたのだ。

試合を見ていた誰もが感じていた違和感。それはアスカが一度も攻撃をせずに受けに回っていたことにある。

まき絵達は違和感を感じつつも気づかず、実際に戦っていたネギや見ていた古菲は薄々感づいていた。戦っている当人や師が気づかないでは情けなすぎる。

元々は茶々丸相手にカウンターの作戦を立てていたのだ。基本方針に変わりがないのに出せなかったのはアスカが攻撃を仕掛けて来なかったから。事、二人に関しては気づかなかったら惨めだ。

「……」

妖艶な笑みを浮かべるエヴァンジェリンにチラリと視線を向けたアスカの表情は変わらない。そして再びアスカがネギへと視線を向けた瞬間、対角線上にいた明日菜たち観客全員の身体に悪寒が走る。アスカの中で何かが変わった事を頭が理解しなくても身体が、本能が理解していた。

「は――――っ！　は――――っ！　は――――っ！」

少女達ですら実感した悪寒を間近で感じ取ったネギには肩で息をしていて余裕がない。だがその瞳には未だに消えぬ炎がある。その瞳に対しアスカの表情は逆に氷のように冷たくなっていく。

これからが本当の始まりだった――――――ネギへの地獄の。

第七十八話　　弟子入り試験と少年　中編（前書き）

二話連続投稿。

前話から見ることをお奨めします。

今話はネギファンの方はあまり見ることをお奨めしません。地獄を垣間見るので。それを踏まえた上で見るようにして下さい。

今話の文字数は１０３９１字です。

それではどうぞ！！

第七十八話　弟子入り試験と少年　中編

「時間だ。アスカの攻撃を解禁する！」

攻防が続く最中で放たれた一声によってアスカに掛けられていた枷の一つが外れた。

二人に実力差がありすぎるのでエヴァンジェリンによってアスカは開始６０分間は攻撃を禁じられていたのだ。

エヴァンジェリンの一声によって観客全員の身体に悪寒が走るほどにアスカの発する空気が変わる。

――――――行くぞ？

丸々一時間攻撃しっ放しだったネギの疲労の色は濃い。それでもアスカの発するこれから攻撃するぞ、という空気を前にこれからが本当の試合の始まりだと心の中で自身を叱咤しながら身構える。

攻撃を解禁されたアスカがゆっくりと歩くような速度でネギの下へと進む。徐々に縮まる距離、これからが本当の試合だと実感して震える鼓動を押し込めるように観衆は見つめる。

少しずつ二人の距離が縮まり、拳が届く距離になって先制したのはネギ。

近づいてくるアスカへと逆に踏み込んでの右の崩拳。アスカが攻勢に出ると力を振り絞り、開始当初と変わらない速さの一撃。疲れた状況でありながら今夜のネギが出せる間違いなく会心の一撃。

「――――――っ！」

だが、アスカはネギの会心の一撃を、巧みに身体をずらして予測を狂わせる。

体を開きながらサイドステップしてネギの横へと滑り込む。一連の動きは水が流れ落ちるように自然に成された。アスカはネギの右の袖の外側を右手で掴んで引っ張って外側に回り、地面を滑るような歩法と共に離れた左の掌底を耳の裏に軽く入れて離れた。攻撃を防ぐことも避けることも出来ずにネギは食らう以外の選択肢を選べない。

対角にある腕を掴んで引っ張るということは、引っ張られた方は無防備に背中を晒していることになり、身体を回せないので殴れないし、蹴りも困難。逆に引っ張った方はこれ以上のないポジションに来ることになり、その勢いでカウンターを取れるこの技は、攻撃の利もさることながら相手の右を封じるという防御でもある。

対角する側の手で腕を掴まれた場合、簡単に外す方法がある。

掴まれた腕を内側へ捻るように畳めば、簡単に外れるのだ。焦って外に引っ張っても相手を呼び込むだけで外れない。

そもそも、アスカはネギの袖の外側を取っているので、この対処法は意味をなさい。

他の対処手段としては、カウンターを躱して後ろ回し蹴りなどの回転技、腕を使ったバックハンドブロー、回転肘打ちもあり、主に虚をつく技だが威力もある。

が、初見で躱すにはネギには接近戦での経験が圧倒的に足りなかった。

「!?（な、なんだ?）」

まるでふざけて友達にビンタするような強さで叩かれたそれには必殺の威力はない。攻撃を受けたものの大したダメージもなく、虚仮脅しかと思って振り返ったネギが攻撃をして離れたアスカを追おうとしたその時、フラッとよろける。行き込んで出した筈の出足が遅い。

片膝をついたネギの視界がグニャグニャと歪み、目の前にいるアスカの姿をちゃんと捉えられない。平衡感覚が定まらず、風邪を引いた時のように体の感覚も鈍い。

アスカが攻撃した箇所は、ボクシングで「耳の裏（アンダー・ジ・イヤー）」と呼ばれ、相手の耳の裏を叩いて三半規管を揺らして麻痺させる反則攻撃。絶大な効果とは言い難いが、反則攻撃に取られるだけの効果がある。

ボクシングでの反則攻撃に当たる背後からの攻撃や、金的への攻撃等の一撃必殺のと比べれば地味ではあるが効果はあった。

「どうした、たったあれだけで立てないのか?」

ほんの1，2秒に過ぎない時間だが、ネギは完全に無防備な状態。そこにアスカがわざと見逃してやっているのだと、ネギを揶揄するように口を歪めて挑発する。

（感覚が戻った!!）

「まだまだ！！」

双子の弟であることや魔法学校時代の成績で、ネギは潜在的にアスカを自分の下に置いている。

故に魔法使いとして、習い始めの武術とはいえ何もしていないと思っているアスカに下に見られることがネギには耐えられない。特に教師としては上だと認めざるは得ないことがそれに拍車を掛けていた。

いや、もしかしたら意識的に下に見ることで自身を保とうとしていたのかもしれない。

平衡感覚が戻ったネギは、憤然やるせ無いという表情でアスカに突っ込む。挑発に僅かに冷静さを失い、最初よりもやや大振り気味に攻撃する。

「うぐっ！」

アスカは攻撃を簡単に避け、戻すのに合わせて踏み込み、変わらず左の掌底をネギの鳩尾よりやや左に叩き込む。衝撃に声を上げるもダメージは無いに等しい。気にせずに攻撃を続けるも、

「うっ、うっ」

手を出すたびにカウンター、リカバークロスが驚くほど簡単に決まってネギは呻くような声を上げる。

相手のパンチを寸でで見切って小さく躱し、戻す（リカバー）腕に合わせて踏

み込んで左の掌底を被せている。これをやられるということは、ネギの攻撃がアスカに見切られていることを表している。

ちなみに、「掌底」とあるがアスカは平手で攻撃しているわけでは無い。

掌底打ちは、格闘技や武道における打撃技の一種である。掌打、掌底などの略称でも呼ばれる掌の手首に近い部分で相手を叩く技である。

所謂、平手打ちとは異なり、当てた衝撃を手首の関節で緩和しないため、より力がダイレクトに相手に伝わる。

相撲等で使われる突っ張りや張り手を、さらに相手を倒す、ダメージを与えることに特化したのが掌底打ちである。ストレート、フック、アッパーカットと拳と同様の使い方ができるが、特に鼻、顎先を狙うストレート打ち、顎先、こめかみを狙うフック打ちが頻度が高い。

裸拳で打ち抜いたら相手の顎を割ったり、自分の拳がイカレたりする可能性があるので注意である。

人の骨は硬い。相手を失神させるほどの衝撃に耐えうる拳を作るのは容易いことではない。拳立てや砂袋で鍛えてある空手家の拳でさえ、時に相手の頭部などを叩いて骨折することがある。

掌底による打撃は拳のように皮膚の表面を傷つけることはないが、グローブを着けたボクサーのパンチと同じく衝撃が浸透して脳に直接ダメージを与えるため、根性だけで耐えられるような代物ではない。例えば掌打で軽い脳震盪を起こすため、続く攻撃をほとんど無

防備で受けることになる。

アスカは素人、もしくはそれに近い人間にはこれで対応しているのには理由がある。

アスカの手足……いや、五体の全てが最早既に凶器と化している。防御の心得がない一般人に本気でなくても一撃を振るえば無事では済まない。

以前、中国に住んでいる頃に武侠と問題を起こした時にそれを実感した。己の鍛えた体は最早、一定以上のランクを超えた相手でなければ本気で振るうことは出来ないのだと。

それが示すことは正(ただ)しくアスカが強くなったのだということ。

その事実を剣星に気づかされたアスカの心に去来したのは嬉しさと虚しさという矛盾した感情。

強くなったことは間違いなく嬉しい。だけど、それは同時に唯人に戻れないことを示していた。強さを求めながら平常を望むアスカの矛盾した在り方。

アスカは決して武人ではない。しかし、本人は己がどう在りたいかを定めきれていない。己を肯定せず否定しているばかりの在り方は何時か破綻するかもしれない。それを剣星達や玉藻、神父は危惧していた。師の心、弟子知らずとは良く言ったものだ。

取り合えず本気で戦う時でなければ拳は握らないと誓いを立てた。これはアスカの中にある一つの誓いだった。偶々、今回はエヴァンジェリンに課せられた枷の一つと合致したから良かったが。

「はぁっ！　はぁっ！　はぁっ！　はぁっ！」

ネギは「自分の攻撃は届かず、手を出せば打たれる」を繰り返してもその意思は萎えず、息が乱れだしても攻撃を止めない。何故ならアスカの攻撃を食らってもネギは全くと言っていいほどにダメージを感じていないからだ。

それが既にアスカの術中に嵌っているとも気付かずに。

「――――まだやるつもりか？」

攻撃の合間、身長差だけではなく歴然とした力の差でネギを冷たく見下ろし、アスカは構えを解いて問うた。

「……？」

明らかな隙。なのに、ネギは攻撃を仕掛けることも出来ずに留まって体力の回復に努めた。

そして問われたことを考える。

ネギの攻撃は掠りもせず、アスカの攻撃だけは簡単に当たりまくる状況。傍目に見れば力量差は歴然。

だからこそ、アスカは問うた。ここで止めるか、続けるかを。

無謀と勇気は似て非なる物、何の策も無いままではネギには一片の勝機もない。

アスカに言われるまでもなく理解しながらも、ネギは応えない。否、答えるだけの余裕がない。出来ることは黙ってふらふらとしながらも己には戦意があると証明するために構えを取るのみだ。

ネギの目はギラギラと輝いている。傷付いても、その輝きは失われない。否、寧ろ増している。

その目を見て強情だと思いながらも、やれやれ、とアスカは息をつく。

「ここでそれを問うのは野暮というものか――――――為らば、覚悟しろ。ここから先は地獄だぞ！！」

下げていた腕を上げて構え、爆発するように弾けてアスカがネギに迫る。

ネギは朦朧とする意識の中、攻撃を放つ。

しかし、

「ぜ――――っ！　ぜ――――っ！　ぜ――――っ！　ぜ――――っ！」

何度攻撃しても躱され、その度にカウンターがネギの腹を打つ。

アスカが攻撃した箇所は心臓（ハート）、肝臓（リバー）、胃（ストマック）、脾臓（スプリーン）。腹部にある急所を恐ろしいほど的確に捉えている。

誰かが教えてここまで正確にできるものではない。しかし、治癒魔法を学ぶ過程で神父から医学を畳み込まれ、戦場で医者もどきを

していたアスカには内臓の位置が手に取るように分かる。

そして、攻撃するたびにダメージを触診しているのだ。

肉を打つ容赦の無い音色は最早、一方的な暴力でしかない。鳴り響く打撃音、血などは流れていないが耐性の無い少女らは目を瞑り耳を塞いで恐怖を堪える。

「あ……ああ！！　ネギ君の顔色が青紫色に。ま、まだやるつもりなん……？」

尋常ではないネギの顔色を見て涙目で言ったのは、こちらも顔色を悪くした亜子である。

亜子は身体を震わせ、座り込む。木乃香も亜子と同じく震えていたが刹那が支えていた。特に心優しき彼女たちにはこの光景は心の拷問である。

亜子の言葉に、裕奈とアキラも同意する。

「うん、……あれでは――」

「勝ち目、ないよ……」

ネギに勝機がないのは素人の彼女たちでも明らかだった。

だけど、当事者であるネギが止めないと言った以上は彼女たちに止める術はない。声援と共に応援するしかないのだから。

一人頷かぬまき絵は、じっと眼に涙を溜め――――それでも眼を

逸らさず、攻防を見守る。

「――――ネギ君」

涙を流しながら飛び出しそうな自分の体を押し留める。

あそこまで頑張ってボロボロになっているネギを止めてはいけない。

ここで止める方がネギには酷いと思っていた。何故ならばネギはどんなことでも頑張ると言った。子供の我侭でただの意地っ張りだからと思うかもしれない。だけど、子供の意地っ張りであそこまでは出来ない。あそこまで粘り強く、どれだけ打たれても諦めない姿勢は同年代の子供では滅多にいないだろう。

ネギには目的があって、そのために自分の全部を掛けて頑張ると決めているのだ。

まき絵は自分でも友達でも先輩でもいいし、男の子の知り合いでもいいがネギのように目的を持った子を知らない。あやふやな夢みたいのじゃなくて、ちゃんとこれだって決めて生きている人を過分にして知らない。

ネギは目的を持って頑張っている大人なのだ。今は止めるべきではない。

それは屁理屈かもしれない、思い込みかもしれない。事実ネギは酷い目にあって、今にも倒れそうだ。しかし、如何してもまき絵には出来なかった。

夢を持つ。なんとも甘い言葉だ。

今時にありがちなあやふやなモノではなく、確りとした目標であり目的である物。

それを追い求めるというのは、何とも辛く、難しい。何度も挫折するだろう。何度も諦めそうに為るだろう。それを止める想いこそが、覚悟や信念。熱い思いこそが、夢の原動力と為るのだから。

戦うネギの姿を、ぼろぼろに為って尚諦めない姿を焼き付ける。

「ネギ君……」

頑張れ、とまき絵は口の中で泣きそうな声で小さく呟いた。

彼女たちの心配を余所に息が乱れ、動きすらも衰えてきたネギは尚も諦めずに攻撃する。だが、ネギの戦意とは別に状況は刻一刻と悪い方向に進む一方。

「くっ……」

その中で明日菜の拳は強く握り締められていた。

この戦いはネギと明日菜のどちらかの弟子入りが掛かっている。

本来ならアスカではなく明日菜が戦いの場に立つのが正道であろう。それを頼まれたエヴァンジェリンが「それではつまらない」と言って、よりにもよって兄弟対決を実現するために頼みに来た弱い立場のアスカを戦いの場に引きずり出したのだ。

既にこの状況になるだろうことはアスカから聞かされている。最初から最後まで全てがアスカとエヴァンジェリンの掌の上だと。

明日菜はネギに対して良い感情を持っていない。これは事実だ。

彼女はネギが麻帆良に来て当初に起こした事件の数々に巻き込まれている。必ずしもネギだけの所為のものでもないものもあるが、大体においてネギが原因であることに変わりない。

決定的だったのは桜通りの吸血鬼事件でネギが起こした行動。

許せはしないし、納得も出来ていない。それでも最低限の理解はした。

あの事件を切っ掛けに今まで以上に距離を取ることになったが、逆にこれが功をそうして悪い面だけではなく良い面も見えてきた。といっても一度決定付けられた感情が容易く変化することはないが。

それでも最低よりかは大分回復しており、ここまで苦しめられる姿を見たいとは思わない。

元々、神楽坂明日菜という少女は子供嫌いを標榜しながらも甘い性格だった。きっとアスカがいなければなし崩しでもネギに情を移して、根には持っていても許していただろう。

攻撃が解禁されるまで何気にアスカはネギを休めさせようとはしなかった。一分でも休めば、多少は回復するのに休ませないように離れようとすると接近して攻撃を誘導する。

ネギの中に残っている体力の全てを無理矢理に搾り取るやり方に

感心するべきか、卑怯と罵るべきか。試合ならば、卑怯だと叫んでもいいが、実戦だったらそんな事を言っても戯言にしかならない。

卑怯だと思い切り叫びたい。

しかし、アスカが戦っているのは明日菜のためなのだ。本来なら背負わなくてもいい重みを任せているのだ。

二人のやり方を気に食わないと思いながら、ここで止めることはネギのここまでの努力と、アスカの誠意を踏み躙ることが分かってしまう明日菜は、どうしようも出来ない現実に強く握り締めていた拳から血を滴らせ、唇は噛み締めすぎたのか破れて血が流れていたが当の明日菜も誰もがそれを気にする余裕はない。

「……勝てないアル」

簡潔にこのまま行けばどうなるかを古菲は静かに呟く。

ネギが端整な顔を崩して必死な顔で手を出し続けているが掠る事もなく回避されている。それどころかカウンターを合わされてダメージを増している。

それに空振りは体力の消耗度を早める。このまま続けば遠からず、ネギの体力は残らず奪い取られてしまう。

打開策を実行する体力は残されておらず、そもそも同じ状況下では彼女にもどうすることも出来ない。それに思いつく策もない。

対するアスカは試合前の疲労の様子がなんのその、逆に回復したような様子。

アスカは回復し、ネギは疲労する一方。ネギの勝機は完全に潰えたかに見えた。

彼女たちの反対側でボロボロになっていくネギの姿にハラハラする心優しい茶々丸を脇に、エヴァンジェリンの最初の従者が口を開いた。

――――――アスカが強いか、を

「御主人……アイツハ強イゾ」

「あぁ……」

エヴァンジェリンはチャチャゼロの言葉に小さく同意した。アスカが強いことなどエヴァには最初から分かっていた。だが絶対的な確信はなくあくまで推測の域だった。だがこの闘いを通して証明された、即ち彼が己と同種である事を。

「中々に手厳しいやり方だが悪くない」

「ケケケ、ボーヤニハイイ経験ニナルゼ」

かなりの枷を嵌められながらも徐々にネギを追い込んでいくアスカの手腕にエヴァンジェリンとチャチャゼロは感心して見物している。

鋭い眼光でありながら、それでも隠しきれない高揚感が伝わってくる。英雄の息子の才能に興味があるのか。惚れた男の息子を、自分の手で育て上げる事に固執しているのか。

スプリングフィールド、英雄の血族を味方につけるというのは、この学園での鬼札を手に入れると同義。少なくとも最も影響を与える存在になる事は、この学園に縛り付けられ退屈を持て余している彼女には中々有意義なものだろう。

最もネギがエヴァンジェリンの期待値に届かなければ、その才能に興味を失って彼女は呆気なくネギを捨て去るだろう。

正面から正々堂々戦う事を好むネギがもっとも苦手とするだろう搦め手。今後、こういう敵が現れた時の参考になるだろうと思うと悪くないと考えて、笑みを浮かべていた。

「ぜっ！　ぜっ！　ぜっ！　ぜっ！」

時間経過と共にネギの攻撃が目に見えてスピードが落ち、鈍ってきた。比例するように息の荒さも上がってきている。

人体で心臓（ハート）、肝臓（リバー）、胃（ストマック）、脾臓（スプリーン）等が何故、人体の急所と呼ばれるか？

それは神経郡が集中しているから。横隔膜の上下動がポンプの様な働きをし、人間は呼吸する。しかし、急所を強打されると、その神経郡が硬直してしまう。即ち、息が出来なくなる。

そして、息が出来なくなる状態が長時間持続する。そんな状態が続いたネギの顔には呼吸困難の色、酸素欠乏症（チアノーゼ）がはっきりと出てきていた。

必要最小限の手数で、一つ一つの機能を破壊していく。どこをどういじれば、人間の体が壊れるかアスカは良く理解している。治す

という事は壊すことにも通じるのだから。

（う～～～～っ！）

またネギの攻撃は簡単に躱され、腹部にアスカの攻撃が入る。さっきまで感じなかったのに、腹部を攻撃されるたびに激痛が走った。

心臓が酸素を要求してくる。意識はハッキリしているのに、ネギはちゃんと呼吸ができない。呼吸困難と腹部の激痛に苛まれているネギは、アスカのボディ攻撃を噛み締めなければならない。だからこそ、ボクシングではボディは地獄の苦しみと言われる。

（苦しい～～～っ　い、息ができない！）

ネギの目標はこの程度で蹲いていいほど楽なものじゃない。例えどんなに困難であろうと立ち向かわなければならない。しかし、たった一撃が今は酷く遠い。

埒が明かない。このままでは体力気力共に底を尽き、戦えなくなるのは明白だった。自身にかけることのできる魔力供給も時間が経つごとに精度を落としており、戦いを見ている者たちにも、ネギの動きが最初のころに比べて鈍くなっているのがはっきりと分かる。

ぼやける視界、おぼつかない感覚。既に立っている事も限界に近いようである、だが彼は倒れない。

最早、体力の消耗によって戦うことしか頭に思い浮かばない。

反対にアスカは消耗はしているようだがネギと比べればどこ吹く風と全く疲れた様子を見せない。まるでのんびりとウォーキングで

もしているような自然体。

それは勿論、無駄な動きが多いネギと違い、基本的に待ち受け迎撃する必要最低限の動きだけでアスカが戦っていたからだ。

戦術と言ってしまえばそれまでだが力量以前に勝利に対する姿勢が違いすぎた。

「ネギ君の顔色が……む、紫色に」

誰かののゴクリと唾を飲み込む音がやけに響く。

ネギの顔には酸欠状態（チアノーゼ）の症状が出ており、顔色が更に酷くなって紫になっている。素人が見てもひどい酸欠だとわかる状態だ。

しかも、ネギの意識がはっきりとしている分、苦しみは倍増する。

「があ！　げえええ！」

アスカの攻撃と共に聞くに耐えない悲鳴を漏らすネギ。誰も笑えない、笑わない。その表情から尋常ではない苦しみが伝わってくるから。

その状態のネギを見ても、アスカが狙うのは情け容赦なくひたすらボディのみ。ネギも横に飛んで逃げようとするも、足取りは重く、動きが鈍い。

（い、息が吸いたい。一呼吸でもできれば、反撃の一打が打て……る。一呼吸でも……）

しかし、アスカはそれすらも許さず、ネギを追いかけながらボディの連打。徹底して呼吸する暇を与えず、見た目にもネギの体が重くなっていくのが分かる。

ネギが攻撃に出している手は空を切り、ただ振り回しているようにしか見えない。そこに意味はないと素人でも分かる。たったそれだけの動作でさえ体力を消費し、余計に苦しくなるという悪循環に陥っていた。

ネギが粘れば粘るほど地獄を彷徨う事になり、その苦しみようは見ている者が窒息しそうなくらいだ。

「お、おい、ぼーや、もういいだろ？　お前のやる気はわかったから、な？」

「――――ゼェッ――――ハァッ――――ゼェッ――――ハァッ――――い、いえ――――まだ――やれ――――ます――――ゼェッ―ハァッ――――」

流石に顔色が悪くフラフラと何時倒れてもおかしくないほど消耗したネギを見かねたエヴァンジェリンがそんな言葉を掛ける。彼女もまさかネギがここまで粘るとは、アスカがここまでやるとは考えていなかった。

必死だからこそ哀れを誘い、同情したくなるほどのネギの表情。

しかし、ネギは受け容れずアスカに向かっていこうとする。なのに、向かおうとしても疲れ果てた体はそんなネギの意志を裏切るように一歩たりとも動かなかった。

逆にアスカに懐に潜りこまれて再びのボディ攻撃。

（く、苦しい。何もかも吐き出したい。手が重くて上げていられない！）

初めて味わう苦しみに、ネギはエヴァンジェリンに返した言葉とは裏腹に心の中で弱音を漏らす。攻撃されるたびに内臓の筋肉が硬直していくのが分かり、痛みと息苦しさでついに気が遠くなってきた。次第にガードの腕が下がっていき、もう頭部はがら空きに近い。最早、手どころか体ごと動かなくなってしまった。

しかし、アスカは防御の隙間を縫って執拗にボディを攻撃。ネギは息を吸えず、酸欠で意識が薄れて目の光が失くなって表情が虚ろになっていく。

目が虚ろになるほど疲労困憊したネギは、か細くも荒い呼吸を繰り返すのみ。

これこそがアスカの作戦。オーバーペースで打ち込んでくるネギが疲れたところを執拗にボディ攻撃して弱らせる。どれだけ体力に自身がある人間でも、流石に体の自由は奪われる。

一対一の勝負というのは、実際には二対二で争われるのだという。

勝負する人間の心の中には、相手の優位に立ちたい願望と、相手の優位を認めて楽になりたいという願望――――いわば「勝ちたい自分」と「負けたい自分」が同時に存在しているからだ。

「負けたい自分」が「勝ちたい自分」の足を引っ張らないようにコントロールし、さらに「負けたい自分」を味方に引き入れること

が勝負の鍵だ。

いかに実力で勝ろうとも、三対一では勝てるものではない。勝負強い人間とは、いかに自分が負けたがっているかをよく承知している者なのだ。

アスカの作戦によって、ネギの「負けたい自分」がどんどん引き込まれていく。

単純にネギよりもアスカの方が心肺機能に自信があってこそ実行できる作戦だ。弱らせて弱らせて確実に仕留める。ネギはまんまと術中に嵌った。

最初にアスカと対峙したネギの感想は正しかった。

獲物に罠を掛けて徐々に仕留めていくその手際は正しく狩猟者（ハンター）と呼ぶべきもの。どれだけ粘っても、このダメージは試合中には抜けない。今は何とか蝕まれた肉体を精神力で支えているも、終わりは近い。

既にネギはアスカをアスカと認識できなくなり始めていた。

熱い。身体中が熱を帯びている。

「ゼェ――ハァ――ゼェ、コホッ――」

意思だけを頼りに、途切れそうになる意識を繋ぎ、折れそうになる意地を建て直していたが　苦しみが過ぎたせいで一周し、ふわふわと暖かな感覚がネギを包む。

限界が――――近い。

「ブハッアァ……ッ！」

アスカの猛攻は終わりを見せない。ネギが肺に残っていた空気を吐き出し、既に半分意識がない状態になっても腹への連打が続く。勿論、掌底の攻撃には変わらない。

ネギの顔は涙が滝のように零れ落ち、鼻水が流れ出て他人にはとても見せられない悲惨なことになっていた。目は酸欠から血走って白目を剥きかけ、口は酸素を求めるように常に開いたまま。他人の眼を気にすることが出来ないほど追い込まれているのだ。

「うっ……う……」

生存本能か、防衛本能か、既に意識を半分以上失くしている本人にすら定かではないが、ネギの身体はアスカから逃げるように後方へ泳ぐ。悲しいかな倒れる初動作にしか見えない。

「！！！」

だが、そこに追い討ちをかけるようにネギの懐に踏み込んだアスカが右手を伸ばして視界を防ぐ。

ネギの視界がアスカの掌で一杯になった瞬間、

「ガハァ……ッ！」

顎下から来た衝撃に、限界を超えたネギの意識は完全に落ちた。後は全身から力を失くして操り人形が糸を失ったように膝から崩れ

落ち、最後は上半身も地に伏した。

「ネギ君――――ッ！！」

ネギが倒れ込むと同時にまき絵が名を叫びながら駆け寄る。

ネギに縋りついて揺らすまき絵を前に暫く残心していたアスカが起き上がって来ないのを確信して構えを解いて深く息を漏らす。

二人の内、立っているのはアスカのみ。ネギは倒れ付し、まき絵に揺さぶられながらも立ち上がる様子がない。

勝者：アスカ・スプリングフィールド

敗者：ネギ・スプリングフィールド

と、ここに勝敗は決した――――

――――かに思われた。

第七十八話　　弟子入り試験と少年　中編（後書き）

明日菜の葛藤、古菲の師としての未熟。

ネギの文字通りの死ぬ思いで根性を見せました。頑張りました、本当に。

弟子入り試験は決着がついたように見えますが、まだ続きます。というか、ここから展開が二転三転します。

それと種明かしも。

次回更新は明日の午前０時です。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

第七十九話　　弟子入り試験と少年　後編（前書き）

次回更新予告が当てにならない筆者でした。

今話の文字数は１２５８２字です。

明かされるアスカに科せられた枷。

二転三転する展開。

下される裁定。

その時、彼らは何を想うのか。

『第七十九話　　弟子入り試験と少年　後編』始まります。

第七十九話　弟子入り試験と少年　後編

倒れ伏したネギに駆け寄るまき絵と付き添う亜子を背に離れるアスカの下へ少女達が駆け寄る。

「ねぇ、アスカ君。……ネギ君に此処までする必要があったの？」

最初に口を開いた裕奈の眼差しは、非難よりも今にも泣き出しそうなくらいに悲しみの色が強かった。アキラも言葉はなくとも同意するようにアスカを見つめていた。

「此処までする必要はないでしょうね。というより此処までしなければならなかったというのが正しいです」

今のネギが単純な戦闘でアスカに勝つなど、奇跡が起きない限り不可能だ。だから、エヴァンジェリンはアスカに制限をつけた。

そう言ってアスカは疲れたように息を吐いて自嘲の笑みを浮かべ、自身に架せられたハンデを話し始めた。

ハンデを纏めると、

？試合前にフルマラソン（４２．１９５？）近くを走って体力を消耗する。

？開始六十分間の攻撃を禁ずる。

？魔力などの身体強化を禁ずる。

?攻撃する場合は利き腕ではない左腕の掌のみ。それ以外は禁止。

?意識を刈り取るような一撃はなし。

?パワーアンクル（片側１０?、両方で２０?）を足につけること。

開始六十分間は攻撃出来ない以上、最低でもアスカが勝つには試合時間は六十分かかり、身体強化できない状況で意識を刈り取る一撃を禁止されてはチマチマとダメージを重ねるしかない。攻撃を許されたのが片手ではもっと時間が掛かる。長期戦でもパワーアンクルを付けていることで体力を強く消耗する。

パワーで劣り、スピードで劣り、制限を付けられた状態では選べる策も少ない。長期戦で体力を搾り取り、その果てに倒すことしかアスカには出来なかったのだ。

「これでも結構ギリギリだったんですよ、ほら」

見た目ほどアスカに余裕があったわけではない。

身体強化した武術を学んだネギの拳は今や完全な凶器である。その拳で一メートルもある大岩を粉々に砕くことも可能だろう。

その圧倒的な力を知っているからこそアスカはただ躱す。【硬気功】で体を固めようが生身でまともに受ければ間違いなく命はないから。

六十分間の攻撃禁止だけがハンデではない。更に魔力などによる身体強化も禁止されている以上、有効打＝死は確実。一撃、一撃が一般人の至近距離で拳銃を撃たれる感覚と同じ。迫り来るネギの攻

撃を紙一重で躱し、受け、捌くという行為は予想以上にアスカの神経を磨り減らした。

技は拙くともパワーとスピードは一級品。素の身体能力＋幾つものハンデ付きの状況はアスカにして冷や冷やさせられる場面が幾つかあった。的確に急所を仕掛けるその姿は素人とはとても思えない。だがその攻撃をアスカは躱し続けていた。

一対一、それも定められた場所（フィールド）で技で劣っていようともパワーとスピードが圧倒的に上の相手からの猛攻を凌ぎ続けるのは肉体、精神の両面から疲労を強いる。更に攻撃は片手のみ＋意識を落とす攻撃はなし、となれば逆に勝てたアスカを賞賛してもいいぐらい。

「うわっ」

アスカがそう言って見せたのは、ジャージの袖によって隠された腕。

袖を捲くるとそこには思わず裕奈が声を漏らしてしまうほどに肌の色をしていないどす黒い内出血痕で埋め尽くされていた。肘から先は真っ黒に隙間無く埋め尽くされ、無事な肌色をしている箇所が一つもない。

岩石を容易く破壊するパワーとスピードを持ったネギの攻撃を捌き続けたアスカの腕は、許容量の限界を遥かに超えて痛々しいまでの様相を呈していた。

気を抜いたからか、力が入らないのか、今になって痛みを訴えるように五指が震えている。

「エヴァちゃん、絶対やりすぎよ」

アスカの消耗具合を見てとった明日菜が近くにいたエヴァンジェリンを問い詰めていた。

「しかしな、ここまでハンデをつけなければ公平になるまい？」

「そうかもしれないけど、これは……」

そう言われては納得するものがあるが、だからといってモノには限度がある。

結果的にせよ、ネギも、アスカも、無茶をし過ぎている。

「まあ、やりすぎという自覚はある。そもそも上げたハンデの中から選ばせるつもりだったんだ。それをあいつが全部選んだんだ。私だけの所為にされても困る」

エヴァンジェリンとしては出来る限り勝負が公平になるようにアスカに掛けるハンデを考えたのだ。

アスカに考えた奴を提示して選ばせるつもりだったのだが勘違いして全てのハンデを背負った。面白がって勘違いを訂正しなかったエヴァンジェリンに責任があるにしろ、勘違いしたアスカ、頭を使わなかったネギとそれぞれに咎がある。

「――――――っ」

残心を解いて気を抜いたからか今まで気力で抑えてきた汗が噴き出し、息が大きく乱れだした。腕の痛みもあり、疲労しつくした足

はふらつき、異常な負荷をかけられた精神が軋みを上げる。

明らかに異常な状態を示すアスカに誰もが気付いた。

「ちょっとアスカ、大丈夫！」

「はは――――ちょっと――――疲れましたね」

足腰がふらつき、倒れかけたアスカを近くにいた明日菜が驚きながらも支える。

異常な発熱。

今まで抑えてきた分までもと謂わんばかりに汗が滝のように噴き出し、話すのも苦しそうなアスカの姿。

考えてみれば、パワーアンクル（片側１０?、両方で２０?）をした状態でフルマラソンをして殆ど休みなく1時間もの間、魔力で身体強化したネギのミスをすれば死ぬ可能性すらあった猛攻に晒され続けた。

肉体的、精神的に疲労していたのはネギもアスカも変わらない。それが表だって顕著に現われたかどうかの差しかない。

これで攻撃禁止が後三十分でも長ければアスカの方が敗北していた可能性もある。

アスカにとって幸運だったのはネギにとっての戦いとは、乗り越えるもの。自分を示すものであり、見せる事であったことだ。

大人や年上の少女達は、それを『子供だから』という言葉を使い彼を庇い甘やかす。魔法学校での魔法使いたちの言葉の裏には『英雄の子供だから』と言う言葉がつく。

そんな周囲環境で人格を構築したネギが引かず、守らず、攻めるを基本とするのは必然。麻帆良に来てから改善傾向にあるものの真っ向勝負を好む気質は変わっていない。

逆にアスカにとっての戦いは生き残るために時には手段を選べないこともあった。

当時のアスカは今ほどに強くなく、負ければ多くの命が失われるという状況もあったので、手段を選ぶ余裕がなかった時もあった。誇るべきではない卑怯と呼ばれるものから外道な行為まで様々な汚いことをしてきた。中国で方向修正されたものの根本的に勝つために手段を選ばない気質は変わっていない。

更に元々の性格の面もある。いざとなったらどれだけ泥を被ることも厭わないアスカと違って、ネギはまだ正々堂々と戦うことに拘りがあるし、それはそれで得難い資質ではある。

むしろ、命のやりとりではなく、「相手に負けを認めさせる」という場合なら、ネギ式の方が戦った後に相手の共感や友情を得られることも多いのだ。

そもそも子供の内からスレた事をするよりはずっとマシであろう。

子供の内から卑怯な手段を平気で使うのは先が見えるから選択肢から除外するのが普通。

安易に楽な手段で勝ち続けては進歩しなくなり、強者を相手にした時に死を迎える。

罠や搦め手などという戦法が生き延びた強者に通用すれば勝てるかもしれないが、そんな戦いも経験済み強者なら罠毎を噛み砕いてしまう可能性だってある。

経験を積み上げるのは悪い事ではない。

自身が得た経験を血肉に変えて、有効活用すれば予測、経験則から得た直感等という部分が磨き上げられる。予測から危機を回避したり、ギリギリのところで避けられたら、その分だけ生き延びられる。

アスカのように生き残るための手段でない限り、ネギが真っ当な手段を選ぶのは間違いではない。それでも頭の片隅に入れておくべきだ。殺し合いを仕掛けてくるような相手が年齢を考慮してくれるとは思えないのだから。

育ってきた環境の差と言えばそうなのかもしれない。

僅か数日程度の修行で、あそこまでの動きを見せることは称賛に値する。素人の付け焼刃とは呼べない。

しかし、対戦相手がアスカだと分かった時点で体術で劣っていたのは本人も分かっていたはず。

ネギは一つ勘違いをしている。

それは古菲も同様で、エヴァンジェリンは『有効打を一撃でも入

れてみるがいい』と言っていても決して『魔法を使用することを禁じていない』のだ。それはつまり魔法で攻撃でも捕縛でもするなりして、その隙に一撃を入れるということでも構わないわけだ。

もしくは場所（フィールド）が限られている以上は逃げ場もないので、茶々丸が危惧をしていた範囲攻撃で殲滅するか。この戦法を取った場合、アスカの命は保証できない。

お互いに体術のみでやり合うならば、単純な経験の差が物を言う。その差を覆すことのできるネギの唯一の手段である魔法は、一般人も連れてきているこの場所では使えない。

ならばこそ、ネギは自身で勝利への最短の道を閉ざしてしまった。

この場に連れてきているのが魔法関係者のみだったならば、まだ魔法を使うことも出来ただろう。

ネギはエヴァンジェリンの言葉を言われた当時の状況から体術による一撃と勘違いして受け取って視野狭窄に陥っていた。対戦相手がアスカと判明して、エヴァンジェリンが開始を告げるまでの間に魔法関係を知らない少女達を返すなり、出来るかどうかは別にして試験を後日にしてもらえるように頼むべきだった。

元々限りなく合格率の低い試験だったが、それでも可能性はゼロではなかった以上、ネギの努力が足りなかったということになる。例えその努力をする時間さえも与えられていなかったとしても。

体格や力で劣る者が、自分より勝る者と闘って勝つ――――それが武術の生み出された目的の一つであり、真髄でもあるだろう。

例えば非力な女子供が大人の男と闘わねばならない状況に陥った場合、正面からぶつかっていては勝ち目はないが、相手の背後に回り込んで急所を蹴り上げれば一撃で悶絶させることもできる。武器を使えば（使いこなされればだが）互角に闘うこともできるだろう。極端な話、戦法さえ間違えなければ、アイスピック一本で幼稚園児がプロレスラーを殺すことさえ可能だ。

取るべき戦術を根本的に間違えた――――それがネギの最大の敗因だろう。

「レベルが違いすぎたアル。武術でも、考え方でも」

体力を使わせて腹部を何度も強打することで酸素欠乏症（チアノーゼ）が出るほどに消耗させ、最後は右手の目隠しで動きを止め、振りぬかれた左の掌底に顎をよって搗（か）ち上げて仕留めた。

何もかもアスカの手の平の上のことで、最初から仕留めるシナリオだった。それを含めての先程の言葉である。

未熟だった。ネギだけではなく、師である古菲もまた。

刹那の耳に、偶然入ってきた古菲の言葉。

「……」

ぐっ、と夕凪が入った竹刀袋を握る手に力が入る。

――――強い。

目の前で親友である木乃香と話す十歳にも満たない少年の果て知

れぬ強さ。

寧ろ成長期であるアスカにしてみれば身体も精神もこれからというところ。今でさえこの強さと策を巡らせる頭脳を持っていることに体の震えを覚える。

歓喜や興奮ではない、どこまでその力を高めるのかという恐怖で。

自分が未熟という事は百も承知。

アスカと同じ枷を付けたとして自分ならばネギに勝てるだろうか、今ですら出来るという自信はない。ならば、彼らと同じ年代の時に出来るかと問われれば不可能としか答えられない。

力の上限が見えないことで恐慌を示さずにいられる。もし、これでアスカの本気が刹那の認識外にあったとして平常通りに接することが出来るか。

彼女の心の中にとある種子が芽生えつつあった。

――――――アスカへの畏怖という名の種子が

「予想より頑張ったが、やはり届かなかったか」

元々ネギが勝とうが負けようが彼女はどっちでも構わないのだ。負ければ面倒が無くていいし、勝ってもいびって遊ぶのだから。

エヴァンジェリンにとっても、スプリングフィールドの血を身内に入れる事は重要なことだ。アスカがこれ以上の協力をするとは思えないので、鍛え上げれば健全に戻った封印を完全に解く事も或い

は可能かもしれない。健全に戻っても以前よりも更に厳重になった封印を掛けられたエヴァンジェリンが解くのは不可能という結論に達した故に思いだった。

だが、どうしても遠大過ぎる計画だった。それならばネギを鍛えるよりは、別の手段を模索した方が遥かに早い。

今のネギなどひよっこに毛が生えた程度だ。膨大な魔力があろうとも技術がなければ宝の持ち腐れ。逆に言えば資質があるので伸び代は大きく、鍛えるとしたら楽しみが多いだろう。

だが、ネギの気性は力任せに物事を解決するタイプではなく、悩んで悩んで、答えを出したつもりになってもどこか自分自身に自信を持てないタイプだ。改善するための精神鍛錬に果たして何年掛かるか。単純な戦闘能力に関しては、まだまだ未知数ではあるが。

それでもあそこまで前後不覚になりながらも頑張ったのは評価できる。結果が伴わなければ……と思う者もいるだろうが、あそこまで必死にならなければ認めずにはいられない。そこまでエヴァンジェリンの器は小さくない。

何よりも強い想い、折れない気持ちというのは鍛錬したからといって得られる類のものではない。それを持っていることは得がたい資質だ。

他の要素では届かなかったにしろ、その諦めない根性だけは賞賛に値する、と。

皆の認識とは別にネギはまだ完全に意識を失っていなかった。といっても確実に意識が遠くなっていく中で、ネギは何が何だか分からなくなっていた。

エヴァンジェリンの弟子入り試験。対戦相手がアスカだと分かってもネギには自信があった。

侮りがあったのは事実。だけど、まだ全てを出し切ったわけではない。

胸が苦しくて、今にも息が止まりそうで体が自分の思いについて来ない。必死に伸ばす拳が届かずに、動かす度に重く感じてしまう。

（……なんで？）

それは思い通りにならない子供染みた我侭。世の中、社会に出れば思い通りにいくことの方が稀。これを比べるのとは間違いだが、ネギがぶち当たった問題は切実だった。

酸欠によって足りない酸素で思考が纏まらずに本能的に身体が止まろうとするのを止めさせない。

倒れた自分にまき絵と亜子の心配する声が今は耳障りなものしか聞こえなかった。

（なんで？　なんで？　なんで？　なんで？　なんで？
なんで？　なんで？　なんで？　なんで？　なんで？
なんで？　なんで？　なんで？　なんで？　なんで？

なんで？　なんで？　なんで？　なんで？……）

疑問が積み重なる。この試験の先に望んだモノがあるはずなのだ。

（アスカが僕を……嗤うな！！）

酸欠によって朦朧とした意識は思考を短絡にする。

最近になって芽生えたが今まで抑え続けたアスカに対する感情。

酸欠から暗くなっていく視界で談笑するアスカがまるで自分を嘲笑っているように思えて、ネギの中で何かがブツリと音を立ててキレた。

「――――ッ！」

その瞬間、この場で何があったかを正しく理解できたのはアスカ一人だけだったであろう。

突然、明日菜に支えられていたアスカの姿が掻き消えた。

皆が理解できた時にはまるでそっと押されたようにアスカの周りから弾き飛ばされてからだった。

「アス――――」

驚愕はそこで終わらない。

空中で驚きから声を掛けようとしたエヴァンジェリンは見た。

トン、と軽く地面を蹴る音がやけに周囲に響いて、轟音と共に呆気なくアスカが吹き飛び、広場の手摺を殆ど砕いてその身を埋めるのを。

アスカを殴り飛ばしたのは――――――気を失ったはずのネギ・スプリングフィールド。

温厚で人当たりのいい少年の持つ空気が変質して穏和な感情が影を潜め、拳を振り切った姿勢で無機質な冷たい目が苛烈に瓦礫に埋もれるアスカを見つめる。

「ネギ先生ッ！」

偶々アスカとネギを繋ぐ射線上にいなかったまき絵が明らかにネギの様子が変だと感じて声を出す。

「……」

まき絵の呼びかけにもネギは振り返ろうともせず、ピクリとも反応を示さない。

茫洋とした視線から半分意識が飛んでいるような状態で、先程からアスカのことしか注視していない感じから彼以外のことが目に入っていないのかもしれない。

体からは溢れ出す魔力がバケツをぶちまけたように奔流する。魔力のオーバードライブだ。分かりやすく言うなら力が暴走している。

こんな状態でアスカしか認識していないネギの射線上にいたらどうなっていたか。

もし(if)、を考えたアスカが取った行動は自身の周りにいた少女達を怪我させることなく離れされること。

しかし、アスカの近くにいた少女は九人。両手両足を振るおうとも相応の時間がかかる。それでもアスカは選択を変えなかった。限界まで駆動されて酷使された足と、ネギの拳によって感覚すら感じなくなっていた腕を無理やりに動かした。

その甲斐もあって両手両足を使って押し出すように突き飛ばすことに成功した。しかも、彼女たちに怪我をさせないという手加減まで徹底した上でだ。

だが、出来たのはここまで。

次の行動を起こすにはオーバードライブを引き起こしたネギの身体能力は速すぎた。怒声とも、悲鳴とも、歓声とも、気合とも判別つかぬ叫びなき奇声を出して吶喊してくるネギに成す術もなく殴り飛ばされた。

【窮鼠、猫を咬む】

追いつめられた鼠が猫にかみつくように、弱い者も追いつめられると強い者に反撃することがある、という諺。

見える部分は脚のみ。上半身全てを瓦礫に埋めたアスカの姿を見れば真っ当な表現だった。

アスカが完全に瓦礫に埋もれたと同時に彼によって吹き飛ばされた少女達が危なげなく着地した。だが、飛ばされたにも拘わらず、

体勢を崩すことない絶妙な攻撃に賞賛する暇もない。

ネギが魔力を一瞬高まった魔力が徐々に収束していく。暴走していたのは一過性らしく、目にも少しずつ正気が戻りつつあった。

――――――次の瞬間

次の行動もまた着地した少女たちがアスカの名を呼ぶ暇もなかった。

それを最初に感じ取ったのは、１５年もの長い学園生活で鈍っていてもやはり６００年という時を生き、他を圧倒する戦闘経験を持つエヴァンジェリンだった。

「いかん！　止めろ、アスカっ！！」

背筋をゾクリと走る悪寒にネギの下へと走り出しながら、未だ起き上がって来ていないはずのアスカに向けて叫ぶ。

そして走る――――――ネギの下へと。

周りが理解できない中で、エヴァンジェリンに遅れて主を追って茶々丸が動き出したと同時に鉄の塊のような殺気が辺りに満ちた。

先程のネギの暴走に気づかなかったのは、試合は終わったと思ったこと、殺気がなかったこと、魔力の暴走が表に出てきたのがアスカを殴り飛ばした後だったこと、何よりもネギが暴走する可能性を考えなかったことにある。今回は殴り飛ばされたアスカに注視していた。だから、気づけた。

「動ケ！　妹！！」

「……ッ！」

殺気の発生源はアスカ。だが、それを直ぐに理解できたのはエヴァンジェリンと長年のパートナーであるチャチャゼロだけだろう。しかし、チャチャゼロは魔力が供給されていないため動けない。

だからこそ、妹とも言える茶々丸に命令し、意味を理解する前に機械ならではの反応を示して与えられた命令のためだけに動き出した。

「！」

殴り飛ばしたところで正気に戻ったネギの足元に、瓦礫に埋もれていたはずのアスカが音もなく起き上がって何時の間にか忍び寄っていた。ネギが気付いた時には既に遅く、沈み込むように腰を落として下から左手の掌底でネギの顎を搗ち上げるように打ち抜いた。

衝撃が脳を貫いたネギに意識があるかどうか怪しい中、アスカの動きは止まらない。

腰を落とした姿勢のまま右手を地につき、顔が上に跳ね上がったネギの足を刈り取る。足払いによって両足を刈り取られ、ネギの体が後方に流れるように宙に浮いて天を仰いで地面に平行になった。

一度は倒れたはずが起き上がってのネギの強襲。今度はアスカの攻撃へと目まぐるしく変わる変化に、ほとんどの者がついていけない。

運動部四人組と木乃香は殺気に対する免疫がないために理解できず、一度とはいえ実戦経験がある明日菜と古菲は純粋な殺意に呑まれて動けない。二人より実戦経験のある刹那は木乃香を背中に庇って守ることを選択したため、二人の戦いに介入できない。

そうしている間にも立ち上がったアスカが宙に浮いたネギに腕を振り被る。

「止まれ、アスカ！　坊やを殺す気か！？」

エヴァンジェリンがそういうだけの殺気がアスカから放出されている。

言葉をかけながらも流石に一般人が多くいる前で殺人を起こさせるわけにはいかず、エヴァンジェリンはなけなし魔力全てを右拳に収束して、目を覚まさせるため、もしくは意識を保っているかどうかも怪しいため、完全に気絶させるためにアスカの頭部に全力の一撃をお見舞いした。

立ち上がりネギ一人しか見ていないアスカは、エヴァンジェリンの攻撃を避ける素振りすら見せずに受けた。結界内では非力な魔力しかないエヴァンジェリンでも、なけなしの魔力全てを集めれば一般人なら十分に昏倒させる威力を持っている。

その証拠に何の防御をしなかったアスカは殴られた頭部から大量の出血を迸らせた。だが、それでもアスカは止まる気配を見せない。頭部が衝撃に揺らいだだけで体は微動だにしない。攻撃を止める気配すらない。

「止まってください、アスカ先生！」

エヴァンジェリンに殴られたことで間に合い、一瞬だけ動きが止まったアスカの右腕を茶々丸は下から掬い上げるように抱え上げて拘束しようとするも、

「きゃあっ！」

拘束したはずの茶々丸が逆に強化をしていない素の状態のアスカに振り回される。身長１７４ｃｍと中学三年生としては高く、且つロボット故に通常よりは遥かに重い茶々丸の体を、１５０ｃｍ少ししかない素の身体能力しか使っていないはずのアスカが、持たれた右腕だけでまるで誰もいないかのように振り回すのは異様としか言いようがない。アスカが身体強化をしていないことが分かるので特に。

「先生、もうやめて！！」

流石にアスカの様子がおかしいこと気づいてまき絵や少女たちが静止の声をかけるも、皮肉にも先程のネギ同様にアスカの耳には届いていないのか動きは止まらない。

「……」

鍛え上げられた強靭な肉体と、凄まじい精神力によって眼前に立ち塞がる敵を無視し、エヴァンジェリンの一撃によってサングラスが飛んで行ってもアスカは当初の目的――――ネギだけを見据えていた。

「ぜぁ！」

振り回しているとはいえ、茶々丸が抱えた右腕で攻撃することはできず、足を刈られて受身も取ることも出来ずに地面にもんどりうって倒れたネギに向かって、振り被った左腕を叩きつける。その手は掌底の形をしていた。

――――ドゴォオオオオン

まるで爆弾でも爆発したかのような爆音と振動が辺りに響き渡る。

訪れる惨劇に目を閉じていた少女たちは、爆音と振動が収まった頃にそろそろと目を開ける。

そこにあった惨状は少女たちが想像したものとは違って凄惨なものではなかった。だが、与えた衝撃という点ではそれを上回っていたかもしれない。

殴られたはずのネギは目立った外傷もなく、無事である。何故ならアスカの拳はネギの顔の直ぐ横のアスファルトを打ち砕いていたからだ。

打ち砕いていた、という表現は正しく、叩きつけた手はアスファルトの地面を陥没して腕の中程まで埋もれて捲くれ上がり、放射状に罅割れが二十メートル近くまで広がっていて彼女たちの足元にまで及んでいる。

「う……」

シュウウウウ、と風の音なのか、それともアスカの手が放つ音のなのか定かではないが、耳元から聞こえてくる音に、地面に叩きつけられた衝撃で意識がはっきりしたネギは目を見開いて茫然自失の

まま、呻き声とも取れる言葉を発する。

一度倒れてからネギの記憶は欠損している。だから、気がついた時のはアスカを殴り終えてからだ。

その後の展開については何一つ理解できていない。

「あ……」

分かったのは、理解できたのは、世の中には気合や根性だけではどうにもならない父やエヴァンジェリンのように強い存在が直ぐ傍にいたということだけ。

自分の本当の間近、行方が分かっている唯一の血縁、双子の弟アスカ・スプリングフィールドもそうなのだと。

「あああ……」

アスカが拳を振り被ったあの瞬間、髪の毛の隙間から（サングラスは先程ネギが殴りつけた時にどこかに飛んで行った）見えた両眼は、ネギに対する殺意に満ちていた。放たれた一撃が当たれば間違いなくネギの命を刈り取っていただろう。

それは、エヴァンジェリンや小太郎と戦った時には感じなかった明確な殺意。死の恐怖だった。そして張り詰めた糸が切れた。

「うわあああああああああああああああああああ！！！！」

恐怖からか自分でも分からない感情が湧き上がったネギは、ただ

叫びを上げることしかできなかった。

だから、アスカがエヴァンジェリンに打たれた頭部から大量の血を流し、茶々丸の腕に引っかかるように己の上で意識を失っていたことも知らなかった。

試験翌日の朝、ネギの下にエヴァンジェリンの使いとして試験結果を伝えるために茶々丸が訪れた。

まず、彼女の口から語られたのはネギも気になっていた弟子入り試験直後の出来事。

前後不覚に陥ってまき絵と亜子に連れられて職員寮にある自室に戻ったネギに試験後からの記憶は残っていない。気がついたら布団の中で翌朝だったからだ。

自分は最後、完全に戦意を喪失していた。そもそも一撃を入れたといってもネギにはその時の記憶が残っていない。

「それでアスカは？」

ネギのは言ってしまえば酸欠による一時的なものに過ぎなかったので、睡眠を取ったら大半の疲労は既に取れた。二、三日もすれば完全に回復するだろう。

自分が怪我をさせたことに過失の責任を背に背負いつつ、ネギの

口から零れ落ちたのは純粋な疑問。

「骨折や腕の内出血、今までの無茶が祟って過労にも成り掛けていたそうで大事を取って一日だけ入院するそうです。先生は入院する必要はないと仰ったんですがマスターや皆さんが無理やりに」

問題は試験直後のアスカの状態。

元々、疲労の極地にあったことであの後に完全に気を失い、エヴァンジェリンの一撃によって頭部から血を流していたこともあって病院へと運ばれた。

頭部への治療だけだったが、後になって腕の内出血を見るために医者が診断すると、ネギが暴走した時に受けた攻撃によって右腕の骨が折れていた。

あれだけの状態でちゃんと防御したことに驚嘆を覚えるもそれはさておき、骨折自体は転位（骨のずれ）のないタイプだったので手術は必要なく、そのまま固定することになった。若いから治癒までに六週間もあれば完治すると思われる。

医者が眼を疑うほどにドス黒い内出血痕の腕だけに限らず、今まで積み重ねてきた心労やら修学旅行での一件での何やらで過労一歩手前という状態。

医者からは一週間の入院を言い渡されたものの本人は「大丈夫」と何の根拠もなく家に帰ろうとしたが、そこは付き添ったエヴァンジェリン、茶々丸、明日菜、木乃香、刹那、裕奈、アキラたちの手によって押し切られた。

休みなので一日入院しても仕事には響かないということがアスカの折れた理由でもあった。

アスカは右腕を骨折していた。つまり、ネギは有効打を当てたという考えも出来る。

だが、

「やっぱり僕の……負けですか」

誰が見てもそれ以前に勝敗が決まっていたのは明らか。ネギは自分の敗北が伝えられるのだと思っていた。落胆はあってもその眼に希望はない。

「はい、そうです。ですが、マスターよりあなたに伝言を承っています」

伝えられた結果は違えることなくネギの敗北。

しかし、茶々丸からエヴァンジェリンの伝言を聞いたネギは驚愕から目を剥いた。

――――――望むならば弟子入りを認めよう、と。

「え？　ちょっと待ってください。どう考えてもあれは僕の負けで……」

当然、ネギは異議を唱えた。誰が見てもネギは戦意を喪失して、アスカに一撃も与えられていない。自分の負けなのだと。

ネギの抗議を茶々丸は首を縦に振って頷いて認めた上で、続きを話した。

エヴァンジェリンが試験で見たかったものは決して近接格闘能力ではなく、戦い方と格上相手にどう戦うか。

結論として戦い方はお粗末なものだったが、あれだけの状況になりながらも諦めなかった根性と暴走時に見せた潜在能力を買った、と、

「つまり、勝負に関係なく気に入ったから弟子入りを認めるということですか？」

「はい」

機械故に感情を感じさせない無表情の茶々丸の首肯に、人間であるネギの表情に苦渋が満ちる。

例えエヴァンジェリンがネギが暴走前に勝負の裁定を下さなかったからといって勝ちを標榜する気はない。それどころか頑固にネギは自分の負けだと主張する。真面目と頑固は違う。ネギは場合によりけりで今回は頑固な面が表に出てきた。

エヴァンジェリンがネギへ言っている事は、弱者への施しに他ならない。

屈辱。

曲がりなりにも幼い頃からトップを走ってきたネギが感じたことのないもの。

公平な勝負に負けた癖にエヴァンジェリンの温情に縋ってまで弟子入りを求める。なんと恥知らずで厚顔無恥な行為か。だが、強くなることはナギを追い求めるネギに唯一のことと言ってもいい。

ここでエヴァンジェリンに見放されてしまったらネギの追い求める背中が遠ざかる。そんな気がした。

だが、ならばこの申し出を拒否するか？

勿論、エヴァンジェリンへの弟子入りがなくなるなんてことは分かっている。それでも譲れない一線というものがある。

懊悩を重ねたネギが出した結論は、

「――――――お願いします、とエヴァンジェリンさんに伝えてください」

みっともなくとも確実に強くなれる道を選んだ。

「分かりました。その旨、マスターにお伝えします」

そう言って綺麗に頭を下げて茶々丸は去って行った。

「……」

閉じたドアを見つめたまま、ネギは微動だにしない。

１０分ぐらいそうしていただろうか、ピクリとも動かなかったネギが徐(おもむろ)に動き出す。

――――ガン、ガン！　ガン！　ガン！　ガン！

頭部をドアにぶつけてから次は拳を何度も何度も叩きつける。

日曜日なので寮に入っている他の教師達の迷惑になるかもしれない。普段ならば他人の迷惑を考えて直ぐに止めるのだが今回はそうならなかった。

身体強化をしていないのでドアを叩き壊すなんてことにはならず、逆にネギの拳が鋼鉄の扉を叩いたことで痛む。

「ちくしょう……」

額を強くドアに押し付け、頬からは痛みとは別に流れ出た涙と共にぽつりと呟く。

顔を押し付けたドアによって誰にもこの時のネギがどんな顔をしていたのか分からない。高畑は出張でいない。頬を流れる涙が、ネギの口から出た言葉の意味が示すものは一体なんなのか。この時のネギ自身ですら気づいていなかった。

結局、弟子入り試験は限りなく敗者のいない誰にとってもすっきりとしない決着となった。

第七十九話　弟子入り試験と少年　後編（後書き）

はい、では「二重の意味」の答えです。

別にエヴァンジェリンは一撃を入れる方法を原作のように「攻夫」でとは指定していないので魔法を使えばいいじゃん、でした。

遠目から魔法の射手を放つとか、空中から雷の暴風で全て薙ぎ払うとか。気づけば確実に勝てる手段があったわけです。

それと主人公に科せられた枷が公開されました。これだけやったら勝負も公平になると思っています。何気に主人公が重傷を負う、死ぬ可能性ばかりが高い気がします。

ちなみに最後、主人公は暴走していません。ちゃんと科せられたハンデに従って左腕の掌で攻撃しています。暴走しているようで冷静に。ちょっと生徒を巻き込みそうになったネギに怒りを覚えているだけですから。

刹那の中でアスカへの畏怖が芽生えました。

強すぎる力、異端は恐怖を招きます。種が花を咲かす日が来るのだろうか？

次回更新は来週か再来週の日曜日と月曜日の間の午前０時です。今回のでストックを全部使い果たしてしまったので来週更新できるかは未定です。

そもそも次の話をどうするか、ちょっと決めかねています。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

第八十話　　南国と少年（前書き）

何故か阿呆みたいに投稿してます。前話更新してからの数時間で書き上げました。

今話の文字数は１３７６４字です。

それではどうぞ！！

第八十話　南国と少年

試験から数日後、２００３年５月６日（火）の夕方にエヴァンジェリンによる修行が始まった。

春休みに学園長によって魔力制御の訓練を受けた現在の実力を把握したエヴァンジェリンは、話すことがあるのでネギを家へと招いた。

ネギより少し遅れて、事前に彼女の弟子入りが決まっていた近衛木乃香と付き添いとして桜咲刹那と神楽坂明日菜もエヴァンジェリンの家を訪れた。

二階に上がって全員を座らせ、茶々丸に指示棒とボード一式を持って来させて何かを書き始める。

「――――お前達二人の魔力容量は強大だ。これはトレーニングなどでは強化し難い、言わば天賦の才。ラッキーだったと思え」

当のエヴァンジェリンは眼鏡を掛けて小さいながらも女教師を気取り、真剣な目を向けてくるネギと木乃香を向かい合うように座らせて笑みを浮かべていた。意外と教師と言うか、物を教える職が向いているのかもしれない。結構、様になっている。

何やら途中経過に問題はあっても、格好はともかく引き受けた以上は本気でやってくれるのは確かなようだ。

ただし、ボードに書かれたのはラテン語か何なのか読めるのはエヴァンジェリンとネギ、そして彼の肩の上にいるカモだけだったが。

「それは努力とか訓練とか、そういうのは関係ないの？」

明日菜が疑問に思ったのか何となく疑わしげにエヴァンジェリンを見上げていた。

「なくはないさ。どんな才能があろうと、それを仰する制御力がなければ、いざ解放しても無駄が目立つだけだしな。以前の坊やがその典型だよ」

エヴァンジェリンは言いながら、ネギを指差す。

およそ、曲がりなりにも魔法と名のつくものを扱える人間ならば、他の魔法使いが魔法を使ったときに空間に放たれた魔力や術式というものが見える――――その構成の精度や込められた魔力から、ある程度の相手の力量を把握することが出来る。

もっとも、ネギの目から見たら、エヴァンジェリンが扱う魔法の術式は、自分の物とは次元が違いすぎて教えられても理解すら出来ない。

「だがそれにしても、先天的な魔力の大きさというのは重要だ。これればかりは、そうだな――――――例えば身長なんかと同じでどんなに頑張っても、天賦のもの以上にはできない。ある程度には、成長させることはできてもな」

修行（トレーニング）や子供から大人に経るまでに年を取っていけばある程度は成長する。が、持って生まれた天凛以上には絶対に増やすことは出来ない。

「但(ただ)し、それだけではただデカイだけの魔力タンク。使いこなすためには、それを扱うための『精神力の強化』。或いは『術の効率化』が必要になってくる。どっちも修行(トレーニング)だな」

白いチョークで黒板をカンっと軽く叩いて黒板に図として魔力が大きいだけでは何の意味もないと説明するエヴァンジェリン。

「ちなみに『魔力』を扱うためには主に精神力、『気』を扱うためには主に体力といったところだ」

そこで一旦言葉を止め、エヴァンジェリンは木乃香に向き直る。

眼鏡を外し、真剣な目で言葉を紡ぐ。

「それと近衛木乃香。貴様には詠春からの伝言がある」

「父さまから？」

「ああ、真実を知った以上本人が望むならば魔法についてもいろいろと教えてやってほしいとのことだ」

面倒くさいだなんて思いつつも報酬を貰っている以上は下手に手も抜けない。「面倒くさい」なんていう本音を小声でぶつぶつと呟いているが。

続けて、エヴァンジェリンは木乃香から視線を外し、ネギへと向ける。

「これからの修行(トレーニング)の方向性を決めるため、坊やには自分の戦いのスタイルを選択してもらう」

「戦いのスタイル……ですか」

「うむ、お前の進むべき道は二つ考えられる。二者択一、簡単に言おう」

エヴァンジェリンが指を二本立てて挙げた進むべき道、それは『魔法使い』と『魔法剣士』。

ゲームの話のようだが、これは魔法使いの戦闘スタイルを大きく二つに分けるための、便宜上の言葉である。

魔法使いの戦闘スタイルは、大きく分けて二つ。前衛における戦いを仲間に任せ、自らは後方から強力な魔法を放つ『魔法使い』タイプと、自らも前衛に出て戦う『魔法剣士』に分かれると説明した。

ネギが魔法使いタイプかと言えばそうでもない。

単純な話、杖を持っているといってもネギはどちらにもなっていない未熟な魔法使いだということだ。

魔法世界を別にして、魔法が一般に知られていない旧世界では杖を持って歩くなんて怪しすぎる。一流ともなれば別の魔法発動媒体を持っている。

「どちらも長所短所はある。小利口なお前は『魔法使い』タイプだと思うがな」

説明を終えたエヴァンジェリンがネギを見る。

ネギにとっては初めて耳にする話ばかりだったが、そもそも魔法学校とは、魔法使いの卵達が魔法使いとしての基礎を学ぶための場所であるのだから、魔法使いとしてのスタイルなど求めないので当然である。

実際、彼が覚えている戦闘用魔法の内の幾つかは授業で教わった物ではなく、禁呪書庫に侵入したり、図書館に篭って独学で血のにじむような思いで身に付けたものだ。普通の魔法学校では【雷の暴風】を教えはしない。

「……」

これはあくまで修行の為のとりあえずの分類といっても、カモにはエヴァンジェリンが言うようにネギには『魔法使い』タイプが合っているとそれを聞いて納得したようにうんうんと頷いている。しかし、ネギの方は少し考え込んでいた。

「一つ聞いてもいいですか？」

二つを提示されたネギは暫し悩んでいたが、ふと気になった事を尋ねた。

「何だ？」

「父さんは、サウザンドマスターのスタイルは？」

やはりと言うべきか、ナギの戦闘スタイルを聞いてきた。おそらく、同じスタイルにしたいのだろう。もしかしたら参考にするだけかもしれないが。

「フッ、言うと思ったよ」

フッと笑みを浮かべるエヴァだが、それには苦笑の意味も込められていた。

この二つのタイプの分類自体が、強い魔法使いになればなるほど、意味がなくなっていくと言う事だ。サウザンドマスターのタイプを聞いたところで、今のネギにあまり意味は無い。本来、未熟な魔法使いを育てるための指針であり、それがそのまま戦闘スタイルの話として使われているだけに過ぎないのだから。

「私の戦いを見れば分かるように強くなってくればこの分け方はあまり関係なくなってくる。が、敢えて言うなら奴のスタイルは『魔法剣士』、それも従者を必要としないほど強力な、だ」

それを聞いたネギは「やっぱり…」と、どこか納得した表情をしている。

子供の頃に、一度だけ父の戦いを見ているので、その姿を今の話に当て嵌めて考えているのだろう。

『魔法使い』を目指すからと言って白兵戦をしてはいけないと言うわけではない。『魔法剣士』が速度ではなく威力重視の魔法を使ってはいけないわけでもない。

後衛で砲台となるのが役目である『魔法使い』と言っても、危険に晒される事だってある。そのような時のために、自分の身は自分で守れるぐらいの自衛手段を身に付けておくに越した事はない。

『魔法剣士』もそうだ。白兵戦の技術しか持っていなければ、お

のずと射程が短くなっていき、距離を取られてしまうと何もできなくなってしまう。その為に遠くを狙い撃つための重火力の魔法を隠し持っている事はさほど珍しい話でもなかった。

「それともう一つ、アスカのスタイルはどっちなんですか？」

先程、ナギのスタイルを聞いた時よりも眼の輝きが違う。もしかしたらネギが最も聞きたかったのはこっちかもしれない。

執念、嫉妬、憧憬、ありとあらゆる感情が込められたエヴァンジェリンが好む歪んだ眼だ。

「ふっ――――――」

明日菜も木乃香も刹那も茶々丸も気づかぬネギの変化。

以前の優等生染み過ぎて年齢の割りに良い子過ぎるネギとは違う。エヴァンジェリンには今のネギの方が人間らしく思えた。

「――――――知らん」

笑みを浮かべて自信満々に告げられたエヴァンジェリンの言葉。

――――――ズダダッン！！！！

散々、勿体ぶっておきながら自信満々の「知らん」発言に茶々丸以外が盛大に椅子から転げ落ちた。

「アタタ……」

「大丈夫ですか、お嬢様」

ネギに押し潰されたカモは蛙のような鳴き声を上げ、刹那が木乃香を引き上げていた。

「え、エヴァちゃん……あれだけ引っ張っておいてそれはないでしょ」

「と、言われてもな。私もあいつ（アスカ）がちゃんとした戦闘をしているところを見たことがないんだ。お前達よりかは知っているだろうがな」

テーブルに手をついて起き上がりながら明日菜が文句を言う。

対するエヴァンジェリンは悪びれた様子もなく、答える姿には気にした風もない。

魔法学校の成績ははっきりいって劣等生だが、不良やチンピラたちを相手に大立ち回りを演じたこと数十回や何やらで近接戦闘の能力の高さを見せているので弱いということはありえない。

しかし、アスカは用心深く手札を晒さない。

修学旅行で機会があるかとも思ったがなかった。

それだけ警戒しているということか、単純に機会がなかっただけか、エヴァンジェリンにも分からなかった。

「何時か機会があれば分かることだ。今は人のことばかりじゃなくて自分のことだけを考えておけ」

そう言って、エヴァンジェリンは木乃香を筆頭に三人にもう少し詳しい話があるので下に行ってしまった。

「『魔法使い』と『魔法剣士』かぁ……」

茶々丸も葉加瀬と一緒に行ってしまって一人残ったネギは小さく呟いた。

茫洋とした視線を空中に向けるネギをカモが心配そうに見つめていた。

サンゴ礁の海が鮮やかなコバルトブルーの色を発している。熱帯性の植物が浜辺を彩り、白い砂浜がカレンダーに反して夏を主張している。

ここは雪広グループの所有するリゾート島。自然をゆったりと満喫できるとして、富裕層の人間の間では有名なバカンス地だ。

「「「「海だーーーっ！！」」」」

砂浜に鳴り響く歓喜の絶叫。

歓声を挙げながら青い海と白い砂浜が広がる他に誰もいない貸し切りのビーチに飛び込む少女達。彼女達は麻帆良学園中等部の３－Ａの生徒である。

雪広家のプライベート船に乗り込み、雪広家所有の個人リゾートアイランドへとやってきた。破格のお嬢様っぷりが伺えるが、３－Ａの一同は気にしてないようで、全員が楽しく遊んでいるようだ。

日本では味わえないこのリゾートは南国の特権。おいそれと来れる場所ではない。

「なんでこんな所にいるのだろうか？」

そんな彼女達とは裏腹に、砂浜の上に立ってダウナーな雰囲気を振りまいてポツリと呟く黒の長袖長ズボン、右腕を三角巾で吊った物凄く場違いな格好と服装の少年――――アスカ・スプリングフィールドがいた。

ここにいる経緯は本当に簡単。

事の起こりは五月の連休の最初の日にネギが“その筋”では特に有名なお嬢様こと雪広あやかと偶然にばったりと出くわした所から始まった。

弟子入り試験の日から考え込むことが多くなったネギを気にして、折角の休日だからと『南の楽園』へと招待したのだ。

なのに何故、他の生徒達やアスカがいるかというと原因は至極簡単。３－Ａのお喋り好きである朝倉と早乙女に早々に嗅ぎ付けられ

たのが敗因。

それでも付いてきた彼女たちの旅費までしっかり面倒みるところが根っからのお人好しというか委員長気質というか。

やって来たほとんどの者はリゾートを楽しみにきたものだが、中には不本意ながら、引っ張られてなどで来てしまったという者もいた。

「なんで私までこんなとこ来なきゃいけないのよ」

海へとはしゃぎながら飛び込んでいく、彼女たちを神楽坂明日菜は呆れたように見ていた。

「まあまあ、折角誘ってくれたんやからえーやん」

まず、明日菜がその一人。来る気はなかったのだが、木乃香に引っ張られるように来てしまった。水着も他のみんながプライベート用に対して学園指定のものだというのも彼女が浮いている原因になる。もっとも、誘った木乃香や護衛で付き添っている刹那まで指定の水着を着ているから違和感にはならなかった。

「あ～、暑い」

３－Ａの騒ぎどころのクラスの半数以上が参加することになった南の島行きの旅行である。

彼女たちは寮暮らし。つまり、外泊ともなれば許可が必要で、これだけの人数が纏めて動くともなれば保護者が必要となってくる。

普通に考えるなら担任だが高畑は毎度の如く出張でいない。副担任であるしずなは仕事があるため無理。誘われたのは副担任補佐のネギということで自動的に担任補佐であるアスカへとお鉢が回ってきた。

なので、拒否権なく付いていく事になったわけだが、燦々と降り注ぐ熱い光を感じながら右腕をギブスで固めているので蒸れて仕方がない。

視界に入るのは澄み渡った空、透き通った紺碧の海原、輝く太陽、戯れる少女達、まさにリゾートアイランドに相応しきものが全て揃っていた。

よりにもよって熱を吸収する黒の服を着てきたこともあってアスカはダラダラと汗を流していた。正直、見ている方が暑くなると言って過言でない服装だ。

だが、脱ぐと場の雰囲気を悪くしそうだから脱げない。脱ぐに脱げない事情というものがアスカにはあった。

「うぐぐぐ、これは一体……ネギ先生との二人っきりのパラダイス計画が。な、な、なぜこんなことにしかもクラスの半数以上が……！？」

ビーチバレー、遠泳、貝殻集め、砂遊びなどやっていることはバラバラだが海に集まったクラスの面々は楽しそうに遊んでいる。

はしゃぎまわる者たちを招待者である雪広あやかは青空へ顔を向けて嘆く。目の前には白い砂浜に青く澄んだ美しい海があったのにあやかの気持ちはどんよりと濁り気味だった。

そう、ここは彼女が借りたリゾートアイランドなのだ。彼女の実家は財閥。その辺のコネを利用したのだろう。ただし、言葉の節々に本心が見え隠れしているのは気のせいではあるまい。

「和美とハルナさんにもれたのはまずかったわね、あやか」

「あなた達もですっ！！」

穏やかに言う那波千鶴にあやかは突っ込む。

そんな様子に気づいた朝倉は海の中から声をかけた。

「いやーお金のない中学生にこんな素敵な御招待ありがとーいいんちょ」

金のない中学生や学生教師には味わうことの出来ないはずの場所。素直に感想が止めとなったのかあやかはムキーッと喚き、千鶴に宥められていた。

雪広グループのリゾートアイランドを貸切にして楽しむ計画を考えていたのに、現実はあやかの妄想……もとい想像を上回る嫌な方向へと発展していた。

「まあ、いいですわ。来てしまったものは仕方有りませんし」

諦めたように息をつくあやかだが、茫洋と砂浜に立っているアスカを見て少し眉を顰めた。

実はあやかがネギをリゾートに誘ったのには別の目的があった。

何やらネギとアスカが戦うことになって、結果的にアスカの腕が折れたことは３－Ａの生徒全員に広まっていた。

それと一日とはいってもアスカが入院することになり、過労一歩手前まで心労を与えていたことを委員長であるあやかは気にしていた。

それで、今回の件で少しでも養生をと考えていたので彼女たちの暴走は渡りに船だった。ネギと二人っきりになりたいという想いは変わらないが。

水の中で遊んでいた鳴滝姉妹は、ビーチボールで朝倉や柿崎やまき絵たちと遊んでいたが、ふと目に飛び込んで来たモノに呆然となった。

それは、あまりにも大きなものだった。

「ちづるってやっぱり……」

「おっぱい、大きいです……」

「ま、奴がクラス？1だかんな」

鳴滝姉妹が自分たちの平地と比べてボソリと呟いた事に、律儀にフォローを入れる？3の巨乳をもつ朝倉。彼女がフォローしてもあ

まり大きな効果はなく、逆に嫌味だった。

あやかもスタイルが良く、かなり際どい水着を着ているが、特に千鶴の推定９０ｃｍ以上のナイスバディの水着姿を見た一人の少年がいた。

「中学生の定義って何なんだろう？　いや、高校生でもいないよな？」

思わずといった様子で呟いて悩みだしたアスカの姿があったりなかったり。

徐々に日が傾き夕暮れへと差し掛かる頃、遊び疲れた内数人がテラスでのんびりとビーチチェアに座って、トロピカル色満載の飲み物を飲みながら会話を楽しんでいる。

普段ならばリゾート客で賑わうであろうこの場所も今日は貸し切り。最高の休日をプレゼント（と言っても勝手についてきたのだが）してくれた雪広あやかに感謝だ。

交わされる年頃の女の子の会話。

「最近の男子は情けないってゆーか、カッコ悪いってゆーか、元気ないところはあるよ」

「まーねー」

最初は他愛ない話だったが、女の子だから異性に興味を持つのは当然で、話は何時しか身近な男子の物足りなさに話題が移っていた。

「やっぱり男は戦ってないとね。夢に向かってさ」

早乙女ハルナが笑いながら、男とはこうあるべきと何を根拠にしているかは分からないが、とにかく自信満々に言い切る。

「目標……夢か……」

ハルナの笑いながら冗談のような口調とは反対に大河内アキラ比較的真面目に反芻するように呟き、自分の周囲にそんな男子がいるかなと考えているのか、それとも自分の夢でも考えているのだろうか。

「てことは付き合うなら年上ってことかにゃー」

「でも先輩とか兄貴も将来何になりたいとかわからんとか、よー言ーてたけど。……まぁ、その点、アスカ君やネギ君は元気があってええと思うよ」

明石裕奈が独特の語尾で一つの可能性を話すも和泉亜子が家族と身近な男子の事を言う。

「お♪　亜子もやっとネギくんの良さをわかったかなー」

嬉しそうに反応したのはクラスでも有名なネギ好き人間である佐々木まき絵がネギの評価が上がった事を喜んでいる。

弟子入り試験でアスカが係わったことで複雑な感情を抱いたものの、まさか骨折していたなんてことになってはそんな感情を抱いているのも難しい。

そもそも先に殆ど勝負が終わったような状況で不意打ちを仕掛けたのはネギなのだから。それにアスカの最後の攻撃は自分達を巻き込みそうになったネギに対する義憤から来ているとあっては感謝しても感謝しきれない。

それでも最初に決まったイメージは覆りにくいので彼女の中では最終的に＋－０という状況になった。

「てゆーても二人とも十歳やし……」

普通に考えて十歳にならない二人に対して十四歳と年頃の彼女たちが恋心を抱くのは難しい。ネギに対するのどかといった例外はあるが。

「まあねー。年下ってゆーのがネックかも」

「そっかなー。今は子供だけど、一応社会人だよー」

年下というだけで敬遠するのをまき絵は不服そうに言う。

その場にいる全員の視線が自動的に揃って少し離れた席でのどか

とあやかと談笑するネギへ、桟橋の端っこで足を下ろして何やら真剣に分厚い本を読んでいるアスカへと向けられる。

日が沈み始めた空、そしてそれを反射する海は昼とはまた違った美しさを見せる。太陽が今まさに水平線に差し掛かっており、光も更に赤くなっていった。

本から顔を上げて沈みゆく夕日を眺めて薄く笑みを浮かべるアスカから男の色気を感じて、思わず顔を赤らめる少女達。

「年下も良くない？」

「確かに」

直ぐにアスカは開いていた本に眼を落としたが、少女達は一様に頷くのであった。

「ねぇねぇ、そう言えばアスカ君って海に入ってないよね」

「仕方ないよ、腕があんなんじゃ」

気を取り直して裕奈がアスカが海に入っていないことを思い出して話題を変えた。

この場にいる全員がアスカの右腕が骨折していることを知っているので亜子の言葉に頷きを返した。流石に腕をギブスで固めているのに海に入るとは思えない。

「でもさぁ、水着に着替えるぐらいしてもいいじゃない。あの格好だと暑そうだし」

黒の長袖長ズボンと南国にはかなり不向きなアスカの服装に、ハルナの意見も最もだと同意する。

「それにさ、見てみたくない？　あの服の下」

互いの目を見てアイコンタクトをして意志疎通を交わしたのかハルナと裕奈が話の方向を特定へと誘導していく。

幾らギブスをしていてもこれだけ暑かったら水着に着替えてもいいし、せめて半袖短パンになってしかるべきだろう。少女達の中で理論武装が固められていく。

「ギブスをしてるんだから脱ぐのも大変だし、変なことしたら駄目だよ」

まき絵が前向きな姿勢を見せ始め、亜子も興味を引かれたのか少し気になっているようだ。そんな中でアキラだけが控えめに止めるように言っているが、彼女だけでは既に定まりつつある流れは止められそうにない。

「んじゃ、皆にも聞いてくる！」

場の趨勢を感じ取ったハルナが他の子たちにも聞きに行った時点で、残るのは基本的にノリのいいメンバーばかり。

アスカの運命や如何に。

南国に来たからといってアスカは元々派手に遊びまわる性質ではない。固められたギブスで泳ぐことも出来ず、リゾートに連れてこられても手持ち日沙汰になってしまうのだ。

「は～……」

とはいっても、あやかから生徒達のことは任せて欲しいと言われたので久しぶりにのんびりすることにした。ネギが何やらやっていたようだがアスカにまで事が起こることはなかったので、あやかの隠された目的であるアスカの養生は成功していた。

夕闇に染まっていく中、桟橋で足だけを下ろして気の抜けたような息を漏らす。

本に見せかけて纏められたデバイスの研究成果のレポートを読んでいた。

ハードはともかくソフトに関してアスカは信頼も出来て能力もある、アメリカにいた頃に知り合ったＭＩＴに通う日本人の兄妹と三体（？）の人間に良く似たＡ・Ｉ　プログラムに頼んでいた。

当時から魔力や気に興味を持っていて研究をしていてお願いしたが、研究成果を見る限りでは現段階では実用化するのはもっと先の

話になりそうだ。それでもアスカが一人でやるよりも１０分の１の行程で済みそうだから頭が上がらない。

（今度、何かお礼を贈らないとな）

お礼は何がいいかなと考えているアスカは気が抜けていた。肉体だけではなく、精神も弛緩していて後ろにそろりそろりと足音を消して迫る人間達に気づかないほどに。

――――――ドンッ

「はっ……？」

油断しまくっていたところで不意に背中を押された。

アスカが今いる場所は桟橋の端っこで足を下に投げ出している。つまり、背中を押されると前のめりになる。

しかも、完全に油断していたので緩み捲くった精神では力の入っていない体を支えることも出来ない。すると、どうなるかは簡単で海に落ちるしかない。

ここでアスカが何を持っていたか思い出して欲しい。

本に見せかけた折角送ってもらったデバイスの研究成果のレポート。

それが背中を押されたことでアスカの手を離れて一緒に海へと向けて落下していた。

「ええいっ……！」

まだ全て読み終わっていないし、無茶な頼みを好意で引き受けてくれた成果を海の藻屑とさせるわけにはいかず、アスカが取るべき行動は決まっていた。

――――即ち、己が身よりも本に見せかけたデバイスのレポートを優先。

「せいっ！」

本を桟橋に向けて放り投げると、アスカの背中を押した少女達――ハルナや裕奈といった３－Ａの賑やか系達と目が合った。

アスカの背中を押したらしく手を伸ばした姿勢のハルナと裕奈。その後ろに亜子、まき絵、鳴滝姉妹、和美の七人。本来ならここに桜子、美砂、円が参加するところだが何故か桜子が敬遠したため参加していない。

のどか、夕映とあやかがネギの傍に。あやかの様子を千鶴や夏美は近くで眺めていた。

彼女たちの前では、水の上に立つなんてことや、この状態で助かる術である方法は使えない。この恨みどうしてくれようかと考えながら、真っ逆さまに海に落ちながら、

（どうしようか……泳げないんだけどな）

そんなことを考えながら着水して沈んでいったアスカだった。

――――――ブクブク

「さ～て、早く上がって来ないかな♪」

アスカが落ちて微かに泡立つ水面を見下ろし、背中を押した張本人であるハルナと裕奈が鼻歌をしそうなぐらいにご機嫌な様子を見せる。

「なぁ、やっぱり不味かったんとちゃうかな」

ここまで一緒に来た癖に今さらになって怖気づいた様子の亜子。

他にもハルナや裕奈のテンションに流されて来てしまったがアスカを怒らせた場合のことを考えて尻込みし出した。

「……上がって来ない」

主犯たちと従犯たちとの間で明らかな温度差が生じり始めた中で、その中に加わらなかったアキラが十秒以上経っても上がって来ないことを言った。

アキラの言葉にはっとした様子で何人かがあることを思い浮かべた。

「もしかして、アスカ君って泳げないんじゃ？」

「まさか、勉強、運動、歌、何でもござれの麻帆良の万能少年だよ。そんな訳が」

まき絵がもしかしてと言ったことに、和美がありえないと否定す

るも皆が最悪の想像を膨らませる。

「……そう言えば前に皆で行ったボーリングでさ」

「アスカ先生って初めてやったらしくて同じ初心者のせつなさんよりもスコア下だったよ」

あの時のことを思い出すように鳴滝姉妹が虚空を見つめながら話すと皆の顔から血が抜けていった。

万能だと思っていたのは自分達だけで、アスカにも出来ないことがあるのだと今さらながら気づかされたのだ。

「あんたたちどうしたのよ」

そこに現われたのはさっきまで泳いできたらしく濡れた様子の明日菜、木乃香、刹那、古菲。遠目からでも異様な様子の皆が気になったらしい。

「……行く！」

「「お願い、アキラ！！」」

亜子や和美が説明している間に、水泳部であり心優しいアキラが真っ先にアスカを助けに行くために飛び込もうするのを、流石に自分たちが不味いことをしたと実感した裕奈やハルナが真っ青な顔で頼む。

談笑していたネギたちもこちらの騒ぎが気になったのか、立ち上がった。

他にも話を聞いた明日菜や刹那、泳ぎの得意な何人かが飛び込む体勢に入って、

――――水面を割って子供みたいな小さな手が伸びて桟橋を掴んだ。

「「「

私、怒ってます、と言わんばかりに大きく息をついたアスカに恐る恐る訊ねたのは裕奈。

「泳いだことがないので泳げません」

皆の予想通りにぴしゃりと言い切った。

そもそも今まで遊びで泳ぎに行ったことがない。

今まではチャクラの修行であった「水面歩行の行」で学んだことを活かして歩いたり走ったりしてきたので、緊急事態も問題はなかった。泳げなくても別に問題なかったのだ。

「泳げないのになんで無事なの？」

どうやって泳げない人間が助かったのか、全員が疑問に思ったことを代表して和美が一歩前に出て訊ねる。

「なんでって、海底まで沈んでから飛び上がって来ただけですけど」

アスカは自分が助かった方法を嘘偽りなく真摯に語った。

――――――し～ん

陸地から十メートル以上離れているので海底までの深度は、それなりに深い。曲がり間違っても人間が海底からジャンプしてどうにかなる距離ではない。

泳げないからって幾らなんでもアスカがしたことはありえない、と驚愕の真実に黙った全員に共通の想いだった。

黙ってしまった皆を変なものでも見るようなアスカの視線。

今までの経験からこういう変なところで常識が狂っているアスカだった。

「あ～服が海水でベタ付く」

皆の奇異を視線の中で、怒りはともかく、体中に感じる気持ちの悪さにアスカが三角巾を外して後ろを向き、左手で濡れた服をパタパタとする。

――――――キラッ

事ここにいたって良からぬことを考えたらしく、主犯であるハルナと裕奈の眼が光った。

アイコンタクトを交わすことなく、周りが止める間もなく二人は片手でやりにくそうに前屈みになって服を絞って海水を搾り出していたアスカに襲い掛かった。

服を絞りながら放り投げた本の行方を探して見つけて無事だった安堵と、まさかこのタイミングで襲われるとは思ってもみなかったので対処するのが遅れた。

振り返ったところでタイミング良く後ろに回りこんだハルナが腕を押さえつけて動きを封じ、裕奈が胸の上にまで服を捲り上げた。

「「「

現れた裸の上半身は、服越しに見ている限りでは発達しているようには見えなかったのに、格闘技の鍛錬を積んだ身体だと一目で分かった。かといって腹筋が異様に割れているだとか、筋肉が普通以上に盛り上がっているとか、筋骨隆々というわけではない。

晒した体つきも筋肉質というものではなく、かといって細いというわけでもない。一番適した言い方としては、余分な肉がないため、筋肉質に見える体。と表現したほうが正しいだろうか。

腹筋は薄らとだけ割れ、まるでぎゅうぎゅうに詰め込んだように一ミリグラムの無駄さえないように絞り込まれているといった方が適切か。

筋力は単純に太さだけで判断できない。無駄に分厚いだけの見掛け倒しの筋肉と比べ、アスカの全身は極限まで引き締まっており、まさに見た者に鋼のようだという印象を与えた。

筋肉にはそれぞれ質というものがある。格闘家なら人体を素手で破壊するための筋肉、スプリンターならより速く走るための筋肉というように。見せるための筋肉にはない極限まで使うことを追求した筋肉。

例えば、ボクシングをする者は比較的着やせする人が多く、少し見ただけでは判断しづらいように、アスカも腕の外側の伸筋が著しく発達していて内側の二頭筋を上回っている。他に肩の三角筋、背中の後背筋など総じてヒットマッスルと呼ばれるこれらの筋肉の発達は攻撃力の大きさを約束するものだ。

アスカの肉体はある分野の技術を突き詰めた者だけが持つ美しさがあった。無駄を削ぎ落としたことで生まれる機能美。見せるため

に鍛えた肉体では手に入らない感動を、見た者に感じさせる。

思わずといった様子で、まるで至高の芸術品を見たように感嘆の声が少女達の口から異口同音に漏れる。

神父や剣星たちが施してきた肉体改造の結果がはっきりと現われていた。しかし、他の皆を驚かせたのはそれではなくアスカの上半身中に隈なく走る傷跡だった。

体の至る所に、うっすらと、だが確実にはっきりと見える様々な傷痕、中には致命傷だと思えるような深いものまである。

”肉体”はその人間の”人生の表示装置（ディスプレイ）”。それまでの生き方全てを余すところなく映し出しているという。ならば、その体の傷跡が示すものは……

傷のその種類も様々で切り傷、刺し傷、火傷、果ては銃創まで、アスカがこれまでどんな生き方をしてきたのか、容易に想像できた。

「ええい！　何をするか！！」

「「ぶぎゃんっ！！」」

流石にこれには堪忍袋の尾が切れたアスカがハルナの拘束を振り解き、服を捲り上げた裕奈の腕を振り払う。更に制裁にとギブスで固められた右腕を二人の頭に振り下ろした。

ギブスで固められた腕に打ち据えられて女の子が上げてはならない声を出す二人。

更にお返しと言わんばかりに回し蹴りで二人を海へと放り込んだ。

――――――キラン！

アスカの行動は終わっていない。

サングラスをしているのに光った分かる眼が従犯である少女達を打ち据える。

少女達は助けを助けを求めるように後から来た明日菜達やネギ達を方を見るも、全員が合掌して冥福を祈っていた。

「キャー！」

「ひー！」

直後、修羅と化したアスカによって海に五本の水柱が上がったとか。

生還後、修羅と化したアスカだけではなく、骨折している人間にふざけて海に落とすとは何事だとして、委員長のあやかや明日菜達全員に絞られた少女達は満場一致で夕飯抜きが決定された。何気に騒動を回避した桜子の強運に美砂と円が感謝していたとか。

皆でワイワイとバーベキューを食する中で、罰として皆が食べている中で端っこで正座が義務付けられていた七人の内の一人、和美

が恐る恐るといった様子で訊ねた。

「あの……アスカ先生、すいません」

「ああっ！」

温厚といっても限界があるのか訊ねてきた和美を斜め４５℃で見ながら、まるでヤクザのように聞いていた。

「ひぃっ！　ごめんなさい、もう許してください！！」

「はぁ～……なんですか？」

迫力がありすぎるアスカの威圧に震えて泣きながら謝る和美に毒気を抜かれて問う。

「もう怒ってない？」「怒ってないから」と母親に悪さして怒られ、機嫌を伺う子供のような仕草を見せる和美にもう怒っていないと伝えるために夕食の新しい串を渡す。

「雪広さん、皆にも」

「先生が構わないならいいですが」

「ああ、もういいですよ」

「仕方ありませんわね。皆さん、次はないですからね！」

他の少女達も昼間に散々遊んでお腹が空いていたのか泣きながら謝ってきたので、疲れたようにあやかに頼む。

アスカに泣いて謝り、あやかに感謝して差し出された串に食いつく少女達。

「で、何ですか？」

串に齧り付く少女達を見やって再度、和美に訊ねる。

「え、と。アスカ先生の体にあった傷のここからここにあったのは何なのかな、と」

和美が自分の体を指して聞いてきたのは、アスカの身体に刻まれた大小無数の傷の中でも、特に左肩から右脇腹に走る大きな三本の傷だった。

他の少女達も気になるのか、一様に食事の手を止めて物言いたげな視線を向けてくる。流石にその場にいる全員から向けられれば答えなければならないと空気を感じさせて、

「ああ、これは――――――」

この傷こそがある意味、今のアスカを形作ったと言っても過言ではない。

聞かれたのでアスカはゆっくりと思い出すように語り始めた。別段、聞かれて困る話でもない。魔法関連は伏せて懐かしそうに、大切に、掌中の珠のような過去の思い出を。

第八十話　　南国と少年（後書き）

前話の「第七十九話　　弟子入り試験と少年　後編」で二箇所修正を入れました。

刹那の主人公への「不信」を「畏怖」に。ネギの暴走の理由を変更しました。

まだおかしいと感じたかは遠慮なく言ってください。再考します。もしくは削除します。

次回更新というか更新の仕方なんですが、今までは週に一回と日曜日と月曜日の間の午前０時にしてきましたがちょっと悩んだのでアンケートみたいなのを取りたいと思います。

?今まで通りに週に一回で日曜日と月曜日の間の午前０時に更新。

?出来上がり次第更新

のどちらがいいでしょうか。

?なら安定した更新とストックが溜まった時の一斉放出があります。

?ならもしかしたら今回のように週に何度かの更新の可能性もあります。変わりに遅くなる可能性もありますが。

次回の更新まで受け付けます。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

第八十一話　始まりと少年　前編（前書き）

何をやってんだろう？

残酷描写あり。

今話の文字数は１０２５９字です。

それではどうぞ！！

第八十一話　始まりと少年　前編

時を遡ること今より五年前。

それが起こったのはアスカが望まぬ殺人を起こして神父がいる教会に上がりこんで数日が経過してからことだった。

何か難しいことをしていたわけではない。

偶々、神父が魔法を使えることを知って魔法学校以外で教えてもらえる人を探していたアスカが頼み込み、熱意に折れた神父の目の前で現在の実力を知るために実演するだけのことだった。

本当に、その時のアスカですら簡単に出来た身体強化の魔法。習得したのは魔法学校に入学して半年。既に覚えてから半年経ち、特に意識することもなく出来るはずだった。

ベッドと机があるだけの簡素な部屋にいるのはアスカと神父、それと外に出れるようになってから出ずっぱりの玉藻の三人。魔法関係者の前に出るのは嫌がるが、一緒に暮らしていく以上は神父の前では妥協することに決めたらしい。

「始めます」

「ああ」

開始の宣言したことに何か意味があったわけではない。別に緊張していたわけでもない。

身体強化の魔法は基本且つ、簡単なものだ。

アスカは、意識を集中し始めた。他に使える魔法が少ないこともあって慣れたことだ。なんの心配もない。ほとんど意識もせずに身体に魔力が流れる――――

（あれ……なんだ？）

彼は、ふと違和感を覚えた。そして――――

感じたのは眩暈、とても深い眩暈。彼の五感が停止した。外界から孤立した脳が感じることは、猛烈な眩暈。

視界が歪曲し、目くるめく朦朧とした迷宮に平衡を失い、よろけてそのままアスカは昏倒した。

最後に必死な声で自分に呼びかける玉藻の声が聞こえて、アスカの意識はブレーカーがシャットダウンするように落ちた。

昏倒したアスカを玉藻がベッドに運び、神父と二人で薄暗いランプに照らされたアスカの汗の浮かんだ苦しそうな寝顔を見ていた。

玉藻にはアスカが突然、昏倒した理由が判らなかった。

魂まで？がっている玉藻ならアスカのほんの少しの体調の変化にも気付けるはずなのに、あの瞬間にアスカの体に起こった変化に玉

藻には見当がつかなかった。

「……もしかしてお主、何か分かったのか？」

「恐らくは、私の考えている通りだろうな」

同じようにアスカを見下ろしながらも玉藻の心配そうな顔とは違って殆ど表情を変えない神父に、なんとなく感じ取って訊ねた。

視線をアスカから変えて玉藻に移した神父はどこか苦い表情を浮かべているようにも思えた。

続きを話そうとしない神父に先を促す。

「――――魔法とは制御できて初めて魔法なのだ。そして制御されている間しか魔法でいられない。制御から外れればただの物理力に戻る。つまり物理法則に従い始める。その時に真っ先に現われるのが何か分かるか？」

促されて仕方なくといった風情で神父が口を開いた。

神父の話し方は、まるで教師が生徒に教えるような口調だった。

分かり易く説明されたお陰で対して学のない玉藻にも彼が何を言いたいのか容易に理解できた。

「反作用か？」

反作用とは、物体に働くある作用に対して、同じ大きさで反対方向に働く作用のことで、この場合は魔法の制御に失敗すればその反

動が来ているという事だ。

「そうだ。今のアスカは身体強化の魔法すら辛うじて制御しているに過ぎない。生じた反作用で自分自身をも標的としているのだ。今よりも少しでも低いレベルで制御をしくじれば――――確実に死ぬ」

玉藻は神父の言葉を聞いて、自分の米神（こめかみ）で脈打つ音と、頭痛とが相まって脳幹に異様な痛みを感じた。

避けて来た事実。

そして見たくない現実を前に少しでも目を逸らすように再度、言葉を重ねる。

「どうにかならぬのか？」

「これに似たような症例は知っているが、ここまで重症なのは私も初めてだ。必ず治るなどという確約はできん。そもそも治す必要があるかもな」

玉藻がどのような状態かを理解しながらも神父の口が澱むことはなかった。

神父の知る症例の中でもアスカのそれはかなりの重症だった。こんな状態に陥ってまで治るなんて保証は出来ず、そもそもここまでなってしまったのならすっぱりと諦めてしまった方が手っ取り早い。

「だが、主には戦うための力が必要だ。皮肉にも今回のことがそれを証明している」

玉藻の熱くなっていく身体を、冷や汗が冷ましていく。そんな堂々巡りを続ければ、体力だけを地味に消費していくことになる。

何時までも目を逸らすことは出来ない。だけど、見たくない、聞きたくないと思いながらも口から出る言葉は止まらない。

撃退したにせよ、必ずしもアスカの身に災難が降りかからないといえない状況にあることを証明していた。それが原因で戦うための力を失ったのは皮肉と言えよう。

「……魔法にしろ、聞いた忍術にしろ、そのプロセスに違いはあれど、限りなく直接的な手段で事象を起こすのは同じだ。魔法ならば魔力によって精霊を使役し、術式によって発動する。忍術ならばチャクラを練って印を結ぶことで発動する。両者に共通するのは、その間に他のプロセスが入り込むことには徹底的に弱いということだ」

一度溜息を吐いた神父は、まるで畑違いの教師のように語りながらも解説をしていく。

玉藻はなにが言いたいのか理解できないフリをしつつも口を挟むことなく、目線で先を促した。

「人は無意識という状態を信じている。時に無意識という言葉に罪を被せ、それを利用しようとする者もいる。それこそ”無意識”のうちにな」

神父の解説は、唐突に方向を変えた。顔は先程向けた寝むっているのに苦しそうな表情を浮かべるアスカを見たまま。

「だが、無意識が意識を上回ることがあるとしたらどうだ？」

「まさか……あり得ない。そんなことは――――」

苦い表情を浮かべた神父の言葉は、俄かに信じ難く玉藻は頭(かぶり)を振るも、同時に納得もしてしまった。

そして最早、告げられてしまえば目を逸らすこともできない。向き合うしかない。

「これを解決するのは容易ではない。するには――――」

「荒療治しかないということか」

二人の見解は一致した。そこで二人の会話は止まり、黙って苦しそうに眠るアスカを見ていた。

ナギ・スプリングフィールド。アリカ・アナルキア・エンテオフュシア。

目を開く寸前にその名が胸に浮かび、そして開いた瞳が射した時には、アスカはその名前を意図して忘却しようとした。

自分たちを生んだ人間たちの名前だが、親であったことはアスカの記憶において一度もない。その名や存在において多大な迷惑をか

けられていることに憎しみや怒りを覚えていることは否定しない。彼にとっては愛すべき存在ではなく、唾棄すべき存在でしかない二人だ。

（だけど……なんで僕は、そんなことを思い出す。もしかして縋りたいのか？）

自分が生きていることを確認したかったのかもしれない。というより、誰かから生まれてきた人間だということを実感したかっただけか。

額の上に重く圧し掛かる何かを振り払いながら――――実際には何も乗っていなかったが、彼は意識を視界に戻した。もう一度仰向けに横になって上を見上げていて何があったのかと思い出そうと回想する。

（そうだ。確か魔法を使おうとして……）

あまり意識せずに思い浮かべようとして、アスカは頭痛に身を竦ませた。頭痛の所為で複雑なことを考えようとしても集中できそうにもない。脳の血管が片端から詰まっているような違和感が、彼の意識を揺さぶった。

「つぅぅぅぅ、何だこれっ」

刺すような痛みが走る頭を抱えて土の上をごろごろと転がる。

何度も転がってようやく痛みも収まってきて、また仰向けの状態に戻る。

見上げた先には木の葉から漏れる太陽の輝き。いい加減に現実逃避を止めるべきだろう。

「ここ、どこ？」

アスカ・スプリングフィールド。目が覚めたらベッドの上ではなく、どことも知れぬ森の中にいた。

現実逃避を止めてもアスカの行動は鈍かった。

確かめるも体の中に玉藻の存在を感じ取れない。

意識を失う前後の記憶を欠落していて、自分が何でこんなところにいるのか分からない。まさか、玉藻や神父が自分をここに連れてきたなんて発想は浮かばない。

ここにいる経緯が分からないアスカに出来る事は人がいる場所を探して森の中を彷徨いだした。

しかし、本来、山篭りというのは、ただ生き残るだけでも大変なこと。大自然の中では人の力など無に等しい。木の根を喰らい、泥をすすってでも生き残る。

「こんな時でもお腹は減るもんなんだな」

余程、意識を失ってから時間が経ったのか異様にお腹が減ってい

た。具体的に言うと「ぐぎゅるるるる！」と獣の鳴き声のような腹の音が鳴るぐらい。

それでも最初は我慢して歩き続けた。木を避け、進路を遮る葉をかぎわけて一心不乱に進む。

だが、行けども行けども風景は変わらず、人がいる場所に辿り着けない。何分も何時間も歩き続け、やがて日が落ちてきたのか薄らと日が翳（かげ）ってきた。

「腹減ったっ！　こうなったらその辺の草を片っ端から食べられるかどうか試してやる！！」

朝から――――――多分、体感時間でそれぐらいから水すらも口にしていない。

水は普通にあるものではない。飲み物で、食べ物で困ることはなかった。血走り始めた目が足元に生えている草を掴んで千切り躊躇なく口に入れた。

きっと正気じゃなかったのだろう。空腹で頭がおかしくなったのだろう。

食べるものが無いからと言って、そこら辺の草を片っ端から食べられるか試してはいけない。何故ならトリカブト、ドクニンジン、ハシリドコロ、スズラン等の猛毒を食べてしまう恐れがあるからである。

「し……自然を舐めてました」

そんなことをすると、食ったものが見事に大当たりしてゲーゲーと吐き出しながら自然の厳しい現実を実感できるものである。

胃の中に残っていたものすら残らず吐き出し、胃液しか出ないようになってようやく収まった。どうやら幸運にも毒とかではなかったようで動くには支障はなかった。

口の中が臭いので洗いたいが水源が近くにはない。我慢するしかなかった。

知識がないのでは何も口にすることすら出来ず、余計に減った腹を抱えて人がいるところまで歩くしかなかった。

しかし、想いとは裏腹にどれだけ歩き続けようとも人のいる場所に辿り着けなかった。

気がつけば太陽は完全に沈んで夜となっていた。辺りに広がるのは一面の暗闇。

微かな星明りに照らし出されているといっても、足元すら覚束ない暗い山道を歩くことは控えた。

いや、本音は暗闇に包まれた山道を歩くことで、自分がどんな場所にいるかも分からない恐怖を感じていたのだ。アスカは木の根元に座り込み、震えて一歩も動けなかった。

都会と違って森の中では明かりは空に浮かぶ月や星だけしか光源がない。そしてその微かな光すらも木々に遮られて地上まで届かない。

暗くなると嫌な想像ばかりが頭を過ぎる。

『どうして殺した』『どうして見捨てた』『どうして殺した』『どうして見捨てた』『どうして殺した』『どうして見捨てた』

繰り返し、繰り返し、まるで耳元で囁かれ続けるようなアスカを責め続ける声。

「何が……聞こえ……ち……ちがう。幻聴だ……」

震えが止まらない。聞きたくない、思い出したくないことばかりが頭に浮かび、夜だというのに一向に眠くならない。孤独で胸が詰まる。

「灯りを……ぐぁ、あああああああっ！」

――――――じいんっ！

恐怖心から魔法で咄嗟に明かりをつけようとして突然来た頭痛が脳幹を揺さぶった。金属音にも似た不快な音が、頭を突き刺す。と同時に視界が真っ暗になった。うねるような痛みが喉の奥から脳を侵食する。

激しくではなく、緩やかにちくちくと。脂汗、もしくは冷や汗を額に浮かべてアスカは頭を抱え、乾いた唇に唾をつけた。舌で舐めると、苦い砂の味がする。何時の間にか倒れて顔が地面についていた。

（そうだ――――やっぱり――――そうだ）

わざと思い出そうとしなかった、背けていた現実。

喉に痰が詰まり、息が上がる。頼りになりそうにない視覚だけではなく、ぼやけた五感を総動員してなんとか、暗く閉ざされた闇を見ることが出来た。

しかし、よく見えなかった。視界が薄れていく。涙だ、と彼は驚き半分で気付いた。残りの半分は、笑い出したい気分だった。

震える手で涙を拭うと、多少はマシになった。涙を拭いた手をそのままに、ゆっくりと最も慣れ親しんだ忍術を行おうとする。何度も印を結んで、もはや意識せずとも無意識に動く指で結印をする。

「あああああああっ！」

だが、術は発動しない。

忍術は知らないうちに彼が意図していたものとは懸け離れた形に変貌していた。無意識下で行った印もばらばらで、チャクラコントロールすらまったく意味を成さない。部分部分を取ってすら、まったく形になっていない。

それどころか体に尋常ではない魔法を使おうとした時よりも遥かに強い痛みが走って絶叫を迸らせた。

「駄目だ……もう駄目だ」

認識して、呆然とアスカは呻いた。声が上ずっているのが自分でも分かる。

涙が頬を止めどなく流れ落ちる。

遠鳴りのようにどこかから、しかし無辺に、頭の痛みが激しさを増していく。どこまで逃げても追いかけてくる。執拗な痛み。彼は呻いて、痰を吐き出した。

「魔法を――――忍術を使えない」

呻くように吐き出したアスカの言葉の後に、重い沈黙が辺りを支配した。当然だ、ここにはアスカ以外には誰もいない。なのに、今はその沈黙が痛い。

無言のまま起き上がり、顔についた砂を払って、木の根元まで這って凭れて膝を抱える。

アスカには魔法や忍術が使えない理由が分からない。魔力やチャクラはあるのに術式や印――――ようはどんなものを使うかっていう設計図や流し込むエネルギーが滅茶苦茶なのだ。

いや、本当は理由など分かっている。分かりすぎるほどに理解している。ただ、事実から目を逸らしたいだけ。

「人を殺したから……」

自分自身に思い知らせるように呟いた声は、鐘の音のように低く小さい。なのに、他のどんな声よりも己に響く。

頭の中に、なにかが響き渡った。頭蓋が割れそうなほどの頭痛に、顔を顰めながら、あの時それを成した手を見る。何時になく巨大な鼓動が、耳の横の血管で脈打つ。終わることのない脳の痛みに、身体が戦慄く。

「ごめんなさいっ……！」

己の手を強く握り締め、天を仰いで謝罪を発した彼はきつく目を

閉じた。必死に堪えるが、事実を認識した痛みはさらに激しくなっていく。痛撃の波の下でもがいて、アスカは悲鳴を上げかけた。

『どうして殺した』『どうして見捨てた』『どうして殺した』『どうして見捨てた』『どうして殺した』『どうして見捨てた』

アスカを責めるように、生きていてはいけないのだというように幻聴は止まらない。

「僕が、僕なんかが……！」

アスカは生きるという全ての生き物が感じる喜びから背を向けていた。生きるために受け入れるべき苦痛に飲み込まれた。

まるで自分が、この世界に一人取り残されたかのような。誰もいなくなったかのように感じる孤独感。この日、アスカの口から謝罪や自虐の言葉が止まることはなかった。

恐怖でほとんど寝ることも出来ず、朝になって夢遊病患者のようにふらふらと目的もなく森を彷徨う。

眼に、表情に生気はない。空腹も全く気にならず、まるで生きることを放棄したようにさ迷い歩く。

――――ガサガサ

近くの茂みが葉を鳴らし、アスカは何か動物がいるのかとそこを見る。

「あ……！」

「ガフッ！　ガフッ！」

近くの茂みから葉をガサリと出てきたのは体長が二メートルはあるかというクマ。自分の縄張りに入られたからか、はたまた別の理由かかなり気が立っている様子だ。

クマは走るのが速いので、出会っても決して走って逃げようとしてはいけないと知識にある。物を投げつけるなどの行為は刺激しても危険。そして木に登ってやり過ごそうと思っても、クマは木登りが上手いので無駄。更にやってはいけないのが死んだふり。クマは動物の死骸などもエサにする場合があります。

彼我の距離が近すぎて逃げられる状況ではない。取るべき道は唯一つ――――――戦うしかない。

だけど、本人はそんなことを考えつきもしない。無力な人間が取るように怯え、振るだけ。

「があっ！」

「で……でかい」

どうするかも定まらないアスカを前に、クマはがばっと立ち上がる。それを見たアスカはただ驚愕を禁じえない。目算で１メートル８０センチぐらい。誰がどう見てもアスカとでは子供と大人の差ぐらいある。

投げ技や締め技は、この体格差では何の意味もなさない。となると打撃系しかないが、せいぜい身体強化ぐらいしかできないアスカに果たして倒せるだろうか。

いや、今はその身体強化どころか何の魔法も忍術も使えない絶体絶命の状況だった。

しかも、足が、腕が、体が、心が竦む。巨躯に込められた、圧倒的な存在感にアスカは完全に飲まれて動けない。

恐怖で覚えたはずの術が恐怖で頭からスッポリと抜け落ち、我知らずのうちに明確な殺意に晒されて体がじりじりと後退していることにアスカは気付かない。

息は恐怖から大きく乱れ、涙や鼻水はみっともなく流れていた。股間も生暖かい。もしかしたら失禁してしまったかもしれない。

「はっ」

どすっと木に背中がついて、ようやく自分が後ずさったことに気付き、後ろがないことに絶望感が胸中に広がる。

背中に気を取られて僅かにクマから目を逸らしたことで、野生の勘か他の何かかは分からないが好機と見たクマが突進してくる。その突進のあまりの速さにアスカは驚きを隠せず、横に避けられない。偶然にもアスカを救ったのは恐怖から力の抜けた体だった。

「〜〜〜〜っ！」

恐怖から膝の力が抜けて尻餅をついた頭の上を、バガアッとクマが振るった腕が背負った木の幹を叩き折る。叩き折られて地面に落ちた木を見て、その破壊力にアスカは尻餅をついた姿勢のまま唾を

飲み込む。

「うっ！」

しかし、クマは怖気づいたアスカを気にした様子も無く、木を折ったのとは反対の手でアスカを襲う。それに気がついたアスカが尻餅の姿勢から命の危機に咄嗟に反応した足と腕の力だけで後ろに飛ぶ。

「ぐわぁっ！」

間一髪で回避に成功するも、微かに掠った爪の先で着ている服がビリビリと破け、鳩尾から下までしか残っていない。不完全な体勢から後を考えずに飛んだのでバランスを崩し、折れた木の傍に背中から落ちた。

「うおおっ！！」

「ゴア――――ッ！」

背中の痛みに悶えたり体勢を整える暇も無く、クマが巨体で圧し掛かってくるのが見えたので傍にあった木の幹を、本当に無意識に施した身体強化で掴んで突き出す。何とかクマとの間に木を入れたことで、突進と振ってくる両腕を避けることができた。

「うわ～～～～っ！　うわ～～～～～っ！」

無様にみっともなく泣き喚きながら木を支える。

「ぶあぁ！」

しかし、幾ら強化しているといっても子供の力ではクマには勝てず、少しの間留めただけで右手で呆気なく木、諸共に吹っ飛ばされる。転がりながらも体勢を整えるも、勝機が浮かばない。

力の差はまさしく大人と子供。しかも、あの連続攻撃は間合いが全く分からない。あの鋭い爪で一撃でも生身で貰ったら死ぬ。

「ガフッ！　ガフッ」と息が荒い、クマが再度突進してきた。突き出された右を、今出来る最高の最小限な動きで避けてガラ空きの懐に潜り込む。

「うおおぉぉおっ！！」

対象が小さいために降りてきた顎に、渾身の突き上げた右ストレートをがむしゃらに叩き込む。自分でも今まで最高の一撃だと自負できるほどで、アスカは勝利を確信した。

しかし、クマはアスカの渾身の一撃を効いた様子もなく、ギロリと睨みつける。

「ガオオオオオオオ！！！！！」

「がぁっ！！」

モロに当たったはずなのに効いた様子のないクマ。このまま懐にいるのは危険とアスカが離れようとした瞬間、先程攻撃した右とは反対の左の鋭い爪から逃げようと背を向けかけていたアスカの左肩から右脇腹までの肉を抉る。

「グルルルル」

「ぐぶっ！！」

血を撒き知らしながら吹っ飛び、ゴロゴロと地を転がって仰向けになった状態で止まった。そして痛みで動けない所で右腕を抑えられ、残った手が体に圧し掛かってくる。アスカの体で体重数百キロのヒグマを支えられるわけもなく、身体強化をしようとも胸骨や肋骨が軋みを上げる。

甘かった。クマに勝とうなんて思い上がっていた。

クマの荒い息は遠雷のように響いた。緩く開いた口腔からは涎が滴る。全身から凄まじい獣臭が湧き上がり、アスカはそれを吸い込んでしまい、思わず咽る。

アスカを食べようとしているのか、はたまた息の根を止めようとしているのか「グワバァ」とクマが口を大きく開ける。

圧しかかる逃れようのない死の恐怖。

――――――嫌だ

死を恐怖し、嫌うのは生物として当然の感情だ。例え己の存在を疎み厭おうとも。

――――――死にたくない

しかし逃れるすべなどない。回避は不可避、防御は無意味。ただの人間にそこから脱する力など無い。

――――僕は

それがただの人間であれば、何の力もないただの人間であったならば迫り来る現実を変える方法はない。

――――僕は、死にたくないっ！！

「死んでたまるかああっ！」

腹からの声が周囲に響き、嫌だ、こんなところで死にたくないと思いが火事場のクソ力というべきものを呼び起こし、迫っていたクマの左目に無事な左手を突き入れた。指先に目を潰した嫌な感触に覚えながら、力の限り腕を突き込むと、クマは叫び声を上げながら体を起こす。

クマが痛みで体を起こした隙に抜け出し、一目散に背を向けて走り出す。その後を自分に食われるだけの獲物に傷つけられ、怒ったクマが追いかける。

命を懸けた壮絶な鬼ごっこが始まった。

第八十一話　始まりと少年　前編（後書き）

どうやって殺人を起こした主人公が立ち直ったかの過去編です。全ての起源、アスカ・スプリングフィールドという人間が生まれた話となります。

何気に続きます。

前話の最後辺りを大幅に修正しました。分かり易く言うなら「修羅降臨」で。

アンケートは続きます。

?:今まで通りに週に一回で日曜日と月曜日の間の午前０時に更新。

?:出来上がり次第更新

のどちらがいいでしょうか。

?:なら安定した更新とストックが溜まった時の一斉放出があります。

?:ならもしかしたら今回のように週に何度かの更新の可能性もあります。変わりに遅くなる可能性もありますが。

次回の更新まで受け付けます。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

第八十二話　始まりと少年　後編（前書き）

本当なら昨日、投稿するつもりだったんですけど２０時にはウトウト、気づいたら２１時。これはもう寝ようと眠くなって断念しました。ストーブはつけていないけどホットカーペットの魔力には抗いきれませんでした。

その前の日に仕事があるのに（６時起き）投稿するために３時まで起きていたのはきつかった。

弟子入り試験結果を『第七十九話　弟子入り試験と少年　後編』の最後辺りを修正しました。ネギの負けだけどエヴァの温情で弟子入りさせてもらえると。詳しくは本編参照を。

後、前話の後書きでも書きましたが『第八十話　南国と少年』も最後辺りを修正しました。具体的に言うと『修羅降臨』で。これも本編参照で。

前話に続けて残酷描写あり。

今話の文字数は１２７５０字です。

それではどうぞ！！

第八十二話　始まりと少年　後編

草を蹴立てて、走る。走る。

地を揺らす足音を先導する形で、アスカは斜面を走っていた。人里離れた山中の、峰に近い辺り。自然のままの雑木が行方を遮り、下草は伸び放題で足に纏わりつく。太陽は山の中でも容赦なく、周囲は草いきれで青臭い。

目の前に低木。種類は分からない。いや何であろうと関係ない。身体を振って躱す。尖った葉が頬を引っかくが、気にする余裕はない。その向こうに灌木（かんぼく）。種類は不明。ハードル走の要領で、飛び越えて綺麗にスルーして着地。続いて一歩二歩三歩目で足元に段差。とっとっとっとつんのめり、無理に逆らわずに踏み切って両手を接地。

それまでのスピードを殺さないように腿を引き寄せて――――クラウチングスタートの形でダッシュ再開。

肺が痛い。足が重い。斬り付けられた傷跡が焼けるように熱い。しかし、まったく痛みは感じない。何かが抜けていくような感触があるから血は止まっていないのだろう。となるとアドレナリンが出ているから痛みを感じていないだけか。

目に流れ込む汗を拭う暇も無く、我武者羅（がむしゃら）に走る。前へ前へ、さあ急げ。

「っ！」

目の高さに張り出した枝を、身体を沈めてやり過ごす。幾分頼りなくなった両足に力を込め、更に強く、激しく、そして滑らかに地面を蹴る。

体力には同年代よりも遥かにあると自信がある。いや、あった。今までしてきた修行が修行だけに、山歩きも慣れている。整地されたトラックでどれだけ鍛えていようとも、どれだけ記録が出ようとも、いざ体力勝負となれば生半可な相手なら負けないつもりだ。

その自負も、相手が人間に限定されればの話しだ。

「ガオオオオオオオ！！！！！」

背後から、山中に咆哮が響く。咆哮に振り返って後ろを見ると、その姿はかなりでかい。しかもかなりの距離走っている筈なのに、諦めも悪くしつこいときた。更に一番大切なことには、彼が彼女か性別が分からないのでどちらでもいいがアスカを殺そうとしている。

（静まれ、静まれっ、静まれっ！）

弱音が滲み出たのを感じて歯を強く噛み締め、アスカは激しく暴れる心音を落ち着けようと、必死に自分にそう呼び掛ける。

後ろに迫る重量の気配。太い木なら別だが、途中の細い立ち木もなんのその、ばきばきぃと生木が裂け、足音に山の空気が揺れているように感じる。

死にたく無いという思いで頭を起こし、目を見開く。両腕を大きく振り、地面を蹴立てる。向こうが怒れる獣なら、こちらは鳥だと脳内の快楽物質で奇妙な思い込みが浮かんでくる。細かいことは考

えられず、ただ走る。溜まり始めた疲労を駆逐し、スピードに乗る。

時に低い位置にある木の枝に捕まって猿のように別の枝に乗り移り、飛び上がって木を蹴って直角に方向変換して惑わし、少しでも距離を稼ぐ。背後の怒涛が僅かに遠のいた。

距離が開いたことに怒ったのか、後ろのクマは猛り狂い、獣ゆえの純粋な殺気が倍も膨れ上がる。ひときわ荒い鼻息が首にかかったような錯覚を覚える。立ち止まって振り返れば様子は分かるだろうが、恐らくそのまま人生が終わる。

「な――――――っ！」

そこで距離を開けたことに若干とはいっても安心してしまい、森を抜けたことに気づくのが遅れた。

どこまでも広がるアスカの膝ぐらいに伸びた雑草の群れ。

木という障害物がなければ直線距離では幾ら無意識に身体強化をしようとクマには勝てない。遥か向こうに新たな森が見えたが、あそこに行くまでに確実に追いつかれるのは自明の理。

覚悟を決めるしかなかった。

即ち――――――クマと正面切っての対決。

確かに、アスカには戦いの経験が足りない。

獲物が逃げるのを諦めたと考えたのか、それとも自分に一撃を与えた相手を警戒しているのか、クマはゆっくりと追い詰めるように

徐行してアスカから少し距離を取って止まった。

「スゥ～ハァ～」

視線を合わせたまま、奥歯を強く噛み締めると静かに息を吸い込んだ。

ジリジリと半径上に移動して再び森の中へ入ろうと少しずつ移動する。クマとの正面切っての戦いなど覚悟していようと御免被る。

足元の石を蹴って馴らし、怒りの矛先を向けてくるクマ。鼻にかかった嘶きを上げ、牙を振り立てる。よほど、左目を潰されたことが頭に来たらしい。何が何でも殺す気だと伝わってくる。

お互いの目を睨み据え、緊張が高まり、限界まで引き伸ばされる。

もう少しで森へ入れると思った時、来る、そう感じた瞬間、アスカは横に飛ぶ。森ではなく、草原側へと。

同時に巨体が膨れ上がり、二つの爪が石を蹴立てて突進してきた。間一髪躱したものの、その迫力に煽られて蹈鞴（たたら）を踏む。攻撃するどころではない。クマは避けたアスカの横を通り過ぎると、そのままブレーキをかけずに木を真っ二つに折る。どうやっても逃がしてくれる気はないらしい。もし、森側に躱していたら命はなかった。

折れた木が倒れ、激突音が地面からの衝撃がアスカの腹に響く。

（どうする！？）

あの巨体に真正面からぶつかるのは自殺行為だ。躱しざまに攻撃

すればよかったが、その考えが浮かばない内にクマは動いた。

こちらに向き直って再び突進。一気に加速。

「――――――っ！」

先程よりも距離が近かった分、反応が遅れた。危ういところで躱すが、腕が頭の直ぐ横を掠める。慌てて身を退いて、十分に距離を取ってから息を整える。懲りずにクマは頭を擡げ、アスカを睨んだ。

視線はクマに据えたままでアスカは足元の小石を拾う。クマの本日、六度目の突進。直ぐには躱さず、アスカは鋭いモーションで無意識に強化した身体能力に有無を言わせて手の中の石を投げつけた。

石は残像を残してクマの眉間に吸い込まれ、あとは見ずに横っ飛びに身体を投げ出す。が、何もナシでギリギリなのに余計なことをした所為で少し遅かった。宙に舞った身体が地面に着く前、押し寄せる怒涛に足を引っ掛けられる。

衝撃。暗転。

体重差が倍以上あるアスカの軽い身体は簡単に吹っ飛ばされた。耳の奥で何かが弾ける音がして、感覚が切り替わる。天地がひっくり返り、足の下に一瞬だけ見えた空がやけに青かった。その後は直ぐに何も分からなくなる。

錐揉みしながら宙を飛び、地面に叩きつけられる。草がクッションになったといっても何の意味もない衝撃。

「げほっ……！」

肺から空気が漏れ、息が詰まった。落ちた勢いのまま二度、三度と転がってようやく止まる。視界が定まらず、自分の身体がどこにあるのか分からない。ただ全身が痛い。とにかく痛い。

《――――――っ！》

頭の中で誰かが叫んでいる。自分を呼んでいるようにも聞こえたが、はっきりしない。恐らく気のせいだろう。自分を心配する者などいない。気のせいだ、とそう思い込む。

だが、続いて感じた振動は気のせいではなかった。仰向けから横向きになり、ピントの狂った視界の向こうで、クマが苛立って地面を蹴立てている。直ぐにでも突っ込んで来るかと思ったが、そうではなかった。前足で、後足で立ち上がっては宙を掻き、地面を踏みしだいてる。不恰好なダンスのようでもあり、地団太を踏んでいるようにも見えた。

煩わしそうに頭を振りたくり、クマが高く吼えた。咆哮に周囲の大気がピリピリと震える。

殺気に中(あて)てられ、意識が戻る。ぼやける目を凝らすと、額を気にするような仕草を見るに、ちゃんと当たっていたらしい。

「……と」

それを見て急いで立ち上がろうとするも、のろのろとぎこちない動きしか出来なかった。足がどうにも頼りない。三半規管は半泣きで、身体が勝手に右に傾く。

傍にあった大きな岩に凭れて身体に走る震えを自覚する。腕、膝、指――――身体の中心から細かい震えが沸き起こり、止まらない。散々走り回って寒いはずはないのに、頬を伝う汗はひどく冷たい。

「落ち着け、落ち着け、落ち着け、落ち着け」

念仏のように、己に言い聞かせるように唱える。

手を伸ばして膝を叩く。震えるそれを砕けんばかりに強く握り、厚い布越しに食い込む爪の感触を肌に確かめる。怯えるなと自らに言い聞かせ、奥歯を噛み締める。一瞬だけ目を閉じ、開く。

襲われた当初の狼狽は、もうない。１００％冷静とは言わないが５０％ぐらいには安定している。それだけあれば思考するには十分。

どんな場合でもそうだが、危機的状況に陥った時に大事なのは、まず理性を保つ事だ。何故なら人間はあらゆる生物の中でもっとも脆弱で、知恵のみに特化してきたからだ。

脆弱さと知恵、それこそが万物を凌駕して人間を生態系の頂点に押し上げた理由だ。もともと、人間の身体能力は、地球上の動物の中では下から数えたほうが早いのだ。どれほど鍛えたところで、魔力や気の助力なしで身一つで虎やライオンを倒せるような者は――――いたとしても百万人に一人が精々だろう。

そんな貧弱な生き物が、何故この星の覇権を握るに至ったのか。それは偏に、力を圧する知恵があったためである。人間は野生生物としてはあまりにも弱く、ただ震えていることは出来ないほどに知恵があった。脆弱だから生存の武器として知恵を持ったのか、それとも知恵を手にする過程で貧弱になっていったのか、それは知らな

い。どうでもいいことだ。確実なのは、両者は分かち難く結びついているということ。

目の前にいるクマのような大型の肉食獣を例として考えてみればいい。彼らは人類よりも遥かに早い段階でその座に登りつめ、そのあとは進化を止めてしまった。彼らは一個の固体として強者であり、ゆえにその位置に留まっていればよかったからだ。だが、人は違う。

人間は弱い、これが前提だ。弱ければ考える。

考えて、逆転の道を見出す。かくして人類は陸海空を制覇し、ついには如何なる生物もなし得なかった重力からの脱却も成し遂げた。地球上でもっとも勢力の強い動物が人間であることは、もはや自明の事実となっている。

一人で勝てなければ二人で。道具を使い、罠を張り、策を巡らし――――そうした知的な手段を用いることによって、人間は他の動物を駆逐し、版図を広げてきたのだ。

――――そこまで考えて、何かが変わった。

ようやく身体の痛みに気がついた。見た感じと意識を保っていられる以上はそれほどの重症ではなく、痛みは直に収まるだろうが――――具体的にどこが痛いという事も分からないほど、『痛い』という衝撃が全身を叩き続けている。

そこで腕を曲げようとして左肘が曲がらないことに気がついた。指は動くので腱を痛めたわけではないと思うが確証は無い。曲がらないものは仕方ないと諦めるしかない。

人間は、痛みに弱い。死に近い。恐怖に染まりやすい。だけど、考えられる。

そのためには、まず落ち着くこと。そして落ち着くには『自分』をできるだけ遠くに追いやってしまうこと。痛みも苦しみも、死に？がる恐怖としてではなく、身体の状況を把握するための情報として扱う。アスカは前世でそれを知っていた。何時死ぬか分からず、周りに恐怖を抱えている事を知られないために何度も経験したから。その度に母親に悟られ、悲しい顔をされるので何度も繰り返して。結局、最後まで母親を欺くことができなかったが、やり方を知識としてではなく、血肉として体得していた。記憶を失っていようが魂が覚えている。

息を深く、長く、静かに吸う。できるだけゆっくりと吸い、さらに倍もかけて吐く。身体のダメージを頭頂部から順に確認していく。

あちこちがかなり痛む。切りつけられた傷は熱湯を掛けられた様に熱く、その後に圧し掛かられた時に肋骨の何本かに罅（ヒビ）が入ったようだが、短時間なら動くことも可能だ。自分はまだ力尽きていない。問題はないと思い込む。

そうしている間にクマが攻撃を仕掛けてこなかったのは望外の幸運だった。こちらの準備が整うまで待っていてくれたのか、それとも行動の意味を図りかねたのか。

どっちでもいいかと考え、腹に力を込めてクマを睨む。その気持ちが届いたのかどうか――――――クマも身を低くして突進の体勢を取った。

そこでクマと目が合い、奇妙な共感を覚える。殺し合いの中で生

まれた？がりであろうか。

「行くぞ！！」

発したのが自分の声とは分からない。ただ、何かが音が聞こえた。それは自分の喉から出ているような気がした。同時に風を感じた。熱が身体を動かしている。そんな錯覚だ。自分の意志では無いのに身体が動いていく。冷たい心だけが、やけにそれを知覚していた。

生まれた僅かな感慨を置き去りにしてアスカはクマを目指して駆け出した。直後、クマも七度目の突進をする。願わくば最後の。

傷に痛みが走る。出血で世界が歪んで見える。膝から下が真綿のように頼りない。

それがどうした。自分は生きていると、岩を踏みしめ砂利を蹴立て、小石に躓きながら走った。唇を舐めると端が切れて、血が滲んでいる。鉄の臭いと一緒に、土の味がした。口の中に入ってきた砂の粒子を血と唾と一緒に飲み下して、息を吸い込む。

アスカはクマを、静かに目を細めて見定めた。痛みは執拗に神経を引っかくが、それに惑わされることは無く、冷静にクマの速度と、彼我の距離を計る。チャンスは一度きり。これを逃すことはできない。

タイミングを計って、潰したクマの左目の視界に可能な限り真横に向けて飛ぶ。

心の中で念じる。自分を言い聞かせるように。

（信じろ！　自分を……必ず出来ると信じろ！）

腹の底から――――純粋に力が欲しいなどと願ったことはない。復讐は確かに誓ったが、結局のところそれも逃げなのだろう。

今となっては何故、＜魔法＞と＜忍術＞が使えないのか分かる。自分の＜力＞が人を傷つけるだけならと否定したのだ。自分を、力を。

だけど、絶対に否定はできない。この身に流れる血、力はもう一人の自分自身のようなものだ。どちらが大きいわけでもない。どちらも自分だ。片割れだけでは、もう生きていけない。

――――＜力＞が傷つけるのか？

違う。現に＜力＞がなくてもアスカの腕は熊の眼を抉った。＜力＞が傷つけるのではない。制御できない己が他者を傷つけるのだ。

（制御して見せろ、自分自身を！）

己に向けて叫びを上げると、頭痛が消えていた。まったく消えていた。静かに――――耳の奥で鳴っていた風のような音も、もうどこにも聞こえない。

内臓はもうひっくり返ったりしない。四肢も強張らない。

「これが俺だ！」

極限の集中の中、一瞬が永遠になり、時間が鉛を流したように遅くなる。

全ての動きが呆れるほどゆっくりと映る。耳元を唸る風。手刀の形にした右手に、次を考えずにありったけの魔力とチャクラを込めるとバチバチと放電し始めた。

今までの無意識の身体強化とは違う。意識的な＜力＞の行使。

疾走することで地面と平行近くになるまで前傾姿勢になっていることで右手が地面を抉って、「チッチッチッチッ」と千もの鳥の地鳴きにも似た音を奏でていた。

奇しくもそれは、アスカが望まぬ殺人を犯してしまったのと同じ雷遁。

それに気付いた様子のないアスカは、クマの突進してくる爪を驚異的なスピードで躱して、その真っ赤に燃え猛る右目に向けてジャンプして雷を発する右手を突き入れた。

「グギャアアアアアアア！！」

ぞぶり、と手首まで埋まる。間違いなく殺すために成されたそれは、炎の灯る眼球を貫いて眼底を射通し、十分以上にクマの体内に潜り込んで止まった。角度は微妙ながらも、脳に達したかと思うほどの威力。如何なる生物であろうと、間違いなく致命傷となる一撃だった。

殺したと感じさせる確実な手応え。いくら人でないとはいえ、二度目の命を奪った感覚に怯みそうになるのを堪えて手を抜くと鮮血が噴き出す。吹き出す血が細かい雨となってアスカに降りかかる。

体中の痛みと、命を奪ったことによって生まれた弱気が身体をクマから僅かに遠ざける。

その時、仁王立ちして死んだと思っていたクマが激しく反り返り、巨体を揺さぶった。腕に当たったわけでもなく、腕を振ったことによる風圧に圧されるように後ずさって先程あった岩に体をぶつける。そしてズルズルと全身に力が抜けて尻が地につく。

（死ぬのか――――）

後悔も恐怖もなく、その事実を自然に受け入れることができた。自分に出来ること全てやり、生存競争に負けたという想いだけ。お互いに命をかけて戦って、血を流しすぎたのか薄れた意識の中でも認めることができた。

意識が薄れていくのに比例して目も開けていられない。最後に自分を殺す相手を見ようと力を振り絞る。何かを拒むように頭を左右に振り、棹立ちになったクマの姿を見て、意識は完全に闇に落ちた。

それきり、アスカは動かなくなった。

アスカは死んではいなかった。

「う……」

本人がそれを実感したのは日も沈んだ夜になってからで、バチバ

チと火が爆ぜる音に揺り起こされるように眼を覚ました。体には冷えぬようにかシーツらしきボロ布が掛けられていた。

「生きてる」

仰向けに寝かされた視線の向こうは満天の星空。

体を動かそうとして走った痛みに己がまだ生きていることを実感し、思わずと言った口調で呟いた。

「それは我らが治療したからじゃ。言っておくがかなり危険だったのじゃぞ」

肋骨は何本も折れ、腕も同じく。体の前面に三本の爪痕が刻まれていて流れた血は致死量に達しかけていた。体中に包帯が巻かれており、特に体の前面に刻まれた三本の爪痕は一生跡として残るだろう。

「玉藻？」

最初からいたのだろう、アスカの視界に覗きこむように入ってきた玉藻がまるで言い聞かせるように話す。

だけど、アスカにはまだ状況が飲み込めず、伝わっていない。

「お前はうろたえてばかりで治療をしたのは私だけだろうに」

「何を言うんじゃ、お主は！」

アスカが起きた原因である焚き火に新たな木を放り込んだ神父が

呆れたように玉藻に突っ込む。

本当のことを突っ込まれたことて恥ずかしかったのか、夜の闇の中で焚き火の灯りに照らされて分かり難くても玉藻の頬が紅く染まった。

「どういうこと？」

アスカが聞きたいのはこの状況に対してのこと。

「この女は大怪我をしたお前の前で治療も出来ずにうろた――――」

「だからそこから離れんか！」

凝りもせずに先程の突っ込みを繰り返そうとした神父に、よほど恥ずかしいのか玉藻が爆発した。

これ以上は危険と判断したのか神父は話題を変えた。

そもそも何故アスカが気がついたら森の中にいたなんてことになったのか。

「分かっていると思うが、お前は魔法や忍術を使う時、自分を殺す術式を必ず組み込んでいた。自分自身、意図せずにな。だが、自分を殺すことを願うなんてことは意味を為さない。奇跡は願わなければ起こらないが、自分を殺すことを願うのは意味的なパラドックスを生み出すことになる」

神父が言うことも森で目覚めた当初のアスカなら認めなかっただ

ろう。今のアスカだからこそ納得ができた。

魔法は物理を越えることはできても、意味を無視することはできない。

「僕は……人を殺したことに自己嫌悪して意識せずに自分を殺そうとしていた」

魔法や忍術を発動しようとして失敗した際の痛みは、殺人を犯した自己への罰として無意識下に行っていたことなのだ。

「そういうことじゃろうな」

あっさりと肯定した玉藻は、弱まってきた火力を上げるために傍に置いていた木片を放り投げる。

「肉体的な異変があるわけじゃないから結局は内面――――精神的なものに過ぎなかった。しかし、精神というのは、神聖不可侵のものではない。……けれど、壊すことも癒すことも難しい。そこが肉体とは違い、思考とも少し違う」

「誰かが手助けしたところで根本的な解決にはならない。ならば、望む死に対して反発する気持ちを作り出すしかないわけじゃ」

魔法使いにしろ、気の使い手にしろ、一度コツを掴めば習得は簡単なものである。

要は自分に扱いきれない限界の一歩手前で自制することだ。あとは繰り返し、その手加減を忘れないように練習すればいい。どんな状況で、どれだけの力が必要とされるのか。そのうち、それが出来

て当然になる。

魔法というのは、暴走する可能性がある反面、何時如何なる時でも制御できる力ではある。

全体の危険を十とするなら、術者はその時必要とされている力がそのうちの一なのか九なのか、把握できていないといけない。時には、力の限界以上のものを要求されることというのもないわけではないが、制御できない魔法を使うことと、それでもなければ対処できない事態に魔法なしで立ち向かうのと、どちらがマシかなんていうのは、きっと誰にも分からないだろう。

アスカが今回陥った症状を正式名称がないので神父は【魔法使いの憂鬱】と呼んでいる。

魔法使いたち――――それも未熟な魔法使いが一度は蹲(づまず)くと言われている有名な症状だった。大抵の魔法使いは、大なり小なり一度はコレに引っ掛かる。魔法というのは、どう考えても生身の人間には扱いかねる代物だから。制御に自身が持てなくて、必要な時に咄嗟に魔法を使うことを躊躇ってしまう。特に一度大きな事故を起こした魔法使いなどは顕著に現われる。

突如として、自分の魔法に恐怖を覚え、それを使うことを躊躇するようになる、むしろ、生身で扱うには危険すぎる、魔法という力に対する健全な危機感とも言えるのだが、自覚症状がない場合、実際にその魔法が必要とされる――――例えば頭上に植木鉢が落ちてくる、階段から転げ落ちる、処女の生贄で古代の魔王が復活する――最後のは冗談だが、そう言った場面での躊躇は、かえって深刻な事態を引き起こしかねない。

自覚がある場合には、さらに面倒なことになる。魔法使いが魔法使いであることをを辞めることはできない。魔力を封印でもしない限り、自分の身体に刻み込まれた魔法という十字架を、恐怖しながら生活していかなければならない。

特効の治療薬は、ない。根本的な治療法はなく、アスカのように自信があろうとなかろうと、使わないと死ぬような状況に置かれるか、時間が解決してくれることを祈るしかない。

寧ろ、コレを経験しない魔法使いの方が魔法の怖さを理解していないということだから危なっかしい。

場合によって強大な力を有する魔法使いは、どうしてもそれを制御するための訓練を受けて、実際に制御を実践する責任を求められる――――ただでさえ悩みの多い子供の時分にだ。

説明されたことに納得したような、それでも微妙に納得していないような相反する表情を浮かべたアスカの前に神父が器が差し出した。

「これは？」

渡されるままに受け取ると、中にスープと肉らしきものが入っており、空腹に喘ぐ胃が食べさせろとがなり立てる。

「熊鍋だ。お前が殺したクマの、な」

「――――――っ！」

見たことのない肉らしき物体が何か気になって差し出した神父に

尋ねると思わず、落としそうになった器を抱えて痛む体を無視して起き上がり、辺りを見渡した。

　すると近くに皮だけのアスカが殺したクマが枝に引っ掛かっていた。

「私達がついた頃にはもう死んでおってな。どうせじゃからクマ鍋にしてみた」

　首を切って血を抜き、木に吊るす。水場で頭を落として腹を裂き、内臓を引っ張り出す。排泄器官周辺は内容物が肉に触れないように大きく切り取る。アバラも割り開かないと全部引っ張り出せない。

「殺したのはお前だ。自然の摂理に従って最初はお前が食べろ」

　アスカには命を奪う権利とか、何が尊く価値あるものか、何をするべきか、しないべきか分からない。それでも今日、一つの命を奪った。

　弱肉強食。

　弱ければ食われ、強ければ食べる。普遍にして絶対のこの世の単純な自然界の理（ことわり）。

「いい匂い……」

　肉の甘く香ばしい香りが、強烈に空きっ腹の食欲を刺激した。ナイフでスライスしたらしい肉を湯で温めて出来上がったものを口に入れる。味がどうとか、そういうレベルではなかった。結構、こってりとした味や独特のくさみも気にならない。満ち足りるとはこう

いうことなのかという食事は初めてだった。

「フゥ……」

涙を流しながら、一口一口ずつ命の有り難味を噛み締めるように食べて一息つく。そして自分が殺したクマを見て、痛む体を押して玉藻の静止の声が掛かるのを神父が止めるのを背景とし、アスカは近くにあった木の棒で土を掘り返して、置かれていた首や内臓を埋める。

止められて玉藻は不服そうだったが、神父は初めからアスカにさせるために置いておいたそれらを埋める姿を黙って見ていた。

「ありがとう……」

ふいに、アスカの言葉が口に出た。胸の奥から熱い感情が溢れ、その言葉の意味を理解した。命をくれたクマに、クマを育てた森に温かい気持ちが湧いてきた。感謝の気持ちに涙が止まらない。

生き延びた、生かしてもらった。その事に感謝の気持ちが湧いてくる。死にたいという気持ちは消えていた。

森は、人間が人間となる遥か以前から森として在る。

己が創り得たものでなければ、己の物差しで量れぬのは当然の理(ことわり)。世のほとんどは人間の量りえぬもので作られている。人は決して己のみで生きているのではないと、身に染みていた。それに気づけたということは。失ったものよりも遥かに大きい。

「普通に暮らしていると生きるということが、どういうことなのか

忘れそうになる」

埋めた場所の前に膝をついて与えてくれた命に感謝を捧げるアスカに向けて神父が言葉を紡ぐ。

大事な話なのだと悟って振り返るアスカ。

まだこの頃はサングラスなんてつけておらず、焚き火の火に照らされた前髪の向こうにある深い緑色の眼を神父が射抜いた。

「私達は他者の命を喰らって生きている」

スーパーで買った肉も野菜も何もかもが命を奪った果てにあるもの。自分で成したことではないから実感していなくてもその事実に変わりはない。

「聖人になれ、なんて事は言わない」

きっとこれは神父の真なる願い。

考えてみればおかしな話で、押しかけてきたアスカや玉藻を彼は黙って受け入れた。そこにどんな想いがあるのか、彼が亡くなった後も終ぞアスカが知ることはなかった。

だけど、神父がアスカに向けた言葉は今も尚、胸の中に生き続けている。

「君は君が正しいと思う人間になればいい。後悔のないように生きなさい」

前世の記憶を失っていた。他にもあった分かれ道で多くの人と道を違えさせた。

だが思えば、この言葉こそが明確な分岐点だったのかもしれない。この言葉こそアスカ・スプリングフィールドを前世とは違う今のアスカ・スプリングフィールドへと形作らせた最初の一歩だった。

単体ではなにも為し得ない。きっと言葉も持ちようがない不安定な存在。それが親と関わり、他人と関わり、世界を認識していく中で、自分という形が作られる……もしくは、〝発見〟される。

そして同時に、この言葉こそがアスカにとっての魔法の言葉だった。

暗闇の中で見出した一筋の光。それは、これ以上ない救いだった。

前世を失い、寄る辺無き縁であったアスカの心に強烈に刻み込まれた最初の思い――神父に対する憧れだった。

「ああ……」

月の綺麗な夜だった。

アスカが月を、夜空を好きになった理由。

この時、見上げた先にあるのは、まるで天の河のように広がる満点の星空と新円に輝く白き月。

――――それは生まれて初めて見たもののような気がした。

この大きな星空は、見上げなれば気づかないけれど何時だってそこにあった。どんなものも、どんな生き物も、どんな人間も、当たり前のようにそこにいるけれど、その一つ一つがかけがえのない存在でこの世界を作っている。

みんな同じだ。みんな同じ小さな小さな欠片（カケラ）同士。

「こいつはな、クマに吹き飛ばされたのを見て、それはもう必死な顔で呼びかけを――――」

「お主はさっきからそればっかりじゃな！！」

そこで綺麗に終わらせておけばいいものを、楽しそうに茶々を入れる神父に恥ずかしさから激昂する玉藻の姿があった。

ああ、あの時に誰かに呼ばれたと思ったら玉藻だったらしい。

分かった事実に焚き火の火が楽しそうに揺れる中、アスカの意識は数時間程度では足りぬので微睡（まどろみ）へと誘われていた。前夜は幻聴に悩まされていたが今夜は良く眠れそうだった。

明日から頑張ろうとアスカは睡魔の海へと身を投じた。

戻って現実世界へ。

「と、まあ若気の至りというか、若さ故の暴走とでもいうべきか、

そんなことがあったんですよ」

流石に四歳～五歳児が熊（クマ）を単独で倒したなんて話しをするわけにはいかないので細部は誤魔化しているが、あり得ない事実に皆、唖然とした表情を浮かべる。

まさか、その傷がクマに付けられたものとは考えられず、かといって嘘というには傷跡がはっきりとしていて疑うことも出来なかった。真実だと物語っていた。

「ああ、そういえばアレも大変だったなぁ。ソレもコレも……」

そもそもあの時のアスカが山を下りれらなかったのは玉藻が施した【狐理心中の術】の所為。

複雑な迷路に迷い込んだかのように、同じ道を永遠と歩かせる術。複数の人間に効果を発揮し、術にハマッた人たちは同じ場所を歩かされている自覚もなく、まるで狐か狸に化かされているかのような錯覚に捕われる。そして、幻術だと気づかずに長時間を歩き続ける内に、その体力を消耗していくのだ。

アスカがトラウマを克服できるようにやったのだろうが、どう考えてもやり過ぎである。このことに気づいた時、キレて二人に報復の戦いを挑んだが秒殺された。

今、思い出しても膝が震え、背筋を冷たい汗が伝わるような出来事ばかり。仙人と戦った時の及ばない力に対する絶対の恐怖や、特に力に溺れていた時に玉藻に完膚なきまでに叩き伏せられたこと。今なら分かる。確かにあの頃の自分は増長していた。天狗になった鼻をへし折られる必要はあっただろう。

あれは、そのために有効な手段だっだと言える。

理解はできる。理性は納得している。だが、しかし、それでも思わずには要られない。

――――――もっと、他の方法はなかったのか。

よりにもよって九尾モード全開で叩き潰さなくてもよかろうに。死にかけて真剣にトラウマに成りかけた。

「「「

騒動を引き起こした責任を取ってハルナと裕奈が場を盛り上げて話題変換をしたお陰で場が暗くなることはなかった。盛り上がる周りとは裏腹にアスカ一人だけは欝モード全開だったが明日菜たちが強制的に引っ張ったお陰で、この日は賑やかなまま終わることが出来た。

蒔かれていた種は花開く時を今か今かと待ち詫び、その時が迫る。

過去からの来訪者が現われる時、アスカは非情な選択を迫られる。その決断が何を示すのか……この時は誰にも判らない。

だけど、今だけは誰もが優しい時間を甘受していた。

第八十二話　始まりと少年　後編（後書き）

修学旅行編でアスカが月を好きになった理由を公開しました。それと神父の台詞は「月姫」から来ました。ピッタリだったので。

後、【魔法使いの憂鬱】は「魔術士オーフェン」からです。

ちなみに最後の種が云々は刹那の事とは関係ないのであしからず。

アンケートの結果、１３対５で『今まで通りに週に一回更新』となりました。ストックが溜まったら一斉放出という形となります。

答えてくれた皆様方には感謝を。

次回更新ですが、溜まりに溜まった感想返しもしなければならないので、１８日と１９日の間となります。

あ、それと更新して欲しい曜日などがあれば受け付けます（例：月曜日と火曜日の間といった風に）

なければ今まで通り、日曜日と月曜日の間という事で。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

第八十三話　　とある場所での修行と少年（前書き）

先日、レンタルショップで「蒼穹のファフナー」の映画を借りてきて見ました。

いや、完成度の高さが凄い。テレビとは違ったテーマでありながら上手く纏めていました。

どうしてもネギまの映画と比べてしまう筆者です。

またまた予告更新日より速いですが気にせずに行きましょう。

今話の文字数は１２０５４字です。

それではどうぞ！！

第八十三話　　とある場所での修行と少年

現代において強くなりたいと願う者の選択肢は自(おの)ずと限られている。

或いは最新設備を備えたトレーニングシム、或いは道場。そこへ多くの若者が集い、互いに切磋琢磨しあう。それは武道・格闘技の一つの正しい姿である。

昔のように戦場で実戦を重ねて強くなるというのは現代の、それも日本ではまずあり得ない。

だが、「強くなりたい」と願うものは共通してこう考える。

――――――他人と同じ練習をしていては、他人より強くなることはできないのではないか

だから武術家は本来、己が鍛錬している姿を他人には見せない。例えば夜の山中や塀で囲まれた庭の中、或いは狭い室内で知人や家族にすら密やかに鍛錬を積む。

それもまた昔から今も変わらない武道の一つの正しい姿なのだ。

G．Wが終わり、雪広あやかに招待された南国リゾートから帰って来たある日、ネギはとある場所で激闘を繰り広げていた。

３６０。辺りを見渡せば遠間に見えるのは水平線だけという奇妙な場所。恐らくはどこかの屋上中央。まるで中世ヨーロッパの城の庭にあるような白い円盤型の屋根のある建物や、何故か椰子の木があるものの、それはさておき、

「くっ……！」

現在、ネギはＶＳエヴァンジェリン＆初代従者チャチャゼロ＆現在の従者茶々丸の三対一で手合わせをしている。但し、ネギが押されまくるという極めて一方的な展開になっていた。実力差から考えて当然の結果だが。

ネギが必死な顔で食らい尽いているのに比べエヴァンジェリンは見下すように不敵な笑みを浮かべていた。

「ぎゃうっ！」

エヴァンジェリンの魔力を収束させた一撃（怪我をさせない絶妙な手加減の成された一撃）に盛大に吹っ飛ばされるネギ。碌に受身も取れずに十メートル近くも吹っ飛び、「ズシャアアァ――ッ」と盛大に地面を転がるネギに向けて従者コンビ（チャチャゼロは己の半身近くはある刃物を両手に持った二刀、茶々丸は機械機構を活かして肘関節の部分から噴射光を放って威力を倍増）が挟み込むように迫る。

その間、エヴァンジェリンは両腕を胸の前で組んで優雅にふわっと浮き上がる。

「ぐっ……ラス・テル・マ・スキル・……！！」

ネギが右手に杖を持ち、左手を地について肩膝をついた状態で起き上がった時には従者コンビが既に目前にまで迫っていた。

体勢が不十分な以上は避けることは難しく、即座に取るべき手段を選択して詠唱を開始する。

「風花・風障壁（フランス・パリエースアエリアーリス）！！！」

ネギを護るように風の壁が従者達の攻撃を阻む。

小柄ながらも異常な攻撃力を誇るチャチャゼロと機械故の機構を活かして尋常ならざる力の茶々丸の攻撃を、物理的な損害から身を守ることができる【風花・風障壁（フランス・パリエースアエリアーリス）】ならば凌げると判断したネギ。

先程から防戦一方だが、修行当初はこの防御すらも間に合わなかったのだから、これでも大した進歩である。

しかし、当のエヴァンジェリンはこの程度では満足しない。

「うぎゅ！」

【風花・風障壁（フランス・パリエースアエリアーリス）】は１０ｔトラックの衝撃クラスも凌げるといっても、術者自身も動くことは出来ず、効果は一瞬で連続使用も不可能という難点がある。

その気になればトラックとの正面衝突も無傷で済ませる事ができる、本来ならば物理的に破壊する事が出来ない魔法障壁。しかし、それは理論上の話で、力量差によっては力尽くで突破される事も有り得ることである。

魔法力による身体能力強化の賜物と言えよう。流石に両方を一気に教えることが出来ないので前者から。

【風花・風障壁（フランス・パリエースアエリアーリス）】が解けた瞬間、茶々丸がネギの頭部を掴んで地に押し付ける。

「うひぃぃっ！？」

更に追い討ちを掛けるようにチャチャゼロが持っている刀（ナイフ？）を地面に押し付けられたネギの顔の直ぐ真横に突き刺した。

文字通りの眼と鼻の先にある刃物の脅威。何よりもチャチャゼロの「キャハ」という楽しげな声がネギの背筋に悪寒が走り抜ける。思わず涙を流してうろたえるネギは至極真っ当な精神を持っている。

「どうした、たった１２秒だぞ。三対一とはいえ、せめて一分は持たせろ。私はまだまだ余裕があるのだぞ」

「へみゅ」

そこにむぎゅっと（流石に靴は脱いだらしい）ソックスに包まれたエヴァンジェリンの御み足がネギの顔を踏み潰す。「グリグリ」ではなく「むにむに」という擬音が発生される辺り、三対一の状況を考えると優しいのか厳しいのか。

主（あるじ）の危機にカモが慌てて駆け寄ろうとする。何気に楽しげに片手でナイフを振り回すチャチャゼロが怖い。

傍目にはイジメのように受け取れるが、エヴァンジェリン曰く『

これくらい当然だ』と何事も無いような表情だった。

「うっ……まだまだです！」

押さえつけられながらも、ネギの目は戦う意志を失っていない。若干のヘタれ具合はあるものの。

それを見てエヴァは、そうこなくてはと唇の端を吊り上げて笑みを浮かべる。とある事情でこれだけ動いても魔力にはまだ余裕がある。流石に全力と言うわけにはいかないが、どの道ネギを相手にするには手加減しなければならないので、それはどうでも良い。こうして魔力を以って暴れられる事こそが、彼女にとっては重要なのだ。

「その気概やよし、更に行くぞ。いいモノを見せてやる」

「うひゃ！？」

エヴァンジェリンは、その言葉と共に手を差し伸べるどころか倒れているネギを豪快に蹴り上げて空中に飛ばした。傍にいた茶々丸も主の行動が予想外だったのか少し驚いた様子。

「はぅ」

「手加減してやる。耐えてみろ」

そして、宙を舞うネギを追いかけるように自ら飛んで接近するや否や、防御しようとした右手を掴んで開いた胴体に己の右手を当てる。この攻撃自体に威力は無い。真価はこれから明らかになる。

エヴァンジェリンが掌底をネギの胴体に入れると同時にポッポッ

と腕の周囲に光が起こる。

「あううーーーーーっ」

無詠唱による【雷の魔法の射手】を叩き込んでバチィッと何かが弾けたようにネギが体が悲鳴と共に吹き飛ぶ。

そもそも倒れていたところを蹴り上げられ、空中で詠唱時間ゼロの魔法で追撃。ネギは成す術もなくその連続攻撃を食らってしまう。威力そのものは怪我をしないように手加減されているので大した事はないのだが、如何せん速いため防御したり反撃を狙う暇が無い。後、「雷」の【魔法の射手】なので付加効果で痺れる。

「リク・ラクラ・ラック・ライラック　来れ、虚空の雷、薙ぎ払え」

しかも、大締めはここからが本番だと詠唱しながら両手に紫電を纏わせるエヴァンジェリン。当然、狙いは弾き飛ばされて落下中のネギ。

さっきまでのただの打撃と無詠唱の一撃に過ぎず、最後はやはり詠唱魔法による追撃。

しかし、先程の【雷の魔法の射手】で体が痺れて目下落下中のネギには、対処しようにも体勢を立て直す時間すら与えられていない。出来る事があるとすれば、不完全でも魔法障壁を張って身を守るぐらいだ。

「雷の斧（ディオス・テュコス）ッ！！！」

短い詠唱の後に放たれる力ある言葉と共に放たれた雷の精霊は、

魔法名と同じく巨大な雷の斧となって、その刃をネギ目掛けて容赦なく振り下ろした。

「ひあああ――――――！！」

荒ぶる力は容易く障壁を突き破って、ネギの身体を貫いていく。

この時ネギは身を以って理解した。本人も言った通り無論手加減はされたものだがそれでも威力は中々であり、不完全な魔法障壁で身を守ったはいいが、仮に完全な障壁であったとしても、これは防ぎ切る事が出来ないと。

全然歯が立たないってことを改めて実感するネギ。それほどまでに実力差がある。未熟な自身にも分かる事実を体をビリビリと痺れさせながら理解した。

「……今のが決めとしてそれなりに有効な雷系の上位古代語（ハイ・エンシ）魔法（エント）だ」

音も無く静かに降り立つエヴァンジェリンの姿からは、強者故の絶対の余裕が感じられた。

「ううぅ、しび、しびれる～～～～」

怪我させないといっても雷系特有の付加価値である痺れまでは逃れられず、体を起こすどころか満足に動かすことも出来ずに震えた声を漏らす。

「ちなみにこれは千の呪文（サウザンド・マスター）の男が好んで使った連携でもある。覚えておいて損はないぞ」

氷と闇の精霊の力を借りた魔法が専門である事を差し引いても、まだまだ強い魔法が使えるはずのエヴァンジェリンが【雷の斧（ディオス・テュコス）】を使ったのはネギに見せるため。

かく言うエヴァンジェリンは、あまりこのような連携を使わない。先程行ったように使えはするが。

「え……父さんが」

痛みと痺れに打ちひしがれながらも父というワードが出てきて反応を示すネギ、未だに父と同じ魔法剣士タイプか従来の魔法使いタイプかの選択は決まってはいないモノのやはり父に由来する魔法と言うのはそれだけで彼にとっては無条件に興味を抱くものになるようである。

案の定、付け加えられた「もっとも、今のお前にはムリだがな」は聞こえていない。

（しかし、得意でもない雷系魔法をバンバンと。流石だな、あの女……）

流石は英雄と呼ばれる男が好んで使った連携であるだけあって、距離を詰めての白兵戦と無詠唱の魔法の射手で体勢を崩させ、相手が満足に防御できない隙を突いて、中の上程度の威力だが詠唱の早いタイプの上位古代語（ハイ・エンシェント）魔法。シンプルだが効果的な戦法である。

ならば、それを容易く、それも得意でもない系統の魔法を軽々と行使するエヴァンジェリンの力量の高さにカモが瞠目する。伝説とまで言われた「闇の福音」の実力の高さをマジマジと思い知らされ

た。

あれほど動き回ったというのに、エヴァンジェリンは汗どころか着衣のわずかな乱れすら見られない。それだけ無駄のない動きでネギを圧倒していたと言うことだろうが。

「じゃあ、回復したら実戦訓練を更に二時間だ」

「ハ、ハイ。師匠（マスター）！」

（ええ～～～まだやるのかよっ！　もう四時間はぶっ続けだってのに！）

距離を置いて見守っていたカモがこれまで行われた修行の時間を換算して、まだ続けることに驚愕の叫びを心の中で上げる。

修行が始まってから日に日に修行時間が増え、以前に戦った時の感じから予想していたものよりも遥かに厳しい修行に主であるネギが持つのかと心配になる。

かといって、疲労と痺れで未だに立ち上がれないとはいえやる気満々のネギを前にすれば諌める言葉が出るはずもなく、本当に無茶をしそうな時にはエヴァンジェリンが止めるだろうし、自分がさせはしないと心に誓う。

「あ、あれ……？」

ネギが立ち上がろうとして足の踏ん張りが利かずに尻餅をついた。

とはいえ、手加減していても魔力が有り余った状態の【雷の斧（ディオス・テュコス）】

を食らっては直ぐに回復することが出来ず、暫くは痺れが取れずに動けそうも無い。

「やりすぎたか？」

「そのようで」

「貧弱ダヨナ～物足リネェゼ」

やりすぎた自覚が少しはあったのか自問したエヴァンジェリンとそれに同意する茶々丸。チャチャゼロだけはもっとやらせろと言わんばかりに刃物をグルグルを回す。何故かネギには、自分の目の前で腹をすかした肉食獣が「待て」をさせられた風景が思い浮かんだらしい。

「まあ、いい。丁度いいから少し休憩だ。私は少し離れる。茶々丸、後は任せた」

「分かりました。マスター」

エヴァンジェリンは悩む間もなく即断即決で、後を茶々丸に任せるとさっさとネギの前から立ち去ってしまった。茶々丸の返事を聞く間もなく、聞く気もないのかもしれないが、既に目的地が定まっているのか迷いのない足取りで歩いていく。

「オレモイクゼ～御主人」

主の命を守ってネギの介抱をする茶々丸とは別に、自動人形たるチャチャゼロは己の興味を優先させてエヴァンジェリンの後を追って短い足を振るって歩く。

ただ、屹然と歩く師匠（エヴァンジェリン）の後姿をネギが射抜くように見ていながら、彼女が向かう先にいるとある人物を見ていることに残った茶々丸だけが気付いた。

エヴァンジェリンが後を付いて来たチャチャゼロと共に三人がいる開けたホールのような場所に着いた時、三人の中で唯一人だけ性別が違う少年――――アスカ・スプリングフィールドが対峙していた桜咲刹那が持っている夕凪を弾き飛ばしたところだった。

くるくると舞った夕凪が自身の前に突き刺さるのを横目に二人へと視線を戻す。

「くっ――――」

獲物を弾き飛ばされた刹那が片手に果物ナイフを持ったアスカが懐に潜り込んで来るのを察して、距離を取ろうと【瞬動】で数メートルを一瞬でバックステップした。

「はい」

「――――え？」

しかし、一足でバックステップした刹那の視界の中に突然出現した異物。

それが歩み寄ってきた目の前の少年が喉元に突きつけられた刃――――業物でもなんでもなくこの場所に元からあったただの果物ナイフなのだと気付くのに、刹那は幾ばくかの時間を要した。

我が目を疑うような表情で凝視して何かを言いかけて言葉が止まった。

「これで三本目――――――まだ、やる？」

ナイフを手にしたアスカの態度には、気負いというものがまるでなかった。人の急所に刃を触れさせていながら。継続の意思を問う口調は常と変わらず緊張感は感じられない。

追い詰める、などという生易しい距離ではない。刹那はその刃先が自分の首元に触れているの気付いた。ほんの少し身体を前後に揺らすだけでも、刃は刹那の首元を切り裂くだろう。

【瞬動】でバックステップした刹那に一瞬で間合いを詰め、相手との距離を髪の毛一本分の誤差も許さずに見切り、それに従い精密に腕を突き出す。動きそのものは単純極まりないが、それがいかに並外れた技であるか。

少しでも近づきすぎれば鮮血の花が咲き、遠すぎれば意味をなさない。

「あ……くっ――――」

戦慄を押し殺して無意識に一歩後ずさる刹那だが、真の恐怖はそれからの事だった。

後ろに下がったのに首元から刃の感触がなくならない。ナイフは首筋に接着されたように、一瞬も離れずについてくる。遠ざからないのだ。自分が動かなかったのか、と刹那が錯覚したほどに――――まるで元から一つの物体であるかのように、刹那とアスカの距離が変化しない。

「ば、ば、ばかな……」

恐怖に震える刹那の首筋と、アスカが持つ果物ナイフと――――その間には文字通り薄紙一枚が通り抜けられるかどうかの隙間もない。ほんの少し力を入れれば刃が喰い込む。

刹那は結局二歩三歩と後退し、しかし刃と己の相対位置は全く変化しなかった。

常人には信じられない程の見切りである。アスカは相手の微妙な筋肉の動きや気配の変化から、行動の先を読み、その動きに瞬時に合わせて踏み込んだのだ。

アスカは神業的な事をしながらも特別なことをしているような感じはなく、当然の如く受け止めていた。

刹那は自分とは桁違いの実力というものを思い知らせた。逃げても逃げても刃が追って来る。アスカにその気があれば、刹那は瞬時に艶やかな鮮血の花を咲かせているのだから。

「……降参です」

完全に戦意を挫かれ、刹那は崩れ落ちるように膝を折って呻くように負けを認めた。

「どういう状況だ、これは?」

二人が勝負をしたのは分かるが先程到着して途中の経過を知らないので状況を掴めない。

なので、近くで息も絶え絶えでホールの床に横たわってグロッキー状態の、年頃の乙女として「ちょっとどうよ?」と突っ込みたい状態の神楽坂明日菜の横腹を軽く蹴った。

「グェ……!　それが人にモノを聞く態度!?」

蹴られて痛かったのか、これまた乙女らしくない悲鳴を上げながら起き上がり、明日菜が蹴った張本人(エヴァンジェリン)に詰め寄る。

「あ……!」

しかし、精神とは裏腹に肉体は突然の動きを拒否するように足が縺(もつ)れる。

普段ならまだしも疲れ切った肉体ではここから立て直すことが出来そうにない。そんな彼女が倒れる先にいたのはエヴァンジェリン。そもそも彼女に向かっていこうとしたのだから前向きに倒れれば彼女に覆いかぶさるような形になるのは当然。

(受け止めて!!)

ここで彼女に避けられたら明日菜は冷たく固い床に「ビターン!!」と漫画の如く張り付いてしまう。それを避けるために彼女は眼力(念話は使えず、突然のことで声が出なかった)で思いの限りに

懇願した。

「――――――だが、断る」

しかし、そこはSとして定評のあるエヴァンジェリン。助けを求める明日菜の心の嘆願が届いていながらも無情にも拒否して、無駄に闘牛士が闘牛を避けるように格好良く、社交界でダンスを踊るように軽やかにステップを踏んで、明日菜の落下予想地点から華麗にも回避して見せた。

――――――ビターン！！

結果、懇願が聞き届けられなかった明日菜を受け止めるものはなく、漫画の如き描写と共に地面に張り付いて音を立てた。

「あべしっ！」

と、同時にこれまた乙女としてどうかという断末魔の悲鳴（？）を上げた。彼女は昨日、北斗の拳を見たに違いない。次は「ひでぶ」か「たわば」だろう。きっと明日菜なら期待に応えてくれる。

「やらないわよ！！」

「何を言っている？」

「いや、なんとなく叫ばないといけない気がして……」

何やら電波を受信したらしい明日菜に突っ込みを入れる明日菜。問いかけるエヴァンジェリンに自分でも突然叫んだ理解が出来ずに首を捻っていた。

「……って、そうじゃなくて何で避けるのよ！　痛いじゃないっ！」

このままでは話題を転換されて流されてしまうと悟った明日菜が再度、エヴァンジェリンに詰め寄る。今度は先程の二の舞にはならないように上半身だけ。つまり、体を起こした状態で近くにいた彼女に掴みかかったのだ。

流石にスカートを掴まれてしまっては避けて「ひでぶ」か「たわば」状態にさせることが出来ず、ちょっと残念だったエヴァンジェリン。

ちなみに明日菜に怪我はない。ちょっと打ったらしい鼻の頭が赤いだけ。あれだけ勢い良く顔面を強打したはずなのに鼻血も出ていない。

「知らん、そっちが勝手に突っ込んできたんだろうが」

見る限りエヴァンジェリンに罪悪感は一ミクロンの欠片もない。今も隙あらば明日菜の手を振り解こうと虎視眈々と狙っている。そこまで「ひでぶ」「たわば」が見たいのか？

「エヴァちゃんが人の脇腹を蹴るからでしょうがっ」

流石にこれ以上の醜態は晒せんと執念染みた想いでエヴァンジェリンのスカートは意地でも離さない。今、離されたら間違いなく、「ひでぶ」「たわば」状態になってしまうからだ。

「人の進行方向に偶々いて出した足に当たっただけだ。他意はない」

「どう見てもワザとでしょうが……！」

悪びれた様子も無く、それどころか「こいつ何、言ってんだ？」って的な眼で見られたら誰だって怒る。

然しものエヴァンジェリンも明日菜の勢いに押されたのか、それとも流石に悪いと思ったのか少しだけ熟考し、

「――――――気のせいだ」

「こいつ、悪びれた様子もなしに――――！！」

微かな明日菜の希望をも打ち砕く大魔王が如き知らん振りを披露して見せた。明日菜の「憎しみで人が殺せたら！！」と心の叫びが響き渡った。

「ククク……ああ、スッキリした」

「――――――（返事がない。屍のようだ）」

数分間、同じやり取りを繰り返した（エヴァンジェリンがボケ、明日菜が突っ込み）後、吸血鬼なのに血も吸わずにお肌ツヤツヤとなったエヴァンジェリンと、彼女に突っ込みを入れ続けてまるで血を吸われたようにツッコミ疲れてダウンした明日菜の姿があった。

「これは突っ込みを入れるべきだろうか？」

「いえ、それは何か違うでしょ」

アスカにどこぞの関西人の魂が宿ったのか、漫才の相方がボケた時に入れる「ツッコミ」をするべきかと手刀の形にした手をウズウズと揺らしていた。

元祖関西人らしくアスカにビシッと突っ込みを入れた刹那のツッコミ力に脱帽。

話は少し遡る。

ここに来てから基礎鍛錬と素振りを繰り返していた明日菜が体力切れからダウンした時、丁度やってきたアスカに手が空いた刹那が簡単な手合わせを申し込んだことが始まりだった。

気や魔力などの超上の力を使わない手合わせで寸止めルールならば怪我をさせる心配もないのでアスカにも断る理由もなし。ここならば監視の目も無く、この場所の主であるエヴァンジェリンもネギの方に熱中しているためか関心は薄い。

簡単な体術程度ならば既に周りに何度も披露しているので隠す価値もないので手合わせを同意したわけである。

問題は刹那が鞘に入れたままの夕凪を持って対峙したのに対してアスカは無手のまま。刹那も危険だからと明日菜が素振りに使っていた木刀を持つように言ったのだがアスカはこれを必要ないと拒否。

刹那は腰を落とし、抜き打ちの構えを取った。対してアスカは、やや左半身になり、腰を落として軽く開いた両手を体の前面にして構えた。

二人の体格には殆ど差はないが、刀を相手に素手では圧倒的に不

利である。勝機があるとすれば斬撃を見切ってかわし、懐に飛び込んで組む以外にはありえない。

俗に剣道三倍段というものがある。剣道の初段は他の武道の三段にあたる力があるという意味で、それも剣ありき武道なので間違ってはいない。不良が使うバットや木刀とは根本で違うのだ。明らかに対処が間に合うとは思えない。

（それとも私を舐めているのだろうか？）

確かに刹那は自身の剣がまだまだ未熟の域を出ないことを自覚している。修学旅行初日の月詠との戦闘の時もそうだった。今まで戦ったことのない相手の戦法に戸惑った。幾多の戦いに適応できて初めて、長である詠春のように強く守るべきものを守れるような剣を手に入れることができるのかもしれない。

しかし、それでも刹那は自身の剣に誇りを持っている。

それを嘲笑うかのように自分の不利になるような条件を取られると少々、頭に来る。

「せいっ！」

考えていても仕方ないと刀を抜き（抜刀はしていない鞘のまま）、真正面から真っ直ぐに突っ込んで行った。

気の強化はされていないが、十分に鋭い剣先に、アスカは背を腰を落とした姿勢のまま滑るように一歩で間合いを詰め、刀を振り上げた瞬間に生じた一瞬の死角に飛び込む。

「……！？」

『―パンッ』と刹那の手から刀がすっぽ抜け、高々と宙に舞った。

「……凄い」

グロッキーな状態でありながらも見ていた明日菜が思わず惚れ惚れするほど鮮やか過ぎる手際だった。

中国拳法に【空手奪刀】と剣士から刀を奪うための技法がある。

【空手奪刀】に必要なのは速さである。

太刀筋なんてものは、どれほど奇を衒ったところで、結局は真ん中と左右、そして上中下段の三×三＝九しかない。相手の足の運びや手首の動きを見てどれかに絞る。そして相手が斬りつける前に飛び込んで止める。そうすれば九のうち八は取れる。

と、理屈は簡単だが、身体をその通りに動かすには超人的な反応速度が必要になる。加えてある種の予知能力にも通じる勘と大胆さが不可欠である。

「もう一度、もう一度お願いします！」

「分かりました」

当初は信じられないような面持ちで己の手を見ていた刹那だが、正気を取り戻した後は先程のは自分が油断していたからだとすっぱ抜けた夕凪を拾って再戦を申し込む。

慌てた様子の刹那とは反対に落ち着き払ったアスカは嘆願に当たり前の如く受け入れた。

そして繰り返される光景。

対峙した二人の構えは先程と同じ。

だが、油断無く構えてアスカの一挙手一投足も見逃さんと凝視する。

気が入りすぎて刹那の体が少しだけ動いた。刹那の身体が僅かに動いたのに反応して、アスカの構えが両手を今度は上下に開き気味にして微妙に変化していた。

（まさか……太刀筋を読まれている！？）

アスカの意図が分からずに微妙に身体が動いてしまったが、それにしてはアスカの動きが変化しすぎている。何度か繰り返して、その事実に気付き、背筋に戦慄が走った。

武道に、それもある程度のレベルに達しなければアスカが奇妙な踊りをしているのだと思ってその本質を理解できない。

相手の動きや呼吸から、繰り出される斬撃の軌道を読まれているのだ。居合いやそのものを返すつもりなのか、と驚愕を禁じえない。

「……！」

刹那は自身の狙いが読まれていることを覚悟した上で、いきなり刀を抜いた。踏み込まずにその場で刃を水平に振るい、更に空に十

字を描くようにしたから切り上げる。

わざと空振りをしたと知りつつ、アスカは高々と上がった刀に吸い寄せられるように踏み込んでいた。刹那はその動きを予測していたように床を蹴り、真後ろに跳んだ。

それ以上はアスカも踏み込まず、その場に留まった。

二人の対峙する距離は最初に戻る。アスカの構えは当初に戻る。だけど、刹那の方は構えを変えてきた。

刹那は刀を目の高さに持ち上げ、切っ先を正面に向けて、弓に矢を番えて引き絞るような構えを取った。

――――刺突

九つのうち八つは取れるが、唯一つ返せない斬撃がそれだった。真正面からの突きには、この対処方法ではつけいる隙はない。

アスカも僅か数合で気付くとは思わなかったので、誘いに乗ってしまった。この間合いでは至近距離でショットガンを向けられているのと同じで、左右に避ける動作は命取りだった。

なので、アスカが選択した行動は床を蹴っての斜め後方への跳躍。

「せやあああっ！！」

刹那は放たれた矢のように一足飛びに突進する。鞘に入れているとはいっても刀を持って生身の人間にマジで突っ込むその姿は、この試合の意味を忘れているのかもしれない。

実に五メートル近くの距離を疾風のごとく駆け抜けた刹那が勢い余って踏鞴（たたら）を踏む。斬撃の軌道上にいたはずのアスカは、空中に静止して難を逃れていた。

「と、飛んでる！？」

明日菜にはアスカが重力を無視して空中での静止しているように見えた。実際は違う。

突き出した刹那の太刀が止まっている。その峰の上に、アスカが乗っていた。流石にかわせないと悟ったアスカが刹那の鞘入り刀の上に乗ったのだ。昔の忍者物や伝記物ではお馴染みの図だったが、現実にこんなことをヤラれると異様な光景だった。

刀の上に乗られた刹那は己を見下ろすアスカと目が合った。

愕然とした刹那が気がついた時にはアスカの右足が動いた。アスカの動きに反応できず、眼を瞑った刹那が感じたのはコツンという感触のようなものだった。

「これまで、かな」

目を開くと刀の上から降りたアスカが固まった刹那の目の前で人差し指を額を突いていた。

大したことをした気もなさそうなアスカに刹那は弟子入り試験で芽生えた「畏怖」の感情を強くする。だけど、認められないその感情。麻帆良で初めて表だって己の「翼」を認めてくれた人であり、木乃香との仲を紡いでくれた恩人に対して抱く感情ではない。

無意識下であっても認められない「畏怖」の感情。

刹那は再度の今度は気や魔力もありの本気の再戦を挑んだ。気が使えればこんな感情を抱かずに済むはずだと考えて。

「――――それじゃ、次は僕も獲物を使わしてもらってもいいですか？」

「構いません」

眼に強い光を走らせた刹那の頼みにアスカは若干の黙考の末に今までと違って獲物を使うことを考える。元々、互いに武器ありで手合わせをするつもりだった刹那としては願ったり叶ったりの提案だったので即決で受け入れる。

刹那が夕凪を鞘から抜き出して戦闘への気運を高める中でアスカが選んだ獲物は、明日菜が素振りで使っていた木刀ではなく、ホールから少し出て行ってどこからか持ってきた小さなナイフ。

刹那が持っている夕凪の大太刀と比べれば全長で１０センチ程度しかない果物ナイフ。

結末は知っての通り、そこから先の対決に関して特に言うべきことはない。

流石に試合で奥義は使わなかったものの、全力でアスカに挑んだ刹那の敗北。本当に僅かな身体強化と武器強化だけで神鳴流の技の悉く切り抜け、夕凪を弾き飛ばして懐に潜り込んで切っ先を首元に突きつけた。

「成るほど、な」

「ぎゃあああああああああ！！」

アスカがグロッキー状態の明日菜に、あまりに異様な匂いのする漢方薬（？）を飲ましたり、整体を施して絶叫を上げさせているのを努めて視界に入れないようにしながら、簡単に負けて消沈している刹那から経緯を聞いてエヴァンジェリンが首肯した。

二人とも助けを求めて伸びる明日菜の手を一顧だにせずに話を続ける。

これがこの場所で修行を進める上でよくある光景だった。

明日菜、哀れ。ネギ、哀れ。

明日菜が絶叫を迸らせていた夜も深まってきた丁度その頃、学園長室に一本の電話が掛かってきた。

「おお、詠春か」

電話を掛けてきたのは京都にいる自分の義理の息子・近衛詠春。先の修学旅行の直後以来、これからの組織運営に合わせて個人的な距離を少しだけ取る方針を明確にしたばかりでありながらの連絡に、学園長の声に僅かながらの驚きの感情が混じる。

『実は問題が起こりまして。それ程、心配はないと思うのですが一応報告をと……』

「ふむ……ふむ……何じゃと？　脱走!?」

修学旅行の一件で捕まった犬上小太郎が囚われていた牢から脱走したとの報告を受けて学園長は今度こそ驚きを露にした。戦って負けたネギにご執心だったので、もしかしたら麻帆良に向かった可能性があると締め括って詠春は電話を切った。

「何もなければいいんじゃが……」

京都にいる詠春との電話を終え受話器を戻す学園長。そして視線を中空へと固定して修学旅行直後のアスカの異変がどうしても頭の中に残り、彼の懸念は外の雲一つ無い満天の星空のように晴れはしなかった。

第八十三話　　とある場所での修行と少年（後書き）

え～勘違いの可能性もありますが、明日菜は主人公に弟子入りはしていません。偶に修行場所に現われてちょっかいを出しているっていう感じでしょうか。

剣の師は結局、刹那に。それ以外をエヴァンジェリンに習っている感じです。

次回更新は一週間後です。既に八割方出来ているので間に合うかと。多分、主人公は出てこないかな？

タイトルは『別荘と少年　前編（仮）』になるかと。変更の可能性もありますが。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

それでは夜勤に行ってきます。更新時間が夜勤始めの時間なので。

第八十四話　別荘と少年　前編（前書き）

最近、悟りの境地に至ってきました。

曰く、「日曜日と月曜日の間の更新は必ずするから余裕があったら投稿してもいいんじゃないか？」と。

いや、以前にアンケートを取っておきながらなんだという突っ込みがあるのは重々承知しています。

ですが、最近の筆者の暇つぶしは携帯で感想が来ていないかを確認するまでに【感想ジャンキー】になっています。

そして話の展開を見て判るように、文字数と話数の割りに全然話が進んでいません。週一のペースで行くと完結するのは何時になることやら。何気に今話と前話合わせても原作一話分も僅かに行っていなかったり。

なので、なので、真に申し訳有りませんが、常に一話の余裕を持ちつつ、気が向いたら投稿という形に変更させて頂きます。ちなみに既に次話は九割方出来ています。

今話は殆どが原作の再現であり、いなくなった登場人物の代替を行っています。多分、辻褄合わせの部分がありますが。

今話の文字数は１０７７７字です。

それではどうぞ！！

第八十四話　別荘と少年　前編

麻帆良学園女子中等部三年Ａ組、今日の最後の授業は担任教師であるネギによる英語の時間になる、なるのだが。

「で、では――――――次の所を……四葉さん」

ネギの状態はふらつき、頬がこけている。はっきり言って尋常ではない。

連日ハードな修行を行って、その上師匠に授業料として血を抜かれるのだ。あの状態は必然だろう。といっても血自体の負担はそれ程でもない。問題は諦めないネギに触発されてエヴァンジェリンが熱血して芋づる式に修行時間が伸びていくという悪循環が主な原因だ。

当のエヴァンジェリンはあの程度ぐらいでフラフラするとは情けないと目が言っていた。

「ネギ君、疲れてるってゆかヤツれてない？」

「五月病か？」

「気の早い夏バテとかー」

教壇でフラフラするネギの様子に様々な憶測が飛び交う。教室全体でやっているものだから、個人の声は潜めても全体ではさざ波のように聞こえてしまう。でも、疲れているネギにはそれにすら注意が及んでいないようだ。

幸か不幸かフラフラしていてもネギはしっかりと授業を行い、授業そのものについては問題なく進んでしまった。

――――キ～～～～～ン、コ～～～～～ン、カ～～～～～ン、コ～～～～～ン……

「それじゃあ今日はここまでに～……」

間延びしたチャイムが鳴り授業が終って、ネギが授業の終了を宣言して頭を下げ、フラフラと偶に黒板や壁にぶつかりながら教室を出て行く。

何時もならそこでクラスが騒がしくなるのだが、今回はネギの様子がおかしいことで少し違った。

あやかを始めとして彼を心配するもの多数。普通の人間でよほど嫌いでなければ心配するのも当然で、中には行動を起こす者がいた。

ふらふらと蛇行運転しながら廊下を歩くネギの後を、建物の角からこっそり覗いていた綾瀬夕映、宮崎のどか、朝倉和美、古菲が追う。

「たった二、三時間の練習であんなになっちゃうなんて、絶対におかしいです。何やってるか突き止めるですよ、のどか」

「う、うん」

ここ数日、ネギの様子がおかしいことに気付いたのどかが夕映に相談したことがこの行動の発端である。

宮崎のどかには二人の親友が居る。早乙女ハルナ、綾瀬夕映の両名である。

とりわけ、その二人のうち夕映とは格別に親しかった。

ネギが来る前は前髪で眼を隠すという髪型で人との接触、特に異性に対しては男性恐怖症なのでないかと噂されるぐらいに引っ込み思案だったのどか。

のどかが副担任補佐であるネギ・スプリングフィールドに想いを寄せていることは、それの程度に関してはともかくとしてクラスの全員が知っている事実である。

のどかに相談を受けた夕映が原因を究明するために動くのは自明の理であった。

それに夕映には修学旅行三日目の事についても色々と思うことがある。あの日はそもそもネギを追いかけたことで巻き込まれた。摩訶不思議な出来事に関して誰も説明してもらえず、かといって彼女が対面した楓ははぐらかされてしまい、気がついたら翌日になっていた。

退屈な日常に無い物を求めていて知的欲求に取り憑かれた彼女の欲望は、のどかから与えられた好機（チャンス）に物の見事に食いついた。

「それであんなにヤツれてんだ」

「私との朝練でもフラフラで気になっていたアルよね～～」

まず、夕映が最初に取った行動は聞き込み。

最近になって弟子入りした古菲が無駄に頑張った所為かと思ったが本人に確認すると以上のような返答が返って来た。

情報通の和美に確認するとネギは仕事が終わった後、どこかに行って二、三時間程経ってから職員寮へと戻っていることを聞いた。古菲からの話しも統合して考えると、エヴァンジェリンの所へと行ったと思われる。

で、気になったので皆で尾行してみようという話になったのだ。

コソコソとみんなでネギを追いかけていた時、噂をしていたら何とやらでエヴァンジェリンと落ち合った。

「しかし、毎日二、三時間でヤツれて帰ってくるってのは、こりゃアレかなー」

仕草で顎に手を当てて和美が親父染みたエ■を想像したのか笑みを浮かべて何か重々しい感じで口を開いた。

「ドレですか？」

ボケ役は揃っていてもイマイチ突っ込み役が不在の為か会話が回りにくいものの、仕方なく夕映が問いかけた。

「いやー、そりゃ大きな声ではあまり言えないよーな、マル秘の？？」

和美は夕映の問いかけに、ピシッと指を立てて勿体付けて答える。

「コラコラー、何を考えているのですかっ！？」

本来ならばこういう突っ込み役はハルナにでも任せたいところだが、肝心の彼女は同人誌の修羅場への追い込みのためにいない。和美が何を言いたいのかを理解しても引っ込み思案ののどかでは突っ込めず、古菲は何のことか見当がつかずに首を傾げていた。となると残るのは夕映のみ。和美の暴走を止めるために顔を紅くしながらも突っ込むのだった。

そうしている間にもネギとエヴァンジェリンが何か話しながら、学校の玄関を抜けて街に出た。後を追う四人。

「これでは尾行にならないです」

「まーまー、気にしない気にしない。バレナイって」

「あ、雨アル！」

四人で喋りながらではとても尾行とは言えない。事実、建物の影に身を隠して後を追う四人がいる道路の反対側から指を差す子供の純粋な瞳が眩しい。母親の犯罪者を見たような対応に気づかなかったことは幸運か。

「お……あの家はエヴァちゃん家かな？　二人で入っていく――――」

振り始めた雨にネギが折り畳み傘を取り出して相合傘になっていたり、道中に色んな苦労はあったものの、どうにか目的地まで尾行出来たらしく、街外れにある一軒の木造りのログハウスへと二人で

消えていった。

「雨が降ったから室内で修業ですか？」

「まさかー。あんな狭い所で？」

途中から雨が降ったことでずぶ濡れになりながらも見つからないように藪に身を潜めて夕映が言ったが、ネギがエヴァンジェリンから魔法を習っていることを知っている古菲からすると疑問に思う。

そもそもネギがエヴァンジェリンから何を学んでいるかも知らない残りの三人（和美だけは予測しているが）は真っ当に考えても分からなかった。

「こりゃ、やっぱり、マル秘のアレ？？」

ちょっと赤くなった朝倉が、またぶっ飛んだ発言をする。

「そ、そんなはずありません！」

「そうです。何を言い出すですか、朝倉さん！」

真っ先に反応したネギに恋するのどかが和美に迫り、彼女を応援する夕映が後押しする。二人とも顔が火照っている。二人とも耳年増らしく何が言いたいかを察していた。案外、同人誌を作るためのハルナの資料を見せられたのかもしれない。

「ゴ、ゴメンゴメン、冗談だって」

流石に真剣にネギに告白までしたのどか相手にこれ以上、茶化す

のは不味いと悟った和美は素直に謝る。

「……あれ？　誰もいないアルよ？」

ネギとエヴァンジェリンの姿が完全にログハウスに消えたのを確認して、四人は雨の中を水溜りを蹴飛ばしながら走って近づき、窓から中を覗き込む。

「おかしいなー。確かに二人で家に入ったのに」

「お風呂にもトイレにもいないアルよ」

サラサラと降っていた雨が本格的になり始めてきた。夏のように雨に濡れたからといって大丈夫な季節ではない。体も冷えてきたから、このままでは風を引いてしまう。チャイムを鳴らしてもドアをノックしても誰も返事をしないため仕方なく、悪いと思ったが無断で逃げ込むようにエヴァンジェリンの家に忍び込んだ。

傍目には犯罪だがクラスメイトだからと許されると考えている部分があった。雨宿りだと言い訳も忘れない。

しかし、二人が先に入っていくのを見たのにおかしい。誰もいない。確かに四人ともが二人が家に入るのを見たのにロビー、キッチン、寝所。果ては風呂やトイレまで探し回ったが、家の中は神隠しでも起きたのかと思うほど静かだった。

「み、みなさん、こっちへ～～っ」

「何かあったの？」

手分けして家捜ししていた時、のどかと夕映が地下室で何かを見つけたみたいで、二人を呼びに来た。地下へ降りる途中、山のように置かれた人形が怖かったのは内緒である。実は夕映が最初に見つけた時、ちょっとチビッたのは秘密である。

地下へ続く階段の奥にあったのは大きな扉。そこを開けると、夕映がスポットライトを浴びている台座の上に乗った大きいボトルシップみたいなものを覗き込んでいた。ボトルシップらしきガラスと思しき球体の中に塔のミニチュアが入っていた。

それを指差して、のどかがこの中にネギがいるのを見たって言う。

「え!?　どーゆーことアルか?」

「ですから、小さいネギ先生が――――」

「ん?」

後からやってきた古菲が夕映に聞いていると和美はどこからか「カチッ」とした音に気がついて辺りを見渡す。

「おっ?」

足元に魔法陣が浮かび上がり、和美の姿が消失した。まるでどこかに飛ばされたみたいに。

「……ほぇ?」

「あ……」

和美と同じように「カチッ」と音が鳴り、古菲、のどか、夕映の順に足元に魔法陣が浮かんでその姿を消失させた。残ったのは大きいボトルシップだけで少女達の姿はどこにも無かった。

千鶴と夏美が食料の買い込みを済ませ、麻帆良学園に戻る道中。

四人の少女達が謎のボトルシップらしきものを発見し、その姿を消失させた丁度その頃。二人の少女が下校の途(と)についていた。

一人は赤毛に耳を隠す程度のショートヘアとそばかすの少女。もう一人は腰まであるロングヘア、もう一人の少女と同年代と思えない身長とプロポーションを持っている女の子。

彼女たちと同じ三年A組の生徒である那波千鶴と村上夏美。インパクトの大きい外見を持つ者が多いA組の中で、あまり目立たない子と一際目立つ子の組み合わせだ。

突然の雨であったが千鶴がしっかりと鞄に折り畳み傘を携帯していたお陰で事なきを得て、二人で一つの傘を差して川沿いの道を女子寮に向かって歩いている。

「ネギ先生、大丈夫かなー」

「風邪かしらねぇ……」

二人の話題はここ数日、調子の悪そうな副担任補佐ネギのこと。

千鶴は普段、麻帆良学園都市内の保育園で保母としてボランティアをしている。普段から子供を見慣れている彼女には、その理由までは分からなくとも、ネギの僅かな変化も見逃さなかった。

元より心身ともに母性的な少女だ。普段からネギの事を保護者のような目で見ていたのだろう。勿論、その対象にアスカも入っている。先日のG・W・での南国リゾートで見せた全身の傷跡を見てからその想いは益々強くなっている。

麻帆良広しといえど、アスカをただの子ども扱い出来る女子中学生は彼女だけだろう。

「あら？」

雨が振っているといってもこのまま何事もなく帰るはずだった中

で、千鶴が何かに気付いて視線を動かした。

「行き倒れよ、夏美ちゃん」

「行き倒れ！？」

さらりと千鶴の落ち着いた声とは裏腹な重い内容に夏美は驚いて一般人ならではの反応をする。慌てて彼女が見ている視線の先を見てみると、黒い犬が倒れていた。

「あ、何だ犬かー……かわいそだねー……」

夏美が行き倒れと聞いて真っ先に想像したのは倒れている人間。

しかし、そこに倒れ伏していたのは人間ではなく犬だった。犬ならば良いと言うわけではないが、人が倒れていない事に夏美はほっと胸を撫で下ろす。

恐らく体格を見るからに子犬のようだ。呼吸は小さく荒く、随分衰弱しているように見える。

「しかも怪我してるわ、この子」

夏美が可哀そう、と思っていると、隣にいた千鶴は手に持っていた傘を彼女に渡し、雨に濡れてしまう事など気にも留めず、行き倒れの野良犬かもしれない子犬へと近付き、何の躊躇も戸惑いもなく抱き上げた。

子犬は前足に怪我をしている。よほど疲れているのか千鶴が抱き上げても抵抗する様子もない。

「わ、バッチくない？　ちづ姉」

飼い犬と違って野良犬なら洗っていないので感じる清潔感が段違いに違う。素直な感想を口にした夏美であったが、千鶴はそれにかまわず寮に連れて帰ることを勧めた。

「とりあえず連れて帰るわ。一先ず体力が回復するまで面倒を見て、それでも駄目なら獣医さんにでも診てもらわなきゃ」

今すぐどうこうということは素人目でもなさそうだが、念のために寮に連れて行って温かい部屋と食事を与えれば回復するだろう。

自分が持っていた傘と買い物袋を夏美に預け、千鶴はしっかりと黒犬を抱き締める。女子寮では原則としてペットを飼う事は禁止されているので夏美は戸惑っているが、本音ではその子犬を可哀想だと思っていたので、強く反対はしなかった。

回復した後は捨て犬や野良犬なら里親になってくれる人を探そう、と現実的なことを考えて寮へと向けて歩き出した。

人であろうと犬であろうと、見ず知らずの者を躊躇なく助けることは簡単ではない。同情等の幾つか理由はあっても、言葉だけではなく現実に救済の行動に移れる人間がどれだけいるだろうか。

自らが雨に濡れること、汚れることなど一切お構いなしに、千鶴は犬を助けることを選択したのだ。

エヴァンジェリンの家から姿を消した四人の少女達は、気がついたら見たことのない場所に立っていた。

上を向けば青い空に白い雲。下を向けば小さな砂辺もあれば辺り一面の海もある。おまけに煌く陽光まで完備されており、まるで南国のプライベートビーチを思わせる。

辺り一面の水平線。今いる彼女たちがいる場所は海に浮かぶように作られている白亜の建物から伸びる手摺(てすり)もない橋に?がった円筒状の塔の上。白い石畳に書かれた五防星が描かれており、彼女たちはそこに立っていた。

「どうなってるアルか?」

「へ?」

辺りを不思議そうに見渡しながら困惑を露にする古菲とのどか。

「何か見覚えがあるね」

「そうですね、どうやら先程のミニチュアと同じ場所のようです」

「じゃあさっきのネギ先生も……」

「多分、本人であると推測されるです」

その中で和美は何となく見覚えがあるような気がして、夕映が彼女の言葉からヒントを得て見えている風景が自分たちが先程あったボトルシップの中にあった場所にいることが分かった。

どうやら彼女の話によればここはあのミニチュアの中であるらしく、さっきのどかが見たネギらしい人物も本人であると推測できた。夕映は相変わらずの鉄面皮ようだが自分の意見を述べる姿は興奮しているようだった。そしてその意見は恐らくあっているであろう。

修学旅行から抱えていた疑問を解消する大きなヒント。否、もはや答えは目の前にある。ここまで大規模な事が出来ることに好奇心が更に刺激されて大きな瞳に歓喜を湛えていた。

そういうわけで少女たちは、恐らくネギがいるであろう白い石畳の橋の向こうに見える場所に建っている白亜の宮殿に向けて、橋を渡るために歩を進めて行った。

「うわっ、こんな高い橋に手摺ないし！」

「わはははは、滅茶苦茶高いアルね～」

手摺（てすり）がないことに驚いたものの臆した様子のない和美と何とかは高いとこが好きとでもいうのか何でか楽しそうな古菲を先頭に一行は進む。

「ゆ、夕映～」

「大丈夫ですよ、のどか。非日常な出来事は胸躍る思いです。学校のつまらない授業などよりも余程、楽しいですよ」

例えるなら高層ビルと高層ビルとの間に渡された少し丈夫な板の様な物でしかない。心臓が止まりかねない景観が丸見えなのである。しかも、高さに比した程ではないが、少なからず風が吹いていた。

「って、ゆえっちも膝震えてるけど――――」

「これは武者震い、ということにしてください」

生まれたての小鹿みたいに震えている夕映の膝を全員見なかったことにするらしくコメントは差し控えた。怖いのは皆同じだったからだ。しかし、武者震いとは日本語というものは便利である。

色々あったが、突然の突風が吹くことも無くどうにか橋を渡り切った。

そして白亜の宮殿に辿り着くと階段が見えた。階段を抜き足差し足で降っていくと、突如仄かな明かりが漏れる扉のちょうど壁際で先頭に立つ和美の動きが止まる。掌を上にして静止のジェスチャーをかける。ちなみに万が一、何かあった場合に外に伝えるために古菲は残っているのでいない。

和美に続いていたのどかと夕映も揃って歩を止める。そして和美が聞き耳を立てているのを見習って聞き耳を立てる。すると何やら話し声が聞こえてきた。

「も、もう限界ですよ」

「少し休めば回復する、若いのだからな」

一体、何が限界なのか、と三人が共通の疑問を抱いた。そして何故休めば回復するのか、とも。

彼女たちは言葉の断片から推測するより他にない。推測するに当たって変な方向に思考が回るので三人の体温は異常なほどの上昇を開始する。

「あっ、ダメです」

「いいから早く出せ」

艶のあるエヴァンジェリンの声と、怯えたようなネギの声、声に合わせて小さい衣擦れの音が耳に届く。

一体何を出すというのだろうか、和美ですら顔面が体温の上昇と伴って紅く染まっていく。しかし問題はそれだけに留まらなかった。

「ダ、ダメですよ。エヴァンジェリンさん……」

「フフ……私の事は師匠（マスター）と呼べ……」

どう考えても淫靡に聞こえる内容に、年頃の少女達の脳裏にはネ

ギを尾行する時に和美がふざけて話した１８禁な映像が流れていた。特にのどかの顔は完熟トマトのように真っ赤に熟れて「あわわわわわわ」と言いながらガクガクと震えだし、彼女よりかは震度は小さいもの夕映も同様に頭は完全にオーバーヒート。

限界に達した少女たちはその声の主たちを止めるべく彼らの前に顔を晒した。

「「何を……やっ……て……？」」

物陰から飛び出した少女たちの声の勢いが急速になくなっていく。彼女たちの眼前に広がっていたのは淫靡さとは懸け離れていた光景だった。

「ん？」

「エ、エヴァンジェリンさん、そそそ、それ以上は～～～」

二人が並んで座っていて、血を吸われて今も顔を少々歪めて懇願するネギと、その腕に噛み付いて血を吸う子供が御飯を口に運んでいる時に声をかけられたような顔のエヴァンジェリン。

「……何だ、お前達」

「え、と……何って何やってるの？」

エヴァンジェリンはネギの腕から口を離して突然、現われた少女達に問いかける。

末だにダメージが抜け切らないのどかと夕映を除けば、まだダメ

ージの浅い和美が代表してそもそもの疑問を口に出す。エヴァンジェリンの問いには答えていないが。

「授業料に血を吸わせて貰っているだけだよ。献血程度のな。多少魔力を補充せんと稽古もつけれんし……」

不法侵入を咎める前にこうしてネギの血を吸っている経緯を素直に説明するエヴァンジェリンも、もしかしたら現われた少女達を前に混乱していたかもしれない。

「「「ええ～～～？！！」」」

一人は魔法を知って偶然といってもネギと仮契約している宮崎のどか。

一人は魔法を知っているものの一度だけ現物を見て説明を受けただけの朝倉和美。

一人は魔法を知らないといっても人が目の前で石化という異常をその目にして疑いを深めていた綾瀬夕映。

そんな彼女たちでもまさか自分達の級友が授業料代わりだからと血を吸うことを簡単に受け入れるはずもなく、直後、怒号のような悲鳴を白亜の宮殿内に鳴り響かせた。

「何事っ！！」

「どうしたんやっ！」

「危険です！　お嬢様、下がってください！！」

すわ、敵襲かと思って真っ先にアーティファクトのハリセンを片手に駆けつけた明日菜。明日菜に若干遅れて木乃香、刹那と続き、刹那が先に着いた木乃香を庇って後ろに下がらせ、鞘から抜き放った夕凪を構えた。

「「「えっ?!」」」

「「「あ」」」

現われるはずのない三人が現われて困惑の声を上げる和美、のどか、夕映。先程の声の主が敵襲ではなくて和美たちだと分かって間抜けな声を上げるのだった。

「これはどういう状況アルか?」

「知らん」

和美たちの声に急いで階段を飛ぶようにして下りてきた古菲が見たものは、ハリセンと刀を構えたまま固まった明日菜と刹那、その後ろに庇われた木乃香と、口をポカンと開けた和美、のどか、夕映の姿だった。

なんとなく上げた疑問の声に答えたのはエヴァンジェリンだったが、彼女も事情が分かるはずもないのでにべも無く斬り捨てた。

「――――ここは私が造った『別荘』だ。ちょっと前に少しだけ使ったがそれ以来放っていたが、ぼーやの修行のために再び掘り出して来た」

来てしまったものはしょうがないが人の家への不法侵入に対する罰だけ（茶々丸の鋼鉄の腕による拳骨によって四人の頭の上に漫画のような大きなタンコブを作る）はしっかり与え、エヴァンジェリンがこの場所の説明を行っていた。

「へーこんなモノ造ってしまうとは魔法使いとは凄いアルねー」

ヒリヒリするタンコブを痛そうに摩りながらもキョロキョロと辺りを見渡す古菲。

「全く……勝手に入って来おって一応言っておくがな……」

エヴァンジェリンは全く懲りた様子のない古菲に腰に手を当てて呆れた表情を浮かべ、同じような様子の他の少女達にも向かって言葉を続ける。

「この別荘は一日単位でしか利用出来ないようになってるからお前達も丸一日ここから出れんからな」

「「「「ええ――――――?!」」」」

暴露された衝撃の真実に侵入者たる四人の少女たちは揃って驚愕の声を上げた。

この『別荘』の主であるエヴァンジェリンは勿論、利用者であるネギ、明日菜、刹那、木乃香に驚きの色はない。利用する前に事前

の説明を受け、それを理解した上でここにいるのだから驚く理由はない。

「じゃ、明日まで出れないアルか？！」

「聞いてないよっ！」

「明日の授業どうするのですか――――――っ！」

「……！」

上から順に古菲、和美、夕映、のどかと続けざまに、まるで親鳥から餌を貰う雛の如くエヴァンジェリンに向かって囀る。

そもそも不法侵入者である彼女たちに事前の説明など出来るはずもなく、それで責められたとしても自業自得としか言いようがないが人間というものは他人に責任を転嫁する生き物である。

「ああ、もううるさいな。安心しろ」

ビーチクパーチク囀る少女達を鬱陶しげに見やり、説明するためか何時か見た教師スタイル（眼鏡＋差し棒＋黒板）を茶々丸に用意させた。

「日本の昔話に『浦島太郎』ってのがあったろ。ここはそれの逆だ」

エヴァンジェリンが説明しながら黒板に書いたのはネギの一日のタイムスケジュール。

朝の睡眠から古菲との朝練、朝食を取ってから学校に行き、放課

後になったら最近入ったエヴァンジェリンとの修行の項目が追加されている。

そこに更に横に追加されたもう一日分のタイムスケジュール。違うのは睡眠からは体術の自主トレ、基礎訓練、実践訓練などの修行一色に染められた一日。

「ここで一日過ごしても外では一時間しか経過していない。これを利用してぼーやには毎日丸一日たっぷり修行してもらっている」

書き記された図を見てエヴァンジェリンの説明を纏めると、通常の学校もあるタイムスケジュールの中にあるエヴァンジェリンとの修行の間にもう一日別荘内で過ごしているということだ。

ちなみに一日の仕上げに実戦稽古を行っているが5～15分ぐらいしか持たない。というか、それ以上は無理。

「……ということはネギ先生は仕事をした後に、もう1日ここで修行したということですか？」

誰も実は魔法のことを知らない夕映がこの場に普通にいることに突っ込まない。

エヴァンジェリン達はこの場にいる以上、のどかや和美が話してしまったのだろうと思い込んでいたから。

のどか達は何というかその場のノリというか単純に目の前の驚愕の事象たちの前に忘れてしまっていたから。事ココに至って夕映が魔法を知らないことが頭からスッポリと抜け落ちているのだ。

「教職の合間にちまちま修行してもラチがあかないからな」

爛々とした目で問いかける夕映を訝しげに思いながらも問いに正直な考えを返す。

「てコトはネギ坊主、一日が二日アルか！？」

「いえ、最初はそうでしたけど今は僕がお願いして三日にしてもらっています」

古菲の驚きに更に上乗せするようにはにかんだ笑みを浮かべながらぶっちゃけてしまったネギ。強くなりたかったネギがエヴァンジェリンに無理を言って頼んだのだ。

「「「ふええ～～～～～！？」」」

（丸二日もぶっ続けで修行した後に血まで吸われたらヤツれもするわな、そりゃ）

ネギの周りに集まった三人が衝撃の事実に驚きの声を上げる中で、彼、彼女たちから少し離れた場所から眺めていた和美は腕を組みながらネギの学校でのヤツれ具合は当然だと納得した。

魔法という凄さを改めて思い知った。燦々と輝く太陽はまるで南国。広い海はコバルトブルーで綺麗な色をしている。この場所での一日は外の一時間ということを知ったら、あまりのデタラメ具合に溜息を漏らすばかりだった。

そこで同じように彼女たちの輪に入っていなかった明日菜たちが眼に入り、「はて、なら彼女たちはどうなのか？」と疑問に思った。

「そういえば明日菜たちはどうして？」

「私と木乃香もエヴァちゃんに弟子入りしているのよ。まあ、変な形だけどね」

近づいて問いかけてきた和美に最初から用意していたように明日菜が答える。何時かは聞かれると分かっていたので返答に澱みはない。

「変な形って、どんな？」

変な形と聞いても想像が出来なかったので更に問いかける。

「私は剣術を刹那さんに習って後はエヴァちゃんが気が向いた時だけ教えてもらうって形かな」

明日菜が答えた内容は確かに弟子入りしたというには少し奇妙な形だった。

取り合えず、次の木乃香の方に視線を向けると、

「うちはな、実技よりも基礎の方が大事って言われてな。アスカ君の昔の教科書を借りて自主学習しながら分からないことがあったら聞くって感じやな」

本当に大変やわ～、とポヤポヤとした笑顔で言われたもんだから困った。

エヴァンジェリンに教えてもらうこと請うた順番は木乃香が一番

早い。厳密にはネギの方が早いが認められたのは木乃香の方が先。

しかし、ここで問題なのは木乃香が全くの素人と大差ないことだ。

一々最初から教えるのは面倒くさいとエヴァンジェリンが言い出し、基本は出来ているネギを鍛えた方が面白いとややこしい事態になったのだ。

ここでアスカを木乃香の教師役に任命しようとするも、当の本人はスゲもなく拒否。曰く「自分の仕事ぐらいは自分でしろ」と。

この問題で色々と物議を醸し出したものの、ネギが一日で丸三日頑張ると熱意を見せたことで解決。ネギにも自主練を化して空いた時間に木乃香や明日菜を見るということで落ち着いた。

ちなみに明日菜たちはネギと違って一日で二日のスタイルである。アスカも本当に偶にやってきて手伝ったりするが、基本ノータッチである。別荘にいても彼女たちにはどうしているか分からない時もある（エヴァンジェリンは知っているが）

第八十四話　別荘と少年　前編（後書き）

夕映たちへの罰はまだあります。次回に持ち越しで。

筆者が実戦経験の足りないネギを鍛えるために編み出した苦肉の策。
それが「ネギの別荘を使う時間を増やせばいいんじゃね？」でした。
原作と違って何かとヘコまされることが多いのでエヴァンジェリンのしごきにもある程度耐える精神耐性があって、単純に修行時間は倍。魔法制御の修行が既に終わっていることも大きい理由ですが。

なんとなく最近ギャグに走りすぎている気がする。

次回更新は早ければ明日というか今日。普通なら明後日というか明日。遅ければ定められた時間に。日が変わってからだとややこしいな表現が。

今話主人公出てきてませんが、多分、次話も主人公は出てこないかもしれない。出てきたとしても数行だと思う。

次回は後編です。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

それでは寝ます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4514l/

双子の弟は魔法忍者

2011年12月13日04時46分発行